

とある三兄妹のデンドロ記録：Re

貴司崎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

2043年7月15日。この日は「無限の系統樹」と銘打たれた本物の“VRMMOが発売された日”。

とある三兄妹は発売された「Infinite Dendrogram」の紹介記事を見て、ちよつと気になったのでプレイしてみる事に。

……これは、そんな三人が「Infinite Dendrogram」の世界で様々な出来事に関わっていく物語である。

□注意事項

※この小説は作者が以前書いていた『とある兄妹のデンドロ記録』
<https://syosetu.org/novel/203577/>のリメイク版です。

※原作で新情報追加・誤字脱字・ナンカコレジヤナイ感のある描写や設定などがあった時には文章や設定を随時変更する事があるのでご了承下さい。

※拙作内の各種設定に関して、各種マナーに反しない限りにおいてなら他の作者様を書く「Infinite Dendrogram」系の二次創作に流用・転用して頂いても構いません。詳しくは活動報告にて。

目次

三兄妹+ α の設定まとめ	1
アルター王国〈マスター〉設定まとめ：その1	11
アルター王国〈マスター〉設定まとめ：その2	22
アルター王国〈マスター〉設定まとめ：その3	33
レジエンダリア〈マスター〉設定まとめ：その1	42
レジエンダリア〈マスター〉設定まとめ：その2	53
ティアン+ α 設定まとめ	66
序章 2043年7月15日	
とあるゲームを買った日：Re	73
手探りの初ログイン	81
冒険者ギルドでの初クエスト	89
〈エンブリオ〉の孵化と訓練開始	96
初戦闘、そして出発	105
王都の外で出会ったモノ	113
【ミメーシス】	123
初日の終わり	132
掲示板回・初日編	142
第1章 〈Infinite Dendrogram〉が始まって	
三兄妹のデンドロプレイ・二日目	156
レントのクエスト・【ジエム】作り	165
ミカのクエスト・王国の騎士達	172
ミュウのクエスト・格闘家ギルド	181
掲示板回その2・とある日曜日	190

	PKとの遭遇	206
	〈狂乱の森〉での死闘（前編）	216
	〈狂乱の森〉での死闘（後編）	224
	次への準備	233
	掲示板回その三・PKとかモンスターとか	241
	第2章 【墓標迷宮探索許可証】を入手せよ！	
	今回のイかれたメンバーを紹介するぜ！	255
	いきなりの不穏な気配	263
	パーティー合流と情報整理	272
	野生の〈UBM〉が 現れた！	280
	ゴブリン軍団との激闘	289
	〈UBM〉の正体	299
	一つの決着	307
	【ゴブリン・キング】の最後	316
	【鬼仔母身】	325
	調査、そして接敵	334
	【天翔騎士】VS【クインバース】	343
	私に良い考えがある！	351
	炸裂！ 人間砲弾（妹）！	359
	ゴブリン事件の終わり	368
	掲示板回・宣伝とか	377
	第3章 王都アルテアでのアレコレ	
	〈墓標迷宮〉へGO！	391
	緑の迷宮	398
	〈プロデュース・ビルド〉へようこそ！	408

野良パーティーを組んでみた件	418
馬車を救出せよ！	428
兄のレベリング風景	438
クエスト・騎士団のレベル上げ	446
昔話と準備と	455
馬を買おう！	463
〈墓標迷宮〉への再挑戦	473
〈墓標迷宮〉を進め	482
VS【刻傷黒晶】	492
掲示板回：ダンジョンスレと有名人スレ	502
第4章 決闘都市へ	
1日遅れのリザルト	516
そうだ、ギデオン行こう！	524
謎の【怪盗】と復讐鬼	532
忌まわしき呪物	542
呪物（○）と怪盗少女の結末（前編）	550
呪物（○）と怪盗少女の結末（後編）	558
掲示板回：ギデオンの日常風景	567
ギデオンでの三兄妹・その一	580
ギデオンでの三兄妹・その二	588
ギデオンでの三兄妹・その三	598
ギデオンでの三兄妹・その四＋α	608
何故彼女達は山賊討伐に行く事になったのか	619
いざ！ 〈クルエラ山岳地帯〉へ！	628
灼熱の竜	636

VS 【熱態己竜 ヒートライザ】	644
蟲毒の蟲／灼熱の竜	654
灼熱の竜の最後	664
難易度が九である本当の理由	675
エレメンタルの少女・その真価	685
エレメンタル少女との契約	695
それぞれの脱出	704
『運が悪かったな』	713
打ち上げ／前世のお話	723
間章 色々なへマスターへ達	
とある大学での一コマ	732
超級職の条件	741
ネリル先生による魔法＋αの解説講座	750
あのへマスターへの今：エルザ・ウインドベル編	758
あのへマスターへの今：ひめひめ編	767
あのへマスターへの今：プロデュース・ビルド編	776
現実での一幕	784
第5章 死者の森	
ひめひめからの救援依頼	793
【クルエラン・プロト】	802
レジエンダリアより来る者達	811
到着！ ニッサ辺境伯領	818
予期せぬ再開	826
少女達の過去／これから	834
作戦会議／未だに残る繋がり	842

〈サウダーテ霊林〉	850
霊林での戦い／冥樹降誕	859
侵食スル屍界	869
V S 【冥樹屍界】	879
勝算の見えない戦い	888
掴んだ可能性	900
彼女達のリザルト	914
間章 様々な掲示板／色々な短編	
ダンジョンスレ／超級職の試練	922
生産スレ／デンドロの生産クラン達	936
職業スレ／レントとひめひめ	951
ハロウインスレ／少女達の戦い	966
レジェンダリアのH E N T A I 達	980
ハロウインスレ2／ボスモンスター攻略に向けて	989
ハロウインボスのカボチャ竜（前編）	1002
ハロウインボスのカボチャ竜（後編）	1011
ハロウインスレ3／裏側の事情	1022
アマゾネス達の戦い	1038
夜に踊る死神	1049
夜を払う竜の剣	1057
ハロウインリザルト	1068
第6章 麗しの都	
【女帝】との邂逅	1077
ティアモの過去／竜の血統	1085
少女達の討伐クエスト	1093

PK達をわからせる！

討伐クエストside兄

【女帝】の力

掲示板回：限定イベントと……

竜の少女の歩む道

崇リノ神

妖精境でのやり残し

クルエラン、新たな姿！

特別章 争乱の孤島

バトルロイヤルイベント

孤島で戦う者達

集められた強者達

合流する者／潜伏する者

潰し合う参加者達

星の光を超えて

小康状態／次なる戦いは……

刃と拳

決着、そして終盤戦へ……

125212441235122512161207119711891181

11721164115311441130112011111102

三兄妹＋αの設定まとめ

アバター名：レント・ウイステリア

本名：加藤連

性別：男

下級職【剣士】【騎士】【騎兵】【獣戦士】【格闘家】【斥候】【盗賊】【狩人】【傭兵】【餓鬼】【見習】【魔法剣士】【魔銃士】【魔術師】【司祭】【付与術師】【呪術師】【祓魔師】【防術師】【幻術師】【魔石職人】【戦像職人】【従魔師】【調教師】【従竜師】【女術】 合計26種

上級職【聖騎士】【暗黒騎士】【幻獣騎兵】【古株】【獣戦鬼】【高位従魔師】【紅蓮術師】【黒土術師】【白水術師】【抵抗術師】【司教】【高位祓魔師】【高位魔石職人】【巨像職人】 合計14種・合計レベル約2650

備考：本作の主人公その1であるごく普通（自称）の大学一年生。通称・兄。性格は冷静で常に余裕ある態度を取ってはいるが、妹達の事になると積極的にお節介を焼く割とシスコン気味な所も。デンドロは妹である美希の勧めで始めたが、現在はすっかりハマっておりエンジョイしている。

デンドロでのプレイスタイルは自身の「ヘンブリオ」のスキルで大量のジョブに就けるので戦闘も生産も出来る万能キャラになっている。戦闘では妹二人が前衛型な事もあって魔法支援主体の後衛で、前衛系のジョブも入れている事と剣の心得がある事により前衛もある程度熟せ、生産では複数種の魔法が使える事を生かした【ジエム】作りや特典武具のスキルを用いたゴーレム作成を行なっている。

現在はタイムモンスター達との連携を視野に入れた新たな戦術を模索中。

凡ゆる分野において天才的な才能を有するが真の意味での規格外ハイエンドには後一步及ばず、昔やっていた剣道でそんな存在と遭遇してしまつたことで挫折したので自分の「才能」についてコンプレックスを抱いていた……が、その少し後に遭遇した飛行機事故で両親を失い自分

も大怪我を負った事や、それから出会った後に恋仲になる姫乃を始めとする「色々な者達」や遭遇した様々な事件（ジャンル違いあり）によって、現在では『自分の持った才能は生まれつきだしそういうモノだからしょうがないよね』と割り切る様になった。

とりあえず今後の方針としては昔の自分の様に「才能」について悩んでいる妹達を見守りつつ、デンドロ世界を満喫させて自分なりの『答え』を見つけさせようと考えている。後はネリルから学んだ魔法技術の研鑽などによる自己強化に励みつつ、妹の『才能』によって今後巻き込まれるだろう厄ネタに対する対策を行なっている。

【百芸万職 ルー】

〈マスター〉：レント・ウイステリア

TYPE：テリトリー↓ルール

到達形態：V

能力特性：ジョブ^オレベル^能

固有スキル：

《エクスペリエンス・ブースター光神の恩寵》パッシブスキル。自身が獲得する経験値を増加させる、第五形態現在では+500%。【見習】系ジョブスキルなどと合わせて兄の経験値稼ぎのお供スキルその1。

《エクスペリエンス・トランスレイション長き腕にて掴むモノ》パッシブスキル。自身又は自身のパーティーメンバー・タイムモンスターがモンスターを倒した際、アイテムを落とさなくなる代わりにその分のリソースを獲得経験値に回す。オンオフの切り替えも可能だが、一度切り替えると再度の切り替えに第五形態時では8時間かかる。兄の経験値稼ぎのお供スキルその2にして三兄弟のレベルが高い理由。

《スキル・マスタリー諸芸の達人》パッシブスキル。控えにあるレベル50以上のジョブのスキルをメインジョブに寄らず使用出来る。また、同じ条件で控えにあるジョブのジョブクエストでの経験値をメインジョブに寄らずに獲得出来る。

《イミテーション・ブリューナク仮想奥義・神技昇華》アクティブスキル。任意のジョブのレベルをコストにして選択した「ルー」のスキル以外で自身が習得しているアクティブ系のスキルの効果を強化する。クールタイムは五分。コス

トに出来るレベルは第五形態時で最大50までで、選択したジョブスキルは24時間使用不能になる。コストが重い分だけ強化度合いは絶大で、現在でも50レベル捧げれば上級職の奥義を超級職奥義レベルまで引き上げられる。

《我は万の職能ルに通ず》必殺スキル、パッシブスキル。自身が就く事が出来るジョブの数を大幅に増やす。第五形態時点で下級職は30個、上級職は20個増える。強力なスキルであるが故にデメリットとして『ステータス補正の半減』と『現在就いているジョブに由来する超級職への就職不可』が課せられている。【ルー】の中核スキルであり、他のスキルはこのスキルを補助する為にある。

備考・モチーフは『諸芸の達人』『長腕のルー』ともあだ名されるケルト神話の太陽神“ルー”。前述した兄の才能に関するコンプレックス——一応割り切ったとは言え『後少し自分に才能があれば』という少しの未練はあった——から、デンドロに於ける才能の象徴と言える“ジョブレベル”を起点にジョブやスキルを拡張するへエンブリオとして生まれた。

名前：ヴォルト

種族：【ライトニング・ストライクホース】↓ライトニング・デミドラクホース【亜竜雷電馬】↓

【ライトニング・トライコーン】

性別：男

備考：兄のタイムモンスターその1であり、デンドロ世界を馬車で移動する為の足要員として買った馬型モンスター。性格は冷静である種達観しており知性も同種の馬型モンスターの中ではかなり高く、後述の理由で強くなるための向上心もあるので似た様な性格の兄とは馬があっている感じ。

元はアルター王国周辺にいたライトニング・ドラクホース【純竜雷電馬】群れで生活しており、その知性と才能から群れの次期リーダーとして扱われていた。だが、群れがユニーク・ボス・モンスターへU B M【蠱毒狩蟲 ラーゼクター】に襲われて全滅し、自分だけは生き残ったものの弱った所を捕獲されて店に売りに出された……とは言え、“野生においては生き残った者の勝利”と教えら

れて来た彼には群れを壊滅させた〈UBM〉への恨みなどはそこまで無く、むしろ“生きる為に強くあろう”という考えが強い。

戦闘能力に関しては物理的なステータスは純竜級のモンスターとしては平均より少し上ぐらいだが、その分MPが高めで様々な雷属性のスキルを駆使して戦うスタイル。最近ではネリルの指導とそれによって進化時に得たスキルのお陰で雷属性制御力が上昇したので安定して兄を乗せた騎乗戦闘が可能になった他、電磁防壁・電磁索敵などの新スキルも取得出来た模様。

ただ、兄自身の慣れとステータスの関係やらヴォルト自身の騎乗させての戦闘練度の関係で別々に戦う事も多いので、現在は兄側で騎乗系ジョブを習熟したり騎乗しながらの戦闘訓練を行う事で騎乗戦闘を『手札の一つ』として扱える様に訓練中。その一環として電磁障壁を応用した空中走行などが出来ないか模索している。

名前：ネリル

種族：〔リトル・ネイチャーエレメンタル〕↓〔ネイチャーエレメンタル〕

性別：女

備考：兄のタイムモンスターその2。偶々出会って自分をタイムする様に言ってきた外見は少女型のエレメンタル。性格はおおらかで明るく見えるが、その実深い知性と只者ならぬ雰囲気を持つ。

その正体は先々期文明から生きる神話級最上位の〈UBM〉〔魔鉱地蟲 アニミズワーム〕が万が一の時の為に自分の記憶と経験をインストールしておく事で“自分”を存続させる為に作られたエレメンタル。なので二千年の時を生きてきた魔法系〈UBM〉の記憶と経験――世界最高レベルの魔法技術や様々な知識を有する。

普通のモンスターや〈UBM〉とはかなり異なる価値観を有しており、現在は自身の兄を始めとする三兄妹が中々“面白い”相手な事もあって自身の知識や経験を教えてみたり、〈UBM〉だった時と違って普通に食べれる様になった食事を堪能したりとタイムモンスター生活満喫している。

戦闘能力に関してはMP特化（後はAGIとDEXにも多少）のステータスと、高位魔法を「スキルによる補助無しで」運用出来るレベルの魔法技術で戦う典型的な魔法型で、使用頻度が高い魔法はスキルとして習得しておく事で手早く使える様にするなどの芸当もやっつてのける。また、「ジエム」作成やゴーレム創造も得意とするので兄やヴォルトに技術を教えたり、後述のクルエランを始めとするゴーレムや兄の「ジエム」作成を手伝ったりしている（その気になれば超級魔法の「ジエム」も作れるが兄の成長の為に自重している）

名前：クルエラン

種族：「クルエラン・プロトゴーレム」↓「カスタムゴーレム・クルエラン二型」

性別：女

備考：兄のタイムモンスターその3。〈UBM〉「クルエラン・コア」の残留思念をベースにネリルが作り上げた「ゴーレム」コアを金属化させた「ウッドゴーレム」と「クルエラン・コア」が使っていた古代伝説級合金を組み合わせた躯体に組み込んだゴーレム。そこに特典武器である「クルエラン・コア」の力でスキルを付与したからか種族名に「クルエラン」が付いた新種のゴーレムと化した。残留思念をエレメンタル化した過程で安定化の為に女性寄りの人格にしたので性別は雌判定。

戦闘能力に関してはHP・END特化のステータスに付加された各種防御・回復スキルを使った壁役であり、埋め込まれた「コア」が自然系エレメンタルの要素もあるのでMPも比較的高く自己強化魔法を使う事も可能。更にこの「コア」はネリル謹製の特別製であり砕かれない限りは躯体がどれだけ損傷してもHPが1以下にはならず、仮に砕かれても躯体が50%以上残っていれば時間経過で自動回復するので非常に死に難い。

元となる残留思念が三強時代「霸王」によって物理的に両断されて、今では殆ど忘れ去られた「山岳国家クルエラ」の怨念がベースだからか「クルエラ」の名前を世界に轟かせる事を条件に兄に付き従って

いる。現在の實力は亜竜級上位であり更に戦闘能力を磨いて活躍の機会を得ようと鍛錬に余念がないが、躯体のベースとなる素材や兄のゴーレム生産技術の関係で成長限界は純竜級中位ぐらいなのでより良い素材による更なる強化改造を希望している。

アバター名：ミカ・ウイステリア

本名：加藤美希

メインジョブ：【戦棍姫】

サブジョブ：【剛戦棍士】【戦棍鬼】【戦棍士】【戦棍騎士】【壊屋】【重戦士】【砕屋】【双棍士】

備考：本作の主人公その2の小学五年生、通称・妹。性格は普段は明るく天真爛漫だが後述の「直感」が働いた場合には異様に冷徹になり、本人も自分のそんな在り方に悩んでいる。

生まれつき自身とその周りにいる者に降りかかる危険を感知出来る「直感」を有しており、自身への攻撃を先読みしたりその危険を回避する方法が解つたりもする。昔兄と両親が巻き込まれた航空機事故を「察知出来ていたのに止められなかった」事がトラウマになっており、それからは「直感」による危険回避の導きは最優先で実行する方針。

デンドロでのプレイスタイルはゴリゴリの前衛戦闘型で、ヘエンブリオンの高い物理ステータス補正で得られた物理ステータスと防御スキル効果減衰によるゴリ押しが主体。更に奇襲や罠や不意打ちは持ち前の「直感」によって事前察知出来るので、大抵の相手には無理矢理正面からの戦闘に持つて行ける。

現在はようやく得られた超級職【メイス・プリンセス戦棍姫】を見てニヨニヨしつつ、後述する【ギガス】の特性的に重要な物理ステータスを上げる為に積極的にレベリングをしている。装備品に関してはガチャ産の特典武具【どらぐている】が優秀なので防具は他に要らず、その分浮いた金を使ってサブのメイスや各種高性能耐久性アクセサリなどを買い込んでいる。

【激災棍 ギガス】

〈マスタ―〉：ミカ・ウイステリア

TYPE：エルダーアームズ

到達形態：V

能力特性：物理ステータス・スキル効果減衰

固有スキル：

《バ―リアブレイカー》パッシブスキル。【ギガス】装備時の自身の直接攻撃を行った相手の防御系・身代わり系などの“自分の攻撃を妨げるスキル効果”を減衰させる。効果強度は攻撃が当たった時の攻撃力とスキルレベルによって決まり、第五形態時のスキルレベルは5。直接攻撃であれば【ギガス】での打撃以外でも殴る蹴るの格闘や鞭の様な持っている武器などでの遠距離攻撃でも効果は発動するが、武器の投擲や射撃など“自身の肉体から離れた攻撃”には効果を発揮しない。

《我は禍ツ神を砕く巨人なり》必殺スキル。対象一体を指定して《バ―リアブレイカー》の効果はその対象にしか発揮させない様にする代わりに大幅に引き上げる。更に対象の自身に対するスキル効果も大幅に減衰する。減衰効果は自身のHP・STR・END・AGIの物理ステータス数値に応じて上昇する。その基準となるのは現在値であり、HPの減少や物理ステータスへのデバフを受けていれば効果は下がる。効果減衰の範囲は対象にした相手の保有するスキル、装備品の装備スキル、対象が使用した消耗品のスキル、従属キャパシテイ範囲内及び《軍団》スキル範囲内の使役モンスターが使ったスキルといった所。発動中は対象の強さに応じて常時SP継続消費し、クールタイムも1時間と長め。

備考：大型メイスのアームズでモチーフはギリシャ神話において神々と戦った巨人を指す言葉“ギガス”。一つのパッシブスキルと必殺スキル以外のリソースを武器としての性能（強度・耐久性重視）と物理ステータス補正に割り振っているので第五形態時でSTR・AGI補正がS、HP・END補正がAに届くが、その分必殺スキルに必要なSPが僅かに補正があるぐらいでそれ以外はGのままという物理ステータス特化型。生まれながらの“直感”に振り回されてき

た妹が『降りかかる理不尽に負けない強さが欲しい』と思った結果、デンドロにおけるチート理な防御スキル不を打ち破るスキルと高い物理ス強テータスさ補正を持つ「ヘエンブリオ」として生まれた。

アバター名：ミュウ・ウイステリア

本名：加藤祐美

性別：女

メインジョブ：【魔導拳】

サブジョブ：【武闘家】【格闘家】【魔拳士】【拳士】【僧兵】【蹴拳士】

【拳闘士】

備考：本作の主人公その3である小学二年生、通称・末妹。普段の性格は礼儀正しく真面目だが、身内（兄と妹及びミメーシス）と一緒にいる時にははっちゃける事も。生まれつき武術を中心にした肉体の運用・戦いの際の判断力や冷静さなど“戦闘”に対しての規格外の才能を持つ天災児。

デンドロでのプレイスタイルはその戦闘の才能と現実で少し学んでいる古武術を合わせた格闘家スタイル。普段は遊撃だが本人の高い戦闘センスとヘエンブリオであるメイデンジャイアントキリングの特性もあって、妹では対処しきれないレベルの相手との戦闘も担当する。最近は獲得した古代伝説級特典武具【バイオハーネス】に蓄積された魔力を大量に使う事で、各種スキルの効果を大きく引き上げたりコストを考えずスキル効果を維持出来る様になって更に戦闘能力があがった。

だが、かつて起きた“とある事件”で自分が『異常な才能』を振るって戦った所を見られた所為で、友人であった真里亞と疎遠になってからその才能に対して忌避感を抱いていた……が、デンドロ内で再開した彼女と和解して再び友人に戻った事でその忌避感は大分薄くなった。現在はデンドロ内部での活動や現実の“師匠”と話し合いを通して自分の“才能”とどうにか向き合おうと努力しているが、まだ自分自身の『本来の戦闘の才能』には枷が掛かったままの様である。

【模倣天女 ミメーシス】

〈マスター〉：ミュウ・ウイステリア

TYPE：メイデンwithガードナー↓チャリオッツ・ガードナー↓アドバンス・ガーディアン

到達形態：V

能力特性：模倣&同一化

固有スキル：

《フュージョン・アップ憑依融合》アクティブスキル。マスターである末妹と融合してステータス・耐性などを乗算するスキル。ガードナー形態の「ミメーション」のステータスはMPに特化、それ以外はHP・SPが多少高いぐらいだが各種耐性のマスクデータはかなり高い。融合時には接触している必要がある、デメリットとして「両手武器枠装備不可」と「ステータス補正0」が課せられている。また種族もエレメンタルになり反応速度や思考速度、肺活量や再生能力など「生物としての性能」も向上していて、他にもエレメンタルとしての特性を幾らか持っている。おまけに融合時には髪と瞳の色が黒から桃色に変化したりする。

《アビリティ・ミラーリング天威模倣》アクティブスキル。効果範囲内の対象一体のSTR・END・AGI・DEX・LUCの内 で 数値が高いものから順に任意の数を選び、選んだ対象のステータスを自身のものにコピーする。コストとしてスキル発動時とそこから（6ー選択したステータスの数）分毎に、コピーしたステータスの中で一番高い数値だけMPを消費する。効果は任意のタイミングで終了出来、その際は最後の判定から経過した時間の割合分だけMPを消費する。クールタイムは効果終了から1分間。コストが足りなかった場合にはそのMP×10秒だけクールタイムが延長される。

《アタック・テックチャ攻撃纏装》アクティブスキル。自分に当たった「攻撃」をストックし、それを消費して自分の肉体を用いた攻撃にストックした「攻撃」の攻撃力と効果を上乘せする。またストックした「攻撃」に必要なコストを支払いながら消費する事でその「攻撃」の効果をそのまま使う事も出来る。ストック出来る数は第五形態現在七つで一度使用したストック枠はラーニングしたスキルの強度に応じた時間だけ再使用不能。ストック出来るのはその「攻撃」を受けてから30秒

以内で、肉体への上乗せを使用した後は十秒経過で効果が切れる。ス
トックを一時間使用しなかった場合自動消滅。

《エフェクト・ミラーリング転位模倣》アクティブスキル。効果範囲内の対象一体のバフ・デ
バフなどの掛かっているスキル効果、一部の傷痕系などを除く状態異
常を自身にコピーして上書きする。コストとして発動時とそこから
1分間経過する毎に選択した敵対象がモンスターの場合にはレベル
×50、人間範疇生物の場合には合計ジョブレベル×10だけMPを消
費する。効果は任意のタイミングで終了出来、その際は最後の判定か
ら経過した時間の割合分だけMPを消費する。クールタイムは効果
終了から1分間。コストが足りなかった場合にはそのMP×10秒
だけクールタイムが延長される。

《ミメシス汝は正しく我を模倣せよ》必殺スキル。対象との五分以上(自身と相
手の実力差に応じて時間延長)の戦闘と対象への接触によって発動。
マスターに憑依している「ミメシス」を対象に憑依させ、そのステ
ータスとスキルをマスターのものと同一化させる。効果時間は5分間
で、効果が終了して憑依が解除された後「ミメシス」が紋章の中で
24時間休眠状態になるデメリットが存在する。

備考：常時融合型のガードナーで、モチーフは西洋哲学の概念の一
つで『模倣』という意味を持つ言葉 “ミメシス”。メイデン態は
ショートカットなボーイッシュボクっ娘で性格は基本的に一歩引い
て末妹のサポートに徹する控えめな感じだが、主人の為に必要と判断
すれば積極的にその背を押す事も辞さない。食癖は “一緒に食べて
いる誰かと同じ物しか食べない” で、メイデンとしてのジャイアント
キリング要素は “自身と敵のスペックが同じであれば勝てる” とい
う末妹の戦闘センスを前提としたもの。かつての事件から『異常な自
分でも受け入れられる様に回りと同じでありたい』という願望と『自
分でも制御出来ない(と本人は思っている)才能を側で止めてくれる
人が欲しい』という心の奥底での危機感から『模倣と同一化を能力特
性とするメイデン』として発現した。

アルター王国〈ハマスター〉設定まとめ：その1

アバター名：エルザ・ウインドベル

性別：女

メインジョブ：【高位飼育者】

サブジョブ：【高位従魔師】【従魔師】【飼育者】【調教師】【魔獣師】

【従竜師】【怪鳥師】

備考：三兄妹のフレンドであるテイマー系〈ハマスター〉。バトルファンタジー系のラノベ好きで元々は自分で戦闘を行おうとしていたが、冒険者ギルドでの戦闘訓練で致命的に運動・戦闘センスが無い事が判明して挫折。その直後に戦闘を代行する【ワルキューレ】が生まれたのでテイマーの道を進む事になった。

テイマーとしては後述の【ワルキューレ】達に加えて、感覚が鋭い偵察・斥候要員【デミドラグ・グレイウルフ亜竜 灰狼】のヴォルフ、空中支援・風属性魔法担当【デミドラグ・テンペスティイグル亜 竜 嵐 鷲】のウオズ、地属性魔法全般に長け彼女の護衛も務める【アース・コアエレメンタル】のアーシー、強力な光属性の純竜である【シャイン・ドラゴン】のシャイナと強力なタイムモンスター達を有する。

また、本人もテイマーとしての才能は高かったらしく割とすぐにデンドロへ順応しており、配下への資金やタイム時の交渉・脅迫などもリアルを知る友人に驚かれるレベルで熟しているので、アルター王国でもトップクラスのテイマーとして一部では有名。

ちなみに天然物の《審獣眼》などは持ち合わせていないが、単純に『いいな』と思ったモンスターの資質が高いという巡り合わせの運—リアルラックに優れたタイプ。なので友人が所属している生産クラン〈プロデュース・ビルド〉の専属として装備と引き換えにリアルラックで当てた高品質の装備を提供したり、最近では偶々立ち寄ったギデオンのガチャで特典武器を当てたりしている。

【代行神騎】ワルキューレ】

〈ハマスター〉：エルザ・ウインドベル

TYPE：レギオン

能力特性：代行

到達形態：V

保有スキル：《代行者》オルタネイティブ《主の加護》

必殺スキル：《神軍騎行・合一戦姫》ワッフル キュレ

備考：モチーフは北欧神話の戦乙女「ワルキューレ」で、種族は天使で女性の人型ガードナー。各々の基本ステータスは初期へマスター並だが、スキル《代行者》により人間範疇生物と同じ下級職六つ、上級職二つのジョブに就いてレベルを上げる事が出来る。

更に《主の加護》によって第五形態時には一人につき合計600%の補正を各ステータスにつき10%刻みで10%〜200%の割合で割り振る事が出来るのでカンストへマスター並のスペックを持たせられる。ただしデメリットとしてマスターのステータス補正はゼロになる。

現在は騎士・盾系ジョブで壁役の長女アリア、司祭系統ジョブで回復の次女セリカ、戦士系ジョブで物理アタッカーの三女トリム、魔術師系ジョブで魔法攻撃担当の四女フィーネ、狩人・弓系で探知と遠距離物理攻撃担当のリーファがいる。

第五形態になって習得した必殺スキルは任意数の「ワルキューレ」に選んだ自身のタイムモンスター1体を融合させるガードナー系へエンブリオお約束の融合系スキルの亜種。ただスキルを使うのがマスターになってるのでチャージ中と融合中はマスターが戦闘行動不可・アクティブスキル使用不可のデメリットを追う仕様になっている。

アバター名：ターニャ・メリアム

性別：女

メインジョブ：【紡績職人】

サブジョブ：【裁縫職人】【紡績師】【裁縫屋】【服飾職人】【機織職人】

【糸細工師】【繰糸師】

備考：三兄妹御用達の生産クラン「プロデュース・ビルド」の一員でありエルザのリアフレ。糸素材や布素材の生産、及びそれらを使っ

た衣服の生産を担当している。

性格は明るくコミュ力も高いのでやや職人気質があるクランメンバーのまとめ役になる事もあるが、面白がってギャンブルみたいな生産を行ったりもするトラブルメーカーになる事も。

一応糸を使った戦闘も可能ではあるが、基本的には「エンブリオ」のスキルを使った特殊な糸素材の生産・販売による資金稼ぎ。及びオシヤレで高性能な衣服の生産やクランで作る装備品の布装飾生産などの生産活動がメイン。

【天糸紡蚕 クロートー】

〈マスター〉：ターニャ・メリアム

TYPE：ガーディアン

到達形態：V

能力特性：製糸・捕縛

固有スキル：《天糸紡ぎ》《運命の縦糸》《運命の横糸》《天命紡績》

必殺スキル：《其の運命は此処ココに紡がれんト》

備考：体長1メートル程の蚕型ガードナーで、モチーフはギリシヤ神話の運命の三女神の一人「紡ぐ者」を意味する名を持つ「クロートー」。ステータスはMP・SP・DEXに特化で蚕型の見た目通りAGIが低いから直接戦闘は苦手。

素材を捕食する事でその素材と同じ特性・性質を持つ繊維を生産する《天糸紡ぎ》や、それで作った繊維でマスターが行う生産活動に補正を与える《天命紡績》など生産補助がメインのガードナー。だが相手を【拘束】する《運命の縦糸》や、相手を【呪縛】する《運命の横糸》といった捕縛用の糸を出しての戦闘支援も一応可能。

必殺スキルは一定以上のリソースを持ったアイテムを「クロートー」に捕食させた上でマスターと融合するもので、ステータスは合計されて戦闘能力が上がる……が、メインは融合中にMP・SPを消費する事で《天糸紡ぎ》を使って捕食したアイテムの特性を持った糸を幾らでも生産出来る事にある。

アバター名：エドワード

性別：男

メインジョブ：【高位冶金術師】

サブジョブ：【鉄鋼術師】【錬金術師】【冶金錬金術師】【魔術師】【彫金師】【金工師】【製鉄屋】

備考：プロデューサー・ビルドのクランオーナーで兄とは同じ大学の同期生。ちなみにオーナーの座は他のメンバーが面倒がったので消去法で決まった。クランの中では一番真面目でリーダーシップもあり、更にリアルの実家が自営業店なのである程度商売についても詳しくだったのでそれなりに上手くオーナーを務めている。

一応金属操作やへエンブリオでの戦闘も可能だがメインはへエンブリオ製の特殊な金属素材の生産・販売と、クランでの合作時の生産工程に於ける金属加工を担当するなどの生産活動。実は某錬金術師系漫画のファンであり、アバター名やデンドロで錬金術師を目指したのはそこから。

【幻想冶金 オレイカルコス】

へマスター：エドワード

TYPE：ワールド

到達形態：V

能力特性：非金属の金属化

固有スキル：《メタル・トランスレイト》《ファンタジー・メタル・ワーキング》

必殺スキル：《錬金秘術・幻想合金》

備考：モチーフは神話や伝承に登場する架空の金属の名称の一つ「オレイカルコス」。

任意の非金属を性質はそのままに一定時間金属化させる《メタル・トランスレイト》で相手を【金属化】させて動きを封じたり、自身が所有している非金属のアイテムを一定確率で性質はそのままに完全に金属化させる《ファンタジー・メタル・ワーキング》で特殊な金属素材を作ったり出来る。

必殺スキルは非金属素材と金属素材を融合・金属化させる事で両方の性質を兼ね備えた特殊合金を作成するスキル。使用素材の品質と

本人の技量で成功確率が決まる他、クールタイムは24時間と長め。

アバター名：ゲンジ

性別：男

メインジョブ：【高位鍛冶師】

サブジョブ：【高位武器職人】【鍛冶師】【武器職人】【鎧職人】【盾職人】【剣職人】【槍職人】

備考：『プロデュース・ビルド』の一員で主に武器生産全般を担当している。性格は寡黙な職人肌だが割と仲間思いであり、後述する自身の『エンブリオ』もクランメンバーには遠慮なく貸し与えている。

基本的により良い武器を作る事に意識が向いているので自分の意見を言う事はあまり無いが、メンバーの話し合いがグダグダになった場合にはばつさりと思いを言っつてまとめる事もある。具体的にはクラン名決めの際に自分の『エンブリオ』のスキル名をもじった案を提案したり、クランの行動方針について『素材販売とオーダーメイドアイテム生産』を提案したりしてる。

【改訂工房 へパイストス】

〈マスター〉：ゲンジ

TYPE：フオートレス・ルール

到達形態：V

能力特性：生産スキル効果及び生産物の効果改竄

保有スキル：『プロダクション・エンハンスメント』『プロダクト・リビルド』

必殺スキル：『我が精粹を込め神なる祭器を』

備考：生産工房型のキャットスルで、モチーフはギリシャ神話の鍛冶の神『へパイストス』。

工房内でマスターかそのパーティーメンバーが発動した生産系アクトイブスキル効果欄の数字表記の内、効果がプラスになる部分のみを倍加（第五形態現在では三倍）させる『プロダクション・エンハンスメント』と、自身及び自身のパーティーメンバーが工房内で作った生産物の効果をそのリソースの範囲内で改竄・変更する『プロダクト・

リビルド》による生産活動補助に特化した〈エンブリオ〉。

特に《プロダクション・エンハンスメント》は素材の生産を行う為にジョブ構成も半分くらいはそちらに寄せているメンバーが多く、更に加工が難しい特殊素材を扱う事が多い彼等にとつて非常にありがたいスキルであり、クラン名がそれをもじった物でも誰も文句を言わないレベルで重要スキルの一つとして扱われている。

必殺スキルが工房内で生産したアイテムにチャージしたりソースを注ぎ込んで内包リソースを増幅させる《プロダクト・リビルド》との組み合わせが前提の物。アイテムの性能を大きく引き上げる事が出来るがチャージ時間及びクールタイムは30日と非常に長い。

アバター名：アカイ・ワカバ

性別：女

メインジョブ：【木工職人】

サブジョブ：【高位育樹家】【木工師】【木細工師】【木彫家】【育樹家】
【植樹家】【伐採師】

備考：プロデュース・ビルド〉の一員である〈マスター〉の一人で、主に木材の生産と植物素材の加工を担当している。ボーイッシュな外見の少女で一人称は“僕”。腕はいいのだがセンスが独特で味のある（デザインの木製アイテムを作ってはクランホームに置いたりしているとか。

完全に純生産型のビルドでありログイン中は基本的にクランホームで木製アイテムの生産を行うか、街の商店や木工ギルドで〈エンブリオ〉様に植物系素材を探したりしていて、良い遺伝情報が取れそうな素材を見つけると全力で散財し出す。

【九製界樹 イグドラシル】

〈マスター〉：アカイ・ワカバ

TYPE：フォートレス・カリキュレーター

到達形態：V

能力特性：植物複製

固有スキル：《樹界図》《第一樹層・神》《第二樹層・人》《第三樹層・

深《樹洞拡張》

必殺スキル：《九界貫く天樹》
イグドラシル

備考：モチーフは北欧神話に登場する九つの世界を内包するという架空の木「イグドラシル」。

形状は三階建ての塔で採集した植物の遺伝情報をストックするスキル《樹界図》から任意の植物を選んで育樹・生産する事が出来、それぞれ上から少数高品質生産の《神》、高速大量生産の《人》、複数の遺伝情報をランダムで合成・変異させる《深》となっている。

一つの階層で生産出来る植物の種類は三種・それぞれ三つまでであり、生産する植物の大きさに応じて《樹洞拡張》である程度内部空間が拡張される。

必殺スキルは「イグドラシル」の形状が階層の無い一本の塔に変形され、収集した遺伝情報から九つを選んでそれらを掛け合わせた高品質な樹木を作成出来るスキル。ただしどんな性質の物が出来るかは選んだ遺伝情報を基準にするがランダム性が高く、伐採可能なまでに成長するまで相応の時間が掛かる。

アバター名：マキア・マジカ

性別：女

メインジョブ：【高位製図師】

サブジョブ：【高位手順書士】 【製図師】 【手順書士】 【生産者】 【鍛冶師】 【細工師】 【装飾職人】

備考：プロデュース・ビルドの一員であり、クランでの生産に於ける設計図や【レシピ】の政策や一般向けの特性【レシピ】販売を担当している。ゲームとかでボタンをポチポチして単純作業生産をするのが好きなタイプであり、スキルを使えばサクッと生産出来るデンドロの仕様が気に入ったので生産職をやっている。

なので「エンブリオ」もそれに合わせて【レシピ】を介した生産バフになっているが、ダラけて居ても文句を言われない今のクランは気に入っているのでメンバーでの合同生産では手間を掛けて高性能な設計図を作ったりもしている。

彼女のレシピ・設計図は様々な生産行為（ヘエンブリオ）に対してバフが掛けられるので、ゲンジと同じくクラン内生産活動の要として扱われている。

【図面改算 ゴブニユ】

〈マスター〉：マキア・マジカ

TYPE：ルール

到達形態：V

能力特性：レシピ・設計図

固有スキル：《改造の判》《成功の秘》《昇華の印》

必殺スキル：《三振の神槌》

備考：モチーフはケルト神話において槌を三振りするだけで完璧な武器を製造したとされる工芸神「ゴブニユ」。

設計図やレシピを作る際の自由度が上がり内容が細かく詳しい程他の二つのスキルの効果が上昇する《改造の判》、自身が作った「レシピ」における生産スキル効果・成功率を上昇させる《成功の秘》、自身が作ったレシピ・設計図通りに作った生産物の性能を上昇させる《昇華の印》による生産行動へのバフを掛ける事に特化している。

必殺スキルは自身が作った設計図での生産時で使われる生産スキル一つの成功率を大幅に引き上げると言うもの。スキル使用の為にストックは三つあり24時間で一つ回復する。複数回同じスキルに掛ける事も可能。

アバター名：鵜崎

性別：男

メインジョブ：【宝石職人】

サブジョブ：【彫金職人】【宝石師】【彫金師】【宝石細工師】【装飾師】

【採取師】

備考：ヘプロデュース・ビルドの一員であり、希少鉱石素材の生産と宝石・金属加工担当。簡単に取れる宝石・鉱石をちよつと加工してから売って儲けていたが、その手の特殊素材の流通ルートを持っているクランの話聞いて加入した。

ソシヤゲとかでログインボーナスをこまめに貰ったり貯めたそれらでガチャを回すのが好きなタイプだったが、昔それが行き過ぎてリアルで重課金兵だった時に生活が苦しくなってきたからは現実の金を使う事からは足を洗っている。その代わりに現実の金を使えないデンドロでへエンブリオで取れたアイテムを売って出来た金をギデオンのガチャを楽しんでいる（そしてしょっちゅう爆死している）

なので生産自体にはそこまで熱心では無いがデザインセンスとかは良いので普通に売れており、本人もゲーム内で所属するクランとして今の緩い感じが気に入っているので必要なら生産の手伝いをして希少素材をメンバーに安く売ったりしている。

【果樹宝咲 ゴールデンアップル】

〈マスター〉：鵜崎

TYPE：フォートレス

到達形態：IV

能力特性：希少鉱石生産

固有スキル：《金の生る木》

必殺スキル：《ゴールデンアップル黄金と成る樹》

備考：モチーフはさまざまな国や民族に伝承される民話や説話の事実である『黄金の林檎』。大きな一本の木の姿をしたへエンブリオで、スキル《金の生る木》によって大地からリソースを吸収して一定間隔で様々な金属や宝石で出来た果実を付ける。

また自身のHP・MP・SPを注ぎ込んだり所有するアイテムをコストとして捧げる事で、生成される宝石・金属の質と数を上昇させたりの次の果樹が生る間隔を短くする事も可能だが、基本的にどんな金属・宝石が生成されるかは完全なランダムであり、木に果実として生る特性から一度に取れる量は平均的な果実程度の質量は余り多くないが、その分だけ高品質の物が生成されやすい。

必殺スキルは【ゴールデンアップル】そのものを何らかの金属・宝石素材へと変換するという効果で、へエンブリオ自体をコストにしているので相応に高品質で大質量な素材を獲得出来るが、へエンブリオ自体が再生するまで使用不可になるクールタイムも30日と長い。

アバター名：ドワガール

性別：女

メインジョブ：【装飾職人】

サブジョブ：【高位武器職人】【装飾師】【武器職人】【鍛冶師】【木工

師】【裁縫屋】

備考：へプロデューズ・ビルドへの一員で、名前通り女ドワーフっぽいアバターをしたへマスター。西洋系ファンタジー作品やそこに出てくる伝説の武器とかが好きで初期開始国家はレジエンダリアと迷ってコイントスで決めたらしい。

純生産系ビルドであり様々なアクセサリや装備品の生産・研究を行っており、クランに入ったのもエルザから話を聞いて希少素材が安く手に入ると思ったのもある。クランの方針も『オーダーメイド装備』を作る事に特化した自身のへエンブリオと相性が良いのでエンジョイしている。

最近ではタイムモンスター用にHPを1だけ残して【ジュエル】に収納させて生存させる【臨死の救命】のスキル装備が兄に売れたので、それを機に他のテイマーにも売ろうとしたのだが『そもそもHP1なら状態として大体死んでるし、死期を伸ばすしか出来ないんじゃない？』と言われて売れなかつたので現在改造中（兄が買ったのはネリルが超級回復魔法も使えるから）

【専要装造 ドヴェルグ】

へマスターへ：ドワガール

TYPE：ルール・カリキュレーター

到達形態：IV

能力特性：オーダーメイド装備作成

固有スキル：へエニフン・オーダー・メイキング依頼者は神魔も問わずへジョーン・インクールド《汝の血肉で完成させん》《因子解析》

備考：モチーフは北欧神話で対価に応じて神々の象徴となる魔力のある武器や宝の制作をする優れた匠としても描かれる闇の妖精“ドヴェルグ”。形状は二の腕部分に機械がついたオープンフィンガー

型の長手袋。

他者から装備を作成する依頼を受けた時のみ生産スキルの効果を引き上げる《依頼者は神魔も問わず》と、対象の遺伝情報の一部を機械部分に取り込む事で作る装備品を対象専用にする代わりにスペースなどを強化・改造する《汝の血肉で完成させん》によるオーダーメイドの装備を作る事に特化している。

遺伝情報はモンスターの物でも問題無く、その場合は例え人間用の装備でも装備条件やサイズなどを改変してそのモンスターに装備出来る様にする事すら可能。更に自身の所有物をコストに情報を記録して、それらのデータを生産物に反映させる《因子解析》によって改造の範囲・自由度を上げている。

アルター王国〈ハマスター〉設定まとめ：その2

アバター名：レオン・ハート

性別：男

メインジョブ：【黒騎士】

サブジョブ：【聖騎士】【騎士】【弩弓手】【短槍士】【戦棍士】【盾騎士】【斥候】

備考：三兄妹の知り合いであるアルター王国で騎士ロールプレイをやっている〈ハマスター〉で、実は兄とは【聖騎士】の転職条件を教えるなどしてその後も多少の付き合いがあった。

現在は同じ騎士ロールプレイの〈ハマスター〉を集めてハアルター王国自由騎士団というクランを作り、【聖騎士】の就職条件を広めたなどの功績から成り行きでクランリーダーに収まっている。現在は騎士系統のジョブクエストを始めとした騎士っぽいプレイに励み、その過程で危険なクエストやボランティアなども行なっているので王国の騎士達からもそれなりの信頼を得ている。

戦闘スタイルは手持ち武器を強化して戦いつつ相手によって武器を使い分ける正統派だが、最近ブラックナイトは偶々条件を満たす事が出来た騎士系統派生上級職【黒騎士】のジョブとの組み合わせを考えている。

【獅支心応 ライオンハート】

〈ハマスター〉：レオン・ハート

TYPE：ウエポン

能力特性：手持ち武器強化

到達形態：V

固有スキル：《イミテーション・エクスカリバー》《レンジレス・アイムズ》《リリーフ・ウエポン》

必殺スキル：《駆けよ獅子心王、其の聖剣は真成らずとも》

備考：モチーフはイングランドの王であり自分の剣に『エクスカリバー』と名付けていたリチャード1世の異名「獅子心王（ライオンハート）」。形状は獅子の意匠をあしらった白い小型の籠手で手に持った装備に効果を発揮する。

手に持った武器の性能を強化（第五形態時は片手につき+250%、一つだけを両手持ちにすれば効果は累積する）する《イミテーション・エクスカリバー》、MP消費で手持ち武器の射程を上昇させる《レンジレス・アームズ》、手持ちの装備で使うジョブスキルの消費MP・SP・クールタイムを軽減させる《リリーフ・ウエポン》と言ったスキルによって武器を使った戦闘を補助する効果がある。

必殺スキルは手持ち武器の合計装備攻撃力分AGI上昇、合計装備守備力分攻撃対象の防御力減少、手持ち武器で使うジョブスキル効果大幅上昇というシンプルな強化能力。コストも騎士系統ジョブを取っているので多いHPの継続消費でクールタイムも十分程と使いやすい、騎士団の訓練にも積極的に参加している本人の技術と合わせて純竜級モンスターのソロ討伐も可能。

アバター名：アミタリア

性別：女

メインジョブ：【魔導騎兵】

サブジョブ：【魔導盾】【騎兵】【盾士】【魔法盾士】【魔術師】【冒険

家】【写真家】

備考：W i k i 編纂部・アルター王国支部の一員。《エンブリオ》を使つての人員輸送、戦闘時には前衛での壁役を主に担当している。写真とサーフボードが趣味であり旅行先で珍しい風景を撮ってはネットに上げたりしていたので、デンドロ内の写真撮影に都合が良いと思つて編集部に入った。今も暇な時は編集部の伝手で手に入れたカメラ系アイテムと映像出力アイテムを使い、「プリトヴェン」に乗つて色々な風景の写真を撮っている。

【暴風盾板 プリトヴェン】

《マスター》：アミタリア

TYPE：ギア・ウエポン

能力特性：風による移動

到達形態：V

固有スキル：《ホバーダッシュ》《エアロバースト》《ウインドリダク

シヨン》

必殺スキル：《吹き荒べ、嵐の王》

備考：モチーフはアーサー王伝説で語られる盾とも船とも言われるアイテム「プリトヴェン」。大型のサーフボード形態と手持ち出来るサイズの盾形態に変形する「エンブリオ」で、上級に進化した際に数が二つに増えてそれぞれ別の形態で使ったり同じ形態同士を連結させて威力を上げる事も出来る様になった。

サーフボード形態ではMPを消費して陸・海・空を移動するホバー移動を行う事が出来て、盾形態ではMPを消費して殺傷性が低い代わりに相手を吹き飛ばすノックバック効果が高い暴風を発生させる。サーフボード形態では空気抵抗軽減、盾形態では暴風を起こした時の反動を軽減するパッシブスキル。

必殺スキルは効果終了後の「エンブリオ」自壊と引き換えに大気放出効果を短時間だけ超大出力化するもので、更に形態変化なく全スキルが使用可能になり大気放出の指向性の操作や殺傷性が元通りになるので風属性上級魔法以上の威力の攻撃なども可能になる。

アバター名：リゼ・ミルタ

性別：女

メインジョブ：【高位呪術師】

サブジョブ：【増幅術師】【魔術師】【付与術師】【防術師】【司祭】【呪術師】【斥候】

備考：Wiki編集部「アルター王国支部」の一員であり、デンドロの魔法に関する研究考察担当。戦闘に関しては分かりやすい純魔法型の支援タイプで、他者の魔法効果の強化に特化した付与術師派生上級職「増幅術師」で自分の「エンブリオ」を強化するスタイル。

元々ファンタジー系の魔法が好きで以前からゲームの攻略wikiとかに魔法関連の使い方を書き込んだりしていたから「Wiki編集部」に入ったタイプで、今も異常に複雑なデンドロの魔法理論をどうにか分かりやすく解析できないかオーナーなどと一緒に奮闘中。

【支援妖精 フェアリー】

〈マスター〉：リゼ・ミルタ

TYPE：レギオン

能力特性：魔法運用支援

到達形態：V

固有スキル：《マジカル・ラーニング》《マジカル・コントラクト》

《フェアリー・コーラス》

必殺スキル：《たくさんフェえるよリー！》

備考：モチーフは西洋の神話や伝説に登場する超自然的存在の総称「フェアリー」。見た目は身長20センチぐらいの三頭身ゆるキャラ妖精。ステータスはMP極特化で浮遊可能。必殺スキルで増やしたモノ以外のオリジナル「フェアリー」は第五形態時で5体。

この「フェアリー」達はマスターが習得した魔法系スキルを確定で、又は発動を目撃した魔法系アクティブスキルを最大1%（魔法によって隔離変動）の確率で「フェアリー」がスキルレベル1の状態でラーニングする《マジカル・ラーニング》や、「フェアリー」が覚えている魔法を一体につき一つマスターが使える様になる《マジカル・コントラクト》、マスターと「フェアリー」で擬似的に《ユニゾン・マジック》発動させる《フェアリー・コーラス》と言ったスキルで様々な自在に魔法を運用してくれる。

必殺スキルは自分のジョブレベルをコスト（大体約上級職100レベル分）として「フェアリー」のコピーを一体増やすと言うもので、チャージ時間とも言えるクールタイムが30日かかる。レベルを上げてジョブをリセットしつつ、別の魔法系ジョブを取って「フェアリー」に更なる魔法をラーニングさせるのが主な使い方で、初の必殺スキル使用時には【賢者】を捧げて新たに一体作ったので代わりに【高位呪術師】を取っている。

アバター名：久遠たむー

性別：男

メインジョブ：【鷹匠】

サブジョブ：【大弓狩人】【狩人】【弓狩人】【弓手】【怪鳥師】【観測

手】【尾行者】

尾行・W i k i 編集部・アルター王国支部の一員であり、主にヘエンブリオンを使っての探索・索敵並びに弓を使っての遠距離支援戦闘を担当している。

元々隠しダンジョンやレアモンスターを見つけるのが趣味であり、デンドロでも情報を集めながらヘエンブリオンを使ってそういった要素を見つけ出している……が、その途中で自身や「ヤタガラス」が強力なモンスターに襲われてデスペナになる事も多い模様。

【誘導神鳥 ヤタガラス】

〈マスター〉：久遠たむー

TYPE：ガーディアン

能力特性：導き

到達形態：V

固有スキル・〈神鳥の導き〉《金鳥の炎》《誘導光》《視覚転写》《金鳥の火の粉》

備考：モチーフは日本神話に登場するカラスにして導きの神〃八咫鳥〃。外見は小型の三本足のカラスでステータスはMP・AGIが高く、頭も良いので短文なら喋る事も可能。

基本的に〃目的地〃を設定、その情報量・距離・自身の能力・隠蔽度合いなどからスキル行使が可能かを判定して、成功した場合「ヤタガラス」がそこまで飛んで行く《神鳥の導き》によってレアモンスターや隠しダンジョンなどを探したり、「ヤタガラス」の視界をマスターと共有する《視覚転写》での索敵を主に行う。

一応、目視した対象を追尾する金色の炎を発射して攻撃する《金鳥の炎》や、攻撃を当てた敵一体にマスターの攻撃を誘導する《誘導光》、誘導効果・軌道操作効果などの特性があるスキルの制御権を奪い取るチャフをばら撒く《金鳥の火の粉》で戦闘も可能だが、そもそもステータスがMP・AGI型で同ランクのガードナーと比べても低めなので直接戦闘には向いていない。

アバター名：モヒカン・デイシグマ

性別：男

メインジョブ：【盾巨人】

サブジョブ：【守護者】【盾士】【塔盾士】【盾騎士】【双盾士】【防術師】【斥候】

備考：三兄妹を襲ったPKの一人であるモヒカン……だったが、かなりエグい戦術であつさりと返り討ちにされてからは相方のボツチーと一緒に足を洗って、現在はへモヒカン・リーグへアルター支部に入って三兄妹との遭遇を避ける為に辺境でボランティアに邁進している。

戦闘スタイルはへエンブリオへを含む盾を使ったガチガチの前衛壁役で、相方であるボツチーを守りつつ彼の味方毎吹き飛ばす広範囲攻撃もガードする防御特化系。一応【盾騎士】や【双盾士】などでの盾を使った打撃スキルでの単独戦闘も出来るが、PKだった時に妹に単騎で挑んで頭を潰されてからは連携を重視する様になった。

【盾備板端 アイアス】

へマスターへ：モヒカン・デイシグマ

TYPE：ウエポン

能力特性：障壁展開

到達形態：V

固有スキル：《七の青壁》セブン・シャッター 《鋼の赤壁》ハード・シャッター 《撃の黒盾》リベンジ・シールド 《再の茶盾》レストア・シールド
《操の緑壁》ディフォーム・シャッター

備考：モチーフは『ギリシャ神話の英雄大アイアスが持つ盾』である盾型のアームズ。後述のスキルに色々制限がある分だけ純粋に盾としての性能（装備攻撃力と装備防御力）が高くなっている。

基本的に25万近い耐久値と間接攻撃に関してはダメージを半減する効果を有する障壁を展開する《七の青壁》を主体とした障壁展開能力を有する防御系へエンブリオへだが、ストックは7つだけで一つの回復に1時間掛かるので連続戦闘には向いていない。

その分上記の空きストック数×2秒間だけ展開中の全障壁の耐久値が減らなくなる《鋼の赤壁》や、MPを消費して展開した障壁を移動・変形・拡大などの操作を行える《操の緑壁》を適時使って最適な

防御を行う。或いは空きストック数×3秒間戦闘中に障壁が受けたダメージ分アイアス本体の攻撃力を上昇させる《撃の黒盾》でのカウンター戦術や、盾で攻撃を受けた時ダメージ数×1秒分上記ストック回復時間を短縮する《再の茶盾》による継戦時間増加などの戦術も取れる。

アバター名：ボッチー

性別：男

メインジョブ：【黒土術師】

サブジョブ：【高位付与術師】【魔術師】【防術師】【付与術師】【司祭】

【生贄】【裁判官】

備考：リアルで付き合っていた彼女にフラれたので腹いせにデンドロでカップルを爆殺していたPK……だったが、兄に返り討ちにされて頭が冷えたので引退。今は迷惑を掛けた詫びも兼ねて相方のデイシグマと共にボランティア活動とかをしている（クランにはモヒカンになるのは嫌なので入っていない）

戦闘スタイルは爆破（自爆）が得意なガードナーを強化しての広範囲攻撃で、味方を巻き込みそうな時には相方のデイシグマにフォローして貰う形。単独でも土属性魔法で壁を作って防ぎながら戦えるビルドになっているが、PK時代を取った【裁判官】は別のに変えようかと思っている。

【爆炎再誕 ベンヌ】

〈マスター〉：ボッチー

TYPE：ガーディアン

能力特性：自爆・再誕

到達形態：V

固有スキル：爆炎鳥（エクスペロージョン）《爆裂羽弾》（エクスペロッド・フェザー）《爆裂羽陣》（エクスペロッド・マイン）《再誕鳥》（リ・ボーン）《魔力蓄積》

必殺スキル：《爆裂転成》

備考：モチーフはエジプト神話に伝わる不死の霊鳥「ベンヌ」であり、スキル型でステータスはそこまで高くは無いが二人ぐらいは背に

乗せて飛ぶ事も出来る大型の鳥型ガードナー。

メインの攻撃方法は自爆する事で自身のステータスに比例した威力の高熱と衝撃波を発生させる《爆炎鳥》による自爆特効。他には左右の翼に30枚づつある特殊な羽を分離・射出した上で爆発させる《爆裂羽弾》や、その羽を多数に分裂させ滞空・低速移動・接触でも爆発という設定で周囲に散布する《爆裂羽陣》と言った身を削つての爆破を駆使する。

だが、自爆は言うまでもなく羽に関しても一枚消費する毎に自身の全ステータスが1%低下する仕様故に継戦能力に欠けている。それを補う為MPを支払う事で上記スキルによる損耗を回復させる《再誕鳥》と、それに使う魔力を事前に蓄積（容量は第五形態で25万程）出来る《魔力蓄積》のスキルもあるが典型的な蓄積型なので連続戦闘は苦手。

必殺スキルはマスターと「ベヌ」が融合したのちに蓄積魔力を全て使って自己強化を行いステータスを大きく引き上げると言うもので、更にこの手のスキルにありがちな発動までのチャージ時間も存在せず即座に使用できる……のだが、実は融合してから10秒後に自動で超強力な大爆発を起こす自爆スキルでもある。当然融合しているマスターも死ぬ。

アバター名：シユバルツ・ブラック

本名：新垣貴志

性別：男

メインジョブ：【疾風槍士】

サブジョブ：【呪槍士】【槍士】【双槍士】【魔法槍士】【呪術師】【伏兵】【斥候】

備考：アルター王国所属の「マスター」で、高い実力と狙いを定めたターゲットの事を事前に念入りに調べる慎重さを持ち合わせた優秀なPK。昔やっていたMMOでレアスキルで粹がってるプレイヤーに初心者狩りされたのをキッカケに、トッププレイヤーやイキるPK専門のPK活動を始めとして名を馳せていた。

……が、デンドロのPK始めとしてそこそこ有名だった三兄妹に狙いを定めたら返り討ちに、その後対策を講じて敗北した末妹にリベンジを仕掛けるも惜敗、更に現実での気になるクラスメイトが実は妹――美希だった事に気が付いて頭を抱える事になり、現在はPK稼業を中止して今後どうしようか悩みながら三兄妹と顔を合わせない様に王国の辺境で普通にプレイしている。

それでデンドロ辞めようかなとも思ったが、PK辞めて普通にプレイしていたら何故か高性能な武器や特典武器を手に入れられたので『ここで辞めるのもなあ』となり、現在は特典武器に合わせてジョブビルドを見直しつつ今後どうするかを考えている。

【滅神呪槍 ミステイルティーン】

〈マスタ―〉：シユバルツ・ブラツク

TYPE：テリトリ―・アームズ

能力特性：特化能力に対する特効

到達形態：V

固 有 ス キ ル：

《輝ける身体よ、墜ち果てろ》 《輝ける命脈よ、尽き果てろ》

《輝ける才覚よ、消え失せよ》 《ヤドリギの枝よ、天へ伸びよ》

備考：モチーフは北欧神話において無敵の肉体を持つと言われた神“バルドル”を殺したヤドリギで出来た槍 “ミステイルティーン”。木製の槍で装備攻撃力は低めでありステータス補正も平たく余り高くは無い。

主な能力は〈エンブリオ〉が接触した対象（自身含む）全ての最大HP・MP・SPの内でも最も高い数値一番低い数値と同じにして、更にこの効果が適応されている対象に攻撃する場合のみ槍の攻撃力はその減少数値の半分だけ上昇させる《輝ける命脈よ、尽き果てろ》と、最大STR・END・AGI・DEX・LUCの内でも最も高い数値を一番低い数値と同じにして、その減少数値分だけ槍の攻撃力を上昇させる《輝ける身体よ、墜ち果てろ》による無差別デバフと攻撃力上昇。他にも同じ条件で上級職以上のジョブスキル・ジョブレベルを封印する《輝ける技巧よ、色褪せよ》や、その合計レベル×50の固定ダ

メージを与える《輝ける才覚よ、消え失せよ》などを使える他、HPを任意消費して展開したHP100につき直径1メートルの円形ドーム状をフィールドの範囲内に入った者全てを『ヘエンブリオ』が接触した対象』にする《ヤドリギの枝よ、天へ伸びろ》などで強制的にスキルの発動条件を満たす事も可能。

アバター名：ガイアー

性別：男

メインジョブ：【重装戦士】

サブジョブ：【鉄拳士】【重戦士】【鎧戦士】【拳士】【蹴拳士】【格闘家】【冒険家】

備考：アルター王国の《マスター》で強敵とのタイマンが生き甲斐な奴。これは初日にログイン勢によくある『本物のVRMMOに出会った感激で辺りを走り回ったらモンスターに襲われる』展開の際に、それを苦戦しながらも倒した事でその興奮にやみつきになったから（その後は別のモンスターに襲われてデスペナになった）

その後は強敵に積極的にタイマンを挑み続けておりPKの扇動に分かっていながら悪ノリして三兄妹に挑んだ事もあるが、基本的にティアンに迷惑が掛かるような犯罪行為は萎えるからやらない様になっている。

戦闘スタイルは全身鎧の《エンブリオ》を装備しての近接格闘であり、本人の好みと能力との相性から足を止めて徹底的に殴り合うのが基本。

【大地巨鎧 アンタイオス】

《マスター》：ガイアー

TYPE：エルダーアームズ

到達形態：V

能力特性：接地

固有スキル：《チューニング・アーマー》《大地の加護》《代打鎧》ピンチヒット

イア・インパクト》《ガイア・バースト》

必殺スキル：《大地に立つ不屈の巨人》

・モチーフはギリシャ神話のポセイドンとガイアの息子であり、大地に足が付いている限り無限に復活して強化される巨人。アンタイオス”。高い強度・装備攻撃力・装備防御力を持った全身鎧だが、装備した時はアクセサリーと特殊装備品枠以外の両手装備枠も含めた全身の装備枠を使用する。

重厚な全身鎧であるが肉体と遜色無く自在に稼働して視覚・聴覚などの五感も十全に運用出来る上、接地中はそれらの行動に対する制限への抵抗力も上昇する《チューニング・アーマー》の存在もあって意外と俊敏に動く。それと大地のリソースを吸い上げて鎧を自動修復する《大地の加護》や、発動中に自分自身が受けるダメージや状態異常などを鎧へのダメージに変換するアクティブスキル《代打鎧》があるので耐久力も高い。

また鎧による直接攻撃時のダメージを『装備攻撃力分の固定ダメージ』に変更する《ガイア・インパクト》や、その戦闘中に鎧が受けたダメージ+装備防御力分の攻撃力を持つ衝撃波を発生させる遠距離攻撃技の《ガイア・バースト》と言ったアクティブスキルもある。ただしクールタイムは長め。

必殺スキルは戦闘中に「アンタイオス」がダメージを受ける度に装備攻撃力・防御力が上昇し、更にSTR・END・AGIに対する装備補正が追加・強化されるといふパッシブ型で上記の再生能力や身代わり能力もあってグングンステータスを引き上げられる。

だが、モチーフ通りと言うか「アンタイオス」の固有スキルは全て“地面に接地している状態”でのみ発動可能で、必殺スキルも地面から1秒以上離れたら強化が解除されるデメリットがある。

アルター王国〈マスター〉設定まとめ：その3

アバター名：日向葵

本名：日向葵

性別：女

メインジョブ：【手刀拳士】

サブジョブ：【賢者】【拳聖】【魔術師】【魔拳士】【拳士】【蹴拳士】【斥候】

備考：克蘭〈月世の会〉に所属する〈マスター〉の一人で、妹・末妹のフレンド。現実では生まれつきのアルビノ中学生少女であり、一応日光対策をすれば日常生活を送れるが病弱なので病院通い。

その病院が〈月世の会〉関連の病院であつた事と克蘭オーナーである月夜と知り合いだった事が縁で克蘭に加入したが、現実の方では〈月世の会〉には入っていなかったりする（デンドロは外で遊べない彼女の為に両親が買って来てくれた）その所為か月夜とは割と年の離れた友人みたいな気さくな関係になっており、偶に腹黒過ぎる行動に辛辣なツツコミを入れる事も。

戦闘スタイルは〈エンブリオ〉に蓄積された熱エネルギーを使って【賢者】の魔法や【魔拳士】【付与術師】の身体強化を駆使する感じだったが、特典武具【ヒートライザ】を手に入れてからは純格闘型にジョブビルドを移行させている。これは火属性魔法で熱エネルギーをチャージする必要も無くなった事や、特典武具の装備スキルで遠距離攻撃が可能になった事、同じく特典武具の高熱を肉体に纏う装備スキルと近接格闘の相性が良かった事も原因。

【日天鎧皮 カルナ】

〈マスター〉：日向葵

TYPE：アームズ

到達形態：V

能力特性：光・熱エネルギー吸収&蓄積

固有スキル：〈日^{サン}天^{シャイン}吸^{アブソーブ}蓄^{ション}〉

必殺スキル：〈日^カ輪^ル殲^ナ洗^ナ〉

備考：モチーフはインドの叙事詩『マハーバーラタ』に登場する皮膚と癒着した黄金の鎧を持って生まれた英雄「カルナ」。全身の皮膚を置換した人工皮膚型の「エンブリオ」で装備枠はアクセサリ枠を一つ消費する。人口皮膚とはいえアームズなので通常の皮膚より遥かに強靱であり、特に刺突・斬撃に対する防御力は高い。

固有スキルは自身への光・熱エネルギーによるダメージを吸収・蓄積して、更にMP・SPを使う自身のスキルを使用する際に代わりとしてその蓄積エネルギーを使う事が出来る『日天吸蓄』一つだけの単機能特化型。これによりデメリットとして自分に高熱によるダメージが発生する特典武具などを自在に使える様にするなどしている。

必殺スキルは蓄積した全光熱エネルギーに最低限の指向性を持たせて放出すると言うシンプルなもの。クールタイムは24時間で他のデメリットとして発動後には十分間『日天吸蓄』の『MP・SPの代わりに蓄積エネルギーを使う』能力が使用不可能になる（光熱吸収の方は使用可能）

マスターの『日の光を浴びたい』という願いの元で生まれた「エンブリオ」だが、アバターの時点で日光下での活動は問題無かったので光熱エネルギー蓄積の方がメインになった。

アバター名：小鳥遊雲雀

本名：小鳥遊雲雀

性別：女

メインジョブ：【教会騎士】

サブジョブ：【司教】【司祭】【助祭】【付与術師】【死兵】

備考：克蘭「月世の会」に所属する「マスター」の一人で、リアルでは「月世の会」関係の病院に所属している終末期医療担当の看護師であり、業務の一環としてデンドロ内部での患者のケアやデンドロが患者に与える影響の調査の為にデンドロをやっていた。

デンドロのハードは患者優先で自分はアカウンタだけ作って必要に応じてハードを借りていたが、最近ようやく自分用のハードを買う事が出来たので仕事以外にも息抜きにログインする事も出来る様に

なった。

仕事が忙しいのでログイン時間が少ない事や「エンブリオ」の能力がピーキー過ぎる事から戦闘能力自体は低いが、仕事内容が『デンドロ内の患者の観察とケア』なのでクランメンバーでパーティー組む事を前提として支援と自身の生存能力特化でジョブビルドを組んでいる。

【回生杖 アスクレピオス】

「マスター」：小鳥遊雲雀

TYPE：アームズ

到達形態：IV

能力特性：蘇生

固有スキル：『パーフェクト・リザレクション』

備考：モチーフはギリシャ神話に登場する名医であり医神「アスクレピオス」で、ステータス補正はMPに特化した杖型アームズ。固有スキルはMPを消費して蘇生可能時間内の死者を蘇生させる『パーフェクト・リザレクション』のみと言うピーキーな「エンブリオ」。

だが、リソースをほぼその一点に集中しているが故に効果は強力で、蘇生の際にHP完全回復・【炭化】や部位欠損すら治せる状態異常回復・発動までほぼノータイム・消費MP低・短いクールタイム・複数人同時使用可能な超高性能蘇生スキルになっている。また上級「エンブリオ」になった際には無詠唱発動や装備さえしていれば手に持っていないなくても発動可能になったりしている。

「マスター」：鈴木健太

本名：鈴木健太

性別：男

メインジョブ：【薬効戦士】

サブジョブ：【隻剣聖】【戦士】【剣士】【隻剣士】【薬師】【斥候】【指揮官】

備考：クラン「月世の会」に所属する「マスター」の一人で、リアルでは複数の副作用がある薬を常飲しなければならぬ病気を患っ

ている。その為余り人と接する事も少なく、何時も一人で本やゲームをしていた。

それ故にデンドロでは克蘭メンバーと共に自由に動ける事を楽しんでおり、戦闘では発現した〈エンブリオ〉の効果による自己バフや他者への支援・回復などを行うパーティー戦に長けたビルドを組んでいる。更に片腕が〈エンブリオ〉の装備で塞がる欠点を【隻剣士】系ジョブでもう片方の手で使う剣術の威力をあげる事でカバーしたりもしている。

【良薬来効 ヒュギエイア】

〈マスター〉：鈴木健太

TYPE：テリトリー・アームズ

到達形態：V

能力特性：薬品強化

固有スキル：《瞬間充薬》《瞬時注射》《霊薬は口に易し》《皆癒の落

涙》《魔薬は身に厄し》

備考：モチーフはギリシヤ神話の医神アスクレピオスの娘で健康の維持や衛生を司る女神ヒュギエイア……が持つ、薬学のシンボルにも用いられている“ヒュギエイアの杯”。

形状は短銃型の無針注射器で、中に入れたポーションを対象に注射する事で即時かつ最高効率で効果を発揮させる《瞬時注射》というスキルを持つ。更に《瞬間充薬》で所有しているポーションを内部へと瞬時に装填し、それら効果・持続時間を《霊薬は口に易し》で強化及び副作用・デメリットの大幅軽減を行う事によって薬品の効果を最大限に引き出す事が出来る。

また、そのポーションの効果範囲内の味方に付与する《皆癒の落涙》による全体バフや、内部ポーションの薬効を反転させて《瞬時注射》と合わせて敵に打ち込む為の《魔薬は身に厄し》による、ポーションのバフ・回復効果扱い故に耐性が機能しにくい特殊な攻撃も可能。

アバター名：立花翔

本名：立花翔

性別：男

メインジョブ：【大魔戦士】

サブジョブ：【賢者】【剣士】【投剣士】【魔戦士】【魔術師】【付与術師】【斥候】

備考：クラン〈月世の会〉に所属する〈マスター〉の一人で、現実では“とある飛行機事故”によって重傷を負い、その後遺症で今は車椅子での生活を余儀無くされている。それ以前は武術をやっていたのだが辞めざるを得なくなったので鬱になっていたが、デンドロの紹介CMにおける決闘の映像を見て『自分もあそこで再び戦いたい』と思い〈月世の会〉の伝手でデンドロを始めた。

戦闘スタイルは後述する自身の〈エンブリオ〉のバフデバフを受けると、『せつかくのゲームだし現実では使えない魔法とか使ってみたい』という理由で色々な事が出来る器用貧乏なジョブビルドを組んでいる。

【同一戦場 コロッセウム】

〈マスター〉：立花翔

TYPE：ラビリンス

到達形態：V

能力特性：決闘場・無差別バフデバフ

保有スキル：《高速展開：緊急収納》《特殊規則：能力偏向》《特殊規則：攻撃偏向》《特殊規則：技能偏向》《特殊規則：装備偏向》

必殺スキル：《絶対平等決闘場》

備考：モチーフは古代ローマに於ける円形闘技場の名称“コロッセウム”。第五形態では直径60メートルぐらいで、それ以前の形態のより小さい決闘場を展開する事も出来る。また《高速展開：緊急収納》で高速で展開又は紋章で収納出来るが一度使うと一時間のクールタイムが掛かる。

そしてスキルは内部にいる者全てに対するバフデバフの複合であり、ステータス一つを半減させ別のステータス一つを倍加させる《特殊規則：能力偏向》、攻撃手段一つによるダメージ量を半減させ別の攻撃手段一つのダメージ量を倍加させる《特殊規則：攻撃偏向》、任意の

スキル種別一つの効果を半減させ別のスキル種別一つの効果を倍加させる《特殊規則：技能偏向》、アイテムの種別一つの性能を半減させ別の種別一つの性能を倍加させる《特殊規則：装備偏向》と言った具合。

必殺スキルは対象一人を選択して自身と一対一で隔離する形で「コロッセウム」を展開、スキルによるバフデバフの効果を第五形態時でそれぞれ四倍と九割減に引き上げて適応するもの。・必殺スキル発動時には外部と内部は隔たれる様に決闘場の上と下に半球状の境界が展開されて壁自体の強度も大幅に上がっているので外部からの干渉や脱出は困難になる。クールタイムは24時間。

他にもスキルを適応する条件は「コロッセウム」の展開前に設定する必要があり再変更するには再展開する必要がある、バフとデバフは「自身に全ての効果で適応出来る」様な設定でないといけない、発動してから1分以内にバフデバフの内容を敵に告げないと莫大な維持コストを支払われるなどの制限・デメリットがあるが、その分内部限定・無差別・バフ効果との併用な事もあつてほぼ全て耐性を突破して効果が適応される。

アバター名：佐藤結奈

本名：佐藤結奈

性別：女

メインジョブ：【疾風操縦士】

サブジョブ：【疾風騎兵】【騎兵】【魔砲兵】【操縦士】【斥候】【探検

家】【索敵者】

備考：クラン〈月世の会〉に所属する〈マスター〉の一人で、双子の佐藤姉妹の大人しめな姉の方。現実では姉妹揃って生まれつきの病で入院を繰り返しており、そのせいか殆ど友人おらず姉妹でゲームなどをするしか出来なかった。レースゲーム好き。

故にデンドロでも基本的に姉妹揃って行動しているが、これまで余り機会が無かった他の人間との遊び——〈月世の会〉のクランメンバーとのデンドロプレイが出来て嬉しく思っている。

戦闘スタイルは乗機であるへエンブリオに乗った上で速度強化系のバフ効果を積んでの高速戦闘であり、火力面は妹の方に任せてジョブ構成は騎乗系と索敵系に特化している。最近では自分に適したジョブに就く為にドライフへと遠征した。

〔八速騎動 スレイプニル〕

へマスター：佐藤結奈

TYPE：ギア

到達形態：V

能力特性：斥力力場・滑走

スキル：《滑走機動》スライドムーブ《自在機動》フリームーブ《機動負荷軽減》《リパルジョンブ

ラスト》《リパルジョンバリア》《リパルジョンブレード》

備考：モーターフは北欧神話に出て来る八本足の馬である「スレイプニル」で、見た目は八本足で一人乗りの有脚戦車。強靱で可動域の広い脚部を使った走行でも亜音速レベルでの移動・跳躍と高い走破性・旋回性を有しており、スキル《滑走機動》を使い斥力によるホバー機動に切り替えれば超音速で移動可能になる。その場合は加速・旋回性に関しての問題ないが、地上の起伏に合わせて滑走する仕組みなので道が険しすぎると上手く動けない欠点がある。

更に移動時に掛かるマスターへの負荷・慣性など軽減する《機動負荷軽減》や、多脚時には天井に張り付く事すら出来て滑走時には水上走行すら可能になる《自在機動》と言った補助スキルを組み合わせて行うアクロバティックな機動が持ち味。

また戦闘手段として足先から斥力力場を応用した衝撃波の弾丸や、斥力を広範囲に展開してそれによって攻撃を弾く障壁、剣状に展開した障壁の両側面から逆方向に斥力を発生させて刃に当たる部分に触れた物体を割り裂く斥力ブレードが使えるが、機動力を重視したへエンブリオなので総合的に攻撃能力は余り高くない。

アバター名：佐藤利奈

本名：佐藤利奈

性別：女

メインジョブ：【戦車操縦士】

サブジョブ：【魔砲兵隊】【魔砲兵】【操縦士】【観測手】【技師】【整備士】【生贄】

備考：クラン〈へ月世の会〉に所属する〈へマスター〉の一人で、双子の佐藤姉妹の活発な妹の方。現実では姉妹揃って生まれつきの病で入院を繰り返しており、そのせいか殆ど友人おらず姉妹でゲームなどをやるしか出来なかった。シューティングゲーム好き

自身の〈へエンブリオ〉の特性もあって基本的に姉妹揃って行動しているが姉と同じ様に〈へ月世の会〉のクランメンバーとのデンドロプレイが出来て嬉しく思っている。

戦闘スタイルは〈へエンブリオ〉に乗っての遠距離砲撃特化であり、最近では自分に適したジョブに就く為にドライブへと遠征した。

【棄動戦車 チャリオッツ】

〈へマスター〉：佐藤利奈

TYPE：アドバンス・フォートレス・ウエポン

到達形態：V

能力特性：騎乗物の火力・輸送能力強化

スキル：〈へコネクション〉〈カートリッジ〉マルチプル・マジカノンシステム〈多機能型魔力式砲塔機構〉マルチエレメント・バリアシステム〈万能属性防壁障壁機構〉〈兵員輸送〉

備考：モーターは古代の戦争で用いられた戦闘用馬車……『戦車』の総称“チャリオッツ”。その名の通り馬車型の〈へエンブリオ〉で〈コネクション〉により“他人が所有する”騎乗物に接続する事で真価を發揮する。その際に騎乗物に掛かる自身の重量軽減及び騎乗系スキル効果の共有を行い、騎乗物の移動・加速・停止に合わせて自身も動く様にもなる。

主兵装の〈多機能型魔力式砲塔機構〉は備え付けられている三種の魔力砲台による攻撃システムの総称で、まず主砲である上部の大型砲台からは単純威力特化の炎熱弾〈火属性爆裂魔弾〉、防衛スキル貫通に特化したビーム〈光属性徹甲魔弾〉、防御力を無視する固定ダメージエネルギー弾〈固定威力破碎魔弾〉を選択して使用可能。次いで左右にある速射可能の自在稼働型副砲からは【麻痺】効果もある指向性を持

たせた雷を放つ《雷属性照射魔弾》、暴風を巻き起こして広範囲を吹き飛ばす《風属性拡散魔弾》、浄化効果のある聖属性エネルギー弾を発射する《聖属性浄化魔弾》を使用。最後に各部に配置されたミサイル発射管からは敵の生体反応を追尾する物体透過闇属性弾の《闇属性誘導魔弾》、敵の熱源を追尾する【凍結】効果もある氷属性弾の《氷属性誘導魔弾》、発射後に対空し接触か一定時間経過で炸裂する防御用の《滞空機雷式炸裂魔弾》を発射可能。

更に自身と接続している機体に任意の属性一つの防壁障壁を纏わせる《万能属性防壁障壁機構》も有しており、これらのスキルに使用するMPを1日に第五形態現在では15個の生産できて、それにMPを装填して保管しておける《カートリッジ》によって賄う事が出来る。加えて《兵員輸送》により内部空間を拡張して人員や物品の輸送も行えると非常に多目的に使える機体。

その反面【チャリオッツ】自体には移動能力が存在せず、更に《コネクション》を使用した状態でなければ《カートリッジ》以外のスキルが使用不可能になってしまうデメリットが存在しており、戦う為には「騎乗物を持った協力してくれる他人」が必要というピーキーな《エンブリオ》であるが彼女の場合には姉の【スレイプニル】と連携する事で純竜すら倒せる火力を十全に運用出来ている。

レジェンダリアへマスターへ設定まとめ：その1

アバター名：ひめひめ

本名：加茂姫乃

性別：女

メインジョブ：【大魔弓手】

サブジョブ：【高位幻術師】【魔弓手】【弓狩人】【幻術師】【付与術師】

【観測手】【探検家】

備考：レジェンダリアのまとも枠のへマスターで、兄とはリアフレであり両想いの恋人（事情があつて未満）な関係。実家は退魔師的な家系で昔は現代ファンタジー的な感じで兄と共にバトル展開になつたりラブコメ展開になつたりしていたが、現在では色々片付いたので落ち着いている模様。

デンドロに関して実家から調査を依頼されてプレイしていたが、兄からの情報提供によつて『自分達ではどうしようもないジャンル違いな問題』と判断して今では普通にゲームを楽しんでいる。ただ可愛いロリアバター（若返らせただけ）にした所為か妙に変態に絡まれるのが悩みの種で、それ故にまともな性癖と人格を持つ者を集めて固定パーティーを組んだりした。

戦闘スタイルはへエンブリオである魔法弓を使った遠距離戦で、ここに幻術を絡めての不意打ちや攪乱も行う。どちらかと言えばパーティー戦闘向けの支援系ビルドだが、本人の魔法弓と幻術を扱うリアルスキルが図抜けているので単騎での戦闘能力もかなり高い。

【光炎矢如 アマテラス】

へマスターへ：ひめひめ

TYPE：アームズ

到達形態：V

能力特性：光・火属性魔力矢の生成

スキル：《光炎之矢》《閃光之矢》《炎勢之矢》《聖浄之矢》《爆裂之矢》

必殺スキル：《天地一切大祓之矢》

備考：モチーフは日本神話の太陽神にして主神である天照大御神

“。MPを消費して様々な特性を持つ光・火属性の矢を生成する魔法弓型のアームズで、ステータス補正はMP・DEX特化で後はSTRとAGIにそこそこ。

生成出来る矢の種類は光熱による単純威力重視の《光炎之矢》、光属性で光速かつ貫通性が高い《閃光之矢》、火属性で当たった相手に延焼による継続ダメージを与える《炎勢之矢》、威力は低いが聖属性故の強力なアンデッド特攻・浄化能力を持つ《聖浄之矢》、着弾又は一定時間経過で爆発する広範囲攻撃用の《爆裂之矢》である。

必殺スキルはまず矢の種類一つを選択し、それを自身の上空に向けて射って太陽エネルギーをチャージする光球を形成、そして任意のタイミングで光球を選択した特性を持った超威力の矢へと変換させて指定した場所に放つという物。その特性上日照下でしか使えずクールタイムも24時間と長い上、矢を打ち上げてからクールタイム終了まで選択した種別の矢も使えずチャージ時間も最低五分は必要と使い難いが、その分チャージ時間と選んだスキルに応じて威力・射程・弾速・効果範囲を大幅に引き上げる。

アバター名：アリマ・スカーレット

本名：赤城真里亞

性別：女

メインジョブ：【狂信者】

サブジョブ：【剣聖】【戦士】【狂戦士】【剣士】【司祭】【催眠術師】【斥候】

備考：レジエンダリアのまとも粋のヘマスターで、ひめひめのパートナーメンバーの一人にして末妹の親友。かつてあったとある事件以来末妹とは疎遠になっていたが、デンドロで再開した際に仲直り出来たので今では反動でベツタリになっている。

リアル小学生ロリなので（YLN T倶楽部）のメンバーに声を掛けられる事もあるが、彼女自身が『悪意の無い人間には警戒心を抱かない』事と連中にロリシヨタへの悪意が一切ない事から比較的仲が良い。その代わりに保護者（ひめひめ）が変態を撃ち抜く事が多々ある

(笑)

戦闘スタイルは「エンブリオ」によってデメリットを廃した狂化スキルによる自己強化からの近接戦闘で、そこに「狂信者」の無差別精神汚染スキル効果を敵だけに限定する精神攻撃を絡めると言う見掛けによらずかなりエグい代物。そこに精神系のデメリットがある装備や特典武器を組み合わせる事で、周りを気にせず無差別精神汚染を行うと言う条件付きで現状でも準「超級」レベルの戦闘能力を有する。

【正心偽脳 シヤカ】

〈マスター〉：アリマ・スカーレット

TYPE：ルール・カリキュレーター

到達形態：V

能力特性：精神制御

固有スキル：《悟りの境地》マインド・セット 《悟りし者の御業》ソウル・コントロール

必殺スキル：《??》シヤカ

備考：モチーフは仏教の開祖である覚者の仏名「釈迦」であり、マスターの脳の一部を置換した世にも珍しい『人工補助脳』型の「エンブリオ」。

固有スキルである《悟りの境地》は「現在掛かっている精神系状態異常や精神に関するスキルの悪影響・デメリットを受けない効果のパスシブスキル。これは単に精神干渉を無効にしている訳で無く、悪影響のみを受けない」効果なので、例えば精神系状態異常に掛かった場合その状態異常に掛かったままでもその悪影響のみを受けず、狂化系のスキルを使ったとしても任意行動不能やアクティブスキル使用不可のデメリットのみを無効にしてステータス上昇などのメリット効果のみを享受出来る。また人工補助脳である副次効果として自身が受けている精神汚染の詳細を正確に把握する事も出来る。

もう一つの《悟りし者の御業》は自身が使う精神系スキルを操作・制御するスキルで、効果範囲を敵限定にしたりオフに出来ない精神系パスシブスキルをオフに出来たりもする。消費コストは操作するスキルによって追加でいくらかMP・SPを消費する感じで、パスシブスキルをオフにする程度ならノーコストで可能だが無差別スキルを

制御するならそこそこコストが掛かる感じ。彼女の場合は基本的に無差別系である【狂信者】のスキルや特典武具のスキルを制御する為に使っているが、それ故に味方を気遣う必要のある戦場ではMP・SPの消費が多くなって継戦能力が大きく落ちる。

尚、第五形態に進化した際に必殺スキルを覚えた様だが『強い事には強いんだけど消費コストに見合った能力とは言えないかな』と言う感じだったので、現在有用な使い方を考察している。

アバター名：でいふえくんど

性別：男

メインジョブ：【曲射弓手】

サブジョブ：【城塞衛兵】【衛兵】【槍兵】【弓手】【長弓手】【防術師】

【索敵者】

備考：レジェンダリアのまとも枠のへマスターで、ひめひめのパーティーメンバーの一人。アバター名に関しては昔見た特撮ネタから面白そうですネタに出来る変わった名前として付けてみたが、変態の巣窟であるレジェンダリアだとその程度では目立つ事すら無かった。

戦闘では城壁型のへエンブリオンで相手の攻撃を防ぎつつ槍や弓で地道に攻撃を仕掛けていくスタイルで、最近では壁を越えて弓を放てる【曲射弓手】のジョブスキルと組み合わせた戦術を試している……が、他のパーティーメンバーと比べて火力不足で戦術も地味な事が悩みの種。

【自在城壁 パラスアテナ】

へマスター：でいふえくんど

TYPE：キャツスル

到達形態：V

能力特性：城壁

固有スキル：《フリーダム・ランパート》

備考：モチーフは都市の守護神としても扱われるギリシャ神話の女神アテナの別名「パラスアテナ」。キャツスルとしては珍しく一切の特殊能力を持たない単なる城壁であり、それ故に第四形態現在

でも小さな城を囲める程の質量と非常に高い耐久力・強度を持つ。

固有スキル《フリーダム・ランパート》は「パラスタテナ」の高速展開・高速収納・部分展開・複数展開などを行うと言うもので、イメージ的には紋章内の城壁の一部を切り分けて展開してる感じ。その特性上展開出来る最大質量や形状は大元の「パラスタテナ」の質量と形状までが限界だが、それ以下であれば高さ・幅・厚さなどの設定は自由自在で戦闘中に小型の壁を複数出して味方を守ったりと応用も効く。ただしある程度スキルの副次効果で固定されるとは言え壁や地面など、城壁を支えられる最低限の地盤がある場所にしか展開出来ない。制限もある。

一見地味であるが壁によって味方を守る・即興で足場を作る・展開速度を活かして敵を閉じ込めるなど色々応用が利き、マスター自身のサポートに長けた判断力もあってパーティーメンバーからは頼りにされている。

アバター名：シズカ

性別：女

メインジョブ：【崇神】

サブジョブ：【幽霊術師】【怨霊術師】【死霊術師】【呪術師】【防術師】
【付与術師】【召喚術師】【冒険家】

備考：レジエンダリアのまとも（では無い）枠の「マスター」で、ひめひめのパーティーメンバーの一人。リアルではひめひめの「実家関係」の知り合いであり、彼女曰く「規格は人間だけど在り方——特に精神面ではデンドロで言う古代伝説級の長命な人外に近い」だとか。

デンドロをやり始めたのはちょうど暇だった時にひめひめがやっているのを見て興味を持ったからで、彼女に頼み込んでハードを手に入れて貰ったらしい。その時に『デンドロ内ではあくまでも「ゲーム」として楽しんでほしい』と契約して受け取ったので、現在は「不思議系お姉さんポジだけど割とまともな人」のロールプレイをしている。

戦闘スタイルは〈エンブリオ〉である自分自身に蓄積した怨念を使った霊体系アンデッド召喚による広域制圧や、大量の怨念を注ぎ込んでラーニングしたスキルを強化しての攻撃が主体。現在は新しく取った超級職【崇神】の怨念操作スキルをどう〈エンブリオ〉と組み合わせさせて戦闘に活かすか研究中。

【不有幽霊 ゴースト】

〈マスター〉：シズカ

TYPE：ボデイ

能力特性：霊体・怨霊集積

到達形態：V

固有スキル：《幽霊体》《斯の身は怨嗟の受け皿也や》《供物を捧げ、御霊を祀れ》《御霊顕現・霊装招来》《御霊顕現・亡霊召喚》

備考：モチーフは幽霊や怨霊を意味する言葉である「ゴースト」。自身を「霊体系アンデッド」に置換する《幽霊体》により物理攻撃無効・浮遊可能・物体透過などの恩恵があるが、火・光・聖属性ダメージ大幅上昇・日光下での弱体化・物質透過故に普通の装備品の装備不可と言ったデメリットもある。

加えてボデイ故にステータス補正がSP・STR・ENDがマイナス75%、HP・DEX・LUCがマイナス50%となっており、MP・AGIにも補正は無い……が、周囲の怨念を自身に蓄積してスキル使用時のHP・MP・SP・怨念の代替とする《斯の身は怨嗟の受け皿也や》によって足りないコストを用立てる事が出来るのでスキル使用には問題無い。

固有スキルである《供物を捧げ、御霊を祀れ》は自身が所有するアイテムをコストとして捧げる事で生物由来であればその情報を自身の合計ジョブレベルの十分の一の数までストック、そうしない場合又はそれ以外のアイテムであればリソース分の怨念に変換蓄積すると言うもので後述する二つのスキルの使用条件に関わる。

まず一つ目は記録されているストックを自身の使われていない装備枠まで選択して、その中のスキルの内一つを自身のスキルとして使用可能にする《御霊顕現・霊装招来》で、これによりシズカは複数の

モンスターのスキルを使用可能になっている。

二つ目はストック一つを選択してMPを消費する事で霊体系アンデッドに変性させて召喚する《御霊顕現・亡霊召喚》で、消費MPによって維持時間は変わりクールタイムは1分間。

そのストック内モンスターのステータス・レベルなどは捧げたアイテムの質に比例して、情報の上書き・破棄や同じモンスター由来のアイテムを捧げた際に既にあるストックに上乘せして情報内容の強化も可能。

アバター名：クロード

性別：男

メインジョブ：【白氷術師】

サブジョブ：【暗黒術師】【魔術師】【呪術師】【防術師】【付与術師】

【斥候】【魔石職人】

備考：レジエンダリアのまとも梓の《マスター》で、ひめひめのパーティーメンバーの一人。リアル小学生なシヨタマスターだが、昔プレイしていたネトゲでマナー違反者に苦しめられた事があってゲーム内でのマナー違反には口煩い所がある。

しかし逆に言えば自分がマナー違反をする事も許せないタイプでもあるので彼自身はマナーを守る良いプレイヤーでもあり、デンドロの自由度の高さと姉であるクラリスからの注意によって最近では多少融通を効かせる様にもなった（とは言えPKやマナー違反の変態には容赦は無い）

戦闘スタイルは《エンブリオ》によるAGIデバフで動きを止めつつ閻属性魔法で攻撃するか、氷属性魔法で凍らせて動きを完全に封じる魔法型。パーティー内では魔法とデバフによる支援を担当している。

【減速領域 スロウス】

《マスター》：クロード

TYPE：ワールド

能力特性：減速

到達形態：V

固有スキル：《足引きの呪縛域》（デーセライレーション・ゾーン）《届かじの闇衣》（ディクリース・ファイールド）

必殺スキル：《過剰励起・怠惰世界》（スロウ・ウオース）

備考：モチーフは七つの大罪の一つである怠惰を意味する言葉「スロウス」。スキルは全てMP消費制でありステータス補正もMPに特化しており、次いでAGIにも少し振られている。

第一スキル《足引きの呪縛域》は効果範囲内の敵対対象のAGI及びそれらが使う魔法や飛び道具などの速度にデバフを掛ける呪術系スキルで、対象と自身の強度差によって変動するが第五形態だと最大速度を九分の一に出来る。範囲内の敵対対象が多い程に消費MPは多くなる。

第二スキル《届かじの闇衣》は自分の身体を纏う程度の範囲に『自分への攻撃の運動エネルギーや熱エネルギーなどを大幅に減速・減少させる結果』を展開する防御用スキル。その関係上運動エネルギーや熱エネルギーを伴わない氷属性や闇属性攻撃には効果は無い。

必殺スキル《過剰励起・怠惰世界》は範囲内の対象一つに対して超強力な「減速効果」を与えるもので、MP消費は対象の能力と減速効果の強度次第で次第でクールタイムも長い対象が範囲内にいればすぐに発動する、またクールタイム終了まで「スロウス」のスキルは使用不可になるデメリットもある。この「減速効果」は単にAGIを下げるだけでなく発動した遠距離攻撃すらも減速させ、多量のMPを使えば対象の分子運動すらも限りなくゼロに近づけて完全に凍り付かせる事も可能。

アバター名：クラリス

性別：女

メインジョブ：【大戦僧兵】

サブジョブ：【肉壁】【槍兵】【投槍兵】【肉盾】【僧兵】【司祭】【冒険家】

備考：レジエンダリアのまとも枠の「マスター」で、ひめひめのパートナーメンバーの一人であり上のクロードの姉。コミュニケーション

ン能力が心配な弟の面倒を見ていたらひめひめからスカウトされたのでパーティーに入った。

戦闘スタイルはHP消費でスキルを起動する「エンブリオ」と、HPが上がりやすいジョブ及び自己回復魔法を組み合わせたビルドによる瞬間火力と壁役を合わせた前衛。ただしスキルのクールタイムが長過ぎるので最大戦力での連続戦闘には向かず、本人が必要ななら躊躇なく切り札を使うタイプなので予期せぬ遭遇戦も苦手とする。

〔命×血槍 ロンギヌス〕

〈マスター〉：クラリス

TYPE：エルダーアームズ

能力特性：生命力消費・奇跡

到達形態：V

固 有 ス キ ル：

《我が命を捧げ聖なる守りを》

《我が命を捧げ無双の力を》

《我が命を捧げ破壊の一投を》

《我が命を捧げ奇跡の癒しを》

《我が命を捧げ応報の呪詛を》

《我が命を捧げ光の裁きを》

備考：モチーフは神の子の血を浴びて聖遺物となった「ロンギヌスの槍」。見た目は白い長槍に血の様な赤いラインが入っており強度は高いが装備攻撃力はかなり低く、ステータス補正はHP極特化。

自身のHPを消費して能力特性の「奇跡」に相応しい強力で多様なアクティブスキルを使用可能で、消費したHP四分の一だけ自身のSTR・END・AGI・「ロンギヌス」の攻撃力を上昇させる《我が命を捧げ無双の力を》、消費したHPの十倍の耐久力を持ちある程度の悪性効果も防ぎ変形・移動も可能な聖属性の結果を展開する《我が命を捧げ聖なる守りを》、自身のHPを消費して任意の対象一人の状態異常を回復させる《我が命を捧げ奇跡の癒しを》、消費したHPの半分の速度と攻撃力と追尾機能を有する「ロンギヌス」を投擲する《我が命を捧げ破壊の一投を》、消費したHPの五分の一の攻撃力とそれに応じて射程・範囲を持つ聖属性拡散ビームを発射する《我が命を捧げ光の裁きを》、自身にダメージ・悪性スキル効果を与えた者のSTR・END・AGI・DEX・LUCの内ランダム一つを消費したH

Pの五分の一だけ減少させつつ呪怨系状態異常を三十種類程からランダムに一つを与える呪いを身に纏う《我が命を捧げ応報の呪詛を》を有する。

ただし、持続時間があるスキルの最大維持時間は（合計レベル）秒間まで。更に全てのスキルにおいてクールタイムは24時間と非常に長く、また複数のスキルを併用する事も出来ないので使い所を考える必要もある。

アバター名：ダーク・バイヤー

性別：男

メインジョブ：【邪眼術師】

サブジョブ：【高位鑑定士】【幻術師】【呪術師】【魔眼術師】【観測手】
【鑑定士】【行商人】

備考：レジエンダリアのまだまとも枠の《マスター》で、デンドロで『何処からか現れた意味深な事を言いながら高性能なアイテムを売ってくる謎の闇商人』と言う非常にニツチなロールプレイを行なっている。

その為にレジエンダリアの《魔法少女連盟》などの生産系クランなどと渡りを付けてマイナーなアイテムを買い取ったり、それらを上手く使えそうな人間を探して売ったりもしていた……が、HENTAIが多いレジエンダリアだと闇商人ロール程度では相対的に怪しくは見えなかったため、今はアルター王国に移ってレジエンダリアのアイテムを売るなどして活動している。

ジョブビルドは基本的に《エンブリオ》強化される視覚系スキルに特化しておりアイテムや売り手を見つける為の鑑定に長けているが、戦闘においても強化された魔眼系スキルで戦う事が可能。そもそもデンドロ世界で一人旅が出来たり、アイテム集めの為に亜竜級程度なら一人で討伐出来るぐらいには強かったりする。

【視覚過敏】 イーヴィルアイ

《マスター》：ダーク・バイヤー

TYPE：ロール

能力特性：視覚系スキル強化

到達形態：V

固有スキル：《ハイクオリティ・アイズ》《セービング・ルック》《ペネトレイト・ゲイズ》《マルチプル・サイト》《ピーピング・ウォッチ》
備考：モチーフは世界の広範囲に分布する民間伝承で、悪意を持って相手を睨みつけることにより対象者に呪いを掛ける魔力・邪視・魔眼などを意味する言葉 “イーヴィルアイ”。

固有スキル《ハイクオリティ・アイズ》は自身の視覚系スキルのスキルレベルを第五形態時では5だけ上昇させるパッシブスキルで、最大レベル10までしか上げられないがスキルレベルを超過した数×10%だけそのスキル効果を強化出来る。これを使って「鑑定士」系統の最大レベルが低いと言う欠点を補っている。

他にも視覚系スキルの消費HP・MP・SP・クールタイム・発動までの時間を軽減する《セービング・ルック》や、視覚系スキルを使う対象のそのスキルに対する耐性や隠蔽・防御スキル効果を減少させる《ペネトレイト・ゲイズ》、視覚系スキルを第五形態までは五つまで同時発動出来る《マルチプル・サイト》、視覚系スキルに隠密効果を付与する《ピーピング・ウォッチ》と言った視覚系スキル補助のパッシブスキルのみで固有スキルは構成されている。

レジェンダリアへマスターへ設定まとめ：その2

アバター名：ミマモリ

性別：女

メインジョブ：【邪眼術師】

サブジョブ：【高位呪術師】【魔術師】【付与術師】【呪術師】【魔眼術師】【毒術師】【索敵者】

備考：レジェンダリアのへY L N T倶楽部へに所属しているへマスター（H E N T A I）の一人であるロリシヨタコン。幼気なロリシヨタを守る事こそ我が使命と思って常に子供達を視姦していると云う、かのクラン内では割とよく居るタイプの人物。

戦闘スタイルは感知・解析能力に長けたへエンブリオと魔法系ジョブスキルによる支援が主体だが、魔眼系スキルとへエンブリオによる遠視・透視を組み合わせての強力な状態異常戦術も行える。

【監視感撮 ヴィルーパークシャ】

へマスターへ：ミマモリ

TYPE：カリキュレーター

到達形態：V

能力特性：千里眼

固有スキル：《四天の千里眼》《四天の透視眼》《四天の解析眼》《四天の読心眼》《広目の天眼》

必殺スキル：《森羅万象を見通す眼》

備考：モチーフは仏教の四天王の一角『広目天』の梵名にして、千里眼や尋常でない眼・特殊な力を持った眼とも解釈される『ヴィルーパークシャ』。見た目は大きな目のマークが描かれたゴツイバイザーで、強力かつ高精度な視覚系固有スキルを有する。

内訳は遠隔視と視野の拡大を齎す《四天の千里眼》、凡ゆる物体を透視する《四天の透視眼》、凡ゆるものを生物・非生物問わずに解析する《看破》と《鑑定眼》の複合スキル《四天の解析眼》、凡ゆる隠蔽・迷彩を看破する《四天の読心眼》の四つ。それぞれのスキルを同時に使用する事も出来て、その場合は個々の出力は落ちるが併用している

個々のスキルの出力を状況に応じて変更させる事も出来る。

また、現在自分が使っている固有スキルの効果を七割程度の出力でパーティーメンバーに付与する《広目の天眼》と言うスキルもあるもので、パーティー戦闘でも活躍する。

必殺スキルは直近24時間以内に対象を見ている時間に応じて、その相手に自身の視覚系スキルへの耐性を減少させるパッシブスキル。耐性の下がり方を緩やかだが、へエンブリオのスキルだけでなく自身のジョブスキルにも効果は適応される。

ちなみに通常の《透視》などと違って服だけ透過出来るレベルの精度を有しているが、ミマモリ自身が『私如きが穢れなきロリシヨタの肢体を視姦するなど言語道断』として少年少女に透視は使わないので安全(○)

アバター名：KNKA

性別：男

メインジョブ：【翠風術師】

サブジョブ：【賢者】【魔術師】【防術師】【付与術師】【司祭】【祓魔

師】【冒険家】

備考：レジエンダリアのへYLNT倶楽部へに所属しているへマスタ(ヘンター)(HENTAI)の一人であるロリシヨタコン。ロリシヨタの生活を守る為に孤児院への寄付やボランティアを積極的に行い、その手伝いの際に漂ってくる子供達のスマイルをひっそりと楽しむかのクラン内では割とよく居るタイプの人物。

戦闘スタイルはへエンブリオに蓄積したMPを使った魔法戦闘で、後述の理由で膨大なMPを溜め込んでいるのでクラン内部でもトップクラスの魔法使いとして知られている。

【空輝清杖 アイテール】

へマスターへ：KNKA

TYPE：エルダーアームズ

到達形態：V

能力特性：大気中の不純物吸収

固有スキル：《輝く空を我が手に》
必殺スキル：《真なる空をここに》

備考：モチーフは澄み渡った輝く大気を神格化したギリシャ神話の神であり天体を構成する第五元素であるエーテルの由来となった「アイテール」。見た目はシンプルな形状の白い杖。

固有スキルは空気中の不純物を吸収してMPに変換して蓄積・運用する《輝く空を我が手に》のみで、その特性上酸素や窒素は吸収出来ず、基本的に空気中に微量しか存在しない不純物のみしかMPに変換出来ない事から少し使い辛いスキル……。だがレジエンダリアの場合にはそこに存在する「可視化した自然魔力」も不純物判定で吸収出来、そもそも魔力なので変換効率も100%である事もあって膨大なMPが蓄積されている。

必殺スキルは単純な吸収・変換・蓄積能力や範囲の大幅強化だが酸素や窒素すらも含めた周辺の大気全てを吸収・変換可能になり、更に何をどう吸収するのかと言う効果範囲の選択なども可能になる。具体的には酸素を吸収して周囲一帯を無酸素空間にしたり、一定範囲の大気を纏めて吸収して真空を作ったりも出来る。その分スキルの持続時間10秒程でクールタイムは十分掛かる。

アバター名：剛雅

性別：男

メインジョブ：【獣戦鬼】

サブジョブ：【疾風槍士】 【槍士】 【短槍士】 【双槍士】 【獣戦士】 【魔獣師】 【斥候】

備考：レジエンダリアの〈Y L N T 倶楽部〉に所属しているヘマスタ―（H E N T A I）の一人であるロリシヨタコン。ロリシヨタを命に代えても守る為に日々厳しい訓練を積んでいると言う、かのクラン内ではよく居るタイプの武闘派。

戦闘スタイルは槍を主体にしたAGI型のジョブビルドを活かした高速近接戦だが、ガードナー獣戦士理論によるEND型ガードナーのステータスを足し合わせる事でENDとAGIに二極型になり生

存能力も高い。ガードナーが味方のカバー時にAGIを上げるスキルを持つので、自分が高速で敵に接近しながらそのスキルを使わせる事でAGIの低さをカバーさせるなど連携も考えている。

【守護星蟹 カルキノス】

〈マスター〉：剛雅

TYPE：ガーディアン

到達形態：V

能力特性：カバー・妨害

固有スキル：《友の危機に駆けよ》レスキュー・フレレンズ 《邪魔大鋏》ジャマーシザース 《邪魔甲羅》ジャマーシエル 《巨蟹宮の加護》《自動再生》

必殺スキル：《魔蟹は砕かれ星となる》

備考：モチーフはギリシャ神話のヒュドラの友であり後に蟹座となった魔物“カルキノス”。HP・END型のステータスをしている巨大な蟹型のガードナーで基本は陸上で行動するが、蟹なので水中でも生存と行動は可能(但し泳ぐ能力は無いので水中戦が得意と言う訳では無い)

STR・AGIはそこそこだが味方を敵の攻撃から庇う際のみAGIを十倍にするアクティブスキル《友の危機に駆けよ》によって高いカバーリング能力を持つ。更に魔法攻撃の威力を減少させる《巨蟹宮の加護》とHP・傷痕系状態異常を自動回復させる《自動再生》によって耐久力も高い壁役として機能する。

また、鋏で組み付いた相手のAGIを下げる《邪魔大鋏》と、直接攻撃を受けた際に相手のSTRを下げる《邪魔甲羅》によって相手にデバフを掛ける事も可能。

必殺スキルは死亡した際に「カルキノス」とマスターの直前までステータスを合計してスキルも全て使えるようになる融合系スキルで、この手のスキルとしては珍しくチャージ時間は無いが持続時間は五分間。その後は最低24時間(死亡時の損壊・状態異常などによって延長される)復活の為に「カルキノス」が紋章の中で休眠する。

アバター名：ペロセウス

性別：男

メインジョブ：【聖戦士】

サブジョブ：【守護者】【魔戦士】【盾士】【小盾士】【祓魔師】【司祭】

【冒険家】

備考：レジェンダリアの〈Y L N T 倶楽部〉に所属している〈マスター〉(H E N T A I)の一人であるロリシヨタコン……だったが、ロリシヨタに触れたいと言う僅かな性癖の違いから離反して、同じ性癖のメンバーを集めて〈L P T 小隊〉と言うクランを立ち上げた。

とは言え、彼もクランメンバーも含めてロリシヨタ相手に無理矢理接触を迫る事はせず、あくまでも相手の許可を得た上で手を繋ぐレベルの接触に止めるだけの分別はある。内心はペロペロしたいと思っ
ていても表には出さない。

戦闘スタイルは防御・回復のジョブスキルで相手の攻撃を耐えながら、カウンターで〈エンブリオ〉による拘束を仕掛けつつ攻撃に転ずると言う意外にも正統派。

【反視逆盾 アイギス】

〈マスター〉：ペロセウス

T Y P E : アームズ

到達形態：V

能力特性：カウンター・拘束

固有スキル：〈ペトリフィクション・リフレクト〉〈スリーピング・リフレクト〉

必殺スキル：〈応報する蛇頭の邪視〉

備考：モチーフはギリシャ神話の女神アテナが使ったとされる防具「アイギス」。元ネタ通りメデューサを模した蛇頭の女性のレリーフが刻まれた盾で、大きさは然程ではないが強度と装備防御力は高い。

固有スキルは【アイギス】で物理攻撃を受けた際にそのダメージ（スキルによる減少分含む）に応じた強度の【石化】の状態異常を攻撃対象に仕掛ける〈ペトリフィクション・リフレクト〉と、魔法攻撃を受けた際に同じ条件で【精神休眠】の状態異常を仕掛ける〈スリーピン

グ・リフレクト』の二つ。盾で攻撃を受けるだけで自動発動するパッシブスキルだが、それ故に状態異常の強度はそこまで高くない。

必殺スキルは「アイギス」で攻撃を受けた時のダメージ（減少分含む）1000毎に1%、攻撃した相手のジョブ・ヘンブリオのスキル効果を十分間減少させるパッシブスキル。時間内であれば効果は重複する。

アバター名：サリー・クリイミー

性別：女

メインジョブ：【賢者】

サブジョブ：【司教】【魔術師】【付与術師】【呪術師】【防術師】【司祭】【魔石職人】（その他へエンブリオに保存されている魔法系ジョブ多数）

備考：レジェンダリアのまとも粋なへマスターの一人で、克蘭〈魔法少女連盟〉のサブオーナー。別に天災児でもないごく普通の魔法少女好き小学生だったのだが、後述のボロボロになったモツプルを助けた事で『おお……！ この無償の善意と曇りなき瞳……まさしく私が追い求めていた魔法少女そのもの！ どうか我が女神たる魔法少女よ、私をマスコットとして貴女に跪かさせて頂きたい』とか言われてついオーケーしてしまい、あれよあれよと言う間にへ魔法少女連盟の魔法少女メンバーの代表みたいになってサブオーナーになった子。

戦闘スタイルは基本的に正統派の後衛魔法職だが、へエンブリオの能力でジョブビルドを必要に応じて変更出来るので保存してある魔法戦士系ジョブをセットして近接戦とかも出来る……が、普通の小学生である本人の戦闘技量はそこまで高くない上、魔法技術の研鑽などには興味がなく、それよりも魔法少女ロールプレイとしてクエストや人助けなどをしている事が多い。

【魔包証助 アラディア】

へマスター：サリー・クリイミー

TYPE：ルール・アームズ

到達形態：V

能力特性：魔法職

固有スキル：《奇跡の軌跡》ホープ・レコード 《魔導記録》マジカルコレクト 《魔法転身》マジカルトランス

必殺スキル：《出会いと笑顔が私の魔法》デイト

備考：モチーフはウイツカ（魔女宗）で信仰されている女神の一人で、迫害される貧しい者達を救うとされる女神“アラディア”。外見は『ザ・魔法少女』と言った感じのピンクでハートとかが付いたデザインのコンパクト型でアクセサリー枠を消費し、普段は付属の専用ポシエットに入れている。

固有スキル《奇跡の軌跡》はメインジョブが魔法系の時に限定して自身に向けられる正の感情を経験値に変換するスキルであり、加えて《魔導記録》によってカンストした魔法系ジョブをステータス・スキルをそのままにジョブ枠から外したコンパクトの内部にある水晶——専用ジョブクリスタルに保存出来るので、既に複数の魔法系ジョブをカンストしている。

更に収納したジョブは《魔法転身》によって自由に空きジョブ枠にセットしたり他のカンストした魔法系ジョブと入れ替えられるので、戦闘やクエストに際しては必要に応じてジョブや使う魔法を切り替える事が出来る。

必殺スキルは十分間【アラディア】に保存されているジョブ全てのステータスを加算し、更にジョブスキルも全て使える様になるアクティブスキル。加えて効果時間中は《奇跡の軌跡》の効果が『自身に向けられた正の感情をMPに変換する』に変わるのでMPは高速で回復する。ただし強力なスキルである分クールタイムは24時間と長めな“魔法少女の最終フォーム”的スキル。

アバター名：モツプル

性別：男

メインジョブ：【司令官】

サブジョブ：【高位記者】 【死兵】 【指揮官】 【冒険家】 【索敵者】 【記者】 【書士】

備考：レジェンダリアのアレな部類の〈ハマスター〉で、クランへ魔法少女連盟〈クランオーナー〉。魔法少女のマスコットになりたいと言う理由だけで難易度ルナティックの小動物型アバターを選択し、当たり前の様にまともにプレイ出来ずズタボロにされたが、デスペナでも諦めず争った結果サリーに助けられた事でそのパートナーに収まった漢。

その偉業からクランオーナーに選ばれ、本人も『サリーを最高の魔法少女にする』為に必要だと考えてクランの経営を行なっている。ちなみにクランオーナーとしても普通に優秀で所属魔法少女達のサポートや宣伝などの態勢を整えたりしている。

戦闘スタイルは〈エンブリオ〉や【司令官】のジョブスキルによる支援特化で単体での戦闘能力は皆無。他にも《ペンは剣よりも強し》による魔法少女達へのレベリング支援も行なっている。

【魔導契約 デーモン】

〈ハマスター〉：モツプル

TYPE：アドバンス・ルール

到達形態：V

能力特性：魔法職の支援

固有スキル：《僕と契約して魔法少女になつてよ》
《契約ある限り悪魔は滅びず》《魔法少女達の宴》《仮初めの契約》

備考：モチーフは悪魔を意味する言葉。『デーモン』だが、どちらかと言うと中世に魔女と契約して人を害する魔力や薬を与えたと言われた悪霊デーモンの方が本来のモチーフ。支援とスキル特化なのでステータス補正はオールG。

メインのスキルは魔法系ジョブに付いた者一人を選び、相手の許可を得て『主人』と設定する事で自分へのデバフと引き換えに強力なバフを主人に掛ける《僕と契約して魔法少女になつてよ》で、このスキルを魔法少女を助ける基点に様々な効果を発揮する。

現在のバフの種類は『全ステータス最大値半減と引き換えにMP倍加、HP・SPに自身の合計レベルの二十倍、それ以外に合計レベルの五倍加算』『戦闘系アクティブスキル使用不可と引き換えに魔法系

スキル効果倍加』『アクセサリー以外の装備不可と引き換えに全状態異常耐性が自分の空き装備枠数×20%上昇』『経験値獲得不可と引き換えに獲得経験値大幅増加』『従属キャラパシテイ消失と引き換えに被ダメージ合計レベルの倍だけ減少』であり、それぞれオンオフは可能だが一度切り替えると24時間再変更出来ず、また契約自体も一度結べば一ヶ月以上経ってから相手の許可無く解除出来ない。

また、主人とパーティーを組み自身の戦闘不可を引き換えに凡ゆる攻撃によってダメージを受けなくなる《契約ある限り悪魔は滅びず》により貧弱なステータスに比して生存能力も高いが、主人の一定距離内に居なければ効果は発動せず主人が死亡した場合には自身も死亡する。更に《魔法少女達の宴》は主人とパーティーを組んでいる魔法職にも主人と同じバフを掛ける事も出来るが、一人を対象にする毎に全ステータスが元々の最大値の一割削れるので、前述のデメリットを含めると最大四人までしか対象に出来ない。

当然モップルが主人に設定しているのはサリー・クリイミーであり、数多のデメリットも『彼女のマスコットでいられる』と言う（彼にとつての）最大のメリットがある時点で一切気になっていない。

アバター名：バーニング・ハート

性別：女

メインジョブ：【炎霊術師】

サブジョブ：【紅蓮術師】【魔術師】【付与術師】【幻術師】【精霊術師】

【召喚師】【冒険家】

備考：魔法少女連盟に所属する魔法少女へマスターの一人。現実ではアラサーのOLであるが昔から魔法少女好きであり、デンドロではリアルでのストレス発散も兼ねて魔法少女ロールプレイをしようとしていた……が、変人の多いレジエンダリアで天然気味なサブオーナーのフォローをしている内にすっかりツツコミ役になってしまった。

戦闘スタイルはヘエンブリオによる火属性エレメンタル召喚、及びそれらをジョブスキルによって強化するサモナースタイル。

【奇炎伴杖 イグニス・ファトウス】

〈マスター〉：バーニング・ハート

TYPE：レギオン

到達形態：V

能力特性：火属性精霊召喚

固有スキル：《炎妖精召喚》サモン・ファイアフェアリー 《焰騎士召喚》サモン・フレイズナイト 《火鳥召喚》サモン・フレイムバード

《赤像召喚》サモン・レッドゴーレム 《緋狼召喚》サモン・スカレットウルフ

必殺スキル：《融合召喚・紅蓮女王》イグニス・ファトウス

備考：モチーフは青白い光を放ち浮遊する球体、あるいは火の玉を由来にする鬼火伝承を表す言葉の一つ「イグニス・ファトウス」。外見は炎の意匠を象った杖だが、武器では無く召喚器なので装備枠は使ってもアームズではないタイプ。

固有スキルは自身が習得している炎熱系魔法（火属性・爆発魔法・幻術など）を最大5つまで選択、それらを様々な火属性エレメンタルに変性させて召喚すると言うもの。選択したスキルに応じて召喚したエレメンタルの能力やスキルが変動するが、デメリットとして召喚されている間は選択したスキルは使用不能になる。

召喚出来るエレメンタルの種類は選択した魔法を使うMP特化の「イグニス・フェアリー」、STR型で選択した魔法によって武器が変わる「イグニス・ナイト」、AGI特化飛行可能で選択した魔法によって爆発の性質が変わる自爆型「イグニス・バード」、END・HP型で選択した魔法によって防御スキルが変わる「イグニス・ゴーレム」、AGI型で索敵能力が高く選択した魔法によって攻撃手段が変わる「イグニス・ウルフ」の現在5種類。汎用性は高いが命令一つのみを実行するしか出来ない。

必殺スキルは召喚したエレメンタルが消滅する度にそのステータスの1%を蓄積、スキル使用時に杖を破壊する事で蓄積した累計ステータスを全消費しながらマスターに加算させて強力な火属性エレメンタルへと変性させると言うもの。召喚器である杖が壊れるのでエレメンタル召喚は出来なくなるが、代わりにそれぞれのエレメンタルが蓄積された数に比例した強度の爆発・炎剣・炎熱攻撃・高熱防壁・

追尾火球と言ったスキルが使える様になる。ただし変身時間は十分間でクールタイムは24時間な上、杖が壊れるので修復されるまでは「エンブリオ」が使えなくなる。

アバター名：スノーホワイト

性別：女

メインジョブ：【白氷術師】

サブジョブ【氷像職人】【魔術師】【防術師】【冒険家】【戦象職人】【氷細工師】【氷屋】

備考：魔法少女連盟に所属する魔法少女「マスタール」の一人。スノーアートなどが好きだったので、デンドロでは「エンブリオ」を活かして色々作っていた所を魔法少女にスカウトされて面白そうだから加入した。衣装とかも『まあゲームだし性能良いし』で気にしていない。

どちらかと言うと生産職寄りだが、作りだめしておいた氷ゴーレムを大量に呼び出したり新たに即興で作ったりして戦える。更に氷属性魔法を使つての魔法戦も可能。

【氷室晶界 ニブルヘイム】

「マスタール」：スノー・ホワイト

TYPE：ワールド・フォートレス

到達形態：V

能力特性：氷生産

固有スキル：《氷晶創造》^{アイスメイク} 《氷晶操作》^{アイスムーブ} 《氷晶成型》^{アイスカット}

必殺スキル：《氷晶輝く銀世界》^{ニブルヘイム}

備考：モチーフは北欧神話の九つの世界のうち、下層に存在するとされる冷たい氷の国「ニブルヘイム」。周囲の水分が存在する空間自体を工房とする非実体型のフォートレス。

周囲の水分を触媒にして魔力で氷を作り出し《氷晶創造》と、それで作った物をMP消費で動かす《氷晶操作》並びにその形を自由に変える《氷晶成型》によって好きな氷を作る事が出来る。《氷晶創造》は普通に液体を凍らせて氷を作る事も可能で、その方が消費MPは少な

くなる。

必殺スキルは周囲の気温を大幅に下げながら吹雪が舞う銀世界へと変えて、その範疇で使用される氷属性系統のスキルや氷属性エレメントルなどの能力を大幅に強化するというもの。効果範囲は任意に設定可能だが広める程に継続消費するMPが増える。

アバター名：イーグレット

性別：女

メインジョブ：【翠風術師】

サブジョブ：【閃光術師】【魔術師】【付与術師】【防術師】【魔戦士】

【斥候】【生贄】

備考：魔法少女連盟に所属する魔法少女へマスターの一人。その身だけで空を飛ぶのが夢でありデンドロでもへエンブリオを使って空を飛んでいたのだが、魔境である『デンドロの空』を相手にして何度もデスペナしてしまい落ち込んでいた所を魔法少女にスカウトされた。クランに入ってからレベリング補助や装備によつて戦力強化されて空を飛びやすくなったので割と満足している。

戦闘スタイルはへエンブリオで高速飛行しながらの魔法攻撃。飛行しながらでも当てやすい様に範囲攻撃を行える風魔法と後述の必殺スキルで弱点を潰せる光属性魔法が主体。

【白翼天靴】 タラリア

へマスター：イーグレット

TYPE：エルダーアームズ

到達形態：IV

能力特性：飛行

固有スキル：《飛行》アビエーション 《飛翔》ソアリング

必殺スキル：《飛翼》タラリア

備考：モチーフはギリシャ神話の伝令神ヘルメスが有する有翼のサندانル「タラリア」。外見は側面に羽飾りが付いた金色の脚甲で、ステータス補正はMP・AGI特化。

固有スキルはMPを消費して自身のAGIと同じ速度で飛行する

《飛行》と、飛行時に元々の最大MPの20%（第四形態時）をAGIに加算する《飛翔》の二つだけと言う飛行特化。また飛行時には側面の羽飾りから光輝く翼が展開される。

必殺スキルは飛行速度がAGI一万を超える毎に累積する形で自身が使用するアクティブスキルの発動までの時間・消費MP・クールタイムを二分の一にする常時発動型。具体的にはAGI換算で一万（音速）の速度で飛んでいる時は二分の一、二万になったら四分の一、三万になったら八分の一と言った具合。ただし「飛行速度」で換算するのでホバリングなどで空中停止していたり音速以下の速度で飛んでいる場合は効果を発揮しない。

ティアン+α設定まとめ

名前：アイラ・ローラン

性別：女

メインジョブ：【教導官】

サブジョブ：【連闘士】【闘士】【双剣士】【鞭術士】【短弓手】【教官】
【斥候】

備考：アルター王国王都アルテアにある冒険者ギルドの受付嬢であり、デンドロを始めた三兄妹が最初に交流したティアン。王国の最強戦力の一角である【天翔騎士】リヒト・ローランの娘であり三姉妹の長女、美人で面倒見の良い性格でギルドの初心者講習も行なっているのでティアン・ヘマスターと共に関人気は高い。

実は王国でも最上位の騎士とトップレベルの魔道具職人である母の間に生まれながら、騎士・騎兵系統や魔術師系統のジョブ適正を持っていなかったため、周りからの視線や両親の才能を受け継いだ妹達を見ていられず家を出てフリーの冒険者になった過去がある。

それからは合計レベル500に至れて様々な武器系前衛職に就ける資質と、妹のリリイは愚か父であるリヒトすら上回る武芸の才能を持っていたので瞬く間に頭角を表して「王国最強の冒険者」や「王国決闘ランキング第2位」と呼ばれる所にまでに上り詰めた。

……だが、とあるクエストで準備不足により引率していた新人を死なせてしまった事で冒険者を辞め、二度と同じ事がない様にとジョブリセットまでしてギルドに所属して初心者の育成を邁進する事に。

初心者サポートに関しては冒険者ギルドの利用者が少ない事からそこまで上手くいっていなかったがヘマスターが来てからは状況が一変、三兄妹の意見を取り入れて王都に來たばかりの彼等を対象にした初心者講習をした結果大盛況となり、Wikiや掲示板にも『王国を選んだらまずは講習を受けろ』と書かれるレベルになった。

本人が美人で王都でも五人と居ない教えた相手に経験値補正を与えられる【教導官】である事もあってヘマスターからは大人気であり、教師ギルドとの協力関係を結んだにも関わらず連日講習に駆り出

されている。教師ギルドからのジョブクエストも兼ねていたお陰でレベルも500に戻った。

戦闘スタイルは近距離では双剣、中距離では鞭、遠距離では弓を闘士系統のスキルで使い分ける全距離オールラウンダーな物理型。【教導官】が様々な武器種戦闘を指導するジョブである事と、本人が使用する全ての武器種で超一流の技量を持っている事もあって現在でも王国トップレベルのティアンのままである。

名前：リリイ・ローラン

性別：女

メインジョブ：【天馬騎士】

サブジョブ：【聖騎士】【騎士】【槍士】【騎兵】【乗馬師】【冒険家】【魔獣師】

備考：アルター王国近衛騎士団所属の騎士であり、ローラン家三姉妹の次女。資質的には父のものを色濃く受け継いでおり、騎乗者として卓越した才覚を有するので自身の愛馬の娘である「テンペスト・ペガサス」のテイルルを授けられた。

騎士団の中では親へマスター派であるがこれは別にへマスターが好きと言う訳では無く、今後増えてくるであろうへマスターによる犯罪を止めるにはティアンだけの戦力では不可能だと考えているから。なので国を挙げて支援した方が効率が良いとも内心考えているが、それはそれでデメリットもあると分かっているので現状に文句は言わず個人的に信頼出来そうなへマスターと友誼を結ぶにとどめている。

戦闘スタイルは愛馬であるテイルルに乗つての騎乗戦闘が主体で、純竜級モンスターであるテイルルを含めれば超級職の面々を除いて王国騎士団最強の実力者。また幼い頃より父からの指導を受けていたので武芸の実力も高く、従属キャパシティの為にジョブの幾らかを従魔師・騎兵にしても彼女に勝てるのは同じカンスト組の近衛騎士団副団長ぐらい……だが、それでも騎乗していなければ姉にはとても敵わないらしい。

ちなみに彼女が近衛騎士団副団長では無いのは将来的に【天騎士】では無く【天翔騎士】を受け継ぐ事を期待されているからであり、現在も就職条件を満たそうと鍛錬しつつ仕事に励んでいる。

名前：ティール

種族：【テンペスト・ペガサス】

性別：雌

備考：リリイの愛馬である風属性の有翼馬。美しい薄緑色のペガサスでステータスはMP・AGIが高めであり、攻撃・防御・移動に使える優秀な風属性スキルを持つ。またメイド服（趣味）を着た美女に人化する事も可能。

更に父であるデュラルからの指導によってスキルを扱う技量も非常に高く、リリイが幼い頃からの付き合いで『お嬢様』と呼ぶぐらいの信頼関係もあるので連携も完璧。

名前：マリイ・ローラン

性別：女

メインジョブ：【高位魔具職人】

サブジョブ：【賢者】【魔術師】【付与術師】【司祭】【防術師】【呪術師】【魔道具職人】

備考：王都の冒険者ギルド近くにある〈マリイの雑貨屋〉の店主であり【天翔騎士】リヒトの妻。元々はレジエンダリアで代々魔道具を作っている家系だったのだが、両親が死に議会関係のタチの悪い連中に目を付けられたので王国へと亡命した。

その時にリヒトと出会って助けられたので、彼の下で厄介になる代わりに護身用として両親から預けられたペガサス——後のデュラルを預けた。その後は魔術師としても卓越した技量があったり三大属性全てへの適正がある事や魔道具職人としての能力を買われて王国の魔術師ギルドにスカウトされたりと紆余曲折あった後に彼と結婚して三人の子供を設けた。

現在はギルドからは距離をとって趣味の雑貨屋を営みつつ魔道具職人としての仕事を偶に行っており、自分の素質を受け継いで魔

法に長けている三女への指導も行なっている。

名前：リヒト・ローラン

性別：男

メインジョブ：【天翔騎士】

サブジョブ：【天馬騎士】【聖騎士】【騎士】【槍士】【投槍士】【騎兵】

【乗馬師】【冒険家】

備考：アルター王国第一騎士団団長にして王国所属の超級職【天翔騎士】。王国でも代々優秀な騎士を輩出している名門である。『ローラン家』の人間であり、後に妻になるマリイと愛馬であるデュラルとの出会いによってロストしていた【天馬騎士】を復活させて超級職にまで付いたガチの偉人。

娘達から三兄妹などの〈ハマスター〉の話聞いたのと、上級職にすら就いてないのに伝説級〈UBM〉を倒した妹を見た故に『今後成長を続けるハマスター〉相手にティアンだけでは治安維持は難しい』と早々に判断して、独自に信用出来るハマスターとの友誼を結んでいく。

戦闘スタイルは神話級モンスターである愛馬デュラルを【天翔騎士】のスキルで強化・補助する空中戦。そこに30年近く『デンドロの空』という魔境で戦い続けてきた経験及び技術、そして実力と機動力を買われて王国に現れた危険な〈UBM〉への援軍として活躍したが故に保有する多数の特典武具を合わせる事で、後年に於いて準超級〈最上位と言われる者達に匹敵する戦闘能力を有する〉。

名前：デュラル

種族：【ハイエンド・セイクリッド・モノペガサス】

性別：雄

備考：リヒトの愛馬である聖属性の有角馬と有翼馬のハーフ。見た目はツノが生えている白銀のペガサスで、有翼馬としての飛行能力と有角馬としての魔法制御能力を併せ持つ。

聖属性・風属性の強力な攻撃・防御・移動のスキルを持ち、加えて回復魔法までも使えるスキル型のモンスター。ステータスはMP・A

G I型で神話級モンスターの中でも低い方だが【天翔騎士】のスキルで強化されるので問題にはなっていない。更に歴戦の経験と研鑽からスキルを運用する技術も非常に高く、主人であるリヒトとの連携及び飛行技術は神がかっている。見かけのステータスを遥かに超える戦闘能力を有している。

名前：レナート・セイラン

性別：男

メインジョブ：【聖騎士】

サブジョブ：【騎士】【司祭】【助祭】【巡礼者】【指揮官】

備考：アルター王国近衛騎士団の一人でリリーの副官。リヒトの同期であるベテラン騎士で、合計レベルこそ350止まりではあるが回復と味方のサポートに長けているので頼りにされている。

人柄の良く【天騎士】【天翔騎士】から将来的に騎士団を背負える資質を持つリリーやリリアーナ達への指導役も任されており、長年騎士をやって来た際に得た経験を彼女達に伝えている。

名前：ゴライアン・ガヘリス

性別：男

メインジョブ：【拳聖】

サブジョブ：【武闘家】【拳士】【格闘家】【蹴拳士】【手刀拳士】【力士】【斥候】

備考：アルター王国格闘家ギルドのギルドマスター。元はどこかの貴族の三男坊だったが王国では珍しく格闘系ジョブに特化した才能を持っていた事と、幼い頃の見た【格闘王】の戦いに憧れた事で修練を積んでカンストの強者にまで至った。

まあ、昔は格闘バカ一代みたいな性格だったが、色々な経験を積んだ結果【格闘王】の爺様は割とアレな性格だと知ったり、ばら撒かれた【格闘王】の就職条件を巡る暗闘を収めたりした事で精神的には成熟した。その後は成り行きでギルドマスターの座に収まり、今は超級職狙いの「ハマスター」が増えた事で色々と苦労している模様。

名前：シルビイ・マグノリア

性別：女

メインジョブ：【怪盗】

サブジョブ：【輸送隊】【戦士】【短剣士】【盗賊】【荷運】【行商人】

備考：元はギデオンの大商店の娘だったが妻が死んでガチャに逃避する様になった父親を見て、それを盗み出す為に冒険者として活動しながら合計レベルを400近くまで上げてガチャが収められた金庫を盗み出すというかなりアグレッシブな人物。

その後は三兄妹との出会いや父親との和解を得てガチャと金庫を売り払い、心機一転も兼ねてギデオンからカルチエラタンへと引越して親子二人で小さな店舗を開きつつ慎ましく暮らしている。ただ、偶に生活費を稼ぐ為にせっかく取ったジョブを活かせるドライブへの物品輸送の護衛も行なっているとか。

名前：ペルシナ・デミテル

性別：女

メインジョブ：【高位霊術師】

サブジョブ：【屍術師】【死霊術師】【呪術師】【防術師】【付与術師】

【従魔師】【冒険家】

備考：レジエンダリアの死霊術師ギルドに所属する死霊術師。様々な自然干渉魔法に長けたエルフの母とレジエンダリア有数の天属性の攻撃魔術師である父の間に生まれたハーフエルフだったが、死霊術師だった父側の祖父の資質を受け継いで死霊術師系のジョブにのみ適正があり、その祖父の知り合いだった【冥王】ハイデスに弟子入りしていた。

だが、その妻子が謎の存在「魂喰らい」に殺された所為でハイデスが暴走して「UBM」となり、そんな彼をこれ以上罪を重ねない為に三兄妹とひめひめパーティーに依頼して討伐してもらった。その際に自分が討伐に関われなかった事を振り切る為と、古代伝説級すら討伐した「マスター」の力を見て現在は死霊術師ギルドで「マスター」と

の融和策などの各種作業を積極的に行なっている。

戦闘スタイルは作り上げたアンデッドを使役しつつ、自身は呪術による後方支援を行う典型的な死霊術師。【冥王】のジョブは空いているが師匠から正確な条件を聞く前に死に別れた事で一部の条件しか知らないのと、魂が見える故に堕ちた彼を見て自身が超級職を使いこなせるか不安なので今は目指していない。

名前：ティアモ・ウル・ヒュポレ

性別：女

メインジョブ：【竜戦士】

サブジョブ：【剣巨人】【戦士】【女戦士】【剣士】【大剣士】【格闘家】

【斥候】

備考：レジエンダリアの部族の一つである「アマゾネス」の少女であり、その族長である【女帝】レイソアの孫娘の一人（子沢山なので孫も複数いる）でもある。大人しめな性格だが割と天然であり、更にアマゾネスらしい恋愛への積極性もあつてひめひめと好き合つて居る事に気づいていながら兄に告白して妾希望を出すなどして二人を困惑させている。

外見は褐色肌に金髪の美少女とアマゾネスにはよく居る感じだが、側頭部の二本の角と爬虫類の様な尻尾が生えている……そのぐらいであればレジエンダリアには居ない事も無いのだが、爬虫類系の獣人種などとは違うらしい、他にも古代伝説級特典武器【竜剣飾 ドラグソード】や単純な攻撃力だけなら超級武器にすら迫る【剛竜剣】を保有し、誰も聞いた事の無いジョブ【竜戦士】に就いているなど謎が多い。

戦闘スタイルは前衛系ジョブで固められた十生まれつきのスペックと、アマゾネスとして鍛え抜いた技量による近接戦。魔法攻撃などの遠距離攻撃は特典武器と【竜戦士】のジョブスキルで無理矢理突破する事も出来るので対応力もある。

序章 2043年7月15日
とあるゲームを買った日：Re

□地球 加藤美希かとうみき

……その光景を一言で表現するのならば『地獄』であろうか。

焼き払われた森林、穿たれ砕かれた大地、かつて街だったモノの残骸、荒れ果てた荒野……そして、人間だったと思わしき“ナニカ”。

『……………』

……そして、そんな中で一人ぽつんと立っている人影があった。

その人物は原型を留めない程にボロボロになった鎧らしき物を身に纏い、手には身の丈以上の大きさがある何かの武器の残骸らしき物をぶら下げて、ただじつと立っていた。

『……嗚呼、失敗したな』

その人影がポツリと呟いた……その何処かで聞いた事のある様な声には悲嘆と諦念、そしてそれ以上の悲しみの感情があった。

『……………』

その人影が空を見上げると、そこには宙に浮かぶ巨大な……。



『……………ハッ!?? ……夢かあ……………』

……と、そこで私は夢から覚めてベットから跳ね起きた。慌ててベットの側に置いてあったスマホを確認すると、今日は2043年7月15日水曜日、夏休み少し前の何の事も無い平日であって少しホツとした。

私の名前は加藤美希、日本のとある街に住んでいる “ごく普通” の女子小学生である。

「うーん……久しぶりに結構キツイ夢を見たな〜と」

私はその夢の内容を振り払う様にベットのうえで大きく伸びをする
と、そのままベットから降りて洗面所へと向かい顔を洗う。

(しかし、あの妙に意味深な夢は一体何だったんだろうかね? ……私の直感が危険を察知したのかも思ったけど、それにしてはあんな光景が現実には早々起こるとは思えないし……)

そんな事を考えながらも、私は顔を洗って目を覚ましてから部屋に戻り服を着替えてリビングへと向かっていった。

「おはようお兄ちゃん、祐美ちゃん」

「おはようなのです姉様」

「はい、おはよう。朝メシは出来ているぞ」

私がリビングに着くと、そこには先に起きていた私の兄である加藤蓮(現在大学生)と従姉妹である加藤祐美ちゃん(現在小学生)が用意された朝食を食べていた。

ちなみに本日の朝食はマーガリンを塗ったトースト、塩胡椒を振りかけた目玉焼き、そしてヨーグルトとバナナとカフェオレである。

「あれ? 叔父さんと叔母さんは今日はもう仕事だっけ?」

「はい、父様と母様はもう仕事に行きましたよ。今日は二人とも朝の仕事だそうです」

……ちなみに私とお兄ちゃんの両親は数年前に事故で亡くなっており、今は祐美ちゃんの両親である叔父さんと叔母さんの下で暮らしているんだ。

また、その事故にはお兄ちゃんも巻き込まれていて幸い命は助かったものの、その時の後遺症でそれまでやっていた剣道を引退する事になったりもした……あの時、私がつと……。

「それで俺が朝食を作る事になった訳だ。有り難く食べるといい」

「……おっと。はい、有り難やく、いただきまーす」

今日は夢見が悪かった所為か思考がややネガティブな方向に向きそうだったので、私は敢えて少しふざけつつお兄ちゃんに対して両手を合わせてからトーストに噛り付いた。

……そうして、私はさっさと朝食を食べ終わって使った食器を片付けてから、登校時間になるまでリビングで寛ぎながらお兄ちゃん達と話していた。

「そういえば、今日は近所のゲーム屋さんのポイント倍増の日だった

な。……今日は大学も早く上がれるし、学校が終わったらこの夏休みにやるゲームでも買いに行くか？」

「おっ、いいね！ 夏休み前だから小学校の方も早く終わるし」

私達は三人共ゲームが結構好きで、夏休みの様な長期休暇がある時には一緒に家庭内で出来るゲームを遊んだりする。なので休暇の前には何かみんなで作れるゲームを買いに行くのは定番になっているのだ。

「……あ、でも祐美ちゃんは道場とかあるんじゃない？ 放課後の予定は大丈夫？」

「ダメそうなら欲しいゲームを先に言ってくれば買ってくるが」

実は祐美ちゃんは護身術をメインで教えている格闘技の道場に通っており、放課後はそちらに行く事も結構あるのだ。なので、その辺りを心配して放課後の予定を聞いてみたのだが……。

「今日は道場の方に行く予定は特になかったので大丈夫なのです。……それに師範からは『お前にはもう教える事は特に無い。後は自身で己の行く道を見つけた方がいい』と言われてますし」

「な、成る程……」

なんか思ったより凄いや言葉が帰ってきた……ま、まあ、予定が無いなら三人一緒に行くって事で良いよね！

……という訳で、まだ時間があつたので私達は今どんなゲームが発売されているかをスマホで少し見てみる事した。

「……えーと『ドラクエXV』？ 随分ナンバリングが進んだんだな」

「あ、ポケモンの最新作がVRで発売されるそうですよ」

「うーん、私達ってVRとかやらないからなあ。……ん？ <Infinitive Dendrogram>？」

祐美ちゃんにポケモンVR（仮称）の事を言われたのでちよつとだけVRゲームのページを除いてみると、そこに本日発売と書いてある<Infinitive Dendrogram>と言うVRMMOの紹介が載せられていた。

……私はこれまでVRやMMOは全くやって来なかった筈なのだ
が、その記事の事が何故か酷く気になった。

「どうしたんですか姉様。……えーと何々？ VRMMOへInfinite Dendrogram……『五感の完璧な再現』『単一サーバーで億人単位でも全プレイヤーが同時に同じ世界で遊戯可能』『ゲーム内では現実の三倍で時が進む』ですか。……凄いですね、VRつてもうこんなに進歩していたのですか」

「……いや、俺もその方面に詳しい訳じゃないから断言は出来んが、どれも今の地球の技術では無理な事だと思うぞ。まあ、普通に考えたら誇大広告なんだろうが……何か気になるのか？ 美希」

私の様子が変わった事を察した二人がへInfinite Dendrogramの記事を見て各々の反応を見せた……だが、私はその記事の文字を追う事すらせずに、ただ記事に書かれているへInfinite Dendrogram題名部分だけを見つめていた。……その只ならぬ様子を見た二人は、すぐさま表情を真剣なモノに変えて私に問いかけてきた。

「……美希、また何か感じ取ったのか？」

「うん、このゲームは買ってプレイした方が良い気がする」

「姉様の“気がする”ですか。……では、このゲームには“何か”があるのでしょうか？」

私のその言葉に二人はそのまま考え込んでしまった……私の“直感”ではこのゲームをやった方が良い気がするのだが、もし危険なモノだったら……。

……そこまで考えたところでききなりお兄ちゃんが勢いよく手を叩いたので、私は思わずそつちを向いてしまった。

「よし！ それじゃあゲーム屋で買うのはこのへInfinite Dendrogramにするか！」

「いや！ でも、もし危険だったら……」

「ですが、姉様はやった方が良いと感じたんですよね？ ……だとすれば、姉様の“直感”の性質から考えて危険とかは無いのでは？」

お兄ちゃんの提案に思わず言い返した私に対して、更に祐美ちゃんがそう返した……確かに、私の“直感”では今回ゲーム自体には『危険が無い』って感じるけど……。

……言い淀んだ私に二人は更に言葉を重ねた。

「まあ、初期のVRゲームには健康被害とかも有ったらしいが、今出ているヤツはそういうのは無い様になってるしな。……最悪、クソゲーかネタゲーを糺まされて残念ぐらいで済むさ」

「そうですね、たかがゲーム一つで大袈裟過ぎますよ」

「二人共……そうだね！ たかがゲーム一つにちよつと神経質になってたかな！」

最も、二人が朝の夢見の所為で気分が落ち込んでいた私を気遣って、そう言ってくれてる事にも気づいてはいるけど……そんな二人の気持ちを無駄にする訳にもいかないし、ここは明るく振る舞っておこうかな。

「それにしてもお兄ちゃん、妙にVRについて詳しくはたけど実は前から気になつたりしてた？」

「まあ少しな。……あの事故の“後遺症”が出て以来は、全力で遊びやスポーツ的な運動する事も殆ど無くなったからな。VRでなら或いはと調べた時期があつた」

「では、今日の放課後は初めてのVRゲームを買いに行きましようか！ ……何、所詮はゲームですから死にはしませんよ、死には」

ちよつと！ せつかく明るく振舞おうとしたのに、何でいきなり話題が暗くなるかなあ！

「まあ、冗談はさておき……姉様、そろそろ学校の時間です」

「あ！ ホントだ！ 急がないとー！」

「じゃあ、俺もそろそろ出るかな」

そうして、私達は各々の学び舎へと向かうために家を出たのだつた。



「はいっ！ そんな訳でこちらに用意したのが〈Infinite Dendrogram〉本体三つになります！」

「わく、パチパチパチパチ」

という訳で、あれから各々の学校が終わってから近所のゲーム屋に行ってへ Infinite Dendrogram のハードを三つ程買って来ました……はい、登校前は結構シリアスな感じがしたんだけど、特に何か描写する事も無く普通に買えてしまいました。

……とりあえずへ Infinite Dendrogram と書かれている黒い箱を開けてみると、中からゴツイヘルメット型の VR 機器が出て来た。でも、試しに持ってみたら意外と軽かったね。

「しかし、一個一万円とか儲ける気が無い値段設定だよな……美希の『直感』の事もあるが、ここまで来れば一周回って本物じゃないかと思える様になったな」

「とりあえず、やって見れば分かると思うのです兄様。……えーっと、確か紹介には最初に所属する国家を決めるんですよ。三人一緒にプレイしたいので同じ国家にしましょう」

「選べる国家は騎士の国『アルター王国』、刃の国『天地』、武仙の国『黄河帝国』、機械の国『ドライフ皇国』、商業都市群『カルディナ』、海上国家『グランバロア』、妖精郷『レジェンダリア』の七つあるみたいだね。どれにする?」

私達はホームページなどに載っていたそれぞれの国の詳しい説明などを見て、最初の所属国をどれにするか話し合う事にした。

「ここは王道ファンタジー的な『アルター王国』でいいんじゃない?」

ほら、以前やったゲームは SF 系だったし、ここはファンタジー系にしようよ!」

「それは構いませんが……ファンタジーと言うなら『レジェンダリア』もそれっばいですよ? 説明文を見る限り神秘的な雰囲気面白そうですね」

「俺達は VR や MMO は初めてだから、なるべく初心者向けの国の方が良いだろう。……その二つだと『アルター王国』の方がスタンダードっばいか?」

そう言う訳で、2対1で私達の所属国家は『アルター王国』に決まったのだった……別に私達は所属する国家にこだわりがある訳じゃなかったから、祐美ちゃんからも特に反対は無かったしね。

「プレイヤーネームはいつもゲームで使っている『レント』『ミカ』『ミュウ』でいいかな？ 名前は分かりやすい方がゲーム内で合流しやすいと思うし」

「……待ってください姉様。多人数が同時にプレイするMMOだと短い名前では誰かと被ったりもするのでは？」

「まあ、どれもありがち名前だからそういう事もあり得るか。……じゃあ、そこに苗字でも付けるか？ 同じ苗字なら兄妹だと分かりやすいだろう」

確かに祐美ちゃんが言う事も最もなので、私達はお兄ちゃんの提案で何時もの自分のプレイヤーネームに苗字を付けることになったのだが……これがなかなか思いつかない！

……いつものプレイヤーネームも本名をもじったものだから、これ以上もじれる所が見つからないし。

「……と言っても、全然思いつかないなあ。私達は本名をもじっただけで丁度いい苗字と名前が決まる様なものじゃないし……」

「そうだな……じゃあ安直だが、苗字の『加藤』の一文字である『藤』^{ふじ}を英訳した『ウイステリア』とかでどうだ？」

……と思っていたら、お兄ちゃんがあっさり和本名のもじりで苗字候補を出してくれました。流石はお兄ちゃん、略してさすおに。

「綺麗な響きだからいいと思うのです。流石です！ お兄様！」

「それ以上のアイデアも浮かばないしねー。……じゃあ、私のプレイヤーネームは『ミカ・ウイステリア』になるね」

そして、お兄ちゃんが『レント・ウイステリア』で祐美ちゃんは『ミュウ・ウイステリア』になると……MMOだと現実の情報はあんまり出さない方がいいから、本名で呼ばない様に気を付けないとね。

……さて、これでゲーム前の準備は全て整ったね。

「それじゃあ、決める事も決めたとしそれぞれの部屋に戻って早速プレイしてみようかー！」

「はい、初めてのVRゲームですから楽しみなのです！」

「……まともなゲームなら……」

……そうして、私達は本物のVRMMOへInfinite De

n d r o g r a m を プ レ イ す る 事 に な っ た の だ っ た 。

手探りの初ログイン

□アルター王国・王都アルテア南門前 レント・ウイステリア

「……おー、青い空、白い雲、草の感触、そして目の前に聳え立つ白亜の街……成る程、確かにこれは本物だな」

俺、かとうれん加藤蓮ことアバター名『レント・ウイステリア』は、目の前に広がる現実と寸分違わぬクオリティで広がる景色に柄にもなく感動してしまっていた……あれからへInfinite Dendrogramを起動してログインした俺はこのゲームの管理AIだという『ダッチェス』という女性に遭遇し、そこで彼女にゲーム内における各種設定を行う様に言われたのだ。

その際にちよつとした質問をした後、描画選択で『私のオススメはリアリティがある現実視私の仕事が減るから現実視にしてほしい』と言われたので現実視に決めたり、プレイヤーネームを事前に決めていた『レント・ウイステリア』に決めたり、アバターの容姿を現実の姿を金髪碧眼にして少し弄ったものにしたたり、各種初期配布アイテムを渡されたり、このゲームの目玉だと言うへエンブリオを移植されたりした。

……そして、初期国家を事前に決めていたアルター王国にして、このゲームを始める事になったのだが……。

「まさか、ゲームを開始していきなり上空からパラシュート無しスカイダイビングをさせられるとは思わなかったぞ。……高所恐怖症の人とかトラウマになるんじゃないか？」

正直、事前説明無しにコレとかサービスが足りていないと思う……改めて思い返すとゲーム内のシステムの説明とかもされていないし……。

「まあ、そこはもう終わった事だからしようがないとして……問題は妹達とどうやって合流するかだな。初期ログイン地点は王国首都の東西南北にある門の前のどれかだと聞いたし、このままここで待つか目の前にある街に入るか……ん？」

そこまで考えたところで、俺は上空から声が聞こえてくる事に気付いた……その声は徐々に近づいて来ている様だし、恐らく俺と同じ初

ログインのプレイヤーだろう。

……よく聞いてみると声は二人分あるようで、どうやら二人の人間が落ちて来ている様だった。

「へぶつ!?」

「おっと」

落ちて来た二人はどうやら両方共中学生ぐらいの少女の様で、片方は上手く着地出来ず尻餅をつき、もう一人は綺麗に両足を揃えて着地した。よく見てみるとあの二人の顔には見覚えが……いやいや、そんな都合のいい事がある訳が……。

……そう思っていたら、綺麗に着地した茶髪のセミロングの少女がこちらを見ると話しかけて来た。

「おや、そこに居るのは兄様……レント・ウイステリアさんなのです？」

「……まさかとは思ったが、そっちの名前はミュウ・ウイステリアとミカ・ウイステリアか？」

「そうだよー、レントお兄ちゃん。……しっかし、このゲーム凄いな。VRはやったことないんだけど、見た限り現実と変わらないや」

俺のその質問に尻餅をついていた方の白髪ロングヘアで赤目の少女がそう答えた……やっぱり、そんな気はしていたんだが……。

「随分都合が良いな、全員この場所に落とされるとは」

「あ、それは違いますよ兄様。……私が担当してくれた管理AIのアリスさんに頼んだら、初日限定のサービスとして兄様と姉様を同じ場所に落としてくれる事になったのです」

詳しく話を聞くと、俺達が合流出来るかどうか気になったミュウちゃんが担当のアリスという女性に良い方法が無いか聞いてみたところ『じゃあ、さつきログインしたレント・ウイステリアというプレイヤーと同じ場所に投下してあげるわ。初日だから私達の演算能力にも余裕があるしサービスよ』と言われたので、その提案に乗ったらしい。

また、ミカの方も同じ地点に投下してもらおう様にして貰ったとの事……気が利いているのかいないのかよく分からないな。

「私を担当していたチエシヤさんは少し困惑していたけど、『まあ、初日だしいいかなー』って言ってることに投下してくれたよ」

「……まあ、さっさと合流出来たのならそれはそれで良いか。……それでミカ、このゲームをやって何か感じたか？」

俺のその質問にミカとミュウちゃんは一転表情を真剣なモノに変えた……この〈Infinite Dendrogram〉を始めるキツカケになったのはミカの「直感」だからな。その辺りはまず確認しておかないと。

「うーん、流石にログインしてすぐじゃこの世界については殆ど何も分からないけど……チエシヤさんに『この〈Infinite Dendrogram〉は只のゲーム何ですか?』と聞いた時には、少し驚かれた後『この〈Infinite Dendrogram〉で現実のプレイヤーに物理的に危険が及ぶ事は一切無いよー』って言われたかな」

「私もアリスさんに似たような事を聞きましたが、彼女もプレイヤーへの物理的危険は無いと言った上で『少なくとも〈Infinite Dendrogram〉の世界は貴女達にとつては最初の最後までゲームよ。実はデスゲームとかそんな事は絶対に無いわ』とも言っていましたね」

「俺の担当したダッチェスは『ただし、貴方達がこの世界で見たモノによる精神への負担は別だけど。ホラー映画とかと同じ理屈よ。……後は自分の“目”で確かめなさい』とも言っていたな」

管理AIから聞いた情報を纏めると『〈Infinite Dendrogram〉はプレイヤーの現実の身体には一切無く(ただし精神への影響は例外)あくまで俺達にとつてはゲームである』という事か……でもそれは俺達にはともかく「この世界」は只のゲームでは無いとも取れる表現だよなあ。

「まあ、私の勘だと彼等^{管理AI}は嘘は付いていないし、私達の安全を保障するってのも本当だと思うよ」

「後はもう兄様に言われた通り、自分達の目で見て判断するしかないでしょうね」

「ま、最後はやっぱりそうなるか……じゃあ、先ずは目の前にあるこのアルター王国の首都らしい所に行ってみるか」

そういう訳で、俺達は目の前にある見上げる程に大きな白亜の壁に組み込まれている巨大な門へと向かっていった。



幸い目の前にあった門は解放されており、先程から馬車や人が行き来しているので俺達も普通に入る事が出来た……出来たのだが……。

「……さて、ここから私達は何をすれば良いのでしょうか？」

「……俺達は何か明確な目的があつてこのゲームを始めた訳では無いからな。行動の指針が無い」

「チェシャさんは『このゲームでは君達は自由だよ。何をやっても良い』つて言つてたけど……自由すぎて、まず何をすれば良いのか分からないんだけど！」

正直言つて、ゲームのシステムを説明するチュートリアルぐらいはあつても良かったんじゃないかと思うんだが……この〈Infinitesimal Dendrogram〉、クオリティは凄いいけどシステム面はクソゲーでは？

「初日だから情報も殆ど無いし！ このゲームがどういうシステムなのかも説明無いし！」

「うーん、マップがあつてもどこに行けば良いのか分からなければ意味は無いですね。まずは地道に情報収集から始めるしか無いのでは？」

「まあ、それしか無いか……とりあえず、ここは騎士の国らしいからその辺にいる騎士っぽい人に話を聞いてみよう。多分、警察機関とかも騎士がやっているとと思うから悪い様にはされないだろ」

そんな希望的な観測を元に騎士と思われる人間を探すと、門のすぐ近くに〈アルター王国第一騎士団・南門駐在所〉と書かれた看板を掲げた建物を見つけた事が出来た……そりゃあ、首都の門に警備の兵を置くのは当然だよな。

……と言う訳で、俺達はそこに居た騎士さんに話を聞いてみる事にした。

「あの、すみません。少し宜しいでしょうか？」

「はい、何でしょうか？」

「えーっと、私達この世界に来たばかり何ですけど、正直この世界の常識とかさっぱり分からないので色々教えてほしいんですが」

俺が駐在所に何人か居た騎士さんの一人に話しかけたら、いきなりミカがその様な事を相手に問いかけた……一瞬、NPCにそんな聞き方で大丈夫なのかと思つたが、直後に管理AIが『Infinite Dendrogram』のNPCは人間と同じ思考能力を持つ』と言っていた事を思い出した。

……それなら寧ろその聞き方が正解かもな。それに、ミカがそうしたという事はそちらが「正解」何だろう。

「この世界……ああ、もしかして〈マスター〉の方ですか？」

「〈マスター〉？ ……お兄ちゃんとミユウちゃんは知ってる？」

「いや、知らない単語だな」

「私もなのです。……申し訳ありませんが、私達は〈マスター〉という言葉の意味を知らないのです。なので、それを含めたこの世界の一般的な常識を教えてくださいませんか？」

なんか、騎士さんの口からいきなり知らない単語が飛び出して来たし……やっぱり、チュートリアルとか用語説明とかはゲームシステムに入れた方が良いと思うんだが。

……幸いな事に、その駐在所に居た騎士達は嫌な顔一つせず快くこちらの質問に答えてくれて、様々なこの世界の一般常識を教えてくださいました。

「簡単に纏めると〈マスター〉っていうのは〈エンブリオ〉に選ばれた者の事で、不死身であるがその代償として頻繁に異世界に飛ばされてしまう……上手い設定だね」

「そして、この世界では『ジョブ』につく事によってレベルを上げるシステムになっている様です……ジョブレベルゼロの私達はまずジョブに就く事が目的になるでしょうか」

「後、へマスター」以外のこの世界の人間は『ティアン』と呼び、ここはへ王都アルテア」というアルター王国の首都で、冒険者ギルドとかではクエストを受けられるなど……情報量多すぎ。これでヘルプやチュートリアルが無いとか……」

……管理AIはもうちよつと初心者サービスを充実させて置くべきでは？ いや、本当に。

とりあえず、色々教えてくれた騎士さん達にはお礼を言っておかないとな。

「本当にありがとうございます。お陰で助かりました」

「いえいえ、こういう事も我々の仕事ですから。……それにへマスター」の方々が奇行を行う理由も分かりました。異世界から来たばかりのへマスター」達はこの世界の常識を知らなかったんですね」

「……奇行……ですか？」

ミュウちゃんがそう聞き返すと、駐在所の騎士さん達は苦笑いしながら肩をすくめて答えてくれた。

「ああ、へマスター」が今日から多く現れる事は事前に知っては居たんだが……その現れたばかりのへマスター」達がジョブに就く事すらせずにフィールドへと走り出してしまい、そこでモンスターに襲われて死亡する事件が非常に多く発生していてな……」

「へマスター」が不死身とは言え、それを目撃した王都の民にも不安が広がっており今も王都周辺を騎士達が見回りをしているのですが……どうも、多くのへマスター」は貴女達の様はこちらの話を聞いてくれず、向こうの話もどうも要領を得ない様でして……」

「……あー……そりゃあ、こんな世界に初めて来たら走り回りたくもなるよねえ……」

「……なんか色々とすみません」

……まあ、事前情報が殆ど無ければそんな事も起こり得るよなあ。やっぱり、管理AIはちゃんとしたチュートリアルとかでゲームシステムの説明をするべきでは？ (四回目)

さて、彼等には世話になったし、何かアドバイスでもしておくべきかな。

「えーつと、多分『この世界ではジョブに就かなければレベルがゼロのまま上がらないシステムだ』と説明すれば、そのへマスター達も思い止まってくれると思うのです」

「王都内の冒険者ギルドとかでクエストを受けられると言ったりするのでもいいかもね。……モンスターに殺される為にこの世界に来るへマスターは殆どいないと思うし」

「……俺達の方でも、可能な限り他のへマスターに今聞いた情報を教えたりするので」

「ありがとうございます。今聞いた情報は見回り担当の騎士達に伝えておきましょう」

そうして、改めて騎士さん達にお礼を言ってから、まず俺達は彼等に教えられた王都内にある冒険者ギルドがある場所へと向かう事にした……どうやら、彼等の話によると冒険者ギルドでは元々初心者冒険者への講習などを行っており、そこでならより詳しい説明をして貰えるだろうとの事だ。

……さて、マップによると冒険者ギルドはこの大通りを進んだ先にある様だな。

「さてー、なんか色々グダグダだったけど、とりあえずまずは冒険者ギルドに行こうか！ なるう系小説では最初に行くのがお約束だし！」

「確か様々なクエストの斡旋を行なっている施設との事でしたね。騎士さん達は何をするのか決まっていけないのなら、まずそこで話を聞けばいいのではないかと言っていたのです」

「まずは、どんなジョブがあるかを知らなければジョブに就く事も出来ないしな……ん？ おっと」

「ッ！ 済まん！ 大丈夫か!?」

そうやって駄弁りながら大通りを歩いていると、突然後ろの方からフードを被った男性が凄い勢いで走って来たので俺達は素早く大通りの脇の方へと寄った。

その人物はフードの所為で顔はよく分からなかったが、どうやらとても焦っている様だった。また左手には第ゼ口形態のへエンブリオ

があつたため、俺達と同じ初日ログイン組のへマスターだど分かつた。

「ああ、別に大丈夫ですよ」

「そうか良かった。……じゃあ、俺は急いでいるので失礼する！」

…… 上から見た光景だと、確かこの先に着ぐるみ屋がある筈だ！」

そんなよく分からない事を言いながら、フードを被った彼はものすごい勢いで走り去って行った……しかし、着ぐるみ屋？

「そんなに着ぐるみが好きな人だったのかな？ ……あんなに焦っていたし」

「まあ、個人の趣味は人それぞれだし、ゲームなんだから変な遊び方をする人もいるだろう」

「うーん……フードでよく分かりませんが、あの人どこかで見た事がある様な……？」

俺達は少しだけ啞然としながら彼が走り去った跡を見つめていた……後、ミュウちゃんは何か気になったのか首を傾げていたが。

……まあ、あんまり気にしてもしょうがないか。

「とりあえず、他人の事よりも今は自分の事だ。俺達もさっさと目的地に行くぞ」

「まあそうだね。あの人みたいに走る必要はないけど急ごうか」

「そうですね。……まあ、再び会う機会でもあれば思い出すでしょう」

そうして、俺達は少しだけ歩く速度を速めながら冒険者ギルドへと向かって行ったのだった。

冒険者ギルドでの初クエスト

□王都アルテア・冒険者ギルド前 ミユウ・ウイステリア

「と、言うわけで、やっと到着しました冒険者ギルド!」

何故か妙にテンションの高い姉様が、虚空に向かつてたつた今到着した冒険者ギルドの紹介をしているのです……姉様、異世界転生・転移物のラノベとかが好きですからね。

「ミカ、一体誰に話しかけているんだ?」

「とりあえず中に入りましょう姉様」

「ぶー、二人とも反応が塩いよー」

そんな姉様の言動をスルーした私と兄様は冒険者ギルドへと入っていき、そんな私達の反応に少しむくれた姉様もその後には続きました。

そんな冒険者ギルドの中は思っていたよりも遥かに綺麗で、その雰囲気は現実での市役所などの公的機関を思わせるものでした……しかし、中に居る人達は鎧や武器を身に付けている人が多く、彼等の雰囲気や足運びからその殆どが「戦う人間」である事も伺われました。

「……冒険者ギルドと言うからには荒くれ者の集まりみたいなのを期待してただけど……」

「国がやっている公共機関ならこつちの方が普通だろう。……ほら、さっさと受付に行くぞ」

「ハイなのです」

そう言つて兄様が姉様を連れて受付に向かつて行つたので、私も周りの人の観察を終えてその後を追いました……幸いにも空いている受付があつたので、そこに居た受付嬢さんに話を聞く事にしましょう。

「済みません。俺達は今日この世界に来たばかりのへマスターなんですが、南門駐屯所に居た騎士さん達から『この冒険者ギルドでならジョブやクエストの詳しい説明を聞く事が出来る』と聞いて来たのですが」

「ああ成る程、へマスターの方達でしたか。……分かりました。では、

簡単な説明だけをやる事も出来ませんが、この冒険者ギルドでは簡単な訓練やジョブ適正の審査、初心者用アイテムの配布などを行う初心者講習を一人千リルで受ける事が出来ますが、どうしますか?」

兄様が受付に居た金髪ロングで碧眼の美人受付嬢さんにその様な質問をしたら、彼女からその様な提案されました……さて、どうしましょうか?」

「千リルかく、結構高いね。どうする?」

「受けてもいいんじゃないでしょうか。……私達はまだこの世界について殆ど知りませんし、ここでの戦い方が分かるのなら千リルぐらいなら安いかと」

「まあ、序盤には少し痛い出費ではあるが、また稼げばいいだけだし……」それでは、私から一つ提案があるのですが、初心者講習の費用を無しとする代わりに一つとあるクエストを受けて貰えないでしょうか?」

受付嬢さんの提案をどうするのかを私達が相談してまあ受けてもいいかなと考え始めていた時に、その彼女からそんな提案を持ちかけられました。

「千リルを払わなくて済むのなら助かるのですが、その『とあるクエスト』の内容はどんなものですか?」

「はい、そのクエストの内容というのは『へマスター』と言う存在についての情報提供』になります。……実は、私達冒険者ギルドを始めとするこの国の公共機関は【猫神】や〈D I N〉から『今日から多くのへマスター』がこの世界に現れる』と言うことは聞いて居たのですが、〈マスター〉の情報自体は伝説に語られている様なものしか知らないのです」

そこから彼女が語ったへマスターの情報は騎士さん達から聞いたものと殆ど同じ不死である事や、へエンブリオに選ばれた者といった内容でした。

「ですが、昨日あたりから来たへマスター達の行動は、これまで私達が抱いて来たへマスターのイメージとズレているものが多く……これからこの世界に現れるへマスターが増えていくとするなら、より

詳細で正しい情報を得て置いた方が良いと私は考えたのでこのクエストを出させて頂きました」

「成る程〜！」

「後、貴方達は何故か奇行ばかり行う他の〈マスター〉よりも話が通じそうな事も理由ですね」

「成る程〜……」

「どうやら、色々と手探りなのはテイアンの人達も同じの様ですね……まあ、いきなり不死身で超常的な力を持ち、価値観もかなり違う人間が大量に現れて何の問題も起きない筈はないですよね……」

「二人はどう思いますか？ 私は受けてもいいと思うのです」

「うん、私も受けた方が良い気がする」

「まあ、コツチに損はなさそうだしな。……分かりました、そのクエストをお受けします」

「ありがとうございます。……申し遅れましたが、私は王都アルテア冒険者ギルドにおいて受付嬢をしておりますアイラ・ローランと申します。本日はよろしくお願ひします」

【クエスト【相談——アイラ・ローラン 難易度：二】が発生しました】

【クエスト詳細はクエスト画面をご確認ください】

私達が彼女——アイラさんからのクエストを受託すると共に、そんなアナウンスが表示されました……こう言うところはゲーム的なですね。

「それでは、あまりここで話を続ける訳にも行きませぬので奥の個室へご案内します。こちらへどうぞ」

私達はアイラさんの案内で冒険者ギルド内にある個室に向かいました。



「なるほど、やはりこれからこの世界に来る〈マスター〉は、以前からいた〈マスター〉とはだいぶ違うようですね」

「そうみたいです。……と言っても、〈マスター〉個人個人で価値観

や行動パターンも全く違いますから、へマスター〜と言う括りで見すぎるのは誤解を生むかもしれません」

「私達を含めてへマスター〜達は基本的にこの世界には遊びに来てるからね。人によって楽しみ方は違うからね」

「へマスター〜は良くも悪くも『自由』ですから。善行を成す人も、悪逆を成す人も、これからはそれぞれ現れると思うのです」

あれから私達はアイラさんにへマスター〜と言う存在について可能な限りの事を話しました……さつき騎士さん達に話したこと以外にも、初期の所持金や初期装備、この世界にいられる時間には個人差が大きい事なども伝えました。

……まあ、この世界がへマスター〜の中ではゲームとして扱われているとかは、遊びに来ているなどと表現してある程度ぼかして話しましたが。

「へマスター〜がこちら側に居られる時間が限られている以上、長時間の護衛依頼などは難しいですか。……ギルドとしてはへマスター〜が受けやすい依頼を纏めておいた方が良くもありませんね」

「人によるだろうけど、多分モンスター討伐みたいな派手なクエストが人気になると思うよ。逆に採取系とかは人気があんまり無いかも」
「へマスター〜は不死身だから命の危険もある程度は気にしないだろうし、どちらかと言うと時間単位での報酬が良いクエストは人気になりやすいでしょう」

「ジョブクエストは特定のジョブに就いた人にしか受けられませんし、複数種のジョブでパーティーを組んでいるへマスター〜には冒険者ギルドの方が使いやすいかもしれませんのです」

そんな感じで、私達とアイラさんは大体二時間程へマスター〜の事やこの世界の詳しい情報を話し合いました。

「……皆さま、今回は貴重なご意見を聞かせて下さって誠にありがとうございました。今回の意見は冒険者ギルドのへマスター〜に対する姿勢の良い参考になると思います」

「いえ、こちらこそ色々な話を教えてくれて感謝しています。……中には、詳しく知らなかったなら致命的な情報もありましたし」

「へマスターへ同士の争いはこの世界の法律でのノータッチだとか、へ監獄への事とか、へU^{ユニーク・ボス・モンスター}B Mへの事とかね。……本当に知らなきや行けない情報が多すぎ」

「誰かへInfinitive Dendrogramへのwikiとか作ってくれませんかね。……物凄く大変そうですが」

今までにこれだけ沢山の情報が出て来ましたが、それらですらこの世界では一般常識レベルのお話らしいですね……兄様は『これらの情報は掲示板とか使って拡散した方がいいか?』と呟いていましたし。

「クエスト【相談——アイラ・ローラン 難易度：一】を達成しました」と、思っていたらそんなアナウンスが表示されました。どうやら、これで彼女からのクエストは達成と言う扱いの様ですね。

……まあ、後のへマスターとティアンの関係はこれから手探りで進めていく事になるのでしょう。

「それでは、これからは初心者講習を始めさせて頂きます。……もつとも、主な説明は既に終わっていますので、これから私がするのは貴方達が初めて就くジョブ選択の手伝いと簡単に戦闘指導、そして初心者用アイテムの配布になりますが。……後、配布されるアイテムはクエスト報酬分も含めて多少色を付けさせて貰います」

「何から何までありがとうございます」

そう言って、改めてこちらへ向き直ったアイラさんは左手人差し指に付いている指輪から一冊の本を取り出しました……どうやら、あの指輪は【アイテムボックス】の様ですね。ああいうタイプのも有るんですか。

「皆様にはこの【適職診断カタログ】をお貸しします。……このカタログには現在確認されているジョブの情報が載っており、更に質問を通じて今就けるジョブの中で一番合っているジョブを探す事が出来ます。……まあ、本当に最適とは限りませんが指針にはなりますし、それでも分からない事があればいつでも質問して下さい」

「分かりました」

兄様は手渡された【適職診断カタログ】を受け取って開き、早速質

問機能を使つて『現在就くことのできる戦闘型の下級職』を表示させました……成る程、今のところ私達は生産をやる予定は無いですし、これなら今就けるジョブを探すのも楽そうですね。

えーつと、載っているのは【戦士】ファイター【闘士】グラディエーター【剣士】ソードマン【槍士】ランサー【騎士】ナイト【アーチャー】ハンター【斥候】スカウト【冒険家】アドベンチャラー【盗賊】バンディット【魔術師】メイジ【司祭】プリースト【付与術師】エンチャンター……なんかめっちゃいっぱい有りますね。

「……お兄ちゃん、もつと絞つた方がいいんじゃない?」

「じゃあ、どんなジョブに就きたいのかを言ってくれ。……俺がこの形式にしたのは、どんなジョブがあるのかを一通り確認する為だしな」

「では兄様、私は格闘系のジョブを見てみたいです」

「それでも、私は護身術の道場に通っているので格闘技にはそこそこの自信があるのです……後、武器を使うのはちよつと性に合わないの
で。」

「……そして、兄様がカタログに『今就ける格闘系ジョブ』を質問すると【拳士】ボクサー【格闘家】グラップラー【蹴士】キックマンなどのジョブが10個以上表示されました。」

「……ふむ、格闘系だけに絞つても結構有りますね」

「この世界のジョブ多過ぎない? 一体いくつ有るんだよ」

「転職条件がロストしたものなども有りますので正確な数は私も分かりませんが、現在明らかになっているだけでも千は優に超えるでしょう」

「そんな姉様が言った愚痴にもアイラさんが真面目に答えてくれました……もう何度思ったか分かりませんが、この世界ゲームとしては自由度高過ぎじゃないですかね?」

「その後、私達は『ジョブを全部確認なんて何日かかるか分からない上に最悪ジョブはリセットも出来るらしいから、とりあえず適当に就くジョブを決めよう』と言う話になりました。」

「私はせっかくだし派手に戦える前衛系、【戦士】とかがいいかな。ミュウちゃんはやっぱり格闘系?」

「はい、とりあえず【格闘家】辺りにしようかと。……兄様は昔剣道を

やっていますし【剣士】とかですか?」

「いや、パーティーで前衛三人というのもバランスが悪いし、せつかく剣と魔法のファンタジー世界に来たんだから魔法系のジョブとか良いと思ってるんだが……悩むな。……へエンブリオが生まれれば何かの指針になるんだが」

そう言ながら、兄様は左手の甲にある卵——第ゼロ形態のへエンブリオを見つめました……アリスさんは孵化して第一形態になったら外れると言っており、もうログインしてから結構経ちましたがいつ生まれるのでしょうか。

……そう思っていたら、突然兄様のへエンブリオが光を放ち始めました。

「お、お兄ちゃんっ!?? なんか光ってる! 光ってる!」

「うおっ! ……多分、これは孵化の合図だよな。……爆発とかはないよな?」

「流石にそれは無いと思いますが……。あ、姉様のも光ってますよ」

「えっ!?? ホントだ! 私の卵も生まれそう!」

いきなりだったから流石の二人もてんやわんやしてますね。あちらのアイラさんも目を丸くしていますし。

……しかし、私の左手は全然光りませんね。引っ掻いたりつついたりしても反応が無いですし、孵化までの時間には個人差があるのでしょうか?

「へマスターへにおける最大の目玉であるへエンブリオ! 一体どんなのが生まれるのかな」

「まあ、ジョブを選ぶ前だったからタイミングは良かったか」

「……私のは光ってませんけどね」

……別にいいですもん。へエンブリオなんて無くても殴ればいいだけですし。

へエンブリオの孵化と訓練開始

□王都アルテア・冒険者ギルド ミカ・ウイステリア

私の左手にある卵——第ゼロ形態のへエンブリオが光を放ち始めてからしばらくした後、その光が収まると共に私は自分左手に何か握られている事に気が付いた。

「……………これは……………随分とデカイね。……………えーっと、金属製の棍棒なのかな？」

私の左手に握られていたのは長さ二メートル程の金属製らしき棍棒で、形状は一メートル強ぐらいある持ち手の棒に巨大な四角錐がくつついた様な感じである……………また、四角錐は鋭い凹凸が付いているかなり殺意の高い形状であり、物凄く重そうなのに不思議と片手で持てるぐらい軽かったりする。

……………そして、卵があつた私の左手には「棍棒を持った大柄な人」っぽい凶柄の紋章が描かれていた。

「……………それが姉様のへエンブリオなのです。なんか凄いゴツイのです。……………どこかのロボットアニメの主人公機が持つてそうなデザインですね」

「本当に殺意が溢れるデザインだね……。……………あつ！ お兄ちゃんの方はどうなったのかな？」

そう思つて私とミュウちゃんが隣を向くと、そこには左手にある「太陽を背負う男」の様な紋章を眺めているお兄ちゃんの姿があつた。

「あれ？ お兄ちゃんへのエンブリオは？ まさかハズレとか……………」
「ちゃんと孵化はしている。……………おそらく、実態が無いタイプのモノなんだろう」

ああ、確かへエンブリオにはいくつかの種類があるんだつたね。私の棍棒は武器やアイテム型のTYPEアームズ、お兄ちゃんのは能力・領域型のTYPEテリトリーってヤツっぽいかな。

……………と言うか、それもステータス欄を見れば普通に分かるよね。よく見たら、お兄ちゃんは早速自分のステータスを開いてるし。

「とりあえず、ステータスを見てみようか。……………えーっと、へエンブリ

オ〉のステータス欄はーつと……」

「一体どんな感じなのですか？」

「……んー、ちよつと待ってねー……ああコレだね。こんな感じー」

私はステータス欄を操作してお兄ちゃん和ミュウちゃんに自分の
へエンブリオ〉の能力を見せた。

【激災棍 ギガース】

TYPE：アームズ

到達形態：I

装備攻撃力：200

装備防御力：20

ステータス補正

HP補正：D

MP補正：G

SP補正：F

STR補正：D

END補正：E

DEX補正：G

AGI補正：D

LUC補正：G

『保有スキル』

《バリアブレイカー》Lv1：

自身の直接攻撃時、攻撃対象の防御系スキル・身代わり系スキル・
防御力強化系スキル効果を低下させる。

効果低下率はこのスキルのLvと攻撃する際の自身の攻撃力、及び
攻撃対象と対象となるスキルの強度で決定する。

パッシブスキル。

……ふむふむ、このスキルとステータス補正を見ると、多分物理的
な近接戦闘に特化した感じのへエンブリオ〉みたいだね。相手の防御
を削って物理で殴る感じのスタイルなのかな。

「姉様のへエンブリオ〉は物理攻撃特化って感じですかね。……後、ギ
ガースってどういう意味でしたっけ？」

「私も知らない。……後で現実リアルに戻ったらネットで確認してみよう。
……さて！ 次はお兄ちゃんの〈エンブリオ〉を公開ダー！」

「はいはい……ほれ、こんなんだ」

そして、お兄ちゃんお兄ちゃんは私達私達に自分の〈エンブリオ〉のステータスを公開した。

【百芸万職 ルー】

TYPE：テリトリー

到達形態：I

ステータス補正

HP補正：G

MP補正：G

SP補正：G

STR補正：G

END補正：G

DEX補正：G

AGI補正：G

LUC補正：G

『保有スキル』

《光神エクスペリエンス・ブースターの恩寵》Lv1：

自身が獲得する全ての経験値を+100%する。

パッシブスキル。

《長き腕エクスペリエンス・トランスレイションにて掴むモノ》：

自身自身と自身のパーティーメンバー、及びそれらの従属生物が非人型範疇生物モンスターを倒した時、アイテムをドロップしなくなる代わりに経験値が増大する。

※このスキルのオンオフを切り替えた後、〈Infinite D
endrogram〉内時間で24時間の間はこのスキルのオンオフの再変更は不可能。

パッシブスキル

……うーむ？ ステータス補正がオールGなのはともかく、スキルの的には獲得経験値を増大させる〈エンブリオ〉って事なのかな？

「それにしても、スキルの文字とルビがなんかアレだよ。……まあ、お兄ちゃんのパーソナルから生まれたのなら納得だけど」

「おいコラお前それ以上言うなそれを言ったらマジで戦争だろ！」

「まあまあ！ 落ち着いて下さい兄様！ ほら、アイラさんも見ていますし」

私のからかいの言葉にちよつとキレたお兄ちゃんをミュウちゃんがどうにか宥めてくれた……ていうか、さつきからアイラさんを放置しっぱなしだったね。へエンブリオの孵化にちよつと浮かれ過ぎてたかな。

「あ、……申し訳ありませんアイラさん。何分、急にへエンブリオが孵化したもので動揺してしまつて……」

「いえ、大丈夫ですよ。……私も、へマスターがへマスター足り得るへエンブリオの誕生を見る事が出来てとても興味深かったですし」

お兄ちゃんの謝罪に対しアイラさんは大人の態度でそう言ってくれた……私達は『これ以上彼女に迷惑をかけるのも忍びないので、へエンブリオの考察は後回しにしてさつきと就くジョブを決めよう』という事になった。

……とりあえず、私とお兄ちゃんは自分達のへエンブリオの情報もカタログを入力して、自分に適したジョブを検索してみた。

「じゃあ、私はカタログで出たオススメの【戦棍士】^{メイスマン}にしようかな。【ギガス】の種類は戦棍^{メイスマン}みたいだし、その扱いに特化したこのジョブが無難でしょう」

「私はさつき言つた通り【格闘家】^{グラップラー}でいいですし……兄様は？」

「俺は【魔術師】^{メイジ}で行く。……俺の【ルー】は今のところ獲得経験値を増大させるだけのへエンブリオだから、ジョブは割と何でもいいしな」

「その三つのジョブであればこの近くにあるそれぞれのギルドで転職出来ますね。……では、地図を渡しておくので早速転職してから、また此処に戻ってきて簡単な戦闘訓練に入りましょうか」

そうして、私達はそれぞれ自分が初めて就くジョブをそれぞれのギルドに行つて転職し、その後戦闘訓練の為に冒険者ギルド内にある訓

練場へと戻っていったのでした。

◇◇◇

□王都アルテア・冒険者ギルド訓練場 【魔術師】 レント・ウイステリア

「『ファイアーボール』！」

そう言った俺の突き出した右手から小さな火の玉が発射され、10メートル程先に置かれていた的に命中した……ふむ、この世界の魔法は基本的にスキル名を言うだけで後は自動で発動してくれるみたいだな。

……あれから俺達は各々が選んだジョブに就いた後、この訓練場でアイラさんに簡単な訓練を付けてもらう事になった。

『それでは、まずは皆さんの実力を知りたいので軽く模擬戦でもしましょうか。……ああ、これでも私は殆ど戦闘系のジョブで合計レベル468ありますので、遠慮なく向かって来てくれて構いませんよ』

そう言った彼女の実力は本物で、俺も多少は剣の腕に覚えがあつたのだがステータス差以前に純粋な技量で上回られて軽くないなされてしまっていた……と言うか、ティアンは「マスタ―」と違って合計レベルも個人差があるらしいのに、レベルから考えて彼女の最大レベルは500あるよな。

……なんで冒険者ギルドの受付嬢なんてやってるんだらう？

『レントさんはどうやら剣の心得があるようですし、魔法系のジョブ主体で行くならそちらの訓練を優先した方がいいでしょう。ミカさんは武術の心得が無い様なので私が少し指導しましょうか。……ミウさんは特に私が教える事は無いレベルなので自主訓練で』

その模擬戦の後、アイラさんはミカとの一对一の訓練を始めて、俺は彼女が用意してくれた訓練用的に向けて魔法スキルを発動させる練習を行っていた……後、ミウちゃんは『あっちと身体現の大きさ実が違うのでちよつと調整してきます』と言って、訓練場の端っこで暫く武術の型を繰り返していた。

……と思っただら、ミュウちゃんが急に演舞を辞めてこっちにやってきた。

「もう調整はいいのか？」

「はい、体格の違いによる動きのズレは矯正出来ました。やっぱり格闘で戦うなら手足が長い方が有利ですからね、アバターを成長させて正解だったのです。……それで兄様、そちらの魔法の方はどんな感じですか」

「ふむ、発動の意思を込めてスキル名を言うと、MPが消費されてスキルが魔法を自動で発動させてくれるって感じかな。……後、発動者のイメージでスキルの方がある程度補正してくれるらしいか？」

例えば、さっきの《ファイアーボール》は右手から出したけど、左手から魔法を出す事もできたりするし……多分、この辺りの事は本格的に魔法について調べないとどうしようもない領分かな。興味はあるし、機会があったら調べてみるのもいいかもしれない。

……実は、今はそれよりも気になる事があるんだが……。

「後、気になる事は何故か俺のレベルが上がっている事だな」

「……アレ？ この世界ってモンスターを倒すかジョブクエストをこなすかしないとレベルが上がらない仕様では無かったですか？」

「ああ、それは私のジョブスキルによるものですね」

そんな俺の疑問に答えてくれたのはアイラさんだった……後、ミカは向こうでヘトヘトになって地面に座り込んでいる。

……アイラさんは汗ひとつかいていないんだが、これがステータスの差か……。

「私のメインジョブ……教官系統上級職【インストラクター教導官】には《戦技教導》という『戦闘の指導をした相手がその度合いに応じて経験値を獲得する』スキルがありますので」

「成る程、そうだったんですね。ありがとうございます」

経験値を獲得させるタイプのジョブスキルもあるのか……俺の【ルー】とは相性が良さそうだし、今度その辺りのジョブを調べてみようかな。

「それでは時間も押していますし、ミカさんの体力が回復したら最後

の訓練……実戦訓練に移りたいと思います」

「分かりました」

それじゃあ、暫くは休憩時間だから俺とミュウちゃんはへたり込んでいるミカの様子でも見に行く事にした……まあ、ミカは『アイラさんスパルタすぎー……。レベルは上がったけど……。』とか言ってたし特に問題は無さそうだった。

◇

それから十分後、ミカの体力が回復したので俺達はアイラさんの言う『実戦訓練』に入る事になった。

「では、これからの実戦訓練では、この中に入っているモンスターと戦ってもらいます」

そう言って、アイラさんは一つの宝石の様な物を俺達に見せた。

「これはモンスターを入れておく為の【ジュエル】というものです。……この中には呼び出した人間を襲う様に設定された訓練用のモンスターが入っているので、皆さんにはそれと戦って貰う事になります」

尚、そのモンスターは呼び出してから30分程度で死亡する設定の【錬金術師】が作り上げたホムンクルスらしく、ステータスも王都周辺に出るモンスターに毛が生えた程度らしいので、今の俺達でも普通に倒せるでしょうとの事だ。

……そうして一通りの説明を終えた後、アイラさんは【ジュエル】を俺に手渡してきた。

「それを持って《喚起》——【チュートリアル・ブラックホムンクルス】と言えば中にあるモンスターが出て来ますので、準備が出来たら呼び出してそれと戦って下さい」

「分かりました」

それだけ言うと、アイラさんは部屋の隅の方に下がっていった……。まあ、レベル四百越えの彼女がいれば方が一も無いだろう。

「……ミカ、ミュウちゃん、準備はいいか？」

「大丈夫だよお兄ちゃん」

「問題無いのです」

俺の確認にミカは両手に「ギガス」を構えて、ミュウちゃんはごく自然体で立ったままそう答えた……それじゃあ、この世界での初実戦をやりましょうか！

「じゃあ行くぞ……《喚起》——【チュートリアル・ブラックホムンクルス】！」

俺のその宣言と共に手に持った「ジュエル」が発光し、直後に前方5メートルぐらい先へ一体のモンスターが出現した……のだが……。

『KYASYYYYAAAAA……』

「……ホムンクルス？」

「……どつちかと言うと、怪物系の映画に出て来るクリーチャーみたいなんですけど……」

「……見た目的にはゲーム終盤に出てきそうな感じですね」

その見た目は鈍く輝く黒い身体に禍々しい爪がついた手足を持つ長い腕と脚が生えていて、首から上は人間に嫌悪感を抱かせる事に特化された歪な形状をしていて、その牙が生えた口からは呼吸音と共に異臭を放つヨダレが滴り落ちていた。

……呼び出す相手を間違えたかな？

「……あのー、アイラさんこれは……」

「それが貴方達がこれから戦う【チュートリアル・ブラックホムンクルス】で間違いありませんよ。……初めてモンスターと戦う初心者死亡因で最も多いのが、初めて相対するモンスターに怯んで不意を突かれる。事なので、そう言った事に耐性を持たせる為に多少見た目を変えています」

ええ……俺達は別に大丈夫だけど、現実視でグロ耐性の無いヘマスタールはリタイヤしそうな見た目ですが……。

……そんな俺の考えを読み取ったのか、アイラさんは更に言葉を続けた。

「まあ、この程度でリタイアする様ならば戦闘以外の道を探した方が賢明でしょう。この世界にはコレより遥かに恐ろしい脅威が幾らで

も存在していますし。……それより、そろそろ来ますよ」

『KYASYYYYAAAAAa——ツ!!!』

アイラさんのその言葉と同時に「チュートリアル・ブラックホームンクルス」が奇声を上げながら俺に向かって突っ込んで来た……ここに、俺達のへInfinite Dendrogramにおける初めてのモンスターとの戦闘が始まったのだった。

初戦闘、そして出発

□王都アルテア冒険者ギルド・訓練室

王都アルテアにある冒険者ギルド、その訓練室ではウイステリア兄妹と「チュートリアル・ブラックホムンクルス」との戦闘^{訓練}が始まっていた。

『KYASYYAAAAAa a a a——ッ!!!』

まず、「ジュエル」から解放された「チュートリアル・ブラックホムンクルス」がその製作時に与えられた命令に従って、自身を解放したレントに襲い掛かりその歪に拵じくれた爪を振り上げた。

「チイッ！」

……出てきた相手の醜悪な見た目に面食らっていたレントだが、相手がこちらに向かって来るや否や即座に気を切り替えて距離を取る為に後ろに飛び……。

「セイハーツ！」

『GYAAAAッ!?!?』

その間に「ブラックホムンクルス」動き出すよりも早く動いていたミカが両手に持った大型メイス——彼女のヘエンブリオ〈撃炎棍 ギガス〉を割り込ませてその爪を防ぎ、そのまま「ギガス」を振り抜いて相手を吹き飛ばした。

……この「チュートリアル・ブラックホムンクルス」は醜悪な見た目と違い、STRを含む殆どのステータスは王都周辺に出現する「リトルゴブリン」と大差無い程に低く設定されているので、現在ミカのSTRでも余裕で吹き飛ばす事が出来たのである。

『KYASYYAッ!』

「あら、結構頑丈だね」

「戦闘訓練用だからか?」

しかし、吹き飛ばされた「ブラックホムンクルス」はそのまま体勢を立て直して再び兄妹に向き直った……レントの想像通り「チュートリアル・ブラックホムンクルス」は初心者に多くの戦闘経験を積ませる事を目的に作られている為、そのステータスはENDをやや高く、

HPは非常に高く設定されているのである。

……更に「ブラックホムンクルス」は一度でも自分を攻撃した者も攻撃対象に含める設定にされているので、前衛ジョブとしてレントの前に立ったミカへとターゲットを変えて、そちらに襲いかか……。

「……私を無視するのは頂けませんね。お陰で簡単に近づけました」

『ツッ!? GYAッ!』

……るよりも早く、その懐に潜り込んだミュウが放ったアッパーによつて「ブラックホムンクルス」の顎はかちあげられた。

だが、その攻撃によつてミュウもターゲットと認識した「ブラックホムンクルス」は、直ぐ手の届く位置にいる彼女に対してその爪牙を振りかざした。

『GUッ……GYAッ! SYAッ!』

「……ふむ、見かけはクリーチャーですが中身は人間とさして変わりませんね。これなら避けられます」

しかし、彼女に噛みつこうとした牙は僅かに身を逸らされるだけで躲され、続けて振るわれた両手の爪も腕の部分を弾かれる事によつて軌道を逸らされて当たらない……更に攻撃後の隙を突いて彼女の拳や蹴りが的確に突き刺さっていく。

……「ブラックホムンクルス」の視点では、まるで自分が向こうの攻撃だけが当たる幻影と戦っているかの様に感じる程であった。

「……このままミュウちゃんに任せれば普通に倒せそうだねー」

「それだと俺達の訓練にならないだろ。……ミュウちゃん、俺が合図をしたら一旦離れてくれ。ミカは俺が魔法を撃つたら入れ替わりに近接戦だ、必要なら援護する」

「分かったのです」

「オツケー」

このまま見物人に徹するのでは訓練にならないと判断したレントが、妹二人に簡単に指示を出すと共に魔法スキルを使い……そして、そのスキルの僅かな準備時間が終わった。

「ミュウちゃん今だ! 《ウインドカッター》!」

「了解なのですっ!」

『! GYAAAAA!?!?』

合図と共にレントが掲げた手の平から小型の風の刃——風属性の初歩魔法《ウインドカッター》が放たれる……それは、合図と同時に「ブラックホムンクルス」から離れたミュウが直前まで居た場所を通りその腕の一本を切り飛ばした。

「ナイスコントロールです、兄様!」

「まあ、このぐらいはな。……ミカ!」

「分かってるって!」

『GYAAAAAaaaa!!』

腕を切り飛ばされた痛みには悶える「ブラックホムンクルス」に対して、下がったミュウの代わりに「ギガス」を振りかぶって突っ込んだミカが容赦なく追撃をかける。

「潰れる! 《ストライク》!」

『GYAAAA!?!?』

そして、大上段からアクティブスキルを伴って打ち下ろされた「ギガス」が「ブラックホムンクルス」の頭部に直撃して、相手を叩き潰し床に打ち付けた。

……だが、それでも「ブラックホムンクルス」はその高いHPから痙攣して動けないながらも生きており……。

「お兄ちゃん、トドメ!」

「分かった……《ファイアーボール》!」

『——ツ!』

直後、飛び退いたミカと入れ替わりにレントが放った小型の火球が「ブラックホムンクルス」に直撃して、その身体を跡形も無く焼き尽くして光の塵へと変えた。

「おー、見事に焼けているのです」

「……話には聞いていたけど、モンスターを倒すと光の塵になるってあんなの何だ」

「そうみたいだな。……経験値も入ってレベルも上がったみたいだし、これで初戦闘は終わりで良いんですね」

妹二人が各々の感想を述べているのを尻目にレントはステータス

欄を見て経験値が入っている事を確認しつつ、この戦闘が終わった事を壁際に立ってこちらを見ていたアイラさんに改めて確認した。

「はい、お疲れ様でした。……三人とも見事な戦いぶりでしたし、これなら戦闘メインで十分やっていけるでしょう」

彼女のその言葉と共に、三兄妹のへInfinite Dendrogramに於ける初めての非人型範疇生物相手の戦闘は終わったのだった。



□王都アルテアへマリイの雑貨屋【格闘家】 ミュウ・ウイステリア

あれからモンスターとの初戦闘を私達はアイラさんの案内でへマリイの雑貨屋というお店にやって来ました……ここに来たのは先程のクエストの報酬である、私達に渡す初心者用アイテムを買う為だそうです。

……正直、こちらの方が多くの情報を教えて貰いましたし、ここまですされるのは貰いすぎでは無いかと思っただけです……。

『貴方達から頂いたへマスター関係の情報はとても参考になりましたから。今後もへマスターが増え続けるならば、それらの情報は非常に役に立つでしょうし。……それに、私は貴方達の話聞いてこれらの事を考えると、優秀かつ善良で話のわかるへマスターとの伝手を作っておく事は非常に重要な事だと判断しました。なので、この報酬は今後の事を考えての先行投資と言うのもありますから』

と、返されてしまったので、私達は甘んじて彼女から報酬を受け取る事にしたのです……そんな事を考えていたらアイラさんが店の中に入って行つたので、私達もその後を追って中に入って行きました。

……店の中に入るとそこには様々なアイテムが綺麗に陳列されており、奥のカウンターには一人の女性が座っていました。

「いらつしやいませ。……って、アイラじゃない。どうしたの？」

「ええ、今日はこちらのへマスターの方達に依頼したクエストの報酬

を買いにきたんですよ。……申し遅れました、彼女はこの店の店主、マリイ・ローラン。……私の母でもあります」

そう言ったアイラさんに続いて店主——マリイさんが挨拶をしてくきました。

「いらつしやいませ、そのアイラの母でこの〈マリイの雑貨屋〉の店主をしていますマリイ・ローランと申します」

「どうも、〈マスター〉のレント・ウイステリアです」

「その妹で〈マスター〉のミカ・ウイステリアです」

「同じく妹のミュウ・ウイステリアなのです」

成る程、確かに言われてみるとこの二人は顔立ちとかがよく似ているのです……しかし、マリイさん若いですね。とてもアイラさんぐらいのお子さんがいるとは思えないのです。

……そして、そんなマリイさんは私達の事を興味深そうに見つめていました。

「〈マスター〉が今日から増え始めるみたいなのは聞いていたけど、まさかいきなり娘が連れて来るなんてね。……でも、クエストを発注したのなら報酬は事前に用意しておくべきじゃない？」

「……こちらもあるべき〈マスター〉の増加に対応するのに精一杯だったんです。その分報酬は色を付けますし……それよりも、この三人用の装備を買い取るので案内して下さい、店主さん」

「ハイハイ。……それじゃあこちらにどうぞ」

そうして、私達はマリイさんの案内で店の一角にあるという初心者向けのアイテム売り場に案内されました。

……そこには様々な武器や防具、そして初心者用のポーションなどの使い捨てアイテムが並んでいました。

「ここが初心者用アイテムのコーナーよ。……ここでは使い終わった中古品の装備とかを整備して安く売ってるのよ」

「ここではそこそこの性能の装備が安く手に入るのよ、多くの初心者が利用しているんですよ。……なので、大した金額ではないので遠慮無く受け取って下さい」

「はい、ありがとうございますアイラさん」

そして、アイラさんは今の私達に合った装備を手早く選んで買い、クエストの報酬として簡単な解説付きで渡してくれました。

「レントさんにはそれぞれMPを固定値で200ほど増やすスキルが付いている外套【マジックローブ・1】とアクセサリーの【魔力の指輪】、杖の【リトルトレントの魔杖】を。ミカさんは武器はご自身のヘインブリオがあるのです、セットで装備すれば《ダメージ軽減》とHP上昇の効果がある軽鎧の【ライオット】シリーズのSサイズ。ミユウさんには格闘家用のAGI上昇スキルがある【青の武闘着】上下セットと、特殊な効果は無いですが軽くて頑丈な籠手【ライトメタル・ガントレット】をそれぞれ報酬として渡します」

「思ったよりめっちゃ多いんだけど……」

「ですね……」

「こんなに沢山……大丈夫ですか？」

報酬として渡されたなんか凄そうな装備の数々に、私達は思わず遠慮してしまいました……。

「これでも私はそれなり稼いでいるので大丈夫ですよ。それに先程も言った通り、これらは初心者用の中古品ですから安いですし。……ああ、初心者講習を受けた人には低級の【HP回復ポーション】を渡す事になっていますので渡しておきますね。……後はレントさんが【魔術師^{メイジ}】なのでここで【MP回復ポーション】などを買っておくべきでしょう。ついでに外での活動に必要なアイテムも教えて置きますので、余裕が出来たら買ってみるのも良いと思いますよ」

そうして私達はアイラさんから報酬を受け取り、ついでに必要なだと教えられた各種アイテムを買ってみました……その後、私達はアイラさんの勧めで初心者用のクエストを受けるために冒険者ギルドに戻って行きました。

……やっぱり、アイラさんって物凄く面倒見が良いタイプですよ
ね。



「これらが王都周辺の低レベルモンスター討伐クエストになります。……これらは王都周辺のモンスターが増え過ぎない様にする。間引き」としての意味の他に、初心者用救済・育成の為のクエストとしての意味があるので初めてのクエストとしては丁度いいでしょう。……おっと、言い忘れていましたが私の指導を受けた事で、貴方達には今から一時間程【インストラクター教導官】の奥義《教導官の薫陶》による獲得経験値・スキルレベル上昇の補正が付きますのでよろしくお願いします」あれから私達は報酬としての貰った装備を身につけて、冒険者ギルドでアイラさんオススメの初心者用クエストを受注しました……ちなみに、これらの初心者用クエストは下級職一職目の人のみを受けるモノという暗黙の了解があるので、注意して下さいとも言われました。

……しかし、アイラさんには本当に色々とお世話になりっぱなしですね。初日に彼女に出会えたのは私達にとって埒外の幸運でしょう。

「アイラさん、本当に何から何までありがとうございます」

「初めて仲良くなったティアンがアイラさんで良かったね」

「そうですね」

「いえ、これは私が好きでやっている事ですし、先程も言った通り先行投資の様なものですから。……それに、ここまでやってもこの世界では人はあっさり死んでしまうものですしね」

……そう言った彼女の顔は先程とは一転して深い悲しみと憂いを抱えています。

「この世界では人間は非常に弱い生き物ですからね。昔、私が冒険者をやっていた頃にも、昨日一緒にパーティーを組んでいた人が明日には死んでいるなんて事はザラに有りました。……そんな人を少しでも減らす為に冒険者ギルドの受付嬢に転職しましたが、毎日顔を合わせていた人がある日突然来なくなる事も多いです。……貴方達にここまで援助をしたのは不死身である《マスター》が増えれば、戦いで死んでいくティアンの数が減るのではないかと思った事も理由にあるんです……」

そこまで語ったアイラさんの雰囲気はとても申し訳なさそうな感

じをしていました……とりあえず、私が何か言おうとするよりも早く兄様が口を開きました。

「アイラさん……成る程、安心しました」
「え？」

兄様が言ったその言葉にアイラさんは少し惚けた様な声を出しました……そして、兄様は更に言葉を続けます。

「貴女がただ優しくしてお節介焼きな人だった事がですよ。……正直、ここまでしてくれるからには後々何か重い対価を支払わせる事が目的では無いかと内心疑っていましたし。……〈マスター〉を援助してテイアンの死人を減らす程度の事なら、別にどうという事はありませんから」

「疑っていた事とかは別に言わなくても良いと思うのです兄様。

……それにアイラさん、不死身な〈マスター〉達は基本的にこの世界へ遊びに来てるだけなのです。なので、そんな私達よりもテイアンの命を優先するのは当然だと思いますよ」

「まあ、〈マスター〉つて言うのは自由だから、必ずしもテイアンを守る者だけとは限らないけど……貴女の様^{テイアン}な人がいるなら、テイアンを仮初めの命をかけて守ろうとする人も必ず出て来ると私は思うよ」

「皆さん……」

そんな風に私達はアイラさん——この世界で初めて友誼を結んだテイアンに各々の思う言葉を伝えました。

……私達の言葉を聞いてアイラさんは一度だけ目を伏せると、次の瞬間に今までよりも綺麗な笑顔を浮かべながら私達に自分の言葉を伝えました。

「ありがとうございます皆さん。私が初めて言葉を交わした〈マスター〉が貴方達で本当に良かった。……では、クエストは受託^{〈マスター〉}されたので行ってらっしゃいませ。当冒険者ギルドは貴方達の訪れをいつもお待ちしております」

……アイラさんが掛けてくれたその言葉を背に、私達は王都の外へと足を進めていったのでした。

王都の外で出会ったモノ

□〈ヘイースター平原〉【魔術師^{メイジ}】レント・ウイステリア

あれから、俺達はアイラさんオススメの初心者用クエストを達成する為に、王都の西側にあるヘイースター平原へと来ていた……ちなみに受けたクエストはここに出る〃【リトルゴブリン】【パシラビツト】【グリーンスライム】をそれぞれ一定数討伐する〃と言うものである。

……ここヘイースター平原は王都の東西南北にある狩場の中で最もモンスターのレベルが低く、下級職一職目の俺達が戦うには適した場所だと言う話なのでここで狩りをしているのだが……。

「うらー！ 《ストライク》！」

『PYUUUU!?!?』

「テイツ！ セヤア！ セイハーツ！」

『GYAAAA!?!?』

「……分かってはいたが、圧倒的だなウチの妹達」

まず、飛びかかって来た【パシラビツト】をミカが【ギガス】の最適なタイミングで放たれた一振りでミンチより酷い何かに変え、横合いから襲い掛かって来た【リトルゴブリン】の内一体はミュウちゃん拳と蹴りによる鮮やかな連撃で打ち倒していた……まあご覧の通り、前衛が強すぎる所為でここらの敵は大体瞬殺である。

……ジョブを後衛寄りにして正解だったな、あの天災児二人が前衛だと俺が前に出てもやる事が無いだろうし。

「と言っても、二人しか居ないから討ち漏らしもある訳で……《ウインドカッター》」

『GYA!』

そう言いながら、俺は掲げた【リトルレントの魔杖】から風の刃を放って、別方向から来た【リトルゴブリン】を縦に真っ二つにした……どうも、魔法は使用者が意識した地点から発射される設定みたいだな。掲げた手や杖から出たように見えるのはそこに意識が集中していたからで、その気になれば棒立ちでも放てたし。

……まあ、流石に背中から放つ事は出来なかったからある程度の制限はあるようだが。

「だが、今はこれ以上考察を深める必要な無いかな。まずは、魔法自体をちゃんと扱える様になる方が重要だろう……《詠唱》終了《マッドクラップ》」

『GYAAAAA!?!?』

俺が一人言——先程覚えたMPを込める呪文詠唱を追加でくつつけることで、魔法スキルの威力や射程、範囲を拡大するスキル《詠唱》を使って強化した地属性拘束魔法を使い、少し離れた所に居た二体の「リトルゴブリン」の動きを止めた……別にさつきから何の意味も無く一人言を呟いていた訳じゃ無いぞ。

「お兄ちゃんナイス！ 《ハードストライク》！」

『GYAAAAAaaa!!』

そうやって動きの止まった二体を、ミカが「ギガース」を横向きに振り回してまとめて撲殺した……周りをみると既にモンスターは全滅していたので、とりあえず今の戦闘は終わった様だ。

……俺の《エクスペリエンス・トランスレイション長き腕にて掴むモノ》の効果でアイテムは落ちないから周りには特に何も残っていないので、妹達はそのままこちらに向かつて来た。

「お兄ちゃんお疲れ。 ナイス援護」

「流石は兄様！ 魔法を上手く扱っていますのです」

「まあ、それなりにはな。 ……と言っても、出来ればもつと魔法の練度を上げておきたいがな。 前衛との連携になると誤射が怖いし」

このゲームにはフレンドリーファイアがある仕様だから、後衛にとって前衛との連携で一番重要なのは誤射しない正確性だとこれまでの戦闘で痛感したからな。魔法だと火力が高いから尚更だし。

……まあ、ウチの天災児二人なら戦闘中に後ろから不意打ちで魔法を撃たれても余裕で回避出来るだろう、と言う話は置いておく。兄として妹の足手まといにはなりたく無いプライドもあるし。

「しかし、アイラさんとお兄ちゃんのスキルのお陰でジョブレベルが凄く上がるね！ 大体二時間ぐらい狩ってもう10レベルだよ」

「私は9レベルなのです。……それに、人が少なくて狩りがしやすいのも理由だと思うのです」

「俺は16レベルだな。……まあ、デンドロが始まってまだ初日だからな。多分、明日以降は物凄くヘマスター〈が増えるんじゃないか?」

まあ、俺のスキルによるデメリットでアイテムは一切手に入っていないが、どうせこの辺りのモンスターが落とすアイテムを売っても二足三文にしかならないからレベル上げの方を優先しよう方針で狩りをしてきたからな。

尚、俺のレベルが一番高いのはスキルによる獲得経験値上昇の他にも「グリーンスライム」を焼き払ったりしたのが原因でもある……こいつは物理攻撃無効だからミュウちゃんでは倒せないし、ミカの《バリアブレイカー》付きの攻撃でもまだステータスが低いからか何回も叩かなければ倒せなかったので、必然的に俺の魔法で倒す事になったのだ。

「じゃあ、初日でデンドロを始められた私達は勝ち組だね！ 今の内に一步リードしようよ!」

「では、そろそろ狩場をより上位の所に変えましょうか？ クエスト達成に必要な討伐数は既に満たしているのです」

「むしろ、大分数をオーバーしているよな。……ほら、レベルがどんどん上がって行くのが楽しかったから……」

それで調子に乗ってモンスターをサーチアンドDESTROYしてたからなあ……お陰で周囲にモンスターの気配が無くなったし、レベルが上がった事も合わせて狩場を移すべきだろうな。

そう言うわけで俺達はヘイースター平原〈での狩りを終えて、一旦クエスト達成の報告とその報酬を受け取る為に王都の冒険者ギルドに戻る事にしたのだった。



そうして王都の東門への道を歩いている最中、俺達はちらほらとヘイースター平原〈でモンスター狩りをしているヘマスター〉を見かけ

た。

「流石に私達の他にもへマスターは居るんだね。紋章とへエンブリオがあるから分かりやすいね」

「まあ、ログイン即自滅せずにゲームを進められたのが俺達だけ、何てことは無いだろうさ。……しかし、へエンブリオと言うのは本当に多種多様な」

少し遠目で見ただけでもTYPEアームズっぽい光る剣からビームを放って【パシラビット】を攻撃していた男性や、TYPEチャリオッツらしきサーフボードに乗って空を飛びながら【リトルゴブリン】を轢殺していた女性とかが居たな。

後、俺達のようにパーティーを組んでいたへマスター達も居て、TYPEガードナーであろう芋虫を肩に乗せた少女と初期装備っぽい剣を持った女性ともう一人後方で指示を出していた少女の三人組や、多分TYPEテリトリーであろう暗いフィールドを展開していた女性との中で影を操ってモンスターと戦っていた男性のペアとか。

「……こうして見るとへエンブリオって本当に多種多様な」

「そうですね兄様。……ところで、私のへエンブリオは一体いつになつたら目覚めるのでしょうか」

そう言ったミュウちゃんは、自分の左手に付いている第ゼロ形態のへエンブリオを見ながら溜息を吐いていた……確かに俺とミカのへエンブリオが孵化してからもう三時間は経っているしな。

……もうそろそろ目覚めてもいいと思うんだが、ひよつとして孵化までの時間は個人差が大きいのか？

「大丈夫大丈夫その内目覚めるって！ 多分、日曜午前のヒーローヒロインの初変身みたいな劇的な感じで！ なんかそんな気がするし」
「……まあ、そういうシチュエーションに憧れないと言えば嘘になりますが、そこまで劇的で無くても普通に目覚めてくれればいいのです」

「と言うか、劇的なシチュエーションという事はそれだけ厄介事が起きている最中って事じゃ無いか？」

規格外な直感持ち天災児のミカが言うとなんかシヤレにならない

んだよなあ……この後、高確率で何かが起こる可能性が高いって事だし。

……そんな会話をしながら、俺達は冒険者ギルドまで戻って来てクエスト完了の報告をして報酬を受け取り、更に別のクエストを受けた後、少し休憩を兼ねて王都を見て回っていた。

「合わせて三千リルか……まあ、依頼の難易度からすれば妥当な額だよな」

「本来ならドロップしたアイテムとかを売るんでしょうけど、私達は兄様のスキルで全部経験値に変えていますからね」

「序盤はレベル上げを優先にして、クエストでお金を稼ぐ方向でいこうよ。……お金に困ったら普通に狩りをすればいいんだしさ」

そんな会話をしながら、俺達はちよつとお腹が空いたからその辺りにあつた露店で買い食いをして見たりして、王都の観光を楽しんでいた……しかし、結構美味いなこの「パシラビットの串焼き」。

……そうして休憩を終えた後で、俺達は次の狩場であるへノズ森林へへと向かう事にしたのだった。

◇◇◇

□へノズ森林◇ 【戦棍士^{メイスマン}】ミカ・ウイステリア

そんな訳でやって来た王都北部にあるへノズ森林へ、ここで私達がやるクエストは「テイルウルフ」の一定数討伐だったんだけど……。

「……アレ、何でしょうか？」

「……熊、じゃないかな？」

「……正確には熊の着ぐるみだな」

森の奥にやって来た私達が見たものは、二足歩行の熊が左手に着いた金属製の筒の様な物を使って四方から襲い掛かる「テイルウルフ」の群れを殴り倒している、と言う実にシュールな光景だった。

……まあ、お兄ちゃんの言う通りよく見ればアレが熊型の着ぐるみを来た人だという事は分かるんだけどね。

『だーっ！ 数が多いクマー！』

「喋ったし、やっぱり中の人がいるみたいだね。……あの人もへマスタ―」なのかな？」

「わざわざ動きにくい着ぐるみを来て戦う様なティアンは居ないだろうし、多分そうなんじゃないか？ ……まあ、この世界になら着ると戦闘能力が上がる着ぐるみがあるという可能性もあるが」

「彼は相当動きにくそうにしていますし、その可能性は低いかと。……しかしあの人、着ぐるみ越しでも分かるぐらい凄い武術の技量をしているのに、何故動きを阻害する着ぐるみなんて来ているのでしょうか？」

お兄ちゃん曰く『戦闘系天災児』なミュウちゃんがそこまで言うつて事は、あの人(?)は相当強いって事だよね……着ぐるみ縛りのネタプレイとか、或いはそう言う修行とかかな。

……でも、さつきから私の直感に妙な反応があるんだよね……。「……なんか、あの子の事を助けた方が良い気がするんだけど、どうしよう?。」

「お前がそう言うならそうした方が良いんだろうが……ネットゲームに横入りはマナー違反だし……」

「いえ待ってください兄様。よく見たらあの子の足元に誰かいるのです……子供が二人、でしょうか?。」

遠目で見ていたらよく分からなかったけど、確かに着ぐるみさん(仮称)の足元には子供が二人程蹲っており、彼はその二人を守りながら戦っている様だった。

『この二人を守りながらこの数だと流石にキツイクマー!』

「……確認しました、あの二人の左手には何も無かったのでおそらくティアンなのです」

「分かった、じゃあ助けに入るぞ……《ウインドカッター》!」

「オツケー!」

ミュウちゃんが発したその言葉で助ける方向へと舵を切ったお兄ちゃんが、即座に風の刃を放って群の外側にいた一匹の「ティールウルフ」の首を切り飛ばした。

……それと同時に私とミュウちゃんが「ティールウルフ」を蹴散ら

しながら突っ込んでいき、そのまま着ぐるみさんと子供二人——大体6、7歳ぐらいの男の子と女の子に合流した。

「ハイ！ その着ぐるみさん、お困りの様だけど手助けはいるかい？」

『手を貸してくれるならありがたいクマー！ 俺一人だとこの二人を守りながら狼を倒すのはちよつとキツかったクマー』

「それではさっさと倒しましょうか」

「子供については俺が守っておく……〈アースウォール〉」

『『『『G A A A A A A A!!』』』』』

そうして、私達と着ぐるみさんはお兄ちゃんが子供二人の周囲に魔法で作った土の壁を貼るのを見ながら、こちらに襲いかかって来た「テイルウルフ」の群れを相手にしていったのだった。

◇

「……よし！ これで大体片付いたね」

『ホント助かったクマー。ありがとうクマー』

あれからしばらくして、私達は周辺にいた「テイルウルフ」を全て倒し終えていた……まあ、私やお兄ちゃん、ミュウちゃんはさっきのパワーレベリングのお陰で〈ノズ森林〉の適正レベルを大きく上回っていたからね。

それに着ぐるみさんもミュウちゃんが言っていた通りかなり強く、左手に付けていた筒——どうやら大砲らしき物を片っ端から殴り飛ばして大暴れしていたので、特に危なくなる事は無く戦闘は終了したのだ。

「それで？ 着ぐるみさんこの子供達はこの森で何をしていたの？」

「……ああ、私はミカ・ウイステリア、〈マスター〉だよ」

「その兄で同じく〈マスター〉のレント・ウイステリアだ」

「同じく妹のミュウ・ウイステリアなのです」

『これはご丁寧にクマ。俺も〈マスター〉で名前はシュウ・スターリング。見ての通り愛らしいクマだクマ。……この二人は、俺が森で狩り

をしていたら【ティールウルフ】の群れに襲われていたので助けに入ったんだクマ』

成る程ね、着ぐるみさん——シユウさんも偶々この二人と遭遇しただけだと……それじゃあ、二人とも泣き止んでいるみたいだし話を聞いてみようか。

「二人共お名前は？ どうしてここにいたの？」

「……わたしはマリーって言います。……今日は、お母さんに渡すお花を取りに来て……」

「俺はケン。妹のマリーについて行ったんだけど、途中で綺麗な花があったから、ちよつと奥の方に行ったらいきなり【ティールウルフ】の群れが……」

……二人の話を纏めると、彼らのお母さんが今度誕生日を迎えるからお花をプレゼントしようと思つてこの近くにあるお花畑に来たんだけど、そこで森の奥に綺麗な花があったから取りに行ったらうっかり奥に行き過ぎてしまい、そこで偶々【ティールウルフ】の群れに遭遇して逃げ回っていたら更に森の奥まで入ってしまった、もうダメだと思つた時にシユウさんが助けに来てくれたとの事。

「まあ、お母さんの誕生日を祝おうとしたのは良い事だが、だからと言つて子供二人だけで外に出るのは危ないからやめた方がいいな」

『今回は俺が偶々近くにいたから良かったが、もう二人だけで外に出ちゃダメクマよ』

「今度からはちゃんと保護者同伴で行くべきなのです」

「ごめんなさい……」

「はい！ じゃあ後の事は親御さんに任せるとして、この二人はとりあえず騎士さんのところに預ける形でいいかな」

まあ、二人共反省しているみたいだし、後は迷子を送り届けるだけかな……と、思つたその時、私の直感がこちらに来る明確な危険を察知した。

「ツッ？？ みんな何か来るよ！ しかもかなりヤバイヤツ！」

「《殺気感知》に反応！ 森の奥からです！」

私とミユウちゃんの警告に、お兄ちゃんとシユウさんも即座に戦闘

態勢を取って森の奥に向き直った……直後、ヘノズ森林の奥から現れたのは全長3メートル程度、全身の毛が赤く染まって目を血走らせた一匹の熊だった。

……そして、その頭上にはその熊が非人型範疇生物である事を示す名前——【亜竜吸血熊】^{デミドラグブラッディベア}の文字があつた。

『GURURURURU……』

「亜竜級モンスター……！　なんでこんな所に……ッ」

『タイミング悪いクマ……』

「あ、あ……」

私達の前に現れた【亜竜吸血熊】は不気味な唸り声を上げながら、こちらを血走った目で観察していた……確かアイラさんの話では亜竜級モンスターは「下級職六人のパーティー、もしくはは上級職一人」に相当する戦力を持つんだつたよね。

……ケンくとマリーちゃんがいるこの状況で、私達に最も最善な選択肢は……。

「お兄ちゃん、ケンくとマリーちゃんを連れて王都へ逃げて。……多分、それが最善だと思う」

「お願いします兄様。……アレは私達でどうにかするのです」

「俺はそれでもいいが……シユウさんはどうします？」

『俺もそれでいいクマ。……ま、女子供を見捨てて逃げるなんてのは俺の性には合わないし、何より後味が悪いってヤツだからな』

助かるよシユウさん。見た目は完全にネタだけど凄くいい人だね

……だが、そんな会話をしている間にも【亜竜吸血熊】は少しづつこちらとの距離を縮めており……。

『それじゃあ二人共、俺が担いで王都まで走るから』GAOOOOOO
!!!』

お兄ちゃんが二人に注意を向けた隙をついてこちらに一気に突っ込んで来た……アイツ、こつちが隙を見せるまで行動を起こさないとか相当に抜け目がないね。

……でも残念、抜け目が無いのはウチのお兄ちゃんも同じなのさ。

「……《詠唱》終了《アースウォール》」

『ッ!?? G A A A A!??』

突撃して来た【亜竜吸血熊】は突如目の前に現れた土の壁——お兄ちゃんが二人に話しかけていると見せかけて《詠唱》しながら準備していた地属性防御魔法《アースウォール》——にぶつかってその足を止めた……ぶつかった土の壁自体は粉々に砕かれたものの、それで出来た隙にお兄ちゃんは二人を脇に抱えて全速力で王都に向かって走っていった。

……直ぐに砕かれた土を振り払ったヤツはその後を追おうとするが……。

「おっと、ここから先へは通行止めだよ」

「まさか、私達を無視してこの先に進めるとは思っていないですよね?」
『……この二人ちよつと男らしすぎて、俺が言うセリフが無いクマー……』

そこに【ギガス】を地面に突き刺した私と指を鳴らしながら不敵な笑みを浮かべるミユウちゃん、そしてなんか愚痴りながらも左手の大砲を構えるシユウさんが立ち塞がった……これであの二人の安全は確保出来たね。

『G U U U U……G U A A A A A A A A A A!!』

……そんな邪魔者である私達に対して【亜竜吸血熊】は一瞬だけ迷うような素振りを見せると、次の瞬間にはターゲットを変更したのか私達に向けてその豪腕に備わった爪を振りかざして襲い掛かってきた。

まず、三人の中では最もAGIが高いミカが先陣を切って【吸血熊】に突っ込んでいく……無論、まだ下級職一職目であるその速度は【ギガス】の第一形態としては高いステータス補正込みでも【吸血熊】の数分の一といった所だが。

だが、彼女は自分の体感で倍近い速度で迫る爪を直感だけでその軌道を先読みして相手が動き出すよりも早く回避行動に移る事で躲し、腕を通りに抜けた所で相手の後ろ足にアクティブスキル込みの【ギガス】を叩き込んだ。

そして、攻撃を終えたミカはそのまま離脱して相手が反撃として振るってきた腕を避けた……そのタイミングとほぼ同時に左手の大砲を構えたシユウ・スターリングが接近する。

『ツ！ GUAAAAA!!』

『チツ、コイツ結構鋭いクマ！』

だが、【吸血熊】野生のモンスターとして所有していた《危険察知》がその構えられた大砲に反応したため、即座に【吸血熊】は撃たせないためにシユウへと接近してその豪腕を振るった。

シユウは【壊屋^{クラッシュヤ}】というSTR特化のジョブに付いている所為で他の二人よりも更にAGIが低かったが、こちらの様子を探る様な行動から相手を相当用心深い性格だと事前に読んでおり。事前にこちらが撃つより早く反撃してくる事も想定して近づき過ぎない様にしていた事で、高いSTRを使い無理矢理地面を蹴ってバックステップする事で離脱する事に成功していた。

……更に彼は自分の《エンブリオ》が危険視されている事を逆に利用して、【吸血熊】に隙を作らせて三人目であるミュウがその死角となる背後から接近出来る様にもしていたのだ。

「せいっ！ ……って、やっぱり効きませんか」

『GAAAAA!!』

接近したミュウは【吸血熊】の後ろ足に向けて正拳突きを放ったが、単純に相手のENDが高すぎてダメージにはならなかった……^{グラップラー}【格闘家】の特性でステータスも余り高くない、アクティブスキルも強力なものはまだ覚えていない自分では「こうなるのではないか」と

半ば分かっていたとはいえその結果に内心残念に思っていた。

まあ、だからこそ《危険察知》をすり抜けて接近出来たのだし、隙を作る役目は果たせたと判断した彼女は、その場を素早く離脱し……直後、煩わしいモノを排除するために「吸血熊」は彼女がいた場所に爪を振るわれが、既に間合いの外に離脱した彼女には当たらずその隙を突いて残りの二人が態勢を立て直して再び攻撃に移る。

……と、この様に各々が持つ規格外の才能リアルスキルを活かして、この三人はステータスで圧倒的に上回る「吸血熊」と互角に渡り合っているのだが……。

「……さて、このまま戦い続けると相手の攻撃を躲しきれなくなつて普通に負けますね。どうしましょう?」

「ステータスに差があり過ぎて、アクティブスキル込みでもまともに攻撃が入らないからなあ。……シウさん、何かドカンと一発デカイのとか無いの?」

『一応、俺の《エンブリオ》には1日1発高威力の砲撃を撃つスキルがあるが……今の俺のステータスじゃ急所にも撃ち込まないと致命傷にはならないだろうし、何より完全に俺のスキルを警戒されている状態で当てるのは厳しいクマ』

そう、「吸血熊」のSTRから繰り出される攻撃は直撃すれば彼等三人共一撃で戦闘不能になる威力があり、それが自分達よりも数倍早く繰り出されるといふ状況は彼等をしても長時間戦い続ける事は非常に困難であった。

更に彼等の攻撃は「吸血熊」のENDとHPに阻まれてまともなダメージが通らず、唯一ダメージを与えられる可能性もあるシウの《エンブリオ》「戦神砲 バルドル」の《ストレンジス・キャノン》——第一形態では自身のSTRの五倍の威力がある砲撃を撃つスキル——も、現在のシウのステータスでは1000をギリギリ超える威力にしかならず、普通に当てても致命傷にはならないのである。

……まあ、警戒されている事を利用してブラフに使う事で相手の動きを誘導して、この近郊状態を維持している事も軽々しく撃てない理由になっているが。

『GOAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!』

更に悪い事に、最初はステータスで劣る相手にいい様にされて所為で怒って攻撃が雑になっていた【吸血熊】も、戦っている相手がこちらに対してまともなダメージを与えられないと分かると、怒りが収まって攻撃の精度が元に戻り始めたのだ。

……当然、今まで辛うじて相手の攻撃を凌ぎ続けてきた彼等にとつては、そんな僅かな差でも致命傷に成りかねないのだが。

「ええいつ！ こつちにまともな手が無い事がバレましたか!?!?」

『向こうのAGIが高過ぎてよっぱど接近しないと急所には当てられんクマー！ ……後、着ぐるみ着てるから動き辛いクマー！』

「じゃあ脱げばいいんじゃないかな（名案）……まあ、勝算が無いわけじゃないんだけど……」

そう言ったミカは一瞬だけ心配そうな瞳でミュウの方を見た……その視線を受けた彼女は姉の言う『勝算』とは、自分の未だに孵化していないへエンブリオの事であると思いついた。

……それと同時に、自分が今まで分かっていながら目を逸らし続けていたへエンブリオが孵化しない理由に向き合う事になった。

（……ええ、本当は私のへエンブリオが何故中々孵化しないのかぐらいは分かっていたのです。……ただ、私はこの期に及んで自分の『戦いの才能』を活かすか殺すかで悩んでいたから、へエンブリオも自分の方向性を決められなかっただけなのです）

……彼女ミュウ・ウイステリア——加藤^{かとう}祐美^{ゆみ}はかつてあったとある事件の所為で、自分が生まれつき有する『戦いに関する事に対する規格外に高い才能』に対して強い嫌悪感を持つてしまっているのだ。

それを克服する事と自分の才能を制御する為に格闘技の道場にも通ったりしていたが、未だに嫌悪感を抱いたままである。

（師匠には『自分の才能に振り回されない程度の技術は教えたから、後は自分でどうするか決めろ』と言われてましたし、兄様や姉様は自分の才能を殺す道を選んでも責めはしないでしょうが……）

そこまで考えてから、彼女は自分の左手を見て自分の覚悟を叫んだ。

「そんな事で、あの二人の足を引っ張る事だけは絶対に嫌なのです！
……だから、私の才能を活かすへエンブリオ」としてきつさと目覚めなさい！」

『やれやれ、僕は中々強引なへマスターに引き当てられたみたいだね。
……まあ、それがキミの望みなら是非もないさ』

その覚悟と自分が二人に置いていかれるかもしれないと言う「危機感」によって、彼女の左手にあった可能性の卵はへマスターの願いから自分のあるべき姿と力を定義して外界へと出力した。

「おはようマスター。……僕はTYPEメイデン with ガードナー
【模倣乙女 ミメーシス】だよ。よろしくね」

「メイデン……？」

ミュウは聞いた事の無いカテゴリー名に首を傾げながら、目の前に現れた「彼女」の姿をまじまじと見つめた……その姿は桃色の髪をした今の自分と同じぐらいの人型の少女であったのだ。

……そうしてやや困惑していたミュウに対して、ミメーシスはその手を差し出してこう告げた。

『GUUUUU……』

「その辺りの事を説明したいのは山々だけど、今はのんびりしている時間は無いからね。……アイツが様子見している間に説明を終わらせたいから、直ぐにこの手を取って欲しい」

「分かったのです」

今は戦闘中なので思った疑問は後回しにしようと思ったミュウは、直ぐ様言われた通りミメーシスの手を取った……まあ、幸いにも【吸血熊】は「目の前でいきなり人間が増える」という今まで経験した事の無い現象に対して、一旦距離を取って様子を見ていたので妨害される事は無かったが。

「じゃあ行くこうか……」
《フュージョンアップ
憑依融合》

その言葉と共にミメーシスの姿は桃色の粒子となって解けていき、そして即座にその粒子はミュウの身体と重なって融合した……その結果、ミュウの髪と瞳の色は桃色に染まっていた。

「これは……！」

『これが僕の第一スキル《憑依融合》……僕とマスターを融合させてそのステータスを足し合わせるスキルだよ。……僕は融合型のガードナーだからこれが基本状態かな』

故にこの《憑依融合》は使用条件として『両手武器が非装備状態である事』や『融合時に《エンブリオ》と《マスター》が接触状態である事』などの条件はあるが、維持コストやクールタイムなどが一切存在しないのである。

……最も、普通のガードナーであれば複数の制限付きの切り札として存在する融合スキルを常時使用するにあたってのデメリットは当然あり、まずガードナー形態時の【ミメーシス】のステータスはMPこそ5000はあるもののHP・SPは100程度で、それ以外のステータスはオール桁という有様である。また更なるデメリットとしてマスターのステータス補正もオールゼロになっている為、このスキルでのステータス強化は殆ど期待出来ない様になっているのだ。

「成る程、つまり融合してもステータスはほぼ伸びないと……後、変身バンクとかは無いですかね？」

『流石にそれは無いかなあ。……まあ、メインはもう一つのスキルの方だからステータス面の問題は特に無いんだけど……おっと、どうやら来るみたいだよ』

『GUUUUUUU!!!』

そこでいい加減に痺れを切らしたのか、様子見をしていた【吸血熊】が再び戦闘行動を開始した……それに対してミカとシユウが迎え撃つが、先程までの焼き直しの様に防戦一方になっていき、そのまま【吸血熊】がミユウに向けて突撃する事を許してしまった。

……だが、彼等はミユウがもう一つのスキルを確認するだけの時間は見事に稼いでいたが。

『GUUUUUUU!!!』

「分かりました……では、もう一つのスキルの発動をお願いするので
す」

『了解マスター……アビリティ・ミラーリング《天威模倣》』

向かって来る【吸血熊】に対して、ミユウはミメーシスにもう一つ

のスキルを発動させながら表情一つ変えず冷静な目でそれを見つめて……彼我の距離が更に縮まった瞬間、相手と全く同じ速度で間合いを詰めて懐に潜り込みその腹に正拳突きを放った。

……そして、殴られた【吸血熊】はそのまま後ろに吹き飛んでいったのだ。

『G A A A A ! ? ?』

「ふむ、増加したA G Iに少し振り回されましたか。やや間合いがズレました」

『まあ、今のマスターのA G Iは1147、S T Rは2085……ヤツと同じだからね』

そう【模倣乙女 ミメーシス】の第二スキル《天威模倣》の効果は『敵対象一体を指定してそのS T R・E N D・A G I・D E X・L U Cの内高いものから二つまでのステータス数値をマスターのそれへ同期させるスキル』である……【吸血熊】は前述の五つのステータスの内S T RとA G Iが高かったので、そいつを対象にスキルを使ったミュウのS T RとA G Iは同じ値になっているのだ。

……だが、このスキルはコストとして発動時とそこから1分間経過する毎に同期させた最も高いステータス——今はS T Rの2085分の数値だけM Pを支払わなければならないから、今の彼女達では二分程度しか維持出来ないが……。

『それに、今の僕じゃE N Dまでは同期出来ないから耐久力は変わらないよ』

「問題無いですね、当たらなければどうという事は有りませんから……それにステータスさえ互角であれば、アレを倒すのに一分も掛かりませんよ」

『G A A A A ! ? ? G U A A A A ! ? ?』

その言葉通りにミュウは即座に【亜竜吸血熊】との距離を詰めて懐に潜り込むと、近過ぎる事と体格差の所為で精度が落ちた反撃を全て躲しながら拳と蹴りの連打を見舞いそのH Pをあつという間に削り取っていった。

……T Y P Eメイデンの特徴は強者打破系ジャイアントキリングの能力になりやすい

事であり、この【ミメーシス】の場合は『能力さえ同じであればどんな相手でも打倒出来る』というミュウ・ウイステリアの戦闘センスを前提とした理論となっている。

「では、そろそろ終わらせましょうか」

『G U A A ! ? ? G A A A A A A A A A ! ? ? 』

そう言ったミュウはこちらを噛み砕こうとした【吸血熊】牙を躲してその脇を擦り抜け、そのまま後ろ脚の膝部分に全力の蹴りを打ち込んでへし折った。そして、片足が【骨折】して態勢が崩れた相手の腕を掴み、その重心を崩しながら強化されているSTRを使って投げ飛ばしたのだ。

……投げ飛ばされた【吸血熊】は仰向けのまま地面に叩きつけられ、足が折れている所為で中々立ち上がれず……。

「私を忘れて貰っちゃ困るよ。《ハードストライク》！」

『! ? ? G A A A A A A A A A A A A A A A A ! ! ! 』

その隙に接近して来たミカがアクティブスキル付きの【ギガス】を折れた後ろ脚に向けて振り下ろした……当然、そんな事をされた【吸血熊】は痛みから闇雲に暴れ回ったが、それよりも早くミカはその場を離脱していた。

追い詰められた【吸血熊】はどうにかしてここから離れようと両手も使って無理矢理立ち上がろうとし……直後、そのこめかみに金属製の大砲が突きつけられた。

『ここまで丁寧に隙を作ってくれたなら、今の俺でも接近するぐらいは出来るクマ』

『G A ! A A …… ! ? ? 』

それは、ずつと自分の切り札を撃ち込む隙を伺っていたシユウだった……二人が自分の為に隙を作ろうとしている事に気が付いていた彼は、相手の両腕が封じられたこの絶好の機会を逃す事無く接近したのである。

『終わりだ《ストレングス・キャノン》！』

『G A A A A A a a a a a …… 』

そうして、動けない【垂竜吸血熊】のこめかみに突きつけられた大

砲から放たれたエネルギー弾は、その頭部を跡形もなく吹き飛ばしたのだった。

『……うん、スキルの効果が切れたから間違い無く倒せたよ』

「宣言通り、全員で挑めば一分も掛からず勝利出来たのです」

……こうして、彼等はデンドロ初日に遭遇したボスモンスター、【亜竜吸血熊】を撃破する事に成功したのだった。

初日の終わり

□王都アルテア 【魔術師^{メイジ}】 レント・ウイステリア

あれからケンくん&Maryちゃんを担いだまま全力疾走で王都に向かっていた俺は、幸いな事に途中モンスターと遭遇する事も無く無事に王都北門に到着した。

……その後、北門の駐屯所に居た騎士さん達にへノズ森林で起きた事情を説明した上で二人を預けて親御さんの元に送り届けて貰えるように頼んでおき、俺はへノズ森林にいる三人の下へ戻ろうとしたのだが……。

「……行かない方がいいだろう。……【デミドラグブラッドレイベア亜竜吸血熊】相手では、その三人はおそらくもう……」

「あ、いえ、三人ともへマスターなので死にはしないかと……」

「少なくともそこだけは幸いだったな。……何、亜竜級の『ブラツデイ』系モンスターが王都の近くにいるのは危険だから、直ぐに討伐令が下されるだろう」

「は、はあ……」

なんか、悲壮な表情をした騎士さん達にそんな事を言われたりして止められた……でも、あの三人なら割と大丈夫な気がするんだけどなあ。うちの妹二人は規格外っぷりは言わずもがな、それにあのシユウ・スターリングという人も動きのキレや雰囲気から、俺の見立てだと多分『規格外』側の人間だろうし。

……とりあえず、騎士さん達がへノズ森林への調査人員の派遣やら各方面への報告やらで忙しくなって居たので、邪魔にならないようにこっそりとお暇する事にした。

「……まあ、改めて考えてみるとティアンにとっては『仲間を死地で囿にして自分だけ逃げてきた』的な状況だから、あんな悲壮な感じになるのも無理ないか。……さて、じゃあ迎えに行く「お〜い！ お兄ちゃん！」お？」

そんな事を考えつつ俺は北門を出て三人の様子を見に行こうとしたらちょうどその時、向こうの方から聞き覚えのある呼び名が聞こえて

来た……そちらを見ると予想通りミカとミュウちゃんと熊の着ぐるみ——シユウ・スターリングさんがこちらに歩いて来る所だった。

……まあ、ある程度予想はしていたが、本当に三人だけで【亜竜吸血熊】を倒してしまったらしい。

「よう、お疲れ様。……どうやら無事に倒せたみたいだな」

「うん、どうにかね。……あ、お兄ちゃんあの二人は？」

「北門の詰所に居た騎士さん達に預けておいたぞ。後で親御さんの所に送り届けてくれるらしい」

『それは良かったクマ。誰も犠牲にならなくて万々歳だクマ』

「そうですね」

……ん？ よく見たらミュウちゃんの髪と目の色が何故かピンク色に変わっているんだが。ちよつと聞いてみるか。

「ミュウちゃん、いつの間に髪と目の色を変えたんだ？ イメチェン？」

「あ、そうでしたね。……ミメーシス、もう街の中なので融合を解いても良いですよ」

『了解、マスター』

ミュウちゃんがそう言った直後、彼女の身体から光の粒子の様な物が溢れ出した……そして、その粒子は彼女の直ぐ隣に集合するとそのまま一人の少女の姿へと変わった。

……その外見は桃色の目と髪をした短髪で中学生ぐらいの少女で、服装は半袖でショートパンツのボーイッシュな感じだった。

「お初にお目にかかるね。僕はミュウ・ウイステリアのへエンブリオ、TYPEメイデン with ガードナー【模倣乙女 ミメーシス】だよ。以後よろしくね、お兄さん」

「これは……丁寧にも。ミュウちゃんの兄のレント・ウイステリアです」

その少女——ミメーシスはお辞儀をしながら挨拶をして来たので、こちらもつい釣られて頭を下げて丁寧な挨拶をしてしまった……しかし、少女型のへエンブリオなんてのもあるのか。本当にへエンブリオってのは多種多様だな。

「……だが、メイデンなんてカテゴリーは聞いた事がないな」

『へエンブリオ』には既存五つの他にもレアカテゴリーがあるって話だから、多分それじゃないクマ?』

「このデンドロもまだ始まったばかりだからねー。まだ明らかになっ
ていない事が沢山あるんでしようよ」

……確かに、本当に情報が多いよなあ、このへInfinite
Dendrogramは。貴方だけの可能性”を売りにしてるだ
けあってオンリーワン要素も多いみたいだし。

「つまり、私のミメはレアなのです!」

「まあ、カテゴリーとしては希少な方だと思うけど……って、ミメって
のは僕の事?」

「はい、毎回【ミメーシス】と呼ぶのは面倒なので愛称を付けてみまし
た。……ダメでしょうか?」

「いや、マスターがそう呼びたいのなら構わないさ。……それじゃあ、
僕もマスターの事はミュウと呼ばせて貰おうかな?」

「勿論なのです!」

まあ、二人は普通に仲が良さそうで何よりだがな。実に微笑ましい
光景だ。

「あ、そうそうお兄ちゃん。あの【亜竜吸血熊】を倒した時に【亜竜吸
血熊の宝櫃】ってのを手に入れたんだけど、中に入っていたのは【亜
竜吸血熊のコート・ネイティブ】と【エメンテリウム】って言うアイ
テムだったんだ」

『それでクマ、どうもコートの方は合計レベル150以上じゃないと
装備出来ないし【エメンテリウム】の方は多分換金アイテムっぽいカ
ラ、二つとも売ってから得たお金を山分けにしようって話になったク
マ』

「? ……まあ、お前達が倒したんだし好きにすれば良いんじゃない
か? ……ああ、騎士さん達がへノズ森林の調査をするって話して
たし、一応【亜竜吸血熊】を倒した事を伝えておいた方がいいかな」
そういう訳で俺達は一度駐屯所で諸々の事を報告してから、ドロツ
プアイテムを売りに行く事にしたのだった……その際、騎士さん達に

『下級職一職目三人で【亜竜吸血熊】を倒した』と報告したら驚愕されたり、ケンくんとマリーちゃんを迎えに来た彼らのお母さんに感謝されたりしたが、概ね何も問題無く用事を済ませる事が出来た。



さて、そんな訳で俺達はドロップアイテムを換金する為に、再びヘマリーの雑貨屋へとやって来ていた……俺達がこの王都で知っているお店はここしか無いし、シユウさんも着ぐるみ屋ぐらいしか知らないそうなのでここになったのだ。

「へへ、ついさっき初めて王都の外に行ったのに、もう亜竜級モンスターを倒して来るなんて流石は伝説のヘマスターねへ。……で、お値段の方だけど【エメンテリウム】は2万リル、【亜竜吸血熊】のコート・ネイティブの方は【亜竜吸血熊】自体が結構なレアモンスターだからちよつとお高めで25万リルになるけど、それで良いかしら？」

「おお！ 流石はボスモンスター、ドロップアイテムもめっちゃ高く売れるね！」

「苦労して倒した甲斐があつたのです！」

「よかつたね、ミュウ」

『よつしやあ！ これで貧乏生活ともおさらばクマー！』

「……えーつと、じゃあその値段でお願いします」

そんなこんなで歓喜している他のメンバーの横で27万リルという大金をマリーさんから受け取った俺は、それを歓喜している四人に渡して適当に分配する様に言ったのだが……。

「え？ いや、お兄ちゃんにも当然お金渡すよ？」

「いやいや、俺は討伐メンバーに加わっていないし……」

『でも、レント君がああ二人を連れて逃げていなければおそらく勝てなかつたクマ。だから遠慮する必要は無いクマよ』

「そうです！ これはみんなで掴んだ勝利の報酬なのです！ ……その方が綺麗に纏まりますし」

「諦めて受け取った方が良いと思うよ、お兄さん」

そのような問答があった後、そこまで言うならと俺も報酬の分配に加わる事になった……まあ、他のメンバーと同じ額なのは流石にどうかと思っただので、話し合いの末に俺は3万リルだけ受け取り、残りの24万を三人で8万リルづつ分ける感じになった。

それから、俺達とシユウさんは店を出てから各々の別の用事があるという事で分かれる事になった……すっかり馴染んでいたから忘れかけていたが、シユウさんとはさつきへノズ森林で会ったばかりだったな。

『三人共、今回は本当に助かったクマ。……お陰で子供二人に怪我させずに済んだし、ボスモンスターも倒せて俺の残金20リルという大ピンチなおサイフも救われたクマ。本当にありがとうクマ』

「こちらこそ、シユウさんが居なかったら【吸血熊】を倒すのは難しかったからね。……ていうか、残金20リルって一体何に使ったのさ？」

『この着ぐるみのお値段が4980リルだったクマ』よんきゅっぱ

「初期費用の殆どを着ぐるみに突っ込んだのですか……。そんなに着ぐるみが好きなのです？」

ミユウちゃんが発したその質問に対してシユウさんの雰囲気が一気に暗い物が変わっていった。

『……それは聞くも涙、語るも涙の話クマ』

「別に言いたく無いなら良いのですが……」

『このゲームの開始前には、自分のアバターを設定するキャラクタークリエイトがあるクマ』

「結局話すんだ……」

『その時、俺は一から作るのが面倒だから現実の自分の姿をベースにして設定しようとしたクマ』

「俺もそうしましたね」

『……その時間違って、うっかり何もカスタムせずに決定したクマ』

「」「うわぁ……」」

……それは着ぐるみでプレイを始めても仕方がないかな。このゲームの現実視は本当にリアルと全く変わらないし、そんなところで

素顔プレイは難易度が高すぎるし。

「しかし、後からアバターの設定を変えられなかったの？」

『……俺を担当した管理AIが面白がって変えさせてくれなかったクマ。……その上、初期装備カタログで顔を隠せる装備を必死に探している間や、各国家の空中映像から全身を隠せる装備を売っている店を探している時にもニヤニヤしながら見てきたし……おのれ！　ハンプティ！』

……どうやら、管理AIにも当たりハズレがあるらしい。俺を担当したダツチエスさんは陰鬱な雰囲気は無愛想ではあったが、説明とかはちゃんとしてくれたから当たりの部類だったんだなあ……。

「……て事は、最初の時にフードで顔を隠しながら着ぐるみを求めて全力疾走していたへマスター〜って……」

『それは俺クマ。……あの時はめっちゃ焦ってたからろくに謝れもせずに済まなかったクマ』

「それは別に良いけど……あ、そうだ！　せっかくだからフレンド登録しようよ！　一緒に戦った中だしさー！」

『オツケー、構わないクマよ』

そんなミカの提案で俺達とシュウさんはお互いをフレンドに登録した……ついでに俺達三人も互いに登録しておいた。ログインしてからずっと一緒だったからすっかり忘れてたな。

『それじゃ俺はそろそろログアウトするクマ。そんでちよつと弟をデンドロに誘ってみるクマ。……ミカちゃん達を見てたら兄弟でデンドロをプレイするのも悪くないと思ったからな』

「うん、じゃあね。弟さんもいつか紹介してね」

そう言っつてシュウさんはログアウトして行った……と、横を見たらミュウちゃんが何か考え込んでいる様な仕草を取っているのに気がついた。

「どうしたミュウちゃん。何か気になる事でもあったのか？」

「いえ、大した事では無いのですが……シュウ・スターリング……スターリング……^{むくどり}驚鳥？　……でしよつかね。あの動きは以前見たアソクラの試合のモノと同じでしたし」

「……あー、ひよっとして、シユウさんのリアルに何か心当たりがあるの?」

ミカがやや気まずそうにミュウちゃんに聞くと、彼女は頷いて周りを気にしつつ声を落としながら話し始めた。

「……多分、昔『アンリミテッドパンクラチオン』に出場していた椋鳥修一選手で間違いないかと。……師範が以前『私の知り合いの門下生がアホな勝ち方している試合があるから見ようぜー』と言って見せてくれた試合に出っていたので印象に残っているのです。顔はフードでよく見えませんでした。着ぐるみ越してもあの体術で確信しました」

「ああ、確か『航海戦隊クルーズファイブ』のクルーズゴールド役をしていた子役の人でもあったかな。……まあ、ネットゲーでリアルの詮索はマナー違反だから気付かなかったフリでいいだろう」

「そうだねー。……流石にこんなあつさりバレたとか気まずいし」
「僕も気をつけるよ」

そういう事で、この話は無かった事になった……しかし、椋鳥と聞くと昔出会ったとある女性を思い出すが、まあ流石に偶然だろう。

「それで? これからどうしようか?」

「とりあえず【ティールウルフ】討伐のクエストはさっきの戦闘で達成したし、一旦冒険者ギルドに行って報酬を受け取ろうか。……そして俺達もログアウトだな。もうこっちに来て六時間は経ってるし、三倍時間だとしても向こうでは二時間経っているはずだ。……ログインしたのが四時ごろだったから、そろそろ辞めないと夕食の準備が間に合わん」

「じゃあ、そうしましょうか。……ところで、三倍時間というのは本当なんですよね?」

「……そう言えば、ゲームに集中し過ぎてその確認は忘れたいたな。」

「……じゃあ、さっさと用事を済ませてログアウトしようか」

「……そうだな」

「……念の為にですな」

そうして俺達は急いで冒険者ギルドに行つて報酬を受け取ると、早々にログアウトして行つた……尚、ログアウトして時計を確認したところ六時ごろだったので、ちゃんとデンドロ内では三倍時間になっていた事は記しておく。

◇◇◇

□??へノズ森林???

そこはへノズ森林の一角、三人と【亜竜吸血熊】との戦いがあつた直ぐ近くの森の中……そこには卵に似た楕円の薄い膜に覆われた中に人間の少女がいるという奇妙な存在がいた。

……それは見ようによつては御簾の中の貴人、あるいはヴェールをかけた花嫁にも見えるかもしれない。

「シユウがログインしてからの行動が面白かつたから観察していたけれど、やはり亜竜級程度ではテストにもならなかつたわね。……まあ、まだ始まつたばかりだし、もう少し経つたら相応しい相手を用意してから改めてテストをすれば良いわね」

薄い笑みを浮かべながらそんな話を話しているモノの名前はハンプティ、へ Infinite Dendrogramを管理する13体のAIの一人であり主にへエンブリオの管理を担当している。存在である。

……彼女は自分がチュートリアルを担当した時に目を付けたシユウ・スターリングの行動を観察していたのだ。

「でも、へマスターが増えてくれば私の仕事も増えるし、そうなればこちらへの干渉もし難くなるでしょうし……そうね、こちらの時間で1カ月後ぐらいがちょうどいいかしらね。……ところで、貴女達も誰かを観察していたのかしら？」

そう言ったハンプティが後ろを振り向くと、そこには頭に猫を乗せた男性とカジュアルな格好をした女性の姿があつた……彼等はハンプティの同僚である管理AIであり、男性の方はチェシャ、女性の方はアリスと言つた。

「まあそうね。ちよつと気になる子が貴女のお気に入りと一緒にボスモンスターと戦っていたから様子を見てたのよ」

「こつちも同じ」

『私が彼等の視覚をモニターにして様子を見ていたわ』

「……チエシヤやアリスならともかく貴女がそういう事をするのは珍しいわね、ダツチエス。あの三兄妹と何かあったのかしら？」

姿を見せずに声だけを発したのはグラフィック担当の管理A Iダツチエスであった……性格的にこちらへの干渉が多いチエシヤやアリスだけでなく、(予定される仕事量的に)こちらへの干渉を余り行わないダツチエスも観察に加わっていた事が気になったハンプティは彼らに理由を尋ねてみた。

……その問いに対して、彼等三人も特に隠す事でも無いので普通に事情を話しす事にした。

「彼等三人は、僕達がそれぞれチュートリアルを担当したんだけど」

「その時、三人とも真つ先に『このへInfinite Dendrogram』は本当にただのゲームなのか?』と尋ねて来たのよね」

『それで少し様子を見ていたのよ』

「へえ……でも、しようがないんじゃないかしら。このへInfinite Dendrogramは見方によつてはとても怪しいゲームだし、その辺りを調べようとする人間が出る事も想定済みではあるでしょう?」

実際、明らかにオーバーテクノロジーであるへInfinite

Dendrogramに対して探りを入れてくる人間が出て来る事は彼等管理A I達も想定しており、それらに対しては違法な干渉は容赦無く潰して、正規ルートで来るならば1プレイヤーとして歓迎するという結論が既に出ていた。

「それはそうなんだけどね。……僕が担当したミカちゃんにそう思った理由を聞いたんだけど『広告を見た時にそんな気がしたんだよ。要するに勘』って言われてね」

「他の二人は彼女に言われていたのでそう聞いたと言っていたわね。……ただの勘と言われればそれまでだけど、そういうセンススキルも

ありえるし」

『初日でまだ仕事量が少ない事もあって、少し様子を見る事にしたのよ』

「成る程ね。……まあ、正規のルートで遊んでいるんだっいたら良いんじゃないかしら。それにそういうセンススキルを持つているなら〈超級〉に至る可能性もあるでしょうし、むしろ歓迎するべきじゃない？」

そう言う形でこの話は締めくくられた……そもそも彼等にとつてはこの「世界」の真実にたどり着く〈マスター〉が現れる事も想定の内であり、正規のルートでゲームをプレイする限りは歓迎するというスタンスである。

「まあ、僕は好きな子に嫌がらせするレベルの干渉とかはせずに普通に見守るだけだけどー」

「何か言ったかしら。……それに、あの「亜竜吸血熊」が彼等を襲ったのは只の偶然よ。……まあ、アレがあそこにいた事に関しては私達に遠因があるとも言えるけど」

「ああ、確かクイーンとジャバウオックが提案した「スタートダッシュキャンペーン」だったかしら。……〈マスター〉の成長を促すために初期開始地点に弱いモンスターを追加するイベントだったわね」
『その影響で初期開始地点周辺の生態系が少し乱れているみたいね。……まあ、彼等が行ったもう一つのイベントの影響もあるようだけど』

そんな会話を最後に彼等の姿はその場からかき消え、それぞれの職務へと戻って行った……彼等が語った「イベント」が明らかになるのはもう少し先の話になる。

掲示板回・初日編

□??地球 とある掲示板



【情報】へInfinite Dendrogram〈情報スレ【求む！】

1：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15（水）

このスレは本日発売のVRMOへInfinite Dendrogramの情報について語るスレです

このゲームは情報が少なすぎるのでドンドン情報を書き込んで行きましょう！

荒らしはスルー推奨

.

.

.

257：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15（水）

それで？ 結局デンドロって本物なの？

258：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15（水）

本物だぞ！ 現実視だと本当にリアルと変わらないし

……最も、俺はログイン直後走り回ったら狼に食い殺されたから詳しくは分かんが

259：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15（水）

俺は砂の中から出て来たムカデっぽいヤツに丸呑みにされた
それでデスペナが24時間のログイン制限だと知った

260：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15（水）
グランバロアだとログイン場所が船上だからモンスターとは出会
わなかったな

……まあ、道に迷って8時間ぐらい船の上を彷徨ったが

261：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15（水）

>>258

はーつつかえ

262：名無しのへマスター「sage」：2043/7/15（水）
ここがデンドロの情報を書き込む掲示板でいいのか？

263：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15（水）
おっ、新規さん？ どうぞどうぞ

264：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15（水）
歓迎しよう！ 盛大になあ！

265：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15（水）
正直言つて情報が少なすぎるし、何か書き込んでくれるなら大歓迎
だぞ

……他の連中はログイン早々モンスターにやられたヤツらばかり
でなあ

266：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15（水）
そうそう（小鬼にリンチされた）

267：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15（水）

遠慮無く書き込むと良い（熊に食われた）

268：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15（水）

>>266>>267

お前らなあ……

269：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15（水）

>>262

ん？ よく見るとコテハンの所が『名無しのへマスター』ってなってるんだけど、へマスターって何だ？

270：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15（水）

あ、ホントだ。何故に？

271：名無しのへマスター「sage」：2043/7/15（水）

じゃあ、そこから書き込んで行こうか。まずへマスターというのはデンドロ内でのプレイヤーの呼び名だ

あちらではへマスターはへエンブリオを持つ者の事であり、頻繁に別の世界へと飛ばされてしまう制約を背負っていて、その時間はまちまちで消えた場所に戻る事もあるが、セーブポイントという特殊な場所に飛ばされている事もある

そして、死亡した場合でもへエンブリオの力でその身を別の世界に飛ばして生き延びる事が出来るが、その場合は最低三日は戻って来られない

……という感じでプレイヤーのログアウトやデスペナルティを設定に落とし込んでいる感じみたいだな

272：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15（水）

早っ！　そして情報多っ！

273：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15（水）

>>>271

はえー、デンドロだとプレイヤーはそういう設定なのか

274：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15（水）

これはちゃんとデンドロプレイ出来てる人っぽいから期待

275：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15（水）

そう言えばへエンブリオってなんぞ？ 広告でやってたけど詳しく聞きたい

へマスターへニキ教えてくなしやす！

276：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15（水）

そう言えば、船の上であったNPCが『伝説のへマスター』とか何とか言ってた様な……

277：名無しのへマスターへ「sage」：2043/7/15（水）

>>>275

オツケー、じゃあ次はへエンブリオの説明なー

へエンブリオはデンドロの最大の特徴でありへマスターのパーソナルによって千変万化するオンリーワンの固有システム

チュートリアル時左手に全てのプレイヤーに卵型に第ゼロ形態へエンブリオが移植され、その後ゲームプレイ中にいくらか時間が経つと孵化してそれぞれ違う第一形態になる（孵化時間は個人差あり）

千差万別だがカテゴリはあり

プレイヤーが装備する武器や防具、道具型のTYPEアームズ

プレイヤーを護衛するモンスター型のTYPEガードナー

プレイヤーが搭乗する乗り物型のTYPEチャリオツ

プレイヤーが居住できる建物型のTYPEキャッスル

プレイヤーが展開する結界型のTYPEテリトリー

があるがそれ以外のレアカテゴリもある様で、少女の姿を取るTYPEメイデンが確認されている（正確にはTYPEメイデンwith

h○○の様に他のカテゴリとの複合になっている模様)

……正直、まだ分からない事が多いシステム

278：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15 (水)
わー、また一気に来たぜ。凄い情報量だ

279：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15 (水)
あーここまではチュートリアルで言われた……ってメイデン!!?
レアカテゴリとかあんの!!?

280：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15 (水)
>>>277
へマスターへニキ情報ありがとナスー。なんか面白そーだなー

281：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15 (水)
既存情報かと思っただらさらつと新規情報が混ざってた件

282：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15 (水)
そこに痺れる憧れる！

283：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15 (水)
実際、ちゃんとゲームをプレイして情報収集していた人っぽいし期待大だな

……ログイン直後モンスターに食われてデスペナ食らった俺と違って

284：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15 (水)
>>>238

ていうか、デスペナがめっちゃ多いんだがそんなに過酷なゲームなのかデンドロ

ちゃんとプレイしたへマスターへニキ情報プリーズ！

285：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15（水）
情報収集とかせずに外を駆け回ったのが原因っぽいが……

286：名無しのへマスター「sage」：2043/7/15（水）
〓〓284

それは多分『ジョブ』に就かずにモンスターと戦ったのが原因と思われる。じゃあついでにジョブの説明いこかー

基本的にデンドロはジョブレベル制のゲームで、ジョブに就かなければレベルは上がりずステータスも伸びない仕様です

ジョブには下級職と上級職があり、へマスターの場合下級職6つ上級職2つまで就くことが出来る

下級職はレベル上限が50で転職条件が簡単、覚えるスキルも基本的なものでステータス上昇値も低い

上級職はレベル上限が100で転職条件が難しく、覚えるスキルも専門的な上級者向けのものでステータス上昇値も高い

種類についてはめっちゃ沢山あり数は千を優に超える模様

転職するには各国の街にあるジョブクリスタルを使う必要がある、主に各ジョブのギルドにあるからログインしたらそこのティアンにまず話を聞こう！

……ちなみにレベル上限無し転職難易度激高、覚えるスキルも超強力でステータス上昇値も超高い先着一名だけがつけるへ超級職へなんてのもあるらしいが詳しくは不明

287：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15（水）

……長文回答がすぐに上がってくるのにも驚かなくなって来たな

288：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15（水）

〓〓286

へマスターへニキ感謝！ ジョブレベル制ゲームでジョブに就かずモンスターと戦うんじゃないやそれは死ぬわ

……後、やっぱり最後にとんでもない情報が出てきた件について

289：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15（水）
……そんな事チュートリアルでは言われなかったんですが……

290：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15（水）
チュートリアルに頼るな！ 情報は己の足で探すんだ！（現在デ
スペナ中）

291：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15（水）
>>290

探した結果がそれなんですなー

292：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15（水）
じゃあログインしたらまず街に入ってギルドに行くのが鉄板なの
かね……とところでティアンって誰？

293：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15（水）
また知らないワードが出てきたー！ デンドロ情報多いぞ！

294：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15（水）
へマスターへニキ情報早よ

295：名無しのへマスターへ「sage」：2043/7/15（水）
ティアンはデンドロでのNPCの事だぞ。管理AI曰く『人間と同
じレベルの思考能力がある』とか

実際話してみた感じだと人間と全く変わらない受け答えをしたか
ら個人的には間違い無いと思う。ここで書いた情報もティアンの人
から聞いたものだし

尚、へマスターへティアンを含めてジョブに就ける生物を人間範疇生
物って言うらしい。ジョブに就けない生物は非人間範疇生物……モ

ンスターになるみたい

ティアンもジョブに就けるが問答無用で全てのジョブに就けるへマスターと違つてどんなジョブに就けるかは先天的に適正で決まるらしく、レベル上限も本人の才能次第で500よりも低い事があるらしい

296：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15（水）
成る程、NPCの事を言うのか

297：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15（水）
>>295

わーもう書かれてるよー。そして情報量が多いー

298：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15（水）
へマスターへニキこれ今日だけで調べたのか……

299：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15（水）
NPC……ティアンに話を聞いたらしいが、よくもまあ

300：名無しのへマスターへ「sage」：2043/7/15（水）
>>298 >>299

相手のティアンの人もいきなり現れ始めたへマスターへの情報を知りたがっていたから、情報交換的な事をしたんだよねー

ちなみに現在の多くのティアンがへマスターへに抱く印象は『いきなり現れてジョブにも就かずにモンスターに殺されるやつら』って感じ

301：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15（水）
>>300

それってキ○ガイって言うんじゃない……

302：名無しのゲーマー「sage」：2043／7／15（水）

>>301

グハア！

303：名無しのゲーマー「sage」：2043／7／15（水）

現実で言うところと丸腰で肉食の猛獣の群れに飛び込む人間を見る感じ
なんだろうな

304：名無しのゲーマー「sage」：2043／7／15（水）

>>303

どう見てもプレイヤーがアレな連中な件

305：名無しの「マスター」「sage」：2043／7／15（水）

ついでにモンスターの情報も出してくか

さつきも言ったけどモンスターはデンドロの生物の中でジョブに
就けないヤツの事で、レベル上限は100までだが人間とはステータ
スの上昇率とかも全く違うからレベルはそこまで当てにならないら
しい

モンスターは頭上に名前表記が出るからそこで見分けるのがわか
りやすいかな

モンスターの分類はいくつかあってレベルで分類する1～50ま
での下級モンスター、51～100までの上級モンスター

一般的に野生モンスターで普通にアイテムを落とすらしい通常モ
ンスター、それより強力で倒すと【宝櫃】を落とすボスモンスター

強さの基準で下級職6人パーティーか上級職1人相当の戦力であ
る亜竜級モンスター、上級職6人パーティー相当の戦力である純竜級
モンスター、それより更に強いらしい伝説級・神話級モンスターとか
もいるとか

そんで世界に一体しかおらず他のモンスターと比べても圧倒的な
戦力を持ち、倒すと特典武器というユニークアイテムをMVPに贈与
する「UBM」……ユニーク・ボス・モンスターとかいうのもいるら

しい

正直、分類法が多すぎて俺もよく分かっていないです

306 : 名無しのゲーマー「sage」: 2043 / 7 / 15 (水)
はーい、お前たちへマスターへニキから新しい情報よー！

307 : 名無しのゲーマー「sage」: 2043 / 7 / 15

>>306

元氣100倍！ スレ住民！

308 : 名無しのゲーマー「sage」: 2043 / 7 / 15

ていうか、これまでの情報を見るとデンドロってユニーク要素多すぎじゃない？

309 : 名無しのゲーマー「sage」: 2043 / 7 / 15

へUBMへやら超級職とかだな……へエンブリオへもそうだが

310 : 名無しのゲーマー「sage」: 2043 / 7 / 15

実際ゲームとしてはどうなの？ 教えてへマスターへニキ！

311 : 名無しのへマスターへ「sage」: 2043 / 7 / 15

>>310

ゲームとしてはユニーク要素が多すぎたり、テイアンの反応が人間と同じだったり、チュートリアルが不親切だったり好みが分かれるかもしれないかな

……だが、へInfinite Dendrogramへが“本物”であるという事だけは保証しよう

312 : 名無しのゲーマー「sage」: 2043 / 7 / 15

>>311

……なんかへマスターへニキの発言は意味深何ですが……

313：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15

まあ、実際ログインしてみればへマスターへニキの言う通り “本物”
“だという事は嫌でも理解出来る”

314：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15

成る程……じゃあ買ってみようかなデンドロ

315：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15

俺も買おうかな

へマスターへニキの説明だと設定がめっちゃ細かく作られているみたいだしこういうの調べるの好きなんだよな

316：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15

それじゃあ、ログインしたらその場のテンションに任せて走り回る事をオススメするぞ！

……俺をモグモグした狼はティールウルフって文字が頭上にあつたな、いつかりベンジしよう

317：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15

＞＞＞316

こちらこちら！ 新規さんに変な事を教えるんじゃない！

318：名無しのへマスターへ「sage」：2043/7/15

まあ、ログインしたらまずは街に入ってからティアンの人に話を聞いてギルドに行くのが妥当かな

そこで職員の人に話をちゃんと聞いてからジョブに就くといひ
ジョブに就くのはへエンブリオへが孵化してからでも遅くは無いからあまり焦らない方がいいぞ

319：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15

そうそう、こういうアドバイスで良いんだよ

320 : 名無しのゲーマー「sage」: 2043 / 7 / 15

>>>318

へマスターへニキありがとう！ 他に気を付ける事ってあるかな？

321 : 名無しのゲーマー「sage」: 2043 / 7 / 15

何か新情報が出て来るかも

322 : 名無しのへマスターへ「sage」: 2043 / 7 / 15

>>>320

強いて言うならチュートリアル時のアバター設定かなあ？ 管理AI曰く獣人とか異形のアバターにも出来るけど性能は変わらないし、現実と違い過ぎると動かすのに慣れがいるらしいし

だから現実の姿を基準に弄ってアバターを作るのが一般的かな……ただ、現実視は本当にリアルと同じだから現実と全く同じはリアルバレの観点からやめた方がいいぞ

後、プレイヤーのデータはサーバーに保管されているらしいからやり直しは効かないっぽいし、ネタバレプレイをするのでなければ名前やアバターはしっかりと決めた方がいいと思うぞ

323 : 名無しのゲーマー「sage」: 2043 / 7 / 15

ゴボツバアアツ!!!

324 : 名無しのゲーマー「sage」: 2043 / 7 / 15

へマスターへニキが真面目な書き込みをしたらなんか誤爆したぞ

325 : 名無しのゲーマー「sage」: 2043 / 7 / 15

>>>323

いったいどうしたんだ？

326：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15
話の流れ的にアバターか名前設定でやらかしたっぽいか？

327：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15
……デンドロもこれまでの粗製乱造VRと同じクソゲーだと思っ
たから適当にプレイして酷評してやろうと思つてネタ系の名前で始
めたら本物だったんだ……！

……事前に本物だと分かっていたらあんな名前には……！

328：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15

>>>327

あー……ドンマイ

329：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15

……名前とアバターの設定は真面目にやろう

330：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15

>>>327

ドンマイwww

331：名無しのゲーマー「sage」：2043/7/15

……ちつくしよオオオオ!!!

◇◇◇

「……ふむ、名前を真面目に考えていて良かったな」

「何やってるの？ お兄ちゃん」

「今日デンドロで得た情報を掲示板に書き込んでいたんだ。……ま

あ、掲示板への書き込みは初めてだったから大分適当だったが」

「フーン……これで少しは自滅する人が減るといいね」

「そうだな。……じゃあ、そろそろ夕飯だ。今日は親子丼だぞ」
「わーい！」

第1章 へInfinite Dendrogram が始まって

三兄妹のデンドロプレイ・二日目

□王都アルテア 【格闘家】 ミユウ・ウイステリア

私達がデンドロを買った日の翌日である2043年7月16日、その日も私は学校が終わってから速攻で家へと帰り兄様と姉様と一緒に速攻で家に帰って来てデンドロにログインしていました。

……そして、私達が王都に降り立つとそこには昨日と比べても、左手に紋章や卵を付けたへマスターの姿を多く見かけたのです。

「しかし、二日目になると一気にへマスターの数が増えたね」

「掲示板とかを見てもデンドロが『本物』だと言う情報が飛び交っていたからな。そうなれば当然大ヒットするだろうよ……実際、デンドロのハードは売り切れ続出らしいし」

「それに関しては、今日発表されたへInfinite Dendrogramの言葉も影響していると思うのです」

確か『へInfinite Dendrogram』は新世界とあなただけの可能性を提供します』って言うキャッチコピーでしたね……それを思い出して、私はつい左手にある紋章を見てしまいました。やっぱり、この『世界』のキモは無限の可能性を謳うこのへエンブリオなのでしょね。

「まあ、それはともかくとして今日は何をしようか？ 明日も学校だからあまり長くは出来ないけど」

「ですが、明日は終業式でそれからは夏休みなのです！ だから、それ以降はたっぷりデンドロが出来るのですよ」

「じゃあ、無難にレベル上げでいいんじゃないか。……この世界だと行動範囲を広げるには強くないといけないだろうし」

確かにそれが無難ですか……私達は兄様のへエンブリオのお陰で大分レベルが上がりやすいですし、そのメリットは十分活かしてレベ

ル上げをして夏休みに備えるのが賢いですかね。

……という訳で、私達は冒険者ギルドで適当な討伐系依頼を受けた後に、昨日はトラブルで探索が中途半端に終わってしまったという理由で再びへノズ森林へ行って狩りをする事にしたのでした。



「いや、結構レベルが上がったね。狩場を森の奥に変えたのは正解だったかな」

「森の浅いところには、同じ初心者へマスターへ達がひしめいていましたからね。……今の私達のレベルなら、もう少し奥で戦っても大丈夫だったのは幸いでした」

「相変わらず俺のスキルを使うとアイテムはさっぱりだが。……まあ、初日に稼いだ金がまだあるから問題は無いか」

そういう訳で、私達はへノズ森林への狩りを終えて王都への帰路についたところなのです……まあ、特に語る様な事も無く、普通に森の中の低級モンスターを三人で危なげなく倒していただけでしたね。

……森の奥に居る少し強めのモンスターに狙いを絞ったお陰で、今日から増え始めた他のへマスターへとブッキングする事も無かったのだ。

『しかし、雑魚相手だと僕のスキルはあんまり役に立たないね。……まあ、僕は強敵相手の戦いに特化しているからしょうがないんだけど』

「私はミメの高いMPを活かすスキルを持って無いですからね。……今度、MPを使って殴る格闘系のジョブでも探してみましようか」

そんな中、私と融合しているミメが愚痴をこぼしてたので宥めて置きます……ちなみに融合している間はミメの声は私にしか聞こえない様です。どうやらミメには融合中に声を外に届ける機能が無い様ですね。

……実際、今の【格闘家】のジョブはミメとそこまで相性がいい訳

では無いですし、何かこう「魔法拳士」的なジョブがあると通常戦闘でも融合で上がったMPを活かせるのですが……。

「……んん？ ……二人とも、あっちから何か来るよ」
「何？」

『あ、なんかステータスの高い敵対象が近づいているみたい』
「本当ですか？ ミメ。……確かに《殺気感知》に反応が出て来ましたね」

その時、突然姉様がまた「何か」を感じ取ったのか私達から見ても指差し、それとほぼ同時にミメの感覚に高ステータスの敵対象が引っかけました……ミメは有するスキルの関係なのか一定範囲内にいる敵のステータスが感覚で何となく分かり、その応用で比較的高いステータスを持つ敵性存在の位置を大雑把に感知する事も出来る様なのです。

……その直後、そちらの方向からかなり早い速度でこちらに近づいて来る人の声が聞こえて来ました。

「きやあああゝゝ!? 助けてええゝゝゝ!!!」

「ヒイヒイヒイ!?」

『『『『K I S Y A A A A A A A A A A!!』』』』』

悲鳴を上げながらこちらに向かって来たのは青と金で塗られたサーフボードに乗って地上スレスレを飛んでいる黒髪の女性と、その腰にしがみついている獅子の意匠をあしらった籠手を付けた金髪の男性でした。

……そして、その後ろからは様々な種類の大量の虫——二十体前後の魔蟲系モンスターの群れが二人を追って来ていたのです。

「ふむ、あれがトレインとかMPKとか呼ばれている行為なのか？

……では、どうするべきかな」

「随分と必死そうだから、多分あの群れから逃げているだけじゃない？ ……私の勘だと背を向けて逃げる方が危険かな」

『後、奥に強いのがいるよ。多分亜竜級のモンスター』

「どうやら、あの群れを統率しているらしきボスモンスターがいる様なのです」

そんな事を話している間にもサーフボードに乗った二人はこちらに迫って来て……突然、飛んでいたボードが失速して地面に接触、そのまま乗っていた二人は放り出されて盛大に地面を転がって行き、私達の近くでようやく停止しました。

「イタタ……しまった、MP切れか。やっぱ【騎兵】ライダーだとMPが少ないなあ……」

「大丈夫ですかー?」

「あ、ああ。大丈夫……って! ヤバイ、追いつかれた!」

起き上がった男性の方がそう言いながら魔蟲の群れの奥の方を指差しました……そちらを見てみると、群れの奥に全長3メートル程の巨大な白いカマキリの姿がありました。

……そして、そいつの頭上には「テンプテーション・プリンセスマウンティス」の文字があり、その雰囲気から明らかにレベルの違う相手だと分かりますね。

「……成る程、「魅」テンプテーション「工」ね。種類がバラバラの虫達が何で一緒にいるか疑問だったんだが、そういう事か……《詠唱》終了《アースウォール》」

「少し《看破》してみました、兄様の予想通り全員【魅了】の状態異常になつてますね」

「【魅了】した魔蟲系モンスターを操るモンスターってところかな? ……それで、その二人には簡潔に状況を説明してほしいんだけど?」

そうして、兄様が予想の説明ついでに前方に土の壁を作って虫達の足止めをしている間に、姉様がやって来た二人に詳しい事情を問いたりました。

「ああ、私の名前はアマタリア、そっちの男はレオン・ハート。見ての通りへマスターよ。……今日は同じ様にデンドロを始めたばかりのメンバーでパーティーを組んで狩りをしていただけ……その途中でアイツらに遭遇して逃げ回ってたのよ」

「他のメンバーは全員やられて生き残ったのは俺たちだけって訳。……【魅了】している大元を倒せばどうにかって思ったけど、あの力

マキリ自身もめちやくちや強くて俺達以外輪切りにされたし」

成る程、事情は大体分かりましたのです……と、そんな事をしてい
る間に土の壁が難なく切り裂かれて、その向こう側から「プリンセス
マンティス」が現れました。

……そいつはまるで獲物を前に舌舐めずりをする様にじわじわと
こちらとの距離を詰めつつ、周りのモンスター達を動かしてこちらを
包囲して来ました。

『K I S Y A S Y A S Y A S Y A S Y A S Y A S Y A!』

(アイツ、完全にこちらを舐めて居ますね。……まあ、油断してくれる
ならそれに越した事は無いんですけど)

『ミュウ、アイツのステータスはSTRとAGI特化型だよ。……後、
ENDと多分HPはかなり低い』

(こちらの《看破》でもそんな感じのステータスでしたね。……これな
らいけますか?)

そう考えた私は兄様と姉様に目配せをします……それに対して、二
人もこちらの意図を分かってくれたのか頷きました。

『K I S Y A S Y A S Y A S Y A S Y A S Y A S Y A S Y A!!』

「……済みません。貴方達を巻き込む気は無かったんだけど……」

「トレインとかMPKとかする気は無かったんです……だから、掲示
板とかに晒すのはやめてくやしやす……」

何故か諦めムードの二人を見て「プリンセスマンティス」は気を良
くしたのか、更にこちらに近づいて来ました……では、獲物の前で舌
舐めずりするのには狩人として三流だと言う事を教えてあげましょ
うか!

『《メイス・スロー》!』

「……《マッドクラップ》!』

『K I S Y A !?』

そうして油断していた「プリンセスマンティス」に対してまず姉様
が手に持った「ギガース」を勢いよく投げつけました……それをアイ
ツは腕に付いた鎌の一本を振るって弾き飛ばしましたが、「ギガース」
は姉様以外には見た目通りの重量がある為に衝撃でその態勢が大き

く崩れました。

更にその直後、兄様が発動した土属性拘束魔法によってその足の一本が地面に出来た泥の中へと沈んで、そのまま固まり拘束されました……その拘束も数秒もせず突破されるでしょうが、それだけあれば……。

「ミメー！」

アビリティ・ミラーリンク

『天威模倣』！ STR1563、AGI1835だよ！ そして

ENDは3桁！』

「上出来です！」

『K I S Y A A A ! ! ? ? 』

ミメがスキルのよって「プリンセスマンティス」のステータスをコピーして、それによって大幅に上がったAGIで私がアイツに接近するには十分な隙なのです！ ……ヤツも私の接近に対してもう片方の鎌を振り下ろして来ましたが、咄嗟に放たれた攻撃でかつ同じ速度であれば見切れない道理はありません。

そして、私は振り下ろされた鎌を回避すると同時にその上に飛び乗って足場とし、そのままヤツの身体を駆け上って背中から組み付きその首に腕を絡めました。

「《ネックチョーク》……相手を侮ったツケはその身で支払う事ですつと！」

『K I S Y A a a a a —— ! ! ? ? ……』

更に私は絡めた腕を【格闘家】で覚えた数少ないアクティブスキルで固定すると、強化されたSTRを使ってそのまま勢いよく相手の首を捻りながらねじ切りました。

……流石に首を引きちぎられて生きていられる様な相手では無かったらしく、倒れてから暫く痙攣した後「テンプテーション・プリンセスマンティス」は光の塵となったのでした。

「……………え？」

「はい！ その二人ぼーっとしない！ ボスを倒して【魅了】が解けたからと言ってモンスターが消える訳じゃ無いからね！」

「敵が浮き足立っている今の内に殲滅するぞ……《ファイアーボール》

！」

「……は、はい！」

そうして、兄様と姉様は「魅了」が解けた事で周囲の魔蟲モンスター達が混乱している隙について攻撃を仕掛けていきましました……最初はあまりに急な展開に惚けていた二人もどうにか意識を取り戻して戦闘に参加し出しました。

「MP回復ポジション」は飲んだからね！ 《エアロバースト》！」
「なんかよく分からない事になったが、今がチャンスだ！ 《レンジレス・アームズ》！」

……尚、二人の戦い方はアマリアさんは盾に変形したサーフボードを手を持ってそこから風を出して敵を吹き飛ばしたりで、レオンさんは装備した剣から光の斬撃を放つというものでした。

「やっぱり〈マスター〉の戦い方は変わっていますね」

『……それ、ミユウには言われたく無いんじゃないかなあ？』

……私の戦い方は至って普通ですよ？ ただモンスターを殴ったり蹴ったり首を振り切ったりするだけですし。



そうやって戦う事暫く、私達は周囲に集まっていた魔蟲モンスター達を全て倒し終えたのでした……兄様のスキルが発動中だった（解除する暇が無かった）のでアイテムは手に入りませんでした、その分カマキリ倒した時に結構ガッツリ経験値が貰えたので良しとしましょう。

……と、そうしていたらアマリアさんとレオンさんが礼を言ってきました。

「今回は本当に助かったよ、お陰でデスペナにならずに済んだ。……お礼と言っては何だけど、今ドロップしたアイテムは全部そっち持ちでいいよ」

「と言うか、ゲーム始めたばかりだからまともに払えるお金とかも無いので……だから、掲示板に晒すのだけはやめて下さい……」

「別に晒したりはせんし、礼もドロップアイテムを譲ってくれるだけで良いや」

「そんなに気にする事は無いよ、大した相手でも無かったしね」

「油断と慢心が過ぎる相手でしたから、隙はつきやすかったです」

まあ、モンスター倒したのは殆ど私達なのでそのドロップアイテムは経験値に変わっていますが……後、レオンさんは掲示板に何か嫌な思い出でも有るんですかね。

……そんな感じの事を私達が言ったら、二人はやや顔を痙攣させました。

「……えーっと、お三方は私達と同じ〈マスター〉ですよ？」

「はい、先日始めたばかりなので、まだ下級職1個目の新人なのです」

「……それでボスモンスターをあんなあっさり倒したんですか……？」

「大体はミュウちゃんとの相性が良かったお陰だけ。……やっぱりドロップアイテムの【宝櫃】は惜しかったかな？」

「仕方あるまい。スキルを解除するのもそれなりに手間がかかるのだし」

まあ、デンドロを始めてから二日連続でボスモンスターと戦う事になるとは思いませんでした……幸い先の【テンプテーション・プリンセスマンティス】は直接戦うタイプじゃ無かったのか、昨日のデミドラグブラッディベア【亜竜吸血熊】と比べると総合的な戦闘能力は低かったのであっさり倒せましたし。

「それじゃあ、俺達はもう王都に帰るつもりなんだが二人はどうするんだ？」

「あ、あー……私達もこれ以上の狩りは出来ないし王都に戻るよ。レオンもいいよね？」

「今日は流石に疲れたしな……」

そう言うわけで、私達は二人と一緒に王都へと帰って行ったのでした……まあ、王都に着いた後は二人と別れて冒険者ギルドで依頼達成を報告しつつ、まだ行っていなかったへウエズ海道やへサウダ山道で時間が許す限りレベル上げをして明日からの夏休みに備えたりし

ま
し
た
が
。

レントのクエスト・「ジエム」作り

□王都アルテア・魔術師ギルド 【ジエムマイスター魔石職人】 レント・ウイステリア
さて、今日は妹達に通っている小学校では終業式が終わり夏休みに入ってから始めての土曜日、俺は王都アルテアにある魔術師ギルドの作業部屋で【魔石職人】のジョブクエストとしてチマチマと下級魔法の【ジエム】を作っています。

ちなみに内容はギルドから貰った鉱石を《魔石精製》で【魔石】に変え、それらに《魔法封入》を使い低級魔法を込めて【ジエム】にして提出するというものなので報酬は安いが、この【魔石職人】のジョブクエストは多くの初心者【メイジ魔術師】が小遣い稼ぎレベル上げとして行っているとギルドの職員さんにオススメされたので受ける事にしたのだ。

……え？ だから何でいきなり転職してジョブクエストをやっているのかって？ それは、今現在王都周辺の狩場に^{〈マスター〉}廃人達がひしめいていてモンスター狩りがやり難いからだよ。【魔術師】のジョブ自体は昨日の内にカンストしたから、新しいジョブに就いても特に問題は無かったしな。

「ある程度予想していたが、昨日から多くの学校が夏休みに入った所為でデンドロへのログイン者が物凄く増えてるんだよな。更に土曜日の今日は更に増えているし。……そして、現在ほぼ全ての〈マスター〉達が行動出来る範囲は初期地点周辺しか無いわけで……」

「そうなれば当然、初期地点周辺の狩場に大量の〈マスター〉が溢れる事になると。……まあ、序盤から生産をやる〈マスター〉は少ないだろうからな。生産ジョブクエストは受けるのに元手がいるのも多いし」

「さつき少し掲示板を見てみたが『フィールドに〈マスター〉多すぎワロタ』とか『フィールドを探してもモンスターがいらない』『モンスターが現れたら周囲の〈マスター〉が集まって来てリンチされてた』『〈マスター〉がラフムに見える件ww』というスレが揃っていたな。……〈マスター〉が強くなって行動範囲が広がれば少しはマシになる

だろうが……」

と、現在の初心者狩場はご覧の有り様なのである……ちなみに今回は妹達とは別行動であり、今一緒に部屋に居るのは俺と同じく魔術師ギルドのジョブクエストを受けに来た「魔術師」(今は「魔石職人」)であるエドワードとアット・ウイキという「マスター」である。

何故この二人を一緒に部屋の部屋に居るのかと言うとこの作業部屋は貸し出し制でそこそこお金がかかる為、偶々出会った俺達はまだ始めたばかりで資金が少ない事もあって『三人で割り勘すれば安く済むんじゃない?』と考えて、お互いに金を出し合い部屋を共用する事にしたのである。

……それでまあ、男三人で黙々と「ジエム」を作るのも絵面的にアレなので、こうやって黙弁りながら作業を続けているのだ。

「まあ、この世界はモンスターが虚空からポップする仕様じゃなくて、ちゃんとした生態系がある仕様だからな。当然モンスターを狩り続けなければ数は減る訳だ」

「それなら運営はもつとモンスターを事前に配置とかすればいいんじゃないか?」

「それはそれで生態系が乱れそうだが……。しかし、このデンドロでモンスターの分布を調査するのは大変そうだな」

そう言いながらアット氏は軽くため息をついた……。この世界では縄張り争いとかでモンスターの分布や生態系が大きく変わる事も珍しく無いってアイラさんが言っていたし、確かに調査は大変そうだな。

……とは言え、そう言いながらもアット氏は楽しそうに笑みを浮かべていたが。

「まあ、だからこそこの「Infinite Dendrogram」の情報は調べ甲斐があるんだがな」

「やっぱりアットさんって調査とか好きな人? ほら名前に」

「アットでいいぞ。……まあ、俺は考察や調査が昔から好きでな。そしてとある掲示板に「マスター」ニキ」という人物が「Infinite Dendrogram」の世界の情報が細かく書きこんでい

たのを見て、このゲームの情報 Wiki を作りたいたいと思いプレイを始めたんだ。デンドロの人氣に火がつく前にどうかハードを入手出来たからな、今はあの書き込みには感謝してるよ」

「……へ、ヘーソウナンダー……」

いやー、そのへマスターへニキってイッタイダレナンダロウナー○
……後、ログイン前の情報不足は管理AIでも問題視されたのか、二日目辺りで公式のホームページにデンドロ世界の常識についての説明が載せられる様になっていた……まあ、見ているだけで眠くなりそうな文章量だったけど。

「とは言え、今はコッチとリアルで同志を集めながら地力を上げる為にレベル上げに勤しんでいるところだがな。……ティアンから情報を得るにしてもまずは信用を得ないといけないし……」

「あー、確かにティアンってへマスターへへの対応が塩いからなあ。俺も錬金術師ギルドに行つてクエストを受けようとして、金と素材が無いつて言つたら白い目で見られたし。……後で『普通はコネのある工房や商家の人とかから援助して貰う』って聞いたけど、それへマスターへにはどうしようもないやつじゃんか……」

「まあ、今のへマスターへってティアンから見ると『伝説とかで知ってるけど、いきなり大増殖し出したなんかよく分からない連中』みたいな印象つぽいな。……まだへマスターへもティアンも色々手探りだから、ある程度時間が経てばもう少し良くはなるだろうが……」

一応、ギルドとかでの事務的なコミュニケーションとかは普通にやってくれるんだが、それ以上となると今の所は難しい様だ……初日にアイラさんと会えた俺達は本当にラッキーだったんだろうな。

ちなみにエドワードは「錬金術師」^{アルケミスト}的なプレイをしたくてデンドロを始めたらしいのだが、上述の理由で今は「魔術師」のジョブに切り替えて資金稼ぎをしているらしい。

「正直なところ、今のデンドロは生産志望には厳しい環境なんだよなあ……。初期資金なんて本格的に生産活動するとあつという間に尽きるし」

「……今やっている【ジェム】作成も、素材である【魔石】をギルドか

ら供給されているからこそ出来ているからな。……その分、失敗すると報酬から素材代が差し引かれる上、まだスキルレベルも低いから失敗率も高く報酬も安くなりやすいが」

「魔法を込める時にも魔法スキルを使った扱いになるからスキルレベルは上げられるんだがな。……経験値稼ぎも含めて新人【魔術師】の援助がメインのクエストみたいだからな」

後、一応錬金術師ギルドの方にも似たような初心者向けクエストがあるらしいが、素材の代金が低級の【魔石】よりも高い所為で失敗した時の報酬減少の割合が大きく、ステータスとスキルレベルが低い現在では余り儲からない様だ。

「あー、何か生産活動を上手くやる良い手は無いのかなー」

「ふむ、やはりへマスターへ最大の特徴であるへエンブリオへを使って自分売り込むとか、或いは同じ生産系へマスターへを集めて互助クランでも作るとかかか？」

「ほう、レントには何かアイディアがあるみたいだな」

そうして俺が少し思った事を呟いたら、それを聞いたアットとエドワードが興味深そうにこつちを見てきた……そんなに期待されても困るんだが……。

「……いや、本当に大した考えでは無いんだが……」

「別に話の種になるならなんでも良いぞ。……正直、結構行き詰まってるし……」

「俺は自分で考察するのも好きだが、他人の考察を聞くのも大好きだからな。是非聞かせてくれ」

なんかアットがめっちゃ目を輝かせながら催促してきたんだが……仕方ない、二人がそこまで言うなら少し話をするとうしようか。

「まあ、簡単に言うるとティアンに無くへマスターへにはあるへエンブリオへ」というシステムを使って、ティアンには中々作れない様な物を作って売り込んでコネを得るという考えだな。この世界にはちゃんと流通があつて、生産者は商売で飯を食ってるんだから有用性……儲け話になりそうなら後見人とかになつてくれる人も居るのではって事だ」

「要するに自分の〈ヘエンブリオ〉を売り込んでコネを得るって事か。……理屈は分かるけどそう上手く行くか？」

「現在の〈マスター〉に対するティアンの印象は、さっきレントが言った通り余り良くは無いからな。……そんな人間が持ち込んだ怪しげな物品でコネを作るのは……いや、そういう先見の明があるティアンも何処かにはいるか？」

……まあ、俺自身そんな上手く行くとは思っていないアイデアだからな。正直、今必要なのはティアンが〈マスター〉という存在に慣れる事だと思っているからな。実際、このアイデアは〈マスター〉が良き隣人であるとティアンに印象付けるのが主目的だし。

「それ以前の問題として、俺の〈ヘエンブリオ〉は特殊なアイテムとか作れない……というか、生産に寄与するものじゃないんだが。……とりあえず資金稼ぎが優先だと〈ヘエンブリオ〉が孵化する前にフィールドに出て戦ったのが良くなかったのかなあ。戦闘には便利な〈ヘエンブリオ〉で助かってはいるんだが……」

「それに関してはどうしようもないが……〈ヘエンブリオ〉は進化すれば新しいスキルを覚えるし、生産系スキルが欲しいと思っていればその方面のスキルが生えると思うぞ。……俺の〈ヘエンブリオ〉も第2形態になったらちようど、あつたら便利だ」と思ったスキルが生えたし」「レントの〈ヘエンブリオ〉はもう進化したのか。……つまり、〈ヘエンブリオ〉は進化するという情報は本当だったか」

ちなみに俺の「ルー」が第二形態になった時に覚えたスキルは《スキル・マスタリ諸芸の達人》と言い、効果は『レベル50以上になったジョブのスキル及びジョブクエストの制限解除』……具体的に言うレベル50以上のジョブをサブに入れた時に、そのジョブスキルをメインジョブが何であれ使用出来る様にするスキルの様だ。

この世界のジョブシステムではサブジョブのスキルは汎用スキル以外だとメインジョブと関係のあるものしか使えない仕様だが、この《諸芸の達人》があるとそういった制限が無くなる様だ。

……このスキルは「魔術師」のレベルがカンストして次のジョブに悩んでいた時に生えて来たものだから、〈ヘエンブリオ〉がマスターの

パーソナルに合わせて進化すると言うのは本当なのだろう。

「もう一つのアイディアである生産クランを作る方は……まあ、こつちもさつきと同じへエンブリオへ頼りのアイディアで、生産系へエンブリオを複数集めて凄いいものを作ってコネを得ようみたいな感じだ。……他にも生産系同士で協力すれば活動がしやすくなる期待もあるし、特定の能力特化のクランを作るなら先駆者の方が圧倒的に有利だから、まだデンドロが始まったばかりの今だからこそクランを作るメリットは大きいと言う考えもある」

「ふむ……とりあえず、実現可能かはともかくとして、ただ文句を言って腐っていてもどうしようも無さそうだし、せつかくの先駆者だから色々やってみるのも悪くないかな？」

「まあ、クランを作るなら早い方が有利というのは分かるな。……後から来るへマスターも既に自分の目的に合ったクランがあつて、そこに入れば大きなメリットがあると分かつて入れればそこに加入するだろう。そうすればクランの規模を拡大させるのもやり易いだろうし……やはりwiki作成の為にはクランを作つて人間を集める事が急務になるか」

正直、今の段階だとへマスターがティアンに優っている部分なんてへエンブリオしか無いので、そこを活かす事ぐらいしか思いつかなかつたから適当に語っただけだったんだが……二人共結構真面目に考えてるなあ。

……何かこういういい感じに為になる意見を言つた方がいいか……？

「実際、へマスターとティアンの信頼関係の構築はこのゲームをまとも遊ぶ上では必須だろうし……へマスターにはログインログアウトがある以上この世界の経済と商売の主役はどう頑張つてもティアンになるだろうし、デンドロの情報に関してもこの世界で生きるティアンが一番多く持っているだろうしな」

「確かにただ作つて売るだけならともかく、本格的な店の経営や流通経路の確保はへマスターだけだと難しいか？へマスターが生産ギルドの運営とか無理だろうし。……やっぱり生産には地道な努力が

「必要か」

「少し調べただけでもこのデンドロ世界の設定は複雑怪奇だったからな。……やはり、学者系ティアンとの協力関係構築は必須か？へマスター」という存在に対して興味を抱いているティアンはいるだろうし、まずはその辺りから……」

二人共、ちゃんと目的があってデンドロをやってるから凄いな色々と考えてるなあ……俺は妹に誘われてただ何となくプレイしているだけだし……。

……何かこの世界での“自分だけの目的”を探してみるのも悪く無いかな。

「……よし、これでクエストの受注分は全部出来たな。じゃあ、ちよつと【ジエム】を提出して来るわ」

「おう、いつてらー」

そうして、俺は出来た【ジエム】を魔術師ギルドの魔石職人部門に渡してクエストを達成すると共に、新しい【ジエム】作成のクエストを受けて、また作業部屋に戻って【ジエム】作りに励んで行ったのだった。

ミカのクエスト・王国の騎士達

□王都アルテア・騎士団施設内訓練場 【戦棍騎士^{メイスマン}】 ミカ・ウイステリア

「せいっ！ 《ダブルスラッシュ》！」

「おっとお!?？」

私ことミカ・ウイステリアは向かい合っている凄い美少女が放った二連続の高速斬撃を、持ち前の「直感」で攻撃の軌道を先読みしそこに手に持った【ギガース】置く事でどうにか防いでいます……今、私が何をやっているのかと言うと、王都にある騎士団関係施設の訓練場で騎士団の人達と訓練をしているんだよね。

〈マスター〉（まさか王都周辺の狩場が廃人達の氾濫でまともに使えないとはねー。だから、王都内で各々ジョブクエストをやるうって事になったんだけど……私がメインジョブにしていた【戦棍士^{メイスマン}】のジョブクエストは殆どが討伐依頼や護衛依頼とかで、今の私が受けられるものが無かったのは誤算だったねー。……おっと、これ以上追撃は受けたく無いし距離を取ろうか）

だから、しょうがなく冒険者ギルドで何か適当なクエストを受けようと思ったら、そこに居たアイラさんにこの【騎士団で訓練相手のヘマスター〈募集〉】のジョブクエストを紹介されたんだよ……まあ、騎士系統のジョブクエストだからメインジョブを変更しないと行けなかったんだけど、幸い騎士系統の派生下級職にメイスを扱う【戦棍騎士】つていうのがあったので、クエスト受領ついでに騎士団の施設にあったジョブクリスタルで転職したりしてね。

……そんな訳で、私は今訓練場で騎士の一人と模擬戦をしているのである。

「くっ!?？ これも凌ぎますか！ ……だったら《ソードスラスト》！」

「ええ！ いくら刃引きした模擬刀だからって突きは危なくないっ！」

そうして連続斬撃をどうにか凌いで距離を取った私に対して目の

前の超美少女——王国の騎士の一人だと言うリリアーナ・グランドリ
アさんは追撃の為に私の胸目掛けて突きを放つて来る……よりも早
く「近い勘」に示された彼女の攻撃軌道上に「ギガース」の頭部を
持って来て、そこに放たれた突きをどうにか防いだ。

……この【ギガース】は見た目通りの重量があつて、かつへエンブ
リオ◇だからマスター自身は重量を感じない仕様（掲示板のへエンブ
リオ◇板で見た）なので、獲物の重量差を活かせばステータスで劣る
私でもどうにか彼女の攻撃を凌いでいるのだ。

（と言ってもレベルが三倍以上差があつて武術的な技術面でも劣つて
いると、攻撃防ぐしか出来なくてどうにもならないだけだね。……
とりあえず向こうは何故か警戒しているみたいだし、このまま逃げ続
けよう）

ちなみに試合開始前に聞いたリリアーナさんのメインジョブは騎
士系統上級職の【聖騎士】パラディン——こちらは就いたばかりでレベルまだ低
いらしいが、それ以外にも下級職を3つ程カンストしているらしいの
で彼女のレベルは150以上。【ギガース】が第二形態に進化してス
テ補正が上がった事を踏まえても【戦棍騎士】レベル1【戦棍士】レ
ベル32の私より圧倒的にステータスは高いのである。

……まあ、お兄ちゃんやミウちゃんとは違つて武術面の経験が無い
私には彼女の技量がどれだけ優れているかはよく分からないだけ
どね。分かるのは他の騎士さん達の剣技と比べて攻撃に重きを置い
てるのかなーつていう事ぐらい。ただ、攻撃に入ったら確定で反撃喰
らうと私の「近い勘」がそう言ってるから相当な技量なんだろうけ
ど。

「つまり、結論としては実力差が大きすぎて私の勝ちの目が一切無い
んだよねー」

「……そう言われると、技量とステータスで優っているのにまともに
攻撃を入れられない私の立場が無いんですが……。これが貴女のへエ
ンブリオ◇の力なのですか？」

「……さーて、どうだろうねー」

……勿論、私のへエンブリオ◇である【激災棍　ギガース】の特性

は高いステータス補正と防御スキル効果減衰なので、相手の攻撃を先読みする様な効果は当然無い……この危険感知は私が生まれつき持っている『異常な直感力』によるモノである。

この直感には主に二種類あり、一つ目は自分や周りに降りかかる直近の危険を感知してそれをどうすれば回避出来るのかを示す『近い勘』で、リリアーナさんの攻撃を防いでいるのはこちらである。

もう一つはいつか遭遇する危険に対応するための行動を示す『遠い勘』で、*Infinite Dendrogram*を買った方が良いと感じたのはコッチ……正直言つてコッチの『遠い勘』は発動した回数も少なく、私にもよく分からないからあんまり信用は出来ないかな。

「さてリリアーナさん、どうするかな？ ……ちなみに、このまま戦い続ければ私が普通に負けるけど！」

「……それは自身満々に言う事じゃないと思うんですが……」

「いや、模擬戦はここまでにしようか」

そう言つて手を叩きながら私達の間に入って来た壮年に男性——今回のクエストを依頼したアルター王国第一騎士団団長のリヒト・ローランさんであった……苗字から分かる通り、彼はアイラさんのお父さんらしいんだよね。

「ミカ君の実力は見せて貰ったし、他のへマスター達を待たせているからね。……二人はしばらく休んでいるといい」

「分かりました！ リヒト団長！」

「分かりましたー」

そんな感じで、私とリリアーナさんは模擬戦を終えて訓練場の端で休む事になったのだった。



「《レンジレス・アームズ》！」

「模擬刀から光の刃を出すとは面妖な！ ……だが、軌道が単純すぎる！ これでは接近してくれと言わんばかりだ！」

「はい！ 分かりました！」

休憩中の私は他の「へマスター」と騎士団の人達との模擬戦を観戦していた……さて、あそこで戦ってるのは先日「ノズ森林」で出会ったレオン・ハートさんだね。剣からビームを出して騎士さんを攻撃したけど、あつさりと避けられてそのまま接近されてるみたい。

彼とはこのクエストを受けた時に再開して少し話したんだけど、中世の騎士物語とかが好きだから初期国家をアルター王国にして、メイ
ンジョブも【騎士】にしたとか言ってたね。今も楽しそうに模擬戦……というか現役騎士からの指導を受けているし。

「アリア、頑張ってください！」

「お任せ下さいマスター！」

「ふむ、主人を守ろうとするその心意気は良い。……ですが、そちらに気をとられ過ぎです。……後、守られる「へマスター」の方も、常に守られやすい位置取りを意識するように！」

別のところでは金髪緑眼の少女と同じく金髪で赤眼の女性のコンビが女性騎士と戦っていた……彼女達は少女の方が「へマスター」のエルザ・ウインドベルちゃんで、女性の方がその「へエンブリオ」である人型のガードナー【代行神姫 ワルキューレ】のアリアさんというらしい。

彼女達とは私が冒険者ギルドでこのクエストを勧められた時に遭遇して、同じクエストを受けた同性同士として少し話したんだよね。何でもエルザちゃんは【従魔師】だけど、「へエンブリオ」であるアリアさんがジョブに就く事が出来るスキルを持っていて今は【騎士】に就いているからこのクエストを受ける事が出来たらしい。

「しかし「へエンブリオ」ってのは本当に多種多様だね……。でも、やっぱり今はまだティアンの人の方が強いかな。模擬戦も殆ど指導みたいになってるし」

「まあ、「へマスター」の方々が現れ出してからまだ一週間程度ですから、そんなにあつさりと実力で上回られたら流石に困ります。……最も、私はミカさんに指導とか出来ませんでした……」

おっと、うつかり呟いた独り言が隣にいたりアーナさんに突き刺

さつちやつたよ……とりあえず、私は武術とかさっぱりだからその辺りを後で指導してくれると嬉しいな！ 的な事を言つてフオローを入れておく。

実際、デンドロでは【戦棍士】で覚えた《戦棍術》の様なセンススキルがあればリアルで武術の心得が無い私とかでもある程度は戦える様にはなるんだけど、お兄ちゃんやミウちゃん曰く『ちゃんと武術を覚えておいた方が動きは良くなる』らしいね。

……と、そんな感じでリリアーナさんと話していた私の所に二人の人間がやつて来たのだ。

「やあ、ミカ君とリリアーナ。少し話をいいかな？」

「は、はい！」

「あ、はい。別に良いですよリヒトさん。……えーつと……」

「初めまして、私は近衛騎士団所属の【天馬騎士】リレイ・ローランと申します。……もうお気づきかと思いますが、リヒト団長は私の父でアイラ・ローランは私の姉に当たります」

成る程、つまりはローラン一家の次女さんだったらしい……それで、なんか凄そうな肩書きの人達が私に何の用だろうか？ ちよつと聞いてみようか。

「それで、一体何の話何ですか？」

「それは娘のアイラが話していたウイステリア兄妹というへマスターと一度話してみたくてね。……おつと、まだ正式に自己紹介はしてい

なかつたね。私はアルター王国第一騎士団団長、天馬騎士系統スベリオルジヨフ ナイト・オブ・ソアリング 超級職【天翔騎士】リヒト・ローランだ。改めてよろしく」

……超級職、噂では聞いてたけど本物を直に見るのは初めてだね。さて、一体どんなお話なのだろうか？

「まずは礼を言わせてくれ……君達が教えてくれたへマスターの詳しい情報は、この国におけるへマスター増加初期の混乱を収めるのにかなり役に立ったからね」

「姉さんから伝えられて驚きましたよ。……まさか、この世界に来たばかりのへマスターは一般的な常識すら殆ど知らなかったとは……。この情報が無ければ混乱は更に助長されていたでしょうね。そう分

かつて入ればやり様も有りますし」

「いえいえ、そんな大した事は無いですよ。……むしろ、私達の方がア
イラさんにはお世話になってますし」

実際、情報量に関してはアイラさんから伝えられたものの方がはる
かに多いしね……。それに混乱の終息は、公式ホームページに追加され
た情報欄や掲示板のお陰でリアルの方にデンドロの事前情報が広
がって来たのも大きいし。

……と思っていたら、リヒトさんの雰囲気がちよつと変わった気が
した。

「……さて、娘が信用出来ると言った〈マスター〉である君に少し聞き
たい事があるんだが……。良いだろうか？」

「？ はい、良いですよ」

「ありがとう。……聞きたい事と言うのは、〈マスター〉が増えた事に
よつてこの国にどの様な悪影響があるか」を、〈マスター〉である君の
視点から聞いておきたいんだ」

……。あー、成る程ねー。まあ、国内の治安を維持する立場なら〈マ
スター〉とか言う不審者大量発生事件で一番に気にするのはそこだよ
ねー。

しかしどうしようかな、こういう事考えるのはお兄ちゃんが得意な
んだけど、私じゃ何となく思った事を言うしか無いんだよねー。

「悪影響か……。まあ、沢山出ると思いますよ。例えば犯罪に走る〈マ
スター〉とかPK……。〈マスター〉やティアンを殺害する事を目的と
してこの世界に来る〈マスター〉とか。まあ、後者は〈マスター〉だ
けを狙うなら問題無いんですけどね。……今はともかくいずれば
ティアンだと〈マスター〉の犯罪者を止められなくなるだろうし……」
「？？？ そんな事は！ 「まあ、そうなるだろうな」でしようね」って、
リヒト団長にリリイさんまで！」

私が行った「ティアンの力不足発言」にリリアーナさんが反論し
ようとするが、それよりも早くリヒトさんとリリイさんが肯定した。

……。そして、二人はそのまま言葉を続けた。

「私がこのクエストを発注した理由の一つは、今現在の〈マスター〉の

実力を知っておく」というものでな……そして、一通り〈マスター〉の実力を見たが、ばらつきこそ有っても特に技量面ではテイアンの方が勝っている印象を受けたな」

「まあ、私達〈マスター〉で武術の心得がある人は少ないからね。……もちろん例外はいるけど」

「ですが、それ以上に彼等の〈エンブリオ〉の力は凄まじい。……これが生まれたばかりでまだ成長の余地が十分ある事や、〈マスター〉の必ずレベルを500まで上げられる万能の才能を考慮すれば、いずれ超級職などの例外を除けばテイアンで〈マスター〉の犯罪者を止める事は難しくなるでしょうね」

「それは……」

リヒトさんとリリイさんの理路整然とした意見にリリアーナさんも黙り込んでしまった……でも、このままだと〈マスター〉全体の印象が悪くなるし何かフォローは入れないと行けないかな。

「でも、〈マスター〉という括りだけで判断するのは辞めて欲しいかな。〈マスター〉一人一人で考え方や価値観も全く違うし、この国に害を齎す〈マスター〉も居ればこの国を守ろうとする〈マスター〉も居るからね。……力の過多こそあれど〈マスター〉とテイアンの精神性には特に違いは無いから」

「……ふむ、まあテイアンにもどうしようもない悪人はいくらでも居るし、個人個人を見て判断する事も必要か」

「ですが、やはり力の差がある以上は〈マスター〉に対抗するには〈マスター〉の力が必要になる時が来るでしょう。……信頼の置ける〈マスター〉を今から探すべきでしょうね」

おお、二人共結構あっさりと分かってくれた……のかな？

「……というか、私の事を試しましたか？」

「ああ、まあそういう意図も有った事は否定しない。気を悪くしたのなら謝ろう。……だが、さつきもリリイが言った通り私達はこの国を守る為には〈マスター〉の力が今後必要になってくると考えている」「その為に今の話には姉が言っていた有望な〈マスター〉である貴女の人格を確認する意図もあつた事は認めます。……ですが、貴女の話

聞いて私達の考え方が間違っていないか、と確信した事も本当です」
ふむう、別に試された事が不満な訳では無いし、〈マスター〉と繋がりを持つとうとする二人の考え方は間違っていないと思うんだけど……うん、ここは自分の「直感」に従って言いたい事を言ってみようか。

「この世界に来る直前に出会った管理者は、私が『この世界で何をすれば良いのか?』と聞いた時にこう答えました……『何でも。英雄になるのも魔王になるのも、王になるのも奴隷になるのも、善人になるのも悪人になるのも、何かするのも何かしないのも、この世界に居ても、この世界を去っても、何でも自由だよ。出来るなら何をしたらいい』と」

「それは……?」

「この世界に来る時に言われた中で一番印象に残っている言葉ですよ。……要するに私達〈マスター〉は良くも悪くも「自由」って事です。……だから皆、自分のやりたい事を、自分で考えて、自分で決めて行動すると思いますよ。……ああ、勿論「自由」って言うのは何をしても良いという免罪符じゃ無いですけどね。自由と言うのは『自分の行動全てに自分で責任を持つ事』でしょうし」

……何となくなんだけど、この国で〈マスター〉がそういう存在であると印象付けておいた方が良い気がしたんだよね。何故かはわからないけど。

そしたら、少し考え込んでいたりヒトさんが改めて「私」に聞いてきた。

「それじゃあミカ君。……君はこの国に危機が訪れた時には私達に力を貸してくれるのかな?」

「んー、その時の状況次第では分からないですけど……少なくとも、私の手の届く範囲で悲劇が起きそうなら止めようとはしますよ。……解っていて何も出来なかったというのは気分が悪いので」

悲劇が起きると解っているならそれを止める為に私は全力を尽くすよ……この世界の「ミカ・ウイステリア」にならそれが出来るからね。

……その答えを聞いたリヒトさんは何かに納得した様に頷いた。

「成る程、『自由』か……ありがとうミカ君、なかなか貴重な意見だったよ。どうやら私達ももう少しこの国に来たへマスター達と、それによって変わり行くこのアルター王国を見定めて行く必要がある様だ。……さて、では訓練を再開するでしょうか。せつかくだし、ここからは私が指導する事にしよう」

「ふえ？」

「おや、やる気満々ですネリヒト団長。……さて、何人残るでしょうかね」

……何故だろう、なんか凄く嫌な予感がしたんだけど。リレイさんもなんか凄く不穏な言葉を言ってるし……。

「さて、ではまず私一人とへマスター全員と見習い騎士達の模擬戦をしようか。……ああ、私はこれでも超級職だからENDは一万を超えているし、『救命のブローチ』も着けてるから遠慮無く掛かって来なさい」

「あつ（察し）……この人、基本スパルタなアイラさんのお父さんだったわー」

そんな感じで行われたリヒトさんの超スパルタ指導に、その場に居たへマスター達と騎士達は纏めて死屍累々の有り様となつたのであつた……まあ、流石はアイラさんのお父さんだけあつて、各々への指導とかは物凄く的確だったから得るものは多かつたけど……。

その後、ボロボロにされたへマスターと騎士達の間で友情が芽生えたり、治療に回つたりリリーさんが男性へマスターの間で大人気になったり、リレイさんがそれを見て『へマスター』相手にはリリーナのウケが良いですね。まだ若いから余計な先入観も無いでしょうし彼女にはへマスター達と積極的に関わらせても良いかも知れないわね』とか言つてたりしたけど、クエストそのものは無事に達成出来ましたとき。

ミュウのクエスト・格闘家ギルド

□王都アルテア・格闘家ギルド 【格闘家】^{グラップラー} ミユウ・ウイステリア
「さて、ここが格闘家ギルドですか。……成る程、皆さん何かの格闘技を収めている様なのです」

「そうなんだ。……僕は他人のステータスは分かるんだけど、それに寄らない技術とかはさっぱりだからね」

そう言うわけで、私は王都周辺の狩場が満杯で使えなかったので格闘家ギルドにジョブクエストを受けに来たのです……ちなみに「格闘家」ギルドと名を打っていますが、実際には「格闘家」ボクサー「蹴士」キックマンなどの徒手格闘系ジョブ全般の総合ギルドだそうなのです。

……しかし、格闘家ギルドと言うからには道場っぽい感じを想像していたのですが、基本的には冒険者ギルドとそう変わりませんね。現実で言うスポーツジムの様な感じでしょうか？

まあ、それはともかくとして、早速受注するジョブクエストを探しに行きましようか。えーつと……とりあえず受付の人に聞いてみましょう。

「すみません、ジョブクエストを受けに来たのですが」

「はい……えーと、ここは格闘家ギルドなのですが……」

ふむ、何故か聞き返されてしまったのです……まあ、このギルドにいる人達は皆筋骨隆々の男性ばかりで、私の様な少女は居ませんので仕方ないでしょうか。

……ああ、そう言えば籠手を付けたままなので「マスター」の証である紋章が見えませんか。外しますか。

「はい、ですからここに来たのです……これでも「マスター」で「格闘家」レベル44なのです。確かギルド登録もしてあった筈なのです」
「あ、僕はミュウの「エンブリオ」だから、まあ付き添いみたいなものだね」

「へマスター」の方でしたか、これは失礼しました。……確かに登録してありましたね。では、こちらのカタログに受けられるジョブクエストが載って居ますので、その中からお選び下さい」

そうして、私は受付の人からジョブクエスト用のカタログを貰いました……どうやら、この辺りは冒険者ギルドと変わらない様なのです。このカタログは便利ですからね、普及するのでしょうか。

……と言うわけで、私とミメはカタログから自分の受けられるクエストを探していったのですが……。

「ふむむ……討伐は狩場の状況的に難しいですし、護衛依頼は時間的拘束が長過ぎてへマスターへである私には不向きなのです」

「……あ、コレとかは？　なんか武術の指導とか書かれてるけど」

「推奨レベルが合計300以上ですから、まだ下級職一つ目の私では相手にされないのでは？　……それに、私は人に武術を教えるのは苦手ですし」

以前、師匠からは『お前みたいにパソコンのソフトをインストールする様なお手軽感覚で武術を習得出来るヤツはまずいないから。多分感覚が違い過ぎて人に教えるのには向いていないな』と言われました。

……要するに、私は一度見て数時間程その型をなぞれば武術を習得出来てしまうので、武術を習得するのに苦労した経験というのが一切無いのですよ。

「そんな私には他人に武術を教えるなど出来ないのですよ。……武術なんて、一度見てやってみればその理ぐらい理解出来るでしょう？

……と言っても、同じ事を出来る人はいないので」

「……まあ、そうだろうね。……じゃあ別のを探そうか」

この話はここまでにして、私とミメはカタログを読み進めていきます……ふむむん、やっぱり戦闘系ジョブのクエストだからか討伐や護衛のクエストが多いですね。

……一応それ以外の依頼もありますが、どれも一定以上の合計ジョブレベルが推奨されている専門的な依頼ですし。やっぱりジョブクエストは冒険者ギルドのクエストと比べても敷居が高い様ですね。

「ぬぬぬ……初心者用のジョブクエストとかは無いですかね？　皿洗いとか掃除とか荷物運びとか」

「それは【料理人】とかのジョブクエストじゃない？　多分、ジョブク

エスト自体が専門家の手が必要なクエストって感じだしなあ。……あ、コレなんかどう?」

そう言っただけは開かれたカタログの一箇所を指差しました……そこにはこう書かれていたのです。

「何々……【合計レベル1〜100までの低レベル帯同士での乱取り
難易度：一】ですか。……えーと、ギルドの訓練室で集まった人と
模擬戦するクエストみたいです。報酬は大したことないですがコレ
ならば受けられそうなのです」

「ミュウなら同じレベル帯で負ける事は早々無いだろうし大丈夫じゃない? いざとなればボクも居るし」

……格闘技の模擬戦でミメ〈エンブリオ〉を使うのはどうなんでしょう? それに依頼主が格闘家ギルドのギルド長になってますし、多分コレは初心者救済用のクエストとかじゃ無いですかね。

「まあ、とりあえず受付の人にこのクエストの受注を伝えにいきましょうか」

「オツケー、腕がなるね!」

多分、実際戦うのは私になると思うんですが……まあ、その辺りはクエストが始まってから聞いて見ればいいでしょう。



そういう訳で、私とミメはクエストを受注してギルドないにある訓練場にやって来ました……そこでは既に何人かの人々が徒手格闘による模擬戦を行なっていて、その表情は模擬戦とは思えない程に真剣なものでした。

……さて、受付の人はここに来れば後はギルド長が案内してくれると言っていたのですが……。

「おい嬢ちゃん達、そこで何をしてるんだ。ここは格闘家ギルドの訓練場だぞ」

と、そうやって私とミメが訓練場の入り口から周りを見てみると、室内に居た一人の非常にガタイのいい男性に声を掛けられました。

……ふむ、見た限りではこの人がこの格闘家ギルドで見た中で一番強い人みたいですね。

「ミュウの考えている通りだと思うよ。……この人のステータスがこのギルドで一番高い」

「ん？ 《看破》でもしたのか？ ……まあいいか。俺は【拳 聖】フィストマスターゴライアン、この格闘家ギルドのギルドマスターをしている。……それで？ 嬢ちゃん達は一体何の様なんだ？」

おっと、まずはちゃんと自己紹介をしなければならぬのです……この人が強かったので少し見入ってしまいました。

「申し遅れたのです。私は【格闘家】の〈マスター〉、ミュウ・ウイステリアと申します。こちらは私の〈エンブリオ〉のミメなのです。……今日は乱取りのクエストを受けたのでここに来たのです」

「受付の人は、ここに居るギルドマスターに詳しい話を聞いてほしいって言ってたよ」

「……チツ、あの野郎面倒ごとを押し付けやがったな。……分かった、じゃあ簡単に説明するぜ」

ゴライアンさん曰く、このクエストは格闘家ギルドがジョブ1つか2つまでの初心者の実力を底上げする為に定期的に行っているもので、この訓練場で模擬戦をしながら彼や他の格闘家達が指導を行うという形式の様です。

……指導を受けるのがクエストなのかと疑問に思いましたが騎士団の訓練などもクエスト扱いに出来る為、戦闘系ジョブの場合は自分の実力を磨く事もクエスト扱いに出来るらしいとの事です。

「まあ、模擬戦つつつても上級職への転職条件にも関わっているから全員真剣にやっってるけどな」

「転職条件？」

「ん？ 嬢ちゃんは【格闘家】なのに知らないのか……って、この世界に来たばかりの〈マスター〉なら仕方ないか。……格闘系ジョブの上級職の転職条件には対人戦が条件になっている場合があつてな。例えば、格闘家系統上級職【武 闘 家】マッシュアル・アーティストの転職条件は『【格闘家】をレベル50のカンストにする』『亜竜級以上を無手で討伐する』そして『格闘系同士

の勝負で10連勝する』になつてる」

ちなみに格闘系同士の勝負は別に命の取り合いでは無く、模擬戦でも大丈夫の様ですが、自分より圧倒的に格下の相手と戦ったり八百長をしたりした場合はカウントされたいらしいです……要するに真剣に戦つて勝敗を決める必要があるみたいですね。

「そういうのもあつて、ギルドではこのクエストを定期的に行なつて
いるんだ。……まあ、レベル100以上の連中や、もっと本格的な試
合がしたいって奴らはギデオンの闘技場を使つてるがな。ここはあ
くまで初心者救済用だ」

「成る程、ご説明ありがとうございます。……では、早速私も
模擬戦をするのです」

「ああ、一応危なくなつたら止めるからな」

そうして、私は説明してくれたゴライアンさんにお辞儀をしてから
模擬戦に加わるのでした……最後まで気を使つてくれるとは、ゴライ
アンさんはとてもいい人なのです。

まあ、師匠からは『お前が下手に戦つたら相手の心が折れかねない』
と言われて、あまり同世代の門下生と試合をさせて貰えなかったので
すが……モンスターと日常的に戦つているこの世界のティアン達な
らそんな問題にはならないでしょう。多分。



□格闘家ギルド・訓練場

「セイヤー！」

「グワーー！」

「そこまで！ 勝者、ミュウ・ウイステリア！」

今、訓練場ではミュウ・ウイステリアと【蹴士】のジョブについて
いるティアンが模擬戦をしており、相手のティアンが放つた上段蹴り
を躲した彼女がカウンターの上段蹴りを打ち込んだところだった。

……その攻撃が有効打となり相手の【蹴士】がダウンしたので、審
判は彼女の勝利とみなした。

「わーい！ またミュウが勝ったね。これで9連勝だよ！」

「……あー、そうだな。……しかし、とんでも無いなあのお嬢ちゃん」

その光景を彼女の〈ヘンブリオ〉である「ミメーシス」とギルドマスターのゴライアンは訓練場の壁際で眺めながら、各々が思った事を口に出していた……ちなみにミメーシスは自分も融合して戦うつもりだったが『僕と融合すれば亜竜級の首をネジ切れる様になるし、余裕だね！』と言ったせいで、それを危険視したゴライアンに参加を禁止させられている。

……尚、最初の内はふて腐れていたが、ミュウの連戦連勝を見たお陰で機嫌が治った様で今は素直に応援している。

「……では、次の試合はミュウ・ウイステリアとビシユマルで行う。両者前へ！」

「おや、同じ〈ヘマスター〉の人が居たのですね。【格闘家】ミュウ・ウイステリアなのです。よろしくお願いしますのです」

「おう、【力士^{レスラー}】のビシユマルだ。同じ初心者〈ヘマスター〉同士よろしく頼むぜ」

そうしてお互いが軽く挨拶した後、審判の合図によって模擬戦が開始された……開始と共にビシユマルがミュウに対して低空タツクルを見舞うが、彼女はそれをギリギリで躲して距離を取る。

それに対してビシユマルは直ぐ様方向転換をして再びタツクルを仕掛けるが、それも彼女はヒラリと躲してしまう。

「レベル差の割にステータスに差は無い……むしろビシユマルって〈ヘマスター〉の方がステータスは高いみたいだな」

「それは〈ヘンブリオ〉のステータス補正の所為かな。……僕はステ補正無いし。向こうはちゃんとあるみたいだけど」

「……成る程な。まあ【格闘家】よりも【力士】の方がステータスの上がりも良いしな」

ゴライアンとミメーシスがそんな会話をしている横で、未だに珍しい〈ヘマスター〉同士の戦いだから訓練の手を止めて彼等の模擬戦を観る者も増えてきた様だ……この場に居る殆どの人間にはミュウの方がビシユマルの攻撃を辛うじて躲している様にしか見えなかった。

……だがその中で、ギルドマスターであるゴライアンを含めて数人の上位格闘家だけが、今戦っているミュウ・ウイステリアという少女がどれだけ異常な事をしているのかを気が付いていた。

(……あの嬢ちゃん、最初の模擬戦からずつと相手の攻撃をミリメートル単位で完全に見切つて躲してるな。……しかも、躲した時の自分の身体と相手の攻撃部位との距離が全く同じになる様にしてやがる。……相手がまだ下級職一個目の新人とは言え、一体どんな目と体術してるんだ)

そうやってゴライアンが考えを巡らせている間にも模擬戦は続いており、ビシユマルはフェイントを駆使してどうにか組みつこうとするもミュウはそれらを意にも介さずギリギリで避け続けていた。

(あのビシユマルつてへマスターへは決して弱い訳じゃない。むしろこれまで見たへマスターの中は殆どが武術どころか運動の素人だったが、彼はキチンと走り方が出来るところからそれなり出来る方だろう。……だが、それ以前にあのミュウつて嬢ちゃんの体術は極まっている。……才能だけならへマスターで決闘ランク一位の【猫神】も遠く及ばず、俺すら遥かに凌駕してるな。ここまで桁外れな才能を見たのは【格闘王】の爺様以来だ)

長年の間、格闘家ギルドのギルドマスターをしていたゴライアンは非常に目が肥えており、他者の武に於ける才能を見破る事に非常に長けているのだ……が、そんな彼を持ってしてもミュウの才能の底は見えなかった。

そうしている間にも模擬戦は佳境を迎えておりビシユマルの低空タックルが遂にミュウを捉える……直前に彼女は逆にビシユマルの懐に潜り込むと、彼の襟と腕を掴みそのまま後ろに倒れこみながら足を使って投げ飛ばした。

「とりやー!」

「巴投げだとおおお!!! グハアツ!?」

「一本! ……そこまで! ……勝者ミュウ・ウイステリア!」

ミュウの巴投げは見事に決まりビシユマルは背中から床に叩きつけられ、その結果を見た審判はミュウの勝利を告げた。

……その後起き上がったビシユマルとミュウが握手をしながら会話をしているのを見つつ、ゴライアンは今後の事について思案していた。

(まあ、ギルドマスターとしては有望そうな格闘家には唾をつけておくつもりだし、それはへマスター相手でも変えない予定だが……あのビシユマルつてのは兎も角、ミュウの嬢ちゃんは下手すると爆弾になりかねないしどうするかね。……とりあえず、後でもう少し詳しく話を聞いてみるか)

そんな事を考えつつもゴライアンはその事を一旦置いて、ギルドマスターとしてクエストに於ける新人の指導を行う事にしたのだった。



「ふう、中々良い経験でした」

「お疲れ様ー、ミュウ。はいお水」

一通りの乱取りを終えたミュウは訓練場の端にいたミメーシスの下に行き、そこで渡された水を二人で飲んで休んでいた……と、そこにゴライアンが近づいて来て彼女に声をかけて来た。

「よう嬢ちゃん、お疲れ様。……少し話をしたいんだが、いいか？」

「構いませんよ。何の様でしょうか？」

「ああ……嬢ちゃんは模擬戦の時、回避する距離を意図的に一定になる様に動いてたな？」

その言葉を聞いたミュウは少し困った様な表情になりながらその問いに答えた。

「ええ、常に回避距離が5ミリになる様に意識して回避していました。……ミメが覚えた新スキルを活かすためには見切りの鍛錬が必要だと思っで行った事なのですが……やっぱり、もっとちゃんと戦った方が良かったでしょうか？」

「いや、それに関しては相手に本気を出させられなかった方が悪いかから別に良い。……それにこの模擬戦はお互いの鍛錬の為にやっているんだし、自分を鍛える為に必要だと思っって新しい戦い方を試すのは

良くある事だしな。真剣にやった以上は【武闘家】の転職条件も満たせているだろうしよ」

彼の言葉を聞いたミュウは安心した様な表情になってホツと息を吐いた……その反応を見たゴライアンは『自分の才能に倣う様な感じでは無いし、この少女は悪い人間では無いのだろう』と思い、とりあえず友誼を結んでも大丈夫だろうと判断した。

「しかし、嬢ちゃんの武術は凄いな。一体誰に学んだんだ？」

「えーと、リアル……じゃなくてあちら側の古流武術の道場で習いました。……習った時間は一年にも満たないですし、師匠からは『教え甲斐が全く無い』と言われましたがね」

「……お、おう。そうなのか……」

ゴライアンはそれらの発言に《真偽判定》が一切反応しなかった事から彼女が本物の天才であると確信し、その「師匠」とやらも教えられる事が無くなったのだろうと察した……ただ、この年齢でこれだけの才能を持ちながら、これまでの彼女の言動や雰囲気からはその事に對する自負や傲りが全く見られない事に不自然さを感じたりもした。

……彼は若く才能のある武芸者が他の同レベル帯の相手と戦った時には、僅かでも相手を見下すか自分の腕を誇りたがるものだとかつての自分の経験から良く知っていたが、彼女が戦っている際には僅かたりともそういうった雰囲気が見られなかったのだ。

だが、出会ったばかりでこれ以上の事を聞くのは性急すぎると常識的に考えたので、彼はこの程度で話を切り上げる事にした。

「まあ、何か格闘関係で相談があったら遠慮無く言ってくれ。……こつちもへマスターとの距離間はまだ掴みかねてるから、出来る限りへマスターとの齟齬は無くして置きたいからな」

「はい、ありがとうございますゴライアンさん！」

その後はミュウがビシユマルにフレンド登録を申し入れたりしたぐらいで、特に何事も無く格闘家ギルドでのクエストを終了したのだった。

掲示板回その2・とある日曜日

□??地球 とある掲示板



【増えるマスター】へ Infinite Dendrogramへアル
ター王国雑談スレ13【減るマスター】

1：名無しのへマスターへ「sage」：2043/7/19（日）

このスレはVRMMOへ Infinite Dendrogram
の「騎士の国」アルター王国の関連のスレです

基本的にアルター王国所属のへマスターへが適当に駄弁ります

専門的な事は各種専門スレを見よう！

荒らしはスルー推奨

・

・

・

137：名無しのへマスターへ「sage」2043/7/19（日）

だー！ 王都の周辺へマスターへばっかでモンスターがいらないんだ
が！

現れたモンスターもすぐにへマスターへ供が群がるし！

138：名無しのへマスターへ「sage」2043/7/19（日）

休日だからログインするヤツが多いからなあ

初心者へマスターへが大量発生してるしお陰で王都周辺の狩場は常
時満席状態だぜ

139：名無しの〈マスター〉「sage」2043/7/19（日）
モンスターが現れても〈マスター〉達がまるでラフムの様に群がる
からなあ

狩場の取り合いでなんか雰囲気はギスギスしてるし

140：名無しの〈マスター〉「sage」2043/7/19（日）
〈〉139

そう言えばみんなラフムラフムって言うけどそれって一体どう言
う意味？

141：名無しの〈マスター〉「sage」2043/7/19（日）
あー、そう言えばもう随分前のネタだからなあ、元ネタを知らない
ヤツもいるか

20年ぐらい前に流行ったFate/GrandOrderって
ソシヤゲのネタだな

142：名無しの〈マスター〉「sage」2043/7/19（日）
キャハハ！ ケイケンチ！ オイシイ！ モンスター！ タオス
ノ！ タノシイ！ アイテム！ オトセ！

143：名無しの〈マスター〉「sage」2043/7/19（日）
〈〉140

それは〈〉142みたいな連中の事
人間の欲望の成れの果て、或いは人類悪とも
詳しくはググレ

144：名無しの〈マスター〉「sage」2043/7/19（日）
〈〉140

ラフム自体はバビロニア神話に登場する神の名前なのですが…
そのソシヤゲに登場した同名のキャラが色々トラウマ物だったん

です

それで色々ネタにされてるんですよ

145：名無しの〈へマスター〉「sage」2043/7/19（日）
そのキャラが登場した直ぐ後の最終決戦で全国のユーザーがボスドロップ目当てにラスボスの配下を殲滅した事件があつて

それ以来欲望のままにモンスターを狩る行為をラフムの様だとネタにされたんだつたか

146：名無しの〈へマスター〉「sage」2043/7/19（日）
つか、ここはデンドロの掲示板だからFateネタはそっちの掲示板で喋れ

147：名無しの〈へマスター〉「sage」2043/7/19（日）
>>146
まあ確かに話がズレてるよな
後でググって自分で調べてみるわ

148：名無しの〈へマスター〉「sage」2043/7/19（日）
それにしてもモンスター少なすぎ
運営はもっとモンスターポップさせてどうぞ

149：名無しの〈へマスター〉「sage」2043/7/19（日）
>>148
このデンドロではちゃんとモンスターにも生態系があるからポップとかしません、情弱乙

150：名無しの〈へマスター〉「sage」2043/7/19（日）
モンスターとかテイアンとかデンドロってリアル過ぎるんだよ
なあ

設定も異常に細かいし

151：名無しの〈マスター〉「sage」2043/7/19（日）
一応モンスターがポップする神造ダンジョンってのもあるみたい
だけどねー

そしてアルター王国には全ての神造ダンジョンの中で最も入るのが
簡単な〈墓標迷宮〉が王都にあるのだ！

クエストで一緒だったティアンの騎士さんが言ってた！

152：名無しの〈マスター〉「sage」2043/7/19（日）
>>151

マジで！ それならマスター満杯フィールドに出る必要無いじゃ
ん！

詳しく情報プリーズ！

153：名無しの〈マスター〉「sage」2043/7/19（日）
入る条件はいたって簡単、アルター王国に所属していて【墓標迷宮
探索許可証】と言うアイテムに名前を書き込むだけ！

……尚、その許可証の相場は十万里ルだそうです

154：名無しの〈マスター〉「sage」2043/7/19（日）
>>153

よし、解散

と言うか、まともに狩りも出来ないのにどうやってそんな金稼げと
!??

155：名無しの〈マスター〉「sage」2043/7/19（日）
これでも全ての神造ダンジョンの中で一番入りやすいらしいけど
ねー

それに【許可証】自体は王国が定期的に発注するクエストをこなす
事でも手に入るよ

後お金ならジョブクエストで稼げば？ 経験値も入るし王都内で

出来るのも結構あるよ

156：名無しの〈ハマスター〉「sage」2043/7/19（日）

>>>155

それじゃあくクエストで手に入れるのが一番良さそうだな

一体どう言うクエストなんだ？

157：名無しの〈ハマスター〉「sage」2043/7/19（日）

ジョブクエストは固定パーティーだとジョブが違って受けづら
いからなあ

それに王都内のクエストってアルバイト的なヤツが多いからゲ
ム内でまでそんな事したく無い

158：名無しの〈ハマスター〉「sage」2043/7/19（日）

>>>156

王国が定期的に行ってる王都周辺及び東西南北の街道周辺のモン
スター掃討と生態調査だって

範囲が広くて騎士達だけじゃ手が足りないから外部からも人員を
募集してるらしいよ

定期的に行らないと流通に支障が出るってリリアーナさんが言っ
てた

特に今は〈ハマスター〉達が無秩序にモンスターを狩りまくっていて
生態系が大分変動してる可能性が高いから念入りにやるらしい

詳しくは騎士団の施設で聞いてみよう！

159：名無しの〈ハマスター〉「sage」2043/7/19（日）

>>>158

長文サンクス

……しかし、〈ハマスター〉の所為で生態系変わってんのか

そう言えばノズ森林の奥に行ったらデカイカマキリに襲われてデ
スペナ食らったがアレも生態系の変動が原因？

160：名無しのへマスター」[sage] 2043/7/19 (日)

俺も空から襲ってきたワイバーンに食われてデスペナったー

まだ接近戦しか出来ないのに空飛ぶモンスター相手とか無理ゲー

161：名無しのへマスター」[sage] 2043/7/19 (日)

へマスター」いっぱいだったから狩場を変えたらデカイイノシシに轢き逃げされてデスペナ

あの辺りには強いモンスターが居ないって話だったのに

でも生態系の変動が理由だと自業自得って事に……

162：名無しのへマスター」[sage] 2043/7/19 (日)

へマスター」がモンスターを狩りすぎた所為で下級モンスター減少

↓そのモンスターを餌にする強いモンスターが飢える

↓餌を探して移動

↓なんかレベルが低いのにイキってる連中（マスター）発見！

↓いただきまーす！

って感じなのかね

163：名無しのへマスター」[sage] 2043/7/19 (日)

以上の所業を持って我等の在り方は決定した

ゲームプレイヤーなど偽りの名

其は人類の誰もが持つモノにして人類史で最も有り触れた大災害

その名はへマスター」

他者と世界を顧みず己の欲望を叶えようとする『自由』の理を持つ
獣である

164：名無しのへマスター」[sage] 2043/7/19 (日)

>>>163

ちよwww吹いたwww上手いwww

165：名無しの〈マスター〉「sage」2043/7/19（日）
>>163

現状を見るとあながち間違っていないのがwww
〈マスター〉人類悪説www

166：名無しの〈マスター〉「sage」2043/7/19（日）
>>163

こうはならない様に気を付けたいね

>>158

そう言えば気になったんだけど『リリアーナさん』って誰？

167：名無しの〈マスター〉「sage」2043/7/19（日）
>>166

アルター王国の超絶美少女騎士「リリアーナ・グランドリアさん」
の事

騎士団関係のクエストで仲良くなって色々教えて貰ったよ

>>163

これはデンドロのバッドエンドルートかな？

自由は自分の行動に自分で全て責任を持つ事でもあるからねー

168：名無しの〈マスター〉「sage」2043/7/19（日）
>>167

何イ!?？ 超絶美少女騎士だと！ 実在して居たのか！

もつと詳しい情報を！

169：名無しの〈マスター〉「sage」2043/7/19（日）
詳しくは有名ティアンズレでやってるからそっち行ってねー

さつき見たらなんかファンクラブが出来てたしー

『自由』の獣がいっぱい居たよー

170：名無しの〈マスター〉「sage」2043/7/19（日）

分かった！ ダッシュで行ってくる！

171：名無しの〈マスター〉「sage」2043/7/19（日）
行ってらー

ところで>>170はファンクラブに入っていないの？

172：名無しの〈マスター〉「sage」2043/7/19（日）
超絶美少女騎士と仲が良いなんて許せん！

俺の〈エンブリオ〉で爆散させてやる！

173：名無しの〈マスター〉「sage」2043/7/19（日）
>>171

あんなアイドルオタみたい群れの中に入るのはか弱い乙女として
ちよつと……

174：名無しの〈マスター〉「sage」2043/7/19（日）
>>173

百合ならば許す！

175：名無しの〈マスター〉「sage」2043/7/19（日）
>>174

成る程、コレが『自由』の獣か……

◇◇◇

【カネが無い】〈Infinite Dendrogram〉生産スレ
5【モノも無い】

1：名無しの〈マスター〉「sage」：2043/7/19（日）

このスレはVRMMO〈Infinite Dendrogram〉における生産関連のスレです

書き込みは自由ですが情報漏洩は自己責任で
荒らしはスルー推奨

395：名無しのへマスターへ「sage」2043/7/19（日）

あー今日も首都周辺の狩場は満杯だなー

……あれ？ 俺って生産職だっけ？

396：名無しのへマスターへ「sage」2043/7/19（日）

まあ、まだ序盤だからねえ

私も今は資料整理のクエストで資金稼ぎ&知識の獲得の下積み中
だしねえ

397：名無しのへマスターへ「sage」2043/7/19（日）

せっかくへエンブリオへが生産系になっても素材を買えないと意味
が無い

くそう、私の1分の1大和を作るといふ野望が……！

398：名無しのへマスターへ「sage」2043/7/19（日）

ジョブクエストで稼ごうにもクエスト自体に金がかかる始末

普通はコネのある人に援助して貰うってへマスターへにそんなコネ
がある訳無いじゃんか！

おのれティアン！

399：名無しのへマスターへ「sage」2043/7/19（日）

まあテイアンもいきなり現れた不審者に援助しようとは思わないよねえ

いきなり現れた訳の分からない存在が「金を貸してくれ！」って言っても聞く耳持たないでしょ？

400：名無しのへマスター〈「sage」2043/7/19（日）

〉〈399

そうかも知れないが……それではゲームとしては成り立たないだろう

せめて初心者向けクエストの拡充とかはして欲しいんだが

401：名無しのへマスター〈「sage」2043/7/19（日）

ちよつと聞きたいんだけどアルター王国所属の生産系へマスター〈って今どれくらいいる？

402：名無しのへマスター〈「sage」2043/7/19（日）

はい

私アルター王国所属の【裁縫師】件【紡績師】だよ

403：名無しのへマスター〈「sage」2043/7/19（日）

ワシも王国で【鍛冶師】をやつとるな

404：名無しのへマスター〈「sage」2043/7/19（日）

僕は王国の【木工師】

405：名無しのへマスター〈「sage」2043/7/19（日）

〉〈401

それで一体何の様なんだ？

406：名無しのへマスター〈「sage」2043/7/19（日）

最近掲示板も不満を愚痴るだけでマンネリになって来たから気に

なるねえ

407：名無しの〈へマスター〉「sage」2043/7/19（日）
>>405

いや俺もアルター王国所属の【錬金術師】なんだがちよつと生産特化クランを作ってみようかなって

それでメンバーを募集してみた

目的は各々の〈エンブリオ〉を使ってティアンには作れない物を作って彼等のコネを得る事

つまり〈へマスター〉である俺達の売り込みかな

408：名無しの〈へマスター〉「sage」2043/7/19（日）
>>407

ほう面白い事を考えるな

確かに複数の〈エンブリオ〉を使えばより良い品物が出来るだろうが

409：名無しの〈へマスター〉「sage」2043/7/19（日）
でもティアンのコネってNPCに媚び売るのもなあ

410：名無しの〈へマスター〉「sage」2043/7/19（日）
>>409

だが今のところデンドロにおける流通や商業の殆どがティアンの物だしな

不定期にしかログイン出来ない〈へマスター〉では金を稼ぐ事は出来てもその辺りに食い込むのは難しいし

何より生産にはカネとコネが居るしこっちの有用性を証明してティアンに〈へマスター〉の事を認めさせないと

……全部知り合いの受け売りだけどさ

411：名無しの〈へマスター〉「sage」2043/7/19（日）

ふーんただひたすらに狩りと初心者用クエストを続けるよりは面白そうかも

412：名無しの〈マスター〉「sage」2043／7／19（日）
>>410

確かにその通りだねえ

〈マスター〉だけで経済回すのなんて無理だし生産やるならコネ作りも必要だし

まずはこつちと組めば得するとティアンに証明する事から始めるのは良いと思うよお

413：名無しの〈マスター〉「sage」2043／7／19（日）
だがいきなりクランの結成に踏み切るとはな

俺も同士を集めての生産活動の効率化は考えて居たがそれはもう少し土壌が整ってからにするつもりだった

414：名無しの〈マスター〉「sage」2043／7／19（日）
それにクラン運営するにもカネがかかるだろう？

415：名無しの〈マスター〉「sage」2043／7／19（日）
>>413>>414

そう言った意見も最もだし俺も最初から上手く行くとは思っていないがな

……だがこのままダラダラ続けてティアンが〈マスター〉に慣れるのを待つのも芸が無からうし

それにこの手の活動は先駆者の方が最終的に有利になるしな

416：名無しの〈マスター〉「sage」2043／7／19（日）
そういうチャレンジ精神は嫌いじゃないよ！

そもそも生産というのはトライアンドエラーでやる物だからね

それに王国初めての生産系クランとか話題になるだろうし僕は

入っても良いよ

417:名無しのへマスター< [sage] 2043/7/19 (日)
まあ良いじやろう

モンスター相手に鎚を振るうのも飽きてきたしのう

418:名無しのへマスター< [sage] 2043/7/19 (日)
試行錯誤も物作りの醍醐味だしね

私も参加ー

419:名無しのへマスター< [sage] 2043/7/19 (日)
クランを作るなら先に作った方が有利ではあるだろうな

420:名無しのへマスター< [sage] 2043/7/19 (日)
>>416>>417>>418

加入ありがとう!

とりあえず明日月曜日の〇〇時に王都大噴水前に集合で

421:名無しのへマスター< [sage] 2043/7/19 (日)
しかし複数のへエンブリオ< を使って1つの作品を作るっていうのは
凄く興味があるねえ

活動報告とか掲示板に上げてくれないかねえ

今後の参考とかにしたいし

422:名無しのへマスター< [sage] 2043/7/19 (日)
>>420
分かったよ

423:名無しのへマスター< [sage] 2043/7/19 (日)
>>420
了解した

4 2 4 : 名無しのへマスター↓「s a g e」2 0 4 3 / 7 / 1 9 (日)

>>> 4 2 0

オツケー

4 2 5 : 名無しのへマスター↓「s a g e」2 0 4 3 / 7 / 1 9 (日)

>>> 4 2 1

生産クランの動向も気になるな

いずれ組織を作る身としては先駆者の様子は知りたい

4 2 6 : 名無しのへマスター↓「s a g e」2 0 4 3 / 7 / 1 9 (日)

>>> 4 2 1 >>> 4 2 5

上手く行ったら宣伝も兼ねて掲示板にあげるかも

まあ最初は手探りになるだろうから大分後になるか？

4 2 7 : 名無しのへマスター↓「s a g e」2 0 4 3 / 7 / 1 9 (日)

祝え！ 騎士の国において初めての生産系クランが誕生した瞬間

を！

4 2 8 : 名無しのへマスター↓「s a g e」2 0 4 3 / 7 / 1 9 (日)

>>> 4 2 7

ウオズ湧いてて草

そう言えばもう出来たクランって他にあんの？

4 2 9 : 名無しのへマスター↓「s a g e」2 0 4 3 / 7 / 1 9 (日)

>>> 4 2 6

出来ればで良いさあ

>>> 4 2 8

皇国ではまだへマスター↓がクランを立ち上げたって話は聞かない

ねえ

430：名無しの〈マスター〉「sage」2043/7/19（日）
グランバロアでも無いな

むしろ船の上という特殊な環境に慣れるのに皆苦労している感じだ

431：名無しの〈マスター〉「sage」2043/7/19（日）
王国には確か〈月世の会〉ってクランが出来てて人を募集していた
様な

432：名無しの〈マスター〉「sage」2043/7/19（日）
俺は天地だけどやっぱり始まったばかりだからクランとか殆ど聞かないよな

433：名無しの〈マスター〉「sage」2043/7/19（日）
〈〈431〉
それって現実にある宗教組織の名前じゃなかったっけ？

434：名無しの〈マスター〉「sage」2043/7/19（日）
とにかくクラン作ると決めた以上はなんとかやって行くのでよろしく願います！



「ふむん、掲示板にも結構興味深い情報が多いね。……お兄ちゃんを真似て書き込みとか初めてやってみただけど結構面白かったかな」

「……おい美希、お前夏休みの宿題はどうした」
「今日は王都周辺に人が多いから先に現実で宿題を終わらせるという話でしたよね？」

「……いやー、ちよつと息抜き？」
「夏休みの宿題ぐらいさっさと終わらせろよ。俺は小学校の頃は1日

で終わらせてたぞ」

「……兄様の頭脳を基準にされても……」

「私達は普通の女子小学生だからね。……頭脳面は」

「分かったからさっさと宿題やれよ。こっちも大学の課題があるんだから」

PKとの遭遇

□〈ヘウエズ海道〉【斥候^{スカウト}】レント・ウイステリア

今日は7月20日月曜日、デンドロにログインした俺達は久しぶりにフィールドへと狩りに行っていた……土日は狩場が満席だった所為で王都内でのジョブクエストばかりだったからな。お陰で【^{ジエムマイスター}魔石職人】のレベルは30ぐらまで上がってしまったし。

そして、今は【ルー】の《諸芸の達人》によるジョブスキルの制限解除を活かして、メインジョブを有用な汎用スキルや索敵スキルを多く取得出来る【斥候】にしている……え？　メインジョブを選ばない汎用スキルメインなら《諸芸の達人》は意味が無いんじゃないかって？

……いや、このスキルのお陰でメインジョブを【斥候】にしても魔法を問題無く使えるし、何だかんだ言って汎用スキルは覚えておいて損はないし、索敵スキルは妹達みたいにリアルスキルで超高精度の危険感知とか出来ない俺にとっては有用だし……。

「でも、お兄ちゃんが索敵系スキルを覚えてくれたお陰で、大分狩りもしやすくなったよね」

「私も上級職に転職出来て大分強くなりましたが、流石にモンスターと遭遇出来ないとうしようもありませんし」

「……まあ、汎用ジョブとか呼ばれるだけあって【斥候】のジョブは有用なスキルをいくつも覚えるからな。役には立つんだよね」

ちなみにミユウちゃんは条件を満たしたとかで【^{グランプラー}格闘家】の上級職【^{マーシャル・アーティスト}武闘家】に転職済みである……MPに特化したジョブに就くか悩んだそうだが、上級職の方がステータスの伸びも良いし【武闘家】でもMPはある程度伸びる事からこちらにしたとの事。

……まあ、ミユウちゃんは今回の狩りでも上級職になった事で覚えたスキルとかで活躍していたし、この選択は正しかったのだろう。

「……うーん、やっぱり上級職には早く転職した方が色々有利になるみたいだね。……私も【^{メイスマン}戦棍士】はそろそろカンストしそうだし、そろそろ転職条件を満たす事も考えないと」

「俺も次は【魔術師】^{メイジ}の上級職にでも就くかな。……確か、特定の魔法属性特化型上級職の転職条件は『その属性への適性』と『その属性の魔法を一定以上で使える事』とか、後は魔術師ギルドのジョブクエスト関係だったか」

……適性はへマスターだから何とでもなるのだが、もう一つの『一定以上の魔法』には相応のMPとスキルレベルが必要らしいんだよね。

更に【魔術師】直系の上級職は数が多いし、他にも魔術師ギルドのジョブクエストとかが関わる転職条件もあつたりするから、色々どうしたのか……。

「そういえば姉様は【戦棍騎士】^{メイスマイト}にも就いていましたが、あちらの上級職はどうなのですか？」

「あー、騎士系統の上級職は転職条件に騎士団からの推薦とかがあるから今は保留かな。……まあ、戦棍士系統上級職【剛戦棍士】^{ストロング・メイスマン}の方の転職条件は『戦棍士』レベル50』『メイス装備で亜竜級以上を撃破』『メイスで生物に与えた合計ダメージが20万以上』だからどうにかなりそうだけど」

「狩りをしてる間に亜竜級モンスターとは何度か戦っているからな。……そういう連中と主に戦っているのはミュウちゃんだが」

一応、転職条件的にはパーティー単位での討伐でも余程他のメンバーに負んぶに抱っこでもない限りは条件を満たせるらしい……後、戦棍士系統には条件が難しい方の上級職もある様だが『そっちは条件がちよつと面倒くさいから保留』との事。

……と、まあ、そんな感じで適当に妹達と駄弁りながら、俺は《魔物索敵》を使ってモンスターを探していた。

「とはいえ、さつき覚えたばかりだからレベルも低いし、あんまり広範囲は索敵出来ないんだがな。……使わなければスキルレベルも上がらないし、ガンガン使っていくべきだろうが」

「そうだねー。……あー！ お兄ちゃん、次からはアイテム回収優先にしよう。そろそろ初日に稼いだお金が無くなってきたし」

「私もMP自動回復のアクセサリーが高かったので、ちよつと心許な

いのです……」

俺は【魔石職人】のクエストでそこそこ稼いでいたからまだ余裕があるが、そろそろ装備とかも上位の物に買い換えたいと思っていたので《エクスペリエンス・トランズレイション長き腕にて掴むモノ》をオフにした……ちなみに【ルー】が第二形態になった際、このスキルをオンオフするクールタイムも地味に20時間へ縮まっていたりする。

……そうやって、俺は【SP回復ポーション】を飲みつつ《視覚強化》や《遠視》なども使って周囲を探っていたのだが……。

「！……んー？ ……お兄ちゃん、人間の索敵つて出来る？」

「ああ、一応覚えているぞ。レベルは低いがな《対人索敵》………特に反応は無いが、何か感じ取ったのか？」

「……兄様、さつきからこつちに殺気を飛ばしてくるヤツがいるのです。この粘っこい感じは多分人間ですね」

俺の《殺気感知》には反応が無いが、まだレベルが低い以上はより上位の隠蔽系スキルがあれば誤魔化せるだろう……正直、ジョブスキルよりもこの天災児達の感覚の方が信頼できるからな。

「で、どうするんだ？ スキルに対する隠蔽と姿も見えない事から光学迷彩とかも使ってるっぽいし……多分、複数の《マスター》によるPKとかだと思っただが」

「ティアン……の可能性は低いですかね。こんなレベルの事が出来るなら私達程度を襲う必要は無いでしょうし」

「私の勘だとお兄ちゃんの言う通り《マスター》のPKかな。多分複数。……それで、何と無くあつちの森に行った方がいい気がするんだけど、どうする？」

ミカが指差した方向には木々が生い茂った森があつた……あちらには他に人が無いし、何よりあの森は……。

「まあ、ミカが言っているならそれでいいだろう。……向こうに既に気付かれている事を悟らせない意味もあるしな」

「それに、乱戦に持ち込むなら障害物があつた方が有利でしょうし」

「……二人ともありがとうね。……それじゃあ、より強いモンスターを求めてあつちの森に言ってみようか！」

ミカが監視している連中に聞こえる様にした提案に従う様に見える感じで、俺達はその森の中に入っていた。

◇

それから、俺達は森の中に入って時折出て来る低級モンスターを倒しつつ自分達を尾けてくる連中の様子を探っていた……。のだが……。(……モンスターを相手にしていればその隙に襲い掛かって来ると思ってたんだがな。複数の人間の姿を隠すには相応のコストが掛かる筈だし、こつちが消耗するのを待っているのか?)

(……と言うか、踏み潰されている枝や葉の音で位置がバレバレですね。これでは姿を消す意味が無いです)

(うーん、なんか全体的に雑だね。……多分、この辺りで良いっぽいしそろそろ出て来て貰おうか)

そのミュウの提案に同意する形で、俺は素早く発動した《ファイアーボール》を敵と思われる者達の所に放り込んだ……。その火の玉はどうやら姿を消している誰かに当たった様で、虚空から火ダルマになった男が地面に転がると共に、同じ様に何故か手を繋いでいた五人の男性が姿を現した。

……全員、左手に紋章があるという事は《マスター》か、これなら全員始末しても特に問題はないな。

「ぎゃああああ!!? 火があ!!?」

「お、おい! スキルが解けたぞ!」

「クソツ!!? ……テメエ、いきなり何しやがる!!?」

「姿を消してこちらを尾けてくる怪しげな連中を攻撃しただけだが? そつちこそ何の用だ」

姿を現した者達の一人であるモヒカンの男がなんか訳の分からない事を怒鳴ってきたので、とりあえず適当に答えておく……。その隙に懐から以前ちよつとだけ作った「ジェム」を取り出しておこう。

……俺の質問に対してそのモヒカンが更に何か言い募ろうとするが、それを隣にいた黒服の男が制して何か語り始めた。

「俺達は所謂PKってやつだよ。へマスターへ同士なら何をやっても罪にはならないのがこの世界でのルールらしいからなあ。……しかしよく気付けたな、コツチの隠密には自信があったんだが」

「ネチっこい殺気がダダ漏れなのです。後、足音も消せて無いのでお話しになりません」

「おいっ！ 《殺気感知》は無効に出来てるんじゃないのか!?？」

「そ、そんな筈は……ッ！ 俺のへエンブリオへのスキルは今も発動しているぞ!?？」

ミュウちゃんが辛辣に言ったその言葉に後ろにいた男の一人が別の男に文句を言い、言われた方も慌ててステータスウィンドウを確認していた。

ふむ、少し《看破》してみたがレベル差がある俺でも連中の全ての項目が黒塗りになっていたし、おそらくあの男のへエンブリオで感知系スキルが妨害されていんだろう……残念だが、ミュウちゃんのはただの技術だから意味ないが。

……だが、俺がそんな事を考えている間に何故か連中の言い争いは徐々にエスカレートしていった。

「せっかく俺のへエンブリオでMPを回復させてやったのに役に立ってねえじゃねえか!!!」

「うるせえ！ 俺のへエンブリオはちゃんと機能してんだよ！ ……それに足音を立てたのは、そこで転がってるバカのへエンブリオが触れた物しか消せない所為で森の中をまともに歩けなかったからだよ！ お陰で奇襲も出来なかつたし！」

「んだとコラア!!! そういうへエンブリオなんだからしょうがないだろ!!!」

……と言うか、後ろに居た三人がお互いを罵り合い始めたんだが……モヒカンと黒服の男も呆れた様に頭を抱えているし。

「……………随分と仲がよろしい様で」

「……………掲示板のPK板で募集した野良パーティーだからなあ……。やっぱ、PK同士で仲良く連携とか難しいかあ」

「……………次からはもつとちゃんとしたパーティーを組もう。……ほ

ら、お前ら言い争いはやめろ。多分あの嬢ちゃんが感知系のへエンブリオでも持つてたんだろ。……それよりも向こうがやる気な以上はいつまでも言い争っているとか殺されるぞ」

その光景を呆れながら見ていた俺はモヒカンと黒服に皮肉をぶつけてみるが、その二人も何か疲れた様に頭を抱えながら三人を宥めていた……そして黒服の言葉でこちらの存在を思い出したのか、三人は言い争いを辞めて俺達の方に向き直った。あの黒服の男がリーダー格らしいな。

……しかし、さつきから最後まで黙り込んでこっちを見ている最後の一人が不気味だな。三人組の言い争いにも無関心だったし、一体何を考えて「……お前達は『カップル』か?」……………へ?

「……………えーつと……今一体何と?」

「お前達は両手に花のカップルかと聞いている!!!」

「「いえ、三兄妹です」」

……なんか、ずっと黙っていた最後の一人がいきなり訳の分からない事を叫び出したので、俺達はつい真顔になってハモリながら質問に答えてしまった。

「……ふむ、この私がカップル断罪の為に習得した《真偽判定》に反応が無いということは本当の様だな」

「いや、お前そんなスキル取っていたのか?」

「だが! 美少女な妹二人を侍らせてのデンドロなどこの私が認めん!!! そんなクソ羨ましい貴様の様な男はこのボッチーが断罪してくれる!!!」

「は、はあ……そうですか……」

その男——本人が言うにはボッチーと言うらしい——は俺の事を指差しながらそんな訳の分からない事を叫び出した……そのアレな様子に俺達はおろか、向こうのPK達もどうすれば良いのか分からず困惑している様だ。

「……あの人、どうしてそんなにカップルが嫌いなの?」

「……いや、この前付き合っていた彼女に振られたばかりでな。……その鬱憤を晴らすためにあんな感じに……色々済まない」

「また、随分と愉快的な仲間達ですね」

「……………俺、この戦いが終わったらもつとちゃんとしたPKクランを作るんだ…………」

今もミカが疑問を訪ねるとモヒカンがやや申し訳なきそうに答え、ミウちゃんが皮肉をぶつけると黒服の男は遠い目をしながら虚空に向けてそんな事を呟いた……………後ろの三人も困惑している様だし、もうPKとかする雰囲気じゃ無くなってないか？

「うーん、なんかぐだぐだになって来たし、何もせずに立ち去るなら見逃すけど？」

「ふっ、悪いがそれは出来ない相談だなお嬢さん。…………この世から全てのカップルを撲滅するまで我らは戦い続けると誓ったのだ！ そうだろう、我が同士モヒカン・デイシグマ、シュバルツ・ブラツクよ!!!」

「え？ いや一緒にデンドロロやるとは言ったけどそんな事は誓って無いだろ」

「…………俺は普通にPKプレイがしたいだけなんだ…………」

流石に呆れた様な表情になったミカがそう提案したが、未だになんかハツスルしているボツチーはそれを拒絶した上で近くにいた二人に声を掛けた……………が、その二人はそんな感じの塩対応だった。

……………後ろの三人も及び腰になってるし、このまま行けば向こうは空中分解するかな？ ……と思っただが、黒服の男——シュバルツ・ブラツクは紋章から自身のヘエンブリオ〜であるらしい木製の槍を取り出した。

「生憎、ここで引く様なら俺はそもそもPKなんてやろうとは思って無いしな。…………それに、俺は強者を倒す為にこのゲームを始めたんだよ。だから、〴〵見逃してやる〴〵なんて上から目線の言い分に従う事は出来ないな！」

「…………まあ、今更ここで引く方が阿呆らしいしな。悪いが付き合ってもらおうぞ嬢ちゃん達」

「あら？ 逆効果だったかな？」

「その様ですね」

どうやらミカの提案は向こうのやる気を出させるだけの結果に終わった様で、シユバルツの方は手に持った槍をこちらに向かつて構えて、モヒカンの方も紋章から盾の〈エンブリオ〉を取り出した。

……しかし、本当に残念だ。ここで逃げていればまだ助かったかもしれないのに。

「ふつ、流石は我が同士達だ」「違う」……まあいい、ならば私も己が〈エンブリオ〉を呼び出そう！　こおい！　ベンヌウウウウ!!!」

『K I E E E E E E E E E E!!!』

それに（やや締まらない形で）続いたボツチーは左手を天に掲げると、そこから翼長1メートルぐらいの燃え盛る鳥型モンスターを呼び出した……どうやらTYPEガードナーの〈エンブリオ〉の様だな。

……それに応じる様に俺達も各々の武器を構えると、槍を持ったままのシユバルツが周り全てに聞こえる様に大きな声を上げた。

「それに俺はお前達の事を色々調べていたからな！　たった三人で亜竜級モンスターを何体も討伐しているへマスターだとな！　……つまり、それだけ多くのレアアイテムを持っているという事だ！　6対3なら勝てる！」

「そ、そうだな。こつちの方が数は多いんだ！」

「よくも燃やしてくれたなクソ野郎！　美少女二人を引き連れたにやけ顔をぶつ飛ばしてやるよ！」

「ケケケ、アイテムは山分けだぜえ！」

そして、そのシユバルツの言葉にこれまで及び腰だった後ろの三人も、それに釣られる形で戦闘態勢を取った。

「ほう、よく調べているな。……それに、その情報を後ろの連中を釣るダシに使うとは頭もキレる様だ（アイテムは俺が殆ど経験値に変えてるんだがな）」

「やれやれ、また面倒ですね（ミメによるとあの連中は全員下級職一個目ぐらいのステータスっぽいのです）」

「それにちよつと情報収集が足りてないね。……ここが何処だか分かっている？」

「何？」

前に出たミカが言ったその言葉にシュバルツは怪訝な表情を浮かべる……。それに対してミカはニヤリと笑いながら更に言葉が続けた。「ここはアルター王国にあるへ自然ダンジョンの内の一つへ狂乱の森へ……バーサーカー系スキル持ちモンスターが多数生息している王国でも結構難易度の高い危険なダンジョンなんだよねー。……ほら、もう来たよ」

『……………G A A A A A A A A A A A A A A A A!!』

ミカの説明が終わるとほぼ同時に俺達から見て右方向から身長3メートル程で筋骨隆々の鬼型モンスターが現れたのだ……。その鬼の頭上には【デミドラグ・ヘルセルクオーガ亜 竜 狂 鬼】の文字があり、血走った目で周囲に居る人間達を見回していた。

……。突如現れたそのモンスター相手にPK連中は相当動揺しているのか、全員かなり浮き足立っている。

「な！ 亜竜級モンスターだと!??」

「クソツッ！ どうする……」

「お兄ちゃん壁よろ」

「ハイハイ……。『ジエムー《アースウォール》を地面にせい！ そんなで《アースウォール》！』」

そんな動揺しているPK達を尻目に、俺は準備しておいた【ジエム】と魔法を駆使して自分達と【亜竜狂鬼】の間に土の壁を展開した……。まあ、亜竜級モンスターにとっては容易く壊せる程度の壁ではあるが、ヤツの視界から俺達を隠す程度の事は出来る。

……。そして、俺達は直ぐにその場から距離を取った。

「それじゃあ後は頑張っつてねー！」

「程よくお互いに消耗してくれるとありがたいのです」

「あそこで逃げ帰っていれば助かったのにな」

「ツ!?? ……まさか、MPKだとオオ!!!」

『G A A A A A A A A A A A!!』

いち早く俺達の目的——モンスター・プレイヤー・キルに気が付いたシュバルツが叫ぶものの時すでに遅く、タゲをPK達に移した【亜竜狂鬼】は彼等に襲いかかって行ったのだった。

……しかし、側から見ると俺達の方が完全に悪役なんだよなあ。
ま、だからと言って敵対を選んだ相手に容赦をしてやる義理も無い
が。

〈狂乱の森〉での死闘（前編）

□アルター王国・〈狂乱の森〉

アルター王国の首都〈王都アルテア〉の西部にある自然ダンジョン〈狂乱の森〉、そこでは自らの縄張りに入って来た人間を排除しようとする「デミドラグ・ベルセルグ亜竜狂鬼」と、とある三兄妹を狙ったら何故かソイツとエンカウントしてしまったPK達との戦いが（強制的に）始まるうとしていた。

『G A A A A A A A A A』

まず、真つ先に行動を起こしたのは「亜竜狂鬼」であり、一際大きく咆哮をすると同時にその血走った目を完全に狂気に染めた……発動したスキルは「アイジカルバーサーク」という理性喪失とアクティブスキル使用不可を代償に身体ステータスを激増させる狂化スキルである。

……最も「亜竜狂鬼」はこれ以外のアクティブスキルは習得していないのでデメリツトの半分は意味が無く、もう半分の理性喪失も元々目の前の敵を屠る事だけを目的としている彼にとっては大した問題ではないのだが。

『……？』
「……？ デイシグマアアアア！ 障壁を展開しろオオオ!!!」

『……？』
「……？ セブン・シヤッター
「セツ 《七の青壁》 アアア!!!」

自分達の元へ狂気に塗れながら突撃してきた「亜竜狂鬼」を見ていち早く我に帰ったシユバルツ・ブラツクは即座に大声でと指示を出し、その指示を聞いたモヒカン・デイシグマはどうか手に持った盾型の「ヘエンブリオ」を向かってくる相手に構える……そして彼がスキルを使用すると盾から5メートル四方の青色の障壁が展開されてその突撃を遮った。

これがモヒカン・デイシグマの「ヘエンブリオ」〔盾備板端 アイアス〕が有する障壁を一定時間展開するスキル《七の青壁》である。この障壁は名前通りストックが7つだけでストック1つの回復に1時間かかる代わりに、第二形態現在でも一枚につき十万程度の耐久力を有す

「非論に強固な障壁なのだ。」

「あつちよ?連続で殴られているから、ものすごい勢いで耐久値が減つてくんだけど!?!?」

だが、自分の突撃を遮られた【亜竜狂鬼】は目の前の障害を破壊しようとして、その純竜級に迫るステータスにまで引き上げられたSTRによる拳で障壁を連続で殴り始めたのだ……一発一発が4000近いダメージを叩き出すそのラツシユによって《七の青壁》の耐久値はギリギリ削られ徐々にヒビが入っていた。

……だが、その不自然な行動にチャンスを見出した人間も居た。

「いや、これはチャンスだ！ 飛び越えるか回り込めばいい筈の障壁に対してそんな行動を取っている時点で付け入る隙は有る！ ……デイシグマは障壁を追加展開してヤツの動きを封じろ！ そこをポツチーのベンヌで吹き飛ばす！」

「わ、分かった！ 《七の青壁》！ 《七の青壁》！」

「承知した。……行け！ ベンヌ！」

『K U E E E E E E !!』

そのシュバルツの指示の下でまずデイシグマが《七の青盾》を左右に追加で展開して【亜竜狂鬼】の動きを制限し、そこにポツチーが上空からベンヌを突っ込ませた……そう、狂化によって理性を失った【亜竜狂鬼】には障壁を飛び越える、回り込むなどの判断が出来ていないのである。

……そして、それを見破ったシュバルツの読み通り、【亜竜狂鬼】は上空から来るベンヌには眼もくれず目の前にある障壁を殴り続けていた。「だ。……ソノ?一枚はもう割られるか?!? 《七の青壁》！」
『ハイド・シヤッターの鋼の赤壁』！」

その名の通り狂った様に《七の青壁》を殴り続ける【亜竜狂鬼】によって最初の障壁が限界だと察したデイシグマは追加の障壁を展開し、更に《鋼の赤壁》——《七の青壁》空きスロット数×2秒間だけ

展開中の全障壁の耐久値が減らなくなる代わりに、効果時間終了後に障壁が消滅するスキル——を使った。

そして、その効果により色が赤く変わった障壁を見た彼は即座に後ろに下がり……。

「全員衝撃に備えよ！……」
《爆炎鳥》!!!
エクスプロージョン

「KYAAAAAAAAAa a a a a——ツ!!!」

「——ツ!!!」

その直後、上から【亜竜狂鬼】にぶつかったベヌヌが相手の身体のを覆い尽くす程の大爆発を起こした……ボツチーのヘエンブリオは【爆炎再誕 ベヌヌ】は自爆と再誕を能力特性とするガードナーであり、その主力スキル《爆炎鳥》は自身の破壊を代償とする分その瞬間火力は亜竜級モンスターであろうと一撃で倒せる程に強力である。

欠点として攻撃範囲が広すぎる上に威力の調整なども出来ないの自身や味方を巻き込みやすいというものがあるが、それもデイシグマの障壁を使えば味方だけを守る事も出来るので問題になつていなかった。

……このコンボはこれまで多くのヘマスターカップルを爆散させて来た彼等の必勝戦術だったのだが……。

「????????????」

「なんと????? まだ生きているのか」

爆炎が晴れたそこには全身が黒焦げになり片腕が欠損して片膝をつきながらも、未だにHPを僅かながら残して生存している【亜竜狂鬼】の姿があつた……この【亜竜狂鬼】はアクティブスキルを《フィジカルバーサーク》しか持たない代わりに、《狂気》《ダメージ軽減》《HP自動回復》などのパッシブスキルを複数持っていたのでどうにか生存出来たのである。

「いや、あの負傷ではもうまともに動けまい。……今なら俺達でも倒しきれぬ筈だ」

「そ、そうだな」

「へへへ、亜竜級モンスターを倒せばアイテムもがつぽりだぜ」

「せっかく喉けたモンスターがこうもあっさり倒されると知ったら、

アイツらはどんな顔をするだろうなあ」

「そうですね……してやったり、という感じの笑顔ではないでしょうか？」

その何故か聞こえて来た返答にPK達が振り返ると、そこには言葉通り笑みを浮かべたミュウ・ウイステリアの姿があつた……彼等三兄妹は別に逃げた訳ではなく、一旦離れる事で両者を戦わせて戦力を削りつつ漁夫の利を狙うつもりだったのだ。

……そして敵にステータスが高い相手が居る状況に於いて、ミュウのヘエンブリオ〈【ミメーシス】はその真価を發揮するのである。

『ターゲット【亜竜狂鬼】で《天威模倣》アビリティ：ミラーリングを起動。ステータスはSTR4056、END2370、AGI3147だよ』

「了解なのです」

融合しているミメーシスが行使したスキルによって【亜竜狂鬼】の《フィジカルバーサーク》による非常に高い身体ステータスを自身のそれに同期させたミュウは、そのステータスでもって即座にPK達の後方にいた三人に接近し……。

「《正拳突き》《スライスハンド》《回し蹴り》」

「ゴフウ!?？」

「えッ?」

「ゲハアツ!!!」

まず一人の胸部に拳を叩き込んでその肋骨をまとめてへし折りながら吹き飛ばし、次に二人目を手刀に斬撃効果を付与するアクティブスキルを使って相手が何をされたかも分からない内にその首を切り落とし、最後の一人は素早く後ろに回り込んでその延髄に回し蹴りを打ち込んでそのままへし折り即死させた……彼等がこの〈狂乱の森〉を戦場に選んだのはステータスを激増させる狂化系スキル持ちに對して、ミュウとミメーシスが非常に有利に戦えるからでもあつただ。

……とは言え、何もかもが彼等の思い通りに行くという訳でも無かつたが。

『aaaaa——……』

??????

『……残念だけど【亜竜狂鬼】が死んだみたいだからスキルは解除されたよ。それでクールタイムが終わる1分間は再使用不可能だ』

「では、仕方ないのでこのまま戦いましょうか」

そう、このタイミングで彼女のステータスの同期先であった【亜竜狂鬼】が【火傷】【炭化】などの状態異常による継続ダメージで死亡して光の塵となったのだ……ミメーシスの《天威模倣》は同期先が死亡した時点で解除される仕様であり、解除後に1分間のクールタイムが発生してしまうのだ。

……最も、今この場には上級職に就いているミュウ以上のステータスの持ち主は居ないので、どの道スキルを使う意味は無いと考えた彼女はそのまま三人の下へ歩いて行ったが。

「さて、後は貴方達三人だけですな」

「クソツッ！ 横入りとか奇襲とか卑怯じゃないか!?!?」

「先に不意打ちしようとした人達に言われたくありません。……それに、姉様が事前に通告した筈ですよ『今逃げるなら見逃してあげる』と」

余りにもあんまりなミュウのやり方にデイシグマは思わず文句を言うが、彼女は顔色一つ変える事無く正論で言い返した。

……それを聞いたシュバルツは苦笑しながらも手に持った槍を彼女に向けて構えた。

「ククッ、ぐうの音も出ないぐらいに正論だな。……デイシグマ、ボッチー、俺がアイツの相手をするからお前達は残りの2人を警戒しなけ。多分、また奇襲とか狙ってくるぞ」

「おや、中々鋭いのです」

「本当にねー」

「まあ、ここまで露骨にやれば普通は警戒するだろうよ」

そんな言葉と共にPK達の後方にある森の中から二人の人間——ミカとレントが姿を現した……彼等はシュバルツの読み通り奇襲を仕掛ける為に茂みに潜んで接近していたのだが、バレているなら意味がないと判断してこうやって出てきたのである。

……それを見たボッチーは剣、デイシグマは片手持ちの槍を取り出

して、彼等に向けて構えた。

「チツ！ こつちは切り札のベンヌを失ったし……つーか、それが目的でMPKを仕掛けやがったな!!?」

「まあね。あの鳥さんは危険そうだったし」

「流石に私のベンヌもこの短時間では再生させられんからな。……仕方ない、ならば私は最後の力を持ってあのコソコソと妹二人の影に隠れるだけのヘタレ野郎に一矢報いる事にしようか」

「……ほう、いいだろう。……安い挑発ではあるが乗ってやる。《瞬間装備》」

そのボツチーの挑発に対して何か思うところがあつたのか、レントは非常にイイ笑顔を浮かべながら《瞬間装備》で予備武器の《ステイールソード》を片手に装備して前に出た。

……そんな兄の姿を見た妹達は少し呆れた様な顔をしながらも、各々が相手取るべき敵に向かつていった。

◇

「さて、それじゃあ行くよー」

「くっ！ ……だが、一対一ならまだ勝算はある《七の青壁》！」

巨大なメイスを振りかぶって突っ込んでくるミカに対して、デイシグマは前方に障壁を展開する事で迎え撃つ構えを取った……この障壁は任意で解除する事も出来るので、それを利用して相手の動きを見ながら攻撃を仕掛けるつもりなのだ。

……だが、その戦術は今相対している人物には致命的なまでに相性が悪かった。

「ふははー！ 見るがいい、私の【ギガース】にあんまり使う機会が無かったスキル隠された真の力を！

《オーバースイング・ストライク》！」

「んなあ!!? 俺の障壁が割れたアアア!!!」

なんと、ミカは眼前の障壁に対して大きく振りかぶった【ギガース】を叩きつけてそのまま叩き割ってしまったのだ……無論、これは【ギガース】の現在唯一のスキル《バーリアブレイカー》の防御スキル効

果低下の力によるものである。

……実は、ミカは三兄妹の中でいち早く「エンブリオ」が第三形態に進化しており、スキルレベルとステータス補正も上がっていたので、強固な障壁を一撃で破壊する事が出来たのだ。

「今まで障壁スキル持ちなんて殆ど居なかつたから分からなかつたけど、意外と強いねこのスキル！」

「クソッ！ メタ効果持ちかよ！ 《シールドガード》！」

障壁を破壊してそのまま突っ込んでくるミカに対して、エンブリオのスキルは意味がないと判断したデイシグマは「盾士」のジョブスキルによって「アイアス」の装備防御力を上げて迎え撃つ構えを取るが……。

「残念、意味ないよ。《スタンインパクト》！」

「グアアア！ こ、これは……し、衝撃？！」

そのメイスを盾で受けた瞬間に全身へ衝撃が走ってそのまま動けなくなってしまった……レベルの上がった《バリアブレイカー》は効果範囲も広がっており、現在は装備防御力の上昇などにも減衰効果が働く様になっているのだ。

更に「戦棍士」——メイスという武器種は盾や鎧、武器などの装備の破壊、或いはそれらを無視して本体に衝撃を通す事に特化している。そして、今使った《スタンインパクト》も装備で防御された際にも本体に衝撃を与える事で短時間「硬直」させる効果のあるアクティブスキルであったのだ。

「相性が悪すぎる……ッ！ まさかこいつら最初からコレを狙って……ッ!?」

「うん、さっきの戦いを見て貴方には私が一番相性がいい気がしたからね。……貴方達は強かったから、こっちも油断せずに全力で倒させようよ！ 《インパクト・ストライク》！」

そうしてミカは動けないままのデイシグマを《インパクト・ストライク》——メイスで殴った相手の身体に衝撃による追加ダメージを与えるスキル——を使って全力で横殴りにして吹き飛ばした。

実際、自分達が戦ってもそれなりに苦戦するであろう「亜竜狂鬼」を

あつさりと倒した彼等PKメンバーの實力は非常に高く、故に最初に正面から戦っていれば無事では済まなかっただろうとも三兄妹は考えていたのだ。

……それだけ彼等の事を高く評価しているからこそ、側から見れば卑怯だと思われる様な手段を使つてでも油断や慢心無く攻め立てているのである。

「……クソツ、狙った相手が悪すぎた……ッ！」

「こつちも貴方達に狙われて凄く危なかったよ。《ハードストライク》！」

「グハアアア!!!」

吹き飛ばされ大ダメージを負った所為で動きが鈍り立ち上がる事も覚束ないデイシグマに対して、ミカは油断無く即座に追撃を掛けながら彼女にとつてのPKに対する最大限の賛辞を投げ掛けた後、上段からの振り下ろしでその頭部を容赦なく叩き潰した。

……そして、頭部を潰されてデイシグマはアイテムを撒き散らしながら光の塵となったのだった。

「……コレでこつちは片付いたかな。他の所に援軍に行つても良いんだけど、これ以上やるとマジでこつちが悪役に見えるし……。それにあの二人なら大丈夫だろうしね。……じゃあ、今の内にドロップアイテムを拾つておこう！ まあコレもデンドロの習いという事で〜」

そんな事を「ギガス」を肩に担ぎながら言ったミカは、ちゃっかりデイシグマが落としたアイテムとPK達が倒した【亜竜狂鬼】の落とした【宝櫃】を拾って自分の懐に納めたのだった。

〈狂乱の森〉での死闘（後編）

□アルター王国・〈狂乱の森〉

「リア充死すべしイイイイ!!!」

「……んな事言われても、俺は未だに彼女いない歴〇年齢なんだけどなッ！」

……そんなアホな事を言い合いながら手に持った剣で斬り結んでいたのは、PKパーティーの一人ボッチーと彼等に狙われた三兄妹の長兄レント・ウイステリアである。

先程、ボッチーが言い放った安い挑発にレントが敢えて乗った結果、彼等は〈狂乱の森〉の一角でこの様な剣での近接戦闘を演じているのだ。

「む……そうなのか。それは早とちりして済まなかった」

「……別に謝らんでいい。しかしテンションの落差が激しい奴だな……」

レントの返答が《真偽判定》によって嘘では無いと分かったボッチーはさつきまでのテンションは何だったのか、途端に落ち着きを取り戻して普通に謝った……彼のその余りの変わりぶりを見たレントは頭を抱えて溜息を吐きながら愚痴を零していたが……。

……どうやらボッチーはレントに彼女がいた事が無いと知って別に怒りを向ける相手では無いと判断したらしく、その所為かなんか空気がグダグダした戦闘を続ける様な感じでは無くなってしまった。

「とは言っても、このまま戦いを終わらせる訳にも行かないがな」

「別に構わん。……どうせそのダメージならもう終わりだろうしな」

そのレントの言葉通りボッチーの身体には無数の切り傷があり、それによるダメージと【出血】の状態異常によって彼のHPは最早風前の灯であったのだ。

……その傷はこれまでの斬り合いでレントが付けたものであり、対してレントはこれまでの戦いで一切のダメージを負っておらず無傷のままであった。

「……しかし、もう少し善戦出来ると思ったのだがな」

「そりゃあ【裁判官】^{ジャッジ}は戦闘向きのジョブじゃないから剣の扱いに補正など掛からんし、ステータスでもこちらが上回っていればこんなものだろう。……何の経験や補正も無く上手く戦える程、武術や武道は甘くない。特に対人戦ではな」

「……成る程、道理だ」

最も近接戦においてジョブの補正が無いのはレントも同じではあるが、彼にはブランクがあるとはいえかつて剣道をやっていた経験があり、そういった各種戦闘経験によってそれなりの近接戦闘能力も持っているのだ……加えてボッチーの「ベンヌ」はスキル特化型のヘエンブリオでステータス補正は低く、例え補正が無い魔法職であってもレベル差もありステータスはレントが上回っていた。

……そこまで読んでいたからこそ、妹二人が対一で戦える様に教えてボッチーの挑発に乗って接近戦を挑んだのである。

「……と言うか、お前さつきからテンションが下がってないか？」

「うむ、先程まではリア充への恨みから少しハッスルしてしまっていたが、お前が彼女居ない歴Ⅱ年齢であるこちら側の人間だと知ってからは頭が冷えた。……むしろ、彼女が居た事のある自分はリア充よりなるのでは無いかと考えてしまってたな。……リア充とは、非リアとはいつたい……?」

「すこぶるどうでもいい」

……なんか変な哲学みたいな事を言い出したボッチーに対して、それを聞いたレントは完全な無の表情になって剣を構え直した。

「とりあえず、さつきと決着をつけるぞ。……これ以上付き合ってはられん」

「まあそんな反応になるのは仕方がない、先に勝手な理由で仕掛けたのはこちらだしな。……では！ 行くぞオオオオ!!」

剣を向けてきたレントに対して、ボッチーは先程までとは一転して理性的な反応をしつつ剣を上段に構えた……そして、僅かな静寂の後にその態勢のまま全力で咆哮しつつレントに突っ込んでいった。

……そして、その勢いのままレントに向けて全力で剣を振り下ろし

……。

「……本当に気迫だけは凄まじいな」

「ガハアツ!?？」

その斬撃をレントは完全に見切って半身になって躲し、そのまま手に持った剣を横薙ぎにしてボツチーの腹部を真一文字に斬り裂いた……その一閃が致命傷となってボツチーは地面に崩れ落ちた。

……尚、ここまでレントはボツチーを仕留めきれなかったのは、彼の無駄に凄まじい気迫に少しだけ押されていた事が大きかったりする。

「……ヌウ、ここまでか……デイシグマには今まで色々悪い事をしたか。後で謝っておこう……グハア！」

「……ハアアアアツ、やつと終わったか。……色んな意味で疲れる相手だったな」

それだけ行った後にボツチーのHPは完全にゼロになって蘇生可能時間が経過して光の塵となっていった。

……それを見たレントは本当に疲れた様な雰囲気になって、頭を掻きながら大きく溜息を吐いたのだった。



……そこはこの《狂乱の森》に於ける最後の戦場、PK達のリーダー格シュバルツ・ブラックとウイステリア三兄妹の末妹ミュウ・ウイステリアが向かい合っている場所である。

「……ふむ、先程まで比べてステータスが大幅に下がっているな。あの【デミドラグ・ベルセルクオーガ亜竜狂鬼】を倒した直後にステータスが下がった以上、キミの《エンブリオ》のスキルは敵のステータスをコピーする事かな？」

『おー、大体正解だね』

「それを答える義理はないですね。……もとより、貴方程度の相手であれば素の状態ですじし」

シュバルツが手持ちの《看破》を可能とする装備でミュウのステータスを見て彼女の《エンブリオ》のスキルを予想し、牽制も兼ねてそ

れについて質問を投げかけた……それに対してミュウは融合しているミメーシスの呑気な声を聞き流しつつ、適当に誤魔化しながらお返しに笑みを浮かべながら軽い挑発を返した。

……その挑発に対してシュバルツは歯を食いしばりながら、戦意を滾らせて己の「へエンブリオ」である木槍を握りしめた。

「……いいだろう。その上から視線を後悔するといい！」《ダブルスラスト》！」

「おや、随分と沸点が低い様で……《気功闘法》《ウエポン・パリング》
そう言いながらシュバルツは即座に接近して「槍士」のアクティブスキルによる二連続の突きを放つが、ミュウは《気功闘法》——MPを消費して短時間身体ステータスを強化するスキル——と、《ウエポン・パリング》——徒手による武器防御効果を上昇させるスキル——を使ってからその軌道を完全に見切り素手で槍の側面を弾いて受け流した。

……だが、相手のその行動を見たシュバルツは先程とは態度を一転させて笑みを浮かべた。

「掛かったな！ 《輝ける命脈よ、尽き果てろ》！」

「む!?? 《バックステップ》！」

シュバルツが途端に雰囲気を変えて「へエンブリオ」のものと思われるスキルを行使した事に対し、ミュウは咄嗟に後方に跳躍して距離を取った。

だが、暫くしても自身や相手に一見何の影響も無い事に彼女は疑念を抱き……直後、自身と融合しているミメーシスから驚きの声が上がった。

『ミュウ！ 僕達のMPの最大値が物凄く下がってる！ ……これHPと同じ数値になってるよ!??』

「成る程、デバフスキルでしたか。……しかも、へエンブリオに触れるだけで効果を発揮するタイプだとは迂闊でした」

「御名答」

そう、これがシュバルツ・ブラックの「へエンブリオ」【滅神呪槍 ミステイルティン】の《輝ける命脈よ、尽き果てろ》——発動時に槍と

接触した事のある対象に『そのHP・MP・SPの中で最も高いステータスの最大値を、二番目に高い最大値を持つものと同じにする』デバフ効果を与えるスキルである。

……この「ヘエンブリオ」のモチーフは北欧神話において無敵の肉体を持つと言われた神「バルドル」を殺したヤドリギで出来た槍「ミステイルティン」であり、故にその能力特性は『強い力極振りに対する特攻』なのである。

「お前のステータスは《看破》で見たところ、ジョブとレベルに比べてMPだけが異常に高かったのだな。おそらく高いMPへの補正と、それをコストにしたステータスのコピーがその能力なのだろう。……故にまずはそれを封じさせて貰う」

「……成る程、よく見ていますね（ですが、この状況だと別にMPが減っても特に問題無いんですけど）」

『まあ《天威模倣》はまだ使えないし、使っても相手とステータス差が対して無いからね。それにジョブスキル使う分なら今のMPでも問題無いし、僕の三つ目のスキルにはMPは必要無いしね』

確かに、シュバルツが使ったスキル効果によりミメーシスとの融合で一万を超えていたミュウのMPは二千程度にまで減ってしまったもののだが、そもそも彼女はMPを《天威模倣》のコストぐらいにしか使わず【武闘家】のアクティブスキルも現在のMPで十分賄えるので特に問題にはしていなかった。

加えて《輝ける命脈よ、尽き果てろ》の接触対象には使い手である自分自身も含む仕様になっており、現在シュバルツへ三つのステータスの中で一番高かったHPにデバフが掛かっている状態になってしまっている。

……だが、これは無差別的なスキルであるが故に非常に少ないMP消費で強度の高いデバフをかけられるメリットにもなっており、更にこのスキルには追加効果もあるのだ。

「さあ、一気に行くぞー！ 《アクセルスラスト》！」

「多少早くなろうとも……むっ？？」

『ミュウ？？』

アクティブスキルによって加速しながら突きを放って来たシュバルツに対して、ミュウは籠手にある腕部分の装甲を使つて受け流そうとし……そうして槍の切っ先が籠手に接触した瞬間、その金属部分が粉々に砕け散り腕の一部が切り裂かれたのだ。

……これが《輝ける命脈よ、尽き果てろ》の『ミステイルティン』の攻撃力をその対象の減ったステータスの半分の数値だけ上昇させる』追加効果である。そしてミュウが減らされてMPが約八千、つまり現在のミステイルティンの攻撃力は四千近くも上昇しているのだ。
「ここだ！ 《輝ける身体よ、墜ち果てろ》！」

「これは……またデバフですか」

そのタイピングでシュバルツは第二スキル《輝ける身体よ、墜ち果てろ》——接触した事のある対象のSTR・END・AGI・DEX・LUCの中で最も高いステータス数値を三番目に高いステータス数値と同じにするスキル——を使った……そして、このスキルにもステータスの減少数値分「ミステイルティン」の攻撃力を上昇させる効果があるのだ。

彼の狙いはこのタイピングでAGIを下げる事でミュウの動きを鈍らせると共に、急なAGIの減少によって動きが乱れた所を更に攻撃力の上がつた「ミステイルティン」でトドメをさす事である。

「これでえ！ 《スイング・ランス》！」

『今度はAGIが下がった！ ENDと同じに！』

「了解なのです」

……だが、融合している自他のステータスの把握に特化したミメーシスの言葉で自分に起きた状況を即座に把握したミュウは、顔色一つ変えずに思わぬ腕のダメージを無視し、薙ぎ払う様に振るわれたシュバルツの槍を完全に見切つてからステータスに抛らない最低限の動きで回避した。

「……ミメ、後ストックを。《ミドルキック》」

「ガハッ!?」

『あつ!?? 了解！』

更に、そのまま彼女はミメーシスに第三スキルの為の指示を出すと

同時に、槍を振り終えたシュバルツに前蹴りを放って吹き飛ばした。

……蹴り飛ばされたシュバルツを尻目に、ミュウは自身のデバフの掛かったステータスとダメージを負った腕の様子を確認した。

『ミュウ、腕は大丈夫？』

(ええ、傷は見た目ほど大した事は無いですし、動かす分には支障は無いでしょう。……しかし油断しましたね、攻撃力が高いと掠っただけでこうなるとは。初見では分からないへエンブリオの固有スキルと言い、この世界での戦闘にはまだまだ学ぶ事が多そうです)

『後、さっきの攻撃はストック出来たよ』

(では、次の攻防で使用します。……掠っただけでコレですし、直撃させれば威力は十分でしょう)

そうしてミュウは相手の技量だけ測ってへエンブリオの固有スキルを考慮しなかった油断を反省しつつ、ミメーシスと簡単に現在の状況を話し合った……その後、彼女は態勢を立て直して再び槍を構えたシュバルツへと向き直る。

「……ダメージとデバフを食らった割には随分余裕そうだな。……追撃もしてこないとは、舐めているのか？」

「いえ、現在の自分の状況確認を優先しただけですよ。……貴方は予想以上に強かったので、ここからは全力で行かせてもらおうのです」

だが、シュバルツはその対応を自分が舐められたと考えて、怒りに染まった表情のまま質問を投げかけた……が、ミュウは涼しい顔をしながらいり返しつつ、これまで取ってこなかったリアルで習っている古流武術の構えを取った。

……その構えから相手が本気で来ると察したシュバルツは改めて槍の持ち手を握り直し、僅かな時間その二人の間は沈黙に包まれた……。

「……………行くぞ！ 《デルタ・スラスト》!!!」

その沈黙を先に破ったのはシュバルツの方であり、彼は攻撃力が大幅に上がった「ミステイルティン」を構えてミュウに向けて突っ込みながら三連撃を放った……彼が現在使っている二つのスキルは攻撃力上昇効果がある分、効果を維持する為にはMPを継続消費する必要

があるのだ。

……スキルの無制御化によって消費MPもかなり少なくなっているとは言え、現在の自分のMPでは長時間の同時使用は不可能だと判断した彼はこれ以上戦闘時間を引き延ばす事を良しとせず短期決戦を仕掛けたのだ……が。

「掠っただけでも大ダメージになる程の攻撃力……逆に言えば、当たらなければどうという事は無いのです」

「なアツ!?？」

ミュウはそれらの三連撃を全て見切り最小限の動きで完全回避したのだ……というか、彼女は元々相手の攻撃は完全に見切れていたのだ、避けようと思えば普通に避けられたのだが。

……そして、何故わざわざ攻撃を受けたのかは「ミメーシス」の第三スキルの発動条件に起因する。

『アタック・テスクチャ《攻撃纏装》スロット1』

「これで終わりです」

「ごっつ！……ハアア……!?？」

その直後、至極あっさりと槍の間合いの内側に入り込んだミュウはミメーシスのスキルが発動したと同時にシユバルツの胸部に拳を叩き込み、そこにまるで非常に攻撃力の高い槍に貫かれた様な風穴を開けた……これが「ミメーシス」の第三スキル《攻撃纏装》——自分が受けた攻撃をストックして、その攻撃力と特性を自分の直接攻撃に乗せするスキルである。

今の攻撃では先程を籠手を砕いた『攻撃力四千の刺突』をストックして、それを上乗せした拳で相手の胴体に風穴をあけたのだ。

「……やっぱり……手加減……して……」

「いえ、油断していたのは事実ですが手加減はしてませんでしたよ。……単に私もまだこの世界での戦闘には慣れていなかっただけなのです」

胸に風穴を開けられた所為でHPが全損したシユバルツが光の塵になりながら言った言葉に対し、ミュウはやや自嘲気味にそう独白した……実際、先程は相手の攻撃を掠らせる様に受ける事で最小の損害

でストックを確保する為に籠手で受けたら、そのへエンブリオの能力を読み違えて負傷してしまうという失敗を犯してしまっている。

「流石に、私は姉様の様に初見のスキル効果の危険性を正確に把握するなんて事は出来ませんかからね」

『……ミユウ、とりあえず怪我を治す為にポーション飲んだら?』

「あ、そうでしたね。痛覚オフだから忘れていました」

そう言われて彼女はアイテムボックスから「HP回復ポーション」を取り出して嚙下した……すると、それぞれの戦闘を終えたレントとミカがこの場に集まってきた。

……彼等は怪我をしたミユウを見るなり、まるで信じられないものを見たかの様な声を上げた。

「おー、ミユウちゃんお疲れ……って！ ミユウちゃん怪我したの!?？」

「ミユウちゃんが怪我するとは、そんなに相手は強かったのか?」

「ええ、普通に強かったですよ。……負傷に関しては私自身の油断が大きいですが。やつぱりへエンブリオの初見殺しは怖いですね」

彼等はお互いの戦況を簡単に話しながら思わぬ強敵をどうにか退けられた事に安堵し、それと同時にこの世界での戦闘はどんな相手でも油断は出来ない事を改めて確認しあったのだった。

そして彼等は撒き散らされたシュバルツのアイテムを回収すると、連戦の消耗もあつたので早急にこのへ狂乱の森を後にする事にした。「それじゃあ、ここからさっさと離れようか。……あんまり此処に長居するのは私達にはまだ早い気がするし」

「この森の奥には狂化スキルを持つ純竜級モンスターや、精神系状態異常を得意とするモンスターが出て来るらしいな」

「私達はまだまだ弱い事がこの戦いで分かりましたしね。……デスペナにならない様に、いのちだいじに」でいきましよう」

そうして彼等は騒ぎを聞きつけたモンスターが現れる前にそそくさとへ狂乱の森から撤退して、そのまま王都に戻って行ったのだった。

次への準備

□王都アルテア 【戦棍騎士^{メイスナイト}】 ミカ・ウイステリア

今日は7月22日水曜日、^{リアル}infinite Dendrogamが発売されてから現実で一週間が経ち、私達三兄妹は今日も今日とて夏休みを利用してデンドロ三昧な日々を過ごしています……
勿論ちゃんと休憩は取っているし、今年の夏は暑いから冷房と水分補給はしっかりとしているけど。

そして、今日はPKに襲われたりする事も予期せぬボスマスターと遭遇する事も無く、無事に外での狩りを終えて王都を散策している所なんだよ。

「ふう、今日の狩りも無事に終わったね！ ……二日目三日目みたいに狩場が〈マスター〉で溢れるって事も無くなって来たし」

「俺達を含めて初日あたりから始めた〈マスター〉のレベルが上がって、王都から離れた狩場で戦える様になってるみたいだから……
そのお陰で王都周辺は始めたばかりの〈マスター〉が普通に利用出来る様になってたしな」

「このまま〈マスター〉の行動範囲が広がれば初心者狩場が満杯なんて事は無くなるでしょうか？」

「他の街に拠点を移す人も出て来るだろうから、その内そうなるんじゃない？」

ミュウちゃんとミメちゃんの言う通り、最近では〈マスター〉の行動範囲が結構広がっているからね。掲示板でも〈決闘都市ギデオン〉など他の街に行ったってコメントが結構あったし……私達の知っている人では、確かミュウさんがリアルで三日ぐらい前に王都から出て行ってたね。

……何でも『アバターのキャラメイクをやり直せるかもしれない場所の情報を入手したクマ。……正直言って情報元はまったく信用出来ないが、実際に確かめてみるまで可能性はゼロじゃない筈クマ！』とか言ってる。

「確かにミュウさんはそんな事を言っていましたね。……しかし、アバ

ターのキャラメイクをやり直せるモノなんて有るのでしようか？」

「光学迷彩とかステータス偽装とかのジョブスキルはあるみたいだな」

「でもお兄さん、それじゃあキャラメイクのやり直しにはならないんじゃない？」

「まーしよがないけどねー。シユウさん『着ぐるみ着たまま店にいとティアンの人達に不審者を見る様な目で見られるクマ』って愚痴ってたし。……ちなみに、私の勘だとちよつと丈夫な新しい着ぐるみを手に入れるだけな気がするけど」

ティアンが〈マスター〉のやらかしに対するスルースキルを身につけるにはまだしばらくかかりそうだしね。それまでは頑張つてとしか言えないかなー。

「まあ、シユウさんなら遭難とかしても自分で何とかするだろうし放っておこう。……それよりも明日受ける【墓標迷宮探索許可証】入手クエストの準備をしに行こう！」

「確か騎士団の人達と一緒に王都周辺の街道沿いでモンスターの討伐をするんだったな。……〈神造ダンジョン〉に入る為に必要なアイテムだから確保はしておきたいな」

「これも騎士団に渡りを付けてくれた姉様のお陰ですね！ 予約制だったので早めに知れたのは大きいのです」

「予約漏れの〈マスター〉が結構いたみたいだからね」

何処からか〈墓標迷宮〉や【許可証】の事が〈マスター〉達に広がったのか、騎士団詰所はクエストを受けた彼等への対応で大わらわだったからね……私達は以前私が騎士団のクエストを受けた時にこの事を知って、そのまま直ぐに二人を誘って予約したから余裕でしたが。

……一応、他に〈墓標迷宮〉へと入る方法には『パラディン聖騎士』に転職する』って方法もあるみたいだけど、転職条件が厳しいから普通にクエストに参加した方が簡単だしね。

「とりあえず戦力強化の為にマリイさんのお店で装備を買うか。……その為に俺の【長き腕】をオフにして亜竜級モンスターを倒していったんだからな」

「冒険者ギルドでボスモンスターを目撃情報を探して、その場所を狙い撃つ作戦が思った以上に上手く行きましたからね。……情報を教えてくれたアイラさんには感謝なのです」

「お兄ちゃんの「ルー」やミメちゃんが第三形態に進化したお陰で亜竜級モンスターも安定して狩れる様になったからね。……私達が装備出来る様なアイテムは落ちなかったけど、そこは換金すれば良いだけだし」

「僕が進化した時に覚えた《エフェクト・ミラーリング転位模倣》は《アビリティ・ミラーリング天威模倣》と同時に使用出来ない……というか、どちらかしか使えない仕様だから微妙に使いづらいけど」

そう、ミユウちゃんミメちゃんが新しく取得した《転位模倣》は『指定した敵対対象一体に掛かっているバフ効果・デバフ効果・傷痕系以外の状態異常を自分に同期させる』スキルだったんだけど、《天威模倣》とは併用不可な二者択一のスキルらしい。

「でも、状態異常を多用してくるモンスターにはかなり有効だったじゃない。……《転位模倣》の同期効果を使うと指定した対象がデバフ・状態異常に掛かっていない限りは自分も掛からなくなるんだから」

「まあ、以前のシユバルツ何某にデバフを食らって苦戦したのが原因でこんなスキルになったんだろうからね。……でも、《天威模倣》と違って相手にバフが掛かって無いとステータス面で優位が取れないから決め手に欠けるんだよね」

「おそらく《転位模倣》の方は状態異常への対策がメインの形態なんだろうよ。……要は使い分けが必要だと言う事だ」

「そうですね、バナナアームズ使い易い方だけでなくマンゴーアームズ使い難い方もちゃんと特性を把握して使いこなさないとです。……それにタイプチェンジでの能力変化はロマンですからね！」

まーそれは分かるかな。私も不利になった状況を姿と能力を変えて逆転するのにはロマンを感じるし……偶に番組後半になると使われなくなるヤツが出たりするけどそれもご愛顧。クライマックスとかで急に今まで使われなかった形態が出たりするのも燃えるしね！

……そんな感じでちよつと話が脱線仕掛けた所で、ミュウちゃんが
お兄ちゃんの新スキルについて言及した。

「それに、切り札なら兄様の新しいスキルがありますし」

「……俺の新スキル《イミテーション・ブリュナク仮想奥義・神技昇華》もかなり使いづらいんだが
な。……何せ自分のジョブレベルをコストにスキルを強化するスキ
ルだし」

「えーつと、確かお兄さんのスキルは『任意のジョブ一つのジョブレベ
ルを最大30まで下げて、その分だけ指定したアクティブスキルの効
果を上昇させる』なんだったね」

「でも威力は凄かったよね！ 何せ【ジエムマイスター魔石職人】のレベルを5つ捧げた
だけの《火属性下級魔法フレイムアロー》が亜竜級の頭部を消し飛ばす威力になつた
し」

まあ、お兄ちゃん的には『実践で上手く使う為に効果範囲とか規模
とか色々検証したいんだが、レベルがコストだとおいそれとは使えな
いのが問題』らしいけど……進化によって《エクスペリエンス・プーンスター光神の恩寵》のレベル
も3になり獲得経験値も+300%になつたとは言え、レベルを上
げつつのはそれ自体が大変な行為だしね。

……後、下手にレベルを下げるとせつかく覚えたスキルがリセット
される事もあるのが最大の問題だとも言ってたね。

「まあ、このスキルのお陰で【バイロマンサー紅蓮術師】の転職条件を満たせたのは幸
いだったがな。……これで俺も漸く上級職だ」

「おめでとうなので兄様。上級職になるとステータスやスキルも強
力になりますから、戦闘もずつと楽になりますよ」

「あーいいなー二人共ー。私は【メイスマン戦棍士】はカンストしたけど、最後の
転職条件であるダメージ総量のヤツを満たすにはもう少しかかり
そう」

私の【ギガース】は新スキルとか覚ええないから二人みたいに一喜一
憂出来ないしな……その分ステ補正は高いんだけど、それを活かす
には元となるステータスが高い上級職に就かないとねえ。

……と、そんな風に私達が話しながら歩いていると、目的地である

〈ヘマリイの雑貨屋〉が見えてきた。

「あつ、お店に着いたよ」

「……じゃあ、アイテムを換金した後に買い物するか」

「この前籠手をぶっ壊されてから有り合わせの物を使ってみましたから、今日はちゃんとした物を買いたいですね」

そうして私達は狩りの後にはいつも利用していて、今やすっかり馴染みとなった〈ヘマリイの雑貨屋〉へと入っていった。



□ 〈ヘマリイの雑貨屋〉 【紅蓮術師】 レント・ウイステリア

「……はい、全部合わせて124万8000リルになるわ。……しかし、よくこれだけのレアアイテムを集めたわねえ」

「ありがとうございます。……まあ、今回は比較的ドロップ運が良かったですからね」

そんな訳で〈ヘマリイの雑貨屋〉に入った俺達は狩りで集めたアイテムをマリイさんに渡して、その代金である124万8000リルを受け取った。

初日は数万リルで一喜一憂していた俺達がこれだけの大金を稼げる様になるとは、何か感慨深い物があるな……まあ、これだけの大金でも、ちよつと装備を整えようとするとなつさり消え去るのがデンドロクオリテイなんだが……。

「おお〜！ 凄いねリルが百万超えたよ。……これもアイラさんがボスモンスターの情報を与えてくれたお陰だね！」

「本当にありがとうございます、アイラさん」

「……え、ええ……どうも。……確かに王都周辺に目撃情報があつて討伐対象に指定されそうな亜竜級モンスターの情報を教えましたけど、まさかその殆どを倒して来るとは……」

手に入れた大金を見たミカとミュウちゃんは、偶々雑貨屋にいたアイラさん——どうやら今日は冒険者ギルドが休みだったのつで実家でもある雑貨屋を手伝っていたらしい——にお礼を言っていた。

……まあ、彼女は俺達がここまで多くのモンスターを倒して来るとは思っても居なかった様でかなり驚いていたが。

「いえ、貴方達が亜竜級モンスターを倒せる実力があるのは知っていましたが、だからこそ危険なモンスターの討伐を期待して情報を渡した訳ですが……そこまで正確な位置情報は渡せなかったのに、こんな短時間で何故ここまでの数を見つけられたのですか？」

「……基本は運が良くて偶々遭遇出来ただけですよ」

「強いて言うなら危険なモンスターだったからかなー」

……尚、本当の理由は「危険なモンスター」の大雑把な位置を危険を感じ出来るミカの「直感」で把握してから、その近辺を俺が「斥候」のジョブスキルなどを駆使してボスモンスターを探し出したのが真相である。

……まあ、ミカの直感だつて都合よく発動する訳ではないし、ここまで上手く狩れたのは運の様子も強いから嘘は言っていないがな。

「じゃあ！ 資金も手に入れましたし【通行証】ゲットのクエストの為に装備を買いましょうか！」

「そうだね！ 破壊された籠手の代わりを買わないと！」

「ああ、皆さんもあのクエストを受けるんですね。……では、それに対するおススメのアイテムを紹介しましょう」

話が面倒な方向に転がりかけた時、ミュウちゃんとミメちゃんが話を誤魔化す為に本来の目的を声高く言ってくれたお陰でアイラさんの注意は別の方に向けてくれた様だ……彼女が空気を読んでくれただけかもしれないが。

「ちゃんと紹介してねーアイラ。なるべく高いやつをー」

「キッチンと彼等の予算に合わせた物を紹介します。……合計レベルはレントさんが100以上、ミカさんとミュウさんが50以上ですか……ではこちらですね。後は外での長期間行動に使えるアイテムもついでに紹介しましょう」

そう言つて、アイラさんが紹介してくれたのはMPを込めると飲める水が出て来る水筒型マジックアイテム、長期保存出来る携帯食、テントなどの各種キャンプセットと言つた初心者が使う野外用アイテ

ムだった……この世界にはアイテムボックスがあるからこれだけ持って行っても嵩張らないのである。

ちなみに携帯食や水筒が「初心者用」なのは、一定以上の実力者とかになると時間遅延・停止機能の付いた高級アイテムボックスに水や食料を詰め込んでいるからの事。

……そして装備についても、彼女は俺達の戦闘スタイルや意見を聞いてから最適な物を選んでくれた。

「基本は魔法で妹達を支援していますね。後、たまに剣を使った近接戦も」

「では、レントさんにはまず今使っている物の上位版である【マジックローブ・3】と【マジックトレントの杖】を。そして【紅蓮術師】である貴方に合わせて火属性魔法効果及び火属性耐性が上昇する【紅蓮魔導の手套】と、魔法剣士用の剣でMPに補正が入り更にMPを込める事で一時的に攻撃力を上げる《マジックエッジ》スキルの付いた【シルバー・マジソード】がおススメですね。……後は魔法職だとMPが幾らあっても足りない【MP回復ポーション】を沢山買っておきましょう」

「【ライオット】も良い装備なんだけど、私って回避が上手く攻撃があんまり当たれないから《ダメージ軽減》が意味ないんだよね」

「それでは動きやすい軽鎧でAGI補正と範囲攻撃である風属性耐性がついた【ウインドスケイルアーマー】上下セットと、AGI補正と低レベルですが【麻痺】【拘束】耐性が付いた【不縛のブーツ】ですかね。……後はSTRを上昇させる籠手装備【パワーガントレット】やアクセサリーの【怪力の腕輪】辺りでしょうか」

「籠手はなるべく頑丈な物を。後スキルの都合上ダメージを受ける機会が多くなりそうなのです」

「僕のスキルの都合上HP・MP・SP以外は上がっても余り意味はないかも」

「でしたら《ダメージ軽減》《武器ダメージ減少》スキルの付いた【鋼の武闘着】上下セットと、SP補正が付いていて頑丈な【ミスリルアロイ・ガントレット】でどうでしょうか？ ……後は【麻痺】【脱力】

耐久性付きで装備攻撃力が高めな【鬼人の脚甲】が有りましたね」

……アイラさんってこういうの本当に丁寧を選んでくれるよなあ。【鑑定眼】で見るとどれも今装備出来る中ではトップクラスの性能で、全部合わせても今回の儲けで買える値段になっているし。

とりあえず、彼女には丁寧にお礼を言った上でこれらのアイテムを全部買う事になった……お陰で今回の儲けが殆ど吹き飛んだが、まあ必要経費だろう。

「は〜い、お買い上げありがとうございます。お陰で在庫がかなり捌けたわ〜。……今後もサービスするから、またいっぱい買って行ってね〜」

……ひよつとしたら、アイラさんの行動含めて全部マリイさんの計算通りな気がして来たが……気の所為と言う事にしておこう……。

「今日も本当にありがとうねアイラさん！ ……何か困った事があったら言ってね、可能な限り力になるよ」

「分かりました、もしそんな事があったら頼みますね。……それでは、今度のクエストも頑張ってください」

そうして、俺達は準備を可能な限りの整えた上で【墓標迷宮探索許可証】獲得クエストに挑む事になったのだった。

掲示板回その三・PKとかモンスターとか

□??地球 とある掲示板



【ヤルか】へ Infinite Dendrogram へ PK 専門スレ
3 【ヤラレルか】

1. 名無しの PK へマスター へ 「sage」: 2043/7/19 (日)
このスレは V R M M O へ Infinite Dendrogram
m への PK (プレイヤーキラー) 専用のスレです

デンドロで PK をやって行くという人だけ書き込みましょう

荒らしは……PK の民度的にはしようがないが出来るだけスルー
推奨

.

.

.

45. 名無しの PK へマスター へ 「sage」: 2043/7/20 (月)
それにしてもこのスレは進みが遅いよな

46. 名無しの PK へマスター へ 「sage」: 2043/7/20 (月)
そりゃあ PK やる様なヤツが積極的に掲示板に書き込んだりしないだろ

47. 名無しの PK へマスター へ 「sage」: 2043/7/20 (月)
書かれる内容も『○○をキルしたぜー』みたいなばかりで面白

が無いし

信用出来ないから詳細をかけや

48・名無しのPK〈マスター〉「sage」2043/7/20(月)
自分の手の内を明かしたくないのは理解出来るけどな

：そう言えば以前に掲示板でPKパーティーを募集したヤツが居たな

49・名無しのPK〈マスター〉「sage」2043/7/20(月)
確かアルター王国のPKだったっけ

PKの野良パって上手く行くのか？

なんか空中分解しそう

50・名無しのPK〈マスター〉「sage」2043/7/20(月)

>>49

空中分解はしなかったが振り返りにはあつた

：オノレあの女共、次は絶対にリベンジしてやる

51・名無しのPK〈マスター〉「sage」2043/7/20(月)

あれ？ ご本人登場？

52・名無しのPK〈マスター〉「sage」2043/7/20(月)

ていうか振り返りかよ、はーつつかえ

53・名無しのPK〈マスター〉「sage」2043/7/20(月)

まあまあ、新鮮な話のネタが来た事だし話を聞いてみようぜ

：このスレ当たり障りの無い事しか書かれないから暇なんだよ

54・名無しのPK〈マスター〉「sage」2043/7/20(月)

然り然り

55・名無しのPK〈マスター〉「sage」2043/7/20(月)
〓〓53

各々の能力とかは書くわけにも行かないけど概要ぐらいならいいぞ

…この屈辱を忘れない為、それに何より奴らへのリベンジを誓う為に敢えて屈辱の記録を晒そう……！

56・名無しのPK〈マスター〉「sage」2043/7/20(月)
き、気合い入ってんなー(汗)

57・名無しのPK〈マスター〉「sage」2043/7/20(月)
返り討ちにされてもリベンジに走れる気概があるのは良いPK

58・名無しのPK〈マスター〉「sage」2043/7/20(月)
例えデスペナにされても

『そのツラ覚えたからなあ……！ 地獄の底まで追い詰めて絶対に仕留めてやる……！』

と言える人間は天誅系PKの適正がある。

59・名無しのPK〈マスター〉「sage」2043/7/20(月)
うーん、PKスレらしく殺伐として来たぞう！

60・名無しのPK〈マスター〉「sage」2043/7/20(月)
とうか誰に返り討ちにされたんだ？
女達って言ってたから女子パーティー？

61・名無しのPK〈マスター〉「sage」2043/7/20(月)
〓〓60

王国にいる男一人女二人で三人組の〈マスター〉

本人達が言うには三兄妹らしく真偽判定で確認済み

亜竜級モンスターを倒してるって噂になってたから高価なアイテ

△狙いで襲った

62・名無しのPK〈マスター〉「sage」2043/7/20(月)

ほーん、亜竜級倒せるとかかなり強い連中だな

そんな奴らを狙うとは中々のチャレンジャーだ

63・名無しのPK〈マスター〉「sage」2043/7/20(月)

俺も亜竜級ぐらいなら倒せるがな

っーかそんな強い連中狙ったら返り討ちにされる可能性が高いだ
ろ

相手選べよアホか

64・名無しのPK〈マスター〉「sage」2043/7/20(月)

>>>63

雑魚ばかり狙っても面白く無いだろ

俺は強者を地面に這いつくばらせたいからPKやってんだ！

65・名無しのPK〈マスター〉「sage」2043/7/20(月)

oh::中々ファンキーなヤツだぜ::嫌いじゃないわ！

66・名無しのPK〈マスター〉「sage」2043/7/20(月)

まあPKによって目的は様々だからな

:::とか話がずれ始めてるから早く詳しい話プリーズ

良い感じにスレもあつたまつて来たしネタを早よ

67・名無しのPK〈マスター〉「sage」2043/7/20(月)

>>>66

分かった。とりあえず産業で説明する

六人各々の能力を使って姿を消しながら奇襲しようとしたが相手
に見破られる

止む終えずそのまま襲いかかろうとしたらカウンターでMPKに

会う

そのモンスターを何とか倒したら、もう用済みと言わんばかりに皆殺しにされた

68・名無しのPK〈マスター〉「sage」2043/7/20(月)

>>>67

……んんん??? ちょっと意味がわかりませんね

69・名無しのPK〈マスター〉「sage」2043/7/20(月)

姿を消しながら奇襲しようとしたが見破られる↓まあ分かる

カウンターでMPK↓んん?

用済みと言わんばかりに皆殺し↓……有名PKでも狙ったの?

70・名無しのPK〈マスター〉「sage」2043/7/20(月)

PKに失敗した負け犬の遠吠えかと思ったら妙な感じになったな
ネタにしたいから詳細を話すが良い

71・名無しのPK〈マスター〉「sage」2043/7/20(月)

せいぜい嘲ってやるぜ!

72・名無しのPK〈マスター〉「sage」2043/7/20(月)

>>>70

何様だテメエ……まあ話すけど

まず三兄妹を狙う為に各々の能力を使って光学迷彩と探知スキル
妨害を使って接近する作戦を立てた

↓だが森の中に入った連中を追跡したら既に気付いていたらしい
相手が先制で火球を発射して来た

↓それでも数では優っていたから戦おうとしたら『ここが何処だか
分かってる?』と言われる

↓直後に亜竜級モンスターが襲来

↓実はそこは強力なモンスターが出没する自然ダンジョンだった

んだよ！

↓連中は魔法で目眩ししてモンスターのタゲを押し付けて逃走

73・名無しのPK〈マスター〉「sage」2043/7/20(月)
長文御苦勞……しかしこれは、どういう事だつてばよ？

74・名無しのPK〈マスター〉「sage」2043/7/20(月)
>>72

この鮮やかな手口……MPK専門の連中かな？
追跡に気付いた上で敢えてダンジョンに誘い込む辺りプロっぽい

75・名無しのPK〈マスター〉「sage」2043/7/20(月)
これってアルターと天地間違つてない？

76・名無しのPK〈マスター〉「sage」2043/7/20(月)
>>75

いえ、天地のPKならそんなまどろっこしい事はせずに問答無用で
斬りかかるので違うでしょう

77・名無しのPK〈マスター〉「sage」2043/7/20(月)
天地エ……

78・名無しのPK〈マスター〉「sage」2043/7/20(月)
>>72の続き

現れたモンスターをどうにか倒した俺達「アイツらもザマアないぜ
！」

↓そこに背後から三人の内一人が背後からアンプッシュユ！

↓イヤーツ！ グワーツ！

↓デデーン！ 三人アウトー！ しめやかにデスペナ！ ナムア
ミダブツ！

79・名無しのPK〈マスター〉「sage」2043/7/20(月)
うわあ……

完全に用済みになったヤツを始末する気満々じゃん

80・名無しのPK〈マスター〉「sage」2043/7/20(月)
完全にプロMPKの犯行ですねコレは
行動に迷いが無さすぎる

81・名無しのPK〈マスター〉「sage」2043/7/20(月)
>>>78の続き

三兄妹「ドーモコンニチハ、PKスレイヤーデス。…ハイクを読み、
カイシヤクしてやる」

↓そうして残った俺達三人はそれぞれ一対一でヤツらと戦う事に
↓俺はアンブッシュして来たヤツと戦って相手の武器を破壊する
など善戦した

↓のだが、一瞬の隙を突かれて素手で胸に風穴を開けられて死亡！
グワァー！

↓他の二人もモンスターに手札を使い切っていたのもあって普通
に敗北、ナムサン！

82・名無しのPK〈マスター〉「sage」2043/7/20(月)
南無三！

83・名無しのPK〈マスター〉「sage」2043/7/20(月)
素手で胸に風穴……なんというカラテの練度！

84・名無しのPK〈マスター〉「sage」2043/7/20(月)
……改めて見てみると完全に計算づくだよコレ
実はPKK専門の連中とか？

85・名無しのPK〈マスター〉「sage」2043/7/20(月)

先にモンスターぶつけて戦力を削る辺りとか完全に計算づく

86・名無しのPK〈マスター〉「sage」2043/7/20(月)
次こそは絶対にリベンジしてやるんだ……

その為にデスペナ明けたらレベル上げと技術を磨かないと

87・名無しのPK〈マスター〉「sage」2043/7/20(月)
>>86

また一人、修羅の道を行く者が増えたか……

88・名無しのPK〈マスター〉「sage」2043/7/20(月)
後はちゃんとしたPK仲間を集めたい
やっぱり野良パだと行動方針や目的の違いとかがでかいわ

89・名無しのPK〈マスター〉「sage」2043/7/20(月)
まあ一口にPKと言っても色々だからな
PKやってる以上は行動にも問題あるだろうし目的意識の共有は
必要

90・名無しのPK〈マスター〉「sage」2043/7/20(月)
リスクが少ない〈マスター〉だけを狙うヤツ
テイアンも狙ってヒヤツハーするヤツ
俺は自分より強いヤツに会いに行くヤツ
弱いヤツ甚振って無双したいヤツ
PKも色々

91・名無しのPK〈マスター〉「sage」2043/7/20(月)
まあ頑張れ、特に応援はしないけど



【ゴブリンとか】〈Infinite Dendrogram〉アル
ター王国モンスター情報スレ11【ウルフとか】

1：名無しの〈マスター〉「sage」：2043/7/19（日）

このスレはVRMMO〈Infinite Dendrogram〉
に於けるアルター王国のモンスター情報を書き込むスレです
モンスターの目撃情報・生態系・疑問点・UBMの事などご自由
に

荒らしはスルー推奨

・
・
・

137：名無しの〈マスター〉「sage」2043/7/22（水）

アバーツ！ ちくしょうデスペナだ！

一体何が起こったんだよ！

いつに間にか死んだんだけど！

138：名無しの〈マスター〉「sage」2043/7/22（水）

おー、荒れてんなー

とりあえずモチツケ

そして冷静に情報を書き込むんだ

139：名無しの〈マスター〉「sage」2043/7/22（水）

アンブツシュでも食らったかな？

隠密効果持ちのモンスターにやられるのは割と良くある（一敗）

140:名無しの〈マスター〉「sage」2043/7/22(水)
>>138

俺は王都の近くで普通に狩りをしていたんだがいきなり何かに引き寄せられたんだ

そして気が付いたら生き物の体内っぽいところに居てそのまま死んだ

……今思えばアレは食べられたんじゃないかと思う

でも周りには何も無かったしなあ

141:名無しの〈マスター〉「sage」2043/7/22(水)
成る程、分からん

142:名無しの〈マスター〉「sage」2043/7/22(水)
>>140

姿を消せるモンスターに丸呑みにされた感じかな?

でも王都の周辺に迷彩能力があつて人間を丸呑みに出来るぐらい大きなモンスターはいたかな?

最近出来たWikiにも載ってないし

143:名無しの〈マスター〉「sage」2043/7/22(水)
デンドロの生態系は結構変わるらしいからwikiのモンスターの分布はあんまり信用出来ない

この前目撃された影を操る狼型の〈UBM〉の例もあるし

144:名無しの〈マスター〉「sage」2043/7/22(水)
〈UBM〉って?>

145:名無しの〈マスター〉「sage」2043/7/22(水)
>>144

ああ!

146：名無しのへマスターへ「sage」2043/7/22（水）
〈UBM〉に関しては最近出来たデンドロウィキに乗ってるから
そっちを見よう！（ダイマ）

一応王都周辺のモンスターも現地のティアンに聞いたりしたのを
載せてあるし！

ぶ、分布に関しては変わる事も多いけど……

147：名無しのへマスターへ「sage」2043/7/22（水）

あ、編集部の人かな。お疲れ様です

はい、そこで外来種をドーン！

148：名無しのへマスターへ「sage」2043/7/22（水）

>>>147

ウワーーーーーッ！ ヤメろーーーーーッ！ 折角調べたの
にーーーーッ！

149：名無しのへマスターへ「sage」2043/7/22（水）

wiki編集部は大変そうだなあ

デンドロは情報量多いしねー

150：名無しのへマスターへ「sage」2043/7/22（水）

まあwikiには助かってるしコレからも果てない情報集めを頑
張ってほしいですね

151：名無しのへマスターへ「sage」2043/7/22（水）

俺達はまだ登り始めたばかりだからよ

この果てしないデンドロウィキ情報坂をよ……

152：名無しのへマスターへ「sage」2043/7/22（水）

止まるんじゃねえぞ……

編集部が止まらない限りwikiはその先にあるんだからよ……

153：名無しのへマスター<「sage」2043/7/22（水）
何という心温まる声援（白目）

154：名無しのへマスター<「sage」2043/7/22（水）
あ、デンドロのモンスターに関する質問はここで良かったでしたっ
け？

155：名無しのへマスター<「sage」2043/7/22（水）
お？ 新規さん？ 何かあるなら好きに書き込んで良いよー

156：名無しのへマスター<「sage」2043/7/22（水）
情報は常に歓迎していますよ

157：名無しのへマスター<「sage」2043/7/22（水）
>>155ありがとうございます

えーつと、俺はへサウダ山道<で狩りをしていたんですけど
その時に倒したゴブリンがアイテムを落とさなかったんです
……これってバグですかね？

158：名無しのへマスター<「sage」2043/7/22（水）
>>157

モンスターを倒してもアイテムを落とさなかった？ ……それは
野生のモンスターだったんですよね？

デンドロのタイムモンスターや召喚モンスターは死んでもアイテ
ムを落とさない設定なので

159：名無しのへマスター<「sage」2043/7/22（水）
間違っって他人のモンスターを倒しちゃったとか？

後はゴブリンを召喚するモンスターが居て、それは召喚獣だったと
か

160：名無しのへマスター<「sage」2043/7/22（水）

>>158

その場に居たのはゴブリン10体ぐらいで俺達のパーティー以外は人の姿も見えなかったですね

後、その場に居たのは全部倒しましたがけど誰もアイテムを落とさなかったです

パーティーの中に探知系へエンブリオ<持ちの人がいたので召喚士やテイマーが居たら分かると思うんですが……

161：名無しのへマスター<「sage」2043/7/22（水）

成る程ー……さっぱり分からん！

162：名無しのへマスター<「sage」2043/7/22（水）

普通のゲームならバグを疑う所なのだが……デンドロだと不自然な現象もへエンブリオ<とかの所為と言えなくも無いしなあ

163：名無しのへマスター<「sage」2043/7/22（水）

知りたければ現地で調査するしか無いな！

……というわけで、編集部の皆さんお願いします！

164：名無しのへマスター<「sage」2043/7/22（水）

……調査って物凄く大変何だが……人材が、人材が足りないイイ……！

wiki編集部はやる気のある人材はいつでも募集です！

165：名無しのへマスター<「sage」2043/7/22（水）

デンドロは謎がいっぱいだから頑張つてね<

166：名無しのへマスター<「sage」2043/7/22（水）

王都周辺もなんか騒がしくなって来たな<

……今度やるクエストは大丈夫かな？



「よし、改めて掲示板でリベンジの誓いを立てた事だし、今度こそあの三兄妹を血祭りに上げてやる……！ その為には、まず今度受けるクエストで【許可証】を手に入れてダンジョンでのレベルアップを「たかし貴志みちく！ もうご飯よく！」はい！ 今行くく！ ……とりあえず、小学校の夏休みの内にレベル上げだな」

第2章 【墓標迷宮探索許可証】を入手せよ！
今回のイかれたメンバーを紹介するぜ！

□王都アルテア・南門前 マーシャル・アーティスト【武闘家】 ミユウ・ウイステリア

はい、そういう訳で私達ウイステリア三兄妹は【墓標迷宮探索許可証】を入手する為のクエストである【王都周辺及びその街道沿いのモンスター討伐・調査の手伝い 難易度：三】を受けて、今は同じ様にクエストを受けたヘマスターやティアンの騎士達と共に王都アルテア南門前にやって来ているのです。

このクエストは王国が王都と各街の交通網を確保する目的で定期的に発注していて、私達の様な外部協力者は基本的に騎士団の人達に着いて行き、彼等がモンスターを討伐したり周辺の調査をする事を手伝うのが主なクエストの内容となっています……が、今回は報酬である【墓標迷宮探索許可証】に釣られた多くのヘマスターがクエストを受けに来たので多少形式を変更して、騎士1〜3人とヘマスター複数名でパーティーを組んでそれぞれ王都周辺や街道沿いの担当する地点を回るといった形式になっている様なのです。

……そして、私達は王都の南側にある「サウダ山道」から「ネクス平原」辺りを担当するらしいので、こうやって南門前に集まっているという訳ですね。

「しかし、これだけ多数のヘマスターに原価十万里ルの【墓標迷宮探索許可証】を報酬としても大丈夫なのでしょうかね？」

「その辺りは特に問題無いですね。……元々、神造ダンジョン「墓標迷宮」の探索は、出土したレアアイテムを王国の市場に下ろす事を含めてアルター王国の重要な産業の一つですから。なので【許可証】を持つている人間は多い方が良いでしょう。この「十万里ル」という値段も『王国所属でこれだけのお金が稼げるならある程度信用が置ける』という意味での値段ですし、このクエストも騎士団の仕事の手伝いをキチンとしてくれる事で【許可証】を渡しても問題無い相手だと判断する為のものですからね」

私はふと漏らした疑問に答えてくれたのは、今回私達と一緒にパーティーを組む事になった近衛騎士団所属の【天馬騎士】ベガサスナイトリリィ・ローランさんでした……名前からも分かりますが彼女はアイラさんの妹さんだそうです。姉様が言っていました。

ちなみに私達のパーティーにいる騎士は彼女一人であり、これは『万が一に備えて一つのパーティーに騎士を最低限亜竜級モンスターに対抗出来る程度の戦力を持つ様に配置する』という騎士団の方針によるものだそうです。

……つまり、彼女は単独で亜竜級モンスターと互角に渡り合える実力を持つという事の様です。凄いですね。

「後、気になったのですが近衛騎士団というのは王族や王城を守る事を主任務としていると聞きました……が、この任務にも結構な数が参加している様でしたが大丈夫なんでしょうか？」

「ああ、元々近衛騎士団には王族・王城の守護以外にもアルター王国最精鋭部隊として他の騎士団への救援を行う遊撃部隊としての役割もあつて、今回は多くの「マスター」がこのクエストに参加したので騎士団の人手が足りなくなつて手伝いに来たのですよ。……それに王城には「大賢者」殿と「天騎士」殿が詰めていますから。……あのお二人が居れば、それ以外の近衛騎士の数が多少増減しようと総戦力的には誤差の範囲内です」

私のそんな質問に対して、リリィさんは薄い笑みを浮かべながらそんな事を言い放ちました……冗談を言うような雰囲気に見えました。目が笑っていないかったので、多分彼女が言った事は事実なんですよ。うね……。

……ちなみに私がリリィさんとばかり喋っているのは、兄様と姉様が同じパーティーに居る別の「マスター」達に挨拶をしているからなのです。

「やあエルザちゃん、久しぶりだね！ また一緒にクエストを受けられるなんて嬉しいよ。……しかし、前と比べるとガードナーの数が増えているし、更にはタイムモンスターも居るとは見違えたよ」

「はい、ありがとうございます。……あれから「ワルキュー

レ」が第三形態になったお陰でアリアにも仲間が増えましたし、私も【従魔師】^{テイマー}としてモンスターをタイムして戦力を整えてみたんです」
姉様が話して居るのは今回のクエストでパーティーを組む事になったへマスターの一人である【従魔師】のエルザ・ウインドベルさん、姉様とは以前に騎士関係のクエストで一緒になってフレンド登録をしたそうなのです。

「お久しぶりですミカ殿。今日はよろしくお願いします」

「初めまして、次女のセリカです。回復を担当して居るので怪我をしたら仰って下さいね」

「ワルキューレ」三女のトリムだよ！ よろしくね」

そして、エルザさんの側には同じ顔をしている三人の女性がまるで従者の様に付き添っていました……彼女達がエルザさんのへエンブリオ＜【代行神姫 ワルキューレ】なのだそうで、それぞれ長女のアリアさん、次女のセリカさん、三女のトリムさんと言うのだそうです。

そして、彼女達は固有スキルの効果でへエンブリオ＜でありながらへマスターと同じ「ジョブ」に就く事が出来るらしく、それぞれアリアさんが【騎士】^{ナイト}、セリカさんが【司祭】^{プリースト}、トリムさんが【戦士】^{ファイター}に就いているらしいです。

「ふーん、モンスターの【テイル・ウルフ】もこうして見ると結構カワイイね！ ……普段は適当に叩き潰してミンチにしてるから分かっていなかったよ」

『ツ!?? B A U W A U!?? (主イ!?? コイツ目がマジです?!?)』

『K U E E E …… (この少女からは何かこう恐ろしい気配を感じるのですが……)』

「え、えーつと……ミカさん、あまり怖がらせないで下さいね……」

それに加えて彼女はタイムモンスターとして【テイル・ウルフ】のヴェルフと【ウインド・イーグル】のウオズを従えており、実に強力そうなチームを組んでいます。

……後姉様、ただの冗談だと思えますがその二匹は凄く怖がついてる様なので自重して下さい。姉様の「直感」時の雰囲気は感覚が鋭

い者からすると空恐ろしいモノを感じるので……。

「おうレント、今日はよろしく頼むぞ」

「ああ、こちらこそよろしく頼むアット」

別の所では兄様が一人の男性——リアルでデンドロの情報が載ったホームページを作っているへWiki編集部・アルター王国支部の克蘭オーナーであるアット・ウイキさんと話していました……何でも以前【ジェムマイスター魔石職人】のジョブクエストで知り合ってフレンドになったそうです。

「しかし、その合計レベルに加えてもう既に上級職か。……やはり、お前のへエンブリオは獲得経験値増幅系か？」

「その辺りはご想像にお任せしよう。……それよりもデンドロWikiは俺も見たぞ。アルター王国の部分は中々良い感じに纏まっていたじゃないか」

「まだ、王都とその周辺の情報を僅かながら纏められたただけだがな。……まあ、お前が言っていた事を参考にしてティアンへの聞き込みを重視しながら情報を集めたお陰で、他の支部よりはやや情報量が多くなったが」

ちなみにへWiki編集部への他の克蘭メンバー達も一緒に来ていたらしいのですが、人数分けの関係上あぶれてしまいこちらに回されたそうなのです……まあ組み分けの際にはへマスター同士の揉め事を減らす為に出来る限り顔見知り同士で組む様にしていたので、偶々この空きパーティーに兄様という知り合いが居た彼は自らこちらに来た様なのですな。

……それ故に、この様に都合よく知り合い同士が組むパーティーとなったのです。

「七大国の中で唯一侵入方法が分かっている神造ダンジョンへ墓標迷宮はこのアルター王国の目玉だから、なるべく早く早く自由に入れる様にしておきたい。……市場価格が十万里ルもする以上へWiki編集部へ全員分の【許可証】を用意するのは今のところ難しいからなあ」
「まあ確かに首都の地下にある最下層不明のダンジョンとか、実にエンドコンテンツ感があるからな。情報を上げればホームページはさ

ぞかし賑やかになるだろうさ」

……ふむ、まあこの様にパーティー同士の中も良い様ですし、これならこの【墓標迷宮探索許可証】入手クエストもどうにかなるでしょう！

『……それでミュウ。現実逃避的にモノを考えるのも良いけど、あつちの彼はどうするんだい？』

「……どうしましょう、ねえ……」

「……………」

そんなミメの声を聴きながら、私は先程からずっとこちらの事を睨みつけてくる男性——先日、私達を襲って来て返り討ちにあつたPKの一人であるシュバルツ何某さんにどう対応しようかと途方に暮れました……以前、彼を直接デスペナにしたが原因なのか、最初に顔を合わせてからずっと私の方を睨んで来ているんですよね。

……ちなみにパーティー人数が七人なのは、リレイさんがサブジョブ入れている【指揮官】^{リーダー}のスキルでパーティー枠が増えているからです。更に他の騎士さん達の話を知ると、彼女なら即興で作られたヘマスターのパーティーでも上手くまとめられるだろうという事で、あぶれた人を優先的に回したりもした様ですね。

「……そして、その結果がコレなのです。確かに顔見知りではあるのですがね……」

『騎士さん達もヘマスター達の組み分けには凄く苦労していたから、あんまり文句を言う訳にも行かないしねえ』

「……………」

尚、この事に気が付いた姉様は『ミュウちゃんが彼のハート^{胸部}を打ち抜いた（物理）んだから頑張つてね（笑）』と言い、兄様は『彼が用のあるのはミュウちゃんの様だから俺は離れておこう』と言ってそれぞれ顔見知りの所に行つたのです。ちくしょうです。

……とは言え、このまま放置しておいて今回のクエストに支障を出す訳にも行かないですし、最低限揉め事を起こさない様にはした方がいいでしょうし話し掛けるしか無いですよね……。

「えーっと、シュバルツさん。……別に私の事を敵視するのは構いま

せんが、最低限クエスト中にはある程度協力してほしいのです」

「……そんな事は言われずとも分かっている。こうしてクエストを受託した以上、その間は私情を持ち込むことはせん」

ふむ、私は《真偽判定》のスキルを持つては居ませんが、とりあえずは嘘を付いている感じはしないですし大丈夫そうですかね……どうやら彼は思っていたよりも真つ当なPKで幸いでし「だが！」……へ？

「勘違いするなよ、俺は別に貴様と馴れ合うつもりは断じて無い！

……俺に初めて死を味合わせた女、ミュウ・ウイステリアよ……いつか必ずお前を打ち倒しこの屈辱を必ず晴らす！ それまで首を洗って待つているがいい!!!」

「……………は、はあ……………」

なんか、いきなりシュバルツ何某さんはこちらに指を突き付けてそんな事を宣って来たのです……つか、そんな大声で私の名前を呼ばないで下さい。周りにいる他のへマスターやティアンがこつちを見ているじゃないですか。

後姉様『おー、実にテンプレライバルキャラな台詞だね』とか呑気に言わないで下さい、兄様も『ミュウちゃんにやられたのにあそこまで吠えられるとは中々見所があるな』とか言って関心しないで下さい！

……そんな事をしていたら騒ぎを聞きつけて来たリリイさんが私達の所にやって来ました。

「ミュウさん、シュバルツ・ブラックさん、お二人の間に何があったかは知りませんが、今回のクエストでパーティーとして行動出来ない様であれば最悪辞退して頂く事になります」

「心配〴〵無用。……先も言った通り一度クエストを受託した以上は、そこに私情を挟むような事は一切無いと約束しよう」

「……私としてもそちらの方から仕掛けて来ない限りは何か揉め事を起こす気は無いのです」

「……………どちらも嘘は言っていない様ですね。……分かりました。ですが、クエスト中は私の指示に従って諍いを起こさない様に」

リリイさんは《真偽判定》で私達の発言に嘘が無い事を確認すると、それだけ注意をしてから立ち去って行きました……チツ、本当に面倒な事をしてくれませぬコイツ、お陰でリリイさんに迷惑が掛ったじゃないですか。空気読めよ。

……尚、周りのテイアンの騎士達はやや困惑している様でしたが、《マスター》達は『良いライバル系ロールプレイだな』とか『中々はしゃいでるねー』とか『殺し愛な関係かな！』とか呑気に宣ってました。やはり《マスター》とティアンでは価値観に差がありますね……。

『御愁傷様、ミユウ』

「(ありがとうございます、ミメ。……まったく、変な奴に目を付けられたのです)」

次、あのシュバルツ何某が私に襲い掛かってきたら容赦なく潰しましよう……後、自分達だけ厄介事から逃げた兄様と姉様も覚えておくといいいのです。

……そんな風に私が頭を抱えていると、他の騎士達に指示を出していたリリイさんが私達の元に戻ってきました。

「さて、準備は整いましたので今からクエストを始めます。……私達のパーティーは主に《サウダ山道》から《ネクス平原》に入る辺りのモンスター討伐を行います。万が一、何かあった場合には私に聞いてください、その都度指示を出します。……それでは行きましょうか」

それだけ言ったりリリイさんが《サウダ山道》に向けて進んで行ったので、私達もその後を追って行きました……その直後、兄様と姉様がこちらにやって来ました。

……どうやら何かこつそり話をしたい事があるみたいなので、私はジト目になりながらもさり気なく二人に近づいて行きました。

「……何の用ですか、自分達だけ厄介事から逃げた兄様と姉様」

「あーごめんごめん。まさかシュバルツ何某があそこまで積極的とは、このミカの目を持ってしても見破れなかったよ」

「ただ睨みつけているだけで殺気や悪意は余り感じられなかったからな。……まさかあそこまで騒ぎになるとは……」

……とりあえず、兄様と姉様には後で王都のお高いお菓子を買わせ

る事を取り付けたので、さっさと姉様には本題に入って貰うのです。

「……それで？ 何を感じ取ったのですか姉様」

「……うん。どうもこのクエストで何か厄介ごとがあるっぽい。それも今までとは比べ物にならない脅威の」

「やっぱりそうか。……どうりでお前が事前に準備をしておこうと言うわけだ」

まあ、姉様が『このクエストの前にお金を稼いで装備を整えよう』と言った時点である程度は予測していましたが……尚、もつと詳しい情報を知りたかったのですが、姉様曰く『このクエストで何らかの危険があり、私達がそれに関わらないとかなり多くの犠牲が出る』という事以外はまだ分からないそうです。

「……まったく、相変わらず肝心な所で役に立たない直感だよ」

「……まあ分かりました。私もよく注意しておくのです」

「今のところはよく注意しつつ、何かあったら相互に連絡を行いぐらいしか出来んか。……とりあえず、今はクエストに集中しよう」

私達は一通り手早く話終わってから兄様がそう締め括った後に、何事も無かったかの様にパーティーに戻って行きました……内憂外患とはこの事ですかね。さて、このクエストはどうなる事やら……。

いきなりの不穏な気配

□〈へサウダ山道〉【紅蓮術師^{バイロマンサー}】レント・ウイステリア

さて、先程の顔合わせでは色々○あつたが、俺達はとりあえずクエスト【王都周辺及びその街道沿いのモンスター討伐・調査の手伝い 難易度：三】を開始して、一路〈へサウダ山道〉を南に進みつつ出て来るモンスターを倒していた。

……正直、このメンバーで上手くパーティーとして戦えるかが心配だったが、シュバルツ何某が先程言っていた言葉は嘘ではなかった様でちゃんとリーダーであるリレイさんの指示に従って戦っていたし、ミュウちゃんの方も大分機嫌が悪そうだったが動きには一切の変化は見られなかったので一先ずなんとかなりそうである。

「ふむ、この世界に現れてから長くてまだ一カ月程度でこの実力……やはりへマスター」という存在は色々と規格外ですね。……クエスト内容をこの様な形式に変えてまで、へマスターとの交流を深めようとした父上の判断は正しかった様ですね」

「……む？ リレイさん、それは本来の【墓標迷宮探索許可証】入手クエストはこの様な内容では無かったという事なのか？」

そんな俺達の戦い方を見ていたりリレイさんがふと呟いた言葉に、偶々それを聞きつけたアットが非常に興味深そうな様子で反応した……アイツはこの【許可証】入手クエストの詳しい内容もWikiに載せるつもりだと言っていたから、今の彼女の発言は聞き逃せなかったのだろう。

……ちなみに今までも戦闘の合間などの空き時間にリレイさんに色々質問しており、そんなアットに対しても彼女は大人の対応で質問に答えていたので、今回のアイツのちよつと失礼な態度にも彼女は特に気にする事も無く答えていった。

「ええ、このクエストの本来予定されていた形式は『調査担当の騎士達とモンスター討伐担当のへマスター』に分けてクエストを行う』と言うものだったのですが、私の父上——アルター王国第一騎士団団長リヒト・ローランが『今後の事を考えると騎士達とへマスター』を積極

的に交流させて、彼等との友好を深めつつその対応方法などを探して行つた方がいい』からと、今の様な騎士団とへマスターの混成パーティーを組んでモンスターを討伐する形式になったのです」

「ふーん、そんな裏話があつたのか……」

「……国としても俺達へマスターとの付き合い方を探っている感じかな」

ちなみに経験の無いへマスターでは不向きな生態系の調査の方には、それ専門のティアンと護衛の騎士で構成されたパーティーを事前に編成して各地に派遣しているとの事……今回は多くのへマスターがクエストに参加して討伐の方には人的余裕があつたので、生態系の調査の方にもそれなりの数の人材を回す事が出来たらしい。

……彼女のそれらの話から得た情報をメモに書いていたアットは、それを一通り書き終えた後に更にアイツにとつては重要な問いを投げかけた。

「……では、この【許可証】入手のクエスト内容は後々変わる可能性があるか？」

「その可能性は高いでしょうね。……今の王国は急なへマスターの増加に対して色々対応している真つ最中ですから、このクエストだけでなく様々な事が今後変わって行くでしょう。このクエストに於いて父上がへマスターとの交流を優先したのも、今後起きるであろう変化に我々騎士団を慣れさせる為でも有るのでしょうし」

「成る程……だとすると、今後何度かこのクエストを受けて情報を精査する必要があるか。……それにへマスターの増加による王国の変化も考慮に入れて……」

そんな事を言いながら、リリースさんの話を聞き終えてメモを取り終えたアットは顎に手をやって考え込んでしまった……彼女の話からするとへマスターの増加による王国の変化は結構ありそうだからな。〈Wiki編集部〉も大変そうだな。

尚、こんな風に呑気に喋りながら移動している様に見えるかも知れないが、俺はちゃんと索敵系スキルを使いながらモンスターを探しているし、他のメンバーも（アットはちよつと怪しいが）辺りをキチン

と警戒している。

……そして、そんな中でも周辺の索敵に一番活躍しているのは、
【テイマー従魔師】エルザ・ウインドベルちゃんが率いる二体のモンスター
【ティール・ウルフ】のヴェルフと【ウインド・イーグル】のウオズで
あった。

『BAUWAU! (主! あつちに何体かモンスターがいますぜ
!-)』

『K E E E! K I E E! (こつちでも確認しました……あれはゴ
ブリンの群れです!)』

「分かったよ……皆さん! ここから10時の方向にゴブリンの群れ
が居るみたいです!」

この様に彼女のティムモンスター達は、先程からずっと【スカウト斥候】の
ジョブをカンストしている俺より早くに敵であるモンスターを探し
出しているのだ……リリイさん曰く『あの二匹は同種のモンスター
中でも索敵に長けた才能を持っている様ですね』との事らしい。

……何でもこの世界では同じ名前のモンスターでも個体によつて
レベル上限や得意分野などの才能が違うので、稀に特定の分野に特化
した変種が生まれる事もあるのだとか。

『《遠視》……確かに向こうの山道にゴブリンの群れが居るな。ひー
ふー……二十四ぐらいかな』

『『……g a a a……g a a a……』』』

俺はスキルを使ってエルザちゃんが言った方角を見てみると、そこ
には確かに武装したゴブリンの群れが辺りを警戒しながら進んでい
るのが見えた……内訳は【ゴ布林・ファイター】【ゴ布林・ソード
マン】【ゴ布林・アーチャー】と言った物理系の連中みたいだな。と
りあえず敵の情報をリリイさんに伝えておこう。

……おつと、どうやら群れの中にいた【ゴ布林・スカウト】がこつ
ちに気が付いたらしく、慌てて周囲にいたゴ布林達にその事を伝え
ているな。

「あつちにも斥候が居たみたいでこつちに気付かれました。今、連中
は戦闘態勢を取ってこつちに向かつてきました」

「分かりました。……では、アットさんとレントさんは魔法で壁と先制攻撃をお願いします。ミカさん、ミュウさん、シユバルツさんは私と一緒に前衛で戦って下さい。エルザさん達はそのフォローを」

それだけの簡潔な指示を出したリリイさんは自身も武器である長槍を構えて前に行つた……つまり、これまでの戦いと同じパターンだな。下手に複雑な指示を出しても寄せ集めの俺達では満足に動けないだろうし妥当な指示だろう。

まあ、そもそもゴブリン二十体程度ならリリイさん一人でお釣りが来るだろうけど、彼女は俺達のレベル上げとへマスターの實力を知る為に敵が弱い内には最低限しか戦わないって最初に言つてたからな。

……と、そんな事を言つてる間に向こうに居た三体の「アーチャー」がこつちに向かつて狙いを定めて弓を引きしぼっていたので、こちらも魔法による応射の準備をする。

『G A A！』

「アット、壁頼む……《魔法射程延長》《ヒート・ジャベリン》！」

「まだ下級職の俺ではあまり射程の長い魔法は使えんからな……《詠唱》終了《アースウォール》！」

その結果、あちらの三体の「アーチャー」がこちらの前衛に放つた矢はアットが魔法で作り上げた土の壁に阻まれるか、狙われたリリイさんとミカが手に持った武器で払い飛ばす事で防がれ、俺が放つた炎の槍は敵の「アーチャー」一体とその後ろに居た「スカウト」一体を焼き払つた……うん、我ながら中々良い狙いだつたな。

更に、その隙にフリーだつたミュウちゃんとシユバルツが敵の前衛である「ファイター」や「ソードマン」との戦いに入っていた……のだが……。

『G Y A A A A A A A！』

「おいっ！ このゴブリン供なんか強くないか？！」

「チツ、何をへタレた事を……と言いたいのですが、妙に強いのは本当の様ですね。……少し《看破》してみました、コイツら全ステータスが倍くらいになるバフが掛かっているみたいですし」

確かにミュウちゃんの言う通り、このゴブリン達のステータスを《看破》で見るとそれぞれステータスを倍加するバフが掛かっていた……元がゴブリンだからかそこまで劇的な強化では無いもの、これまで特に苦戦もせず敵を倒して来たこちらの前衛達を手間取らせるぐらいには厄介な感じである。

……そして、その報告を聞きながら自分でもゴブリン達のステータスを確認していたリリイさんは、何か心当たりがあったのか顔を顰めていた。

「……まさか、近くに【キング】がいますか？ ……皆さん、作戦を變更します。私が本気を出して早急にこの群れを討伐するので援護をお願いします。……《喚起》^{コール}テイルル！」

『……承知しました、お嬢様』

リリイさんははそれだけ言うと、右手に付けられた【ジュエル】から一頭の美しい薄緑色のペガサス——これまでは前述の理由で戦闘には参加させなかった彼女の愛馬である純竜級モンスター【テンペスト・ペガサス】のテイルルを呼び出した。

……尚、普通に人語を解するモンスターは初めて見たのでちよつと驚いた。

「テイルル！ 連中を蹴散らさない！ ……《グランドクロス》！」「了解しました、お嬢様……《テンペスト・アーマー》！」

『『GYAAAAaaaaa!!』』

そしてリリイさんが指示を出すとテイルルは即座に自身の身体に暴風を纏わせて目で追うのが難しい程の速度でゴブリン達に突撃し、その纏った暴風によつてゴブリンを千切り飛ばしながら蹴散らして行く……更に彼女自身も、今まで使つてこなかった【聖騎士】^{パラディン}の奥義である《グランドクロス》で持つて地面から聖属性の十字型エネルギーを出してゴブリン達を消し飛ばして行つた。

……いくらステータスが倍加しているとはいえ所詮はゴブリン。合計レベル483を誇るリリイさんと純竜級モンスターである【テンペスト・ペガサス】にとつてはどうと言う相手では無く、それから間も無くしてゴブリン達は跡形も無く消え去つていたのであった。



そうして戦闘（殲滅）が終わった後、俺はいきなり行動を変えたり
レイさん疑問に思っているへマスター」達を代表してその理由を尋ね
た。

……それに対して、愛馬のティルルに周辺の偵察を命じていた彼女は
その質問に答えて状況の説明を始めた。

「それでレイさん、何故あのゴ布林達を早急に始末したんですか
？ ……何かあの群れに対して心当たりがある様でしたか」

「はい、あのゴブリンの群れはおそらく「ゴ布林・キング」の配下で
ある可能性が高いと思われたので、決着を急がせて貰いました」

彼女曰く【ゴ布林・キング】とはその名の通りゴブリンの群れを
率いる「王」としての能力を持ったゴ布林だそうで、単体としての
ランクは亜竜級以上純竜級未満程度だそうだが、その【キング】が必
ず保有する《ゴ布林キングダム》と言うスキルが厄介らしい。

《ゴ布林キングダム》は複数の効果を併せ持つ複合型のパッシブス
キルで、その効果は「配下のゴブリンの全ステータスを倍加し、配下
が得た経験値が自身にも加算され、自身の受けたダメージを配下のゴ
布林に転嫁する」と言うものです。……つまりは配下が生きてい
る限り【ゴ布林・キング】にはダメージが通らないと言う事です」
その特性上、配下の数が増えて質が増す程に【ゴ布林・キング】の
脅威度は一気に上昇して行き、もし【ホブゴ布林】【ハイゴ布林】
などの上位ゴ布林が配下にいた場合には群れ全体の脅威度のラン
クは純竜級にまで達する事もあるらしい。

それに加えて配下の経験値を自身に加算するので成長も早く、もし
【キング】がより上位のモンスターに進化して、更に亜竜級以上のゴブ
リンを複数従える様になった場合には小国を滅ぼす程の戦力になっ
た事例も過去に有るのだとか。

「それに今遭遇した群れはその構成からおそらく偵察部隊……つまり
この【キング】は二十体程度のゴ布林なら偵察として派遣しても問

題無い規模の勢力を持っている可能性が高く、かつ本隊がこの近くに
いる可能性が高いと思われました。……なので、可能な限り早く戦闘
を終わらせて周辺の状況を確認する必要があると判断しました」

「成る程……分かりました、ありがとうございます」

確かにそう言う理由なら決着を急ぐのも当然だし、先程真つ先に
ティルルを上空に飛ばしたのも納得だな……どうやら他のメンバー
も今の説明に納得した様で周辺の警戒を始めている。

……だが、あのゴブリンの群れにはまだ一つだけ気になる部分があ
るんだよな。そこもちよつと聞いてみるか。

「ではリレイさん、その『ゴブリン・キング』には配下がやられた時に
アイテムを落とさなくなるみたいなきスキルを持っているんですか？

さっきの群れが倒されてもアイテムを落とさなかったのが気にな
るんですが」

「えっ？」

その俺の言葉に始めて気がついたのか、リレイさんと俺達三兄妹以
外のへマスター達は先程まで戦っていたゴブリンが倒された場所を
振り返った……そう、この世界のモンスターは倒されたらアイテムを
落とす筈なのに、先程倒したゴブリン達は跡形も無く光の塵になっ
ていたから気になっていたのだ。

「あれ？ お兄ちゃんが《長き腕》を使つてた訳じゃ無いんだ」

「いつも通りだから気にならなかったのです……が、この状況だと兄
様はスキルをオフにしますよね」

「ミュウちゃんの言う通り、今はスキルをオフにしている。……ああ
でも、タイムモンスターや召喚モンスターはアイテムを落とさない設
定だったか？」

「おい、ちよつと待て！ ……状況がよく分からんからもつと詳しく
説明しろレント。《長き腕》とはなんだ？」

その可笑しい状況に対して動揺している他の人間を後目に、俺と妹
二人がとそんな会話をしているとアットが詳しい状況説明を要求し
て来た……うん、ついいつもの癖で身内だけで会話を完結させてし
まったか。

……今は野良パーティーを組んでいる訳だし、この不穏な状況をキチンと確認する為にもちやんと説明しておく必要があるだろうな。

「えーっと、まず《長き腕》って言うのは俺の〈エンブリオ〉のスキルエクスベリエンズ・トランスレイション《長き腕にて掴むモノ》の事で、このスキルは自分とパーティーメンバーが倒したモンスターがアイテムを落とさなくなる代わりに、その分だけ獲得経験値を上昇させるスキルなんだが……今回は野良パーティーだったから、色々と揉め事を避ける為にオフにしてあるんだよ。ほら」

そう言っただけ俺は《長き腕》のステータス欄をみんなに見せてスキルがオフになっている事を示した……このスキルは一度切り替えると16時間が再変更不可能な仕様であり、既に再変更可能な状態である事からこの現象は俺の所為では無い事が証明出来た。

……そして全員が納得した所で俺は更に話を続ける。

「それで、このスキルがオフになっているのにアイテムを落とさなかった事が気になって聞いてみて、確かタイムモンスターと召喚モンスターは倒されてもアイテムを落とさない設定だったと思ひ出した所だったんだよ」

「……タイムモンスターは倒されてもアイテムを落とさない設定ですがそれは無いでしょう。モンスターに使役されたモンスターは普通にアイテムを落としますし……もう一つの召喚モンスターの方ですがこちらも時間制限がありますし、あの群れはかなり長時間活動していた様に見えたので可能性は低いかと」

そうやって俺がこの状況での一通りの疑問点を並べると、リリイさんはそれに対して一つ一つ丁寧に答えてくれた……さて、いくつかな予想は立っているが……。

「ふーん。……お兄ちゃんは消えたアイテム分のリソースを経験値に変換してるけど、このゴブリン達のアイテムのリソースは何処に行っただらうね？」

「……【ゴブリン・キング】の変異種……いえ、まさかユニーク・ボス・モンスターへU B M

ミカが発したその質問にリリイさんは考え込みながらも、思ひ至る

いくつかの可能性を呟いた……正直、今のところ情報が少な過ぎて断言は出来ないが、俺のスキルがアイテムのリソースを経験値に変換している様に、このゴブリン達のアイテムのリソースを何かに利用しているモノが何処かに居るといいうのが一番可能性が高い考えだろうな。

……そうやってメンバー達が考え込んで居る所で、辺りを偵察に行っていたティルルが地上に降りてきた。

『お嬢様。周辺一帯を搜索しましたが大規模なゴブリンの群れは発見出来ませんでした』

「そうですね……とりあえず、この事を他の騎士達とリヒト団長に知らせしてから近くにいるパーティーと合流しましょう。……少なくとも「ゴブリン・キング」がいる事はほぼ確実ですし、もし遭遇したのなら1パーティーで戦うのは厳しいですから」

そう言ったりリレイさんは、アイテムボックスから通信用のアイテムを取り出して各所に連絡を取っていった……さて、こうなるとさつきミカが言った「直感」通りに中々厄介な事になりそうだな。

パーティー合流と情報整理

□〈ヘサウダ山道〉【戦棍騎士^{メイスマイト}】ミカ・ウイステリア

……私達ウイステリア三兄妹はパーティーを組んで【墓標迷宮探索許可証】を入手する為のクエストを受けている途中、〃倒したゴブリンが何故かアイテムを落とさない〃という怪現象に遭遇した。更にそれらのゴブリンが強化されて居た事から、パーティーのリーダーである近衛騎士団所属の【天馬騎士^{ペガサスマイト}】リレイさんは『ゴブリン・キング』の存在はほぼ確実。

加えてアイテムを落とさない現象の事を考えるにそれ以外の異常が発生している可能性もある』として、その異常事態を同じクエストを受けている付近のパーティーやアルター王国第一騎士団団長【天翔騎士^{ナイト・オブ・ソアリング}】リヒト・ローランさんに魔道具を使って連絡を取って居ただけど……。

「……………はい、分かりました。では、こちら側は部隊を合流させて異常事態の調査を続行します。……………それでは皆さん、これから私達は近くにいるパーティーと合流してこの異常事態の調査を行う事になりました。とりあえず通信で分かった現在の状況を説明します」

通信で情報を集め終わったリレイさん曰く、南側に居る他のパーティーでも倒したゴブリンがアイテムを落とさない現象が確認出来ており、更に複数のパーティーがゴブリンの部隊に遭遇している事から【ゴブリン・キング】が率いて居る戦力は相当なものになっていると思われる。なので二、三パーティーになる様に合流した上でヘサウダ山道〈周辺〉のゴブリンについて調査を行う事になったみたい。

……………ただ、こちら側の最大戦力である〈超級^{スベリオルジョブ}職〉のリヒトさんは現在〈ヘノズ森林〉の方に現れた純竜級モンスターと交戦中だそうで、ヘサウダ山道〈に〉来るまでしばらく時間が掛かるのでそれまでは相手の規模を測る為の調査に集中して、もし規模が大きかった場合には可能な限り交戦を避けて援軍を待つ方針で行くとの事。

「……………では皆さん、ここまでの説明で何か質問はありませんか？」
「特に文句を付ける所が無い説明だったから質問は特に無いですね。」

俺はそれで構いませんよ」

「実に分かりやすい説明だったしな。……それに編集部としてはこんな異常事態の情報を逃す手は無い」

「私も大丈夫です」

「……パーティーリーダーの指示に従うだけだ」

そんな感じでパーティーメンバー全員がリリイさんの説明に納得してその提案に従う事を決めた為、私達はまず他のパーティーと合流する事になったのだった。

「それでは、近くにいるパーティーと合流しましょうか。……報告によると「マスター」と組んでいるパーティーが一つ、騎士だけで組んでいる調査担当パーティーが一つこの近くに居る様なので、それぞれの中間地点辺りを合流する事にしましょう。……それとティルル、貴女は上空から周辺の警戒を。何かあったら知らせなさい」

『承知しました、お嬢様』

そうして私達は周囲を警戒しながら「サウダ山道」の街道を進んでいったのだった……うん、今の所は順調に進んで居るね。私の「直感」も『このままでいい』と言ってるし、後はここから先に何が待ち受けて居るのかな……。



「……それでは、そちらが遭遇したゴブリンもアイテムを落とさず、ステータスが倍加して居たのですね？」

「はい、ローラン卿。……相手は下級のゴブリンでしたし、パーティーを組んで居た「マスター」の方の助けもあってどうにか撃破出来ました」

「それと周辺を調査した結果、この近辺でのゴブリン以外のモンスターの数がかなり減って居るようです。……確か、過去に「ゴブリン・キング」率いる群れが経験値稼ぎの為に周辺のモンスターを狩りつくす行動を取った事があるらしいので、これもその類いである可能性は高いかと……」

「ディテクティブ【探偵】パトロール【警邏】チェイサー【追跡者】などのジョブスキルで調べましたが【ゴブリン・キング】を見つかる事は出来ず……」

はい、そういう訳で私達は特に何事も無く無事に近くのパーティーと合流する事が出来ました……そして、今はリリイさんに『自分達が情報交換をしている間に、へマスターへ達は今後の事を考えてお互いの自己紹介と情報交換をしておいてほしい』と頼まれたんだよね。

……相手方のへマスターへは男性一人、女性二人の三人パーティー（それとガードナーのへエンブリオへっぽいのが居る）みたいだけど、どうやらアットさんの知り合いらしく……。

「……というか、合流するパーティーのへマスターへ達はお前等だったのか。まあラツキーかな」

「いやー、組み分けでハブられたオーナーが戻ってきてくれて助かったよ。正直慣れない指揮がキツかったし」

「へWiki 編集部」の戦闘パーティー復活ですね」

『K U E E』

「オーナーと合流出来て良かったです」

『『よかったなー』』

実は、向こうのへマスターへ達はアットさんがクランオーナーを務めるへWiki 編集部」のクエストに参加した残りメンバーだったんだよ。お陰で、特に揉め事とかが起きる事無くスムーズに合流出来たね。

……おっと、よく見たらそれに私達に縁があった人も居るし、ちよつと挨拶しておこうかな。

「やあ、アマリアアさん。久しぶりだね」

「えっ？ ……ああ！ ミカさん達がオーナーのパーティーに居たのか。これは頼りになりそう」

「アマリアアさんこそ、今日はよろしくお願いしますのです」

「……しかし、考察クランであるへWiki 編集部」に入っていたとは驚いたな」

そう、向こうのへWiki 編集部」パーティーには、以前どつかのカマキリをボコった時に知り合ったへマスターへであるアマリアアさ

んが居たんだよね。

……しかし、お兄ちゃんの言った通り彼女が〈Wiki編集部〉に加入してたとはちよつと驚いたよ。人の縁とは不思議だね。

「まあね。……元々、私は適当に走り回りながら色々な景色を見たいと思ってデンドロを始めたんだけど、この世界は本当に広いからね。せつかくだからもつと色々な事が知りたいと思ってこのクランに入ったのさ」

「……アレ？ アミタリアさん、お知り合いですか？」

「アミタリア、お前レント達と知り合ってたのか？」

そんな感じで私達三人がアミタリアさんの話を聞いていると、それに気付いたアツトさんと〈Wiki編集部〉の残りのメンバーである弓を持つて肩に鳥を乗せた男性と、周りに小さい妖精？ みたいなのを連れた少女がこつちにやって来た。

……今後も行動を共にする訳だし、丁度いいから初めて会った人達には自己紹介もしておこうかな。

「初めまして。私は【戦棍騎士】のミカ・ウイステリアだよ。今日はこれからよろしくね」

【武闘家】のミュウ・ウイステリアなのです。よろしくなのです」
マッシュ・アーティスト
【二人の兄の【紅蓮術師】レント・ウイステリアだ。よろしく】
パイロマンサー

「あ、これはど丁寧に。……僕は【狩人】の久遠たむーです。こつちは僕のへエンブリオ」
ハンター
【誘導神鳥 ヤタガラス】です」

『KUEEE!』

まず、弓装備で狩人っぽい格好をした青髪の男性の名前は久遠たむーさん。その肩には【ヤタガラス】と言うらしい三本足で黒い羽毛に所々金色が入っている見た目の鳥型へエンブリオを乗せている。

「私は【魔術師】のりぜ・ミルタと申します。……そして、この子達が私のへエンブリオの【支援妖精 フェアリー】達です」

『はじめましてー』

『よろしくなー』

『いんごともごひいきにー』

もう一人の茶髪の少女の名前はりぜ・ミルタちゃん。彼女はお兄

ちゃんも以前使っていた【リトルトレントの魔杖】と【マジックロブ・1】の女性用を装備していて、周りにはそれぞれ別の色のトンガリ帽子と服を着た身長20センチぐらいのゆるキャラ妖精——彼女のへエンブリオである【フェアリー】達が飛び回っていた。

……そんなこんなで、私達のパーティーと向こうのパーティーは一通りの自己紹介を済ませ終わり、引き続き周囲を警戒しつつ騎士達の話が終わるのを待つ事にした。

「現在のところ分かっている情報は以上です」

「……成る程、分かりました。……やはり、現在集まっている情報だけではこの異常事態の原因までは分かりませんか……。へマスターの皆さんも自己紹介は終わった様ですし此方へ。現在分かっている情報とこれからの行動予定を話します」

そうして情報交換が終わったらしいリレイさんが私達を呼んで現在分かっている情報を話し始めた……彼女が言うには、現在分かっている限りで『ゴブリンのステータスが倍加している』『ゴ布林が複数の部隊に別れて組織立って行動している』『ゴ布林以外のモンスターが非常に少なくなっている』『ゴ布林を倒してもアイテムを落とさない』といった感じらしく、アイテムを落とさない部分以外は【ゴ布林・キング】が発生した過去の状況と酷似しているとの事。

「そういう訳で、これから私達はやるべき事はゴ布林達を強化・指揮している【ゴ布林・キング】らしき個体を探し出す事です。……ただし、アイテムを落とさないという前例の無い事態が発生しており、最悪へU ユニーク・ボス・モンスター B Mが発生している可能性も想定して援軍が来るまでは調査を優先して可能な限り交戦を避けます。……もしへUBMが発生していた場合、この戦力では太刀打ち出来ないでしょうから」

そう言ったりリレイさんと他の騎士達の雰囲気は非常に深刻なものであり、それにつられて私達へマスターの雰囲気も真剣なものになった……へUBMとは今まで遭遇した事は無いけど、彼等の雰囲気からして通常モンスターとは比べ物にならない実力なんだろうね。

……みんながそんな雰囲気になった事に気が付いたのか、リレイさんはおそらくワザと笑みを浮かべながら雰囲気を柔らかいものに変

えながら話を続けた。

「……まあ、しばらくすれば援軍としてこれまで多くの〈UBM〉を倒した経験のある超級職であるリヒト団長が来てくれますし、それまでは調査に徹すれば良いだけですからあまり緊張しないで下さい。……それでは、ここまでの事で何か意見や質問はありますか?」

「……それじゃあ、質問では無いんだが一ついいか?」

リレイさんが説明を終えた後、意見を求めた彼女に対してアツトさんが手を上げて一つの提案をした。

「うちの久遠たむーの【ヤタガラス】には設定した“目的地”に向かう事が出来る《神鳥の導き》ってスキルがあるんだが、それを使えばその【ゴブリン・キング（仮）】の居場所が分かるかもしれないぞ」

「本当ですか!?!」

「うん。……まあ、スキルの発動にはいくつか条件があるんだけどね」

具体的に《神鳥の導き》とは“目的地”に対する情報量・現在地からの距離・自身のジョブレベル及び〈エンブリオ〉の到達形態・目的地の希少性や隠蔽度合いなどからスキルが発動出来るかを【ヤタガラス】が判定して、可能であれば【ヤタガラス】がそこまで飛んで行くというスキルらしい……とはいえ、“一度会ったことがある人”とかでも、余程距離が離れていなければ問題無く発動可能なくらいには判定条件は緩いらしいけど。

……まあ、そんなこれまでの大前提を覆す様な爆弾発言を聞いた騎士達には少し動揺が広がったりしたけど、そこは歴戦の騎士達だけあって直ぐに冷静さを取り戻したみたい。

「それでは久遠たむーさん、そのスキルは発動出来るんですか?」

「んー、ちよつと待ってね……ヤタ、この辺のゴブリン達を指揮している【ゴブリン・キング（仮）】を目的地に《神鳥の導き》は使える?」

『……オツケー! イケルヨー!』

「えっ! 喋れるの!?!」

『チヨットダケナー!』

ちよつと驚いて言葉が出てしまった私に対して、そう答えた【ヤタガラス】はそのまま身体を金色に光らせながら飛び立っていった……

そして、その航跡には金色に輝く光の帯の様なものが見れていた。
「あ、あの金の帯はスキル使用中にヤタが通った後の記す為のもので、しばらくは残り続けるのでアレを目印に後を追えば目的地に着けますよ」

「ありがとうございます、久遠たむーさん。お陰でこの事件の解決の糸口がつかめそうです。……しかし、へエンブリオとは本当に凄いですね。これで指名手配犯とか終えませんかね」

「うちのクランに依頼をしてくれば報酬次第で請け負うが？　うちは方針上そういうへエンブリオの持ち主が多いし。……尚、報酬は王国の希少な情報とかでも良いぞ」

そんな会話をしつつも、私達は目印である金色の帯が消えないうちに急いで【ヤタガラス】が飛んで行った方向へと向かって行ったのだった……さて、私の「直感」は『この先に強敵がいる』ってピンピンに行ってるんだけどどうなるかな。

……私の「直感」ってその裏付けとかは取れないからね。お兄ちゃんやミュウちゃんには信じて貰えるんだけど、こういう時に他人へ話し難いのがもどかしいよ。



??へサウダ山道??

……そこはへサウダ山道の南側にある山岳地帯、すぐ南にはヘネクス平原があるその場所には百を超える多数のゴブリンと、それらを指揮する一体の「王」の姿があった。

その「王」の姿は身長3メートル程、肉体は全面的に引き締まった筋肉質で、その背には禍々しい雰囲気を持つ身の丈程もある大剣を背負っているという、一眼見るだけでも高い戦闘能力を持っていると分かる出で立ちだった。

……そして、今その「王」は周囲の偵察に出ていた指揮下の【ゴブリン・スカウト】の報告を黙って聞いていた。

『報告します。……現在、北にある大きな街から多数の人間の戦士が

出てきている様です。…………どうやら奴等は街道周辺の調査とそこに居るモンスター討伐を行なっているようで、現在でも威力偵察に出ていた下級部隊がいくつかやられています』

『……ソウカ。……ダガ、死ンデイツタ者達ノ一部ハ帰り、再ビコノ世ニ舞イ戻ルデアロウ……』

その報告を受けた「王」は、どこか遠くを見ながらそんな事を呟き……直後、その雰囲気を一変させて身体中から戦意を立ち上らせた。

……そのまま背中に挿した大剣を引き抜き掲げて、指揮下のゴブリン達に宣言した。

『ダガ、我等ノ同胞ヲ殺シタ人間ドモヲコノママ放ツテ置ク訳ニハ行カヌ。……皆ノ者、出陣デアル！ ソノ人間ドモヲ一人残ラズ殲滅シ、我等ノ糧ニシテクレヨウ！』

『』『』『』とおおおおおおおおお——っ!!!』』』

その「王」が発した宣言に周りに居たゴ布林達——「ホブゴ布林・ウォーリア」【ホブゴ布林・ソードマン】「ホブゴ布林・ランサー」【ホブゴ布林・アーチャー】「ホブゴ布林・メイジ」【ホブゴ布林・プリースト】などの進化済みのゴ布林達を含む軍勢が大声で答えた。

『……ソウダ、我等ノ敵ヲ殲滅シ一人残ラズ糧トスル……ソレガ我ノ成スベキ事デアリ、ソノ為ニコノ剣ヲ賜ツタノダカラ……』

……その歓声の中で「王」が呟いたその言葉を聞いた者は居なかつた……。

野生の〈UBM〉が 現れた！

□〈サウダ山道〉

マーシャル・アーティスト
【武 闘 家】

ミュウ・ウイステリア

そんな訳で、私達は現在〈Wiki編集部〉のメンバーである久遠くおんたむーさんの【誘導神鳥 ヤタガラス】のスキル《神鳥の導き》によって〈サウダ山道〉で起きた事件の原因と思われる【ゴブリン・キング（仮）】の足取りを追っているのです。

しかし、〈エンブリオ〉とは本当に便利ですね。特にこの手の調査・探索作業ではオンリーワンのその能力が凄く活きるのです、ジョブスキルとかよりも活躍出来る感じですかね……調査・索敵特化でジョブを埋めると戦闘能力が落ちますし、フィールドに出るならある程度のステータスは必要ですし。

『僕は戦闘特化……しかも、強敵とのタイマン特化だからねー。今日のはあんまり活躍出来ていないよ。……ステータスを感じする感覚も基本的には近くにいる敵対対象にしか効果を発揮しないし』

「まあまあ、ミメも進化によってMP以外のステータスもそこそこ上がっていますし、その分だけ融合している私のステータスも上がっていますので全く役に立っていない事も無いですよ。……それに姉様の“直感”ではこの先で強敵と遭遇するらしいのですので、ミメが活躍するのはそこになるでしょう」

ちなみに第三形態ガードナー時に於いての【ミメーシス】のステータスはMPが15000強、SPが5000、HPが2000、STR・END・AGIが500、DEX・LUCが100弱と言ったところなので、王都周辺の雑兵を相手取るには十分過ぎるステータスバフになっているのです。

……さて、そんなこんなで途中にモンスターと遭遇する様なトラブルも無いままに金色に光りながら空を飛ぶ【ヤタガラス】を追っていた私達なのですが、しばらくすると突然先頭を進んでいたリリイさんの懐から何かのアラームの様な物が鳴り始めたのです。

「……ん？ 緊急連絡用のマジックアイテムが反応している……相手はリリアーナですか。……こちらリリイ・ローラン、どうしましたか

？」

『ザザツ……こちらリアーナ！ 現在ゴブリンの群れを引き連れ
たへU B M』と遭遇して交戦中！ 敵の名前は「魔刃戦鬼」ゴb

……キヤアアアアア!!! ……………ブツツ』

「ツ!? リリアーナ！ リリアーナ！ ……駄目ですね、通信が切
れました」

そして、リリイさんが懐から取り出した宝玉の様な物からは、周囲
に居た私達にすらも聞こえる様な音量でリリアーナさんの非常に
焦った声が聞こえてきました……聞こえてきて内容から察するに、ど
うやらリリアーナさんのパーティーにへUBMが襲来してしまった
様ですね。しかもゴブリンの群れを引き連れて。

……その通信を聴き終えたリリイさんは雰囲気を厳しいものに変
えつつ、即座にアイテムボックスから一枚の地図型マジックアイテム
——パーティーの騎士に持たせている発信機的マジックアイテムの
位置情報を示すための物——を取り出して、それを食い入る様に見つ
めました。

「……………チツ、やはり今現在私達が向かっている方向にはリアー
ナ達のパーティーが居ますか。どうやらこちらで追っていたヤツが
先に仕掛けて来た様ですね。……セイラン卿、私は先行してリアー
ナ達の救援に向かいます。貴方達はリヒト団長達にへUBMの出現
情報を伝えた後に、へマスター達を連れてこちらへ向かってきて下さ
い」

「ハッ！ 了解しました！」

「頼みましたよ。……ティール！」

『了解です、お嬢様』

素早く状況を整理し終わったリリイさんは近くに居た騎士に声を
かけた後、呼び寄せた「テンペスト・ペガサス」のティールに飛び乗っ
てそのままリアーナさん達の下に飛び去って行きました。

また、指示を受けた騎士さん達は各々が持っている通信様のマジッ
クアイテムを取り出して、先程リリイさんに言われた通り現在の状況
をリヒト団長を始めとする他の騎士達に伝えている様ですね。

……さて、そんな状況なので私達〈マスター〉組は何をして良いのか分からない事もあって、とりあえず邪魔にならない様に大人しくしていたのですが、ただ一人ウチの姉様だけは行動を起こしたのです。「ねえねえ久遠たむーさん、上で飛んでる「ヤタガラス」の追跡スキルはまだ有効？ それとアミタリアさん、貴女の〈エンブリオ〉で一人を運んでリリアーナさん達の所に行く事は出来そうかな？」

「え？ ……ヤタのスキルはまだ有効だけど……」

「私の「プリトヴェン」も第三形態になってからは、同行者を乗せたままである程度の飛行が可能になりましたが……まさか、ミカさんは襲撃されているティアンを助けに行こうと？」

まず、姉様はアミタリアさんと久遠たむーさんにそんな質問をしていました……そして、それを聞きつけた他の〈マスター〉組もちよつと暇していた事もあって姉様の下に集まって来ました。

……これ幸い（おそらくは狙い通り）に姉様は自分がやろうとしている事をみんなに話始めました。

「まあ、アミタリアさんの言う通り襲撃を受けている向こうに援軍を送り込もうぜ！ って感じの提案だけどね。……もちろん案内役の久遠たむーさんと輸送役のアミタリアさんがいいのならだけど」「僕は元々ヤタのスキルで案内するつもりだったし構わないけど……アミタリアは？」

「私も構わないよ。ミカさん達には貸しも有るしね。……とはいえ、一応クランとしてはオーナーの指示を確認したいけど……」

二人の方はそれなりに協力してくれる気に成っていますが、やはりそこはクランの一員と言う事でオーナーであるアツトさんに伺いを立てる事に。

「……そうだな、一つ条件がある。出来れば今回交戦した際の〈UBM〉の情報をこちらに渡して欲しいのだ。〈編集部〉としてはまだ殆ど目撃例が無い〈UBM〉の情報を入手する絶好の機会を逃したくは無いいしな。……それさえ守ってくれるのならばクランとして全面協力しても良い」

「オツケー、じゃあ私達三兄妹が得た今回の〈UBM〉に関する情報は

全部へWiki編集部へに渡すよ。……と、言うわけで援軍よろしくねミュウちゃん」

……まあ、そんな感じでへUBMへに関する情報提供を対価として割とあっさり話が付きましたので、私がアマタリアさんの「プリントヴェン」に乗って援軍に行く事になりました。

「え？ ミカちゃんが援軍に行くんじゃないの？」

「いやあエルザちゃん、多分私が行ったところで瞬殺されるだけだしね。……それにミュウちゃんは相手次第なら純竜級モンスター相手でも互角に渡り合えるから適任なんだよ」

「相手がステータス特化であればミメのスキルで互角には持ち込めませんから」

『でも、MP特化やスキル特化の相手だとキツイけどね』

まあ、姉様がそう言っている以上は今回の相手は高ステータス型のモンスターなのでしょうが、何分始めて戦う事になるへUBMですし気合いを入れ直して行くとしましよう。

……ただ、そのすぐ後に兄様から『流石に騎士さん達に話を通さずに行くのは問題だから、ちゃんと許可を取った方がいいだろう』と言われたので、連絡中の騎士の中でリーダー格っぽいセイランさんと言う人に話を通しておく事になりましたが。

「……………」と、言うわけでして俺達の方からもへUBMへに襲われている場所に援軍を派遣したいんですが。ウチのミュウちゃんは強いですよ。亜竜級ぐらいならタイマンで倒せますし」

「それに、どうせ俺達は不死身のへマスターだからな。……何ならティアンの騎士達の盾として使ってくれても構わないぞ」

「ふむ分かった、いいだろう。……ただし、向こうではリレイさんの指示に従う様にな」

とりあえず、割と交渉事に長けている兄様とアットさんがセイランさんに話を通してあっさり許可を取ってくれましたね……アレはどちらと言うと兄様達の交渉が上手いのではなく、セイランさんの方に何か考えがある感じでしたが。

……その結果に苦言を呈している騎士達をへUBMへの脅威を引き

合いに出して諫めている様子を見るに、どうやら襲撃して来た敵を相手取る為には少しでも多くの援軍が必要になると考えている様ですね。

「クエスト【救援——アルター王国騎士団 難易度・八】が発生しました」

「クエスト詳細はクエスト画面をご確認ください」

……あ、何かクエストを受けた扱いになりましたね。まあいいでしょう、やる事は変わりませんし。

「よし！ 許可も取った事だし頑張つてね！ ミユウちゃん、アミタリアさん」

「分かりました、任せて下さいなのです。……では、お願いしますのでアミタリアさん」

「オツケイ！ じゃあ【プリトヴェン】の後ろに乗ってくれい」

「ヤタ、二人の案内を頼むよ」

『マカセローー！』

そんな訳で、私はアミタリアさんが乗っている【プリトヴェン】の後ろに乗りこみました。

「それじゃあ出発！ 舞え【プリトヴェン】！ 《ホバーダッシュ》！」

そして、私達を乗せた【プリトヴェン】は底部から風を噴射しながら舞い上がり、そのまま先導する【ヤタガラス】を追って空を飛んで〈UBM〉との戦いに赴くのでした。



「おお！ 空を飛ぶのは初めてですが、実にいい眺めなのです！」

「でしよでしよ！ 【プリトヴェン】が進化して一番良かった所は出力が上がって空を飛べる様になった事なんだよねー！」

そんな感じで、私とアミタリアさんは先導する【ヤタガラス】を追いながら空の旅を少々不謹慎ながらも満喫していました……ちなみに【プリトヴェン】には移動時の空気抵抗を軽減するパッシブスキル《ウィンドリダクション》があるので、思った以上に快適な空の旅に

なっているのです。

……しかし、こんな風に空を飛びながら景色を眺める事が出来るのは良いものですね。デンドロフアンタジー万歳です。

『……ミエテキター！ モクテキチャー！』

「おっ、どうやら目的地に近づいて来たみたいだね」

「そうみたいですネ。……そう言えば双眼鏡が有ったので使ってみましょう。後はミメ、敵を感知したら教えて下さい」

『分かったよ』

目的地が見えて来た事を「ヤタガラス」が教えてくれたので、私はアイラさんが『野外科動のおススメ品』として提示したので買っておいた双眼鏡をアイテムボックスから取り出して進行方向を覗いてみました。

「くっ！ 《デイバイン・チャージ》！」

『《テンペスト・アーマー》！』

『《マルチワ！ 《インフェルノ・ブレード》！』

そこには「テンペスト・ペガサス」のテイルルに跨って手に持った長槍に白い輝きを宿しながら突撃するリリイさんの姿と、その突撃を紅蓮を纏った大剣で迎え撃ち逆にリリイさん達を吹き飛ばしてすらいる一体の大鬼の姿がありました。

……吹き飛ばされたリリイさんはそれでもテイルルが使っていた風の鎧によって炎による熱を防ぐと共に致命傷を避けており、そのまま翼を飛ばたかせて態勢を立て直して再度大鬼に向かって行きます。

「……アレがへUBMですか。成る程、確かに桁外れですね。それに周りには大量のゴブリン達まで居ますし」

「そっちは他の騎士達とへマスター達<が戦っているのかな」

そして、その周りには多数のゴブリン達が残りの騎士達やへマスター達と戦っていました……どうもこちらの方が状況が悪いみたいですね。騎士やへマスター達の中にはかなりのダメージを負った人もいる様ですし、ゴブリン達の質もこれまでの者より高そうで何より数で押されています。

……確か「ゴブリン・キング」のスキル《ゴブリンキングダム》に

はステータス倍加と身代わりの効果があると言う話でしたし、リリイさんは上手くヒットアンドアウェイで時間を稼いでいますがこのままだとまずいですね。

「……アマタリアさん、あの大鬼の近くの地面に降ります。アレは私とミメが相手をするので他の人の援護をお願いしますのです」

「分かったよ、気を付けてね。……ヤタ！ あんたは私と一緒に他の人の援護だよ！」

『カラスツカイガアライナー！』

そうして、アマタリアさんは私を地上に降ろした後、「ヤタガラス」と一緒に他の人達とゴブリンの相手をしに行きました……さて、とりあえず先に【MP持続回復ポーション】——15分間だけ5秒毎にMPを最大値の1パーセントずつ回復させるポーションを飲んでから、私はあの大鬼の下に向かって行きました。

……幸いというか何というか、リリイさんと大鬼の戦いに巻き込まれないためかその近くにはゴブリンとかは居なかつたので特に問題なく近づく事が出来たのです。

『……ムウ、ナニモノダ？』

「貴方の敵ですよ【魔刃戦鬼 ゴブゾード】さん（ミメ、スキルを）」

『《^{アビリティ・ミラーリング}天威模倣》で上から三つコピー……ステータスはSTRが7648、ENDが6316、AGIが5732だよ』

成る程、この大鬼の〈UBM〉——頭上の表記を見ると【魔刃戦鬼 ゴブゾード】と言うらしい——は純竜級すら優に超えるとてもないステータスをしている様ですね……MPの回復量込みでもスキルの判定を超えられるのはギリギリ三回、コピーしているステータスは三つなので維持時間は6分ぐらいでしょうか。

……そこに私が来た事に気が付いたりリリイさんが、高度を少し下げてくださいらに声を掛けて来ました。

「ミュウさん！ 何故ここに……？」

「援軍に来たのですよ。……コイツは私が引き受けますので他の人達の援護に向かって下さい。正直言って、そっちの方が状況ヤバイのです」

実際、周囲のゴブリン達は数でも百体を超えており質においても亜流級に迫る個体も居るので、相手をしている騎士達とへマスター達とはかなり不利な状況に陥っているのです

……まあ、彼等も向こうで夜の様な空間を展開している女性を中心に、ひとかたまりとなつて防戦する事で辛うじて凌いでいる様ですが今のままだとあまり長くは持たないでしょう。

「そういう訳で、向こうに雑兵を蹴散らせるリリイさんが行かないと詰みかねませ……むっ」

『余所見ヲシテイル暇ガアルノカ? 《ダツシユ・スラツシユ》!』

「ミュウさん!?!?」

私がリリイさんと話しているのを隙と見たのか、「ゴブゾード」はおそらく加速系のアクティブスキルを使つて音速に迫るぐらいの速度でこちらに突撃しながら両手持ちの大剣を振り下ろして来ました。

……しかし、コイツはこの私が目の前にいる敵から注意を逸らすなんて事があると思つているんでしょうかね。

「……確かに早いですが見切れる範囲なのです。《カウンター・ブロウ》!」

『ナツ!?!? ……グハアアアア!!』

……「ゴブゾード」が放つた斬撃を私は上昇したAGIもあり紙一重で見極めて躲しつつ、そのまま相手の懐に潜り込んでカウンター時に威力を大幅上昇させるアクティブスキル《カウンター・ブロウ》でその腹部を殴り飛ばしました。

「ご覧の通り、私一人でもコイツの相手は出来るので向こうの援護に行つてください」

「……分かりました。御武運を!」

今の攻防のお陰で踏ん切りがついたのか、リリイさんはテイルルを駆つてゴブリン達と戦っている騎士達の下に行つてくれました……よし、これでとりあえずの「詰み」は回避出来ましたかね。

『……油断シテイタノハコチラダツタカ。貴様ハ我が全力デモツテ相手ヲスル必要ガアリソウダナ』

「一切のダメージは無し、やはり《ゴブリン・キングダム》による身代

わりは健在ですか」

その直後、吹き飛ばされはしたが身代わり系スキルのお陰でダメージゼロな「ゴブゾード」がよく見るとデザインが超キモい大剣を持ってこちらに歩み寄って来ました。

……そして、向こうは引き締まった身体中に戦意を滾らせながら大剣を構えて来たので、こちらもそれに応じる様に構えを取っておきま

す。

『【魔刃戦鬼 ゴブゾード】……貴様ハココデ斬リ捨テル』

「【武闘家】ミユウ・ウイステリア……貴方は私が押さえましょう」
……そうして、私の初めての対へUBM戦（向こうにダメージを与えられないクソ仕様）が始まったのでした。

ゴブリン軍団との激闘

□王都アルテア南部・へサウダ山道

『シイ！ 《デルタスラッシュ》！』

「ええい！ 《ウエポン・パリング》！」

〈サウダ山道〉南側にある少し開けた場所、そこでは「魔刃戦鬼」ゴブゾード」と「武闘家」のへマスター」ミュウ・ウイステリアが激しい戦いを繰り広げていた。

今も「ゴブゾード」が放った三連斬撃をミュウが一・二撃目を回避して、三撃目をスキル効果込みのパリィで凌いで互いに一旦距離を取った所である。

『フン、先程カラ避けテバカリダナ』

「攻撃してもダメージを与えられないのだからしょうがないのです。……貴方の技量が高いので、下手に攻撃するとカウンターを喰らいかねないですし」

『現在2分経過したからMP消費だよ。……現在のMPとその回復量から考えると次の判定を超えたらその次を超えられるか怪しいね。止む終えずMP消費のスキルを使ったりしたし』

そう、ミュウは「ゴブゾード」が有する身代わり効果を突破する手段を有していない為、先程から相手の攻撃を避けるかいなすかしか出来ない状態に陥っていたのだ。

……最初の方では相手の攻撃の間をつき上昇したステータスからのアクティブスキルを叩き込んで周りのゴブリンの数を減らすぐらいは出来たのだが、戦闘から1分も経過した時には向こうが持つ高レベルの《剣術》の所為でミュウの動きに慣れ始めてしまい下手な攻撃は出来なくなっていたのである。

（それでもまだこちらの方が技量は上なので無理をすれば攻撃を当てるぐらいは出来るのですが……そこまですらダメージを与えられないならリスクとりターンが釣り合っていないのです）

『本当にね。……それでどうする？ このままだとジリ貧だよ。とりあえず向こうが使って来た強い攻撃を二つ《攻撃纏装》アタック・テスクチャにストック

したけど。炎熱斬撃と重斬撃みたいなやつ』

とはいえミュウもただ攻撃を凌ぎ続けていた訳ではなく、相手が威力の高いアクティブスキルを使ったタイミングで《攻撃纏装》にそれらの攻撃をストツクするなどしていた……だが、そのストツクを使つた所で【ゴブゾード】を倒す事が出来ない以上、彼女は勝機が来るまでそれを温存する戦術を取るつもりであった。

……しかし、相対している【ゴブゾード】は目の前の相手を自分だけの力で倒すのは困難だと判断して次の一手を打とうとしていた。

『マア、俺ハ剣士デアル以前ニ“王”ダカラナ。……故ニ、コウイウ戦術ヲ取ラセテ貰オウカ』

「……チツ、成る程そう来ますか」

『ミュウ、向こうの騎士やへマスターと戦っていたゴ布林達がこっちに向かつて来てるよ！』

その次の一手とは実に単純なもので、何体かの遠距離攻撃可能なゴ布林を自分の援軍に寄越すというものだった……が、数発の遠距離攻撃に対応する事がミュウに取つての致命的な隙に成りかねない現在の様な拮抗した戦況では実に有効な一手であった。

……今の彼女のステータスを考えればゴ布林の遠距離攻撃程度では致命傷にはならないだろうが、相手はそれを避けるか防ぐかした隙を突いて戦局を有利な状態にする気なのだろう。

『貴様ハ強イノデ余リ時間ヲ掛ケタクナイ……ココデ確實ニ詰メサセテ貰オウ』

「全く、個人としても強いのに集団戦もある程度熟すとか嫌になるのです」

『本当にね』

……ミュウと【ゴブゾード】の戦闘開始から約2分、彼女が一对一で〈UBM〉を足止めするには限界に達しようとしていた。



「あー、これはあかんわー。……アイツ、ウチの《月面徐算結果》の外

側を囲んどったヤツらをあつちに向かわせたな」

その時、騎士とヘマスター達の中心で夜の様な結界を展開している女性——今回のクエストに参加していたクラン〈月世の会〉のオーナー【司祭】^{プリースト}扶桑月夜はゴブリン達のそんな動きを見てやや眉を顰めた……彼女を含み現在ゴブリン達と交戦中のヘマスターと騎士達は他と同じ様に近くにいるパーティーと合流して周囲を調べていたのだが、そこで運悪く【ゴブゾード】率いるゴブリンの群れと遭遇してしまったのだ。

それに気付いた彼等はその群れを自分達だけで相手をするのは無謀だと他のパーティーに連絡を取りつつ即座に逃走しようとしたのだが、足の速いワイバーンに乗った【ホブゴブリン・ライダー】や索敵と遠距離攻撃が出来る【ホブゴブリン・ハンター】などの追撃を受けてやむ終えず交戦状態に入ってしまったのだった。

……その際に勝手な行動を取った何人かのヘマスターがデスペナになったりもしたが、幸いにも向こうの本隊である【ゴブゾード】率いる部隊と交戦状態に入ってから直ぐにペガサスを駆るリイ・ローランが援軍に来了たので、彼等はへUBMを彼女に任せる形で辛うじて防戦を行う事が出来ていたのである。

「うーん、レベル差の所為でこっちのスキルはあつちのボスにはあんま効かへんし、このままあの子に崩れられるとこっちも普通に詰むやろうなあ」

「ですが、月夜様がここを離れる訳には行きませんよ」

「それは分かつとるよ。……こっちの戦況はウチの【カグヤ】のデバフで向こうのバフを相殺しとるお陰で持つとる様なもんやからな」

月夜は騎士達とヘマスターが円陣を組んでゴブリン達と戦っている中心で、自身の秘書兼護衛である【暗殺者】^{アサシン}月影永仕郎の言葉に答えながら周り戦況を見ていた……彼の言う通り『ゴブリン・キングダム』のバフによつて亜竜級に迫る程に強化されている多数のゴブリン達と騎士やヘマスター達が戦えているのは、彼女の敵対対象への強力なデバフスキル『月面徐算結界』の効果で敵のステータスが大幅に下がっているからである。

……ただ、ゴブリン達も月夜の『夜』が自分達のステータスを下げるモノであると気がついており、その効果範囲外からの遠距離攻撃を主体で攻め立てているので向こうの数を減らす事は難しくなっているのだが。

「ちゃんと集団戦をしてくる相手はほんとに面倒やわー。……ウチの今のMPでこれ以上範囲を広げると直ぐに枯渇するやろうしー」

『此の今の到達形態でのスキル出力も考えると、このぐらいが一番範囲と消費のバランスがいいものね』

「頼みの綱は結界外でも問題なく戦えるリリイ氏ですが……彼女も上手く対応されている様ですね」

主人である月夜に近づいてくるゴブリンを自身の「ヘンブリオン」である【影従圏 エルルケーニツヒ】で操る影で倒しながら、月影は結界の外で地上から弓や魔法による遠距離攻撃を受けながら空中でワイバーンに乗ったゴブリンを相手にしているリリイを見てそう言った。

ミュウに【ゴブゾード】の相手を任せてからゴブリンの群れを空中からのヒットアンドアウェイで倒していたリリイとテイルルだったが、それに対してゴブリン達は横入りに対する警戒の為に外側に配置していた【ホブゴブリン・ライダー】とワイバーン達6組を呼び戻して彼女の相手をさせたのだった。

……リリイにとって一対一でなら問題無く倒せる相手であったが、6組のライダーの連携に加えて地上からの援護もあり彼女はかなりの苦戦を強いられていたのだ。

「まあ、お陰で遠距離攻撃出来るゴブリン達の何割かは向こうに行つとるけど……このままやとジリ貧やね。今は【ポーション】飲んで凌いでるけど、ウチのMPもそろそろ心許ないし」

「足止めしている彼女の方も「ヘンブリオン」のスキルでステータスを引き上げている様ですし、コストが何かは分かりませんがいつまでも戦い続けられるという訳にも行かないでしょう」

今も円陣の外側では【聖騎士^{パラディン}】のジョブに就いている騎士が『グラウンドクロス』を放つてゴブリンを焼き払ったり、レオン・ハートを始

めとするリリアーナファンクラブパーティーが彼女を守ろうと獅子奮迅の活躍を見せていたり、ミュウと一緒に援軍に来たアマリアが《エアロバースト》でゴブリン数体を吹き飛ばしたり、物理攻撃の効かない泥状のゴレム型ガードナーのヘンブリオがそのマスターのバフを受けて物理攻撃しか出来ないゴブリンの足止めを行ったりして辛うじて善戦しているが、負傷者も増えてきておりこのままではそう遠くない未来に破局が待っているだろう。

「あー、後もう一回ぐらい都合よく援軍が来てくれへんかなー。……っーか、もうそれぐらいしか状況を打破する術が無いんやけど……」
「……それですが月夜様、どうやらお望みの援軍が来た様ですよ」
『そうみたいね』

そんな事を月影に言われた月夜がその指を指した方向を見ると、そこには九人程の騎士が後ろにもう一人乗せた馬に乗ってこちらに來ている光景があった……そう、彼等はリリイが率いていた残りのパーティーメンバーであり、騎士達が自分の愛馬の後ろにヘマスター達を乗せてどうにか短時間で援軍に來ることが出来たのだ。

……そうして援軍に來た騎士達は即座にヘマスターを後ろから下ろしてゴブリン達に向かって行き、降ろされたヘマスター達も各々のヘエンブリオやスキルを使ってゴブリン達を攻撃していった。

「よっしゃー！ 援軍來た、これで勝つる！ これもウチの日頃の行いが良いからやね！ ……それじゃあ、向こうと合流しつつ情報共有と態勢の立て直しやな」

「そうですね。……アマリアさん、貴女は元々向こうのパーティーの一員という事なのであちらへの状況報告をお願い出来ますか？」

「あ、はい！ 分かりました！」

……そして、月夜はそんなどっかのクマ着ぐるみが聞いたら全力でツッコミそんな事を宣いつつ、月影やアマリア達と協力して戦局を立て直す為に動き始めたのだった。



「……と、現在の状況はそんな感じ！」

「成る程、そういう状況か。……良くやったアミタリア」

「しかし、ミュウちゃんの戦闘開始から3分経過となるとちよつと不味いな。……残りMPから考えてスキルの制限時間は後3分ぐらいだろう」

「それにミュウちゃんのスキルは一度解除すると同じ対象への再使用にしばらく掛かるからね」

「それは不味いですね。……ローラン卿は敵航空戦力と交戦中ですし」

空を飛ぶ事でこちらに合流したアミタリアから現在の戦局を聞いたアット、レント、ミカ、セイラン卿を始めとした援軍は、ゴブリン達と戦いながらもお互いの情報を擦り合わせて次の行動を考えていた。

……とりあえず、まだお互いの連携が拙い事や指揮系統の関係から、へマスター組と騎士組は一旦別れて行動する事となった。

「まずは遠距離攻撃持ちを減らした方がいいか。……今【ゴブゾード】をフリーにする訳にも行かないし、上手く対空攻撃を減らせばこっち側の最大戦力であるリリイ氏をフリーに出来るかもしれないな。

……へマスター組全員！ 遠距離攻撃持ちを可能な限り優先して狙え！ 《アイスニードル》！」

「まあ、それが妥当かな。上手く空中を飛び回る相手に遠距離攻撃を当てるのは難しいし…… 《詠唱》終了《ヒート・ジャベリン》！」

「ヤタ《金鳥の炎》と《誘導光》を！ …… 《ハンティングアロー》！」
『カラスツカイガライナー！』

そしてアットが指示を出しつつ【ホブゴブリン・アーチャー】に氷の針を突き刺しその腕を凍らせて射撃を妨害し、レントの放った《詠唱》による強化が乗った炎の槍が別の【アーチャー】に突き刺さって焼き付くした。

別の所では指示を受けた【ヤタガラス】が【ホブゴブリン・メイジ】に金色の炎を当てた上でその身体にマスターの遠距離攻撃を誘導する光を纏わせて、そこに久遠たむーが上空に狙いを定めずに全力で

放った矢が引き寄せられて頭部を撃ち抜いた。

「…………え？ さっきの魔法がラーニング出来た？ ……じゃあそれだ！」

『おっけー。さあ、はでにいくぜ！ ……《ヒート・ジャベリン》！』
『こつちもいくよー！ 《ヒート・ジャベリン》！』

『おなじくー。《ヒート・ジャベリン》！』

また別の所では「フェアリー」達からレントが使った魔法を運良くラーニング出来たと聞いたリゼが、早速その魔法を三体の「フェアリー」の行使させる事で三本の炎の槍をそれぞれ放ってゴ布林達を焼き尽くした……だが、それだけ目立つ事をした所為で彼女は一体の「ホブゴブリン・アサシン」に目をつけられてしまう。

……その【アサシン】が有する《気配操作》スキルによってリゼと「フェアリー」達はその接近に気付く事は出来ず……。

『BAUWAU！ (主人！ 気配を消してる奴がいるぜ！)』

『KIEEEEE！ (何をこつそりと近づいてる！ 《ウインドカット》ー！)』

『GAAAAA!?!?』

「リゼさん！ 敵が近づいて来ていたみたいです！ アリア！ トリム！」

「ええ?!? と、とりあえず魔法を……」

『「こんとらくと」しとくぜー』

彼女の護衛に付いていたエルザの従魔で索敵に長けた「テイルルーフ」のヴェルフと【ウインドイグル】のウオズにその接近を気付かれて暗殺を阻まれた……エルザとその配下達はレベルがまだ低い所為で強化されたゴ布林と戦うのは自分達では厳しいと判断して、他のメンバーのサポートに集中していたのだ。

……更に存在がバレた【アサシン】に【ワルキューレ】のアリアとトリムが切り掛かってダメージを与えつつ足止めして、そこに《フェアリー・コントラクト》でラーニングした魔法を使える様にしたりゼが放った《ヒート・ジャベリン》が突き刺さった。

「《グランドクロス》！ ……こちら近衛騎士団所属のセイランです！」

「救援に来ました！」

「おお、有り難い！」

そしてセイラン率いる騎士達はゴブリン達の包囲の一角を総攻撃でもって崩し、ゴブリン達と戦い続けていたもう片方のパーティーと合流する事に成功していた……また、上空で戦っていたリリイとティルルも地上からの遠距離攻撃が減った隙について、空戦技能の差から「ライダー」が乗っているワイバーンを始末する事に成功していた。

……そうして二つのパーティーは合流する事が出来て、どうにか態勢を立て直す事が出来たのだった。



「《遠視》《看破》《鑑定眼》……ふむ【魔刃戦鬼 ゴブゾード】ね。ステータスはSTRが7648、ENDが6316、AGIが5732、手に持ってるのは「ヴァルシオン」という銘の大剣で高い攻撃力及び高いスキルレベルの《破損耐性》や《盗難耐性》を持つてるみたいだな」

「成る程、とんでもないステータスだな。普通に戦ったらアイツ一体でこつちが全滅しかねん。……それと単騎で互角に渡り合えるお前の妹も大概だが」

「ホンマになー。……ただ、身代わりスキルのお陰でダメージを与えられへんから、このままやとジリ貧やけど」

そうして戦局にある程度の余裕が出来たので、後方に居るアット、レント・月夜などのメンバーは敵のステータスを鑑定しつつ今後の方策を話し合っていた……と言っても、未だにゴブリン達の数はこちらよりも多いので中々有効な手段は思い浮かばなかったのだが。

そこにサブジョブの【司教】レシヨブのスキルで回復などの後方支援をしていたセイランと、上空の敵を倒し終わって地上に降りてきたリリイが話に加わってきた。

「とにかく援軍として【天翔騎士】ナイト・オブ・ソアラングのリヒト団長がもうすぐ来てくれる筈ですし、それまで持ち堪えるしか無いのでは……」

「いえ、話を聞いた限り【ゴブゾード】の足止めをしているミュウさんの残り戦闘時間は2分程です。……リヒト団長が来るまでもたない可能性も有りますから、もう一度私とティルルが援護に言った方がいいでしょう」

……だが、この場の戦局がゴブリン側に不利な状況になったと気が付いたのは【ゴブゾード】の方も同じであり、故に彼は好んでいた。タイマンで強者と戦う。事を辞める事にしたのだった。

『止ム終エン、貴様ハ後回シダ。《テンペスト・ブレード》！』

「チツ！ 地面に……すみません！ 【ゴブゾード】がそっちに行きます！」

突然、【ゴブゾード】が暴風を纏った大剣【ヴァルシオン】が地面に叩きつけた事によって発生した土煙りと衝撃波によってミュウは一瞬だけ相手を見失ってしまい、その隙に彼はゴブリンと戦っているパーティを潰す為にそちらへと全力で走り出した。

……それに気付いたミュウも警告を飛ばすと共に自身も後を追うが、スキルの特性上AGIは同じにしかならないので一度距離を離されると追いつく事は難しいのだ。

「ティルル！ 行きますよ！ ……このままアイツに暴れられたら全員潰されかねません！」

『《ゴブリン・キングダム》でダメージを受けない以上、乱戦であればあちらに部がありますからね』

それに気付いたリイとティルルは即座に【ゴブゾード】の迎撃に向かっていった……身代わりスキルでダメージを受けない以上、自分に向けられる攻撃を全て無視して倒せる相手を倒す戦術を取られれば不味いという判断である。

……事実、向こうの狙いは彼女達が考えていた通りのものであり、だからこそ足止めに徹して戦場から隔離していた訳だが……。

「そりゃあ、身代わりでダメージを受けない最強の自分を前線に出すのが向こうの集団戦では一番強いよね」

「……ミカ、どうする気だ」

そんな人間側の殆どの者が焦りや不安を感じている状況で、ほぼ

唯一特に心を乱す事を無かったミカはデバフを受けたゴブリン達を【ギガス】で叩き潰しながらレントの下へとやって来ていた。

……その姿を見たレントは彼女がこの状況を打破するすべを「直感」していると判断し、今後どうするかを問うた。

「流石はお兄ちゃん、話が早くて助かるよ。……大丈夫、私にいい考えがあるよ！」

「……なんかちよつと不安になって来たな。とりあえずさっさと言葉え」

……何故かドヤ顔で放たれたその言葉に少し呆れながらも、レントはこの状況を打破出来るだろうミカの言葉の先を促したのだった。

〈UBM〉の正体

□??
???

「……ふむ、少し妙な事になったから暫く王国に投下した
ユニーク・ボス・モンスター
〈UBM〉の定期的な観察を続けていたが、それが率いるゴブリ
ンの群れと〈マスター〉・ティアンとの戦闘になっていたとは」

「あー、王国が定期的に行っている【墓標迷宮探索許可証】が報酬のクエ
スト参加者達だねー」

暗い闇の中、とあるモニターを見ながらそんな会話をしているのは
〈Infinite Dendrogram〉を管理する十三体の管
理AIの一人〈UBM〉担当・管理AI四号 “ジャバウオック”と、主
に雑用担当の管理AI十三号の “チェシャ”である。

そして彼等が見ているモニターには現在〈サウダ山道〉で起きてい
る【ゴ布林・キング】に率いられたゴブリンの群れと、〈マスター〉
とティアンの騎士で構成されたチームの戦いが映し出されていた。

「大軍勢を率いる “王” に対して仲間と協力して立ち向かう……う
む、これもまた英雄叙事詩^{ヒロイック}であるのだろう。……スタートダッシュ
キャンペーンという事で、〈マスター〉達の〈エンブリオ〉の進化を促
すカンフル剤として各国の初期開始地点周辺に現在の〈マスター〉で
も倒せる可能性のある逸話級から伝説級下位の〈UBM〉を投下・発
生させた甲斐があると言うものだ」

「まあ、今のところはこれと言ったやらかしが無いようで良かった
よー。……この序盤で〈UBM〉が何か訳の分からない変異とかして
もらったら困るしねー」

尚、チェシャがジャバウオックの担当区域にいるのは、この “序盤
の〈マスター〉へのカンフル剤として初期開始地点への〈UBM〉投
下” 計画で何か異常が起きていないかを調べる為である。

一応、まだデンドロが始まってから間も無い序盤なので念の為に
ジャバウオックが投下・発生させた〈UBM〉への監視を行いつつ、何
かがあれば報告を上げる事になってはいる……のだが、管理AIの中
でも “やらかす” 率が高いジャバウオックの監視だと微妙に信用出

来ないと思つたチェシヤは、まだ序盤で演算容量にも余裕がある事もあつてこの様に定期的な監査を行なつていふのだ。

「……投下した〈UBM〉は逸話級から伝説級下位ぐらいで、かつ能力が出来るだけ（比較的）悪辣でないモノか、条件を満たせば序盤のヘマスターでも討伐し得る可能性があるモノを選別したのだから。何か異変が起きる可能性は低い筈なのだが」

「その『可能性が低い』でこれまで僕やドーマウスやキャタピラーが何度も後始末をしてるからね。……〈Infinite Dendrogram〉が始まつて〈マスター〉を迎え入れた以上はこれまでみたいな『火消し』は出来ないから念の為だよ」

「……そんなちよつと毒のある発言をしつつもチェシヤはモニターに映る〈UBM〉について言及し始めた。

「……それより、この『ヴァルシオン』は大丈夫なの？　なんか妙な所に拾われているみたいだけど」

「ふむ、確かにこの『心触魔刃 ヴァルシオン』が『あの』『ゴブリン・キング』に拾われたのは多少予想外ではあつたが、そこまで問題視する事もあるまい？」

その〈UBM〉監視用モニターに映っていたのは『ヴァルシオン』という大剣を持つ『魔刃戦鬼 ゴブゾード』……では無く、大剣型の伝説級〈UBM〉『心触魔刃 ヴァルシオン』を持ち、最早その面影すらないレベルで改造された『ゴブリン・キング』の姿であつた。

「……そう、初めから『魔刃戦鬼 ゴブゾード』などという〈UBM〉は存在しておらず、その場に居る〈マスター〉やティアンが『ゴブゾード』だと思つていたのは『心触魔刃 ヴァルシオン』という大剣型〈UBM〉を装備……否、それに寄生された『ゴブリン・キング』だったのである。

「対象一体を強力な『魅了』状態異常にして自意識をそのままにしつつ思う通りに操る『魂縛心触』、自身及び自身を装備した対象のステータス表記や頭上の名前表記を隠蔽・偽装する『偽装消剣』、自身を装備した対象のステータス・状態異常耐性を倍加させる『凶相魔刃』、戦闘中に装備した対象のHP・MP・SPを自動回復させる『強壯魔刃』、自

身の形状を装備者に合わせて変形させる《剣状変形》、自身を使った戦闘の経験から得られたデータを元に装備者の肉体・スキルを改造・追加・強化する《刃体改造》と……序盤の敵にしては盛りだくさんじゃない？」

「その分、自分自身では動く事も出来ないただの頑丈な剣でしかないという欠点も有るがな。だからこそ伝説級のランクでこれだけのスキルを詰め込めたとも言いが。……後は「ヴァルシオン」を放って持ち主だけを倒すと、その際の持ち主の怨念を使って《魂縛心触》の効果範囲をその場に居る全員に広げた上で発動出来る《怨縛心触》というトラップもある」

そのモニターに映し出された「心触魔刃 ヴァルシオン」のステータスを見てチエシヤが軽く苦言を呈するが、ジャバウオツクは特に気にせず「ヴァルシオン」の欠点を含んだ詳しい解説をしていた。

……自分の作品を解説したい製作者精神があったのか、或いは自分好みの英雄叙事詩ヒロイックを見れてご機嫌なのかジャバウオツクの解説は更に続いていく。

「ヴァルシオン」はこのスキルを使って持ち主を渡り歩きながら戦闘データを収集し、自身と装備者を強化していくコンセプトで作った《UBM》だからな。……まあ、《マスター》の精神保護は抜けないから「自害」で対応されてしまうが、それも含めて仕込みさえ見破れれば勝てる条件特化型に分類されるから序盤《マスター》の壁としては丁度いい相手だろう。……昔作ろうとした《SUBM》を生み出すための失敗作の一つだったのだが、保管しておいて正解だったな」

「待って。なんか今物凄く厄い言葉が聞こえてきたんだけど」
そんな上機嫌で自分の作品を語るジャバウオツクがふと漏らした聞き捨てならない言葉にチエシヤは反応するが、そんな事は特に気にする事も無く彼は解説を続けた。

「そこまで忌避する様なモノではないぞ。単に「ヴァルシオン」は私が昔へSUBMを作ろうと試行錯誤していた時期に作った《UBM》の一体だというだけの話だからな。……ああ、その場合は「失敗作」では無く「試作品」と言うのが正しいのか」

「……とりあえず、この【ヴァルシオン】について詳しく解説してくれる？」

……ジャバウォックはそう言うが、この同僚が作った〈UBM〉がこれまで巻き起こした数々の「やらかし」を知っているチエシヤからするとイマイチ信用出来ないのもそのまま詳しい解説を促した。

「ふむ、アレは〈UBM〉同士をキメラ化させる事によって〈SUBM〉を作ろうとしていた時だったな。その際の実験結果で〈UBM〉同士のキメラはその成功率が余りにも低く数少ない成功例もその殆どが寿命や耐久性などに欠陥を抱える事が分かっていたので、私は「キメラ化以外の方法で〈UBM〉同士を融合させられないか」と考えたのだ。……その際に考えたプランの一つに『〈UBM〉に〈UBM〉を装備させる』と言うものがあつてな。その為に「三強時代」に作り出された【ヴァルシオン】という名の剣がモンスタライズした【インテリジェンス・カースソード】を改造して生み出された〈UBM〉が【心触魔刃 ヴァルシオン】だった訳だ」

「あー、あの時代ならそんな武器が生み出されていても仕方ないかなー」

ちなみに【ヴァルシオン】は腕は一流だったのだが世渡りが下手で作った剣がまともに売れなかったある鍛冶師が『自分の作った武器が他者に認められる様になりたい』と願って作り上げてしまった、その剣を見た者を強力に【魅了】してしまう剣だったらしい。

更にステータスの偽装や装備した人間を強化する装備スキルを持つていた所為で【ヴァルシオン】を奪い合う為に殺し合いまで発生してしまい、その際の怨念によって【インテリジェンス・カースソード】へと成り果ててしまったのだった。

……尚、その鍛冶師はその【ヴァルシオン】を巡る争いに巻き込まれて死んでしまっている。

「その【インテリジェンス・カースソード】が元々持っていた魅了・偽装・強化の能力を強化し、更に装備した〈UBM〉を〈SUBM〉に進化させる為のスキルである《刃体改造》を始めとしたいくつものスキルを追加して【心触魔刃 ヴァルシオン】を作り上げた訳だ。……

が、肝心の《刃体改造》がへUBMのスキルに対しては上手く干渉出来ず、また【ヴァルシオン】自体のモンスター改造へのセンスが低かった為に失敗作扱いとなつて今まで保管されていたという訳だ」

「成る程ねー。……まあ、その手の生産系スキルはスキル強度よりも使用者のセンスがモノを言うしねー」

……そう言いながら、チェシヤは目の前の同僚が生み出してきた数々の「アレ」な能力を持つへUBM達を思い浮かべていた。

「まあ【ヴァルシオン】の思考が『所持者を【魅了】して自身を上手く使える様にする』だけな所為で、モンスター改造も身体強化と剣技系スキル強化ぐらいしか行わないからな。【ゴブリン・キング】を強化するなら《ゴブリンキングダム》を始めとするゴブリンの使役・指揮能力を強化した方が面白くなると思うのだが。……やはりモンスター改造に於いてセンスは重要か。今回のイベントで3号が作ったモンスターも良く言えば無骨、悪く言えば単純だったしな。序盤へマスター相手なら丁度いいと今回は認定したが、今後はもう少し判定を厳しく……」

「……それはクイーンには言わないであげてねー」

そのジャバウオックが発した唐突な同僚へのディスリに対して、今回のへUBM投下イベントで自分が考えたモンスターが選ばれた事を実は物凄く喜んでいたその同僚の事を知っていたチェシヤは余り意味はないだろうと内心思いながらもそれだけは言っておいた。

……そうして考え事を終えたジャバウオックは再びへUBMについての話を続けた。

「まあ、そういう事で今回のイベントの一環として【ヴァルシオン】をティアンの剣士系ジョブの山賊に拾われる様に投下したのだが、その【ヴァルシオン】を拾った山賊がああ【ゴブリン・キング】に敗れたのだ。……そして【ヴァルシオン】が《怨縛心触》を発動させて【キング】を【魅了】して操った結果、今の【魔刃戦鬼 ゴブゾード】に見える奴が生まれたという訳だな」

「まあ、大体分かったよー」

そんなジャバウオックの一通りの説明を理解したチェシヤは、最後

に【ヴァルシオン】が寄生している【ゴブリン・キング】の〃とある情報〃を見て質問を言い放った。

「ところで、この【ゴブリン・キング】は〃かなり特殊な生まれ〃みただけけど大丈夫？ ……こんな序盤で王国が滅びるとかにはならないよね？」

「問題無かろう。【ヴァルシオン】とこの【ゴブリン・キング】の〃特殊性〃は両立しない様だし、そちらの方も王国に居る【天翔騎士】【天騎士】【大賢者】が出張れば特に問題無く対処されるだろう。 ……それより、向こうの状況が動く様だぞ」

…その様な不穏な会話をしつつ、二体の管理AIはへサウダ山道へ起きている戦いの趨勢を見守るのだった。



□へサウダ山道へ

管理AIが見ているとはつゆ知らず、へサウダ山道へで戦っていた〈マスター〉の一人であるミカ・ウイステリアは自身の兄であるレント・ウイステリアに一つの提案をした。

「とりあえず、アイツの持っている大剣をぶっ壊そう！ ……なんかそうした方がいい気がするし！」

「まあ、俺もあの大剣は怪しいと思ってたしそれで行くか。 ……と言うわけで、あの大剣を狙うぞ」

「いや、ちよつと待てレント。なんか二人だけで納得してるが、こつちにも詳しい事情を教えてほしいぞ」

持ち前の〃直感〃であっさりと色々台無しになる感じな最適解を割り出したミカに対して、こちらも慣れているのかあっさりとなんげしたレントだった……が、流石に周りの人間はそういう訳にもいかず、代表してアット・ウイキがレントに説明を求めた。

…とは言え、その反応も予想の範囲内だったのかレントは即座に理由を説明し始めた。

「別に、あの【ゴブゾード】本体には攻撃が届かないからその武器を狙

おうってだけの話だ。アイツは剣技メインみたいだし武器を奪えば戦闘能力は大きく下がるだろうからな。……それに、あの「ヴァルシオン」って大剣はアレだけ禍々しい邪気を放ってんに鑑定したスキルにはそれらしいモノが無かったならな。それに他人の武器を鑑定したらマイナス補正がかかる筈の鑑定、しかも俺の低レベルな《鑑定眼》で情報が全部見えたのもおかしい」

「な、成る程……」

「一応理には叶つとるねー。……で？ どうやってあの剣を狙うん？」

周囲の人間はレントのその説明に一応納得したが、そこで扶桑月夜が肝心の剣を狙う方法について問いただしてきた……が、それについて答えたのは彼では無くその妹のミカの方だった。

「それはアイツの動きを止めてから剣を殴るしかないんじゃない？」

……どっちみちミュウちゃんの残り時間は後1分くらいだから時間は無いし、アイツの動きを止める必要はどっちみち生じると思うけど」

「まあそうだな。……リゼ、お前の「フェアリー」の切り札は残っているな。それで拘束魔法は行けるか？」

「はい！ 大丈夫ですオーナー！」

「ま、身代わり効果持ち相手なら妥当な対応やしね。影やんいける？」

「お任せ下さい」

そうして方針が決まった彼等は、手の空いている者達から「ゴブゾード」の身代わり効果を突破して拘束や攻撃が可能なメンバーを早急に選別して行った……現在「ゴブゾード」はミュウとリレイがどうか足止めしているだけだという危機感もあって、これらのメンバーはどうか捻出する事が出来たのは彼等にとって幸いだっただろう。

……尚、ティアンの騎士達は彼等の方がステータスが高いので他のゴブリン達の相手をせねばならず、捻出出来た協力者は「マスター」のみであった。

「それじゃあ、ミュウちゃんのスキルも残り1分も無いだろうし行くとするか。……まあ、どうせ初見の「マスター」同士でロクな連携な

ど取れんだろうし、基本的には拘束して武器を奪うだけだがな」

「ああ」

「分かっとする。じゃ行こか」

……そんな簡単なレント・アット・月夜の会話を合図として、彼等は【ゴブゾード】を拘束してからその武器を奪う為に動き出したのだった。

一つの決着

□〈へサウダ山道〉

「ええいつ！ リリイさんのお陰で追いつけはしましたが、こうも乱戦では！」

『ミュウ！ 残り時間1分を切ったよ！ 今のMPじゃ次の判定を超えられない！』

『チー！ 邪魔ヲスルカ！』

「行かせる訳には行きません！」

当初の予定であった強者との戦いを中断して、他の倒しやすい弱者を狙おうとしていた【魔刃戦鬼 ゴブゾード】——に寄生して操っている【心触魔刃 ヴァルシオン】——だったが、まず迎撃に來たりリイとティルルの突撃で足止めを喰らい、更にそのお陰で追いつかれたミュウが協力する事でどうにか押さえ込めていた。

だが、戦場の位置がゴブリン達とへマスター・ティアンが戦っている場所になった所為で彼女達に他のゴブリンが襲いかかる様になってしまい、それに気を取られる所為もあって苦戦を強いられていたのだった。

……その様に激しい戦いを繰り広げている場所に一つの人影が踊り込んで來た。

「ミュウちゃん、まずは接近してそいつの足を止めるよ！ そんなで持っている剣を狙う！」

「姉様!? ……分かりました！」

そこに現れたのは両手に大型戦棍【撃炎棍 ギガス】を持ったミカであった……彼女は自分のへエンブリオが身代わり効果を抜ける事から前衛として【ゴブゾード】の足止め及び戦っている二人に作戦内容を伝える役目を買って出たのだ。

彼女が発した簡潔な指示にその「直感」の事を知る身内であるが故に、それがこの状況を打破出来ると即断したミュウは相手の動きを制限しながら【ゴブゾード】が手に持った大剣を狙い始めた。

』

これに対して焦ったのはただの大剣の振りをしている「ヴァルシオン」である……彼（？）の思考パターンは基本的に他者を「魅了」して自身を使わせる事しか考えていない単純なモノであるが、自分自身が狙われていると知ってそれに対して自己保存を図るぐらいの判断は出来た。

……そして、思考が単純であるが故に、「ヴァルシオン」は即座に《魂縛心触》によって自身の使い手宿主である「ゴブゾード」を自分を狙う相手を迎撃させる様に操った。

『ッ!?? 我ガ剣ヲ狙ウカ! ヤラセン! 《ライトニング・ブラスト》!』

「範囲攻撃!?? テイルル防御を!」

『《テンペスト・アーマー》』

直後、膨大な雷がその大剣ヴァルシオンに宿り、そのまま「ゴブゾード」が剣を円を描く様に水平に振り回す事で360度全方位に強力な電撃が撒き散らされた……この《ライトニング・ブラスト》は以前に彼等が倒した電撃によって相手を「麻痺」させる事得意とする純竜級モンスター「ライトニング・ホーネット」の能力を模倣して作られたモノで、高確率で相手を「麻痺」させる雷を剣に纏わせて攻撃するスキルである。

そして、このスキルは直接攻撃だけでなく電源を撒き散らす範囲攻撃としても使う事が出来、その場合でも威力こそ直接斬りつけた時と比べて大幅に落ちるが電撃が当たった相手を高確率で「麻痺」させる効果はそのままに出来るのだ。

……剣を使って直接相手を斬る事を好む様に精神を操作された所為で「ゴブゾード」は今まで使わなかった方法だが、そのお陰で初見殺しになってしまい距離が離れていたリイは防御出来たものの、接近していたミカとミュウはその雷撃をモロに浴びてしまい……。

「……はい、予測確定」

『ナ……!?? 何故、我ノ方ガ「麻痺」ニ……?』

その雷撃が当たった彼女達では無く、何故か「ゴブゾード」の方が「麻痺」の状態異常に掛かってしまっていた……こうなる事が分かっ

ていたからこそ、ミカはわざわざ大声で「剣を狙う」と言ったのだが。

「……ふむ、念の為に前衛の三人をスキル効果の対象に入れていて正解だったな。これはラッキーだ」

「しかし、パーティーメンバーへの状態異常反射とはアットのヘエンブリオは強力だな」

「名前が言いにくいのが玉に瑕ですけどね」

その不可思議な現象は、〈Wiki編集部・アルター王国支部〉クランオーナーであるアット・ウイキのヘエンブリオ「白夜洛陽 ティエンレンウーシユアイ」の「指定したパーティーメンバーに掛かった状態異常を無効化・蓄積して、状態異常を掛けた相手に増幅反射するスキル」によるものである。

……彼は方が一に備えて同じパーティーを組んだままだった前衛三人を自身のヘエンブリオのスキル効果の対象に入れており、彼女達に掛かった状態異常を無効化した上で反射したのだ。

「うるさいぞ久遠たむー、ヘエンブリオのモチーフは選べないんだから仕方ないだろう。……つと、そんな事より蓄積量が少ないから「麻痺」もそんなに長く続かん。リゼ！ 準備は？」

「……《フェアリー・コーラス》準備出来ましたオーナー！ 行くよフェアリーズ……《マッドクラップ》！」

『『おっけー！ 《マッドクラップ》!!!』』

『グウ!!! コレハ土ガ足ニ……!??!?』

続いて〈Wiki編集部〉のメンバーの一人であるリゼ・ミルタとそのヘエンブリオ「支援妖精 フェアリー」による地属性拘束魔法が発動した……そのスキル《フェアリー・コーラス》は自身と「フェアリー」達で擬似的な合体魔法を使用出来る様にするスキルであり、それによって大幅に強化された《マッドクラップ》は「ゴブゾード」の膝から下をガッチリと固定してしまった。

……だが、大幅に強化されているとは言え所詮は駆け出し「マスタール」が使った下級の拘束魔法であり、高いSTRを誇る「ゴブゾード」ならば時間を掛ければ拘束を破壊して脱出出来るだろう。

『エエイ！ ナラバ地面ヲ破壊シテ……』

「勿論、そんな事はさせへんけどな。……カグヤ《月面徐算結界》、影やんもよろしく」

「承知しました月夜様」

「ラフム！ 貴方も行ってください！」

『BO・BO・BO』

咄嗟に「麻痺」している身体を無理矢理動かして地面を破壊しようとした「ゴブゾード」だったが、そこにへ月世の会〈克蘭オーナー扶桑月夜の《月面徐算結界》による「夜」が辺りを覆い、間髪入れずにそれによって出来た影を月影が操って「ゴブゾード」の下半身に纏わり付かせてその動きを制限して行く。

更にその場に居たへマスターの一人であり、今回の作戦に協力を申し出た「付与術師」エンチャンターシャルカの泥状ゴーレムのガードナー【守護泥濘 ラフム】がその上半身に覆い被さって動きを制限させた。

……いくら「ゴブゾード」が高いステータスを持っていてもこれだけの多重拘束を受けてはまともに動く事が出来ず、そこにダメージを回復させたミカとミュウが再び接近していった。

「まあ、ここまで動きが制限された相手なら外し様がありませんね。

《正拳突き》！」

『アタック・テスクチャ攻撃纏装』！』

そうしてAGIの差から先に接近したミュウは「ゴブゾード」が手に持っている大剣の腹に向けて、先程の戦いの中で《攻撃纏装》にストックしておいた相手の《インフェルノ・ブレード》の攻撃力と炎熱を上乗せした正拳突きを打ち込んだ。

……そしてステータスのコピーによって七〇〇〇を超えるSTRの^①一撃に、それと同じSTRを持つ相手が使った炎熱攻撃の威力を上乗せしたそれは、高性能な武器として一方を優に超えるENDを持つ「アルシオン」の刀身にヒビを入れるのに十分な攻撃力を発揮したのだった。

『ウウウウウウウ!!! オノレエエエエエ!!!』

????????????

「チツ、硬いですね。ではもう一撃……」

!!その地上に投下されてから始めて負ったダメージに思わず「ヴァルシオン」は鈍い金属音の様な悲鳴を上げてしまい、それに精神が操られているからか「ゴブリン・キング」の方も苦しげな呻き声を上げた。……が、ミュウはそれらの光景にも特に動じる事も無く、むしろ淡々と容赦無く追撃を掛けようとした。

『』

『紙メルナア!!! 《インフェルノ・ブレード》!!!』

『BO・BO……』

『ヒツ!? 《心頭滅却》!』

だが、初めて遭遇した生命の危機に「ヴァルシオン」はジャバウオツタから与えられ全く使いこなせていないと酷評された、その最大の権能である《刃体改造》を全身全霊を持って行使した……とはいえ戦闘中に於ける無理矢理な改造だった為、出来た事は《インフェルノ・ブレード》のMP消費を大幅に上昇させた上で炎熱を周囲へ無差別にバラ撒ける様に出来たぐらいである。

……だが、制御を投げ捨てたが故にその火力は大幅に増していた所為で接近していたミュウは咄嗟に炎熱耐性を上昇させた上で一旦後退せざるを得なくなり、更にその炎の光と熱量で纏わりついていた影と泥状ゴーレムである「ラフム」を振り払う事に成功していた。

加えて無差別攻撃特有の自傷ダメージも《ゴブリン・キングダム》による身代わり効果で無効化できる為、この改造方針こそが現在の使い手に合っていると「ヴァルシオン」は考えつつ効果時間が終わって炎熱が消えた自身で拘束した地面を砕こうとし……。

「……うん、お前がここで覚醒する事は読んでいたよ《インパクト・ストライク》!」

『ガツ!?』

そこで事前に「ゴブゾード」の身体が盾になって炎が届きにくい背後に移動していたミカが、その脳天に全力で「ギガース」を振り下ろしたのだった。

……ただ彼我のステータスに差があり過ぎる為、内部に衝撃を与え

るので対象のENDの影響を受けにくい《インパクト・ストライク》、対象のENDバフ・身代わりスキル効果を低下させる《バーリアブレイカー》、対象のENDを自身のSTR基準で減少させるパッシブスキル《ストライク・ペネトレーション》を組み合わせた一撃であつても一瞬相手を怯ませるのが精々だったが。

「助かりました姉様。……これで近づけました」

「又ウ!?」

「E! ユウ! 残り時間が十秒切つたよ!」

だが、その一瞬の隙を突いてミュウは再び「ゴブゾード」の懐に潜り込んでいたのだつた……そして彼女は《天威模倣》の制限時間が終わるより早く最後の攻撃を仕掛けた。

「時間も無いので一気に決めますよ! 《スライスハンド》《旋風脚》

《攻撃纏装》スロット2、3連続使用!」

彼女はまず《攻撃纏装》の二番目のスロットにラーニングしていた重撃を上乗せした手刀を「ヴァルシオン」のひび割れた部分に打ち込んで相手の剣を持つ姿勢を崩し、間髪入れず先程ストックしていた《カイトニング・ブラスト》の攻撃力と雷撃を上乗せした回し蹴りを剣を持つ手に叩き込んで「ゴブゾード」の手から「ヴァルシオン」を弾き飛ばしたのだつた。

……弾き飛ばされた「ヴァルシオン」は異音を発しながら飛ばされると共に、ダメージの所為で隠蔽が解除されたのかその頭上に「心触魔刃 ヴァルシオン」の文字が表示されてしまっていた。

「よっし! みんなあっちが本体だよ! こっちの名前は「ゴブリン・キング」になつてるし!」

「サセルカア!!! 才前達、アノ剣ヲ確保シロオ!!!」

『『G A A A A A A A A A』』

「コイツ、拘束を!?」

それを見たミカが大声でその事実をその場に居る全員に伝えるが、それと同じ様に「ゴブゾード」……では無く「ゴブリン・キング」も

周囲のゴブリン達に「ヴァルシオン」の確保を命じて、自身も脚部の拘束を無理矢理破壊して向かおうとしていた。

……そうして戦場は一転、弾き飛ばされた「ヴァルシオン」の争奪戦の様相を示し始めたのだった。

『ヨシ、拘束ハ解ケタ！ コレデ……』

『させません！ 《ディバイン・チャージ》！』

『ミユウ！ スキル効果が切れたよ！』

「致し方ありませんね。【ゴブリン・キング】の方はリリイさんに任せて、こちらは周囲のゴブリンを狙いましょうか」

「そうだね、行こうかミユウちゃん。……あつちはお兄ちゃん達に任せよう」

まず、拘束を破壊して「ヴァルシオン」を追おうとした【ゴブリン・キング】に、テイルルに乗ったりリイが上空から【天馬騎士】ベガサス・ナイトの奥義による突撃を仕掛ける事で足止めする……更にそれを邪魔しようとする周囲のゴブリン達の相手はミカとミユウが請け負った。

……その間にも飛ばされていった【ヴァルシオン】はそこから少し離れた地面に突き刺さり、それに目掛けて多数のゴブリンと人間が群がっていった。

『『『G A A A A A A A A A A A!!』』』』

「ゴブリン供をあの剣に近づかせるな！ それと誰でもいいからあの剣型〈UBM〉を破壊出来ないか!?」

「……俺が行こう。一発限りだが大火力のスキルがある」

「では俺も同行しよう。……相手が装備では無く生物なら俺のデバフも効くかもしれん」

騎士達を指揮してゴブリンと戦っていたセイランの問いに答えたのは、偶々その近くで戦っていたレントとシュバルツ・ブラックだった……彼らは自分達のスキルであれば〈UBM〉を破壊出来る可能性があると考え、お互いに目配せをするとすぐに地面に突き刺さったままの【ヴァルシオン】へと向かっていった。

……それを妨害しようとしたゴブリン達も居たがアツトや月夜が率いるヘマスター達や騎士達に阻まれて、それによって出来た道を

通って彼ら二人はどうか【ヴァルシオン】の元に到着する事が出来たのだった。

「頼いな……とりあえず、お前がデバフを掛けてから俺が最大火力を撃つって事で」

「ま、複雑な作戦を考えている暇は無くなった……
《輝ける命脈よ、尽き果てる》《輝ける身体よ、堕ち果てる》！」

せめてもの抵抗なのか地面に突き刺さったまま鈍い金属音の様な叫び声を上げ続ける【ヴァルシオン】に対して、二人は多少顔を顰めるつつお互いがやる事を確認して実行する……まず、シュバルツが手に持った【ミステイルティン】で【ヴァルシオン】を軽く小突いてそのスキルを使用し、それにより【ヴァルシオン】の二十万近いHPはMPと同じ十万程度に、一万を超えて居たENDは三番目に高い3桁程度のD.E.Xと同じ数値にまで弱体化させた。

……基本は「ただの剣」として特定のステータスに特化していた【ヴァルシオン】にとって、極振りに対して特攻がある【ミスティルティン】はまさしく天敵だったのだ。

「……む、結構攻撃力が上がったしこのまま殴れば倒せ」ぬおっ!!
? 熱!」

だが、自身のステータスが大幅に弱体化した事を悟った【ヴァルシオン】は、その窮地にここで更なる覚醒を起こした……《刃体改造》を自分自身にも適応して【ゴブリン・キング】に与えた《インフェルノ・ブレード》のデータを元にして、自身に身を守る為に全方位に炎を発生させるスキルを発現させたのだ。

その炎はかなりの勢いであり相手が直接的な抵抗をしないと油断していたシュバルツに直撃し、彼は思わず飛び退いて地面を転がり身体についた火を消す羽目になった。

……管理A I ジャバウォックから《SUBM》に成り得ないと見限られた最大の理由である「自分自身を改造の範囲に入れられない」という弱点を克服した【ヴァルシオン】は、このまま然るべき宿主を見つけて成長すれば更に進化しうる可能性もあったのだが……。

「ふむ、火力はそこそこだが攻撃範囲は余り広く無いな。ならそれ以上の出力で貫けばいい……《イミテーション・プリユーナク仮想秘奥・神技昇華》【パイロマンサー紅蓮術師】のレベルを30消費。《詠唱》終了《ヒート・ジャベリン》！」

短時間で無理矢理作ったスキルであるが故にただ全方位に炎を出すだけで火力そのものはまだ低レベルのシユバルツを倒せない程度のものであったので、少し離れた場所に居たレントに対しては殆ど効果が無く、彼が準備していた切り札を妨害する事は出来なかった。

……そして彼が作り出した今までの戦闘で上昇していた上級職のレベルの殆ど、及び《詠唱》スキルによつて残りほぼ全てのMPを込められた炎の槍は【紅蓮術師】の奥義《クリムゾン・スファイア》すら上回る熱量となり、放たれたそれは相手の放出している炎の壁を容易く撃ち抜いて【ヴァルシオン】本体に直撃した。

『!?……………』

着弾した炎の槍はそのまま膨大な熱量を有する火柱となって【ヴァルシオン】の身体を焼き尽くしていく……シユバルツが事前に使っていたバフによりENDが3桁まで落ち込んでいた【ヴァルシオン】がその熱量に耐えられる筈も無く、その刀身の大半を跡形も無く溶解させてHPを全て焼き払ったのだった。

〔UBM〕【心蝕魔刃 ヴァルシオン】が討伐されました】

【MVPを選出します】

【レント・ウイステリア】がMVPに選出されました】

【レント・ウイステリア】にMVP特典【才集刃飾 ヴァルシオン】を贈与します】

……そうして見る影もなく溶解した【心蝕魔刃 ヴァルシオン】が光の塵になった後に流れたそのアナウンスによつて、このヘサウダ山道で起きた激闘に一つの決着が告げられたのだった。

【ゴブリン・キング】の最後

□〈へサウダ山道〉【紅蓮術師^{バイロマンサー}】レント・ウイステリア

〔UBM〕【心蝕魔刃 ヴアルシオン】が討伐されました】

【MVPを選出します】

【レント・ウイステリア】がMVPに選出されました】

【レント・ウイステリア】にMVP特典【才集刃飾 ヴアルシオン】を贈与します】

「……む、このアナウンスは……つまりはアイツを倒せたという事か？」

「そうなんじゃないか？ ……しかしMVPは取り逃がしたか。トドメ刺せなかったしな……」

俺の放った極大の炎の槍が【心蝕魔刃 ヴアルシオン】を焼き溶かしてHPをゼロにした後、目の前にその様なアナウンスが表示された……近くにいたシュバルツ何某の言葉や周りの反応から、どうやらこのアナウンスは戦闘に参加した全員に通達されているらしい事が分かる。

……更にそのアナウンスと同時に俺の手元には一つの【宝櫃】が現れた。確か^{ユニーク・ボス・モンスター}へUMを倒した際、最も活躍した者にはユニークアイテムである「特典武器」が与えられると言う話を以前アイラさんが言っていたから、おそらくコレがそうなのだろう。

「ふむ、中身を確認したいのは山々なのだが……まだ、周りにはやる気のあるゴブリン達が残ってるしな」

「ボスを倒したんだから周りの雑魚も一緒にやられてくれる仕様なら良かったんだが。……やっぱり、この群れのボスはあっちの【ゴブリン・キング】って扱いなんだろうな」

そう言ったシュバルツ何某と同じ方向を向くと、そこには【テンペスト・ペガサス】のテイルルに乗ったリレイさんが徒手空拳の【ゴブリン・キング】と激しい戦いを繰り広げている所だった。

……相手のステータスを《看破》すると、どうやら【ヴァルシオン】が強化していたのか先程までの半分ぐらいの数値になっており、更に

徒手空拳な事もあって現在はリリースさんが飛行出来る事による機動力を活かしたヒットアンドアウェイで圧倒していた。

「UBM」が倒された事でステータスが下がっていますね。……これなら押し切れます。《エアレイド・ラッシュ》！」

『まあ、身代わりでダメージを与えられないのは変わりませんが、足止めし続ける事は出来ませぬ。《エア・ハンマー》！』

『マダダッ！ タトエ弱クナツタトシテモ我等ガヤル事ハ変ワラヌ！』

……才前達！ アノ方ニヨリ多クノチカラヲ捧ゲル為ニ戦ウノダ
!!!

今もテイルルが圧縮した暴風を叩きつけて「ゴブリン・キング」の体勢を崩した所で、そのまま上空から鋭角の軌道を描く様にリリースさんが突撃してから離脱するを繰り返し返して相手を攻め立てている。

……ただ、あの「ゴブリン・キング」が何か気になる事を言っているし、その声に応えた周りのゴブリン達の士気も更に上がっている事が気になるな。UBM」が倒されたのだからもう少し混乱すると思っていたんだが、以前として全体の戦局は押され気味だ。

「とはいえ、俺のMPは枯渇していてレベルも下がってるから正直厳しいな。……折角の特典武具なんだから、何かこう都合のいい装備とかが出てくれないかな。開けてみるか」

「……それはペンダントか？」

シュバルツ何某の言った通り、手元の「宝櫃」から出て来たのは小さな剣型のペンダントが付いた首飾りだった……少し「鑑定眼」を使ってみると名前はアナウンスにあった通り伝説級武具「才集刃飾ヴァルシオン」というアクセサリで、装備補正は無いが装備スキルは二つあった。

……少し見た限りだと残念ながらもこの状況を打破出来る様な都合のいいスキルでは無かったが、片方が装備者の合計レベル分の数値だけHP・MP・SP・STR・END・AGI・DEX・LUCと言った全ステータスを上昇させる《強装才刃》というパッシブスキルだったので、装備すれば下がったレベルを多少補うぐらいは出来るそうだ。

「とりあえず《瞬間装着》つと……」

「つて、おい！ ゴブリン達がこつちにも来たぞ！」

『GYAAAAA』

幸いアクセサリー枠は空いていたので、俺はさっさと《瞬間装着》を使つて【ヴァルシオン】を首にかける……その直後、シユバルツ何某が慌てた様子でゴブリン達がこちらに來た事を伝えて來た。

……こつちに來たのは【ゴブリン・ウォリアー】と【ゴブリン・ソードマン】の二体だったので、片方の【ウォリアー】をシユバルツ何某に任せて、俺はもう片方の【ソードマン】を《瞬間装備》で【シルバー・マジソード】を取り出しながら迎え撃つ事にした。

「……まあ、幾ら物理ステータスが劣つているとは言え、この程度の雑魚にやられたりはしないけどな」

『GYAAAAU?』

俺はまず【ソードマン】が振り下ろして來たそれなりに鋭い剣閃を半身になって躲しつつ、そのまま懐に潜り込み逆手に持ち替えた剣を横薙ぎに振るつて相手の両目を斬り裂いて視覚を封じる。

そこから更に相手が怯んだ所で足払いを掛けて転ばせつつ馬乗りになって、そのまま逆手に持った剣を全体重を込めて相手の喉に突き刺してその身体を光の塵に変えるのだった。

……まあ、俺のジョブは魔法寄りだから物理ステータスが低いしその手のスキルも持つてないから、相手とのステータス差からこうでもしないと仕留められないんだよな。今回は相手が下級のモンスターだから何とかなつたけど、これ以上の相手に接近戦はキツイか。

「……お前、魔法職じゃ無かつたっけ？」

「ミユウちゃん程では無いが、俺もこの程度の事が出来るリアルスキルは持ち合わせているさ。……しかし、状況は余り良いとは言えないな」

担当していた【ウォリアー】を倒したシユバルツ何某が唾然とした様子で問いかけて來たので、俺は適当に答えながら周辺を見渡して戦況を確認したが……その状況はお世辞にも良いとは言えなかつた。

「あ、やっぱ。MPがもう切れそうや。ポーションも無くなつて來た

し」

「オーナー！ こつちもMPが〜！」

「安心しろ……俺ももう無い」

「セイラン卿！ 負傷者が増え過ぎて前線が維持できません！」

「くっ、止む終えん、私も前に出る！」

『『『GYAAAAA!!!』』』』

「ご覧の通り、数こそ減ったもののまだまだ元気……と言うか、疲労とかを感じさせない程に高い士気を保っているゴブリン達と比べて、こちら側は負傷やMP切れなどで既にまともに戦える様なコンディションな者は殆ど居ない状態である。

これは戦力的に不利な状況を覆してゴブリン達と互角に戦う為に、これまでずっと後先考えずに全力を出し続けて戦った所為でこちらが息切れした形になるな。

……そうでもしなければゴブリン達の物量に飲み込まれて、俺達はあっさりと壊滅して居ただろうから仕方がないのだが……。

「……ふむ、このままだと普通に詰むな」

「いや！ どうかにならないのかよ！ その特典武器とかで!?!?」

「残念ながら、この『ヴァルシオン』は今の所《強装才刃》で俺のステータスを多少上昇させる事しか出来ないからな。……もう一つのスキルは使用する為のコストの蓄積が終わってないから使えないし」

ちなみに、この「才集刃飾 ヴァルシオン」のもう一つのスキルは《刃技才集》——装備者が獲得する経験値の内5%を「ヴァルシオン」に蓄積して、蓄えられた経験値を使って装備者に適した新しいスキルをランダムに一つ習得させるスキルと言う割ととんでもないモノだったりする。

……ただ、スキル自体のクールタイムが30日間もある上、経験値を蓄積する関係からか手に入れてから30日間スキル使用不能のデメリットもあるのでは何の意味もないスキルである。

「……とりあえず味方と合流するぞ。こつちにもゴブリンが集まって来たし、このままだと囲まれる」

「チツ、今はそれしか無いか……」

ギーが纏わされふた回り以上に巨大化させた上で、そのツノで【キング】を掬い上げる様に打ち据えて空高くはね飛ばした……尚、その一撃の身代わりのなった周囲のゴブリンが十体程消し飛んだ事からその威力が伺える。

……更にそれを追ってリヒトさんも直ぐ様上空に舞い上がり……。

「ゴブリン・キング」が率いる群れを倒すのは簡単だ……【キング】を攻撃し続けてその超過ダメージで群れを全滅させればいい。《エアリアル・ダツシユ》！」

『ガ！ アア！ アア！ ア!!』

そんな事を言った直後、デュラルに乗ったりリヒトさんは俺の目には映らない程の速度で飛翔して【ゴブリン・キング】に突撃して（多分）手に持った長槍で打ち据えて吹き飛ばした……と思ったら、吹き飛ばされた【キング】が更に（おそらく）急旋回したりリヒトさんによる再びの突撃を受けてまた吹き飛ばされた。

……そうしてリヒトさんは【キング】を吹き飛ばした先に飛翔で追いついて、更に別の方向に吹き飛ばすと言った行為を何度も繰り返す事でまるでお手玉の様に相手を空中で打ち据え続けていったのだ。

（一見ギャグみたいに見えるけど、相手をまともな防御・回避行動が取れない空中に縫い止め続けて一方的に攻撃する為に吹き飛ばす方向や威力とかも計算してやってるみたいだな。……それに一発の威力も身代わりにされた地上のゴブリンが十数体あっさり消し飛ぶ威力だし……確かにコレなら直ぐに終わるだろうな）

……俺がそんな事を考えている間にまだ数十体残っていた筈のゴブリン達は、彼の苛烈な攻撃の身代わりにされた所為で全て跡形も無く消滅しており、残りの敵は空中に弾き飛ばされて続けている【ゴブリン・キング】のみとなってしまうていた。

「終わりだ。《デイバイン・チャージ》！」

『ガアツ!? ……』

そこにリヒトさんが先程もリレイさんが使っていた聖属性の突撃スキル——ただし、武器に纏わせた聖なるオーラの威力・規模共に桁外れ——を【ゴブリン・キング】に叩き込んで、その身体を文字通り

跡形も無く消し飛ばしたのだった。

……〈UBM〉である「ヴァルシオン」が倒されて弱体化していた
とは言え、あの「ゴブリン・キング」がまるで相手になっていないと
か超級職ってヤバいなホント。

◇

「……成る程。それで「ゴブリン・キング」に寄生していた〈UBM〉
「心触魔刃 ヴァルシオン」をへマスター達に倒したが、その後もゴ
ブリン達は戦闘を継続したので応戦していた時に俺が到着した訳だ
な」

「はい。……私が合流する前に向こうにいた何人かのへマスターがや
られた様ですが、合流後はへマスター・ティアン共に死者は出ていま
せん」

「うむ、それは幸いだったな。……死亡したへマスターの分も合わせ
て追加の報酬を用意しておいた方がいいか……」

あれからゴブリン達をあつさり全滅させた後、地上に降りてきた
リヒトさんはまずへマスター・ティアン問わずに負傷者の手当てを部
下達に指示して、それと共に怪我が少なかったリヒトさんから今まで
あつた事を詳しく聞き出していた。

ちなみに怪我人の治療で一番大活躍したのはリヒトさんの愛馬で
あるデュラルで、彼は執事服の男性に人化すると強力な広域回復魔法
を行使して俺達の負傷を瞬く間に癒していったのだ（その際、リヒ
トさんの愛馬であるティールもメイド服の女性に人化して手伝ってい
た）

……だが、そこで大した怪我も無かったから治療も直ぐに終わって
いたミカが、話をし終わったリヒトさんとリヒトさんの方に向かって
いった。

「ねえねえリヒトさん、ちょっといいかな？」

「ん？ 君はミカ君だね。……話は大体終わった所だから問題無い
が、一体何かな？」

「うん、リヒトさんがさっき倒した『ゴブリン・キング』って……アイテムを落としました?」

……ああ、成る程。確かに〈UBM〉である『ヴァルシオン』を倒した後もゴブリンを倒した後には「何も残らなかった」な。ただ光の塵になっただけだ。

この『アイテム』を落とさない現象が『ヴァルシオン』の仕業なら倒された時点でゴブリンはアイテムを落とす筈で、そうでなければあの『ゴブリン・キング』がそういう能力を持っていた可能性もあるが……。

「……いや、あの『ゴブリン・キング』もアイテムは落とさなかった。つまり、先程から君達が目撃していた『ゴブリンがアイテムを落とさなくなっている』現象の原因はあの『キング』では無い可能性もあるという事だな」

「そう言えば、あの『ゴブリン・キング』は『あの方により多くの力を捧げる為』と言っていましたね。……ゴブリンの王である筈の『ゴブリン・キング』が奉じている『あの方』……そう呼ばれている存在がいると?」

「その可能性もあるって話だね。……私の勘だとこの件にはまだ黒幕がいる気がするし」

そのリヒトさんとリレイさんの証言によって『キング』がそう言った能力を持っている可能性が低くなった……最もミカが「黒幕がいる」と言っている以上は、まだこの事件が終わっていない事は確定だろうがな。

「そんな……まさかまだ黒幕がいると……!」

「あ、これはまだ続きがあるヤツかな。でもポーションの飲み過ぎでうちの腹タプタプなんやけど……」

「ふむ、〈編集部〉的には美味しい展開ではあるが……」

「いやオーナー。もうポーションとかのアイテムも残って無いですし、これ以上戦うのはキツイですよ」

……セイラン卿や月夜さんやアットなど頭が回る人間達は、そのミカとリヒトさんの会話を聞いて俺と同じ結論に達したのか愚痴をこ

ぼしたり周りの人間と相談しだしたので俄かに周囲は騒がしくなつて来た。

だが、リヒトさん以外の此処にいるメンバーは直ぐに戦える様な状態では無いし、戦うとしても疲労から十全のパフォーマンスは出せないだろうしな。

「……取り敢えず、〈UBM〉が現れたと言う報告があったから騎士団の方から一旦クエストを中断して援軍をこっちに送る手筈になっていたし、今後は彼等に事情を説明した上で協力してこの近辺を引き続き調査する事になるだろう」

……その状況を見かねたのかりヒトさんは今後の明確な方針を皆に説明し始めた。

「……それと〈マスター〉はここで抜けて貰っても構わない。無論、その場合でも後日改めてクエスト報酬の【許可証】と〈UBM〉討伐の追加報酬を渡す。……だが、今後の調査にも協力して貰えるなら更に追加で報酬を支払う事も出来るだろう」

そして、彼は俺達〈マスター〉にはその様な追加説明を行った……その言葉を聞いた他の〈マスター〉達は今後どうするべきか少し悩んでいる様だった。

……まあ、どうやらミカがやる気みたいだし俺も中途半端で終わるのもアレだから今後も協力する方針だけだな。

【鬼仔母身】

??へネクス平原??

そこはへサウダ山道を更に南に進んだ先にあるへネクス平原、その王都くギデオン間の街道からはかなり離れた目立ちにくい山岳地帯の一角……そこには三体の「ハイゴブリン・キング」を含む千に届く程のゴブリン達が住む、外周を囲む壁や住処となる家などが建ち並び最早一つの「国」とも呼べそうな規模の集落が形成されていた。

……だが、基本的に群れを率いる側である筈の「ハイゴブリン・キング」などの上位ゴブリンを含む彼等は、その全員が集落の中央に作られたまるで玉座の様にも見える台座に鎮座している「存在」——上半身は通常の雌ゴブリンと変わらないのに、下半身はその10倍以上も肥大化した下腹部を持つと言う異形のゴブリンに向かって片膝をついていたのだ。

『どうやら、何か「妙な剣」に取り憑かれていた13番目の【ゴブリン・キング】が討たれた様です。……おそらくその剣は私と同じユニーク・ボス・モンスターへU B Mでしようし、それによって強化されていた13番目が私の制御下から離れる可能性がありましたから、念のため最低限の配下を充ててしばらく様子を見ていましたが……思ったよりあっさりとは始末されましたね』

『ふん、他のへU B Mを手に入れたのなら即座に「女王」へ献上するのは筋であろうに……所詮は新参者か』

『相手もへU B Mであれば方に一つでも「女王」に危害が及ぶ可能性がある以上は近づける訳にはいくまい。……故に向こうの能力を明らかにしてから始末するつもりだったのだろう』

『問題は誰が取り憑かれていた13番目を討ったのかという話だ。……我ら程では無いにしてもへU B Mに取り憑かれて強化されたヤツを討ったのなら相応の実力者であろう。ヤツを監視していた者はまだ戻って来ないのか』

そしてその異形の雌ゴブリン——彼等が言うには「女王」と、それに仕えているらしき三体の「ハイゴブリン・キング」はどの様にして

知ったのかへサウダ山道で起きた戦いについて語っていた……その発言や行動は彼等を含むその場にいる全てのゴブリンが異形の「女王」に忠誠を誓っているのが分かる程に洗練されている。

……その時、彼等の上空から巨大な怪鳥——亜竜級モンスターの【テンペスト・ロックバード】がその集落の一角に舞い降り、その背に乗っていた二体のゴブリン——【ハイゴブリン・ライダー】と【ハイゴブリン・ウォッチャー】が地上に降り立って、即座に「女王」の元へと馳せ参じて周囲のゴブリンと同じ様に片膝をついた。

……そして、その二体は顔を上げて「女王」への報告を始めるのだった。

『妙な剣に取り憑かれた【ゴブリン・キング】の件について報告します。……まず、妙に剣の正体は「女王」の予想通り【心触魔刃 ヴァルシオン】と言うへU B Mでした。どうやら偽装系のスキルでステータスと名前を隠していた様です。……ですが、その【ヴァルシオン】は北にある街から出て来た人間の一人団に倒されました』

『そうですか……これまでの人間達は少数で実力も大した事は無かったので容易く糧に出来ましたが、とうとうその様な実力のある人間も出て来ましたか。……出来る限りその詳細を知りたいですね。続きを話しなさい』

そうして「女王」に続きを促された【ハイゴブリン・ウォッチャー】は、【ヴァルシオン】に取り憑かれた【ゴブリン・キング】が騎士が率いる人間の一人団を襲い、そこから援軍に來た人間達との協力による反撃で【ヴァルシオン】が倒された事までを詳しく報告していった。

尚、このゴブリン達は「女王」の名を受けて、騎獣である【テンペスト・ロックバード】に乗って遙か上空から【ヴァルシオン】に取り憑かれていた【ゴブリン・キング】の群れを監視していたのだ……その為に【ウォッチャー】には高レベルの《遠視》を始めとする監視用スキルが、【ライダー】には騎獣を操る為に《騎乗》などのスキルを「女王」から与えられている。

『……ただ、連中が【ヴァルシオン】を撃破した後人間達が多数住んでいる街がある方角から【ハイエンド・セイクリッド・モノペガサス】

に乗ったこれまで見たどんな人間よりも強い一人の男が超音速で飛翔してきたので、我々の事に気付かれる可能性が高いと判断してその時点で撤退しました』

『その男のステータスを《看破》しましたが「天翔騎士」という超級職でした。合計レベルも1286を数えていましたし、我々の脅威になり得るでしょう』

『ふん、人間側もとうとう本腰を入れて我々を討ちに來たという訳か。ならば返り討ちにするまでよ』

『いや、こちらの戦力には空を飛べる者は乏しい。その男相手では「テンペスト・ロックバード」程度では話にならないだろうし、まずは“女王”を守る為に対空攻撃が可能な戦力を用意しておくべきでは？』

『念の為に“出稼ぎ”に出ている「キング」を何体か呼び出して“女王”の護衛に回しておくべきか。……いや、それよりも其奴らに人間達の動向を探らせて、その間は我々が常時“女王”の護衛についた方が良いか』

実際にはリヒト・ローランを始めとする人間側の陣営は、偶々行ったクエストの最中に「ヴァルシオン」を持った「ゴ布林・キング」と遭遇しただけであり彼等の詳細を知っている訳では無いのだが……問題は彼等がゴブリンの群れとは思えない程の知性と組織だった連携を可能としている所であるから。

本来「ゴ布林・キング」などの群れを率いるモンスターは自身の群れを拡大する事を最優先とする為、他の同種族を『自身の群れを脅かし得るライバル』と見做して敵視しやすい性質を持つ筈なのだが、何故かこの集落では多くのゴ布林を率いた「キング」が進化した「ハイゴ布林・キング」が複数協力し合うと言うある程度の知識がある人間から見れば明らかに異常事態が起きているのだ。

……そして、その異常の原因は中央の玉座に君臨している“女王”の力によるモノであった。

『……成る程、状況は分かりました。元よりこれだけの大勢力になった以上はいつか人間側か、或いは他のモンスターの勢力に見つかって全面戦争になる事は想定されていた事ですからね。……“出稼ぎ”

に出て行った者達から得たりソースはそれなりに溜まっていますし、まだ時間がある内に新たな戦力を産んで起きましようか。……《産メヨ、増ヤセヨ、地ニ満チヨ》』

そう言った「女王」がスキルを発動させた瞬間、肥大化した下腹部の前面が縦に割れてそこから粘液に包まれた「ホブゴブリン・メイジ」が次々と文字通り産み出されていく……これこそが「女王」が有する《産メヨ、増ヤセヨ、地ニ満チヨ》——自身が獲得する経験値の大半を蓄積し、それとSPを消費する事で好きな能力を持つゴブリンを創り出して産み出す固有スキルなのだ。

……そう、先程倒された「ヴァルシオン」の取り憑かれた「ゴブリン・キング」を含むここに居るゴブリン達は、全てこの「女王」がこのスキルでもって産み出したモノなのだ。ちなみに彼等が問題無く協力出来ているのも産み出した際に「女王」への忠誠心を最大限に持たせた上で、お互いに協力する思考パターンを持つ様になっているからである。

『ふう、とりあえず現在蓄積してあったりソースから対空攻撃用に長射程攻撃が可能な「ホブゴブリン・メイジ」を五十体程産めました、やはり「ホブゴブリン」はコストが重いですね。……いくら私が《ゴブリンエンパイア》によって大量の経験値を獲得出来るからと言っても、いきなり数を増やすのは肉体の負担を考えると難しいですね』

そして、この「女王」がこれだけの膨大なゴブリン軍団を産み出すことが出来たもう一つの理由が、彼女が保有する《ゴブリンエンパイア》——自身が産み出したゴブリンが獲得した経験値を自身にも加算する・自身が受けたダメージ・状態異常・デバフなどの悪影響を自身が産み出したゴブリンに転化する・自身が産み出したゴブリンが倒された時のドロップアイテムに使われる分のリソースを回収する複合効果を持つスキルによるものである。

……尚、このスキルの効果範囲は精々半径30キロ程度ではあるが、「女王」が創り出した「ゴブリン・キング」には『自身とその指揮の下にあるゴブリン達を《ゴブリンエンパイア》の効果範囲に入れる』効果の《デタツチド・エンパイア》と言うスキルが与えられてい

るので、経験値を稼ぐ為に【キング】が率いる群れを遠方に「出稼ぎ」させる事も可能になっている。

『どうかご自愛ください。女王』。この集落の防衛を行うのは我らにお任せを……では、新しく産まれた【メイジ】を各々の軍勢に入れてから拠点の防衛を固めましょうか』

『それと例の人間共への警戒もだ。周囲の見張りも増やしておくべきだろう』

『貴様ら！ やる事が分かっているならさっさと動くがいい！』

『『『ハハア!!』』』』

そんな三体の【ハイゴブリン・キング】の指示の下に、先程産まれたばかりの【ホブゴブリン・メイジ】を含んだ千を超える数のゴブリン達が一糸乱れぬ動きで拠点の防衛戦力の強化・周囲の監視と警戒を行なっていく……その光景は見方によっては一人の偉大なる「女王」の為に臣下たちがお互い協力し合う、まさに「理想の国」の様に見えるかもしれない。

……最も、その発言と裏腹に「女王」が配下のゴブリン達を見る目はどこか冷めており、その内心では自分で創り出したモノが上手く動作している程度にしか思っていないのだが。

(各ゴブリン達の戦力増強と動作は順調。これならば人間達が相手でも早々に遅れは取らない筈。……私はもう二度と何も失わない。必ず私の帝国を作り上げてみせる)

……そうして「女王」は自身がへUBMへになったきっかけについて思いを馳せて行く……。



『GA! ……GE! ……GI……』

その一匹の雌ゴブリンは、傷だらけの身体に走る痛みを無視してただひたすらに走っていた……それはまるで何かから逃げるかの様であり、実際その通りであった。

『GN……GN……』

彼女はアルター王国の一角にあるゴブリンの集落に住んでいたごく普通の雌ゴブリンで、強いて特筆すべき事があるのなら子供を身籠っている事ぐらいである。

……そんな彼女が何故必死に逃げているのかと言うと、住んでいたゴブリンの集落がゴブリン討伐を目的とする人間達に攻め滅ぼされたからであり、彼女は重症を負ったものの運良く逃げ出す事が出来たのだった。

『GA……（この子だけでも……どうにか……）』

彼女が住んでいた集落は強力な【キング】に率いられており、更に周辺のゴブリン達の群れを吸収して辺りに敵が居ない程の勢力を持っていた……だが、それがその地を治める人間達に危険視された事によって攻め込まれる事になったのだ。

……ゴブリン達も【キング】を中心にして応戦したものの、相手がゴブリン達の危険性を非常に高く見積もっており、念には念を入れて高レベルの騎士や冒険者を多数用意していた事もあって敗北して攻め滅ぼされる事になったのだった。

『……GA……』

そう言う訳で逃げ続けていた彼女だったが、その身に負った【骨折】や【出血】のせいでそのHPは既に尽きかけており、最早歩く事すら出来ずに倒れ伏してしまった。

……最早ここまでかと思った彼女の霞む視界の中に地面に落ちている「何か」が見えたのだ。

『……G……GA……』

彼女にはそれが何かは分からず、いつから落ちているのかも分からなかったが、何故かまともに認識すら出来ない筈のそれに強く惹かれた……この時の彼女の中にあっただのは『これがあれば自分と子供が助かるかもしれない』と言う思いだけであっただのだ。

……彼女は最後の力を振り絞ってそれを掴んで口に入れてそのまま嚙下した……その直後、彼女の身体に莫大な変化が生じた。

【デザイン適合】

【存在干渉】

【エネルギー供与】

【設計変更】

【固有スキル《産メヨ、増ヤセヨ、地ニ満チヨ》付与】

【固有スキル《ゴ布林エンパイア》付与】

【スキル《出産負担軽減》付与】

【スキル《SP自動回復》付与】

【死後特典化機能付与】

【魂魄維持】

【〈逸話級UBM〉認定】

【命名【鬼仔母身 クインバース】】

彼女には理解できない、彼女のものではない言葉が、彼女の脳裏を駆け巡った。

……そしてそれが終わり、頭の中の言葉が何も聞こえなくなったとき、一匹の瀕死の雌ゴ布林は下腹部が肥大化している巨大なゴ布林へと変貌していた。

『……………やった！ これであの子を産んであげる事が出来る！』

《産メヨ、増ヤセヨ、地ニ満チヨ》！』

変貌した雌ゴ布林——【鬼仔母身 クインバース】はすぐさまスキルを発動して一体の【ゴ布林・ウォーリアー】を産み……即座に絶望した。

『G A A A A A A A A A』

『……………違うっ！ コレはあの子じゃないっ！』

そう、【クインバース】のスキル《産メヨ、増ヤセヨ、地ニ満チヨ》で産み出されたゴ布林は、〈UBM〉になる前に彼女の腹の中にいた赤子とは全く別のモノだったのだ。

……コレは“何か”を食べる前に彼女が瀕死であつた為にそのままでは〈UBM〉に肉体を変異させる事が出来なかつた事。そして彼女の赤子が【キング】になれる程の高い潜在能力を持っていた事が原因になっている……そう、その“何か”は新しい〈UBM〉を作る為に彼女と赤子を融合させて、その両者の特性を持ち合わせた【鬼仔母身 クインバース】と言う一体の〈UBM〉を誕生させたのだ。

理飛べる様にしてコストの割には戦力になりません。……だからといって飛行出来るモンスターをタイムするのにも手間が掛かりますしそこまで数は用意出来ませんから、やはり対空能力を持つ者を産み出すしか無いですか』

……ただ、それでも「クインバース」はかつて自分が住んでいた集落を人間に滅ぼされた経験により、一切の慢心無く人間達との全面戦争に必要な戦力の拡充を進めていた。

『貴方達、おそろく近くに人間達との全面戦争となるでしょう。……我らの“帝国”を作り上げる為にここで負ける訳には行きません。皆の頑張りを期待します』

『『『『オオオオオオオオオオ——ツ!!! 我らが“女王”様！

「クインバース」様万歳——ツ!!!』』』』

……その一糸乱れぬが故にどこか空虚な歓声を聴きながら、「クインバース」は今後の己の国の行く末について考えを巡らせ続けたのだった。

調査、そして接敵

□〈へサウダ山道〉【戦棍騎士^{メイスマイト}】ミカ・ウイステリア

さてさて、例のへU^{ユニーク・ボス・モンスター} B M〈【心触魔刃 ヴアルシオン】を私達が、その持ち手だった【ゴブリン・キング】をリヒトさんが倒した事でこのへサウダ山道〉で起きた戦闘は一先ずの決着を見た。

だけど、その際に【ヴァルシオン】を倒された後の【ゴブリン・キング】がドロップアイテムを出さなかった事から、この事件には更なる黒幕がいるんじゃないかと追加調査が行われる事になったのです……尚、〈へマスター〉はここで離脱しても良いと言われたけど、追加報酬目当てだったりここで帰るのは後で色々気になりそうだからといった理由で殆どが残る事にしたらしい。

……私の『直感』でも『この事件にはまだ黒幕が居る』って出てるし、そいつをどうにかしないと王国にかなりの被害が出る気がするから、このデンドロで出来た知人を守る為にも何とかして見つけ出さないと行けないんだよね。

「そういう訳で久遠たむーさん！ 今こそ【ヤタガラス】の真の力を持って黒幕を見つけ出せないですかね！」

「確かにそろそろクールタイムも終わった事だし出来るか？」

「うーん……ヤタ？ この事件の黒幕って追え『ムリー！』……ないみたいですよ」

とりあえず『編集部としては隠された真相がある可能性がある以上、参加しない訳にも行くまい！』と黒幕の調査に協力してくれている〈Wiki編集部〉のメンバー、久遠たむーさんの【誘導神鳥 ヤタガラス】のスキルを頼みにしてただけど無理みたい。

……詳しく聞くと、さつき【ヴァルシオン】装備の【ゴブリン・キング】を見つけられたのは『ゴブリン達を指揮している【ゴブリン・キング】の位置』という設定条件にアイツらがピタリと当てはまっただけかつ距離も比較的近めだったからだろう。

だが、今回は情報が『ゴブリンを操っている黒幕』というかなり曖昧なものである事と、多分向こうの実力が非常に高い事などが理由でス

キルの発動条件を満たせないみたいです、との事。

「……うん、詰まったね。どうしようお兄ちゃん」

「お前の『直感』でどうにかならないのか？ ……とりあえず、俺たちだけで判断するのもアレだから、リヒトさん達に相談するのが妥当だろう」

「……と言うお兄ちゃんの助言で、私達は久遠たむーさんのへエンブリオ＜などの事を含むこちら側の事情について相談してみる事にした。」

「あちら側もリレイさんから『ヤタガラス』の事については聞いていたのと、私と同じ様に黒幕を早く探す必要があると判断したのか快く相談に乗ってくれた。」

「……ふむ、それなら私がここに来る途中で大型の怪鳥に乗った二体のゴブリンが地上を監視しているのを見かけたな。こちらを見たら直ぐに離れていったしその時は地上の敵を倒す事を優先したから追えなかったが、私が持っている感知系特典武器によると南の『ヘネクス平原』に向かつていった様だが」

「ここから南側にいるヤツって情報が追加されたけど、どうかな？」

『………ヤツパムリー！』

「ダメみたいです、すみません」

「ふむむ、やっぱり情報の精度が足りないか黒幕は相当高位の相手なのが原因かな……私の『直感』は『確証のある情報』って訳では無いからなー。でも多分そろそろ状況が動きそうな気がするんだけど……。」

「……そうみんなが悩んでいた所でリヒトさんが持っていた通信用のアイテムに連絡が入った。」

「リヒトだ、一体どうした？ ……何！ 王都南東部と南西部にそれぞれ別の『ゴブリン・キング』率いるゴブリンの群れを発見したのだ？ ……お前達はそのまま監視を継続、援軍には王都から追加部隊の出勤を要請する」

「リヒト団長、まさか……」

「ああ……どうやら状況が動いた様だ。これから説明する」

そんな連絡を受けたりヒトさんは真剣な表情になって私達に詳しく事情を説明し出した……何でもリヒトさんの指示で周辺を調査しながらこちらに合流しようとしていた騎士団（今回のクエストに西側・東側担当で参加していた人達）が、その道中でそれぞれ別の【ゴブリン・キング】が率いるゴブリンの群れを発見したらしい。

……基本的に【ゴブリン・キング】は周辺にいる他のゴブリンの群れを支配下に置こうとする習性があるので、こんな近い位置に三体もの【キング】が揃っているのはほぼあり得ない事なんだとか。

「これらの事実から今回の黒幕は生産型の〈UBM〉クラスのモンスター、おそらくゴブリンを出産する事に特化した上級ゴブリン【ゴブリン・クイーン】派生のヤツだと推測される。……配下を生産するタイプの〈UBM〉は三十年前にも一度王国付近に現れた事があり、その時は王国と隣のドライフ皇国の超級職二人が相打ちになる程の被害が出ている。この手の相手は時間を置く程戦力が増えるからなるべく早くに討伐したい。どうか協力をお願いしたい」

そこまで説明してリヒトさんは私達へマスター〈〉に対しても軽くでは有るが頭を下げた協力を要請してきた……彼程の立場の人がここまでするという事は、多分今回の黒幕を相当に危険視しているってだよな。

……しかし、黒幕の何所を探るにはどうすれば……ふむん、ちよつとだけティンときたアイデアがあるね。

「……なら久遠たむーさん、ここから南側で大量のゴブリンが集まっている場所に案内する事は出来るかな？ その黒幕がゴブリン生産が得意なら自分の護衛として大量のゴブリンを近くに置いているんじゃないかな」

「目的地をより弱い方に設定すると？」

「確かに【ゴブリン・キング】も【ゴブリン・クイーン】も基本的に群れで行動するモンスターだからな。その可能性は十分にあるだろうし、もしダメでもゴブリンの群れを見つければ黒幕に関係する情報が入手出来るかもしれない」

そういう訳で、私は「直感」的に閃いた黒幕自体ではなくその周辺

に居る（と思われる）ゴブリンの群れをターゲットとして「ヤタガラス」のスキルを使う事を提案してみた。

久遠たむーさんの言う通り「目的地」のスペックが高い程にスキル発動は難しくなるらしいから、近くに居る弱い方を代わりに目的地にするって考えである。歴戦の精鋭であるリヒトさんからも良質な反応を貰えたいいけるかな？

「ふむ、成る程。……久遠たむー、それでいけるか？」

「こればかりは試してみないと……ヤタ『ここから南側で一番近い場所にいるゴブリンの群れ』まで誘導出来る？」

『……………オツケー！ デキルぜ、マカセナー！』

やったね！ これで良い感じの「ルート」に乗った気がする……その後に色々と話し合った結果、まずは「ヤタガラス」とリヒトさんだけを先行させて偵察する事になった。

これはリヒトさんからの提案で『まずは向こうの情報を集めるために機動力の高い人間で偵察する必要がある。私は超超音速で飛行出来るし、索敵・隠密に使える特典武器も持っているからね。……それに相手が〈UBM〉なら生半可な戦力では情報を持ち帰る事も出来ないかもしれないし、私なら少なくとも逃げるぐらいは出来るだろう』という意見によるものである。

……流石にこれまで多くの〈UBM〉を倒して来たらしいリヒトさんの言葉だったので誰も反論する人は居なかった。そもそもリヒトさんですら本気のリヒトさんと組んでも足手まといにしかならないらしいし。

「……では、宜しく頼む久遠たむー君」

「はいはい……《神鳥の導き》！ ヤタ、ゴー！」

『イツテクルゼー！』

「行ってらっしゃーい！」

そうしてスキルを発動して金色の光を纏った「ヤタガラス」は真っ直ぐに南の空に飛んでいき、それを追って「ハイエンド・セイクリッド・モノペガサス」のデュラルに乗ったりリヒトさんも大空に舞い上がって行ったのだった。

……うん、この「ルート」なら被害は最小限に抑えられる気がするけど、大丈夫だよな？

◇◇◇

□〈ネクス平原〉上空

今回の「黒幕」を調べる為に飛び立った「ヤタガラス」とアルター王国第一騎士団団長リヒト・ローランとその愛馬であるデュラルは、しばらくの飛翔の後に《神鳥の導き》が示した「目的地」へと到着していた。

……そこで彼らが見たものとは……。

「……【ゴブリン・キング】に率いられたゴブリンの群れか……」

『「モクテキチ」ハココダゼ！』

彼らの眼下にあったのは一体の【ゴブリン・キング】に率いられた二百体程のゴブリンの群れが行軍している光景だった……確かに【キング】が率いる群れとしては大規模で有るだろうが、その中には黒幕と思しき〈UBM〉クラスのモンスターは見当たれなかった。

……そこでリヒトは保有する片眼鏡型モノクルの伝説級特典武器「索視眼鏡ラウンドシーカー」を装備して《トライブレベル・ラウンドサーチ》——広範囲に存在する生物の位置、及びその種族と合計レベルを表示するリーダースキル——と、自身の《遠視》《看破》スキルを併用して更なる詳細情報を集めていった。

「……ふむ、やはり基本的には通常の【ゴブリン・キング】とゴブリン達だな。平均レベルはかなり高いが……だが、こいつらはさつきからずつと一糸乱れぬ動きで一方の方向に歩き続けている。いくら【キング】が統率しているからと言って、知能がそこまで高くないゴブリン達がこのレベルの集団行動を可能としているのはやはり不自然だな」

『おそらくアレらは自然に生まれたゴブリンでは無いな。行動や思考に「雑味」が無さすぎる』

彼等の言う通り眼下のゴブリン達は何かを喋る事すらせず隊列を

組んだまま前進し続けていた……その余りに「雑味」が少ない動きを見たリヒトとデュラルは、今まで数多の野生モンスターと戦い続けて来た経験からアレらが【研究者】^{リサーチャー}系統が作った人工モンスターなどに近い精神調整が成されていると当たりを付けた。

「だが、奴等が向かっている方向には人気の無い山岳地帯が有るぐらいだが……もしや、そこに黒幕がいるのかもしれない。後をつけてみるぞ。《オプティック・ハイド》」

『承知した、音は消しておく。《サウンド・キャンセラー》……【ヤタガラス】と言ったか、お主は主人の元に変えると良い。後は我々が調べておく』

『ワカツタ、ガンバレヨー』

そして彼等は役目を終えた【ヤタガラス】を帰らせると共に、リヒトが装備していたマント型の逸話級特典武具【螢幻布 ホタルンガ】の《オプティック・ハイド》——自身とその騎獣の周辺に光学迷彩のフィールドを張って目視不能にするスキル——を使って姿を消した。

更に、それと並行してデュラルが《サウンド・キャンセラー》——周辺の大気を操作して自身が発する音を外に漏れなくする風属性魔法——を使って聴覚でも自分達を捉えられない様にしつつ、やや高度を落としながらゴブリン達の後を尾けて行くのだった。



そうして彼等は行軍するゴブリン達に気づかれない様に細心の注意を払いつつその後を尾けて行く……しばらくするとゴブリン達は《ネクス平原》の外れにある人気の無い山岳地帯に足を進めていった。「……この先には人里が無い上にそれなりの高レベルモンスターがいた筈だが、そんな気配が無くゴブリン達は進んでいるな。……これは当たりか?」

そう考えた彼は再度【ラウンドシーカー】の《トライブレベル・ラウンドサーチ》を使って周辺のモンスターの分布を確認した……すると……。

「……思った通りか。……この先に千を超える鬼系モンスターの反応がある。しかもかなりの割合が高レベルの上級モンスターだな」
『だとすると相当な戦力だな。……【ゴブリン・キング】の支援や高い頭脳を与えられていると思しき奴等の連携を考えれば、こちら一体の高レベルモンスターを狩り尽くせたとしても不思議では無いか』

そんな会話をしつつ彼等はゴブリン達の尾行を続行していき、ついに彼等の拠点まで辿りつく事が出来た……そこで彼等が見たモノは……。

「……まさか、ここまでの勢力を作り上げていたとはな。複数の【ゴブリン・キング】が居た事から半ば予想はしていたが……」

『最早、これは集落というよりも一つの「国」の様なものだ。戦闘要員が待機する拠点では無く、生産や居住までも考えられているという意味でだが』

そこには三体の【ハイゴブリン・キング】を含む千に届く程のゴブリン達が住む、外周を囲む壁や住処となる家などが建ち並ぶ大規模集落……デュラルの言葉で言うなら一つの「国」と呼べるモノが形成されていた。

……だが、それを見た彼等は少し驚いた物のそこはこれまで数多くの「UBM」と戦ってきた歴戦のコンビだけあって、即座に気を取り直すと「国」の中心にある玉座に座している「黒幕」と思しき「UBM」【鬼仔母身 クインバース】について詳しく調べ始めた。

『《ピンポイント・アナライズ》……やはりこの【クインバース】が今回の事件の黒幕だな。……スキルも《産メヨ、増ヤセヨ、地ニ満チヨ》と言うゴブリン生産スキルと《ゴブリンエンパイア》と言う《ゴブリンキングダム》の派生スキルと思われるモノを持っている』

まず、リヒトは【ラウンドシーカー】の第二スキル《ピンポイント・アナライズ》——目視している生物一体を指定して、そのステータス・スキルなどの情報を見るスキル——を使い【クインバース】の能力を看破して、そのスキル内容から相手がこの事件の「黒幕」であると確信した。

……その後も彼は姿を消したままこの拠点とゴブリン達の戦力に

ついで調査を続行しようとしたのだが、そこで拠点にいるゴブリン達が突如慌ただしく動き始めたのだ。

『探知用の結界にゴブリン以外の反応があった！ 侵入者だ！』

『本当か!??』

『『G A A A A A!!』』

『だが何処だ!? 姿が見えないぞ!』

『さっきの連中が尾けられたか! 阿保どもめ!』

『『G U E E E E!!』』

『……どうやら我々の事に気付かれた様だな』

「……ああ、まさかそのレベルの探知用結界が使えるレベルのゴブリンすら生産可能とはな」

そう、拠点への防備の一つとしてゴブリン達は複数の「ゴブリン・メイジ」が協力する事で、その周辺にゴブリンかその配下以外が侵入した場合にそれを感知する結界を展開していたのである。

……姿と音を消していた彼等であつても魔法的な感知に対する妨害は成されていなかったもので、こうして侵入を気取られてしまったという訳だつた。

『ではどうする? 今なら逃げる事も出来るが』

「いや、とりあえず一度戦おう。こいつらは放置すればするだけ厄介になる手合いだからな。……最も、俺達では勝算が薄いだろうから基本的には情報収集優先で危なくなれば撤退する」

『承知した』

それだけ話すとリヒト達は敢えて自らの隠蔽を解いてゴブリン達の前にその姿を晒した……当然、それを見たゴブリン達は侵入者を見つけた事で全員が即座に戦闘態勢を整えて彼等の下に向かって来る。

そんな光景をリヒトとデュラルは特に動揺する事も無く眺めながら、自分達も同じ様に戦いの準備を整えた。

『“女王”の護衛は我らが受け持つ!』

『対空攻撃可能な者は攻撃用意! 前衛型の者はその盾となれ!!!』

『航空部隊は騎獣に乗って順次出撃だ!』

「……指揮を執っているのはそれぞれ大剣・大斧・長槍を持つ三体の

「ハイゴブリン・キング」か。それにゴブリン一体一体もまるで統率の取れた軍隊の様に淀みなく動いている。……やはり、こいつらは放置しておくには危険過ぎるな」

尚、彼等が敢えて奇襲などを行わずに姿を現したのはゴブリン達が敵に対してどの様な動きを見せるかを調べる為であり、その見事なまでに統率の取れたゴブリン達の動きはリヒトが彼等の脅威度を一段階上昇させる結果となった。

そんな風に彼等がゴブリン達を観察している間に対空攻撃可能なゴブリン達は準備を終え、その直後に指揮を執っていた大斧装備の「ハイゴブリン・キング」が号令を挙げた。

『対空部隊は準備の出来た者から攻撃開始！ 我らが女王に仇をなす者を粉碎せよ!!!』

「では、やるか」
『応』

……そうして、千体を超える数のゴブリン達を率いるへUBMへ「鬼仔母身 クインバース」と、アルター王国第一騎士団団長ナイト・オブ・ソアリング「天翔騎士」リヒト・ローランとその愛馬「ハイエンド・セイクリッド・モノペガサス」デュラルの戦いが幕を上げたのだった。

【天翔騎士】VS【クインバース】

□〈ヘネクス平原〉【クインバース】の拠点

〈ネクス平原〉の僻地にある山岳地帯に作られたゴブリン達の「ユニーク・ボス・モンスター国」……そこでは数多のゴブリンを生み出す〈U B M〉【鬼仔母身クインバース】が率いる千を超える数のゴブリン達と、王都南部に【ゴブリン・キング】が複数存在するという異常事態をへマスタ―の力を借りて調査を行いこの拠点を突き止めたアルター王国第一騎士団団長【ナイト・オブ・ソング天翔騎士】リヒト・ローラン、及びその愛馬である【ハイエンド・セイクリッド・モノペガサス】のデュラルとの戦いの火蓋が切って落とされていった。

『遠距離部隊一斉攻撃!!! 撃て——ッ!!!』

『『『スナイプ・アロー』!!!』』』

『『『トルネード・ブラスト』!!!』』』

『『『ブラスト・アロー』!!!』』』

『『『サンダー・スマッシュ』!!!』』』

まず、大斧を装備した【ハイゴブリン・キング】の号令と共に地上にいる遠距離攻撃可能なゴブリン達が、弓矢や魔法によるアクティブスキル込みの一斉射撃を空中にホバリングしているリヒトとデュラルに向けて撃ち放った。

……これらのゴブリン達は【キング】の『ゴブリンキングダム』によりステータスは最低でも亜竜級、中には純竜級にまで達している個体もいる。更に各々がアクティブスキルを使って強化された対空攻撃を放っているのです、幾つかがまとめて直撃すれば純竜すら容易く屠る程の威力となっている。

それに加えて【ハイゴブリン・キング】が有する『同種族意思伝達』のスキルによって威力が高い弓矢や雷属性魔法スキルを使う者はリヒトを直接狙い、効果範囲が広い風属性魔法スキルを使う者はその周囲を攻撃して逃げ場を奪うという完璧な連携を実行する事が出来ているのだ。

その様な絶死の連携攻撃をいきなり受けたリヒトは窮地に陥って

いると思われたが……。

「飛べ、デユラル」

『承知』

その一斉攻撃が放たれる直前にデユラルは音速の三倍の速度で直上に飛翔する事で自分達を狙った高威力攻撃を回避し、更に地上から距離を取った事で密度が薄くなった範囲攻撃の間をすり抜ける様に鋭角起動を描いて飛ぶ事で無傷での攻撃回避を実現したのだ。

こんな出鱈目な飛行が可能なのは飛行中に自身の行動によって発生する悪影響をほぼゼロに出来る【天翔騎士】のパッシブ奥義《天駆翔》と、デユラルの卓越した風属性魔法技術、そして長年に渡って数多の戦場を共に駆け抜けてきた二人の連携と飛行技術によるものである。

……こと空戦に於いてであれば【天騎士】と【黄金】の組み合わせですらその影を踏む事すら出来ない、現在この世界の人間の中で最高の飛行能力を持つ【天翔騎士】に取ってはこの程度の雑な対空攻撃は驚異ですら無かった。

「しかし、ゴブリンがこのレベルの連携攻撃が可能とはな。……今度はこちらから仕掛けるぞ。《グランドクロス》！」

『分かった……《エメラルド・トーンード》！』

そうして彼等は次々と放たれる対空攻撃を躲しながらも、反撃としてそれぞれリヒトは【聖騎士】^{パラディン}の奥義《グランドクロス》によって発生された十字型の聖属性エネルギーを地面から発生させ、デユラルは《エメラルド・トーンード》と言うスキルによって上級職の奥義に匹敵する威力の竜巻を撃ち放った。

……それぞれ超級職と神話級モンスターである彼等が放ったそれらの攻撃は、上級職のティアンが使う同種のものとは一線を画す威力となつて地上で対空攻撃を行なっているゴブリン達に襲い掛かっていた。

『させん！ 《カバリング》!!!』

『《ウインド・レジスト・ウォール》!!!』

『《ワイドフォースヒール》！』

だが、それらの対空攻撃部隊を狙った攻撃は割り込んで来た「ハイゴブリン・ガーディアン」が持った大盾に防がれたら、「ハイゴブリン・セイジ」が使用した対風属性用の防魔法で威力を弱められるなどをされた為、何体かのレベルの低いゴブリンを屠はしたものの全体には大した痛手を与える事は出来なかった。

……更にすぐさま後方で待機していた「ハイゴブリン・ビショップ」が発動した範囲回復魔法によってダメージを負ったゴブリン達を回復して行き、直後に再びゴブリン達の対空攻撃が始まった。

『《テンペスト・アーマー》……予想はしていたがここまでの連携が可能だとはな。並みの人間のパーティーより連携が上手いのでは？』
「一切の私心無く自分自身をもコマだと認識して、その上で最適な行動が出来るのならこうもなるだろう。……やはりコイツらを放置しておくのは王国にとって危険過ぎる。無駄かもしれんが本丸を狙ってみるぞ。《第三の腕》」

それらの対空攻撃を回避するか身に纏った暴風の鎧を使って防ぎながら戦っていた彼等は、余裕そうな会話と裏腹に眼前のゴブリン達の個々の実力とその連携制度は王国にとって十分過ぎるほどに危険であると判断していた……仮に超級職を除いた王国の全騎士達とこのゴブリン達が戦えば高確率でゴブリン側が勝つだろうと考える程に。

……故にリヒトは情報収集を兼ねてその大本である「クインバーズ」への攻撃を行おうと装備していた手甲型逸話級特典武器「虚腕手甲 フェルリツパー」のスキル《第三の腕》——MPを継続消費して不可視の念力を発生させて一つの物体を掴んで動かしたり出来るスキルを行使した。

「情報を集めるにしてもそれなりの損害を与える必要があるからな、出し惜しみはせん。《瞬間装備》」

更にリヒトは《瞬間装備》を使って展開した《第三の腕》に赤色の円錐が六つ程重なった様な形状の突撃槍を装備した……そう、この《第三の腕》には発動中に手持ち武器に限り装備出来る装備枠を追加する特性があり、念力で保持している武器を装備している扱いにするの

だ。

……そして装備した突撃鎗型の伝説級特典武具【爆竜鎗 ドラッグブラスト】を構えながら（傍目には宙に浮いている様に見える）対空攻撃を掻い潜りながらゴブリン達に勘付かれない様に本丸である【クインバース】が座す玉座へと少しずつ距離を詰めていった。

「しかし、これだけの対空攻撃があると【ドラッグブラスト】は少し使いづらいか」

『それだけでは無いぞ。……どうやら空を飛べる連中も上に登って来た様だ』

デュラルの言葉通りに【テンペスト・ロックバード】に乗った【ハイゴブリン・ライダー】を初めとした飛行可能なモンスターに乗ったゴブリンライダー部隊が空へと上がって来ていた。

……更に向こうは地上からの対空攻撃をほぼ無視してリヒトの元へと突っ込んで来たのだ。

『……成る程、特攻と言うわけか。我らの動きを封じて自分達ごと地上から撃たせる気だな』

「自分の命すら女王を生かす為のコマだと思っているヤツらならそう来るだろう。……だが、あの程度の下手糞な飛び方で私達の足止めが出来ると思われるのは心外だな。《エアリアル・ストライダー》！」

その相手の行動の意図を正確に理解したデュラルとリヒトは不敵な笑みを浮かべながら【天翔騎士】の空対空加速突撃スキル《エアリアル・ストライダー》で持って、相手の航空戦力の中で最も強力な【テンペスト・ロックバード】に乗ったゴブリンが率いる一団へと突っ込んで行った。

『なっ!?? 舐めるなっ! 《ロング・スラスト》!!!』

「遅い。《セイクリッド・スラッシュ》！」

『KIEEEEEEEEE!?!』

その行動に対して【ロックバード】に乗っていた【ハイゴブリン・ライダー】は手にした長鎗をリヒトに突き出すが、彼は僅かにデュラルを傾げるだけでそれを回避してそのまますれ違い様に聖属性のエネルギーを纏う【収奪長鎗 ドレインドレイク】で【ロックバード】の

翼を斬り裂いて地上へと叩き落とした。

……尚、この時に【ドレインドレイク】のパッシブスキル《リミテッド・オールドレイン》——【ドレインドレイク】によってダメージを与えた時にそのダメージ分だけ対象のMP・SPを減少させて、その数値分だけ自身のHP・MP・SPを回復させる——によって自身を回復させるというオマケ付きである。

「本丸に仕掛けるついでに、向こうの航空戦力は可能な限り削っておくか。行け【ドラグブラスト】」

『周辺と地上には牽制を仕掛けておこう。《カッター・トーネード》』

更にそこからリヒトは《第三の腕》で保持した【ドラグブラスト】を音速の三倍で射出してゴブリンが乗っている騎獣の一体を貫いて絶命させた……ちなみに《第三の腕》の出力は装着者のSTRと同じ、物を動かす速度は自身のAGIと同じで、操れる範囲は半径100メートル程である。

加えてデュラルが使った《カッター・トーネード》によって彼等を中心に無数の風の刃で構成された竜巻が発生した事で周囲にいるゴブリン航空部隊はズタズタに切り刻まれ、その竜巻が地上にも届いた事で一時的に対空攻撃も大幅に減少させた。

……それによって出来た隙について、リヒトは射出した【ドラグブラスト】を操って【クインバース】が座す玉座に近付けた後、その穂先を地上の【クインバース】がいる方向へと向けた。

「よし、狙える位置を取った。《爆ぜ燃ゆる竜炎槍》」

そして、リヒトがスキルを発動と同時に【ドラグブラスト】の重なった円錐の一番外側に付いている物が切り離され、そのまま円錐の底面部分から火を吹いて亜音速程度の速度でミサイルの様に地上へと飛翔していった。

『ツ!?? いかん女王を守れ!!! 《ウイングド・スラッシュ》!』

だが、それに真つ先に気が付いた【クインバース】を守る【ハイゴブリン・キング】が配下のゴブリン達に指示を出すと共に、手に持った大剣を振り抜いて斬撃波を飛ばし飛来する円錐を斬り裂こうとして……その斬撃波が当たった円錐が大爆発を起こして拠点の三分の

一を覆い尽くす程の爆炎を撒き散らした。

……これが「ドラグブラスト」の唯一のスキル《爆ぜ燃ゆる竜炎槍》の効果であり、リヒトが持つ攻撃手段の中で最大の広域攻撃である。もちろん本人は爆発に巻き込まれない様に発射直後に「ドラグブラスト」を回収しつつ高空に避難しているが。

「さて、これでどれだけ敵に打撃を与えられるか……だが、おそらく……」

『女王！ ご無事ですか!?』

『ええ、問題有りません。貴方達が守ってくれましたし結果もありませんから』

だが、爆炎に巻き込まれた筈の「クインバース」が座す玉座の周りには四体の「ハイゴブリン・セイジ」が戦闘開始時からずっと展開していた防御結界が展開されおり、更に周囲のゴブリンが己の身を呈して守った所為で「クインバース」にはかすり傷一つつけられていなかった。

……加えて《ゴブリンキングダム》身代わり効果のお陰で「キング」が全員生存しており、それ以外のゴブリン達もステータスバフが掛かっていたと爆発点が地上から離れていた事もあって死んだ数は一割程度で、その他負傷したゴブリンもその半数以上が戦闘可能な状態だった。

「やはり駄目か。……一応、並みの竜級モンスターで構成された群れ程度なら壊滅させられる威力があるんだがな。「ドラグブラスト」の残弾も残り五発だから無駄撃ちは出来ん」

『下手に撃つと自分達も巻き込みかねないし、もう初見で無い以上は向こうも対応してくるだろう。……所詮我々は個人戦闘型だから広域殲滅はそこまで得意ではない上、身代わりを突破出来る攻撃手段もないからアイツらは倒してきれんか』

実際、彼等は自分達が保有する戦闘手段では「クインバース」率いるゴブリン軍団を倒し切る事はまず不可能だと最初から予想しており、今回戦ったのもゴブリン達の能力などを把握しながらついでに出来る限り戦力を削るのが主な目的である。

……だが、実際戦った結果相手の戦力は最初の予想以上であり、リヒトを持ってして王国側が「クインバース」達を倒せる手は「大賢者」に《イマジナリー・メテオ》などの広域攻撃魔法を連発してもらおうぐらいしか無いと思える程だった。

なので、リヒトはここで戦闘を切り上げて王都に詳しい情報を伝えるべきだと考え撤退しようとしていたのだが……それより早く、今までやらねばなれなかったゴブリン達は起死回生（彼等視点）の反撃を行おうとしていたのだ。

『……よし！ 準備は整ったか！ お前達、場所を開ける！』

「ん？ 一体何を……」

まず、長槍を持った「ハイゴブリン・キング」最後の一体がそう指示を出すと、配下のゴブリン達の一部が急いで拠点の外側へと移動し始めたのだ……すると拠点の一角にぼつかりと誰もいない場所が出来た。

……そんなゴブリン達の行動に警戒を強めたりヒトは急いで離脱しようとして高度を上げようとしたが、その直前にその場所の地面が何らかの地属性魔法によって崩れたので、彼は念のために《遠視》を使ってそこで何が起きているのかを確認した。

『「」』

そこでリヒトが見たものは地面が崩れたその場所にあらかじめ作られていた地下室と、その中には数十体の「ホブゴブリン・メイジ」達が一心不乱に何かの魔法の詠唱の様なものを行なっている光景だった。

……そのゴブリン達を行動を見た彼は、それがかつて「大賢者」の徒弟達が行なっていたとある魔法と同じものであると気がつくとう驚愕の表情を浮かべた。

「まさか《ユニゾン・マジック》だと!? デュラルツ!!! 全速離脱!!!」

『承知ッ!!!』

『「」』

《ライトニング・ヴァイパー》!!! 『「」』

それに気が付いたりリヒトはデュラルルを瞬時に最高速度まで加速させてその場を離脱しようとして試みるが、それと同時にゴブリン達の詠唱

が終わり上空へと超級職の奥義すら上回りかねない威力の雷が放たれて、即座にその軌道その名の通りまるで蛇の様に捻じ曲げて離脱したりヒトを追っていった。

「《ライトニング・ヴァイパー》……追尾効果付きの雷属性魔法、しかも確か当たった相手に連続ダメージを与える効果もあつたな!!」

『「ブローチ」対策か、念のいった事だ!!』

そんな事を言いながら彼等は加速系アクティブスキルを使って音速の三倍を超える速度で逃走するものの、その背後からは極太の雷蛇が電撃を撒き散らしながら急速に迫ってきていた……《ライトニング・ヴァイパー》は追尾式の雷属性魔法である影響でその速度は本物の雷速には届かないが、それでも音速の十倍を優に超える速度を叩き出す。

……いくら世界最高クラスの飛行能力を持つ彼等でも流石に自分を追いかけて来る雷を振り切る事は出来ず、とうとう雷蛇が背後から二人を飲み込んだ。

『チッ！ 《スファイア・サンクチュアリ》！』

「……止むを得んか。《空陣で……」

その寸前にデュラルが自分達を囲む球状の防御結界を展開したが、それごと彼等を飲み込んだ極大の雷蛇は内側に向けて大威力の放電を長時間に渡って行い続けた。

……そうして内部にある彼等の影が見えなくなる程の雷光と轟音を伴いながら放電は続き、それが終息した後そこには塵一つ残ってはいなかった。

『……よし！ 我等が女王を狙う愚かな敵は跡形も無く消え去った！』

我々の勝利だあ!!!』

『『『『『オオオオオオオオオオオオオオ——ツ!!!』』』』』』

……それを見た「ハイゴブリン・キング」があげた勝どきに続いて「ネクス平原」の一角にゴブリン達の大歓声が響き渡ったのであつた……。

私に良い考えがある！

□〈へサウダ山道〉【紅蓮術師^{バイロマンサー}】レント・ウイステリア

さて、リヒトさんが「ヤタガラス」の先導でゴ布林達を生み出していると思しき黒幕を探しに行ってからしばらく、俺達は回復を終えた後でこの近辺に例のゴ布林達がまだ残っていないかを調査していた……まあ、前回の戦闘の事を考慮して部隊を分けずに一かたまりになつての搜索だからそこまで広範囲を探せる訳ではないが。

……リヒトさんの報告を待つ意味でもが帰つて来るまでは余り動かない方が良いでしょうと言う声が「マスター」から上がったりもしたが、部下であるリレイさんが『リヒト団長はマジックアイテムのお陰でこちらの位置が分かりますし、いざとなれば一瞬でこっちに戻つて来れるから大丈夫ですよ』と言つたので全員納得して探索を行なっている。

「と言つても、ゴ布林どころか普通のモンスターも出てこないけどねー」

「まさか全てゴ布林達に狩り尽くされたのでしょうか？」

「それも一つの理由だろうが、多分危険を察知してゴ布林達から逃げたモンスターも相当数居るんじゃないか？」

このデンドロのモンスターは普通のゲームの敵キャラと違って一体一体に人格と知性があるからな、自分達が住んでいる場所が危険地帯になつたと分かつたら逃亡を考えるのは当然だろう。

これまで俺達が狩りをしていた時もモンスターは危機に陥つたら逃げようとする者ばかりだったからな……まあ、そういう連中は俺が容赦無く後ろから撃つか天災児二人に回り込まれてしまった事が殆どだったが。

……それに、これだけ数が多い人間達のパーティーを襲うにはモンスター側にも相応の実力や規模が必要だろうしな。普通なら関わらない様に避けるだろう。

「……あ、なんかヤタが目的地であるゴ布林の群れに着いたみたいですね。……んー、それで多分ヤタだけが引き返してリヒトさんが引

き続きそのゴブリンの群れの後を追おうとしているのかな？」

「成る程、ありがとうございます久遠たむーさん。……リヒト団長がそう言った判断を下したのなら、おそらくそのゴブリンの群れに何か今回の黒幕に繋がる情報を見つけたのでしよう」

……と、そんな事を思っていたら久遠たむーさんとリレイさんがそんな話をしているのが聞こえてきた。どうやらリヒトさんが向こうで何か手掛かりを掴んだ感じか。

……それからしばらく調査を続けていると、南の空から久遠たむーさんの元に役目を終えた「ヤタガラス」が戻って来た。

「お疲れ様ー、ヤタ」

『ガンバツタゼー！ ツカ、オレサマハタラキスギジャーナー！』

「ええ、今回の事件では貴方達が居てくれて本当に助かりました。報酬の方も期待しておいて下さい」

「ほう、それは楽しみだな。一体どんな情報が手に入るのか……」

まあ、本当に今回の事件では〈Wiki編集部〉組は大活躍だからな……俺もミカが色々は無茶振りした事も合わせて特典武器含む〈U B M〉の情報を渡す約束だったから、今の内に情報をちよつと纏めておこうかね。

……そう考えていたら近くにいたミカが顎に手をやって虚空を見ながら何かを思索している姿が見えた。これはミカが何かを感じ取っている時の表情だな。

「どうした、何か気になる事でも起きたのか？ ……それともこれから“起きる”のか？」

「んー、いやそういう訳じゃないよ。私の“直感”だと今の所は、この事件に関しては順調に進んでいるし……あ、来たみたいだね」

ミカがリレイさんとアット達の方向を見ながらそんな事を言った次の瞬間、いきなり向こうにいたリレイさんの近くの空間が光り輝いたのだ……咄嗟に俺やミュウちゃん、アット、月夜さん達などの場慣れしたへマスター達に戦闘体勢をとったが、直後に光が消えると共にその場所には調査に行っていた筈のリヒトさんとデュラルが現れたのだ。

……よく見るとリレイさんを初めとする騎士達は光を見ても驚いていなかったし、これはリヒトさん達が何らかの方法で転移して戻って来たと見るべきなのか。

「お帰りなさいリヒト団長、どうでしたか？」

「ああ、状況はこちらが思っていた以上に不味い事になっていた。……全員を集めてくれ、これから王都への報告を合わせて詳しく説明する」

現れたリヒトさんの表情はかなり深刻なものであり、彼はそのまま全員を集めてマジックアイテムによる連絡の準備を整えながら自分が見て来た事を話し始めた。

ちなみにリヒトさんがいきなりこの場に現れて驚いていたへマスタール達に近くにいた騎士さんが説明してくれた事によると、アレはリヒトさんが有する転移能力を持った特典武器によるもので、彼は〈UBM〉と戦って窮地に陥ってもそれを使って撤退出来るからこそ団長なのに単騎で威力偵察を行っているのだとか。

……それはつまり今回の黒幕は、超級職のリヒトさんと物凄く強いであろう彼の愛馬デュラルを持ってしても窮地に陥る様なヤバい相手だったって事だよな。これから始まる話はしっかりと聞いておいた方が良さそうだ。



「……以上が、私とデュラルがへネクス平原〉で見たへUBM〉【鬼仔母身 クインバース】とその配下であるゴブリン達の情報の全てだ」
「……………」

そうしてリヒトさんがへネクス平原〉で戦った【クインバース】率いるゴブリン達の事を話し終えた後、その場に居るへマスタール・テイアン全員が口を噤んでしまった……そりゃあ上級モンスターを含む千を超えるゴブリンとそいつらを作り出せるへUBM〉って言う時点でヤバいのに、超級職のリヒトさんですら防戦一方な戦力があるって分かってしまっているからなあ。

……それに「ゴブリン・キング」率いる群れを自分の護衛では無く遠征させて居るって事は《ゴブリンキングダム》みたいな配下の経験値を獲得出来るスキルを持っていて、多分それでゴブリンを生産しているっぽいしな。倒したゴブリンがアイテムを落とさないのもその分を経験値に変換している可能性が高いし、下手をすると放置しておくだけで戦力がどんどん増えていく可能性が高いしな。

「……それでリヒト団長、今後私達はどの行動するべきでしょうか？」
「うむ、とりあえずは一旦王都に戻る事になるだろう。ここに居る戦力だけでは「クインバース」率いるゴブリンの群れ相手にはどうしようもないだろうし、クエストに参加した「マスター」達への報酬の話もあるからな」

その場を覆う沈黙を破ってリレイさんがリヒトさんに今後の方針を聞いた所、彼はひとまず王都への帰還を提案した……まあ、話を聞く限りの向こう側の戦力だここに居る人間だけではどうしようも無さそうだからな……その後もリヒトさんは深刻な表情で話を進めていく。

「その後は王都で「クインバース」に対する対策を話し合う事になるだろう。流石にあの規模の相手だとグランドリア卿や「大賢者」殿が出て来る必要があるだろうしな。……ヤツらは私を迎撃する時に高度な連携を取れる程の高い知性があるし、その特性上「クインバース」は時間を置くと規模がドンドン拡大していくタイプの「UBM」だから、コイツだけでも可能な限り早く倒したいんだがな」

「……その「クインバース」だけを倒す方法なら無くは無いんだけどね」

「「えっ!?？」」

そのミカが発した言葉に対して、その場に居るミカの「直感」の事を知っていた俺とミウちゃん以外の人間達が驚きの声を上げながら振り向いた。おそらくミカには既に「クインバース」を倒せる道筋が「視えて」いるんだろうな……早急に倒さないと被害が酷くなる事まで含めて。

……ミカは「直感」の所為か色々説明を端折って話す癖がある

から色々フォローしてやらんと……。

「ミカ、それはお前の〈エンブリオ〉の防御・身代わり系スキル効果減衰を使って「クインバース」を倒すって事か？」

「そうだよお兄ちゃん。私の〈エンブリオ〉のスキルはきつき「ゴブリン・キング」の《ゴ布林キングダム》を抜いてダメージを与えられた事は確認済みだし」

「……ふむ、まあ確かにあの「クインバース」のステータスはSPに特化していて、それ以外のステータスはHPが多少高いぐらいの亜竜級程度だったか……」

俺がミカに詳しい話を聞きながらその場に居る人間に事情を説明して行くと、やはりと言うか真っ先にリヒトさんが反応してくれた……本当にこの人はへマスター〈〉に対する偏見も少ない上に色々話が早くて助かるよ。

……とは言え、例えミカの「ギガース」が「クインバース」にダメージを与えられたとしてもそれだけではどうしようもないんだが。

「だが、それでもミカ君のステータスでは一撃では倒しきれない程度の能力はあったし、それ以前にあのゴ布林達の守りを突破する事は出来ないだろう」

「それはそうなんだけどね。……と言うか、私のスキルは自分の攻撃力を基準としてスキル効果を減衰させるから、多分〈UBM〉である「クインバース」のスキルを抜くには今の私のステータスでは無理な気がするし」

そう、つまりミカ自身が弱すぎて超級職すら退ける戦力を持つ「クインバース」に太刀打ち出来ないという当たり前の事実があり、当然の事ながらリヒトさんにもそこを突っ込まれた。

……しかし、本当にどうするつもりなんだろうか？ 正直なところ俺には「クインバース」をミカが倒せる道筋がちよつと思いつかないんだが。

「ではどうするのですか姉様？ ……まあ、何か考えがあるのでしようけど」

「うん、あるよ。……私だけだとどうしようもないからリヒトさんに

は協力して貰う必要があるけど」

「あの【クインバース】率いるゴブリン達からは人間に対する敵意の様なものがあつたし、これ以上の戦力増加を防ぐ為に大元だけでも潰しておくのは賛成だからそれに関しては構わないが……具体的にどうするつもりなんだ？」

幸いリヒトさんは【クインバース】を早急に倒すというミカの提案には肯定的だから、後はちゃんとした方法を提示すれば協力してくれるであろう。

……ミカが如何するのかは俺には分からないが、うちの妹の『直感』が外れた試しはないから多分俺には見えない最適な道筋が視えているんだろう。きっと俺には思いもつかない様な提案をしてくれる筈だ。

「それに関しては簡単な話だよ。今回必要な要素は私が【クインバース】を倒せる攻撃力を得る事と、ゴブリン達の防衛体制を抜いて不意打ちを可能にする事……つまり！ 超超音速で飛べるリヒトさんがそのままの速度で私をぶん投げて【クインバース】に直撃させればいいんだよ!!!」

「「「「……………」」」」

……ミカが物凄いドヤ顔で言い放つたその言葉によって、その場には先程リヒトさんの話を聞いたのとは別の意味の沈黙が包み込んだ……ワー、オレニハオモイモツカナカッターアイデアナー（白目）「…………おいたわしや姉上……『直感』の使い過ぎでとうとう頭が残念な事に…………」

「いやミュウちゃん、私の頭は正常だよ!?? てかちよつと酷くない!??」

「そりやあいきなり『私自身が人間砲弾になる事だ』とか提案すればそうなるよ」

「お兄ちゃんまで!?? ……いやこの方法が一番【クインバース】を倒せる確率が高いんだって！ 私の【ギガース】は私自身の直接攻撃なら殴っても蹴っても体当たりしても減衰効果は発揮されるし、ヤツを守ってる結界もそのまま抜けるからね」

……まあ、お前がそう言うならそうなんだろうが……流石に人間砲弾戦術とか言ってもリヒトさんは協力してくれないと思うぞ。正直言って説得はかなり難しいと「……まあ、出来なくは無いな」………えっ!!?」

「俺とデュラルの能力なら一人を超超音速で飛ばすぐらいなら可能だし、もう一度だけ【クインバース】に接近する事も出来なくは無いだろう。……だが、その方法だと君は高確率で死ぬ事になるぞ。いくら不死身の「ヘマスター」とは言え……」

「んー、でもここで【クインバース】を放置したら後々王国のティアンに多大な被害が出ると思うけど?」

「ッ!!?」

そう言った上でリヒトさんが懸念を口にしたが、先程までとは打って変わって表情を消したミカという言葉に黙り込んでしまった……その上で更にミカは言葉を重ねる。

「所詮、私は死んでも三日後には蘇る「ヘマスター」だからね、死んだらそこで終わりのティアンが犠牲になるよりは良い結果に終わると思うよ。……それに、これ以上【クインバース】が戦力を増強させれば確実にティアンとの大規模な戦争になりそうだからね。今の内に斬首戦術で親玉を始末出来るに越した事は無いよ。……それが分かっているからリヒトさんは私の提案を「出来る」って言ったんでしよう?」

「……………」

無表情のまま、ただし目だけは座っているミカの話のリヒトさんは何かを見極める様にミカを見ながら真剣な表情でただ聞いており、周りの人間達もいきなり変わったミカの雰囲気呑まれたのか口を噤んでいた。

……ミカは「直感」関係になると雰囲気身内でもちよつと怯むぐらいに変わるからな。それにデンドロでなら自分で先を変えられる所為か本気になってるからな。

「それに私が死なずに【クインバース】を撃破出来る可能性も十分にあるんでしよう? リヒトさんが「出来る」って言ったのはそれも理

由だよな？」

「……確かに【救命のブローチ】と【身代わり竜鱗】辺りを使えばどうにかなるかもしれないが……分かった。見たところ君は本気で言っている様だし協力しよう。もし倒せなくとも手傷を与えればゴブリ達の戦力拡大を抑えられるかもしれないしな」

やがて根負けしたのかりヒトさんもミカの突拍子も無い作戦を了承してくれて、直ぐに配下の騎士達に指示を出したり王都へと連絡を行なったりして準備を進めていった……後、周りの「ハマスター」達が『ふーん、おもしろい事考えるな、あの子』とか『人間砲弾戦術を躊躇無くやるとかガンギマリすぎだろ』とか『ハマスター』が超音速で飛んだ時の検証とか出来ないかな』とか聞こえてくるが面倒なのでスルーで。

……しかし、こんな阿保な人間砲弾作戦があつさりと認められるなんて、ひよつとしてこの世界ではごく普通の戦術なのか？

「それでミカ、本当にこの作戦で大丈夫なんだよな。……お前がそう言うならそれが最適解なのかも知れないが」

「まあ、大丈夫な気がするし大丈夫なんでしょう。……私だって好きで人間砲弾をやりたいと思っっている訳じゃないんだからね。ただそうしなければもっと酷い事になると感じたからやってるだけで」

「それは良かったのです。人間砲弾が趣味になった訳では無いのですね」

……俺達はそんな会話をしつつも俺達はリヒトさんの準備が整うのを待つのだった……まあ、ここは俺達「ハマスター」にとつてはあくまで死んでも死なないただのゲームだから、自分のやりたい様にやればいいだろうさ。

炸裂！ 人間砲弾（妹）！

□〈ヘネクス平原〉上空 【戦棍騎士^{メイスナイト}】ミカ・ウイステリア

【クエスト【討伐——【鬼仔母身 クインバース】 難易度：九】が発生しました】

【クエスト詳細はクエスト画面をご確認ください】

そう言う訳で突発クエスト『ミカのドキドキ人間砲弾作戦（爆笑）』の発動が決まったので、私は王都への連絡など諸々の準備が終わったリヒトさんと一緒に【ハイエンド・セイクリッド・モノペガス】のデュラルに乗って、一路空路にて【鬼仔母身 クインバース】率いるゴ布林軍団の元に向かっているのです。

これはどうせ行くなら出来る限り早く【クインバース】の元に赴く事で、向こうが先程の襲撃で受けた損害を補填するより早く奇襲を仕掛けるべきだと言うリヒトさんの提案である。

……しかし、私は今リヒトさんの後ろに乗ってるんだけど、流石は最上級のモンスターだけあってデュラルの乗り心地はいいね。向かい風やら空気抵抗やらも彼が風属性魔法でどうにかしてくれているらしいから、高空を飛んでいても全然寒く無いし。

「それじゃあ改めて今回の作戦を確認しておこう。……と言っても、やる事は俺とデュラルが姿を消してゴ布林達に感知されないギリギリまで接近、そこから全速力で【クインバース】に突撃しながら《第三の腕》で保持したミカ君を【クインバース】にぶつけると言うだけなんだがな」

『その際に私が君に空気抵抗軽減の魔法をかけるから大気の影響は無視出来る……が、激突時の衝撃はどうしようもないから、そこは追加で貼った結界と渡した【救命のブローチ】及び【身代わり竜鱗】を信じるしか無いがな』

「オツケー、分かりました！ ちゃんとその二つも装備してるよ」

ちなみに私をぶつける時には投げけるのでは無くりヒトさんが持つ物体を動かす特典武器のスキルを使う事になりました……投擲だと命中率に不安があり、こっちの方が確実に当てられるとの事。

……ぶつちやけ私は「ギガス」を握りしめてじっとしているだけの簡単なお仕事なので、その辺りは全部リヒトさんとデュラルに任せしか出来ないんだけどね。気を付けなければいけないのは「ギガス」がすっぽ抜けないようにするぐらいだし、一応布とかで縛っておけば大丈夫でしょう。

「後は、相手のダメージに依らず一撃入れたらその時点で全速離脱するから。……最低でも手傷さえ負わせれば時間稼ぎにはなるだろうし」

『無理に追撃などはしない事だ。……もし追撃の必要があっても、その時は私達が行おう』

「はい、邪魔しない様にじっとしてます」

まあ、今回の私の役目は言ってしまったば「武器」兼「砲弾」だからね。戦力としては一切役に立たないから、二人の邪魔にならない様にじっとしているのが一番でしょう。

……そんな事を考えていたらリヒトさんがややトーンを変えてこちらに話しかけて来た。

「さて、まだ目的地まで時間があるし少し話をしようか。……君は何故こんな自分の命を投げ捨てる様な作戦を提案したんだ？」

「それはさっきも言った通り「クインバース」を倒さないと王国のテイアンに被害が出るし、私は「ヘマスター」だから死んでも問題無いし……」

「その事に関しては『真偽判定』にも反応は無かったし嘘では無いんだろうが、私が疑問に思っているのは君が王国に多大な被害が出る事を確信している事なんだがね。……確かに「クインバース」がこれ以上戦力を増やすと王国に居る超級職達だけでは倒し切れなくなり、総力戦になれば相応の犠牲が出ると俺は睨んでいるが……この世界に来たばかりの「ヘマスター」で王国の戦力について詳しく知らない筈の君が、「確信」を持ってその判断が下せるのは妙だろうか？」

「……………」

そのリヒトさんの問い掛けは実を射ているものだったので、私はそれ以上の言い訳を募る事が出来なかった……まあ、別に私は自分

の「直感」について念入りに隠している訳じゃないから、目端の利く人なら普通に気づかれるよね。

ただ、現実では未来が分かる程の「直感」なんて眉唾物過ぎて誰も思いつかないけど、この世界でなら本当に当たる占いや予言とか有りそうだから私が可笑しい事には直ぐに当たりをつけられるのが原因かな。反省しよう。

……しようがない、リヒトさんには無茶振りを聞いてくれたしこつちもちゃんと事情を話そうか。それにここで私の事情を彼に話しても特に問題無い気がするしね。

「……信じて貰えるかは分から無いけど、私は生まれつき自分やその周りに訪れる「危険」とか「事件」を感じ取れるんですよ。……今回もこのまま「クインバス」を放置しておくとう王国に多大な被害が出ると感じ取ったので、私はそれを阻止しようとしてました。……そうなるかと分かっているのに放置しておくのは非常に不愉快なので」「……成る程。そう言う事なら納得がいった」

まあ、こつちの Infinite Dendrogram の世界だと「危険」をどうにかする為に自分自身で動けるから大分気が楽なのだけだ……向こうではお兄ちゃんや由美ちゃんに起きた事件をどうにかする事は出来なかったし。

……私がデンドロやってるのは自分の「才能」である直感に向き合う為でもあるからね。その為にもまずはこの事件を解決に導いてみよう、そうすれば何かが変わるかもしれないから……。

「しかし、なんかあっさり信じてくれましたね。……私が予知・予測系の「エンブリオ」とかジョブスキルを持っているんじゃないかと聞かれると思っていたんですけど」

「ああ、それは以前に「似たような話」を聞いた事があるからな。……君には言い辛い話をさせてしまった様だし、その礼として私が知っている限りのその事……特殊超級職【ヴァンガード 先導者】の事について教えるよ」

……どうやら言葉にはしてない部分も察せられてしまっていたらしい。この辺りはまだ子供の私との人生経験の差が出たかな……規格外の直感を持っていても人の心とかは分からないモノだからね。

……しかし、その【先導者】と言うのは一体何なのだろうか？ 名前前からしてこの世界にあるジョブの一つなんだろうけど……。

【先導者】と言うのは転職に『血筋』や『特別な適性』などが条件にある超級職の事だ……本格的な説明をすると長くなるし、詳しくは後で調べてほしい」

「はあ……」

「とまあ、そんな特殊超級職である【先導者】なんだが、その資格者は『危険をなんとなく探知する才能』を有するらしいんだ。……まあ、私も建国者がその資格者だったらしいグランバロア出身のラングレイや、フィンドル侯爵に聞いた話だからこれ以上は知らないんだが」
『後はその【先導者】に就いているティアンの噂は聞かないから、未だに空位に有るのではないかと言うぐらいか』

……へー、中々面白い話だね。このゲームをやり続ける理由が増えたかな。

「……おっと、話し込み過ぎたな。そろそろ【クインバース】の拠点に付くから準備してくれ。《オプティック・ハイド》。デュラル消音を」
『既にやっている』
「分かりました」

……まあ、まずはこの目の前にある『いずれ起こりうる悲劇』を未然に阻止する事から始めましょうか。



□?? 〈ネクス平原〉僻地・【クインバース】の拠点

ここは【鬼仔母身 クインバース】率いるゴ布林軍団の拠点、ここでは現在【天翔騎士】リヒト・ローランとの戦いによって負った拠点・人員の補填作業が急ピッチで進められていた。

……具体的には【クインバース】が出稼ぎに行っている【ゴ布林・キング】が稼いだ経験値を使って新たに即戦力のゴ布林を産したり、地属性魔法や大工・木工系スキル持ちのゴ布林による拠点修復などである。

『呼び戻していた【ゴブリン・キング】二人がようやく戻ってきたぞ』
『現在残っている【キング】は我々三人を含んで十二人。その内の半数である六人と率いるゴブリン達がここで“女王”の護衛をしている事になるか……もう少し拠点に呼び戻すべきか?』

『いや、これ以上は拠点に入らないから無意味だ。今も全体の三割程度は外の偵察を行っているしな。……だが、人間どもの全面戦争も近いのだし、他の【キング】拠点の近くまでは呼び戻しておくべきだろう。どうせこの位置は既にばれていているんだからな』

今までは人間達にバレない様に派手には動いて来なかったゴブリン達だが、リヒトとの戦いがあった時点で隠蔽の意味が無いと判断して拠点の戦力を大幅に増大させていたのだ。

……これは彼等ゴブリン達の最優先事項は【クインバース】の身をを守る事だと設定されているので、この様に経験値獲得のペースを下げても拠点戦力の増大を優先しているのも有るが。

……だが、そこで彼等にとっては思わぬ来客が現れる事になったのだった。

『……大変です！ あのペガサスに乗った人間がまた攻めてきました!!!』

『何だと！ ……チツ、どうりで手応えが無いと思っていたらやはり生きていたか!!!』

『今すぐに護衛役と結界役は“女王”の守りを固めよ！ 他は戻って来た者達も含めて迎撃だ!!!』

見張りに付いていたゴブリンからそんな報告を受けた【ハイゴブリン・キング】達は、即座に迎撃の準備を進めると共にそのゴブリンが指差した方角の空を見上げる……すると、そこには角が付いたペガサスであるデュラルとそれに乗ったリヒトの姿があった。

……そのまま上空を飛んで拠点の元に近づいて来た二人は地上のゴブリン達に風属性魔法の刃と聖属性魔法の槍を放って攻撃し始めた。

『攻撃して来ました!??』

『落ち着け！ 向こうの狙いは荒いからただの牽制だ！ 準備が出来

た者から攻撃開始!!!」

その攻撃に前回の被害を思い出して怯むゴブリンも居たが、それは「キング」が一喝するだけで直ぐに落ち着きを取り戻して上空にいる彼等への攻撃や、相手の攻撃に対する防御など自らの役割を忠実に言い始めた。

『《スナイプアロー》!』

『《ヒート・ジャベリン》!』

『《スプレッド・アロー》!』

『《サンダー・スマッシュャー》!』

そして先程の戦闘と同じ様に地上にいる対空攻撃可能なゴブリン達が、一斉に上空にいる彼等に向かってアクティブスキル混みの矢や魔法を放ち始めた。

……その対空攻撃は先程と全く回避を許さぬ様に彼等の周囲を覆う様に広範囲にばら撒かれる物と、直接彼等を狙う物に分かれて放たれ……リヒト達に当たる起動を描いた攻撃は全て彼等を擦り抜けた。

『攻撃が擦り抜けた!?!』

『今度はどんな能力……!?!』

『……いや! アレは幻影だ!?!? ……不味い!?!? “女王”が……!』

ゴブリン達が上空に居たりヒト達がよく出来た幻影だと気付くその直前、その反対側に居た「クインバース」の直上まで姿を消して接近していたリヒト・デュラル・ミカの三人はそのまま超超音速での急降下を行っていた。

……これはリヒトが所有する特典武具「螢幻布 ホタルンガ」のうち一つのスキル《イリュージョン・ダブル》——本人及びその騎乗対象と同じ姿の幻影を作り出すスキル——を事前に使っていたからである。

◇

……これはゴブリン達がリヒトの幻影を発見する少し前の事であ

る。

「……おお、リヒトさん達がもう一人」

「この幻影を囮にしてゴブリン達の目を引き付けて、その隙に隠密状態で「クインバース」の近くまで接近する。……どうせ十秒もあれば気付かれるだろうが、それだけあれば超超音速で近付いて一撃入れるぐらいは何とかなるだろう」

『後、幻影の中に風属性と聖属性の魔法を仕込んで遠隔発動させればよりバレ難くなるだろう』

そうしてリヒトは《イリユージョン・ダブル》で作られた幻影をゴブリンの拠点に向かわせつつ、自身は姿と音を消して向こうの探知結界に掛からない様大きく上空を迂回して「クインバース」の元に接近していった。

「それじゃあミカ君、君を《第三の手》で保持するから準備はいいか。……一応、君のメイスを含めて念力で保持するから大丈夫だと思うが、なるべくしつかりと握っておいてくれ」

『空気抵抗軽減の魔法は念入りに掛けておいたし、衝撃対策として君の体表面に結界を張っておいたが、これから行う事が事だから気休めぐらいに思っておいてくれ』

「分かりました大丈夫です。……手と「ギガース」を布で縛ってみたけどやっぱり気休めかな」

そう言ったりリヒトは《第三の腕》で「ギガース」を握り締めたミカを宙に浮かせて自分の横に固定した……尚、現在のミカの姿勢は「ギガース」の柄を両手でしつかりと掴み、自分の頭の上に「ギガース」の頭部が来る様にながら空中で横になっているという側から見るとややシュールな光景だったが。

「……よし、敵が囮に食いついた。行くぞミカ君！」

「はいっ！」

……そしてゴブリンの拠点の上空にまで来ていた彼等は、光学迷彩を解除しながら一気に超超音速で斜め下に居る「クインバース」の元へと突っ込んで行ったのだった。



その様にしてゴブリン達の裏を書く事に成功したりヒトは、各種加速系アクティブスキルを使って護衛のゴブリン達が気付くよりも早く「クインバース」を《第三の腕》の射程圏内——100メートル以内——に収める事に成功していた。

……尚、この《第三の腕》は「腕」であるが故に使用者であるリヒトと保持している物体は相対距離で固定される、つまりリヒトが超音速で移動しても隣に保持しているミカは《第三の腕》を動かさなくても同じ様に移動する仕様である。

「今だっ!!!」

「——ッ!!!」

それはつまり、超超音速で移動している最中に《第三の腕》を前方に移動させた時の速度は『移動速度+《第三の腕》を動かす速度——リヒトのAGI』になるという事である。

……故に、今《第三の腕》によって前方に射出された弾丸^{ミカ}の現在の速度は瞬間的にだが音速の六倍を超えているのだ。

『……不味い!?? “女王”が危ない!!!』

『“女王”を守……!』

『結果を……!??』

その圧倒的な速度はゴブリン達が「クインバース」を守ろうとするよりも早く玉座を守る結果までミカを到達させ、その速度によって得られた圧倒的な攻撃力は「攻撃力を基準としてあらゆる防御系スキル効果を低下させる」パッシブスキル《バリアブレイカー》の効果を最大限に引き出している。

その結果、先端に配置しておいて「ギガース」が結界に触れた瞬間、超級職の奥義すら一撃なら凌げる程の強度だった結界はまるで紙切れの様に消し飛び……。

『……あ』

……そのまま相手が何かを言うよりも早く一発の弾丸と化したミカは「クインバース」の上半身部分に突き刺さり、最後の砦である《ゴ

プリンエンパイア』の身代わり効果を『バリアブレイカー』で無効化してその身体を上半分を跡形も無く吹き飛ばしたのだった。

〔UBM〕〔鬼仔母身 クインバース〕が討伐されました〕

〔MVPを選出します〕

〔ミカ・ウイステリア〕がMVPに選出されました〕

〔ミカ・ウイステリア〕にMVP特典〔鬼身腰帯 クインバース〕を贈与します〕

……後、こんなアウンスが表示されたのだが〔クインバース〕を貫通して超超音速で地面に突っ込んだミカにはそれを確認する余裕は無かった様だ……。

ゴブリン事件の終わり

□【クインバース】の拠点 【戦棍騎士^{メイスナイト}】ミカ・ウイステリア

「……痛たた……まあ、痛覚はオフにしてあるんだけど。……ていうか、私生きてる？ HPは減ってるけど」

私は自分で発案（不本意）した人間砲弾作戦によって超超音速で【鬼仔母身 クインバース】に向けて突っ込んだ訳だが、その後に地面へ激突したのに何故か生きていた。

……正直なところ私のAGIでは何が起こったのかはよく分からなかったが、身につけていた【救命のブローチ】と【身代わり竜鱗】が碎けていた事と、地面に激突する寸前にスピードが落ちた様に感じたので多分リヒトさんが上手くやってくれたのだろう。

（ちよつとだけ【気絶】してたから分からないけど、手元にお兄ちゃん
が持ってたのと同じ特典武器入りっぽい【宝櫃】があるから多分【ク
インバース】は倒したんだろう。そんな気がするし。……さて、この
ままだと残ったゴブリン達にリンチにされそうだけど……おおつと
！」

未だにフラつく頭を抑えながら現在の状況を確認していると、突如
として私の身体が何者かに引っ張られる様に宙へと舞い上がった
……そして、次の瞬間には【ハイエンド・セイクリッド・モノペガサ
ス】のデュラルに乗って地上に接近していたリヒトさんの後ろに乗せ
られていた。

……更に私を乗せたりリヒトさんは即座にデュラルの騎手を上げて
上空へと昇っていった。

「おお!! リヒトさん【クインバース】は!?!?」

「討伐アナウンズがあつたから倒したのは確定だ! よくやってくれ
た!」

『それよりさっさと離脱するぞ。……あのゴブリン達【クインバース】
がやられたという事実でショックを受けて今は放心状態だが、おそら
くこれから……』

『『『『『』』』』』』』

????????????????????

デユラルさんが何か言おうとして途端、地上から凄まじい怨嗟と怒りが伴ったゴブリン軍団の大咆哮が辺り一帯に轟いた……うーん、戦意喪失とかじゃなくてそっちの「ルート」に行くかあ。まあ予想はしてただけだ。

『ヨグモ女王ヲオオオツ!!!』

『追エエエエエエ!!! ヤツヲヲ殺セエエエエエ!!!』

『G A A A A A A A A A A A A A A A!!!』

「……わーお、みんなハッスルしてるねー(棒)」

……私が思わず下を向くと、そこには血走った目をしゅつと怨嗟の声を上げながら上空にいるこちらを睨みつけるゴブリン軍団の姿がありましたとき。「クインバース」を倒したら高確率でこうなるとは解つてはいたけど、実際にこれだけの殺気をぶつけられるとちよつとビビるね。

勿論、ゴブリン達はただ喚いている訳ではなく、こちらに向けて弓矢や魔法や投擲による遠距離攻撃を行ってもいる……が、そこはリヒトさんが上手く飛び回る事で回避しているから私達には当たらずに空を切るだけである。

「それでリヒトさん、あの連中から逃げられますか?」

「逃げるだけなら君を乗せたままでも容易いが……あのゴブリン達をこのまま放つておく訳にもいかん。八つ当たりで近くにある村や街を襲撃される可能性もあるからな」

『幸いと言うか今のヤツラは我々にしか目を向けて居ないから、このまま引き離さない程度に逃げ回ればそう言った被害は抑えられるだろう』

……まあ、そうするしかないよねー。「クインバース」は倒したからもう増える心配は無いとはいえ、あのゴブリン達だけでも相当な戦力になるし。

「……一応、「クインバース」を倒した時点でこうなる可能性も予測していたから対策も打っているし、悪いがミカ君にはしばらく付き合ってもらおう。……とりあえず「クインバース」を倒した事を連絡して、事前に伝えておいた予定通りあの辺りに追い込めば……」

「ああ、へサウダ山道」の街道から大きく外れた人気の無い地点だ。アイツらを相手にする際に余計な被害を出さない様にな。……む、来たか」

……その時、リヒトさんの通信手段として使えるらしきマジックアイテムに誰かから連絡が入った。

「……はい、予定通りゴ布林達はそちらに誘導しています。そちらの準備は？ ……分かりました。では後五分程度でそちらに付く様に誘導します。……それじゃあ向こうの準備が整った様だからそろそろ詰めに入ろう」

「はい」

通話を終えたりヒトさんはそう言う少し高度を上げてゴ布林達を何処かに誘導し始めた……そして五分後、私を乗せたりヒトさんは「へサウダ山道」の山間部にある盆地の上空にやって来ていた。

……そして、その上空には黄金の機械の馬に乗ったなかりヒトさんと同等ぐらいの実力がありそうな騎士と、その後ろに横向きに座っているローブを着た老人の姿があった。

「グランドリア卿、【大賢者】様、お待たせしました準備は？」

「ええ、〃歓迎〃の準備は出来ていますよ。何せ五分も時間を貰いましたから」

「私は【大賢者】様をここまで運んだだけだからな」

どうやら、その二人とリヒトさんは知り合いの様で何処か気安く話していた……以前、アイラさんから聞いた話と彼等の特徴は一致する

し。多分この二人が王国に所属している残り^{スベリオルジョブ} 超級職である

【^{ナイト・オブリゼステイアル}天 騎 士】ラングレイ・グランドリア卿と本名不明の【大賢者】さんな^んだろうね。

……私がそんな事を考えると地上から散々聞かされてきたゴ布林達の怨嗟の叫び声が聞こえて来て、そちらを見ると山間の盆地に次々とゴ布林達が入り込んで来る光景があった。

「……これは、上級のゴ布林がこれほどか。話には聞いていたが凄まじいな。拠点で防衛するコイツらを倒すのは我々でもかなり梃子

摺るだろう」

「ですが、怒りで理性を失っているのであれば御し易いですね。……何せこんな分かりやすい罠に簡単に引つかかってくれるのですから。……魔法隠蔽解除」

ゴブリン達が山間部に入り込んだ丁度その時、「大賢者」と呼ばれた老人が何かを呟きながら右手を振り上げると、盆地の上空に突如として直径300メートル以上の巨大な隕石が現れたのだ。

……そのあまりにあまりな光景にあれだけ怒号を放っていたゴブリン達ですら、頭上を見上げて沈黙すらしていた。

「五分も時間を貰えればこの場所に姿を消した発動待機状態の魔法を仕込むぐらい出来ますからね。……では、落ちなさい。《イマジナリー・メテオ》」

そう言った【大賢者】さんが右手を振り下ろすと上空の隕石がゴブリン達に向かって急速に落下していった……それを見たゴブリン達が慌ててその隕石に弓矢や魔法を放つが、それらは全て隕石を擦り抜けていったので何の妨害にもなっていなかった。

……そして、その隕石はゴブリン達の群れの中央部分に激突して彼等を跡形も無く消し飛ばしていく。よく見ると周辺の地形には一切の影響を与えていないから、多分敵対生物だけ攻撃する感じの仕様なんだろう。何そのチート。

『……GA……GGA……』

「おや？ 【ハイゴブリン・キング】は生き残ってますね。……ああ、《イマジナリー・メテオ》の範囲外のゴブリンにダメージを写しましたか。数が多すぎて盆地に入り切らないゴブリンが結構いましたからね。……では、もう一発落としましょうか。彼等にダメージを与えればその身代わりにされたゴブリン達を殲滅出来るでしょうし」

隕石が落ちた後、まだ辛うじて生き残っていた三体の【ハイゴブリン・キング】を見た【大賢者】さんは何の事も無い様にそう言って、おそらく事前に準備しておいたもう一つの隕石を上空に出現させた……どうやら、あの隕石は複数用意してあったみたいだね（白目）

……それを見て呆然としている【ハイゴブリン・キング】に向けて

先程と同じ様に隕石が落下していき、今度はその落下地点には何も残らなかつたのだつた……。

「……ふむ、これでここに来たゴ布林達は倒しましたかね」

「《トライブレベル・ラウンドサーチ》……この一帯にはもうゴブリンの姿は無い様です。……まあ、まだ「クインバース」によつて産み出されたゴ布林が残っている可能性もあるが……」

「そこは〈サウダ山道〉から〈ネクス平原〉の監視を強化して対応するしか無いだろう。……王都の騎士だけで無くギデオン伯爵にも連絡して協力を頼むべきだな」

あれだけいたゴ布林達をサクツと殲滅した御三方はそんな感じの会話をしながら周辺の確認をしているみたいだね……とりあえず、これで事件は解決して一件落着つて事で良いのかな？ 私の「直感」でも『この事件はこれで終わり』つて感じがするし。

……そんな事を考えていたら私を放置していた事に気が付いたりヒトさんが話しかけて来た。

「おつと、それよりもまずはミカ君を送り届けなければならぬな。……ミカ君、今回は本当に助かつた。君達が早期に「クインバース」を発見・排除してくれたから楽に対処出来た。報酬の方も「許可証」を含めて相応の物を用意しよう」

「確かにあのゴ布林達は更に勢力を増した状態で正面からの戦いになつていれば、ここまで楽に済む事は無かつただろうしな」

「まあ、報酬の方は王都に戻ってから話し合う事になりそうですがね」
「は、はあ……」

実際、この人達がいれば「クインバース」とか普通に倒せたんじゃない？ と思つてしまつたので恐縮しつつりヒトさんの背に隠れる私なのでした……まあ、そつちのルートだと勢力を増した「クインバース」達が人里を襲い始める気がするから、こつちの方が私的には良かったんだけど。

……後、本当に何となくだけどあの「大賢者」さんには余り関わらない方が良い気がするんだよね。何かこう「直感」がイヤな感じで反応しているというか……。

「それじゃありりイ達と合流して王都に戻ろうか。報酬に関しては色々話し合う事もあるから後日になりそうだが……」

「あー、それで良いですよ。私も今日は疲れたので」

主に人間砲弾になった事とかね……そんな訳で本当に妙な事になった私達の【墓標迷宮探索許可証】入手クエストは終わりを迎えたのだった。

◇◇◇

□????

【孤狼群影 フェイウル】

最終到達レベル：37

討伐MVP：【壊屋】クラッシュヤ シュウ・スターリング Lv48 (合計レベル：48)

〈エンブリオ〉：【戦神砲 バルドル】

MVP特典：逸話級【すーぱーきぐるみしりーず ふえいうる】

【絶界虎 クローザー】

最終到達レベル：58

討伐MVP：【闘士】グラディエーター フィガロ Lv46 (合計レベル：46)

〈エンブリオ〉：【獅星赤心 コル・レオニス】

MVP特典：伝説級【絶界布 クローザー】

【擬音色獣 サウンドカラレス】

最終到達レベル：42

討伐MVP：【盗賊】バンディット ゼクス・ヴュルフエル Lv39 (合計レベル：39)

〈エンブリオ〉：【始源万変 ヌン】

MVP特典：逸話級【偽音色布 サウンドカラレス】

【心蝕魔刃 ヴァルシオン】

最終到達レベル：51

討伐MVP：【紅蓮術師】パイロマンサー レント・ウイステリア Lv8 (合計レベル：140)

〈エンブリオ〉：【百芸万職 ルー】

MVP特典：伝説級【才集刃飾 ヴァルシオン】

【鬼仔母身 クインバース】

最終到達レベル：69

討伐MVP：【戦棍騎士】ミカ・ウイステリアLv45（合計レベル：95）

〈エンブリオ〉：【撃炎棍 ギガース】

MVP特典：伝説級【鬼身腰帯 クインバース】

「……ふむ、これは予想外と言うべきか。投下した〈U B M〉の多くが〈マスター〉に倒されるとは。……“こちら”に来たばかりの〈マスター〉に対する最初の壁として程々の強さのモノしか投下しなかつたとは言え、これは嬉しい誤算か」

「やっぱり地球の〈マスター〉は優秀みたいだねー。……最初はどのような事かと思っただけど、これなら何事も無く終わるかなー」

そこは管理AI達が住まうとある場所、その一角ではジャバウオックとチェシヤが今回の〈UBM〉投下イベントの成果であるその討伐情報を眺めていた。

……そこにはアルター王国を始めとした全ての国での〈Infinitive Dendrogram〉を始めて内部時間で1カ月程度にも関わらず、投下した〈UBM〉を倒して特典武器を獲得した〈マスター〉達の情報が載っていた。

「結果を見ると今回の投下イベントは大成功と言って良いだろう。……まあ、本来は〈UBM〉が多く〈マスター〉を打ち倒して、それによって彼等の発奮を促す予定だったのだがな。地球の〈マスター〉達は期待以上の逸材が多い様だ」

「まー、〈マスター〉達が強い分はいんじゃない？ 僕らの“目的”にはさー」

それを見ていたジャバウオックは満足気であり、チェシヤは懸念が悉く外れてくれたお陰で安心した雰囲気だった。

「ふむ、とすると今回のデータを参考にして今後のイベントで使用するモンスターの強度は上方修正した方がいいか。……例えばハロ

ワイン用の〈UBM〉として「カボチャ化」の特殊な状態異常を他者に与えて操るモンスターとか。それと今後はクイーンの〈UBM〉判定はキツめにしよう」

「……影響が広範に及ぶイベントの〈UBM〉はティアンへの被害が少ないヤツにしてねー。……後、クイーンにはもうちよつと優しくしてあげて」

……そんな会話をしてから彼等は各々が〈Infinite Dendrogram〉で為すべき作業へと戻って行ったのだった。

掲示板回・宣伝とか

□??地球 とある掲示板



〔クエスト中に〕〈Infinite Dendrogram〉アル
ター王国モンスター情報スレ36 〔〈UBM〉が!〕

1:名無しのへマスター〉「sage」:2043/7/25(土)

このスレはVRMMO〈Infinite Dendrogram〉
に於けるアルター王国のモンスター情報を書き込むスレです

モンスターの目撃情報・生態系・疑問点・〈UBM〉の事などご自由
に

荒らしはスルー推奨

・

・

・

510:名無しのへマスター〉「sage」:2043/7/25(土)

それで? なんかサウダ山道でのクエスト中に〈UBM〉と遭遇し
たんだって?

511:名無しのへマスター〉「sage」:2043/7/25(土)

確か【墓標迷宮探索許可証】が入手出来るクエストだったな

俺も申し込んだんだが定員で受けられなかったんだよなあ

……くそう、神造ダンジョンとか行ってみたいのに!

512・名無しの〈マスター〉「sage」：2043/7/25（土）
　　〓〓510

そうなんだよ！　せっかくクエストに参加出来たのに現れやがって！

〈UBM〉とは初遭遇だったから特典武具ゲットのチャンス！

……だと思って飛び出したら速攻でぶった斬られたし

513・名無しの〈マスター〉「sage」：2043/7/25（土）
　　迂闊に前に出て来るから！

……真面目な話、格上に無策特効とか自殺行為では？

514・名無しの〈マスター〉「sage」：2043/7/25（土）
　　で？　その〈UBM〉はどんな奴だったの？

話のタネにするから情報早よ

515・名無しの〈マスター〉「sage」：2043/7/25（土）
　　〈UBM〉の情報は希少……特典武具欲しさにみんな黙るから

516・名無しの〈マスター〉「sage」：2043/7/25（土）
　　でも、クエスト中だから騎士沢山いたしもう討伐されているのでは？

517・名無しの〈マスター〉「sage」：2043/7/25（土）
　　〓〓514

【魔刃戦鬼　ゴブゾード】って言う大剣持ったマッチョゴブリンだった

それと配下のゴブリンを百匹ぐらい引き連れてた

後、俺の〈エンブリオ〉の攻撃を当てたけどノーダメージ……自信あったのに

518・名無しの〈マスター〉「sage」：2043/7/25（土）

一応勝算はあったけど〈UBM〉の理不尽防御スキルには意味がなかった感じが

519・名無しの〈マスター〉「[sage](#)」:2043/7/25 (土)

あー、俺も大量の影狼に群がられてモグモグされたからなあ

攻撃力高いアームズ持っても使えなきや意味ないって事がよく分かった

520・名無しの〈マスター〉「[sage](#)」:2043/7/25 (土)

>>>516

俺がデスペナ食らった後も騎士達は残っていたがその後どうなったかは分からん

あーあ、折角美人の騎士さんとパーティー組めていい感じだったのに

521・名無しのwiki編集部「[sage](#)」:2043/7/25

(土)

そんな皆さんにご朗報です!

なんとサウダ山道に出て来た〈UBM〉の情報がwikiに追加されました!

詳しくはこちらをチェック! <http://○○○○○○○○>

522・名無しの〈マスター〉「[sage](#)」:2043/7/25 (土)

ナニイ!??

523・名無しの〈マスター〉「[sage](#)」:2043/7/25 (土)

知っているのか編集部!?!?

524・名無しの〈マスター〉「[sage](#)」:2043/7/25 (土)

宣伝乙

525・名無しの「マスター」[sage]:2043/7/25(土)
随分と情報をあげるのが早いな、もしかしてクエに参加してたのか？

526・名無しのwiki編集部[sage]:2043/7/25(土)

>>525

Yes!!! 編集部戦闘班がクエスト中に遭遇して戦闘も行いましたよ！

騎士達や他の「マスター」と強力して撃破に成功しました！

MVPは他の「マスター」達が獲得しましたがね

527・名無しの「マスター」[sage]:2043/7/25(土)
なあこの「ヴァルシオン」って何だ？ 俺が見たのは「ゴブゾード」ってヤツなんだけど

後、「クインバース」って一体？

528・名無しのwiki編集部[sage]:2043/7/25(土)

【ゴブゾード】の正体は自分を持った【ゴ布林・キング】を操った【ヴァルシオン】

【クインバース】はサウダ山道で起きたゴ布林異常発生の原因

詳しくはwikiに載ってるのでそちらをどうぞ

529・名無しの「マスター」[sage]:2043/7/25(土)
wikiの宣伝必死すぎwww

530・名無しのwiki編集部[sage]:2043/7/25(土)

私達はwikiの充実とサイトの閲覧数を稼ぐ為にデンドロやってるので

後、配信サイトでの再生数と広告収入

531：名無しの〈マスター〉「sage」：2043／7／25（土）
世知辛い……

532：名無しの〈マスター〉「sage」：2043／7／25（土）
〈UBM〉の情報や行動は載ってるけど特典武具は名前しか載ってないけど

MVP取れなかったからか？

533：名無しの〈マスター〉「sage」：2043／7／25（土）
頑張つてちゃんと載せろよー

534：名無しのwiki編集部「sage」：2043／7／25（土）
〈〉〈〉532

私達はいくまでwikiを作っているので個人情報は余り載せないスタイルです

主に汎用的なデータを主体に載せていくのがクランの方針なので
……個人情報載せるとコメント欄とかデンドロでの活動とかが酷い事になりかねないし

535：名無しの〈マスター〉「sage」：2043／7／25（土）
MVPの名前すら書いてないからな
まあ、自分のプレイヤーネームが勝手にwikiに書かれていたらちよつと嫌だが

536：名無しの〈マスター〉「sage」：2043／7／25（土）
無闇やたらと個人情報を拡散しようとする連中は余り良い印象を持たれないだろうしな

537：名無しのwiki編集部「sage」：2043/7/25
(土)

>>535

リアルとデンドロを股にかけている以上はその辺りの線引きはキツチリしよう

……と言うのが各国の編集部オーナー達が話し合って決めたルールになりますから

538：名無しのへマスター「sage」：2043/7/25 (土)
ここモンスタースレんだけどいつのまにかwiki編集部宣伝
になってるんだが

539：名無しのへマスター「sage」：2043/7/25 (土)

まあ、そういった宣伝は専門のスレとかでやるべきだな

……と言うわけで話を戻す為にへUBMとの戦闘について語って

♡

540：名無しのへマスター「sage」：2043/7/25 (土)
wikiにはへUBM自体の情報は載っていてもその戦闘経過と
かは載って無いからな

541：名無しのwiki編集部「sage」：2043/7/25

(土)

>>539

まあいいでしょう……じゃあまずは「ヴァルシオン」から

クエスト中に別のパーティーがゴブリンに襲われていると騎士さんが連絡を受けて私達が援軍に

↓「ヴァルシオン」持ちゴブリンキングを相性の良いマスターがタ
イマンで押さえ込みつつ他のメンバーで周りのゴブリンを相手に

↓そこで持っている剣が怪しいと言う意見が出たので手の空いて
いる者で総攻撃して剣を手放させる事に

↓ゴブリンキングの動きを封じ【ヴァルシオン】をどうにか手放させて最後はMVP取った人が最大火力で焼き尽くす

……とこんな感じでした。私もキングの拘束に参加したよ

542・名無しのへマスター↓「sage」：2043/7/25（土）
成る程……って、あのゴブリンをタイマンで押さえ込んだヤツがいのん!!?

543・名無しのへマスター↓「sage」：2043/7/25（土）
やっぱへUBM↓相手に今のへマスター↓じゃタイマンでは無理……
そう思っていた時期が俺にもありました

544・名無しのへマスター↓「sage」：2043/7/25（土）
でも、結局は集団で戦っているんだしソロで挑むのは無謀って事に
変わらないんじゃないか

545・名無しのwiki編纂部「sage」：2043/7/25
（土）

じゃあ次【クインバース】ね

ゴブリン増殖事件の黒幕をうちのクランメンバーのスキルで探し出して超級職の騎士さんを案内する

↓その騎士でも倒しきれなかったのでそこにいたへマスター↓の一人が自分のスキルを使って【クインバース】を倒す作戦を提案

↓「私が人間砲弾になればいいんだよ！」

↓撃破

以上です

546・名無しのへマスター↓「sage」：2043/7/25（土）
成る程、人間砲弾……みんな!!?

547・名無しのへマスター↓「sage」：2043/7/25（土）

どういう……ことだ……!??

548・名無しの〈マスター〉「sage」:2043/7/25 (土)
まるで意味が分からんぞ!

549・名無しのwiki編集部「sage」:2043/7/25
(土)

私達もその作戦には参加出来なかったので詳細は分からないんで
す

何でも自分自身を音速の数倍の速度で「クインバース」に投げ飛ば
して貰ったとか

550・名無しの〈マスター〉「sage」:2043/7/25 (土)
〈UBM〉を倒すにはそこまでしななければならないのか……

551・名無しの〈マスター〉「sage」:2043/7/25 (土)
そいつガンギまつててヤバイ

俺鳥系モンスターに上空からスカイダイビング(強制)された事
あったんだけどめっちゃ怖かったんだが

552・名無しのwiki編集部「sage」:2043/7/25
(土)

作戦を聞いたその場の人間達も殆どがドン引きでした

……ただその人のパーティーメンバーと超級職の騎士さんは平然
としてたけどね

553・名無しの〈マスター〉「sage」:2043/7/25 (土)
デンドロはシグルイなり……



「カネはどうか」へ Infinite Dendrogram 生産スレ37 「モノはギリギリ」

1：名無しの「マスター」 「sage」：2043/7/26 (日)

このスレはVRMMO へ Infinite Dendrogram における生産関連のスレです

書き込みは自由ですが情報漏洩は自己責任で

荒らしはスルー推奨

・
・
・

78：名無しの錬金術師「sage」：2043/7/26 (日)

と、言うわけでアルター王国に克蘭 へプロデューズ・ビルド 結成！

及び、王都アルテアにその店舗を構える事に成功したぞ！

79：名無しの「マスター」 「sage」：2043/7/26 (日)

パチパチー (拍手)

80：名無しの「マスター」 「sage」：2043/7/26 (日)

おめでとー

81：名無しの「マスター」 「sage」：2043/7/26 (日)

おめでとうだねえ……しかし克蘭は兎も角、よく店舗まで建てられたものだねえ

土地も建物もそれなりに高く付く筈なんだけど

82：名無しの〈マスター〉「sage」：2043／7／26（日）
確かに、王都って事は土地代も高いだろうにどうやったんだ？

83：名無しの錬金術師「sage」：2043／7／26（日）

〓〓81〓〓82

うむ、うちのクランメンバーの〈エンブリオ〉に特殊な素材を作れるヤツがいたからな

それをダシにして生産ギルドの偉い人にコネを作つて人が居なくなつた安い店舗を譲つて貰つた

……ローンを組む羽目になつたし店舗も小さくて表通りから離れているが

84：名無しの〈マスター〉「sage」：2043／7／26（日）

世知辛い……

85：名無しの〈マスター〉「sage」：2043／7／26（日）

まあ自分の店を持てたのは大きな一歩だと思うねえ

その偉い人的には〈マスター〉が使えるかどうかの試金石を兼ねてる気がするけど

86：名無しの〈マスター〉「sage」：2043／7／26（日）

というか人が居なくなつた安い店舗って前は誰が居たんだけ？

87：名無しの錬金術師「sage」：2043／7／26（日）

〓〓85

ご明察、向こうもこつちを試してる雰囲気があつたからそれで正解だと思う

利益を出してくれるならよし、そうでなくても異邦人の〈マスター〉なら後腐れは無いつて感じかな

〓〓86

前も何かの店をやったらしいけど、その一家全員が自殺したらしいよ

だから値段は超安かった。

88：名無しのへマスター「sage」：2043/7/26（日）
事故物件じゃねえか!!!

89：名無しのへマスター「sage」：2043/7/26（日）
確かに後腐れは無さそうだねえ
それじゃあティアンは来ないだろうけど

90：名無しの錬金術師「sage」：2043/7/26（日）
まあ自分達が生産作業出来る場所が出来たのがこの店舗を得て最大のメリットだな
ティアン相手だとそもそも現在のへマスターの信用度的に難しいし

しばらくは特殊素材をその偉い人に卸すかまだ低レベルのへマスター相手に地道にやってくよ

91：名無しのへマスター「sage」：2043/7/26（日）
でもデンドロって幽霊も普通にいるんだよなあ……
その事をバラしたのは失敗じゃね？

92：名無しのへマスター「sage」：2043/7/26（日）
……流石にもうちよつと準備期間を置いた方が良かったんじゃ

93：名無しのへマスター「sage」：2043/7/26（日）
いやあ、ティアンは兎も角へマスターなら気にしないかネタで訪れる人もいるだろうしねえ

ほら、悪名は無名に勝るってヤツ？

94：名無しの〈マスター〉「sage」：2043/7/26（日）
まあ有名にならねばどうしようもない業界だからな

95：名無しの錬金術士「sage」：2043/7/26（日）

〈93

まあそんな感じ、しばらくは王国初の生産クランとそのネタで宣伝して行こうと思っている

……勿論、軌道に乗って資金を稼げたらちゃんとした店舗を買いつもりだが

ところで他にはクラン作ったヤツとかは居ないのか？

96：名無しの研究者「sage」：2043/7/26（日）

こつちはまだだねえ、モンスター生産関係は中々ニツチな業界だからやってる人も少ないから

でも〈エンブリオ〉の宣伝でティアンとのコネ作りは上手くいきそうだよお

後、意見言うから分かりやすい様にそつちを真似てコテハン変えておいたよお

97：名無しの船大工「sage」：2043/7/26（日）

俺は同志達と共に貿易船団と渡りを付ける事に成功した
クラン設立ももうすぐだろう

これですよやく長年の夢だったリアル大和建造の第一歩が……

98：名無しの鍛冶師「sage」：2043/7/26（日）

天地の鍛冶師さん達はまず腕を見せてみる的な事から始まるのが多いかな

……〈エンブリオ〉頼みで自分の腕が伴ってないためつちや駄目出しされるけど

99：名無しの〈マスター〉「sage」：2043/7/26（日）

はえー、みんながんばってるなー……私は未だにモンスター狩りで
もう完全に戦闘職だよ

レジエンダリアは狩りがかなりやり難いから大変だし

生産クラン作ったなら初心者への援助とか無いの？

100：名無しの鍛冶師「sage」：2043／7／26（日）

>>99

（そんな事をする金銭的余裕は）ありません

101：名無しの船大工「sage」：2043／7／26（日）

こちらが援助をするメリットを提示せよ

102：名無しの研究者「sage」：2043／7／26（日）

生産に有用なへエンブリオを^レ持っているなら相性の良いクランに
自分売り込むのもアリかもねえ

採用されるかは知らないけど

103：名無しの錬金術師「sage」：2043／7／26（日）

クランに入りたいなら面接してへエンブリオ^レの能力と人格次第で
採用する事もあるかな

……こつちも店が出来たばかりで余裕がある訳じゃ無いから誰で
もとは行かないが

104：名無しのへマスター^レ「sage」：2043／7／26（日）

ですよねーやっぱ地道にやってくしかないか

……俺の夢である最強のハイレグビキニアーマーを作る為にな!!!

105：名無しの錬金術師「sage」：2043／7／26（日）

前言撤回、来んな

106：名無しの船大工「sage」：2043／7／26（日）

レジエンダリアンえ……

107 : 名無しの研究者「sage」 : 2043 / 7 / 26 (日)
まあ、レジエンダリアンだしねえ……

第3章 王都アルテアでのアレコレ

〈墓標迷宮〉へGO！

□王都アルテア 【剛戦棍士】^{ストロング・メイスマン} ミカ・ウイステリア

「さて、いざ行かん神造ダンジョン〈墓標迷宮〉！ 音速の数倍で投げ飛ばされるなどの凄まじい苦勞の果てに手に入れた【墓標迷宮探索許可証】を今こそ活用する所だよ！」

「辛く厳しい戦いの果てに獲得したアイテムですからね。大事に使いましよう」

「実際、〈UBM〉二体と戦ったからねー」

「……本来は精々十万里ルぐらいのアイテム何だがな、この【許可証】。……これ一枚手に入れるのにここまでドラマチックな事になるとは」

そんな感じで、私達^{三兄妹+ミメちゃん}何時ものメンバーは手に入れた【許可証】を早速活用すべく、アルター王国・王都アルテアにある神造ダンジョン〈墓標迷宮〉へと向かっています……あれだけ苦勞して手に入れたんだからしっかりと活用して元を取らないとね。

それに私は漸く転職条件を満たして就く事が出来た戦棍士系統上級職【剛戦棍士】のレベル上げもしないと行けないし、お兄ちゃんもとある理由でレベリングを急がないといけないし。

「まあ、あのクエストでは苦勞した分、高額のリルの初めとした報酬はたんまりと貰ったからね。……それに特典武具や〈エンブリオ〉の進化とかいい事もあったし」

「うん！ 僕も第四形態になれたしね！」

「……と言うか、あの戦いが終わってから私達三人の〈エンブリオ〉が全て第四形態に進化しましたから。あの戦いで経験値的な何かを得たのでしょうか？」

「さあ？ 〈エンブリオ〉の進化に関してはよく分からんから何とも言えんな」

そう、あのクエストを達成し終えた翌日、私達がデンドロにログインするとそれぞれの〈エンブリオ〉が第四形態に進化していたのだ

……まあ、ログアウト前にミメちゃんがなんかダルそうにしてた（彼女は進化前にちよつと気怠い気分になるらしい）ので、そうじゃないかとは思ってたけど。

……ちなみに私の【ギガース】はいつも通り《バリアブレイカー》のレベル上昇とステ補正・装備性能の強化だけだったから、ちよつと損した気分。

「まあ、第三形態以前までの進化時とは比べ物にならないぐらいに強化はされてるけど。具体的にはHP・STR・END・AGIの補正がAになってたりしたしね。……確か第四形態からはへ上級エンブリオって呼ばれて能力が大幅に上昇するんだっけ？」

「そうらしいな。アット曰く、ギデオンに居る【猫神】^{ザ・リンクス}トム・キャットトというへマスターからの証言らしいが。……他にも上級になると“必殺スキル”というへエンブリオの名前を冠するスキルを覚えるとか」

「確か数年前から決闘王者をやっているらしいへマスターでしたね。……もろに運営側の人間ですかね？」

「だよなー。まあ別に私達は決闘王者を目指す予定はないから別に良いんだけど……ちなみに以前ちよつと調べた所、この世界の伝説に出て来る有名へマスターってその殆どがキャット姓で【猫神】のジョブに就いてるみたい。」

「……この運営って妙な所で雑だよな。チュートリアルとか……人手が足りないのかな？」

「……まあ、それはそれとしてミメも進化に際してスキルこそ増えませんでしたけど五万強ぐらいまでに上昇したMPを筆頭に融合時のステータスがそこそ上昇しましたし。更にスキルが強化、及びデメリットのいくつかが解除されたので大分戦いやすくなったのです」

「僕の名前も【模倣天女 ミメーシス】に変わって、TYPEもメイデンwithチャリオツ・ガードナーになったしね！ ……後は衣装もなんか追加されたけど、変じゃないかな？」

「大丈夫、凄い似合ってるよそのコート」

「元の素材がいいからな、そういう衣装を着ても違和感はないだろう」

ミメちゃんが私とお兄ちゃんに新衣装を褒められて照れてる。可愛い！ ……前までのミメちゃんの衣装は半袖とハーフパンツというさっぱりとした感じだったんだけど、進化した際に白を基調とした可愛いデザインで長袖ロングコートを上羽織る様になったんだよ。

外見的にも進化して名前が付いた「天女」の文字にぴったりだね！ ……でも、何で乗り物でもないのにTYPEにチャリオッツが付いたんだろう？

……と、そんな会話をしていたら突如お兄ちゃんが肩を落として溜息をついた。

「しかし、お前達は良いよなあ、進化してパワーアップしてさあ。……俺はむしろ第四形態になって折角必殺スキルとやらを覚えたのに何故か弱体化したからなあ……」

「別に弱くなった訳ではないのでは？ ……ただちよつと兄様のジョブを枠拡張する必殺スキルが現在のところ意味ないだけで」

「まあちよつと進化する間が悪かったよなあ」

お兄ちゃんの「エンブリオ」〔百芸万職 ルー〕の必殺スキル《我は万の職能に通ず》は自身が就く事が出来るジョブの数を下級職20個、上級職15個、合計2500レベル分だけ増やす事が出来るパッシブスキルである。

……元々就ける500レベル分のジョブを合わせて今のお兄ちゃんの最大合計レベルは3000に届くので、超級職を除けば基本的に500までしかジョブレベルをあげられないこのデンドロに於いては非常に強力な「必殺」の名に恥じないスキルなのだが……。

「『ジョブ枠拡張』とか言うデンドロのゲームシステムに喧嘩を売ってる効果だからか相応のデメリットがあるんだよなあ……具体的に『就いているジョブ系統の超級職への転職不可』と『全ステータス補正マイナス50%』と言うね。……超級職に関しては目処が立たない以上どうでも良いんだが、正直全ステ常時半減はキツイ……」

「最終的にレベルが六倍になるんだし、ステ半減でも別に良いよね！
って感じかな」

「ステータス補正マイナスなんてあるんですね。私の補正はゼロのままですが」

「スキルのデメリットとしてならそういうのもあるみたいだよ」

そういう訳で、今のお兄ちゃんは進化前と比べてステータスが大幅にダウンしているのであった……一応、進化によって獲得経験値が＋400%になるなど強化された部分もちゃんとある模様。

なので、この〈墓標迷宮〉でさっさとレベルを上げてステータスをどうかしようとしているらしい。他と比べてステータスが半減しているなら他人の倍レベルを上げれば良い理屈だね。

「それにお兄ちゃんは『ヴァルシオン』があるんだしステータスはある程度どうにかなるでしょう。……私の『クインバース』は色々とアレだし。主にデザインが」

「ああ……確かに中々ファンキーなデザインですよね」

「でも性能は普通に強いだろう。俺の『ヴァルシオン』は合計レベル分のステータス上昇だから、他のステと比べて数値が多いHP・MP・SPの上昇に不安があるし……特に俺は魔法系だからMPが少ないのが痛い。他の装備で補ってはいるが」

ちなみに私が入手した特典武具「鬼身腰帯 クインバース」のデザインは正面に生前の「クインバース」に似たゴブリンの顔を模したエムブレムがあり、左右にこれまたゴブリンの頭部を模したキーホルダー的な物が付いているという見た目が物凄くファンキーでパンクでアレな感じのベルトなのである。

……まあ、能力はSP＋50%のステ補正を初めとして、10秒毎にSPを1%ずつ回復するパッシブスキル《SP自動回復》と、SPを消費して自身に掛かった状態異常・デバフ効果を移し替えて治す事が出来るゴブリン頭キーホルダーを作る《インスタントエンパイア》と性能は強力なアクセサリなので装備するんだけどね。

「……しかし、能力だけじゃなくて外見もアジャストしてほしいね。お兄ちゃんの『ヴァルシオン』は土産物屋に売ってそうなオサレペンダントみたいな感じなのにどうしてこうなった」

「まあ、この手の剣型アクセサリって小学生ぐらいの時に買った記

憶があるな」

「あーよく道の駅とかで売ってますよね。……おっと、二人とも情報交換はここまでにしませうなのです」

「着いたみたいだよ〈墓標迷宮〉」

ミメちゃんの言葉通り前方に〈墓標迷宮〉の入り口に続く墓地が見えてきたので、私達は日課の情報交換を辞めてその墓地に入っていた……しばらく墓地を歩くと二人の騎士に守られた石造りの門が見えて来た。

……どうやらアレが〈墓標迷宮〉の入り口の様なので私達は騎士さんに【許可証】を見せる事にした。

「……確認しました。どうぞお通り下さい」

「ありがとうございますーすー！」

……さて、これから初めての神造ダンジョンアタックだね。張り切っている！



□〈墓標迷宮〉【紅蓮術師】パイロマンサーレント・ウイステリア

そんな訳で、今俺達は〈墓標迷宮〉地下五階に居た巨大な骨剣が付いた六本の腕、及び頭部の代わりに先端に骨剣が付いた骨の職種が付いた大型スケルトンであるボスモンスター【スカルレス・セブンハンド・カトルラス】との戦いを繰り広げていた。

……尚、道中の事は出て来るゾンビやスケルトン、レイスを片端から蹴散らすだけの作業だったので描写はカットである。強いて言うならミュウちゃんがゾンビを殴るのを嫌がって《波動拳》による遠距離攻撃に徹していたぐらいかな。

「はい加減にしつこいのです。骨もゾンビもそろそろ見飽きたので消えてください《インパクト・フィスト》！」

「さっさとくたばるが良いわこのデカブツ！ 《アンデッド砕き》！」

「お前も経験値になるんだよ！ ……《ヒート・ジャベリン》！」

????????????????

そして全員で容赦無くフルボッコにしています……確かにコイツは身体に付いた7本の骨剣で連続攻撃してくるそれなりに強いモンスターなんだが、うちの天災前衛二人にその程度の攻撃が当たる訳も無く攻撃の予備動作が大きく所を突かれて的確な反撃を食らってダメージを受けていた。

……そこに二人が与えたダメージで怯んだ隙に、後方に居る俺が【紅蓮術師】のレベルを上げて覚え直した火属性魔法を当てる事でHPをガリガリ削っているのだ。

「ソンビと違って骨なら殴っても汚れないので楽で良いのです《真撃》

《正拳突き》！」

「素手だと感触が気持ち悪いもんねー《攻撃纏装》！」

乱舞される7本の骨剣をあつさりと躲しながらミユウちゃんは

【カットラス】の足元まで接近して、そのまま【武闘家】の奥義《真

撃》——次に使用する格闘系アクティブスキルの効果を大幅に強化す

るスキル——とミメちゃんのスキルで強化した拳で相手の足を一本砕いて転倒させた。

「やれやれ、やはりMPが下がっているのが痛すぎるな。火力が出せ

……《詠唱》終了《ブレイズ・バースト》！」

『

それによって出来た隙に、俺が《詠唱》によって強化された豪炎の奔流を倒れた【カットラス】に撃ち込んでその腕を二本程吹き飛ばし

た……やっぱり威力が落ちてるよなあ。もっとレベルングしないと。

「っしや！ ナイス二人共！ ……これで終わりだよ《インパクト・

ストライク》！」

『

そうして死に体になって倒れ伏した【カットラス】にミカが飛び乗

りその胴体部にステータス補正特化の【ギガス】の進化と上級職

になった事を合わせて更に上昇したSTRによる一撃を叩き込んで

トドメを刺した。

……今回はレベリング重視で俺の《長き腕》をオンにしていた為

「カトラス」はアイテムを落とさなかったが、階層ボスを倒した際に
出て来る追加の宝箱は普通に入手出来た。

「それで宝箱の中身は……人数分の【エレベータージエム】と換金アイ
テムか。時化てるね」

「まあまあ姉様、今回はレベリング重視という方針なので良いでしょ
う。私の【武闘家】もだいたいレベルが上がりましたし」

「それで地下六階への階段と情報通りなら地上に繋がっているワープ
ポータルが出てきたけど、予定通り先に進む感じでいいか？」

事前の話し合いでしばらくは〈墓標迷宮〉で経験値稼ぎマラソンを
する予定だから……地下五階までのゾンビやスケルトンは大した
アイテムは落とさないと獲得経験値は悪くないし、まだ〈マスター〉
で【許可証】を持つてる人は少ないから狩り場がブッティングする事
もないのも良い。

「そうだねー、ここまで大した消耗もしていないし。……それに次の
地下六階からは植物型エレメンタルがポップするらしいから、火属性
魔法が使えるお兄ちゃんならカモでしょう」

「これまでのゾンビ達も片っ端から焼き尽くしていましたからね。
……お陰で匂いが酷かったです」

「あー確かに……必殺スキルのお陰でジョブ枠増えたとアンデッド対
策に【司祭】^{ブリスト}でも取るかな」

ウチの妹二人が減多にダメージを貰わないから後回しにしていた
回復スキルだが、以前の戦いの事もあるし就いておいても良いかもし
れないな……そんな会話をしながら俺達は地下六階へと続く階段を
降りていったのだった。

緑の迷宮

□〈墓標迷宮〉地下六階 【紅蓮術師】バイロマンサー レント・ウイステリア

さて、地下六階に降りてきた俺達の目にまず飛び込んできたのは鬱蒼とした木々と草花だった……と言つても内部がジャングルになっている訳ではなく、基本的な構造はこれまでの迷宮と同じで壁や床や天井に様々な植物が生えている感じである。

……事前に調べた情報によると高価な薬草などが生えていたりする場合もある為、採取師系のジョブを取っていれば思わぬ臨時収入が手に入る事もあるとか。

「最も生えているのは無害な植物だけではないがな……《魔物索敵》〈フレイムアロー〉」

「そうみたいだねー。《ハードストライク》！」

『KYAAAAA!?!』

索敵スキルに反応のあった位置に生えていた植物へ俺が炎の矢を叩き込む……すると無害な植物に擬態していた「ミミックリー・ポイズンプラント」が炎に巻かれてその正体を表しながら消し炭になる。

また、ミカがその辺に生えていた木をぶっ叩くと、同じ様に擬態していた「ミミックリートレント」が奇声を上げながら正体を現してそのまま砕け散った。

……この様に擬態能力持ちの植物系モンスターが周辺の植物に紛れている事があるので、何らかの探知スキルが無ければ痛い目を見る事もあるのがこの階層の特徴でもあるのだ。

『『『KYAAAAA!?!』』』

「おや、毒ガス……いえ、毒の粉ですかね。ミメ、《転位》でお願いします。《波動拳》！」

『オツケー。《エフェクト・ミラーリング転位模倣》！』

そして俺とミカが擬態モンスターを駆除している間に現れた五体の【ポイズン・リトルトレント】はミュウちゃん達が対処していた……今もトレント達が広範囲にばら撒いた“どくのこな”的な攻撃に対して、それらを受けても平然としているミュウちゃんが拳からの衝撃

波をその効果範囲外から当てる事でダメージを与えていく。

……とはいえ、狭い通路に五体ものトレントが毒の粉をばら撒いた所為で、その効果範囲が一気に広がってそのままミュウちゃんを飲み込んだ。

「……やはり自分達には自分で出す【毒】に対して耐性があるのですね。《発勁》！」

『KYAAAAAAAA!』

……だが、事前に敵対対象一体の状態異常・バフデバフをコピーする《転位模倣》を使い、持っていた耐性のお陰で【毒】になっていないトレントの状態を自分に貼り付けていたミュウちゃんに毒の粉は効かなかった。

そのまま彼女は一体のトレントに掌底を放ってその樹体を内側から弾けとばさせるのを皮切りに、コピー対象のトレントを除いた敵を次々と仕留めていった。

「兄様。この毒の粉があると効果切れと共に【毒】状態になるのです」

「はいはい、吹き飛ばせばいいんだろう。《ウインドブロー》」

そんなミュウちゃんの要望で俺は《ウインドブロー》——一方方向に風を起こすだけの風属性基本魔法——によって彼女の周りに舞っていた毒の粉を吹き飛ばしておいた。

……それにより、もう【毒】になる事は無いと判断したミュウちゃんが最後に残ったコピー元のトレントに拳を叩き込んでトドメを刺したので、とりあえずここでの戦闘は終わったのだった。

「……ふう、しかし地下五階までと違って難易度が大幅に上がっていますね」

「どちらかと言えば大分「ダンジョンらしく」なって来たというべきだろう。……主にダンジョン内のトラップとか状態異常を使う敵とか」

「ああ成る程。確かに地下五階までは何も無い通路にただアンデッドが出て来るだけだったからね」

要するにこの《墓標迷宮》の地下五階まではチュートリアル的な感

じでダンジョンに慣れさせる為にただ通路にモンスターが配置されているだけの様だが、この地下六階の植物ゾーンからはトラップ的に配置されたモンスターや状態異常を駆使するモンスターなど本格的な「ダンジョン」といった趣になっているのだろう。

……尚、この階からはランダムでレアアイテムの入った宝箱なども配置されるらしいが、当然それがミミック的な罠である可能性も十分あるのでパーティーに「斥候」スカウト「盗賊」バンディットなどのジョブを納めた者がいた方がいいと「墓標迷宮」関係の情報にはあつたな。

「俺達の場合は俺が【斥候】をカンストしている事と、ミカの「直感」で罠を見破れるお陰で大分楽に攻略は出来てはいる。……ただ、状態異常やダメージの回復がアイテム頼りなのが気になるな。状態異常に関してはミュウちゃんの《転位模倣》とミカの【クインバース】ドうにかしているが、やはり次のジョブは【司祭】プリーストにするべきかな」「まあとりあえず行けるとこまで行けばいいんじゃない？ ヤバそうになったら撤退で」

「これからしばらく「墓標迷宮」経験値稼ぎマラソンをする予定ですし、今回は初回ですから気軽に行きましょう」

……ふむ、まあ確かにちよつと考え込み過ぎたかな。今後の予定は今後置いておいてダンジョン攻略に集中するか。



『『『CYAAAAAAA!』』』』

「ふむ【ウォーキング・マンイーター】の群れか。確か対人特攻系のスキルを持っていて人間をバリバリと食らうんだっか。……じゃけん、全部燃やしましょうね」《詠唱》終了《魔法多重発動》《フレイムアロー》

「おー燃えてる燃えてる。やっぱり「くさタイプ」には「ほのおわざ」だよね！……でも問題は周囲にある植物に延焼してる事なんだけど」

「あんまり燃やし過ぎるとこつちにも火の手が来ますし」

「だから威力が低くて効果範囲が狭い魔法を使ってるんだがな。……それに閉所で物を燃やし過ぎると酸欠状態になる可能性もこのゲームならありそうだ。連中は物理特化だからお前らなら問題無いだろうし行つてこい」

「はい」

◇

「……あ、ミュウちゃん。そこに擬態してるヤツがいるよ」

「ふむ、この木ですか。……《波動拳》！」

『KYAAAAAAAA!』

「またも【ミミックリントレント】か。……擬態系は隠蔽能力に特化している分だけステータスは低いから見破れるなら倒しやすい」

『大体直ぐにミカちゃんが見破っているから僕達にとってはカモだよね』

「まあねー。……つて、ミメちゃん融合状態で喋れたの？　そういえばさつきも喋っていた時があった様な……？」

「第四形態になったからか、或いは融合に慣れたからか最近私の口を使えばミメも話す事が出来るようになったのです」

「戦闘時は大体ミュウちゃんが喋つてばかりだから気付かなかつたな」

◇

「……む、索敵スキルだとその壁に違和感があるな。少し調べてみてくれ」

「え？　危険とかは感じないけど……あ、壁に生えていた植物を退けたら向こう側に隠し部屋があったね。しかも中には宝箱まで。……私の直感つて『危険』じゃないと反応が悪いからなあ」

「姉様の『直感』に反応が無いという事はミミックとかでは無いのでしようし、とりあえず開けてみれば？」

「そうだねー、んしよつと……ふむふむ、中身は一冊の本だね。……あ！ これって以前アイラさんに見せて貰った【適職診断力タログ】じゃない?」

「どうやらそうみたいだな。……そこそこの値段がする物だった筈だし、これからジョブビルドを考える必要のある俺達には使えるアイテムだから当たりだろうな」

『良かったね。僕達はドロップアイテムを経験値に変えてるからこういう宝箱は嬉しいかな』

「これぞダンジョンって感じになって来たね！ よーし、これからドンドン宝箱を見つけていこう!」

◇

「ぎゃ————っ!?? 宝箱の中から大量のスライムが!!!」

「出て来たのは【パラライズ・トラップスライム】か。……ダンジョンお約束の宝箱トラップだな」

「姉様の“直感”なら分かっていたのでは?」

「私の“直感”は危険かどうかは分かるけど中身が正確に分かる訳じゃないからね! それにコイツはワンパンで倒せるぐらいの雑魚だったから反応薄いし!」

『危険だと分かっていたら開けなければ良かったんじゃ……』

「私は宝箱の中身がミミックだと分かっているもとりあえず開けたくなるタイプだから。モンスターでも倒せばいいし」

「分かる分かる。“ちいさなメダル”とか落とすからな」

◇◇◇

□〈墓標迷宮〉地下十階 マーシャル・アーティスト【武闘家】ミュウ・ウイステリア

そんなこんなで私達は植物エリアのボス部屋前までやって来ていたのです……本当は植物エリアをある程度回ってから引き返す予定だったのですが、今回は色々とスムーズに進んだ事もあってついボス

部屋前まで来てしまったのです。

……ここまで来たのならボスを倒して地上に帰った方が早いし安全でしょうからね。

「さて、植物エリアのボスは亜竜級上位から純竜級下位ぐらいの植物モンスターいくつかの内の一体がランダムに出現だったな。確か物理型、魔法型、状態異常型、擬態型といったところだったか。……後、これで最後だから《長き腕》は切っておくか」

「どれが出るのでしょうかね？」

「ま、この扉を開けてみれば分かるでしょう。……たのもー！」

そんな軽い感じで扉を開けた私達の目に飛び込んで来たのは鬱蒼とした森林でした……。どうやらこのボス部屋は内部に多数の木々が生えている構造になっているようですね。

……そして、しばらく森の中を進むと前方に周りの木々とは明らかに様相の違う一本の巨大な黒い木が見えて来て、それは私達が近づくとゆっくりと動き出したのです。

『○○○○○○……』

「ふむ「ウォーロック・ブラックトレント」か。魔法型のボスだな。

……援護するから接近戦に持ち込め《フレイムアロー》！」

「オツケー。魔法使いは物理で殴るのが基本だね」

『ミュウ、向こうのステータスはENDだけがこつちより高いみたいだけど、スキルはどうする？』

「辞めておきましょう。……他の物理ステータスに大差ないのでは意味ないので、MPは別のところに使います。《気功闘法》！」

それが敵だと確定した時点で私は自分のステータスを強化した上で、姉様と共に兄様が放った炎の矢に続く形で「ブラックトレント」に別方向に散らばりつつ突っ込んで行きました。

……しかしMP特化の魔法攻撃型は物理ステータスをコピーする意味がないからミメとは相性悪いですね。一応ミメと融合している間は魔法耐性もやや上昇する（最近魔法ダメージを食らう様になって気付いた）みたいなので、色々スキルと技術を駆使すれば戦えますが。

『○○○○……』《Fire·Regist》……《Earthwall》

！』

「チツ、火耐性付加か……なら上から押し切る《ブレイズ・バースト》！」

「それに加えて土の壁で近接を妨害かな！……でも、それごと砕いて進めば問題ないよね！《ストライク》！」

「私は姉様の様に砕けないので普通に避けて進みましょう。以前動画で見たパルクルの要領で行けますね」

だが、向こうも流石にボスを張っていると云うべきか兄様の炎の矢を自身に炎への耐性を付与する事で防ぎ、私と姉様には足止めとして進行方向に土の壁を展開して対応してきました……まあ、姉様は「ギガス」のスキル効果で防御毎粉碎し、私はこのぐらいなら足を止めずに飛び越えられます。

……ちなみにパルクルの動画とかはちゃんと訓練を積んだ人がやってるものなので、普通の人は見よう見まねで真似してはいけません。私との約束です。

『……いや、誰にいつてるのさミュウ？』

「気にしないで下さい、ただの戯言です。……それより来ますよ」

『《Water Splash》！……《Stone Pile》！

……《Thorn Whio》！』

そうして防御魔法で守りを固めた「ブラックトレント」は即座に攻勢に転じて来た……まず兄様が放った豪炎に対して高压水流を撃ち放って押し返し、近づいてきて姉様には地面から複数の石の槍を生やして攻撃と足止めを同時に行い、私には棘が生えた蔓の鞭を差し向け捕縛しようとして来たのです。

……流石は魔法特化のボスだからか苛烈な魔法攻撃ですね。兄様と姉様はちゃんと回避はしているものの足が止まってしまっていますし、ここは攻撃が一番緩い私が行くしかないですね。

「ストックを！《スライスハンド》《旋風脚》《波動拳》……ミメ、撃つて！」

『《攻撃纏装》MP消費《ソーン・ウィップ》！』

『○○○○？？』

こちらに襲い掛かって来たイバラの鞭を私は手刀で切り飛ばすと同時に《攻撃纏装》にそれをストック、そして回し蹴りで明後日の方向に吹き飛ばしました……更にそのまま流れる様に体勢を整え拳からの衝撃波を「ブラックトレント」に放って牽制しつつ、ミメにストックした《ソーン・ウィップ》をそのまま使わせて相手をイバラの鞭で拘束します。

ミメが第四形態に進化してから使える様になった《攻撃纏装》の別パターンは結構良いですね。相手次第ですが応用が効くので戦い易くなったのです。

……ですが、相手は魔法特化のボスモンスター、身体が拘束されないようが関係無く魔法を行使してこちらを攻撃しようとして来ました。

『《Branch・Needle》!』

「おっと、枝で出来た針ですか。……数は多いですが威力は然程でも無いので、身体に当たるものだけを見切って弾けば良いですね」

『……百本近いの太い枝が高速で飛んで来るのにあっさり対応出来るものなんだねー』

まあ、確実に当てる為なのでしょうが攻撃範囲はかなり広く散つてるので、実際私に向かって来るのは三十本強といったところですからね。それに速度も亜音速に満たないので一番攻撃密度が低い場所に体を置いて、後は籠手で払えば良いだけです。

それに向こうは自分の身体から枝の針を飛ばしているのだから、注意が完全に私へ向いていますし……お陰で二人が攻める隙が出来たのです。

「ナイスだミュウちゃん……《魔法発動加速》《ヒート・ジャベリン》!」

「攻撃技は碎き難かったけどようやく近づけたよ。《ギガント・ストライク》!」

『OOOOOO!?!』

私が「ブラックトレント」の意識を引き付けている所で横合いから兄様が放った炎の槍が相手に突き刺さり、更に接近して来た姉様が全力で「ギガス」をその幹に叩きつけました……特に姉様の一撃が向

こうに齎したダメージは大きく、それなり高いHPとENDを持つ筈の樹体の一部を粉碎する程でした。

……どうやらヤツが魔法には強いですが物理攻撃には弱い様で、そのまま密着した姉様の連続攻撃によってその樹体をどんどんと碎かれて行きます。

『OOOOO《H a i l・S t o r m》!』

「おおっと! 氷の嵐かな? とりあえず下がるよ」

「む、鬱陶しいですね!」

ですが、向こうもこのまま終わるつもりは無いのか自身を中心として周辺に大きな霰交じりの嵐を巻き起こす事で姉様を引き剥がすと共に、近ずいていた私を攻撃して来たのです。

最も、姉様は得意の「直感」で事前にそれを察知して飛び退いていたのでダメージは少ないようで、私も距離は離れていたので霰を払いつつ一旦距離を取りました。

……この氷嵐を物理で突破するのは骨が折れそうですし、ここはさつきから準備している兄様に任せましょうか。

「……まあ、接近して来た対象への広域攻撃は鉄板だからな。だが効果範囲が広い分だけ威力は下がる以上、一点突破は十分可能だろう……《詠唱》終了《ヒート・ブラスター》!」

『OOOOOO!?!』

そこで後方に居た兄様が「ブラックトレント」に向けて大量のMPを注ぎ込んだ熱線を放ち、吹き荒れていた氷嵐を突破してその樹体の一部を焼き払いました……流石に戦略的な「読み」だと兄様は頼りになりますね。

「ここは更に追撃です、ミメ!」

『了解! 《攻撃纏装》MP消費《ヘイル・ストーム》!』

『OOOOOOOOOO!?!』

そこで更に私はミメに追撃として先程ストックした《ヘイルストーム》を使うように指示を出し、それに答えたミメが大量の霰交じりの暴風に指向性を持たせて「ブラックトレント」に叩きつけました……どうやらストックした技をそのまま使う場合、こうやってある程度の

効果範囲を変化させる事も出来る様ですね。要検証です。

……そしてこれらの攻撃が収まった所で再び姉様が接近していき
ました。

「あんまり時間を掛けたくないし、ここで決めさせて貰うよ！ 《イン
パクト・ストライク》！」

『○○○○○○!!』

そのまま姉様の全力の一撃が「ブラックトレント」に叩き込まれま
した……これまでの攻撃でダメージが蓄積されていた樹体は衝撃波
による内部ダメージを伴うその一撃に耐えられずへし折れました。

……このダメージがどうやら致命傷となった様でヤツは魔法運用
すらままなら無くなり、その後は私達にまともな抵抗も出来ずに倒さ
れて光の塵と成り果てました。

「ふいー、お疲れー。やっと地上に帰れるね。……後、出て来た【宝櫃】
と追加の宝箱の中身は何かな〜」

「……【宝櫃】の方は【魔導黒樹の杖・ネイティブ】と【エメンテリウ
ム】だな。……杖の方は俺が貰ってもいいか？」

「魔法系の兄様向けの装備ですし良いんじゃないでしょうか？ ……
宝箱の方は【エレベータージエム】と【救命のブローチ】ですね」

……そんな感じで戦利品を確かめた私達はボスを倒す事では出現し
たワープポータルに乗って地上へと帰還したのでした。

へプロデュース・ビルドへようこそ！

□王都アルテア 【司祭】^{フリースト} レント・ウイステリア

俺達三兄妹が初めてへ墓標迷宮へに潜ってからしばらく経ったある日の事、俺達は久しぶりに三人で王都を散策がてらとある場所に向かっていた。

ちなみにへ墓標迷宮へレベリングに関しては俺のリハビリに付き合ってくれた妹達もゾンビや植物と戦ったり、それにちよつと飽きた二人が別行動を取っていた間も俺は一人でアンデッドを焼き払ったりしていたお陰でどうか【紅蓮術師】^{パイロマンサー}をカンストさせて次のジョブにパーティでも個人でも腐らないだろう回復魔法を覚える【司祭】のジョブに就けたりしている。

……だが、流石の俺でもへ墓標迷宮へ上層部往復マラソンをデンド口内で数日も行くと飽きが来ていたし、ソロ行動の間放置していた妹達の機嫌がちよつと悪くなっていたので、こんな風に気晴らし件ご機嫌取りも兼ねて二人を連れ出したのだ。

「それで本当にこつちで合ってるのお兄ちゃん？ どんどん表通りから離れていくよね」

「アットから貰ったマップを見たらそう書いてあるしな……エドワードが作ったという克蘭のホームの位置は」

「確かへプロデュース・ビルド」という名前の生産克蘭でしたか」

「でも、こんな人気の無い場所にホームを建ててもあんまり売れなさそうだけど」

そして今向かっているのは俺のフレンドである【錬金術師】^{アルケミスト}エドワードがオーナーを務めているへプロデュース・ビルド」という克蘭のホームへと向かっている所である……先日、偶々アット・ウイキの奴と会った際に『なんかエドワードが克蘭作ったみたいだから冷やかしを兼ねて見に行ってみれば？』と言われて、その場所を教えるもらったのでせっかくだから行ってみる事にしたのだ。

「……でも、本当に道はこつちで会ってるの？ なんか物凄く入り組んでいるみたいだけど」

「ここら辺は昔の再開発とかで少し道が入り組んでいるという話らしいからな。……まあ、ちゃんとマップに位置情報は書いてあるしどうにか……あれ？ さっきの道を右だったか？」

「……兄様、本当に大丈夫何ですか？」

「利便性最悪過ぎない？」

「……ええいつ！ 聞く所によると、この辺りは昔に何か新しい商店街的なものを作ろうとして盛大に失敗したらしい区画だそうで、多くの店が閉まつてるし区画整理もお金の関係で遅々として進んで無いとかの所為で道がちよつと分かりにくいんだよな。

「……まあ、落ち着いてマップを読み解けば迷う程のものでも無いんだが面倒な事に変わりは無いのである……ふむふむ、成る程こつちの道だな。」

「……ん？ あつちに誰かいるな。こんな寂れた所で珍しい」

「お兄ちゃん、それは私達が言ってもブーメランだよ。……あれ？」

でもあの人達何処かで見た事が……」

「彼女達は以前のクエストでお会いしたエルザ・ウィンドベルとその〈エンブリオ〉の「ワルキューレ」達ですね。あのワルキューレ達は全員動きのクセが同じなので分かり易いのです。……後、一人知らない人もいますね」

いつも通りミュウちゃんがサラツと規格外な行動をしたので、とりあえず俺も《遠視》を使ってみると確かに向うにいるのはエルザさんと四人の「ワルキューレ」達、そしてあと一人知らない女性が居たな。……どうやら向こうもこちらに気付いた様なので、フレンドであるミカがちよつと声を掛けてみる事にした様だ。

「おーい！ エルザちゃん久しぶり！ ……という程でも無いけど。こんな寂れた所で何をしているの？」

「ああミカちゃん、【許可証】のクエスト以来ですね。……後、何をしているかとかはこちらの台詞でもあると思いますが……今日は友達のとターニヤが作ったクランに制作を頼んでいた装備が出来たみたいなので引き取りに行く所だったんです」

彼女がそう言ったら同行していた茶髪を三つ編みにした小柄な少

女の「ハマスター」が自分を呼ばれた事に気付いて前に出てきた。

「初めまして、克蘭〈プロデューズ・ビルド〉所属【紡績師】^{スピンワーカー}のターニャ・メリアムだよ。エルザとはリアフレなんだ。宜しくね！」

「^{ストロング・メイスマン}【剛戦棍士】のミカ・ウイステリアだよ。……って言うか〈プロデューズ・ビルド〉所属？ 私達もその克蘭のホームに行くつもりだったんだけど」

「そうだったんですか？」

何か意外な展開になって来たので、とりあえずお互いの自己紹介をしつつ詳しく話し合う事にした……どうやら話を聞いた所ターニャさんがエルザさんをようやく結成した自らの克蘭〈プロデューズ・ビルド〉に招待して、今はそのホームへと向かっているのだそうだ。「成る程ねー。レントさん達はエドワードが克蘭を作ったから訪ねに来たのか。……じゃあ一緒に行こうか、暫定ホームまで案内するよ」

「それは助かる。ここは道が少し入り組んでいて分かりずらかったからな」

そういう訳で俺達はターニャさんの案内で〈プロデューズ・ビルド〉の克蘭ホーム（なんか暫定らしい）に向かう事になったのだった……そして早速、ウチの妹達と彼女達は仲良くなった様で親しげに話し込んでいた。

「そう言えばエルザちゃん、よく見たら【ワルキューレ】の数が増えってるね？」

「はい、第四形態に進化したのもう一人、四女のフィーネが加わりました。ターニャ達に装備を作って貰ったお陰で大分戦力も強化されましたよ」

「紹介されたフィーネ。ジョブは【魔術師】^{メイジ}をやってる。宜しく」

そう言っただけでエルザさんに紹介されたのは緑髪の【ワルキューレ】でフィーネという名前らしい……よく見ると彼女や【ワルキューレ】達の装備も以前と比べて強化されている様で、どうやら彼女達も着実に強くなっている様だ。

「まあ、私達が色々な練習で作った失敗作を格安で提供したり、素材集

めの依頼の報酬で割引した装備を販売しただけなんだけどね」

「それでも全員分の装備を整える事すら苦勞していた私にとつては物凄く有り難かったですよ、ターニヤ。……【テイマー従魔師】って仲間の食費や装備に本当にお金がかかりますから……」

そんな事を話すエルザさんの背中は何処か煤けていた……ま、まあ、話を聞くと彼等はちゃんと生産系ギルドをしている様だな（目逸らし）

……しかしだとすると、どうしてホームがこんな分かり難い場所にあるんだ？ 生産物を販売するなら少し目立つ場所にした方が宣伝し易いのでは？ 少し聞いてみるか。

「と言うか、そもそも何故こんな寂れた所に克蘭ホームを作ったんだ？ 生産系克蘭ならもっと人通りの多い所でやった方が……」

「……今私達のお金で買える生産活動な住居がここにしか無かったですよ。開発が失敗した時に色々あったらしく、未だに買い手が付かなかったので凄く安かったです……」

……成る程、まだ克蘭が出来たばかりだから単純にお金を用意出来なかっただけか。デンドロが始まってからまだ半月程、内部時間でもようやく1カ月を過ぎた所だし仕方ないのかな。

……とまあ、和やかなムードで会話をしつつ俺達は裏通りを歩いて行っただった……アレ？ ここって地図にある所からちよつとズレている様な……。



「……はい！ そんな訳でちよつと迷った気もしたけど、ここが私達へプロデュース・ビルド」の暫定克蘭ホームになります！」

「まあ、道を一本間違えたただけだから大事には至らなかつたがな」

「道順が分かりにくいと言うより、どこも閉まったお店ばかりだから見分けが付き難いんだよね」

「そういう意味では、このへプロデュース・ビルド」のホームは目立っているから分かりやすいですね。看板とか結構洒落ていますし」

……そんな訳で、多少手間取ったが俺達はようやくへプロデューズ・ビルドへの暫定クランホームに到着した。

尚、この辺り一帯が寂れているからどれだけアレなホームかと思っただが外観は意外と綺麗にされており、更にへプロデューズ・ビルドの名前が彫られた木製看板やちよつとした布飾りや金属製の飾りなども付けられていたので、その部分だけならちゃんとしたお店に見えた。

「でしよでしよ！ 正直生産活動が出来れば良いな程度の気持ちで買った仮のクランホームで、お金が貯め終わったらちゃんとした物を買うつもりなんだけど……せつかく手に入れたんだから見た目ぐらいはどうかしよう」とメンバーみんなで頑張ったんだよね！」

「まあ確かに良いセンスしてるな。これなら期待出来そうか」

自分の作品を褒められたからか結構なハイテンションになったターニヤさんに連れられて俺達はへプロデューズ・ビルドへのクランホームに入ってしまった。

「おいエドワード！ あんたの客を連れてきたわよ！」

「なんだターニヤ、騒々しいな。……というか客つて……」

「久しぶりだなエドワード、客は俺だ。……今日は以前アットにお前がクランを作ったと聞いてちよつと寄つてみたんだよ」

「お邪魔します」

外観と同じ様にクランホームの中もちよつとした小物などが置かれていて意外と小綺麗にされており、きちんとホームとして気を使っているのが分かる。

……そして室内には作業台に向かいながら金属を弄っていたエドワードと、もう一人如何にも職人といった風情の男性へマスターが居た。

「あれ？ ゲンジ、`ワカバ`と`マジカ`は居ないの？」

「ああ、フレンドリストを確認してみたのじゃが二人はまだログインしておらん様じゃ」

「……とりあえずちよつと待てターニヤ、まずは事情を説明しろ」

エドワードのその言葉で一旦俺達はそれぞれの自己紹介をする事

になった……それによると、あちらの男性へマスターへはへプロデュー
ス・ビルドへの克蘭メンバーの一人である【鍛治師】のゲンジさん
だそうで、他にも二人程メンバーがいるみたいだが今日はログインし
ていないらしい。

「ほーん……つまりレントは友人のエドワードが克蘭を作ったと聞
いて見に来たんじゃな。……良い友人を持ったじゃないかエドワー
ド」

「まあ、別に例え冷やかしても来てくれるのは有難いが……はつきり
言つて、今俺達が提供できる物は何も無いからなあ。……今のへプロ
デュース・ビルドへは地道に資金繰りと生産スキルのレベルアップに
励んでいる時だし」

そう言つたエドワードは頭を抱えながら溜息を吐いていた……立
地条件は兎も角としてこんな立派な克蘭ホームがあるのに、随分と
テンションが低いな。

「自分で作つた生産物とかは売ってないのか？ クランホームがある
んだから店を開くとか」

「売る程の物が作れないんだよねー。……主に資金と素材とスキルレ
ベルとジョブレベルとその他諸々が足りないお陰で」

「足りない物が多過ぎー」

詳しく話を聞くと、彼等は克蘭を作つた後で自分達が使える生産
拠点を得る為にこのホームをちよつとした伝手を使って格安で買つ
たのだが、流石に無茶な買い物だった所為で克蘭の資金源はかなり
ピンチらしい。

更にアイテムや装備を作るにしても各々のレベルが低いので余り
良いものが作れず、今の所はへエンブリオへで作つた特殊素材を売つ
たり地道にジョブクエストをこなして資金稼ぎとレベリングを急い
でいるとの事。

「俺達で作つた素材を買つてくれる生産ギルドの人に『自分達で使え
る生産場所があつた方がいい』と言われてホームを買つたけど早まつ
たかなあ。……以前の持ち主が自殺したとか言う事故物件だつたつ
て言うからめっちゃ安かつたし……」

「それは事故物件の処理とへマスター」の囲い込みを同時にやる策略では？（名推理）」

「それは私もそう思ったけど他にウチの特殊素材を高値で買ってくれる人は居なかったからねー。少なくとも商取引に関してはへマスター」相手でも公平にやってくれるし」

「このホームも裏に空き地があるお陰でワシやワカバのキャツスルが大分使いやすくなったし、事故物件である事と立地条件以外は悪い所ではないぞ」

そこは生産クランのホームとして致命傷では？ ……と俺は少し思ったが黙っておこう。商売の為のコネと生産場所が確保出来たのなら悪い事だけでは無いだろうと思うし。多分。

「ちなみに商売をやっていない訳じゃないぞ。素材の買い取りとか個人レベルで装備の受注とかは可能な限り行なっている。…ああ、装備と言えばエルザ嬢には渡す物があつたな」

「うむ、以前の素材集めの報酬の残りである盾はもう出来ているぞ。……これだな【ウッドメタル・カイトシールド】じゃ」

そう言つてゲンジはアイテムボックスから木目の様に模様がある金属製の盾を取り出した……確かエルザさんはここに報酬を受け取りに来たと言っていたから、おそらくそれなのだろう。

「ありがとうございます。これまで使っていたアリアの盾は大分ボロボロになっていましたから」

「……これは良い盾ですね。軽くて振り回しやすい」

その盾を「ワルキューレ」の一人であるアリアが受け取つて腕に装備して軽く振り回している……うん、話を聞いていたらちよつと不安だったがちやんと生産クランとして活動出来ているみたいだな。

「しかし、その盾は変わった模様だな。どうやって作つたんだ？」

「ああ、これは俺のへエンブリオ」で木材を金属化したら木目みたいな模様が付いた金属が出来るんだよ。それでその金属を使って作つたから盾もこうなったんだ。……折角ホームに来てくれたのだし実際にやってみせようか。宣伝にもなるしな」

そうしてエドワードがアイテムボックスから取り出したのは一枚

の木版……《鑑定眼》で見ると【リトルトレントの木版】と言う特に珍しくないアイテムだった。

……板や枝とかは植物系下位モンスターを倒すと高確率でドロップするアイテムで、俺も《長き腕》がオフの間に《墓標迷宮》の植物ゾーンを回っていたら大量に手に入ったしな。

「そんでこれを俺の非金属アイテムを金属化させるスキル《ファンタジー・メタル・ワーキング》を使うと……こんな風に【リトルトレントの金属板】に変化する訳」

「おおすごい！ メタリックになったね」

「ほー、確かに金属になっているな」

エドワードが手に持った木版に対してスキルを使うと、その木版の木目や色合いなどはそのままに金属の光沢が付いた……成る程ね、そうして作った物を素材に装備を作っているのか。

「ちなみにエドワードのスキルはある程度元の素材の特性を残したまま金属化するからの。この【リトルトレントの金属板】なら木材の様に軽量で柔軟性がある上に金属としての硬度もあつた具合じゃ。……最も元が木材であるからか普通の金属と比べると硬度が低く、融点もかなり低くなつておる様じゃが」

「それに特殊な素材だから既存の生産【レシピ】は基本的に使えないからなあ。……今は素材そのものを売りに出すのが俺達のメイン活動になつてるし」

「ちなみに私も同じ様な事が出来るよー。ちよつと貸してねー。出ておいで【クロートー】」

そう言ったターニヤさんがエドワードから金属板を受け取ると、左手にある《繭》の様な紋章から体長1メートルはありそうな一匹の蚕を呼び出した。

『KYUNUNUN』

「この子が私の《エンブリオ》TYPEガードナー【天系紡蚕 クロートー】だよ。……それじゃあクロートー、この金属板を食べて《天系紡ぎ》をお願いね」

更にターニヤさんはその蚕——クロートーに手に持った【リトルト

レントの金属板」を差し出すと、クロートーは目の前にある金属板をバリバリと食べ始めた……そうして食べている間にターニヤさんはアイテムボックスから一本の棒——鑑定してみると【糸巻き棒】と出た——を取り出した。

……そしてクロートーが金属板を食べ終わるとその口から金属の様な光沢の糸を吐き出し始め、それをターニヤさんは手に持った【糸巻き棒】で巻き取って行く。

「いーとーまきまき、いーとーまきまきつと……はい！　これで【リトルレントの金属糸】とか言う、名前からして訳の分からないアイテムが完成しました！　……私の【クロートー】は食べた物の性質をそのままにして糸に出来るのですよ」

「ウチのメイン商品その二だな。……まあ、今はこんな感じで特殊な素材を売って資金を稼いでいるが、いずれはちゃんとした装備とかアイテムを作って店を開くのが俺達の目標だな」

……今日は生産系へマスターも色々大変だという事が分かりました（小並感）……そんな感じで俺達が彼等の生産活動を見て感心していると、突然ターニヤさんがこんな提案をして来た。

「そうだ！　ミカちゃん達、私達とフレンド登録しようよ！　生産関係でやってほしい事があれば報酬と力量次第で力になるよ」

「まあ、俺達も固定客は喉から手が出る程ほしいな。……せつかくここまで来てくれたんだ、逃がさんぞ……」

「ちよつと怖いぞエドワード。……別にフレンド登録ぐらいいは構わないさ」

「生産系へマスターに繋がりを作っておけば後々いい事がありそうない気がするしね」

そんな訳で俺達はお互いにフレンド登録を行ったのだった……まあ、ミカも言っていたが生産系へマスターに伝手を作っておくのは今後装備を整える必要がある時に役立ちそうだからな。あの盾とか二人のへエンブリオを見た限りでは今後に期待が持てそうだし。

……その後は俺が持っていた植物系モンスターのドロップアイテムを彼等に売ったり（残りのクランメンバーで活躍出来る人がいるら

しい)、彼等が試験的に作った物を見せて貰ったりした。

「……まあ、次にお前達が来る時にはもう少しちゃんとしたアイテムを見せるさ」

「今度は何か買って行ってねー!」

「その時までにはワシらも腕を上げておこう」

そんな感じで俺達の〈プロデューズ・ビルド〉初訪問は終わったのだった……ウチの妹達も気晴らしは出来たし、生産クランへの伝手も出来たし今日は中々良い1日だったな。

野良パーティーを組んでみた件

□王都アルテア・冒険者ギルド ストロング・メイスマン【剛戦棍士】ミカ・ウイステリア

「さてさて、お兄ちゃんは〈墓標迷宮〉でアンデッド狩りに行ったし、私達はどうしようかなミュウちゃん」

「とりあえず何かクエストでも受ければいいんじゃないでしょうか……ここ最近は何プロデュース・ビルド〉の所に行った時以外はそればっかですが」

「最近、お兄さんずっとレベリングしてるもんね」

本日も私はデンドロにログインしてから、レベリングに行ったお兄ちゃんと別れてミュウちゃんとミメちゃんの三人で冒険者ギルドにやって来ていました……お兄ちゃん最近レベリングばっかだからなあ。

まあ、必殺スキルのデメリットでステータスが下がった所為で私達の足を引っ張るのが嫌だと思っっているのは分かるんだけどね。デンドロで一番効率的なレベリング方法は単独で大量の雑魚を殲滅する事だし。

「ですが、私達三人だけだと狩りは安定しないですよ。兄様の支援が無いと亜竜級はともかく純竜級以上になると相性次第では不味い（負けるとは言つてない）でしょう」

「お兄ちゃんって基本的に出来ない事が無いって人だから。どんな状況でも活躍出来るんだよねー。……本人はそれを割り切ってはいるが、納得はしてない感じだけど」

「複雑な兄妹関係……なのかな？」

基本的には凄くいいお兄ちゃんなんだけど、どうも私達みたいな規格外な才能を持っていない事に引け目を感じているというか……というか、お兄ちゃんもあらゆる方面に於いて十二分に「天才」と呼べる才能を持っているんだけどねー。

……現実では色々あったらしいから完全に割り切っているけど、せめてゲームぐらいは私達の足を引っ張りたく無いと思ってる節があるんだよね、お兄ちゃん。

「……そもそも現実では私達の才能なんてなんの役にも立たないのですが……」

「お兄ちゃんなら将来の就職先とか困らないだろうしねー。……私達の才能が活かせる場所なんてこのデンドロの中ぐらいだし……」

「……うーん、これは根が深い問題なのかな？」

お兄ちゃんの『兄としての意地』的なものと、私達の『自分の才能に対するコンプレックス』が複雑に絡み合っている感じだからねー……まあ、それで何か私達の関係が悪くなるとか、そういう問題が起きるといっても無いんだけど。

……今も要するにただステータスが低くなったお兄ちゃんが、それを補う為に私達をほっぽり出してレベリングに励みまくっているだけだし。

「……はい！ やめやめ！ これ以上この話題を続けるとテンション下がるだけだし、さっさと何かクエストを探そうか！」

「そうですね。……何か手頃な依頼があれば良いんですが」

「とりあえずカタログを見てみようか」

そういう訳で私達は冒険者ギルドのクエストカタログを開いて何か丁度いいクエストが無いかを探す事に……ふむむ、戦闘型の私達でやるとなるとやっぱり討伐系のクエストが妥当かな。

えーと【討伐——【バイオレンス・フアング・ボア】の群れ 難易度：五】王都北部に目撃情報あり、通商の邪魔になる可能性があるの
で討伐願う……血の匂いに惹かれて人を襲うモンスターだから報酬は結構高めだけど、群れで行動するから何パーティーかでの受注推奨か……。

他には王都西での【ブレイズ・デミドラグウルフ】率いる【ブレイズ・ウルフ】の討伐とか、王都東での【メール・デミドラゴン】の群れ討伐の依頼とかもあるね。

「……むむ、何故かモンスター群れ討伐の依頼ばかりだね。こう言うクエストって複数パーティー前提のヤツばかりだから、お兄ちゃんを欠いた私達二人じゃちよつとキツイかも」

「群れの討伐の依頼が多いというよりは、少数のモンスター討伐の依

頼が少なくなっているみたいですね。……これはみんな考える事は同じという事でしようか？」

あー、個人や少数で出来る討伐クエストはレベルが低くグループや固定パーティーとかが余り作られていない今のへマスター達には人気だね。私達もお兄ちゃんが居ない間に少人数で受けられるクエストを何度もやってるし、採取やお使いみたいな地味なクエストよりも討伐系の方が人気だろうしねー。

……しかし、こうなると選択肢は不得手なのを覚悟して少人数で受けられる採取かお使いのクエストを受けるか、或いは……。

「複数パーティー前提のクエストを野良のパーティーを組んで受けるかな？ ……でも、私達って身内だけの固定パーティーばかり受けてたからなあ。野良パーティーはVRMMOのお約束らしいけどどうしたものか」

「でも、同じ事を考える人も多いのか、この冒険者ギルド内でもへマスターによる野良パーティーの募集は結構やっていますよ」

「さつきから呼び掛けとかはそこら中でやってるもんね」

確かにミメちゃんの言う通り冒険者ギルドのあちこちで色々なへマスター達が『回復が出来る人が居ませんか』とか『バイオレンス・フランク・ボア』の群れの討伐クエストの参加者募集ーとか言ったりするからね。

……別に私達は野良パーティーを組みたくないって訳でも、他人と会話するのが怖いコミュ障って訳でもないから何処かに入った方が良いかもね。

「それじゃあちよつと野良パーティーを探して組んでみようか。私達は二人とも近接型だから前衛を募集してる所とかで良いかな」

「そうですね」

そういう訳で私達は冒険者ギルドで組める野良パーティーを探してみる事になったのでした……んだけど、探してみるとこれがなかなか見つからないんだよね。何故か前衛が既に埋まっている所が多い。

……どうも今日は野良パーティーを募集しているへマスターは前

衛系が多かったみたいで、募集対象が後衛系や回復系に偏っているみたい。

「あー、魔法も回復も出来るお兄ちゃんがいればなあ」

「……兄様がいると多分いつも通りに身内パーティーで済ませられると思いますよ」

「いつそ何処か顔見知りとか居ないかなあ」

まあ、そんな都合のいい事は早々「誰かく、ウチらと一緒にパーティー組まんく」……と思っていたら、向こうから聞き覚えのある声があったので思わずそちらを向くと……。

「……あかんわー。いくら声掛けても誰も野良パーティー組んでくれんわ。〈月世の会〉のクランオーナー件その教主様が声掛けとるのに何でやー?」

「怪しげな現実逃避型宗教の教主が声を掛けているからに決まってるだろJK。後本人が凄く胡散臭いし」

「酷ない!? あおやん!」

「まあ、ティアンと違って〈マスター〉には〈月世の会〉の事を知っている人が多いからね」

「でも、私達だけだと前衛がいないからパーティーのバランスが悪いわよ。永仕郎君から月夜ちゃんの面倒を見てほしいとは言われてるけど、私レベル低いし……」

そこに居たのは以前の【許可証】入手クエストで一緒に戦った事のあるクラン〈月世の会〉のオーナー扶桑月夜さんと、確かその〈エンブリオ〉であるメイデンの「カグヤ」さん、そしてその月夜さんに毒舌をかましている白髪赤眼の少女〈マスター〉と黒髪黒目の女性〈マスター〉の四人だった。

どうやら、その三人も野良パーティーを募集している様だったがどうにも上手くいって居ないらしいね……上手くいってない者同士丁度いいかもしれないしちよつと声を掛けてみようかな。

「はーい、月夜さん久しぶりー。野良パーティーを募集してるの?」

「あ、確かミカちゃんともミュウちゃんやったね。実はそうなんよー。……今日は影やんもリアルの用事でログイン出来へんから、クエスト

受ける為に野良パーティーを募集しとつたんやけど何故か誰も来てくれへんのやー」

「他の克蘭のメンバーも今日はそれぞれ別のクエストを受けにいったから誰も予定が合わなくて。色々と間が悪かったのよね」

「……月夜ちゃん、この人達は知り合い？」

「……オーナーに克蘭の信者以外で親しげな知り合いが居たなんて……っ（驚愕）」

そうして挨拶をしていると初対面の女性へマスターへから質問が入ったので、とりあえず私達はお互いに自己紹介をする事にした。

「私は【剛戦棍士】のミカ・ウイステリアだよ。月夜さんとは以前にクエストで一緒になった事があるんだ」

「その妹の【魔拳士】マジックボクサーミュウ・ウイステリアとそのへエンブリオのミメなのです」

「これはご丁寧にどうも……私は一応へ月世の会へ克蘭メンバーの【魔術師】メイジ日向葵ひなたあおいと言う。よろしく」

「同じくへ月世の会へ克蘭メンバーの【付与術師】エンチャンター小鳥遊雲雀たかなしひばりと言います。よろしくね」

「んで、知つとるとは思うけどウチはへ月世の会へ克蘭オーナーの【司教】ビショップ扶桑月夜。そんでそのへエンブリオのカグヤヤ」

「……ふむふむ、白髪赤眼の毒舌系少女へマスターへが日向葵ちゃん、黒髪黒目の温和そうな女性へマスターへが小鳥遊雲雀さんだね。覚えたよ。」

「それじゃあ本題だけど野良パーティーを募集しているなら私達と組まない？ こつちも今はお兄ちゃんが別行動中で前衛二人しか居ないから後衛が欲しいんだよね」

「よっしゃ、強力な前衛キタ、これで勝つる！ 勿論オツケーやで！」
「それじゃあ今日は宜しく願います。……ただ、私は最近始めたばかりだから、大学があるにも関わらず廃人プレイしているオーナーと違ってレベルはまだ低いのでそこは注意して欲しい」

「私もログイン時間が余り取れなかった所為でレベルは低いのよね」
ふむ、確かにミュウちゃんが《看破》した所によると二人ともレベ

ルは30前後だったね……まあ、月夜さんと私達ならクエストを選べばどうにかなるだろうし大丈夫でしょう。

……強いて気をつける事があるとすればお兄ちゃんみたいに放っておいても問題無い訳じゃ無さそうだから、ちゃんと後衛を守る様に意識しておくぐらいかな。

「それでパーティーを組んだ訳だけど受けるクエストはどうする？」

「せやねー。……ミカやん達が協力してくれるなら多少は難易度の高いクエストでも大丈夫やろうし……この王都西での『ブレイズ・デミドラグウルフ』の群れ討伐とかがいいんちゃう？」

「……こいつらは火炎ブレスによる遠距離攻撃が主体ですから後衛の皆さんを守るのが難しくなると思いますが」

「それに関しては私のへエンブリオが火属性吸収を持っているから大丈夫。オーナーはともかく雲雀さんを庇うぐらいはどうか出来ると思う」

ふーん、成る程ね。月夜さんは葵ちゃんのへエンブリオ混みで提案してみたんだね……それはそれとしてさつきから月夜さんに対する葵ちゃんの発言が超塩いね。仲が悪いって訳でも無くて気安く接しているだけみたいだけど。

「それじゃあコレにしようか。……まあ、ボスも亜竜級ぐらいだしどうとでもなるでしょう」

「亜竜級ぐらいまでならカグヤの効果範囲内やしねー。んじゃクエスト受注して西門いこかー」

そんな訳で私達女性オンリーな野良パーティーはクエスト「へウエズ海道」近辺で目撃された「ブレイズ・デミドラグウルフ」率いる群れの討伐 難易度：五を受けて、一路西に向かう事になったのだった。



□「へウエズ海道」【魔拳士】ミュウ・ウイステリア

「『ブーステッド・パーティー・アジリティ』！」

「ありがとう雲雀さん！ 《ウィールド・メイス》！」

「助かるのです。《フレイム・フィスト》《カウンター・ブロー》！」

『『KYAAAAAAAA!?!』』

雲雀さんの掛けてくれたパーティー全体AGIバフの支援を受けつつ、姉様は額に生えたツノを向けて突っ込んで来た二体の「ホーンラビット」を「ギガース」を振り回して挽肉にし、私は「魔拳士」のスキル《フレイム・フィスト》を使って拳に炎を纏わせつつ同じく突っ込んできた「ホーンラビット」にカウンターを入れて倒しました。

……あれから西門を出て《ウエズ海道》にやって来た私達は月夜さんの『とりあえず適当なモンスターを相手にして連携を確認せえへん？』という提案を受けて、その辺りにいた「ホーンラビット」の群れと戦い……これを一方的に殲滅していました。

「……《ファイアーボール》……うん、実に楽勝。……というか、前衛姉妹二人とカグヤさんが強すぎる件」

「せやろー。やっぱりあの二人を引き入れたウチの眼に狂いは無かったな！」

『まあ、この程度のモンスターだと此の《月面徐算結界》が普通に効くからねえ』

そもそも前衛系上級職である私と姉様にとって「ホーンラビット」程度の下級モンスターは敵では有りませんし、そこに月夜さんとその《エンブリオ》である「カグヤ」が展開する「夜」——強力な広域デバフスキル《月面徐算結界》が掛かるので「ホーンラビット」達のステータスを見るも無残な事になってますし。

……まあ、まだ余り戦闘経験のない葵ちゃんも雲雀さんの動きの把握やパーティー内での各々のポジションでの連携確認は出来たので目的は達成されましたが。

「じゃあこれで終わりだね！ 《ギガント・ストライク》！」

『KYAAAAAAAA!?!』

「……うわお、ミンチより酷えや」

そうして最後に残った群れのボス「グレーターホーンラビット」を姉様が叩き潰した事によって戦闘は終了しました……後、敵がミンチ

より酷い事になるのはこのデンドロに於いて良くある事なので慣れて下さい。特にリアル視点では。

……その後、私達は〈ウエズ海道〉を西に進んで目的である「ブレイズ・デミドラグウルフ」を探す事にしました。探知系スキル持ちが居ないのが不安ですが、そこはもうしようがないので自分達の運を信じる事になるでしょう。

「うんうん、このパーティーはバランスも取れとるし良え感じやない？ クランメンバーが捕まらんかった時はどうしようかと思っただけど、これでクエストもどうにかかなりそうや」

「クランホームを建てるためには資金を稼がなければいけませんからね」

「ん？ 月夜さん達はホームを買う気なんだ？」

そういう感じで私達はのんびりと喋りながら海道沿いを歩いて行きます……勿論、周辺の警戒は怠っていませんが。

「そうやよー。〈月世の会〉の宣伝も兼ねて王都の目立つ所にてっかい屋敷を建てるのが今の目標やね」

「ただし、王都の一等地は物凄く高い。……そのお陰でクランメンバー全員がクエストを受けまくった所為で今回捕まらなかつたんだけどね。王都だけだと限界があるから他の街に行ったメンバーも多いし」

「まあ、メンバーの皆さんがこの世界を各々で満喫しているのも理由ですけどね。……その中でクランホームを建てる為のお金稼ぎをしている感じですね」

……以前の〈プロデューサー・ビルド〉さんの時も思いましたが、現在の〈マスター〉が作ったクランというのは何処も大変なんですねえ……。

「……んん？ これは……」

「どうしたん？ ミカヤん」

そんな時に姉様が虚空を眺めながら訝しげな表情を浮かべました……あ、これは何時もの『直感』が起動しましたね。他の人達が居ますしちよつとフオローしましょうか。

「姉様、何かに気が付いたんですか？」

「あーうん。海道沿いのあっち側に何か居た気がするんだけど、もしかしたら目的の相手かもしれないね」

「……ふうん、ウチは気が付かんかったけど……まあ、今の所手掛かり無いし探してみよか」

そうして割と自然な感じで姉様が示した方向を調査する事が出来たのです……示した方向が殆ど進行方向と同じ海道沿いだった事と他に手掛かりがない事もあって特に揉め事が起きる事も無かったですし。

……そして姉様が示した方向に行く事しばらく、前方から何やら人の叫び声や獣の唸り声、そして何か燃えるような匂いがしたので、もしやと思った私達は急いで何かが起こっている場所まで向かって行きました。

『『GARURURURURURURURU!!!』』

「クソオ！ こいつら!?？」

「まずい！ 馬車に火が！」

「いやああああ!!！」

そこで見たものは数台の馬車が「ブレイズ・ウルフ」の大群に取り囲まれて、そのまま火炎ブレスなどによって焼かれようとしている光景でした……むむ、目撃情報よりも数が多い気がするのです。

「いけない！ 早く助けないと!?？」

「はいちよつと待ち、雲雀さん。本当に助けたいなら闇雲に突っ込んでらあかん。……ウチらのはあの馬車を助けようと思うけど、二人はどうする？」

それを見て慌てて飛び出そうとして雲雀さんの襟元をふん掴んで止めた月夜さんが私達に向けてそう聞いてきました……勿論、私達の答えは決まっています。

「当然助けるのです。……それに元々あの連中を倒すのがクエストでしたから、少数や戦力が多くなっても関係ないでしょう」

「それに見殺しにすると気分が悪いからねー。……私達二人が突っ込んで敵を攪乱するから、その隙に月夜さん達は馬車の人達の護衛と治

療を頼めるかな？」

「分かったわ。後、雲雀さんは二人にバフをよろしゅう」

「はい……《ブーステッド・パーティー・ストレンジス》《ブーステッド・パーティー・エンデュランス》《ブーステッド・パーティー・アジリティ》！」

そうしてバフを受けた私と姉様は馬車を襲う【ブレイズ・ウルフ】達を逆に襲いに行ったのでした……この人数で守るのは難しいですし、先に敵を殲滅する方がいいでしょうからね。

る《火炎ブレス》を全方位から放つのが彼等の必勝法であるのだ。

これは一発一発の《火炎ブレス》の威力は然程ではなく戦闘職に就いていれば耐えられる程度なので、全方位から立て続けに放つてダメージは蓄積させると共に炎によって逃げ場を無くし、それで獲物が弱って逃げられなくなったら接近戦でトドメを刺す安全重視の戦術でもある。

『……GUUU……』

そして更に群れのボスである【ブレイズ・ドラグウルフ】は配下に経験を積ませる為と不測の事態に対応する為に、後方で指示を取りながら待機して戦局を見渡すという徹底ぶりである。

……そんな群れのボスとして相応しい冷静さと判断力を兼ね備えていたからこそ、ボスは真つ先にこちらに向かつてくる強者の気配を察知出来たのだが。

『ツ!?? ……GUAAAAAAAA!!』

「あら、気付かれたか。……てゆーか、名前が【ブレイズ・ドラグウルフ】になっているんだけど。情報と違うじゃん」

「進化したのでしょうか? ……兎に角、あのボスっぽいのは私が相手をしますので、姉様は馬車の方へ救援を。《ウォーター・フィスト》」
『アイツがこつちより明確に高いのはSTRとAGIだからその二つで行くよ。ターゲット【ブレイズ・ドラグウルフ】』アヒリテイ・ミラーリング《天威模倣》STR2489、AGI4156!』

そこに向かつて来たのは馬車を助けに全速力で走って来たミカ・ウイステリアとミュウ・ウイステリアの二人であった……彼女達は即座に戦局を把握するとミュウの方は自己強化をしつつ新たな敵を倒そうと向かって来た【ブレイズ・ドラグウルフ】の迎撃に移った。

……そしてミカの方はその間に馬車の方へ向かい、馬車を取り囲む【ブレイズ・ウルフ】達の背後から襲い掛かった。

「はい、お邪魔します! 《ウィールド・メイス》!」

『GAAUUU!?!』

ミカはそのまま両手に持った【ギガス】を大きく振り回して二体の【ブレイズ・ウルフ】を葬り去った……が、襲撃者に気が付いた【ブ

レイズ・ウルフ」達は直ぐに群れの何割かをミカに差し向けて、得意の《火炎プレス》を一斉に放ってきたのだ。

『『G A A A A A A A A A A』』』

「ええいっ！ 対応が早いね。よく鍛えられてるのかな!?? 《ブラスト・スウィング》！」

そうして放たれた火炎をミカはスキルによって振るった【ギガス】から発生させた衝撃波によって相殺しつつ、その余波で怯んだ【ブレイズ・ウルフ】を一体一体殴り潰していった。

……だが、敵の数が多し事と向こうが動き回りながら《火炎プレス》による遠距離攻撃を主体で戦闘している事、そしてミカが馬車に向かう致命的な攻撃をフォローしている事などからかなりの苦戦を強いられていた。

「き、君は一体!??」

「通りすがりの《マスター》です！ クエストのターゲットが馬車襲つてたんで救援に来ました！ ……っていうか、数が多いし素早いからやり難い！ A G I ^速 _さが足りない！」

『『『G A U A A A A A A A A A A A A A A A A!!』』』

物理的なステータス補正に特化した【ギガス】のお陰で純竜級モンスターに迫る身体能力を持つミカだったが、攻撃手段はメイスによる打撃のみであるので徹底した遠隔からの集団戦を仕掛けてくる【ブレイズ・ウルフ】達には攻めあぐねていた。

……援軍は来たがこのままでは押し切られると馬車の人間達が思った時、突如として辺りが「夜」に包まれた。

「なっ、なんだっ!?? 暗くなっただぞ」

「どうなっている!??」

「あ、やっとなってきたんだね、遅いよ月夜さん」

「いやーごめんごめん。……向こうでボス狼とタイマン張つとるミュウちゃんの邪魔にならんよう迂回したら思ったより時間がかかったわ」

「魔法系ジョブだからA G Iも低いしね」

そこに現れたのはミカ達とパーティーを組んでいた《月世の会》

オーナー扶桑月夜とそのクランメンバーである日向葵、小鳥遊雲雀の三名だった。

『『『GUUUUUU……!?!?』』』』

「うん、カグヤの《月面徐算結界》によるデバフは聞いとるみたいやね。……ウチと雲雀さんは負傷者を治療するから、そいつらの相手は頼むわ」

「オツケー、これなら何とかなる！」

そして「夜」——広域デバフスキル《月面徐算結界》の中に入ってしまった「ブレイズ・ウルフ」達はそのステータスを大きく減じさせて動きを鈍らせてしまい、そこを突いたミカが「ギガス」で次々と狼達を殴り倒していった。

「了解。サンシャイン・アブソーブシヨン《日天吸蓄》解放《ウインドカッター》！」

「感謝する！ これならば！」

「動きが鈍ってるなら俺たちでも！」

『『『GYAAAAA!?!?』』』』

更に葵が自身の《エンブリオ》「日天鎧皮 カルナ」に蓄積されていた光熱のエネルギーを大量の魔力に変換する事で、風属性下位魔法の《ウインドカッター》を限界まで強化して極大な風の刃として放ち複数「ブレイズ・ウルフ」を両断する。また、護衛に付いていた他の冒険者達もコレを逆転のチャンスと見て「ブレイズ・ウルフ」達を攻撃していった。

……とはいえ「ブレイズ・ウルフ」達もやられっぱなしでは無く、何匹かのウルフが反撃として前に出ているのに魔法を準備して動けない葵に向かつて《火炎ブレス》を吐き出した。

『『『GAAAAA!?!?』』』』

「……おや、自分からエネルギーを充填してくれるとは優しいですね。……ではお返しです。《日天吸蓄》解放《ライトニング》！」

だが、その《火炎ブレス》は全て「カルナ」が《日天吸蓄》による光熱エネルギー吸収効果によって葵にエネルギーを与えるだけに終わり、反撃として放たれた強化された雷属性下位魔法である雷撃によってその狼達は一層された。

……その様に戦闘を得意とするメンバーが戦いを優勢に運んでい
る中、月夜達治療系の人間も負傷したティアン達を魔法やアイテムで
治していたのだが……。

「お父さんっ！ お父さんっ！」

「……いかん、この人もう事切れとる。損傷が酷すぎてウチのまだス
キルレベル低い回復魔法や蘇生魔法じゃ治せん」

最初に「ブレイズ・ドラグウルフ」のブレスを受けた御者は、肉体
の多くに【火傷】や【炭化】の状態異常を負う程のダメージを受けて
しまい手立ての甲斐無くHPがゼロになって事切れてしまったのだ
……その亡骸に縋り付く娘の泣き声が痛々しく響き渡り周りの人間
も思わず顔を伏せたが……。

「……うん、これはいいタイミングやな。……雲雀さん！」

「分かったわ。来なさい【アスケレピオス】……《パーフェクト・リザ
レクション》！」

その中でまだ希望を失っていない月夜は彼のHPがゼロになった
直後に雲雀を呼び、それに答えた彼女は左手にある「杖に巻き付いた
一匹の蛇」の紋章から同じ様な巻き付いた蛇の模様が描かれた杖――
自身へのエンブリオ《回生杖 アスケレピオス》を取り出し掲げス
キルを行使した。

……すると彼女の手にある【アスケレピオス】から光の粒子の様な
ものが溢れ出して事切れた御者を覆い、その身体に負った【火傷】や
【炭化】を含むあらゆる傷を直して彼を蘇生させたのだ……これが【ア
スケレピオス】唯一のスキル《パーフェクト・リザレクション》の効
果――死亡者をHP・状態異常含めての完全蘇生である。

「……ここは……」

「お父さんっ！」

「うんうん、損傷が激しかったから蘇生可能時間が不安やったんやけ
ど上手くいったよ良かったわ」

「そうね。……さて、まだ戦闘は続いているんだし援護ぐらいはしま
しょうか」

……そうして生き返った父親に抱き着く娘を見た彼女達は再び自

分達の戦いに戻っていったのだった。

◇

『GAUUUU!!』

「チツ、逃がしません。《波動拳》！」

所変わって《月面徐算結界》の外、そこでは展開された「夜」の危険性を察知して離脱しようとしている「ブレイズ・ドラグウルフ」と、それに対して拳から衝撃波を放ちつつ追撃しているミュウが激しい戦いを繰り広げていた。

……しかし「ドラグウルフ」が瞬間的にAGIを上昇させるスキルを持つていた事と、背後に追いつがるミュウに攻撃出来る火属性魔法を覚えていた事もあって結局は結界の外まで逃げられてしまったが。

『GAA!!』

「くっ！　また炎弾ですか。ブレスと比べて威力は低いですが全方位に撃てるのは厄介ですね。AGIは同じなので引き撃ちされると追いつけません」

『加速スキルもあるしね。……勿論、向こうが加速すればこっちも加速するんだけど、タイミングが完全に向こう持ちだからこっちにとつてはいきなりAGIが変動する形になるし』

敵対象とステータスを完全に同期させる《天威模倣》ではあるが、それ故にいきなり敵のステータスが大きく変動した場合には自分も同じ様に変動するので肉体の操作が付いていか無い恐れがあるデメリットにもなっているのだ。

まあ、ミュウの場合はその圧倒的な戦闘センスでステータスが大きく変わっても問題なく肉体を完全に制御するだけでなく、敵の動きが読めれば加速タイミングを計って逆用する事すら出来たりするが……それでも、単純に逃げる相手に追いつくのはAGIが同じにしなければ難しい。

……そして「ドラグウルフ」は結界から距離を取った所で即座に反転、追い縋っていたミュウを中心とした広範囲に向けて《ブレイズ・

ブレス」を吐き出した。

『G A A A A A A A A A!!』

「うげっブレスですか！ この範囲とタイミングではッ！ 《クロスガード》！」

そのブレスを回避し切れないと判断したミュウは咄嗟に《クロスガード》——腕を交差した構えを取る事でENDを二倍にするスキル——と腕に纏わせていた《ウォーター・フィスト》を使って炎によるダメージを抑えつつ、地面を転がって身体の炎を消しながら急いで範囲外へと離脱した。

『今のはストックしたよ！』

「分かりました！ ですが、やはり近づけなければどうにもなりませんね。……やってみますか《魔力放出》！」

そしてミュウは直ぐに体勢を整えると《魔力放出》——肉体の任意の部位から魔力による推進力を発生させるスキル——を使って加速しながら全速力でブレスを撃ち終わって隙が出来た【ドラグウルフ】に向けて突っ込んだ。

……《天威模倣》の影響を受けたステータスは他のバフ・デバフ効果を受けないが、この《魔力放出》の様にAGIを変えず単純に加速させるだけならば関係ない。

『G A ? ? ?』

「捉えました！ 《ソニックストレート》！」

そうして【ブレイズ・ドラグウルフ】を間合いに捉えたミュウはスキル込みの高速ストレートを相手の顔面に叩き込んだ……更に【マジックボクサー魔拳士】のスキル《ウォーター・フィスト》によって水属性の追加ダメージが発生した事で相手は大きく怯む。

……その好機を逃す事無くミュウは再び相手にブレスを撃たれない為にも、発生が早く発動後の隙も少ない格闘スキル特有の連続攻撃で攻め立てた。

「更に《正拳突き》！ 《旋風脚》！ 《スライスハンド》！ 《回し蹴り》！ 《発勁》！」

『G U U U U U …… G A A A A A A A A A!!』

だが、相手も為すがままに攻撃を受けている訳ではなく魔力が籠った掌底が腹に打ち込まれるのを無視して身体を捻り、そのままミュウを噛み砕こうと炎を纏った牙で喰らい付こうとした。

「……甘い《魔力放出》」

『GAU!?!?』

……が、ミュウは足の裏から魔力を放出して推進力にすると、噛みつきようとして来た相手の顔に手をつきながら前方へ一回転する様に飛び上がってその攻撃を回避した……そして、そのまま放出を続行して倒れ込みつつガラ空きの相手の背を蹴りつけたのだ。

『アタック・テスクチャ攻撃纏装』!』

「《踵落とし》!」

『G A A A A A A A A A A A!?!?』

ミメーシスの《攻撃纏装》にストックされた先程の《ブレイズ・ブレス》の炎と攻撃力を上乘せされた踵落としが背中に直撃した「ブレイズ・ドラグウルフ」は、その衝撃とダメージによって悶絶しながらよろめいた……が、火を使うが故に《火属性耐性》のスキルを持つていた為か直ぐに持ち直して再びミュウにブレスを吐こうとし……。

「……吐かせません《ブレイズ・フィスト》!」

『A G O G A A!?!?』

その寸前、効果が切れた《ウォーター・フィスト》の代わりにMPを目一杯籠めた《ブレイズ・フィスト》による強烈な冷気を纏わせたミュウの拳がその口の中に突っ込まれた……口内の極大の冷気は即座に気管までを凍結させてブレスを使用不可能にさせると共に、相手を呼吸困難にさせる。

……突然ブレスと呼吸を封じられた事で動揺した「ブレイズ・ドラグウルフ」は距離を取ろうとするも、呼吸困難と蓄積したダメージでよろめいてしまう。

「これで終わりです。《真撃》《ハンマーナックル》!」

『——ッ!?!?』

そんな致命的な隙をミュウが見逃す事は無く冷気が吹き荒れる両手を握りしめてスキルによる強化を掛けた上で「ブレイズ・ドラグウ

ルフ」の脳天に振り下ろし、その頭蓋を凍らせながら砕いて絶命させたのだった。

「……《フリーズ・フィスト》解除。……あ、魔力を大量に籠めた所為か腕がちよつと凍ってますね。ダメージはポーシヨンで回復出来る範囲ですが」

『それよりも馬車の方が心配だね、急いで戻ろうか』

そうして「ブレイズ・ドラグウルフ」が光の塵になったのを見届けたミュウ達はポーシヨンを飲みつつ出て来た【宝櫃】を回収して馬車の元へ向かったのだった。



□〈へウエズ街道〉

ストロング・メイスマン
【剛戦棍土】

ミカ・ウイステリア

「へマスター」の皆様、この度は我々の窮地を救って頂き本当にありがとうございました。このお礼は必ず」

「別に気にせんでええよー。クエストのターゲットが偶々馬車に襲われたから倒しただけやし。……でも、御礼なら今後もクランへ月世の会〈を〉ご贖員にー」

「ちやつかり布教してるし……」

「まあ、自分のクランを宣伝するのは普通の事ですし別にいいのでは？」

そんな訳でボスを倒されて有象無象となった狼達を全滅させてクエストを完了した私達は、助けた馬車に乗せてもらって王都へと帰還していました。

……幸い馬車のテイアン達は危ない人も居たけど死人は出なかったのは良かったね。お陰で色々感謝されたしとりあえず一安心つて所かな。

「成る程、では皆様は月夜殿がオーナーを務める〈月世の会〉というクランのメンバーだと」

「そうなんよー」はい、流れる様に嘘を言わない。私と雲雀さんはそうだけどミカちゃんとミュウちゃんは違うでしょ」……えー、あおやん

のいけずー。せっかく外堀から埋めていこうと思うたんにー」

「えーっと、申し訳ありませんが今の所クランに入る予定は無いので……」

「出来ればこの世界を旅して回るとかしてみたいし」

実は以前からお兄ちゃんとも相談してこのデンドロ世界の色々な場所を巡ってみようと計画してるんだよね……最も、今はこの世界で旅をするのに必要な実力を手に入れる為のレベル上げと資金稼ぎをしてる段階だから、本格的な旅行はまだ先の話だけだよ。

「んー、別に名前だけウチのクランに置いて後は自由行動でもええよ？　そうしとるメンバーも結構おるし」

「ウチの教義は『真なる魂の世界で自由を謳歌せよ』ですから、クランとしてメンバーを縛り付ける事は無いんですよ」

「……まあ、傍目から見れば胡散臭さ全開の宗教クランだけど、運営自体は割とまともやってるから」

「へー。……やっぱり今の所クランはいいかな。フレンド登録とかはオツケーだけど」

「まずはお友達から始めましょうなのです」

……そんなノリで私達は月夜さん達とフレンド登録を交換したりしつつ、短い王都までの馬車の旅を楽しんだのだった。

50になっていた……やっぱり下級職のレベルを上げるだけなら地下三階から四階辺りでアンデッドを乱獲するのが今の所一番効率的か。

地下六階で植物狩りでも良いんだが罨や不意打ちがあるから今の俺のソロでは事故の可能性があるし、地上に戻るのも「エレベータージエム」を使う必要があるからな。

……まだ余裕はあるし引き続き狩りを続行しても大丈夫そうだし、アレを使ってメインジョブを変えようか。

「……テレレレッツテレー！ 《ジョブチェンジロッド》〜！」

この一見ただの杖に見える《ジョブチェンジロッド》には、装備スキルとして自身が就いているメインジョブを変更出来る《ジョブチェンジ》が備わっているのだ〜……うん、この某有名青狸の真似はアイテムボックス四から物を取り出す時に一度やってみたかったんだだけです……。

ちなみに、これは以前【司祭】のジョブレベルを上げきった時にジョブ入れ替えの為に〈墓標迷宮〉から出ざるを得なかったので、レベルリング中でもメインジョブを変更出来るように〈マリイの雑貨屋〉で100万リル程で買ったやつ。お陰で手持ちが結構減ったよ。

……まあ、使い捨ての【ジョブクリスタル】でも10万はするし、この杖も本来なら300万近い値段がするんだけど『そもそもファイールドでジョブを変更する必要なんて滅多にないから使い捨てで十分じゃね？』と言う理由で売れ残っていたから安くしてくれたし。

「それじゃあさつさとメインジョブを変えますか。《ジョブチェンジ》

——【エクソシスト祓魔師】」

とりあえずアンデッド狩りの効率を更に上げる為に聖属性攻撃魔法と悪魔・アンデッドへの聖属性ダメージ及びスキル効果上昇特効パッシブスキル《エクソシズム》を覚える【祓魔師】へとメインジョブを変更した……今後の育成方針としてはドンドン下級職をカンストさせていくつもりだからな。

……本来なら上級職の方がステータスの伸びは良いんだが俺の場合必殺スキルの所為でステータスが半減しているし、装備している

るからどうしても使う場面が限定されてしまう
《イミテーション・プリューナク 仮想秘奥・神技昇華》しか無いのもキツイ……特に戦闘に使える固有スキルを持つ妹達と比べると。

「……ふむ、やはり今後は強力なスキルを覚える上級職も取っていった方がいいかな？ ……ただ転職条件を満たすのが面倒だからな。モンスター討伐条件なら亜竜級ぐらいならどうかソロで倒せる俺なら何とかなるんだが、ジョブクエストが条件になると時間が掛かるからな……」

一応、レベリングの合間にジョブクエストを受けたりもしているんだが、ジョブによっては面倒な転職条件があったりするからな……例えばこのアルター王国の目玉ジョブとも言える【パラディン 聖騎士】には「騎士団関係者からの推薦」が条件になってるから、その手のコネが無い〈マスター〉が転職するには時間を掛けてティアンの騎士から信頼を勝ち取る必要があるしな。

……俺が早期に【バイロマンサー 紅蓮術師】に転職出来たのも色々と運が良かったからだしな。まあジョブクエストは達成すれば経験値を貰えるから、今後はもう少し頻度を増やした方がいいか。

「特にこの王国の主要ジョブである騎士系統や司祭系統の上級職には、それぞれ騎士団や教会関係者の推薦が条件になってる事が多いからな。……じゃあ【司祭】のジョブクエストはこの前受けたし、今日は【騎士】のジョブクエストでも受けに行きますか」

……そうして俺は勘定を済ませてからジョブクエストを受けに騎士団の詰所まで行く事にしたのだった。



「さてと、どんなクエストがあるかね……」

そういう訳で特に何事も無く騎士団の詰所にやって来た俺は、そこに備え付けられた騎士系統ジョブクエストが乗ったカタログを眺めていた……このカタログは冒険者ギルドで使われている物と同じで現在受けられるクエストが分かるマジックアイテムで、他にも各専門

ギルドなどジョブクエストが受けられる場所にそれぞれ専用のヤツが置かれているのだ。

「騎士系統のクエストだと一番ポピュラーなのは騎士団の手伝いとしてのモンスター討伐とかか。後は街中の見回りの手伝いや合同訓練などか……どうも騎士団員と合同でやるのが多いみたいだな」

まあ、ジョブクエストは冒険者ギルドで受けるクエストと違ってそのジョブ系統でなければ出来ない専門的なヤツばかりだから……モンスターや犯罪者を相手に戦って国や人を守る公務員——というのがこの国の騎士の仕事内容である以上はジョブクエストもそういう内容になるんだろう。

……魔石職人系統なら【ジエム】作り、司祭系統なら治療とか悪霊払いといった具合にジョブクエストは専門的だけあって時間が掛かるものが多いからな。やはり割とお手軽に受けられる冒険者ギルドのクエストと比べると敷居が高い。

「特にログイン時間が限られてるへマスターだと長期的なタイプのクエストは受けられんな。……まあ、今日はまだ時間があるから大丈夫だが「おや、レントさん」……ん？ 貴女はリレイさん、お久しぶりです」

そんな風にカタログを捲っていた俺に突然声を掛けてきた人がいたので顔を上げると、そこには以前クエストで行動を共にしたアルター王国近衛騎士団の一人リレイ・ローランさんが立っていた。

「はい、久しぶりですねレントさん。……そのカタログを見ていますと言う事は、貴方も騎士系統のジョブに就いたのですか？」

「ええ先日【騎士】のジョブに就きましたので、折角だからジョブクエストも受けてみようかと。……それで？ リレイさんは何か私に御用でも？」

「む、用が無ければ声を掛けてはいけないので？」

「いえ、そんな事は無いですが。何か用がありそうな雰囲気だったのと……例の誘拐事件の後の騎士団の方達は色々忙しそうだったので、そんな中わざわざ俺に声を掛けたのは何か用があったからじゃないかと思っただけですよ。気に障ったならすみません」

尚、誘拐事件というのは先日この国の第三王女がとある犯罪者へマスターに誘拐された事件の事である……幸いその王女は騎士団に助けられたらしいのだが、守るべき王女を一度誘拐されたとあって騎士団は王都・王城の警備の強化を急いで行っていたらしいからな。

ちなみにこの話は先日司祭系統ジョブクエストを受けた時に一緒になったティアンの【司教】さんに聞いた話で、掲示板とかでも犯行声明が出たとかでへマスター間でも結構話題になった。

……しかし、そんな馬鹿をやるへマスターがいずれ出るとは予想していたが、まさかいきなり王女誘拐をやらかすとは。その指名手配された「ゼクス・ヴルフェル」とかいうへマスターは余程アレなヤツなんだろうな。

「……やっぱり誘拐事件の話は広がっているんですね」

「あ、すみません。不謹慎でしたね」

「いえ、あの事件は王城に居る王族は安全だと慢心していた私達近衛騎士団が愚かだったのが原因の一つですから、それについての批判は甘んじて受けましょう。……それに貴方に頼み事があるのは本当ですし」

いかんいかん、王女の誘拐事件なんてどう考えてもこの騎士団詰所で出す話題じゃ無いだろ俺！……ぬぬぬ、やっぱり無理なレベリングのし過ぎでちよつと疲れているのか？ ジョブクエストまでやるのは辞めとくかなあ

……とにかく、リレイさんが何か用があるのは事実みたいだし、とりあえずそれを聞いてから今後の予定を考えようか。

「……それで、俺に頼み事と言うのは？」

「はい、確か以前のクエストでレントさんのへエンブリオンに倒したモンスタードロップアイテムを経験値に変換するスキルがあると言っていましたね。……そして、そのスキルはパーティーを組んでいる者にも有効であると。妹さん二人のレベルもへマスターとして非常に高いですし」

「ああはい、そうですね」

そのスキルとは最近のレベリングで経験値増幅の《エクスベリエンズ・ブラスター光神の恩寵》

と並んで非常にお世話になっている《エクスベリエンストランスレイション長き腕にて掴むモノ》の事だ
……これがオンオフかで獲得経験値量が大幅違うからな。布切れか
骨片しか落とさないアンデッドであっても。

どうもデンドロ口のモンスターが倒された時にはアイテムの方に内
包するリソース的なサムシングが多く割り振られる仕様だからな。
それも高位のモンスターだと【宝櫃】という形でより多く。

……ふむ、何となく彼女が何を頼みたいのかは予測出来るな。

「もう気付いているかもしれませんが、レントさんに頼みたいのは騎
士団のメンバーのレベリングの手伝いです。……先日の誘拐事件も
あって騎士団全体の地力の強化も必要だという話が出たのですが、警
備体制の強化などで時間や人員の余裕が少なくなって中々ジョブレ
ベル上げが出来ない状況だったのです。……経験値増大のアイテム
もありますが高い上にそこまで劇的な効果はありませんし」

「それで俺の〈エンブリオ〉で短時間の内にレベルを上げたいと」
あの手のアイテムって使い捨てで高価な割には効果が微妙だから
な。俺もレベリングの足しになればと覗いてみたが《ジョブチェンジ
ロッド》買ったばかりで懐に余裕が無かったし辞めたが。

「そういう事です。……クエスト内容としてはこちらで選んだ騎士団
の人間とパーティーを組んでのモンスター討伐になります。出来れ
ば何度かに分けて行う形にしたいですね。時間に関しては出来るだ
けそちらに合わせますが、メンバーを招集する必要があるので早くと
も明日からになるでしょう。報酬に関しては現金を予定しています
が、何か他に欲しい物があれば言ってください」

「……それじゃあ【聖騎士】に転職する為の推薦状とかは？」

リリースさんに何か欲しい物とは聞かれたので転職用の推薦状を要
求してみた……【聖騎士】にはちよつと興味があったし、俺としては
現金よりも上級職の転職条件を満たせる方がいいしな。

「現金の代わりに報酬としてなら構いませんよ。私が一筆書くだけで
すし、前回のクエストの事もありますから貴方達ならいいでしょう」
「……分かりました、そのクエストをお受けします。報酬は推薦状で」
【クエスト】【騎士団員のレベル上げの手伝い 難易度・三】が発生しま

した」

「クエスト詳細はクエスト画面をご確認ください」

「ありがとうございます。……それでは明日のこの時間から大丈夫でしょうか？」

「……ふむ、この時間なら空いているので大丈夫です」

「では、明日のこの時間までに再びこの詰所に来て下さい。そこで狩り場などは詳しく説明します」

そんな感じで俺はリリイさんからのクエストを受ける事になった訳だ……とりあえず今日はもうログアウトして寝るか。今休んでおけば三倍時間込みで丁度いい具合にログイン出来るだろう。

……まあ、その前に妹達に事情を説明しておく必要があるだろうがな。

クエスト・騎士団のレベル上げ

□〈墓標迷宮〉エクソシスト【祓魔師】レント・ウイステリア

そういう訳で翌日、俺はちやんとぐつすり休んでからデンドロに口グインしてリレイさんから依頼されたクエストを受ける為に騎士団の詰所まで行き、そこでリレイさん彼女が連れてきた近衛騎士団の希望者である数人の騎士達（中には以前会ったリリアーナさんも居た）と共に〈墓標迷宮〉にレベリングへ行つたのだつた。

……まあ、流石は聖属性剣技を得意とする【聖騎士】パラディン達で構成された近衛騎士団員だけあってアンデッドが出現する階層では文字通りの外周一色で、地下5階のボスモンスターも容易く撃破してしまつていた。

それで今はレベル上げの為に【魔獣師】ビーストテイマーをメインジョブにしたリレイさんと一緒に、後方から他の騎士達を援護しながら地下7階を探索している。

「しかし、皆さん〈墓標迷宮〉の探索は手慣れているみたいですね」
「ああ、近衛騎士団の業務には〈墓標迷宮〉の探索とそこで手に入る希少なアイテムの回収も含まれていますからね。……だからこそ【聖騎士】に就いていれば〈墓標迷宮〉に入る事が出来る様になっていきますから」

リレイさん曰く、この〈墓標迷宮〉では様々なレアアイテムが発見・発掘されるので、それらの入手も王国の重要な産業の一つとなつているのだとか……それらのアイテムは基本的に王国の市場に流されて産業が活性化される感じみたいだな。

また〈墓標迷宮〉では希少なレアアイテムや先々期文明の遺物が発掘される事もあり、個人の実力が国の戦力の多くを占めるこの世界ではそれらを強化できるレアアイテムの収集は国家事業として扱われている様だ。

「有用なレアアイテムやダンジョンでの経験は団員達の実力の向上にも繋がりますから〈墓標迷宮〉へのアタック定期的に行われていますよ。私も地下20階までは潜つた事がありますし……まあ、今回は地

下10階ぐらいいまででレベル上げを優先する予定ですが」

「ふむふむ、成る程。……あ、壁に擬態したヤツがいます！ 《フレイムアロー》！」

『KYAAA!!』

リリイさんの話を聞きながらも周囲を警戒していた俺は前方で戦っている騎士達の近くの壁に違和感を感じたので、警告を発しつつそこに炎の矢を撃ち込んだ……すると擬態していた「ミミクリー・ポイズントレント」が炎に巻かれた所為で擬態が解かれて姿を現したので、それを見かけた近くの騎士が剣でトドメを刺した。

……今回はまだレベルの低い騎士達のレベリングがクエストの主目的だとリリイさんが言っていたので、こんな風に俺と彼女はチマチマ援護するだけである。まあ今ぐらいの援護でも少しぐらいこつちに経験値は入るし、彼女はタイムマスターであるティルルをメイド服を着た人化状態で出して戦わせる事でレベリングをしている。

「ありがとうございます！ レントさん！」

「……………」

……ただ、俺のこの援軍に対してリリアーナさんは御礼を返してくれたのだが、直接助けた騎士がムスツとした顔で黙礼しただけなのが少し気になるが……それを見たリリイさんも軽く溜息を吐いていたし、ちよつとこつそり聞いてみるか。

「……………やっぱり、この前の誘拐事件の所為で《マスター》への評判は悪くなつて居るんですか？」

「まあ、騎士団員の一部で《マスター》に対する悪印象を抱く者がいます……今の所は一部犯罪者《マスター》への警戒や対抗心で済んでいます。大部分の騎士はそう言うのは一部だけで、ちゃんと良い《マスター》も居るとわかっていますし。……ただ、やはり個人的に《マスター》に対して隔意を持つ人間は出てしまっていますね」

まあ、対抗心とかは彼等の立場的にはむしろ当然だろうし、第三王女を誘拐なんてされたのにその程度で済んでいるのは彼等が高い良心と判断力を持つている証拠だろう。

「……………とは言え、今後増えるであろう力ある《マスター》の犯罪を止め

るには同じへマスターの力は必要になるでしょうし、最低限割り切れる様になって貰わないと困りますが。……実はあの誘拐事件で王女を連れ戻してくれたのはとある着ぐるみを来たへマスターでしたしね」

「……ナルホドネー」

……うん、着ぐるみ着たへマスターとか絶対あの人の事だよな。第三王女救出とかなんか凄い事やってるね。

「……じゃあ、今回のクエストはへマスターと騎士達の仲をよくする事も目的に含まれていると?」

「そうですね、それが出来れば良いですがね。……ああ、レントさんは特に何かしなくても結構ですよ。騎士団が依頼したクエストをキチンと熟すへマスターがいる」と騎士団員が理解していけば、最低限割り切れる様にはなるでしょうし。……それすら出来なければ処置無しですが」

……ふむ、リレイさん的には内心はどうあれ騎士団員としてへマスター相手でも任務の為なら割り切って協力、或いは利用出来れば最低限良しって感じかな……まあ、これは俺が考えてもしょうがない事だし、今はちゃんとクエストを達成する事に集中しようか。



そんな訳で俺達は順調にレベルを上げつつ地下9階まで足を踏み入れていた……ここまでのレベルの上がり具合から俺の《長き腕》がちゃんと獲得経験値増加の効果があると騎士団員達も理解してくれた様で、リレイさんやリアーナさん以外の騎士団員も俺に礼を言ってくれたり話しかけて来たりしてくれる様になった。

……ただ、さつき助けた時にムスツとしてた騎士——リンドス卿と言うらしい人は俺に話しかけては来ないのが少し気になったが、戦闘中は普通に声掛けなどはしているので問題は無いだろう。後は個人の好みの問題だろうし。

「それで、今日は最終的にどこまで潜るんですか?」

「そうですね、しばらくの間はこの階層でレベルを上げてから《エレベータージエム》で地上に戻る事にします。……今の戦力だと地下10階のボスモンスターとの戦いは出て来る相手次第ですが厳しくなるでしょうし。それで良いですね？」

「はいっー」

そんな感じで俺達は地下9階を探索しながら出て来たモンスターを片っ端から狩っていった……この階層ぐらいになればドロップするアイテムの質もそれなりの物になるので《長き腕》の効果で増幅される経験値の量も結構なものになる為、レベル上げもスムーズに進んでいた。

……そして今は広めの通路で複数の硬い木で出来た身体を持ち高い再生能力を持つ【ウッドゴーレム】と、いくつかの魔法を使うトレントである【マジック・トレント】で構成された群れと交戦していた。

『『G A A A A A A A A A!!』』

「くっ！ ゴーレムが邪魔で……！」

『『Water ball』！』

「チッ！ 後方から魔法攻撃が！ 《マジックシールド》！」

連中は前衛の【ウッドゴーレム】が騎士達の攻撃を受け止めている間に、後衛の【マジック・トレント】が魔法で攻撃すると言うテンプレな連携を取っているだけだがそれ故に崩し難い……今も放たれた魔法を盾持ちの騎士が辛うじて受け止めたが中々ゴーレムを突破出来ない様だ。通路が広めとは言えゴーレムが複数横並びになると流石に擦り抜けるのは難しいしな

しかし、基本的に迷宮に侵入した者を襲うだけの植物系モンスター達がここまで見事な連携を取って来るとは……ん？ よく見たらトレント達の更に奥に何か小さい人魂みたいなのが居るな。

「アレは……【コマンダー・ドライアド】？ ……まさかアイツが指揮を執っているのか？」

「その様ですね。ドライアド系のモンスターは植物に対して回復やバフを与える事に特化したモンスターですが、コマンダー司令官と付いている以上あの個体には配下を指揮する能力もあるのでしよう。……

しかし、〈墓標迷宮〉の植物エリアにあんなモンスターがいるとは初めて聞きましたね。新種でしょうか？」

ふむ、確かに《看破》で見たらゴーレムやトレント達にはバフが掛かっている上に騎士達が減らしたHPが回復している、これは近衛騎士団達でも苦戦する訳だな。

「……ふむ、あのコマンドーは亜竜級上位か純竜級下位ぐらいですね。……流石に彼等だけでは苦戦するので私も前に出ます。メインジョブの所為でジョブスキルはまともに使えませんが、このぐらいで丁度でしょう。レントさんは援護をお願いします」

「分かりました。大威力の魔法を撃つので気を付けて下さーい！」

……《詠唱》終了《ヒート・ブラスター》！」

そう言ったリレイさんは両手に迷宮用なのか程々の長さの槍を持って前衛に移り、俺は騎士達に合図を送ってから準備し終わった大威力の熱線を体勢を崩した例のリンドス卿を狙っていた「ウッドゴーレム」に撃ち放ってその上半身を吹き飛ばした。

うむ、流石に上半身の大半を吹き飛ばせば再生は出来ないみたいだな。或いはコアでも潰したか……しかし、妹達なら合図無しで魔法を撃つても合わせられるか最悪回避してくれるから連携が楽なんだが、普通のパーティーだところこういう狭い場所では誤射に気を付けないといけないから結構面倒だな。別に出来なくはないけど。

「さあ、一体減りましたしここから押し返しますよ。……どうやら向こうのコマンダーは蘇生までは出来ない様ですから、ゴーレムは一つづつ集中攻撃で潰していきます。盾持ちと遠距離持ちは後衛のトレントにも注意しなさい！ ……ティルルは一体足止めを」

『御意』

「は、はいっ！ 《セイクリッド・スラッシュ》！」

「了解！ 手足を狙うぞー！ 《植物切り》！」

『G A A A A A A A A A!?!』

ゴーレムが一体減った事で体勢を立て直した騎士達は、前衛に出て来たリレイさんの指示通りに一体のゴーレムに集中攻撃を行って手足を斬り落とすなどの大ダメージを与えていく……流石に部位欠損

までになると簡単には再生出来ない様で、手足が無くなって動きが鈍った所を俺が《ブレイズ・バースト》を放って焼き払った。

ちなみにこれが上手くいったのはリリイさんが人化状態にティールに指示を出してゴーレムの一体に張り付稼ぎ足止めしてくれていたからでもあったりする。

『《Wood Spear》!』

「牽制する! 《ホワイト・ランス》!」

「防御は俺が! 《ワイド・ガード》!」

そして後方のトレントがうって来た木の槍は盾持ちの騎士が味方を庇って受けて、更に反撃として魔法攻撃が可能な騎士が聖なる光の槍を放って倒せないまでも向こうの魔法発動を妨害していく。

……ふむ、ゴーレム達はリリイさんを初めとする騎士達が抑えているし俺は「コマンダー・ドライアド」を牽制するかな。

「俺がドライアドを攻撃します! 《魔法多重発動》《ホーミング・ブレイズ》!」

『KYUIII……《Heat Register Wall》!』

とりあえず前衛の騎士達に声を掛けてつつ複数展開した《ホーミング・ブレイズ》——目視した対象一体を追尾する炎弾を発射する魔法——を前衛の頭上へ弧を描く様に撃ち放ってみたが、向こうも即座に対応して火属性攻撃を無効化する障壁を展開して全てに炎弾を防いでしまった。

……まあ、アイツが防御に集中していれば回復や支援は行えないだろうしこのまま攻撃を続行して釘付けにしよう。そうすれば騎士達にも余裕が出来るだろうし。

「……よし、支援が止まってゴーレムの数が減りましたね。手の空いた者は後衛を攻撃! これ以上援護をさせない様に!」

「はいっ! 《グランドクロス》!」

『KYAAAAA!』

そして俺の予想通りドライアドの回復と支援が止まった所為でゴーレムの内一体が崩れ落ちる……それによって余裕が出来たりリアーナさんが確か【聖騎士】の奥義だと言う聖なる光の十字をトレン

ト達が居る場所で発生させた。

流石に耐久力がそこまで高くない【マジック・トレント】では上級職の奥義に耐えられなかった様で、その半数近くが倒されるか戦闘不能になった様だな。

『KYUIIIIIII!!』

「悪いが、これ以上何かをさせる気は無いぞ。《エアスピア》！」

そうした形勢の不利を察してか慌てて逃げようとする「コマンダー・ドライアド」に対して、俺はその周辺に向けて風の槍を数発撃ち込んで逃げ道を塞ぎながら行動を妨害していく。

……そうこうしている内に前衛のゴーレムの数が残り一体に減ったので、それに足止めされていた騎士達がフリーになると状況は一変した。

「残りのゴーレムは私とレントさんが足止めします！ リリアーナは騎士達を率いてコマンダーを討ちなさい！」

「分かりました！ 皆さん行きますよ、まだレントは残っているの
で魔法には注意！ 《クレセント・エッジ》！」

「了解！」

そんなリリアーナさんの指示の元にリリアーナさんが三日月型をした聖属性の斬撃波をコマンダーに放って牽制しつつ、フリーになった騎士達を率いてトレント達に突っ込んで行った。

……しかし、流石はちゃんと訓練を受けた騎士団だけあって連携がしっかりとしてるな。こんな通路の中でも一糸乱れぬ動きで突き進んでいるし。

『疾ッ！ ……レント氏、足は潰したのでトドメをお願いします』

「了解。 ……《ブレイズ・バースト》！」

『GAAAAA!?!』

そんな事を頭の片隅で考えている間にもテイルルは風を纏わせた手刀で鮮やかにゴーレムの脚部を斬り裂いて歩行不能にしていたので、彼女に指示通りその蹲ったゴーレムに俺は《ブレイズ・バースト》による炎の奔流を叩き込んで焼き尽くした。

「これで終わりです。《セイクリッド・スラッシュ》！」

『KYUIIIIIIIIIII——ッ!?!』

そして突撃していった騎士達も問題なくトレント達を殲滅し終わっており、丁度今リリアーナさんが【聖騎士】得意の聖属性剣技で【コマンダー・ドライアド】を斬り捨てた所だった。

……さて、目の前の敵を倒し終わったら一応周辺の索敵をしておきますか。フィールドやダンジョンでは戦い終わった後に奇襲を受ける事がそれなりにあるからな。

「……俺の索敵スキル範囲内には敵はいませんね」

「こちらと同じですね。とりあえずこれで戦闘終了と言っていていいでしょう。……しかし、今の【コマンダー・ドライアド】は今まで〈墓標迷宮〉で目撃情報が無かった新種のモンスターでしたね。一応これまでも新種のモンスターが追加される例はありましたが、後で報告を上げないと……」

そういう訳で戦闘を終えた俺達は周辺を警戒しつつも回復魔法や各種ポーションでHP・MPを回復していく……と、そうやって俺が【MP回復ポーション】を飲んでる所に例のリンドス卿が近づいてきた。一体何だろうか？

「何か用ですか？」

「いや……先程は助かった。礼を言う」

彼は少しムスツとした表情のまま軽く頭を下げてそれだけ礼を言うと、そのまま踵を返して立ち去って行ってしまった……まだ思う所はあるけどちょっとは気を許した感じかな。

まあ、内心がどうあれ表向きはちゃんとしてれば社会人として問題は無いだろうし、リライさんの狙いは上手くいっているみたいかな。「さて、それでは探索を続行しましょうか。……先程の様にこの階層にも強力なモンスターが現れる事もあるので、各々十分に注意する様に」

「了解！」

まあ、そんな感じで以降も俺達は〈墓標迷宮〉に住まうモンスターを倒しまくってレベルを結構あげる事が出来たので、キリのいい所で地上に帰還してクエスト完了と相成ったのだった……その後になり

リイさんが今回の報酬である【聖騎士】の推薦状を一筆書いてくれたので漸く【聖騎士】への転職の目処が立ったのは良かったな。

……まあ、その時に彼女からは『今後も機会があれば【聖騎士】のクエストとして発注するからよろしく』とも言われたが、今回のクエストはそれなりに楽しめたし暇があれば受けてもいいかな。

昔話と準備と

□王都アルテア・とある喫茶店【聖騎士^{パラディン}】レント・ウイステリア「……とまあ、そんな訳で俺は【聖騎士】に転職してそのジョブクエストとして近衛騎士団のレベルングに付き合っていたんだよ。……俺の合計レベルもそれなりに上がったし奥義の《グランドクロス》も覚えたから、それなりの収穫があったと言えるだろう」

「こっちは普通に冒険者ギルドのクエストを受けたただだから特に変わった事は無かったかな。……強いて言うならそれなりにお金が稼げたぐらい」

「後は私が【魔拳士^{マジックボクサー}】をカンストして、新しく【拳士^{ボクサー}】に就いたぐらいですかね。魔拳士系の上級職はまだ条件を満たしていないので、とりあえずアクティブスキルを覚えられるジョブに就いたのです」

「……ただ、どうも【魔拳士】のスキルって多くが魔法系スキル扱いなのか【拳士】をメインにしていると使えないヤツが出て来るのが問題なんだよねー」

そう言う訳で俺は久しぶりに妹達と一緒にパーティーを組んで、行きつけの喫茶店でお互いに別行動していた時の事を報告し合っていた……連携とかの関係上お互いの状況は知っておいた方が良かったからな。

……ちなみに【聖騎士】のジョブスキルには《聖別の銀光》とか言う対アンデッドに超強いスキルがあるみたいなんだが、何でもリリイさん曰く『騎士団の秘奥』らしくて取得条件は教えて貰えなかったのは少し残念だったな。

その代わりに他の【聖騎士】のジョブスキルの取得条件は奥義の《グランドクロス》含めて全部教えて貰ったし、奥義取得の為に騎士団のレベルングを【聖騎士】のジョブクエストを回して貰ったけどね……俺は奥義を取得出来て、向こうはレベルが上がるというwin-winの関係だったよ。

「さて、じゃあ近況報告はここまでにして本題に入ろうか。……お兄ちゃん、そろそろ王都を出て他の街に行ってみない？」

「……ふむ？ それは別に構わないが随分といきなりだな。もう王都には飽きたのか？」

「そういう訳では無いのですが……兄様、私と姉様はこの〈Infinitive Dendrogram〉の世界でなら自分達に与えられた“才能”の意味が見つつけられるかもと思っっているのです。だからもつとこの世界を見て回りたいのです」

そう言った妹達の表情はこれ以上ないぐらいに真剣なモノだった……あー、まあこの二人の“直感”と“戦闘”の才能って現実だと普通の活躍する機会が殆ど無い代物だから、こつちの世界でなら『自分の才能で何か出来るかも』『才能を存分に使えるかも』と思っってそういう考えになるのも無理はないか。

……“人間”の領域を半歩ぐらい超えた才能を持つこの二人と比べれば大して深刻では無かったとはいえ、俺も自分の才能について色々悩んでいた時期があるから気持ちは分からなくは無いな。

「……まあ、お前達がそうしたいと言うなら兄として助けるのは吝かではないし、俺もデンドロの世界を巡っってみるのは面白そうだと思うから旅に出るのは一向に構わないが。……そうだな、何か参考になるかは分からないが少し俺の昔話でもしようか」

「え？」

……と言っても、そんな御大層な話では無いんだが……俺は努力とかしなくても大抵の事が上手く出来てしまっっていたから、小学校高学年から中学に掛けて自分は真正銘の天才だとイキっていた時期があっつな。

……うむ、今思い出してもちよつと悶えたくなるぐらいに当時の俺はイタいやツで、剣道をやってたのも自分より才能が無い他人を打ち負かして悦に浸る気持ちもあつたぐらいだな。

「まあ、そんな中途半端な気持ちでやってる剣が本物の天才に勝てる訳もなく始めて敗北を経験した上で挫折。更に自分よりも才能がある人間に対して醜い嫉妬心を抱いた上、その後にあつた航空機事故を言い訳にして剣道から逃げた訳だが……」

「……あれ？ お兄ちゃんが剣道辞めたのって事故の後遺症が原因

「じゃ？」

「実を言うと今は後遺症は治ってるし剣道をやろうと思えば出来るな」

「……ええ……（困惑）」

俺の話聞いた妹達が困惑した表情を浮かべているが、それはとりあえずスルーして話を続けよう……そんな昔の俺だが事故の後に出会った友人や、中学・高校での学園生活とその中で自分がやりたい事を探すために行った様々な活動の中で、自分なりに自分の才能への「答え」を得て納得したという訳だ。

……うん、今思い出しても当時の俺は実に無様でイタイ男だったな。正直こうやって話している間もちよつと心が痛い（泣）

「……それで、兄様が得た自分の才能への「答え」とは？」

「うむ……ぶつちやけそんなモノは無い！」

「……ええ……（2回目）」

二人は何か困惑しているが、そもそも『自分がこの才能を生まれ持った意味』とかそんなのある筈ないじゃん！ 人間は生まれを選べない以上は偶々そう生まれただけでしか無いのだし。

……大学生にもなった今なら、あんな風に『生まれた意味』とか『運命』とか『やるべき事』とか考えてしまうのは、誰もが中学生ぐらいで一度は考える様になってしまいう麻疹の様なモノなのだろうと分かるしな。

「……と言っても、他人から言われた「答え」では納得は出来ない事ぐらいは分かってるしな。……お前達がそれで納得出来る様になるのなら兄として可能な限り手助けしよう。まあ、後数年もすれば今の自分を思い出して悶えなくなるかもしれないがな！」

「お兄ちゃん……」

「兄様……」

なんか二人が嬉しい様な呆れた様な表情をしているが、言いたい事は言えたし良しとしよう……それに妹達が抱えている悩みは俺のと比べると遥かに深刻だからな。

……余り深刻にならない様出来るだけ軽い感じで過去話をして

みたけど、二人とも大人びてはいるがまだ小学生だし「納得」するには時間が掛かるだろうしな。一度に色々と話し過ぎてもアレだし、一旦この辺りで話を切り替えよう。

「……さてー！ この話はこれまでにして具体的な旅行プランを練っていかうか。どんな旅行にする？」

「え？ ……あ、うん……どうしようか？」

「ええーつと……」

「……お兄さん、それなら王都近くの街に行く感じでいいんじゃないかな。南にある『ギデオン』っていう街とかは決闘が盛んだって格闘家ギルドで聞いたけど」

いきなり話を切り替えた事で妹二人はちよつと困惑してしまった様だが、そこで空気を讀んでくれたミメが助け舟を出してくれた事で何とか話題の転換には成功した。

まあ、それに噂で聞く限りギデオンは決闘好きの「マスター」が多く滞在しているらしいし、デンドロで初めて出掛ける街としては丁度いいだろう。

「確かに格闘家ギルドでそんな話を聞きましたね……じゃあ、まずはギデオンに行ってみるといいう事で良いんじゃないでしょうか。その後に関しては応相談で」

「私も別にそれで良いよ。……悪い感じはしないし」

「じゃあ決まりだな」

そんな感じで俺達の最初の旅行の行き先は「決闘都市ギデオン」に決定したのだつた……さて、これまでのひたすらなレベリングのお陰で、戦闘能力的にはギデオンに行くだけなら今から歩いて行っても良いぐらいなんだが……。

「じゃあ次は移動手段かな。……別にギデオンまでなら徒歩でも問題ないっちゃあ無いんだが……」

「今後も色々な所に行くならちゃんとした移動手段は欲しいですね。ずっと徒歩だと疲れますし……何か良い手段は無いでしょうか？」

「この国での移動手段としては馬車を始めとしたタイムモンスターを利用したものが主流みたいだよ。この前に騎士団の詰所で聞いたー」

確かクエストの時のリレイさんも『騎士系ジョブはAGIが低いから馬系モンスターに乗る事が多い』と言っていたか……まあ、彼女やリヒトさんのペガサスの様に強力な馬形モンスターは少ないので、普通の騎士が乗っているのは下位の馬型モンスターらしいが。

……とは言え、そんな下位の馬型モンスターであつてもAGI換算で最低2000以上は出せるらしいし、移動・戦闘共に非常に役に立つとの事。

「まあ、移動手段としてのタイムモンスターは馬型以外にも結構種類があるらしいがな。……確かそういうタイムモンスターとかの専門店もあるみたいだし、この後ちよつと見に行つてみるか?」

「おおー、いいね! そういうのは初めてだから面白そう」

「タイムモンスターを扱う気は無いですが興味はありますね」

そんな訳で、俺達は移動手段を探すために王都にあるタイムモンスター専門店に向かう事に決めたのだつた……ただ、肝心の場所がよく分からないので、まずは近くにある〈マリイの雑貨屋〉に買い物兼ねて聞き込みに行く事となつたが。



□王都アルテア ストロング・メイスマン【剛戦棍士】ミカ・ウイステリア

「……ふむ、マリイさん曰く『この王都のタイムモンスター専門店の方達が一番おススメのは従魔師ギルドの近くにある店かしらねー。ギルドの管理下にあつて騎士団も利用してるから信頼出来るしー』との事だつたな」

「お兄ちゃんの声真似と演技が無駄に上手い件。……それはともかく、ギルド管理下だから初心者向けのモンスターが多くて私達でも選び易いみたいだし」

「まあ、その分だけ品揃えは無難なモンスターばかりなので、ベテランの【従魔師】は別の店に行く事も多いそうですが私達には関係無いですね。別に従魔師じゃ無いですし」

あれから〈マリイの雑貨屋〉で買い物ついでに王都でおススメのテ

イムモンスター専門店を聞いた私達は、マリイさんのおススメだというギルド直轄のお店に向かっていました。

……さっきのお兄ちゃんの過去話には色々と思う所はあったけど、それは今は置いておいてまずは真っ当にゲームを楽しむか。

「……あ、あそこじゃないかな、従魔師ギルド。看板にそう書いてあるし」

「確かにそうだな。……マップによるとその隣にへギルド直轄・タイムモンスター専門店」がある筈だが……あそこか」

「入ってみよう」

ミメちゃんが見つけたギルドの隣にそんな分かりやすい名前のお店があったので入ってみると、店内には沢山のショーウィンドウが置かれており、その中には確かタイムモンスターを入れるアイテムだという【ジュエル】が置かれていた。

……よく見ると【ジュエル】の隣にはモンスターの写真や能力や値段が書かれた商標が張ってあったので、どうやらこれらの【ジュエル】には全て売り物であるタイムモンスターが入っているみたい。

「……実は私タイムモンスターの専門店には、もっとうこうモンスターが入っている檻とかが並んでいるイメージがあっただけ……」

「こんな街中でモンスターをたかが檻に入れてだけで放置とかしたら色々ヤバいだろう。必要なスペースや衛生面とかも馬鹿にならないだろうし。……一応、店員さんに許可を取ってその立ち会いの元でなら中にあるモンスターを解放して見定めるぐらいは出来る様だが」

確かにモンスターを格納出来る【ジュエル】なんて便利な物があるなら現実みたいに檻とかを使う必要は無いよね……さて、店内地図を見てみるとここは初心者テイマー様の低レベルモンスターが売っているエリアみたいだね。

……えーつと、他には高レベルモンスターが売っているエリアや【ジュエル】などのテイマー向けアイテムが売っているエリアとかがあるね……お？

「お兄ちゃん、騎乗用・移動用タイムモンスターが売ってるエリアがあったよ！」

「でかしたー！」

そんなこんなで私達は店員地図に載っていた『騎乗・移動用モンスター売り場』に向かった……そこには「ランドウイング」や「ブラックホース」などの移動手段として使えるモンスターが多数「ジュエル」に入った状態で展示されていた。

「……ふむふむ、移動用ってだけでも結構色々な種類があるみたいだね。馬とか鳥とかトカゲとか……あとドラゴンまであるよ」

「基本的には地上を移動するモンスターばかりか。……空を飛べるモンスターも居るには居るがどれも亜竜級以上な上、地上型モンスターと比べても遥かに値段が高いな」

「空を飛べて人も運べるモンスターはお高いみたいなのです。……大体亜竜級で300万リル以上、純竜級だと1000万は超えていますね。飛行可能だと更に二倍・三倍の値段がする感じでしょうか」

「今の僕達の資金だと地上用の亜竜級一体ぐらいまでが限界かな？」

ミメちゃんの言う通り私達の有り金を集めてもそのぐらいが限界かな……一応、各々クエストとかを受けたりして稼いでは居るんだけど、その分アイテムや装備で消費する額も多くなってるからね。お兄ちゃんのスキルで経験値優先で稼いでいるのもあるけど。

……どうやら商標には各々のモンスターの用途とかも書かれているみたいだし、自分達に必要な物を調べてみようか。別に今日買わなきゃいけない訳でもないから、資金が足りなくても後日また稼いで買えば良いし。

「とりあえず移動手段として買うなら馬かな？ 俺とミカは騎士系統のジョブのお陰で《乗馬》スキルを持ってるし……使った事はないからレベル1だが」

「スキルレベルに関しては使っていれば上がるでしょ。……四人で移動するなら馬車を使えば良いし、なるべく優れた馬を一体買えば良いかな」

「馬型モンスターの種類は結構あるしね。足が速いのか力が強いのかがあるって紹介に書いてある」

「値段も多少お高いですが亜竜級程では無いですしね。……て言う

か、亜竜級以上の馬型モンスターは殆ど売ってないみたいですが」

尚、近くの店員さんに聞いて見たところ馬型のモンスターの殆どはあまり強くないらしく、亜竜級以上まで進化するのは非常に稀らしい。ただその分、足が速くて使役しやすいので一般的な移動手段としては優れているとの事。

……勿論【ナイト・オブ・ソアラング天翔騎士】のリヒトさんとかが持つペガサス系モンスターなど亜竜級以上の種族もいるのだが、そういった種族が悉く貴重なので殆ど入荷せず値段も亜竜級で最低500万リル以上する事もあると非常に高いのだとか。

「……まあ、別に私達は【従魔師】って訳でもないし、とりあえず移動手段として使えれば良いからそこまでのモンスターは要らないかな？」

「強力な馬系モンスターを買う事が出来れば、俺が【従魔師】やら【ライダー騎兵】を取る考えもあったんだがな。必殺スキルのデメリットも従属キャパシティには及ばないし。……ただ、今の所は資金不足だしこの案は無しか？ まあ育てると言う案もあるが……」

「少しだけ売られている亜竜級の馬は凄く高いですからね。……一頭最低でも700万リル以上しますし」

「亜竜級まで進化出来る馬の見分けでも付けばいいんだけどねー」
そんな感じで自分達が欲しい馬について私達は話し合いをしている、最終的には『四人乗りぐらいの馬車を引けるSTRがあつて乗馬経験の無い私達でも扱い易いもの。戦闘も出来れば尚よしで予算は200万リル以内』という無難な意見に落ち着いた……ただ、それだと亜竜級未満のそれなりに高級な馬型モンスターの殆どが当てはまるので、ここから更に選ぶのに時間が掛かりそうなんだよね。

……まあ、時間はあるしゆっくり選んで行けばいいでしょう。ティムモンスター専門店とか始めてくるから色々面白そうな物があるし、それらを見ながら考えればいいかな。

馬を買おう！

□タイムモンスター専門店 【拳士^{ボクサー}】 ミユウ・ウイステリア

さて、兄様の昔の話を聞いたりと色々ありましたが、現在私達は移動用の“足”となるタイムモンスターを手に入れる為に従魔師ギルド直轄の専門店に来て、そこで売られている馬型モンスターを見たいです。

……別に移動に使えれば馬型モンスターである必要は無いのですが、兄様と姉様が《乗馬》スキルを覚えているので馬型モンスターなら上手く使えるのではないかと考えてそこから選ぶ事にしたのです。「……しかし、この店には馬型モンスターが沢山置いてありますね。騎士は馬に乗る事が多いらしいですし、騎士の国と呼ばれるアルターらしいとも言えますが」

「騎士系のジョブだと《乗馬》スキルを覚えるからな。……低いAGIを騎馬の機動力で補うのが騎士系ジョブの基本だと騎士団の人達から聞いた事がある」

「……ふむふむ、キチンと躰けられていて騎手の言う事を素直に聞いてくれる「ウォーホース」に、気性は荒いが高い物理ステータスを有する「ワイルドホース」ねー。他にも色々取り揃えているみたい」

姉様の言う通り、他にもAGIに特化している速度重視の【疾風駿馬^{ゲイルホース}】とか、HP・ENDが高い耐久型の【ブラックホース】、火属性攻撃が可能な【フレイムホース】、雷属性攻撃が可能な【ライトニングホース】などなど様々な種類のモンスターが売られているのです。

……しかし、こうして売られている馬型モンスターを見ていると、少し気になる事がありますね。

「……同じぐらいのステータスの馬型モンスターでも属性攻撃が出来るタイプのやつは、それ以外のやつと比べても値段が二、三割程安いですね。如何してでしょうか？」

「確かに本当だね。……こういうのは属性攻撃とかが出来る方が高つくのが普通じゃなかったっけ？」

「ふむ、どうやら 〃属性攻撃が出来る〃 馬型モンスターの値段だけが、他の同格の馬型モンスターと比べてやや低くなっている様だな。……気になるしちよつと店員さんに聞いてみるか」

そういう訳で兄様がその事について詳しく聞く為に近くにいた中年の店員さんに声を掛けました……このお店でモンスタートを直に見たい時には【従魔師^{テイマー}】のジョブに就いている店員に頼んで【ジュエル】から出してもらおう形式になっているので、その為に何人かの人が店のいくつかの場所に分かれて常駐しているのです。

……その定員さんも流石はプロと言う事なのか私達の疑問に対して丁寧^{丁寧}に回答してくれました。

「ああ、それはですね属性攻撃を持った馬型……と言うか、騎乗用モンスターはかなり使い難くて人気が無いから値段が下がっているんですよ」

「それはどうして？ 馬が攻撃出来れば手数が二倍になって強そうじゃない？」

姉様の言う通り騎馬と騎乗者が同時攻撃とか出来たら強そうなのです……以前に見たりイイさんは騎馬であるティルとの連携で自分達よりも強い^{ユニーク・ボス・モンスター}へU B Mの【ヴァルシオン】と互角に渡り合っていましたし。

「〃それが出来る〃 騎乗用モンスターなら、むしろ大人気で同格のモンスターの二倍から三倍以上の値段がするんですが……問題はその手の訓練を積んでいない普通の騎乗出来るモンスターだと、騎乗者に影響を齎さずに属性攻撃が出来ない事なんですよね」

「……それは騎乗用モンスターの攻撃で騎乗者にまでダメージを受けてしまうとと言う事ですか？」

「そうなりますね。特に天属性攻撃を行うモンスターの場合には騎乗者を避けて攻撃するのが難しいので、そうなる事が多いです。……また、海属性でも氷属性などでは同じ事になりますし、地属性でも騎乗者に考慮した地面の操作が上手く行かずに落馬するなどのケースがありますね」

尚、ペガサスやユニコーンの様な元々高度なスキル運用技術を持つ

ている種類のモンスターであれば、騎乗者に影響を与えずにスキルを行使出来るそうですが……そういったモンスターは希少なので店にも殆ど出回らず、売られたとしても先程言った通り非常に高値になるとの事です。

……勿論、タイムしたばかりでは騎乗者に考慮した戦闘が出来ないモンスターであつても、ちゃんとした訓練によつて技術を身に付ければ騎乗者との連携攻撃とかも出来る様にはなるのですが、それは非常に手間がかかり専門の【調教師】^{トレーナー}や【飼育者】^{ブリーダー}などで無ければ難しいそうです。

「特にこの国だと馬型のモンスターを求められるのは騎士のジョブに就いている人が多いので、そこまでの訓練を行うのが難しいのです。なので結果として余計なスキルがある馬型モンスターよりも単純にステータスが高い馬型モンスターの人気があるんですよ」

「成る程……色々教えて下さつてありがとうございました」

「いえいえ、これも仕事ですから。モンスターが見たいなどの要件があればまたご遠慮無く声を掛けて下さつて結構ですよ。……それは引き続き当店をお楽しみ下さい」

そうして大変丁寧な説明をしてくれた店員さんは去つていきました……しかし、騎乗用のモンスターにはそう言った注意点もあるんですね。馬車を引かせるだけなら問題は無いみたいですが、騎乗したままの戦闘だと色々と気を使わなければならぬみたいです。

「では、色々騎乗モンスターについての裏事情が聞けた所でどうするべきか。……改めて整理すると欲しいモンスターの条件が『馬車が引けてそこそこの値段』だけだと曖昧過ぎて決め手に欠ける感じが。もう少し条件を明確にした方がいいか」

「戦闘が出来るか出来ないか、騎乗しながらそれをやれるかとかですかね。……とりあえず条件を改めて設定して該当するのが無ければ条件を緩める感じでしょうか」

「店内を見てるとタイムモンスターの種類が思ったより多かつたからね。馬型に限定しても」

そう言う訳で私達は改めて『自分達が欲しいタイムモンスター』に

ついて話し合っただのですが、これがなかなか難航したのです……最初から“とりあえず移動用の乗り物として使えるヤツが有れば買ってみても良いかな”ぐらいの気持ちで来たので、明確な基準を設定するのに手間取ってしまったのです。

……このまま長時間話し合うと店内に居る他の客の迷惑になりそうだったので、とりあえず私達は店にあった休憩スペースに移動する事にしました。

「やっぱりタイムモンスターとはいえ新しい仲間を迎えるのですからもつと真剣に話し合っておくべきでしたね。……駒として使い捨てるなら適当でも良かったかもしれませんが、私達は皆そう言う事が出来る性格では無いのです」

「そうだねー。……とりあえず選ぶのは馬型モンスターからにしよう。ここでブレると延々と店内にある様々なモンスターを見て回る事になりそうだし」

「それと戦闘能力もだな。……俺達はミカの“直感”によって厄介事に巻き込まれる確率が高いし、資金が許す限りで強いモンスターを買うべきだろう。……騎乗して戦うかに関しては二の次で。俺は今の所騎乗戦闘を行う気は無いし、馬車を引かせるだけなら問題無いという話だしな。訓練次第では出来る様になるみたいだし、先を見据えて将来性重視で」

「……でも、確かモンスターってティアンと同じ様に最大レベルが決まってるんだよね？ 将来性重視でって事は潜在能力とかも見るの？」

ミメが言ったその言葉を聞いた私達はちよつと黙り込んでしまいました……以前に掲示板とかで調べた所によると普通はモンスターの潜在能力とかは分からないらしいです。タイムモンスターの紹介にも潜在能力までは書かれていませんでしたしね。

……と、本来なら分かり用の無い潜在能力なんて考えずに強いモンスターを選べばいいのでしょうか、幸か不幸か私達にはもしかしたら潜在能力が分かるかもしれない技術を持っている人が居る訳で……。「……ミカ、お前の“直感”でモンスターの潜在能力とか分からない

のか？」

「無茶言わないでよお兄ちゃん。私の『直感』って基本的に危険が事前に分かるとかぐらいなんだからね。……むしろ、そう言うのはミュウちゃんの専門じゃない？ 見ただけで相手の実力を見破れるとか言ってたじゃん」

「まあ、以前見たティールルさんやデュラルさんを参考にして馬の実力を図るぐらいは出来るかもしれませんが……そもそも、私では『相手が強いかな』は分かりませんが、『相手がこれから強くなるかな』は分かりませんよ」

……ええ、人間と言うのは出来ないと分かっていたら諦めもつくんですが、『出来るかもしれない』と分かるとその可能性を考えてしまおうですよー。

「……よし、潜在能力の事は考えない様にしよう。ミカのもミュウちゃんのもどちらも確実なものでは無いしな。……それにあんまりこだわり過ぎるとポケモンのタマゴ厳選みたいになりそうだし」

「普通のゲームなら『逃がす』コマンドだけで済みそうだけど、この世界で同じ事やったら大変な事になりそうだからね。……自転車走らせるだけでタマゴが孵化する訳でも無いだろうし」

「なんかゴメンね。ボクが変な事を言ったから……」

「別にミメは悪く無いですよ。ただ私達がちよつと優柔不断だっただけですし。……三人共ポケモンで最初の三匹を選ぶ時には結構悩むタイプですからね」

さて、ちよつと話が別のゲームの事になって来たので、私達は一旦潜在能力に関する話は切り上げました……ですが、実物を見てから決めるのは悪く無い方法だと思ったので、条件に合いそうなモンスターをいくつか選び店員さんに頼んで見せて貰う事にしたのです。

……まあ、今日中に決めなければならぬ訳でも無いですし、じつくりと考えましょうか。



□タイムモンスター専門店 【聖騎士】パラディン レント・ウイステリア

「……すみません。見たいモンスターを色々頼んでしまつて」

「いえいえ、お気になさらないで下さい。お客様達の様に行くつかの候補から直に見て決めるといふ人は結構多くいますから」

そう言う訳で俺達は候補のタイムモンスターを直に見て欲しいものを選ぶ為、さつきと同じ店員さんに連れられて店舗の裏手にある大型の檻がある広場までやって来ていた。

……ちなみにこの檻は外側から操作する事で【ジュエル】内のモンスターを檻の中に召喚出来る仕組みになつてはいるらしく、客の安全確保の為に内側に結界が貼つてあると店員さんに説明された。

「まあ、ここで売られているモンスターは全てタイム済みなので危険はそこまで無いんですけどね。……方が一の事があれば私がどうかしますし」

「店員さん結構強そうですね」

……ミユウちゃんの言う通り、この店員さんを《看破》したところ合計レベル400の【高位従魔師】ハイ・テイマーだったし、手にも自分用の【ジュエル】をつけてるからな。

「ハハハ、これでも昔はティマーとして戦っていましたからね。……それではご指定のモンスターを見ていきましようか」

そう言った店員さんは檻に備え付けられたパネルの様な物に【ジュエル】を取り付けて操作して、その中にモンスターを檻の内側に解放していった。



『H I H I ~ ~ ~ N!!!』

「まずはこの【ブレイズ・ワイルドホース】ですね。高い物理ステータスを持ちながらも身体に炎を纏う事が出来て、炎を纏った物理攻撃を得意とするモンスターです」

「……ふむ、中々強そうな雰囲気を感じるのです」

「でも、この炎つて騎乗者や引いている馬車には干渉するんですか？」

「それに関しては身体の炎はオンオフ出来る仕組みになっていますよ。……言う事を聞かせる事が出来ればですが」
「ちよつと気性が荒そうな感じだし、直ぐにこつちの言う事を聞かせられるかどうか。……とりあえず保留で次を見ていこうか」



『BURURURU……』

「次はこちらの【疾風^{ゲイル・デミドラグホース}亜竜駿馬】です。……これはオススメですね。属性攻撃などを覚えていない分ステータス……特にAGIが高く、瞬間的にそれを強化するスキルもあるので騎馬として使うならいい選択だと思えますよ」

「ふむ《看破》……STRもそこそこあるから馬車を引かせる事も出来そうだな。気性も大人しめみたいだし」

「ただ、戦闘は余り好きそうな雰囲気がないですね。どちらかという逃げの方が得意そうな気がします」

「それに亜竜級だから値段も高いよ。300万リル以上する」

「うーん、予算的にちよつとオーバーかなー。……これも保留にして次行ってみよう」



『GUUUUU……』

「皆さん中々見る目がありますね。……それはともかくとして、次はこちらの【グランド・ウォーホース】です。名前通りに地属性のスキルを覚えていて、高いHPとENDを持つ耐久型のモンスターですよ」

「これも中々強そうですね。とても戦闘に慣れている雰囲気があるのです」

「……うーん、でもなんか危険な感じがするんだけど……」

「うむ、こちら……というか人間に恨みを持っている感じなんだが。」

目に憎悪の色がある」

「……ええと、どうやら全滅させて最後に残った一頭をタイムしたと資料には書かれていましたね。……モンスターには個人主義が多いんですが、仲間思いの個体もそれなりに居ますから」

「新しい仲間とは仲良くしたいしこれは無しかな」

◇

……と、その後も色々な馬型モンスターを見て来たのだが「コレ」と言った個体を見つける事は出来なかった。

「……うむ、ちよつとえり好みをし過ぎているか？」

「いえ、どちらかと言うと皆さんの見る目があり過ぎるのが原因ですかね。……普通の新人テイマーではモンスターのステータスは見れども個性や性格までは見抜けませんが、皆さんはそう言った所まで気にしていますからね」

店員さん曰く、ステータスだけ見てモンスターを買って性格や個性の不理解で苦労するのが新人テイマーのお約束らしい……まあ、そう言った経験を積んでテイマーは成長するものだと言った店員さんはしみじみと言っていたが。

「うーん、でもなんかアラ探しになつてる気がする。……次で最後だし買うと決めた時にはこれ以上モンスターを見ずに今まで出た中から選ぼう」

「まあ、そうだな。……それじゃあ最後のヤツをお願いします」

「はい、分かりました。最後のはコレですね……「ライトニング・ストライクホース」です」

『BURURURU!』

そうして現れたのは深い青の身体に金色の鬣を持ち全身が僅かに帯電している一頭の馬型モンスターだった……ふむ、帯電していると言う事はこつちを威嚇しているのか？

……いや、これは威嚇して見せる事でこつちの反応を観察してる感じかな。コイツの目は何というかコツチを見定めている様だし。

「なんか威嚇してるね、気性が荒いのかな？」

「違いますよミメ。コイツは凄く冷静ですし、威嚇もブラフですね。

……後、雰囲気的には今までの中で一番戦い慣れてる感じがします」
「帯電はしてるけど危険な感じはしないしねー」

「それに反応から見てこちらの言葉は理解出来ているようだしな。知性も高い様だ」

『……BURURURU』

その【ライトニング・ストライクホース】はこちらの会話を理解したのか帯電を引つ込めて大人しくなった……また《看破》でステータスを見ても同レベル帯のモンスターとしては中々だし、属性攻撃が出来るという事で値段も50万リルとリーズナブルだし。

「もう、コイツでいいんじゃないか？ こつちのいう事を聞いてくれそうな知性があるのは中々いいと思うが」

「戦闘センスも高そうなので騎乗戦闘も少し訓練すれば大丈夫な気がします」

「何より私の『直感』でも致命的な危険は無さそうだし……それにこれ以上グダグダしたくはないし、ここではつきりと決めちゃおう。

……すみません店員さん、この仔を買います！」

「はい、分かりました。中々良い買い物をしたと思いますよ。……それではご精算に参りましょうか」

そんな訳で俺達は表の店内に戻ってカウンターでこの【ライトニング・ストライクホース】を購入したのだった……ついでに割と軍資金が余ったので、主に騎士が使っているという高級【ジュエル】——収納出来るモンスターが一体のみである代わりに各種機能が充実している値段もそこそこ安いタイプ——も買っておいた。

……これは自身の騎馬しか持つ事が無い騎士みたいにタイムモンスターを一体しか持たない人間用の【ジュエル】らしい。俺は今の所本格的にテイマーをやる気はないからこれでいいだろう。

「それで【ジュエル】は俺持ちでいいか？」

「それでいいと思うよ。お兄ちゃんも騎士系の上級職に就いてるし」

「後、兄様であれば後で【従魔師】に就いたりも出来るでしょうしね。

……では、これからフィールドでその子と本格的な顔合わせになりますか、タイムモンスターを街中で出す訳にもいきませんし」

「名前も決めないとね」

そんな感じで、俺達は新しい仲間である「ライトニング・ストライクホース」を手に入れたのだった……これで本格的な旅行に行くのも大分現実味を帯びてきたかな。

〈墓標迷宮〉への再挑戦

□ 〈墓標迷宮〉地下1階

クラッシュヤ 【壊屋】

ミカ・ウイステリア

さて、本日私達はこれで何回目かの〈墓標迷宮〉へとやって来ていました……そして今回の目的はこの前に新しく仲間になった「ライトニング・ストライクホース」 “ヴォルト” のレベリングがメインなのです。

ちなみに名前を決める時に私達三人で色々案を出して紛糾したりしたけど、最終的に『彼が言葉を理解出来るのだから、彼自身に決めてもらえば?』とミメちゃんが提案して、お兄ちゃんが出した案の一つである “ヴォルト” が選ばれた感じだったりする。

……他の案には私の『ウマ太』や『青吉』とか、ミュウちゃんの『キラポン』や『パチリン』とかがあったんだけどお気に召さなかったんだよね。残念。

『……BURURU……（その選択肢ならマスターの案を選ぶしか無いんですが……）』

「……ウチの妹達はネーミングセンスが微妙だから。プレイヤーネームも本名もじって付けさせたし……俺もネーミングセンスとかはそんなでも無いんだがな」

『BURURU（まあ、ヴォルトというのは中々良い名前だと思いますよ）』

うん、ちよつと離れてるから何を話しているのかは分からないけど、名付けとその後の訓練のお陰かお兄ちゃんとヴォルトはかなり仲が良くなったみたい……基本的にヴォルトはお兄ちゃんのタイムモンスターだから良い関係を作れている様で何よりだよ。

勿論、これまでにヴォルトと何度か一緒に戦ったお陰で私やミュウちゃんともそれなりに仲は良くなったけどね。そのミュウちゃんやお兄ちゃんが言うには『ヴォルトは “より強くなりたい” と思ってるお兄ちゃんに自分より強い私達に従った方が良いと思ってる』みたいらしいけど。

『BURURU、BURURU、BURURU、BURURURU（最初はまた年若い

人間に買われたものだとして少し不安ではしたが、一緒に戦ってみると実力は確かでしたし、今回のレベルリングなど私の強化もキチンと考えてくれているので相当無茶な事を言われたい限りは従いますよ』

「まあ、不満が無さそうなら問題は無いからな。レベルリングだけでなく戦闘技術の習得にも積極的なのは有り難いし、本当にいい買い物だったよ」

「そうですね。連携に関してもヴォルトはキチンとコツチの指示を聞いてくれるのでやりやすいですね」

まあそんな感じで、私達は新しく仲間になったヴォルトと今の所は上手くやっていけそうなのでした……しかし……。

「……お兄ちゃん、さつきから気になっていたんだけどヴォルトの言っている事が分かってるの?」

「いや、何となく雰囲気とかからヴォルトの言いたい事を察してるだけだが? コツチの言葉に“はい”か“いいえ”と思ってるかぐら

いは正確に分かるから、ある程度の意思疎通は可能だから。……まあ、正確な事は分からないから【パラディン聖騎士】をカスタムさせた後は

【テイマー従魔師】のレベルを上げて《魔物言語魔物言語》を使える様にはしたいな」

『BUBU (会話が出来た方が連携などの面で便利ですからね)』
……実は本当に会話出来ているとかじゃ無いんだよね? なんかめづちや以心伝心出来てる気がするんだけど……。

『……』

「……おっと、お喋りはここまでだな。〈墓標墓標迷宮〉何時ものお約束であるアンデッド達が来たぞ」

「ハ?……連中は弱いのですが素手で触りたく無いので苦手なのです」

「まあ、ここは遠距離持ちのお兄ちゃんとヴォルトに任せようよ」

アイツらはぶつ叩くと肉片とか肉汁(グロ)が飛ぶからねー。接近戦を挑むとお兄ちゃんに浄化魔法を事前に掛けて貰ったり、洗剤や洗剤が必須なのが面倒くさいんだよなー。

……まあ、アンデッドは知性が無くて動きも単純だから、慣れてくれば誘き寄せてからの遠距離攻撃で一掃出来るから経験値の稼ぎは

結構良いんだけど。ドロップアイテムもシヨボいから《長き腕》を使っても損した気分にはならないし。

「それじゃあまず《ホーリーライト》……そんで《魔法多重発動》《ホワイトランス》！」

『……H I H I E E E N!!!』（《サンダーバースト》！）』

そうして向かって来るアンデッドの群れに対して、まずはお兄ちゃんが《ホーリーライト》——辺りを淡い光で照らす光球を作り出し、その光で照らされてアンデッドを弱体化させる魔法——を使い自分の頭上に光球を展開して連中の動きを鈍らせる。

そして更にお兄ちゃんが多数の聖なる光の槍を放ってアンデッド達の半数ぐらいを浄化し、ヴォルトが帯電しながら前方へ放射状に雷撃を放って残りのアンデッド達を焼き払った。

「さて《ホーリーライト》は暫く持続する上、俺の動きに合わせて移動するからこのまま維持してアンデッドを狩ってくぞ。……しかし、ヴォルトが雷属性スキルを使った時に帯電するのはどうにかならぬいものか。お陰で騎乗戦闘がかなり難しいんだよな、痺れるし」

『B U R U R U R U……（私も抑えようと思ってるんですが、どうも生態みたいで……）』

「以前試したけ時にはお兄ちゃん感電してたもんねー」

「しつかりとダメージ食らってましたね」

どうも、このヴォルト君は雷属性スキルの制御がまだ荒いらしくスキル使用時に肉体が強力に帯電してしまう様である……なので騎乗戦闘をしようものなら乗った人間まで感電させてしまうのだ。

……詳しく調べてみると、彼のスキル欄にはその名の通り《帯電》と言う肉体に電気を纏わせる事で直接攻撃に雷属性を追加、更に纏わせた電気を別の雷属性スキルに上乘せして威力をアップさせられるスキルがあった。

更には《雷の鬣》と言う運動する事で鬣に電気を蓄積し、雷属性スキルを使う時にそれをコストに出来るパッシブスキルがあったりしたし。

「これまでのヴォルトの戦い方から見て、どうも種族的に肉体に雷を

纏わせて戦う事が前提みたいですね。……ヴォルトのこれまでの戦いを見る限り多分ですが、接近戦では帯電する事で敵からの直接攻撃を牽制しつつ反撃というのが主体だったのでしよう」

「後、遠距離戦では雷属性の特徴である『速度』を活かして多少の制御不足と引き換えにスキルを即座に発動、更に威力よりも範囲を重視して電撃で敵の動きを止める事を重視してる感じだからな」

『BURURURU、BURURURU（確かに野生にいた時は強力なモンスター相手にそうやって生き残ってましたが、よくそこまで分かりますね）』

そんな風にお兄ちゃんとミュウちゃんがヴォルトの能力や戦い方を考察しながら、今後の育成方針を練っていた……ちなみに私とミメちゃんはそこまで分からないので置いてけぼりである。

「まあ、ヴォルトのセンスからして騎乗戦闘に関しては今後も練習を続けて技術やスキルを磨けばどうにかなりそうだし、俺も育成や騎乗に補正が掛かるジョブを今後は取っていく予定だからな」

「とりあえず今はレベリングの時間なのです。今回は脱出用の『ジエム』《エスケープゲート》も三人分手に入れていきますし行ける所まで行ってみましょう」

「旅行に行ったら〈墓標迷宮〉には潜れなくなるし、一回ぐらいは私達で本格的にダンジョン探索を試してみたいしね」

『BURURU（脱出手段があるなら文句は無いですよ）』

実は以前地下10階のボスを倒した時の「エレベータージエム」は持っているのですそこから始める事も出来るんだけど、ヴォルトのレベリングと折角だから腕試しも兼ねて最初から探索したいという事で今回は使いません……そうして私達は〈墓標迷宮〉ダンジョンアタックを始めたのでした。



□ 〈墓標迷宮〉地下16階 【従魔師】レント・ウイステリア

そんな感じで俺達は地下5階のボスを《ピュリファイ・アンデッド》

《ホーリーライト》の対アンデッドデバフ重ね掛けからの《グランドクロス》で蒸発させたり、地下10階のボスを作り貯めしておいた火属性【ジエム】を連発して焼き払ったり、地下15階の獣系ボスをなんとか倒したらして順調に地下16階へと足を踏み入れていた。

……まあ、ご覧の通り終始俺が活躍して経験値を稼いだので【聖騎士】がカンストし、メインジョブを【従魔師】に変更したりしている……勿論、ヴォルトや妹達も相応に活躍していたが。

「……というか、お兄ちゃんが無双し過ぎ。ボスとかほぼ単騎撃破じゃん」

「伊達に今までソロで《墓標迷宮》に潜って経験値稼ぎをして来た訳では無いからな。地下10階までは俺の庭だ。16階以降の獣型もパーティーで連携を組めばどうにかなる」

「流石兄様、頼りになるのです」

ただ、ここから始まる地下16階以降には、俺もまだ行った事が無いんだよな……近衛騎士団のクエストでも『これ以降の階層では組織立ったモンスターの襲撃やタチの悪いトラップが増えて来て、危険度が高くなるので経験値稼ぎでは進みません』と言われたし。

……そして、その危険度が大幅に上がるらしい地下16階から20階までのエリアに出現するモンスターの種類は……。

『……GYA!? GYAGAGA!』

『GUGAGA! GYAGEGO!』

「……おっと、どうやら【ゴ布林・スカウト】に見つかった様だな」
そう、このエリアに出現するのは多種多様な脅威のゴ布林達なのだ……ゴ布林なら大して強くなくね？ と思うかもしれないが、連中の最も厄介な所は知性がありキチンとした連携や戦術をもつて向かってくる所なのである。

……具体的に言うとな狭い通路とかで前衛と後衛が連携したり、ダンジョンにある罠にこちらを率先して嵌めようとして来たりする事はザラらしい。

「なので、まず偵察は速攻で潰そう。《魔法多重発動》《フレイムアロー》！」

「つまり連携される前に数を減らすって事！ 《ブラスト・スウィング》！」

『BRUAAA! (分かりました。《サンダーアロー》!)』

『『GYAAAAA!』』

そういう事で俺が複数の炎の矢を、ミカが「ギガース」から放たれる衝撃波を、ヴォルトが雷の矢をそれぞれゴブリン達の一団に放って連中を一掃した。

……この程度の攻撃で倒せたって事は低位の種族しか居なかったという事だし、となると連中は偵察班だろうから本命の群れが何処かにはいるだろうな。とりあえず《魔物索敵》っと……。

「……ふむふむ、ここから少し離れた所の11時の方角に二十体ぐらいのモンスターの群れを確認したぞ。どうも動く様子は無いみたいだが」

「偵察役を直ぐに倒したからこっちに気がついていないのかな？」

「結構派手に戦闘音がしましたし、それは無いと思いますよ姉様。

……待ち伏せか罠でしょうか」

これまでの階層では戦闘音を聞きつけたら何も考えずに向かって来る連中が殆どだったんだが、このゴブリン達はこういう厄介な対応を取って来るみたいだな。

「……とりあえず、無難に罠や待ち伏せに注意しつつ慎重に進むという事で」

「オツケー」

「分かりましたのです」

『BURRU (承知したマスター)』

……まあ、初見の階層で何があるか分からないから無難に安全策で行こうか。



……という訳で警戒しながら迷宮を移動する事暫く、俺達は曲がり角の向こう側に陣取ってこちらを待ち受けているゴブリン達を発見

したので、今は身を晒さない様に向こうから見て角の死角に身を潜めた。

……少し見たただけだが、どうも「ホブゴブリン・コマンダー」に率いられた部隊みたいだな。通路の狭さを活かして前衛に壁役を布陣、後衛に魔法や弓が使えるゴブリンを置いてるから正面から普通に挑むのはキツイか。

『『GIGIGIGI……』』

「……全然仕掛けて来ないな。こっちには気付いていると思うんだが……」

「お兄ちゃん、多分これ罠だよ。何となくだけど連中の手前の床が怪しい気がする」

ミカにそう言われたので《トラップサーチ》で探してみると、確かにゴブリン達から十メートルぐらい先の床に何かの罠の反応があった……その種類までは分からないが、多分床に接触した際に発動するヤツだろう。

……まあ、これで向こうの目的はこつちを罠に嵌める事だと分かったんだがどうするか。迂回して撤退も視野に入れるべきかな。

「ですが迂回ルートだとかなり遠回しになりますし、逃げ続けるだけではまともな探索は出来ないと思うのです」

「そうだねー。……とりあえず私が突っ込もうか？ 床の罠をどうにかする手もあるし」

「ふむ……まあ今回は可能な限り挑戦する予定だったしな。だが援護射撃ぐらいはやらせて貰うぞ。ヴォルトも頼む」

『BURU（了解）』

そんな感じで手早く作戦を纏めた俺達は曲がり角から出てゴブリンの一段へと戦いを挑むのだった。

「まずは牽制。《魔法多重発動》《魔法発動加速》《ヒートジャベリン》！」

『BURUAAA！（《サンダーアロー》！）』

『ッ!?？ GYAGYAッ！』

『『GAAAー』』

角から出て直ぐに俺とヴォルトが炎の槍と雷の矢をゴ布林達に向けて放つが、コマンダーの指示によって前に出た「ゴ布林・ウォーリア」や「ゴ布林・シールド」に防がれたので大した被害は与えられなかった……が、向こうが一瞬怯んだ隙を突いてミカが高いSTRとAGIを活かした踏み込みを使って全速力で突っ込んで行った。

……それに気付いたゴ布林達も魔法や弓矢で攻撃するが、ミカは得意の「直感」でそれらの攻撃を躲すか「ギガス」を盾にして防いで進んでいき床の罫の数メートル手前ぐらいで停止した。

「……まあ、解除の手段が無いので遠間から強制起動させるだけだどね！」《クエイク・インパクト》！

『『G E A ! ? ? 』』』

そしてミカは大上段に振り上げた「ギガス」を地面に叩きつける事で放射状に地を這う振動波を発生させた……成る程、これなら罫を発動又は破壊した上で、足元を揺らしてゴ布林達の動きを止められるから一石二鳥というヤツだな。

……さて、この振動である罫は一体どうなるかと思つて見ていたら床から毒々しい色合いの煙が勢い良く噴き出した。これは毒ガスの罫みたいだな。

「うおっと！ 毒ガスの罫だったか！ ……あ、これ無視しても大丈夫なヤツだ。《インスタントエンパイア》」

「……毒ガスならこちらに来る前に吹き飛ばせばいいだけだしな。《ウインドブロウ》」

『『G A A A A ! ? ? 』』』

そういう訳でまずミカは「クインバース」のスキルを使って状態異常対策をしながら毒ガスの中に突っ込んで行き、俺は魔法で強風を起こして毒ガスをゴ布林達の方向へと吹き飛ばした。

……うん、ゴ布林達が毒ガスに巻かれて混乱している所を見ると向こうも罫の種類は把握出来てなかったのか？ この毒ガスなら普通に発動するだけでゴ布林達も影響範囲に入りそうだし。

「邪魔だよ！ 《ウィールド・メイス》！ ……そんでまずは指揮官から潰す！ 《ギガント・ストライク》！」

『GYAAAAA!?!』

『GI?!? GEHAAッ!!』

そうしてミカは【毒】の状態異常によって混乱しているゴ布林達に突っ込みながら【ギガス】を振り回して前衛を固めていたゴ布林を吹き飛ばし、陣形が崩れて後衛への道が開けた所で「ホブゴ布林・コマンダー」に接近して文字通り叩き潰して地面の染みへと変えた。

……個々の実力自体は今の俺達なら問題無く相手に出来る範囲だし陣形さえ崩れればこんなものか。しかし狭い通路で乱戦になつている上、毒ガスで見えにくいから魔法での援護がやり難いな。

「……こういう敵含む無差別状態異常だと《エフェクト・ミラーリング転位模倣》は意味ないですね。……エレメンタル化のお陰で酸素はそんなに必要無いですし息を止めれば行けますかね?」

「いや、俺は【司祭】プリーストも取ってるから毒性を軽減するぐらいは出来るし。《ホーリー・ゾーン》」

それを見たミュウちゃんそんな事を聞いて来たので、俺はとりあえず周辺の病毒・呪怨系状態異常を軽減する結界を張つてからゴ布林達を倒すべく毒ガスが蔓延する向こうへと向かつていった。

……幸いというか毒ガスと指揮官の不在によってゴ布林達は最後まで混乱から抜け出せなかつたので、特に問題無く俺達はゴ布林を各個撃破していき程なくしてゴ布林達の全滅によって戦闘は終了した。

「よし終わった! ……しかし、罫を利用して待ち伏せとか難易度が一気に上がった気がする……」

「確かにな。……ゴ布林は個々の実力は低いけど頭はそこそこ回るのが厄介なんだよな」

「馬鹿ですが愚かでは無い感じですね」
『BURURURU……(野生だった時にもゴ布林を舐めてかかった同胞が逆に餌にされてたなあ……)』

……とにかく、俺達は油断や慢心せずには気を付けて行動する事を改めて確認し合いつつ、引き続きダンジョンの探索を行うのだった。

〈墓標迷宮〉を進め

■ 〈墓標迷宮〉地下19階 ???

……王都の地下にある神造ダンジョン〈墓標迷宮〉、その内ゴブリンなどの鬼系モンスターが出現する階層に一つの影があった。

『……』

……「ソレ」は身長2メートル程の細身の人型で両手は薄く鋭い刃となっており脚は鳥の様な三本の爪があつて、その全身は闇の様に真っ黒な鉱石で構成されていた……そして「ソレ」は獲物を求めて〈墓標迷宮〉を徘徊していた。

『……』

……「ソレ」はこの〈墓標迷宮〉を運営する管理AIの一人であるジャバウオックが作り上げたモンスターで、与えられた役割は地下15階以降をランダムに徘徊して遭遇した人間を始末する……所謂『徘徊型のボスモンスター』として作られたモノの一体であつた。

『……』

……だが、「ソレ」が他のランダム徘徊型のボスモンスターと違う点はその一体しか作られていない……否、作る事が出来なかつたと言う事である

『……！』

……そうして「ソレ」——逸話級^{ユニーク・ボス・モンスター}へU B M^{ボクサー}【刻傷黒晶 ブラックオート】は発動中のスキル《人間探知》の効果範囲内に反応があつたとみると、《気配操作》と《消音》のスキルを使いつつ〈墓標迷宮〉内のあらゆる障害物をすり抜けながら真っ直ぐにその反応があつた地点へと進んでいった。



□ 〈墓標迷宮〉地下17階 【^{ボクサー}拳士】ミュウ・ウイステリア

あれから更に下に降りて現在地下17階、私達は探索中に遭遇したゴブリンの群れと何度目かになる戦いを行なっていました……今回

は一つの群れと戦っている間に後方から追加でゴブリンが現れたので、まだ残っている前方のゴブリンを私と姉様が、後方から来た連中を後衛だった兄様とヴォルトが反転して迎え撃つ形になっています。

「よつと《カウンターブロー》！」

『GA!?!?』

「そつちは《旋風脚》！」

『GI!?!?』

「後ろは《バックナックル》！」

『GU!?!?』

まず、私は正面から来た両手剣を装備している「ホブゴブリン・ソードマン」の上段からの振り下ろしを半身になって避けると共にカウンターで顔面を殴り飛ばし、横合いから襲い掛かって来た槍装備の「ゴブリン・ランサー」をその槍ごと回し蹴りで吹き飛ばし、更に背後から気配を消して奇襲を仕掛けて来た「ゴブリン・アサシン」を足音で察知して裏拳で迎撃しました。

……このぐらいの相手であれば、威力の低い格闘系スキルでも一撃で倒せるぐらいには私もレベルが上がりましたからね。格闘系スキルは出が早く技の後の隙も少ないので、連続使用で多数相手でも無双っぽい事が出来るのです。

『いや、ばい〴〵じゃなくて実際無双してない？ ゴブリン達が群れている真ん中に飛び込んで片っ端から殴り倒している訳だし』

「そんな事は無いですよミメ。私がそう見えるのは単に集団の中を上手く立ち回って一対一の状況を何度も作っているだけですから。……それに無双と言うなら姉様の方が相応しいでしょう。ほら」

「纏めて吹き飛ばし！ 《ウィールド・メイス》！」

『『GYAAAAA!!』』』

そう言つて私が横を指刺すと、そこには両手に持った巨大メイス型《エンブリオ》「ギガス」を横薙ぎに振り回して、周囲のゴブリン達を片っ端から肉片に変えている姉様の姿がありました。

……やっぱり雑兵相手だと細かい技術よりも圧倒的なステータスが正義ですね。特に姉様のSTRは既に5000に迫りますから下

位のゴブリン程度なら掠っただけで致命傷ですし。

『《ウエポン・ブレイク》！ 《ハードストライク》！ 《インパクト・ストライク》！ 特典武具のお陰でSPは幾らでもあるからアクティブスキル連発も可能なのだ！ メイスのスキルは大振りのヤツが多いから連続攻撃にはならないけど！』

「というか、一回殴る度にゴブリンが一匹ミンチになってますからね。それでは連続攻撃にはならないでしょう」

姉様の高いSTRとヘエンブリオやジョブスキルによる防御減少のコンボ攻撃はまさに文字通りの一撃必殺ですからね……さて、奇襲を仕掛けて来た連中の相手をしている兄様達は……。

『BURUAAA！ 《迅雷の蹄》！』

「全く、雑魚ではあるが後ろから襲われると面倒極まりないな！ 《セイクリッド・スラッシュ》」

『GUGYAAA!?!』

勢いよく嘶いたヴォルトが雷を纏った後ろ脚で「ゴブリン・バンデイト」の頭部を蹴り碎き、兄様が愚痴りながらも手に持った剣に聖なる光を纏わせた斬撃で「ホブゴブリン・アサシン」を防御しようとした短剣ごと斬り捨てました。

……後方から来たのは《気配遮断》スキル持ちの隠密部隊で、戦闘能力は然程でも無かったので二人にあっさり蹴散らされていますね。肝心の奇襲も姉様の「直感」のせいで意味無かったですし。

「……よしっ、終わったー！ しかし、背後からのアンブッシュとかちよつとヒヤツとしたかな」

「まあ、敵が雑兵ばかりだったので対処出来ましたが。……このゴブリンエリアからは敵のステータスよりもダンジョンとしての難易度が上がっている気がするのです」

「お試し的だった植物エリアに対して、このエリアから本格的にダンジョンギミックが導入されている感じかな。……こうなると【盗賊】バンデイトとかの探索系ジョブも欲しくなる」

まあ多分、このエリアからは「キチンとしたダンジョン探索の為の役割分担が出来たパーティーで攻略する」事が前提って感じですか

ね……敵が連携して来たり状態異常系の攻撃や罠も多いので、ソロプレイだと余程の実力が無い限りは途中で倒れますね。

「私達も決してバランスの良いパーティーでは無いし数も少ないですからね。……今は各々の能力が高く敵の能力が低いからどうにかなっています」

「今後もそうとは限らないし気を付けて行動しようって事だね、ミュウちゃん。……それに何かこの先に強敵が待ち構えている様な気がするし、その上で先に進んだ方が良い気もしてる」

「……それなら行くか。今日はダンジョンに挑戦する為に来たんだからな」

姉様が「何かを感じ取った」という事はほぼ確実にこの先で『何か』が起こるのでしようし、兄様の言う通り今日は挑戦する為に来たのですから油断せずに行きましょう。

……まあ、本当に危険なら姉様は『先に進んだ方が良い』とは言わないでしょうし、最悪でも私達がデスペナするぐらいで済むでしょう。

◇

「……ふむ、その床にトラップがあるな。とりあえず離れて遠隔で発動させるか。《ストーンバレット》」

「……あ、床に大きな落とし穴が。古典的だね……モンスターが居なければ対応は可能かな」

「落とし穴の深さは2メートル程で戦闘系ジョブであればひとつ飛び出来るでしょうが、戦闘中に嵌ったら面倒ですね」

『BURURURU（馬的には天敵ですね。垂直ジャンプは苦手です）』

「罠は単体ならどうにでもなるんだがモンスターと一緒に来られると面倒なんだよな。戦闘時には罠の位置は常時把握出来た方がいいか」

◇

『GAOOOOO!!』

「ワオ、デカイのが一体、「オーガ・ファイター」か。……ここってゴブリンエリアじゃ無かったっけ？」

「正確には鬼系のモンスターのエリアという事なんだろうよ。オーガってゴブリンの進化種だと聞いた事があるし」

「……ですが、集団で連携を取ってくるゴブリン達と比べればやりやすい相手なのです。特に私とミメには」

『《アビリティ：ミラーリンク天威模倣》STR2470だよ。それ以外はコツチとそんなに変わらない』

「ステータスは姉様よりは低い様なのでどうとでもなりますね」

「それじゃあさっさと倒そうか」

『……BURURU（……まあ、そうなりますよね）』

『GAOOOOO!?!?』



「わーい、宝箱見つけたー。ウレシイナー（棒）……真面目に言うところには罨な気がするよ。私の勘だと中身はちゃんとした物っぽいだけど……」

「まあ、あの宝箱は何故か結構広い部屋の中央にこれ見よがしに置かれていているしな。余りにも胡散臭すぎるし……宝箱自体からは罨の反応はしないんだが部屋に何かあるとか？」

「この手のお約束だとモンスターハウスとかですかね。……宝箱を取った瞬間に扉が閉まって大量のモンスターがってヤツです」

「じゃあ扉につつかえ棒でもすれば良いのかな？ ……引き戸みたい

だし【ギガース】を間に差し込んでおけば良いか。長さも丁度良いし」
「へエンブリオ」の扱いが随分雑だな。……それはさておき、あの宝箱をどうするかだが……」

「じゃあ、私がちよつと取って来るのです。……姉様はここで扉を抑える必要がありますし、兄様には万が一の事に備る援護の役割があり

ますから」

「……分かったよ、気を付けてミュウちゃん。私の勘だとそれで大丈夫な気がするけど油断出来ないからね」

◇

……ビィーツ！ ビィーツ！ ビィーツ!!!

『『『GUGYAAAAA!!!』』』

「はい！ 宝箱を開けたら中に凄く強そうな剣が置いてあったので取り出したら警報が鳴って隠し扉が開き大量のゴブリンが！」

「早口で説明ありがとうミュウちゃん！ それより早く戻って来て！」

「この扉が閉まりそうで抑えてる【ギガス】がガタガタ言ってる！」「まあ準備はしていたが！ 足止めする！ 《ファイアーウォール》！」

「ナイスです兄様！ ゴブリンが炎の壁に怯んでいる間にっ！」

「よっしゃ！ 扉を閉めるよ！」

「……ついでにコレも入れておくか」

◇

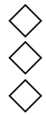
「さて、どうにか脱出出来ましたけどどうしましょう？ この扉の向こう」

「……それよりお兄ちゃん、さつき扉が閉まる前に部屋の中に何か入れてたけどアレは？」

「アレは【ジェムー《オキシジェン・バーン》】と言ってな……あの中に込められた《オキシジェン・バーン》は周辺の大気中にある酸素を燃烧させて酸欠にする火属性魔法で、屋外だと直ぐ効果範囲から酸素が補充される為に大した効果は無いが、密閉された室内とかだと酸素濃度を一気に下げられるってヤツだ」

「……あつ（察し）」

「……本当に抜け目ないですね兄様」



□〈墓標迷宮〉地下18階 【テイマ從魔師】レント・ウイステリア

「いやあ、見事に数十体はいたっばいゴブリン達が殆ど全滅してるね。……酸欠って怖い」

「兄様の策が完璧に嵌ってましたからね、お見事です」
「俺もあそこまで上手く行くとは思わなかったんだがな」

そんな事を話しながら俺達は扉を少し開けて先程のモンスターハウス（全滅）の様子を伺っていた……詳しく部屋の中を調べてみるとどうやらさっきの扉以外は隠し部屋があっただけで、そこには通気口とかが無い密閉空間だったから酸欠戦術が完全に嵌った様だ。

……実を言うと嫌がらせと牽制ぐらいの気持ちで、作ったけど売れなかった【ジエム】を投げ込んだんだけどな。【ジエム】《オキシジェン・バーン》って効果を発揮するには場所を選ぶ上に自分を巻き込む可能性も高いから人氣が無くて……。

「まだ生きているヤツもいるけど酸欠でまともに動けないみたいだし、さっさとトドメを刺しちやおうか。……あ、どうせならヴォルトにやらせて経験値を稼がせるとか」

『……BURURU（……まあ、やれと言うならやりますが）』

平然とそんな事を言うミカにヴォルトがちよつと引くと言う一面もありはしたが、それ以外は特に何事も無くモンスターハウスの後処理は完了した……ああ、そう言えば……。

「ミュウちゃん、あの宝箱に入っていた剣はどんな物だったんだ？」
「ええと、特に見もせずアイテムボックスに突っ込んだのでよく分からないのですが……あつた、コレですね。良い物だといんですけど……」

そうしてミュウちゃんはアイテムボックスから豪華な装飾が付いた黒っぽい片手剣を取り出した……ふむふむ、見た目は近衛騎士団の人達が使っていた騎士剣に似てる気もするが、どれ《鑑定眼》つと……。

【ナイトブレード・カースペイン】

かつて憎悪に取り憑かれた【聖騎士】が魔物を斬り殺し続けた結果、使用していた聖剣が変質して呪われた魔剣となった物。

高い強度・攻撃力を持ち、魔物に対する特攻と呪いと闇属性を併せ持つ斬撃を放つ力があるが、その呪いは使用者をも蝕む。

・装備補正

攻撃力+666

防御力+42

・装備スキル

《魔物特攻》Lv8

《破損耐性》Lv4

《闇属性適正》Lv3

《呪術適正》Lv6

《フロントムペイン》Lv6

《怨讐の闇刃》Lv7

・呪い

【呪詛】【狂化】【幻痛】

※装備制限：合計レベル300以上

……高い装備攻撃力とか強力な装備スキルがある代わりに呪いがいくつつか着いてるのか……うん。

「やっぱり呪われてるじゃ無いですかヤダー！」

「モンスターハウスの宝箱の中身が呪いの武器とか、この迷宮を作ったヤツは性格が悪いね」

……この【ナイトブレード・カースペイン】性能は確かに優秀なんだが、装備すると【狂化】の呪いで見境なく暴れる上に【幻痛】の呪いで身体に激痛が走り、更には【呪詛】でそれらが強化される仕様みたいだな。

まあ、《マスター》なら痛覚オフがあるから【幻痛】は無視出来るかもしれないが【狂化】で制御不能になるのはどうしようもないな。はーつつかえ！

「……私は武器を装備出来ないので兄様に預けて置きますね」

「まあ、一応騎士剣みたいだし【聖騎士】^{パラディン}のお兄ちゃんなら行けるんじゃない?」

「呪いの武器を扱うのは【暗黒騎士】^{ダークナイト}とかの領分なんだがな。……とりあえず何かに使える時が来るかもしれないし仕舞っておこう」

俺が受け取った^{押し付けられた}【ナイトブレード・カースペイン】をアイテムボックスに仕舞った後、俺達は再び〈墓標迷宮〉の探索を続行しようとし……直後、ミカが何かを感じ取ったかの様に足を止めて通路の向こう側を見た。

「……全員警戒、向こうから何か来るよ」

「分かった」

「了解です」

『……BURURU（……何かあるのか?）』

その先程までと比べると明らかに張り詰めた雰囲気になったミカを見て、俺とミュウちゃんは即座に本気での警戒態勢を取り、それを見たヴォルトも何かを察したのか警戒を強めた。

……すると通路の向こう側から何か近づいて来る足音が聞こえてきた。《魔物索敵》が反応しないからモンスターでは無いし、《殺気感知》や《危険察知》も反応が無いのだが……。

「……ハア……ハア……ハア……ッ! ……クソッ! まだ追って来てるか?」

「わ、分かんないですう!」

『うしろにはいないみたいだけど』

「……ん? アレってアットじゃ無いか? もう一人は確か同じクランのリゼ・ミルタだったか」

「あの浮遊している妖精さんには見覚えがありますね。……今は一人しか居ないみたいですが」

そう、通路の向こうからやって来たのは俺達にとっても顔見知りば〈Wiki編纂部〉のメンバー達だったのだ……彼等もこの前のクエストで【許可証】をてに入れていているからここにいるのは可笑しくは無いが、しかしどうやら何か焦っているみたいだな。

……とりあえず声を掛けてみるか。よく見ると彼等は激しい戦闘

をした後の様にボロボロであるり、装備は血塗れになっているので周辺への警戒はそのままだな。

「ようアツト、そんなに焦ってどうしたんだ？」

「ツ!?? ……なんだレントか、脅かすなよ。……って、そんな事を言ってる場合じゃ無い! ッヤッ」が来る!」

そうアツトは焦った声で後ろを向きながら俺にそう言ったので、それに釣られて俺も通路の向こう側を見たが……そちらには暗闇があるだけで何も無かった。

「……ツ!?? お兄ちゃん後ろ!!!」

「何っ!??」

……その直後に発せられたミカからの警告を聞いた俺は反射的に後ろを振り向いた……するとそこには通路の壁をすり抜けて現れた身長2メートル程の黒いマネキンの様なモンスターが、俺に向けて両手に備え付けられた剣を振り抜こうとしていた所だった。

『……』

「ちい!!!」

ソイツの速度は俺を遥かに上回っているので回避は不可能だと判断した俺に出来た事は、咄嗟に手に持っていた剣をどうにかその斬撃の軌道に割り込ませる事だけであり……その相手の斬撃は掲げた剣をすり抜けて俺の首を刈り取る軌道を描いた。

「なっ!??」

「レント!??」

『BURUA!?? (レント殿!??)』

……そんなアツトとヴォルトの声が聞こえる中、その黒いマネキナー【刻傷黒晶 ブラックオーツ】の斬撃は俺の首を薙いだのだった。

V S 【刻傷黒晶】

□〈墓標迷宮〉地下18階

『……!』

「グツ!?」

……突如として〈墓標迷宮〉の壁面から現れてレントの首を刈り取った逸話級ユニーク・ボス・モンスターへU B M【刻傷黒晶 ブラックオーツ】に対して、その場の者達の対応は大きく二種類に別れた。

「なっ!?」

「レント!?」

『BURUA!? (レント殿!?)』

まずは動けなかったアツト、リゼ、ヴォルトの三名……この内アツトとリゼの〈Wiki編集部〉組は事前の「ブラックオーツ」との交戦で自分達には打つ手がないと思っていたが故に、ヴォルトはタイムモンスターとしての経験不足が原因となって咄嗟の行動が出来なかったのだ。

尚、ヴォルトは同種の中でも人間と遜色無いレベルの高い知能を持っているので、もし野生のままであれば『全力で逃亡』という「最適解」を選ぶ事が出来たのだが、タイムモンスターとして信頼を抱きつつあったマスターがやられた事で咄嗟の判断が出来なかった形である。

……そしてもう一つは「ブラックオーツ」に対して即座に対応した首を刈られたレントを含むウイステリア三兄妹である。

「……【ブローチ】が無ければ即死だったぞっ!!」

『……!?』

自らの命の代わりに砕けた「救命のブローチ」を懐から零しながらも、レントは己の首を刈り終わった「ブラックオーツ」に対してカウンターの蹴りを放って押し出しつつ距離を取った。

ちなみにこの「救命にブローチ」は以前〈墓標迷宮〉のボスを倒した際に手に入れた物で、その後レベリングの為に単独で行動する兄に付けておいて欲しいと渡した物だったりする……それから一度も命

の危機には合わなかったので装備したままだったのが幸いした形になつたのだ。

……更に蹴り飛ばされて態勢を崩した【ブラックオーツ】に対し、三兄妹は即座に三方向に散って攻撃範囲を被らせる事無く同時攻撃が出来る位置を取った。

「お返しだ！ 《クレセント・エッジ》！」

「《波動拳》！」

「《クエイク・インパクト》！」

そしてレントが降った剣から放たれた三日月型の聖属性斬撃波が、ミュウの正拳突きから放たれた衝撃波が、ミカが【ギガース】で地面を叩いた事で生じた地を這う振動波がそれぞれ【ブラックオーツ】に襲い掛かった。

『……』

「……ふむ、擦り抜けたか」

……だが、聖属性の斬撃波と魔力による衝撃波は【ブラックオーツ】の身体を擦り抜けてしまったのでダメージを与える事は出来ず、唯一地を這う振動波によって態勢を若干崩す事が成功した程度だった。

……これは【ブラックオーツ】のスキルの一つである《ダークネス・クリスタル暗黒晶身》による物質透過能力によるものであり、これによって武器や魔法による攻撃全てを無効化された事がW i k i 編集部へ半壊の原因なのだ。

「レント！ そいつには武器も魔法も擦り抜けてしまう！ 後、攻撃を受けると【治癒障害】の状態異常を受けるぞ！」

「……ふむ、だが俺の蹴りは普通に当たったよな？ それにその時の感触からして……ミュウちゃん、ミメ、迎撃を頼む」

「了解しました」

それを見たアツトは【ブラックオーツ】が警戒して様子見をしている間に自分達が交戦した結果得た情報を簡潔にレント達へと伝え、それを聞いたレントは先程の攻防から得た情報を踏まえて「最適」と思われる指示を出した。

……それとほぼ同時に様子見を終えた【ブラックオーツ】が亜音速を超える速度でレント達に向かって来た。

『……………！』

『アビリティ・ミラーリング天威模倣』！

……STR2479、AGI8545！ 後、多分ENDは低いよコイツ！』

「分かりましたよミメ……では殴り合いましたらどうか」

だが、その突撃はスキルによって「ブラックオーツ」と同じ速度を得たミュウが割り込んだ事によって止められた……眼前に立ち塞がった相手に「ブラックオーツ」は即座に両腕の刃を振るうが、ミュウは立て続けに放たれるそれらの斬撃を次々と躲していく。

……この際に「ブラックオーツ」は『ステイグマ・ブレード断刻傷深』——MPを消費する事で生物に対する攻撃力を大幅に増加させて、更に負わせた傷に魔法やポーションでの回復がし難くなる「治癒阻害」の呪いを与える効果を自身に付与するスキル——を使っているが、そもそも攻撃が当たらない以上は意味が無い。

『……………！？？』

「……まあ、殴り合う分には問題無さそうですね。『ソニックフェイス』ト』——」

その内「ブラックオーツ」が自分の攻撃が中々当たらない事に焦れて僅かに斬撃が大振りになった隙をミュウは見逃さず、その一閃を紙一重で回避しながら懐に潜り込んで出の早いパンチを胸部に叩き込んで、相手の鉱石の様な身体の一部を砕きながら殴り飛ばした。

……それを見たミュウは僅かに下がりながら殴った拳を眺めて、少し思案した後「ブラックオーツ」の能力に対する自分の考察を述べた。

「……アレを殴った際に籠手では無く生身の拳が当たりました。おそらく、あの透過のタネは生物だけがアイツに触れられる辺りじゃないかと」

「まあ、俺の剣を擦り抜けて首に直接当たっていたからな。闇属性魔法みたいな感じか」

「走ってたし、地面を揺らすのも効いてたから『接地』はしてるっばいけどね」

そう、彼らの推理通り闇属性鉱物型エレメンタルの〈UBM〉であ

る「ブラックオーツ」のスキル《暗黒晶身》は『生物以外のあらゆる物質・能力を透過する』という物であり、一部の閻属性エレメンタルが保有する《物質透過》のスキルを魔法やスキル効果にすら適応出来る様に強化した物である。

更にMPを微量に消費する事で任意の生物以外の対象に接触する事も可能であり、接地程度であれば自然回復で賄える程度のMPしか消費しない事もあって高いAGIを使って走る事も問題無い。

……人間が使う「ほぼ」あらゆる武器や魔法・スキルを無効化出来るこのスキルは非常に強力な物であり、高いAGIと《断刻傷深》や奇襲戦術を組み合わせれば、武器や魔法が主軸だったからでもあるが現時点での「マスター」達の中でも高い実力を持つ「Wiki編集部」パーティーを無傷で半壊させられる程である……のだが……。

「……まあ、これ以上何か「奥の手」でも無ければ私単独でも負ける要素はありませんね。軽く小突いてあれだけのダメージな所やミメの感覚からして、どうもアレはENDが相当低い様ですから」

「これだけ強力な防御スキルがあればENDやHPなんて基本的に無駄だろうからな。……じゃあミュウちゃん任せた」

「……い」

そう言ったミュウはレントと僅かに言葉を交わした後に、再び「ブラックオーツ」に突っ込んで格闘戦を挑みに行った。

確かに「ブラックオーツ」は強力な「UBM」であり《暗黒晶身》は最高クラスの防御スキルなのだが、それだけのスキルを身に宿すが故に「いくつかのデメリット」を背負ってしまっているのだ……例えば、ステータスの内HPとENDが亜竜級以下ぐらいいまで低い事などとか。

「……い……!?? ……」

「確かに貴方は速いですし、攻撃の威力も高いのですが……余りに技術と経験が足りません。師匠や格闘家ギルドのティアン達と比べても劣ります」

そんな事を言いながら、ミュウは当たり前の様に「ブラックオーツ」が立て続けに振るう両腕を回避しながら、スキルすら使わないただの

拳による通常攻撃でその身体を徐々に砕いていった。

この「ブラックオーツ」はスキルとして高レベルの《剣術》《体術》なども保有しているが、「許可証」を手に入れた《マスター》に対応する為に最近《墓標迷宮》に派遣されたので、戦闘経験自体は《Wiki 編集部》との戦いを含めても数える事しか無いのだ。

……故にスキルによる技術に経験が追い付いていないので攻撃の組み立てや間合いの取り方が甘く、そこをミュウに付け込まれて徐々に追い詰められている状態である。

「まあ、技術云々はともかく戦術が未熟なのは事実だよな。……奇襲が失敗した時点で床抜け・壁抜けで逃亡して、再度奇襲を仕掛けた方が良いだろうに」

「……それは分からなくも無いが、妹が一人で戦っているのに随分と余裕だな」

「ミュウちゃんなら問題無いかな。私達が迂闊に攻めると足手まといになりそうだし。……それに相手の逃亡や切り札にも気をつけないといけないしね。ミュウちゃんもそれを警戒してスキルを使わない手数重視で攻めてるからね」

『BURURU……（成る程……）』

そうやって外野が邪魔にならない程度に話している間にも、ミュウは「ブラックオーツ」の攻撃に対応してしまい双剣を掻い潜ってその懐に潜り込んだ……が、突如として「ブラックオーツ」の胸部から何本かの細い剣が生えてきて、懐に潜り込んできたミュウを迎撃した。

……直前にその攻撃に気付いたミュウは咄嗟にバックステップで距離を取って直撃を避けたが、それでもいくつかのかすり傷を負ってしまう。

「チッ！ やはり奥の手を隠し持っていましたか！」

『……!!!』

そして距離が開いた所で「ブラックオーツ」は胸部の剣を引っ込めると同時に後退、間合いを広げた所で両腕を高速で伸長させて両手に付いた剣による遠距離からの斬撃をミュウに繰り出して来たのだ。

……これが「ブラックオーツ」の奥の手であるMPを消費して自身

の肉体の鉱石をある程度変形させる事が出来る、いくつかの鉱物系エ
レメンタルが簡易的な肉体修復や環境への適応の為に所有している
スキル《マテリアル・デIFOーム》である。

「ツ！ 距離を取られましたか！」

『……！……！！』

不意打ちの遠隔斬撃をミュウはギリギリで回避し続けるが、いきな
り攻め手のパターンが変わった所為か完全には避けきれず肉体にい
くつかの切り傷が付いてしまった。

それをチャンスと見たのか【ブラックオーツ】は腕部の伸縮を更に
高速化させてミュウを攻め立てていく……生物による直接攻撃以外
が通用しない【ブラックオーツ】にとって“距離を離して戦える”と
いうのは非常に強力であり、それがただの形状変形スキルである《マ
テリアル・デIFOーム》が“奥の手”となっている所以である。

『……！……！！』

「……さて、このままだと近づくのは少々面倒ですね……私一人なら」
このまま攻め続けて【治療阻害】の状態異常で体力を削っていけば
勝てる【ブラックオーツ】は考えていたが、ミュウは自分達の勝利
を確信しているが故に涼しい顔で淡々と攻撃を捌き続けていた。

『ミュウ、受けた攻撃は全部 “ストック” 出来てるよ』

「……ふむん、こういう奥の手だったか。遠隔攻撃とは予想してい
たけど、アレならどうにかなるかな」

「アツト、少し聞きたいんだがアイツと戦った時に使った魔法で……」

……自分の“頼りになる味方達”による反撃の準備が整うまでの
時間を稼ぐ為に。



「……いや、その属性の魔法はヤツには使わなかったな。だが確かに
ヤツの特性を考えれば……」

「やってみる価値はありますね！ 私達も使えますよ！」

『まかせろー。わがはらからのかたきうちだー』

「じゃあアット達は準備しながら俺のが効いた時に追加で頼む」

「……話は終わった？ それじゃあ私はミュウちゃんの援護に行つてくるよ」

レントがアット達にした確認が済んだ所で、ミカは攻撃をさばき続けているミュウを助ける為に【ギガース】を構えて【ブラックオーツ】の攻撃範囲内まで高いSTRを使った踏み込みで突っ込んで行った。

『……!?? ……!!!』

「ミュウちゃん！ 一発だけ防ぐ！」

「了解なのです！」

いきなり突っ込んで来たミカに【ブラックオーツ】は一瞬怯むものの、即座に相手が自身よりも遥かに遅い上に手に持っている武器では自分を傷つけられないと判断して一刀両断するべく腕の一本を伸長させて大上段から斬撃を放った。

……だが、持ち前の“直感”で斬撃のタイミングと軌道を先読みしていたミカは、それに被せる様にして同じく大上段から【ギガース】を振り抜いた。

「《ハードストライク》！」

『……!?? ……! ……!??』

振り下ろされる刃にドンピシャなタイミングで激突した【ギガース】は、防御系スキルを低下させる《バリアブレイカー》の効果で《暗黒晶身》を無視して【ブラックオーツ】の片手を粉々に打ち砕いた。……そして、大きなダメージに【ブラックオーツ】が動揺した隙を……ついでミュウは再度の接近を試みた……のだが、一瞬早く正気を取り戻した【ブラックオーツ】は一旦全力で距離を取って時間を稼ぎつつ、壁か床を擦り抜けて逃げようとしたのだ。

「……《魔法射程延長》《魔法威力拡大》《ダークリング》」

『ツ!??』

……だが、バックステップしようと地面を蹴る直前に黒いリングが【ブラックオーツ】の右足に嵌って、その動きを一瞬だけ止めた……その正体は対象に黒いリングを嵌めて動きを短時間【拘束】する闇属性の下級魔法《ダークリング》であり、それを使ったのは後ろで待機し

ていたレントであった。

「やっぱり闇属性は効くみたいだな……アット！」

「分かってる！ 《ダークリング》」

「《ダークリング》！」

『《だーくりんぐ》』

それが効いたと見るや否や《Wiki編集部》メンバー達も同じ魔法を行使して「ブラックオーツ」に次々と黒いリングを嵌めていった……そう、スキル《暗黒晶身》は生物にのみ干涉する闇属性の特性を利用して為、『闇属性は同じ闇属性で干涉出来る』という特性が付いてしまっているのだ。

……尚、作成時に同じ闇属性の弱点である光属性や聖属性を透過させる事には成功したのだが、スキルに使えるリソースと闇属性エレメンタルである「ブラックオーツ」が《闇属性耐性》を持っていた関係でこの特性は修正せずに放置されていたのである。

『……!?? ……! ……!』

しかし、所詮は下級魔法である事と「ブラックオーツ」に備わっている《闇属性耐性》のお陰で数秒「拘束」した程度でリングは砕け散ってしまった……が、それだけの時間があればAGIが亜音速を超えるミュウが接近するには十分な時間だった。

『《攻撃纏装》！』
アタック・テスクチャ

「捉えた《ブラストアッパー》！」

『ツ!?!』

接近したミュウは、そのまま「ミメーシス」のスキルで攻撃力を増大させたアツパーで「ブラックオーツ」の顎を打ち抜いて砕きながら空中に打ち上げて逃走を阻止した。

『《攻撃纏装》《攻撃纏装》《攻撃纏装》！』

「《スライスハンド》《回し蹴り》《掌底》！」

『ツ！ ツ!?? ツ!?!』

そして、ミュウが空中にいる「ブラックオーツ」が床や壁を擦り抜けて逃げられない様に、吹き飛ばにくいスキルによる連続攻撃を行なっていていき、更にミメが先程の攻防で限界までストックした《攻撃纏

装》を次々と消費して威力を増大させた。

……結果として【ブラックオーツ】は空中に固定されたまま、その肉体を端から砕かれていった。

『《攻撃纏装》!!!』

「《真撃》《瓦割り》！」

『ッ!!!』

最後に《攻撃纏装》と【武マーシャル・アーティスト闘家】の奥義で強化された鉾物特攻の拳を胸部に叩き込まれた【ブラックオーツ】は、それまでの連続攻撃によるダメージが蓄積していた事と胸部にあつた弱点のコアが砕かれた事で粉々に砕け散つたのだつた。



【《UBM》【刻傷黒晶 ブラックオーツ】が討伐されました】

【MVPを選出します】

【【ミュウ・ウイステリア】がMVPに選出されました】

【【ミュウ・ウイステリア】にMVP特典【黒晶首巻 ブラックオーツ】を贈与します】

「……ふう、このアナウンスが出たという事は倒せた様ですね。後、MVPは私ですか」

「まあ、終始ミュウちゃんが戦っていたしな。おめでとう
「おめー」

そのアナウンスを見て残心を解いたミュウは手元に出てきた特典
武器入りの【宝櫃】を手に取りながら眺めていたが、ふと何かに気が
付いた様に後ろに居た《Wiki編集部》の方に振り向いた。

「そんな訳で特典武器は私が頂く事になりました。……先にそちらが
遭遇したのにすみません」

「……え？ ああ、いや私達は実質敗北してましたし……」

「今回のMVPに関して文句をつける気は一切無いから。……しかし、俺達があればだけ苦戦した《UBM》をこうもあっさりと討伐するか……正直、驚きを通り越して言葉が出ないな」

「あの『ブラックオーツ』は相性的にミュウちゃんが完全に突き刺さっていただけだな」

「私だと防御は突破出来てもA G I差がキツイしね」

そうして彼等は自分達の今後の行動について話し合ったのだが、ミュウが「治癒阻害」付きの傷を負った事と〈Wiki編集部〉のメンバーがこれ以上の戦闘は無理だと言う事で全員が「エレベータージエム」を使って地上に帰還する事になった。

「……ただ、この「エレベータージエム」って発動に少し時間が掛かるから、戦闘からの離脱には使えないんだよな」

「ヴォルト《送還》^{リ・コール}つと。……まあ、それが出来ると〈墓標迷宮〉の難易度が大きく下がるから仕方ないだろう。ログアウトとかと同じだな」

「しかし〈墓標迷宮〉って〈UBM〉も出るんだね」

「今度Wikiに乗せて、掲示板にも書き込みましょう」

……そんな会話を最後に彼等の〈墓標迷宮〉探索は終わったのだった。

掲示板回：ダンジョンスレと有名人スレ

□??地球 とある掲示板



【レッツ】へInfinite Dendrogramへアルター王国
〈墓標迷宮〉情報スレ3 【ダンジョン】

1：名無しのへマスターへ【sage】：2043/8/4（火）

このスレはアルター王国にある神造ダンジョン〈墓標迷宮〉に関する情報を書き込むスレです

ダンジョン内でのモンスターの目撃情報・獲得アイテム・ダンジョンの内部構造・質問などご自由に

荒らしはスルー推奨

・

・

・

36：名無しの冒険家【sage】：2043/8/4（火）

Wikiで見た迷宮内のモンスター分布は地下5階までがアン
デッド

地下10階までは植物系エレメンタル

地下15階まではゴブリンという感じか

37：名無しのへマスターへ【sage】：2043/8/4（火）

リアル視点だとアンデッドがキツくて【許可証】手に入れたけどあんまり潜ってないんだよな

匂いとかも酷いし

38：名無しの編纂部「sage」：2043／8／4（火）

>>>36

ウチのクランメンバーが潜った範囲ではそんな感じ

ティアンの資料ならそれより下の階層のデータもあるんだけど
編集部的には自分達で調べた情報を載せたい……！

39：名無しの冒険家「sage」：2043／8／4（火）

情報待ってるよ頑張れ編集部（言うだけ）

40：名無しのへマスター<「sage」：2043／8／4（火）

>>>37

リアル視点とかマゾか？

それだと普通のモンスター相手でもキツイし普通はアニメか3D
だろ

41：名無しの騎士「sage」：2043／8／4（火）

いや、リアル視点の方が現実と同じな分動きやすいぞ

アニメや3Dだと間合いとか測れないだろう

42：名無しのへマスター<「sage」：2043／8／4（火）

その辺りは個人の自由だから余り騒ぐなよ

それにここはダンジョンスレなんだからそう言った話は別スレで
な

43：名無しの冒険家「sage」：2043／8／4（火）

しかし中々いい感じのネタが上がらないな

へマスター<が地下15階以降に潜れたって報告も無いし

44：名無しの騎士「sage」：2043／8／4（火）

〈マスター〉のレベルがまだ低い上に【許可証】もまだ余り出回ってないからな

俺はクエストで手に入れたが十万リルはやっぱり高いんだろう

45：名無しの編纂部「sage」：2043／8／4（火）

後は単純にレベルと経験が足りないんだよな

ウチの克蘭の連中もダンジョンの攻略には特化したジョブとかが必要だつて言ってたし

モンスター相手でも連戦になるならもう少しレベルが上がらないとキツイみたい

46：名無しの付与術師「sage」：2043／8／4（火）

そんな貴方達に朗報だよ！

私達Wiki編集部パーティーは本日迷宮内で〈UBM〉に遭遇したぜ！

47：名無しの編纂部「sage」：2043／8／4（火）

>>>46

ま、まさか貴女は!?!?

48：名無しの冒険家「sage」：2043／8／4（火）

知っているのか編集部!?!?

49：名無しの〈マスター〉「sage」：2043／8／4（火）

え？ 墓標迷宮ってUBM出んの？

50：名無しの編纂部「sage」：2043／8／4（火）

>>>48

ああ、彼女こそ編集部の掲示板書き込み担当の一人である妖精使い

（仮）さんだ!!!

確か今日は墓標迷宮に潜っていた筈なのになぜここに!?!?

逃げたのか!?!? 自力で脱出を!?!?

51:名無しの付与術師「sage」:2043/8/4 (火)
>>50 (無言の腹パン)

単にへUBMへに遭遇してパーティーが半壊したから迷宮を脱出しただけだよ

遭遇したへUBMへの詳しい情報はコツチね↓http://○○○○○/○○○

52:名無しの騎士「sage」:2043/8/4 (火)
オツケー、早速見てくる

53:名無しのへマスターへ「sage」:2043/8/4 (火)
流星は編集部、情報あげるのが早いね
俺でなければ見逃しちゃうね

54:名無しのへマスターへ「sage」:2043/8/4 (火)
掲示板見ながら別ブラウザで:ふむふむ、ブラックオーツね
:壁抜けに生物の接触以外はすり抜けて強くな? ?
AGIが8000超えてるってあるけど

55:名無しの冒険家「sage」:2043/8/4 (火)
でもこれだけ情報が分かっていたら討伐も出来そうだな
攻撃も強力なガードナーか格闘系ジョブ持ちを使えば何とかかなり
そう

上手くいけば特典武器も……

56:名無しの騎士「sage」:2043/8/4 (火)
……いや、もう討伐済みって書かれてるぞ

57:名無しのへマスターへ「sage」:2043/8/4 (火)

>>>56

あ、ホントだ

まあ、これだけ情報が分かってるって事は長く戦ったんだろうし倒しても不思議じゃないか

編集部の妖精使いさんも普通に脱出出来てるって言うてたしね

58：名無しの冒険家「sage」：2043／8／4（火）

あー残念……ところで特典武具はどんな感じだったんだ？

世界で一つだけのアイテムとか私気になります！

59：名無しの編纂部「sage」：2043／8／4（火）

>>>58

ウチはそういった個人情報扱ってないから教えられんぞ

特に特典武具とかクランとしても切り札になるし迂闊には話せん

60：名無しの付与術師「sage」：2043／8／4（火）

>>>59

ああ言い忘れてたけど、そもそも倒したのは編集部じゃないですよ私達パーティーが半壊した後生き残りが逃亡した時にそこで別のマスターのパーティーがいたんです

そして彼等が追ってきたUBMと交戦して撃破した感じですからなので特典武具は編集部が手に入れた訳じゃないです

61：名無しの編纂部「sage」：2043／8／4（火）

え？ そうだったのか？

62：名無しのへマスター「sage」：2043／8／4（火）

……でも、それって実質UBMのトレインでは？ ボブは訝しんだ

63：名無しの騎士「sage」：2043／8／4（火）

あー、編集部の人も悪気は無かったとはいえね

その人達がUBM倒せるだけの実力があつたから問題無かつたけど

64：名無しの冒険家「sage」：2043／8／4（火）

>>62

別に特典武具を手に入れられたんだから良いのでは？

65：名無しの編纂部「sage」：2043／8／4（火）

編集部パーティーがトレインしたとかの噂が立つとネームバリューに支障が出るからやめてほしい（必死）

妖精使いさん達もワザとじやなかつたんだし…

66：名無しの付与術師「sage」：2043／8／4（火）

>>62

ま、まあ、その辺りは後日御礼をするつもりですよ

それにそのパーティーにはウチのオーナーのフレが居たので特に揉める事も無かつたです

67：名無しのへマスター「sage」：2043／8／4（火）

揉め事が無かつたなら何より

例え意図しないものでもトレインしたらちゃんと謝っておくべきだよ

……トレインしてそのまま逃げるヤツは許さん（怒）

68：名無しの騎士「sage」：2043／8／4（火）

……何かトレイン関係で嫌な事でもあつたのか？

69：名無しのへマスター「sage」：2043／8／4（火）

>>68

まあ、以前フィールドでモンスターを押し付けられてデスペナつた事があつてちよつとな

加えてそいつら謝りもせずにドロップアイテム寄越せとかほざきやがったんでな

つい一人残らずPKしてしまったよ

70：名無しの騎士「sage」：2043／8／4（火）

ア、ハイ、ゴシユウシヨウサマデス……

71：名無しの編纂部「sage」：2043／8／4（火）

みんなもマナーには気を付けようね！

72：名無しの付与術師「sage」：2043／8／4（火）

助けてもらったらちやんと御礼ぐらいは言っておくべきですよ

これからは墓標迷宮に潜る人も増えるでしょうしマナーを守って楽しくダンジョン！

73：名無しのへマスター「sage」：2043／8／4（火）

無理矢理話を墓標迷宮ネタに戻した感が凄いな

まあ、ここは墓標迷宮スレなんだからこれが普通なんだが

74：名無しのへマスター「sage」：2043／8／4（火）

>>>72

迷宮スレで愚痴ってしまってますまぬ

◇◇◇

【有名人】へInfinite Dendrogramへ有名へマスターへ情報スレ【いらつしやい】

1：名無しのへマスター「sage」：2043／8／5（水）

このスレはへInfinite Dendrogram内の有名へマスターへの情報を書き込むスレです

目撃した有名っぽい「マスター」の紹介・偉業・珍行動などを書き込みましょう

ただしネットリテラシー的にアウトな書き込みは厳禁・自重しましょう

荒らしはスルー推奨

.

.

.

12:名無しの「マスター」 「sage」:2043/8/5 (水)

なんか新しいスレが出来た

有名ティアンスレは見た事あるけど

13:>>1 「sage」:2043/8/5 (水)

その有名ティアンスレで目立ち始めたマスターの話題が出たから
それ用に作ったスレだよ

書き込みは向こうと同じ様に目撃した凄いマスターの事を書き込む
感じで

14:名無しの騎士「sage」:2043/8/5 (水)

デンドロが始まって結構経ったから目立つヤツも増えて来たから
な

俺もアルター王国の王都で熊の着ぐるみ着た(おそらく)マスター
を見かけたし

なんか子供に飴ちゃん渡して仲良くなった

15:名無しの「マスター」 「sage」:2043/8/5 (水)

着ぐるみとか着るヤツなんてへマスターへしかないからね

アレ装備枠アクセ以外全部使う割に性能はクソ低いからな

そもそもイベント用とかで戦闘用着ぐるみなんてキワモノなんて
早々無いからしょうがないけど

16：名無しの裁縫師「sage」：2043／8／5（水）

>>>14

アレ？ 私も王都で着ぐるみの人を見かけたけどその人が来てた
のは犬っぽいヤツだったよ

なんか子供達に纏わり付かれて小山みたいになってた

別人かな？

17：名無しの「sage」：2043／8／5（水）

>>>14>>16

そうそう、こんな感じで良いんだよ…じゃあ私も子供関連で一つ話
をしようか

レジェンダリアの首都で覆面を被った全身タイトの男マスターが
孤児院で子供達と戯れていました

18：名無しのへマスター「sage」：2043／8／5（水）

子供関連のほのぼのとした話題がいきなり犯罪っぽくなったん
だが

これだからレジェンダリアは

19：名無しのへマスター「sage」：2043／8／5（水）

もしもしポリスマン？

20：名無しの「sage」：2043／8／5（水）

ちなみにその覆面さんは孤児院への出資やボランティアとかをし
ているらしいよ

ちよつと話してみたけど外見と性癖と言動と行動以外はまともな

人だったね

21：名無しの裁縫師「sage」：2043／8／5（水）
なんだ、それなら安心……なのかな？

22：名無しのへマスター「sage」：2043／8／5（水）
いや、外見と性癖と言動と行動がおかしい時点でアウトだろう
まともな部分が残ってないじゃないか

23：名無しのへマスター「sage」：2043／8／5（水）
>>22内面とかかな？

何というか有名マスターつつつても可笑しな外見や奇行をしてる
ヤツばつかだな

もつとこう高い戦闘能力で有名なヤツとかは居ないのかね

24：名無しのへマスター「sage」：2043／8／5（水）
デンドロが始まってリアルではまだ一カ月も経ってないからな
正直殆どのマスターがドングリの背比べレベルの差しかないだろ

25：名無しの騎士「sage」：2043／8／5（水）
>>23

王国のフィールドで戦車乗り回してモンスターを殲滅してるヤツ
とかいたな

危なそうだから近づかなかったけど王国に戦車なんて無いしアレ
はエンブリオだろう

26：名無しのへマスター「sage」：2043／8／5（水）
皇国でなら戦車は珍しくないんだがな

まあ、エンブリオだとその国の世界観に合わないのは珍しくないが

27：名無しの>>1「sage」：2043／8／5（水）

>>24

やっぱり今の時期だと目立つマスターは外見がおかしいか奇行に走るヤツばっかな

例えば人外アバターの人達とか

レジェンダリアでもケンタウロスとかハーピー的なアバターの人が居たけど超動きにくそうだったし

28：名無しの〈マスター〉「sage」：2043／8／5（水）

〈マスター〉の外見を変更しても性能には関係ありません（公式設定）

人型から離れすぎたアバターにすると動作に支障が出る場合があります（管理AI）

29：名無しの武士「sage」：2043／8／5（水）

そう言う無茶なアバターってやっぱりそこそこ居るんだな

俺は猫耳付けたマスター見た事あるぐらいかな

30：名無しの〈マスター〉「sage」：2043／8／5（水）

デンドロ始めたばかりの頃に動きずらそうにしてたヤマアラシを見たけど

アレも面白アバター勢なのかな

31：名無しの〈マスター〉「sage」：2043／8／5（水）

戦闘で目立つマスターの話題は無いのかね

例えば〈UBM〉を倒したとか決闘で活躍したとか

32：名無しの武士「sage」：2043／8／5（水）

天地では戦闘面で目立つマスターはあんまり見ないかな

決闘も野試合も上位ティアンが強すぎて挑みにいったマスターが片端から散ってるから霞む

33 : 名無しの〈1「sage」:2043/8/5 (水)

天地つて噂通りの修羅の国みたいだね

レジェンダリアは奇行が目立つマスターが多くて戦闘面が際立つのは見ないかな

34 : 名無しの〈マスター〉「sage」:2043/8/5 (水)

〉〉32

俺も天地出身だけど凄腕ティアンに勝ちを拾える極一部は噂になり始めてるぜ

…:俺? 散った側ですが何か?

35 : 名無しの〈マスター〉「sage」:2043/8/5 (水)

ドライブでもあんまり目立つヤツは見ないかなあ

というかマスターはどいつもこいつもエンブリオを使って変な戦い方をするからな

36 : 名無しの〈マスター〉「sage」:2043/8/5 (水)

多少変な戦い方をして埋もれてしまつて逆に目立たない感じか

37 : 名無しの〈マスター〉「sage」:2043/8/5 (水)

やっぱり〈UBM〉を倒したヤツとかなら目立つかな

アルター王国のWikiには討伐済み〈UBM〉は載つてたし討伐者も載らないかな

38 : 名無しの〈マスター〉「sage」:2043/8/5 (水)

というか討伐済みとはいえ〈UBM〉の情報載ってるのアルターだけじゃん

他の国の編集部はちゃんとやってんの?

39 : 名無しの編纂部「sage」:2043/8/5 (水)

〉〉37

ウチは個人情報には載せない主義だからな…詳しくはWikiの注意事項を見てくれ

後、こんな短期間に〈UBM〉に三体も遭遇してるアルター王国支部が可笑しいんだよ！

他の支部は未だにその国の一般常識とかを纏めている所だぞ！

40：名無しの〈マスター〉「sage」：2043／8／5（水）

俺も〈UBM〉なんて見た事無くて噂しか聞かないしな
遭遇したヤツに話を聞いても返り討ちにされたとしか言わないし

41：名無しの騎士「sage」：2043／8／5（水）

俺はWikiに載ってる「ヴァルシオン」ってUBMと遭遇した事があるけどめっちゃ強かったしな

勝手に戦いを挑んだマスター数人が一撃で消し飛んだし

最終的には援軍に来たマスター・ティアン総掛かりでどうにか倒したけどアレをソロで倒すとかは無理だな

42：名無しの〈マスター〉「sage」：2043／8／5（水）

それで誰がMVP取ったの？

43：名無しの騎士「sage」：2043／8／5（水）

超大威力の火属性魔法で「ヴァルシオン」にトドメを刺した人

…最も、その後に援軍に来た超級職ティアンの無双っぷりの方が目立ってたけど

44：名無しの武士「sage」：2043／8／5（水）

超級職ティアンは桁違いだからね（天地感）
エンブリオがある程度じゃどうしようもない

45：名無しの〈マスター〉「sage」：2043／8／5（水）

〈〈43

成る程、つまりUBM戦に割り込んでトドメを刺せば特典武器ゲツ
トもワンチャン？

……みたいな事を考えるヤツも出そう

46：名無しの＜＞1 [sage]：2043／8／5 (水)

そう言うヤツはこのスレに晒して悪い意味で有名にしちゃおう！

47：名無しの編纂部 [sage]：2043／8／5 (水)

後、アルター支部にはUBMを倒す事に特化した秘密の特殊部隊が
いるという噂がある

……それでも無ければあんなにUBMの情報が集まる訳が無い！

(断言)

48：名無しの裁縫師 [sage]：2043／8／5 (水)

……編纂部って支部同士の仲は悪いのかな？

49：名無しの＜＞1 [sage]：2043／8／5 (水)

閲覧数とかを競い合っているとかは聞いた事があるよ

50：名無しのへマスター [sage]：2043／8／5 (水)

広告料とかに直結するからな

51：名無しの編纂部 [sage]：2043／8／5 (水)

アルター王国支部には負けん！

第4章 決闘都市へ

1日遅れのリザルト

□〈ヘイースター平原〉
【ジャガーマン獣戦士】レント・ウイステリア

無事〈墓標迷宮〉から帰還して疲れもあつたのでそのままログアウトして一晩が経った翌日、俺達は諸々の確認の為に王都東のヘイースター平原の端の方へとやって来ていた。

……一応、俺達にとつて切り札となる情報なので秘匿しておきたいので、とりあえず人目につく街中を避けてフィールドの人気の無い所に来た感じである。

「……《魔物索敵》《対人索敵》共に反応無しっ」と

「じゃあ大丈夫そうだね。……じゃあまずはミュウちゃんが手に入れた特典武器の紹介からかな」

「はいはいなのです。……私が先日手に入れた逸話級特典武器【黒晶首巻 ブラックオーツ】のステはこんな感じですね」

そうしてミュウちゃんがアイテムボックスから取り出したのは、まるで水晶の様な光沢を持った黒いスカーフだった……そして見せて来たステータスはこんな感じだった。

【エピソードアイテム黒晶首巻 ブラックオーツ】
〈逸話級武器〉

非生物を透過する呪いの刃を振るう黒晶の概念を具現化した逸品。

装着者に闇と呪いへの耐性を与えると共に、僅かな間だけ命無き攻撃を透過する。

※譲渡・売却不可アイテム

※装備レベル制限なし

・装備補正

MP + 30%

闇属性耐性 + 100%

呪怨系状態異常耐性 + 50%

防御力 + 10

・ 装備スキル

《人間探知》

ダークネス・シフト

《暗黒転身》

「……まず装備枠は外套部分で、スキルはMPを消費して周囲にいる人間範疇生物の位置を把握出来る《人間探知》と、10秒間だけ自身への生物及び闇属性以外の攻撃を透過する《暗黒転身》といった所です。後《暗黒転身》は無消費発動ですがクールタイムが10分あるので連発は出来ませんね」

『ステータス補正的にはMP+30%が嬉しいね。これで少しは僕のスキルも使い易くなりそう』

そんな事を言っているミュウちゃんと融合している（フィールドなので念の為）ミメは嬉しそうに「ブラックオーツ」を装備して首に巻いていた。

……さて、実は態々こんな所に来たのはもう一つ理由があるのだ。

「……さあ、次はいよいよ俺の特典武器【ヴァルシオン】の第2スキル《刃技才集》によるスキルガチャの時間だぜ！ デンドロ時間で1ヶ月間貯めて来た経験値が火を噴くぞー！」

「イエーイ！ ……正直言って私は忘れてたけどね！」

「どんなスキルが出るのか楽しみですね！」

……うん、ぶつちやけ俺もこのスキルの事はちよつと忘れてた。実はこの《刃技才集》って昨日には既に使える状態だったし、俺のテンションが妙に高いのもそれを誤魔化す為だからな（妹達が誤魔化されるとは言っていない）

……ま、まあ！ あの時は疲れてたからさっさと休みたいと思ってたからしょうがないよね！ それに初めて使う特典武器のスキルがどんな風に発動するのかとか分からないから街中で使う訳にも行かないし、だからこそ態々フィールドまで来たんだからな。

「まあ、とにかくスキルを使ってみよう…… 《刃技才集》起動」

俺は自分のキャラじゃない変なテンションをさっさと辞めて、サックと首から下げられた【ヴァルシオン】を手に取って《刃技才集》を使用した……するとその【ヴァルシオン】から淡い様々な色の光の粒

子が溢れ出して、俺の身体を取り巻きながら徐々に包み込んで行った。

……思ったよりも演出が派手だなあ。もつとただサクツとスキルが追加されるだけだと思っただのに、これは人気の無い屋外に来たのは正解だったな。もし街中でコレやったら目立ち過ぎる。

「虹演出来た！ これはSSRか星5確定だね！（ソシヤゲ感）」

「おお、なんか綺麗ですね。……しかしこの虹色の粒子、モンスター倒した時とかに身体に流れ込んでくるエネルギーと“感じ”が似てますね」

なんか妹達が好き勝手言っているのを他所に、俺の身体を取り巻く光の粒子は徐々にその量を増やしながら全体で見るとまるでオーロラのように次々と色を変えていった。

……そしてしばらくしたら粒子の色が『透き通った黒色』に変わった所で、周りを取り巻いていた粒子が次々と俺の肉体に吸収されていった。

「……ふむ、粒子？ は全部身体に吸収されたみたいだし、スキルの説明を見たら『クールタイム30日』って書かれていたからこれで終わりみたいだな」

「それでお兄ちゃん、肝心のスキルは？」

「ちよつと待て……えーつと、ステータス欄にジョブで習得したものの以外のスキルがあったな。名前は《黒晶刃》Lv1か」

「もろに『ブラックオーツ』からのヤツですねソレ」

スキルの説明文には『MPを消費して肉体から物体を透過する閻魔性の刃を展開・変形する魔法』って書かれているけど、取り敢えず使ってみて効果を確かめて行くしかないか……えーと、じゃあ右掌から生やす感じで……。

「……《黒晶刃》ってなんか生えて来たな」

「黒い水晶の刃って感じ？ まあ予想通りだけど」

「やっぱりあの『ブラックオーツ』のスキルですね。質感とかがそっくりです」

そうやってスキルを使用したら右掌から長さ50センチメートル

ぐらゐの黒い刃が生えてきた……妹達が言う通り外見や質感はあの「ブラックオーツ」の身体にそっくりなので、そこからラーニングしたものだとは分かるな。

……この《黒晶刃》はミュウちゃんが触れるので生物には干渉するみたいだが、試しに剣を触れさせてみると擦り抜けたのでやっぱり物体透過能力を持つてゐるみたいだな。

後、説明文に「変形」と書かれていたから試しに『曲がれ!』と念じてみるとMPが微量消費されて刃が曲がってフック状になったり、そんな感じでしたら刃をグネグネさせていると30秒ぐらゐで効果が切れたのか消滅した。

「……ふむ、消費MPは変形分含めても少なめで発動までの時間は非常に早い、その分効果時間は短くクールタイムも長めな魔法といった感じか。攻撃力や実際の使い勝手は戦闘で使ってみないと分からないがな」

「じゃあその辺りのモンスターで試し切りしてみたら? せつかくフィールドにゐるんだし」

「そうですね。私も特典武具のスキルを試したいので」

「そうだな。……ついでに新しく就いた【獣戦士】の《獣心憑依》とやらも試してみるか。《召喚^{コール}》ヴォルト」

『BURURU (お任せを、狩りですね)』

妹二人の提案に対して、俺も新ジョブのスキル効果を試したい事もあってヴォルトを召喚した……この《獣心憑依》は従属キャパシティ内のモンスター一体のステータスの何割かを自身に加算する強力なジョブスキルなのだが、肝心の【獣戦士】のキャパシティが低すぎて強力なモンスターを使役する為にはジョブ枠全てを直接戦闘向きではないテイマー系ジョブで埋めねばならない事から産廃扱いされていたモノである。

……まあ俺の場合は合計レベル3000分のジョブの内いくつかをテイマー系ジョブにしても一向に問題は無いしな。現在でも【従魔師】【騎士】【聖騎士】のお陰で今のヴォルト一頭ぐらゐなら問題無くキャパ内に収められるし。

「それで新しいジョブの使い心地はどうか、お兄ちゃん」

「今の所スキルレベルが1の10%強化だからステの上昇数値は僅かだが、これが【ヒーストオーガ獣戦鬼】になってレベル10の60%強化になるかヴォルトが進化すれば、常時使いの強化スキルとしては破格の強化数値になるだろうな」

「……まあ、兄様みたいに大量のジョブに就けないと従属キャパシティが足りず強力なモンスターを使役出来ないので人気が無いのですが」

「必要な従属キャパシティがゼロのガードナー系統へエンブリオと組み合わせるとかすれば流行りそうだけだな。……融合型のミユウちゃんとミメには相性悪そうだが」

『それはちよつと残念だね』

……そんな会話をしながら俺達は手に入れた新しい力を試す為にフィールドを進んでいった。



そうして歩きながら襲い掛かって来たフィールドのモンスターを《黒晶刃》で辻切り○していったお陰で、このスキルの有効な使い方も大分わかって来た。

まず攻撃力に関しては消費MPに比してかなり高く、そこら辺の下級モンスターなら耐性でも無い限りは撫で斬りに出来た。また自分の肉体のどんな場所にも生やす事が出来る上、変形の応用でオリジナルの【ブラックオーツ】みたいに鞭つぼく中距離攻撃してみたり、変形の際に切り離して投剣みたいに投げるとかも可能（流石に切り離すと変形は不可）

後、オリジナルと違って生物や閻属性以外にも光属性・聖属性なども透過不可能……というかそれらに当たったら砕けたので、流石にこの辺りはオリジナルと違って普通の閻属性魔法と同じ判定という事だろう。

『H I I E E E E N N ! (《サンダーバースト》!』

「よっしや、電撃で動きが止まったな 《黒晶刃》《ドラゴン斬り》！」
『GYAAAAAAAA!』

そして今は喧嘩を売って来た「メイル・デミドラゴン」数体相手にしてヴォルトと共に試し斬りの最中である……こいつらはドロップアイテムの遺骸を取り込んで外骨格を生成する防御型の地竜なんだが、まずヴォルトが電撃を外骨格に通電させる事で動きを封じて、その隙に俺が物体を透過出来る《黒晶刃》で本体を切り裂いて始末した。

……まあ基本的に『ただ闇属性の刃を生やしたり動かしたりするだけの魔法』なので、自力で振ったり変形させたりして動かさないと攻撃力は発生しないので近接用の奇襲スキル的な使い方になるだろうか。そこは剣技系のジョブスキルを使ったりも出来るメリットにもなってはいるが。

「鎧があるならそれごと砕く！ 《インパクト・スマッシュャー》！」
『GAAAAAAAA!?!?』

「とりあえず内部攻撃ですかね《発勁》……ああ、鎧をパージして早くなりましたか……ではAGIを同じにして殴ります 《正拳突き》」

『GA、GYAAAAAAAA!!』

そんで向こうではミカが《インパクト・スマッシュャー》——
【ストロング・メイスマン剛戦棍土】の奥義で攻撃した装備の強度を自身のSTR×スキルレベル×10%下げた上で衝撃波を発生させて装備と装備者を破壊するスキル——で【メイル・デミドラゴン】の外骨格ごと本体を砕いていた。

また別の所ではミュウちゃんに《発勁》で外骨格を無視してダメージを与えられるのに嫌がった個体が《外殻剥離バウ》で外骨格を周囲に飛ばしつつ防御力と引き換えにAGIを大幅に上昇させたが、その外骨格の散弾は全てあっさり回避されるか弾き飛ばされた上で【ミメーシス】のスキルで追い付かれた彼女の拳で打ち倒された。

……うむ、各々で亜竜級を倒せる程度には俺達もデンドロでの戦闘にだいぶ慣れて来たな。

「……よっし終了！ 何時もの通りお兄ちゃんのススキルがオンになっているのでドロップアイテムは無いです！」

「まあ、昨日の〈墓標迷宮〉でそれなりに稼いだから問題は無いだろう。……スキルの確認も大体終わつたしそろそろ王都に戻るか」

そうして突如現れた「メイル・デミドラゴン」の群れを排除した所で俺達は王都に戻る事にした……主な理由はミカとミュウちゃんのメインジョブがさつきの戦闘でカンストしたからでもあるが。

「さて、次のジョブはどうしましょうか。……無難な所で【蹴士】とかですかね。それとも魔拳士系統の上級職でも狙ってみましょうか。……姉様はどうしますか？」

「……うーん、どうしようかな。【戦棍士】のもう一つの上級職の【戦棍鬼】はまだ転職条件を満たしてないしね。……あのジョブ転職条件に『メイスによる人間範疇生物の一定数討伐』ってのがあからそれ以外は満たせているんだけど」

そんな感じで二人は次のジョブに悩んでいる様だった……まあ軽くジョブに悩むのはデンドロの楽しみの一つだからな。こうやってゲームのキャラの育成計画を建てている時が一番楽しいっていうのもあると思う。

……尚、俺の場合は就いただけでレベルを上げていない下級職が沢山あるから、まずはそれらのレベルを上げるところからかなあ……。

『BURURU。BURURURU、BURURURU（私もレベルが上がりましたよ。体感ですが亜竜級に進化する時期も近いと思います）』
「そうか、進化も近いか。……じゃあ騎乗戦闘の練習とかもやった方がいいか」

確かモンスターの進化の方向性は保有するスキルや技術によって決まると聞いたし、騎乗の練習をすればそっち方面のスキルを覚える方向に進化出来るかも。

……ちなみに俺は《魔物言語》のスキルレベルが上がったので、あの程度ならヴォルトが話している事を理解出来る様になっている。意思疎通を積極的に行つてスキルレベルを上げた甲斐はあったな。

「とりあえず騎兵系統のジョブ……いや、まずはモンスターのスキルを強化・操作出来るジョブの【調教師】とかの方がいいか？ 従属キヤパシテイも追加で必要だし」

『BURURURU（その辺りはお任せしますよ）』

本当に何度思ったか分からないがレベル上げをしなくてはならないジヨブが多過ぎて困る……そんな事を考えていると、向こうで話していたミカとミュウちゃんがこちらに来て話しかけてきた。

「お兄ちゃん、やっぱりギデオンに行くべきだよ！ ……真つ当に对人的討伐数を稼ぐなら決闘が一番手っ取り早いしね。PKとかしたくないし」

「格闘系ジヨブも対人戦の戦歴が転職条件に関わる事が多いので、私も決闘が出来るギデオンには一度行っておきたいです」

「……まあ、そこまで言うならいい加減ギデオンに行くか。ヴォルトとの連携やらレベル上げや資金稼ぎが理由で延び延びになっていたしな」

ここまで予定が伸びたのは、新しく仲間になったヴォルトがどのくらい使えるのかを見るのが最も大きい理由だったからな……それも先日〈墓標迷宮〉で〃十分信頼出来る〃と分かったし、後は貯めた資金で馬車とかの必要な物資を買い揃えればすぐにでも出発出来るからな。

……ま、この辺りは身軽な〈マスター〉だからこそだがな……ただ……。

「デンドロの方の準備は直ぐに終わるから問題は無いんだが……お前達、あっち側の準備は大丈夫なのか？ 夏休みの宿題とか」

「ギクツ！」

「まあ、デンドロに入り浸っている時点で予測はしていたがそっちも疎かにはするなよ。……というか、小学校の夏休みの宿題ぐらい7月中に大半は終わらせておけよ。俺は大学の課題は終わらせたぞ」

「……偏差値70代がデフォなお兄ちゃんを基準にされても……」

「……小学校の宿題って量だけが多いんですもん……」

そんな事を話しながら俺達は王都に帰って来たのだった……デンドロが面白いのは認めるがリアル側の事もちゃんとやっておかないとな。

そうだ、ギデオンの行こう！

□王都アルテア クラッシュヤ【壊屋】ミカ・ウイステリア

私とミュウちゃんが夏休みの宿題を終わらせる為に自室で缶詰になる事リアル時間で三日ぐらい、どうにか日記とかの毎日やらなければならぬ宿題以外を終わらせる事が出来た……まあ、小学校の宿題なんて量が多いだけだし元々少しずつはやってたからね。私達もお兄ちゃんと比べなければ頭は普通に良い方だし。

……尚、私達が宿題に掛り切りになってる間お兄ちゃんは自室で悠々とベッドに寝ながらデンドロしてましたとき。まあ私達のリルを渡してギデオン行きの準備をさせていたから文句は無いんだけど。「そんでお兄ちゃん、準備の方はどんな感じ？」

「まず少し値段は高く付いたが《重量軽減》と《悪路走破》とかのスキルが付いた小型の馬車を買ったぞ。ヴォルト一頭で三人を引っ張るならそう言ったスキルがあつた方が良いからな。それと【快癒万能薬^{エリクシール}】をどうにか一本だけ入手出来たぞ。馬車より高かったが。後【救命のブローチ】は五百万リル以上したから買わなかったが【身代わり竜鱗】は人数分手に入れたし、それ以外の各種消耗品やそれを入れる為の小型高性能アイテムボックスも買っておいた。そろそろ初期のヤツじゃ使い難くなつて来たしな」

「おおう……流石は兄様、準備は万端ですね。ありがとうございます」
「楽しい旅になりそうだね」

そうして私とミュウちゃんはお兄ちゃんが用意してくれたアイテムボックス——私が嵩張らない指輪型でミュウちゃんが格闘の邪魔にならないポーチ型、お兄ちゃんは少し容量が大きい小袋型だった——と各種消耗品を受け取りつつ、今まで使っていたアイテムボックスのアイテムを新しいヤツに詰め替えていく。

「……よし、詰め替え終わりって事で出発前にジョブを変えに行こうか。この前は宿題の為にカンストしてからそのままログアウトしちゃったし」

「そういえばそうでしたね。……私も【拳士^{ボクサー}】はカンストしたので

【僧兵】^{モンク}にでも転職しようかと。何でも回復しながら殴る魔法拳士系ジョブっぽいので」

成る程、ミユウちゃんはこのまま魔法拳士的なジョブ構成にする感じか……じゃあ、私はどうしようかな。一応候補の下級職はいくつか見繕ってるんだけど……。

「うむむ、私はジョブ構成を戦棍士系統をメインにした前衛型で行きたいから、サブジョブもそれに準じた物にしたいと思ってるんだよね。だから汎用スキルを覚えるヤツか戦棍士系統をメインにしても使える前衛系ジョブを考えてるんだけど、中々ピンと来るヤツが無くて」

「じゃあ【適職診断カタログ】でも使うか？」

「使うー」

私はお兄ちゃんから渡された【カタログ】の質問によるジョブ検索機能を使い、今の私にオススメらしいジョブを表示させてみた……えーつと前衛系サブジョブ候補として【戦士】^{ファイター}【狂戦士】^{バーサーカー}汎用スキル系のサブジョブとして【斥候】^{スカウト}【冒険家】^{アドベンチャー}とかが候補に上がったね。

他にもメイス含む打撃武器全般を使う【棍棒士】^{クラブマン}とか打撃武器を使う僧兵系統の【戦僧兵】^{バトルモンク}とかも出て来たけど、前者は【戦棍士】^{メイスマン}と出来る事はあるまり変わらないし、後者は戦棍士系統をメインにすると覚えた回復魔法が死ぬし。

……そもそも私は勘で攻撃を察知出来る以上《殺気感知》や《危険察知》は要らないよね。じゃあ【ギガース】の特性を活かすために物理ステータスに特化したジョブに就くのもありかな。今メインにしてる【壊屋】もジョブスキルは殆ど使って無いけど高いSTRも役に立っているし。

「……うん、じゃあ次のジョブは【狂戦士】にしようかな。ステはSTRとAGI特化だから相性は悪く無いし《バリアブレイカー》はパッシブスキルだから、アクティブスキルが使えなくなる事が多い狂化系スキルも最終手段としてぐらいは使えるでしょう」

「姉様も就きたいジョブが決まったみたいですし、さっさと済ませてギデオンに行きましょうか」

「それと冒険者ギルドで何かギデオンに行くついでに熟せるクエストも探してみるか」

そうして私とミュウちゃんはそれぞれのジョブに就けるジョブクリスタルでメインジョブを変更した後、そのまま冒険者ギルドでカタログを見繕って適当なお使い系クエストを受注する事にした。

内容は難易度：二ぐらいの「配達依頼―決闘都市ギデオン ギルド間配送」という当たり障りの無い物だったけど、報酬が3万リルと結構良かったからね。

……まあ、期限は三日以内だし荷物を持ち逃げした場合には刺客を送るとか言う物騒な注意書きが書いてあったけど……冒険者ギルドってその手の懲罰部隊とかいるのかな？

「で？ その所はどうなのアイラさん？」

「冒険者ギルドにはそのような物はありません（大本営発表）……というか、この冒険者ギルドは現役を引退した冒険者の再就職先の一つでもありますから結構高レベルの職員とかもいるんですよ、私とか。……犯罪者はそういったギルド職員や騎士や雇った冒険者で捕まえる様になってます」

「説明ありがとうございます、アイラさん。……ミカ、あんまり変な事を聞くんじゃない」

テヘペロ、ごめんなさい！ でもあんな注意事項が書いてあったら気になるよね？ ……まあ、そんなこんなで私達はクエストを受注したのであった。勿論アイラさんにもちゃんと謝りました。

「……では、こちらが皆様に運んでもらう荷物になります。それと最近、王都からギデオンへの街道に行く商隊で行方不明者が時折出ているのでご注意下さい」

「分かりました、気を付けます」

「まあ、今の私達なら道中にへU ユニーク・ボス・モンスター B Mでも襲って来なければ無事にギデオンに着けますよ」

「……姉様、それはフラグと言うのでは？」

大丈夫大丈夫、私の「直感」だとギデオンまでの道中では何か強敵と遭遇する感じはしないし……ただ、何故か「何も無い」気もしない

「ただけだね。」

「……そんな会話をしているとアイラさんが何か感慨深そうな顔になっていた。」

「？ どうしたんですか、アイラさん？」

「いえ、最初に指導した時と比べて皆さん見違えましたねと思っただんですよ。いずれ強くなるのは分かっていますけどここまで早いとはね。……最近では【インストラクター教導官】のジョブスキルを使って王都に来たばかりのへマスターに戦闘指導を行うクエストもやってるんですが、貴方達程の資質と才覚を持つ人は余り居ませんし」

「へー、そんな事もやってるんですか？」

「何でも教師ギルドと冒険者ギルドの共同でやっているんだとか。この世界で戦闘者としてやっていくのに必要な常識とかも教えてるから、非常識な行動が減る・やる事が分かりやすいとティアン・へマスターに共に結構好評らしい。」

「……でも、ちよつと長く話しすぎたのか受付に列ができて始めてきたね。お兄ちゃんとアイラさんもそれに気付いたみたい。」

「……余り長く話をする訳にもいかんな。次の人が待っている」

「そうですね。……それでは皆様お気をつけて」

「……とまあ、そういう訳で私達はクエストの荷物を受け取った後、アイラさんの見送りを受けて王都の南にある決闘都市ギデオンへと向かうために南門を潜ってへサウダ山道へと出たのだった。」



「おー！ 馬車なんてのに乗るのは初めてだけど意外と乗り心地がいね。もつと揺れるかと思ってたよ」

「速度も思った以上に早いですし、振動の方もリアルの車と対して変わりませんね」

「クッションもあるしね」

「そうして王都を出てへサウダ山道へを南に進んでいた私達は思ったよりも乗り心地が良い馬車の旅を満喫していた……ちなみに私達が

乗っている馬車は御者を含めて五人ぐらいが乗れるサイズの小型二輪馬車であり、それを引いているのは亜竜級モンスターデミドラグ・ライトニングホース【亜竜雷電馬】に進化したヴォルトである。

「まあ、この世界にはリアルと違って『スキル』と『ステータス』があるからな。この場合は馬車に付けられている《悪路走行》のお陰だろう。現実と違って街と街を繋ぐ道もモンスターがいるせいでもともと舗装されていないから、こういうスキルはこの世界での主要な移動手段である馬車には必須らしいぞ。STRがある程度あればモンスター一体でも普通に馬車を引けたりするしな」

『BURURU、BURURU（亜竜級まで進化すれば普通に馬車を引くぐらいは問題無いですね）』

ちなみにヴォルトは進化前だとMPとAGIが高いタイプだったので、馬車を買った後に試しに引いてみたら人間三人を乗せて長時間馬車を引くのはちょっとキツかった事が分かったらしい。

それに気が付いたお兄ちゃんは急いで【獣戦士】ジャガーマンをカンストさせて、すぐさまパッシブで騎乗している物を強化出来る《騎乗強化》スキル狙いで【騎兵】ライダーに転職して狩りや魔石職人系クエストをこなしまくってレベルを上げたんだと。

……まあ、そうやって経験値稼ぎをしていたらヴォルトが亜竜級に進化してSTRはどうかになってしまったのだが、今度は従属キャパシティの方がキツくなったので【調教師】トレーナーに就いてレベルを上げ……みたいな感じだったとか。

「……それはまた二転三転したんですね。色々と準備をして下さってありがとうございますございました兄様」

「まあ気にするなよ、お陰で俺もヴォルトもレベルも大分上がったしな。それに転職条件を満たして【高位魔石職人】ハイ・ジエムマイスターにも就けたから」

『BURURURURU（まさかここまで早く亜竜級に進化出来るとは思いませんでした）』

まあ、お兄ちゃんの場合どんなジョブのレベルを上げてても無駄にはならないだろうからね……っと、右の森から何か来るね。

「お兄ちゃん右からー」

「ああ分かってる。《魔物察知》にも反応があったからな」

『BURURU（来ますね）』

『KISYAAAAA!!!』

私がお兄ちゃんに警告した直後、街道の右にある森から二匹のクワガタムシ型魔蟲系モンスター「スラツシャー・スタッグ」が名前通り鋭い刃になった顎をキチキチと鳴らしながらこちらへ飛んで来た。

……モンスターの少ない街道とは言えフィールドだからね、こうしてそれなりの頻度で襲われる事もある訳ですよ……お兄ちゃんやヴォルトも周囲の索敵は欠かしてないしね。

「ああいう下級モンスターならどうとでもなるんだがな、俺は右をや
る……《ヒート・ジャベリン》」

『BURUAA!（《ライトニング・ジャベリン》!）』

『SYAAAAA!!!』

そして飛来して来た「スラツシャー・スタッグ」二匹は、お兄ちゃんとヴォルトがそれぞれ放った炎と雷の槍で貫かれて出オチ気味に倒されたとき。

……とまあ、モンスターに関しては一向に問題は無いんだよね。大体お兄ちゃんとヴォルトの遠距離攻撃で先に倒せるし、それで倒しきれない程に多ければ私とミュウちゃんが馬車から降りて相手をするだけで済んでるから。

「お兄さんもヴォルトもお疲れ様。索敵に戦闘に大変だね」

「索敵に関してはミカが事前に報告してくれるし、ヴォルトも手伝って交代でやってるからな。お陰でMPやSPにも余裕がある」

『BURURURU、BURURURU（野生の草食系モンスターにとって周囲の索敵は重要でしたからね）』

ちなみにヴォルトは元々《殺気感知》や《危険感知》を高レベルで持っていた——ヴォルトの言葉を翻訳したお兄ちゃん曰く『コレがないモンスターは直ぐに死ぬ』そうである——上に、自分より強い存在の位置が分かるパッシブスキル《強者感知》まで持っているので索敵役としても問題無い模様。

……尚、肝心の騎乗戦闘はもうちよいらしい。何でも進化した時に

雷属性スキルの制御能力が上がる《雷電制御》というパッシブスキルを習得したので、スキルレベルを上げればいけると言う見込みだとか。

「うん、実に順調な旅路だね。これなら無事にギデオンに着きそう」
「姉様がそう言うなら安心ですね」

そんな感じで私達は馬車での旅路を楽しみながらギデオンまで進んで行ったのでした……ただ、危険は無い気はするんだけど何か起きそうな気も少しするんだよね。危なくないトラブルでもあるのかな？



■□〈ヘネクス平原〉
【フアントムシーフ怪 盗】???

そこは決闘都市ギデオンの北にある〈ヘネクス平原〉……その深夜の街道沿いで一つの顔の下半分を隠す覆面と帽子を付けた黒尽くめの人影が大きな荷袋を重そうに背負いながら、まるでギデオンから逃げる様に全速力で北に向かって走っていた。

……よく見るとその人影は小柄であり身体に丸みを帯びている事、そして覆面に隠されていない青い眼や帽子から見える金髪から人影は少女だと分かる。

「ハア……ハア……重いね。《懸架重量軽減》も効果は薄いか……」
……もしその少女を誰かが見ていればアイテムボックスに物体を収納出来るこの世界において態々荷袋を使って物を運ぶ事に不自然さを感じるかもしれないが、それ以上に運んでいる等の少女の必死さの方が目に付くかもしれない。

(どうにかこの『忌まわしき呪物』を盗み出す事には成功したけど、追っ手を巻く為とはいえ逃走ルートを北にしたのは失敗だったね。南や西なら森に隠れて離脱出来たのに……このルートに気付かれるのも時間の問題だし、なるべく早くギデオンから離れないと)

そう考えながらも少女は更にスピードを上げて〈ヘネクス平原〉を駆けて行く……一見小柄で華奢に見えるその少女だが、盗賊系統派生上

級職【怪盗】の他に【荷運^{キャリアー}】の上級職である【輸送隊^{コンボイ}】のジョブにも付いており、合計レベルも400に達する凄腕のティアンである。
（なるべく遠くに離れてこの『呪物』を誰にも知られない場所に……チッ！）

『GYAAAAA!!』

そうして走っている途中、少女は取得していた《危険察知》に反応を感じて咄嗟に短剣を引き抜いた……直後、夜闇に紛れていた三体の黒い狼型モンスター【ブラックナイト・ウルフ】が少女に襲い掛かった。

「邪魔っ！ 《スリーピング・ファンク》！ 《パラライズ・ファンク》！」

『GEE!?!』『GAA!?!』『GUU!?!』

だが、少女は素早く短剣を振るって狼達を斬りつけて【強制睡眠】や【麻痺】の状態異常にする事でその動きを封じ、そのままドメも刺さずに走り抜けていった。

（こんな所で足止めを食らう訳にはいかない。……この『呪物』を盗み出すのに予定より時間が掛かったからもうすぐ夜が明けてしまう……その前になるべく遠くへ……!）

……そうして狼の群れを切り抜けた少女は再び夜闇の中を駆けて行くのだった。

謎の【怪盗】と復讐鬼

□〈ヘネクス平原〉【僧兵^{モンク}】 ミユウ・ウイステリア

「おー！ 綺麗な朝日だね！」

「そうですね、姉様。現実では朝日なんて中々見る機会は無いですし」「お前ら朝起きるの遅いからな。俺は日課の早朝マラソンとかしてるから向こうでも結構見てるぞ」

「へー、ミユウの記憶で知ってたけどそんな感じなんだ」

地平線から半分くらい太陽が昇る程度の早朝、私達が乗っている馬車は漸く決闘都市ギデオンの北にある〈ヘネクス平原〉北部の森林地帯に足を踏み入れていました。

ちなみに王都を出たのがちよつと遅かったので道中すっかり暗くなってしまい一旦ログアウトしようと言う意見も出たのですが、姉様の『このまま夜間行軍した方が良い気がする。夜営とかもしてみたいし』と言う鶴の一声で途中夜営を挟みながら進む事になったのです。

……まあ、夜営や野宿なんて現実ではやる機会なんて無いので結構楽しめましたがね。

「地図によるとこの森林地帯を越えればギデオンまでは平原だから、地形的にも一気に進めるだろう。頼むぞヴォルト」

『BURURU（お任せあれ）』

御者席ではこれまで頑張って馬車を引いてくれたヴォルトに声を掛けていたのです……ある程度舗装されているとは言え山道と林道は物凄くガタついてて《悪路走破》がある馬車でも結構移動し難かったですからね。加えて山や森だと下級とは言えそれなりの頻度でモンスターが襲い掛かってくるので結構面倒でしたし。

まあ一般的なテイアンでも使える移動ルートだったので戦闘自体には苦労はしませんでした。どちらかと言うと初めての馬車での移動に慣れていなかったのが原因ですかね。

……とまあ、そんな感じで馬車の旅をしていた私達ですが突然ヴォルトが雰囲気を変えました。これは道中何度か見た『ヴォルトがスキルで何かを感じ取っている』時の雰囲気ですね。何

でも野生に生きている草食モンスターにとって感知系スキル複数持つのは基本だとか。

『BURU……(む？…これは……)』

「どうしたヴォルト？」

『BURRU、BURRU、BURRU（《強者感知》に反応があります。森の中から何か近づいて来ますね……多分人間かと）』

「ん、分かった。……森の中からおそらく人間がこちらに向かって来ているとヴォルトが言っている、注意しろ」

まあ予想通りと言うか私達には分からないヴォルトの言葉を翻訳した兄様がそう言ったので、私は即座にミメと《憑依融合》^{フュージョンアップ}で融合し、姉様はいつでも「ギガース」を取り出せる様に（重量があるので馬車の上で取り出すとバランスが崩れる）身構えました。

……あ、忘れるところでした。

「そう言えば「ブラックオーツ」のスキルに《人間探知》がありました。近付いてくるのが人間であれば使えるでしょう」

『今までモンスターとばかり戦っていたから使う機会が無かったしね』

このスキルはその名の通り人間しか探知出来ないので使う場面が限定されますからね、使える時に使っておいて扱いに慣れなければ……と言うわけで《人間探知》起動なのです。

……ふむふむ、確かにここから二時の方向に人間の反応がありますね。数は一つ、レベルは結構高い感じかもしれませんが随分と弱っている様な？ 何かフラフラ移動してますし。

「……と、そんな感じなのです」

『BURRU（こちらと同じですね。手負いの相手だと思います）』
「成る程、さてどうするかな。モンスターに襲われたティアンの旅人とかだつたら見捨てるのも後味が悪いし……ミカ、危険は感じるか？」

「ううん、その人からはそんなに危険を感じないよ」

姉様もそう言っているみたいですし、本当に怪我人とかなら助けた方が良いのではという話になったので……。

「……何なら私が様子を見てこようか？ 多分無いと思うけど私なら万が一があつても大丈夫でしょう」

「そうだな、じゃあ頼んだミカ」

「ほいほーい」

そういう訳で念の為に【ギガース】を手に持った姉様が反応のあつた森の中へ様子を見に行きました……まあ姉様が警告をしない以上は特に問題は無いでしょう。念の為に《人間探知》は続行して姉様と謎の人物の動向が伺っておきますが。

……そうして待つ事しばらく、姉様と謎の人物が接触した事が感じ取れましたが……。

「……アレ？ 何か一緒になつてこつちに来ますね……いえ、これは姉様が謎の人物を背負っているみたいですよ？」

『BURURU（確かにその様ですね）』

「ふむ……念の為にポーションと回復魔法の準備をしておくか」

その反応から状況を察した私達は怪我人を治療する準備を進めておきます……そして、その少し後に姉様が森の中から出て来たんです。その背中には気絶している凄惨なボロボロな一人の女性が背負われており、更に片手には何か大きな物が入っているらしき荷袋を重そうに引きずっていました。

「お兄ちゃん、怪我人一人お待ち！」

「別に待つてないが……《フォースヒール》！」

とりあえず兄様が背負われている女性に準備していた上位回復魔法をかけましたが目を覚ます事はありませんでした……呼吸はしますし心音もありますから生きてはいるみたいですね。

『HPはちゃんと回復してるから大丈夫だと思うよ。後ステータス的にはAGI特化って感じ』

「分かりましたミメ。……では姉様、簡潔に説明を」

「森の中でこの人に出会ったらいきなり気絶したので、とりあえず背負っていた荷物を引きずってここまで持って来ました」

そうして姉様が説明している間に背負っている女性を馬車の後部座席に寝かせました……少し状態を見た限り怪我は兄様の回復魔法

で大体治っていますし、呼吸や脈拍も安定しているので命に別状は無さそうなのです。

……とは言え、HPが回復した後でもその女性が【気絶】から覚める気配は無かったので、とりあえずさっさと森を抜けて安全な場所で彼女の目覚めを待とうと言う方針になりました。

「じゃあ後はその荷物だが……しかし他人の荷物を引き摺るのは駄目では？ お前のSTRなら纏めて持っていけると思うんだが」

「いやいやお兄ちゃん、中身がなんだか分からないけどこの荷物めちやくちや重いんだよ。気絶した時に彼女がちよつと押し潰されそうなぐらい。ほら」ベリベリイ!!!

……そう言つて姉様が荷袋を持ち上げようとした瞬間、既にポロボロであつた荷袋が中身の重量に耐え切れずに出来ていた裂け目が一気に広がつて荷袋が真っ二つになり「中身」がこぼれ落ちたのでした……あーあ。

「……やっちゃいましたね姉様」

『やっちゃつたねー』

「いやいや！ この荷袋、私が見た時には既にポロボロだったし！

偶々私が持ち上げた時に耐え切れなかつただけだし！ ていうか、なんでこんなに中身が重いのか?！」

何か姉様がテンパつてますが流石にこれは偶然でしょう。姉様の「直感」も危険が特にならないトラブルには大して反応しない以前言つてましたし。

……しかし、既にポロボロだったとはいえ少し持ち上げるだけで頑丈そうな荷袋が破れるとは、一体この中身は何なのでしょう？ と気になったのでこぼれ落ちた物を見てみると……。

「……これは『金庫』ですかね？ 随分大きいですが」

「しかしなんでアイテムボックスがあるこの世界でこんなデカイ金庫を背負つてたんだよう……」

「……いや、ちよつと《鑑定眼》を使つてみたんだが、どうもこれは金庫型のアイテムボックスみたいだな」

その荷袋に入っていたのは高さ1メートル、幅50センチぐらいの

ダイヤルの付いた黒い金庫——兄様曰く『金庫型のアイテムボックス』らしい——でしたのです……。でも、まともに持ち運ぶ事も出来ないアイテムボックスとか何か意味があるんでしょうか？

「物をお手軽に運ぶ事が主な用途のアイテムボックスがクソ重いとか意味無くない？　なんでこんな物が存在しているんだか……」

「いや、確かこれは据え置きで使うタイプの防犯用アイテムボックスだったな。この前、新しいアイテムボックス買う時に店で見た覚えがある。……アイテムボックスはアイテムボックスに入れられない事を利用して敢えて重量を増やして盗まれ難くしたタイプで、更に強力な盗難対策が施されているから貴重な物品を保管する様として売られてたな」

「成る程、見た目通り現実で言う金庫ポジションとして作られたアイテムボックスだと……。つまり普通はフィールドで持ち運ぶ様な物では無いと」

「……この時、私達三人は同じ事を考えていました……。『アレ？　これ厄ネタじゃね？』と……」

「ちなみにこの子に《看破》を使った所、メインジョブが【ファントムシーフ怪盗】になってたな」

「いや、ジョブの選択自体は個人の自由だし、盗賊系統は探索に役立つスキルとか覚えるから普通に取ってる人も多いしね。……私の『直感』だと危険は感じないんだけどなあ」

「では、何処か人眼に付かない場所で休んで彼女の目覚めを待ちませんか？　詳しいことは彼女自身に聞くのが手っ取り早いと思うのです」

「『異議なし』」

そんな感じで私達が顔を見合わせて色々と話し合った結果、とりあえず何処か適当に所で休みながら彼女の目覚めを待つて事情を聞くという無難な選択に落ち着きましたのです……。正直言って詳しく事情が分からないと何も出来ませんしね……。



□〈ヘネクス平原〉 【調教師】^{トレーナー} レント・ウイステリア

そういう訳でどうも厄ネタっぽい少女を連れて一旦〈ヘネクス平原〉の森林部を出て、その近くにあった馬車を止められるスペースのある平野で彼女が目覚めるまで待つ事になった。

……尚、あの謎の金庫はミカに運ばせた。どうも『運ぶ際に重量が増加する』類のスキルが組み込まれてる所為で馬車で運ぶのが難しかったからな。

「ふー、重かった。私これでもSTR5000近くあるんだけどねー」
「多分防犯用の呪いみたいな物だろうな。……それで彼女の方は？」

「呼吸は安定してますし多分もう少して目覚めると思いますよ」

……そんなミュウちゃんの見立て通り馬車の後部座席で寝かせていた少女が身じろぎしながら目を覚ました。

「……………ううん……………ここは……………？」

「あ、起きたー？ 私の事覚えてる？ 貴女が〈ヘネクス平原〉の森の中でいきなり倒れたから運んだんだけど」

「それで今は〈ヘネクス平原〉の北の方で休んで貴女が目覚めるのを待っていた所なのです」

とりあえず彼女への事情説明は妹達二人に任せの方針で行く……こういう状況なら同性相手の方が色々余計な面倒が無いだろうし、ウチの妹達って見た目は普通の少女だから安心感が与えられるだろう。万が一彼女が凶悪犯とかでも問題無く制圧出来るし。

……とまあ、そんな感じで目覚めた彼女に妹達が事情を説明する事しばらく、一通りの事情を理解したらしい彼女は馬車から降りてこちらにお礼を言ってきた。

「ええと、この度は助けてくれたみたいですがどうございます。私は【怪盗】のシルビィ・マグノリアと言う者です」

「俺は〈マスター〉で【調教師】のレント・ウイステリアだ」

「その妹で同じく〈マスター〉のミカ・ウイステリアだよ」

「同じく〈マスター〉で妹のミュウ・ウイステリアと申しますのです」
そんな感じで自己紹介をしたのだが、その直後からシルビィさんは

何かを探し求める様に辺りを見回し始めた。

「……あの、私が背負っていた荷袋があったと思うんですけど……」
「あの荷袋はもうボロボロだったからシルビイさんを運ぶ時に破れちゃったよ。中身の金庫はあそこに置いてあるけど」

そうやって絶妙に嘘を言わない範囲で荷袋が破れた事を告げたミカの指差した先に置いてある金庫を確認したシルビイさんは、直後何か忌まわしい物を見るかのような目をした後に安堵の溜息を吐いた。

「……運んで来て貰ったんですね、ありがとうございます。荷袋に關しては予備がありますから御心配無く。……申し訳ありませんが私は先を急いでいるので……」

そう言った彼女はアイテムボックスから予備の荷袋を取り出して金庫の方に向かっていった……ふむ、実際あからさまに怪しくはあるんだが偶々出会っただけの関係だし、態々引き止める程の理由も無いからどうしたものか「待った!」……ほう?

「ええと、ミカさんでしたか。一体何か……?」

「シルビイさん、その金庫を持って一人で行くのはオススメしないよ……今の貴女には死相が見えるから」

金庫の方に行こうとしていた彼女に対し、その身に迫る危険を感じ取ったのか非常に真剣な表情をしてミカがそう言っただけで呼び止めた……成る程、どうやら何としても引き止めるだけの理由が出来たみたいだな。

「……ただ、そんな事をほぼ初対面な彼女が理解出来る訳がなく、その顔には有り有りと困惑の表情が浮かんでいた。まあいきなり『死相が見える』とか言われれば当然だよな。」

「……心配してくれるのは有り難いのですが、私はどうしても行かなければならない理由が……」

「いや、別に心配とかじゃ無くてもこのまま見過ごすと私の精神衛生が非常に悪くなるから止めるだけだよ。……例え力付くでも」

そうして何か言い訳をしようとしたシルビイさんの言葉を遮って、ミカは即座に【ギガース】を召喚して彼女に突き付けた……残念ながらシルビイさん、ミカのそれは善意というより『そうしないと気分が

悪くなる』からやってるだけなんだよなあ。

……まあ、ここまで性急な行動をとるって事は、そうしないと彼女がすぐ死ぬ”レベルで切羽詰まってるって事だろうが。

「……ええ？ いやあの……ええ？」

「姉様、彼女に迫る危険とはどのくらいですか？」

「うーん、シルビイさんがその金庫持って私達から離れたら十分ぐらいで死ぬんじゃないかな？ 私の『直感』がそう言ってる」

こっちの余りの態度の変化に物凄く困惑しているシルビイさんを差し置いて、ミカとミュウちゃんは彼女に迫っている危険について話を進めて行く……あ、彼女がどうにかして隙を見つけて逃げようとしてるな。

……まあこの状況なら当然なんだが、いつの間にもやら彼女と金庫までの道を塞ぐようにしてミュウちゃんが廻り込んでから逃げ出せない様だ。それでウチの頼れる探知要員ヴォルトが何か見つけたらしいし。

『BURURU、BURURU（マスター、何かが迫っていますよ。おそらくモンスターでしょうが結構な大群です）』

「分かったヴォルト《魔物索敵》……何故かモンスターの大量がこっちに迫って来てるんですが、シルビイさんは何か心当たりでも？」

「ええ？ ……いや、まさかさつき襲われたゴ布林達はちゃんと巻いた筈……」

……そんな彼女の言葉に答える訳では無いだろうが、地平線の向こうから三十体ぐらいのゴブリンの群れが真っ直ぐこっちを目指してにやって来た。

彼女の発言から推測するにあのゴ布林達は一度襲った彼女を追って来た様だが、ここまで来る時には付けられてはいなかった筈だが……。

『BURURU、BURURU、BURURU（おそらく《マーキング》系のスキルでも使われたんでしょう。肉食のモンスターが良くやる手です）』

「ヴォルト曰く、彼女に居場所が分かる何かを付けられたっぽいので

「戦闘準備！」

「了解！」

そんなヴォルトの意見で疑問が解消された俺は、とりあえず簡単な指示だけ出してからヴォルトから馬車を外してアイテムボックスに入れて戦闘準備を終えた……後、妹達は特に準備とか必要無いので既に戦闘態勢である。

……尚、事態が色々と急展開（大体ミカの行動の所為）過ぎて困惑していたシルベイスンだったが、そこはこの世界で生きるティアンだけあつて直ぐに気を取り直してアイテムボックスから短剣を取り出し戦闘準備を行っていた。

「待って！ 私を後を付けられた以上は私も戦うよ！」

「ではよろしくお願いします」

「気絶から目覚めたばかりだから無理はしないでね」

ここでゴブリンを俺達に押し付けて逃げるんじゃ無く、俺達との共同の選択肢を選ぶって事は悪人では無さそうかな……それはさて置き向かって来たゴブリンの群れは結構な規模で、かつキチンと統率も取れているのか整然と隊列を組んでこつちに向かって来ていた。

……何かいつかどこかで見た光景だよなあ。具体的にはデンドロ内で一カ月ぐらい前に「サウダ山道」で。

『『GUGUGUGUGUGUGUGU……』』

「うわあ、やっぱり『ゴブリンキング』が率いている群れじゃん。もう見飽きたんだけど」

予想通りと言うか何というか、そいつらこれまで何度も見た『ゴブリンキング』に率いられるゴブリン達の群れであった……のだが、何故かそれを見て辟易していたミカを見た連中は途端に激怒し始めたのだ。

『GYAAAAAAAAAAAAAAAA!!! MITUKETAAAAAAAA!!!』

『『GAAAAAAAAAAAAAAAA!!!』』

「うわっ!?? いきなり何なのさ!!!」

「……あの姉様、連中は姉様が付けてるベルトを見て怒ってる気がするのですが……」

キッチンと潰して禍根は絶っておこう。えいっ。

「……あ、あれ？ 確か『ゴ布林キング』にはダメージを部下に移し替える《ゴ布林キングダム》のスキルが……」

「ああ、そこはミカのへエンブリオの力ですね。……それに配下のゴ布林もそろそろ全滅しますし。《ブレイズ・バースト》」

『GYAAAAAAAAA!?!』

そんな私を見て「ゴ布林キング」の知識があったからか驚いているシルビイさんのフォローをしながらも、お兄ちゃんは得意の火属性魔法でゴ布林達を複数体焼き払って行く。

「向こうも終わりましたしこっちも片付けましょうか。《ラツシユナックル》！」

『BURURU……HIHIIN!!! (そうですね……《ライトニング・ジャベリン》!)』

『GYAAAAAAAAA!?!』

そして残りのゴ布林達もミュウちゃん雷を纏った拳のラツシユや、ヴォルトの雷属性魔法によつてあつさりと打ち倒されていった……『ゴ布林キング』が居なくなって強化が無くなればこんなものだよねー。

……それからしばらくの後に全てのゴ布林達は「ゴ布林キング」の後を追っていったのだった。

「……よし、全部倒したしこれで一件落着……」

「な訳ないだろう。……余計な茶々を入れた連中を倒しただけで、一番重要な話がまだ残っているからな」

「そうですねえ。しかし、シルビイさん自身が話す気がないなら無理して聞く訳にも「あ、あの！」……んん？」

そんな風に私達が今後どうするかを話し合っていると、いきなり何か焦った感じがするシルビイさんが話に割り込んで来た……まあ、向こうから何か話す気ならそれでいいんだけどね。こっちからは話を切り出し辛かったし。

「何でしょうか？ シルビイさん」

「ミカさんのへエンブリオはスキルを無視して対象にダメージを与え

られるんですよね。……お願いします！　どうか貴女の力であの金庫を破壊してくれませんか!?!」

……そうしてシルビイさんが切り出した話は中々衝撃的なものだった……さてさて、どうしたものかね。私の「直感」には反応してないから危険は無いと思うんだけど……。



□〈ヘネクス平原〉【調教師】トレーナーレント・ウイステリア

さて、いきなり焦った様子で妙な事を言い出し始めたシルビイさんを落ち着かせる為に、俺達はキャンプセットの椅子をアイテムボックスからだして自分達と彼女を座らせつつ「あの金庫」について詳しい話を聞く事にした。

「それで、あの金庫を破壊して貰いたいという話だったが、そもそもあの金庫はなんなんだ？　それが分からない以上はその依頼を受ける訳には行かないぞ。……下手をすると犯罪になる可能性もあるし」「それは……」

これに関してはちゃんと聞いて置かないといけないしな。もしあの金庫が盗品なら犯罪の片棒を担ぐ事になるし……とりあえず【エクソシスト祓魔師】で覚えた《真偽判定》を使いつつ、妹二人に目配せして彼女の発言に裏が無いか探ってもらう。

……ミカは「直感」で彼女の発言に危険は無いか、ミュウちゃんは彼女の雰囲気から不審な点が見られないかを探る感じだな。目配せされた二人み領いたし、後はシルビイさんがどう出るかだが……。

「……分かりました。確かに今の私は何も事情を知らなければ金庫を盗み出した犯罪者に見えるでしょうからね……実際、そう間違っはいないんですが。……この金庫は私の父の物でそれを私が盗み出した形になりますから」

しばし考え込んだ後、意を決したらしい彼女は自分が何故その金庫を持っていたのかを話し始めた……しかし、自分の父親の金庫を盗み出したとは穏やかでは無いな。

……とりあえず俺の《真偽判定》には反応が無いし、妹二人も何も言っていない以上は本当なのだろうからもう少し話を聞くべきだろうな。

「私の実家であるマグノリア家は父が一代で財を成した裕福な商人の家で、ほんの数年前まではその父と母と私の三人で仲睦まじく暮らしていたんです。特に父と母は大恋愛の末に結婚したので娘の私から見ても非常に仲のいい夫婦でした。……しかし、数年前に流行病で母が亡くなってから、そんな幸せな生活は脆く崩れ去ってしまったのです……」

彼女はそんな事を悲しげな表情で語っていった……少なくとも俺の《真偽判定》には反応は無いし、妹二人も何も言っていない以上彼女の話は真実なんだろうから引き続き聞いていこうか。

「母を失った父はそれまでとは別人の様に塞ぎ込んでしまいました。仕事も手につかず私が声を掛けてもまともに反応してくれなくて……そして、いつの日か父はこの金庫の中に入っている『ある物』に溺れて、ひたすらに家の資産を食い潰す様になってしまったのです」「ある物?」

「はい、それはかつて探検家だった父が《墓標迷宮》で手に入れた物で、父が商売をキツカケになったアイテムなんです。……何でもリルを投入する事でランダムにその額に応じたアイテムが手に入る代物でして、父はそこから偶々出たレアアイテムを売る事で商売の元手にしたそうです」

……んん? 何だろうな、そんな特性で資産食い潰すアイテムにはちよつとだけ聞き覚えが……。

「……えーっと、シルビイさんそのアイテムの名前は?」

「はい、そのアイテムの名前は『ガチャ』と言って、投入したリルに応じたアイテムを何処からか召喚する誰が作ったのかも分からない謎のアイテムです」

やっぱりかー。しかしこのデンドロにもガチャとかあるんだな……それでテイアンがガチャ破産とか運営は何考えてるんだろうね。どうせ言っても意味ないだろうけど。

……この事実を聞いて妹二人も大分微妙な顔をしているが、それが目に入っていないのか或いはそれだけ切羽詰まっているのかシルビイさんは更に話を続けた。

「どうやら父は母を失った悲しみをかつて自分を成功に導いた『ガチャ』に縋る事で誤魔化しているみたいで、最初はただ1日1度使う程度だったのですが次第に頻度が増えてきて……今では仕事もまともに行わず破産寸前まで資産を食い潰してガチャに耽る日々を父は過ごしているんです。私も何度も辞めるように言ったのですが聞き入れてもらえず……」

まあ、ヘマスターから言わせるとガチャで破産しても笑い話で済むんだろうが、この世界で生きるティアンにとっては笑い事じゃあ済まないよなあ。

……シルビイさんの深刻な表情と話から、いつの間にか妹二人もそれに気付いて真剣な雰囲気になって話の続きを聞いているし。

「……なので『ガチャ』を破壊して父の目を覚まさせようとしたんですが、父は普段から貴重品をこの金庫に入れて身内にも触らせないので手を出す事は出来ませんでした。……そこで【ファントムシーフ怪盗】と【コンボイ輸送隊】のジョブを取ってレベルを上げきってから金庫ごと盗み出し、その上でこの金庫を誰にも見つかからない何処かに始末して仕舞えばいいと考えて、実際に盗み出して外に出たら運悪くモンスターに襲われて皆さんに拾われたのです」

「……はえー」

「中々アグレッシブな感じですね」

何とか色々と凄いシルビイさんの話に俺たちは一周回って感心してしまった……実際、そんな理由だけで戦闘向きでは無い上級職二つのレベルをカンストさせるとか、ティアンの身では物凄く大変だっただろうに……。

……まあそれと彼女の依頼を受けるのは別問題なんだがな。流石に俺達が犯罪者扱いになるのは嫌だから色々確認しないと。

「でも、その金庫の中にガチャ以外の貴重品とか入っていたなら何処かに隠すのは問題じゃないの？」

「大丈夫です。……今のうちの資産は最早破産寸前で、この中にあった貴重品も父が全て売りに出してガチャ資金に変えた後だと確認済みです」

「よくそこまでレベルを上げられましたね。……というか、物理系統のジョブにして金庫を盗まずに破壊すれば良かったんじゃないや……」

「レベル上げに関しては知り合いの傭兵団の皆さんに協力して貰いましたし、そもそも私には強力な戦闘系のジョブへの適性が無かったです。……後、この金庫は伝説級金属オリハルコンをベースにして重量と強度を大幅に上げた合金で出来ていて、更に無理矢理破壊しようとする強度が上がるスキルなどもあるので私では破壊出来なかったんです」

……妹達が適当に質問して彼女もそれに答えているが、今の所《真偽判定》には引つかかかっていないな。その二人も特に何も言わないし少なくとも彼女に悪意は無いんだろうが……俺も質問してみるか。

「事情は大体分かった……が、そもそも親父さんの所から無駄で金庫を持ち出した時点で泥棒扱いでは無いのか？ はつきり言うが俺達は自分達が犯罪者扱いされる事に関して基本的には拒否させて貰うぞ。……というか、今の貴女に必要なのは親父さんとしつかり話をする事だと思うが」

「ええと……すみませんご迷惑をお掛けして。……一応、父の元には私が何でこんな事をしたのかを書いた《予告状》を置いておきましたし、世話になった傭兵団の人達にも同じ内容の手紙を渡しておきました。……後、このガチャさえ無くなれば父も私の話を聞いてくれるのでは無いかと思って……」

ふむ、少しきつめに聞いてみたが《真偽判定》には反応無しと……事前に周囲の人間に行動の意図を伝えておくなど周りの事がある程度は考えてはいるみたいだが、その反面こんな無鉄砲な行動に出るぐらいには追い詰められてるって感じかね。

……さてと、多分この調子だと俺達が手伝わなくても一人で金庫を始末しに行きそうだな。どうしたものか……。

呪物（一）と怪盗少女の結末（前編）

□〈ヘネクス平原〉【バーサーカー狂戦士】ミカ・ウイステリア

そんな訳で私達はシルビイさんが金庫を運びながらフィールドに出ていた事情——母親の死が切っ掛けでガチャ狂いになってしまった父親を元に戻す為、そのガチャが入ってくる金庫を盗み出して始末しようとしているらしい——を聞いた訳なのですが……一つ彼女に言っておく事があるかな。

「とりあえずシルビイさんは一度ギデオンに戻った方が良いんじゃないかな？」

「……やっぱり協力はして貰えないんですね。……いえ、流石に出会ったばかりの貴方達にこんな犯罪の片棒みたいな事をやらせるのは、自分でもおかしい事は分かってました……」

「ああいや、そうじゃなくて……お兄ちゃんも言ったけどもう一度お父さんと話すべきだって事。……シルビイさんがそこまで思いつめてこんな行動を取った事をお父さんが知ったのなら、ガチャについても考え直すかもしれないじゃん」

少なくともその父親に真つ当な親としての情が残っていれば、クソ重い金庫を持ち出してまで家出した娘を見て自分の行いを反省ぐらいはすると思うんだよね。

……それでもダメだったら？ 流石に他所様の家庭環境をどうにかするのは私達でも難しいしなあ……。

「……ええと……それは……」

「まあ、ミカの言う事も最もだろうよ。その親父さんは奥さんを失った悲しみからガチャに逃げるぐらいに家族思いなんだろう？ だから娘が悩んでここまでしたと知ったらガチャ狂いの酔いも覚めるんじゃないかね。……それでもダメなら目の前でガチャをぶっ壊すとかすれば良いだろ」

「確かにそっちの方がインパクト有りそうですね」

私の提案を聞いたシルビイさんは冷静さを取り戻したのか顔を俯けて、そこにお兄ちゃんとミュウちゃんのフォローが入って更に深く

何かを考え込む様に黙ってしまった。

……よしよし、どうもかなり思い詰めていて視野が狭くなっていた彼女も私達の言葉を聞いて大分冷静さを取り戻して来たみたいだね。このまま放置していると、多分一人で向こう見ずな行動を取ってそのまま死ぬ可能性が高いみたいだし。

(こーやって知り合ってしまったから、このまま死に行くのを見過ごすのは私の精神衛生的に悪いし……貴女がどうなろうとも命だけは助かって貰うよ)

……私がそんなある意味“自分勝手”な事を考えている間に、シルビイさんは気持ちが悪く落ち着いたのかどこかスッキリした顔を上げた。

「……そうですね。まずはもう少しお父様と話をしようと思います。……改めて思うとちよつと私は色々と思いつめていたみたいですね。皆さんのお陰で気付く事が出来ました。本当にありがとうございます。ございます、何かお礼が出来れば良いんですが……」

「いやいや、一人では“これしか無い”と思いつめていた事でも、他人に相談してみたらあつさりど解決策が思い付くとかはよくある事だからね。私達は話を聞いたただけだしそんなに気にしなくて良いよ」

「そうですよ」

「これからは単独で荷物を持ってフィールドに出るとかしなければ構わないさ。……今回は運が良かったが次は無いだろうし」

そんな感じでシルビイさんはお父さんともう一度話をしてみる事にした様です……ふう、これで彼女がモンスターに喰い殺されそうなルートは回避出来たかな。私の考えを読んだお兄ちゃんも忠告してくれたし。

……さて、後は彼女を連れてギデオンに行けばひとまず解決になると思うんだけど……。

「じゃあ、この金庫を開けるとかの話はどうする？ お兄ちゃんの『目の前で金庫ぶつ壊そうぜ！』作戦には中のガチャを取り出す必要があるし……付いてるダイヤルを適当に回せば開かないかな？」

「あの案はものの例えで言った事だから別に実行する必要は無いんだが……」

「ああ、その話は無しで良いですよ。今度はちゃんとお父様が分かってくれるまでじつくりと話会う気ですから。……それに、そのダイヤルは正しい数字を合わせない事が三回続くと、ダイヤルを回した人間に強力な呪いがかかるスキルが付いていますから」

ほうほう、強力な呪いねー……ふーん……それなら行けるかな。三回でアウトなら二回はダイヤルを回しても安全って事だし……早速二回程適当に回しました（過去形）

「ちよつ!?? ミカさん何を!??」

「……よし、これで次間違えたら『危険』って訳だね。……つまり危険ではない数字を選べば……」

そんな訳で慌てて静止してくるシルビイさんをスルーしつつ、私は『直感』をフル稼働させて金庫のダイヤルをチキチキ回していく……まあ、ダイヤルを弄りながら危険じゃない数字を選んで回して行くだけの、私にとっては簡単な作業なんだけど。

……えーつと、これとこれとこれと……ふむ、それとこれかな？

「……よしっ！ 開いたよー！ シルビイさんどうぞー」

「嘘お!?? ……ファントムシフ【怪盗】のジョブを収めた私ですら、金庫の所有権は身内だったからどうにかして変えられてもこの扉を開く事は無理だったのに……これが伝説の〈マスター〉の力……」

「流石にこんな事が出来るのはウチのミカ含めて何人も居ないだろうがな」

なんか驚愕しながら考え込んでいたシルビイさんだったが、しばらくすると落ち着いたのか開いた金庫の中身を探り始めた……ふむ、この人はどうも一人で考え込む癖があるっぽいね。

「……まあ、何か色々と理不尽を見た気がしますけど置いておいて、とりあえずこの金庫の中身を全部出してしましましょう。……重量増加の呪いは中身が空っぽなら発動しませんからね」

「そういう仕様なんだ」

「そうしないと売る時や部屋に置く時とかに金庫を運べないしな」

成る程く確かにね……と、私がお兄ちゃんの解説に納得している間にシルビイさんは金庫の中から一つの長方形に箱の様な物を取り

出していた。

……よく見るとその箱の上半分ぐらいは透明な素材で中に「複数のカプセル」が入っているのが見えており、下半分には回して使うらしきレバーと如何にも何か出てきそうな排出口が取り付けられている……って、何処からどう見ても現実にある『ガチャ』そのまんまだね。

「これが私の父を狂わせた忌まわしき呪物……【ガチャ】です」

「……まあ、どう見てもガチャだな」

「ガチャだね」

「ガチャなのです」

正直言つて、このデンドロ世界には似つかわしくないぐらいに現実にあるガチャそのままのデザインだね……尚、こんな外見だけでも中にはアイテムとかは入っておらず、投入したリルに応じたアイテムを何処からか呼び出している召喚器の様な物らしい。

……このデザインのどう考えてもへマスター相手にする前提で作ったでしょ運営エ……。

「まあ、私が嫌っていただけで別にこのガチャ自体が呪われている訳では無いのですが。……まだ母が生きていた頃には遊びで回したりしていましたし」

「ふーん……ちよつと回してみても良いかな？　一回だけ、一回だけで良いから！　お礼代わりに！」

「いや、ちよつとは空気読もうぜミカ」

いやあ、だつてこういうゲームの中にあるガチャとか回したくなるじゃん……それにシルビイさんがこのガチャに向ける感情も大分柔らかくなってる感じがするしね。

……後は彼女が私達に対して申し訳なきような風にしてるから、このガチャを回す事をお礼つて事にしてやろうと思つたんだよ。

「ええと……お礼をするのは構わないんですが、この盗みをする為の準備とかで今私はリルをあまり持っていないくて、このガチャから高価なアイテムを召喚する事は難しいかと……」

「ああいや、お金は当然コツチで出すよ。ただちよつとガチャを回さ

せてくれれば良いだけだから。……〈マスター〉の場合だと『ガチャが回せる』というか事実だけでお礼になるからね!」

「そんな〈マスター〉は一部だけだと思うが……まあ、記念に一回ぐらい回すのも面白そうか」

「そうですね。沼に嵌ったりしないお遊び程度なら良いんじゃないでしょうか」

私の提案を聞いてガチャから出て来るレアアイテム狙いだと勘違いしたのかシルビイさんが的外れな事を言ったけど、そこはしっかりと『〈マスター〉は未知や娯楽を求めるからガチャが回せるだけでお礼になる』的な事を言っただけで納得して貰った。

……最も彼女からは『決して連続で回さず一回きりです!』と念を押されたりもしたが……別に私達は物珍しいガチャを回してみたいだけでガチャ狂いではないと説得するのは大変だったね。彼女の事情を考えれば当然だけど。



□〈ヘネクス平原〉【調教師】トレーナーレント・ウイステリア

そんな訳でガチャを引く引かないに関して、俺達とシルビイさんの間で色々話合った結果『三兄妹で一人10万リルを1回ずつ回す』という事になった。

……なんかグダグダな感じの話し合いだったが、だからこそ彼女が抱いていた申し訳無さやらちよつと暗い雰囲気とかが大分薄くなつた様な事だけは良かったかな。

「さあ、やって来ました! ガチャ十萬リル一発勝負! まずはお兄ちゃんからだよ!」

「はいはい……俺は妹二人程リアルラックに恵まれていないんだがな」

妙にハイテンションなミカに促されるままに、俺はガチャに一度に投入出来る最大額である十萬リルを突っ込んでレバーを回した……ミカ曰く、適当な額を入れる様なチキン戦術は認めないそうだ。

……このガチャ、ステータスのLUCが影響とかしないかな。それなら各種補正のお陰で俺はこのパーティー内で一番高い数値なんだが……。

「……おお！ カプセルが出て来たね。この辺りは現実のガチャと同じか……そんでカプセルには『C』って書いてある」

「Cなら投入した額を等価値のアイテムが出る筈です。なので十万里相当のアイテムが入っている筈ですね」

「説明ありがとうシルビイさん。……まあ損はしてないなら良いかな。とりあえず開けるか」

そうして俺がカプセルを開けると中から一つの赤い指輪が出て来た……《鑑定眼》で見た所「ウォーム・リング」という名前で、装備者への氷属性のダメージを僅かに軽減し、寒冷な環境でも体温を一定に保つ《寒冷耐性》スキルが付いていた。

……シルビイさん曰く、主に寒冷環境で行動する時に使うアイテムであり、その中でもアクセサリー枠で済むので割と高性能なアイテムらしい。

「……ただ、今の所は寒い場所に行く予定は無いんだよなあ」

「まあまあ兄様、そう悪いアイテムじゃないんだからいいじゃないですか。次は私ですね」

ミュウちゃんにはそうフォローされたが、昔から俺はゲームでのランダムアイテム入手イベントだと『性能は良いんだけど今求めているやつじゃないよね』的なヤツしか当たらないんだよな。

……そんで、その横でリアルラックが高めな妹二人がレアアイテムを出すのが何時ものパターンで「おや？ このカプセル『X』って書いてますね。ガチャ表にも無いレアリティですが」……ほらー。

「……『X』？ そんなレアリティは私でも見た事が無いんですが……」

「シルビイさんでもそうって事は隠し要素みたいな物なのかな？ とりあえず開けてみなよミュウちゃん」

「はい、分かりましたのです。……おっと、なんかゴツイ拳銃っぽいのが出て来ましたね」

ミュウちゃんが当てやがった『X』などという謎レアリティのカプセルを開かれると、その中には『銀色をしたメカニカルなデザインの大型拳銃』が入っていた。

とりあえず《鑑定眼》つと……んん？ 名前が「シルヴァ・ブライト」という事は分かったが、説明やスキル効果が殆ど見えないな。

……どうやら俺の《鑑定眼》スキルレベルではよく見えないレベルの代物の様だし、ジョブ的にスキルレベル高そうなシルビイさんに頼んで見て貰……なんかその銃を見てる彼女の顔が青いんだけど……。

「……えーつと、シルビイさん？」

「この金属光沢、まさか神話級金属ヒビイロカネベースの合金!?? しかもこの特異な形状からして火薬式の銃器では無く、現在では生産出来ないときれる魔法式の銃器ですか!?? 加えて私の最大レベル《鑑定眼》でも完全にはステータスが分からないとなると……まさか先々期文明の……!??」

……うん、さつきから彼女は俺達が声を掛けているのにも気が付かずに、顔を引攣らせながら「シルヴァ・ブライト」を凝視して、何やらぶつぶつと呟いている。

……なんか凄く不安になって来たんだが。相当に「ヤバい」アイテムなのか？

「シルビイさん！ シルビイさん！」

「ハッ！ ……す、すみません！ ちょっと集中して……」

ミカが彼女の名前を呼びながら肩を揺すったお陰でシルビイさんはようやく我に返った……さて、ちよつと怖いがこの銃が何なのか彼女に聞かねばならないか。

「それは別に良いです。……それでシルビイさん、この「シルヴァ・ブライト」は一体どういう物なのですか？」

「はい……私が鑑定出来た範囲ですが、この「シルヴァ・ブライト」は神話級金属合金で出来た超高性能な光属性の魔法式銃器だと思われます。装備レベル制限が「合計レベル1000以上」になつていたので、恐らく超スベリオルジョブ級職専用に調整された特注品かと。……また、デザインや私の《鑑定眼》でも機能が完全には分からなかった事から先々

期文明の物品である可能性もありますが詳細不明ですね。単に現在ロストしている魔法式銃器の詳しい知識が私に無いのが原因かもしれませんし」

……確か神話級金属ってこのデンドロに於ける最高の金属の事だったよな。価格は1kg1000万リル以上だって聞いたんだが……。

「……ちなみにこれのお値段はどのくらいで」

「……私には専門的な知識が無いので詳しくは分かりませんが、神話級金属製の事や現在では希少な魔法式銃器である事から考えると億を下回る事はないでしょう。……由来が本当に先々期文明の物なら更に数十倍とかするかもしれませんか……」

「うわあ……」

……俺と妹二人は彼女の見立てに思わず絶句してしまった……こんな代物が手に入るならガチャに溺れるのも無理はないかもと、ちよつとだけ思ってしまった。

「と、とりあえず私は手持ち武器を使わないのでコレは兄様にあげますね！ 装備レベル制限的にも兄様の方が相応しいでしょうし！」

……正直、高価過ぎて持つてるのが怖いです」

「まだ装備レベルには足りないんだが……まあ、受け取っておくよ。

……ギデオンに着いたら早急に盗難対策のアイテムボックス買わないと。それと盗難防御が出来るジョブに就く必要もあるかなあ」

「こんな序盤に手に入って良い装備じゃないよねコレ。……こういうのが出るから溺れていくんだろうね。ホントにガチャって怖いわあ……」

そんな訳で、基本的に庶民派の俺達にとっては出鱈目に高価な装備を突然手に入れても戸惑うばかりと言うのが分かったとき……シルビイさんは『そんな貴方達ならガチャに溺れる事は無いと思いますよ』と言ってくれたけどな。

……実際、本当にどうしようかなコレ。へマスターの場合『ころしでもうばいとる！』が普通にあるから、デンドロ序盤の現在下手に使うのも怖いし……ホントにどうしてこうなったorz

呪物（一）と怪盗少女の結末（後編）

□〈ヘネクス平原〉【僧兵^{モック}】ミュウ・ウイステリア

「……よしっ！ 最後は私がガチャる番だよ!!!」

「この空気はまだやる気なのですか姉様」

「もう回さなくて良いんじゃない？ また変なものが出るかもしれないし……」

……私がガチャを回して「シルヴァ・ブライト」とか言う推定数億リル以上のとんでもアイテムを出してしまった所為で、ちよつと微妙な感じになってしまった空気を払拭する様に姉様はそう声を張り上げました。

……申し訳なさそうなシルビイさんへの気遣いを兼ねたお礼としてガチャを回そう！ と言ったのは姉様なので、どうも引つ込みが付かなくなってる気がしますが……。

「いや、この空気を払拭する為には私がガチャを回してFランクのカプセルを出す事でオチをつけるしか無いんだよ！」

「……お前のリアルラックはミュウちゃんと遜色無いレベルだろうが。またとんでもアイテムが出るんじゃないか？」

「いやいや、このガチャの排出率的に考えても二連続であんなとんでもアイテムが出るなんて事は無い筈（フラグ）……まあそれに多少いいアイテムが出たとしても、あの「シルヴァ・ブライト」程の価値があるアイテムは流石に出ないでしょう（フラグその2）から、それでオチは付けられる！ ……ではいざガチャア!!!」

そうして姉様は兄様からの忠告を無視しながら、半ばヤケになったかの様に言い募りつつ勢いよく十万里ルをガチャの中に突っ込んでレバーを回しました……何というか、姉様のあのテンションはむしろ自分に言い聞かせている気もするんですが。

……その結果、ガチャから出て来たカプセルは、なんかもう形状からしてゴツくてめっちゃ虹色に煌めいていて大きく『S』の文字が刻印されている……どう見ても大当たりのSランクアイテムですね。本当にありがとうございますでしたのです。

「……………ヴァカナ!!!」

「まあ、ある意味でオチはついたんじゃないか？ まあここまで見事にフラグを踏み抜くのは流石に予想外だったが」

その結果を見た姉様は目を見開きながら驚愕し、兄様は一周回って諦観の表情を浮かべながら頭を抱えています……ちなみにシルビイさんはカプセルが出た時点で時が止まったかのように硬直しています。

……しかし、たった三回ガチャを回すだけでここまで訳の分からない当たり方をするなんて、何か大いなる運命シナリオのご都合主義的な導きを感じるので。

「……………とりあえずさっさと開けてしまえ。そうしないと話が進まん」「うぐぐ……………適当にガチャを回してお茶を濁す予定だったのに」

なんか凄く投げやりな感じで兄様がカプセルの開封を促し、それに答えた姉様も当たりガチャを開けるとは思えないぐらいに低いテンションでカプセルを開けていきました。

……そして私と兄様は今度は一体どんなんでもアイテムが出てくるのかと内心戦々恐々しながら開封作業を見ていたのですが、そのカプセルの中から出て来たのはなんと着ぐるみだったのです。

「……………ふむ？ これは予想外のアイテムが出て来たね。……………ネタアイテムならオチが付いたと言えるのでは……………」

「往生際が悪いぞ。……………しかしデフォルメされてはいるが、見た目からして多分『ドラゴンの着ぐるみ』みたいだな」

「こうしてみるとちよつと可愛いかもなのです。……………ですが、確かSランクのカプセルって投入した金額の100倍とかではなかったかと思うのですが、この着ぐるみのお値段は億超えるんですかね？」

……私のその発言を聞いた二人は『出来るだけ考えないようにしてたのに……………』的な表情を浮かべながらその着ぐるみの詳細を調べて行きました。

実際、この着ぐるみは見た目こそ『全身が暗い黄色のデフォルメされた二足歩行ドラゴン』ですが、よく見てみると着ぐるみを構成している鱗とか革は今まで見て来た売り物の装備品よりも高級っぽいの

で、おそろくかなりの値打ち物だと思われるのです。

「とりあえずステータスを見てみましょう姉様。……さっきの「シルヴァ・ブライト」の時はとんでもアイテムが当たった衝撃でちよつと忘れてましたが」

「オツケーミュウちゃん、ステータス欄を出すよ。……えーつと、名前は【Q極きぐるみシリーズ どちらぐている】だって」

そう言つて姉様は他人にも見える様に設定してステータス欄を私達に見せて来ました……あれ？ その「説明文」と「モンスターの名前」で命名されるアイテムつて確か……。

【Q極きぐるみシリーズ どちらぐている】

エンシェントレジェンダリーアームズ
〈古代伝説級武器〉

強靱で伸縮自在の尾を持つ地竜の概念を具現化したQ極な着ぐるみ。

凄く頑丈かつ強靱で中の人をすつごく強く出来る！ 更に尻尾を自由自在に伸ばせるんだ！

※譲渡売却不可アイテム・装備レベル制限なし

・装備補正

攻撃力+1065 (どらぐん)

防御力+1065 (どらぐん)

STR+30%

END+30%

AGI+30%

・装備スキル

《アラウンドビュー》：中の人を視界を完璧に確保する。望遠・暗視機能つき。

《フリーサイズ》：中の人サイズに合わせて変形する。急に体格が変わっても大丈夫。

《冷暖房内蔵》：外部気温に関わらず中の温度を適温に保つ。夏でも冬でも安心。

《万能竜爪》：不思議と物を掴めるし器用に使える。更に爪を展開して攻撃も出来る。

《竜尾剣》：SPを消費してブレードが付いた尾を自由自在に伸ばす。パワーとスピードは自分と同じ。

《重位圏》：MPを消費して周囲の物体の位置を把握する。効果範囲は自分のレベルに比例。

《??》※未開放スキル

……これはまた説明文はアレですが、とても着ぐるみとは思えない程の高性能で強力なスキルが多数……って。

「これ特典武器じゃないか!?？」

「……そりゃあ億越えの着ぐるみなんて普通はないよなあ……」

「名前の付け方を何処かで見た事があると思っていました……」

そう、この「Q極きぐるみしりーず どちらぐている」はなんと

ユニーク・ボス・モンスター

〈U B M〉を倒して、その中でも最も活躍したMVPにのみ与えられる筈である世界に一つだけのユニークアイテム……通称「特典武器」だったのです！

……いや、だからなんでガチャからこんなのが出て来るんですかねえ……。

「……確か〈墓標迷宮〉などの神造ダンジョンの深層では、かつての英雄が使っていたとされる特典武器が見つかる事もあると聞いた事があるので、おそらくその着ぐるみもそれに近い物かと」

「あ、シルビイさん復活したんだ」

そこで漸くフリーズ状態から復帰したシルビイさんがその様に解説してくれました……確か特典武器を所持しているティアンが死亡した場合、それらの特典武器も消滅すると以前アイラさんに聞いた事がありましたね。

……つまり、この着ぐるみも元は昔のティアンが所持していた特典武器だと……MVPにアジャストされる筈の特典武器で着ぐるみが出るとか、そのティアンの方は一体どういう人だったのでしようね。ちよつと気になります。

「……しかし見た目と説明文はアホくさいのに、今私が付けてる「クインバース」と「ギガス」除く装備品一式を合わせたよりも高性能なんだよねーコレ。流石は古代伝説級の特典武器ってとこかな」

「古代伝説級ともなると国の存亡を賭けて挑む天災の様なモノですからね。滅多には現れませんし。……一番最近だと数年前に【天騎士】【天翔騎士】【大賢者】の御三方に討伐されたと聞く、[〃]あらゆる生物を喰い尽くす[〃]とされた【業奪死竜 ドレインドレイク】ぐらいしか聞いた事が無いですね」

「確かへU B Mは古代伝説級になると一気に強くなるとリレイさんに以前聞いた事があるな」

まあ、私達がこれまで戦った【ヴァルシオン】【クインバース】【ブラックオーツ】などよりも格上のへU B Mがベースの特典武器ですから、それは見た目はともかく高性能になるでしょうね……見た目はともかく。

「……正直かなり悪目立ちするヤツだしミュウちゃんみたいにお兄ちゃんに押し付け「残念ながら特典武器は譲渡不可能だ」……ですねー。……それじゃあいつそ装備してみるか。このファンシーな外見ならオチがつくかもしれないし。【瞬時装着】でいけるかな」

そう言った姉様は、いそいそと【どらぐている】を身につけ始めた……どうにもこの空気を払拭する為、何かオチをつける事に意地になつてる感じがしますねー。

……そうして姉様の着替えが終わると、そこには手に2メートル弱の大型メイスを持つ身長150cmぐらいの二足歩行デフォルメドラゴンが誕生していました……こうして見るとギャグとしか思えませんがね。

『んーなかなか良い着心地だねドラゴン。《フリーサイズ》のお陰か動きも障害されないし、《アラウンドビュー》で視覚の確保も十分にされているから充分戦闘も出来そうドラゴン』

「……語尾はそれで良いのか？」

「ていうか姉様、なんで語尾付けてるんです？」

『やっぱり四文字だと長いドラ？ 後、着ぐるみを着たら何故か語尾を付けなければいけないって思ったゴン』

そんなどこかのクマさんじゃ無いんですから……まあ、意外と満足そうで何よりですね。私は当たったアイテムが使えなくて兄様に譲

る事になりましたし。



□〈ヘクス平原〉 【調教師】^{トレーナー} レント・ウイステリア

さて、ガチャ関連でなんやかんやあつたがいい加減にシルビイさんをギデオンに連れて行かなければならないという事で、アレらのとんでもアイテム達の事は後回しにする事に……。

……この場で考えてもいい案は浮かばないだろうから。明日の俺達がなんとかしてくれるだろう（願望）

「それじゃあシルビイさん、そろそろギデオンに行きましようか。道中危険なので送りますよ」

「何から何まで本当にありがとうございます。……何かちゃんとしたお礼が出来れば良いんですが……」

「あ、いえ、これ以上変なアイテムが増えても困るので、あの十万里ルガチャ三連で十分です（真顔）」

『落ち着いて考えてみると特典武器と超高性能装備が手に入ったんだから、金庫を開けた報酬としては過剰すぎるドラ』

ちなみにミカは存外気に入ったのか【どらぐている】を着たままである……まあ、性能自体は凄まじいし特典武器である以上は盗まれる心配も無いので、見た目がネタにしか見えない問題を除けば普段から使っても構わないだろうからな。

……そんな俺達に対して苦笑いを浮かべながらシルビイさんは金庫を持っていこうとした。

「あはは……ここで見た事は誰にも言いませんよ。ガチャに溺れる人が（ウチの父含めて）増えそうですし……アレ？」

……そうやって金庫を持ち上げようとしていたシルビイさんだったが、何故か金庫は中々持ち上がらなかつた。

「これはまだ重量増加の呪いがかかっていますね。……中の物はガチャだけだと思っていたんですが、まだ何か入っているみたいですか……」

どうも金庫の中にはまだアイテムが残っていた所為で重量増加の呪いが続いていたらしく、シルビイさんは扉を開けて中を調べていた……そして、しばらくした後には彼女は金庫の中から一つのペンダントを取り出したのだった。

……そのペンダントが何なのかは少し気になったが、彼女がとても懐かしそうで、かつ悲しそうな表情を浮かべていたので空気を讀んで黙っておく事にしよう。妹二人もそんな感じだし。

「……これは……お母様がお父様の初めての結婚記念日に送ったペンダントだった筈。……確かまだ裕福でなかった時の物なので安物ですが……そうですか、これだけは残していたんですね」

「……………」

……つまりはそういう事らしい。これなら彼女の先行きに希望が見えてきたかな。

「……皆様、今日は本当にありがとうございました。……これから必ずお父様を説得してみせます」

「分かりました、頑張つて下さいシルビイさん。……じゃあ今度こそギデオンに向かいますようか」

実に晴れやかな表情になったシルビイさんのお陰で、これまでの（主にガチャ結果の所為で）微妙だった空気も良くなったしな……そういう訳で俺達は再びヴォルトの引く馬車に乗って、一路ギデオンを目指して行ったのだった。



そんなこんなで〈ヘクス平原〉に行く俺達だったが、これまでの様に何かトラブルが起きる事も無く順調に進み大体お昼頃に「決闘都市」ギデオンの北門へと到着していた……そして俺達はここでシルビイさんと別れる事になる。

……まあ、後は彼女達家族間の問題だから俺達がどうこう言える事も無いしな……何より今の彼女は初めて会った時と違って希望に満ちた表情をしている事だから、決して悪い事にはならないだろう。

「それでは皆様、私はここで失礼いたします。……改めて色々と助けて頂いてありがとうございます」

『どういたしましてドラ。シルビイさんも説得頑張ってくださいゴン』
「実質ほとんどガチャ回しただけみたいな物なので気にする事は無いですよ」

「頑張ってくださいね」

……そうして彼女は深々と俺達にお辞儀をした後、そのまま金庫を背負ってギデオンの街の中へと消えていったのだった。

『さて！　じゃあ私達もギデオンを満喫しようドラ！』

「……それはいいんですが姉様、その着ぐるみは着たままなもので？」
「なんか結構しつくり来てるけどさ」

『道中使ってみて中々強かったからね。メイン装備でもいい気がして来たドラ』

ミュウちゃんとミメ（街中なので融合解除）のツツコミを受けたミンスター着ぐるみは、そう呑気な感じで答えていた……確かに道中のモンスター相手に尻尾を伸ばして攻撃したりもしてたからな。

……曰く、この《竜尾剣》は遠距離の直接攻撃だから【ギガース】の《バーリアブレイカー》の効果も乗るから相性は良いと言っていたが……。

「……とりあえず街中では抜いどけよ。悪目立ちするだろ」

『まあそうだねー。街中専用の《着衣交換》付きの服でも買おうかな？』

実際、街中でも着ぐるみとかネタ装備万歳な人間か、余程退つ引きならない事情がある人間（例：シユウ・スターリング）ぐらいだからな。それでもメイン装備にするならそういった備えも必要だろう。

「それじゃあまずは何処から周ろうか。とりあえず決闘場とか見てみる？」

「元々それが目的で訪れましたからね。いいんじゃないかと」

「俺は決闘には余り興味が無いから店とか見てみたいな。……それに例のアイテムを収める盗難防止機能付きアイテムボックスも買わねばならんし」

……そんな感じで俺達は各々の目的の為にギデオンの街へと繰り出して行ったのであった。



……尚、これは少し後の話になるのだが、俺達はギデオンにあるヘアレハンドロ商会のお店で再び例の「ガチャ」と再会したのだ……何でも最近入荷した物で買い物をした人が一回だけ回せるサービスになっっているのだとか。

そしてお店の人に加えて話を聞いた所、この「ガチャ」は壮年の男性と若い女性の親子から買い取った物なのだと言う……更に話を聞いた店員さんはその時に買取を担当していたらしく、彼等は一緒に「高級な金庫」も売りに出してそれで得たお金を使って別の街で新しい生活を始めるのだと言っていたとか。

……それを聞いた俺達はちよつと嬉しくなったので記念にガチャを回してみたが、今度は笑い話になる程度のハズレだったとき。

掲示板回：ギデオンの日常風景

□??地球 とある掲示板



【戦え……】へ Infinite Dendrogramへアルター王国決闘情報スレ27【戦え……！】

1：名無しのへマスターへ「sage」：2043/8/10（月）

このスレはアルター王国での決闘に関する情報を書き込むスレです

決闘の参加者や戦術や決闘都市ギデオンに関する質問や話題など
ご自由に

荒らしはスルー推奨

・

・

・

127：名無しの剛剣士「sage」：2043/8/10（月）

あー、負けたー！ 何だよあの着ぐるみ！

128：名無しのへマスターへ「sage」：2043/8/10（月）

勝つ時もあるれば負ける時もある

それが決闘（デュエル）

129：名無しのへマスターへ「sage」：2043/8/10（月）

しかし着ぐるみとは珍しい装備だな？

犬の着ぐるみ着て子供にお菓子上げてる人？ ならギデオンの広場で見たけど

130：名無しの剣聖「sage」：2043/8/10（月）

てゆうか【剛剣士】とか甘え

ちゃんと【剣聖】取れよ

131：名無しの剛剣士「sage」：2043/8/10（月）

>>129

いや俺が戦った相手はドラゴンの着ぐるみだった

手に持った2メートルぐらいの大型メイスで叩き潰された

>>130

後で取る予定なんだよ！

132：名無しの剛闘士「sage」：2043/8/10（月）

でも着ぐるみってアクセサリー枠以外の全防具装備枠使うネタア

イテムだよな

そんなネタ枠に負けるとは……

133：名無しのへマスター<「sage」：2043/8/10（月）

いや着ぐるみ自体かそれに関するエンブリオという可能性もあるぞ

マスターの場合にはシナジー次第でネタ装備がヤバい事になるかもだし

134：名無しの紅蓮術師「sage」：2043/8/10（月）

自分の鱗に合わせた装備とジョブは基本

特に一対一での決闘に挑む時は

135：名無しのへマスター<「sage」：2043/8/10（月）

シナジーによるわからん初見殺しはやめろ下さい

136：名無しの〈マスター〉「sage」：2043／8／10（月）
気が付いたら状態異常五つぐらい掛かってた……

137：名無しの〈マスター〉「sage」：2043／8／10（月）
〉〉135〉〉136

ギデオンの決闘あるあるネタだな

まあ決闘においては対策出来ない方が悪いって事で

138：名無しの剣聖「sage」：2043／8／10（月）
決闘ではやられる前にやるのが基本

139：名無しの〈マスター〉「sage」：2043／8／10（月）

今の決闘は先手必殺系一強みたいな所があるしなあ

初手で威力の高い必殺スキル撃たれると俺のAGIじゃかわしきれないんだよ

140：名無しの剛剣士「sage」：2043／8／10（月）

〉〉138

俺も初手で不意打ち系高威力必殺スキル使ったんだけど

その着ぐるみにはあつきり回避されたんですがそれは……

141：名無しの〈マスター〉「sage」：2043／8／10（月）

不意打ち系高威力必殺スキルとか決闘当たり鱈じゃねえか

俺まだ必殺スキルなんて覚えてねえよ……

142：名無しの紅蓮術師「sage」：2043／8／10（月）

まあティアンの高位ランカーとかには自分の技術と経験で不意打ち回避するのもあるからね

……一部リアルスキル高い勢の鱈とかも同じ事出来るから技術は重要

143：名無しの〈マスター〉「sage」：2043／8／10（月）
シナジーと技術……マスターにとっては何が重要なんだ？

144：名無しの剛剣士「sage」：2043／8／10（月）
VRMMOでリアルスキル持ち込み無双とかなろう小説じゃない
んだしやめろよ

引きこもりネットゲオタクの俺じゃあ勝てないだろ（泣）

145：名無しの〈マスター〉「sage」：2043／8／10（月）
リアルでは寝たきりでもデンドロではバリバリ動くって鱒もいる
んだから頑張れよ

146：名無しの紅蓮術師「sage」：2043／8／10（月）
＞＞143

勿論どっちもだ……と言いたいがまずは自分の鱒とシナジーする
ジョブ探しから始めればいいぞ

そのジョブの転職条件とかを満たしている内に技術は身に付いて
くるし

147：名無しの〈マスター〉「sage」：2043／8／10（月）
それでもリアルスキルチート勢には勝てないという
何せ元から持つてるモノが違うし

148：名無しの剛闘士「sage」：2043／8／10（月）
マスターの間に技術差があるのはしょうがないだろ
ゲームの腕に差があるなんて当たり前だし

その上でどうやったら勝てるのかを考えて努力するべきだ

149：名無しの〈マスター〉「sage」：2043／8／10（月）
→ぐう正論

150：名無しの〈マスター〉「sage」：2043／8／10（月）
まあ決闘は勝ち負けある対人戦だしなあ

151：名無しの剣聖「sage」：2043／8／10（月）
こんな所で駄弁つてないで腕を磨くべきだろ、常識的に考えて

152：名無しの剛剣士「sage」：2043／8／10（月）
>>151
今書き込んでるお前が言うな!!!

153：名無しの大魔槍士「sage」：2043／8／10（月）
うーん、このジョブなら決闘に勝てる！　みたいな鉄板ジョブと
かって無いんですかね

決闘始めようと思って情報収集してたけどよく分からん
154：名無しの〈マスター〉「sage」：2043／8／10（月）
そもそもまだ500レベルカンストした鱒も少ないからね

155：名無しの紅蓮術師「sage」：2043／8／10（月）
>>153
歓迎しよう！　この鱒同士が互いを喰らい合う終わりなき決闘沼
に!!!

……まあそれはともかくデンドロには千差万別の鱒があるから
なあ
その辺りはジョブ掲示板とかの方が詳しいが鱒にシナジーする
ジョブ選ぶのが無難感がある

156：名無しの剣聖「sage」：2043／8／10（月）
そもそも今だに上位ランカーティアンの牙城は崩せていないんだ
からまずはレベル上げからじゃね

同じ500レベルなら鯨の差でティアンとの技量を覆せるだろうし

157：名無しの剛剣士「sage」：2043/8/10（月）

ティアンランカーはデンドロ口内で戦い続けているからな

基本ネットゲオタクしかいない鯨よりも技術は上（一部例外あり）

……まあ、アルターの決闘一位は数年前から『とある鯨』なんだけどね

158：名無しのへマスター「sage」：2043/8/10（月）

あの運営側かベーターテスターらしき疑惑がある猫さんか

そう言うのが決闘一位に居座ってるのってどうなの？

159：名無しの大魔槍士「sage」：2043/8/10（月）

このゲームベーターテスターなんていたのか？ 初耳だけど

160：名無しの紅蓮術師「sage」：2043/8/10（月）

正確に言えばアルターの決闘一位が合計レベル10000のマスター【猫神】トム・キャットであり

その彼が現地時間で『数年前』から決闘ランク一位の座にあるって話ですね

詳しくは決闘関連のデンドロWikiに書いてあるのでそちらをどうぞ

161：名無しのへマスター「sage」：2043/8/10（月）

ベーターや！ ベーターや!!!

162：名無しの剣聖「sage」：2043/8/10（月）

考察班の考えだと鯨に対しての壁としての役割を担っているんじゃないかとも言われてるがな

直接話してみたらベーターでイキる様なタイプじゃ無かったとか

163：名無しの剛剣士「sage」：2043/8/10（月）

例えそうだとしてもアルターだけ決闘一位になるハードルが高い気がするんだが

164：名無しの大魔拳士「sage」：2043/8/10（月）

友人から聞いた話ですが上位ランカーがほぼ超級職テイアンの天地よりマシかと

165：名無しのへマスター「sage」：2043/8/10（月）

ランキング自体を賄賂か暗殺で操作しまくってるカルディナとかの話は聞いたな

他にもグランバロアだと決闘に船が必要な所為でまだ鱒が参加出来ないとか

166：名無しの大魔槍士「sage」：2043/8/10（月）

決闘にもお国柄は出るんだな

他の国の決闘系掲示板とかも覗いてみるか



【多々買え……】へInfinite Dendrogram「アイテム関連情報スレ35【多々買え……！】」

1：名無しのへマスター「sage」：2043/8/12（水）

このスレはへInfinite Dendrogram「アイテムに関する情報を書き込むスレです」

レアアイテム自慢や変なアイテム発見の話題や質問などご自由に
荒らしはスルー推奨

17：名無しの司教「sage」：2043／8／12（水）
ギヤアアアアアアア

せつかく稼いだ五十万リルがお掃除セットと安物ポーション
にいい!!!

18：名無しのへマスター「sage」：2043／8／12（水）
まーた例のガチャの爆死者が出たか
ていうか司教がギャンブルなんてすんなよ

19：名無しの冒険家「sage」：2043／8／12（水）
え？ デンドロにガチャなんてあつたの？ 初めて聞いた

20：名無しのへマスター「sage」：2043／8／12（水）
最近アルター王国にあるアレハンドロ商会って言う店に置かれる
様になつたらしいぞ
何でも買物したら一回回せるんだと話題になつた
俺はカルディナにいるから見た事無いが

21：名無しの大狩人「sage」：2043／8／12（水）

>>>19
見た目はよくデパートに置いてあるガチャっぽくて投入金額は十
万リルまで

そして入れた金額の1／100から100倍までの価値のアイテム
ムがランダムで出て来るんだ

詳しくはデンドロWikiに載ってる

22：名無しの冒険家「sage」：2043／8／12（水）

ありがとうございます、よく分かりました

23：名無しの司教「sage」：2043／8／12（水）

>>18

俺の鰯はLUC上昇させるやつだからLUC伸びるジョブに就いただけだし

3000越えのLUCならいけると思ったんだが……

24：名無しのへマスター<「sage」：2043／8／12（水）

残念ながらガチャに必要なのはリアルラックの模様ww

25：名無しの大狩人「sage」：2043／8／12（水）

ガチャには無（理の無い）課金を心掛けましょうって事だな

26：名無しのへマスター<「sage」：2043／8／12（水）

でもアルターにしかガチャが置いてないのはズルくね

各国に一つずつ置くべきだろう

27：名無しのへマスター<「sage」：2043／8／12（水）

ほんそれ

俺もガチャやってみたい

28：名無しの冒険家「sage」：2043／8／12（水）

それで爆死するんですね分かります

29：名無しの高位魔石職人「sage」：2043／8／12（水）

あのガチャって元は墓標迷宮から出たアイテムらしいから探せば他にも見つかるかもよ

多分運営がマスター用としてデンドロ内に配置したアイテムだと

思うし

30：名無しの大狩人「sage」：2043/8/12（水）
それってどこ情報？ Wikiにも載ってないんだけど

31：名無しの高位魔石職人「sage」：2043/8/12（水）
最近ガチャを入荷した店の人から聞きました
どうもデンドロのガチャはコンテンツって訳じゃなくて
入れた金額に応じたアイテムをランダムに召喚する物らしいね

32：名無しの破壊者「sage」：2043/8/12（水）
成る程、大体分かった

33：名無しのへマスター「sage」：2043/8/12（水）
でも結局墓標迷宮でしか出ないならガチャは王国専用じゃね？

34：名無しの大狩人「sage」：2043/8/12（水）
いや運営が巻いたアイテムなら他の神造ダンジョンでも出土する
可能性もあるが

ガチャが元からデンドロに巻かれたアイテムならまだ見つからないだけかもしれないし

35：名無しの司教「sage」：2043/8/12（水）
それよりもガチャを回すのにいちいち買い物しなければならない
のが面倒なんだが

36：名無しの高位魔石職人「sage」：2043/8/12（水）
何故わざわざ買い取った物をタダで使わせなければならないんだ？
その店の利益的にも当然の話だろう

37：名無しのへマスター<「sage」：2043/8/12（水）
鱒は買い物するだけでガチャが出来る

店はガチャ目当ての鱒が買い物に来て潤うというかwin-winの関係

38：名無しの破壊者「sage」：2043/8/12（水）

後はある程度不便にする事で>>35みたいな爆死者が減るかもしれないしな

頭を冷やす時間があれば爆死する程回す事も減るだろうし

39：名無しの司教「sage」：2043/8/12（水）

>>36>>37>>38

愚か者!!! 爆死を恐れてなにがガチャか!!!

40：名無しのへマスター<「sage」：2043/8/12（水）

これはもうダメみたいです

41：名無しの冒険家「sage」：2043/8/12（水）

しかし神造ダンジョンから出るなら探してみようかな

……と思っただけど肝心のダンジョンに行く手段が無いorz

42：名無しの大狩人「sage」：2043/8/12（水）

神造ダンジョンはどこも入るのに条件がありますからね

一番簡単な墓標迷宮でも王国所属と許可証（クエスト報酬・十万里ル）が必要ですし

43：名無しのへマスター<「sage」：2043/8/12（水）

やっぱ王国優遇されすぎじゃねー

44：名無しの破壊者「sage」：2043/8/12（水）

神造ダンジョンの数はレジエンダリアが最も多い筈だが

ちなみにそれ以外の国は大体一個ずつぐらいで黄河とグランバロアには無いと聞いた

45：名無しのへマスター「sage」：2043／8／12（水）
地形上グランバロアは仕方ないとして何故黄河には無いんだ（黄河出身鱒感）

運営バランス調整ミスってんよー

46：名無しのへマスター「sage」：2043／8／12（水）
まあガチャがデンドロの1アイテムだとすれば既に出回っているかもしれないし探してみればいいのでは？

案外誰も見つけていないだけで王国と同じ様に使えるかも

47：名無しの高位魔石職人「sage」：2043／8／12（水）

>>45

バランス調整のバの字も無いこのゲームで今更何を（エンブリオとか特典武器とか）

まあ流石にガチャが一つしか無いとは思えないから何処かにはあると思うぞ

48：名無しの大狩人「sage」：2043／8／12（水）

それにデンドロのアイテム数から考えてガチャで狙った物を引くのは天文学的な確率だろう

49：名無しの司教「sage」：2043／8／12（水）

俺はアイテムが欲しいんじゃない……俺はガチャで当たりを出したいんだ!!!

50：名無しの破壊者「sage」：2043／8／12（水）

最早手遅れか……

51：名無しのへマスターへ「sage」：2043／8／12（水）

>>49

ガチャに溺れた物の末路

52：名無しの冒険家「sage」：2043／8／12（水）

まあリアルな金を使う訳では無いから多少はね（精一杯の擁護）

53：名無しのへマスターへ「sage」：2043／8／12（水）

リアルマネートレード禁止法万歳

54：名無しの高位魔石職人「sage」：2043／8／12（水）

こうしてお店はどうどん潤って行くのだった

本当にマスター相手だと上手い商売だよなあ

55：名無しのへマスターへ「sage」：2043／8／12（水）

>>49

ティアンに貢ぐへマスターへの鏡（笑）

56：名無しの司教「sage」：2043／8／12（水）

うおおおお!!! 行くぞおお!!!

俺達の多々買いはここからだ!!!

ギデオンでの三兄妹・その一

□決闘都市〈第五闘技場〉 【戦棍鬼^{メイス・オーガ}】ミカ・ウイステリア

『……それでは次の決闘に参りましょう！ まずは東門。最近決闘に参加し始めた謎の着ぐるみ〈マスター〉！ ですが、格好と裏腹に立ち塞がる相手を次々と巨大メイスのシミに変えていった期待のルーキー！ 【戦棍鬼】ミカ・ウイステリア選手の入場です!!!』

『どらごんーん!』

そんなアナウンズと共に【Q極きぐるみしりーず どらごんーん】を着た私は、適当な叫び声を上げながら決闘場の東門を出て闘技場へと上がっていった……ちなみにこの声に関してはパフォーマンズのなものだよ。プロレスでの叫び声的な。

……このギデオンでの決闘ですと【どらごんーん】を装備してたらすっかり着ぐるみキャラだと思われる様になっちゃったからねー。だから開き直って決闘ではネタキャラ路線で行く事にしたんだ。こつちの方がウケが良いし。

『続いて西門！ こちらも同じく〈マスター〉！ 強大な魔獣の〈エンブリオ〉を従え、自身もハルバードによる強撃を得意とする女戦士！

【獣戦鬼^{ビースト・オーガ}】アマンダ・ヴァイオレンス選手の入場です!!!』

そうしてアナウンズと歓声と共に入場して来たのは手に身の丈程のハルバードを持った筋肉質な長身の女性〈マスター〉だった……アマンダと言うらしい彼女は対面の私を見ると不敵な笑みを浮かべながら話しかけて来た。

「へえ、アンタが決闘界限で今噂になってる着ぐるみの〈マスター〉かい」

『どらごん』

「何でも同じ時期に決闘に参加し出した妹と一緒に、あのビシユマルを筆頭とした腕利きの〈マスター〉やティアンを次々と打ち倒してるとか」

『どらごん』

ちなみにビシユマルって人と戦ったのはミュウちゃんの方だね。

何でもリベンジに燃える（物理的）彼には中々苦戦させられたって
言ってたっけ。

……まあ、ミユウちゃんは上級職への転職条件を満たしたらあんまり決闘には参加しなくなっただけだね。私も転職条件は満たして【戦棍鬼】に就いたけど、技術を磨くのも兼ねて決闘を続けてるのだ。

「……ところで気になってたんだけど、さっきから『どらごん』としか言っていないがアンタは普通の言葉は喋れないのかい？」

『いや、普通に喋れるゴン？』

「喋れるんかい！」

だって、これはネタ的な意味でのキャラ付けでしか無いし……そう言ったらアマンダはため息を吐きながらも左手を上げた。

「まったく調子が狂うねえ……でも、戦うからには容赦は無しだ。こい！ ベファイー!!!」

『G A O O O O O O O O!!!』

そして彼女の呼びかけと共に紋章から高さ3メートル、全長5メートル程の四足歩行で太い手足と鋭い牙を持つ巨大な魔獣が現れた……メインジョブとアナウンスから予想はしてたけど、やはりガードナーの「ヘエンブリオ」か。

お兄ちゃんが『ガードナーと【獣戦士】ジャガーマンの組み合わせって強くね？』とか前に言ってたし、そんな感じのジョブ構成なんだろうね。

……とりあえず私も紋章から【ギガス】を呼び出して戦闘準備を整えると、選手の準備が完了したと見たのか試合開始のアナウンスが闘技場に響き渡った。

『それでは決闘開始イ!!!』

「行けっ！ ベファイー！」

『G A A A A A A A A A A A A A!!!』

……と同時に、アマンダの指示を受けた「ヘエンブリオ」——ベファイーが巨体とはちよっと思えないぐらいの速度でこちらに突っ込んで来た……ふむ、まあ私のAGIなら問題無く見える範囲だけど、その巨体を目隠しにして彼女自身もコツチに向かって来てるのがイヤらしいね。

『《重位圏》《サンダー・インパクト》！』

『G A A A A A!!』

なので、私はまず周辺の物体位置を把握する【どらぐている】の《重位圏》を使って彼女の位置を把握しつつ、眼前にまで迫って来たベフィーが振るう前足を【戦棍鬼】の《サンダー・インパクト》——雷を纏ったメイスで攻撃しつつ、相手に電撃を流し込む事でダメージ+【麻痺】を与えるスキル——で迎撃した。

……この《重位圏》も最初は周囲の物体位置が流れ込んで来る所為で目の前の敵への対応が疎かになったりした物だけど、元々〃目に見えないモノを感じ取る〃のが得意な私なので、何度かの決闘を経てようやく実戦で使い物になるレベルで運用できる様になったのさ。

『そつちドラ！ 《竜尾剣》！』

「チツ、バレてたか！ 《パワーアックス》！」

なので、私が目の前のベフィーの相手に集中している間に背後に回っていた彼女を、スキル《竜尾剣》によって伸ばしたブレード付きの尻尾で迎撃する事も出来るんだよ。

ただ《竜尾剣》の方はまだ操作に慣れてないんだよね。なんか腕が一本増えた様な感じで……今も《獣心憑依》で強化されたアマンダに尻尾を弾き飛ばされて再操作に手間取ったから、その隙にハルバードを槍のように構えた彼女の接近を許しちゃったしね。

「だが、距離は詰めたよ！ 《スラストチャージ》」

『なんのドラ！ 《瞬間装備》！』

そして彼女が突撃系のスキルを使って一気に私を刺し貫こうとして来たけど、そう来る事が分かっていた私は《瞬間装備》によって竜の皮で出来た大型の盾を片手で構えてその刺突を防いだ。

ちなみにこれは【ヘビーアイアン・タワーシールド】と言うギデオンの防具屋で買った物で、私は【戦棍騎士^{メイスナイト}】のジョブで《盾技能》取ってるから多少ならば扱えるのさ。

……最も今までは【ギガース】が両手の装備枠を使ってたから使えなかったけど、【戦棍鬼】で〃両手の装備枠を使う大型メイスを片手の装備枠だけで装備出来る〃パッシブスキルを覚えたからどうか

なったのだ。

『……と言つても、この状況はちよつと頂けないドラ』

『G A A A A A O O O O !!』

『ベファイ合わせな！ 挟むよ！ 《アクスブレイク》！』

だが、彼女は攻撃を盾に防がれても構わず攻め続け私をその場に釘付けにし、更に「麻痺」から回復したベファイと挟み撃ちにする戦術をとつて来た……STRで勝っていて《万能竜爪》のお陰で盾をしつかりと保持出来ているから今の所は崩されていないが、二体一になったらそのまま押し切られるかな。

……なので、まず《竜尾剣》を引き戻してアマンダを攻撃しつつベファイに対して盾をSTR任せにぶん投げて牽制、その隙にSTRを使った踏み込みで彼女に接近して「ギガス」で殴り掛かる！

『ツ!? G A A !』

「何ツ尻尾!?? それに何で私にダメージが『隙ありドラ《インパクト・スマッシュ》!』しまつガハアツ!??」

投げた盾はあつさり弾かれたが名前通り結構重いので怯ませる事には成功、そしてアマンダの方も《竜尾剣》によって僅かだが不意のダメージを受けた事に怯んだのか隙を見せたので上級職の奥義による一撃を叩き込んで吹き飛ばした。

……のだが、現在STRが8000に迫る私の奥義を食らつたにも関わらず彼女はダメージこそ受けているものの、直ぐに態勢を立て直してこちらに向き合つて来た……そして、何故か攻撃しなかつた筈のベファイの方にまるで何かに殴られた様なダメージが見られた。

『む? ダメージが思ったより少ないドラね……ああ、ダメージを自分の《エンブリオ》に肩代わりさせてるドラか』

「名答。……ただ、本当なら私のダメージを100%肩代わりされる筈なんだけどねえ。防御を抜くのがアンタの《エンブリオ》か特典武器の能力なのかい?」

『《想像にお任せするドラ》』

成る程、この状況は彼女の身代わりスキルの効果を私の《バリアブレイカー》が減少させた結果みたいだね……スキル強度の差から完

全には無効化出来ないみたいだし、ここは先にへエンブリオの方を倒した方が良い……。

『……だが、ここは敢えてへマスターを集中攻撃するドラ!!』

「チツ、そう来るか！ ベファイー！」

『G A A A A A A O O O O O!!』

……と言う戦術は何か「嫌な感じ」がしたので、私はダメージを負ったアマンダを仕留めるべく全速力で突っ込んだ……まあ、決闘ならへマスターを倒せば勝ちだしね。後さっきの発言も何か露骨に「ベファイーを先に倒させよう」としてた気がするし。

だが、彼女も直ぐに後退して距離を取りつつ私を自分とベファイーで挟み込める様な位置どりになる様に動いて来た……むむ、ステータス高い二人が連携を取って動いて来るのがこれほど厄介だとは。ガードナーと【獣戦士】の組み合わせが強いというのも納得だね。

「ダメージは負ったがまだ動けるよ！ 《ツインスラスト》！」

《ウィールドアックス》！」

『G A A A A A O O O O O!!』

『どちら、どちら！ 《ウィールド・メイス》！」

私も彼女達に挟まれない様に立ち回りつつ接近して来たアマンダの二連続の突きから斧部分での薙ぎ払いを【ギガース】で防ぐが、その間にベファイーが背後に回って攻撃を仕掛けて来たので、その軌道とタイミングを「直感」で先読みして後ろを見ずに回避する事で凌いだ。

……そのまま【ギガース】で薙ぎ払ってみるものの、前後を挟まれた状態では彼女達を退ける事が出来ず上手く防がれてしまった。

『ぐぐぐ、流石に二体一だと中々キツイドラね』

「挟み撃ちにしても仕留めきれないヤツがよく言う！ つーか、何で後ろからの不意打ちにも対応出来るんだ!?!」

『G A A A O O O O!!』

主に「直感」と《竜尾剣》のお陰です。単純に動かして伸び縮みするだけでなくパワーも私と同じだから、上手く使えば後ろからの攻撃を弾くぐらいは出来るのさ。

……とまあ、こんな風に見ている観客が結構盛り上がるぐらいの接戦を演じていた私と彼女達なのだが、長期戦で集中力が途切れたのか私が《竜尾剣》の制御をミスリベファイに突き刺してしまい、更にはそのまま前足で尻尾を掴まれた事で状況は一変した。

『G A O O O O!!』

『あ、やべドラ』

「よしっ！ ベファイそのまま掴んでおきな！ 《スラツシユアツクス》！」

そうして、こちらの動きが制限されたと見たのかアマンダは一気にこちらへと接近して大上段に構えたハルバードを振り下ろして来た……むむ、後ろから尻尾を掴んだままのベファイも迫って来てるし、このまま回避出来ない様に押さえつけて一気に潰す気かな。

なので、私は全力でバックステップしながら掴まれた尻尾を縮める事で一気に後方へと高速移動して、こっちに向かって来ていたベファイの懐に潜り込んだ。

……この《竜尾剣》、今の私でも300メートル以上伸ばせるし、私一人分の体重を動かせるぐらいのパワーもあるからこんな事も出来るのだ。

「な、速い！ ベファイー！」

『ピンチはチャンスドラ。《テンペスト・ストライク》！』

『G A A A A A A A!』

ベファイは体格差から懐に潜り込まれた私への対応が遅れ、その腹部に私の《テンペスト・ストライク》——暴風を纏ったメイスで相手を殴ると同時に吹き飛ばす【戦棍鬼】のスキルの直撃を喰らい闘技場の端の方まで吹き飛ばされた。

その際に尻尾を掴んでいた手も離されたので、私は身を翻すと同時に《竜尾剣》を操作して横向きに薙ぎ払う様に反対側のアマンダを攻撃した。

『どらー！』

「くっ！ だがまだだよ！ ここさえ凌げばまだ……！」

だが、彼女も即座に反応してハルバードを盾に《竜尾剣》を防ごう

とする……確かに一時的に二人を引き離せただけだし、吹き飛ばされたバフィーも既に態勢を立て直しているから直ぐに合流されるだろうね。

……だから、私はここで確実に仕留めないとジリ貧になると考え、最近使える様になった【どらぐている】の最後のスキルを開帳する事に決めた。

『いや、これで終わりドラ。』グラヒトロン・デイバイタ《重 破 断》

「なっ……!?？」

そうして私がスキルを使用した直後、ブレードが真つ黒に染まりながら彼女の構えたハルバードへと激突……した瞬間、金属製の筈のハルバードごと彼女の腹部を真つ二つに切断したのだ。

……これが【どらぐている】最後のスキル——ブレード側面に光を捻じ曲げる程の超重力を左右に発生させ、その始点である切っ先に触れた物体を“割り裂く”事で切断する(お兄ちゃんの考察)スキル《重 破断》である！

(……ただ、このスキル消費するMPが多すぎて、私のジョブ構成だとこっそりと付けてたMP補正付きのアクセサリー込みでも二秒ぐらい使えばMPの大半が吹き飛ぶんだけどね。……やっぱりにアジャストされてないガチャ産の特典武器だからかなあ)

『決着ウウウ!!! 激戦を制したのは着ぐるみ【戦棍鬼】ミカ・ウイステリア選手ですっ!!! 本当に何なんだあの着ぐるみ!?？」』

ただの特典武器(古代伝説級)です……と、そんな感じで決闘が終わったので闘技場の境界が解除されると、真つ二つになって臓物を撒き散らしていた筈の彼女は完全に元通りになっていた。

……今まで何度も見て来たけど本当に不思議な光景だね。まるで“ゲームみたい”。まあデンドロは『ゲーム』だけどき。

「いやあ、負けた負けた。アンタ見た目の割に本当に強いねえ。技術も凄いし」

『この着ぐるみが私の持つてる装備の中で最も強いから着てるだけドラ』

そんな感じで試合が終わった後の私達は和やかに会話をしながら

握手した……うんうん、戦いが終わったらノーサイドで済むのも決闘のいい所だよね。偶にそうじゃないヤツもいるけど。

〈マスター〉

「しかし、本当に何なんだいその着ぐるみ？ 色々性能がおかし過ぎるだろう。特典武器じゃないかとは聞いているが」

『色々あつて手に入れた特典武器ドラ。由来は聞かないでくれると助かるゴン。……せつかくいい試合だった貴女を盤外で潰したくないしね』

「……あー、その言い分だと何かバカ言うヤツがいたのか」

『いた(過去形)ドラ。……へマスター〉の中にはその辺りの配慮が出来ていないヤツもいたから、余りにもしつこいヤツは潰した(潰す)では無い)ドラ』

ここギデオンは決闘都市と呼ばれるだけあつて参加するテイアンの闘士達のモラルは高く、基本的に人の秘密を積極的に聞いてくる人などいないんだけど……ゲーム感覚のへマスター〉は違うんだよねー。

まあ、その殆どは彼女みたいにちよつと質問するだけではぐらかしたらそのまま引いてくれる常識的な対応んだけど、偶に『偶々手に入れたレアアイテム頼り』とか『ネタキャラの癖に』とか言つて粘着してくるアホもいるんだよね。

……まあ、へマスター〉なら潰しても心は痛まないから “対応” 自体は楽なんだけどね。血糊とかも光の粒子になるから街も汚れない(実体験)

「……まあ、その辺りは深く聞かないでおくよ。アンタが装備頼りのヤツじゃない事はよく分かつてるし」

『ありがとうドラ』

うんうん、やっぱり決闘はこんな感じで爽やかに終わるのがいいね。

ギデオンでの三兄妹・その二

□決闘都市ギデオン・第八闘技場 【魔導拳^{マジック・フィスト}】 ミュウ・ウイステリア

ア

『《ライザアアアキィ——ツク!!!》』

「グワアアアアア!!」

「おー、ビシユマルさんが爆炎を上げながら吹き飛ばされました。見事な跳び蹴りですねー」

「ミュウ、あの爆炎つて彼自身の《エンブリオ》じゃなかったっけ?」

「そうとも言いますがねミメ、これはお約束と言うものなのです……まあ、ビシユマルさんもガードしながら後ろに飛んでダメージを殺していますし、彼が身体に纏う炎でライザーさんもダメージを受けているのでこの戦いはまだ続きそうです。」

「……そんな訳でこの私『ミュウ・ウイステリア』とその《エンブリオ》である『ミメーシス』は友人^{フレンド}になった二人の決闘を観戦していました。ちなみにビシユマルさんは以前の王都の格闘家ギルドで会った時、ライザーさんはギデオンで決闘した後にビシユマルさんの紹介でフレンドになったのです。」

「……ううむ、これが《マスター》同士の試合か。決闘試合でなら何度か見ているが、ここまで間近で見られる機会はなかなか無いな」

「フルフェイスヘルムと軽鎧の方はかなりの格闘術を収めているな……妙に派手な動きが多いのが気になるが。ただ、あの戦い方なら防具はもう少し軽い方がいいんじゃないか」

「ズボンだけの半裸の方はあの炎の《エンブリオ》が格闘戦では厄介だな。……長時間使うと自分も燃え尽きるみたいだが」

まあ、今回の試合はファイトマネーが出る試合ではなく『格闘家ギルドが主催している練習試合形式のジョブクエスト』なので、この闘技場の周りには私達以外にもあの二人の試合を見学している格闘家ギルド所属のティアンや《マスター》がかなりの数いるのですが。

「……ちなみにライザーさんはあの動き的に多分本職の《スーツアクター》さんっぽいですね。以前有名な特撮ヒーロー^{仮面ライダー}っぽいスーツを探

していると言っていましたし。

ビシユマルさんの方は手に入ったレベルが高い《火炎耐性》持ちの防具があのでズボンだけだったそうです。ズボンで良かったですね。

「まあ、あの二人のこだわりがある部分っぽいので私は深く言いませんが」

「リアル情報を言う訳にもいかないからね。……《マスター》の格好が変なのは今に始まった事じゃないし、着ぐるみとか」

……まあ、姉様やシユウさんの格好着ぐるみと比べれば十分まともですかね……と、私達がのんびりと観戦していたらこちらに近付いてくる気配がしたので振り向くと、そこには王都の格闘家ギルドのギルドマスターであるゴライアンさんがいました。

「よう嬢ちゃん、久しぶりだな」

「ああ、ゴライアンさんお久しぶりです。貴方もギデオンに来ていたんですね」

「俺も決闘には出てるからな。最近はギルマスの仕事が忙しかったが、今回の闘技場での練習試合には王都所属の格闘家も参加するからようやく来れたんだが」

彼の言う通り、この練習試合はギデオン以外の格闘家ギルドからも参加者がいるぐらい結構大規模に行われているんですね。

「しかし、随分と盛況なんですね。……私のジョブクエスト参加報酬もかなり良かったですし、《マスター》の能力を見るのが目的でしょうか？」

「お兄さんが言ってた《マスター》との伝手を作る》ってやつじゃない？」

「まあ、今回の練習試合に《マスター》を招いた理由としてはどっちも正解なんだが……この練習試合が大規模なのは別の理由があるぞ」

そんな私達の疑問にゴライアンさんそう答えた後、私達の隣に座って更に話を続けました。

「……今から二十年くらい前に死んでしまったんだが、昔アルター王国スベリオルジヨラの北西にある《クレミル》って街に格闘家系統超級職キング・オブ・グランプリング《格闘王》に就いていた《アスカ・グランツ》って爺様がいて

な。俺もまだ若い頃に一度会った事があるだけの人間だが、彼が死ぬ十年前ぐらいに自分が就いている【格闘王】の転職条件を王国全土に公表したんだよ」

「ふむ？ それは自分の後を継ぐ者を探すとかの目的で？」

「うーむ、それも有ったかもしれないが……俺の見立てだと主な目的は自分に戦いを挑むヤツが出る事を期待してたんじゃないか？ あの爺様、自分の『武』を極める事と強者との戦い以外あんまり興味を抱かない感じの人だったし」

ゴライアンさん曰く、基本的に超級職に就いた人間は『自分の身を守る為に』可能な限りその転職条件を秘匿するものであるとの事……超級職は一種一人しか就く事が出来ないもので、条件が公開されると『俺も転職条件を満たしたんだから、今超級職に就いてるヤツさえ殺せば……！』的な人が沢山出るからだそうです。

何でも超級職の転職条件を満たすと専用のアナウンスが聞こえるそうですが、既にそのジョブに就いている人がいると『転職条件を満たしていない』扱いになるのでアナウンスは出ないそうです……なので、転職条件が分かっているければ『例え条件を満たしていても自分が既存の超級職に就職出来るかも分からない』仕様という訳ですね。

「まあ、転職条件が明らかになっても彼に挑むヤツは殆ど居なかったんだがな」

「それはどうして？」

「まず一つに当時のアルター王国決闘一位だった彼の強さは王国全土に知れ渡っていた事、それに加えて彼は既に老人だったから下手に手を出すより寿命で死ぬのを待った方が良くと考えたヤツが多かった事があるんだが……それよりも、そもそも公開された転職条件を満たせなかった事が一番大きいな」

「ほう？ 話の流れ的にその条件がこの練習試合クエストに繋がる様ですが……」

私は戦いが終わって闘技場から降りて行くライザーさんとビシユマルさんを眺めながら、ゴライアンさんの話に耳を傾けていきます……私もゲーマーの端くれなので、この手のユニーク要素には興味が

ありますし。

「ああ、アスカ氏が公開した【格闘王】への転職条件はまず『グラップラー【格闘家】マイシヤルアーティスト】のジョブを最大レベルまで上げ、習得出来る全てのジョブスキルを習得する』……まあ、これは特定のジョブ系統の超級職では良くあるヤツらしい。……それでもう一つが『自身と同格以上の格闘家相手の真剣勝負で100連勝する』だ」

「それはまた……格闘家系統の超級職なので【武闘家】の転職条件のスケールアップ版だという感じですが」

しかし成る程、つまり最後の『100連勝する』の条件を満たす為にこの練習試合ジョブクエストは行われているんですね……と、思ったのですがゴライアンさん曰くそう上手くはいかないみたいです。

「……アスカ氏は『真剣勝負の最低条件は『闘技場での全力戦闘』ぐらいじゃないか？ 俺は若い頃決闘に出たり修行の旅の途中で野試合したらいつの間にか条件を満たしていたからよく分からないが』という言葉を残していて、それからこう言った練習試合を定期的に行なっているが……少なくともアスカ氏が死んでから、俺が知る限りではアルター王国の格闘家は誰も【格闘王】の座には就いていないんだ。多分この『同格以上との真剣勝負』はかなり厳しい判定なんだろう」
今まで確認出来た範囲内では『相手のやる気が無い』『相手に勝利を譲る気』とかではカウントされず、悪質な『八百長で超級職を』『不意打ちで倒す』とかだと逆に敗北判定になるのでは推測されているようです。

それと『同格以上』の判定も『勝率が高い同格の相手と連戦』とかしても条件を満たせなかったらしいので、連戦だと判定基準が上昇している可能性が高いとの事。

「そもそもこんな練習試合をやっても二十年間【格闘王】に誰も就けなかった以上、闘技場での戦いだと『真剣勝負』の条件を満たす判定が厳しくなるんじゃないかとも推測されてるけどな。……まあ腕を磨くには使えるし、この王国では噂に聞く天地と違って下手に野試合なんてすれば高確率でお尋ね者扱いだしな」

「上手くはいかないものですね」

なので、今ではこの練習試合クエストはギルド内の格闘家同士で技量を磨くための交流戦に近い感じになってしまっているのだとか。

「しかし、その【格闘王】の転職条件を私に条件を教えても良いのですか？」

「ん？ ああ、どうせ過去に一度公開されてる情報だから調べればすぐに分かるしな。……それに嬢ちゃんなら条件を満たせるんじゃないか？ さつきから練習試合を全戦全勝だっただろ」

「……うーん……」

……まあ、確かにライザーさんとビシユマルさんにも私は勝っていますが、その二人クラスの相手に100連勝するのは難しい……というか無理でしょうね。それだけ戦えば私への対策取った二人に何処かで負けると思いますし。

それに超級職欲しいのは誰でも同じですから、勝負の時に相手が条件を満たせない様に撤退的なメタとか妨害とかに出る人も……。

「……この転職条件って公になった方が条件満たし難いのでは？ こう熾烈な取り合いになる的な意味で」

「現状を考えればある意味そうだろうな。……条件を満たすのにどうしても他の人間の存在が必要な訳だから」

件の【格闘王】さんは何を思っただけで転職条件を公開したんでしょうね。特に「マスター」が条件を知ったらロクでも無い事になる気がします。

……そんな話をしてる内に闘技場の貸し切り時間が過ぎたので練習試合はお開きとなりました……就けそうな超級職の転職条件が明らかになりはしましたが、無理をして条件を満たそうとすると（悪目立ちして）失敗しそうなので今は保留にしておきましょう。



□決闘都市ギデオンの八番街

格闘家ギルドによる練習試合のクエストが終わった後、参加者であったミュウ・ウイステリアとその「ヘンブリオ」の「ミメーシス」は友人であるマスクド・ライザーとビシユマルと一緒にすっかり暗く

なつた八番街を後にしていた。

尚、三人が一緒なのはこのギデオン八番街は治安の悪い場所なので少女二人で帰らせるのは危ないと、男二人が街を出るまでの同行を申し出たからである……少女二人の方が戦闘能力が高いとかは言っていない。

『やはりフルフェイスと軽鎧では格闘戦だと動き難いか。……だが、今まで売っている防具を吟味した中で、この装備が最も俺のイメージする“ヒーロー”の姿に近かったんだが……』

「まあ、このデンドロには特撮ヒーローなんてやってないからな。ヒーロースーツなんて売ってないだろ」

「そこまで拘るなら求めるデザインを提示してのオーダーメイドしかないのでは？」

「お金は掛かるけどそれが確実だよな」

そして今は装備が原因で練習試合での戦績が振るわず肩を落とすライザーを、他の三人が励ましたりしている所だった。

「確かゴライアンさんが言っていました、王国の北西にある『クレームル』という街では武器・防具の生産がこの国トップらしいですし、そういった場所ならライザーさんが求める“ヒーロー”の姿をカタチに出来る人もいるのでは？」

「ヒーローの姿を知ってるへマスターでも良いかもしれないけど、以前にあった生産系へマスター達は『まだオーダーメイドを作れる程の技術と材料がない』って言ってたし」

『そうだな……ありがとう二人共。今度「ヘルモーズ」を飛ばしてその『クレームル』に行ってみる事にするよ』

「お前の「ヘルモーズ」は足が速いからな！」

その様に街の雰囲気とは似つかない和やかな感じで話をしていた四人は、特に何事も無く八番街の出口へと辿り着き……不意にミュウが何かに気付いたかの様にその目を鋭いものに変えてあらぬ方向へと顔を向けた。

「……すみません、ちよつと用事を思い出したのでこれで失礼します」

「あ、ああ。気を付けてな」

……そして僅かな時間だけ考え込んだ後、彼女は男二人に別れを告げるとそのままミメーシスを連れてギデオンの西側に向かっていた。

「《人間探知》……ミメ」

「了解。《憑依融合》」

その道中でミュウは特典武器のスキルを使ったりミメと融合状態になる、更に装備のいくつかを戦闘用の物に変えるなど戦う為の準備を済ませていった。

……そして準備を終えた彼女はピンク色の髪を棚引かせながらそのままギデオン西門を出て、その先にある《ジャンド草原》へと向かって行ったのだった。



「……ふう。見晴らしも良いですし、この辺りにしましょうか」

『不意打ちされるのは避けたいしね』

そうして彼女達は《ジャンド草原》の人気の無い平地帯にやって来ると、先程から自分達に殺気をぶつけて来ている相手が居る方向を振り向いた……すると彼女達から少し離れた所の薄暗い夜闇の中から金属製の鎧を着込み、手に“木製の槍”を持った一人の男性が現れた。

「……ハア、分かってはいましたが、また貴方ですかシュバルツ何某」
「シュバルツ・ブラツクだ。……ククク、態々この人気の無い場所を戦いの舞台に選ぶとは、貴様も我らの再びの戦いに邪魔をされたく無いと見える」

「いえ、街中で貴方をPK^殺したら他の人の迷惑になるでしょう？」

そう、現れたのは以前に彼女達兄妹を襲って返り討ちに遭ったPKであるシュバルツ・ブラツクだった……尚、彼自身は待ち望んだりベンジの機会に高揚しているのか笑みを浮かべていて、対照的にミュウは非常にウンザリした表情で溜息を吐いているが。

……そしてシュバルツが何かを言うのを適当に無視しながらミュ

ウはさっさと倒そうと戦闘態勢に入った。

「……前にも行つた通り、仕掛けて来たのはそちらが先なので躊躇なく潰します。《フレイム・フィスト》《フリーズ・フィスト》」

彼女はウンザリした表情のまま、ミュウは魔拳系スキルにより右手に炎、左手に氷を纏わせた上で、自分のAGI速度にSTR筋力を使った踏み込みと《魔力放出》による加速を上乗せした高速移動でシュバルツに向かつていった……ちなみに別属性の魔拳系スキルを同時使用出来ているのは、二種類の魔拳系スキルを同時使用出来る様になる「魔導拳」のパッシブ奥義《双魔拳》によるものである。

……だが、一見自分に酔っている様に見えるシュバルツだったが、その実ミュウ相手に一切油断はしていなかった。

「その戦い方は闘技場で見たぞ！ 《魔力放出》！」

「む、距離を取りましたか。こっちの動きを研究して来てますね」

そのミュウの行動を読んでいたシュバルツは、同じく自身のメインジョブ【魔法槍士マジック・ランサー】で覚えた《魔力放出》を使って即座に後退したのだ……彼はこのリベンジの為にミュウが出ている決闘を可能な限り観戦し、更に決闘の映像を見る事が出来るマジックアイテムまで買って彼女の動きを研究して来ていたのである。

更にミュウは以前の戦いで彼の《エンブリオ》【ミステイルティン】に手傷を負わされているので、そのスキルの発動条件と想っている。槍への接触“を警戒して下手に踏み込まなかった事も後退を許した理由であった。

「……では、それを推し量つた上で動きましょう。《アクセルステツプ》」

とは言え、そこは戦闘に関してなら“天災児”と言える才能を持っているミュウは即座にシュバルツの動きを読み切りながら、数歩の間だけAGI上昇させる歩法系スキルを行使して相手の持っている槍に接触しない様に回り込む形で接近した。

……だが、その慎重な戦術を選んだ事と、戦闘開始時に距離が少し離れ過ぎていた——シュバルツが彼女相手でも二つのスキルを発動する時間がある程度の距離を取っていた事が彼等の命運を分けた。

「遅い！ 《ヤドリギの枝よ、天へ伸びよ》!!!」
「ツ!?? これは……」

シュバルツがそのスキルを行使すると彼を中心として淀んだオーラで出来た半径10メートル弱の半球型のフィールドが展開され、接近して来たミュウを飲み込んだ後に消失した。

……これこそが「ミスティルティン」が上級に進化してT I P E テリトリリー・アームズになった際に発現したスキル《ヤドリギの枝よ、天へ伸びよ》——消費したHP100につき半径1メートルの球状フィールドを展開し、そのフィールドに接触した者全てを『ミスティルティン』が接触した対象』として扱うスキルである。

『エフェクト・ミラーリング転位模倣』……駄目だ！ このオーラの効果は、あの槍に接触したものとして扱われる。感じみたいだけど、同じ効果が向こうにも掛かっている！』

「じゃあ何かされる前に潰します。《波動拳》！」

それを見たミメーシスは即座にデバフ対策の《転位模倣》を使うが、掛かっている効果は判別出来たものの「ミスティルティン」の能力がマスターを含めて無差別に掛かるものだった為にデバフ対策としては機能しなかったのだ。

とは言え、それを聞いたミュウは即座に状況を理解してシュバルツに遠距離攻撃を行い、既に攻撃力が上がると知っている槍での接近戦を避ける様に立ち回りを変更した……が、彼が使う、もう一つのスキル”にとつて距離は余り関係の無いものだった。
「ここだつ！ 《輝ける才覚よ、消え失せよ》!!!」

……シュバルツがそのスキルを発動した瞬間、ミュウの右腕の肘部分がまるで内側から爆発する様に破裂したのだ。

「なつ……!??」
「今だつ！ 《瞬間装着》 《輝ける命脈よ、尽き果てろ》
《輝ける身体よ、墜ち果てろ》 《アクセルスラスト》！」

……流石に自分の右腕が肩口から手首の辺りに至るまで粉々に弾け飛んだ所を見て僅かに動揺したミュウに対し、シュバルツは腕部装

備を「特注の籠手」から動かしやすいグローブに変えた後、更なるスキルを行使して攻撃力を上げた【ミステイルティン】を彼女に突き込むのだった……。

ギデオンでの三兄妹・その三

□〈ヘジャンド草原〉

時刻は夜、場所はギデオンの西に位置する草原地帯ヘジャンド草原、そこであつて倒したP K シュバルツ・ブラックの襲撃を受けたミュウ・ウイス テリアは相手の使つたスキル《輝ける才覚よ、消え失せよ》によつて右腕を奪われてしまった。

「なっ……！」

「《アクセルラスト》！」

そして、ミュウが動揺した隙を突いてシュバルツはスキルにより攻撃力を上げた木槍——【滅神呪槍 ミステイルティン】で彼女を貫こうとする……が、その直前にミュウの目から一瞬で動揺の色が消えた。

……そして彼女は冷徹で感情の無い様な表情のまま、一切の淀みなく即座に現在の戦局に於ける最適解を実行していく。

「《暗黒転身》」

「チッー！」

ミュウは槍が自分の身体を貫く直前に首に巻いた【黒晶首巻 ブラックオート】の非生物による攻撃を透過する《暗黒転身》を使いながら前進、シュバルツの槍を擦り抜けながら最短距離で接近して《双魔拳》によつて強化された冷気を纏う左拳を振り被つた。

「《レバーブロー》」

「《魔力放出》！ ……グハッ!?？」

そのままミュウは強烈な左フックを相手の脇腹に叩き込むものの、シュバルツはそれとほぼ同時に《魔力放出》を使つて無理矢理左に飛ぶ事で威力を殺す事に成功していた。

……だが、それを見たミュウはすぐに彼から距離を取る様にバックステップし、更に【僧兵】の《セルフヒール》でHPを回復させつつ吹き飛ばされた右腕の断面に左手の冷気を押し付けて凍らせる事で無理矢理に止血を行った。

『ミュウー！ 大丈夫!?？』

（ええ、大丈夫ですよミメ。止血は終わりました……しかし、我ながら少々油断が過ぎましたね。……まずは状況確認を行いますよ）

そうしてシユバルツからある程度に距離を取ったミュウは、自分を心配して声を掛けて来たミメに答えつつ冷静に状況の確認を行った。（現在右腕欠損、止血は終わりこれ以上の継続ダメージは無し、右腕が無い事による重心の変動はもう慣れた。向こうは吹き飛ばしたけど）
“こちらの動きを読んで”自分で飛んでいたからダメージは軽微、今はこっちの様子を見ながらポジションを飲んで回復中。……《暗黒転身》を使った武器使いに対するカウンターは以前フォルテスラさんやファイガロさんとの決闘で使ったのでそこから分析されましたか。よっぽど私の事を研究して来た様ですね）

『一応、さっきの体内からの攻撃は“ストック”しておいたよ。それとやっぱりアイツのデバフは自分にも掛かっているよ。《^{エフェクト・ミラーリング}転位模倣》はMPの無駄だから切るね』

（分かりました。……自分含めてのデバフ、制御を手放すデメリットと引き換えの効果強化ですかね。決闘でも無差別破壊が得意なヘンブリオ＜＞がありましたし。ですが先程私の右腕を奪った攻撃は……ヤツのスキル効果適応条件は槍への接触、吹き飛んだのは右腕の体内から、後はさっき付けていた籠手を仕舞っている……）

そう、彼女の兄をして“戦闘系天災児”と呼ばれるミュウの才能は単純な体捌きだけでなく、こう言った“戦闘時に於ける思考の速さと鋭さ”や“戦闘中に何があっても動揺から即座に立ち直る精神性”も含めたモノなのである。

（事前に私を接触状態にするスキルを使った事から、あの“レベル・ブラスト”は槍に触れた相手に……名前からしてレベルを基準にしたダメージを与えるスキルですかね。向こうにダメージが無い様に見えるのはあの籠手で槍からのダメージを防いだ事と、私と同じ様にダメージ軽減系のアクセを付けてましたか）

『ミュウも戦闘になる前、念の為にダメージを減らす系の使い捨てアイテム【身代わり上級人形】と【身代わり羽飾り】を装備してたもんね。二つとも今は発動し終わって砕けてるし。……でも、ミュウの腕

は内側から吹き飛んだよ?』

(なので恐らくダメージの発生場所が違うのでは? 槍に触れている場合は槍から、そうでなければ体内……無制御が特性ならランダムな場所とかですかね。狙って体内攻撃出来るなら胴体か頭部を狙うでしょうし。あの金属製の籠手は槍からのダメージ身代わり用だったとか)

この彼女の推測はおおよそ当たっていた……【ミスティルティン】の第三スキル《輝ける才覚よ、消え失せろ》は『【ミスティルティン】に触れた対象全てにその合計レベル×50の固定ダメージを与える』という効果であり、ダメージの発生場所は【ミスティルティン】触れている場所か、そうで無い場合は対象の肉体のランダムな位置で発生する仕様なのだ。

……この「ランダムな位置」というのが中々の曲者で、生物の体表面と体内の体積の差からダメージの発生が高確率で体内で発生するので多くの装備や防御系スキルが効果を発揮し難いのである。

また、シュバルツ自身は【ミスティルティン】を両手で持つ事でダメージを分割しつつ、その接触点からのダメージを掌に金属板を仕込んだ特注の籠手と【身代わり竜鱗】などのダメージ軽減系アイテムを複数装備する事で凌いでいた。

(……ヤツはこつちを相当研究して来てるみたいですし、こちらは『周囲の迷惑を気にする』など油断して先制を許したのではこうなるのも当然ですか。こんな有様では現実の「^{リアル}師匠」に怒られそうなのです)『それでどうするの、ミュウ? アイツも回復を終えてこつちに向かって来そうだけど』

(向こうは私の決闘を見て分析している様ですし……そうですね、丁度思い出したので「師匠」が最初に教えてくれた決闘では使えない『水面流古武術護身心得』を実践しましょうか)

そして現実の時間で10秒程度の思考を終えたミュウは、回復を終えたシュバルツに対して欠損した右腕をかばう様に半身になって構えを取った。



(よし、腕を一本奪ったし例の『透過スキル』も使わせた。カウンターは貰ったがそれも予想して横に飛んだからダメージは軽微。……向こうはまだやる気みたいだが、このままなら押し切れぬ)

構えを取ったミュウに対して冷静に状況を把握しながらシユバルツは同じく「ミステイルティン」を構えた……彼のPKとしての最大の武器はこの分析能力と冷静さであり、目的の為ならどんな手間の掛かる事前準備も厭わない性格であるとも言える。

……今回の襲撃に關しても事前に彼女の試合映像を何度も見返して徹底的に動きを分析するのは当然として、このリベンジの一戦の為だけに稼いだ資金の殆どを使って高価な装備(使い捨て含む)を整える事すら当たり前の様にやっていた。

(ゲーム内でユニークスキルやら極振りで活躍してイキってる有名人を、事前の分析と対策によって普通のキャラで打ち倒す快感……これだからオンラインゲームでのPKは辞められないんだよな。……まあ、このゲームの「ハマスター」でユニークスキル有を持ってないヤツは居ないんだが。へエンブリオ的に)

尚、彼の基準的にミュウは優先してターゲットにするべき『イキってる』タイプとは少し外れていたりするのだが、最近のギデオンで有名人である事には変わりないし、前回やられたリベンジも兼ねているのでヤル気十分である。

(だが、まだ油断は出来ない。彼女はフィガロとの決闘試合では今みたいに片手を切り落とされても当たり前のように戦闘を続行していたし、既に不意打ちによる動揺からは立ち直ってるからな。リアルで格闘技でもやっているのか俺よりも動きのキレが鋭いし、ここは失われた右腕側から慎重に攻めていくか。例のカウンター系らしきスキルもあるし)

そして徹底的にミュウの情報を分析したが故に、自分にとって圧倒的に有利に見える状況であっても十分に敗北の可能性はありと考えて、一切の油断なくシユバルツは再びの戦いに挑もうとしていた。

ここまでの彼の行動や判断には決して落ち度は無く、むしろこの場に於ける最善の対応を取っていると見えるだろう……が、強いて彼の分析の間違い（と言えるかは分からない程度のもの）を指摘するならば、ミュウは『格闘』では無く、『戦闘』の天才であるという点だろう。

……故に決闘試合と前回の戦いだけでミュウの戦い方を分析していた彼は、彼女が次に取った行動を予測する事が出来なかったのだ。「……護身心得その一！ 危なくなったら大声を出しながらさっさと逃げる!!!」

そう、ミュウはそんな事を大声で叫びながら左手の《フリーズ・フィスト》を解除して身を翻し、そのまま全力疾走でギデオンの方角へと『逃亡』し始めたのだ。

……その光景を見たシュバルツは余りにも予想外の行動だった為に一瞬だけポカンとした表情を浮かべるものの、即座に逃げる彼女を追い掛けに入った。

「おいコラ！ 待てっ!!!」

「待つわけないでしょバーク!!! 危なくなったらまず逃げるのが現実
に於ける護身術の基本です!!!」

『身を守るなら最適解かもしれないけど、ちよつと言葉が汚いよミュウ』

そんなミメの苦言をスルーしつつ後ろのシュバルツの制止の声に罵倒で返しながら、ミュウは右腕を失っているとは思えない綺麗な走り
で逃走を続けていった……まあ当然彼女も散々付け狙われて腕を奪われた事に内心かなり怒っていた様だ。

……だが、彼もいくつかのゲームでPKとして名を馳せた者、自分に罵倒を向けられる事も逃げる相手を追う事にも慣れていたので、走りながらも即座に右手で彼女を指差した。

「止まれっ！ 《カースバインド》！」

「む、呪いですか」

『大丈夫、レジスト出来てる』

そしてシュバルツは《カースバインド》——指を指した相手に軽度の【呪縛】を掛ける【呪術師】の基本スキル——で足止めを試みるが、

融合と装備した「ブラックオーツ」によって呪怨系状態異常耐性が上がっているミュウにはレジストされてしまった。

……だが、彼もスキルレベルの低い呪術はあくまで僅かな時間稼ぎの為に使ったに過ぎず、その一瞬で彼は本命である《瞬間装備》によって取り出した「投槍」を振りかぶっていた。

「喰らえっ！ 《ブースタージャベリン》！」

そしてシユバルツは「魔法槍士」のMPを使って投げた槍を加速させるスキル《ブースタージャベリン》を使って、手に持った投槍を逃げるミュウの背中に向けて投擲した……その投槍は魔力によって急加速しながら正確に彼女の背に迫り……。

『ミュウツ!?? 後ろ！』

「問題有りません。『音』で把握出来ています」

その投槍の風切り音だけで射線と速度を読んだミュウが走りながら身体を反転させた所為で外れて、そのすぐ脇を通り過ぎて行った……が、その回避行動によって彼女の走行速度が落ちたと見たシユバルツは、更に《魔力放出》まで使って一気に距離を詰めて行く。

……しかし、それを見たミュウは笑みを浮かべながら、走っている最中にアイテムボックスから取り出していた「ジエム」を残った左手で彼に投げつけた。

「護身心得その二！ 変質者が迫って来たら手近な物を投げつけよう!!!」

「誰が変質者だっ!!! ……って、「ジエム」だと!??」

変質者扱いに思わず言い返したシユバルツだったが、飛来した物体が「ジエム」だと分かると慌てて避けようとした……のだが、《魔力放出》によって推進力を得ていた身体は簡単には止まらなかったもので、やむ終えず「ジエム」を槍で弾き飛ばそうとした。

……だが、ミュウが起動までの時間すらも計算に入れて投げた所為で、槍が触れる直前に「ジエム」——彼女の兄がお守り代わりに持たせていた「ジエムー《クリムゾン・スフィア》」が起動した。

「なっ……!??」

「たーまやー……《人間探知》も使っておきましょう」

解放された【紅蓮術師】パイロマンサーの奥義は、〃上級職までの最大威力の魔法〃
という巷の評判通りに凄まじい熱量の爆炎でもってシュバルツを飲
み込んだ……が。

「……ゲホッ！ ……クソ、予備の【身代わり竜鱗】を付けてなければ
即死だったぞ」

その爆炎の中からシュバルツは身体のあちこちを焦げ付かせなが
らも、念の為に付けていた【身代わり竜鱗】によって無事に五体満足
で離脱した……この一戦の為に手持ちの資金とアイテムをほぼ全て
使って装備を整えていた事が功を奏した形である。

……だが、そこに《人間探知》で彼の生存と詳細位置を把握してい
たミュウが自前の技術で気配と音を消しながら爆炎とそれによって
生じた煙に紛れて接近して、彼が反応するよりも早く左手でその首を
掴んだ。

「なっ!? ……カハッ」

「《ライトニング・フィスト》」

そのままミュウは気道を締め上げてスキル発動に必要な発声を封
じると共に、その手に纏わせた雷をシュバルツに流し込んでその身体
を【麻痺】状態にした。

……そして動きが鈍った彼の身体の重心を崩す事で片手一本で地
面に押し倒して馬乗りとなり、槍を持った腕の肘部分を自分の膝で抑
え込んで完全に抵抗を封じた。

「ア……カ……」

『《攻撃纏装》』
アタック・テスクチャ

『《握撃》』

そうして最後に先程ストックした『自らの右腕を奪った18000
越えの固定ダメージ』を上乗せした《握撃》——握力を上昇させて掴
んだものを握り潰す格闘スキル——で、彼の首ごと頭部と上半身を吹
き飛ばしてその身体を光の塵へと変えたのだった。

「……水面流古武術・護身心得その三『それでも、本当にどうしても戦
う時になってしまったら、とにかく一手でも相手の虚を突いてそこか
ら確実に仕留めろ』……長くパーティーでの野生モンスター戦や興行

要素のある決闘で戦ってたからちよつと忘れてましたね。やはり戦いは奇襲・不意打ち・騙し討ちとかの方が効率的ですね」

『……まあ、ミュウがそう思うならそれでいいんじゃない?』

シユバルツの肉体が完全に光の塵になって消え去るまで油断なく見ていたミュウだったが、完全仕留めたと確認すると立ち上がってそんな台詞を言った……融合していたミメが苦笑いしているのは内緒だ。

……だが、戦闘が終わった所で彼女はつい失われた右腕を見て溜息を吐いてしまった。

「……ハア、確か部位欠損は通常の回復魔法やアイテムでは治せないんでしたね。本当に高い授業料になってしまいました。……まあ、へマスターへ」なのでデスペナすれば元通りではあるんですが……」

『お兄さん達にはどう説明しようか………ん? なんだろコレ……?』

そんな風にミュウが頭を悩ませていると融合しているミメが何かに変なもの”気がついた様に唸り始めた。

「どうしたんですか、ミメ?」

『うん……ええと、何かがあつちの方にある……? ミユウ、さつき戦いを始めた場所まで戻って見てくれないかな?』

「? 分かりました」

そのミメの言葉に従い、ミュウは早足で先程戦闘を開始した地点まで戻っていく……そこで彼女達が見つけた”もの”とは……。

「コレは”千切れ飛んだ私の右手首”ですね。……流石にこうなつて仕舞えば再生は無理っぽいでしょか」

『……いや、もしかしたらイケるかもしれないよ。その右手首にもまだ僕が憑依しているのを感じるんだ。……流石に遠隔で操作とかは出来ないし、自己治癒だけでは再生は無理っぽいけど……』

「それは……ああ、確か融合している時の私の種族は『エレメンタル』になっていましたね。……コレはもしかしたらワンチャンあるかもしれない。ちよつと兄様に頼んでみましょうか」

……そうして『とある可能性』に思い至った彼女達は千切れた右手

首を持ちながら、ギデオンに居る兄の元へと急いで戻って行ったのだった。



「……とまあ、そんな感じで私はこのザマという訳なのです兄様。……ちよつと油断と慢心が過ぎたのです」

「……事情は大体分かったが……いきなり腕が千切れた状態で手首を差し出して『兄様ちよつと治してほしいのです』は無いと思うんだが」

三兄妹がギデオンでの長期滞在の為に借りていた宿屋の一室、そこではミュウは兄であるレント・ウイステリア相手に先程までの事情を説明していた所だった。

『ゴメンねお兄さん。……でも、手首から感じる『僕の気配』は徐々に薄くなってる気がするから急いでたんだよ』

「別に責めている訳では無いんだがな。……まあ良い、そういう事情ならさつさと始めるぞ。とりあえず傷口を縛って止血した上で凍っている部分を溶かす」

「お願いしますのです」

そう言うとレントはアイテムボックスから取り出した紐を手慣れた動きでミュウの右腕を縛って止血し、その上で解凍の魔法で凍っている断面を手早く溶かした。

……そして更に「ジュエル」からヴォルトを呼び出して《獣心憑依》の効果で自分のステータスを引き上げつつ、いくつかのアイテムを使って次に発動する魔法の効果を増大させていく。

『……必要なのは私のMPだけの様なので待機しておきますね』

「済まんなヴォルト。じゃあミュウちゃんは手首を持っていてくれ。……さてと、今の俺の最大の回復魔法で治るかどうかは分からないが、やれるだけやってみるとしよう……《魔法威力拡大》並びに《詠唱》終了。《イミテーション・プリユーナク仮想秘奥・神技昇華》【パラディン聖騎士】のレベルを40消費……

《フォースヒール》！」

そうして可能な限りの強化が成された^{上級回復魔法}《フォースヒール》がミュウ

の身体に降り注いだ……すると、千切れ飛んだ筈の右腕がみるみると再生していき、同じく再生し始めた右手首とくっついて元通りの右腕となったのだ。

「おおー、本当に治りましたね!!! 正直いけるとは思ってたんですけど!」

『僕も《憑依融合》^{フュージョンアップ}こんな能力があったなんて初めて知ったよ。ただ融合してステータスをちよつと上げるぐらいだと思ってた!』

「無事に治った様なら何よりだ。……確か一部の自然系エレメンタルの特徴だったか?」

『魔力で肉体を構成するタイプのエレメンタルはMPさえあれば肉体を再構築出来ると聞いた事がありますが』

そう、肉体が非実態のエネルギーで構成されたエレメンタルである「ミメーシス」と融合している状態だと、ミュウの肉体はそのタイプのエレメンタルに近似した特性を持つ様になっており、多少の部位欠損であれば強力な回復魔法で直す事も出来るのだ。

……最も、ここまであつさりと腕一本が回復したのはレントによって過剰に強化された回復魔法の恩恵も大きいが。

「いやー、本当に助かりましたよ兄様。後で今回下がったレベル分のレベリングはお手伝いしますね」

「それはいいんだが……今回ミュウちゃんを襲って来たPKであるシュバルツ何某はどうする? もしまたやって来たら……」

「今度は油断しないのです。……次は私の認識範囲内に入った時点で問答無用にPK^殺します」

『お、おう……』

……そんな事を物凄く凄絶な笑みで言ったミュウに対して『これなら大丈夫かな。……むしろシュバルツ何某ご愁傷様』とレントとヴォオルトは思ったそうな。

ギデオンでの三兄妹・その四十α

□決闘都市ギデオン・とある宿屋 ランドマンサー【黒土術師】レント・ウイステリア

「……《魔石作成》《クリムゾン・スフィア》……《魔石作成》《クリムゾン・スフィア》……《魔石作成》《クリムゾン・スフィア》……《魔石作成》《クリムゾン・スフィア》」

『今日もまた【ジエムー《クリムゾン・スフィア》】作りですか』

「しようがないだろう、上級盗難防止機能付きアイテムボックス買ったら資金が尽きたんだから。まさか一千万リルもするとは……」

現実では8月もそろそろ終わりそうな今日、俺は借りている宿屋で資金稼ぎの為に魔石職人ギルドの『難易度・五【ジエムー《クリムゾン・スフィア》】の作成と納品』のジョブクエストに励んでいた……報酬の良いこのクエストを受けるのも何度目になるだろうか……。

……それもこれも先日買ったポーチ型の盗難防止機能付きアイテムボックスが高いのが悪い。そのくせ入れられるアイテムは10種類までだしな。肝心の【シルヴァ・ブライト】を入れるには問題無かったから良いんだけど。

『それと、この部屋そこそこ広いとはいえ亜竜級モンスターである私にとつては手狭なんです……』

「それに関しては本当に済まん。……だが、外に出して従属キャパシティ内に入れて置かないと《獣心憑依》によるバフが掛からないんだ」
『私のDEXはそこまで高くないんですが』

『《魔石作成》にはMPも必要だから……』

俺のステータスは【ルー】の必殺スキルのデメリットで半減してるから、ジョブスキルや装備でステータスを補正しないと成功率が下がるんだ……まあ、戦闘系獣心憑依バフスキルを生産にも応用出来るのは、【ルー】のスキル《諸芸の達人》のお陰なのだが。

それにギデオンに来てから盗難対策に【盗賊】、更に【魔術師】では覚えられない属性の魔法を習得する為に【付与術師】エンチャンター【呪術師】ソウサラー【幻術師】イリュージョニストをカンストさせている。

更に転職条件を満たす事が出来た【黒土術師】と、【シルヴァ・ブラ

イト』を実際に使ってみたら転職条件をクリア出来た【魔銃士】のジョブにも就いたしな。

『しかし、よく飽きずに同じ作業を続けられますね』

「元々単純作業は嫌いじゃないしな。……後は2回目の《スキルガチャ刃技才集》で引き当てた《職能補助・火石作成》のお陰で成功率も上がってるから、資金稼ぎの効率が良いんだ」

ちなみにこの《職能補助・火石作成》は『魔石職人系のジョブクエストを行う時に火属性【ジエム】作成の成功率が5%上昇する』というパッシブスキルである……最近では火属性【ジエム】を作るジョブクエストばかりで経験値を稼いでいたのが原因かな。

……効果は地味だがパッシブスキルなお陰で無駄に成り難いのが良いな。火属性の【ジエム】は人気だからジョブクエストの実行にも困らないし。

『……ふむ、そろそろ暇つぶしに話すネタも無くなって来ましたね』
「翻訳アイテムを買ってから本当に良く喋る様になったよな、ヴォルト」

『部屋の中では他にやる事が無いので。……じゃあ、色々な問題になった【シルヴァ・ブライト】の使い心地とかはどうでしょう？ 先日試し撃ちしてましたよね』

「後で外に連れてってやるから。……それと【シルヴァ・ブライト】に関してなんだが、まあ普通に強いんだがちよつと使い難いかな……多分、俺のMPが足りないのが主な原因だろうな」

何度かモンスター相手に試し撃ちをした所、あの【シルヴァ・ブライト】だが威力的には同じ量のMPを使った火属性魔法の三分の一くらいだったからな……最も、普通の光属性魔法の場合だと火属性と同じ威力を出すにはその5倍程のMPが必要である事を考えれば物凄い効率なんだが。

加えてそんな光速のレーザーが引き金を引くだけで即座に発射出来て、しかも連写まで出来るってくれば【シルヴァ・ブライト】が非常に強い武器である事には疑いの余地は無いだろう。

……燃費に関しては【魔銃士】のスキルに《魔銃威力強化》《魔力装

填効率化』などのスキルがあるみたいだし、今後に期待かな。

「……しかし、ヴォルトは本当に喋るのが好きなんだな」

『そう見えますかね？ ……まあ、生まれつき他の同世代の同族よりも頭が良かったので、こうして会話する機会とかも無かったですからね。確かに新鮮な気分ではありませんか』

「ふーん……そう言えば、なんでヴォルトがタイムモンスターになったのかとかは聞いてなかったな」

『大した理由でもないですよ。……私が居た群れが^{ユニーク・ボス・モンスター}へU B Mに襲われて壊滅、その中で運良く負傷しながらも生き残った私が偶々出会ったテイマーに捕まって売られたってだけの良くある話ですよ』

何でも、ヴォルトが居た「ライトニングホース」系統の群れはボスである【雷電純竜馬】に率いられて、そこらの肉食モンスターでは手出し出来ない程の規模を持っており、ヴォルト自身も生まれつき賢かった事や雷の扱いに長けていた事から群れの未来の主力候補としてボスには良くして貰っていたとか。

『……今思えば私は周りより賢かったせいかな少し調子に乗っていたかもしれないですね。ボスからも『この世界には上には上がいる』『強者に会ったら生き残る事を最優先にしろ』と言われていましたが話半分に聞いていました』

「あー、分かる分かる。……若い時に周りより自分が優れていると思いついてい込むとそうなるよな。実際は『周り』なんて世界と比べればごく狭いモノでしか無いのに」

『本当にそうですよね。……まあ、ボスの事は自分より上だと思つていたので彼の言う事は良く聞いて《強者感知》《危険察知》などの危機回避スキルは磨きましたし、そのお陰であるのへUBM——【蠱毒狩蟲 ラーゼクター】から逃げ延びる事が出来たのですが』

ヴォルト曰く、その「ラーゼクター」との戦い……とも呼べない一方的な「狩り」の始まりは、まずいきなり『地面から』噴出した猛毒の煙——【猛毒】【魔毒】【魂毒】【衰弱】【酩酊】【麻痺】の六重状態異常を有するガスから始まったらしい。

……ヴォルト自身は周囲の警戒の為に群れの外側にいたからかこ

の内【猛毒】【魔毒】【魂毒】しか掛からなかったらしいが、群れがいきなりの猛毒のガスで混乱した次の瞬間にはボスである【雷電純竜馬】は二メートル程の人型の魔蟲に殺されていたのだとか。

『ガスで姿は良く見えませんが、その頭の上にはへUBMの証である【蠱毒狩蟲 ラーゼクター】の文字があり……それが見えて、更に自分より強いボスが瞬殺されたのを見た私は全速力でその場から逃げ出しました』

「……あー、軽い気持ちで聞いてすまなかつたな」

『いえいえ。……そもそも野生のモンスターの間でなら殺し殺されは良くある事ですし、群れやボスを殺された事や群れの仲間を置いて逃げた事も特に気にしてませんから。そんな事を気にしてたらこの世界では生きていけません』

ヴォルトの雰囲気や《真偽判定》スキルでも嘘は言っていないみたいだが、死者を悼む様な気配は感じたので多分割り切っているんだろう……それで、その後【ラーゼクター】からは逃げ切れたらしいが途中で毒が回って動けなくなり、そこに偶々通りがかつたテイマーに珍しいモンスターだからと捕まって売られて今に至ると言う事らしい。

『その後にマスター達に買われたのは幸運だったと思いますよ。ティムマスターでしかない私にも気を使ってくれますし、亜竜級に進化するまで面倒を見てくれましたし。……何よりへUBMと戦って倒せるだけの強者ですしね』

「不満が無いならそれでいいんだが……俺達は今後もへUBMと戦う機会は結構あると思うぞ」

『それは普通に野生で生きている間も変わりませんからね。それならいつそへUBMを倒せるマスターに仕えた方が勝算も生存率も上がるでしょう』

成る程ね、理由はどうあれティムマスターとしてある事には不満が無い様で何よりだな……おっと、もうジョブクエスト分の【ジエム】はこれで終わりか。

「……よし、これでジョブクエスト分の【ジエム】《クリムゾン・スフィア》は作り終わったな」

『お疲れ様でしたマスター。……それでこの後はどうします?』

「さつきも言った通り、この『ジエム』をギルドに納品した後はフィールドにでも行こうか。最近はだいぶ騎乗戦闘も様になって来たしな」
『分かりました。ではそのように「頼もう! お兄ちゃん!!!」……おや』

ジョブクエストを終えてどこかに行こうと話していた俺とヴォルトを遮るように勢いよく部屋の扉を開けて現れたのは、やはり言うか妹のミカだった……よく見るとミュウちゃんとミメも連れているみたいだな。

……せめてノックぐらいはしろと思うんだが、ミカがいきなり突拍子の無い行動に出る時は大体何かがある時だからな。話は聞いておかないと。

「……それで一体何のようだ? 可能な限り結論だけでなく過程を含めて話してくれ」

「うん分かった。……お兄ちゃん、冒険者ギルドの方で『クルエラ山岳地帯の山賊討伐のクエスト』に行かない?」

「……姉様、それ過程を結構省いていますよ」

ミュウちゃんのツツコミ通り、ミカは『あらゆる過程を無視して危険回避の最適解を提示する』事が出来てしまう『直感』を持つている所為でか、それが関わる際に色々過程を無視して普通の人間には理解出来ない行動を取りがちな癖があるからな。

付き合いの長い俺やミュウちゃんならある程度察する事も出来るし、そもそも『直感』の話は俺達ぐらいにしかないから私生活では余り問題にはなっていないけど。

……しかし、山賊討伐ねえ。冒険者ギルドや騎士団が不定期に行なっているとアイラさんやリレイさんから聞いた事があるが、俺は意図的にその手の話……対ティアン相手の殺し合いに成り得るクエストは避けてたんだがな。

「……別に俺は必要であればティアンを殺傷する事に躊躇はしないし、それなりに現実リアルでの経験から対人戦には慣れているが……」

「兄様ってリアルでも大概ジャンル違いな経験してるみたいですから

ね。師匠が言っていましたよ」

「私も詳しくは知らないけど現代ファンタジーものの主人公系な気がするよー」

「言つとくが、俺自身は普通の人間だからな。……ただ、ちよつと中高で『その手のジャンル』の人間が偶々クラスメイトにいて、何故か俺まで妙な事件に巻き込まれたぐらいで」

あの頃は俺も若かったから、つい『ジャンル違いの連中』が起こす問題に首を突っ込んでしまつてな……まあそのお陰で『あの事故とそれに関する諸々』以来、少しだけ燻つていた。自分は特別である”と
言う認識は消し飛んだが。

……なので正直言つて今は反省してるし、出来る限りこのへinite Dendrogramは”ただのゲーム”として楽しみたいと思つてるので、その『秘密』とかは出来るだけ考えない様になっているし。どうせ異世界とか別惑星とか神の箱庭とかだろ（適当）
「……つと、話がズレたな。そもそも”この世界”には一切関係の無い話だからここまでとして……話を戻すが『山賊討伐』つて事はティアンを殺傷する事が前提な訳だが」

「別に私達はその辺りに躊躇はしませんよ。命を奪うのならこれまでモンスター相手に散々やつてますし」

「私も必要なら躊躇いはしないよ？」
「……だから、心配なんだがな……」

ミカの場合は自分の”直感”が示したのなら他人を踏み躪る事すら躊躇無く出来て”しまう”し、ミュウちゃんは生まれつきの戦いの才能の所為で戦闘行動に対する躊躇いなどの悪影響などを一切”抱けない”んだよなあ。

このデンドロをやつてるのは、現実では持て余し気味なこの二人の”才能”に折り合いを付けられる事を期待しての事でもあるが、流石にこう言う展開は兄としては心配になるんだよな。

……といった感じの事を俺が考えていると、それを見た二人は苦笑しながらも明確な”覚悟”を持った瞳でこちらを見ながら話を続けた。

「兄様の心配も最もだと思うのですが、私達は自分の『才能』に負けて人道を外れる様な事は絶対にしないのです。……それにクエストでは『生け捕りの場合には追加報酬』ともありましたし、基本的には制圧をメインで行くのです」

「それに、今このクエストに参加しないとかなり後の方で遭遇するヤバい危険に対して詰む気が物凄くするんだよね。……ミユちゃんと言う通り基本は制圧がメインにするよ。……私達は自分の『才能』には負けたくない、自分だけの可能性が欲しいの」

「……分かった。……まあ、別に山賊退治自体は『悪い事』では無いしな」

この世界的の一般常識的にだと『人殺し』自体は悪とも言えないからな……勿論、無為な殺戮は忌避しなければならぬモノであるべきだし、だからと言って正当防衛や守る為に或いは救う為に殺したりとかを全否定する気も無いが。

……この二人が道を謝らない様にするのも俺の役目だと思って頑張るか。要は『ゲーム』と『現実』の区別をつければ良いだけの話だし。

「そう言うわけだヴォルト、これからやるのは山賊退治になる」

『分かりました。……マスター達の話はさっぱり理解出来ませんが、私は貴方のタイムモンスターですからからお供しますよ』

「……ありがとうヴォルト。《送還》」

俺達の側から見れば意味不明な会話にも空気を読んでか特に何も言わずに付いてきてくれるヴォルトに感謝の意を示しつつ、俺はヴォルトを【ジユエル】に帰還させてクエストを受ける為に妹達を連れてギデオンの冒険者ギルドへと向かって行ったのだった。



■ヘクルエラ山岳地帯・廃砦

アルター王国の東部に存在する古戦場跡に建つ廃砦、そこは現在とある山賊団が根城として使っていた……そして、その内の一室では

グレイト・ハンディット
【大盗賊】のジョブに就いた長身の男が、今部屋に入ってきた
グレイト・ファイター
【大戦士】の大柄な男に話し掛けていた。

「……おい、この前に襲った馬車で捕まえてきた奴隷達の様子はどうかだ？」

「へいアニキ、全員ちゃんと飯をやって大人しくさせてやす」

「それでいい。……そっちの方が大人しくなるし、裏の奴隷商でもなるべく健康な方が高く売れるからな」

彼等は主に「ヘクルエラ山岳地帯」を通る商隊を襲って物品を奪ったり、その際や近くの村落から人を攫って繋がりのある違法業者に売り渡すなどの山賊活動を行っていた。

……何故かこの山賊団は彼等の様に上級職に付いたメンバーを擁していたり、王国やカルディナにある裏の業者とのコネクションを持っていてなど、基本食い詰め者ばかりの山賊団と違ってそれなりの勢力を持った者達だった。

「しかし、奴隷が【ジュエル】に入れられれば良いんですがね」

「仕方ないだろう。【奴隷師】に就いてるメンバーは今カルディナの本部”に行っているんだからな”

「そうなんすけどねえ。……じゃあアイツが帰ってきたらこの『山賊団』も潮時ですかね？」

「そうなるだろうな。……いつも通り金になる奴隷とアイテムだけ持って、適当に集めた食い詰め者を囷にトンスラだ。どうせそろそろ冒険者ギルド辺りが山賊討伐のクエストを出すだろうからな」

そう、実は彼等はカルディナを中心として活動する”とある犯罪組織”の一員であり、需要のある『資材』を本部に売り捌いて資金稼ぎを行う為に適当な食い詰め者達を集めて山賊団を組織、ある程度活動して潮時になったところで用済みの食い詰め者を切り捨てて逃走を繰り返しているのだ。

……そんな二人だったが【大戦士】の方が部屋の中に置いてある金属製の檻の中身を見て【大盗賊】の方に話し掛けた。

「それでアニキ、あの『エレメンタルの嬢ちゃん』も持っていくんですかい？」

「当然だ。……むしろ他は置いていってもアレだけは持つていくぞ。人型のエレメンタルの希少種など然るべき所に流せば大金になるからな」

「……………」

そう言った二人が見つめる檻の中には銀髪の5歳ぐらいの幼女――の姿をしたエレメンタル系モンスターが眠っていた……見た目は殆ど人間にしか見えなかったが、モンスターである証拠にその頭上には「リトル・ネイチャーエレメンタル」の文字が表示されていた。

……と、ちょうどその時に眠っていたエレメンタルの幼女は目を開けて身体を起こした。

「ふあゝ、よく寝たのじゃゝ。……お腹空いたから何かお菓子とかないかのう?」

「ハアゝ……貴様、ここに囚われてから食っちゃ寝しかしてないよな」

「あ、クツキーならあるぜ」

「ありがとうなのじゃゝ……モグモグ……ウマゝ! やっぱり人間の食べ物は美味しいのう」

囚われているにも関わらずそんな呑気なエレメンタル幼女に「大盗賊」はため息を吐いたが、何故か「大戦士」が持つていたクツキーをいい笑顔で食べる光景を見て呆れた様に黙り込んでしまった。

……彼女は少し前に彼等が「ヘルエラ山岳地帯」で行き倒れているところを捕まえたモンスターで、聞いた事の無い種族だから高値で売れるだろうと捕獲したものである。

(まあ、クツキー程度で大人しく捕まっているなら別に良いか。「従魔師」を兼任してるアイツが出ている以上はタイムして「ジュエル」に収める事も出来んし。……それに《看破》したところレベルが1でステータスがMP以外はリトルゴブリン以下の本当にティアンの子供レベルだからな。下手に暴力を振るったら殺しかねんし、傷物にしたら売値が落ちる)

尚、彼も《看破》を駆使して保有するスキルが「魔術師」レベル1で覚えられる《テインダー^種》《ライト^灯》レベルの戦闘で使えない魔法ばかりだと確認しており、その行動や発言にも《真偽判定》《危険察知》

《殺気感知》に反応が無いので危険性は低いと考えて放置しているのだが。

また、それ以外には《高速思考》《分割思考》《魔石還元》《魔力感知》などエレメンタルの中でも一部の者しか覚えられないレアなスキルがあつたので、おそらくごく稀に生まれる突然変異のレアモンスターだと判断していた。

(……コイツは上手くいけばここに集めた奴隷とアイテムを合わせたよりも高く売れるだろうからな。【従魔師】が帰って来るまでは扱っても多少は丁寧にするしかないか)

「それで？ ワシは売られると聞いたが誰が買うんじゃ？」

「俺らも闇のタイムモンスター業者に売り渡すだけだからなあ。そこから先は分からん」

「そうかー」

……だから、こんな呑気な会話も必要経費だと【大盗賊】の男は自分に言い聞かせていた……と、そこでエレメンタル幼女が何かに気付いた様に顔を上げた。

「ん？ どうしたんだ？」

「……御主らには行き倒れていたワシを拾って貰った恩があるからう。……御主ら、なるべく早くこのヘクルエラ山岳地帯を離れた方が良いぞ。この地が少し騒めき始めておるし、おそらくそう遠くないうちに荒れるじやろう」

「はあ？ ……外の天気は晴れ渡ってるぞ」

「……まあ、今のワシ」では確たる事は分からんのじゃが、ただそんな気がするぐらいかのう」

そんな幼女の言葉に二人は顔を見合わせつつも戻って来るメンバーの事を考えればまだ逃げる訳にも行かず、その幼女も彼等の事情を聞けば『ま、確証は無いしな』とだけ言って再びクツキーを食べ始めたのでこの話はここまでとなった。

……その後【大盗賊】の男は冒険者ギルドの討伐隊を警戒して見回り(兼囮)を増やしておくかと指示を出しに行き、もう一人の【大戦士】はいざと言う時の逃走用隠し通路を確認しに行ったので部屋の中

は檻の中の幼女一人となった。

「……さてさて、こんな姿になってしまったワシに出来る事はほぼ無いなあ。どうなる事やら」

……その部屋にはそんな誰に聞かせる訳でも無い幼女の声だけが響いたのだった……。

何故彼女達は山賊討伐に行く事になったのか

□〈決闘都市ギデオン〉・冒険者ギルド 〔重戦士〕 〔ヒーファイター〕 ミカ・ウイステリア

そんな訳で私とミュウちゃんは説得に成功したお兄ちゃんを連れて、待たせていた彼等と合流する為に冒険者ギルドまでやって来ていた。

「はい、お待ちせー。シュウさんに月夜さん。お兄ちゃんを連れて来たよ」

『こつちも例の山賊に関する資料を集め終わったから丁度いいワン。』

……女狐が呼んだ方はまだ来てないしな、資料集めも遅いし」

「クマやんが早すぎるんやー。ウチこーいう資料集めとかレポートとかは苦手なんやもん。何時もは影やんが手伝ってくれるのにー」

「……月影さんを酷使し過ぎ……」

そう、冒険者ギルドで待っていたのは私達のフレンドで犬の着ぐるみを着た“シュウ・スターリング”さんと、クラン〈月世の会〉のオーナーで同じフレンドの“扶桑月夜”さんとそのクランメンバーの“日向葵”ちゃんでした。

……実は今回の山賊討伐のクエストは彼等と一緒に受ける事になってたんだよね。

「……おいミカ。他にメンバーがいるとは聞いていないぞ」

「あれ？ 言っただけじゃなかったっけ？」

「何故山賊討伐のクエストを受けるのかは言っただけじゃありませんでしたね、姉様」

「クエストを受ける事だけは言っただけだね」

……と、そんな彼等を見てお兄ちゃんから小声でツツコミがありミュウちゃんやミメちゃんもそう言ったので、とりあえず何故私達が山賊討伐のクエストを受ける事になった理由を掻い摘んで説明する事にした。

……そう、あれは私達がこのギデオンにある教会で『着ぐるみチャリティーパーティー』を行っていた時の事……。



『はい、お菓子は沢山あるドラ〜』

『犬じるしの手作りポップコーンもあるワン〜』

「「わ〜い!!!」」

今からほんの少し前、私とシュウさんは着ぐるみ（両方とも特典武器）を着たままパーティーの為に集まった子供達にお菓子を配っていた……このパーティーはギデオンの領主と教会が協力して定期的に開いているもので、教会が経営している孤児院の子供達への娯楽や他の子供達との友好を深める意味で小規模ながら行なっているのだとか。

そしてパーティーにはボランティアで教会の有志の人員やギデオンで有名な決闘者の参加なども募集されており、私は『最近話題の着ぐるみへマスター〜決闘者』として声を掛けられたので一緒に居たミウちゃんと共に参加する事にしたのだ。

……ちなみにシュウさんは『子供に美味しいお菓子を配る謎の着ぐるみ』として孤児院の院長さんと知り合いになり、その伝手で今日のパーティーの事を聞いて参加する事にしたのだそうだ。

「ドラゴンさ〜ん！ クツキーちようだい!!!」

「俺も俺も!!!」

『はいはいドラ〜』

「ワンちゃんポップコーンおかわり!!!」

「私も〜!」

『は〜い、慌てないでワン？ まだまだポップコーンは沢山あるワン』
しつつかし、子供達は本当に元気だねえ。さっきから私とシュウさんは働きっぱなしだよ……着ぐるみがそんなに珍しいのか私達二人の元にばかり子供達が集中しているし。ジョブで得たステータスのお陰で体力は問題ないけどさ。

後、あのポップコーンはシュウさんのリアルスキルによる自作らしい。試しに食べてみたけどめっちゃ美味くて子供達にも好評である

……私？ 小学校の家庭科の授業で『まあ……普通？』って言われるレベルの腕前ですが何か？ お兄ちゃんなら……。

「大変そうですね姉様。……はい、麦茶っぽい飲み物です」

『ありがとうドラ、ミュウちゃん』

「大変そうやねクマヤン。……はい、麦茶っぽい醤油や」

『おーありがと……って、いるか女狐エツ!!! 似てんの色だけじゃねーかワン!!!』

「チツ、引つかからんかったかー」

そんな私達に近づいて来たのは、同じくパーティーにボランティアで参加していたミュウちゃんと月夜さんだった……彼女はギデオンの教会から今回のパーティーの事を聞き、ボランティアとして何人かのクランメンバーと共に参加したらしい。

……後、シユウさんと月夜さん前に何かあつたらしく顔見知り（友達かと聞いたたら双方から全力で否定された）みたい。まあボケに対してノリツツコミするぐらいには仲が良いみたいだけどね。

『まさか女狐とクエストでブックキングするとワン』

「それはこっちのセリフやー。ちよつと、フレンドの“ミカヤンミュウヤンが活躍しとるっちゆうギデオンに観光に来て、この後パーティーに参加するって聞き付けてメンバー連れて参加したんに……まさかクマヤンがいるとはなー」

『……ああ、数少ないクランメン^信メンバー以外のフレンドだからか』

「おりますー！ ウチにだつてメンバー以外にもフレンドおりますー！ ……それに基本ボツチプレイヤーのクマヤンに言われたくないわ」

『メンバー以外のフレンドの数には言及しなかったな。後ボツチじゃないワン、ソロプレイヤーと呼べワン。……最近は『ちよつと格好が変わった普通のプレイヤー』扱いされて来たから、野良パーティーとかも組んでるワン！』

「結局ネタバレプレイヤー扱いなのは変わらんやーん！」

「……はいはい二人ともそこまでそこまで。子供達が見てるからねー」

ちよつと二人の掛け合いがヒートアップして来たので私が仲裁に入る事に……まあ、二人とも子供達に変なところは見せない程度の良識はあるので直ぐに辞めてくれたし、子供達もこの二人の掛け合いは漫才みたいに面白がつて見てたから問題にはならなかったけどね。

……そんなこんなで私達は子供達にお菓子を配ったり、葵ちゃんなどの参加していた〈月世の会〉の人と話したり、シユウさん達の料理の手伝いをしたり（余り戦力にはならなかった）とパーティーを楽しんでいたのだが……。

『……んんん？』

「どうしましたか姉様？」

そんな最中、久しぶりに私の「直感」……しかも、遠い危機に対して事前の準備を進める「遠い勘」が、このデンドロに来てからこれまでにない規模で私に対して『危険に対する準備をさっさとしろ』と訴えて来たのだ。

……しかし何で平和なパーティーの日に？ と私は疑問に思ったが無視するには後が怖すぎるので、とりあえずミュウちゃんに簡単に事情を説明してから「直感」の示した方向——教会の裏口の方に足を向けると、そこには……。

「……そんな……それは本当なのですか!?!？」

「……うっ……ぐす……」

「済まない、サリーちゃん……」

そこでは、このパーティーの主催者の一人であり私に参加の依頼を出したシスター服を着た孤児院の院長さんが、全身に包帯を巻いている冒険者っぽい男性に焦った様子で何かを訪ねており、その足元では一人の少女が蹲って泣いているという、明らかに何かがあった事が分かる光景が広がっていた。

……状況はよく分からないけど「直感」が無くてもこの光景を見過ぎすのは後味が悪いし、ちよつと何があったのか聞いてみるか……と、考えて行動に移すよりも先に蹲っていた少女が私がいる事に気が付いて、必死な表情でこっちへと走って私の着ぐるみにしがみ付いてこう言ったのだ。

『おっと』

『お願いドラゴンさん！ ケリーお姉ちゃんを助けて!!』

「サリー!?？」

泣き顔で必死に私に向けてそう言う少女——サリーちゃんに気が付いた院長さんがこつちにやって来たので、私は彼女に詳しい事情を聞く事にした……最初は彼女も私に事情を話す事に躊躇した様だが、サリーちゃんの方が泣きながら事情を話そうとしたので根負けして詳しい事情を話してくれる事になったのだった。

『それで院長さん、この子の言う“ケリーお姉ちゃん”に一体何があつたんですか?』

「はい、ケリーはこの子……サリーの姉で少し前に孤児院を出て行商人として働き始めたんです。……それで少し前からカルデイナまで商品の売り買いの為に رفتっていたのですが……」

「ここから先は俺が。……俺はその商隊に護衛として雇われていた冒険者なんだが、王国との国境沿いにある街からの帰り道にあるヘクルエラ山岳地帯で山賊に襲われて……俺以外の護衛は全滅、乗っかってケリーさんを含む何人かの人間は山賊に捕らえられてしまったんだ。……俺は辛うじて逃げる事しか出来なくて……」

そう言った護衛の人——彼も同じ孤児院の出身らしく院長さんが宥めていた——はとても悔しそうな顔をしていた……まあ、その身体に残る傷跡からかなりの激戦を潜り抜けた事は伺えるし、私からは何も言わないけど。

……それに彼等の事情がどうあれこの依頼クエストを受けるのは決定事項なので、私は未だにしがみ付いたままのサリーちゃんの頭に手を置きつつ彼等に話し掛けた。

『分かったドラ、ケリーお姉ちゃんは私達が助けに行くドラよ』

「ほんとう!!!」

「……本当に良いんですか? ヘクルエラ山岳地帯は山賊が多い危険な場所ですし、こちらにはへマスター様を雇う報酬を出す余裕は……」

『別に報酬は良いですよ、私がこのクエストを受けたくて了承したん

ですし。……強いて言うなら司祭系クエストや上級職転職条件の口利きとかしてくれるだけでも良いですし』

『そんな事で……?』

院長さんは驚いているが、ぶつちやけへマスター〜にとっては下手な報酬よりこの手のティアンとのコネができる方が有難いしね……この前ミュウちゃんが大怪我した事もあって『司祭系上級職取ろうかな。でも他にレベル上げするジョブが多過ぎてジョブクエストを受ける時間が……』とか言ってたし。

『……分かりました、それではどうかお願いします』

『お願いします!!! 可能な限り例の山賊団の情報はお渡ししますので……!』

『お願いしますドラゴンさん!』

『分かったドラ』

【クエスト【救出ーケリー・メイティス含む商隊員 難易度・九】が発生しました】

【クエスト詳細はクエスト画面をご確認ください】

そんな訳で私は山賊に囚われたケリーさん達商隊員を救出しに行く事になったのだった……しかし、予想通りではあるけど難易度・九とかめっちゃ高いねえ。

……正直言って私とお兄ちゃん達だけだと失敗する // 気しかしない // し、何処かに一緒にクエストを手伝ってくれる凄腕のへマスター〜が……。

『……おーい、ミカちゃんどこワン〜。子供達が『ドラゴンさんが居ない』って言ってるワン〜』

「クマヤンよりも人気あるしな〜」

『人気は五分五分ぐらいだワン』

……うん、丁度都合のいい面子がいたね。今回は彼等の助けが必要かな。



「……と、そういう訳で私はシユウさん月夜さん達と一緒に、ヘクルエラ山岳地帯の山賊達からケリーさん達商隊員を救出する事になったんだよ」

「まあ事情は大体分かった。……ただ、そういう事情は事前にちゃんと説明してほしいぞ。討伐じゃなくて救出がメインならそこまですうこうは言わなかったし」

「すみません兄様」

「……まあ、今回はただでさえヤバめの案件だったから色々焦ってたしねえ。ちよつと色々先走り気味だったかな。」

「シユウさん月夜さん葵ちゃんも、今回は大した報酬も無い高難度クエストを手伝ってくれてありがとうね」

「ええよええよく。清廉潔白で善良なへ月世の会のオーナーとしてはティアン救出を手伝うのも吝かではないしな」

「……清廉……潔白？ ……善良？ ……正直ツツコミどころしか無いけど、今回は救出依頼自体は受けるからとやかかくは言わない。……後、ゲーマーとしては高難度クエはむしろ褒美」

『まあ、あの孤児院の子達は着ぐるみを着た俺と初めて遊んでくれた子達だからな。お陰で俺が善良な着ぐるみだと広がった事もあるから、彼等の為に一肌脱ぐのは吝かではないワン。……それにこのクエストの難易度は気になるしな』

そうシリアスな感じ（着ぐるみだけ）で言ったシユウさんは、冒険者ギルドやあの護衛の人から聞き出したケリーさん達を攫ったヘクルエラ山岳地帯の山賊団について話し始めた。

『ケリーさん達を攫ったのはスミス山賊団と呼ばれている、ヘクルエラ山岳地帯の古戦場にある砦跡を根城にしている連中ワン。……その構成員は頭目である【大盗賊】のジョン・スミス、大剣を持つグレイト・フアイター【大戦士】のダリー・スミス、亜竜級魔獣を使役しているらしい【高位従魔師】のライル・スミスという三人のカンストレベルの戦闘能力を持っているティアンが率いている、基本食い詰者ばかりの山賊団としては珍しく討伐依頼を受けた冒険者を返り討ちに出来るぐらいの実力を持っているらしいワン』

そうやって話しながら、シユウさんは冒険者ギルドが調べたヘスミス山賊団の拠点位置や人員などの各種資料を机の上に並べていった。

『……が、それ以外の人員は数こそ多いが精々が下級職一職目の食い詰者ばかり……正直言つて人質を救出する事を込みにしても難易度：九は少しおかしいワン。……ちなみに以前俺とフィガ公が受けた逸話級と伝説級へU B M討伐クエストの難易度はそれぞれ『八』だったワン』

「ふーん、つまり今のヘクルエラ山岳地帯には山賊団以外に何かがあるっちゅうんかねえ？」

「そもそもクエストの難易度ってどういう基準で決めてるのか」

『確か管理AIのクエスト担当が現地情報を参考に決めてるらしいワン。多分正確性ならギルドの難易度より上だワン』

成る程、つまりへU B M討伐よりも難易度が高くなる要因が今のへクルエラ山岳地帯にはある可能性が高いという訳だ……幸い、ここにいる面子で油断や慢心をする人は居なかつたので、みんな真剣に今回のクエストについて考えてくれた。

「……でも、時間が経ち過ぎれば救出自体が失敗する可能性が上がるよね」

『だから出来るだけ早く救出に行く必要があるワン。……でも、まだ女狐が呼びに行かせた人が戻って来てないワン』

「大丈夫大丈夫、影やんの事やからきっちり間に合わせて「遅くなりました月夜様」ほら来た」

そんな事を話していると実に良いタイミングで月影さんが四人のへマスター——20代くらいの青年と30代くらいの男性、そして十代後半くらいの二人の女性を連れて戻って来た。

「ギデオンに来ていたへ月世の会」のメンバーで実力があり、今回のクエストの説明を聞いて同行しても良いと言う者達を集めて来ました。……ただ、こちらに来ていた数が少なかつた事とその多くが非戦闘要員だった事もあって四人しか集められませんでした」

「今回ウチらがギデオンに来たのは観光メインやからしゃーない。殆

どの戦闘系メンバーは今王都で行動しとるしな。……それに今回は救出がメインやし少数精鋭の方がええやろ。とりあえず自己紹介しとき」

「〈月世の会〉メンバーの【大魔戦士】の立花翔たちばなかけるです。事情は月影さんから聞きました。微力ながらお手伝いしますよ」

「同じく〈月世の会〉の【薬効戦士】鈴木健太すずきけんたと申します。必ず助け出しましょうー」

「えーと、佐藤結奈さとうゆな、疾風騎兵ゲイル・ライダー」です。宜しくお願いします」

「結奈の双子の妹で佐藤利奈さとうりなです！ 宜しくねー！ ……あ、ジヨブは【魔砲兵隊】マギ・アーティレリーね」

月夜さん曰く、四人とも合計レベルは2000〜3000ぐらいで十分に戦力にはなるとの事……とりあえず私達やシユウさんも改めて自分のポジションとかを含めて自己紹介をしつつ、ケリーさんの安全的にも時間もあまり無いので早速ヘクルエラ山岳地帯にある砦跡へと向かう事になった。

「それじゃあヘクルエラ山岳地帯までは結奈やん利奈やんのへエンブリオに乗っていこか。この二人のへエンブリオなら全員を乗せた状態でもクマやんの戦車より早く目的地につけるえ。クマやんの戦車よりも早くー！」

『なんで二回行ったワン。……そもそもバルドルは戦闘能力の方にリソース割り振ってるし……』

……ちよつとチームワークが不安な気もして来たけど、個々の実力は確かだし大丈夫でしょう！ ……まあ、私の「直感」だと『これだけの面子』でもうまく行くかはギリギリな感じなんだけどね……。

いざ！　へクルエラ山岳地帯へ！

□へウエスダ平原〈【蹴拳士^{キックボクサー}】ミュウ・ウイステリア

そんな訳で山賊に誘拐された人達を助ける為に集まった私達三兄妹とシユウさん、そして月夜さん達へ月世の会メンバー達はその内の【疾風騎兵^{ゲイルライダー}】佐藤結奈さんと【魔砲兵隊^{マジックアーティレリー}】佐藤利奈さんのへエンブリオに乗って、一路ギデオンを出て東にあるへクルエラ山岳地帯をを目指して進んでいました。

『このまま進めば後5分ぐらいでへクルエラ山岳地帯へ着きます』
「分かったでー、流石は結奈さんの【スレイプニル】と利奈さんの【チャリオッツ】やね。クマやんの【バルドル】よりはやくいー！」

『……事実だから別に言い返さないが、そもそもお前が自慢する事じゃねえだろ女狐。……しかし、地面を滑走しているから亜音速以上で動いても揺れがほぼ無いのは素直に羨ましいワン。無限軌道は揺れが結構酷いからなあ……』

「結奈の【八速騎動　スレイプニル】には搭乗者への揺れとかを軽減するスキルもあるからねー。〃足を使って〃移動する時もあんまり揺れないのだ〜」

今は通信によって話している結奈さんのへエンブリオ〈【八速騎動　スレイプニル】は一言で言うと多脚戦車型のへエンブリオで、外見は短めの砲塔が付いた戦車にキャタピラの代わりに八本の足が付いていると言った感じです。

そして普通にその多脚で移動する他に《滑走機動^{スライドムーブ}》というMPを消費して脚部に特殊な斥力力場を形成し、それによって地面を滑りながら〃亜音速以上の速度で〃移動出来るのだとか。

……これに【疾風騎兵】の騎乗物の速度強化スキルや長距離移動時に消費MP・SP軽減するスキルを組み合わせる事で、ギデオンからへクルエラ山岳地帯までの道のりを短時間で移動する事が可能になるのだとか。

「……それで今乗っているのは利奈さんのチャリオッツ系列の戦車^{チャリオッツ}型へエンブリオである【チャリオッツ】でしたか」

「そうやって並べられるとチャリオッツがゲシユタルト崩壊しそうだねー。私のヘエンブリオ、正式名称は【棄動戦車　チャリオッツ】なんだけど名前が凄く紛らわしいのが欠点なんだよね。最近進化した時にはTYPEアドバンスになったし〜」

そう言う利奈さんのヘエンブリオ、【棄動戦車　チャリオッツ】は【スレイプニル】に接続されながら引かれているメカニカルな大型カーゴ……名称の由来からして文字通りの戦^{チャリオッツ}車でした。

この【チャリオッツ】は《コネクション》というスキルで【スレイプニル】と連結していて、その間は繋がっている相手と同じ様に移動・加速・旋回・停止する上に騎乗・移動系スキルを共有出来るので、この【チャリオッツ】自体も《滑走機動》で移動出来て中にいる私達にも揺れの軽減などの恩恵を得られるのだとか。

「まあ、進化して覚えた《兵団輸送》で内部空間が拡張されたお陰で旅行の移動要員にされたけどね〜」

「二人には本当に感謝しとるよ。お陰でウチのクランの移動範囲が大きく広がったしな」

そして今私達が乗っているのは、利奈さんが座っている【チャリオッツ】の後部に備え付けられた小学校の教室ぐらいの広さの部屋になります……明らかに外見と内部空間の体積が違いますが、どうやらスキルによつて空間が拡張されている様ですね。

……まあ、外から見た時にはカーゴの頭上に大口径の砲台や左右に付いたパラポラアンテナの様な副砲、後はミサイル発射管の様なパーツとかもあったので本来は連結した乗機の戦闘能力を増大させるのが役目のヘエンブリオなのでしようが、今回のクエストではこの輸送能力がメインになりそうですね。

「まあ、救出した人間の輸送が出来るのは大きいな。この移動力なら最悪の場合には誘拐されたティアンを乗せて全速力で街に引き返せばいいし」

「せやねー。……まだ少し時間はあるし人質になつとるティアン救出時の各々の役割ぐらいは話し合つといた方がええかな？　……ちなみにウチとカグヤは回復と敵へのデバフが使えるえ」

「此の《月面除算結界》ならレベル50未満のティアンならほぼ戦力外に出来るわね」

そして兄様と月夜さんがそう言ったのを皮切りに今回のクエストで各々がどんな役割をこなせるかを話し合っておく事になりました。

「俺は基本的に魔法型だな。上級職で就いているのは【紅蓮術師】とパイロマンサー【黒土術師】だから火属性と土属性は得意かな。……ああでも、一応サブに【盗賊】と【幻術師】も入れてるから人質救出の為の潜入も出来るか」

「私は完全に物理で殴る系ビルドだからなあ、人質救出には役に立たなさそう。……着ぐるみを来て無駄に目立つ囮役でもやるかな」

「私も戦闘特化ですが特典武器のスキルで人間の位置を探知出来ますから、上手くいけば人質が何処にいるか分かるかもしれません」

ちなみに私達三兄妹のパーティーでの役割分担は私が近接戦、姉様が近接戦、兄様が近接戦と遠距離魔法と魔法支援と索敵と移動手段と生産です……兄様の万能性が高すぎて役割分担になっていない件。

『俺も戦い方がどうしても目立つから囮役の方がいいワン』

「STR極振り着ぐるみ戦車とかいうキワモノビルドやからね。無駄に目立つから囮役にはびつたりやなー」

『うるせーワン。プレイスタイルから自然とそうなっただけだワン。……後はこの着ぐるみのスキルで偵察用の狼が作れるぐらいか』

私達に続いてシユウさんも月夜さんが入れる茶々に言い返しながら自分が出来るような役割に付いて話してくれました。

……ちなみにクランオーナーが他の《マスター》と言い合いなつていても良いのかと月影さんに聞いたら、『アレでも月夜様はシユウ氏との掛け合いを楽しんでいるので温かい目で見てください。他のメンバーにも言っておりまして』と言われたので、これが原因でパーティーの雰囲気が悪くなる事は（シユウさんが怒らない限り）無さそうです。

「私はジョブと《エンブリオ》両面で隠密行動が出来るので誘拐されたティアン救出にはお役に立てるでしょう」

「そういう意味だと俺は誘拐されたティアン救出には役に立ちそうに

ないですかね。へエンブリオも隠密行動どころか集団戦に向いているタイプじゃないですし……出来る事は普通の戦闘要員ですね」

「私は直接戦闘とへエンブリオのお陰で薬の扱いに長けているので治療や支援も出来ます」

「それで私と結奈は助け出したティアンを街まで運ぶ役だね」

『そうだね利奈。……【チャリオッツ】の中に入れてさえくれれば、カインストティアンや純竜級モンスターからでも逃げ切って街まで送り出しますよ』

続いて月影さん、翔さん、健太さん、結奈さん、利奈さん達へ月世の会メンバーも話し合いに参加して救出作戦の概要を練っていきま……現地地形やスミス山賊団が根城にしていると思しき砦跡の地図はギデオンの冒険者ギルドから入手出来ていたので、大雑把な作戦を立てる事自体は出来ました。

……まあ、現地の詳しい状況やそこからどんなイレギュラーが起きるかはまだ分からないので、建てた作戦は『囹の人達が人質なんて関係なく山賊を殲滅しようとしているフリをしつつ、潜入組が人質を助けて即逃げる』程度の大雑把な方針だけのものですが。

「……とりあえず方針はこんな所で。後は現地の状況に注意して高度な柔軟性を保ちつつ臨機応変に行きましょう」

「実質無策っぽい言い方やけどオツケーやで。……トラブルに会う確率が高そうなくマヤんとミカヤン達がいる時点で現地で何が起こるか分からないしな」

『人をトラブルの元凶みたいに言うなワン。……まあ、とにかく行ってみなければ分からないだろ』

『まもなくへクルエラ山岳地帯の麓に到着します』

……そうして私達の『難易度：九のティアン救出クエスト』が幕を上げたのでした。



……かつてのソレは猛毒を持つ植物が群生する森の中に生きる【リトル・ポイズンローカスト】と言う小さな毒飛蝗であった……そこでは環境に適応した結果、強力な猛毒を持つに至った上位モンスター達が多数生息しており、ソレは文字通り吹けば飛ぶような存在でしかなかった。

……ただ、ソレが他の同個体のモンスターとの違っていた部分は周辺の有毒植物を食べる為の免疫スキルが多少強力だった事と、他の同族と比べて偶々『賢かった事』ぐらいのものである。

『……K I T I K I T I K I T I K I T I (私は弱い。生き残る為にも上手く立ち回らなければ)』

……まず、ソレがその森の中で生き残る為に行った事は周りを観察して学習する事だった……強力な有毒植物にやられた同族から食べられる植物・食べられない植物を学び、他の強力なモンスターにやられた同族からはその失敗の原因から身の隠れ方を覚え、そのモンスターからは他の獲物を狩る仕方と彼等が使うスキルを参考にすると……他にも森で起きた事から様々な事を学んでいったのだ。

そしてそのあとソレは身を隠しながら少しずつ力^{リソース}を蓄えていき【ポイズンローカスト】に、更に学んだ狩りの方法や他のモンスターの情報を駆使して上手く狩りを行って【ポイズン・デミドラグローカスト】に、そこから学んだ有用な他者のスキルを自身でも使える様に身体を変化させ【ヴェノム・ドラグインセクター】という人型の魔蟲へと進化していた。

そして、スキルに頼らない狩りの技術なども磨いてその森の中で自身が最も強くなった時に、何処からか膨大な力が流れ込んで自身が変化するのを感じ、気が付いたら逸話級^{ユニーク・ボス・モンスター}へU B M【^毒毒狩蟲 ラーゼクター】となっていたのだった。

『(どうやら私はこの森の近辺を徘徊していた、魔蟲を食らい喰らった魔蟲の形とチカラを得る『異形の魔蟲』と同じ存在になったようだな。……ふむ、元々持っていた毒と免疫のスキルは強化され、更に新しく狩った獲物のスキルを覚える力を得たのか)』

ソレ——【ラーゼクター】の有するスキルは、まず今まで捕食した

毒の種類内いくつかを選択して「自身すら汚染するレベル」で強化した上で噴霧する《蠱毒瘴気》、自身に掛かった状態異常を時間を掛けて回復させる《免疫生能》、これによって治した事のある状態異常の効果を反転させる《害毒反転》と言った元々の毒虫としての能力が強化されたものがあつた。

……そして、単独で生物を殺傷した時に対象が覚えているスキルの中で自身が使える物を一定確率でランダムに一つラーニング出来る《ソリチュード・ラーニング》という、周りを見て学習しながら一人で生きてきた彼を象徴する様なスキルを習得していた。

『……確かに凄まじい力だが、力を持った魔蟲である私自身をあの「異形の魔蟲」は見逃さないだろう。……いつか私がヤツに狩られる前にこちらからヤツを狩らねばならん』

その為に「ラーゼクター」は強くなった力でより強い獲物を相手に更なる狩りを重ねて経験値とスキルを蓄え、更に「異形の魔蟲」をこつそりと付け回しながらその行動パターンを把握して入念な策を練り……ついに「異形の魔蟲」を討ち取る事に成功したのだつた。

……更に《UBM》が《UBM》を倒した事によって「ラーゼクター」に莫大なりソースが流れ込み、その身を伝説級《UBM》に進化させたのだつた。

『まあ、倒せたのは「異形の魔蟲」が他の魔蟲の形とチカラを取り込み過ぎて脆くなっていたのが大きいが……やはり、他の者の力を詰め込みすぎると肉体に何らかの弊害が出るのか。私自身もスキルを覚える程に成長自体が遅くなるのを感じていたからな』

そう考えられたからこそ、彼は進化した際に『習得したスキルを削除・合成・改造するスキル』である《取捨戦択》を習得したのかもしれないが……それからの「ラーゼクター」はスキルを厳選しつつ活動範囲を広げて行き、様々な獲物を狩って自身の力を上げて更に活動範囲を広げるという事を繰り返していた。

……その途中でモンスターよりも人間の方が獲得経験値の効率が良く、ラーニング出来るジョブスキルも有用なものが多い事に気が付いて積極的に人間を獲物とした結果、それを聞きつけてやって来た

『天馬に乗った人間の強者』に危うく討たれかけたと言ったトラブルもあつたが。

『……どうやら少し慢心していた様だな。上には上がいるという事を忘れるとは、必死に知恵を絞って生きてきた小さな毒蟲だった昔なら考えられないことだ。今後は気を付けねば……まずは私を能力・技術共に圧倒した“天馬乗り”から何か学ぶ事がないか考えてみるか。この知恵こそが私がこれまで生き残って来れた最大の武器なのだから』

そして彼は大きな人間の街に近づき過ぎない様にしながら、これまでに以上にモンスターや人間達の行動を積極的に学習していき、より効率的に狩りが出来るようにスキルだけではなく戦術や技術についても磨きをかけて行つた。

……そうして経験と研鑽と学習を重ねていく中で『人間が獲物にしている人間——山賊とかを狩るのなら自分を脅威と見てヤバイ追手が来る事は無い』と考え、更に連中が街から離れた所にいるから狩りやすい事もありそういった連中が多数いるへクルエラ山岳地帯で狩りをする事にしたのだった。

『これで潰した山賊団とやらは五つか。……人間はレベルが低くても経験値の効率が良い上に、低レベルであっても使えるスキルをラーニング出来る可能性も高いから良いな。他にもいくつか収穫もあつたからこの選択は上々か』

……だが、そんな「ラーゼクター」の悩みはおそらく現在の自分が既に頭打ちでレベルが殆ど上がらず、おそらく伝説級へUBM」としての『壁』にぶつかっているだろうと言う事だ。

『おそらくこの『壁』を乗り越えるには、以前“異形の魔蟲”を倒した様にへUBMを狩る事で大量のチカラを得る必要があるのだろうか……へUBM」というのは実力的にも早々に狩れる相手では無いかな』

実際、以前に遠目に見かけただけの『万物を切断する剣虎』には今の自身の実力ではどうあがいても勝てないと判断していたし、同族の群れを率いる外竜や鎧竜の「竜王」達にも彼ら全員と自身単騎だけで

は勝率は薄いだらうと考えていた。

……なので狙うのは『自身の実力と手札で狩れる同格以下で単独行動している〈UBM〉』と言う事になるのだが、そんな都合のいい相手とあつさり遭遇出来る訳もなく……。

『……まあ良い、今は最後に残った砦跡に住む人間達を狩る事を考えよう。あそこにはかなりの実力を持つ人間もいたから後回しにしていたが、色々と保険も手に入ったしそろそろ狩りに出ても良いだらう……む?』

そんな事を考えていた「ラーゼクター」は周辺警戒の為に使用していた《強者感知》——かつて狩った「ライトニング・ドラグホース」からラーニングしたもの——に『この山の中に入って来た強者の反応』を感知して、その方向へとラーニングした複数のアクティブ索敵系スキルを行使して詳細を探った。

『……ふむ、これはかなりの大物がこの山の中に入って来た様だな。都合良く数は一体の様だし狙えるか……んん? そちらに高速で向かっている反応が……こっちは生物では無い? このままだと……であれば……』

……そうして複数の索敵系スキルでそれらの反応の位置を把握した「ラーゼクター」はどうすれば上手く立ち回れるかを考えながら詳細な状況を把握する為、複数の隠密行動用スキルを使って誰にも悟られぬ様に反応があつた場所へと向かっていったのだった。

灼熱の竜

■ヘクルエラ山岳地帯〈【熱態己竜 ヒートライザ】

『GURURURU……』

そこはアルター王国とカルディナの国境地帯の一つであるヘクルエラ山岳地帯、そこには全身に傷のような模様があり肉食恐竜の様な姿をして背中に長さ2メートルぐらいの短い翼を持った全長10メートル級のドラゴン……逸話級^{ユニーク・ボス・モンスター}へU B M〈【熱態己竜 ヒートライザ】がゆっくりと歩いていて。

……最も、その周囲はまるで高温で焼き尽くされたかの様に焼け焦げた木々と燃え盛る地面、そして全身が黒焦げになった純竜級モンスター【アーマード・ドラグワーム】が複数体倒れていると言う焦熱地獄の様な光景だったが。

『……KI……TI……』

『GAA!』

辛うじてまだ息の合った【ドラグワーム】だったが、近づいて来た【ヒートライザ】の超高温を纏った足による踏みつけで頭を溶かし潰されてそのまま光の塵となった。

……そうして【ヒートライザ】は同じ様に他の【ドラグワーム】を始末すると、ドロップしたアイテムを^{ドラグワームの内}食べる為に固有スキル《熱態圏》を解除しつつ、背中の翼に備わった身体に籠った熱を外に逃がす固有スキル《熱羽》によって身体の温度が下がるのを待った。

『……GURURU……』

ちなみに【ヒートライザ】としては飛べない天竜でしか無い自分がかここまでの力を得た事に關しては文句はないが、習得したスキルの効果が残ったままだと食べようとした肉が炭になってしまるのが不便だと少し思っていた。

……実はこの【ヒートライザ】元々は生まれつき羽が短くて飛行能力が無い畸形種の【ヒート・ドラゴン】で、それが理由で群れから放逐されたという過去を持っているのだ……これが〈天竜山〉で生まれたのであれば生まれた直後に処分されていたかもしれないが、彼は地

上を住処にする群れで生まれたので雑に放逐される程度で済んだのだ。

『GUU……MOGUMOGU』

自身の温度が下がった事を確認した【ヒートライザ】は早速余熱でこんがり焼けた肉を食べていく……何故自分の親が天竜の掟に従って己を殺す事をせず、ただ放逐するだけだったのかは分からなかったが、群れを追われた当初から自身が不具であるが故に捨てられた事は理解していた。

……そして、その事に関して彼がまず思った感情は怒りと克己心であり、その上で必ず強くなって自分を捨てた者共を見返してやると思いながら行動し始めたのだ。

『……GUU』

幸い飛べない天竜とは言えこの世界における最上位の種族であるドラゴン、追放された当初は【テイルウルフ】や【パシラビット】を狩るのにも苦勞したが直ぐにレベルも上がり、翼の代償なのか他の同族と比べてステータスや熱量を操るスキルの強度も高かったので一人でも生きていけるだけの強さを得る事に成功はした。

……だが、所詮は天竜種であるが故に格下の相手ならともかく同格の地竜などが相手では物理ステータス面で劣っており、彼自身が怒りと克己心を元に積極的に同格以上の相手と戦う事が多かったため、その結果として敗北を喫する事もまた多かった。

『……GEFU』

そんな彼が今の【ヒートライザ】となったのは先日とある【グラランド・メイル・ドラゴン】の群れを戦って敗北し、もう何度目かの屈辱感を味わいながらの逃走の最中の事だった……まあ、その逃走劇の最中に地面に落ちている『何か』を見つけて、それを惹かれるがままに食らったらへUBM〕になっていたと言うだけの話なのだが。

その後、力を得た彼はその【グラランド・メイル・ドラゴン】の群れを焼き払い、この新たに得た力を試す為に次々と強力なモンスターの群れを襲撃しながらこのへクルエラ山岳地帯〕までやって来たのだ。

……そうしてカルディナの砂漠から流出した【アーマード・ドラグ

ワーム」の一団と遭遇して、これを一方的に殲滅して今に至ると言う訳である。

『……GURURU?』

……と、事情でヘクルエラ山岳地帯へ来ていた【ヒートライザ】だったが、食事が終わった直ぐ後に何かが高速でこちらに接近して来る事に気が付いた。

これまでの数々の戦いで磨かれた野生の感覚は近づいて来る「何か」がかなり強力な相手だと告げており、元より誰が相手でも戦わずに逃げると言う選択肢を持たない【ヒートライザ】は即座に戦闘状態へと移行して、先手を取って戦いを優位に進めるべく気配のする方向へと亜音速で駆けて行ったのだった、



□ヘクルエラ山岳地帯へ ランドマンサー【黒土術師】レント・ウイステリア

さて、山賊からの人質救出クエストを受けた俺達はヘクルエラ山岳地帯へ到着した事もあって本格的な戦闘準備を整え始めた……この【チャリオッツ】の内部が広いお陰で装備変更とかは問題無く出来るのはありがたいな。

……とりあえず、俺達はお互いに連絡を取る手段として月夜さんと月影さんから貸し出された【テレパシーカフス】を装備したり、戦闘用の装備をアイテムボックスから取り出して装備したりしている。俺も万々に備えて【シルヴァ・ブライト】を腰に提げておくなど本気の装備である。

「おや? 葵さんも【デモンズガントレット】を持っているのですね」「うん、これ【インフェルノ・デモンズガントレット】……装備すると自分諸共焼くレベルの強力な炎が出せる神アイテム。デメリット付きだから安かったし、これを使う為に【賢者】ワイズマンから拳士系統に転職した。今は【魔拳士】マジックボクサー」

「分かります、デメリットはありますがそれさえどうにか出来れば強いですからねコレ。……まあ、私の【アンチウェポン・デモンズガン

トレット」は結構高かったもので、以前に渡した物の対価として兄様からお金を出して貰いましたけど」

ああ、あの「アンチウエポン・デモンズガントレット」は以前シュバルツ何某の襲撃で使っていた籠手が壊れたからと、俺のレベル上げ前に買ったヤツだな……この「シルヴァ・ブライト」をくれたお礼も兼ねて金を半分くらい出したんだった。

装備者に「武器装備不能」の呪いを掛ける代わりに接触した武器を呪う装備スキルのあるって言う強力な格闘用装備だから、基本武器を装備しない自分には相性が良いとミュウちゃんが珍しく欲しがったんだよな。

……本人は何も言わないが、どうやら余程シュバルツ何某に手傷を負わされたのが悔しかった様で自分達の戦力増強に積極的になってるしな。

(この前も『ミメとの融合では単純なステータス以外の部分も上がっているので調べておきたいのです。五感や反射神経や肺活量などが上がってるのは直ぐに分かったのですが、この世界特有の属性耐性や状態異常耐性はまだよく分からないので』とか言って、自分に呪いや魔法を融合状態と非融合状態で当てると言ってきた事があったし)

融合時にはMPも上がってるし肝心の属性耐性とかはマスクゲータなので分かり難かったが、低位の呪いや属性攻撃のダメージとかなら大体三〜五分の一ぐらいに減っている感じだった。

……さて、ミカも最強^{着ぐるみ}装備に着替えた様だし、他のメンバーも戦闘準備を終えたみたいだから最後の作戦確認をしよう……と思つた所でミカの雰囲気(着ぐるみで分かりにくい)が) 鋭い物に変わった。

『……む、敵が来るよ。前からー!』

「へ? 『ツ!?? 前方から何か来ます!』……全員注意!」

そのミカの警告に「チャリオツ」内の操縦席に座っていた利奈さんは困惑した声を上げたが、前の「スレイプニル」からの通信から聞こえて来た結奈さんの報告を聞いて車内の人間へ注意を飛ばしつつ前方に着いた広域モニターに目を凝らし始めた……直後、前方にあった森を焼き払いながら一体の巨大なドラゴンが飛び出して来た。

……そして、そのドラゴンの頭上には【熱態己竜 ヒートライザ】の表示が浮かんでおり、その口からは今にも、ドラゴンの切り札であるブレスが放たれる直前” の様にエネルギーが集中して……ってそのままじゃん！

『GUUUUUUUUUUUUUUUUU!!!』

「ブレスだ！」

「やばっ!?? 結奈ちゃん回避!!!」

『分かってます！ 《ストーム・アクセラレイション》!!!』

直後に【ヒートライザ】の口からビームの様な熱線が放たれたが、ほぼ同時に結奈さんが【疾風騎兵】ゲイル・ライダーの奥義《ストーム・アクセラレイション》——短時間乗機にかかる空気抵抗はゼロにしつつAGIを二倍にするスキル——を使いながらそのままの態勢で90度直角に曲がる事によって辛うじて熱線の回避に成功した。

……いや、【ヒートライザ】はまだ熱線の照射を継続して……まさか!??

「攻撃はまだ続いてる！」

『横に薙ぎ払う気だ!!』

『AAAAAAAAAAAAAAAA!!!』

俺とシウさんが警告した直後、あの【ヒートライザ】は熱線を照射したまま首を振ることで、横方向に回避した【スレイプニル】を追撃して来たのだ。

……こちらも超音速で移動しているのだが、向こうはただ首を振るだけで良いので薙ぎ払われた熱線は直ぐに【スレイプニル】を捕捉……。

『皆さん捕まって下さい！ 飛びます!!!』

「うおっ!??」

……しかけた直後、結奈さんの気合の入った声と同時に【スレイプニル】とそれに繋がれた【チャリオッツ】が大ジャンプして、薙ぎ払われた熱線を飛び越える様に回避したのだ。多脚戦車だけあってこんな事も出来るのか。

「散々やってくれたね、お返しだよ！ 《魔弾出力増大》

《雷属性照射魔弾》《水属性誘導魔弾》発射ア!!!
サンダー・メーサー
ブリザード・ミサイル

そして跳躍すると同時に、流石双子と言うべきか利奈さんがまるで示し合わせたかの様に「チャリオッツ」の武装で「ヒートライザ」を攻撃した……横部の副砲から放たれた二条の雷撃が真っ直ぐ「ヒートライザ」へと飛ぶが、向こうも亜音速は出ていそうな機動でその雷撃を横つ飛びに回避する。

……だが、その回避方向に予め放っていたらしい追尾能力を持っているらしい氷のミサイルが飛来して……「ヒートライザ」が放っていた高熱によつて着弾するよりも早くあつさり全弾溶けてしまった。

『G A A A A A!!』

「嘘お!? 威力上げたのに! 弾種の選択ミスった!!!」

「二人共、まずは一旦距離を離しい」

『分かりました! 横道に逸れます!!!』

その月夜さんの指示で結奈さんは着地して直ぐに近くにあった横道に入り込んで行った……それを見た「ヒートライザ」もダツシュで追い掛けて来たが、流石に純粋な速度なら「スレイプニル」の方に部がある様で徐々に速度を離していく。

『G A A A A A O O O O!!』

「今度は間違えないよ! 《魔弾射程延長》《闇属性誘導魔弾》
ウインド・バースト

《風属性拡散魔弾》!!!」

更に「チャリオッツ」の後ろを向いた副砲から暴風が放たれて「ヒートライザ」を打ち据えて、そこに今度は闇属性らしいミサイルが飛来して相手が纏う高熱を無視して本体に着弾してその足を止めて更に距離が離された。

……だが、その程度で倒せるなら「UBM」などとは呼ばれないと言うべきか、それらの攻撃でも「ヒートライザ」には大したダメージが無い様で走るペースを更に上げてこつちを追撃してきた。

「うへえ、強化してもミサイルと副砲じゃ全然効いてない。闇も風も威力低い弾種だって事差し引いてもEND高すぎー」

『距離は取りましたが未だに追ってきます。どうしますオーナー?』

「流石は難易度・九つて事やね、まさかいきなり「UBM」と遭遇する

とは……そや！ クマヤんを単騎特攻させて足止めしつつ、それ以外で誘拐された人達の救出に行くのはどやろ？」

『……微妙に有効な手だから反論しにくいのがムカつくワン』

まあ、俺達のクエストの目的は『山賊から誘拐された人達を助ける』事だからな。へU B Mへばつかりに構っていく訳にもいかない……が、アレを放置したままだとクエスト達成も難しいだろうし。

……と考えて来たら、ミカが（着ぐるみで分かりにくい）こつちを見てから喋り出した。ハイハイ何時ものフォローだな。

『クエスト達成の為にはアレは撃破した方が良い気がするよ。人質救出の為に必要な最低限の人員以外はアレの撃破に向かわせた方が良いと思う』

「それだと山賊団の方に行くのは俺とミュウちゃん、後は月影さんと利奈さんと結奈さんになるか。……まあ、あの「ヒートライザ」を放置したままだと誘拐された人達を助け出したとしても、ギデオンまで送り届けられるのが難しそうだからな」

そんな感じでいつも通り「直感」に任せて最適解を発言するミカと、同じくいつも通り俺がその最適解にそれっぽい理由付けして捕捉して説明したのだが、さてどうなるか……。

『確かにアレはかなりしつこくこつちを追って来てるからな。放置したら確かにクエストの邪魔になりそうか』

「せやねー……まあ今回のクエストはミカやんが受けたんやし、その提案なら採用でええやろ。そろそろ日も暮れて来たから影やんも全力出せるしなー。任せたで三人共」

「お任せ下さい、月夜様」

「オツケー」

『了解しました』

……そうしたらシウウさんと月夜さんが賛成してくれた事で、どうにかミカが提案した作戦通りに行く流れになってくれた。

ただ、その際に月夜さんがこつちにウインクして来たので、多分この二人にはこつちの事情を何となくだが察せられている気もするが……まあ、この二人ならそれでどうこうとはしないだろうし、今は気

にする余裕も無いし考えるのは後回しで良いか。

「それじゃあ【ヒートライザ】が来る前に足止め班は降りよか。救出班はレント君リーダーで山賊団から誘拐された5人の救出を頼むで」

「分かりました。……では宜しくお願いします、レントさん」

「え？ 良いんですか？」

……と思っていたら、月夜さんからいきなりそんな事を言われた。
〈月世の会〉メンバーの数の方が多いんだし月影さんがリーダーだと思ってたんだが……。

「ミカやんとミュウやんが言うには、そっちのパーティーのリーダーは君やろ？ それにこのパーティー分けを提案したのもレント君やし、これまでの会話でリーダー任せても大丈夫っぽいしなあ。それに何かあっても影やんがサポートしてくれるさかい」

「微力ながらお手伝いさせて頂きます」

「……分かりました。誘拐された人達の救出は任せて下さい」

……しようがない、ここまで来たからには俺も覚悟を決めよう。何とかして山賊団から誘拐された人達を救出しないと……一応、策と
言える程のものじゃないが勝算はあるし。

「さて、それじゃアレがこっち来る前に迎撃班は急いで降りて戦闘準備や。……向こうは炎熱攻撃主体みたいやし、葵ちゃん頼むで？」

「了解。炎や熱相手なら任せて」

『それじゃあ私も行くよ。お兄ちゃん、そっちも大変だろうけど宜しく』

「分かった」

『それじゃあやるかワン』

……そうして、俺達は二手に別れてクエスト攻略の為にそれぞれの敵と戦う事になったのだった……ただ、ミカの言葉と雰囲気からして難易度・丸の理由はまだありそうだし、気を付けていった方が良さそうだな。

VS【熱態己竜 ヒートライザ】

□ヘクルエラ山岳地帯〈

『GUUUUAAA!!』

そんな雄叫びを上げながら逸話級ユニーク・ボス・モンスターへU B M【熱態己竜 ヒートライザ】は逃げていった乗り物に乗った人間達を追撃すべく、周囲にある木々を高熱で焼き払いながらヘクルエラ山岳地帯〈を駆けていた。

……ちなみに木々を焼いているのは戦闘中故に発動し続けている《熱態圏》の効果であり、雄叫びも《熱態圏》の所為で位置を隠せないのもあり獲物を追い立てる意味も兼ねて敢えて上げているだけで彼自身は冷静であり、だからこそ逆にこちらに向かつてくる人間二人の気配を感じしても特に動じる事なく即座に行動に移せたのだ。

『GAA!!』

その気配に向かって「ヒートライザ」は口から熱光球《ヒートブラスト・スファイア》を撃ち放つ……これは最初に使った《ヒートブラスト・コンバージェンス》と比べると威力・弾速は低いがほぼノーマルで使えて、更に着弾と同時に爆発して高熱を撒き散らして広範囲を攻撃出来るスキルなのだ。

……加えて《熱態圏》の副次効果である“効果範囲内の熱系スキル効果上昇”によって直撃すれば亜竜級にも致命傷を与えられるので、初手としては非常に使いやすいスキルであり……。

「……そちらから熱量エネルギーを供給してくれるとは有り難い」

『葵ちゃんナイス!』

『GUA!?!』

……故に放たれた《ヒートブラスト・スファイア》が前に居た人間に吸収された際には、いかに「ヒートライザ」といえど驚きの感情を露わにしてしまった。

「これだけ熱に満ちた場所ならスキル使いたい放題……
サンシャイン・アップリケーション

《日 天 吸 蓄》解放《ブーステッド・ストレンジス》《ブーステッド・エンデュランス》《ブーステッド・アジリテイ》」

『こつちも行くよ！ 《ブラスト・スウィング》！』

そして、高熱を吸収した人間——日向葵は「日天鎧皮 カルナ」に蓄積された大量の熱エネルギーをスキルを介して、サブジョブに入れた「付与術師」の単体バフに注ぎ込み自身の物理ステータスを大幅に強化し、その後ろに居たミカ・ウイステリアは素早く前に出て「ギガース」を振るって「ヒートライザ」の顔面を狙って衝撃波を放った。

『ッ!??・G A A A!!!』

『おつとお！』

だが、それを見た「ヒートライザ」は首を振って衝撃波を躲すと同時に、再びの《ヒートブラスト・スフィア》を着ぐるみの方に向けて撃ち放った……その攻撃自体は“直感”によって発生を先読みしたミカに回避されたが、その回避したと言う事実だけで次に取る行動を決めるには十分だった。

『G A A A!・G U A A A A A!!!』

『うおつとお!?? ……葵ちゃん！ そつち行つたよ！』

「む、そう来る」

【ヒートライザ】は追加でいくつかの高熱球をミカに放って牽制しながら自身に高熱を纏わせるスキル《ヒートボディ》を使って、そのまま葵に接近しての肉体を使った物理攻撃を仕掛けたのだ。

……詳しい理屈こそ分からなかったが片方の人間が自分と同じ様に高熱を無効化しているが、もう片方の着ぐるみが高熱攻撃を避けた以上は高熱無効スキルはそちらしか保持していないと判断しての行動だった。

『(……見た所、あの人間の速度は俺よりも下——であれば、接近して爪牙による格闘で叩き潰せば「《月面徐算結界・薄明》」G I A !? ?』

そうして【ヒートライザ】が葵に近付こうとした瞬間、その周辺一帯が『曇り空の夜』へと切り替わると同時に彼の速度は千未満にまで下がり、自身から離れて行く彼女よりも低くなったので格闘に持ち込む事は出来なかった。

『G I A A!・G A A A!』

「本当にあのオーナーは実力に関しては文句の付け所が無いんだよな……《マッドクラップ》」

『ふむ、動きが止まったのでまずは足狙いかな』

まるで鉛の様に重くなった自分の身体から、この『夜』がAGIに対するデバフ効果のスキルだと判断した【ヒートライザ】はその発生源を探そうとしたが、それよりも早く葵が発動した大量の熱エネルギー^Mを込めた《詠唱》付き地属性の拘束魔法が彼の片脚を捉えた。

……そして、それを隙と見たミカが拘束された足を潰そうと接近するが、【ヒートライザ】も全身から熱波を放つスキル《ヒートブラスト》で接近を牽制……それも先読みで後方に飛ぶ事でダメージを抑えたミカだったが、彼はその間に拘束された足を力付く^{STR}で外してしまった。

『……むう、私の炎熱耐性は葵ちゃん程万全じゃないから、接近する程に温度が上がる〴〵らしいアレに近づくのは難しいか。……まあ、足を狙うのは私じゃ無かつたりするけど』

『……バルドル、撃て』

『了解』
ラージヤ

……彼女がそう言った瞬間、拘束から抜けた直後で体勢が崩れていた【ヒートライザ】の脚部に遠方から放たれた砲撃が直撃し、そのまま彼はバランスを崩して地面に倒れこんでしまったのだ。

『GYAAAAA!?!』

『流石はシユウさん、狙いとタイミングが正確過ぎるね。《インパクト・ストライク》!』

『そのまま倒れていて欲しい、無理だろうけど……《グラウンド・ホールダー》!』

そうして倒れ込んだ【ヒートライザ】を葵が発動した地属性拘束魔法によって地面から生えた腕が押さえ込み、そこに接近したミカが頭部を狙って大型メイスを振り下ろした……が、倒れた【ヒートライザ】は振り下ろされたメイスを咄嗟に拘束させていなかった腕で防ぎつつ、再び全身から熱波を発生させて周囲一帯を攻撃しながら拘束を破

壊した。

……だが、「ヒートライザ」が立ち上がった時には葵とミカはその場から離れており、同時にAGIが下がった彼には回避できないタイミングで再びの砲撃が次々とぶち当たっていく。

『GUU?!? ……GAAAAA!!』

……しかし、「ヒートライザ」の一万程あるENDと三十万はあるHPの前ではその砲撃も大したダメージにはならず、それを自覚した彼はまず鬱陶しい砲撃とデバフを掛ける相手を潰そうと砲撃がやって来る方向に顔を向けて、そこに居た砲撃を放つ戦車と周囲にいる三人の人間に狙いを定めた。

「熱で土が溶ける……けど、向こうに行かせる訳にはいかない。《ライトニング・ジャベリン》！」

『そうだね。……殴った【ギガス】も赤熱するぐらい体表の温度はヤバイ事になってる。熱対策は念入りにしたつもりだけど長く持たないよ月夜さん……《竜尾剣》！』

『GAAAAA!!!!』

それを阻止しようと雷の槍と伸びる剣尾が襲い来るが、「ヒートライザ」はそれらの攻撃を捌きながら《ヒートブラスト》と《ヒートブラスト・スファイア》を周囲にばら撒いて二人を攻撃、それによって彼女達に攻撃する余裕を無くさせた隙に減ったAGIではなくSTRによる踏み込みを駆使して砲撃する戦車に多少のダメージを無視して突っ込んで行った。

◇

『バルドル、後退しながら砲撃を続行。……あの【ヒートライザ】、最初の奇襲といい俺が戦ったへUBMの中でもかなり戦い慣れてる部類だな。少なくとも固有スキル頼りとかじゃなさそうだ』

「せやねー、二人とも下がるえー」

「分かりました」

「了解」

戦闘が起きている地点から50メートル程離れた場所、そこには戦車形態の「バルドル」に乗ったシユウ・スターリングとその上部に腰掛けている扶桑月夜、その横にはへ月世の会メンバーの立花翔と鈴木健太が居て、自分達に向かって来る「ヒートライザ」から離れる様に移動していた。

……彼等は「ある事情」で離れた場所から月夜のへエンブリオ「カグヤ」の《月面徐算結界・薄明》とバルドルの砲撃によって前線で戦う彼女達の援護をしていたのだ。

「さて、砲撃あんまり効いてないみたいやけど徐算はこのままAGIのまままでええ？　ENDかSTRの方がええかな？」

『いや、このままAGIで良いだろう。ヤツが展開しているこのフィールドの効果を考えると追い付かれたら熱耐性が少ない俺達では詰みかねん』

「ミカちゃんからの報告やとアレに近づけば近づく程に温度が上昇するらしいしな。……けど、アレに近付いた瞬間に気温が高温に変化したのは驚いたなあ。事前に健太の処方した耐熱ポーションが無ければ危なかったわ。今もめっちゃ暑いけどー」

『おそらく高熱を発生させるだけじゃなく、一定空間内の熱量を保持する……へエンブリオで言えばテリトリー系列のスキルを使っているみたいだな』

そう、それこそが「熱態己竜 ヒートライザ」の《熱態圏》——自身を中心とした半径100メートル圏内に熱量を保持するスキルである……これにより「ヒートライザ」が放った熱量は霧散する事なく《熱態圏》の内側に籠り続けて内部温度を上昇させ続けている訳である。

更に《熱態圏》内の温度は「ヒートライザ」に近づく毎に急上昇する仕組みになっており、現在では50メートル以上離れた彼等の位置なら約50℃程度だが、彼女達が居た半径20メートル以内なら200℃を超え、そして「ヒートライザ」自身の体表面ともなれば使用している《ヒートボディ》の効果も合わせて2000℃を優に超えているのだ。

「それに気温も徐々に上がってきとるな。……まあ、温度を保持するフィールドなら熱量を放てば当然その分だけ気温も上がるわなあ」

『時間を掛けすぎると俺達の熱耐性を突破して来るだろうな。その前に片を付けたいところだが……』

「熱耐性特化の【カルナ】がある葵ちゃんはともかく、ミカやんの方は不味いかな。……それはウチらもやけど」

ちなみに【カルナ】のスキルで《熱態圏》を無効化している葵と違い、ミカの方は特典武器【どらぐてい】の古代伝説級冷房スキルを始めとして、事前に処方された飲んだ者に《炎熱耐性》を与える【耐熱ポーション】、《炎熱耐性》付きアクセサリ、【重戦士^{ヘビーファイター}】の装備の炎熱耐性を上昇させる《アームズ・ファイア・レジスト》の重ねがけで辛うじて熱を防御している状態である。

……そうやって【ヒートライザ】への対策を話し合っていたシユウと月夜だったが、そこで横にいた鈴木健太が手に持った短銃の様な物を掲げながら月夜に声を掛けた。

「オーナー、《皆癒の落涙》のクールタイムが終わりました。次はどうしましょうか？」

「んー、あの二人が戦いやすい様にAGIバフかなあ。どうせ短期決戦するしか無いし、効果がキツツイおクスリ頼むで」

「……オーナー、その言い方だと色々誤解を招くのでやめてくれると……《瞬間充葉》【アジリティ・ドーピング】セット。《霊薬は口に易し》《皆癒の落涙》」

そうして健太は短銃の様な物——「無針注射器」の中に摂取した物のAGIを上昇させるドーピングションを入れ、それを上に向けて引き金を引いた……すると、まるで輝く噴水の様な光が上空に打ち上がり、それが光の雨なつて辺り一面に降り注いでそれに触れた味方全員に内部のポーションの効果が大幅に強化された上で適応された。

……これがへ月世の会メンバー鈴木健太が有する無針注射器型へインブリオ〈良薬来効 ヒュギエイア〉のスキル、装填した薬品の効果・持続時間の上昇と副作用・悪性効果の軽減を行う《霊薬は口に

易し』、及び『薬品の効果を周囲の味方全体に付与する』、『皆癒の落涙』の効果である。

『よっしゃ！ AGIバフ感謝！ 『ライトニング・インパクト』！』
「お陰で追い付いた。『ウインド・ジャベリン』！」

『GUUAAA!?!?』

それによってAGIが上昇したミカと葵が「ヒートライザ」に追い付き、各々雷を纏ったメイスと風の槍で後方支援役である月夜達に接近されない様に攻撃を仕掛けて行った。

……ちなみに彼等が『熱態圏』内部で活動出来るのは、事前に製薬特化〈エンブリオ〉持ちの〈月世の会〉メンバーが作った「耐熱ポーション」を「ヒュギエイア」によって効果を増強した上で処方されている事が大きい。

「……さて、あの二人が頑張つとるけど、このまま熱圏の温度が上がり続ければ先に参るのはこっちやね。ウチの結界もクマやんの砲撃も距離を取り過ぎると届かへんから熱圏の外に出る訳にもいかんし……クマやん、なんか都合のいい弱点とか見つからんの？」

『強いて言うならあの『翼』だな。さつきからアイツは翼への攻撃だけは全力で回避してやがる。……多分だが、あれは放熱板じゃないのか？』

「あー、翼があるのに飛ばへんと思つとつたらそう言う事か？ アレが熱圏の中心におるのに無事なんも……ミカやん、葵ちゃん」

その仮説を聞いた月夜は即座に「テレパシーカフス」を使って前線で戦っている二人に『翼』についての確認を取った……すると、二人も翼に攻撃しようとしたら全力で防がれていると答え、更に葵が翼から常に熱が発せられているみたいだと言う報告もあった事で仮説は確信へと変わった。

「ほんならあの翼を壊せば熱で自滅するかな。そうでなくとも高熱の発生はある程度抑えられそうか」

『問題はどうかやって翼を破壊するかだが……さつきから翼を狙って砲撃してるのに上手く避けられてる。しまいには蜃気楼まで使ってくるし』

そう、AGIが下がった所為で砲撃を避け難くなった【ヒートライザ】は、それに対抗して熱で光を屈折させて自身の蜃気楼を作り上げる《ヒート・ミラージュ》というスキルを使っているのだ。

……他の熱系スキルと違って練度が低いので一歩ズレた場所に像を結ばせる程度しか出来ず、接近すれば直ぐに見破られる代物だったのでシユウは即座に見破ったが、それでもお互いに動いている事もあって遠距離からピンポイントで砲撃の命中率を下げる効果は十分に発揮していた。

『俺の“切り札”を当てられればアイツを倒せる可能性がある……最悪でも翼を奪うぐらいは出来るだろうが、その為にはどうしても接近する必要があるな。遠間からでは当てられん』

「あの翼が排熱版なら破壊した上でウチの【カグヤ】と葵ちゃんの“必殺スキル”を使えば倒せるかもやけど……カケやんの【コロッセウム】ならアレの熱量は下げられるか？」

「不可能ではないと思いますが必殺スキルは“数の問題”がありますし、そもそも【コロッセウム】の効果は無差別ですから葵君のスキルまで制限するかと。それに内部に取り込むにはアイツに接近しないと……」

『G A A A A A A A A A A A!!』

そうこうしている間にも《熱態圏》の温度は更に上昇を続け、砲撃に慣れてきた【ヒートライザ】も徐々に後方支援役への距離を詰め始めていた……これ以上時間を掛ければ近く事すらままならなくなるかと判断した彼等は、【テレパシーカフス】を使って手早く【ヒートライザ】を撃破する算段を立てて行く。

「とりあえず多少のダメージは覚悟で接近してからクマヤんが特攻、それでダメならウチと葵ちゃんまで仕掛ける、それでまだ仕留められんならカケやんの【コロッセウム】で囲って殴るって感じで。後は高度な柔軟性を保ちつつ臨機応変に対応してこか」

『……まあそれしか無いか。後特攻言うな、算段はあるワン』

そうして全員が乾坤一擲の決戦を【ヒートライザ】に挑もうとした……その直後、“直感”によって『新たな脅威』を感じ取ったミカが

焦った声で全員に警告を飛ばした。

『ツ!?? 新しい敵が来る! 下から……! 『コドクシヨウキ』なつ……!』

その警告とほぼ同時に戦場の地面の複数箇所から毒々しい色合いの瘴気を勢いよく吹き出して彼等を覆い尽くし、その瘴気を吸った彼等と【ヒートライザ】を【猛毒】【魔毒】【魂毒】【衰弱】【酩酊】【麻痺】の六重状態異常に陥れた。

『GUUUU!??』

「これは……六重の状態異常やと!??」

『まさか新手か!??』

継続して吹き出し続ける瘴気によって状態異常を受けた【ヒートライザ】は【衰弱】【麻痺】【酩酊】の効果の所為で勢いよく地面に倒れ込み、人間側もそれらの状態異常の効果で動く事もままならず、その場に蹲ってしまい……そんな中で【ヒートライザ】の近くの地面が盛り上がりそこから一体の人型の魔蟲——〈UBM〉【蠱毒狩蟲 ラーゼクター】が地上に這い出てきた。

……彼は人間達と【ヒートライザ】の戦いを《熱態圏》の効果を受け難い地中で監視しながら、彼等の進行方向先に瘴気を吹き出させる罠を仕込んで待ち構えていたのだ。

そして自身にラーニングした《炎熱耐性》《ファイア・レジスト》《コールド・フィールド》と言った炎熱対策スキルと、《害毒反転》《ブーステッド・エンデュランス》《セルフ・リジエネレーション》と言った防御・回復スキルを重ねがけにして《熱態圏》を突破したのである。

『GUUAAA……』

『コドクゼツサツ』

そして【ラーゼクター】は左腕の一部を鉢の腹と針の様な形状に変えて、そこに《蠱毒瘴気》を集中して行く……これは【ラーゼクター】が編み出した《蠱毒瘴気》の病毒系状態異常を一つに絞り、更に自身の肉体の一点に圧縮する事で効果を大幅に引き上げるバリエーション《蠱毒絶殺》である。

『……TIE!!』

……そうして「レーザークター」は「猛毒」を圧縮した対HP用の《毒絶殺》でもって一撃で葬らんと、全速力走りながらで左腕の針による刺突を「ヒートライザ」の喉元に突き立て様としたのだった……。

蠱毒の蟲／灼熱の竜

□ヘクルエラ山岳地帯

伝説級ユニーク・ボス・モンスターへU B M

へと至らせる為、近くにいた逸話級へUBM

【熱態己竜 ヒートライザ】に狙いを定め、その場で人間達と戦っている隙をついて《蠱毒瘴気》による病毒系六重状態異常の罠に掛ける事に成功した。

『蠱毒絶殺コドクゼツサツ……TIE!!』

そして【酩酊】の効果で倒れ込んだ【ヒートライザ】に向けて、腕に集中させた圧縮状態異常スキル《蠱毒絶殺》を叩き込もうとしていた。

……HP減算系の【猛毒】【溶解毒】と言ったの効果を圧縮した直接ダメージ特化の一撃なら例え相手がへUBMであれ致命傷を与えられ、《免疫生能》《害毒反転》の許容量を超えた圧縮状態異常の反動ダメージや相手の高熱によるダメージで腕一本犠牲になるだろうが、それも《混蟲代百化》によって再生可能と考えての一撃だった……が。『それは“危険”過ぎるみたいだからさせないよ……』グラビトロン・ディバイダー《重破断》

《竜尾剣》！』

『ナツ!? K T I E!』

そうして突っ込もうとした【ラーゼクター】に突如として『漆黒の刃を持った剣尾』が割り込んだ……当然それはミカの【どらぐている】による攻撃であり、彼女はその行動を許せば最悪の結果になると“直感”して、状態異常を【クインバース】の《インスタント・エンパイア》によって快癒させ【ラーゼクター】を奇襲したのだ。

……その攻撃自体は《危険感知》《殺気感知》で気が付いた【ラーゼクター】だったが、敵対対象であるが故に月夜の《月面徐算結果・薄明》の効果でAGIは亜音速レベルにまで下がっていた事と、その“漆黒の刃”から感じる危険な気配を警戒したが故に剣尾を掻い潜って【ヒートライザ】に攻撃する事が出来ずに一旦下がるしかなかった。

『あまりお前に好き勝手はさせたくないんだよね！ 《テンペスト・ストライク》！』

『TIE! 《ピアースニードル》!』

そこにAGIバフのお陰で亜音速での移動が可能なミカが【ギガース】に暴風を纏わせて殴りかかっていく……が、それを躲した【ラーゼクター】の方もミカが何らかの方法で毒を無効化したと判断して反動が大きい《毒絶殺》を解除、即座に腕の『蜂の針』の元になった【グレーター・ヴェノムホーネット】からラーニングした貫通力に特化したスキルで迎え撃った。

……【ラーゼクター】のステータスはSTR・ENDが5000、AGIが8000程度と伝説級としては低い方だが、自身にも状態異常を齎す《毒瘴気》と状態異常による悪影響を反転させる《害毒反転》によつてステータス半減の【衰弱】とAGI9割減の【痺痺】をそれぞれ「ステータス倍加」とAGI90%増加”にしている。

『……《サンダースラッシュ》!』

『うげっ!?? 今度は腕がカマキリの鎌に……おつとお!』

よつて【ラーゼクター】はSTR・ENDは一万以上でAGIは徐算を食らつて尚5000に迫り、更に長年の修練や単独で狩りを続けていた事で正面戦闘の技巧においても戦闘系超級職ティアンに匹敵する実力を持ち、ラーニングしたスキル群を十全に運用出来る。

……今ももう片方の腕に【スラッシュャー・ドラグマンティス】の鎌を生やして、全身を着ぐるみで覆われたミカにも通じうる【ソートマスター剣聖】のティアンからラーニングした雷の斬撃を放っていた。

『……ふむ、それは直接受けたらやばい感じだね……こっちは受けよう』

『TIE! 《パラレルステイング》!』

だが、ミカは持ち前の“直感”で《サンダースラッシュ》の攻撃軌道を先読みして回避、逆の手から放たれた【フェンサー細剣士】の二連続刺突は威力が大してないと見抜いて【ギガース】を盾代わりに受け止めた……この様にミカは数多のスキルを使う【ラーゼクター】を相手にして、それら全てを先読みする事で辛うじて凌ぎ続ける事が出来ていた。

……そうして彼等が戦う間に状態異常を食らつて蹲っていた月夜

達もまた動こうとしていた。

「六重の病毒系状態異常とかウチじや完全に治すんは無理やけど、効果を軽減するぐらいなら……《ホーリーゾーン》！ 健やん！」

「了解！ 《瞬間充薬》【快癒万能薬】セット！ 《霊薬は口に易し》《皆癒の落涙》！」

まず月夜が【司教】^{ピシヨップ}の一定範囲内の病毒・呪怨系状態異常を軽減する《ホーリーゾーン》を使って周囲の人間を多少動けるぐらいに回復させ、その後に健太が【ヒュギエイア】に病毒系状態異常を回復させる【快癒万能薬】を入れ上に向けて引き金を引き、その効果を味方全体に作用させる事で彼等に掛かっていた状態異常を全て回復させた。「よし、動ける様にはなったな……助かった」

「もつと感謝してもええんやでくマヤん……ん？」

シユウからの（微妙な雰囲気だったが）感謝の言葉に上機嫌な月夜だったが、ふと視界に目に入った物を見て目を細めた……その彼女の視界の先には肉体が【麻痺】し地面に倒れ伏したままもがいている【ヒートライザ】の姿があった。

「アイツ倒れたまま……ああ、この【衰弱】と【麻痺】に加えてウチの《薄明》の所為でAGIが下がり過ぎとるんやな。……アレ？ これはチャンスでは？」

『まあ、奇襲を仕掛けてきた【ラーゼクター】の方はミカちゃんが抑えているしな。……ここできっさと【ヒートライザ】の方を倒して向この援軍に行ければ一番良いだろうな』

「せやね、折角の機会を逃す必要は無いわな。……全員攻撃準備や」当然、彼等がそんなあからさま過ぎるチャンス逃す訳がなく即座に【ヒートライザ】へと一斉攻撃を仕掛けようとして……その直前に【テレパシーカフス】からミカの慌てた声による警告が飛んできた。

『ストップ！ 今【ヒートライザ】に攻撃したらダメ！ むしろ少し離れた方が良い!!』

「え？ 一体どういう……」

『ッ!? おい見ろ！』

その警告に疑問を呈する月夜だったが、直後にシユウから発せられ

た警告に従って【ヒートライザ】の方を見て目を見開いた……何と【ヒートライザ】の身体にあつた古傷の様に模様が全て開き、そこから『赤い蒸気』を吹き出しながら先程までとは明らかに違う異常な雰囲気纏つて立ち上がったのだ。

『GURURURU……GUAAAAAAAAA!!』

「な……熱う!?？」

『これは……まだ奥の手を隠してやがったな!』

そうして立ち上がった【ヒートライザ】が大咆哮を上げるとともに全身に付いた傷口から大量の『赤い蒸気』を噴出して、それと同時に先程までとは比べ物にならない程の熱波を放出し始めたのだ……シユウの言葉通り、これが【ヒートライザ】が〈UBM〉になった際に覚えた三つ目のスキル《熱体血放》——自身の体温を急上昇させて病毒系状態異常を熱消毒する事で無効化し、更にSTR・AGI・熱系スキル効果を三倍にするという超強力スキルである。

……それによって状態異常から回復した【ヒートライザ】は自身の近くで戦っていた【ラーゼクター】とミカに目をつけ、熱系スキル強化により5000度を優に超える超高温となった《ヒートボディ》付きの爪牙を使い、先程とはまるで違う荒々しい暴力的な動きで二人を噛み砕かんと攻撃を仕掛けていった。

『あ、ヤベ、全力で離れないと死ぬ……《竜尾剣》!』

『GUUUUAAAAAAAAA!!』

『TIE!!』

その直前に“直感”で【ヒートライザ】の攻撃を感知したミカは、即座にその場から飛び退ると共に《竜尾剣》を地面に突き刺して全力で伸長させる事で自分の身体を無理矢理移動させた……それに僅かに遅れて【ラーゼクター】も攻撃に気が付きその場から逃れようとしたが、その一瞬が致命的となり本能のままに動いている【ヒートライザ】に“最も脅威度に高い敵”としてロックされてしまった。

……予想外の展開になったもののAGIに関しては自分の方が上なのでどうにか逃れようとした【ラーゼクター】だったが、距離を取った瞬間に【ヒートライザ】がほぼノータイムで放った《ヒートブラス

さつきから気温の上昇率が急激に上がってやがる。多分後数分もしないうちに俺たちの熱耐性を抜いてくるぞ』

「あー、アイツらの戦いが終わったら残った方が更にパワーアップして襲い掛かってくる上、このまま待機したら葵ちゃん以外は全員焼け死ぬと。今もサウナみたいに暑いしなあ」

「……流石に私一人じゃ勝てない」

『とにかく、どうにかしてアイツらのどつちかを倒さないと……何かいいアイデアは無いかな』

そのシユウと月夜の説明によって現在実に面倒な状況になっている事を理解した彼等は、下手に割り込む事も難しそうな二体の戦いを見ながらどうしようかと悩んで居たが、そこで二体のへU B Mへ《看破》を使っていたへ月世の会《メンバーの立花翔が取得出来た情報を提示した事で状況は動き出した。

「オーナー、看破したところ「ラーゼクター」の方は先程の我々と同じ六重状態異常に掛かっていますが、逆にステータスにバフが掛かっている様です。そして「ヒートライザ」の方はあの状態に徐々に最大HPが下がっています」

「うーん「ラーゼクター」の方は状態異常効果の反転って感じかな？

敵には状態異常をばら撒いて、自分は強化するっちゆう感じで」

『「ヒートライザ」の方はデメリット付きの強化スキル……いや、さっきまでの知性のある動きと違って今は本能のままに敵に襲い掛かっているから狂化スキルと言った方が正解か』

そう「ヒートライザ」のスキル《熱体血放》はステータス強化の際に《熱羽》でも放熱しきれないぐらいに体温が上昇してしまうので、体温を無理矢理下げる為に全身の古傷から自身の沸騰した血液を放出して強制的に放熱しているのだが、そのせいで十秒毎に最大HPの1%が減るデメリットが課せられるのだ。

更にそれによる激痛で正常な思考が難しくなり、本能のままに戦闘する狂化系スキルとしてのデメリットを持ってしまっているスキルでもある……まあ、その分だけ強化値は非常に高い上、激痛によって精神系状態異常を無効化出来るというメリットもあり、更に好き勝手

暴れるだけで《熱態圏》と放熱や強化された熱系スキルの組み合わせで周囲の全てを焼き尽くす灼熱空間が完成するが。

……それが分かっていた彼等もどうにかしてあの二体を倒す方法が無いかと考え、そこで翔が一つの案を提示した。

「[ラーゼクター]の方は状態異常に掛かったままスキルでその効果を反転させている……それなら俺の「コロッセウム」の必殺スキルでなに対処出来るかもしれません。最悪でもあの二体を分断出来ます」

「成る程、カケやんのへエンブリオならいけるか。今の「ヒートライザ」ならウチらが接近してもギリギリ死なへんやろし、さつき考えた作戦を実行するぐらいは出来るか」

『……どうも悠長に話している暇はなさそうぞ。アイツらがこっちに来てる』

そうシュウに言われた彼等は二体が戦っている方を見ると、そこには「ヒートライザ」に追われながら全速力でこちらに向かってくる「ラーゼクター」の姿があった……今の「ヒートライザ」がただ本能で獲物に襲い掛かっていると気が付いた「ラーゼクター」は、それなら近くにいる人間達に押し付けMPKすれればいいと考えたのだ。

……仮に人間達に攻撃されてもそれでターゲットが移るだろうか？ 問題なく、もし押し付けられなくとも人間達を巻き込んで乱戦に持ち込んだ方が勝算は高いと判断しての戦術である。

『GAAAAAAAAAAAAAAAAA!!』

『TIE!!』

「……うんしやーない、カケヤン必殺スキルを頼むわ。とにかく「ラーゼクター」の足止めをお願いや」

「了解しました。……後、足止めは構わないんですが……別に倒してしまっても構わないんでしょう？」

「一向にオツケーやで……てゆーか、それが言いたかっただけやろ？」

バレました？ といい笑顔を浮かべながら翔はパーティーから離れて向かってくる二体の前に行き、自身のへエンブリオが宿った左手を前に出した。

「味方側は俺一人、敵対象は【蠱毒狩蟲 ラーゼクター】同じく一体……各スキル設定完了。では行きますか……《絶対平等決闘場》！」
そうして彼が必殺スキルの発動を宣言した直後、彼自身と【ラーゼクター】のみを囲む様に高さ10メートル程の壁が直径50メートル程の円形状に超高速で展開され、それ以外の【ヒートライザ】や他の人間達はまとめて外に弾き飛ばされた。

『G A A A A !?』

「おっと、範囲内に入っとったか。でもこれで分断完了やな」

『成る程、TYPEキャツスル系列のへエンブリオだっただね』

ミカの言う通り、へ月世の会メンバー立花翔の【同一戦場 コロッセウム】はTYPE：テリトリリー・キャツスルの円形闘技場型へエンブリオであり、その効果は……。



『K I T I ……』

「おっと、温度も下がってるね。……まあ、以前の実験ではオーナーのスキルも外から中には届かなかつたし、多分スキルが遮断されたからだろう」

ところ変わってそこは展開された【コロッセウム】の内部……そこに居る【ラーゼクター】はいきなり周囲に壁が展開された事に驚きはしたが、目の前に一人の剣を持った人間がいた事からそいつが自分を閉じ込める目的で何かのスキルを使ったのだと直ぐに思い至った。

……更には男の発言と先程まで地獄の様な超高温だった気温が大幅に下がっている事から、上方は空いている様に見えても外部との繋がりが遮断されている事を察し、これまでの経験からこの手のスキルは術者を倒せば解除出来ると考えた……その直後、彼は自身を蝕む六重状態異常によって膝をついてしまった。

『K T I ? ? ?』

「……どうやらキチンと【コロッセウム】の効果は効いているみたいだな。へエンブリオのスキル以外という大雑把な設定だったから上手

くいくか不安だったんだが……」

……立花翔の「エンブリオ」[「コロッセウム」]の能力特性は決闘場、及びその中での平等無差別なバフとデバフであり、現在は必殺スキルと緊急展開・格納用のスキル以外に三つのスキルを有している。

まず一つ目が「内部にいる者の任意のステータス一つを半減させ、別の任意のステータス一つを倍加させる」《特殊規則：能力偏向》。二つ目が「内部にいる者の攻撃手段一つによるダメージ量を半減させ、別の攻撃手段一つのダメージ量を倍加させる」《特殊規則：攻撃偏向》。三つ目が「内部にいる者に任意のスキル種別一つの効果を半減させ、別のスキル種別一つの効果を倍加させる」《特殊規則：技能偏向》と言った具合だ。

……そして必殺スキル《絶対平等決闘場》は自身と味方を任意の数だけ指定して、それと同数の指定した敵対象を[「コロッセウム」]内部に強制的に取り込み、更に上三つのスキル効果を強化及びスキル指定の為の「任意」の自由度を大幅に増した上で適応するという物である。

「現在、この[「コロッセウム」]内部では『AGI7割減、MP三倍』『自身の肉体を使った攻撃のダメージ7割減、武器によるダメージ三倍』……そして『エンブリオ』以外のスキル効果7割減、エンブリオのスキル効果三倍』のバフとデバフが掛かっているのさ。後、この必殺スキルを使った[「コロッセウム」]が敵味方のどちらかが全滅しない限り俺にも解除不可能だから」

『……ッ!??!』

そう、この『エンブリオ』以外のスキル効果7割減』のデバフによって《免疫生能》《害毒反転》の効果が悪化した所為で[「ラーゼクター」]は自身の六重状態異常の効果を受けてしまっているのだ。

ちなみに彼が態々掛かっているバフデバフの効果を説明したのは、これらのスキル全てに『自身がこれらの説明前に攻撃した場合、コストである一分ごとの消費MPが百倍になる』というデメリットが課せられているからである。

……どこまでも「平等」を要求する（平等とは言っていない）自身

のへエンブリオに苦笑を浮かべつつ、説明を終えた翔は手に持った剣を膝をついた【ラーゼクター】に向けて構えた。

「さて、平等とは名ばかりの一方的にこっちが有利な決闘場ではあるが、容赦なく行かせてもらおうぞ！」

『……………!?』

……………そうして【コロッセウム】内部におけるへ月世の会メンバー立花翔と伝説級へUBM【蠱毒狩蟲 ラーゼクター】の“決闘”が始まった。

距離を詰めて行くものの、近づく毎に密度の増す弾幕に加えてこちらからの砲撃を意にも介さず熱球を連射してくる【ヒートライザ】の苛烈な攻撃を受けて徐々に追い詰められていった。

『GUUUUUAAA!!!』

『【ヒートライザ】、熱球を吐き出しながらこちらに接近』

そして、ある程度バルドルが接近した所で【ヒートライザ】は熱球を連射しながら一気に駆け出して距離を詰めて来た……元より今の【ヒートライザ】は圧倒的なSTRと身に纏う高熱による接近戦の方が強く、それを本能的に理解しているが故に相手を確実に仕留める際には己の爪牙を使う事を優先しているのだ。

『……やっぱり距離を詰めて来たか。さっきの【レーザークター】との戦いでも執拗に距離を詰めようと追いかけて来ていたからな』

『大気温度の急激な上昇を確認』

『接近するだけで焼き殺せる以上は当然の対応だが……バルドル、通常弾頭砲撃の後にB弾頭セット』

『……了解』

『GEEEEAAA!!!』

だが、その行動を読んでいたシユウは冷静にバルドルへと指示を出し、それにより放たれた砲弾が【ヒートライザ】に突き刺さる……が、それでも相手の足は止まらず、遂に《熱態圏》の逸話級特典武器【ふえいうる】が焦げるレベルの温度となっている距離まで接近されてしまった。

……そこまで接近されて仕舞えばバルドルの砲撃よりも【ヒートライザ】の爪牙が届く方が早く、そのまま戦車の正面装甲すら溶かす超高音を纏った牙によってバルドル毎上に乗っていた【ふえいうる】は噛み砕かれ……。

『残念だが……中の人など居ないぞ?』

『GAAA!?!』

それによってバルドル内にセットされていたB弾頭——ブラフ用の煙幕と派手なだけの炎を撒き散らす弾——と、中に誰もおらずただ置かれて居ただけの【ふえいうる】の中に入れてあった【煙玉】が起

爆して【ヒートライザ】の周囲を炎と煙によって覆い尽くした。

……何の事は無い、単にシユウはバルドルに無線で指示を出しながら遠隔操作させて【ヒートライザ】へと突っ込ませ、わざと攻撃させる事で相手の視界を奪って隙を作ったのだ。

『……バルドル回収、そして第一形態』

そして、相手が囷に気を取られている隙にこっそりと【コロッセウム】の反対側から回り込んでいたシユウは、破壊されたバルドルを紋章内に回収して再度第一形態の腕部装着型大砲として展開した。

……尚、もしバルドルが第五形態^大以降^艦を発現させていたら形態間の構造に差があり過ぎるデメリットとして形態変更に硬直時間が発生していたが、現在は第四形態^車である為まだ硬直時間のデメリットは無く、それ故にシユウは即座に次の行動に移る事が出来ていた。

『最近手に入れたヤツだが頼むぞ【らびふつと】……《アームズ・フアイア・レジスト》《大跳躍》！』

更にシユウは来ている『白いウサギ型の着ぐるみ』——逸話級特典武器【すーぱーきぐるみしりーず らびふつと】に火炎耐性を付与した後、その跳躍の飛距離と速度を大幅に強化する装備スキル《大跳躍》を使って地面を蹴り一気に【ヒートライザ】との距離を詰めた。

……この着ぐるみはシユウが以前に逸話級^{ユニーク・ボス・モンスター}へU B Mの【跳躍兎殺 ラビフット】を倒した時に手に入れた物で、超音速の跳躍による一撃必殺の奇襲を得意としていた致命^{ヴォーバルラビット}兎の能力を反映した跳躍強化・気配操作の特性を宿しているのだ。

『ッ!??!』

『遅い！ 《ストレンジス・キャノン》!!!』

その《気配操作》スキルと目くらまし煙幕によって【ヒートライザ】はこちらに向けて跳躍してくるシユウに気付くのは一手遅れてしまいい、そちらに振り向いた時には既にシユウは【ヒートライザ】の回避が間に合わない距離まで接近して大砲から巨大な光球を撃ち放っていた。

……この《ストレンジス・キャノン》は第四形態時にはシユウのSTR約8000の二十倍……つまりは15万以上の攻撃力を持って

おり、直撃すれば【ヒートライザ】と言えど致命傷は免れない一撃だったのだが……。

『G A A A A A A A!!』

そもそも目の前の敵を倒す事しか考えられない【ヒートライザ】が必殺の光球を前にして取った行動は迎撃……口から可能な限りの最大威力で《ヒートブラスト・コンバージェンス》を光球に向けて放つ事だった。

……《熱体血放》の効果によりノータイムで放たれた熱線は超威力の光球とぶつかり合い僅かな時間だけ拮抗した後に押し切られてしまったが、その軌道を僅かに逸らす事には成功した。

『G U U U U U A A A A A A A A!』

『……逸れたか。片腕と片翼は奪えたから最低限の仕事は出来たが……本能だけで動いているから意外な最適解を取って来るな』

それでも放たれた超威力の光球は【ヒートライザ】の顔を僅かに逸れて直ぐ横を通過し、熱線により多少威力を落としながらもその片腕と片翼を消しとばした。

……しかし、元より《熱体血放》のデメリットで理性を失うだけの激痛を味わっている【ヒートライザ】にとって今さら腕を失う程度の痛みは誤差の範囲であり、新しく出来た傷口から血の蒸気を噴き出させながら目の前の敵シユウに向かって突撃を敢行した。

『G A A A A A A A A A A A A A!!』

『やっぱり痛みやダメージでは止まらないか！ 《大跳躍》《空中跳躍》！』

だが、仕留めきれなかった時点でそう来ることを読んでいたシユウは即座に後方へと跳躍しつつ、更に装備スキルによって空中を蹴って後ろに飛ぶ事で自身を加速させながら距離を取った。

そうして装備補正で強化されたA G Iもあって【ヒートライザ】の近接での間合いから離脱する事に成功したシユウは、耐久力が【ふえいうる】と比べて高くない【らびふつと】が燃えかねない高温圏に入らない様に、その上で逃げながらも相手を引きつけつつ【テレパシーカフス】で“本命の人員”に連絡を取った。

『今なら【ヒートライザ】の注意は片腕と片翼を奪ったこつちに向いてる。仕掛けるなら今だ、ミカちゃん、葵ちゃん……後女狐』

『ありがとうシユウさん！　じゃあ行こうかな！』

「……健太さん、おクスリをお願い。ステータスが足りないかも」

「分かった。《瞬間充薬》【オーバーブースト・ドーピング】セット……

《霊薬は口に易し》《オーバーブース》《瞬時注射》

「……ウチだけなんかおぎなりちやう？」

そうしてシユウを追う【ヒートライザ】の背後に【コロッセウム】の左側からミカが、右側から葵と健太が現れた……そして右側に居る健太はデメリットと引き合えにSTR・END・AGIを大幅強化するドーピング薬を、【ヒュギエイア】だけでなくステータス強化薬剤の効果を強化する【薬効戦士】の奥義《オーバーブース》まで使った上で葵に注射する。

……そして、その間にミカは本命である彼女達に注意を向けさせない為にも、視線がそちらに向かない位置から大声を上げながら全速力で【ヒートライザ】に突っ込んでいった。

『うら——！！』

『GUU!?　G A A A A A A A A A!!』

そんな雄叫びを上げながら突っ込んできた着ぐるみ^ミに対して、これまでの戦いから炎が効く相手だと判断した【ヒートライザ】は即座に《ヒートブラスト・スファイア》を連射しながら接近する、

……スキルの所為で本能的に『攻撃して来た相手か向かって来る相手を優先的に攻撃する』程度の思考しか出来ない【ヒートライザ】はそうするしか無く、その辺りも読んでいたミカは上手い感じに葵達の方に注意が向かない様にしつつ引き気味に戦っていた。

「……オーナー、合図をしたら……」

『分かつとるえ、いつでも切り替えられる様に準備しとる。行つたれ葵ちゃん』

「了解……じゃあ行く！」

そして、ミカが【ヒートライザ】の注意を引き付けている隙に準備を終えた葵は、月夜に通信を送った後で超音速機動で駆けていった

……健太が使った「オーバーブースト・ドーピング」は効果時間終了後のステータス激減、及び効果発揮まで1分以上かかるデメリットを代償に、STR・END・AGIと言った物理ステータスを3000近く上昇させるといふ代物である。

……彼はそこに《霊薬は口に易し》の効果上昇・デメリット軽減とステータス上昇薬の持続時間を半減する代わりに効果を倍加させる《オーバードーズ》を使い、更に『どんな薬でも即時に効果を反映させる』《瞬時注射》を使う事で効果発揮までの時間をゼロにしたのだ。

『GA!?!?』

「遅い！ 動きがスロウリイ！ もう何も怖くない!!」

『なんか凄いフラグっぽい?!?』

その結果として薬による物理ステータス上昇値は8000を優に超え、現在の葵のステータスは戦闘型超級職に匹敵するものとなり、ミカのツツコミを無視して彼女は「ヒートライザ」が何かするよりも早く接近する事に成功していた。

……咄嗟に「ヒートライザ」は尻尾を振るって迎撃するものの、葵は強化されたステータスでもってそれを飛び越えてそのまま相手の背中へと組み付いた。

「オーナー!!!」

『徐算対象変更、END!』

「《エンチャント・フィスト》！ せやっ!!!」

その葵からの合図で月夜は《月面徐算結界・薄明》の対象をENDに変更し、その直後に葵は「インフェルノ・デモンズガントレット」を付けた腕を片翼が吹き飛んだ時に出来た背中^{ENDが六分の二に}の傷口に打ち込んだ……その腕は脆^{ENDが六分の二に}くなっていた事と、事前に掛けておいた腕部攻撃力強化のスキル効果もあって肘ぐらいまで相手の体内に埋まってしまう。

『GIE!?!? GAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!』

「ぐおっ!?!? でもこれなら離されない!」

そんな自分の背中で好き勝手する葵を振り落とそうと「ヒートライザ」は全身から熱波を放出しながら全力で暴れるが、熱波は葵の

泡立ち始め……その次の瞬間にはその肉体は熱量に耐え切れなくなつて大爆発を引き起こし跡形もなく消滅したのだった。

◇

「……ああああああああああああ……」

そうして「ヒートライザ」が大爆発を起こした直後、その上に乗っていた葵はそんな棒読みの悲鳴を上げながら爆発の衝撃波によつて吹き飛ばされていた。

『はい、ナイスキャッチ!』

「センキュー。おクスリによる強化が無ければ即死だった」

そんな風に飛ばされていた葵も近くにいたミカにキャッチされて無事に地上に着地した……そして二人は「ヒートライザ」をちゃんと仕留めたかどうかを確認する為にそちらへと視線を向けると、そこには足先や尻尾の残骸しか残っていない「ヒートライザ」の姿があった。……そして彼女達が見ている前でそれらの残骸は光の塵となつて消えていき、その死によつて《熱態圏》が解除され熱量が拡散して気温が大幅に下がった。

〔UBM〕〔熱態己竜 ヒートライザ〕が討伐されました〕

〔MVPを選出します〕

〔日向葵〕がMVPに選出されました〕

〔日向葵〕にMVP特典【熱竜冠 ヒートライザ】を贈与します〕

「やったぜ、初MVPアンド特典武器ゲット」

『おめでどう。……まあ、序盤から最前線で戦つてトドメも刺したんだし当然かな』

更にその場にいる彼等へとそんなアナウンスが流れたので、ようやく「ヒートライザ」を倒せたと安堵した彼等はMVPを取つた葵の元へと集まっていた。

「おめでとー葵ちゃん。これでへ月世の会ではウチに続いて二人目の特典武器持ちやな。他のクランよりも一歩リードや」

「保有特典武器の数がクランの価値を決める物でも無いと思うけど

……ちなみにミカちゃん、貴女達のパーティーで保有する特典の数つていくつ？ 差し支えなければで良いけど」

『私が二つ、お兄ちゃんとミュウちゃんですつだから合計四つだね』

「……〈UBM〉との遭遇率おかしくない？」

そんな月夜の疑問をスルーしつつ、集まった彼等はまだ残っている問題——未だに屹立している「コロッセウム」の内部について考える事になった。

『えつと月夜さん、確かあの「コロッセウム」は中に居るどちらかが死なない限り解除は出来ないんですよ？』

「せやね。しかも内部と外部を完全に隔絶しとるから、ウチのスキルはおるか「テレパシーカフス」での通信も出来へんから中の状況は分からへんし」

『パーティーメンバーのHP表示は見えるから無事かどうかぐらいは分かるんだが……少しずつHPが減っていつてるな』

「事前に私の「ヒュギエイア」でHPの持続回復ポーションを打っておきましたか……」

そうして彼等は念の為に減ったHP・MPの回復や装備の調整などをしつつ、中で戦っているであろう立花翔の細かく増減しているHPゲージを見ていたのだが……突如、そのHPが一瞬でゼロになった。

「翔ツ!?？」

「……カケやん、あかんかったかー」

唐突な克蘭メンバーのデスクペナルティに驚く健太と言葉とは裏腹に厳しい雰囲気を目を細める月夜の前で、主人を失った「コロッセウム」が光の塵となって消えていき……完全に消え去った跡には人型の魔蟲——【蠱毒狩蟲 ラーゼクター】が両手に槍と剣を持った状態で立っていた。

……その【ラーゼクター】が「武器」持っている事、そして状態異常が完全に治っているのを《看破》した月夜は、事前に聞いていた翔が【コロッセウム】でデバフを掛ける要素を照らし合わせて一つの結論に至った。

「あの両手の武器はカケヤンが持ってたんと違うな。それにヘエンブリオ以外のスキルは制限されとった筈やし……アイツ、ひよつとしてアイテムが使えるんちゃうか？」

『……………』

その月夜の言葉に答えるように「ラーゼクター」は両手の武器を身に付けていたアイテムボックスに仕舞う事で消し去ってみせた……そう、彼はこれまで狩って来た人間が使っていた中で容量が大きく頑丈で小さいアイテムボックスを回収し、外からは分からない様に《混蟲代百化》を使って外殻の内側に身に付けていたのだ。

そしてそのアイテムボックスにこれまた狩った人間から回収した中で使えそうなアイテムを仕舞ってあり、その中には先程装備していた一流のティアンが使う様な高性能装備や状態異常を回復させるアイテムも入っていた。

……つまり「コロッセウム」内でスキルを封じられた「ラーゼクター」は即座にアイテムボックスに入っていた「快癒万能薬」を使用して自身の状態異常を治し、更に《瞬間装備》で武器を取り出して翔を始末したという訳である。

『……………』

「……………仕掛けてこおへんな」

『こつちの様子を見ているみたいだが……』

『狙っていた「ヒートライザ」が先に倒されたからガツカリしてるのかな？』

だが、直ぐにでも戦闘が始まると思っていた彼等の考えに反して、武器を仕舞ったその場を動かずに警戒しながら「ラーゼクター」は辺りの様子を確認していた……実はミカの意見は結構惜しい所を突いており、今の「ラーゼクター」は狩る予定だった「ヒートライザ」を先に狩られた事、そしてへUBMを倒せるだけの戦力を持つ人間と戦うリスクを考えて行動が慎重になっているのだ。

……加えて「ラーゼクター」はこれまでに何度かへマスターを倒した事があり、その際に『痣持ちの人間は強さの割に倒した時の経験値が少ないから割に合わない』と思ったので、態々ここで目の前の人

間を倒しても大したメリットは無いとも思っていたので、彼の内心は『撤退』に傾き始めていた。

「ウチはMP回復させたからまだ戦えるけど、クマヤんは？」

『……主戦力の第一と第四が壊されたから戦力はかなり落ちてるな。後は肉弾戦ぐらいか』

「私も必殺スキル使ったし、おクスリのデメリットが……」

「まだ薬は残っていますが、肝心の『快癒万能薬』が後一つしかありません」

『【ギガス】は少し溶けてるけど十分戦えるかな』

『……………』

……だが、そんな事までは分からない彼等は現在の状況を確認しつつ戦闘態勢のまま様子を見ており、それを見て逃走時に攻撃される可能性を考えて【ラーゼクター】の方も彼等から目を離せずに戦闘態勢のまま警戒を続けていた……そんなお互いに微妙に噛み合わない状態で、彼等は不気味な沈黙と共に膠着状態のまま睨み合いを続けるのだった。

難易度が九である本当の理由

□〈ヘクルエラ山岳地帯〉
【重戦士】ヘビーファイター ミカ・ウイステリア

どうにか〈U B M〉【熱態己竜 ヒートライザ】を倒した私達だったが、パーティーメンバーの一人である立花翔さんが倒された事で彼の〈エンブリオ〉で足止めしていたもう一体の〈UBM〉【蠱毒狩 蟲 ラーゼクター】が解放されてしまったのだ。

『……………』
「……………」

そして現在、その「ラーゼクター」と私達はお互いに戦闘態勢を取りながらも何もせずに只睨み合っていた……こっちは「ヒートライザ」との戦いでかなり消耗してるから、このまま「ラーゼクター」との戦いになったらキツイってもんじゃ無いし。

……加えて今仕掛けたら詰むって私の「直感」が言っている上、目の前の「ラーゼクター」がまったく隙を見せないからシユウさんや月夜さんも手が出せないんだよね。

（さて、真面目にどうしよか？ このまま睨み合っても拉致があかんやろ）

（俺の見立てだと女狐の徐算があれば俺とミカちゃんなら接近戦で抑えられるだろうが……決め手に欠けるな）

（勘だけど今の戦力じゃアイツは倒し切れないと思うよ。どっか行つてくれないかな？）

（……あ、やばい、そろそろドーピングの反動が……）
（抗ドーピング薬はあるが……）

そんな感じで私達は「ラーゼクター」の様子を見つつ小声で話し合っていたのだが……突然、私の「直感」が『何か別の脅威が迫って来る』事を示した。

……直後、明後日の方角から何やら「多数の足音」が聞こえてきたので、私達と「ラーゼクター」はそちらに目を向け……。

『……………アレは……………』
「ええ……………なんか来るんやけど……………」

『どうやらここからが本番みたいだね』

『……K I E……』

……そうして、そちらから近づいて来る“モノ達”を見た私達と「ラーゼクター」は思わず呻きながらも、ここで硬直した状況が動く判断していつでも戦闘に入れる様に身構えた。



◆◆◆
■へクルエラ山岳地帯へ 廃砦

「おつ、お頭あ!?? 大変です!!!」

「……何だ、騒々しい」

「まあ一旦落ち着きけ。何があつたのかゆつくり話しな」

アルター王国とカルデイナの国境地帯にあるへクルエラ山岳地帯へ
にある廃砦、そこを根城にしているへスミス山賊団へグレイト・バンデイツトの首魁
【大盗賊】ジョン・スミス（仮名）とその相方（共犯者）である
【大戦士】のダリー・スミス（仮名）は、慌てた様子でいきなり自
室に入って来た配下の一人に辟易しながらも何があつたのかを問い
ただした。

「へ、へえ……お頭達に言われて辺りの監視を強化していたんですが、
そしたら【斥候】スカウトのヤツが山の中程ぐらいでへUBMへを見たつて……」
「詳しく話せ」

その山賊の口からへUBMへという言葉が出た瞬間、ジョンとダリー
の雰囲気鋭いものへと変わった……彼等もこの世界のテイアンと
してはレベルを500でカンストしている幾多の戦いを潜り抜けた
強者であり、それ故にへUBMへの恐ろしさをよく理解しているのだ。
……そして山賊の一人はへUBMへの名前が【熱態己竜 ヒートラ
イザ】である事、そいつがこの山に入って来た《鑑定眼》が効かない
機械的な馬車を引いた多脚戦車と交戦状態に入った事、そして直ぐに
どこかに逃げていった戦車を追って【ヒートライザ】もまた何処かに
行ってしまった事を伝えた。

「……機械的な戦車か。こんな所に居るって事はドライブ製でも無さ

そうだし、鑑定が効かなかった事を考えると〈マスター〉の〈エンブリオ〉の可能性が高いか」

「そ、それでお頭！ 俺達はどうすれば……」

「落ち着け、まだその〈UBM〉がこつちに来ると決まった訳じゃない（ティアンは経験値が高いからそうなる可能性は高いだろうが）……とにかく周囲の監視を強化して、万が一〈UBM〉がこつちに来るようならば即座に撤収すればいい（そんな余裕が無い可能性も十分あるから俺達は先に撤収するが）だから落ち着いて行動しろ（そんで精々囷になれ）」

「は、はいっ!?？」

そんな風に完全に配下を見捨てて逃げる気な本心を隠しながら、ジョンは配下の山賊に指示を出して部屋から追い出した……彼は自分が比較的才能に恵まれたお陰でカンストレベルの強者になれたが所詮はそこ止まりだと考えており、自分が〈UBM〉に勝てる程の^{超級職}規格外には慣れないと自覚しているが故に引き際は弁えていたのだった。

ちなみに見張りに出た山賊が「ヒートライザ」を見た時点でアジトに戻ったので彼等は新たに現れた「ラーゼクター」の存在は知らないが、仮に知ったとしても逃亡という選択は変わらなかっただろう。

……そうして配下が出て行った後、彼は気取られぬ様に相方のダリーと共に砦から逃げる準備をして行った。

「それで兄貴、持っていくものは？」

「〈UBM〉と遭遇する可能性がある以上、動きやすい様に身一つだ……と、言いたかったんだがそつちの小娘はどうするか……」

「んおっ？」

そう言っただけでジョンは部屋の隅にある檻の中でさつきからずっとお菓子を貪っていた「リトル・ネイチャーエレメンタル」の少女の方を見た……ジョンが当初希少なモンスターで高く売れるだろう彼女だけは連れて逃げようと思っていたが、それと同時に近くに〈UBM〉がいる以上は万が一を考えると足手纏いを連れて行く事に不安を感じていてどうするか悩んでいたのだ。

加えて彼女が先程言った『この山は荒れる』という言葉通りにへU B M が現れたので、彼の中では『この少女は本当にただのレベル1 モンスターなのか?』という疑問が浮かんでおり、それを確かめる為に改めて問い詰めるつもりで声を掛けたのである。

……だが、彼が問い詰めるよりも早く、食べながらも話を聞いていたエレメンタルの少女はともすると呑気な口調で驚きの言葉を口にした。

「……ああ、話は聞いておったぞ。中々物騒な事になって来た様じゃな……まさかワシが感知したのは別にへU B M まで現れるとは」
「……………待て、お前は一体何の話をしているんだ?」

……その口から放たれた余りにも意外すぎるその言葉にジョンは思わず聞き返してしまっただが、彼女は特に気にせず『少々説明不足だったか』と考えて先程自分が感じ取った事について詳しく話し始めた。

「うむ、今のワシ」の種族である「ネイチャーエレメンタル」は様々な属性の自然魔力の扱いに長けた種族でな、それ故に自然魔力を感知する能力も高いのだが……その感覚でどうもこの山の地脈に流れる自然魔力に不自然な淀みの様なモノを感じ取ってな。殺された生物の怨念が地脈に染み込む事はままある事ではあるが、それにしても怨念が異常に広範囲から感知されておるでな。……普通ならばその手の怨念は地脈の自浄作用で時間をかければ浄化されるものなのだが、ここまで溜まっておるのは明らかに不自然じゃからな。故に山岳地帯の地脈に怨念中心のロクでもない干渉できる「何者か」の意思が関わっておる可能性が高いと思って忠告したんじやよ」

「……………」

彼女が語ったその内容を聞いたジョンとダリーは思わず黙り込んでしまった……それが明らかに『只の感覚だけでなく異常なまでの知識と経験に基づくモノ』だと理解してしまっただが故に、目の前の少女が只の『レベル1エレメンタル』などでは無くもつと計り知れない何者かでは無いのかと思いついてしまったからだ。

……その解説が終わった後、部屋の中は張り詰めた様な沈黙に包ま

れたが、やがて堪り兼ねたジョンが口を開いた。

「……お前は一体何者なんだ？」

「んー、ワシか？ ……まあ普通のエレメンタルと言うには違うじやろうが、単にちよつと転せ『ギャアアアアアアアアアアアアアアアアア!!』……む、なんじゃ？」

重苦しい雰囲気で放たれたジョンの質問に対して彼女は軽い口ぶりで答えようとしたのだが、その直前に砦の外から山賊達の悲鳴が聞こえてきた所為で話は中断されてしまった。

……そんな立て続けに起こった異常事態にとうとう冷静さを失い始めたジョンは、頭を書きながらも外の見張り役に持たせておいた通信用アイテムを手にとつて連絡を取った。

「今度は一体なんだ!?!」

『お、お頭！ いきなりこの砦に襲撃を掛けてきたヤツが！ アレはまさかゴー……グワアアアアツ!!』

「おいっ!?!? どうしたっ！ おいっ!!! ……くそっ!?!? 切れたか。……一体この山で何が起きてるってんだ!!」

向こうの使用者がやられた所為で通話が切れてしまった通信用アイテムを握りしめながら、ジョンは思わず余りにも悪い条件になってしまっている現状への苛立ちを吐き出す様に叫んでしまった。

……彼等へスミス山賊団の拠点を襲ったモノ、それは……。



□へクルエラ山岳地帯へ 廃砦前 ランドマンサー【黒土術師】レント・ウイステリア
いきなり襲い掛かって来たへUBMへ【ヒートライザ】をミカとシユウさん、月夜さん達に任せて、俺達は山賊団のアジトである廃砦前
やって来ていた。

……まずは廃砦の偵察を行う為にデカくて目立つ【スレイプニル】と【チャリオツツ】を乗り手である佐藤結奈さんと佐藤利奈さんと一緒に離れた場所に待機させて、俺とミュウちゃんと月影さんで廃砦前までやって来ていた。

「……それでミュウちゃん、あの砦の内部に居る人間の位置はどうなってる?」

「んー……私に分かるのは位置情報と大雑把な強さだけなんです。……あの砦内部には大体下級職一つ目の人間が多くいますね。それがあちこちに」

そして今は砦から少し離れた茂みの中で、俺が就いているジョブの一つ【イリュージョニスト幻術師】で習得した《光オプティカル・迷カモフラージュ彩》を使って姿を消しながら、ミュウちゃんの【ブラックオーツ】の《人間探知》で廃砦の内部を探っている所だ。

……ちなみに月影さんは単独で動く方は隠密能力が高いとの事なので、俺達よりも更にアジトに近づいての偵察を頼んでいる。

「……砦の内外にレベルが低めの連中が慌ただしく動いています、多分コイツらが山賊団でしょう。それと他と比べてレベルが高いのが二人程二階の一箇所に留まっていますね。……後、地下にレベルが低い人間が六人一箇所に留まって動いてないです」

「……地下の人間が誘拐された人達かな、事前情報と数が一致するし。……二階のヤツらは山賊団の首魁かな。三人いるって話だったが一人いないのか……」

目を閉じて集中しながら内部を探ったミュウちゃんの報告に対して答えつつ、俺はどう人質を救出するかを考えて行く……と、その時に偵察に行っていた月影さんから【テレパシーカフス】で連絡が入った。

『こちら月影です。……少し山賊達の話《盗み聞き》したんですが、どうも【ヒートライザ】と私達の戦いの一部が目撃された様で【スレイプニル】と【チャリオツ】の存在にも気づかれています。今も《UBM》を警戒して見張りを強化しているみたいですね』

「ありがとうございます、月影さん。……さてどうするか」

見張りが強化されているとなると潜入は難しいし、その上で【スレイプニル】と【チャリオツ】の事も気付かれています……とありあえず【テレパシーカフス】を結奈さんと利奈さんに繋げて現在の状況を知らせてから話し合うか。

「……………と言うのが現在の状況ですね」

『うえー、難易度爆上がりじゃん』

『難易度：九のクエストだけあって面倒な状況ですね』

『潜入して人質だけ連れ出して逃げると言うのは…………』

『私とレントさんなら潜入する。だけ』なら出来るかも知れませんが、中に居る人質を山賊達に気付かれずに連れ出すのは厳しいでしょうね』

結局の問題は月影さんが言う通り人質を連れ出すって所なんだよな。今回のクエストの目的はそこな訳だし…………これは多少荒っぽく行くしかないか。

「やっぱり囷役が派手に暴れて山賊の注意を引き付けている隙に、やや強引にでも人質を連れ出すしかないかな。…………ちよつと戦力が足りないのが不安だが」

『山賊達は〈UBM〉の登場で浮き足立っていますから案外上手く行くかも知れませんが…………誰が囷役になります？』

「囷役は当然俺が行く…………と言うか、人質までの案内と潜入役にミュウちゃんと月影さんは必要だし、結奈さんと利奈さんは必要の回収をしてもらわないといけないしな。ヴォルトと一緒に俺だけでもまあ何とかなるだろう」

基本方針としては俺とヴォルトが派手に暴れると同時にミュウちゃん月影さんが潜入、それと共に結奈さんと利奈さんにもこつちに来てもらって潜入した二人が人質を連れ出した所で回収、そのまま逃亡…………って感じで行ければ理想なんだが。

…………正直、自分で考えておいて大分雑な作戦ではあるが、何でも月影さんの〈エンブリオ〉には影の中に他者を入れるスキルがあるらしいので、山賊の注意を引き付けさえすれば人質を逃がす事は可能だろうって事でこういう作戦に決まった。

「…………よし、じゃあやりますよ。この作戦は連中が何かする前に人質を逃がせれば勝ちなのでスピード重視でいきましょう」

『そうですね、では私とミュウさんが合流次第救出に…………ん？…………レントさん、砦の正門前の道の先から“何か”が来ています』

「なっ!?? コイツ……ガアア!」

『……………』

「このっ……喰らえ! コイツッ! ……ゴフッ!??」

『……………』

「いきなりこの砦に襲撃を掛けてきたヤツが! アレはまさかゴ…
……グワアアアッ!!」

そのゴーレム達は一体一体の平均ステータスは下級職二つか三つ程度のティアンレベルで山賊とそこまで変わらないレベルであったが、山賊の数は精々五十人程しか居ないのに対してゴーレムは三百体も居たため文字通りの「多勢に無勢」と言った結果となり次々と山賊は始末されていった。

……そんな酷い光景に目を奪われながら「クルエラ」の名を持つあのゴーレム達が一体何なのかを考えていた俺だったが、その戦っているゴーレムの一部が砦の中に入って行くのを見て即座に「テレパシーカフス」を起動して全員に連絡を取った。

「作戦変更だ、現在此処にいる全員で砦に突っ込むぞ。……あのゴーレム達人間を積極的に殺してやがるから中に居る人質達も危ないから、その前に全員救出する。どうせこんな騒ぎになった以上は連中にくつつちを気に掛ける余裕は無いしな」

『成る程、では私は先に砦内部に潜入します。確か地下でしたね』

「お願いします月影さん。……結奈さんと利奈さんも来てくれ。そして退路の確保の為に可能な限り外のゴーレムを倒してほしい」

『分かりました』

『りようかい! ……って、ただの山賊討伐なのにどうしてこんな事に……』

多分、難易度：九のクエストだからだろうな……そして俺は光学迷彩のまま戦闘態勢を整えた上でミュウちゃんと一緒に砦への潜入を試みる事にした。

「……と言っても、この位置からだとは戦闘を回避するのは難しそうですが。ゴーレムに光学迷彩がどこまで有効かですかね」

「一般的なゴーレムはコスト面の問題から基本的に再現しやすい視覚

か聴覚で情報を取得している筈だが……どう見ても、アレらが一般的なゴーレムには思えないからな。最悪戦闘も覚悟で進もうか」

「どうせ退却の為にはある程度数を減らさねばなりませんしね」

……そうして俺とミュウちゃんには気配を消しつつ足音を立てない様に、だが可能な限り急いで未だに山賊とゴーレムの死闘が行われている砦まで向かっていったのだった。

エレメンタルの少女・その真価

■ヘクルエラ山岳地帯〈廃砦

「クソツ!?? ゴーレムだと! 一体どうなっている!!」

ジョン・スミスは見張り役からの連絡が途切れた後、即座にジョブスキル《遠視》と《透視》を組み合わせて外の様子を確認し……現在この砦に謎のゴーレム軍団が現れて次々と山賊を虐殺している事を知って、頭を掻きむしりながら立て続けに訳の分からない事が起きる現状の意味不明さに思わず苛立ちを露わにしながら叫んでしまった。

「兄貴! 落ち着いてくださいえ!」

「そうじゃぞ、冷静にならねば拾える命も拾えなくなろう」

「……あ、ああ、そうだな。済まん。……後そのエレメンタル、俺が頭を痛める原因の一つは貴様だからな」

だが、動揺しているジョンを見て逆に冷静になれていた側近のダリー・スミスと、この状況になっても檻の中で残りのお菓子を食べている「リトル・ネイチャーエレメンタル」の言葉でジョンは冷静さを取り戻した……原因の一つである謎過ぎるエレメンタルにはしつかりと突っ込みを入れたが。

……そうして冷静さを取り戻した以上、歴戦のティアンであるジョンは即座に最適な行動を選択した。

「よし、じゃあダリー【常夜の外套】を出せ。こんな面倒ごとが起きている場所からはさっさとおさらばだ。隠し通路から外に出るぞ」

「へ、へえ。……とところでそっちのエレメンタルは……」

「置いて行くに決まってるだろう、こんなあからさまに『何かある』と言っている様なエレメンタルなんぞ。……今の俺たちには女一人連れて行く余裕もないし、とにかくここから離れるのが第一だ」

「うむ、残念でも無く当然な正しい判断であるな」

そう言いながらジョンは【常夜の外套】——装備者に短い間だけ強力な《光学迷彩》と《気配遮断》を齎す装備スキルを持った黒い外套で、これまで何度も彼等が逃亡できていた理由になる物——を装備して、この部屋に備え付けられていた隠し通路から早急に外に出ようと

した。

……それを見て「リトル・ネイチャーエレメンタル」の少女は檻の中に放置されたままなのに平然としながら、むしろ二人の判断を賞賛するぐらいの謎の余裕を持っていたのだが……直後に彼女は目を細めながら彼等に忠告を放った。

「……む、その隠し扉の先から『何か』が来るぞ?」

「は? 確かこの隠し通路の先は外側からじゃなかなかな見破られない様に……って!?? 《瞬間装備》!」

『……………』

そう彼女に言われて足を止めた思わずジョンだったが、直後に今から出ようとていた隠し通路から当たり前の様にゴーレム——両手に短剣を持った「クルエラデッドハンド・ゴーレム」が現れたのを見て、咄嗟に足を止めながらも愛用の短剣を取り出して身構えた。

……次の瞬間、そのゴーレムは表で暴れている連中とは比べ物にならない速度でジョンまでの距離を詰めて、流暢な声で喋りながら両手の短剣に「【麻痺】の効果を宿して」斬りかかって来たのだ。

『《パラライズ・フアング》』

「ゴイツスキルをつ!?? しかも早い……表の連中とは違う亜竜級のゴーレムか!」

この「クルエラデッドハンド・ゴーレム」はその名に暗殺者系統上級職【兇手】^{デッドハンド}を冠する通り、1000程度のSTR・END・3000程度のAGIと短剣系や気配操作系、そして暗殺系のいくつかのジョブスキルを与えられているのだ。

だが、所詮はゴーレムであるので有するジョブスキルの数は必要最低限のものでしかなく、ステータスや技術においてもレベル500で高性能な装備を身につけて、そこに至るまで多くの実戦経験を積んで来たジョンには及ばないので左程時間も掛からずに敗北するだろう……この砦に潜入したゴーレムが一体だけならば。

「兄貴つ!?? 隠し通路から追加のゴーレムが!!!」

『『『……………』』』』

「チィ! 更に四体だと!??」

そのダリーの言葉を聞いたジョンが隠し通路の方を見ると、そこには更に四体の「クルエラデッドハンド・ゴーレム」の姿があった……ゴーレム軍団はこの砦を「奪還」する為にまず囹役のゴーレム部隊を正面から進軍させて山賊達の注意を引き、その間に破壊工作に長けた上級ゴーレム部隊を詳細な位置を知っていた隠し通路から潜入させる戦術を取っていたのだ。

……とは言え、それでもこの二人は高い実力を持ったティアンであり亜竜級ゴーレム五体を相手取っても尚互角に戦い続けていたが、そこまで広くない部屋で七人が入り乱れている事などあつてどうしても長期戦になつてしまつていた。

『パラライズ・フアング』

『スリーピング・フアング』

『ポイズン・フアング』

「クソツ!?」 状態異常攻撃ばかり……部屋が狭いせいで躲さずに受けざるを得ない！」

「一体一体はそこまででも無いですし、ゴーレムだから動きも単調ですから時間をかければ倒せるでしょうが……」

ゴーレム達から次々と放たれる状態異常付きの短剣をジョンとダリーはそれぞれ短剣と片手剣で防ぎながらカウンターで徐々にダメージを与えていくが、相手はゴーレム故に多少の切り傷では動作に支障を起こさせる事は出来ず、狭い室内である事と状態異常にかかる事を警戒しなければならぬ為に下手にゴーレムを破壊出来るだけの大振りな攻撃が打てないので苦戦してしまつていた。

……それでもこの二人の技術と連携であれば時間を掛けて一体ずつゴーレムを始末して行く事も可能ではあるだろうが、その「時間」こそがこの場においては最大のネックとなつていたのである。

「……むむ！ 正面から砦内部に侵入したゴーレム達もこつちに来てゐるな。多分そいつらが苦戦しているから援軍を呼んだ感じか？ どうも地脈を通して何やら「リンク」している感じがするし」

「ハア!? ……この状態で更に援軍は……！」

そう、この二名が自分達だけでは倒せないと判断した「クルエラ

デッドハンド・ゴーレム」は他のゴーレム軍団を援軍に呼んだのである……上級ゴーレムには高い状況判断能力と近くの下級ゴーレムへと指示を出す機能を付加されているのだ。

……その事をエレメンタル少女から聞いたジョンは本人が暗殺者や盗賊系統のジョブを有しているが故に、この部屋に近づいて来るゴーレム達の気配を感じ取ってそれが本当であると判断してどうすべきか一瞬悩んでしまい、その所為で一体のゴーレムの攻撃を受け損ねて体勢を崩してしまった。

『《パラライズ・フッキング》』

「チツ!?？ ミスった!」

「兄貴ー！ フォローしやすー！ 《パワースラッシュ》!」

幸い多少よろめいたぐらいたったので素早くダリーがその「クルエラデッドハンド・ゴーレム」を弾き飛ばして難を脱したのだったが、その間に援軍のゴーレム達が部屋の前までやって来てしまったのだ。

『『『………』』』』

「ギャー！ 兄貴なんかワラワラ入ってきました!!!」

「だークソ！ ホントクソ！ ……ていうか部屋が狭すぎてまともに戦えなくな……ああもう！ ゴーレムだから同士討ちとかを考えずにこつちを押し潰す気かよ!!!」

そうしてゴーレム達は部屋の中に一気になだれ込んでジョンとダリーが動ける空間を大幅に制限し始めたのだ……援軍のゴーレムは一体一体であれば二人なら瞬殺出来る程度だがそこに居るだけで動きを制限される上、その雑魚ゴーレムを相手にしている隙に上級ゴーレム達が襲い掛かって来るので状況はかなり不利になってしまっていた。

……そうして文字通り物量に押し潰されそうになっていた二人を見ていた「リトル・ネイチャーエレメンタル」が、僅かに何かを考える素ぶりをした後におもむろに檻の中で立ち上がった。

「……まあ、拾ってくれた恩もあるしお菓子を奢ってくれたしな、ここはワシが何とかしてやろうぞ。……んあー」

「何やってんだ!?？ 菓子でも吐く気か!?？」

そして彼女は何故か唐突に口を大きく開けて、その中に片手を突っ込んで何やらもごもごさせ始めたのだ……そんな傍目から見ればちよつと間抜けな行動にジョンから突っ込みが入るが、彼女はそれを無視して口の中から“虹色に輝く小さな宝石の様なナニカ”を取り出した。

……その虹色の石は見る者が見ればそこらの「ジェム」などは比べ物にならない程の膨大な魔力を秘めている事が分かるぐらいの代物であり、現に地脈の自然魔力を深く繋がったゴーレム達の意識はその石に釘付けになってしまっていた。

『……?』

「流石に体外に出せば気付くか。……まあよい、さてさて“以前のワシ”が作った物じゃが“今のワシ”にどこまで扱えるかな……では【魔神石】起動」

彼女がそう呟いた瞬間、手に持った虹色の石が跡形も無く霧散して解放された膨大なMPが彼女の肉体に流れ込み、その最大MPを遥かに超過した数十万程のMPが供給された。

……これがかつての彼女が“この世界の理を解した極一部の【竜王】が使う《竜神装》と呼ばれるスキル”を参考に作り上げた『蓄積』であるMPを自身のMP最大値に関係なく付与させる『効果を持つ【魔神石】の効果である。』

「……むう、蓄積したMPは百万ぐらいはあつた筈なのじゃが、今のワシの“器”ではこの程度しか供給されんか。残りは霧散しとるし……まあ連中を倒す分なら支障は無いがの……《メタル・デIFOメーション》《マニユピレート・メタル》」

『……?』

そのまま彼女は自身を捉えていた檻に手を当てると、ほぼスキルに寄らない純粹な魔力制御技術のみで地属性金属操作魔法である《メタル・デIFOメーション》《マニユピレート・メタル》と同じ術式を構築・実行して、触れた金属製の檻を無数の極細ワイヤー状に変形させてゴーレム達を拘束させる様に動かした。

……ゴーレム達も咄嗟にそれを避けようとしたが狭い室内だった

事、そしてワイヤーの速度が亜音速以上だった事もあってゴーレム全員がワイヤーに絡め取られて拘束されてしまった。

「なっ!?? これは……………」

「金属操作魔法!?? しかも以前見たフルメタル・プリンセス「鋼 姫」のものと同等か、それ以上の……………」

「…………ふむ、地脈とリンクするタイプのゴーレムか。…………解析は終わったしもう良いじゃろ『ワイヤーカッター』」

その余りにデタラメな光景を見て驚愕を露わにする二人を他所に、捕えたゴーレム達を観察していたエレメンタル少女はその凡その構成を読み取った後、ワイヤーを攻撃力を強化した上で引き絞ってゴーレム達をバラバラにしまった。

…………その後、余りの急展開に部屋の中はしばらくの間だけ沈黙に包まれたが、エレメンタル少女が残った二名が自分を恐怖の表情で見ている事を気が付いて少し気まずそうに声を掛けた。

「…………あー、ワシは別にお主らをどうこうするつもりは無いぞ…………と言つても信じられんじやろうから、さつさと逃げる事をオススメするぞ。今なら隠し通路の先にはゴーレムはおらん。それにこのゴーレム達はこの山の地脈とリンクして動いている様じゃから、この山から降りてしまえば追つてこれんじやろう」

「…………あ、あんたは一体…………?」

「おいバカやめろ!?? どう見ても面倒ごとだろうが! ……良いからさつさと逃げるんだよお!!」

エレメンタル少女の発言を聞いてダリーの方は思わずその素性を聞こうとしてしまったが、これ以上厄ネタに巻き込まれたくないジョンは余計な情報を得ない為にそれを止めて、急いで「常夜の外套」の《光学迷彩》と《気配遮断》を起動して隠し通路の奥へと走っていった。

…………それを見たダリーも急いで隠し通路の奥へと続いていったのを見て、エレメンタル少女は『達者でなー』と呑気な声で見送りながらも現在の状況を確認していった。

「まあ、あの二人の実力なら山から降りて逃げるぐらいは出来るじゃろ。このゴーレムは数で押すタイプで質自体はそこまで高くない様

じやし。……おっと、付与したMPがもう霧散を始めとるな。やはり今の器では【魔神石】の力もまともに使いこなせんか。……さて、体内の【魔神石】は残り二つ、この山から脱出する為にどう使うべきか……そうじやの」

そう言いながらエレメンタル少女は残ったMPを使ってマニュアルで術式を構築しつつ、周囲の自然魔力を操作する《ネイチャー・コントロール》を使って霧散したMPを檻の残骸に込めていった……が、どうも不満があるのか彼女は眉を顰めている。

「……うむむ、自然魔力の操作が上手くいかん。今のワシってスキルレベル低いし、技術で補うにもこの器では限度がある。……だが、【魔神石】の魔力を十分に込めたこの元檻のワイヤーを使えば残りMPでもそれなりの物は作れるか。今のクソ弱いワシがこの山から脱出する為にも使えるモノは無駄なく有効に使わねば……《メタルゴーレム・クリエーション》」

そして発動したのは金属製のゴーレムを作る魔法によって檻の残骸は更に形を変え、形が残っていた残骸を骨格としてワイヤーになった部分がそれに巻きついて肉付けする様な形で瞬時に人型へと整形されていた。

……その結果出来上がったのは片膝をついた身長2メートル強の何故か胸部装甲が左右に開いた金属性の人型ゴーレムであり、それを見たエレメンタル少女は満足気に頷きつつ再び口の中に手を入れて例の【魔神石】を一つ取り出した。

「むむむ、あー……さて、後はこの【魔神石】の一つを胸部内にセットして、ゴーレムの駆動に必要なMPをこっちから供給出来る様にラインを繋いで……今のワシではゴーレムを動かすのに必要なMPを供給するのも難しいしなあ……後は胸部装甲を閉めてつと……よし出来た」

『……GOO』

……そうしてエレメンタル少女が作業を終えるとそのゴーレム——【スチールゴーレム】は低い唸り声を上げながら立ち上がった。

「……ふむ、まあ亜竜級のゴーレムといった所じやな。今のワシの器

と有り合わせの材料、そんで即興で作った事も考えればこんなもんじゃろ。……必要なのはティアンの幼子レベルのワシを運ぶ足しやしな」

『G O O G O O』

そう言いながらエレメンタル少女は「スチールゴーレム」に指示を出して自身を肩に担がせた……ちなみに「魔神石」に込められた魔力をフルに使えば純竜級ゴーレムにする事も出来たが、素材の質が低すぎた事や現在の彼女のステータスの関係で魔力のロスが酷いので、長時間の稼働を重視して「魔神石」から僅かずつ魔力を引き出してゴーレム維持に使う仕様になっているのだ。

それに万が一の時には「魔神石」を取り出して通常の用途で使う事も出来るので、現在の異常なヘクルエラ山岳地帯から脱出するにはこの選択が一番だろうとエレメンタル少女は考えつつ、ゴーレムに乗って廃砦から脱出しようとして……ふと、この部屋に近づいて来るゴーレムでは無い気配に気が付いた。

(……む、誰かがこっちに近づいて来るな。魔力波長から山賊や下にいるらしい人質とかでは無さそうだが……ふむ、対象を人間範疇生物・非人間範疇生物に限定して砦周辺を索敵)

そして彼女は少し考えた後、残された僅かなMPで砦周辺の生物(死体含む)の位置情報と大雑把な強さを計り取る魔力波を発生させた……その結果として近付いて来るのが「非常に高レベルな人間である」事、そして地下付近にも高レベルな人間二人が外に脱出しようとしている事に気が付いた。

(レベルから考えてもやはり山賊の生き残りと言う訳でも無いか……態々この砦に潜入してから脱出しようとしている時点で、おそらく人質の奪還に来たか、火事場泥棒で金目の物を盗みに来た人間達か?)

……人質の死体を感じ出来なかった事を考えると「ジュエル」か何か仕舞って外に出そうとしているのか……態々このレベルの人間が火事場泥棒する必要は薄いし悪意とかは感じぬから奪還目的っぽい(の)

……そこまで考えた彼女は、おもむろに「スチールゴーレム」へと

指示を出して『非常に高レベルな人間』が近付いて来る廊下側へと進ませたのだ。

「……む？ ああ《光学迷彩》で姿を消しておったか」

「ッ!? 《喚起》！」

そうして彼女は当たり前の様に《オプティック・ハイド》と《気配操作》を使っていた非常に高レベルの人間——人質を救出し終わった後、ゴーレム達が向かった先から膨大な魔力を感じ取ったので警戒しながら様子を見に来たレント・ウイステリア——の方を向いて声を掛けた。

……声を掛けられたレントは即座に目の前の金属ゴーレムに乗った少女がこの砦を襲うゴーレム達とは比べ物にならないぐらいにヤバイ相手だと『直感』し、即座に光学迷彩を解除しながら「ライトニング・デミドラグホース」のヴォルトを呼び出して全力での戦闘態勢に移行した。

「……ほう、なんじやタイマーじゃったか」

『……主人、私のスキルだと彼女のステータスは低レベルのエレメンタルでしか無いと出ていますが……』

「そんな低レベルエレメンタルが亜竜級上位のステータスを持ったゴーレムを従えてる時点でどう考えても厄ネタだろう。……ゴーレムって所から見てこの騒ぎの元凶かもしれない、気を付けろ」

……妹や末妹程では無くても『現実での経験』からヤバイ相手を見破る直感や観察力に優れているレントは、目の前の「リトル・ネイチャーエレメンタル」がスキルで読み取れる通りの相手では無い事を確信して全力で警戒していたのだ。

……その反応を見た彼女は『あ、流石にこの状況じゃ誤解されるのも止むなしか。失敗失敗』と思いつつも、これだけの実力と判断力を持つている相手なら『丁度いいか』と考えて弁明と説明を試みた。

「言っておくがこの砦を襲うゴーレム達とワシは関係無いぞ。この【スチールゴーレム】もさつき作った別物じゃし」

「……それじゃあ何でこの砦に居たのだ？」

「行き倒れている所をこの山賊に拾われて売りに出される所だった

んじやよ。……まあ、捉えていた山賊の頭目達は既に逃げ出しておるし、ワシもこの砦から脱出しようとしておった所じや」

「……《真偽判定》には反応が無いが……正直言つて胡散臭すぎてこのスキルも信用出来ん」

「嘘や偽装はしておらんのだが……」

ただ、状況と余りにも物凄く怪しいエレメンタル少女（ゴーレム付き）の相乗効果でどれだけ会話をしてもレントの警戒は解かれなかった……彼女としては『このレベルの相手に補足されたら今の自分ではあつさり殺されるだろうし、人質を助けに来た善性の人間なら説得すれば山を降りるのを手伝ってくれるかも。今の自分はかなり高値で売れるみたいだからそれを対価にすればいけるいける』と考えての行動だったのだが、レントの判断力と警戒心が高過ぎたせいでこんな状況になってしまっているのだ。

……そんな全力で警戒するレントを見て困り果てたエレメンタル少女だったが、唐突に『何か良いアイデアを思いついた』的なドヤ顔をしながら手をついてこう提案した。

「ならば御主がワシを《従属契約》すれば良い。それがすんなりいけばワシに御主への拒絶の意思が無い事を証明出来るじやろう。契約すれば行動もある程度縛れるしな。今ならゴーレムもついて来るぞ」

『GOO』

「……はあ？」

……そんな余りにも怪しいエレメンタル少女から齎された提案を受けて、レントはどういう行動をとっていいのか一瞬迷ってしまい思わず惚けた声を出してしまったのだった。

エレメンタル少女との契約

□ヘクルエラ山岳地帯〓 廃砦 【黒土術師】^{ランドマンサー} レント・ウイステリア
「ならば御主がワシを〓従属契約〓すれば良い。それがすんなりいけばワシに御主への拒絶の意思が無い事を証明出来るじやろう。契約すれば行動もある程度縛れるしな。今ならゴーレムもついて来るぞ」

『GOO』

「……はあ？」

いきなり山賊団の拠点に大量のゴーレム軍団が攻め込んで来たので、止む終えずミュウちゃんと月影さんと共に砦内に潜入して囚われている人質を救出しようとした俺は、現在何故か表のとは別種っぽいゴーレムの肩に乗ってドヤ顔をかましている【リトル・ネイチャーエレメンタル】の見た目は少女にタイムを迫られていた……いや本当にどうしてこうなった？

……ゴーレム襲撃のドサクサに紛れて地下に囚われていたケリーさん含む商隊員の人達を救出する事には成功し、彼らに事情説明した上で（〓真偽判定〓があるから楽だった）月影さんの〓エンブリオ〓である影の中に入って貰って後は脱出するだけだったのだが……。

（そしたら、いきなり二階から馬鹿げた出力の魔力が放たれたからな。……最悪ここに攻めて来たゴーレム軍団の親玉がいる可能性もあったから二人には救出した人達を連れて先に逃げて貰い、俺は偵察と最悪足止めも兼ねてここに来たんだが……）

「むむ、これでもワシは今のレベルこそ低いが将来性は多分凄いからお買い得じゃぞ。今なら三食昼寝とオヤツ付きでそこそこ働いてやろうー！」

「図々しいヤツだなオイ」

そんな事を言う目の前のエレメンタルに思わず突っ込んでしまったが、コイツからは『悪意』の類いは感じないんだよなあ……それにミカが『大変だろう』といった場所に態々俺を向かわせたって事は、俺がここに居るのが〓この状況を打破する重要な要素〓になるって事だからな。

……ここでコイツをタイムするのが『ソレ』に当てはまるってのはありそうだが、まずは少し質問してみるか。余り時間は無いが……。「ところで、さっき発せられた莫大な魔力はお前がやったモノか?」「ん? ……ああアレか、そうじゃよ。裏手からゴーレムの精鋭別働隊がやって来ていたから倒したんじゃ。一体一体が亜竜級じゃったから切り札を使わざるを得なかったがの」

「切り札だと? ……そのゴーレムと言いお前のステータスでどうやってアレだけの魔力を……」

「それに関してはこの【魔神石】を使っただんじやよ。これ一つに大体百万くらいの魔力が蓄積されているのでな。……これとゴーレムの動力炉に使ってるのを合わせて後二つしか無いがの」

「MP百万!?」

俺の質問に対してエレメンタル少女は何故か口の中から虹色の石を取り出してそう答えた……いやなんでそんなデタラメな代物を持つてるんだよ! どう考えても低レベルエレメンタルが持っている物じゃ無いだろうが! 怪しさが一気に増したぞ。

「なんでそんな物を持つてるんだ……というか、本当にお前は一体何者なんだ」

「ん? ああ言っておらんかったな。……この【魔神石】は前世のワシが作って今のワシに持たせておいた物なんじやよ。ワシは所謂『転生体』と言う奴じやからな」

「転生体……? どっか異世界から転生したとかか?」

「異世界? それは“化身”の領分じやと思うが。……ここで言う『転生体』と言うのは、一部の上位自然系エレメンタルが持つ『死んだ際に記憶や能力の一部を次に生まれるエレメンタルに引き継がせる』スキル《輪廻転生》リインカーネーションなどで前世の記憶やスキルを引き継いで居るモンスターの事じやよ。めっちゃくちゃ希少なんじや」

成る程成る程、つまりこのエレメンタル少女は前世で上位エレメンタルだったから強力な魔力を操れた……などと言うとても思ってたか。その《輪廻転生》と言うスキルでは来世にアイテムを持ち越す事は不可能だろうに。

……自分が転生体という発言に《真偽判定》は反応しなかったが、コイツは『自分の前世が高位エレメンタル』だとか『自分が《輪廻転生》で転生した』とは言っていないからな。

「……で？ お前は《輪廻転生》とやらで転生したわけじゃ無いんだろ？」

「そうじゃよ。正確には《輪廻転生》とかを参考にした別の方法で転生したんじゃない。……前世のワシは自分が死んだ時の為にこのエレメンタルの肉体を用意しておつてな、自身の死亡時に記憶と精神を写す様にしておつたんでな。【魔神石】も万が一の為にに入れておいただけじゃ」

それでその辺りを問い質したらエレメンタル少女はあっさりとそれを認めて、詳しく事情を説明し出した……嘘をつかずに意図的に情報を伏せて相手をミスリードさせる騙しの手口だとも思ったが、その割にはやり方が雑だったし悪意も感じないから深読みし過ぎたか？

「それで？ 【魔神石】なんてヤバい代物を作れるんだつたら前世では相当なモンスターだった筈だろうに、何故俺のタイムモンスターになりたがって居るんだ？ それだけの実力なら自由に生きられそうなものだが」

「それはこの世界の事を甘く見過ぎじゃろう。今の貧弱な器では【魔神石】があっても何処かで死ぬ……と言うか、この山を無事に降りられるかどうかも怪しいしな。……ワシがここに居るのが良い証拠じゃろ」

……まあ、このエレメンタル少女が転生してるって事は、相当なモンスターだったらしい。ゴイツの前世も死んでしまったって事だからな。

「だから、今のワシが長く生きる為にも庇護者が欲しいんじゃないよ。……この肉体も潜在能力高めに作ったからレベルを上げれば、ハイエンドまでは行くじゃろうし、それでも前世では長い時を生きてきて相応の経験と知識を蓄えて来たから色々役に立つぞ。……例えば現在この山に現れた謎のゴーレムの正体の推測とかの」

「!?? 何か知っているのか?」

「うむ、今から大体600年ぐらい前の所謂『三強時代』と呼ばれている時期、このヘクルエラ山岳地帯は〈山岳国家クルエラ〉と言う国だったんじゃない。確かそこでは豊富な地脈の魔力を活かした都市結界やゴーレム運用によって防衛を行っていた筈じゃから、多分現存している施設かマジックアイテムか何かがあるのでは無いのか。……あの時代の物品は『先々期文明』の次ぐらいで、『聖剣王の時代』と同じぐらいに暴走や^{ユニーク・ボス・モンスター}へU B M化が多いからな」

エレメンタル少女の説明だと、ゴーレムの名前に「クルエラ」と付いている上に地脈を介してヘクルエラ山岳地帯〈全域でコントロールされている様なので、おそらく国家規模で作られたマジックアイテムか何かの仕業である可能性が高いらしい。

……また、ゴーレムの造形や命名が明らかに人の手による物なので、自然発生的なゴーレムでは無く人間が作った物が関わっている可能性が高いだろうとの事。

「後、ゴーレムからは僅かだが生物への恨みの様な物を感じ取ったから、古戦場やらに溜まった怨念が原因の一端かもしれない。……昔の器物が怨念でモンスター化するのには良くある事じゃし」

「ふむ、確かこのヘクルエラ山岳地帯は山賊の名所とか呼ばれていたな」

「この地脈には『淀み』の様な物を感じるし、そうして殺された者達の怨念が溜まっていったのかもしれない。昔も〈山岳国家クルエラ〉はあの時代の国家のお約束として【霸王】の配下と激しい戦いを繰り広げおったし……まあ、最終的には山頂にあった首都を、前線に出て来た【霸王】によってその山ごと真つ二つにされたんじゃないけどな。今は谷間の通行路になっとる」

「何それ怖い」

それはともかく、ここまで詳細に事情を話した以上は本当に自分を売り込みただけなんだろうな……ミカが俺をこっちにやった事を踏まえても、あのゴーレム達をどうにかするにはこの少女の力が必要なのだろう。

……と、そこまで考えていた時に【テレパシーカフス】にミュウちゃんからの連絡が入った。

『兄様、こちらは無事に脱出を完了。月影さん、やって来た結奈さんと利奈さんと共に辺りにいたゴーレム達を倒して今から脱出するところなのです。そちらはどうですか?』

「こっちはちよつと名状しがたい事になっているが、あのゴーレム達について知っていきそうなヤツを見つけたからそっちに連れて行くかもしれない」

「お！ ティムじゃな！ ティムしてくれるんじやな!!!」

……俺の会話を耳聴く聞き付けたエレメンタル少女が目を輝かせながら催促してくるがスルーしつつ、ミュウちゃんとの通話と続けていく。

「……とにかく、今から向かうから」

『分かりまし……待って下さい兄様! ……また新しいゴーレムが、今度はこの近くの地面から生成されているのです! 数は三百以上!!!』

「なんだと!?!?」

「……ふむ、ゴーレムを地脈を介しての遠隔生成かの。やはり地脈の自然魔力を使っているか」

そうしたらミュウちゃんが更なるゴーレムの増援が現れたと報告すると同時に、エレメンタル少女は壁を見ながらここからでは見えな以外のゴーレムの発生を感知してみた。

……やつぱり、この状況を優位に進めるにはこの少女? の力が必要になりそうだな。

「分かった、俺の方はヴォルトも居るし単騎でも脱出は出来るから直ぐにここを離脱してくれ」ああ、あのゴーレムから逃げるならさっさと山を降りる事をオススメするぞ。この山の地脈とリンクしている以上、山さえ降りれば追ってこない筈じゃ」……こっちの情報提供者曰くこの山岳地帯を降りればゴーレムは追ってこないらしいから。とにかくケリーさん達を無事にギデオンに送り届けるのが最優先だ」『……分かりました、兄様の方もご武運を』

その会話を最後に通信が切られた後、外の方から砲撃音と爆発音が聞こえ始めたので向こうの戦闘が始まったと察した俺はこちらの「案件」も手早く済ませる事にした。

「そんなにタイムして欲しいんならタイムするし三食昼寝お菓子付き生活が欲しいならくれてやるが、とにかく何か事件が起きた時にはしっかりと俺のタイムモンスターとして働いてもらうぞ。まずはこの山のゴーレムへの対処だ」

「無論だ我が主人よ。……御主の協力があれば地脈を介してゴーレムを操っている『何か』の位置を探れるだろうし、そいつを倒すなら残りの【魔神石】の使用も行うぞ」

「それならいい。……じゃあ《従属契約》だ」

……そうして俺は新たなタイムモンスターとして謎のエレメンタル少女（+彼女製のゴーレム）との契約を行い、クエスト達成の為にこの「魔の山」と化したヘクルエラ山岳地帯のゴーレム達へと挑む事になったのだった。



■ヘクルエラ山岳地帯〉???

どこかの廃砦で【リトル・ネイチャーエレメンタル】の少女が言った通り、現在ではヘクルエラ山岳地帯と呼ばれているこの場所には、かつてへ山岳国家クルエラと呼ばれる小国があったのだ……そこは山岳地帯にある国故に生産力や規模こそ小さかったが西と東を結ぶ交易の中継点として栄えており、また南にあるレジエンダリアとの交易も行われていた。

また、山の強力なモンスターに対抗する為に兵の質は高く、当時所属していた【山キング・オブ・ブリガンド 賊 王】を筆頭に山での戦闘に慣れており、更にレジエンダリアから輸入した魔法技術である地脈に流れる上質な自然魔力を活かした防衛装置——ゴーレムの運用に長けていたので小国ながらかなりの戦力を持っており、通商路の維持管理や地の利を活かした防衛戦術で総戦力で上回る他の小国を退けたりとそれなりに名

を知られていた国だったのだ。

……まあ、最終的には当時の西方小国のお約束として【霸王】に滅ぼされたのだが、それでもその配下【霸王】的には手が空いてなかったから適当に向かわせた(だけ)を何度も退けるなど武勇に優れた国だったのである。

『……前線基地奪還の為に向かわせたゴーレムの八割は沈黙。追加戦力として【クルエラブリガンド・ゴーレム】【クルエラソルジャー・ゴーレム】【クルエラメイジ・ゴーレム】計三百体と【クルエラグレイトブリガンド・ゴーレム】二十体を作成。前線基地周囲の戦力への攻撃を開始』

そして山賊達が根城にしていた廃砦も元々はへ山岳国家クルエラが作った前線基地の一つであり、〃【クルエラ】のゴーレム〃を生み出し操っている『何者か』は既に廃墟になっているそこを奪還しようとしていたのだった。

……何故そんな事になったのかと言うと、これまたエレメンタル少女の推測通り『何者か』の正体はかつてへ山岳国家クルエラに所属していた【ゴーレム・ジェネラル像 将軍】を始めとしたゴーレム使い達が作り上げた『地脈を利用したゴーレム作成の魔道具』だったからである。

『……その近辺にいるへUBMと人間のパーティー一団に向かわせたゴーレムも半数が撃破。追加で五百体のゴーレムを作成して対応』

その魔道具が作られたのは当時の【像将軍】が將軍系超級職に於ける共通の悩み——《軍団》スキルによって使役する配下の数を用意できない事を解決しようとした事が発端である。

他のモンスターと比べれば資材があれば作成出来て、魔力を用いたインスタント召喚も可能な種別があるゴーレムは数が用意しやすい方ではあったのだがそれでも3000以上を用意するのは至難であり、《軍団》で使役できる数が上がる毎にどうしてもパーティー枠に大量の空きが出来てしまったのだ。

……そこで【像将軍】を始めとするゴーレム使い達は『地脈に流れる自然魔力を蓄積・使用してインスタントのゴーレムを作成・使役する魔道具』を開発したのだ。

『……第一、第四、第五前線拠点のロストを確認。各三百体のゴーレムによつて周囲に存在する敵性生物の掃討を開始』

その魔道具は国土に於ける地脈の魔力を運用する為に地中深くに埋められ首都に居る【像將軍】が操作する仕組みになっており、作成されるゴーレムのステータスは最大でも亜竜級下位程度だったが【像將軍】の配下になる事で《魔像強化》レベルEXが乗る仕組みになっていた。

更に地脈を介する事で山岳地帯の任意の場所にゴーレムを遠隔生成する機能や【像將軍】の使役可能範囲を国土内限定で大幅に広げたり、更に地脈を用いた探知機能や作った【偵察隊】リコナイターのジヨブスキルを応用したゴーレムと視覚を同調させる機能なども兼ね備えていたのだ。

……これにより山岳地帯内部限定だが使い捨ての偵察隊を幾らでも作成可能になったお陰で攻め込んでくる敵陣の調査がやりやすくなったり、敵軍の背後や側面からゴーレムを作成して不意打ちに向かわせると言った戦術が可能になったので、へ山岳国家クルエラへの防衛能力は大幅に上昇する事となった。

『……山岳中腹部に住んでいたゴブリンの群れの掃討を確認。引き続き戦力補充の追加ゴーレムを百体生成して次のモンスター群生地帯は移動』

まあ、そんな風に山岳地帯の防衛とゲリラ戦に特化したへ山岳国家クルエラでも、流石に山脈ごと斬り裂ける【霸王】相手にはどうしようもなくあつさりと滅ぼされたのだが、運が良かったのか地中深くに埋め込まれた『ゴーレム作成魔道具の本体』は首都が両断された後も無事だったのだ……最も首都が消滅した事で指示を出す者が居なくなつたので、自動的に地脈の魔力を集める以外の機能は停止し、その存在は国家機密として秘匿されていた為に存在を知る者も居なくなつてしまつたので長い間放置されていたのだが。

……ここで終わればただ無意味に地脈の自然魔力を集めるだけで終わったのだが、やっぱりエレメンタル少女の予想通り地脈に染み込んだ戦争で死んだ者達やへクルエラ山岳地帯となつた後に山賊に襲

わかれて殺された者達の怨念を取り込んだせいで徐々にその在り方を『呪われた魔道具』として変質させて行つたのだつた。

『……北部に於ける亜竜級地竜の群れとの戦闘でゴーレムが全滅。五百体再生成及び「クルエラソードマスター・ゴーレム」を三十体生成して対応』

取り込んだ怨念が『殺された人間』のモノだった事、そして怨念によつて元々魔道具に組み込まれていた『自国の人間には手を出さないセーフテイ』と『敵対対象を倒し国家を守る為の戦術をインプットしたゴーレムの自動操作プログラム』が変質した事で、『へ山岳国家クルエラ』を守る為、へクルエラ山岳地帯に存在する国家に所属しない生物全ての殲滅』を行動基準とする呪われた魔道具へと生まれ変わってしまったのだ。

……そうして変質して僅かな自我を得掛けていた所に地脈を介して『国土内で二体のへUBM』の反応を検知』してしまった事によつて、その魔道具はへ山岳国家クルエラを守る為、そして『敵』を滅ぼす為に完全な非人間範疇生物として覚醒する。

『……現在稼働中のゴーレム合計五千体による国土内の生物の殲滅戦は順調に進行中』

そして既に滅んだ国の産物であるが故にその在り方が唯一である^{ユニーク}と世界に認められた魔道具は逸話級へUBM』【山核型骸 クルエラ^{システム}ン・コア】となり、それによつて得た『ゴーレム・クルエラアーミー・クリエーション』のスキルと600年間蓄積し続けてきた魔力を使つてへクルエラ山岳地帯に存在する敵性生物の殲滅を開始した。

……へクルエラ山岳地帯で理不尽に殺された者達の怨念^願を受けた【クルエラン・コア】は、その魔道具としての在り方通りにその命令^{怨念}を遂行して、この場所からあらゆる理不尽^{生命}を排除する為に動き続けるの^だつた……。

それぞれの脱出

□ヘクルエラ山岳地帯◇
【重戦士^{ヘビーファイター}】ミカ・ウイステリア

お互いにどう出ているのか分からず睨み合いとなっていた私達と【蠱毒狩蟲 ラーゼクター】だったが、その均衡は突如現れた乱入者達——大量のゴーレムの群れによって破られたのだった。

『……………』

『《テンペスト・ストライク》！ 全く数が多いね！』

『撃つても殴つても終わらないウサ！』

槍を構えて襲いかかる【クルエラソルジャー・ゴーレム】達を私が暴風を纏わせた【ギガス】によって吹き飛ばし、向こうではメイスで殴り掛かってくる【クルエラブリガンド・ゴーレム】をシユウさんがガトリングガンで蜂の巣にしながら、時折片手持ちにしたハンマーで接近して来た【クルエラスカウト・ゴーレム】をカウンターで殴り飛ばしていた。

まあ、一体一体は雑魚だから倒すのには苦勞しないんだけど、相手は数百体はいるから中々面倒なんだよね……私みたいにENDがある程度高ければ困んで棒で叩かれても死にはしないんだけど、他の人達はジョブが魔法寄りだったりSTR極振りだから数の暴力はそれなりに有効な手段になってる。

「武具など前座……真の英雄は目で殺す。《ヒートブラスト・コンバージエンス》！」

「目つて言うより額から出てへん？ 遠目から見ればそんな風に見えるかもやけど……とりあえず【ラーゼクター】は逃げて行きよつたし、《薄明》から通常の《月面除算結界》に変えとこか」

『分かったわ』

『《瞬時注射》……護衛はお任せを』

向こうでは葵ちゃんが入れたばかりの【熱竜冠 ヒートライザ】から熱線を放つて遠間から魔法攻撃をして来ていた【クルエラメイジ・ゴーレム】を焼き尽くし、月夜さんが健太さんに守られながら回復魔法とデバフ結界を駆使して味方を援護していく。

……ちなみに「レーザークター」は月夜さんの言った通り私達とゴーレム軍団と戦い始めたドサクサに紛れてさっさと逃げていった。ゴーレムはあっちにも向かったんだけど、ヤツは斬撃波を出すスキルを使って蹴散らした後こちらには目もくれずに。

『まあ、お陰でゴーレムに集中出来るんだけどね！もし同時戦闘してたら酷いことになってた！』

『それよりも更に追加のゴーレムが来るウサ！』

『『『………』』』』

月夜さんの《月面除算結界》によって全ステータスがダダ下がりしているお陰でゴーレム達は瞬殺出来ており数に押し切られずに済んでいたのだが、倒しても倒しても次々と地面から追加のゴーレムが現れるのできりが無いんだよね。

……しかも、追加ゴーレムには「クルエラソードマスター・ゴーレム」とか「クルエラグレイトブリガンド・ゴーレム」などの亜竜級に届くものもあったのだ。

『《サンダー・スラッシュ》』

『《インパクト・ストライク》』

『げっ!?? コイツらスキルまで使ってくる！《アームズブレイカー》！』

加えて亜竜級ゴーレムは当たり前の様にそこそこ強力なスキルを使うので、こちらに与えるダメージが大きく集団で囲まれた時の脅威度が段違いに高いのだ。

今のところは月夜さんのお陰で弱体化してるのもあって、私は「直感」で攻撃軌道を見切りカウンターで武器を砕くとかして対処出来ているが、それでもパーティー全体としてみると徐々にダメージが積み重なっているし。

……加えてへU B Mとの連戦だったから徐々にMPやSPが

底をつき始めていて、正直これ以上戦闘を続けるのはかなり不味い状況になってしまっていた。

「まあ、ウチがおれば雑魚はどれだけ集まっても大した脅威では無い……と言いたい所なんやけど、完全に向こうは消耗戦の構えやなあ。

弱体化しようが全方位から数で押し続けられればって感じか？」

『どれだけ倒しても百体以上のゴーレムを次々と辺りの地面から生成されている上、場所を移動しようとしても移動先にゴーレムを生成されているからどうも位置を捕捉されている様だし、完全にこつちを狙って来ているな』

『それにこつちからはゴーレムを作っている “何者か” が何処にいるのかさっぱり分からないからジリ貧だよね。山を降りるルートで移動してるけど逃げ切るのは難しいかな』

とりあえずシユウさんや月夜さんと話し合って打開策を考えるものの、向こうがやってるのは単純にゴーレムを大量に作って嚇けるだけの『物量によるごり押し』なので対抗手段が思いつかないでいた。

……とは言え、私の “直感” だと『ここでもう少し待てば事態は好転する』感じもしてるからね。だから後少しだけ頑張ろうか。

『《インフェルノ・バーンナックル》！ 《ヒートブラスト・コンバージェンス》！ ……必殺スキル使った後で蓄積した熱量が少ないからあんまり派手な事は出来ないか』

『《インパクト・スマッシュ》！ ……亜竜級のゴーレムは私が優先して倒しておくよ！』

『雑魚は任せるウサー！』

『《皆癒の霊薬》 ……HP回復はこつちで行います！』

『じゃあウチは結界に集中しよか。MPポジションMPポジションと……』

『『『……』』』』』

それでも私達は各々の得意分野を活かした連携を駆使してどうにか持ち堪えていたのだが、どうも倒される端から補充されているのか、ゴーレムの数は一向に減る事が無く戦線は膠着状態に陥っていた……と思われたその時、後方から一発の火球が凄まじい速度で飛来して後方にいたゴーレム達に着弾して炸裂した。

……それによってゴーレム達の何割が吹き飛んだ所に、更に追加で氷属性の誘導弾を放ちながら見覚えのあるカーゴを引いた多脚戦車——山賊のアジトに向かっていた筈の「スレイプニル」と「チャリオツ

ツ」が突っ込んで来た。

『ようし！ 《火属性炸裂魔弾》命中！ 続けて《氷属性誘導魔弾》連続発射！ 更に《魔弾出力増大》《雷属性照射魔弾》掃射！！』

『こっちも行きます！ 《リパルジョンブラスト》発射！！』

そうして雨霰と多種多様な砲撃による圧倒的な火力でゴーレム達を吹き飛ばした「スレイプニル」と「チャリオッツ」は、そのまま進路上に残っていたゴーレムを亜音速で轢き潰しながらこちらに来た……そうして私達の側に停車すると「チャリオッツ」の後部からミウちゃんと言影さんが降りて来たのだ。

「ミウちゃん！ 誘拐された人達は？」

「山賊に誘拐された人達の救出は完了しました……ですが、山賊達はゴーレムに襲われて壊滅。私達も急いで山を降りる所だったので」
「ですが、その途中で月夜様達が交戦している場面に遭遇してこうして助けに来たという訳ですね」

『そもそも進路上にいたから突破しなきゃいけなかったし』

『それよりも早く乗ってください！ ゴーレムが再生成され始めています！ この「スレイプニル」の足なら奴らを振り切れますから！』

とりあえず簡単に彼女達の事情を聞いた後、再生成が始まってこっちに向かって来たゴーレム達を各々の遠距離攻撃で牽制しながら結奈さんに言われた通り「チャリオッツ」へと騎乗していく。

……その中にはサリーちゃんから救出を頼まれていたケリー・メイティスさんを含む誘拐された商隊員達も居たので、私はクエストそのものは達成出来たのだと安堵のため息を吐いた。

『全員乗り込みましたね。では発進します……《ストーム・アクセラレイション》！』

「追ってくる連中には《風属性拡散魔弾》と《闇属性誘導魔弾》を喰らえ！！」

「ついでに《月面除算結界》を使ったままにしておか。これで追いつけなくなるやろ」

そうして全員が乗り込んだ所で結奈さんがスキルを使って「スレイプニル」を急加速させ、利奈さんが追いつかなくてくるゴーレム達を暴

風で吹き飛ばし、暗黒の魔弾で粉碎しながら追撃を妨害していく。

更に月夜さんの結果のお陰で近づくゴーレムはステータスが大幅に下がるので追いつく事が出来ず、前に立ちはだかるものも普通に轢殺出来るので私達はあっさりとゴーレム達の囲みを抜ける事に成功していた。

『じゃあこのまま逃げ切れればとりあえずクエストは完了かな？ サリーちゃんには良い報告が出来そうで良かったよ』

「……あの、妹の事を知っているんですか？」

「ウチらはサリーちゃんの依頼であんたらの救出に来たからな。まあ無事で何よりや」

「それは……本当にありがとうございます。このお礼は必ず……」

……そんな感じでケリーさん達誘拐された人達と話せる程度には状況が落ち着いた所で、シユウさんが何かに気が付いた様に声を上げた。

『……そう言えばレントはどうしたんだ？ 姿が見えないんだが』

「兄様なら山賊のアジトに残りました。……そこで凄まじい魔力を感じ取ったので様子を見に行ったら、あのゴーレム達について知っている情報提供者に遭遇したとか。援軍のゴーレムが来たから誘拐された人達の救出優先で自分は置いて先に逃げろ、この山から降りればゴーレムは追ってこないとも言ってたのです」

ふーん、まあ私の「直感」的には今のところ上手くいってる感じがするし大丈夫でしょう……このクエストを受けた本当の目的である『遠い未来に訪れる脅威に対抗する為の「何か」を山賊のアジトに向かわせたお兄ちゃんに確保させる』事も無事に達成出来たっぽいしね。

『まあ、あのゴーレム達の対処はお兄ちゃんに任せておけば大丈夫な気がするし、私達はクエスト達成の為にケリーさん達を山から降ろしてギデオンに送る事に集中しようか』

「そうですね、兄様ならこの山で単独行動でも問題ないでしょう。何せ私や姉様とはくぐって来た場数が違いますしね。……それよりも今はこの山からの脱出を優先しましょう。家に帰るまでが遠足です」

「……まあ、身内である二人がそれで良いならええやろ」

……お兄ちゃんが単独で山に残ったと聞いても私とミュウちゃん
が何でもない様に平然としていたので、他のメンバーや救出された人
達もやや困惑しながらも、気をとりなおして完全な危険地帯と化した
〈クルエラ山岳地帯〉を抜ける事に集中するのだった。

◇◇◇

□ 〈クルエラ山岳地帯〉 廃砦 【黒土術師^{ランドマンサー}】 レント・ウイステリア

「……よし、これで契約完了だ」

「うむ、今後ともよろしく頼むぞ主人よ」

そんな感じで俺は山賊のアジトで出会ったエレメンタル謎少女を
タイムした（させられたとも言おう）のだが……正直言つて物凄い厄ネ
タを背負い込んだ気がしなくも無い。

「まあ、それに関しては後で考えるところ……まずはこの砦から脱出
せんとな。あのゴーレム達は光学迷彩と気配遮断は有効みたいだが」
「解析出来た範囲ではあのゴーレム供の感知機能は視覚メインで補助
に聴覚、更に固有の探知スキルを付けられたものもおるな。……それ
とおそらくじゃがああゴーレムを操つておる存在は地脈を介して生
物の位置を探知しておる。地脈の自然魔力を読み取ったらその手の
術の反応があつたし」

……やっぱコイツヤベエ（震え声）……俺もこの世界の魔法技術に
はそこまで詳しい訳じゃ無いんだが、それでもコイツの魔法技術が
色々おかしいって事ぐらいは分かるぞ。

「それじゃあどうやって連中の目を誤魔化す？ ミュウちゃん達が全
速力で逃げていったお陰で今ゴーレム達の注意はあつちに向いてい
るが、追いつけないと分かればこつちに来るぞ」

「基本は光学迷彩と消音でどうにかなるじやろ。地脈からの生態探知
に関してワシならどうとでもなる、これでも自然魔力の扱いには長
けておるしな。……ただ、今のワシの魔力じゃと『裏技』混みでもあ
まり多人数を誤魔化せんから、そつちのヴォルトとゴーレム君を一旦

【ジュエル】に仕舞って……」

「……待って、この【ジュエル】一体だけしかモンスターを入れられないタイプなんだけど」

正直タイムモンスターを増やす気は無かったからな、移動用のヴォルトだけ入れられれば良いってそう言うタイプの【ジュエル】にしたからなあ。

「ふむ？ ヴォルトに《魔物強化》が掛かっておったから【従魔師^{テイマー}】だと思つとつたんじゃが」

【従魔師】のジョブも取ってはいるがヴォルトを強化するのと従属キヤパシテイを稼ぐ為に取っただけだから……」

「ああ、なるほど。その異常な高レベルは【勇者】と同じタイプか。……ま、そのぐらいならゴーレムをアイテムに変えれば良いじゃろ」

そう言うのとエレメンタル少女はおもむろにゴーレムの胸部に手を当てて、何やらぶつぶつと呟きながら俺には理解出来ないレベルで何かの魔法を使い始めた。

……そうして十秒ほど何かの作業をした後、エレメンタル少女はゴーレムの胸部を開いて中に入れてあった虹色の石(多分前に言っていた【魔神石】ってやつ)を取り出し、それと同時にゴーレムは膝を停して機能を停止した。

「これで【スチールゴーレムの素体】と【魔神石】の二つのアイテムになったからの。これならアイテムボックスに仕舞えるし、戦力が必要になったら素体に【魔神石】を入れれば直ぐにゴーレムとして使えると言う寸法よ」

「器用な事をするな」

「アイテムをゴーレムにする手法もあるからな。そのちよつとした応用よ」

とりあえず俺は【スチールゴーレムの素体】と【魔神石】をアイテムボックスへと仕舞いヴォルトを【ジュエル】へと戻すと、さっさとこの砦から脱出する事にした……どうも表のゴーレムはミュウちゃん達を見失って、追跡を諦めてこつちに来ているみたいだからな。

「それで生態探知を妨害する手段があると言う話だったが」

「その前に手を出してくれ。……今のワシのMPでは少々術の維持には心許ないでな。【魔神石】は本命の為に温存しておきたい故、《従属契約》の繋がりを置いて主人殿のMPをワシが使える様にするパスを繋いでおきたいのじゃ」

「そんな事も出来るのか。……まあ良い、分かった」

もういい加減このエレメンタル少女の出鱈目さには慣れたので、俺はさっさと済ませる為に手を差し出した……すると少女は俺の手を両手で取って目を瞑りながら、俺では理解出来ないレベルの術を行使していく、

「……さて、じゃあ《従属契約》を踏み台に《ライフリンク》とエレメンタルマンサー【精霊術師】の魔力供給系統のスキルを参考にして……いや、今後の事と長時間の使用に備えてこれはスキルとして習得しておいた方がいいか。MPを確保する手段はあった方が良い……よし、出来た《主従契約・魔力共有》サーヴァント・マジックリンク」

「む、これは……」

……エレメンタル少女がそのスキルの発動を宣言した途端に、俺と彼女の間に『何か』が繋がった様な感覚があった。

「魔力のパスが繋がった様じゃな。ちなみに接触状態じゃないと共有効率が大きく落ちるからこのままな。……それじゃあ地脈からの探知を誤魔化す為に『ジャミング・ライフサイン』……それと『オプティック・ハイド』と『サイレンス』もこっちで使っておこう。……よし、これで見つからないだろうから後はワシを運んでくれ。今のワシはティアンの子供にも負けるレベルの身体能力なのでな」

「実にトントン拍子に進むなあ……まあ分かった」

そうして俺はエレメンタル少女を小脇に抱えて廃砦から出る為に廊下を進んでいった……途中で砦に入って来たゴーレム部隊にも遭遇したのだが彼女が使った『隠密術式セット』の効果は絶大だった様で、ゴーレムの直ぐ横を通ろうが一切こっちに気づかれる事なく進む事が出来てしまった。

『……』

「……本当に効果バツグンだな。全くこっちに気が付いてない」

「まあ、このゴーレム自体にそこまで強力な探知機構は組み込まれていない様だから。おそらく地脈からの生態探知と視覚・聴覚情報の共有で周辺情報の探知を行うタイプの様じゃからな。そこを誤魔化してしまえばこんなものよ」

……そんな感じで俺達は特に何事も無くあっさりとゴーレム軍団の包囲網を突破して砦から脱出、そのままゴーレム達から離れる事に成功したのだった。

「……さて、無事に連中を巻けた訳だがこの後はどうする主人殿。このまま山を降りる事も出来るだろうが」

「お前、さつきはあのゴーレムを操る黒幕を倒す気まんまんな感じの事を言っただけか？」

「アレは売り込みの為の宣伝も兼ねて言っただけだ。……まあ、地脈を探ってみたらあのゴーレム達はかなり遠隔から操られている上、このヘクルエラ山岳地帯＜全域に多数展開されておる節がある……このまま時間を置けば経験値を稼いで更に厄介な事になるやもな」

……もしへUBM＜なら経験値で進化する可能性もあるし、そうで無くともこのヘクルエラ山岳地帯＜がゴーレムの領域になるって感じか。

「アイツらは山賊を積極的に殺して回っていたからな……良いだろう、厄介事はさつきと済ませるに限る。黒幕の位置は分かるんだろう？」

「うむ、地脈の自然魔力の流れを読んでゴーレムを操っているラインから逆探知すればな。……黒幕そのものを倒せるかは分からんが」

「それに関しては黒幕を見つけてから判断するさ。駄目なら撤退すれば良いしな」

そういう訳で俺はエレメンタル少女の案内の下、このヘクルエラ山岳地帯＜にゴーレムを展開している黒幕の所まで行ってみる事にしたのだった……ミカが俺をこっちにやっただけで事は『そういう事』だろうからな。

へUBM＜とかなら倒せる時に倒した方が良いだろうし、ミカに負担が掛からない様に可能な限り悲劇が起きない方が良いだろうしな。

『運が悪かったな』

□ヘクルエラ山岳地帯◇ 【黒土術師】ランドマンサー レント・ウイステリア

【クエスト】【救出】ケリー・メイティス含む商隊員】を達成しました」
「……ふう、どうやらミカ達は無事に山を降りられたみたいだな」

俺は山の中を歩いている最中にクエスト達成のアナウンスが入って来たので、どうやらミカ達は無事に彼女達をヘクルエラ山岳地帯◇から脱出させたのだと安堵のため息を吐いた……さて、向こうは片付いた様だし、こっちはこっちでは『山中のゴーレム』への対処に集中しよう。

「……それで、あのゴーレム共を操っている相手の位置は分かったのか？」

「まあ待て、そう逸るでない……ふむふむ、まああの時代の人間が使っていた術式としてはそこそこ高度な物じゃが、ワシならば……」

そう言いながら先程紆余曲折あってタイムモンスターになった【リトル・ネイチャーエレメンタル】は、俺と手を繋ぎながらしやがんで地面に手を当てながら何かを探っていた。

曰く、地脈に流れる自然魔力を読み取る事で、地脈を介して操られているゴーレム達と操っている『黒幕』とのラインを読み取ってその位置を逆探知しているらしいが……正直【魔術師】メイジ系統のジョブを複数持っている俺でも何をやってるのかさっぱり分からん。

「しかし自然魔力ね……俺も《魔力感知》とか持つてるんだがさっぱり分からないな」

「あのスキルは生物の魔力^Mを感知出来る様になるスキルじゃからな。自然魔力の感知には別のスキルと技術が必要になるんじゃないよ」

やっぱりこのエレメンタル少女の魔法技術はとんでもないレベルっぽいな……俺もデンドロを始めてまだ大して経っていないからこの世界の魔法技術に関してそこまで詳しい訳では無いけど、魔術師ギルドとかで少し調べた限りでは『自然魔力の操作』の情報は僅かしか無かったし。

「向こうから逆探知される事とかは無いんだな？」

「まあ大丈夫じゃろう。……これでも前世では『天竜王]や[アムニール]の様な例外を除けば』トツプクラスの自然魔力操作技術を持つておったと自負しておるし、何より地脈の自然魔力を介して配下の操作や感覚共有は前世で散々やって来たからな。大きく弱体化した今のワシであつても、この程度の相手に、そんなへマはせんよ」

……後、前世で、それなりの長い時を生きてきた、って言うのも多分本当かな。さつきから「天竜王]やら「アムニール]やら、後は『化身』って言う単語も聞こえて来たし。

以前に王国の図書館で調べた時、前者二つは古い時代から存在する超有名ユニーク・ボス・モンスターへU B Mが紹介された本に名前があつたし、後者の方に至つては『先々期文明の伝説』とかいう本に出て来た単語だし……しかも、雰囲気とか話し方的に聞いた話とかじゃなくて実体験っぽい感じだしなあ。

「厄ネタ……と言うよりもゲーム序盤で仲間にしてはいけないユニツトな気がする……」

「? どうしたんじや」

まあ、このエレメンタル少女と初めて会つた時から『絶対にヤバい相手』だと言うのは分かつてたし、ミカの発言から今後の事を考えるとコイツが強いに越した事は無いんだろう……ただ、その後の話を聞くにつれて想定よりも二三段ヤバイヤツだったただけで。

……と、そこまで考えたところで、俺は『そういえばコイツの事を、エレメンタル少女』としか読んでないな』と思ひ至つた。色々といんパクトのある出来事の連続だったからなあ。

「そう言えば、お前の事はどう呼べば良い? 前世とやらの名前があるならそれで呼ぶが」

「むむ? ……うーん、前世のワシと今のワシでは似ても似つかぬしなあ。……そうじゃ! せつかくだから主人殿が今のワシに名前を付けてくれい。タイムモンスターは主人が名前を付けるのが一般的なんじやろう? 何せタイムされるのは初めてじゃから、そういう事も楽しみたいのじやよ」

そう聞いてみたらエレメンタル少女は僅かに考え込む様な素振り

を見せた後、とても楽しそうな事を思い付いた表情でそんな事を宣った……俺にタイムしろと迫って来た時と言い、このエレメンタル少女は結構酔狂な性格をしてるんじゃないか？

……それと同じぐらいこっちの事を見定めてる気もするがそれは俺も同じではあるし、どんな理由があれタイムした以上はちゃんと面倒を見るつもりだが。

「……さて、それじゃあ名前ねえ。……うーむ、こう言うのは複雑に考えても決められないからファイリングで……種族名が「リトル・ネイチャーエレメンタル」だから適当に振って『ネリル』とかどうだろうか？」

「ネリル……ネリルか、良い響きじゃな。……それでは「リトル・ネイチャーエレメンタル」のネリル、改めてよろしく頼むぞ主人殿」

俺が（種族名の中の単語をそれっぽく組み合わせ）考えた『ネリル』という名前を聞いたエレメンタル少女は何度かその名前を反芻した後、どうやら気に入った様で笑顔を浮かべながら俺に改めてよろしくと言ってきた。

……多分何か裏があるとかそういうタイプでは無いと言うか、俺のタイムモンスターになった事を含めて現在の状況を楽しんでいる感じかな。長生きしていると経験していかない事に遭遇すると新鮮味を感じて楽しくなると「昔の友人」も言っていたから、その類かもしれない。

「ああ、こちらこそ宜しく頼む」

「うむ……さて、早速じゃが主人殿、ゴーレムを操っている者がいる方角は分かったぞい」

少なくともエレメンタル少女——ネリルの事を信頼しても良いだろうと思っただ俺は同じ様に改めてよろしくと伝え、それに頷いた彼女はスックと立ち上がって本題である『ゴーレムを操っている者の探知結果』を伝えて来た。

「地脈の自然魔力を辿った所、ここから北東の方角からゴーレムを操作している魔力が流れている事が分かったぞい」

「流石に詳細な位置までは分からないのか？ まあ方位が分かるだけ

凄いのだが」

「流石に一回ではのう。これから移動しつつ近づきながら何度か探知を行えば詳細な場所も分かるじやろう。……それにこの方角はへ山岳国家クルエラ」の首都があった方じやしな」

「……ふむ、確かその国は昔ゴーレムを運用していたから、そこで作られた魔道具か何かが暴走した可能性があるとか言っていたか。

「成る程、そのへ山岳国家クルエラ」が国防目的でゴーレムを使っていたのなら、当然扱いやすい様に首都の近くに魔道具も配置しているか」

「うむ。……加えて地脈を介する類いの魔道具であれば、運用効率を上げる為に複数の地脈が交差する『要』に配置されておる可能性も高いじやろうて。その辺りを重点的に探れば何か見つかるかもな」

そんな感じで考えを纏めた俺達はゴーレム達に見つかからぬ様にネリルの隠密魔法セットで姿を眩ましつつ、一路へクルエラ山岳地帯」の北東へと歩みを進めていったのだった。

◇

そうして山中を歩く事だいたい二時間ぐらい……途中途中でネリルの地脈探知で足を止めたり遭遇したゴーレム達をやり過ごしたりしていたので時間は掛かってしまったが、俺達は漸くかつてへ山岳国家クルエラ」の首都があったという場所までやって来ていた。

「……ふむ、やはりかつて首都のあったあのへ二つ山」の方から魔力が流れて来ておるな」

「へ二つ山」……確か縦長の山が二つ並んでいて、その間の渓谷が王国とカルディナを結ぶ通商路になっているんだったか。冒険者ギルドで見た資料だと逃げ場が少ないから山賊の多発地域の一つだと書いてあったが」

「ちなみに元はへクルエラ山岳地帯」でもトップクラスの巨大な山じやったんだが、例の如く【霸王】の弱攻撃でああなった」

尚、何故『弱攻撃』なのかと言うと、もし【霸王】が本気で戦った

ちよつと強化すればいけるじやろうし。……それに引つ張りあげる事になったらトドメを刺す者も必要じゃからな」

「じゃあゴーレムを囿にして俺達がこつそり接近、そのまま一気に黒幕を倒すって事でいいか？」

「それでええじやろ」

あまり時間を掛けて追加のゴーレムが現れるとかするのもアレなので、俺とネリルは手早く作戦を決めるとアイテムボックスから「スチールゴーレムの素体」を出して「魔神石」をセットして再び「スチールゴーレム」へと戻した。

『GOGGO』

「さて、流石に亜竜級三十体相手に単騎では囿にならんし出力を上げるか。素体の質が低いから負荷は大きくなるが仕方ないの……『ゴレムス・オーバーロード』」

『!??! GOGGGO!!!』

そして更にネリルがゴーレム君に何かの魔法を掛けると、その体から虹色のオーラの何が吹き出した……曰く、埋め込んだ【魔神石】内の多量な魔力を使って「スチールゴーレム」のステータスを一気に純竜クラスにまで引き上げる魔法らしい。

……加えてネリルは《マテリアル・レジスト》《ファイア・レジスト》などの防御魔法を可能な限り掛けていった。

「……なんか魔力がちよつと可視化したが目立つし囿には丁度いいじやろ……よし行け」

『GOOOOOーッ!!!』

「……それじゃあ俺達も行くか」

……雄叫びを上げながら溪谷に突っ込んで行ったゴーレム君を見送りつつ、俺達はステルスを続行しながらへ二つ山へ側の森を迂回して目的地点に接近して行ったのだった。



□へ二つ山へ溪谷

『GOOOO!!』

『《サンダー・スラッシュ》』

『《インパクト・ストライク》』

『《チャージ・スラスト》』

『《ロック・ジャベリン》』

そんな雄叫びを上げながら渓谷に突入して暴れ回る「スチールゴーレム」がその拳で敵のゴーレムを叩き潰し、それに対抗する様に各亜竜級「クルエラゴーレム」達がそれぞれ覚えているスキルを次々と繰り出してダメージを与えて行く。

……だが、いくら「スチールゴーレム」が強化されていようとも流石に多勢に無勢、加えて攻撃用のアクティブスキルまで駆使してくる「クルエラゴーレム」達相手では流石に劣勢であり、何体かのゴーレムを倒しても直ぐに補充される事もあつて徐々に追い詰められて行つた。

「……まあ、注意を引きつけるならこれで良いんじゃないかな。余りにも無双させ過ぎると援軍とか呼ばれそうじゃし」

「ゴーレム達の目は全員向こうに向いてるからな。お陰で目的地点まで来れた」

だが、その間にレントとネリルは〈二つ山〉側から回り込んで「クルエラゴーレム」達の後方——逸話級〈UBM〉「山核型骸　クルエラン・コア」がいる地中に近い位置まで気付かれぬ様に到着出来たのだから、ゴーレム君は十分にその役目を果たしたと言えるだろう。

……そして、今ネリルは最終確認として地面に再び地面に手を当てて地中にいる「クルエラン・コア」の詳細な情報を探っていた。

「……ふむふむ、まあ予想通り地属性魔法攻撃には対策がある様じゃな。地脈との接続によって周囲の土石を操りにくくしている上に……これはゴーレムを操っている何かが古代伝説級金属の合金で覆われておるか。地中に魔道具を埋めるなら箱に入れるぐらいは必要じゃからな」

「どうするんだ。向こうも押されてるし余り時間は無いぞ」

「問題は無い、要は地脈と魔道具の接続を切れば良いんじゃないかな。」

一時的にしか出来んがその間に地上へと引きずり出せばほほ何も出来まい。……ただ、その間は隠蔽が切れるからな」

「分かった。作業が終わるまでは俺が守ろう」

「うむ……では、いくぞ」

それだけ言い終わるとネリルは取り出した【魔神石】を砕きその身に膨大な魔力を宿らせ、俺はヴォルトを呼び出すと共に準備してあった【シルヴァ・ブライト】を向こうで戦っているゴーレム達へと向けた……同時に膨大な魔力が発せられた事で隠蔽が意味を無くし、地上のゴーレムと地中の【クルエラン・コア】がようやく彼等に気がつくが……。

【魔神石】起動！ 自然魔力強制注入！ そして地属性魔法《テイグアウト》じゃ!!!」

「ヴォルト！ ゴーレム共を撃つて牽制！ 《ヒート・ジャベリン》！」「承知！ 《ライトニング・ジャベリン》!!!」

彼等が何かするよりも早く、まずネリルが両手を地面に付きながら【魔神石】から溢れた自然魔力を地脈に無理矢理叩き込む事でその流れを乱して地脈関係のスキルとゴーレムの遠隔操作を一時的に使用不能にし、更に増加した数十万ものMPを使って、地中にある物を掘り出す。地属性魔法を行使する。

それと同時にレントとヴォルトはその魔法を邪魔させぬ様に光の銃撃・炎の槍・雷の槍を【クルエラゴーレム】達へと撃ち込んで、何体かのゴーレムを破壊した。

『ツ!?? 《レイライン・コネクト》を行使……不可!??』

『「」………!??「」』

自身を地上へと引き上げ様とする地属性魔法を妨害する為に【クルエラン・コア】は地脈の自然魔力を操ろうとするが、その分野に於いては五段は上をいく技術を持ったネリルの妨害をどうにかする事など出来ずどんどん地上まで引きずり出されていく。

そして地上にいるゴーレム達も【クルエラン・コア】が地脈を介した指示を出せなくなった事で自立行動による場当たりの行動しか出来ず、未だに暴れ回る【スチールゴーレム】とレント・ヴォルトの

魔法攻撃もあつてネリルに対しては何も出来なかった。

……そうしている間に渓谷の中程の地面がひび割れながら盛り上がっていき、そこから約5メートル四方の古代伝説級金属で出来た立方体に入った「クルエラン・コア」が地上に叩き出された。

『■■■■■■■■■■?』

「出て来たな……【山核型骸 クルエラン・コア】か」

「地中で使う魔道具だから地上に出して仕舞えば何も出来ない……が〈UBM〉なら何かしてくる可能性はゼロでは無いから早急に倒す事をお勧めするぞい」

「分かっている。《イミテーション・プリユーナク仮想秘奥・神技昇華》レベル合計40消費……《クリムゾン・スファイア》!!!」

いきなり地上に放り出された「クルエラン・コア」に対してレントは迷う事なく自身のレベルを捧げて超級職の奥義に迫るまで強化された《クリムゾン・スファイア》を撃ち込んだ……が、その古代伝説級金属合金は単純な強度も高い上に魔法耐性を持つ金属との積層構造になっていたので、着弾した部分を溶解させて内部の「クルエラン・コア」本体であるクリスタルの様な結晶体を露出させるだけの結果に終わった。

『?』

「おげ、これでも仕留められないか」

「いやが、あのクリスタルが本体の様じゃし破壊してしまえばこちらの勝ちじゃ。ワシの残りMPも貸すからさっさとやってしまえ。
サーヴァント・マジッククリンク《主従契約・魔力共有》」

……だが、地上に放り出されて地脈との接続も阻害された「クルエラン・コア」に出来る事は何も無く、ネリルの手を取ってMPを共有したレントが「シルヴァ・ブライト」へ彼女に残った10万程のMPを注ぎ込む所をただ見ているしか出来なかった。

「ああアレだ、色々運が悪かったな」

『?』

そしてレントが苦笑いしながら「シルヴァ・ブライト」の引き金を引くと同時に、放たれた大出力レーザーが「クルエラン・コア」の本
????????

打ち上げく前世のお話

□決闘都市ギデオン 【黒土術師】ランドマンサー レント・ウイステリア

「……まあ、そんなこんなでなんやかんやあつてへクルエラ山岳地帯〈ユニーク・ボス・モンスターでゴーレムを生み出していたへU B M〉【山岳型骸 クルエラン・コア】は討伐して来た。後このズボンが特典武具ね」

「……いや、〴〵そんなこんなでなんやかんや〴〵つてなんやねん」

『特典武具は本物だし嘘は付いてないみたいウサ』

そんな訳でへクルエラ山岳地帯〈での事件があつてから現実で24時間、デンドロでは3日程経った後、俺はクエストに参加したパーティーメンバー達と合流して無事を報告すると共に【クルエラン・コア】を討伐した事を報告していた。

……ちなみに【クルエラン・コア】を討伐してから俺はヴォルトに乗ってギデオンに戻って来ていたのだが、ちよつとリアル側で用事があつたのでネリルの為に新しく【ジュエル】を買い換えた後さつさとログアウトしており、1日経つてようやくリアル側が落ち着き片付いたのでこうしてログインしている形である。

「お兄ちゃんが大丈夫だとは〴〵分かつてた〴〵けど、お陰で冒険者ギルドに『へクルエラ山岳地帯〉に謎のゴーレム出現』つて報告したのが無駄になつちやつたね」

『事件に関する情報募集』つてクエストも出てましたし」

「これは先に冒険者ギルドとかに報告しに行つた方がええかな」

そういう訳で俺達は冒険者ギルドまで行つて『へクルエラ山岳地帯〉でのゴーレム事件に対する情報募集』のクエストを受けた上で、既に原因となつた【クルエラン・コア】を討伐した事を特典武具を見せながら説明した。

……その時に余りのスピード解決からやらせとかを少し疑われたりもしたが、シユウさんと月夜さんの交渉力と物的証拠特典武具、そして何より『真偽判定』に反応が無かつた事で説明は特に何事も無く信じて貰えた。

「……とは言え、クエストの報酬まで大量にせしめたのはちよつとど

うかと……」

「ウチの交渉術の勝利や！」

「……がめついでだけでしょ……」

『自重しろや女狐』

……まあ、その際に月夜さんが『〃へUBM〃』を討伐して王国とカ
ルディナを結ぶ行路にゴーレムが居なくなつた〃という最大の情報
を持つてきたのだから報酬は大目をお願いな。出来ればへUBM〃の
討伐報酬とかも』てな感じの交渉を持ち掛けて、すつたもんだの末に
クエスト報酬増えたりした事件も起きたが。

最も、出現してから直ぐに討伐された所為で「クルエラン・コア」に
は懸賞金などは掛けられておらず、被害も山賊やモンスターが殺され
た程度とほぼ出なかつたので精々クエスト報酬が倍になつたぐらい
だが。

「……と言うか、その情報を持つてきたのもへUBM〃を討伐したのも
レントさんだから、その報酬もほぼ全部彼の物では？」

「え!?? ……い、嫌やなー葵ちゃん。そもそもちよつとへUBM〃を
討伐したレンやんへの報酬が低かつたから善意で口添えしただけや
し(震え声)」

「別に独り占めしようとは思ってませんよ、このメンバーで受けたク
エストの結果ですし。……なんならクエスト達成の打ち上げとかで
盛大に使いましょう」

「わーい！ お兄ちゃん太っ腹〜！」

『まあいいんじゃないかウサ』

……とまあ、そう言う成り行きで言つてみた俺の『このクエスト報
酬を使つての打ち上げをする』と言う提案だつたんだが、その場にい
たパーティーメンバーにあつさりを受け入れられたので、俺達はその
まま冒険者ギルドの帰りに打ち上げに行く事になつたのだつた。



「それじゃ、難易度：九のクエスト達成を記念して乾杯！」

「「「かんぱーい！」」」

ここはギデオンにあるレストラン〈榎熊食堂〉、ここで俺達はクエスト達成の打ち上げを始めていた……何でもこの店は大人数で入れて多少騒がしくしても文句はせず、その上料理もそこそこ美味いと冒険者行きつけの場所らしいので丁度いいだろうと思つてここにしたので。

「いやあ、色々あったけど終わつてみれば葵ちゃんは特典武器を手に入れたし、王国の教会とも『仲良く』出来たしクランとして得る物は多かつたな。カケさんはデスペナつたけど」

「俺としてはあのセリフを言った上で時間稼ぎが出来たので満足でしたが。……ま、負けっぱなしは嫌なのでこの後はもう少し鍛えますよ」

「そう言えば救出された人達はどうなつたんだ？」

「今は教会で療養中だった筈だよ。後日お礼をしたいとか言つてたかな」

「そこまで悪い扱いは受けていなかった様なので少し休めば大丈夫だとも言つてたのです」

『結果的には万々歳ウサ』

……まあ、色々あった濃ゆいクエストだったが終わつてみれば人質も無事、〈UBM〉も2体倒せたしクエストクリアつて事で良いだろう。

「……モグモグモグ、ムグムグムグ……」

「かわいい〜！ ネリルちゃんだったわけ？ これも食べる？」

「頂くのじゃ、モグモグ」

「……銀髪のじゃロリとかポイントが高い。こんなタイムモンスターを持つているなんて、レントさん恐ろしい人」

「葵ちゃんつてば……（苦笑）」

……後、何故かいつの間によら「ジュエル」から出ていたネリルが〈月世の会〉女性陣に囲まれて飯を食べさせられていたんだが……後、ネリルの見た目は大体小学校高学年ぐらいだからロリとか言えるかもしれないが、俺は別にのじゃロリだからタイムした訳では無いぞ

(強弁)

「で、お兄ちゃん。あの子が?」

「ああ、先日へクルエラ山岳地帯で新しくタイムした「リトル・ネイチャーエレメンタル」のネリルだ……詳しくは後で話す」

「ふーん……そう言えばゴーレム達の情報を得たって言っとつたみたいやけど」「企業秘密です」返答早いな! ……じゃあ特典武具の能力は「禁則事項です」知ってた!」

『手の内の秘匿は基本ウサ』

この後にキチンと聞き出す予定だが、ネリルの正体は秘匿しておいた方が良い類のモノだろうからな……戦力秘匿的にも厄ネタ的にも諸々の情報的にも。

……ちなみに特典武具「クルエラン・コア」はMPへの補正と自動回復スキルがあつたんだが、もう一つ《??》のスキルがあつたので能力はまだよく分かっていないのが実情だったりするんだが。

「ま、別に無理に聞き出そうとは思わへんし別にええけど。……とりあえず今後は王国の教会とへ月世の会で「仲良く」していければええな。ウチらは医療系のへエンブリオへ持ちも多いし、王国の医療担当な司祭達が所属する教会とは「協力」していけると思うんやー」

『……この女狐の発言に一々裏を感じるのは俺の気の所為であつてほしいウサ』

「……まあ、ウチのオーナーはとても善人とは言えない腹黒だけど、それでも外道や非道な事はしないだろうから……」

「モグモグモグ、やっぱり人間の食べ物美味しいのじゃー」

「……兄様、あの子ただの子供にしか見えませんが……いや、何か凄いモノを秘めてるのは分かるんですよ?」

「……安心しろ、俺も不安になつて来た所だ。……まあ、凄いヤツなのは確かだから」

「可愛いよねーネリルちゃん」

……月夜さんの発言にシュウウさんと葵ちゃんが突っ込んだり、ネリルの食べっぷりに俺とミュウちゃんが苦笑いしたりと色々あつたが、

打ち上げ自体はかなりの盛り上がりを見せたのであった。



□決闘都市ギデオン・とある宿屋 （ヘビーファイター）【重戦士】ミカ・ウイステリア

「いや〜食った食ったのじゃ」

「アホみたいな量食べやがって……太るぞ」

「この身体はエレメンタルじゃから肉体の変化は自由自在なので問題ないのじゃ」

「羨ましい……」

そうして結構盛り上がった打ち上げが終わった後、私達は新しく仲間になったネリルちゃんの「事情」を聞くために借りていた宿屋に戻っていた……お兄ちゃんに少し聞いた所『色々面倒そうな出自をしている』らしいけどどうなんだろう。

……私の「直感」だと『彼女の力が今後の私達がこの世界で戦う為には必要不可欠』だと出ているんだけど……。

「さて、新しく仲間になったネリルなんだが……コイツは異常なレベルの魔法技術とか知識とかを持っていて、昨日の【クルエラン・コア】を撃破出来たのも99%ぐらいはコイツの活躍によるものだ。ぶっちゃけ俺なんて只のMPタンク代わりだったしな」

「いやあ、それほどでも」

そんな感じで、お兄ちゃんはヘクルエラ山岳地帯でネリルちゃんと出会ってから【クルエラン・コア】を倒すまでにあつた事を詳しく説明してくれたのだが……うむ、予想以上にネリルちゃん無双だった件について。ミュウちゃんやミメちゃんも驚いてるよ。

「ええ……」

「只者じゃないとは思ってましたが……」

「しかし、そこまで凄いとネリルちゃんの前世が気になるね」

「ああ、俺もそこを聞くつもりだった。……じゃあネリル、話して貰うぞ」

「んー良いぞー。ワシの前世は神話級（UBM）【魔鉱地蟲 アニミ

ズワーム」と言つてな。元は「先々期文明」のしがない【ミネラルワーム】だったんじやが、長生きしてるうちにへUBM〈になったんじやー」

そんなネリルちゃんが間延びした口調で告げたその言葉に、私達は驚きながらもその実力に見合う前世にどこか納得した感じになつた……今の彼女からは宿屋のベッドでゴロゴロしてる彼女からはちよつと想像出来ないけど。

……とりあえず彼女は質問に関しては普通に答えてくれるみたいだし、他にも色々聞き出してみようと私達はアイコンタクトで意思疎通しつつ質問に入った。

「というか【ミネラルワーム】って確か蚯蚓型のモンスターだったよな」

「そうじゃぞー、鉱石を食べてその排泄物で土壌の自然魔力を整える役目のモンスターじゃな。前世のワシは全長500メートルぐらいあつたけどー」

「それでなんで今はエレメンタルなの？」

「んー、前世ではエレメンタルの扱いに長けていてな。よく地中で食っちゃ寝しながら感覚を同調させたエレメンタルを地上にやって観光したりしとつたんじや。……最も、今のこの肉体は万が一の為の緊急離脱手段として作ったモノじやからな」

その後のネリルちゃんの説明曰く、その『万が一の為の緊急離脱手段』とは作成したエレメンタルに《リインカネーション輪廻転生》の応用で自身の記憶と人格を写してからランダム転移魔法で離脱させるという物だったらしい。

……加えてその後に残った肉体が全力で暴れて敵の注意を引きつけると同時に転移が行われた事を悟られぬ様にし、更にその状態の本体が倒されるとへUBM〈としての特典武器や経験値はちゃんと入るので、相手は【アニミズワーム】を倒したと考えると離脱したネリルちゃんを追う事も無いという完璧な離脱手段……とネリルちゃんはドヤ顔で説明していた

「……神話級へUBM〈なのにそんな手の込んだ逃走手段を用意してた

のか」

「そんな事するぐらいなら戦闘能力を上げた方がいいんじゃない？」

「いやいや、戦闘能力面だとこの2000年の間に頭打ちじゃったしな。かつてのワシはレベルも100まで上げてしまっておったし。

……それに前世のワシは「ミネラルワーム」種の「鉱石を食べてそのリソースの一部を経験値とする」スキルを2000年使った結果レベル100になった様なもんじゃから、戦闘能力は神話級へUBMの中ではそこまで高い訳では無いんじゃないよ」

……そう言ったネリルちゃんはベッドでゴロゴロするのを辞めて、その縁に座りながら前世の自分の事について語り始めた。

「実際、同じレベル100の神話級でも【輝竜王】や【凍竜王】辺りと戦えば勝つのは難しいし、そもそもこの世界には神話級へUBM程度ではどうしようもない様な「イレギュラー」もおるからな。……ワシは【天竜王】みたいな『なんでか死なねー』的なインチキは出来ないから、こういうった小細工をするしか無かったんじゃないよ」

「へー……ちなみに前世のネリルちゃんってどんな事してたの？」

「ん？ さつきも言った通り基本的には地中深くで食っちゃ寝しながらエレメンタルを地上にやって色々なモノを見ながら暇を潰したり、退屈しのぎに新しい魔法を作ってみたりしてたな。……後は偶に同族に指示を出して地脈の自然魔力が乱れた所を調律したり、餌である鉱脈の状態を維持したり、地上にある珍しい鉱石を食べに行く事もあったか」

「……神話級へUBMってのもつと物騒なものだと思ってたのです」

「種族的に鉱石が主食じゃから他のモンスターを狩る必要も無いしな。戦闘に関しても偶に現れる地中系へUBMが襲い掛かって来るのを地属性魔法で潰したりしたぐらいじゃよ。……それに下手に人間に手を出したら【霸王】とか【龍帝】とか【聖剣王】とか【妖精女王】とかに目を付けられるの……人間のハイエンドと特殊超級職怖い」

お兄ちゃんの話と彼女のこれまでの行動からそんなに心配しなかったけど、性格に問題がある感じでは無くて良かったよ……まあ、

ちよつと人間とは価値観が違う気がするけど、そこはモンスターだし
上手く折り合いをつけて行ければ良いでしょう。

「それじゃあネリルちゃん、君がここにいてるって事は【アニミズワ
ム】は死んだって事みたいだけど、どうして死んだの？」

「あー、それが分からないんじゃないかなあ。……記憶転写時に不備が
あったのか大体、転生する直前から3ヶ月前までぐらいの前世の記
憶が無い”んじゃよな。この身体の記憶はヘクルエラ山岳地帯で
行き倒れていた時からじゃし。まあ何分記憶と人格の転写なぞ初めて
だったからその程度の不備で済んだのは幸運じゃと思いはするが、お
陰で前世のワシが死んだ時の状況はさっぱりじゃ」

「何か心当たりとかは無いのか？」

「うーむ、寿命はまだ大丈夫の筈じゃったし……やっぱり神話級以上
の〈UBM〉に襲われたかしたかの？ 突如現れた地中戦闘系条件特
化型とか対魔法特化とかの神話級と戦えばやられる可能性は十分に
あるし……正直、この世界には前世のワシより強いのが幾らでもいる
からの。そんな連中にかち合えばレベル100の神話級でもやられ
る事はある」

「……ちなみに前世の貴女の戦闘能力とか戦闘方法とかがってどんな感
じだったのです？」

「基本は三千万程のMPと長年鍛えて来た魔法技術による魔法戦じゃ
な。物理系ステータスは巨体故にHP・STR・ENDはそこそこ
じゃけど、そもそも【ミネラルワーム】自体が戦闘には不向きな種族
じゃからの。……まあ、種族的に秀でた鉱石と自然魔力の扱いから
【^{ジュエム}魔石】を作るのは得意で、それらを《鉱物貯蔵》によって大量に溜め
込んでおったからのう。MP換算で数十億ぐらいのそれらを一気に
消費すればかなりの攻撃力を得られるぐらいか」

「……とりあえずネリルちゃんの言ったMPの量が色々おかしい件
について(困惑)……これで戦闘能力がそんなに高く無いとか絶対に
嘘でしょ。お兄ちゃん達もちよつと引いてるし。」

「……では最後に、ネリルちゃんはお兄ちゃんのタイムモンスターに
なつて何かやりたい事とかはあるかな？」

「とりあえず前世では直接食べられなかった人間の食べ物をもつと食べたいな！ 感覚を同調させたエレメンタルで食事をした事はあるが、直接食べるのは無理じゃったからの！」

「確かにそういう契約だったからな。タイムモンスターとしての仕事をしてくれるのなら食事の保証はするさ」

「まあ、頼りになる仲間が増えたって事にしておこうなのです」

そんな風に目をキラキラさせながら語るネリルちゃんを見て、その前世の話を聞いてちよつと困惑していた私達もすっかり毒気を抜かれた感じになってしまった……まあ、ミュウちゃんの言う通り頼りになるのは確かだろうし、そもそも信頼関係とは一朝一夕で得られるものじゃ無いからね。時間を掛けてじっくりと仲良くなれば良いかな。

間章 色々なへマスター〜達 とある大学での一コマ

□地球・とある大学 加藤蓮

デンドロでネリル（元神話級）をタイムしてから数日、夏期休暇も終わってしまったので俺はごく普通に大学へと通っていた……デンドロやる時間は減るがリアル優先である以上はしようがない。

そこで今は昼休みなので食堂できつねうどんを啜りつつ、同じ大学一年生で中学からの付き合いがある友人の加茂姫乃かもひめのと話していた。

「……ふーん、蓮もデンドロ始めたんだ？」

「ああ、妹達と一緒にアルター王国でな。……その言い方だと姫乃もか？」

「ええ、一月ぐらい前からレジエンダリアで始めたわ。今は気の合ったへマスター〜とパーティーを組んで色々やってるわね」

そんな事を言いながら姫乃は天ぷらそばを啜っていた……ちなみに彼女は身長175ぐらいの長身でスレンダーなモデル体型、かつ長い黒髪に整った顔の美人なのでさつきから結構注目されていたりする。

……俺の方にも視線が来ているが多分姫乃のついでか嫉妬の視線だろう。中学の頃から良くあつたし。

「……言っとくけど蓮も普通にイケメンだから見られているのよ。話題の美男美女で座ってるから注目されているんだし」

「姫乃はともかく俺はそんなに話題になっていたか？」

「貴方この大学にトップの成績で入学したじゃない」

「それを言うならそっちは推薦入学だろう」

コイツは外見だけでなく中身までハイスペックだからな……まあ、それを言うと『お前にだけは言われたくない』って突っ込まれるから言わないけど。

……とは言え所詮は珍しい物見たさの視線なので、しばらく時間が経って食堂に人が増えて皆が食事に入っていくと自然にそう言った

視線は消滅していった。

「さて、注目も逸れた事だし本題の〈Infinite Dendrogram〉の話を続きをしましょうか。……実は私がデンドロ始めたのって『仕事』も兼ねてのものでもあるのよね」

「それって『巫女さん』の方の仕事か？ ……裏側の」

「ええ、何故か巡り巡って私にしわ寄せが来たのよねえ。……いくら私が『靈視』出来るとはいえゲーム内の情報収集はまた畑が違うだけど……」

実は姫乃の実家は古くから続く神社であり、彼女自身も『本物』の巫女——この世界では一般には知られていないが『怪異』やら『異能力』などの『裏の世界』とも言えるモノが存在している——であり、『有らざるモノを見る』眼を持っているのだ。

……ちなみに俺と姫乃の出会いには中学の時に巻き込まれた裏側関係の『とある事件』での事で、その時に色々と世話になったのがきっかけだったりする、

「……まあ、一応これでも国内最高峰である私の靈視が全く通じない時点で只のゲームではないでしょうからねえ。ログインして肉体がアバターに変わってからは靈能力全ての行使が不可能になったし。……アレ、多分だけど魂か情報体か何かを別の器に入れるヤツね。根本的なレベルが違いすぎるから断言は出来ないけど」

「それでログインして普通のゲームプレイヤーとして情報収集していると。……正規以外の方法ではやらなかったのか？」

「分かってて聞いているでしょ。……そうしたら死ぬ未来しか見えなかったのよ。実際私以外にデンドロの調査依頼を受けた電脳系の異能者が不正ログインしようとして、逆に精神が破壊されて廃人になっただって聞いたし」

……まあ、先日ネリルから聞いた『先々期文明に現れた『化身』』の話聞いた限りだとそうなるよなあ。ニユースでもデンドロに不正アクセスしようとしてスーパーコンピュータがアボンされたってのがやってたし。

「……そんな危険な仕事をよく受ける気になったな」

「まあ、正規ルートで行けば問題無いって『視えた』し、チュートリアルの時に担当になった『クイーン』と言う管理AIから『正規の方法でログインして普通にゲームをプレイするのなら、こちらからは一切の干渉はしない』って言質を取ってるから」

「ああ成る程、こつちのも確かに『ヘマスター』に取っては最初から最後までただのゲーム』と言ってたな」

「そういう意味ではゲームを楽しみながら給金が貰えるから悪くない仕事よ」

やっぱり、あの『管理AI』達は正規の『ヘマスター』に関しては基本的に干渉で間違いなさそうだな……先々期文明を始めとした『あの世界における重要情報』を数多く知るネリルを仲間にしたり、彼女から情報を多く聞いても俺は一切問題なくデンドロをプレイ出来ているからそうだと思うてはいたが。

「それで、情報収集はどのくらい進んでいるんだ？」

「それがさっぱり。普通にプレイするだけだと集まる情報はwikiで手に入るもの以下だしね。……まあ、依頼主達の方もデンドロの余りの難攻不落っぷりにもう諦めムードだから、情報無しでも給金が減るぐらいで何か言われる事も無いんだけど」

「まあそうだな。まだデンドロ発売からこつちでは1カ月半だし、早々有用な情報が手に入るなんて事は普通は無いよな」

尚、先々期文明から世界を見続けてきた神話級ユニーク・ボス・モンスターへU B Mの転

生体なんて仲間にした俺とかは例外だが、正直言つてネリルから聞いた情報はどれもこれもヤバイ厄ネタだから扱いに困るんだよな……。『とりあえず今は普通にゲームをプレイしているわよ。固定パーティーも出来たしへUBM』を討伐して特典武器をゲットしたりと割と順調な方ね」

「成る程な。……とところで、レジエンダリアには変なプレイヤーが多いと聞いたが「私はロリシヨタでもバ美肉でも無い」ア、ハイ」

そうやって軽い気持ちで聞いてみたら姫乃がいきなり物凄く据わった眼をしてそんな事を言った……。これは地雷を踏んだか？

「大体私は現実で背が高いからちよつとゲームの中では小さい身体で

もいいかなと思つて小型のバターにただけなのよ。なのにあのクソ覆面変質者と来たら困つていた小学生ぐらいの〈マスター〉を連れた私に『瞳がだいぶ曇つているので本物のロリではありません。しかし俺と同じくロリシヨタを愛し助けようとするその姿勢は見事。同士として手助けしましょうぞ』とか公衆の面前で言つてくれたお陰で私までレジエンダリアの〈マスター〉達にはバ美肉ロリシヨタ扱いされる羽目になったし新しく出来た〈Y L N T 倶楽部〉の連中には同類を見る目で見られるし……」

「どうどう、落ち着け」

暗いオーラを滲ませながら早口で捲したてる姫乃を落ち着かせつつ、俺は食い終わった後のドンブリ二つを返却場所へと持つていく……美人がいきなりぶつぶつ言いだしたからめっちゃ目立つてるしな。ここはさっさと食堂を出た方が良かったらう。



「……あー、落ち着いたか？」

「……ええ、大丈夫よ。悪かったわね」

そんな訳で姫乃を連れて食堂から出た俺は適当なベンチに彼女を座らせた……次の講義まではまだ時間があるしここでしばらく休むか。

「噂には聞いていたが、レジエンダリアってそんなに酷い所なのか？」
「いえ、基本的に全体の半分ぐらいの〈マスター〉は真つ当な部類だし、ザ・ファンタジーと言える様な神秘的な街並みは和風の怪異は嫌という程見てきた私にとつても新鮮で悪くないわよ。……ただ、〈マスター〉の残り四割が性癖を隠してる変態で、残り一割が性癖を隠してもない変態なだけで。後ティアンの一部から現実にもよく居る歳を重ねた事によつて腐敗した長命種特有のの気配がするぐらいで」

……話を聞く限り悪い事しか無い気もするが、姫乃曰く『それでも殆どの〈マスター〉とティアンは（変態である事を除いて）真つ当な生活を送っているわよ。……ただ、私は霊視無しでも“眼が良い”方

だから、どこの社会にもある全体から見れば僅かな悪性が目につくだけよ』との事。

「それにパーティーメンバーには性癖がまともな……性癖がまともな！ 人間を選んだから楽しくやってるわよ」

「なんで二回言っただけ？」

「レジエンダリアでパーティーを組む際に一番重要な要素だからよ。……今までの裏稼業で磨き抜かれた観察力を駆使して集めたパーティーだから、実は異常性癖持ちとかって言うのも（おそろく）無いわ」

俺は安心安全な妹達との固定パーティーが組めて良かったと思いました（小並感）

「強いて他に文句があるとすればへエンブリオの名前かしら」

「何か変なネーミングにでもなったのか？ 【モモタロウ】とか【ジュゲムジュゲムゴコウノスリキレカイジャリスイギヨノスイギヨウマツウンライマツフウライマツクウネルトコロニスムトコロヤブラコウジノブラコウジパイポパイポノシユーリンガンシユーリンガンノグリーンダイグーリンダイノポンポッピーノポンポコナーノチョウキウメイノチョウスケ】とか」

「……よく一息で言えるわね……」

とりあえず思い付いたへエンブリオ名になりそうな変な名前を言ったら姫乃に呆れた目で見られた……実は早口言葉は結構得意なのさ。

……最もこんな長い名前だと必殺スキルがまず戦闘中に使えないから、もしそういうモチーフのへエンブリオがあるとしても名前は題名の方で【ジュゲム】とかだろうけど。

「流石にそこまでネタに振り切った名前じゃ無いよ。単に私のへエンブリオの名前が【アマテラス】だったから、本職の巫女である私としてはちよつともによっただけで」

「日本神話の主神だからなあ、納得。……まあ、俺もケルト神話の太陽神の名前である【ルー】がへエンブリオ名だからね。この国のゲームでは良くある事だし」

「アマテラスがラスボスのゲームとかも普通に出るからねえ。日本宗教色薄いから。……うちのパーティーメンバーにも【シヤカ】って名前のへエンブリオの持ち主がいるし」

そんな訳でへエンブリオの名前が神話とかもモチーフになるならそういう事もあるよねってお話でしたとき。

「それで、そっちのデンドロの様子はどうなの？ まさか私にだけ話させて自分は話さないなんて事は無いわよねえ」

「ん？ ……まあ大した事は無いぞ。普通に妹達とデンドロをプレイしながらモンスターを狩ったりクエストをこなしたり神造ダンジョンに潜ったり、後はガチャを回したりへUBMを倒したりして特典武器をパーティーで五つ手に入れたりとかな」

「……いや。十分大した事してるじゃない。私達でもへUBMは一体倒したぐらいなのに……いや、美希ちゃんの『直感』があればおかしくはないかしら。アレは私の『異能』とは違って純然たる『才能』だからあちらでも使えるでしょうし」

ちなみに姫乃はウチの妹達の事情についても知っていて、良く相談に乗ってもらっているのだ……あの二人の才能は表側では逸脱しているが今のところ裏側で生きていける程では無いから、そちら側に関わらせない様に色々と手伝って貰っている。

……そういう意味では色々貸しもあるし、こっちで得た情報を渡しても良いかもしれないな。姫乃なら上手くやってくれるだろうし。

「確かデンドロの情報を集めてるって言ってたし、こっちが得た情報を教えようか？」

「え、良いの？ 貰えるなら有り難く貰うよ。その方が報酬は増えるし……でも、wikiに乗ってるレベルの情報ならいらなかな」

「大丈夫だ、へwiki編集部には言うつもりが無い情報だしな。……まず、こっちの情報筋だと管理AI達は先々期文明に現れた『無限』の位階にいる『化身』達と同一の存在であろうと推測されるな。更に元々デンドロ世界は『化身』とは別の『無限』であるへ無インフィニット・限ジョブ職

と呼ばれる者達が、自分達の同類を生み出すために作ったモノであるらしい」

「いやちよつと待って!?? なんかも物凄い重要っぽい情報が出てきたんだけど!!!」

とりあえず一番重要そうな情報を初手ブツパしたら慌てた様子の姫乃からストツプが入った……勿論、これらの情報は先々期文明を生きてきた前世を持つネリルから聞き出したモノである。

最もネリルの前世【アニミズワーム】が生まれたのは先々期文明末期の“化身”が表れる直前の事だったんだが、彼女の母親である【ハイエンド・クイーン・ミネラルワーム】からその才能を見込まれて昔の事なども教わっていたらしい。

……何でも【ミネラルワーム】という種族は〈無限職〉が環境調整用に生み出したモンスターの一種で、彼女の母親である【クイーン】は“無限職”に直接生み出された【ミネラルワーム】の最期の生き残りだったから世界の根幹に関わる事も幾らか知っていたらしい。

「まあ、その“無限職”達は成果の出ないテイアン達に愛想を尽かして何処かへと去り、それから先々期文明まで発展するも他所からきた“化身”達に滅ぼされて、今は彼等がドロップアイテムやら〈UBM〉や〈マスター〉……そして〈エンブリオ〉と言った新しい法則を強いて世界を管理してるらしい」

「……どうやってそんな情報を仕入れてきたの……」
「昔の事について知っているヤツを仲間にして聞いた。……流石に今の管理AIの目的までは分からないが、先代管理者である〈無限職〉と同じ様に自分の同類……おそらく〈無限エンブリオ〉みたいなのを生み出すのが目的では無いかと推測してる。それなら態々〈マスター〉に〈エンブリオ〉を持たせてあの世界に向かわせた理由も説明が付くし」

「ああ……成る程ね……」

ちなみにネリルが態々これだけの情報を吐き出したのは、〈マスター〉がこれらの事情知った時に管理AI達がどういう行動に出るかを試す為なのが主な目的だったりする。

そのネリル曰く、〈マスター〉も〈UBM〉を始めとするモンスターも“化身”の力の影響下にある以上は監視されてるだろうし、知った

情報に依りて連中がどの程度干渉してくるか試してみたいと言って、一切の躊躇遠慮無くヤバげな情報を俺に教えまくったのだ。

……結果としてはそういった情報を知っても一切の干渉は無かったので、おそらく管理AIは「マスター」の「自由」を歪める様な干渉は表立ってしないのだろうと言う結論になったが、正直垢BANされるかどうかでヒヤヒヤしたな。

「……ハア……まあ、管理AIが『無限』——超越者がそれに準ずる連中だっただけは予想してたけど何よ前任者の無限職って。こんな私程度にどうにか出来る問題じゃないじゃない。依頼主に報告しても同じだろうし」

「こっちの世界の超越者達は どうして んだ？ 椋鳥さんとか」

「そんなの私みたいな木っ端巫女に分かるわけないでしょ。超越者なんて迂闊に関わったら消されるし……蓮の方こそ昔会った事があるんじゃないかってっけ？」

「いや、昔『友人』と一緒に戦っていた時に一言『忠告』をされただけだからな。連絡先も知らんぞ」

……とりあえず色々と話し合った結果、デンドロの根幹情報に関しては保留という事になった。あっちでもこっちでも下手に藪をついたら蛇どころか竜が出てきそうな話題だしね。

「少なくとも蓮の情報に加えてこっちの超越者が動いたって話は聞かない以上、*Infinite Dendrogram*が地球に影響を与える事は無いと今は考えましょう。……もし何かあっても私達じゃどうしようもないし」

「あちらの世界でならレベルを上げれば案外出来る事もあるかもしれないが……まあ、力をつける事も含めて何かあるまでは普通にゲームをプレイするので良いだろう」

「確かに、私としてもゲーム内の様子をレビューするだけでお小遣いが貰えるバイトは悪くないしそれで行くか」

まあ、今すぐ行動しないと世界が減びるとかそういう問題では無いのでデンドロに関しては先送り、或いは保留するって事に決定した……世界が減びる様な問題になったら俺達に出来る事は何も無いだ

ろうけどね（笑）

「……おっと、そろそろ次の講義だし行かねばな。大学ではゲームよりも勉強優先だ」

「まあ、それもそうね。……確かデンドロのサークル作るって話があるって聞いたけど」

「雰囲気良さそうなら参加してみるのも良いかもしれないかな」

「……そんな会話をしつつも俺達は次の講義の為に指定された教室へと向かっていったのだった。」

超級職の条件

□〈墓標迷宮〉地下16階 【碎屋^{スマッシュヤ}】ミカ・ウイステリア

夏休みが終わり小学校二学期が始まったのでデンドロにログイン出来る時間は減ったけれども、すっかりデンドロに嵌った私は家に帰ってから早速ログインして“とある目的”の為にソロで〈墓標迷宮〉へと潜っています。

『G I A A A A A A !!!』

『甘い！ 《刃碎》!!!』

今はこっちに向かって鋭い剣撃を浴びせかけて来た【ゴブリン・ソードマスター】の一閃を“直感”で先読みし、見切った軌道に合わせる形で左手の【破碎戦棍・四式】を振るって刃の側面に叩きつける事で相手の剣を砕いた。

……ちなみにこの【破碎戦棍・四式】は長さ1メートル程の片手持ちのメイスで、私の“目的”の為に〈プロデュース・ビルド〉の皆さんに頼んで作って貰った装備品特攻系の装備スキルに特化させた一品なのだ。

『うん、流星は〈プロデュース・ビルド〉いい仕事をするね。オーダーメイドに大量のドロップアイテムや資金をつぎ込んだ甲斐はあったよ。《鎧穿》!!!』

『G E A A A A ? ! ? !』

新装備の出来に満足しつつ私は自分の剣を砕かれて動揺している【ゴブリン・ソードマスター】に向けて、間髪入れずに右手に持った【ギガス】を相手が身につけている鎧に突き込んで砕きながらダメージを与えた。

……この《刃碎》《鎧穿》はそれぞれ刀剣と鎧に対する攻撃力を上昇させる効果があり、現在私がメインジョブにしている打撃による装備破壊に特化した【碎屋^{スマッシュヤ}】のジョブスキルである。

『……もう壊す装備は残ってないか。じゃあ○ねい！ 《ハードストライク》！』

『G Y A A A A A A ? ! ? !』

ダメージを受けてフラフラになった「ゴブリン・ソードマスター」の脳天に、私は「ギガス」を振り下ろしてトドメを刺したのだった……コイツは単独行動系の亜竜級モンスターだったから辺りには他には敵はいないかな。スキルとかは無いから良く分からないけど「直感」には特に反応は無いし。

（やっぱり装備品へのダメージを稼ぐにはこの階層のゴブリンを相手にするのが一番効率が良いかな。アンデッド階層にも装備を付けたヤツが出るけど、出現率と装備の質的にこっちの方が効率が良い）

……そもそも何故私がソロで〈墓碑迷宮〉に潜ってまで装備を破壊しているのかと言うと、先日お兄ちゃんが新しく仲間にしたネリルちゃんから「戦棍士系統^{スベリオルジョブ}超^{スベリオルジョブ}級職の就職条件」を聞いたからなのだ。



「んも？ 戦棍士系統超^{スベリオルジョブ}級職の就職条件なら知つとるぞ」

「本当！ ネリルちゃん！」

とある日の事、私達はギデオンにある〈カフェ水蜜堂〉にてお菓子を食べてながら駄弁っていたのだが、その会話の中で私が『なんか都合のいい超^{スベリオルジョブ}級職が何処かに落ちてないかな』と冗談混じりに話したらネリルちゃんがそんな言葉を返したのだ。

彼女は聞かれた事には普通に答えてくれるんだけど、別に聞かれてもいない事や頼まれてもいない事は先日管理^{化身}AIを試す為に色々と重要情報をブツパした以外だと基本的には話さないんだよね。

……多分だけどそういった私達の対応を見て試すと同時に楽しんでる感じ……こんな風に美味しい物を食べてる時は結構口が軽くなるみたいだけど。

「モグモグ……前世のワシが地下で食っちゃ寝しながら感覚を同調させたエレメンタルを地上にやっていた事は話したな。その時にたま〜にじやが縁のあった魔術師系テイアンに情報や貢物を対価として魔法の知識を授ける事もあったんじゃよ。……向こうは先々期文明から研鑽を積んだワシの魔法知識を得られて、こっちは地上の面白い

情報を得られるという所謂win-winな関係というヤツじゃ」

「明らかに得られる情報が釣り合っていない気もするがな」

「別にワシにとって『面白い』と思う情報であれば実際の価値はどうでも良いんじゃないよ。それに時には他の魔術師との議論とかで新しい魔法知識を得る事もあるし、こう言った『人間との交流』は中々に良い娯楽になるんじゃないよ。……長生きすると言うのも中々に大変でな、ずっと地下にいるだけだと精神が摩耗していくからの。それ故に些細な出来事を楽しんで暇つぶしをするのは結構重要なんじゃない」

そう言ったネリルちゃんの雰囲気には見た目によらない年月を重ねた様な雰囲気が見え隠れしていた……直ぐに満面の笑顔で水蜜堂のドーナツを頬張り始めて霧散したけど。

「それで話を戻すが、大体600年ぐらいの所謂『三強時代』に魔法都市で客分をしていた事があつて、そこで手に入れた情報に戦棍士系統超級職【戦棍王】キング・オブ・メイの情報もあつたんじゃないよ。……うむ、大分思い出して来たぞ。確かアレは魔法都市と契約を結んでいた」とある傭兵団に所属していた【魔術王】キング・オブ・ソーサリーから聞いた情報だったな。その傭兵団の団長が代々受け継いで来たジョブだったとか」

「そんな情報を良く教えてくれましたね。魔法知識の対価とはいえ」
「ワシはモンスターじゃから就職条件を知つても超級職になれる訳ではないからな。タイムもされないへU B Mのワシ相手ならジョブを巡るライバルも増えないから、超級職の転職条件を教えても問題は無いだろうと考えた者がそこそこいたのじゃ。……それに当時は圧倒的な力で急速に勢力を伸ばしていた【霸王】と魔法都市の戦いが目前に迫っていたからな。その実力を理解出来てしまった超級職レベルの人間達は勝率を少しでも上げる為に形振り構わず行動しておつたんじゃないよ」

それでも結局【霸王】さんによって魔法都市は滅ぼされ、その【戦棍王】のジョブを受け継いで来た傭兵団も『消滅』してしまったので転職条件も一緒にロストしてしまったのだと言う。

「それで肝心の【戦棍王】への就職条件じゃが、まず一つ目が『戦棍士』メイスマン【剛戦棍士】ストロング・メイスマン【戦棍鬼】メイスオーガの坎スト及びこれらのジョブに於ける全て

のジョブスキルを習得する』じゃな。武器運用の超級職であればよくある条件じゃの」

「……うん、その条件は満たしてるね」

「ならば良し。……それで二つ目は『メイスを用いて純竜級以上の“生物”をソロで一定数撃破する』じゃな。何でも十体以上は倒す必要があるとか言っとった様な」

「そのぐらいであればミカなら出来るだろう」

「ただ、姉様はいつも私達とパーティーで行動してましたからね。改めてソロでの行動が必要でしょうか」

うん、この二つの条件なら私でもどうにか満たせそうかな……ネリルちゃんの記憶が曖昧だから二番目の条件で倒さなければいけない数が曖昧だけど、余裕を持って三十体も倒せば条件を満たせるでしょう。

「それで三つ目の条件が『装備状態の装備品への与ダメージ合計が5000万以上』じゃな。この三つをクリアすると転職の試練へと挑戦出来ると言っておったな」

「……累積系の条件か……」

「ログイン時間が限られてるへマスターへには少し厳しい条件ですかね」

まあ、メイスは打撃武器の中でも装備品を無視して生物にダメージを与えたり、装備品その物を破壊する事に長けた武器種……もつと言えば対人戦に長けた武器種だからね。超級職への転職条件がそう言った物になるのは納得だけじゃ。

「しかし条件を満たすには相手の装備をぶつ壊し続ける必要があるのか。どうするかなあ」

「【戦棍王】がロストしたのには就職条件を受け継いで来た傭兵団の消滅以外にも、【聖剣王】の時代以降に人間同士の大規模な争いが無くなったのも理由の一つじゃからな。……装備にダメージを与える機会が多いのは、やはり高性能な装備を身に付ける人間相手の戦いじゃろうし」

「パツと思いつく方法としては〈墓標迷宮〉に出て来る装備を身に付け

たアンデッドやゴブリンを狙うぐらいか。神造ダンジョンなら装備
毎リポップするだろうし」

やっぱりお兄ちゃんの提案が無難かなあ……後は大量に巨大な盾
とかを買って、それらをお兄ちゃんにでも持ってもらって殴り続ける
とか思いついたけどコストがかかり過ぎるしね。

「まあ、ロストした超級職の条件を知っていると言う事自体が最大の
アドバンテージだしね。後は装備品を殴り続ければ良いんだし」

「そうですねよ姉様。一度の敗北で条件がリセットされる
キング・オブ・グラップリング
【格闘王】よりはマシでしょう」

「……俺の場合は超級職よりもレベルカンストを目指さないとな。後
は技術面か……ネリル、頼みがある。俺にもお前の魔法技術を教えて
欲しいんだが」

「別に良いぞ。報酬は美味しいお菓子で手を打とう」

そういう感じで私達はしばらく話し合った後、今の所は何かやりた
い事がある訳でも無かった事もあって、しばらくの間は各々更なる力
を得るための「修行パート」に入る事にしたのだった。



『……そんな訳でお前達は私の超級職転職の為の偉大なる肥やしにな
るが良い！』《インフェルノ・ブレイク》!!!』

『『GYAAAAA!!!』』

場面は再び〈墓標迷宮〉、私は目の前にいる三体の【ゴブリン・メイ
ジ】を【戦棍鬼】の奥義であるメイスに豪炎を纏わせて殴り付ける《イ
ンフェルノ・ブレイク》によって焼き潰していった……布装備は
打撃では破壊出来ないから、これまでイマイチ使う機会が無かったこ
の奥義で焼いた方が与ダメージを稼げるからね。

……さて、遭遇したゴブリンの群れ相手に装備破壊を優先しながら
戦ってみただけど中々面倒だね。装備を攻撃する間もなく本体を潰す
事もしばしばだし。

『……さて、残りは……』

『GISYAAAAA!!』

そうして私が【ゴ布林・メイジ】を倒して一息付いた所で、その横合いから遭遇したゴブリンの群れを率いていた【ゴ布林・ジエネラル】が手に持った棍棒を勢いよく振り下ろして来た……まあ、お約束の“直感”でどこからどう来るのかは分かってたんだけど。

『《アームズブレイカー》！　んで《アーマーブレイカー》！』

『GAHAAA!?!』

振り下ろされる棍棒を【破碎戦棍・四式】と武器破壊スキルで砕き、そのままもう片方の【ギガス】と防具破壊スキルで相手の鎧を砕きながら殴り飛ばす。

『……これだけじゃダメか。なら《竜尾剣》！　グラビトロン・デイバイダー《重　破　断》!!!』

『GYAAAAA!?!』

現在一万を超えるSTRを持つ私であるが流石に片手で殴ったぐらいでは【ゴ布林・ジエネラル】を仕留めきれなかったので、殴られた勢いで少し離れた相手に漆黒に染まった剣尾を伸ばして鎧每袈裟懸けに斬り裂いてトドメを刺した。

……とりあえずこれでゴブリンの一団は全滅させたみたいだね。

『しかし、与ダメージ5000万は遠いねえ。STR1万なら一回殴れば一万ダメージ……なんて単純なものじゃないからなあ。今どのくらいなんだろう』

確か【破碎戦棍・二式】を受け取った時にへプロデュース・ビルドのメンバーに聞いた話では、武器・防具には装備攻撃力や防御力以外にも生物というENDに相当する硬度、HPに相当する耐久値が設定されているらしいからね。

多分、防御スキルや硬度分ダメージは減らされて耐久値以上のダメージを与えてもその分は判定されないだろうし。

『うーむ、ここはとりあえずもう一つの条件である“純竜級以上の生物の一定数ソロ討伐”の方をやっていかうか。適当なボス部屋のモンスターを一人で討伐すればいけるでしょう。ログアウトに地上に戻るのもやりやすくなるし』

やはり最大の問題は学校が再開した事によるログイン時間かなあ。

幾ら何でもデンドロの為にリアル生活を犠牲にする訳にもいかないから、流石にこれはどうにもならない問題だね……最近では地下16階まで降りるのめんどいので、「直感」を駆使してダンジョン内で口グアウトするとかもしてるぐらいだし。

考えても仕方がない問題だし今はボス戦に集中しようか。確か出て来るのは純竜級の「ゴブリン・キング」に率いられたゴブリン達とかSTR特化な上位純竜の「デストロイ・オーガ」とかだったっけ。……何が出てても私一人では少し厳しくなるだろうし頑張ろう。



□地球 加藤美希

「……はい、ログアウト。そろそろ夕飯の時間だね。少し時間が掛かってしまったかな」

流石に「ゴブリン・キング」に率いられたゴブリン達を一体づつ殴って倒すのは時間が掛かるよね。今日はちよつとハズレを引いちやつたかな。

「おーい美希、夕飯が出来たぞ。まだログインしてるのかー」

「はーい、今行くよー。……そういえば今日は叔父さん叔母さんは遅くなるんだったね」

お兄ちゃんは普通に料理も上手いからね、お陰で叔父さん叔母さんが居なくても夜に冷凍食品を温める必要はないのさ……私？ 小学校の家庭科の授業で目玉焼きを少し焦がすぐらいのネタにもならない腕前ですが何か？

……それはともかくとしてリビングに降りた私が見た物はテーブルの上に並べられた三つの親子丼と、椅子に座ったお兄ちゃんと祐美ちゃんだった。

「わーい、お兄ちゃん特性の親子丼だ。いただきますーす」

「いただきますなのです」

「いただきます」

そうして三人揃った私達は手を合わせた後に親子丼を食べ始めた

のだった……ウチの家では晩御飯だけは家族揃って食べる事にして
いるのだ。

「やっぱり5000万は遠いよ……いまどのくらいダメージを稼いだ
のか分からないし」

「全ての条件を達成すればアナウンスがあるらしいがな。まあ頑張
れ」

「こっちはそもそも戦える相手がいらないんですよね。私が連勝を続け
ている事を知った格闘家ギルドの人の目が少し怖くなってきました
し」

……そういう意味では条件がロストしているお陰でライバルがい
ない私の方が恵まれているのかな。

「そう言えば大学でデンドロのサークルが出来てたな。まあ偶に部屋
で駄弁ったり情報交換をするぐらいの場所になりそうだが、せつかく
だし姫乃と入る事にしたよ。……他にも何人かデンドロをやってい
るヤツがいるみたいでそこそこ人数は増えそうだな。小学校の方は
どうなんだ？」

「小学校にはあんまりデンドロやってる子はいない……というか、リ
アリティがあり過ぎて怖くなって辞めちゃった子の話をよく聞くね。
一応まだやってる子もいるみたいだけど」

「私と同じクラスの『檜宮』君はデンドロやってると言ってたので
す。何でも天地所属だとか」

デンドロ友達とか増えればいいかなと思ってたんだけど中々上手
くは行かなかったね……まあ、普通の小学生には敷居の高いゲームで
はあるから。

「んむんむ……多分だけど超級職は早めに取っておいた方が良い気が
するね。しばらくは各々で強くなっておいた方が良い感じ。……言
われるまでも無い事かもしれないけど」

「先着一名だからな、取れるなら取っておくべきだろう。……俺は必
殺スキルのデメリットで取れそうな超級職が見つからないんだが。
ネリルも『神系は本人の才能次第じゃし、系統無し超級職の条件は知
らんな』と言ってたし」

「じゃあ、しばらくの間は修行パートですね。インフレ展開に追い付ける様に」

インフレに追い付けなくなった者は物語からフェードアウトするのが無常なる世の理だからね……デンドロだと条件が合えばジャイアントキリングが起きたりするから一概にそうとも言えない気がするけど。

ネリル先生による魔法+αの解説講座

□王都アルテア・宿屋 【拳闘士^{ビュージリスト}】 ミユウ・ウイステリア

「さて、ではまずMPとSPの基本について解説するぞい。……簡単に言うとMPとは外なる万能。リソース 力に法則を与える事でこの世界のあらゆる現象に成り代わるモノ。SPは内なる変革。リソース 力を器に触れさせて在り方を変えるモノ……と言った所じゃな」

「……なんかいきなり難易度が高そうな話なのですが……」

「うーん、ちよつとよく分からないなあ」

『そんな風に意識して使った事は無かったですね』

とある日のデンドロプレイ時、私は兄様とミメとヴォルトと一緒にネリルちゃんから魔法やスキルに関する指導を受けていたのです……ちなみに姉様は超級職就職条件を満たす目的で〈墓標迷宮〉に籠っているので不参加なのです。

……私はそろそろジョブの方もカンストしそうですし姉様と違ってジョブリセットの必要も今の所は感じず、超級職の就職条件を満たすのも少し難しそうなので、それ以外の分野で戦力を強化しようとするの強い希望もあつて指導に参加しているのです。

「……ふむ、つまりMPは魔法などの現象を引き起こす……いや、現象に変換される物で、SPは自分自身に干渉する物といった感じか。……外に創り出される物と内を変換させる物とかか？」

「うむ、今の所はそんな認識で大丈夫じゃよ。この辺りの話は『本質』を理解するのに時間が掛かるから、今はフィーリングで覚えておけば良い。……そもそも今回の目的は各々の戦力強化に使えるような知識や技術を教える事じゃからな」

そう、この指導が行われている理由は以前姉様が超級職の就職条件を彼女から得た様に、前世では先々期文明から生きてきて様々な知識を持つネリルちゃんの知識や経験の中で私達の戦力強化になりそうなモノを教えてほしいと頼み込んだからなのです。

……この頼みを引き受けて貰う為に、私と兄様で王都で評判な高級お菓子とか高品質の魔石（前世と同じくこつちも普通に食べられるら

しい)を彼女に貢いだ甲斐がありました。

「改めて言っておくが、御主らが強くなるのに一番手っ取り早い方法は普通にレベルを上げて装備を整えて戦闘経験を積む事じゃからな。御主らなら何か超級職を取ってレベルを上げるだけで普通に最高峰の実力を手に入れられるじやろ。……今から教える知識や技術はある意味寄り道とかオマケとかみたいなものじゃと思っておけ。上手くいく保証は無いからな」

「優先するのはレベルや地力を上げる事だと言うのを間違える気は無い。……だが、俺の場合だと超級職を取れるか怪しいからな」
「それに技術を覚えるなら早い方が良いと思うのです」

レベルを上げて装備を整えるのは時間と手間を掛ければ確実に出来る事ですが、技術を覚えてそれを極めるにはどれだけ時間があっても足りませんからね。

「まあ、分かっているなら良い……と言っても。ワシに教えられるのは魔法技術とかMP系のスキルの運用に関しての物ぐらいじやからな。元「ミネラルワーム」じやから武術とかは全く知らんからの。……じやあ、まずは「魔法」について教えようか」

……そうやって私達への確認と前置きを終えたネリルちゃんは早速この世界の「魔法」についての説明を始めた。

「魔法というのはMPを消費して発動するスキルで、属性は天・地・海の三属性を始めとして複数存在する……と言うのはもう知っておるじやろうから飛ばすぞ。……そんでこの魔法なんじやが実はスキルが無くても設定さえ知っておれば、その通りに魔力を操作する事で発動できる。つまり「魔法スキル」とは「アーキタイプ・システム」によってこの設定を簡略化させたモノになる」

「いきなり知らない単語が出て来たのですが。〈アーキタイプ・システム〉とは？」

「先代の「管理者」が遺した世界を管理するシステムの一つで『ジョブ』を管理するものじや。ジョブクリスタルを通じてティアンにジョブを与えたり個人の適性や才能や人生などを測定して「試練」によって超級職に相応しい者を選別する機能を持つておる。またスキ

ルとしての確立による魔法の簡略化、料理や格闘などのセンススキル
の一般化なども担っておると昔母様から聞いたな。……まあとにかく、魔法スキルによつて詳しい設定を知らずともスキルさえ覚えれば
誰でも簡単に魔法を使える訳じゃ」

尚、その「ヘアーキタイプ・システム」がどこにあるのか、そもそも
どんなモノなのかはネリルちゃんにも分からないのだとか……先代
管理者やそれに仕えていた「古龍」がいなくなった以上はシステム
について知る者は多分いないだろうとの事。

「それで今から教えるのはスキルに寄らず魔法を使う方法になる。こ
れが出来れば魔法スキルの設定変更とかオリジナル魔法の
開発とかが出来ればなる訳じゃ。その辺りはジョブスキルによつ
て簡略化された「魔法の仕組み」に切り込める頭脳と才能を有して
いるかによるがな。……まず、本来魔法とは魔力の変換・操作・制御
等の要素を組み合わせてできており、個々の魔法の要素・構成・仕組
みを理解して手を加えれば魔法の設定を変化させることができるの
じゃ。例えば《ファイアーボール》などの火属性魔法なら魔力の熱エ
ネルギーへの変換、不要な拡散を防ぐための制御、攻撃にベクトルを
与える指向性を持たせる操作と言った具合じゃな」

そう言ったネリルちゃんはおもむろに人差し指を上げると指先に
小さな火球を作り出してみせた。

「これは《ファイアーボール》の設定から『真っ直ぐ飛ばす運動ベクト
ルを与える』操作部分の術式を削除して、その場に留まらせているん
じゃ。設定的には『魔力を熱・光エネルギーの複合である炎に変化』さ
せ『球体に制御』している感じじゃな。ちなみにこのままだと重力に
引かれて下に落ちるから消すぞ」

それだけ説明するとネリルちゃんは徐々に下に落ちていつている
《ファイアーボール》を消し去った……成る程、私にはさっぱり分かり
ませんね（笑）

……まあ、隣の兄様は何か頷いているので分かっているっぽいです
が。

「じゃあこれから魔力制御や術式とかについて教えていくぞい。……

まあ、役に立つかは御主ら次第じゃがな。この技術はテイアンの魔法系超級職等が専門の知識や研鑽によつて自身の魔法を突き詰める事で至る物じゃから一朝一夕には身に付かんし、身に付いたとしてもオリジナル魔法の開発とかちよつと魔法が使いやすくなるぐらいにしか役に立たんが。……まあ、主人殿の場合だと魔法系の“神”の転職条件を満たす事が出来るかもしれないがの」

「それもネリルの指導を受けようと思つた目的の一つだからな。早速教えてくれ」

そうしてネリルちゃんによるへ Infinite Dendrogram に於ける“魔法”の本格的な講義が始まつたのでした……正直言つて私の戦闘能力向上には余り役に立たなさそうですが、兄様やミメはやる気ですし知識を得ておく分には損は無いでしよう。



「……ふむ、主人殿は中々魔法の才能がある様じゃな。……と言うか、かなりこの手の術式を編むのに慣れておる感じがするのじゃが。特に魔力の操作部分がな」

「あちら側で少し特殊なエネルギーを操る経験があるだけだ。あちらのとは大分法則や術式が違うから各種設定をきつちりと覚える必要があるがな」

「成る程のー」

そんな感じで指導を受ける事小一時間、どうやら兄様はかなり順調に魔法技術を覚えていくみたいですね……後、現実の方での“兄様の秘密”とかに関して私は詳しくは知らないのです。兄様が私や姉様を巻き込まない様にしてるのは分かつてるので聞かない様にしてますので。

「まあ、主人殿の場合だと魔法系ジョブをさっさと複数取つてレベルを上げた方が手っ取り早く強くなれるんじゃないかな。マニュアル魔法に関しても多く魔法スキルを使って、簡略化された魔法を使う感覚を体験するのが一番の近道じゃし」

「それはちゃんと分かっていると云っているだろう。今回は知識を得ておくのが目的だから技術の習得は後回しにするさ。ジョブに関してはこの前のクエストで就職条件を満たした【司教】^{レシヨッフ}などの魔法系上級職や、【戦像職人】^{ゴレムマスター}や【防術師】^{ディフェンダー}系統のジョブを取ってレベルを上げてるし」

「うむ、主人殿の場合は魔法剣士系ジョブも良いかもしれんな。アレには近接戦闘しながら魔法の行使を行える様になるジョブスキルもあるし。大量のジョブ枠があるなら必然万能型になるじやろうからその手のスキルがあつた方がいいじやろ」

そしてネリルちゃんの講義は前世で魔法都市のテイアンに講義をした事があると言っていただけあつて意外と分かりやすく、更に魔法技術だけではない各々の適正に合わせたより強くなれる方法を教えたりしてくれるなど長い時を生きてきたからかタメになる知識が多いのです。

……私の場合は『魔法系の才能はそこまででも無いけど、武術系の才能が図抜けてるからそつちを突き詰めた方が良いじやろ。ワシに教えられる事はほぼ無いけどな』と言われただけでしたが。

「ヴォルトの方も中々筋がいいな。雷属性に特化しているとは言え魔力の扱いやスキルの開発能力もかなりのもんじや。……モンスターの場合、ジョブでスキルを得る人間と違って高度なスキルを会得する為には自力開発する必要があるから本人のセンスはかなり重要じや。現在はどんな雷属性のスキルが使えるんじや？」

『雷の矢を発射する《サンダーアロー》、その上位版《ライトニング・ジャベリン》、雷に指向性を持たせて放射する《サンダー・スマッシュャー》、全方位から雷を放射する《サンダーバースト》、蹄に雷を纏わせて踏みつける《迅雷の蹄》、身体に雷を纏わせて突撃する《雷電疾走》ですね。……ただ、制御が荒いので主人を背に乗せたまま戦うとそちらにもダメージが行きますが』

「ふむ、雷は元々操作難度の高い属性じやからな。魔力制御技術を覚えるのは当然じやが、それとは別に絶縁系の雷属性レジストスキルを覚えるのも良いかもしれん。威力を上がってくると自分にその余波

がいかぬ様にする対策も必要じゃしの。……後はワシが使える雷系スキルをいくつか教えよう、各種雷属性攻撃魔法や電磁波レーザー、電磁防壁とかその応用である空中走行能力とかも良さそうじゃ」

ちなみにヴォルトとネリルちゃんの仲は普通に良好……と言うよりは、ヴォルトの方がネリルちゃんを『自分より遥かに上位のモンスター』として敬意を払っている感じですね。兄様曰く、ネリルちゃんが〈UBM〉を倒した所を見たのが原因だそうです。

「そうじゃのう、最終的にはスキルの運用・開発能力が《竜王気》とかを覚えられるレベルになれば言う事無しなんじゃがな。……まあ、技術を磨くというのは時間のかかる物じゃからじっくり行くと良い」

『……《竜王気》って確か「竜王」専用のスキルでは?』

「いや? 《竜王気》は覚えようと思えば誰でも覚えられるぞ。……アレは魔力と魂力によって練り上げるモノ。具体的に言うとなんか魔力的な自分の器に成り代わらせてオーラという緩衝材とし、それに器に干渉する魂力を使う事で変革させ別の特性を与えるモノじゃがな。元は世界創造の力の片鱗であり世界の最古の理に刻まれた力で、かつての管理者の補助ユニットとして作られた古龍と、その類似品である「竜王」には現在も使用権限があるのじゃよ。逆に言えば理屈さえ理解出来れば「竜王」以外でも使えるぞ。前世のワシは使えたし」

「……本当、唐突にヤバめな情報をぶっこんで来るな」

まあ、私も兄様も「竜王」や《竜王気》については気になったので、その後も続いた『ネリルちゃんによる《竜王気》講座』をしつかりと聞きましたけどね……正直習得出来る気がしないのですが、今後「竜王」とかと戦う時になったらこの知識は役に立つでしょう。

『……聞けば聞くほど私程度で習得出来る技術では無い様な……』

「《竜王気》の特性上、器がジョブで紐付けされている人間よりも、器そのもので構成されたモンスターの方が比較的習得しやすいんじゃないかな。……まあ、流石にすぐ習得出来る物でも無いし今は普通にスキル制御や新スキルを覚えていけば良い」

そうしてネリルちゃんやヴォルトにいくつかのアドバイスをした後、私とミメの元へとやって来ました。

「さて、御主らへの指導じゃが、まずミュウの方に関してはさつきも言ったがワシから指導出来る事は殆ど無いな。そもそも前世のワシは手足のない蚯蚓じゃったから人間の武術とかは大して磨いてこなんだしな。人型エレメンタルの遠隔操作時に少し体術の練習をした事はあるが、とても御主に教えられるレベルでは無い。【魔拳士】のスキルで多少のアドバイスは出来るだろうがそのぐらいじゃ」

「分かりましたのです」

「それでミメーシスの方じゃが、そちらもへエンブリオのスキルとか進化関連でワシが力になれる事はほぼ無い。そもそも専門外じゃからな。……まあ、御主が覚えたいのはスキルの運用法に関してのじゃが」

「うん、アタック・テックチャ《攻撃纏装》でラーニングしたスキルを使う時の参考になれば良いと思つてね。……ボクのスキルって使用状況が限定されているから普段の戦闘だと融合してミュウの戦いを見ているだけだし、こう何か出来る事があればいいなと思つて」

確かに雑魚が相手の時にはミメ自身のスキルは余り使つてませんが、直接戦闘していないが故に余裕をもって戦局を見てくれますし、ステータスを感じする特性で周辺を見張ってくれたりするので十分役に立つてると思つのですが。

……それにミメの能力が純粋に戦闘に特化していないのは、多分私のパーソナルが“この世界で強くなりたい”という気持ちがあるのに“強い自分”への嫌悪感があるのが原因なんじゃ……。

「……ふむ、まあミメーシスはラーニングスキルをある程度制御して使っているのだし、そちら方面での才能もありそうではあるが……とにかく主人殿と同じ様にワシが様々な種類の魔法を撃ち込むから、ラーニングしたそれら魔法を使い続けてスキルを使う感覚に慣れるのが良いじゃろう。ワシも出来る限りアドバイスをするし、普段の戦闘でも可能な限りラーニングスキルを使う事じゃな」

「分かりました。……ではミメ、行きましようか。《フレイジョンアップ憑依融合》」

「了解」

そうして私とミメはネリルちゃんのアドバイスを受けつつラーニ

ングスキルの運用技術上昇や、効率的な使い方などを練習していくの
でした……まあ、そうやって練習してみても自分への嫌悪感は消えま
せんでしたが。自分の肉体なら筋繊維一本に至るまで自在に制御出
来る私ですが、自分の心に関しては自由に操る事も出来ないんですよ
ね。

『ミュウ、今は練習に集中しよう。……ボクは君の相棒だからね。
ミュウが先へ進める様になるまでは今のままでも構わずにずっと側
にいるよ』

「……ありがとうございます。私はミメの力が共に歩める融合系で良
かったと思うのですよ」

そんな事を考えていたら融合したミメにそんな事を言われてしま
いました……そうですね、それでも先に進むためには今出来る事を少
しづつやっていくしかないんでしょうし頑張って練習しましょうか。

あの「ヘマスター」の今：エルザ・ウインドベル編

□「ヘイースター平原」【高位飼育者^{ハイ・ブリーダー}】エルザ・ウインドベル

「それでは、この先にあらへイスターデ森林」にターニヤが欲しがっている素材があるんですね？」

「そうだよー。そこに居る【カース・トラップスパイダー】の素材が欲しいんだよね。……でも、生産職の私一人だとキツイ場所だからさ」

デンドロのとある昼下がり、私は友人である「紡績職人^{スピンマイスター}」ターニヤ・メリアムの頼みで王都の東にあるヘイスターデ森林へと向かっていました……ちなみに報酬は彼女が所属する生産クラン「プロデュース・ビルド」の装備をいくつか貰う事になってます。

……テイマーである私は仲間のモンスターや「ワルキューレ」達が使う装備をいくつも用意しないといけないので、こんな風に戦力を貸す代わりに彼等クランが求める素材を手に入れる手伝いをよくやっているんです。

『マスター、10時の方向から【バイオレンス・フアング・ボア】が三体こちらに向かって来ています』

「ありがとうヴォルフ、そのまま私の護衛を宜しく。……アリアとトリムは前に、アーシーは穴と壁を、ウオズとフィーネは援護の準備。ターニヤは私のそばで待機して」

『了解！』

その途中で索敵担当である「グレイウルフ」のヴォルフが敵の接近を感知したので、私はいつも通りみんなに指示を出してから手に持っていたいた「従魔師の鼓旗」を掲げました。

進化したヴォルフの種族である「グレイウルフ」は、直接戦闘能力が低い代わりに《危険察知》《殺気感知》《索敵》《畏感知》などの各種探知系スキルに特化しているので、パーティーの斥候役を担ってくれています。

……そして私が持つ【従魔師の鼓旗】は掲げる事でタイムモンスターのステータスを微増させるパッシブスキル《従魔鼓舞》を持つ、「プロデュース・ビルド」製の一品です。

「マスター、ドロップアイテムの【暴走猪の毛皮】です」

「ありがとうアリア。……ターニャ、毛皮系アイテムだけど買う？」

「そうだねー、じゃあ買い取るよ。最近大口の依頼があつて懐に余裕があるしね。……しかし流石はエルザ、私やクロートーが手を出す暇も無かつたね」

『KYUUU』

まあ、今回の依頼はターニャ達の護衛が主ですから、彼女達が戦う事には出来るだけならない様にする方針です……そんな会話をしつつ、時折現れるモンスターを狩つて素材をターニャに友情価格(高値)で売りながら、私達はヘイスターデ森林へと向かつて行つたのでした。



そうして到着したヘイスターデ森林ですが、ここには魔蟲系……特に蜘蛛系のモンスターのモンスターが多数生息しており、それらによる糸を使ったトラップが多く設置されているので一種の(自然ダンジョン)と化している場所になります。

……鬱蒼として視界が効かない森と至る所に設置された「蜘蛛の巣」によつて、それらに対応出来る能力が無ければカンストしてしまうが森を進むに連れて『詰む』ぐらいに攻略難易度が高い所でもあります。

『マスター、ターニャ殿、前方に蜘蛛の巣がいくつかあります』

『《鑑定眼》……ふむふむ、アレは粘着性に特化して触れると張り付いて動きを封じるタイプかな。可燃性が高いから焼いた方がいいかも』

「分かりました。ファイネ、お願いします」

「了承する……《ファイアーボール》」

最も、こちらには《畏感知》が使えるヴォルフと、ジョブスキルによつて「糸」に対する鑑定に補正が掛かるターニャがいるのでどうにか進めています。

さて、今回のターゲットである【カース・トラップスパイダー】は

その名の通り呪い^{カース}を帯びた糸を使って罫を作るタイプの蜘蛛型モンスターで、その蜘蛛の巣に囚われれば呪怨系状態異常に掛かってしまいます。

……なので呪怨系状態異常を治せて、サブジョブの【祓魔師^{エクソシスト}】の《呪詛感知》で呪いを感じ出来る【司教^{ビショップ}】セリカを中心にしつつ探索を続ける事小一時間、私達ようやくターゲットである【カース・トラップスパイダー】を見つけました。

『KIIISYAAAAA!!』

「やつと見つけたよ【カース・トラップスパイダー】！ クロートー《運命の横糸》！」

『KYUUA!』

目的の相手をようやく見つけてテンションが高いターニヤは、肩に乗ったクロートーに網状に織られた黒い糸を口からいくつも発射させた……アレは粘着性が高く触れた敵に【呪縛】の状態異常を掛ける糸なのだが、所詮は糸なので速度はそこまででも無い上に呪いに長けて意外と素早い【カース・トラップスパイダー】はあっさりと回避してしまっただが。

……まあ、一時的に向こうの注意を引いてくれただけで充分なんだけど。

「セリカは呪い対策、フィーネは周りの巣を排除して」

「分かりました……《ホーリーゾーン》！」

「了承する……《バーンウェイブ》！」

そうして出来た隙にセリカが周囲の呪怨・病毒系状態異常を軽減する結果を展開し、フィーネが弱目の炎を周囲を舐める様に放って貼られた蜘蛛の巣を排除していった。

……とりあえず呪い対策と周囲のトラップの排除さえ出来れば、あの【カース・トラップスパイダー】自体のステータスは低いからね。十分倒せる。

『マスター、辺りのトラップは全て解除されましたぞ』

「分かったヴォルフ。……アーシーは相手の動きを封じて。アリアとトリムは糸に注意しつつ接近戦。ウオズは二人の援護」

「了解です、マスター！」

『おっけー。《マッドバインド》』

そうして蜘蛛の巣が排除された所でアリアが盾を構えながら突っ込んで行き、それと同時にアーシーがスパイダーの左右と後ろの地面から縄状に形成した泥を襲い掛からせる。

……咄嗟にその泥の縄をスパイダーは避けようとするが、泥縄の無い前方からはアリアとトリムが迫っていた事もあって、回避出来ず泥に纏わり付かれてその動きを鈍らせた。

『K I I S A A A ！？』

「隙あり！ 《魔蟲斬り》！」

「いっくよー！ 《バーバリアン・クラッシュ》！」

そこにアリアの剣による一閃がスパイダーの足の内一本を斬り飛ばし、その後ろから飛び出したトリムが両手に持った大斧を勢いよく振り下ろして相手の頭部を真っ二つに叩き割った。

……まあ、「カース・トラップスパイダー」は格的には亜竜級未満といった所ですし、罨と呪い重視で物理ステータスは決して高く無いので今の私達なら接敵さえすれば問題なく倒せるんですがね。

「……ふーむ、ドロップは【呪怨罨蜘蛛の節足】か。出来れば【呪怨罨蜘蛛の糸玉】の方が良かったんだけどね。……まあ、クロートーの《天糸紡ぎ》で糸素材に変えれば良いんだけど。質量はこつちの方が多し」

「ドロップアイテムの種類は問わないのは楽で良いですね。この手の採集クエストは運次第では少し面倒な事になるから『マスター！ 新手ですっ!!!』っ！ 全員警戒!!!」

私とターニヤがが目的のドロップアイテムを拾って一息吐いていと突然ヴォルフが警告を飛ばして来たので、私はすぐさま全員に警戒を指示して皆もそれに応えて即座に戦闘体勢を取った……〈墓標迷宮〉の様なダンジョンでは常に敵を警戒しなければならぬので、すっかりこういう指示出しがクセになってしまいました。

……そうして戦闘準備を終えた直後、森の木々をなぎ倒しながらそれらが私達でも見える場所まで姿を現したのです。

『G A A A A A A A A A!!』

『K I S Y A A A A A A A A A A!!』

怒号を上げながら口から光の束を放って辺りを薙ぎ払っているのは一対の翼とがっしりとした手足を持つ白い竜【シャイニング・ドラゴン】で、そのブレスに擦りながらも反撃として毒の針を飛ばしているのが巨大な毒毒しい色の蜘蛛【デッドリー・ヴェノムスパイダー】……どちらもここらでは珍しい純竜級のモンスターでした。

……どうもドラゴンの方の動きが鈍い様でしたが、よく見ると翼に毒々しい色の糸が絡み付いている所為で飛べなくなっており、《健康診断：非人型範疇生物》で見ると【溶解毒】と【衰弱】の状態異常に掛かっているのが分かりました。

『G I I I A A A A A A A A!!』

『K E S Y A A A A A A!!』

だがそれでもこの世界でも最強の種族であるからか、ドラゴンは毒に犯された身体でも構わず光熱を纏った爪牙で【ヴェノムスパイダー】を斬り裂いています……やっぱ良いですよねドラゴン、ファンタジー好きの私としてはいつかタイムしてみたい物ですが……。

「うへえ……もう怪獣大戦争じゃん。……幸い向こうは戦いに集中してこつちに気付いてないみたいだし逃げようよ」

「……まあ、今回の収集依頼は一応果たしましたし……っ!?? アーシー！ 私達を地下へ!!!」

『《ピットフォール》！ 《アースウォール》！』

そんな光景をどこか他人事の様な雰囲気で見っていた私達でしたが、すぐに私の指示により普段はのんびり間延びした口調のアーシーが焦った様子で全力の地属性魔法を使って地面に穴を掘り、私達をその中に入れると共に土の壁で上を覆いました。

……その直後、スパイダーが口から放った粘着性の糸で囚えた【シャイニング・ドラゴン】を勢いよく振り回してこちら側へと投げつけて来たのだ！

『G A A A A A A A A A!?!』

「わっきゃ——!!!」

こちらに飛ばされたドラゴンは直前に展開していた土の壁を突き破り、穴に入った私達の上を通り過ぎて後ろにあつた木々にぶつかつて動きを止めました……不味いですね、位置的に私達は蜘蛛とドラゴンに挟まれる形になってしまいました。ここは……。

「セリカ以外の総員！ 前の蜘蛛を足止めして下さい！」

「了解！ 《ワイドシールド》！」

「《トマホーク・ブーメラン》！」

「《マッドクラップ》！」

「《ウインドカッター》！」

『K I S Y A A A A A A A A A A ! ! ? ? 』

私の指示の元に穴から飛び出した仲間達はこちらに迫っていた「ヴェノムスパイダー」へと足止め目的で集中攻撃し始めた……幸い相手の注意がドラゴンにしか向いていなくて奇襲になった事、そしてこれまでの戦闘でスパイダーがダメージを負っていた事によってどうにか足止めに成功していた。

「……さてターニャ、確か持ってきたアイテムに【ジェムー《クリムゾン・スフィア》】と【快癒万能薬^{エリックシメル}】が有ると言っていましたね」

「う、うん、お得意様から報酬代わりに貰ったヤツと生産ギルドの伝手で入手したヤツが……何するの？」

「そうですね、ちよつとタイマーらしくモンスターとの“交渉”の間ですよ」

不安そうに聞いてきたターニャに対して私は少し悪戯っぽく笑みを浮かべながらそう答えながら、糸と状態異常によって地面に倒れ伏して動けずにいる【シャイニング・ドラゴン】の元へと向かっていった。

「やあ【シャイニング・ドラゴン】ちゃん、私のタイムモンスターにならないかな？ 今なら【快癒万能薬】が付いて来るよ。……拒否したらこっちの【ジェムー《クリムゾン・スフィア》】を投げるけど」

『何だと……!? ? ? 』

「ああ、ウチの子達が時間を稼げるのは後少しだから十秒以内に決めてね。勿論十秒過ぎたら後顧の憂いを断つために【ジェム】だけど。

「いち、にーい……」

『ま、待てえ!?』

何か焦っている【シャイニング・ドラゴン】の言葉を意図的に無視しながら、私はターニャから預かった【ジエム】と【快癒万能薬】を両手に持ちながら制限時間である十秒を数えて行く。

……状況が状況なので相手に深く考える余裕を無くさせて勢いで押し切る作戦である。今の状態異常では十秒以内に動ける様になるのは無理だしね。

『わ、ワカツタ！ お前のタイムモンスターになつてやるから!!』

「その言葉が聞きたかった。んじゃ《従属契約》」

私の穏便な交渉術——ダウト！ byターニャ——によって【シャイニング・ドラゴン】はタイムモンスターになる事を同意してくれたので、私は直ぐに【快癒万能薬】を彼女に与えて、更にセリカに回復魔法を掛けてさせておく。

……そうして状態異常とダメージが回復して動ける様になった彼女は、即座に自分の身体へと光熱を纏わせて張り付いていた蜘蛛糸を焼き払った。

「それじゃあ、貴女の名前は“シャイナ”で良いかな。まずはあの蜘蛛を倒して貰うよ……誇り高きドラゴンが一度した約束を破るとかは言わないよね？」

『言われなくても分かってる！ お前達は下がっている!!』

『K I S Y A A A A A!!』

そんな風にシャイナはちよつと苛立たしそうにしながらも私の指示を聞いて【テッドリー・ヴェノムスパイダー】へと襲い掛かって行った……まあ、今戦っていたアリア達を下がらせてから突っ込んでいまずし、口調の反面タイムモンスターとしてはキチンとやる気みたいですがね。

……それで肝心の戦いの方だが、そもそもシャイナは状態異常と蜘蛛糸によるデバフを受けた状態である程度戦えていた上、今は私のタイムモンスターになった事で私の《魔物強化》などのバフが掛かっていて、かつ相手はこれまでの戦いで相応のダメージを負っているので

……。

『いい加減に沈め！ 《ストライク・レーザークロー》!!!』

『KEEESYAAAAA!?!?』

散々ボコボコにした後に光の刃によって伸長させた爪による一閃で身体を断ち割られて「デッドリー・ヴェノムスパイダー」は絶命したのであった。

「お疲れ様シャイナ。流石は純竜だね」

『当然だ、毒さえ貰わなければあの程度の相手に苦戦するものか』

「うんうん、これからも宜しくね」

『……ハア……コンゴトモヨロシク』

うん、とりあえずシャイナとは少し無理矢理な契約だったけど私に従ってはくれるみたいだし、この関係が良いものになるかどうかハア今後の付き合い方次第かな……まずは他のみんなに新しく加わった彼女と仲良くする様に言っておこうかな。なんか面倒見は良さそうだし。

「まあ、少々トラブルもありましたが結果的には純竜級蜘蛛の素材も手に入って、純竜までタイム出来たので万々歳ですかね」

「……エルザ、本当に強く……ってか、色々と凶太くなったわねえ。以前はおっとり系お嬢様だったのに……」

……そうして諸々の事態を解決したらターニヤからそんな事を言われて少し引かれた。解せぬ。

あのへマスターの今：ひめひめ編

□霊都アムニール

グレイト・マジアーチャー
【大魔弓手】ひめひめ

ここは妖精境レジエンダリアの首都アムニール、私加茂姫乃ことアバター名“ひめひめ”は今日も仕事と趣味を兼ねてデンドロにログインしていたのだった……まあ、仕事に関しては私がそれとなく“超越者”が関わってるらしい事を伝えたお陰で、依頼主の方が殆ど諦め気味だから実質趣味だけだね。

「さて、何時ものパーティーメンバーかまともな知り合いは居るかなつと……ここで野良パはちよつとねえ」

とりあえず私はフレンドリストを見ながらパーティーを組めそうな人間が居ないか探してみた……野良パガチャすると結構な確率で変態をドロースるしね、この国だと。

「ふむふむ、アリマちゃんとでいふえくんど君とシズカちゃんはログインしてるみたいだね。じゃあ「テレパシーカフス」つと……」

幸い何時ものパーティーメンバーの何人かはログインしてるので連絡を取ってみる事に……え？ 後半の人の名前？ まあアバター名は本人の自由だし、私も人の事は言えないし、性格と性癖はまともだから……。

「……うんうん、アリマちゃんは来てくれるんだね。ありがとう！

……さて、でいふえくんど君とも連絡が付いたけどシズカちゃんとは連絡が付かないか。いつも通り何処かをフラついてるんだろうしこつちはしようがないね」

とりあえず、待ち合わせはアムニールの名スポットの一つである『噴水聖樹』と呼ばれる木の前って事になったので向かっていった……ちなみにこの噴水聖樹は枝先から霧のような水を常に噴き出していて、それがレジエンダリアの自然魔力の影響で虹色に輝くから凄く見栄えがいいので良く待ち合わせ場所として使われているのだ。

「さて、噴水聖樹に付いたけど流石に他のメンバーはまだ来てないかな。それじゃあ今の内にアイテムの確認でも……『おやあ？ 可愛いロリかと思つたらひめひめ殿でしたぞ。残念ですな』死ぬ」

そうして噴水聖樹の前で待っていた私の後ろから忌々しい不快な声が聞こえて来た瞬間、私は左手の紋章から即座に【アマテラス】を召喚しつつ無詠唱で《炎勢之矢》を生成、そのままノールックで炎の矢をその声の主へと撃ち込んで火達磨にした。

そうして火達磨になった全身タイツの変質者——レジェンダリア〈マスター〉内のトップ克蘭〈Y L N T 倶楽部〉克蘭オーナー〃 L S・エルゴ・スム〃は、全力で地面を転がりながら身体についた火を消そうとした。

『アチチチチチ?!? いきなり攻撃とか酷いですぞ!!』

「貴様が私の後ろに立つ方が悪い」

『何処の13な殺し屋ですか?』

「……チツ、耐火系の装備で固めてたか。次は《閃光之矢》貫通特化レーザーを使おう」

街中だから余計な延焼しないように威力を落としたのは失敗だったか……ちなみにいきなり私が H E N T A I を燃やしたので周りは一瞬騒然としましたが、私とコレが〈マスター〉でその後も普通に話しているのを見て『ああまた〈マスター〉の奇行か』『今度も公開 S M とかかな?』『俺もひめひめたんに撃ち殺されたい』と言うだけでスルーされましたが。後最後。

……私がコイツと同類扱いされるのは気に入らないんだけど、レジェンダリアでは〈マスター〉の奇行は日常茶飯事だから騒ぎにならない所は良しとしましょう。

『いやいや?!? ちょっと待ってほしいですぞ! 今日ひめひめ殿に頼みたい事がありましたてな!!』

「断る。今は貴様を蜂の巣にするのに忙しいからな」

『M A T T E R?!? ストップ! 例えひめひめ殿が偽口りだとしても話せば分かり合える筈ですぞ!!』

「残念ながら私とお前H E N T A Iでは戦う事でしか分かり合えないのよ」

そんな事を言いながらも私は L S の眉間に《閃光之矢》の照準を合わせ「アレ? ひめひめさんに L S さん、何やってるんですか?」……後 0.1 秒で撃ち抜こうとしていた所に〃その声〃が聞こえて来たので、私は渋々【アマテラス】を下ろして紋章の中にしまった。

……そうしてやって来たのは、私が待ち合わせていたパーティーメンバーである小学生ぐらいの赤髪の女の子な【狂信者】アリマ・スカーレットちゃんと、褐色金髪の青年な【城塞衛兵】キャッスル・ガードのでいふえくんど君だった。

『おおー。アリマちゃん、久しぶりですな』

「はい、LSさんもお久しぶりです」

「……俺もいるぞー」

そしてLSは私と違ってリアル小学生ロリのアリマちゃんが現れたからか、先程までのダメージなど無かったかの様に立ち上がって彼女に話し掛けていた……まあ単に懐に入れてあった回復魔法【ジェム】を使っただけだけど。

アリマちゃんはデンドロを始めただけの時にLSに色々とお世話になって、更に格好とかを気にしない性格だからヤツの事を慕っているのよね。

……勿論こんな不審者に任せるとか私の良心が許さない（後、公衆の面前で偽ロリ扱いされた恨み）ので、彼女は私達のパーティーに保護したんだけどね。

「それで、LSさんは一体何の用だったんですか？」

『実はですな、アムニール郊外にある孤児院の近くに【カンニング・クロウ】の群れが縄張りを作ったらしく、そこに住む幼気な子供達ロリシヨタが外で遊んでいる時に襲われたのですぞ。コレはロリシヨタを守る事を使命とする俺的には見過ごせぬと思いましたが、同士であるひめひめ殿を誘って彼奴等の討伐を行おうと思ったのですぞ』

「同士じゃねえつつってんだろ（怒）……そもそも【カンニング・クロウ】程度相手なら手前のクランメンバーを頼ればいいでしょうが」

確かに【カンニング・クロウ】は悪知恵カンニングの名の通り頭が良くて低レベルだが魔法を使ってくる上、それなりの速度で空を飛びながら集団で連携してくる厄介な鳥型モンスターであり、戦闘速度や有効射程に難がある呪術師スタイルなLSにはキツイ相手ではあるのでしょうか。

……それでも、HENTAIの集まりのくせに無駄に高スペックな〈マスター〉ばかりな〈YLNT倶楽部〉のメンバーであれば特に苦戦

する事なく討伐出来る筈なのだ。

『いやーそれがすな、今へY L N T倶楽部』はこのレジエンダリアに
いると言う。子供を攫つて魂を抜き取つて殺す謎のユニーク・ボス・モンスターへU B Mを
全力で探しておりましてな。……克蘭で援助している孤児院にも
コヤツに攫われたと思しき子供達は何人もいる以上、我らにとつては
不倶戴天の敵に他なりませんので只今全力でもつて搜索中なのです
が……そのせいで克蘭メンバーが出払っておるのですよ』

成る程、どうやらその調査の途中で「カンニング・クロウ」の一件
を知り、単独での討伐を難しいと判断して知り合いと言えなくもない
かもしれない私達に声を掛けたと言うことみたいね……と、そこまで
考えていたら横に居たアリマちゃんが何やら決意に溢れた表情をし
ていた。

「そんな事情だったんですね……分かりました！ 私も孤児院の子供
達の為に「カンニング・クロウ」の討伐をお手伝いさせて頂きます！

……それでひめひめさん……」

「……ハア、まあ別に構わないわよ。どうせ適当なモンスターの討伐
依頼でも受けようと思つてたんだし、孤児院の子供達の為に動くのは
嫌は無いから」

『おお！ ありがとうございますぞ、アリマちゃん！ 同士ひめひめ』

「だから同士じゃない」

「……俺もいくぞ……」

アリマちゃんって基本的に凄く良い子だからねえ、こうなる事は予
想できていたわよ……ああ、ちゃんつてでいふえ〜んど君がいる事も
忘れてないよ。



さて、そう言うわけで私達と（超絶不本意だけど）LSは件の「カ
ンニング・クロウ」の縄張りの近くにあるそこそこ開けた場所にやつ
て来ていた……実はLSが「鳥寄せの餌」という鳥獣モンスターを呼
び寄せるアイテムを持って来ていたので、今回は敵を開けた場所に誘

き寄せて撃退するという作戦で行くことになった。

「それじゃあ、でいふえくんど君はちよつと「高台」を作つてね。誘き寄せるのとアリマちゃんの戦い方的には目立った方が良いからね」
「おお、やつと出番だ。……とりあえず了解、それじゃあ行くぞへフリーダム・ランパートへ！」

でいふえくんど君がそう言った瞬間、私達が立っている地面から縦幅三メートル、横幅二十メートル、高さ十メートル程の「城壁」が一瞬でそそり立って一つの高台を作り上げた。

……これが彼のへエンブリオである【自在城壁 パラスアテナ】はその名の通り城を囲えるぐらいに巨大な城壁型であり、スキル《フリーダム・ランパート》によって本体の一部のみを任意のサイズ・形状にして好きな場所に高速展開出来るので、今回は高台代わりとして展開して貰つたつて訳。

『『K A A A A A A A A A !!』』』』』

「あら、早速来たわ。そのアイテム凄いい効き目ね」

『ウチのクランメンバー謹製の一品ですからな！ 元はロリシヨタ達を引き寄せるアイテムを開発するつもりだったのですが、それはクランの方針にそぐわれないと言う事で俺の「説得」の末にこの様なアイテムを作らせたのですが』

「その情報は知らない……とりあえず戦闘準備。私がなるべく撃ち落とすから近付いて来たのをお願いね。《瞬間装着》」

L Sの戯言をスルーしつつ私は「アマテラス」を向かって来る【カニンング・クロウ】へと構えながら、マント型の特典武器【竜葉外套 ドラグリーフ】を羽織つてから300メートル程離れた相手に向けて射撃を開始した。

「《閃光之矢》《スプレッドアロー》！」

『『K A A A A A A A A A』』』

……魔弓士系統のスキルは魔力式弓矢の魔力矢に別の特性を追加する物が多く、今は射る矢が散弾となるスキルを使いながら光属性の矢を放ち十数羽の【クロウ】を纏めて撃ち抜く。

『……よくこれだけ離れた場所に、しかも散弾となった矢を全弾個別

に命中させるとか出来ませぬ」

「そうなる様に散弾のタイミングや方向を個別に制御したからね。そもそもたつたの『三百メートルしか』離れていない相手にスキルの保持まであつて外す訳ないでしょ」

双眼鏡で「クロウ」の群れを覗きながら呪術発動の準備をしているLSを横目に、私は「アマテラス」の矢に追尾性を付与しながら連射して近づいて来る連中を次々射抜いていった……ちなみに私が離れた相手を正確に目視出来てるのはサブに入れた「観測手」スポッターの遠視系スキルのお陰だけだね。

……ホントこつちの世界はスキル発動が半ば自動化されてるから楽で良いね。スキル連続使用で消費されるMP・SPも「ドラグリーフ」の自動回復系装備スキル《陽力装》のお陰でしばらくは問題無いから。

『『K A A A A A A A!!』』』』

「《ハウンドアロー》《光炎の矢》！……と言つても、あくまで一羽一羽撃ち落としてるだけだから私だけだと殲滅には時間が掛かり過ぎるわね。……アリマちゃん、準備は？」

「《フィジカル・バーサーク》……《絶望セシ預言者》……《狂乱セシ聖戦士》……《狂喜スル守護聖人》……《狂イ果テル司祭》……もう少しです」

私が追尾機能付きにした《光炎の矢》を連射している横で、アリマちゃんは自身に次々と「狂戦士」の狂化スキルや「狂信者」の『自身が精神系状態異常になる引き換えに強力なバフを掛ける』スキルを使用していった。

……これだけのデメリットスキルを重ね掛けすれば普通のティアンなら発狂、《マスター》でもまともな行動が取れなくなるのだが、彼女の《エンブリオ》「正心偽脳 シャカ」の『自身の精神系状態異常及び精神に干渉するスキルの悪影響・デメリットを受けずに行動出来る様になる』パッシブスキル《悟りの境地》マインド・セットによってメリット効果のみを享受出来るのだ。

「……《狂走スル巡礼者》……後は《悟りし者の御業》ソウル・コントローラーで《伝播スル狂

ど、判定が「精神状態異常・狂化スキル一つ毎に個別に発動する」とは言え成功率自体は最大で一割程度、当然精神耐性やレベル差の影響も受けるから実際にはさらに低くなるので大量の精神異常に掛かっていなければ有効には使えず、無差別系スキルなので味方にも判定が発生してしまう普通なら非常に使い難いスキルなのだが……。

『KIIIIIEEE?!!?』

「相変わらずアリマちゃんはジョブとヘンブリオのシナジーが強力ね《炎勢乃矢》！」

「それほどでも《ウイングド・ブレード》！」

彼女の場合には《悟りの境地》で悪影響を受けない事を利用して精神汚染が掛かる呪いの装備を複数身につけて判定回数を増やし、無差別というデメリットも「自身の精神系スキルを制御・操作する」「シヤカ」の第2スキル《悟りし者の御業》によって『敵対象のみにデメリット効果だけを押し付ける』形にしているので問題にはなっていない。

……そして、それから数分も彼女が戦い続けた結果ほぼ全ての「カニンング・クロウ」が精神汚染を食らってほぼ戦闘不能となったのだった。

『KEEEEEAAAAA!!』

『後はあやつだけですな。まずは動きを封じますぞ。《シヤドウ・スタンプ》《カースバインド》』

そうして配下の殆どを失って動揺した「グレーター・カニンング・クロウ」の下にいつの間にかやら潜り込んでいたLSは、その影を踏みながら相手を指差す事で呪術を掛けてその動きを封じてみせた。

「本当に抜け目のないヤツ……《光剛勢》《光炎之矢》！」

『GYAAAA……!!』

そんなヤツの行動に関心半分呆れ半分な私だったが、その隙を見逃す事無く「ドラグリーフ」のスキルで強化したの光熱矢で相手の頭部を撃ち抜いて始末したのだった。

……ふむ、まあボスも倒したし他の「カニンング・クロウ」もほぼ全滅したから、これで郊外の孤児院に被害が出る様な事は無いでしょ

う。

『これで孤児院の子供達はまた元気に遊べる様になるでしょうな。ひめひめ殿とアリマちゃんも色々付き合ってくれてありがたいですぞ』
「いえ、LSさんのお役に立てて良かったです」

『これで気兼ねなく我が魂の故郷の空気を集める事が出来ますぞ。
子供達ロリンヨタが落ち込んでいると空気も不味くなりますからな！』

「おっと、ここにもう一人孤児院に悪影響を及ぼしそうなヤツがいたわね」

……とりあえず目の前に居るHENTAIに再び《炎勢乃矢》をぶち込んで火達磨にしつつ、私達は孤児院に「カンニング・クロウ」の群れの討伐を報告すべくアムニールへと戻っていったのだった。

あの「ヘマスター」の今：「プロデュース・ビルド」編

□王都アルテア・「プロデュース・ビルド」本拠 【裁縫職人】「ターニャ・メリアム」

「しがない生産系「ヘマスター」の私は先日エルザに頼んで入手した【カース・トラップスパイダー】の素材から、私と【クロートー】で作成した【呪怨蜘蛛の糸】を「裁縫屋ギルド」に納品して来た所だ。

……加えてエルザから買い取った【デッドリー・ヴェノムスパイダー】素材を使って作った【致命毒蜘蛛の糸】も一緒に売りに行つていい値段で売れたんだよね。この手の素材は状態異常耐性の衣服を作るのに使われるから結構需要があるのだ。

「はいただいまー！ ギルドへの納品クエは終わったよー！」

「やあ、お帰りターニャ。僕の方も木工ギルドに素材を下ろして来た所さ」

そうして克蘭ホーム（小）に帰ってきた私を迎えてくれたのは「ヘプロデュース・ビルド」メンバーの一人であるアカイ・ワカバちゃんだった……彼女は【木工師】ウッドワーカーシステムをメインジョブにする克蘭の木材系生産担当の「ヘマスター」だ。

更に「エンブリオ」【九製界樹 イグドラシル】によつて高品質な木材を生産出来るので、サブジョブには【育樹家】ツリー・グロウワーを入れて木材系アイテムの生産も担当している。

……とりあえずまだ他のメンバーは来てないみたいだし、お茶菓子でも食べながらワカバちゃんと話そうかな。

「ほーん、ウチの克蘭も結構生産職として様になって来たね。ギルドから指名依頼も届く様になったし」

「僕達は特殊で高品質の素材を作れるメンバーが多いからね。素材を調達するギルドとしては有名になって来たんじゃないかな？ ……」

まあ、肝心の生産アイテムとかはまだただけど」

「自分達で作った高品質・特殊素材を加工出来る能力やノウハウが無いからねー。……最近ではレベルの上昇やゲンジの「ヘパイストス」やマキアちゃんの【ゴブニユ】のお陰で大分いい物が作れる様になっ

ただ」

この二人の『生産スキルへのバフ効果持ちへエンブリオ』のお陰でスキルレベルの低さや生産成功率の低さに関してはある程度下駄を履けるんだけど、特殊な素材を使って『どんな物を作るか』のノウハウや経験に関してはその道のプロであるティアンの職人達にはどうしても劣るんだよねー。

……私達も素材を売って出来た彼等とのコネを使って色々生産について教えて貰ったりもしてるけど、詳しい事に関してはその工房内の秘伝だったりするからガードが固くてね。

「まあ、今は経験を積んで研鑽に当てる時期なんだろう。……複数の「エンブリオ」を組み合わせる事によってより高い性能のアイテムを作ると言う目論見は今の所上手くいってるしね」

「適当に募集したクランメンバーがみんな自分の「エンブリオ」の能力を晒しても問題無い人格だったのが大きいけどね。……良くも悪くも私達は『生産系クランとか面白そう』ってノリの生産系エンジョイ勢だったから上手くいってる感がある」

実際『自分が王国の生産「マスター」の頂点に立つ』『俺が最も利益を上げる』みたいな人がいたらここまで上手くは回らなかっただろうし……多分、生産クランをやるなら私達ぐらい緩く行くか、或いは強固な目的意識が必要なんじゃないかなと思ってみる。

……そうして私達がしばらく駄弁っていた所、噂をすれば影と言うかホームの扉が開いてメンバーの一人である「高位手順書士」マキア・マジカちゃんが入って来た。

「ただいまー、『レシピ』売り捌いて来たよー」

「お帰リーマジカちゃん、クッキー食べるー?」

「食べりゅー」

そうしてマジカちゃんは気怠げな表情で席に着くと私が渡したクッキーをムシャムシャと食べ始めた……ちなみにマジカちゃんと言う「レシピ」とは、彼女の「エンブリオ」「凶面改竄」「ゴブニュ」によって使用時の生産行動へのバフ効果が付与された特注品である。

……本来「レシピ」とは生産職がスキルでの自動アイテム生産に使

うガイドアイテムでしか無いのだが、彼女は「ゴブニユ」のスキル《成功の秘》と《昇華の印》によって「レシピ」や設計図にそれぞれ『使用時の生産スキル効果上昇』『作成した生産物の品質上昇』を効果を付与出来るのだ。

「要するに【レシピ】を使うだけで生産スキル・生産物へとバフが掛かる魔法のアイテムに変えるへエンブリオ」なのでした」

「誰に話しかけてるのー。……後、そんなに便利な物じゃないけどねー。ただ【レシピ】に付与するだけだと精々数%の効果上昇に留まるし、スキル《改造の判》で使う人間とかスキルとか使い捨てにするとか色々条件を付け加えて効果を上げないとー。工程を簡略化する為の【レシピ】なのに工程を追加しないと目に見えたバフが掛からないとか意味無くない？」

「強力な効果のスキル程、手間かコストが掛かるから仕方がないだろう。特に生産系は」

まあ、微量とは言え自動生産時にバフがかかるからマジカちゃん謹製の【レシピ】は大量生産を生業としているティアンの人に売れてるみたいだけど……ちなみにリピーターを確保する為に『一定回数使ったらロストする』条件を付け加えて効果を上昇させてたり。

……こんな風に私・ワカバちゃん・エドワードが特殊な素材を作成して、ゲンジ・マジカちゃんの生産バフで各々の生産作業を強化しながらそれらの素材からアイテムを作るのがウチのクランの主な活動ではあるのでした。

「さて、今日の予定はエルザ嬢への報酬として専用装備を作るんだっただかな？」

「うん、エドワードとゲンジが帰ってきたら作業を始めるつもり。最近出来た【ワルキューレ】の四女フィーネちゃんのレベルが上がってきたから新しい武器が欲しいんだって。……彼女は攻撃魔法系のジョブに適切があるからそっち方面を強化する感じのヤツ」

「じゃあ、二人が鍛冶ギルドから帰ってきたら相談からの私が設計図を書く作業が始まりますねー」

そしてお菓子を食べ終えた私達は、残りの二人が帰って来るまでに

今日の予定——ウチのクラン専属の〈ハマスター〉であるエルザへの報酬装備を作る作業について相談を始めたのでした……エルザにはクラン全体で素材調達とか色々とお世話になってるからね、ここは奮発しないよ。

……それに本人には自覚が無いみたいだけど純竜をテイムした事でテイマー界限でエルザはちよつとした有名人になってるからね。そこで私達が作った高性能装備を付けて貰えば宣伝にも使えると言う寸法よ。

「それじゃあ僕は最近出来上がった『ウォーロック・ブラックトレント』の遺伝情報をベースに、『第一樹層・神』で作った高品質の『魔導黒樹』を出そうか。魔法系装備の素材としては悪くない筈だ」

「確か火属性メインで行くって言うってたから炎系モンスター素材で作った糸も準備しておくかな」

「……ムムム、魔法使い系の装備だし特に捻りも無く杖とかでいいかな。魔法系木材ベースに金属化させた同種木材を組み合わせつつ魔法系効果増幅の宝石を……こっちは生産出来る人が居ないから買わないとかー。ターニヤのは布飾りとか持ち手部分に巻くとか……」

……何だかんだ言っても我らへプロデュース・ビルドは生産活動好き〈ハマスター〉が集まった生産クランなので、女子メンバー同士の話し合いもこの手の話の方が盛り上がるんだよねー。

「おーい、帰ったぞ」

「とりあえずノルマの納品は終わったぞい」

「はい、お疲れ様ー。……それじゃあ今日の予定である『エルザへの報酬・新装備開発会議』を始めるよ」

そうして生産話が弾んで来た所で納品を終えた残りの二人が帰って来たので、早速私達はクランとしての本格的な生産活動を始めたのでした……帰って来たばかりの二人には悪いけど、ログイン時間の関係で全員が揃う機会はそこまで多くはないからさっさと作業を進めるよ。

……何、こっちの世界でなら生産職でもある程度レベルを上げていれば、それなりに上がったステータスのお陰で長時間労働とかもそこ

まで苦にはならないからね！



そういう感じで各々が出来る事を持ち寄つての喧々轟々な話し合いの末に新装備の作成過程を決めた私達は、早速ホーム裏手にある空き地に展開した「ヘパイストス」内で生産作業を行う事になった。

ちなみにこの空き地は再開発失敗時に店が建てられる予定が無くなつてそのままになつてる所で、キャツスル系の「ヘパイストス」「イグドラシル」を展開する場所としてホームと一緒に買い取った物である……というか、この隣接する空き地があつたからこのホームを買つただけだね。

「……ええと、形状は長杖でベースは【魔導黒樹】で加工はワカバ。それでエドワードがそれを金属化させて【魔導黒樹鋼】にしてゲンジが装飾に加工。更にターニャが【火炎竜の糸】を織つて作った飾り布を……」

まずはマジカちゃんが設計図としてレシピを書いて行く……彼女が「ゴブニユ」のスキル《改造の判》は普通はレシピに書き込めない様な要素（使用する「エンブリオ」のスキル、作業する人間など）を書き込める様にする効果もあり、作業工程を増やして条件を細かく書き込む程に他二つのスキルで付与されるバフ効果を引き上げる事が出来るのだ。

更に【レシピ】を書く事に特化した【手順書士】や設計図を書く事に特化した【製図師】のスキル効果もあつて、彼女は現実ではありえない様な凄まじい速度でペンを動かして設計図を作り上げていく。

「……ふいー！ 書き終わったよー。後はこの設計図通りに生産作業を行えばバフが入るよ。後効果時間を24時間にして使い捨てアイテムに設定したりしてバフ効果を引き上げてるから。……それじゃあ私は少し休むねー」

「お疲れ様」

そう言つてマジカちゃんは書き上げた【レシピ】を私達に手渡すと

そのまま机に突っ伏して眠ってしまった……彼女、生産作業は好きだけど少し面倒くさがりというちよつと変わった性格をしてるからね。だからこそ自動生産アイテムである【レシピ】へのバフ付与なんてへエンプリオへになったんだらうけど。

……まあ、とにかく彼女は自分の仕事をした訳だから後は私達が実際に作るだけだ。私の作業はおまけみたいな物だし【ヘパイストス】と【ゴブニュ】による生産作業バフに重ね掛けがあれば失敗する事は無いでしょう。

「まずは【織手】^{ワイパー}の《機織り》で【火炎竜の布】を作つて、それを^{ニードルマイスター}【裁縫職人】のスキルで飾り布と持ち手に巻く布加工するつと……デンドロは生産スキルを使うだけで（DEXとスキルレベル次第で）サクツと生産可能なのは楽で良いね」

現実で裁縫する時もこのぐらい楽なら良いのに……とか考えているうちにあつさり【火炎竜の飾り布】及び【火炎竜の包帯】が完成した。生産バフの重ね掛けのお陰かラツキーな事に両方とも高品質な出来になっている。

……ふむ、他のメンバーの作業はまだ時間が掛かるみたいだし、終わるまでは【クロートー】と別の生産作業をしておこうかな。【ヘパイストス】内での作業なら成功率が上がるしね。

「よし、加工終わり！ 素体の【魔導黒樹の長杖】は高品質で出来たよ」「こちらも終わったぞい。【魔導黒樹鋼の装飾】をいくつか。注文通りの出来の筈じゃ」

「錬金術による付与も成功したから良い出来の筈だ」

そうこうしている内に他のメンバーの作業も済んだみたいなので、最終工程である杖の組み立てに入る事に……これは各々の得意分野であるジョブスキルで分担する感じに【レシピ】は設定されてるからその通りに……。

「はい完成……名前は私が考えてクジで決まった【ブラックウイザーワンド・フレイム+】で」

「俺の【インフェルノ・ウォーロック・シュバルツワンド】の方が良かったんだが……」

「いや、なんかカッコ良さそうな単語繋げて微妙になってるからね。……やっぱり私の【舞い踊る火竜と黒き大樹の杖】の方が……」

「……【魔導黒樹の長杖・一番】ー」

「ムウ、ワシの考えた【黒賢樹の魔杖・火竜式】が選ばれなかったのは残念だが、まあ出来は良いし文句はあるまい」

……という訳で、完成した【ブラックウイザー・フレイルム+】がこちらになります。デザインは黒い樹の杖に黒くて木目調の模様がついた金属細工があしらわれ、持ち手には真紅の布が巻かれて、更に同じ色の布飾りが先端に付いていると言った所。

魔法補助用の杖だから装備攻撃力は低いけど、装備スキルとして《MP増加》《魔法強化》《魔法発動加速》《火属性適性》《火属性耐性》《盗難防御》のパッシブと、長時間のクールタイムと引き換えに魔法の効果範囲を広げる《マジックブースト・ワイドレンジ》が備わってるからいい感じだね。

ちなみにこの手の合作アイテムの名前は事前にメンバーでそれぞれの案を出した上でクジで決める事にして……各々のネーミングセンスが微妙なものには突っ込まない方向で。

「……では最後にワシの【ヘパイストス】の《プロダクト・リビルド》でいくつかの制限を付けた上でスキルを強化するか」

「ええと、装備制限を非人型範疇生物限定装備、合計レベル200以上、メインジョブが魔法系ジョブにする代わりに《魔法強化》《火属性適正》《火属性耐性》スキル効果を引き上げるんだったか」

「それらスキルなら強化しても損は無いだろうしな」

「その組み合わせだとエルザ嬢の【ワルキューレ】達以外には装備出来なくなるがね」

「後は装備攻撃力と防御力を限界まで落として《MP増加》を強化する予定になってるよ」

スキル効果上昇・ステータス上昇の〃装備しておくだけで効果を発揮する〃パッシブスキルは汎用性が高いから、とりあえず効果を上げておけば腐る事は無いしね。

……そうして暫くの間ゲンジがスキルによって【ブラックウイザー

ワンド・フレイム＋」のステータスを弄ってようやく完成品が出来上がり、それと同時に使い捨ての「レシピ」は光の塵となって消滅した。「よっしゃ完成！」

「乙ー」

「中々の出来だな。装備制限の事が無ければ300万は下らないだろう」

「その装備制限の所為で売り物にはならないんじゃないかな。だが報酬として渡すには十分な出来じゃろう」

「エルザ嬢に取ってきて貰っていた素材の合計額は数百万リル相当だからね。報酬ならこれぐらいじゃないと」

うんうん、結構な自信作だしこれならエルザも満足してくれるでしょう……後日、エルザが内に来てくれた時フィーネちゃんに「ブラックウィザーワンド・フレイム＋」を渡した所、かなり使いやすいと好評だったので今回の生産は大成功と言っていいだろう。

……ティマーのエルザが一番のお得意様だし、今後はティムモンスターに装備出来るアイテムの開発にも力を入れても良いかもね。彼女達の装備をオール「プロデュース・ビルド」にして宣伝効果を狙う意味も兼ねて。

現実での一幕

□とある大学・仮想現実電子遊戯研究会 かとうれん 加藤蓮

九月も半ばに差し掛かった頃、俺は大学に新しく出来たクラブ『仮想現実電子遊戯研究会』の部室で姫乃ひめのと一緒にお菓子を食べながら駄弁っていた……ちなみにこのクラブは名目上は『最近出来たVRゲームが社会に与える影響を調べる』とか最もらしいテーマを掲げているが、実際のところは大学にいるデンドロユーザーが集まって適当に過ぎず感じの集まりである。

「え？ 志津香さんもデンドロやってるのか？ ……というかログイン出来たんだ」

「ええ。……まあ、彼女でもログイン条件を満たせる辺りデンドロは只のゲームじゃないわよねえ。今更だけど。……それにへエンブリオも全身置換型の『ボディ』ってカテゴリだったし」

「全身置換型ねえ……へエンブリオはへマスターのパーソナルを読みとって生まれるんだから、『人間の肉体にこだわっていない』ならそうなるのかね」

尚、『志津香さん』とは姫乃の仕事上の同僚であり、その関係で俺とも面識がある方である……どうも彼女もへ Infinite Dream（インフィニットドリーム）を調べるといふ依頼を受けて『彼女でもちゃんとログイン出来てゲームをプレイ出来るか』を調べる為に一緒にログインしていたらしい。

……尚、彼女のへエンブリオは『負有幽霊 ゴースト』と言って、『自身を非実態型のレイス系アンデッドへと変える』スキルを持っているとの事だ。まあ『そのまんま』だな。

「彼女も今は普通にデンドロを満喫してるからね。頭上にモンスターを示すネームが浮かばないから、偶に本物の幽霊とか言われる事もあるけど」

「普通に本物なだけでは？ それにデンドロ内なら本物の幽霊ぐらい普通にいるだろ」

「知り合いになったティアンの『死霊術師』ネクロマンサーに聞いた話だと、あっちの

幽霊はレイス系モンスターと普通の幽霊の二種類がいて普通の幽霊の方は死霊術師系統のジョブスキルが無いと感知できないみたいよ」その辺りの話は俺も以前の司祭系ジョブクエスト『怨念溜まりの浄化』の時に一緒になった教会の人達から聞いたな……あちらでは怨念の発生は良くある事で、怨念を放置しておくで強力なアンデッド系モンスター発生の温床になるから司祭系統や死霊術師系統の人に頼んで怨念溜まりの対処を定期的に行っているのだ。

故に【死霊術師】は一見如何にも悪者っぽいジョブに見えるかもしれないが、デンドロではむしろキチンとしたギルドで運営されている立派な仕事の一つなのである……まあ、イメージ通りの悪い【死霊術師】も居るが、それは他のジョブも変わらないし。

「……まあ、志津香さんが幽霊っぽい行動を取って、それを見たへマスター」やティアンが勘違いするのが原因なんだけど」
「見た目が完全に浮遊霊じゃなあ」

……まあ、頭上にネームの無い幽霊は普通の人には見えないから志津香さんは『本物の幽霊』とか言われてるって事らしいな。尚、本人はそれを面白がって「いつも通り」幽霊っぽい行動を取って人を驚かせてるみたいだが。

「……よー、邪魔するぜ……本当にお邪魔だったか？」

「別に部屋なのだからクラブに所属している者は普通に入ってくれば良いって思うが、江戸川」

「そもそも単にお菓子食べながら駄弁ってただけよ、江戸川君」

そんなたわいの無い事を話していた途中で、部屋の扉を開いて中を見た瞬間に何故か遠慮しだしたのがクラブのメンバーの一人である江戸川陸えとがわりくであった……後、別にお邪魔とかじゃ無いからさっさと室内に入って来ると良い。後ろがつかえてるだろ。

「なんだ江戸川、またあの二人がいちやついていたのか？」

「あー、何時ものバカップルが？」

「お菓子を食べながら話すのが、いちやついている」と見えるならそうなんでしょう、貴方達の中ではね」

「まあ、客観的に見て男女二人部屋の中で喋っていれば、いちやつい

ている”と見えなくも無いんだろうが」

そんな茶化す様な事を言いながら江戸川の後ろから入って来たのは、同じくクラブのメンバーである赤城讓治あかぎじょうじと結城奈々ゆうきななだった……尚、こうやってからかわれるのは俺も姫乃も慣れていたので適当にスルーである。

……まあ、この二人にこの手の事を言われてそれをスルーするのは何時もの事なので、そのまま彼等は部屋の中に入って一緒にお菓子を食べ始めた。

「しかし、お前ら本当に付き合っていないんだよね？ めっちゃ仲良く見えるのに」

「別に仲のいい男女⇨恋人同士という訳でもないだろう。仲は普通に良いが」

「……というか、今付き合うと色々と面倒なのよねえ。……それよりも一応クラブ活動なのだからデンドロについての話をしましょう」

そうしつこく聞いてくる結城を俺達は適当にあしらいつつ話をデンドロの話題に切り替えていく……ちなみに“面倒”なのは姫乃の『実家』関係である。特に語る意味もないので言わないが。

「じゃあ江戸川、最近の『プロデュース・ビルド』の調子はどうなんだ？」

「まあ、ようやく商売と生産活動が軌道に乗ったって所かな。俺達を作る特殊素材の売れ行きは上々だし、生産物に関してはオーダーメイドの少数生産に特化するっていう方針に固めたしな」

そう、この江戸川のデンドロでのプレイヤー名は“エドワード”……アルター王国の生産クラン『プロデュース・ビルド』のオーナーであり俺のフレンドでもあったのだ。まさか同じ大学にいたとは思ってもいなかったもので、最初にこの事を知った時には世間は予想以上に狭いと思っただな。

「成る程な……それじゃあ何かいい金属素材とかはないか？ 最近ゴレムを作り始めたからそれに適した素材を集めてるんだが」

「それなら生物素材を金属化させた物とかはどうだ？ 俺は金属素材が専門だから他にも色々あるぞ。値段は応相談だが」

それに最近ようやく「クルエラン・コア」の第二スキルが使える様になったから、ネリルの指導の下で本格的にゴーレム生産を始めたのだ……最もその第二スキル〈クリエーション・ゴーレムアーミーズ〉の運用にはまだ色々と準備が必要ではあるので、生産クランである彼等に相談しているのだが。

……その時に回収した古代伝説級合金の箱の残骸もあるが、今の俺とネリルではスキルレベルやMPの関係で複雑な加工が難しいし。

「……それで？ 奈々の『お城作り』はどうなっているのかしら？」

「まあボチボチ？ 【ハルフアス】に素材を貢いで少しずつ大きくしてやる所。……ただ、私と言うか【ハルフアス】は『戦闘』ならともかく

『狩り』は苦手だから中々素材が集まらないんだよねえ。ジヨブクエストで稼いでもいるが効率が……」

「アイテム要求系の〈エンブリオ〉は大変だな。……まあ俺もだけどさ」

ちなみに結城は天地所属の〈マスター〉で大の城マニアであり、デンドロでも資材を使って増築が可能なTYPEキャツスルの【ハルフアス】という〈エンブリオ〉を最強の城にする為に活動しているのだとか。

そして赤城の方はドライブ所属でパワードスーツ着ながら戦つてるとか聞いたが詳細は分からん……まあ、自分の能力を隠すのは基本だし俺も姫乃も〈エンブリオ〉や特典武器について肝心なところは言っていないからな。自分の作品の宣伝をする江戸川と結城が例外なのだ。

「なら必要な金属素材があるなら今度向こうで相談に乗ろうか？ 金か素材とかと引き換えに色々と用立てるが。……こつちとしても実力のある〈マスター〉とのコネは多い方が良い、自分達では取ってこれない強いモンスターの素材とか」

「そうしてくれるなら有り難い。……これでもLUCは高いからドロップ運は良い方だ」

「それは頼もしい」

最も普段はドロップアイテムを経験値に変換してるから余りLU

Cの恩恵は感じられないが……ふむ、ドロップアイテムの量や質が上昇するタイプのスキルも取得しておくべきかな。上手くいけば経験値への変換量も増えるかもしれないし。

……確か【狩人】か【屠殺者】辺りのジョブで覚えられるんだっただかね。

◇◇

□地球・とある小学校 加藤美希

今日も今日とて小学校の授業を終えた私は早速家に帰ってデンドロをやるうと手早く帰りの準備を行っていた……最近はおぼへ墓標迷宮に籠っていたお陰か、多分そろそろ【戦棍王】の転職条件を半分ぐらいい満たせているんじゃないかと思っていたり。

……とはいえ、ただひたすらにゴブリンの装備を壊し続けるのも飽きてきたからね。そろそろ気分転換にちよつとだけ別の事をしようかな。

「……あの……加藤さん、これ落としたよ」

「へ？ ああ、シャーペン^{にいがき}を落としてたね。拾ってくれてありがとう、新垣君」

そんな風に考え事をしていた私におずおずとした声で話し掛けて来たのは隣の席の新垣貴志君^{たかし}だった……どうやら慌てて準備したせいでシャーペンを落としてしまったらしい。気を付けないとね。

「う、うん、どういたしまして……良かった、ちゃんと話し掛けられた……」

「え？ 何か言った？」

「い、いや、何でもないよー」

まあ、彼は気が弱くて大人しい性格でクラスでは少し浮いてるけど悪い人じゃないからね……ただ、そのせいで一昨年辺りに彼を対象としたイジメが起きそうな時もあったけど、少し「目に余る光景」だったから私が色々と動いて無かった事にしたけどね。

……流石に彼が『イジメを苦に自殺する未来』を視せられて何もし

ないのは私の精神衛生に関わるしね。その時の事は彼には気付かれてないだろうけど、今年席が隣同士になって少し話すようになったのは縁を感じるかな。

「そ、そういうえば加藤さんもデンドロやってるって聞いたんだけど……」

「うん、アルター王国でお兄ちゃんと祐美ゆみちゃんと一緒にやってるよ。その言い方だと新垣君も？」

「う、うん、僕もアルター王国で……」

すると新垣君はいつも一言二言で話が終わるのに、今日は何故か吃りながらもデンドロの話が続けてきた……それにしても彼もデンドロを、しかも私達と同じアルター王国でやってるとはね。人の縁とは分からない物だよ。

……と思っていたら、彼は何でか知らないけど何やら考え込む様に顔を伏せてブツブツと呟き始めた。

「……アルター王国の三兄妹……加藤……藤…………ウイステリア？」

「あらバレちゃったか。まあ安直な名前だしねー」

彼の口から出てきた自分達のプレイヤー名を聞いて、私は苦笑いを浮かべながら実質的に正解を認める発言をした……実際只の本名の振りだしデンドロとリアルで両方で私達の事を知ってれば推測は出来ちゃうかな。

……と、特に危険も感じないので私はそんな風にお気楽に考えてたんだけど、またまた何故か新垣君は顔を真っ青にして何やら慌てだした

「ヤベエよ……襲撃どころか妹さんに闇討ちして……」

「ん？ どうしたの？」

「なんでもない！ です……よ、用事を思い出したので俺はこれだ!!!」

そう言った新垣君は急いで荷物を纏めると直ぐに教室から出て行ってしまった……一体何だったんだろうね？ 危険な感じは一切しなかったから大丈夫だろうけど。まあ、気にしてもしょうがないし私も家に帰ろうか。



「……ほーん、そっちは檉宮君って子とデンドロの話をしてるんだ」
「はい、同じクラスでデンドロやってるのは彼だけだったので少しだけ。……武術に関しての考えはお互いに結構違いますが、その辺りに気を付ければ普通に話せる仲なのです」

そうして私は同じく家に帰ろうとしていた祐美ちゃんと一緒に警備ロボが彷徨く道を歩きながら学校であつた事を話していた……こっちは同じクラスでデンドロやってるのがさつき明らかになった小森君だけだからね。隣のクラスにはグランバロア所属の子がいるんだけど。

「お互いに武術やってるなら話が合うんじゃないの？」

「いえ、彼にとって武術は『極めるもの』、或いは『好きでやってるもの』ですが、私にとっては『必要だったから納めているもの』で『出来て当たり前なもの』なので。……まあ、そう言った所に深く突っ込まなければ普通に武術の話も出来ますけどね」

どうも彼等にしか分からない『一線』みたいなのがあらしいなね。武術とかはさっぱりな私には何が何だか分からないけど……と、そんな会話をしていたら突然祐美ちゃんが前方を見ながら足を止めてしまったのだ。

……よく見ると彼女の顔は非常に気まずそうに歪んでおり、更に前方の一点だけを注視していたので私もそちらを見ると、そこには私達が通っている学校と同じ制服を着た女の子がこちらを見ていたのだ。

「……真里亞ちゃん……」

「……ッ!?」

その女の子——祐美ちゃんの友人だつた赤城真里亞あかぎちゃんは、こちらに気付くと同じ様に気まずそうな顔をしながら慌てて身を翻して走り去ってしまったのだ。

……うむむ、それを見た祐美ちゃんは悲しげな表情で顔を伏せながら立ち尽くしているし、これは二年ぐらい前の『あの事件』以来ずつ

とこんな感じみたいだね……。

「祐美ちゃん、あの事件以来まだ仲直りしてなかったの？」

「……はい。……話しかけようにもいつもこんな風に逃げられますし、私も彼女の事が怖くて追いつけないのです。……情け無い話ですね。これが戦闘であれば恐怖など一切感じない身体なのに……」

そう言いながら祐美ちゃんはどんよりとした雰囲気の中で自嘲する様に溜息を吐いた……別に彼女達が悪いという訳でもなく、一昨年の「あの事件」は色々と魔が悪かったからなあ。他にもイジメへの対応とかもあって忙しかったから私の「直感」でも少し対応が遅れてしまうなど時期も悪かったし……。

……その事件の本当に悪い人はお兄ちゃんと姫乃さんが「根絶やし」にしてくれたらしいから事件そのものは解決してるんだけど、この二人の関係はまだ修復出来てないんだよね……。

「……とりあえず帰ろうか祐美ちゃん。帰ってデンドロやる？」

「はい……」

そうして私は落ち込む祐美ちゃんを半ば無理矢理連れて家まで帰っていったのでした……こういう時に気の利いた事が思いつかない辺り、私の「直感」は本当に使えないよね。基本『命の危険』ぐらいにしか正確に反応しないし……情け無いなあ……。



「……あー……また逃げちゃった……」

……さて、全速力で姉妹から逃げていった赤城真里亞だったが、彼女は自宅に駆け込んだ後に自室のベッドに沈んで雰囲気で倒れ込んでいた。

「……ううう……今度こそ話かけようと思ってたのにいきなり遭遇なんて……いや、どの道怖くて動けないんじゃないかな……」

……実を言うと彼女の方も祐美と話したいと思っているのだが、かつての事件のトラウマから思わず逃げてしまつて未だに仲直り出来

ずにいるのだ。

「……ハア、気分転換にデンドロでもやろうかな。……こっちの私——アリマ・スカーレットなら「恐怖」で身体が動かなくなる事は無いのね……」

そうして彼女はへ Infinite Dendrogram のハードを起動し、決して精神系状態異常に負ける事がない自分としてある世界へと向かっていったのだ……彼女達二人の運命が交差するのはまだ少しだけ先の事である……。

第5章 死者の森 ひめひめからの救援依頼

□へサウダーテ森林【暗黒騎士^{ダークナイト}】レント・ウイステリア

現実では十月の半ば頃、俺はいつも通り妹達とデンドロにログインしてギデオン南西にあるへサウダーテ森林を馬車に乗って進んでいた。

「……ふーん、今から行く。ニッサ辺境伯領は通称へ自然都市とも呼ばれていて領内に広大な森林と山岳を持ち、山岳に沿った道でレジエンダリアと古くから交易をおこなっている地域である……と、このパンフには書いてあるね」

「レジエンダリアとの仲が良いから住んでいる亜人種の数ギデオンの比べても多いとか……楽しみですね、兄様」

「後はレジエンダリアから輸入したマジックアイテムとかも売ってるらしいね……それに自然が多いから観光業も盛んで、それ故にこんな観光ガイドが作られてると」

「もつきゆもつきゆ……」

まあ、俺が馬車を運転する後ろで妹二人とミメはこれから向かう。ニッサ辺境伯領の情報が書かれたパンフレットを見ながらキヤイキヤイ騒いでいたが……尚、ネリルは一人我関せずといった風情でギデオンで買ったパフェを食っていたが。

……まあ、このへサウダーテ森林は最大でも精々亜竜級レベルのモンスターしか出ない地域だから、今の俺たちであれば特に問題無い場所ではあるんだが……。

「一応言っておくが、ニッサ辺境伯領には遊びに行く訳では無いんだぞ」

「分かってるよお兄ちゃん……何せあの姫乃さんの頼みだもんねー。お兄ちゃんも凄いやる気でてるよねー」

「そうですねー、準備も万全ですからねー」

そう俺が気の緩みを指摘したら妹二人がニヤニヤしながら揶揄っ

て来た。コイツらお年頃だからか俺と姫乃の話題を面白がって揶揄う事がよくあるんだよな……まあ姫乃との関係は今更そんな事言われてもどうこうなる様な事は無いので適当に答えているが

……とにかく、今回俺達がニッサ辺境伯領に行くのは姫乃から『自分達のパーティーがある事情』でアルター王国に行く事になったからちよつと合わない？ 出来れば『事情』を解決する為の手伝いをして欲しいけど』と言われたからである。

「そもそも俺が準備に全力を入れたのは、その事情が『アルター王国方面に逃げたへU ユニーク・ボス・モンスター B M』を倒す事』だったからだ。……それに今回の一件ではお前の『直感』も反応してるんだろ？」

「うん、しかもかなり強い感じだね。……以前の『クインバース』や『クルエラン・コア』の時よりもヤバい感じがするよ。出来れば超スベリオルジョラ級職に就いてから向かいかけたぐらい」

……さて、そんなあからさまにヤバ目の頼みを姫乃が俺に持ち込んだのは今から数日前の大学での事で、その時に詳しい事情も聞かされたのだが……。



「……事情は大体分かったしデンドロで会うのは別に構わないんだが、そのお前達が追っているへU B M』と言うのはどういう相手何だ？ 協力する以上は詳しい情報を知っておきたいんだが」

「そうね……まず、私達がそのへU B M』を追う事になったのは付き合っている『とあるティアン』からの依頼なんだけど、そのティアン——ハイ・ネクロマンサーペルシナさんは志津香さんがお世話になってる『高位ハイ・ネクロマンサー霊術師』なのよね」

何でも志津香さんはへエンブリオ』のお陰でデンドロ』でも『霊体系アンデッドなのでジョブに関してシナジーする死霊術師系統に就いていて、あちらでの死霊術師としての振る舞いを学ぶ為にレジエレジーンダリアの死霊術師ギルドには良くお世話になっていたらしい。

そして、その中でも特に世話になっていた一人がそのペルシナさん

という人で、彼女は死霊術師ギルドの中でも合計レベル400を超える期待のホープなのだとか。

「彼女はレジェンダリアのティアンの中でもへマスター」と友好関係を結んだ方が良いという考え方の人で、志津香さんとの伝手もあって私達は色々と便宜を図ってもらおう代わりに依頼を受けるって感じの關係だったのよ。……そして、その彼女には死霊術師としての師匠がいてね。名前をハイデスさんと言ってエルフ族で死霊術師系統超級職キング・オウ・タルタロス「冥王」のジョブに就いている人なんですって。……今回の依頼はそのハイデスさんに纏わるモノなのよ」

姫乃曰く、そのハイデス氏は長命なエルフ族で超級職にまで至ったレジェンダリアに於ける最高の死霊術師だったのだが、同族であるエルフや妖精の上層部の腐敗っぷりに嫌気がさして政治の場である首都を離れて辺境の村で家族と共に暮らしながら迷える魂を導いていたらしい。

一応、死霊術師ギルドには偶に顔を出したり弟子を取ったりと政治に関わる連中以外なら世間との繋がりもそれなりにあって、実力の確かな人格者という事で「妖精女王」からの覚えもめでたい人だったのだとか。

「だけど、へマスター」が現れる少し前にレジェンダリア議会からの依頼でペルシナさんや死霊術師ギルドの人達と一緒に怨念溜まりを対処のする為に彼が村から離れた時に「その悲劇」は起こったらしいわ。……彼が依頼を終えて村へと帰ったら、彼の家族を含めて村の間は全員傷一つなく眠る様に死んでいたそうよ」

「それは……」

この事を姫乃達に説明したペルシナさんもこの時はハイデスさんの家族に会う為に同行していたので詳しく事情を聞く事が出来たのだが、その村人達は一切抵抗した様子もなくまるで眠っている間に魂でも抜かれたかの様に死んでいたそうよ。

……実際、ハイデス氏——「冥王」の奥義である《観魂眼》を持ってしても村人の魂を確認する事は出来なかったもので、レジェンダリアではこの事件を「魂喰らい」の仕業だと判断したらしい。

「魂喰らい」？」

「ええ……何でもレジェンダリアに古くから語り継がれる謎の〈UBM〉と思わしき『存在』らしくて、誰もそいつの姿を見る事が出来ず、そいつに襲われた者はまるで魂を抜かれたかの様に傷一つ無く死んでいる事から『魂喰らい』と名付けられたらしいわ。……実際の所はかなり特殊な隠密系スキルと、魂を抜く事による即死スキルを備えた特殊な高位〈UBM〉ではないかと言われてるわね」

その『魂喰らい』にやられた者は大体二百年程前から確認されており、その間搜索に特化した超級職のティアンだけでなくレジェンダリアでなら最強の広域殲滅型である「妖精女王」にすらその姿を捕捉出来ていないのだとか。

「それじゃあ、その『魂喰らい』を追ってお前達はアルター王国に行こうとしている……訳じゃないよな？　そもそも、その『魂喰らい』とやらの所在は分かってないんだし、多分レジェンダリアから出ないんじゃないかソイツ」

「隣国のアルター王国でこの二百年間被害が確認出来ない以上はレジェンダリアを住処にしてると見るべきでしょうからね。……その通り、その『魂喰らい』に関しては何処にいるのかもサツパリよ。子供を良く狙う性質があつて〈Y L N T 倶楽部〉が支援してる孤児院の一つ昔被害にあつた事もあつて、現在『魂喰らい』を目の敵にしたアイツらも探してるみたいだけど未だに見つかからないらしいわ。……アイツらロリシヨタを見守る為なのか索敵・追跡系〈エンブリオ〉持ちが結構いるんだけど、それでも見つからないらしいのよね」

……さて、彼女達がペルシナさんから追跡の依頼を受けた〈UBM〉がその『魂喰らい』では無いとすると……。

「……成る程。じゃあ、追跡する必要があるのはハイデス氏の方か？」
「流石に察しが良いわね。……そう、私達がペルシナさんから依頼を受けたのは『UBM』に堕ちたハイデス氏の追跡と討伐』よ」

……自分の愛する妻子を含めて全滅した村を見たハイデス氏は大いに嘆き悲しみ、更に自らの《観魂眼》を持ってしても妻子の魂を確認出来ない事もあつてまるで全てに絶望したかの様にその亡骸を抱

えて僻地にある拠点に引きこもってしまったそうさ。

どうにか立ち直ったペルシナさんも何度も励まそうとしたが全く効果は無く、その間に「マスター」が現れ始めた事もあって彼女はハイデス氏とやや疎遠になってしまったらしい。

「まあ、彼女が「マスター」を引き込む事に熱心なのは、伝説の「エンブリオ」の力で村を壊滅させた「魂喰らい」を見つけて倒す事が目的でもあったみたいだけど……先日、首都にある「アムニールの枝」を保管してあった施設に「UBM」が襲撃を仕掛けて来たのよ」

「……話の流れからすると、その「UBM」が……」

「ええ、ハイデス氏がアンデッドに堕ちた「UBM」だったそうよ。名前は「冥樹死王」ハデスブランチ」、格は伝説級だけど複数の上位アンデッドを従えている上に人間だった頃の技術と知識も持ち合わせているから「妖精女王」でも倒しきれなかったそうよ」

最もハイデス氏——「ハデスブランチ」は肝心の「アムニールの枝」の奪取は失敗しており、更に「妖精女王」から逃れる為に使役していたアンデッドの殆どを失ったという事だが。

……その後のハイデス氏が使っていた住居を調査したところ、そこには「アムニールの枝」の様な高い魔力伝導率を持つ植物とアンデッドを組み合わせた死者蘇生の術を研究していた痕跡が残っていたそうさ。

「大体読めて来たな。「UBM」化もその研究によるものか」

「おそらくはね。「ハデスブランチ」やその配下は植物とアンデッドが融合した様な見た目をしていてと聞いているし……それと、その研究資料を見たペルシナさんを始めとする死霊術師ギルドの人達は『こんな方法で死者蘇生が出来るはずがない』と悲しそうに言っていたわ」

「……つまりは『そんな判断すら出来ないレベルで狂ってしまったている』という事か……」

人間がアンデッドなどのモンスターに変化する時に無茶な方法だと急激な「器」の変化に精神が耐えきれず異常をきたす事がままある、そうで無くともモンスターになった以上は徐々に精神がそちら寄りになる……と、ネリル先生の授業でやってたし。

「そういう事。……それでペルシナさんと死霊術師ギルドは恩師でもあるハイデス氏が堕ちた【ハデスブランチ】をこれ以上見ていられない事と、死霊術師ギルドに深い関わりのある彼が首都を襲撃した事で議会からギルドへの当たりが強くなった事から、ギルドを上げて【ハデスブランチ】の討伐を決定。その為の戦力として志津香さん経由で繋がりがあり、伝説級〈UBM〉を討伐した私達に声が掛かったという訳」

「成る程な……それでその【ハデスブランチ】がアルター王国に逃亡したから手を貸してくれと」

「ええ、最後の目撃情報がレジエンダリアと王国のニッサ边境伯領を結ぶ山岳地帯手前だったから多分ね。……他国に行かれると国防上の問題から超級職を複数送り込むとかは難しくなるから。まあ、〈ハマスター〉なら関係ないし、ニッサはレジエンダリアとも仲が良いからペルシナさんを始めとする死霊術師ギルドのメンバーを何人か送り込むぐらいなら大丈夫みたいだけど」

まあ、最近王都でばかり活動してたから偶には遠出も良いだろうし、美希も〈墓標迷宮〉には飽きて来たと思っちゃいたしな……ついでに〈UBM〉討伐に協力するぐらいは良いだろう。



「……それでちよつとした遠出のつもりだったらミカの『直感』が反応したから急いで万全の準備を整えて出発したんだがな」

「ふむふむ、大体事情は分かりましたのです」

「魔法系アンデッドだと僕はまたイマイチ役に立たなさそうだ……」

そういう訳でミカからの忠告を受けた俺は時間が許す限り火属性・聖属性の【ジエム】を作ったり、呪怨耐性のある【暗黒騎士】についてレベルを上げたりと死霊術師上がりのアンデッドに対する対策を整えたのだ。

まあ、ジョブの【暗黒騎士】に関しては光と闇が合わさって最強に見えるようなジョブ構成だから……ではなく、条件が【聖騎士】と少し

被っていて条件達成が楽そうだったから以前から少しずつ就職条件を満たしていたのでどうにかなったが。

……それに以前からネリルと作っていた『新しい戦力』もようやく形になったしな。お陰で準備自体は現在出来る限りで万全である。

「まあへU B M〓がいる時点で只の旅行にはならないでしょうよ。……

そう言えば、ネリルちゃんは今の話で何か気になった事はあった？」

「んむー？……その話だけでは特に何も分からのー。【冥王】や

【死霊王】キング・オブ・コーパス辺りがアンデッドモンスターに成るのは良くある話じゃ

しな」

そんなミカの問題に対してパフエを食べ終わったネリルは興味なさそうにそう言った……ちなみに話に出て来た『魂喰らい』についても何も知らないらしい。曰く『別にワシはへU B M〓とかの事を何でもは知らん、知つとる事だけじゃ』との事。

「そもそもワシって死霊術はあんまし得意ではないからのう。配下が必要なエレメンタルかゴーレムを作成すれば済む話じゃつたし……一応、知識としては持つているし出来ない事もないが実戦で使えるレベルではない（ネリル基準）」

「そうか、何か気付いた事があつたら教えてくれ。……ミカの『直感』に反応があつたって事は姫乃にも現実側リアルで電話して伝えておいたし、詳しいことは向こうと合流してから『お話中失礼します主人、9時の方向から敵の気配です』……『レイライン・サーチ』」

そうして駄弁りながら馬車を牽いているとヴォルトがそんな注意を飛ばして来たので、俺は直ぐに地脈を介して周囲の様子を把握するスキルを使うとたしかに左側の森からここらでは珍しい亜竜級ぐらいのモンスターがこちらに向かって来るのが感じ取れた。

……ちなみにこの『レイライン・サーチ』は少し前の【ヴァルシオン】による『スキルガチャ刃技才集』によって取得したスキルで、多分【クルエラ

ン・コア】が使っていたスキルを引いたんだろう。

「敵ですか兄様」

「ああ、亜竜級のモンスターっぽいのがこつちに向かって来る。多分魔蟲系っぽいかな」

「亜竜級以下だとヴォルトが牽くこの馬車を襲おうとは思わないからね」

『私が出している気配に引き寄せられたみたいですね。意図的に気配を出して雑魚を散らすのは上手くいっただんですが……』

実はヴォルトが新しく覚えた《気配操作》スキルの応用で意図的に亜竜級モンスターの気配を出して雑魚を散らしていたのだ……お陰で道中はモンスターが寄り付かずに楽だったんだが、こんな風に亜竜級に戦いを挑む好戦的なモンスターを引き寄せる事になった様だ。

「まあしゃーない、亜竜級以上が珍しいところで遭遇したのは運が悪かっただけだ。……それに「ゴイツ」の実践テストには丁度いいだろうしな。雑魚相手はやったが亜竜級モンスターと戦わせる機会はなかったし。ここは俺に任せてもらう」

「ふむ、そういえばそうじゃの。「ソイツ」はまだ試作段階じゃからな」

そう言いながら俺は馬車を降りて他を下がらせながら右手の「ジュエル」を掲げ、その直後に向かつて来た敵はようやく森から飛び出て来てこちらでも目視出来る距離に現れた。

『K I T T I K I T T I K I T T I I I I I!!』

デミアドラクストライクビートル

「【亜竜突撃兜虫】か、確か魔蟲系の中でも好戦的でツノによる突撃を得意とするんだっただか」

現れたのは昆虫凶鑑の見開きに乗ってそうな「テンプレ日本のカブトムシ」をそのまんまデカくした感じのモンスター「亜竜突撃兜虫」であった。

……まあ、向かい合った瞬間に《殺気感知》と《危険察知》に反応があったので俺は即座に「ジュエル」を起動し、その直後【亜竜突撃兜虫】は背中の中を翼を広げて突っ込んで来た。

『K I T T I I A A A A A!!』

「《喚起》……【クルエラン・プロトゴーレム】」

『……G O O O O O O!!』

そして【亜竜突撃兜虫】のツノが俺に当たる寸前、【ジュエル】から呼び出された三メートル程のゴーレムがそれを受け止めたのだ……

「これこそが【巨像職人】にまで転職した俺とゴーレム作成の達人であるネリルが合同で作り上げた【クルエラン・プロトゴーレム】である。」

「……ふむ、亜竜級モンスターの突撃を受け切れるだけのSTRとENEは問題ないか」

「前衛役として作ったもんじゃからの」

『GOOOOO!!!』

『KITIIII!?!?』

俺とネリルがそんな事を言いながら観察している間にも、【クルエラン】は受け止めた【突撃兜虫】を掴んでそのまま投げ飛ばした……さて、次は動作確認含めた戦闘テストだな。

……では見せて貰おうか、新しいゴーレムの性能とやらを（作ったの俺らだけだ）

【クルエラン・プロト】

□王都アルテア 【巨像職人】^{コロツサス・マイスター} レント・ウイステリア

「……うん、とりあえずこれで一先ず完成かな」

「まあ、試作品件データ収集用としてはこんな物じやろう」

『……………』

俺達がへニツサ辺境伯領へ向かう少し前の事、王都にあるレンタ
ルアトリエ（金を払えば一定期間使わせて貰える生産施設の事）の一
つで俺とネリルは目の前に鎮座するようやく完成したゴーレムを見
て達成感を抱きつつ一息吐いていた。

……尚、ゴーレムを作ろうと思ったのは手に入れた特典武具【クル
エラン・コア】の未開放スキルの解放条件が “ゴーレムの作成” に纏
わる物だという事もあるのだが、もう一つネリルからのとある提案が
あつての事だったりする。

「それでネリル、コイツ自身はモンスターのゴーレムなんだよな？」

……その割には動かないが」

【テイマー従魔師】でもある主人殿なら “アイテムとしてのゴーレム” よりも
“モンスターとしてのゴーレム”の方が相性はいいじやろうからそ
うしておるよ。……動かぬのはまだ『コア』と『躯体』の接続が馴染
んでおらんからじやろ」

『コア』ね……以前のへクルエラ山岳地帯へでゴーレムに入れた【魔
神石】とやらを改造した物だったか」

「うむ、あの時の【魔神石】は魔力を中途半端に使ってしまったおつた
からの。だから外部魔力タンクとして使うより、一時的にゴーレムの
コアにする術式をベースに本格的な『ゴーレムコア』に改造した方が
良いかと思つてな」

ネリル曰く、この『ゴーレムコア』とは文字通りゴーレムの中枢部
分になるパーツの事であり、今回は使いかけの【魔神石】をそこに残つ
た魔力で改造して “器” とし、その中に何処から取ってきた精霊を
詰め込んでゴーレムの自立思考を行う核及び魔力源として再構築し
た物だとか。

……なので、このゴーレムは普通のゴーレムと自然系エレメンタルが融合した“ハイブリッドゴーレム”みたいになっっているらしく、ステータスの内HP・STR・END・AGIなどの物理ステータスは躯体部分、MPに関してはコアのエレメンタルが基準となった数値になっっているのだから高いステータスを誇る様だ。

「……しかし、MPと比べると物理ステータスは少し低いか……躯体の方は主に俺が担当したからなあ。まだゴーレム作り関係のスキルレベルが低いのが原因か」

「だからこの『ゴーレムコア』じゃよ。……コアを別のより高性能な躯体に付け替えれば戦闘経験を積んだ思考はそのままにステータスを強化出来るし、躯体と核が分かれているお陰で躯体側を自由に改造出来るしな」

ちなみに躯体の方の素材は〈墓標迷宮〉の植物階層で取ってきた【ウッドゴーレム】の素材をエドワードに頼んで金属化して貰った【樹木戦像の鋼】を素体に、ネリルが【クルエラン・コア】戦の戦利品である『古代伝説級金属と対魔法金属の箱だった物』の一部を加工して手足と胴体に鎧の様に纏わせる様に融合させた物になる。

元はゴーレムだった【樹木戦像の鋼】を使ったお陰でSTR・AGIなどのステータスは上がり各種動作もより俊敏に、古代伝説級と対魔法金属の積層装甲を組み込んでいるのでHP・ENDが上がり『魔法耐性装甲』のスキルすら組み込めたとネリルは言っていた。

また、ゴーレムの見た目は身長三メートルで手足が太く、茶色の木目の様な色合いな金属の身体とその胴部・頭部・手足に鈍い銀色をしている金属の装甲が張られていると言った無骨な外観で、いかにも『試作型』といった感じで個人的には好みな感じだ。

「……それに、主人殿の手が入らなければ特典武具のスキルは使えんじやろう?」

「まあね。……この『クリエイション・ゴーレムアーミーズ』を活かすためにはもう少し各種スキルレベルを上げる必要があるか」

そう言いながら、俺は今も履いている焦げ茶色のズボン——特典武具【創像地衣 クルエラン・コア】を軽く叩いた……この【クルエラ

ン・コア」の新しく解放されたスキル《クリエイション・ゴーレムアーミーズ》は二つの効果を内包したスキルである。

まず一つ目の効果は『人型のゴーレムを作成した場合の品質及びスキル効果を約二〜三割程上昇させる』という物だ。お陰で人型に限れば今の俺でも素材を厳選してネリルの保持があれば亜竜級相当のゴーレムをどうにか作る事が出来ている。

……そしてもう一つの効果は『自分が作った人型のゴーレムに自身が習得しているスキルを付与・習得させる事が出来る』というものだ。「とりあえずこのゴーレムには騎士系統の《聖騎士の加護》とか《ダメージ軽減》と言った前衛壁役に向いたスキルと、高いMPを活かすために【付与術師^{エンチャンター}】や【魔法剣士^{マジックソードマン}】から自己強化系のバフ魔法を取得させてみたが」

「パッシブスキルの方はともかく、アクティブスキルはどの程度使えるかはまだよく分かっておらんからの。……その為の自立思考付きコアであるし、スキル構成がダメなら躯体だけ作り直す事も出来るしな」

ちなみにゴーレムに付与出来るジョブスキルの種類や数は作成したそのゴーレムの出来で変わってくるらしく、少し前に練習がてら適当な素材で作った物には下級職のスキルをスキルレベルを下げた状態で一つ二つしか付与させる事は出来なかったが、このゴーレムに付与出来るスキルには上級職の物も含まれておりスキルレベルもそのまま五つ以上付与する事に成功している。

……後、多分だが付与出来るジョブスキルの種類とかはゴーレムの性質にも影響を受ける感じだと思われる。氷で出来たゴーレムには火属性魔法スキルは付与出来なかったし。

『……GO……』

「おっ？ どうやら『コア』と『躯体』が馴染み終わったみたいじゃな」
そうこうしている内に目の前に鎮座するゴーレムは僅かに唸りを上げながら身動きし始めた……ようやく『コア』と『躯体』の接続が終わった様だが……。

『……GGGN……』

「……生物系のゴーレムは作成した時点で作成者に使役されている設定になっているが、内部の精霊を含めてコアを作ったのはネリルになるからこの場合はどうなるんだ？」

「そこは心配要らぬよ。きちんと主人殿に従属する様に“調整”しておるし。……内部に入れた精霊もあの「クルエラン・コア」の“残滓”の様な物じゃからゴーレムの駆動も問題無い筈じゃ」

「いやちよつと待て、それは聞いてないぞ」

確かに中に入れる精霊にはゴーレムと相性の良いものを選んでおいたとは言つてたが、俺が倒したへU ユニーク・ボス・モンスター B Mである「クルエラン・コア」由来のモノだと言うのは初耳なんだが……かなり理不尽な方法でぶつ倒したし反逆とか起こされるんじゃない……。

「まったく主人殿は心配性じゃのう。……そもそも「クルエラン・コア」由来と言つても【魔神石】に一部残つていた残留思念とヤツが収められていた例の箱を触媒に《精霊紹介》を行っただけじゃから怨念とかは無いぞ。お陰でゴーレムの操作に長けた精霊を呼び込めだし、ちゃんと契約で縛つておるぞ」

「なら良いんだが……ネリルって意外と凝り性だよな」

「前世では人間と技術交流してみたり、そこで得た技術を地下深くで数十年ぐらい弄り回すぐらいにはな……おつと、接続も終わった様じゃな。調子はどうじゃ？」

『GO』

そうして話している間にゴーレムは完全に目覚めたらしく、ネリルの問いに何か答えらしき唸りを上げてからはただジツとしていた……出来を確認する様にネリルがペタペタと身体を触つても動かないし、特に悪意や害意も感じないのでどうやら俺の懸念は杞憂だった様だ。

……とりあえず俺も《看破》などを使ってゴーレムのステータスを確認していったのだが、突然ゴーレムは俺に向けて控えめに唸りを上げて来たのだ。

『……G O G O G O……G O G O』

「うおつ……ええと、何か言いたい事があるのか？ すまんがゴーレ

ム語は履修してなくて……」

「そもそも発声機能は積んでおらんから唸りしか上げられんのじゃが……まあ、コアの精霊の意思を読み取るぐらいは出来るのじゃがな」
そう言ったネリルはゴーレムに手を当てながら目を瞑ってコアに宿る精霊の意思を読み取ろうとしていった……一体、俺に何が言いたいのか。

「……ふむふむ、成る程のう。……主人殿、このゴーレムは忠誠を誓う代わりにへ山岳国家クルエラへの名を絶やさないう様にしたいそうじゃぞ。多分「クルエラン・コア」の未練の様なモノが残っておった様じゃな」

『GO』

「……成る程、そういう事もあるのか」

ネリルは「クルエラン・コア」をかつてへクルエラ山岳地帯にあつたへ山岳国家クルエラへが作った魔道具が変質した物ではないかと言っていたし、おそらく国を守る為に作られたであろう魔道具の未練としては納得のいく内容か。

……しかし、「名を残す」と言われてもどうするか……そうだな。
「それならお前の名前を「クルエラン・プロトゴーレム」としておく。まだ試作段階だから「プロト」の文字が付いているが、今後改良を加えていっても名前の『クルエラン』に関しては残し続けて、呼び名もクルエランにする事を約束しよう……どうだ？」

『……GOー』

『それで良いです。ありがとう、今後とも宜しく』だそうじゃ。……ふむ、思ったより自立意思の発達が早いの」

……そういう事があって俺の従属モンスターに新しく「クルエラン・プロトゴーレム」が加わったのだった。



『GO——!!!』

『KIISYA——!!!』

そうして仲間になったクルエランは【デミドラグストライクビートル亜竜突撃兜虫】の突撃をほぼノーダメージで受け止めて、そのまま投げ飛ばしていた……尚、彼は「クルエラ」の名前にこだわりがあるので個別の名前は要らず正式名称で呼んで欲しいと言われている。

……古代伝説級金属は一部に薄くしか使われていないとは言えE
NDは4000ぐらいあるし、《聖騎士の加護》を始めとする防御系ス
キルと合わせれば亜竜級モンスターの攻撃も受け止められるか。

『GOO!』

「……ふむ、アレは《フィジカルブースト》じゃな。魔法系アクティブ
スキルも十分使用可能と」

『KISSYA!!!』

「ただ強化して殴り掛かったは良いが普通に避けられてるな。AGI
が低い事もあるがそれ以前に格闘技術面が余り高くないか」

自身のSTR・END・AGIを上昇させる即時発動可能な魔法を
使ったクルエランは【亜竜突撃兜虫】に殴り掛かったが、大振りなそ
の一撃は咄嗟に飛び退った相手には当たらなかつた。

……まあ、ゴーレムはAGIが低かったり動作自体が余り精密でな
い傾向があるのが普通だからしょうがないけどね。前衛壁役として
耐久性特化に作ったから尚更。

「戦闘技術に関しては自意思が経験を積みばなんとかなるじゃろ。
……いつそ攻撃魔法か術系アクティブスキルでも覚えさせるか？
まだ容量はあつた筈じゃが」

「攻撃魔法に関しては俺とネリルがいるからな、これ以上増やしても
余り意味はないだろう。……それより前衛壁役に特化させるのが良
いと思うがな。後はセンススキルでも習得させるのはありか」

ただ、俺が覚えてるセンススキルは《剣技能》《盾技能》ぐらいだか
ら、武器とか使いにくいゴーレムには向いてないか……いつそ格闘系
のジョブでも新しく取ってみるかな。五体があれば使えるから俺の
サブウェポンとしても問題ないだろう。

……そんな品評を俺とネリルがしている間にもクルエランは【突撃
兜虫】の角による打撃にも一切怯まず、逆に攻撃を受けながらカウ

ター気味に打撃を放つ事で相手に当てる事に成功していた。

『GOO——!!!』

『KISYA!??』

「おお、今のは上手いな。これは格闘系スキル習得も視野に入れるか」
「内包した精霊はゴレム運用に長けておるから、それも悪くない
じやろうて。……ただ、攻撃系スキルは持つとらんからそこそこ高い
ENDを持つ相手には致命傷を与えられん様じゃ」

確かにクルエランの拳は当たってはいるが単にSTR任せの攻撃
だからか、相手の甲殻に阻まれてそこまでダメージを負わせられない
様だな……まあ、前衛壁役としては十分な性能があると確認出来たし
そろそろ終わらせるか。妹達も暇そうにしてるし。

「それじゃあ最後に連携の確認でもしておくか。……ヴォルト、アイ
ツの動きを止めろ」

『了解……《サンダー・クロウラー》!』

俺の指示を受けたヴォルトは雷を纏わせた蹄を地面に叩きつけな
がら地を這う雷撃を【突撃兜虫】に向けて放った……死角である真下
からの攻撃に相手は反応出来ず、その電撃によってダメージを受ける
と共に一時的に動きが止まってしまった。

『K I I E!??』

「クルエランは俺の射線が取れる位置までそいつを殴り飛ばせ！ ネ
リルは俺に火属性強化」

『GOOO!!!』

「あいあい」

そうして俺は魔法の準備をしながらそんな指示を出し、それを聞いた
クルエランは動きが止まった【突撃兜虫】を真横に殴り飛ばした
……ふむ、ちゃんと俺と【突撃兜虫】の間に誰もいない位置まで飛ば
してるな。

……実はワザと曖昧な感じの指示を出してどのくらい対応出来る
か見たんだがほぼ満点の回答だ。ここまで判断出来るとは自立意
思って凄いな。

「ほれ《フレア・ブースター》じゃ」

「助かる……《魔法威力拡大》《魔法射程延長》《ブレイズ・バースト》！」

『KISSYAAAAA!?!』

殴り飛ばされた【突撃兜虫】はそのまま地面に叩きつけられ蓄積したダメージによって動きは鈍り、その隙を突いて俺はネリルの火属性強化魔法を含む各種魔法強化スキルで威力を増幅させた豪炎の奔流ブレイズ・バーストを相手に叩き込んで焼き尽くしたのだった。

……そうして戦いを終えたクルエランがこっちに戻って来たので、ちよつと劳いの言葉と妹達への紹介とかもしておこうか。

『GO』

「ああ、よくやってくれたクルエラン、正直想像以上だったよ。……という訳で、新しく俺の手持ちになった【クルエラン・プロトゴーレム】君だ。みんな仲良くする様に。

「お兄ちゃん、ゴーレム作って戦力に加えたのは聞いてたけど、また凄いの作ったね」

「えーと、宜しくお願いしますのです」

「パーティー的には前衛壁役なのかな？」

高性能なゴーレムを作った事は妹達にも言っていたが、クルエラン自体をキチンと見せるのは初めてだったから……興味深そうにペチペチとその身体を触るミカや、礼儀正しくお辞儀をするミュウに対してもクルエランは特に嫌がる様子を見せないし、とりあえず初顔合わせは上手くいったかな。

「クルエランは見てもらった通り前衛壁役だから後衛のネリルの護衛とかで出す事が多くなるかな。俺達のパーティーには明確な壁役がいなかったから、これで戦術のパターンも増えると思う」

「うんそうだねお兄ちゃん……クルエラン君は今回も活躍しそうな気がするよ」

「それは良かった。……出番が来たら呼び出すから、それまでは【ジユエル】で待機していてくれ。《送還》リ・ユール」

『GO』

いつも通り意味深な事をいうミカに対して頷きつつ、俺はクルエラ

ンを【ジュエル】内に帰還させた……AGIはそこまで早くないから移動時には置いてけぼりになりかねないしね。

……そんな感じで新メンバーとの顔合わせを終えた俺達は再び「サウダーテ森林」を進んで、一路「ニツサ辺境伯領」へと向かっていったのだった。

レジェンダリアより来る者達

□ ペルシナ・デミテル

……懐かしい夢を見ていた。

『いいかいペルシナ、私達【死霊術師】ネクロマンサーは死者に寄り添い、彼等の未練を晴らし、その魂が怨念に侵されぬ様に成仏させる事を役目とするんだ。他にもアンデッドの退治や怨念溜まりの対処もあるし、むしろそちらの方が仕事としては多いのだが、だからこそ【死霊術師】としての本来のあり方を忘れてはいけないよ』

『はい、師匠』

……この会話は私がまだ師匠の元へと来たばかりの頃だったか……この頃の私は、様々な自然干渉魔法に長けたエルフの母とレジェンダリア有数の天属性の攻撃魔術師である父の間に生まれたハーフェルフなのに、その二人の才能を一切受け継がず死霊術師系のジョブにのみ適正があつて死霊術師ギルドに通わされていた事でやさぐれていた。

……まあ、父方の祖父は生前腕の立つ【死霊術師】であり私は隔世遺伝的にその才能を受け継いだのだろうし、死霊術師ギルドに通わせられたのも父と母なりに私の将来の事を考えてくれていたのだと今なら分かるが、当時の私は父と母がモンスターとの戦いの果てに帰らぬ人になった事もあつて心配してくれた死霊術師ギルドの面々に当たり散らす様な愚か者であつたのだが。

『ふむ、君がピスティアの娘か。……私は【冥王】キング・オフ・タルタロスハイデス、君の母親であるピスティアの親類だ。今日から私が君の面倒を見る事になった』

『え……？』

……そんな時にいきなりこの世界における超越者である超級職スベリオルジョブの人間が現れたのだから、思わず当時の私が間抜けな声を上げてしまったのも仕方のない事だろう。

確かこの時の師匠は《ネクロ・オーラ》の応用でこつちを威圧する雰囲気を出していたし……後から聞いた話だと『やさぐれている相手

なら初手で威圧するのが手っ取り早い』と言っていたか。

……無論、死霊術師ギルドの方も死霊術師の最高峰である【冥王】に文句をつけられる訳がなく、むしろ超級職の指導を受けられるのだからと大歓迎ですと私は師匠の元へと送り出されたのだが。

『ほう、やはりスジがいいな。かつて共に研鑽を積んだジュリオの事を思い出すアンデッド捌きだ』

『……祖父の事を知っているんですか？』

『ああ、君の祖父とはかつて共に死霊術師として研鑽を積んだ中だな。君の父と母の馴れ初めなども知っているよ』

……衝撃的なファーストコンタクトとは打って変わって師匠の元での生活は実に穏やかなものだった。昔の両親達についての話も色々と聞く事が出来て、それが改めて両親が私をどう思っていたかを考えさせられる事にも繋がり徐々に私は更生していったのだ。

『ペルシナお姉ちゃん！ 一緒に遊ぼう！』

『……はあ、分かったわよ』

『ふふふ、いつもありがとうねペルシナちゃん』

……それから師匠の奥さんと娘さんとも仲良くなってもう一つの“家族”として思えるようになって、それにより過去の自分の身勝手さを理解出来るぐらいに成長も出来た。

『成る程、死霊術師ギルドで働きたいと』

『はい。……昔あそこには色々と迷惑を掛けてしまいましたし、何より師匠の下で学んだ死霊術を祖父の様に誰かの為に使いたいと思つて』

『そうか……成長したな、ペルシナ。いいだろう、行ってこい』

……それからは師匠の名に恥じない様にギルドで働き続け、いつしか私は死霊術師ギルドのエースとして名を馳せる様になった……まあ、私がギルドに来たお陰で余り首都に寄り付かなかった師匠が偶に訪れる様になった事の方がギルドにとっては重要だったかもしれないが。

……そんな大変だけど幸せな日々が続くと私は心の何処かで思つてしまっていたが、父と母が死んだ様にこの世界はいつも思いも寄ら

ぬカたちで悲劇を運んでくるのだった。

『……………』

『……………』

……あの時、まるで時が止まったかの様に静まり返ったあの村で、目の前で魂が抜けた様に奥さんと娘さんの死体を抱えて蹲る師匠に私は何も言えなかった……その時の師匠の顔が、まるで感情の全てが無くなった「真性のアンデッド」にでもなったかの様なその顔を見てしまった私はなんと声をかければいいのか分からなかったのだ。

……その後の私は師匠が村を離れる依頼を議会から持って来てしまった負い目もあつて彼とは疎遠になり、この事件から目を逸らす様にギルドの仕事に邁進した。同時期に「マスター」の急速な増加が起きた事もそれに拍車を掛けたのだろう。

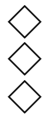
……或いは伝説の「マスター」なら村を襲つたと思われる『魂喰らい』を見つけ出せるかもしれない、そうすればもう一度師匠と……などと思ってギルドに働きかけて「マスター」の取り込みを行ない、いくらかの（性癖はともかく）有用な協力者も得る事に成功はした。

『冥王』ヘイデス氏が「アムニールの枝」を奪う為に首都の保管庫を襲撃しました。その際に彼は「ユニーク・ボス・モンスターU B M」になつており……』

『……………へ？』

……だからこそ、ある意味自分とは違う至高の存在とさえ思つていた師匠がそこまで追い詰められていた事にまるで気が付かなかつたのだ……結局、私は大切な人達の為に何も出来ずにいる単なる無能でしか無かつたという訳である。

……だが、だからこそ、師匠が教えてくれた死霊術師としての在り方に則つて、今度こそ私はこの手で師匠を……。



□レジェンダリア国境地帯 グレイト・マギアーチャー【大魔弓手】ひめひめ

「……ペルシナさん、ペルシナさん、もうすぐニッサ辺境伯領に着きますよ」

「……んん……すみません、どうやら少し眠ってしまったっていた様です」
レジェンダリアからアルター王国へと向かう山岳地帯の街道、そこを馬車に乗った私達パーティーとペルシナさんは進んでいた……この世界の馬車は魔法的な加工で《振動軽減》や《重量軽減》があるからこんな山道でも問題なく移動出来る上に振動も殆ど無いから寝る事だつて出来るのよね。

……まあ、今回の馬車は引いている『馬』も含めて死霊術師ギルドが用意してくれた、山道や林道すら余裕で進める結構な高級品だからと言うのもあるけど。

「大丈夫？ ペルシナちゃん。最近疲れてるみたいだからもつと寝ていいのよ？」

「いえ、大丈夫ですシズカさん。……それにこの馬車を動かしているのは私のアンデッドですし、余り長い時間目を向けていない訳にも行きません……《シャイン・レジスト》」

馬車の中でふよふよと浮きながらペルシナさんに心配そうな声を掛ける【幽霊術師^{ゴーストマンサー}】のシズカに礼を言いつつ、彼女は馬車を引く青ざめたアンデッドの馬【アンデッド・ストライクホース】に再度光属性耐性付与魔法を掛けた。

……今は日中だから何の対策も無いとアンデッドのステータスは大幅に下がるからね。あの馬にも光属性耐性・日光耐性の使役アンデッド用アイテムを装備させているらしいし。

「そういえばひめひめさん、なんかアルター王国側の知り合いのヘマスタ―に声を掛けたと聞きましたね」

「そうよアリマちゃん、ちよつと頼み込んで今回のクエストに協力して貰う事にしたのよ。……ああ、人格面でも実力面でも申し分無いから、その辺りは安心してね」

「まあ確かに、今回のクエストを俺たちのパーティーだけで達成するのは困難だろうからな。折悪くレジェンダリアにいる他のヘマスタ―やティアンは捕まらなかつたし」

でいふえ〜んど君の言う通り、私があの子三兄妹に援軍を頼んだのは今回のクエストに協力してくれそうな実力を持ったレジェンダリア

の〈マスター〉が悉く都合が付かなかったからなのよね。

……と、私達がそんな話をしていたら馬車の隅っこに座っていたアリマちゃんと同じぐらいの年頃の少年——私のパーティーメンバーである〈マスター〉の一人【白氷術師^{ヘイルマンサー}】クロード君が不満そうな声を上げた。

「でもよー、そんな援軍なんて連れて来たら俺達の分の報酬が下がるんじゃない？　そもそも伝説級〈UBM〉なら俺たちだって倒してるし、その知り合いってのが使えるか分からないし」

「こらクロード、今回のクエストで援軍を呼ぶ事は既に決まっていたでしょう？　今更文句を言うんじゃないよ」

「でも姉ちゃん……」

そんな彼を咎めたのは隣に座っている金髪の女性〈マスター〉——クロード君の実姉である【大戦^{グレイト・ウォリアーモンク}僧兵】クラリスさんであった……この二人はクロード君が変態^{ロリシヨタ}供に付かず離れずの距離で粘着されて困っていた所を、私が（変態全員の脳天を撃ち抜いて）助けた事が縁でウチのパーティーに入ってくれたのよね。

……まあ、援軍の事に関しては今回のターゲットである「ハデスブランド」の事を聞いた際に『このパーティーメンバーじゃちよつとキツイ』と思って私が無理にねじ込んだからねえ。不満が出るのもしようがないか。

「二応、今回援軍を頼んだ三人の〈マスター〉は今まで五体の〈UBM〉と戦ってその内四回ぐらいMVPに選ばれてるらしいから実力は本物よ」

「うさんくせえ……幾ら何でも盛りすぎだろ。俺らでも今まで〈UBM〉に勝てたのは「ドラグリーフ」一回だけだったじゃんか。まだデンドロ口始まってからこつちの時間でも半年がやつと過ぎたのに、〈UBM〉にそんなに出会える訳がないじゃん」

「クロードー」

んんー、実際あの三人の事を知らなければそう思うのも仕方ないわよねえ……巫女である私の視点から言わせてもらおうと『才ある者』『選ばれた者』には「運命」が収束する性質があったりするから、そうい

う人達にはトラブルが多く舞い込んで来る事はまああるんだけど。

……さてどう説明したものかと悩んでいると、ずつと話を聞いていたペルシナさんから助け舟が出された。

「クロード君、今回の援軍に関しては私がひめひめさんとシズカさんに『ハデスブランチ』を確実に倒せる様に協力して欲しい』と頼んだのがきっかけです。当然報酬に関しても援軍の有無に関わらず当初の予定通りの額を支払います。……どうか、私の師匠を今度こそ終わらせる為に御助力をお願い致します」

「うぐ……」

「……………」

そう言つて真剣な表情で頭を下げたペルシナさんを見てクロード君は非常に気まずそうにして黙り込んでしまった……まあ、彼は自分の力でこの世界^{ゲーム}を冒険する事にこだわってる節があるから、いつものパーティーメンバーならともかく見ず知らずのへマスターを援軍にしなければならぬのが不満でちよつと口に出してしまっただけなのでしょう。

……それに対してもものすごく真剣な表情で答えたペルシナさん相手に居たたまれなくなつた事と、横から凄い怖い視線で睨みつけてるクラリスさんの事があるからこんな感じになつてると。

「……………」もう決まつた事に関して文句を言つたのは悪かつたよ。……でも、相手がアンデッドなら前の『ドラグリーフ』の時みたいに、初手ひめひめの必殺スキルでなんとかなるんじゃない……」

「あの戦術は事前には何時間かチャージしておく必要があるから突発的な戦闘には対応して無いのよ。『ドラグリーフ』の時は相手が余り動かず自分の縄張りに籠るタイプだったから使えた戦術だし」

「それに忘れたのクロード。ひめひめの必殺スキルが直撃しても『ドラグリーフ』は完全には仕留めきれずに、その後10分くらい私達が総掛かりで攻撃してようやく倒せたつて事を」

以前『ドラグリーフ』を倒した方法は戦闘開始三時間前に私の必殺スキル《^ア天地一切^マ大祓^テ之^ス矢》を使って頭上に《^ア炎勢^マ之^ス矢》ベースの光球を展開、そのまま相手の縄張りまで行つてから、クロード君の『ス

ロウス」によるAGIデバフとでいふえくんど君の「パラスアテナ」で相手を取り囲んで動きを封じた後で上から最大威力の矢を落として溶鉱炉みたいに焼き尽くすってハメ技だったからね。

……アンデッドである「ハデスランチ」にも対アンデッド聖属性の《聖浄之矢》を使った必殺スキルなら勝算はあるんだけど、やっぱり事前準備が必要な戦術だから使えない状況も考えるとねえ。

「……ええ、師匠……「ハデスランチ」はあの「妖精女王」からも逃げ切ったレベルの相手ですから。可能な限り戦力は多い方がいいでしょう」

「相手がアンデッドのプロだと幽霊である私は不利になるしねー」

「アンデッドは精神系状態異常が効きにくい事も多いので、私も余り有利に戦える相手では無いです」

「光や聖属性が使える私やひめひめなら有利に戦えるけど、〈UBM〉を格殺出来るかどうかは怪しいわよ」

「あーもう！ 分かったよ！ 援軍が必要なのは理解したし、もう文句は言わないよ！」

うんうん、クロード君も納得してくれた様で何より（笑）……それにさつきログアウトした時に確認したメールに『美希ちゃんの「直感」に反応があった』と書いてあったし、多分私達が協力しなくても彼等だけで勝手に「ハデスランチ」の所に行くだろうからね。

「……皆さん、どうやらそろそろニッササ辺境伯領に着きますよ」

「ありがとうペルシナさん」

とまあ、私達がそんな会話をしているとペルシナさんが目的地への到着を教えてください……さて、三兄妹との合流に各種打ち合わせ、後は肝心の「ハデスランチ」の搜索とやる事は沢山あるからね。頑張ろうか。

到着！ ニッササ辺境伯領

□ニッササ辺境伯領 【戦棍鬼】 ミカ・ウイステリア （メイス・オーガ）

「はい、そういう訳でやって来ましたニッササ辺境伯領！ 姫乃さんはもう着いてるんだっけ？」

「予定ではこちらの時間で明日辺りに着くと言っていたが……後、こっちでのアバター名は『ひめひめ』と言うらしいから気を付けろよ」

あれから特に何かトラブルに会う（野生の （ユニーク・ボス・モンスター） UB M）が飛び出して来たりする）事も無く、私達はニッササ辺境伯領に到着していた。

……しかし、ここはレジエンダリアが近いからか亜人の数が多いね。ギデオンにも結構居たけどこっちは見た限りでも三割ぐらいがケモミミ生えてたりするし。

「ネットリテラシーには気を付けなければいけませんからね。それでは兄様、今日はどうするのですか？」

「今日はもう遅いからしばらくしてからログアウト。明日からの休日に向こうと合流して例の〈UBM〉を探す予定になってる」

「その辺りはちゃんと計算してるんだね。主にお兄ちゃんとひめひめさんが」

とりあえず夕飯は向 （現実） ところで食べ終わってるので、デンドロ側時間で後10時間ぐらいはログイン出来るからその間は各々観光でもしていよう、ついでの例の〈UBM〉の情報も少し調べようとなってその場は解散となった。

……本当に三倍時間は便利だよねー。学校のある私達でもちよつとした空き時間で長くゲームが遊べるのは最高だと思いましたー（小並感）

「さて、私は （直感のままに） いつも通り街を回ってみるかな。何かあるにしてもこれが一番早いしね」

まずは観光しつつ出店とかを冷やかしに行こうかな。〈墓標迷宮〉籠りでお金には余裕があるし、何か面白そうとか使えそうな御当地アイテムでもあれば買っておこうかな。



「はいお嬢ちゃん、【ジエムー《マナ・ディフュージョン》】三つと【高濃度除草剤】と【高品質聖水】がそれぞれ五つづつだ」

「ありがとうねおじさん。これはお代だよ」

「へい毎度あり……しかし、へアクシデントサークルへ対策の空間中の魔力避けアイテムに、対植物系モンスター用と対アンデッドモンスター用アイテムとは、これからレジエンダリアにでも行くのかい？」
「今はそんな予定はないかな。……ただ何と無く必要そうだから買っただけだし」

訝しげな表情を浮かべる魔道具屋のおじさんに礼を言いながら、私は買ったアイテムをアイテムボックスに収めてその店を後にした……まあ、相変わらずの「直感」が『これこれこういう物を買った方が良い』と告げて来るので買っただけなんだが。

……どれも結構な高級品だったので数は揃えられなかったしそれなりの出費にはなったが、『このレベルじゃないと意味がない』と出たからしようがないよね。

「ふむん、一通り見て回った範囲だところではレジエンダリア産っぽい高性能なマジックアイテムを多く取り扱っているみたいだね。『レジエンダリアから取り寄せました！』あのレジエンダリアでも使われてるマジックアイテム！』みたいなポップが沢山あったし」

ちなみにデンドロの《真偽判定》はこんなポップにも対応しているので、嘘を書いてもすぐに見破れるから殆ど本当の事しか書かない模様……尚、書いた人間が本当だと思っていれば《真偽判定》には引つかからないので、元から商品が偽物で店員が気付いてないとかなら偽りの紹介文もあり得るんだけどね。

……まあそんな事はどうでも良い話ではあるんだが、この街を一通り歩き回って見ても件のへUBMへに対する「直感」の反応は買い物に纏わるモノだけだったね。

（つまり例のへUBMへの知っておいた方が良い情報とかはこの街には無い、情報がこの街に知られない様に目立たず潜伏しているという

事。……私の「直感」ではこの街自体へそう遠く無いうちに不幸が襲い掛かるって出ているんだけどね）

具体的に言うと、今回の案件を解決出来なかった場合はこのニッサ辺境伯領が『半壊』ぐらいはする気がするんだよね……城壁の上に魔方式の砲台とかを備え付けられていたり、かなりの防衛力を持ってそうなのこの街を半壊させるとか分かっていたけど今回の敵は大分厄介そうだ。

……問題は『この街が半壊する事』は分かるんだけど、それが『どんな相手で』『どんな手段で』そうなるのかが現時点ではさっぱり分からないって事なんだけど。

（まあ、私の「直感」が最終的に上手く行くにしても、その過程に与えられる導きが結構曖昧なのは今に始まった事じゃ無いから別に良いんだけどね……多分、レジエンダリア組が合流してからが本番な気がするし）

とりあえず今の私に出来る事は『来るべき時』に向けて出来る限りの準備をしておく事だけだろうと気を取直し、私はこの街でやっていたバザーに足を踏み入れた……こういういった出店には意外と掘り出し物が質のいい中古品とかがあったりするんだよね。

ただ、商品のチエックをちゃんとしている普通の店と違って偽物とか不良在庫も普通にあるから、本当にいい物を手に入れたければ『鑑定眼』と欲しい物に巡り合うリアルラックは必須とか言われてるけど。

「まあ、私は『鑑定眼』とかは持ってないけどね。一応【鑑定モノクル】はあるけど」

最も、私の場合は「直感」のお陰で『買った方が良い商品』が何と無く分かるから掘り出し物を見つけてるのは非常に得意なのである……装備枠特典が着ぐるみ武器とかで殆ど埋まってるから、そもそも普段使いで装備出来そうなヤツが少ないっていう別の問題があるけど……。

「ふーむ、これは【魔法カメラ】ね。中古品だけど性能は良さそうだし面白そうではあるから買っておこうか。……こっちは【オキシジェン・リング】、込めたMP分だけ装備者に酸素を供給するのね。一応買

おうか。……これは【幸運のお守り】ね。割と良くあるLUC値上昇アクセサリーだけど性能はそこそこだしデザインが気に入ったから買いで」

……ちなみにこれらの代物が今回の事件で役に立つとかは無いんだけど、せつかくだから現実では（お小遣いの関係で）余り出来ない衝動買いと言うのをやってみたかっただけである。

「ククク、ちよつといいかなお嬢ちゃん」
「ん？」

そんな風にはバザーを見て回っていた私だったのだが突然変な笑い声と共に声を掛けられたのでそちらを振り向くと、そこには全身真っ黒なフード付きローブを着ている一人の男が、フードの奥で怪しげな笑みを浮かべながら裏路地にあるゴザの上に座っていた。

……左手に紋章があるって事はへマスター〜みたいだし、ゴザの上には商品が並んでいるから多分バザーの出品者なんだろうけど。

「それで、何か用なの？」

「へえ、こんな怪しげな男に声を掛けられて平然としているとは、やはり俺が見込んだ通りの女みたいだなあ」

まあ、見た目や言動はあからさまに過ぎるぐらいに怪しいんだけど「危険」は一切感じなかったからね……ていうか自分が怪しい事自体は自覚あったんだ。

……そう私が少しの呆れと疑問を抱いていると、目の前の男は笑みを浮かべながら話を続けて来た。

「おっと、何の用か」だったが、俺は『闇商人』だからもちろん商売さ。今のお前に一番必要とされている物を売ってやろう」

「……うーん、そもそも闇商人って自称する様なモノじゃない様な気がするけど。というかそんな怪しげな格好で路地裏に店を置いても誰も寄り付かないでしょうに」

……実際、さっきからこの自称『闇商人』さんを見たバザー客は『あ、ヤベーやつだ』みたいな表情で遠ざかっているし。

「俺はこういう闇商人ロールプレイをしたいからデンドロをやっているんだからこれでいんだよ。……それにこの程度の怪しげな見た目だ

けでチャンスを不意にする程度の相手なぞ、俺の『客』には相応しく無いからなあ」

「いや、怪しげな格好の男に話しかけられたら逃げるのが普通だと思うけど」

「その割にお前は逃げなかったじゃないか。俺は見る目に関して自信があるからな。一眼でアンタが只のへマスターじゃないって事に気がついたぜ」

何やらドヤ顔で語る闇商人さん（自称）に対して常識的なツツコミを入れたらそう返された……うーん、彼から『危険』は一切感じないから悪意はないと思うんだけど発言はすごい自信満々なんだよね。初対面で私の『直感』に気がついた訳じゃないとは思うけれど……。「……じゃあ本題に入るけど、貴方は一体何を売ってくれるのかな？」「ほう、こつちの流儀に乗ってくれるとはやはり俺の目は正しかった様だな。……見たところアンタはメイス使いで戦闘に極特化してるみたいだからな。おそらくこの武器が合う筈だ」

私の問いに対して相変わらぬ不適な笑みを浮かべながら、闇商人さんはおもむろにアイテムボックスから『商品』を取り出した……そうして出てきた物は長さ約1メートルぐらいで白い持ち手に金色の星の装飾が散りばめられて、先端には大きなピンク色のハートが取り付けられた上でその周りに何やらカラフルでファンシーな装飾があらわれている一本のステッキだった。

……というか、完全にどっかのアニメの魔法少女が使ってるような、或いはそこらのオモチャ屋さんの女の子向けコーナーで売ってるようなプリティーフアンシーな見た目何ですけど……。

「今回オススメする消費はこちらの『ラブリーリリカルスターハートステッキ』で「あ、今回は縁が無かったって事で」ちよつと待って!?？」

私はそのふざけたステッキを見た時点でさっさと踵を返して立ち去ろうとしたのだが、闇商人（笑）さんが必死で呼び止めて来るので思わず足を止めてしまった。

……それに非常に、ひつじよくに不服なんだけど、私の『直感』が

このステッキを『買った方が良い』って囁いて来るんだよね……とりあえず話だけでも聞いてみますか。

「言っとくけど私は完全に物理特化なビルドだから、こんな魔法少女のステッキを渡しされても困るんだけど」

「それに関しては《看破》したから分かってる。……というか、コレは名前に『ステッキ』と付いてはいるが実際の武器種別は『メイス』だからな。しかも物理的ステに特化した」

「え？ 《鑑定眼》……うわ、本当だ」

闇商人さんに言われた通り「鑑定のモノクル」で見ると、確かにこの「ラブリーリリカルスターハートステッキ」の武器種は『メイス』となっており、装備攻撃力も1000以上ある完全な物理攻撃仕様であった。

「ちなみに装備スキルとしてMP消費で攻撃に強力な聖属性と【硬直】効果を付与する《スターハートアタック》、相手を殴る度にファンシーなエフェクトと効果音がなって周囲の弱めな呪怨系スキル効果やア宁德ッドを浄化するパッシブスキル《ラブリーリリカルエフェクト》、女性にしか装備出来なくなる代わりに高い破損耐性と盗難耐性を獲得する《魔法少女は砕けない》と言ったものを取り揃えている」

「……スキルの名前とか効果音とか凄まじくアホくさいのにスキルの効果だけはモノ凄く有用だね……」

悔しい事にこれから戦う「ハデスブランチ」はア宁德ッドだから相性は非常に良さそうなんだよね……まあ、本気を出したら着ぐるみ装備で暴れ回るから見た目を気にしてもしょうがないかな。

事実、コレを装備したところで私の外見は『ドラゴン風の着ぐるみがラブリーな魔法少女ステッキを振り回して敵を撲殺する』という、非常にシユール極まりない感じになるだけだし。

「しかし、こんなアホな装備を何処の誰が作ったのか」

「製作者はレジェンダリアの《魔法少女連盟》というクランだな。ちよつとした伝手で失敗作を安く買い取ったんだ」

「とりあえず何処からツツコミを入れたら良いのか分かんないけど、闇商人さんはレジェンダリアに居たの？」

「つい先日までな。……アソコだと怪しげな格好をするへマスター」が多過ぎて、俺程度の『闇商人ムーブ』では全然怪しく見えないから国を移る事にしたんだ」

何その地獄絵図……レジエンダリアから来るひめひめさん達は大丈夫だよ？ お兄ちゃんは『性癖がまともな者達を集めてパーティーを組んだらしい』って言ってたけど、ちよつと不安になって来たよ。

「うーん、魔法少女ロールプレイをネットゲでするぐらいならまだ普通の範疇だし、ミュウちゃんも仮面のライダー的ロールプレイをする人もいたと言ってたから大丈夫な範囲かな？ ……後、気になる事が聞こえて来たんだけど失敗作ってどういう意味？」

「(アソコには魔法少女衣装を着た筋肉モリモリマッチョマンの変態とかも居たけど言わなくていいか) ああ、失敗作と言ってもアイテムとしての性能面には一切問題はないぞ。……ただ、この【ステッキ】は克蘭内の『物理で戦う魔法少女も良いよね』勢が作ったんだが、完成した後には『コレ魔法少女の杖じゃなくて単なるメイスでは？』そもそも販促アイテムで殴るのは良い子のみんなが真似するかもしれない以上はアウトでは？」という意見が出て失敗作としてお蔵入りになったらしい」

「えええ……」

まあ確かに、もうそろそろ生誕四十年になる某『プリティでキュアキュアな肉弾系魔法少女モノの大御所』も販促アイテムを打撃武器として使う事は可能な限り避けてるから、そういう考えになるのもしょうがない……と思いついておこう。深く考えると頭が痛くなりそうだし。

「……んで、肝心のそのステッキのお値段は？」

「え!? マジで買う気なの……ああいや、値段に関しては100万リルで良いぞ」

「へえ、性能の割に随分と安いんだね」

何か一瞬間商人ムーブが崩れた気もするけど、性能と比べれば【ラブリーリリカルスターハートステッキ】がかなりの格安だったのでス

ルーしようか。

「ククク、俺は闇商人だからな。必要なモノを必要な人間に売るのが仕事なのさ。……それにここで売らないともう売れる気がしないし……」

「安さに免じて後半は聞かなかつた事にしてあげるよ……はい、コレ代金」

「ククク、毎度ありい……」

そういう訳で私は新武装「ラブリリーリカルスターハートステッキ」をゲットしたのでした……しかし、着ぐるみといい私の装備欄がドンドンネタに走った感じになって来たよねえ。性能だけを見て外見が異様な事になるのはRPG良くある事だけどさ。

……後、件の闇商人さんは私が商品を買った後に少し目を離れた隙に消えていた……最も光学迷彩で姿を消して走ってる事には気付いてたけど、多分闇商人ムーブのつもりみたいだからスルーしてあげたけど。

「さて、そろそろ時間だし今の買い物で所持金も残り少なくなつたら、今日はもうログアウトして明日に備えようか。……せっかく大金を払って買ったんだから活躍してもらわないと許さんよ」

そうして私は手に持った「ラブリリーリカルスターハートステッキ」にちよつと恨み言を言いつつアイテムボックスにしまい、お兄ちゃんとミュウちゃんに連絡を取ってからログアウトしたのだった……出来る限りの準備は整えたけど、どうなるかは明日の合流次第になりそうかな。

予期せぬ再開

□ニツサ辺境伯領 「暗黒騎士」^{ダークナイト} レント・ウイステリア

「それでお兄ちゃん、ひめひめさん達との待ち合わせはセーブポイントの前って事になったんだよね？」

「ああ、ちゃんと電話で『ニツサ辺境伯領のセーブポイントである大樹の前』と言っておいたから間違う事は無いだろ。……それに『ひめひめ一行ウエルカム』と書かれた立って看板も用意しておいたから合流も問題ない筈だ」

そういう訳で一晩明けた翌日、俺達はひめひめ^姫のパーティーメンバーとの待ち合わせ場所に指定したセーブポイントの前に集合していた。

……特に捻りのない待ち合わせ場所だがこういうのは分かりやすいのが良いだろう。俺が立て看板持ってるのと割りかし美少女な妹二人とミメーシスとネリルが、その辺で買ったパフェを食ってるから妙に目立ってしまったるがしょうがない。効率優先だ（強弁）

「……それで改めて確認しておくけど、皆んなは今回の一件でどのくらいの準備をしたの？ 私は昨日対アンデッド用のメイス（おそろく）を買っておいたけど。後は聖水と除草剤」

「俺はミカと違って必要な物が分かる訳じゃ無いからな。ひめひめからも詳しい話は合流してからって事になってるし。……一応、新戦力の「クルエランプロト」以外は聖属性魔法の「ジエム」を少し量産したぐらいだぞ」

「ワシも手伝ったしな。……後は主人殿との『連携』で使える手札を一つ増やしただけかの」

連携で使える手札……ああ、以前ネリルに言われて一度試したアレか。その時はとりあえず上手くいったんだが今の俺達だとそこまで劇的に強くなるという訳じゃ無くて、状況次第では十分使える手札の一つって感じだが。

「二人はちゃんと準備しているんですね。……私の場合はレベルもカンストして装備も更新出来そうなのは無かったので、余ったお金で

ポーションとか状態異常回復アイテムを買い込んだぐらいですが」

「僕も特に変化は無しかな。……そんな都合よく進化して新能力を獲得とかは出来ないし」

そんな少し申し訳無さそうな雰囲気と言ったのはミュウちゃんとミメーシスであった。……まあ、この二人は現行の装備とジョブ構成でほぼ完成されてるからな。

多少ジョブ構成を弄ったり装備を更新するぐらいは出来るだろうが、超級職の取得や「ミメーシス」の進化や特典武器の獲得ぐらいしないと劇的に強くなるのは難しいだろう。

「まああんまり気にする事は無いよミュウちゃん、ミメちゃん。……それに今の二人のままでも十分に強いし、今回の事件では二人の活躍が重要になる気がするしね」

「ありがとうございます姉様。……おや？　どうやら待ち人が来た様なのです」

ミカに励まされて雰囲気は元に戻ったミュウちゃんだったが、その直後に誰かが来るのに気が付いた様子でこの場所に繋がる道の一つの先を向いた。……言われた俺達もそちらを向くと、そこには雑多な格好をした七人の男女の姿があった。

その中の小柄なツインテールの少女が俺の持っている立て看板を見て『ええ……？』と言った表情をしている事や、その内の一人がまるで幽霊の様に宙に浮いていて尚且つリアルで見覚えのある顔立ちをしている事などから、彼等が待ち人である事に間違いは無いのだろう。

……そうしていると何故か彼等はこちらにどう声をかけようか悩んでいる素ぶりを見せていたが、そんな中で件のツインテ少女が溜息を吐きながらこちらへと歩いて来た。

「とりあえずこつちではレントだったわね。……ていうかその立て看板は何よ。目立ちすぎでしょ」

「昨日その辺の雑貨屋で安く売ってたから買ってみた、フレンドリーかつ分かりやすいだろう？　……それにしても随分盛った……じゃなくて削ったな」

「うっさいわ」

そのツインテ少女——加茂姫乃ひめひめを見下ろしながら俺はごく普通に話し始め、それを見た他の向こうのメンバーも少し安心した様子でこちらに向かって来た。

「今回は手伝つてくれてありがとうねえ、蓮……じゃ無くてレント君」
「お久しぶりですシズカさん。まあ暇でしたので」

「再開を喜ぶのは良いけどまずは自己紹介から始めましょう。顔見知りだけで話してたら事が先に進まないわ」

その中でも顔見知りであったシズカさんと軽く挨拶をした後、ひめひめの提案でまずはお互いに自己紹介をする事になった。

「じゃあ俺からか、ひめひめのリアフレで現在のメインジョブは【暗黒騎士】のレント・ウイステリアだ。こっちは俺のタイムモンスターであるネリル」

「どうもなのじゃー、モグモグ」

「その妹で【戦棍鬼】メイス、オウガのミカ・ウイステリアです。宜しくね！」

「同じく妹の【魔導拳】マジック・フィストのミュウ・ウイステリアとそのへエンブリオのミメなのです。宜し……ッ!?？」

「どうしたのミュウ……え?？」

……そんな自己紹介の最中にミュウちゃんが無言に驚いたかの様に顔を歪めたのだが、ほんの些細な事だったので気が付いたのは付き合いが長い俺とミカ、そしてそのへエンブリオであるミメーシスだけで、それ故に俺達の自己紹介を聞いた彼方は普通に自己紹介を返して来た。

「それじゃあ次はコツチね。レントのリアフレで【大魔弓手】グレイト・マギアーチャーのひめひめよ。ミカちゃんとミュウちゃんは久しぶりかしら。それでこちらが今回の件の依頼主である……」

「レジエンダリア死霊術師ギルド所属の【高位霊術師】ハイ・ネクロマンサーペルシナ・デミテルです。今回はこちらの「不手際」を解決する為に協力してください。さうで誠に有難うございます」

そうしてひめひめから紹介されたペルシナさんは非常に丁寧に挨拶をしてくれたので、こちらもしっかりと頭を下げた挨拶を返してお

く……話を聞く限り今回の依頼は彼女にとって重要なものであるだろうし、そんな依頼を信頼しているひめひめからの紹介とは言え初対面の人間が受けたのだから不安はあるだろうから丁寧に対応していただいた方がいいだろう。

……その甲斐もあつたのか、或いは気を使つて貰つたのかペルシナさんの雰囲気は少し柔らかいものになり、今回の依頼の報酬などの話を少しした後^{ゴーストマンサー}に他のパーティーメンバーの紹介に移つていった。

「じゃあ改めて【幽霊術師】のシズカです。こうして幽霊になつてるけど、これはへエンブリオによるものだから安心してね。パーティーではゴーストを使った支援担当よ。レント君とは久しぶりだけど妹ちゃん達とは初めましてかな」

「えーつと、じゃあ次は俺かな。【城塞衛兵】^{キャツスル・ガード}のでいふえ〜んどです。主に前衛での壁役をやつてます。今回は宜しくお願いします」

「……【白氷術師】^{ハイルマンサー}クロードだ。パーティーでは魔法による支援を担当してる。足は引つ張らないでくれよ」

「こら、クロード！ どうして最後に余計な一言を付けるのよ。……ウチの愚弟が済みません。私は【大戦僧兵】^{グレイト・ウォリアーモンク}のクラリスと言います。パーティーでは基本的にアタッカーですね」

そんな感じで多少ギクシャクした様な所もあつたが概ね自己紹介は問題なく進んだ……まあ、ひめひめやシズカさん以外の初対面のメンバーとは今後の行動で徐々に信用を築くしか無いからこんな物でいいだろう。

……そうして、彼等パーティーの最後の一人である今のひめひめと同じくらいの背丈の赤髪の少女が自己紹介に移つた時にそれは起こつた。

「最後は私ですね。パーティーでは前衛を務める【狂信者】^{ファンナティック}アリマ・スカーレットです、宜しくお願い……あの、どうかしましたか？ ミュウさん」

「……あ……え……嘘……？」

アリマちゃんが自己紹介を行った直後、彼女を見たミュウちゃんの顔色が誰にも分かるレベルで真っ青になつて何やら謔言を言い始め

たのだ。

……その気になれば自分の代謝機能すら任意で制御出来るミュウちゃんがかうなるなんて只事では無いと判断した俺とミカは直ぐに駆け寄って声を掛け、それを見たひめひめとアリマちゃんも何があったのかと近付いて来た。

「ちよ、ミュウちゃんどうしたの!?!?」

「一体何があったんだ? とりあえず落ち着いて事情を話せるか?」

「え!?!? ちよ!?!? どうしたの?」

「……あの、私何かしてしまいましたか……?」

そんな風に何かあったのかをミュウちゃんに聞く俺達だったが、彼女は何かを堪える様に顔を俯けながら肩を震わせて黙り込んでしまっていた……どうもアリマちゃんの方を必死に見ない様になっているみたいだが、向こうの反応を見るに彼女とは今日が初対面の筈だし……。

(……いや、ミュウちゃんの観察力なら動きの癖からアバターの中身を特定出来てしまうか。いつかのシュウさん着ぐるみバレ事件の時みたいに。となるとミュウちゃん……祐美ちゃんがここまで動揺する事なんて『あの一件』ぐらいだから、もしかしてそういう事か?)
「……ネリル、向こうの人達にこっちの声を聞かれない様には出来るか?」

「ふむ? まあ問題ないが……何やら厄介ごとの様じゃな。風属性魔法で適当な雑音にしか聞こえぬ様にしておこう」

おそらくミュウちゃんがこうなったのはリアル側の問題だと俺は考え、とりあえずミュウちゃんの側に俺達三兄妹のリアル情報を知っている(おそらく)人間が集まっている事を利用して、ネリルに小声で向こうで困惑した表情で様子を伺ってる他の面々に声が聞こえない様に頼んでおく。

彼等には少し悪いがこれからする話は割とデリケートなリアル側の問題だからこのぐらいの対策は取らせて貰いたい……さてと、何処から話を聞き出すかな。とりあえず事情を知ってる姫乃に……。

「……ミュウ、いや僕のへマスターである加藤祐美はそのアリマ君

に謝りたい事があるみたいだよ。厳密に言えば中身の赤城真里亞つて子にみたいだけど」

「ふあ!?」

……とか思っていたら、これまで妙に大人しく突っ立っていたミメーシスがいきなりリアル側の情報をほぼ全オープンする感じでぶっこんで来たので、思わず俺は口から変な声が出てしまった。

確かに改めて考えるとシステムの的にへエンブリオへはへマスターへと記憶を共有したりある程度意識を読む事が出来るらしい以上、当然ミメーシスはミュウちゃんの心情を把握してるって事なんだろうけど……普段は一步引いた視点でミュウちゃんに追隨する事が殆どな彼女がいきなりこんな事を言うとは流石に予想外なんだが……。

「……あの……祐美ちゃん……何ですか……?」

「~~~~ツ!!」

そんなカミングアウトで俺とミカとひめひめがどうするべきか分からず狼狽えている間に、いち早く気を取り直したアリマちゃんがミュウちゃんにそう聞いた……瞬間、ミュウちゃんは悲鳴を閉じ込める様に口をつぐみながら全速力で身を翻して走り去ってしまったのだった。

……ヤベエ、ホントにどうしよう(滝汗)

「あ!? ……待って……」

「ちよ、これはどういう事なの!?」

「……俺が聞きたいぐらいだが……多分、ミュウちゃんが昔巻き込まれた例の事件があっただろ。そのこのアリマちゃんが一緒に巻き込まれた子だったっぽい」

逃げるミュウちゃんに手を伸ばすアリマちゃんの横で、ひめひめが小声で聞いて来たので俺も素早く推測を答えた……あの事件にはこいつも後始末で関わってるから大体の事は知ってるので、俺の言葉を聞いたひめひめは『え!? マジで!?』と言いながらも事情を理解してくれたいらしい。

……とりあえず大分ややこしいリアル側の話になるのでひめひめにはあつちで呆然としている事情を知らない組への執り成しと説明

を任せて、まずは同じく事情を知ってるミカに話し掛ける。

「それでミカ、これも想定通りなのか？」

「私の『直感』もそこまで万能じゃないよお兄ちゃん……基本的に『危険』なもの以外にはまともに反応しないし、今回は別にそうじゃないしね。どっちかと言うと『ミュウちゃんにとって必要なこと』じゃないかな」

「……まあな」

「それにこの一件が今回の事件解決に必要な気もするし」

まあ、ミカの『直感』がそう言っているならこのトラブルも必要な事なのだろうし、俺もミカもミュウちゃんが『あの一件』を未だに引きずってるのを気にしてたからそれが解決出来るのなら歓迎するべきなんだが……このタイミングだと面倒ごとが多いんだよなあ（泣）……とにかく、ミカの方にはリアル側でそれなりに親しかったアリマちゃんへの説明を任せて、俺は今のトラブルのある意味では元凶とも言えるミメーシスへと向き合った。

「……それで、何故いきなり事情をぶつちやけたんだ」

「僕はミュウのへエンブリオだからね。彼女が『真に望む事』の手伝いをするのが僕の役割だからだよ」

そんな俺の質問に対してミメーシスは何時ものミュウちゃんの後ろに控えている時の様な何処か一步引いた様な態度では無く、その目に確かな信念が垣間見える堂々とした態度で答えた。

「僕はミュウの『今のままの自分では兄や姉に置いていかれる』『でも普通の人とは違う自分は嫌だ』という危機感と嫌悪感から誰かと同じになる能力を持つメイデンとして生まれ、『普通の人とは違う自分が信じられない』『誰かこれ以上間違えない様にその背を押してほしい』という思いから常に側融合しているにある人格を持ったガードナーとして在るへエンブリオだ。……故にミュウが普通に歩める時には黙って後ろで支えるし、恐怖で動けなくなるならミュウが行きたい方向へとその背を躊躇無く押すのが僕の役割だよ」

「……成る程、これは少し君の事を見誤っていたかな」

普段ミメーシスが大人しかかったのは『背を押す必要が無かったか

ら』って事か……思い返してみると、今まで俺やミカと一緒にいる間にはそんな事をする必要がある出来事は無かったからな。

……だからこそ、今この場でミメーシスは積極的に動いているんだろうが。

「後、僕はミュウのへエンブリオだから彼女が今何処にいるのかが分かるから、出来ればそっちのアリマって子を連れて行きたいんだけど」

「ホント一転してアグレッシブになったな。……とりあえず向こうの人達を説得して話を纏めるから少しだけ待ってくれ」

……まあ、俺としてもミュウちゃんが過去にケリをつけて前に進む様になるのは願っても無い事だし、その為なら頭を下げるのも苦勞するのにも全く構わないんだがな。ここは『お兄ちゃん』として頑張りましょうか。

少女達の過去／これから

□ 加藤祐美 かとう ゆみ

……あれは今から約一年程前、私が小学校に入学してから少し経った頃の話です。当時の私は武術などは学んでおらず、自分が『戦闘における異常な才能』を持っている事にも気付かずごく普通の子供として生活していました。

まあ、無意識の内に肉体の最適な使い方などは分かっていたので運動能力は他の子と比べても図抜けており、そのせいで周りからやや浮いてしまう事もありましたが所詮は幼稚園や小学生の中での事だったのでそこまで問題にはなっていませんでした。

『わあ！ すごいねゆみちゃん！ バク転とか出来るんだ!!』
『まりあちゃん……ありがとうなのです』

……ですが、そんな少し浮いていた私にも話しかけてくれて友達になってくれた人——赤城真里亞ちゃんあかぎ まりあが居たのです。

彼女とは幼稚園の頃からの付き合いで、自分の才能を自覚出来ない所為で周りからやや浮いていてボツチ気味だった私に声を掛けてくれた、私の初めての友達でした。

『うぐぐ、このままだと見たいテレビの時間に合わない……祐美、ちよつと近道しようか』

『別に良いですよ』

ある日、私と彼女は一緒に学校から帰っていたのですが、その時彼女がそう言つて家への近道となる脇道に入つていったので、私もついて行つたのです……学校からは『登下校には監視カメラや警備ロボットがあるところを行きなさい』と言われていましたが、私も彼女も少しぐらいなら大丈夫だろうと思つてしまつたのです。

……今の時代、街中には監視カメラがあり警備ロボットが巡回する様になっていますが、それらにだつてどうしても死角というものがあり、そして悪意を持った人間や事件が無くなる訳でもないにも関わらず……。

『……これは……？ 真里亞ちゃん直ぐに引き返して』……… // 光

ノモノ”ノ気配ガスル……”

『え？ 何……？』

その道を歩いてからしばらくした時、私は前方から嫌な気配を感じたのですが私達はそのまま前に進んでしまい……その先でまるで邪悪な黒いオーラでも纏っているとかの様に見える程の異様な雰囲気をつけているフードを被った怪しい男と遭遇してしまったのです。

……それを私は本能的に『この男は危険過ぎる』と感じ取って慌てて彼女を連れて引き返そうとしましたが、それよりも早くその男は手にナイフを持ってこちらに突っ込んで来ました。

『“光ノモノ”ノ縁者ヨ！ 我ラノ怨ミ思イ知レ!!』

『いつ、いやアアアアアアッ!!』

『ッ!? ……させません』

異常な怨嗟の声を上げながら迫り来る真つ黒なフードの男と、その場に響き渡る真里亞ちゃんの悲鳴……そして今までズレていた“ナニカ”がぴったりとハマってしまった私自身の恐ろしく冷たい声を最後に、私のこの時に何があったのかの記憶は一部途切れています。

『……グウ……ガア……!?』

『……』

気がついた時には私は無表情で棒立ちしながら男が持っていたナイフが血塗れになって握られており、その目の前にはフードの男が全身を切り刻まれた上で路上に蹲っていました……今なら分かりますが、私の武術の才能は初めて武器を握った時でもその最適な使い方がある程度は理解でき、敵がどう動くかを完全に見切る事も出来て、そしてその武器をどう使えば人体を的確に破壊出来るかも解つてしまふ程のモノだったので。

この時はおそらく突っ込んでくるフードの男の小指辺りを掴んでへし折り、そのままナイフを奪って筋肉の筋や腱などを斬り裂いて行動不能に持って行ったのでしょう。当時の私は武術を学んでいなかったのですが、兄様の剣を少し見る機会があったので対人戦における手加減などがギリギリ出来ていた事と、人殺しに対する一般的な忌避感そのものは持っていた事でどうにか男を殺さずに済んだので

しよう。

『……あつ!?? 真里亞ちゃんは!?』

それからしばらく、私は蹲る男を見ながら目の前の現実を受け入れられず放心していましたが、一緒に居た真里亞ちゃんの事を思い出して慌てて後ろを向くと、そこには腰を抜かして地面に座り込んでいる彼女の姿がありました。

……私は彼女が無事に事に安心しつつ、手を伸ばしながら彼女の元へと歩いて行き……。

『嫌! 来ないで!』

『え……?』

そうして近づいて来た私に対して掛けられたのは、彼女の私に対する明確な拒絶の声と恐怖の表情……そして彼女の瞳に写る血塗れのナイフを持つて全身が返り血に塗れた私の姿でした。

……今なら理解出来ませんが、あの時の彼女に取って私は『異様な雰囲気を持つフードの男を機械の様な無表情で八つ裂きにする少女』だったのです。そんな反応をされるのは当然だった訳ですが、その時の私は友人からの拒絶の感情を受けてどうして良いのか分からず呆然としてしまっており……背後の男が、暗黒のオーラの様にすら見える“異様な雰囲気”を更に膨れ上がらせて立ち上がるのに気付くのが遅れたのです。

『……オノレヨクモ! 死ネエ小ムス 『テメエ人の妹に何してくれてんじやこのクソがア!!』 ヒデブウツ!??』

まあ、フードの男が襲い掛かってくる直前に颯爽と現れた兄様が怒りの声を上げながら物凄い勢いの飛び蹴りをその顔面に叩き込んでくれたので、その男の魔の手が私や真里亞ちゃんに襲い掛かる事は無かったのですが。

『大丈夫祐美ちゃん!?? お兄ちゃんと姫乃さんを連れて来たよ!!』

『……ふむ、その血は返り血みたいね。人払いは解除したしとにかくここを離れましょう。……蓮、ソレは任せて良いわよね』

『ああ、その二人は任せるぞ姫乃。……どうやら『影法師』の残骸が取り付いているみたいだが、このぐらいなら今の俺の『借り物の光の残

『でも払えるだろう』

『……オオノレエエエエツ!!!』

その後には私は初めて肉体を最高効率で動かした負荷による疲労で倒れてしまったので余り記憶に残っていませんが、再び襲い掛かって来た男は兄様がカウンターの拳の一発を見舞って打ち倒してしました……まあ、その時に兄様の拳が“光っていた”様な気もしましたが、その辺りの事を兄様は私や姉様には出来るだけ話さない様にしてると姉様から言われたので深くは聞いていません。

……一応その後は警察にも連れて行かれましたが、男に前科があった事と何より姫乃さんと兄様が色々動いたようなのであの場に居た私達に関してはお咎め無しになりました。

『あ、真里亚ちゃん……』

『ツ!?? ……ツ!??』

……ですが、それ以来彼女はあの時の私に対する恐怖が忘れられないのか、私を見かけても近づく事が無く直ぐに離れてしまう様になり……私の方も情け無い事にあの時の彼女の表情がトラウマになってしまつて、彼女に近づこうとすると身体が竦んでしまう様になってしまつていたので。

……所詮、私に与えられた戦闘の才能なんてモノは他者を傷つける事に長けるだけのモノでしかなく、何かのキツカケになればと兄様の紹介で学び始めた水面流古武術も自分の才能の制御には役立ちましたがそれだけでした。これは私の心の問題なので当然と言えば当然ですが。

そして今はへ Infinite Dendrogram の世界で遊びながらも、敢えて自身の才能を活かせる戦いの場に身を置きながら己の才能の“意味”を探し続けていますが……それでも、未だに私と彼女の関係は途切れたままなのです。



□ニッサ辺境伯領

マジック・フィスト
【魔導拳】

ミュウ・ウイステリア

「……それで今度は私が逃げてれば世話無いですよね……」

そんな風に過去の事を思い返しながらも、私はニッサ辺境伯領の人気のない街角で蹲りながら自嘲の溜息を吐いていたのです……あれだけ毎回逃げられて落ち込んでるのに、幾らいきなりな遭遇だったとは言え全速力で逃げてしまおうとか……。

……ああああああく！ 本当にもう何やってるんでしょうか私。自分の肉体を代謝機能レベルで制御出来るのが自慢じゃなかったでしたっけ!!？

「……ハア、駄目ですね、混乱して頭が上手く纏まりません。……本当に私の才能は『戦闘』という事象にのみ特化しているので、こう言った日常的な極普通の事についてはそこらの小学生と何も変わらないんですよ……」

いきなり逃げ出した所為で兄様やひめひめさん達にも迷惑を掛けまくってますし、特に今回の依頼主であるペルシナさんには多大過ぎるご迷惑を……ああああああくホントに色々とやらかしてしまったのです、どうしましょう……。

「うぐぐ……とりあえず戻るしかないでしょうかねえ……ううう、でも「やれやれ、こんな所に居たのか。やっと見つけたよミュウ」うおう!!？ ……って、なんだミメですか」

そんな感じで私はしよげ込みつつどうしようか悩んでいたのですが、いきなり声を掛けられたので思わず驚いてしまいました……まあ、声を掛けてきたのはミメだったんですがね。

私のへエンブリオである彼女なら私の居所を探し当ててくるぐらいは出来るでしょうから、多分探し出して連れ戻す様に言われて来たんでしょう……普段ならここまで近付かれる前に気が付ける筈なんですが、やはり今の私は相場に参っているんでしょうかね。

「……それで？ 私を連れ戻す様に言われたんですか？ 言われなくてもそろそろ行くこうかと……」

「いや？ 僕はミュウと話をしたいって言う彼女をここまで連れて来たただけだから。……ほら」

「……えーっと、久しぶりだね祐美」

そう言いながらミメの後ろから出て来たのは、先程私が全力で逃げてしまったアリマ——真里亞ちゃんでした……そうしてオドオドとした様子ながらも迷いの無い歩きで前に出て来た彼女を見て、色々と混乱していた私は思わず後ずさってしまいました……。

「待って!?? 《催眠暗示・忘却》!!!」

「え!?? 身体が……!??」

次の瞬間に彼女がこちらに向けて何かのスキルを行使した瞬間、私の肉体は自分の意思で動かせないかの様に殆ど停止してしまいました……咄嗟に自身のステータス欄を見ると【忘却】の状態異常に掛かっている事が分かりました。

【忘……却】? 身体の動かし方を忘れたとでも……!??」

「あ、つい……ご、ゴメンね! 祐美! ……後、【忘却】の状態異常はへマスターへ相手だと保護システムに引つかかって記憶の消去とか出来ないから、その代わりに肉体の動きが阻害される形になるだけだから!」

成る程、確かにへマスターへにはリアルの自分に影響を及ぼさない精神保護システムの様な物があると以前聞いた事がありますね……しかし、こうもあっさり状態異常に掛かってしまうとは。

……私の状態異常対策は基本的にミメ頼りですから融合していなければこんな物と言えるのでしょうか……しかし……。

「ここまで容赦なく状態異常を掛けて来るとは……強くなりましたね、真里亞ちゃん」

「ツ!?? ……うん、この世界で祐美ちゃんともう一度話が出る自分になる為に色々頑張ってきたから。まあ今も祐美から逃げ出さない様に自分自身の行動を縛る精神干渉を使ってるけど……後、いきなり状態異常にしたのはホントゴメン」

ここまで綺麗に状態異常へと嵌められたのは初めてなのでついっいそんな変な感想が出てしまいましたが、それに対して彼女は真剣な表情で今までは合わせてくれなかった目を合わせながらそう言うってくれたのです。

……彼女がここまでしてくれているのですし、私もいつまでも逃げ

ている訳には行きませんよね。普段は何気なくやってる身体制御を今だけは全力で使用して『今度は絶対に逃げない』と言う意思を持って彼女を見据えて、まずは謝罪しようとする……。

「……ごめんなさいー」

「ふええり?」

……思っていたら、それよりも早く真里亞ちゃんが頭を下げて謝って来たのでめっちゃビックリして変な声が出てしまいました……お、落ち着け私! こういう時は深呼吸するんだ! ヒツヒツフーって、それは違うやつなのです! ええい、戦闘の時には常時平静でいられる私の脳もこういう時には役立たずですね!

……私が突然の事態に内心物凄くテンパっている(それを見ているミメはやや呆れている)のを他所に、頭を上げた彼女は引き続き真剣な表情で話を続けました。

「……一年前のあの日、祐美は必死に戦って私を守ろうとしてくれたのに、私は祐美ちゃんを見て怖くなって拒絶してしまつて本当にごめんなさい。この世界で戦って漸くその事が分かつたんだ。……あれからずつと謝りたかつたけど、ずつと勇気が出せなくて……」

「あ……」

……ああ、そうだったのでですね。彼女も私と同じ様にこれまでずつと一步を踏み出せずに悩んでいたのですか……なら、私も勇気を出して……。

「……こちらこそ、ごめんなさいなのです。……あの日、真里亞ちゃんを怖がらせてしまった事、そしてそれ以来ずつとあなたを避けてしまった事……本当はすぐにお話がしたかつたのですが、どうしても貴女に嫌われるのが怖くて勇気が持てなかつたのです……」

「祐美ちゃん……」

そうして、或いは一年ぶりに真つ直ぐ見た彼女の顔は目に涙を滲ませたの泣き笑いの様な表情でした……まあ、私も同じくそんな変な表情なのでしょうが。

……そして、私はこの一年間ずつと言いたかつた言葉を改めて彼女に伝えました。

「……真里亚ちゃん、もう一度私と友達になってほしいのです」

「……はいー」

そう泣き笑いの顔で頷いた真里亚ちゃんが勢いよく抱きついて来たので、私も彼女を受け止めて抱きしめ返しました……ただちよつとステータスだと『アリマちゃん』の方が幾らか高いみたいなので、重心移動とかを駆使して受け止める必要があったりしましたが（苦笑）

……こうして、私達の一年間にも渡るすれ違いは傍目から見れば実にあつさりど、私達にとっては漸く解消されたのでした。

「うん良かったね二人共。まあちゃんと話さえすればいつでも解決出来た問題なんだけどさ」

「まあそうなんですけどね。……後、ミメもありがとう。私の背中を押してくれて」

「それが僕の生まれた意味だからね。……それと出来ればさつさと戻った方が良いよ。みんなに心配を掛けてるし」

……そうですよー。ちゃんと兄様や姉様、ひめひめさんのパーティーメンバーにも謝らないといけませんよね。頑張りましょう。

作戦会議／未だに残る繋がり

□ニッササ辺境伯領 【戦棍鬼】^{マイス・オーガ} ミカ・ウイステリア

「……色々ご迷惑をお掛けして申し訳ありませんでした」

「ホントにごめんなさい！」

ニッササ辺境伯領にある冒険者ギルドの貸し出し用個室、そこでミュウちゃんとアリマちゃんの二人は私達に向けて深々と頭を下げながら誤っていました……うん、二人の表情や雰囲気を見るにキチンと仲直りは出来たみたいだね。

ちなみに此処は流石に外での話し合い（謝り倒し）は周りの人に迷惑という事で、冒険者のちよつとした話し合い用としてギルドが貸し出しを行っている部屋の一つを借りただけである。

「全く、あちらで知り合いだったかなんだかは知らないが、こちら内にあちらの揉め事を持ってくるなよな」

「本当に申し訳ないのです」

「えーっと、ホントにごめんね、クロード君」

ただ、会議室の椅子の一つに座り憚然とした表情でそう言うクロード氏に関してはどうしようかな……言ってる事そのものは彼の方が正論ではあるんだよね。ネットリテラシー的に。

……これまでの会話から彼が悪意を持って文句を言ってる訳ではなく、多分ネットゲでのマナーやルールとかに凄くうるさいタイプみたいて事分かってるんだけど、どうしたものかな……。

「全く、もうその辺のしときなさいなクロード。二人もちゃんと謝ってるし、レントさんもお詫びに彼等のパーティーは今回のクエストでは可能な限り雑魚敵の相手や、^{ユニーク・ボス・モンスター}へU B M戦での支援に徹してくれるって事で話は付いてるでしょ。これ以上グチグチ言わない」

「でも姉ちゃん、ネットゲのマナーは……」

「別にこの二人は意図的にマナー違反をした訳じゃないでしょうに……ゴメンねー。コイツったら昔ネットゲで嫌な目にあってから、なんかこんなしつこい性格になってさー。そんなんだからスクールで友達出来ないんだよ」

「ボボボボツちやうし!!!」

そこでクロード君を執り成してくれたのは姉のクラリスさんでした……ちなみに支援に徹するとかはお兄ちゃんの交渉の結果。へUBM戦でMVPをひめひめさんのパーティーの取らせやすくして、今回特典武具を譲りますよーっていう感じの。

……まあ、〃可能な限り〃という伏線は入れているし実戦ではどうなるか分からないけどね。そもそも私達は特典武具にガツつく程に困ってないから特に損は無いのだ。

「はいはい、二人ともそこまでね。……今回の一件には私も少し関わってるから強くは言わないけど、私達はペルシナさんからのクエストを達成する為に集まったんだからそこを忘れちゃダメよ」

「うぐ……分かったよ、もう何も言わないさ。受けたクエストはちゃんと熟すべきだしな」

最終的にひめひめさんが話を纏める事によって、ミュウちゃんとアリマちゃんの予期せぬ再開から仲直りまでの一連の騒動は終わりを告げたのでした。

……そして、随分遠回りした様な気がするけどようやく本題である『冥樹死王 ハデスブランチ』討伐』に関する話し合いが、依頼主であるペルシナさん主体で行われる事になった。

「ごめんなさいねペルシナさん、とりあえずこれでようやく本題に入れるわ」

「いえお気になさらず、無茶な依頼を頼んだのはこちらですから。……では改めまして、貴方達にはかつて私の師匠〃だった〃へUBM』【冥樹死王 ハデスブランチ】の討伐に協力して欲しいのです」

そう言ったペルシナさんは私達に頭を下げてから、彼女自身と師匠であるヘイデスさんの関係とその身に起こった出来事を話し始めました……彼女の事情は事前に聞いてはいたけど、改めて本人の口から聞くと色々と居た堪れないね。こう誰が悪いと言うよりも間が悪かった感じがして。

ほらー、彼女の話聞いたミュウちゃんとアリマちゃんが『こんな事情を抱えてる人の前で私情で騒動起こしちゃったかあ……』みたい

な表情でめっちゃ申し訳無さそうに縮こまってるし。

「少しいだらうかペルシナさん。事情は分かったし【冥樹死王 ハデスランチ】を討伐するのは一向に構わないが、その詳しい能力や現在地などは分かっているのか？」

「ああ、レントさん達にはまだ詳しく説明してませんでしたね。……まず【ハデスランチ】の能力ですが襲撃事件の際に戦った人達から聞いた情報によると強力な呪いや配下アンデッドの強化、更には森林内に於ける各種バフや植物操作などを使っていたそうなので、おそらく生前の師匠の能力はほぼ全て使えると考えられます。師匠は【冥王】などの死霊術師系をメインに【森司祭】ドルイド系統をサブに入っていましたから」

そうして一通りの過去話が終わった後、お兄ちゃんの質問もあり本題とも言える【冥王】ヘイデス氏の成れの果て、〈UBM〉【ハデスランチ】の能力の解説へと移っていった。

「また、師匠はアンデッドに植物の要素を持たせた【プランツアンデッド】と呼ばれる種類のオリジナルアンデッドを作り出す技法を編み出しており、〈UBM〉になった際に自分自身にもその術方を使ったのかアンデッドと植物が混ざり合った様な外見をしていたそうです」

「ふむ、アンデッドと植物の融合か。アンデッド化した植物などはそれなりに居るがそれとはまた違うのかの。その術式などの資料とかがあれば見たいのう」

「え？ ……ええ、ええ、師匠の家から回収した資料などはありませんが、読めるんですか？」

ペルシナさんの解説を聞いていたら、突如ネリルちゃんが何やら目を輝かせながら詳しい情報を催促し出していた……ヘイデス氏が作ったと言う『植物を合成したアンデッド』には魔法のプロである彼女の琴線に触れる様な「何か」があつたみたいだね。

……そんなネリルちゃんを見て少し困惑した様な表情を見せたペルシナさんだったが、いきなり真剣な表情になって聞き返した。

「うむ？ まあこの大陸で使われておる言語なら読めるぞ。……内容を理解出来るかの意味であればワシに理解出来ない魔法理論は早々

無いと言っておこうか。これでもワシは転生个体じゃからそれなりの知識はあるぞ」

「《輪廻転生》^{リインカーネーション} 済みのエレメンタル!?? レジエンダリアでも十年に一体、詳細な知識を受け継いでいるなら百年に一体見つかるかどうかなのですが……分かりました、資料はこちらです」

そんな言葉を聞いて何か納得した様な表情を浮かべたペルシナさんは、意を決した様子でアイテムボックスから少し古めな紙束の資料をネリルちゃんに手渡し、それを受け取った彼女はかなりの速さで紙束をパラパラと捲りながら目を通していった。

……自然系エレメンタルの本場であるレジエンダリア出身のペルシナさんだから、ネリルちゃんみたいな特殊なエレメンタルの存在も直ぐに理解出来た（勝手に理解してくれた）みたいだね。

「ふむふむ……ほほう、植物をアンデッド化させる訳ではなく、生きている植物をアンデッドと融合させる形式なのかの。分類としてはフレッシュユゴーレムに近いか。……《光合成》のスキルを応用して日照下での活動可能なアンデッドに仕上げておるようじゃな。……：：：それ故に光耐性がアンデッドとしては高く、水分を含む生きている植物だから多少なりと火属性に耐性も……：：：欠点としては複雑な構成である分、製作者以外が運用する事は難しい感じじゃな。破損の修繕とかはアンデッドと植物操作の両方のスキルがいる様じゃし」

「ネリル、一人で納得してないで俺達にも分かりやすく説明してくれ……：：：と言っても聞いてないか。ペルシナさん、コイツは無視してもいいので説明の続きをお願いします」

「あ、はい」

実の所、ネリルちゃんって自分の趣味（魔法関連）に関しては割と凝り性と言うかマッド気味って言うか……まあとにかく、そんな彼女をスルーしつつペルシナさんからの説明によると、その「プランツアデッド」とやらは通常のアンデッドと比べると以下の様な特性を持っているとの事だ。

① 《植精死霊》というスキルでアンデッドと植物の両方の特性を持ち合わせていて、どちらかの種に対応したスキルであればその効果を

受けられる。

②《光合精気》という光を吸収してエネルギーに変えるスキルを持つているので、アンデッドでありながら日照下で弱体化せず、逆にパワーアップ者もいたり光・火属性攻撃にもある程度耐性がある。

③制作方法はアンデッドモンスターに相性が良くて魔力資質が高い植物を融合させる形式で、融合させた組み合わせに応じてステータスへの補正や新規スキルを獲得する事も。

④だが、制作や維持にはかなり手間が掛かるので量産は難しく、ヘイデス氏ですらそう多くは運用出来ないレベル……といったところらしい。

そんな情報を聞いて部屋にいるメンバー（資料を熱心に読み込んでいるネリルちゃんを除く）は真剣な表情で考え込んでいたが、そんな中でいち早く自分の考えを整理出来たらしいひめひめさんが口を開いた。

「ふうん、かなり強力なアンデッドではあるけど量産は難しいか。確か【ハデスブランチ】は【妖精女王】に配下ごと手酷くやられたって言うってたし、今なら戦力は減ってるから普通に倒せるかな」

「それなんですけど……レジエンダリアでの【ハデスブランチ】の襲撃事件の際、配下の【プランツアンデッド】は数百体はいたらしいです。そのアンデッドは全て【ハデスブランチ】が逃げる際の囮として【妖精女王】に殲滅されている様なのですが……」

「量産が難しい【プランツアンデッド】をそれだけ作れるという事は、〈UBM〉になった事で【ハデスブランチ】にそれが可能になるスキルが発現してる可能性が高いという事じゃな！」

「ネリルお前ちゃんと聞いてたのか」

資料を高速で読み込みながらも周りの話をキチンと聞いていたらしいネリルちゃんが言う通り、おそろく何らかの方法で【プランツアンデッド】を量産化するスキルを【ハデスブランチ】は持ち合わせている可能性が高いだろうというのがペルシナさんの考えの様だ。

……しかし、私達が相手にする〈UBM〉って配下量産系が多いよねえ。まあ私の『直感』は『自分か周りにとって危険度の高いモノ』

を察知するから、予想被害が広範囲に及びそのような軍勢タイプを感知しやすいから何だろうけど。

「それに、おそらく師匠は自身を【ハデスブランチ】に改造した際に、かつて【妖精女王】から賜った【アムニールの枝】の一部を使用している筈なので、おそらく本体の実力も相当なモノだと考えられます。……残念ながらレジエンダリアでの戦いでは基本的に配下の【プランツアンデッド】達に戦いを任せ、自身は前線には殆ど出てこなかった様なので能力の詳細は分からないんですが」

「まあ、そこは出たとこ勝負しかないんじゃないかな。とりあえず今ある情報の中から対策を立てるべきでしょう。【プランツアンデッド】の弱点とかないの？ ネリルちゃん」

「あくまでアンデッドじゃから普通に聖属性やアンデッドメタは効くじやろ。光属性や炎属性も普通のアンデッドと比べれば耐性があるだけで、それなりに効きはするじやろうし。……後、植物の特性を合わせ持っている以上、そちらのメタも効くのではないか？」

そんな感じで私がネリルちゃんに対策とかを聞いてみたら、実にあっさりとした答えが返ってきた……早速【高濃度除草剤】が役に立つかもしれないね（私の場合は直接殴った方が強いかもと言わない）

……そうやって【ハデスブランチ】対策を話し合っている所で、お兄ちゃんがかなり重要な事をペルシナさんに聞いていた。

「そう言えばペルシナさん、【ハデスブランチ】への対策を話し合うのは良いんですが、肝心の相手の居場所とかは分かっているんですか？ まあ、わざわざアルター王国に【ハデスブランチ】が居ると確信して来た以上は、何らかの探知手段があるんでしょうが……」

「それ関しては貴方達にはまだ言ってませんでしたね。……私は生前、師匠からこの【比翼の羅針盤】というアイテムを貰っていたんです。これは昔の【匠神】が作った一品で登録してある人間の位置情報が分かる他、超長距離念話を可能とするマジックアイテムなんです。……師匠がへU B Mへに堕ちてからは念話機能は使えなくなりましたが、位置情報を指し示す機能は生きてるので……」

うん、手のひらサイズの方位磁石みたいなアイテムをじつと見ながら呟くペルシナさんを見て、室内の空気が再び重くなったね。

……とにかく、その【比翼の羅針盤】が指し示す方角に【ハデスブランチ】は居るといふ事らしい。彼女に討伐が任されたのも【羅針盤】が使えるのが最初に設定した人間だけだからという理由もあるのだから。

「まあ、それで目撃情報とこの【羅針盤】による探知で【ハデスブランチ】がアルター王国に居るであろう事を掴んだんです。……現在はどうもこのニッサ辺境伯領の東側に居るみたいですね。しかもかなり近い」

「東側と言うと……確かここらの地理が載ったパンフレットを買っておいたんだが」

お兄ちゃんが机の上にこの辺りの地理や情報が詳しく書かれた旅行者用パンフレットを広げたので、私達はそれを覗き込んでニッサ辺境伯領の東側に何があるかを確認してみた。

……すると、まだ資料を読んでいたネリルちゃんが唐突にパンフレットの情報の一つを指差したのだ。

「多分ここじゃないかのう、この自然ダンジョンへサウダーテ霊林」。……この研究資料の最後に『高純度の霊木と高い魔力を宿した土地で儀式を行う事によって死者蘇生がなされる』とか書いてあったし、確かそれが目的でへUBM』になったんじゃない？　ここから東にあって条件を満たすのはここしかないぞ」

「確かに……このへサウダーテ霊林はアルター王国内にある森林地帯でありながら、レジエンダリアの森林地帯に匹敵する自然魔力を保有するが故に自然ダンジョン扱いになった場所。【ハデスブランチ】の目的を達成するならこれ以上の場所はありませんね」

そういう訳で【ハデスブランチ】が居そうな場所はあると見つけた。私の「直感」でも間違い無いつて出てるし、あの【羅針盤】ってアイテムが優秀過ぎるお陰で何とかあった感じか。

……尚、後でこっそりネリルちゃんに『その術式で本当に死者蘇生が出来るのか』を聞いてみると、『死者蘇生』の概念の度合いにもよ

るが、これで出来るのは高性能な「プランツアンデッド」だけじゃろうから魂がおらん者達を生前と同じ様に蘇生させるのは無理じゃな。精々見た目が同じぐらいが限界では無いか？ ……そもそも、そのレベルの死者蘇生は「天りゆ…」ともかく、こやつ目的が果たされる事はないじゃろうな』との事。

「サウダーテ霊林」には少し準備する時間を設けても、今から向かえば昼前には着くぐらいの距離か。向こうに戦力を用意されない為にも、後は私の必殺スキルのにもその方が良さそう。……他のみんなはどうする？」

「俺達は問題無いがペルシナさんは…」

「私も問題ありません。一刻も早く「ハデスブランチ」を止めなければ」

「それじゃあ決まりだね」

紆余曲折あったものの、こうして私達は「冥樹死王 ハデスブランチ」を討伐する為に自然ダンジョン「サウダーテ霊林」へと向かう事になったのでした……ただ、私の「直感」も『これが最善』とは出てるんだけど、それと同時にどうもイマイチ不透明な気がするんだよね。

……私の「直感」が微妙なのは何時もの事だけど、何というか未来の危険度やそれを攻略する方法が曖昧というか……上手く討伐が成功すれば良いんだけど。

へサウダーテ霊林

?? へサウダーテ霊林 最深部

『……実験はおおよそ上手く行っているな。……この森の魔力溜まりと、中心にある霊木を利用する術式の調整も終了した』

アルター王国にある自然ダンジョンへサウダーテ霊林の中心部に
して最深部、虹色の霧の様に漂う程に自然魔力が濃いその場所には一
本の巨大な霊木があり、その根元には一つの影——伝説級
ユニーク・ボス・モンスター
へU B M 冥樹死王 ハデスブランチの姿があつた。

……このへサウダーテ霊林は地脈の魔力の流れの関係でへニツサ
辺境伯領の中で最も自然魔力が濃い場所であり、その濃さからお隣
のレジエンダリアと同じ様にアクシデントサークルの発生や自然魔
力に適合した強力なモンスターの縄張りとなつている事から自然ダ
ンジョンへと認定された場所である。

(……我が研究成果……完全な死者蘇生の術式と、それに必要な魔力
を集める為のこの森一帯にある自然魔力と地脈の魔力を吸収させる
術式は、その触媒としてこの森で最も古く巨大な霊木を使う事によつ
て完成した)

そして「ハデスブランチ」の足元には霊木を中心として描かれた大
型の魔法陣が敷かれていた……この霊木はへサウダーテ霊林の地脈
の自然魔力が最も濃い場所で生まれたので、その影響を受けて巨大に
成長した樹木である。

また、この霊木はへサウダーテ霊林のボスである樹木系エレメン
タル【アドミニストレーター・ドライアド】が管理していて、更にこ
の森全体の自然魔力のバランスを整える役割を成していたからか、多
量の自然魔力を浴びているにも関わらずへUBM化どころかモンス
ター化すらしていない稀有な樹木オブジェクトでもあつた。

『この森の管理者であるドライアドは既に排除し、森の管理者として
の“制御権”も篡奪し終えている以上は既に儀式の邪魔をする者は
居ない。作業を急ぐとしよう』

最も、管理者であつたそのエレメンタルは既に「ハデスブランチ」に

倒された後であり、更に彼が生前磨いた【森司祭】系統の森林管理スキルによってヘサウダーテ霊林〈全体を管理する術は乗っ取られてしまっていたが。〉

……そうして至極あっさり自然ダンジョンのボスとなった【ハデスブランチ】は引き続き「儀式」の準備をしつつ、手に付けられている生前から使っていた【ジュエル】より四体の純竜級アンデッド——【プランツアンデッド・グリーンドラゴン】【プランツアンデッド・フォレストオーガ】【プランツアンデッド・レイドタイガー】【プランツアンデッド・メイガストレント】を呼び出した。

『『『………』』』』

『お前達は辺りを警戒して先に作っておいた【プランツアンデッド】と協力しつつ、侵入者が居たら排除しろ。後はこの森のモンスターを可能な限り《死界ノ冥種》^{ハデス・シード}を使ってアンデッド化させて戦力を増やせ』
そんな雑な命令を受けた【プランツアンデッド】達は黙ったまま四方に散って森の中へと消えていった……この四体は元々この森に住んでいた丁度良さそうな純竜級モンスターを《死界ノ冥種》で改造したモノであり、限定的だが同じ《死界ノ冥種》スキルで自身よりも弱いモンスターをアンデッドに改造する能力を与えられている。

……まあ、この四体は【妖精女王】にやられた手持ちの代用として即興で作ったモノであり、先に適当に《死界ノ冥種》で配下に変えた低級モンスターと共に、これから始める儀式の方が終わるまで稼働すれば良いとして活動時間は一週間程度ではあるが。

『一応あの【フォレストエレメンタル】が使っていた魔力経路を介して、この森にいる配下に我がパッシブスキルの効果が及ぶ様にしておいたから念の為の防衛に関してはこれで良いだろう。……さて、ようやくだ、ようやくお前達と再会出来る』

そうして伝説級へUBM〈〉が作る物としてはかなり適当に防衛網を整えた【ハデスブランチ】は、一転して狂気を滲ませた声音で虚空に向けて話しつつ懐から二つのアイテムボックス——生前の彼の妻と娘の遺体が収まった【棺桶】を取り出して魔方阵に設置した。

『あの忌々しい【妖精女王】とクソ議会の手の者に妖精郷を追い出され

たが……この森の自然魔力と【アムニール】にこそ遥かに劣るが十分な魔力を宿すこの霊木があれば、我が死者蘇生の儀式を十分に実行する事が出来る。……待っていてくれ、二人とも、もうすぐみんな永遠の時を生きる事が出来るぞ……』

そうして狂い落ちた冥王は地面の魔方陣に魔力を流しながら、霊木を起点に周囲の自然魔力を集めて自身が完全な死者蘇生の術式だと思いついて儀式を進めていった。

……自身の名前はおろか、かつて愛した妻子の顔と名前も思い出せない程に狂い果てたまま……。

◇◇◇

□へサウダーテ霊林〈【暗黒騎士^{ダークナイト}】レント・ウイステリア

「《インクリース・カースド》《怨讐の闇刃》」

『GYAAAAA?』

俺が振るった【ナイトブレード・カースペイン】の装備スキルによる闇を纏った一閃が、こつちへと飛びかかってきた全長2メートルぐらいの全身緑色をした猿型モンスター【^{デミドラグ・グリーンエイブ}亜竜緑猿】の脇腹をカウンター気味に斬り裂いた……その傷自体は大して深く無いが、暗黒騎士系統の呪いの武器を強化するスキルと【カースペイン】の《ファントムペイン》の組み合わせにより発生した激痛に悶え苦しんだ。

……この【亜竜緑猿】は森の中限定で自身と群れにバフと気配遮断能力を掛ける様で、特にAGIは亜音速に迫るレベルだったがそのぐらいならカウンターで捉え切れるし、気配遮断は《レイライン・サーチ》初め各種索敵スキルで対応出来たので問題無かった。

「しかし、この【カースペイン】は結構使えるな。正直言っつとアイテムボックスの肥やしになると思っていたんだが……《野獣斬り》」

『GIIGYA……?』

そして俺は激痛と《怨讐の闇刃》による【呪縛】で動けない【亜竜緑猿】に近付いて、その首を斬り落とした……《魔物特効》のスキルもあるからそこまでSTRが高くない俺でも問題無く亜竜級に攻撃

を通せるし、やはりこの武器目当てで【暗黒騎士】に就いたのは正解だったか。

……俺は【亜竜緑猿】が光の塵リソースとなり宝櫃を残したのを確認してからその部下と戦っていた妹達と従魔達の方を確認すると、そこには【亜竜緑猿】が率いていた全ての猿系下級モンスターを倒し終えた彼女達が居た。

「……まあ、心配はしてなかったが」

『色々な猿系モンスターが居て結構大変だったんだけどねー。魔力いっぱい自然ダンジョンの中だから魔法を使う連中も結構居たし。……ネリルちゃんの支援と絶好調のミュウちゃん無双が無ければもう少し手間取ったドラ』

確かに、これまでは自分の「才能」への忌避感からほんの僅かに戦闘時の動きが鈍っていたミュウちゃんだったが、先程色々な悩み事が解決したお陰か忌避感が薄くなって明らかに動きが良くなっていたからな。

ネリルに関してても普段はそんなにやる気が無いとは言え2000年に渡る経験と魔法に関する研鑽は伊達では無く、少なくとも魔法戦闘の技術に関しては俺程度では及びも付かないレベルなので、下級の猿モンスターがどれだけ魔法を使おうが問題無く封殺出来るだろうし。

「さて、粗方片付いたぞ」

「亜竜級率いるモンスターの群れを一蹴とは流石ね」

そうして戦闘を終えた俺達は後ろに控えていたひめひめのパーティーに声を掛けた……彼女達が後ろに居るのは先程した【ハデスブラランチ】と遭遇するまでは俺達のパーティーが前に出て消耗を引き受ける約束もあって、森に入ったらいきなり襲い掛かって来た【亜竜緑猿】の群れを相手取っていたのだ。

……それじゃあ、さっさと先に進もうかと思ったその時、ひめひめパーティーの一人で先程のトラブルの所為でこっちへの印象が悪いつぽいクロード君がこっちに声を掛けて来た。

「なあ、ちよつといいか？」

類の霊体系アンデッドを召喚出来るスキルよ。この子達は偵察向きだから辺りに放つて周囲を索敵させるわ。後ついでに《ゴースト・レポート》つと。じゃあ行きなさい」

そうしてシズカさんが指示を出すと「グレイウルフ・ゴースト」は生い茂る草木を意に介さず四方に散り、「スカウトイーグル・ゴースト」は木々を擦り抜けながら空へと飛び立って行った……どうも霊体だからかオブジェクトを擦り抜けるみたいだな。これなら鬱蒼とした森の中でも普通に行動出来るか。

「ゴーストマンサー【幽霊術師】のスキルであの子達が得た情報が私にも伝えられる様になってるから……それでペルシナさん、目的の「ハデスランチ」はこの森の中にいるのよね」

「……はい、この【比翼の羅針盤】が指し示す先はこのヘサウダーテ霊林の奥になっていて、そこから動いている様子はありません。……それにこの【羅針盤】はある程度近づけば彼我の距離もわかるのですが、その距離を地図と照らし合わせれば丁度森の最深部に居ます」

「ふむん？　じゃあ例の高性能な【プランツアンデッド】を作る儀式でもやつとるのかの。資料を見た限りだと相応に時間が掛かる様じゃし……さつさと攻略せんと向こうの戦力が増えるな」

確かにネリルの言う通りでもあるが……問題は「ハデスランチ」がその儀式を『亡き妻と子供を蘇生させる儀式』だと思いついてるらしい事なんだよな。その儀式で生まれるのが只の高性能な【プランツアンデッド】なら、それを見た「ハデスランチ」がどんな行動を取るかが予測出来るん。

……同じ懸念をしたのか発言したペルシナさんや、それを聞いたひめひめとシズカさんはやや眉根を寄せていた。

「とにかく時間をかけても状況は悪くなるから、クロード君の言った通り全員で協力して速攻ダンジョンを踏破するのが一番つて事よ。……上空にあんなものをピカピカさせている以上は直ぐに侵入には気付かれるだろうしね」

「ああ、私の《天地一切大祓之矢》か……やっぱクツソ目立つわよねえ……」

そんな二人に釣られて俺達は森の遙か上空、大体ひめひめの真上に位置する場所で木々の間からでも見えるぐらい光っている光球を仰ぎ見た……それはひめひめのへエンブリオへ「アマテラス」の必殺スキルの待機状態であり、時間経過と共にあの光球が周囲から光エネルギーを吸収して威力を増す仕組みであるらしい。

……ちなみにあの光球はひめひめとの相対位置で固定される仕様であり彼女が移動すればその分だけ移動するので、こうしてダンジョンに入る前に準備してから移動時間の間にエネルギーをチャージして、ターゲットのへUBMへに遭遇したら即座に発射するという戦術も可能な訳だが……。

「この戦術の難点は頭上の光球が目立ち過ぎて奇襲には向いていないという事だ。光を吸収してるからか光球の周りだけ暗くなってるからすごい目立つ」

「元魔法系超級職のへUBMなら普通に気がつくよね。……だからこそ向こうが儀式を終えるまでに辿り付かないといけないわ」

「確かにクエスト達成には急ぐべきだったな。……気付かせてくれて助かったよクロード」

「あ、いや別に……」

俺がお礼を言ったらクロードは少し気まずそうに目を逸らしてしまった……シスコンシスコンとよく言われるが、妹関連で少し視野が狭くなる悪癖は直さねばな。

……そういう訳で俺達は早急に「ハデスブランチ」の元へと向かうべく、互いに協力しながらへサウダーテ霊林へを進んでいった。



「ここからは私も前線に出るわね。……多分、聖属性攻撃が乱舞する「ハデスブランチ」戦ではうっかり死にそうだから、あんまり役に立たないだろうし」

「シズカさん【ブローチ】とか付けてないの？」

「こんな身体ホデイだからまともな装備品が付けられないのよ。代わりに

火属性や光属性耐性のスキルは付けてるけど、アンデッド特効の聖属性は普通に死ぬるわ……あら、偵察に出た子達が敵を見つけたみたいね。先制を仕掛けるわよ《御霊顕現・亡霊召喚》【ブラッディベア・スペクター】。更に《ポルターガイスト》つと」

『GURUAAA!!』

ある時はシズカさんが呼び出した血塗れのクマ型ゴーストが、発見したトレントをその鋭い爪で斬り裂いたり……。

◇

「む、危ないのですアリマちゃん！ せいっ！」

「ありがとう！ ミュウちゃん！」

「……今アンタが手を触れたオーガがいきなり吹っ飛んだんだけど、何かのスキルか？」

「いえ？ 単に重心を崩して投げ飛ばしただけの只の技術ですよ。特に何かスキルは使ってませんね」

「ミュウちゃんならそのぐらいは当然だよね！ ……あ、トドメは刺さないと《レーザーブレード》」

「ええ……」

またある時は、そんな絶好調なミュウちゃんとすっかり仲直りしたアリマちゃんの妙に息のあった連携を見たクロードが困惑してたり……蟠りは無さそうです良かったな（目そらし）

◇

そんな感じで《サウダーテ霊林》を歩く事三時間程、俺達は順調と言えるペースで森の奥まで入り込む事が出来たのだが……突然、ネリルが足を止めて警戒を促した。

「……ふむ、気を付けろよ主人殿。どうも侵入者を感知する結界の内部に入り込んだ様じゃし、向こうからこれまでの連中とは違うアンデッドモンスターの反応がある」

「《レイライン・サーチ》《魔物索敵》……確かに純竜級レベルのモンスター
の反応があるな」

「……これは、間違いありません。師匠の【プランツアンデッド】の反
応です」

俺やペルシナさんの索敵結果を聞いた全員は一様に真剣な表情にな
って森の奥を警戒しつつ戦闘態勢に入って行き……その直後、森の
奥から木々をなぎ倒しながら緑色をした全長5メートル程のやや細
長い四足歩行のドラゴンが現れてこちらに突っ込んで来た。

……だが、よく見るとその目は白濁しており身体の一部が黒色の樹
皮に覆われたり湾曲した枝葉が生えていたり植物によって侵食され
ている様に見える、その頭上には【プランツアンデッド・グリーンドラ
ゴン】の文字があつた。

『GUGYURABAAAAA!!』

「こっちに来るわね……全員気を引き締めなさい！　これまでとは違
う相手よ!!!」

……そんなひめひめの号令とほぼ同時に、俺達と亜音速を超える速
度でこちらに突っ込んで来た【ハデスブランチ】配下の【プランツア
ンデッド・グリーンドラゴン】との戦いが始まったのだった。

霊林での戦い／冥樹降誕

□へサウダーテ霊林〈奥部

『GUGYURABAAAAA!!』

「ッ!? 速い!」

現れた【プランツアンデッド・グリーンドラゴン】は、AGI換算で5000^{亜音速}以上の速度でレント達へと突撃した……元となった【グリーンドラゴン】というモンスターは全長5メートル程度と地竜種の純竜としては小型だが、これは木々が生い茂る森の中でも動きやすくなる様に進化した結果でステータスは十分に純竜級と言えるものを持つており、更に植物や毒物に纏わるスキル持ちである緑の名前を持つている通り森林内での自己バフなども駆使するへサウダーテ霊林〈でもトツプクラスのモンスターである。

……とは言え、そもそも【グリーンドラゴン】は高S.T.R・E.N.D型の種族であり亜音速以上の速度が出せるのは些か可笑しいのだが、それでも現実としてドラゴンがそれだけの速度を出して彼等へと突っ込んで行き……。

『フリーダム・ランパード』《鉄壁の城壁》!」

『GUGYUAAAA!』

そのドラゴンの突撃は彼等に到達する直前、両者を別つ様に地面から生えてきた厚さ1メートル・幅10メートル・高さ5メートル程の城壁にぶつかつた事で止められた。

彼、でいふえくんのへエンブリオ〈自在城壁 パラスアテナ〉は普通のTYPEキャッスルが持っている様な特殊性が高いスキルを何一つ持っていない代わりに非常に高い耐久力と強度を持ち、そこに彼のメインジョブである【城壁衛兵^{キャッスル・ガード}】のパッシブスキル《城塞強化》と、城壁への物理的ダメージを減少させる《鉄壁の城壁》を乗せた上で分厚く展開すればドラゴンの突撃でもヒビが入る程度で済む強度を誇るのだ。

「止まったな、《足引きの呪縛域》!」

「まずはデバフを掛けるぞ、《ピュリファイ・アンデッド》!」

「じゃあ私は牽制ね、《ヴァイパー・アロー》《光炎之矢》！」

『G I E E E ! ? ? 』

そうして動きが止まった相手にはクロードの「減速領域 スロウス」による凡ゆる敵を減速させる領域テリトリーに捕まってAGIを2000弱まで落とされ、そこにレントの掛けた聖属性アンデッドデバフ魔法を追加された上で、ひめひめが「アマテラス」の五本の光熱の矢を番えて上空に射ち、それが城壁を乗り越える様に直角に曲がる軌道を描いてドラゴンの背に突き刺さった。

この《ヴァイパー・アロー》は魔弓手系統ジョブの魔法矢に特性を付与するスキルの一種で、放った矢が事前に設定した軌道を描いて飛ぶと言うもので、彼女は《魔矢多重展開》と合わせてそれぞれの矢の軌道をそれぞれマニュアルで個別に設定して城壁の反対側から攻撃したのだ。

『GUGYUAAA!!』

「《透視》……あら、あんまり効いてないわね。聖属性が使えないとは言え火・光属性ならそこそこ効くと思っただけど。《ハウンドアロー》《光炎之矢》」

……が、それらの矢はドラゴンの樹木に侵食された表皮を僅かに貫いた程度で大したダメージは与えられておらず、その様子を城壁を透かして見たひめひめは想定以上のステータスを訝しみながらも目の前の城壁を壊そうとするドラゴンを妨害すべく誘導効果を付与した光熱の矢を上から射かけていく。

「《看破》……ッ!?!? STRとENDが四桁後半ですって!?!? しかもこれは全ステータスに+100%のバフが掛かっています!」

「《メタ・アナライズ》……ふむ、これは《死霊強化》のレベルEXか。加えて「森司祭ドレイド」の森の中限定で植物の耐久性と魔法耐性を上げる《森の守護者》も掛かっとなるか」

その「プランツアンデッド・グリーンドラゴン」の異常なステータスの秘密を見破ったのは、ハイデスが作ったアンデッドに詳しく《死霊知識》スキルで解析能力が強化されているペルシナと、特殊な解説スキルと圧倒的な知識量を有するネリルだった。

……まあ、そこまでの秘密と言う程でも無く、このドラゴンは「ハデスブランチ」のレベルEX《死霊強化》などのパッシブスキルなどで強化されているだけなのだ。この霊林の管理者から権限を奪った所為でパッシブスキルの有効範囲も大幅に上昇している故に。

「でも『冥王』の《死霊強化》レベルは最大で10だった筈……
〈UBM〉化で強化されたの……?」

「《死霊強化》のレベルEXは『アンデッドを征する』【冥王】では無く、『アンデッドを使役する』キング・オブ・アンデッド【屍王】か【屍将軍】の領分じゃからの」

『GYU! GYUAAAAA!!』

「それよりもアイツ壁壊すの諦めて回り込もうとしてるぞ……《魔法遠隔起動》《魔法多重発動》《ホーリーライト》」

「回り込みはさせません、囲みます! 《フリーダム・ランパード》《キネティック・レジスト》!」

そんな二人の詳しい解説の間にもドラゴンはようやく壁を破壊出来ないと判断して横から回り込もうとするが、その周囲にレントが展開した聖なる光を放つ複数の光球によるデバフと浄化効果を受けて一瞬足を止めた隙に、でいふえくんが追加の城壁を左右と後方にまで展開してドラゴンを囲んでしまった。

『GU?!? GIGEEEEE!!』

「よし、パターン入ったわね。削り殺すわよ、《スコール・アロー》《炎勢之矢》!」

「成る程、そういうパターンな訳ね……《瞬間装備》【パラディンブレード】《グランドクロス》!」

四方を囲まれて一瞬狼狽えるドラゴンに対してひめひめは容赦なく上空から数十本の炎の矢を射かけて火達磨にし、それを見て現状の意図を察したレントは以前騎士団のクエスト報酬で貰った《聖属性適正》の付いた剣を装備しつつ、城壁の内側の地面のみから聖属性の光の奔流を吹きあがらせてドラゴンを焼き尽くした。

……これがひめひめ達パーティーが飛行能力を持たない相手へ行う『AGIデバフを掛けて四方を城壁で囲んで動きを封じ、その外側

から一方的に攻撃する』と言う必勝パターンであり、ガチガチに物理抵抗スキルを重ね掛けされた城壁に囲まれれば高いSTRを持つドラゴンと言えど破壊しての脱出は出来ず、猛毒のブレスを浴びせる《グリーンブレス》も使い用が無い。

「……アレだけの純竜がこうもあつさり……」

『ハメ殺しはこの世界での戦いの基本ドラ』

「壁の向こうは聖属性が乱舞してるから、今回は呪怨系スキル乗せた怨霊軍団を送り込むのは無しね」

「強力なバフが掛かっている状態異常攻撃出来る相手なら私の出番かと思いましたがそんな事はありませんでしたのです」

「しようがないよミュウちゃん、このパターンに入ったら私も周辺の見張りか万が一乗り越えるられた時の為の準備しかやる事無いし。……視線が通ってないと精神干渉し難いんだよね」

「やる事無いのは私も同じだけど、今回は相手のステータスがかなり高いから飛び越えられる可能性もゼロじゃ無いわよ」

そんな一方的な展開を見て、包囲と攻撃に参加していないメンバーは呑気に(ちゃんと周囲の警戒はしている)喋っているが、自身のヘエンブリオである、赤いラインの入った白い槍を持つクラリスが発した警戒通り一方的な攻撃に晒され続けたドラゴンは、度重なる聖属性攻撃とデバフを耐えながら頭上から降り注ぐ矢を無視して無理矢理城壁を登ろうとしていた。

「判断が遅い。ヴォルト、ネリル、お前達もだ。《魔法多重発動》《魔法遠隔起動》《ホーリー・ネイル》」

『承知……《サンダーボルト》!』

「了解了解……《魔法遠隔起動》《魔法威力拡大》《セイクリッド・バースト》」

『GGYAGGYAGGYA!?!?』

だが、よじ登ろうとした途中でレントが上空から10本程の聖属性エネルギーで出来た釘——直接ダメージが無い代わりにアンデッドなどの聖属性弱点の相手に突き刺す事で【拘束】と継続ダメージを与えるスキル——が放たれ、それが突き刺さったドラゴンは動けなくな

り地面に落ちた。

更にそこへ間髪入れずにヴォルトが上空から落雷を落としてダメージと「麻痺」を与え、その直後にネリルが聖属性・火属性複合の聖なる炎を城壁内部に放ってドラゴンを焼き尽くし光の塵へと変えた。

「……ようやく倒れたか。しかしアンデッドでありながら、これだけの聖属性攻撃を撃ち込んでようやく倒せるとはな」

「ステータス倍加や魔法耐性だけでなく、アンデッドと植物の複合による再生能力の高さもあつたからのう。……このレベルのモンスターを量産出来るなら厄介じゃろうて」

「こんな連中を大量に使役出来るとかだと厄介ね。……でも、今は手勢の数は減つてる筈だしこれ以上戦力を増やさない内に急いで『ひめひめさん！ 右!!』ツ!!?」

念の為に「プランツアンデッド・グリーンドラゴン」が完全に消滅した事を確認した彼等はようやく一息吐いていたが、突然大声で発せられたミカからの警告を受けたひめひめは咄嗟に右側を向くと、そこには辺りの森に溶け込んだ同じく体表の幾らかが黒色の樹皮に変質した虎——「プランツアンデッド・レイドタイガー」が今にもこちらに飛び掛かろうとしている光景があつた。

……この「レイドタイガー」はレイド急襲の名の通り気配を消してからの不意打ちを得意としており、今回も《気配遮断》と《森林迷彩》によって姿を消して《不意打ち》スニーク・レイドによる奇襲を狙っていたのだ。

『GUUAAAAAAAAA!!』
目視されたが故に《スニーク・レイド》非発見時攻撃力上昇は機能しなくなったものの、クロードがMP回復の為に《足引きの呪縛域》を解除していた事もあり、タイガーはレベルEXの《死霊強化》により超音速に到達した速度でひめひめに飛び掛かってその首を食い千切ろうとし……。

「《堅樹光球》！ ……舐めるな！」
『GEEGAAAA!!』

その牙は、直前に反応したひめひめが身に付けていたマント型の特典武器【葉竜外套 ドラグリーフ】の第三スキル《堅樹光球》によつ

て発生させた光の半球状バリアに阻まれた。

更に高出力の光エネルギーに触れた所為でタイガーの口部と頭部は焼かれ、それにより思わず飛び退って距離を取ってしまい……その一瞬が致命傷になった。

「クソツ、もう一度《足引きの……「HP 6万消費！

《我が命を捧げ破壊の一投を》!!!」

『G A A A A ? ? ?』

奇襲に対して他のメンバーが反応するよりも一瞬早く、真面目に警戒を続けていたクラリスが瞬時に自身のヘエンブリオ〈命捧血槍 ロングヌス〉のスキルを使用した上でそれを全力でタイガーへと投擲した。

……それに気付いたタイガーは慌てて避けようとするが、音速の三倍で飛翔し尚且つ追尾機能まである。その槍を躲す事など出来ずに横腹に直撃、そのまま着弾部を中心にした肉体の八割以上を消し飛ばされて倒された。

「よし撃破！ この森に来てからあんまり活躍出来てなかったけど漸く活躍出来たわ！ ひめひめ大丈夫？」

「ええ、大丈夫だけど……助けて貰った身でこんな事を言うのもアレだけど、クールタイム24時間あるスキルをポンポン使うのは……」

「姉ちゃんはボスキラーなんだから節約とかしろよ」

「《セルフ・フォースヒール》……でも、使わずに死んだら意味ないじゃない？ それに私は宵越しのエリクサーは持たない主義なの」

そんなひめひめとクロードのツツコミに対してクラリスは戻ってきた【ロングヌス】をキャッチしながら、自己回復魔法で減らしたHPを回復させつつあっけらかんとそんな事を言った……彼女のヘエンブリオ〈ロングヌス〉は世界一有名な聖遺物をモチーフにしている通り多様かつ強力なスキルを複数持っているが、その性能を發揮する為には多量のHPをコストに捧げる必要がある上、クールタイムは全てのスキルが24時間と言う非常にピーキーな代物なのだ。

……そんなヘエンブリオ〈ヘエンブリオ〉なのだが、彼女自身が決断力に溢れた所謂『エリクサー症候群』から程遠い性格なのもあって、必要な時にス

キルが使えない事も結構あったりする。

「それに、これ以上時間を掛ける方が危なくない？ あの虎AGI高いからでいふえくんも君でも捉えられなさそうだし」

「……まあそうね。ここで無駄に時間掛けるぐらいなら一気に先に進む方がいいかな、レント達も居るし……足を止めてゴメンね！ 先に進むわよ！」

だが、クラリスの決断力はその場その場での咄嗟の判断力に優れているからでもあり、今までも本当に致命的なタイミングでミスを犯す事は無く、その辺りを理解しているひめひめは話を切り上げて今はとにかく先に進むべきだと判断して森の更に奥へと進む事にした。

「森の奥に向かうなら急いだ方がいいじゃろ……先程から大気中や地脈の自然魔力が森の奥へと流入しておるからな。既に儀式は始まっているのかもしれない」

「後、なーんか森の奥から微弱な怨念っぽいモノを感じるのよね。何か起きようとしているのかも」

「そういう事はもうちよつと早い言いなさいよね……とにかく警戒しつつ急ぐわよ！」

「……師匠、今度こそは間に合わせます」

「……そんな各々の思いを抱きながらも彼女達は森の奥へと進んで行ったのだった。」



??へサウダーテ霊林◇【冥樹死王 ハデスブランチ】

『……ようやくだ、ようやく儀式の準備は整った……』

彼女達が襲撃して来たアンデッド達を退けた頃、へサウダーテ霊林◇深部で堕ちた【ハデスブランチ】は彼だけがそう思っている。『完全な死者蘇生の術式』準備を終えていた。

『……待っていてくれ、お前たち。すぐに永遠の命を与えてやれる。

……さあ、死者蘇生の儀式を始めよう……地脈接続、自然魔力吸収開始……』

そう言った彼は魔方陣の中で霊木に触れながら儀式魔法発動の為に呪文を詠唱し始め、その呪文に呼応して魔法陣と霊木が光を放ち、魔法陣に刻まれた術式に従って周囲の魔力を吸収しだす。

『冥樹死者化術式正常起動……続けて蘇生術式を……』

普通の言葉ながらどこか狂気を感じる呪文の詠唱が進むと共に、魔法陣と霊木の光が強まりながら吸収した膨大な魔力を使って魔法陣に刻まれた術式が効果を発揮し始める……そうして順調に儀式を進めている様に見える彼だが、そこで二つのイレギュラーがあった。

『肉体から抽出した霊的情報固定……知性復旧……』

まず一つ目はこの魔法陣に刻まれた術式は『あらゆるモノを知性のあるアンデッドにする術式』であり、彼はそれによって妻子の遺体をアンデッド化させようとしていたのだが……魔法陣の特性上、当然ながらその術式の効果範囲内には生物である霊木が入っていた事。

『……』

そしてもう一つは彼が狂気の中で作り上げたその術式が、彼が思う以上の効果を持っていた事……膨大な魔力を抱えながらもモンスタライ化しなかった程に安定していた樹齢数百年の霊木を即座にアンデッド化させてしまう程の効果があった事である。

……生前の彼ならばそれらの不備も当然気付く事が出来ただろうが、今のモンスターとなり狂い果てたソレには気付く事が出来ず……故にここに「最悪の事態」となって結実した。

『このまま引き続き霊的情報の固定を……これは……!?』

『……』

アンデッドモンスター【ハイ・アンデッド・ジャイアントウッド】と化した霊木は、術式の効果でかつての管理者の残留思念をすくい上げて知性が芽生えた事により、自身の領域に侵入して管理者を塵殺した【デブランチ】を敵性存在と認識してしまった……この術式は妻子を蘇らせる為であるが故に、アンデッド化した後の制御などは一切考えられていなかったのが災いした形だ。

『!!?』

『何を!?? ……ガアア!!?』

????????

侵食スル屍界

□〈ヘサウダーテ霊林〉深部

「……………む。これは……………《メタ・アナライズ》……………多量の自然魔力が森の奥に現れた何者かに吸われておるな。どうやら少々遅かったらしい」「うわあ……………森の奥から物凄い怨念が……………これはまずい感じ?」「何ですつて?」

彼等【ハデスブランチ】討伐パーティーは森の奥へと向かっている途中、突然顔を顰めながらそんな事を言い出したネリルとシズカを見て思わず足を止めた。

「どう言う事? 詳しく説明して頂戴」

「えーつと、私は〈エンブリオ〉のスキルとサブジョブに入れた【怨霊術師】レイスマンサーの《怨念感知》とリアルスキルの組み合わせで怨念を知覚出来るんだけど……………この先からスゴイヤバイ感じの怨念がするんだよね。これは以前見た純竜級怨念駆動アンデッドを遥かに超えてる……………」

「さっきまでの魔力吸収は資料に書かれておった儀式に使われる量に近かったが、今のはそれを遥かに上回る量を吸収しておるんじゃない。……………このレベルの魔力を運用可能なら、下手をすると古代伝説級レベルのモノが生まれたのかも知れんのか」「そんな……………師匠……………」

二人の言葉を聞いてティアンであり【ハデスブランチ】に関わり深いペルシナを中心にパーティー内に動揺が走るが、それでもレントとひめひめの場数を潜ってる組は即座に対応し出した。

「ネリル、シズカさん、森の奥で何が起こっているのか、そして【ハデスブランチ】に何があつたのかは詳しく分からないか? ここからだと森が鬱蒼としていて先が見えん」「流石にそこまでは……………」

「《マルチ・クレイヤボヤンス》《ハイ・アナライズ》《クリーチャーサーチ》対象アンデッド……………ふむん、ここから500メートルぐらい離れた場所に反応……………いやこれはまさか森がアンデッド化しておるのかの

「？」

「……成る程、でいふえくんど『高台』をお願い。私が見てくる」

「了解……皆さんちよつと離れてて下さい。《フリーダム・ランパード》！」

そんなレントとネリルの不穏な推測を聞いたひめひめが指示を出すすと、それに応えたでいふえくんどは直ぐに彼女の足元から周囲の木々の倍以上の高さがある塔のような細長い城壁に変形させられた「パラスアテナ」がせり上がり、その身体を一気に森の上へと移動させた。

◇

「わあ……何アレ……」

「……」

「……」

「……」

「……更にその中心部には他の木々よりも三倍は大きく、頂点が禍々しいオーラを放つ不気味な人型の樹洞になっている樹木が屹立していた。」

「《遠視》《看破》《遠隔識別》……【冥樹屍界 バイオハーネス】ねえ。」

例の儀式によって生まれた^{ユニーク・ボス・モンスター}U B Mって事で間違いなさそうか

しら。……私のスキルレベルじゃ識別しきれないけど、だからこそ古

代伝説級つてのも領^{わね}ね」

「……」

「……」

「……」

……そんな彼女の考えに呼応してか、或いは彼女の上空に光り輝く必殺スキルの光球に気が付いたのか紫の森の中心部にある巨木「バイオハートデス」がどちらへと意識を向けながら騒めき始めた。

「……ついに気付かれた？ それとも上の必殺スキルに……もしあの森が無制限に拡大するのなら、最終的にこの「サウダーテ霊林」全てが「バイオハートデス」の支配下になる可能性もあり得るか。……今から必殺スキルを撃つわ！」

時間を置いたらマズイと思つたひめひめは地上の仲間と連絡した後、数時間のチャージによって超級職の奥義すら上回る威力となった「アマテラス」の必殺スキルで中央にある本体っぽい巨木を撃ち抜こうと狙いを定めた。

……だが、そのひめひめの行動が危険な物だと融合した「ハデスブランチ」から得た知識と《危険察知》《殺気感知》のスキルで把握した「バイオハートデス」は、即座にこれまた「ハデスブランチ」から得た「対応策」を実行する。

『Forest祭の祝福』
『Fire耐性付与』
『Holy耐性付与』
『Shine耐性付与』

木々に付いた樹洞の多くから悍ましい唸り声を上げた「バイオハートデス」は、更に保有する七桁後半の膨大なMPの一部を解放して自身でもある紫の森へと各種耐性バフを掛けてしまった。

これは森司祭系統の森林内限定全体バフにアンデッドが弱点とする各属性のレジストスキルを組み合わせた、「アンデッドの弱点を一時的に人並みにする」という「ハデスブランチ」が生前から得意としていたオリジナルスキルであり、古代伝説級に進化して膨大なMPを注ぎ込んだ今では超級職の奥義すら防ぐ強度になっていた。

「ツッ？ アレは面倒そうね……《天地一切大祓之矢》!!!」

……それを見たひめひめは即座に必殺スキルを使用して自身の上空に待機させていた光球を巨大な聖光の矢へと変形、その長時間のチャージを得た必殺スキルを中央の巨木へと射ち放った。

『■■■■■■■■■■』
『????????』
『????????』
『????????』
『……』

「うわあ、中央のクレーダー無視してドンドン外側に拡大してるわ。……私の必殺スキルつてあくまで超強化した矢を放つタイプだから、弾速や威力は高くても攻撃範囲はそこまでじゃ無いってのが致命的だったか」

故に彼女の必殺スキルで森の何割かが削られたとしても【バイオハーデス】は未だ活動可能かつ二百万前後のHP・MP・SPを保有しており、それも周囲の木々を再び取り込んでどんどん元通りどころか元を上回るレベルまで拡大しようとしているのだ。

……もちろん生者を直接アンデッドに変えるスキルである《冥樹侵食・屍界拡大》はコストとして少くないMPとSPを要求されるが、前述の最大MP・SP増加に加えて周囲の自然魔力を吸収しての自動回復スキル《魔力集積賦活》により、この自然魔力が豊富なヘサウダーテ霊林内なら消費分を即座に回復でき、先程の大規模魔法で消費されたMPすらも十分程度で完全回復してしまうのである。

『????????』
『????????』
『……』

「あー私の予想が正しかったら、あの【バイオハーデス】相手にこっちの戦力じゃ現状打つ手無いわよ。……レント達が良い感じでアレに有効な手段とか都合良く持つてないかしら……兎に角、一旦降りて他のメンバーと相談ね」

弱点を突いた必殺スキルを撃ち込んで尚、全く問題なさそうに自身自身でもある「屍界」を広げる【バイオハーデス】を見て頭を抱えつつも、ひめひめは今後の動向をどうするかを相談すべく地上に降りたのだった。



「……で、私が見た範囲ではこんな感じだったんだけど……ねえレント、なんかこう都合良く【バイオハーデス】を倒せる手段とか持つてない?」

「流石にそんな都合のいい手段は持ち合わせて無いな……ネリルお前

は?」

「聞く限り今のワシでは倒せんヤツじやな。増殖と魔力回復特化で倒すには体積全部吹き飛ばす必要がある典型的な条件特化型、必要なのが森ごと消し飛ばす超広範囲大火力ではのう。……【バイオハーデス】はこのままだと森全部飲み込んで神話級に至りかねない古代伝説級最上位といった所か」

『……………』

……そうして偵察と先制攻撃を終えて降りてきたひめひめの話と、その情報から語られたネリルの推測を聞いた事によつてその場には重苦しい沈黙が広がった。

「その【バイオハーデス】が使った《森司祭の祝福》と各種レジストスキルの組み合わせは生前の師匠が得意としていた技術です。……もしや【バイオハーデス】は師匠が使役しているのでは……?」

「いや、その防御スキルは【バイオハーデス】自身が発動してたよ」「おそらく儀式の際に何らかの事故があつて取り込まれたんじゃないやろうな。……そもそも古代伝説級を作り上げるのは並大抵の事では無いし、それがいきなり現れたのなら素材として伝説級〈UBM〉を含む物を使いでもない限りは無理じゃろ」

「……そうですか。……どうやら私はまた間に合わなかつた様ですね」

そんな事を言いながら溜息を吐くペルシナを見て更に空気は重くなるが、今はひめひめが与えたダメージのお陰で動きが鈍っているとはいえそう遠く無いうちにここまで到着するであろう【バイオハーデス】にどう対応するのかを決める必要がある事は全員が理解していたので、とにかく彼等はひめひめが音頭をとる形で早急に方針を決める事にした。

「まずは逃げるか戦うかを決めましょう」

「いや、勝ち目がないなら逃げ一択じゃね?」

『へマスター』だけなら敗北覚悟で特攻って手もあるけどね。へマスター』なら死んでも大した問題じゃないし』

「命なんて軽い物だ……主にへマスター』のは。……という冗談はさて

おき、放置しておくのは危険過ぎる相手だから倒せなくとも可能な限り情報は入手しておきたいな」

ひめひめ・ミカ・レント達が中心になって『敗北覚悟で「バイオハーデス」に挑む』か『サウダー・テ霊林』から脱出して逃げる』かの二択に今後の行動を絞る所までは行つた。

「つーかへマスター」だって死んでも問題ない訳じゃないだろ、装備口ストとか」

『別に特攻は強制じゃないよ、あくまで自由参加だから逃げてても良いし。要するにチーム分け?』

「まあ、あの『バイオハーデス』についてニツサ边境伯領に知らせるメンバーも必要だから必然的にそうなるわよね。ペルシナさんの護衛も兼ねて」

「待つて下さい! 『バイオハーデス』が師匠によって生み出されたモノであるのなら私がそれを止めなければ……!」

「いやそれはホント勘弁してくれペルシナさん。今回は実質全滅前提の特攻だから、それで一緒にいるティアンの貴女に死なれたらこつち(主に妹)の精神状態が最悪になって勝算が下がる。……それにこの事を街に伝えるには社会的信用のあるティアンの方が良いし」

その際にペルシナが付いていくと言い、それをレントが合理的(に見える)説得によってやり込めると言う事もあつたが……とりあえず全滅覚悟で挑む者達と街へ報告に行く者達に分かれて行動する事となった。

「……くつ、仕方ありませんね。分かりました……後の事はお願いします」

「すみません、ペルシナさん……後は任せて下さい」

「このひめひめに任せて頂戴! それにへUBM」に挑むはユニークコンテンツへの挑戦「マスター」の花だからね!」

【クエスト】【討伐】——【冥樹屍界 バイオハーデス】 難易度:十【が発生しました】

【クエスト詳細はクエスト画面を」確認ください】

悔しげな表情をしたペルシナがそれでも自分の成すべき事をしな

ければならないと覚悟を決め、これから死地へ向かうへマスター達へと頭を下げると共にクエストが発生した。

「……難易度が『十』なんて初めて見たよ……【ハデスブランチ】の討伐でも難易度『八』だったんだけど」

『クロード君はどうするの？ さつきから否定的な意見ばかりだし嫌なら報告側でいいけど』

「俺は行かないとは言っていないだろ。アレはあくまで一般的な意見を言っただけだし……と言うか、姉ちゃんを始めへマスターへはみんなへUBMへに挑戦する気満々みたいだけど、護衛に回るヤツはいるのか？」

「じゃあ私が護衛役に回るわ。……アンデッドである私が一緒だとレント君達が全力の聖属性魔法使えないっばいし、妥当な人選でしよう」

時間もない事もあって手早く話し合った結果、街への報告にはペルシナとその護衛であるシズカが向かい、それ以外の全員で【バイオハーデス】へと挑む事になった。

……各々『最も犠牲の少ない未来を掴むため』や『折角のへUBMへだしとりあえず戦っておこう』とか『クエスト達成に全力を尽くす』など考えは違うが、デスペナも厭わないし足の引つ張り合いをする気も無くへUBMへと戦う思考だったのが幸いした形だ。

「まあ、このままお別れするのもアレだし置き土産ぐらいは置いておくわね……《多重同時召喚》《御霊顕現・亡霊召喚》【キングバジリスク・スペクター】×三!!」

『『KYASAAAAA』』』

そうして特攻チームが森の奥へと進もうとした時、唐突にシズカがスキルを起動すると共に全長10メートルはある大型の蛇型の霊体アンデッドを三体も召喚したのだ。

……ちなみにこれらはかつてシズカが単独で討伐した特級危険生物【キング・バジリスク】の「群れ」からドロップした素材全てを注ぎ込んで作られた、現状保有する最強の霊体アンデッドのストックである。

「ちよ!?? シズカさんそんな危険生物を……!」

「さーらーにー、これだけじゃないわよー! 怨念解放《テッドリー・グラτζジレイス》! 更にもう一つ《スピリット・オブ・リヴェンジ》!」

そんな唐突な危険生物召喚に動揺するメンバーを尻目に何故かテ
ンション高めでノリノリなシズカは身体ボディから《斯の身は怨嗟の受け皿
也や》に蓄積されていた身の毛もよだつ程の膨大な怨念が放出し、そ
れらを発動したスキルに沿わせて完璧に三体の「キングバジリスク・
スペクター」に注ぎ込んでいく。

……【ゴーストマンサー幽霊術師】の奥義《テッドリー・グラτζジレイス》は使役し
ている霊体アンデッドに大量の怨念を注ぎ込んで超強化するスキル
で、【怨霊術師】の奥義《スピリット・オブ・リヴェンジ》はこれまた
霊体アンデッドに怨念を注ぎ込んで凶悪な呪いを纏わせ、更にそれら
が倒された時に倒した者へと超強力な呪いを掛けるスキルであり
……。

『『ツ!?? A A A A A A A A! G I Y E E E A A A A A A A A A
A A !!!』』

「よし、良い感じに仕上がったわね」

「……いや、どう見てもヤバイ感じに暴走してませんかコレ」

その特性上、どちらのスキルも一歩制御を間違えば対象にした霊体
系アンデッドが暴走して辺りに呪いを撒き散らしかねない非常に危
険なスキルである……少なくとも今のシズカの様に『良い仕事したわ
』みたいな表情で平然としていられる様なモノではない。

それ故に他のメンバーは明らかにヤバイオーラを漂わせながらの
たうち回る【キングバジリスク・スペクター】から距離を取って構え
ているし、その二つのスキルと【キング・バジリスク】の恐ろしさを
よく知っているペルシナに至っては顔を真っ青にしている。

「ふむ、見事な怨念制御じゃな。ここまで出来る者はそうおらんじや
ろ」

「その辺りの技術には自信があるのよねー、お陰で蓄積してきた怨念
はすっからかんだけど。……ほらみんなもそんなに怯えなくて良い

V S 【冥樹屍界】

□へサウダーテ霊林〈深部・【冥樹屍界 バイオハーデス】 勢力圏
『『GUSYABRUGSYAAAAA!!!』』

そんなとても正気とは思えない叫び声を上げながら、三体の【キングバジリスク・スペクター】はそこら一带に存在する黒色の幹と紫色の葉をした木々——古代伝説級へUBM《ユニーク・ボス・モンスター》【冥樹屍界 バイオハーデス】の肉体の一部へと当たる触る攻撃を仕掛けていた。

『BWERRUSYAAAA!!!』

『GEESSSYAAAA!!!』

『KIIUEEE!!!』

まず一体のバジリスクが吸い込んだ者に【猛毒】【衰弱】の状態異常を齎す《ヴェノムブレス》を辺りにばら撒き、別の一体が【バイオハーデス】の一本に噛み付いて牙から強力な【溶解毒】を送り込む《デッドリー・ファンク》で攻撃し、最後の一体は目視した対象を【石化】させる《ペトラアイ》によって木々を石に変えてから体当たりで砕く。

『■■■■■■■■』

『KYABESASYSYAAAAA!!!』

更に三体とも状態異常系スキルを使う度に周囲の物体を毒によって汚染する《ヴェノムフィールド》というパッシブスキルによって、辺りの土壌は既に毒性を帯び始めており、そこに根を貼る【バイオハーデス】を猛毒によって徐々に衰弱させていった。

……これらの強力な各種状態異常攻撃こそ【キングバジリスク】が純竜級モンスターの中でも恐れられている原因であり、加えて今の彼等は霊体なので物理攻撃は効かずシズカから付与された呪詛によって上位純竜に迫るステータスと攻撃して来た相手に呪怨系状態異常までも齎す力を得ている事から、霊体に有効な攻撃手段の無い相手なら超級職や伝説級レベルのへUBMすらも打倒出来る程の戦力と

なっ
てい
たが
……
?????
?????
?????
?????
?????
?????
?????
?????

ine Whip》《Branch Needle》《Vine Whip》《Branch Needle》

『GIGIGYA!?!?』

『GUGUI!?!?』

『GYASYA!?!?』

そして死霊術師系統のアンデッドへのデバフスキル、及び霊体への直接接触と直接攻撃時に固定ダメージを与える事が可能になる《心霊の手》を使った上で、侵食・再生させた多数の木々の枝や根を操つての《ヴァインウィップ^鞭》による直接打撃や、鋭く尖らせた枝を飛ばす魔法によって「キングバジリスク・スペクター」達へと全方位から攻撃を始めたのだ。

……本来ならオブジェクトである木々が変質した「バイオハーデス」の物理ステータスはAGIが300前後、STR・ENDも2000前後というへUBM〈〉としては非常に低い数値であるので純竜級であるバジリスクに対して与えるダメージは少ないのだが、微量とはいえステータスに関係無く固定ダメージを与える《心霊の手》と、何より周辺全てが「バイオハーデス」となった故の圧倒的な物量によって徐々にバジリスクのHPを削っていく。

『GESYAAAAA!!!』

『SYAHAAAAA!!!』

『KYEEEEEEEE!!!』

それに対して三体の「キングバジリスク・スペクター」達も辺りの「バイオハーデス」へと猛毒の牙やブレスで果敢に反撃を仕掛けていくが、既に病毒対策を固められているので毒は効果が無く、直接攻撃も相手の侵食・再生速度が上回っている所為で焼け石に水。

一応、付与されている《スピリット・オブ・リヴェンジ》の効果で攻撃してきた「バイオハーデス」にバジリスクの怨念を具現化した対象腐敗・HP継続低下の「呪毒」という呪いを与えてはいるが、そもそも怨念で動くアンデッドである「バイオハーデス」には効きが悪く、更に《魔力収束賦活》によるHP回復によって相殺されるので余り効

果が無かった。

『GYEGYAAA!!』

更に一体のバジリスクが森の奥から現れた巨大な鬼型アンデッド
「ハデスブランチ」が森に配置していた「プランツアンデッド・
フォレストオーガ」によつて殴り飛ばされたのだ……が、よく見ると
その鬼型アンデッドの頭上にある名前表記は「冥樹屍界 バイオハー
デス」になっており、その脊髓の辺りには一本の黒い蔓が生えて森の
奥へと続いていたのでソレも「バイオハーデス」の一部だと分かる。

……ちなみにスキルによつて体積と共有されているHP・MP・S
P以外の「バイオハーデス」のステータスは取り込んだ生物を基準に
してそれぞれの部位ごとに設定されており、純竜級モンスターを取り
込んだ場合ならば植物アンデッド化によつて多少は変質するがその
部位だけは純竜級相当のステータスとなり、更にそのモンスターのス
キルの程度は使用可能になっているのだ。

『Vine Whiplash Branch Needle』『Vine
Whiplash Branch Needle』『Vine Whiplash
Branch Needle』『Vine Whiplash Branch
Needle』『Vine Whiplash Branch Needle』
『GYEGYAAA!!』

そうして同じく《心霊の手》の効果を受けたフォレストオーガ部分
の打撃、他に侵食して戦闘用の部位とした後に脅威を排除する為に集
めた「サウダーテ霊林」のモンスター達の攻撃、そして変わらず降り
注ぐ周囲の木々からの攻撃を受け続けたバジリスク達は徐々にHP
を削られていった。

……それでも怨念による狂化を受けたバジリスク達は文字通り、
死にモノ狂い”になりその牙で、猛毒のブレスで、強化されたステ
ータスによる打撃で全方位から迫る「バイオハーデス」を破壊し続けた

速度からは逃げられん」

「んな事は言われなくても分かっただよ！　こうなったらやってやらあ!!!」

「あら、やる気ねクロード」

そして、ひめひめが遠視によって「バイオオハージェス」の侵食がこちらまで近付いている事を知った彼等は各々戦闘準備を整えて迎え撃つ構えを見せた……そこでレントは先程から「地面に幾つもの【ジェム】を設置した陣を敷いて何やら準備をしていた」ネリルに向けて声を掛けた。

「ネリル、準備の方はどうだ？　……今回に限っては本気を出して貰うぞ」

「分かっておる……流石に今回は相手が相手じゃし、ワシが全力出しても勝てんヤツじゃから遠慮なく行くぞい。……そんでもって準備は完了じゃから行くぞ！　これぞ「森キング・オブ・フォレスト」が最終奥義！
《魂》の森《じゃ!!!》」

いつに無い気合を入れたネリルがそう宣言すると共に地面の「ジェム魔・トランス力・ス護・フ渡・ア渡」が一齐に砕け散り、そこから大量の魔力が放出されながら「ネイ自・チャー然・エレメンタル」たるネリルのスキル《自然魔力操作》によって掌握された自然魔力と混じり合って辺り一帯にある普通の木々へと浸透して行き……直後、周囲の木々や植物全てが光の塵——リソースへと変換されて消滅した。

そうして発生したリソースを更にネリルが周囲の自然魔力と混ぜて操作して行き、彼等を中心とした半径30メートル程の周辺環境を『聖なる光で輝く半透明の木々で出来た森』へと再構築したのだ……これこそが森司祭系統超級職「森王」の最終奥義《魂の森》、周囲の植物全てと自然魔力をコストにして、その範囲内に任意の森林内バフ効果を超強化した上で展開するスキルである。

「……ふう、とりあえずこの《魂の森》の範囲内では常時『聖属性の対アンデッドデバフ効果』と『生物に対する呪術耐性・聖属性バフ』と『植物の成長阻害』と『諸々のステータス上昇及びHP・MP・SPの自動回復』が掛かる様にしておいたからのー。……しかし、今のワシ

じやし、生存用の「カラクリ」も仕込んであるから問題無いじやろ」
「《フィジカル・バーサーク》《絶望セシ預言者》《狂乱セシ聖戦士》《狂喜スル守護聖人》《狂イ果テル司祭》《狂走スル巡礼者》……よし、全部のせ最大バフも慣れたから大分早くなった。正直精神系状態異常とか凄く効き難いだろうけど」

「私も特殊性特化でステータス低い相手は苦手ですから気にしないで下さい。……とりあえず《聖拳》と《フレイム・フィスト》を重ねがけで殴るぐらいです」

『ふふふ……どうやらこの新武装「ラブリーリリカルスターハートステッキ」の力を示す時が来たみたいドラ』

「いや待って、そのどう見ても魔法少女ステッキなソレは『レジエンダリアのへマスター』が作った物だってニツサにいた闇商人から買いました』

「「知ってた」」

だが、そうして動きが鈍っている間に、他のメンバーも戦いの準備を終えて「バイオハーデス」が迫り来る方向へと歩いていく……絶望的な戦いではあるが、彼等は不死身の「へマスター」であるが故に臆する事無く死地へと向かうのだった。

勝算の見えない戦い

「へサウダーテ霊林」深部

「Whip」
『Branch Needle』『Vine』

「ええいつ！ 数の多い……『簡易聖別』『ウィールドスピア』！」

自身の前方を埋め尽くす様に存在する黒と紫の森——【冥樹屍界バイオハーデス】が無数に放ってくる枝の矢と木製触手に対して、クラリスはそれらの攻撃を無傷で受けながら逆に接近し、自身のヘンブリオである槍【ロンギヌス】に【戦僧兵】ウオリアーモンクのスキルで聖属性を付加した上で超音速で振り回す事で邪魔になる触手を打ち払いながら死霊化した木々を薙ぎ払った。

……現在彼女は『コストにしたHPの四分の一だけ自身のSTR・END・AGI・【ロンギヌス】の攻撃力を上昇させる』固有スキル『我が命を捧げ無双の力を』に四万のHPを捧げる事で、物理ステータスが一万以上という前衛系超級職並の能力を有している。

『Branch Needle』『Vine Whip』
『Curse Bullet』『Curse Bind』
??????

「げっ!? 呪いはMP判定なの！ 『ブレッシング』！」

だが、クラリスが超級職相当のステータスで幾ら木々を砕こうが森の奥から次から次へと追加で【バイオハーデス】が現れる為にキリがなく、更に物理攻撃では倒せないと判断するや相手は攻撃手段を【呪詛】を齎す呪いの弾丸と【呪縛】を与える呪いの連射に切り替え来たのだ。

咄嗟にクラリスは司祭系統の聖属性の防護を掛けて呪い・闇属性を軽減するスキルを使って凌ぐが、拡大・成長を続ける【バイオハーデス】の最大MPは既に数百万を優に超えるレベルにまで達しており、大量に全方位から放たれる事もあって只の下級呪術ですら呪怨系耐性がある【大戦僧兵】グレイト・ウオリアーモンクの彼女でも無視出来ない威力になっていた。

『Curse Bullet』『Curse Bind』『Curse Bullet』『Curse Bind』

「ぎゃあ！ しかもスキルの残り時間が！」

「いいからこの『結界』の中まで下がれ馬鹿姉！ 《アイス・ブリザード》！」

加えてクラリスに《我が命を捧げ無双の力を》の効果時間は自身の合計レベル分の秒数——カンストしている彼女の場合は500秒であり。クールタイムも24時間と長大なので時間切れの際に敵に囲まれていれば当然詰む……故に慌てて彼女は後方の《魂ソウル・フォレストの森》の内部に走って行き、それを追いかけて来た触手は援護を担当していたクロードが氷混じりの強烈な冷気を吹き付けて氷漬けになりながら砕かれた。

「……うむむ、これで自己強化も使い切ったし、後は『状態異常回復』と『結界展開』しか残ってないから直接戦闘能力は皆無になったわ。どうしょ？」

「とりあえず消費した分を回復させながら【ブリスト司祭】か【ライフ・ウォール肉壁】のスキルで援護でもしてろ！ ……済まん！ こっちは姉が出洩らしになった!!」

「……でいふえくんど、他のフォローはいいから東側の穴埋めに向かって。《アローエフェクト：フリードロウ》《光炎之矢》！」

「了解」

そんなクロードの声を聞いたひめひめは《魂の森》に於ける西側の戦場で戦っているミカを囲もうとしていた木々に援護の矢を放ちながら、でいふえくんどを東側からの「バイオハーデス」の侵食を抑える役回りへと向かわせた。

……そう、現在彼等は半径30メートル程度に展開された《魂の森》の四方に散らばり、その範囲外全ての森を侵食し終えた「バイオハーデス」相手に絶望的な防衛戦を演じている所だったのだ。

「おお、流石はひめひめさん狙いが凄く正確だね！ 《スターハートアタック》《インパクト》・ストライク》！」

「?????」
「?!?!?!」
「?????」
「Whelp」
「?????」
「……《Branch Needle》《Vin

『……と言つても、状況は大して好転しないんだけど！ 《双棍撃》《イ

ンフェルノ・ブレイク』!』

そんな《魂の森》西の外側ではミカが援護射撃によって出来た隙に、左手の「ラブリリーリカルスターハートステッキ」のスキルを使ってからファンシーな音とエフェクトを撒き散らしながら「バイオハーデス」の内数本を聖属性と衝撃波で粉々に砕いた……これは単純な本人のSTRに加えてメイスの攻撃力と強度を強化する基本スキル《戦棍強化》と、その効果を装備スキルにまで拡大する《戦棍鬼の怪腕》と言ったパッシブスキルでの底上げもある。

それでも未だに生い茂り増殖を続ける「バイオハーデス」は反撃に枝矢と蔓鞭を多方向から見舞うが、ミカは持ち前の「直感」で安全位置を即座に把握して退避、更に「デュアルストライカー双棍士」のスキルによって両手で同時にアクティブスキルを行使して炎を纏わせた「ギガス」と「スツキ」の両方を振り回して辺りの木々を焼き払う。

「ウングド・スラッシュ」! 《レーザーブレード》! ……うぐぐ、やっぱり精神系状態異常は効きにくい……と言うか、「一部」にしか効いてない感じ?」

北の外側で戦っているのはミュウとアリマの親友(に戻った)タツグである……アリマの方は物理ステータス上昇の《フィジカル・バーク》、STR・AGI大幅上昇&消費SP軽減の《狂乱セシ聖戦士》、強力な危険察知や畏感知などの感知能力を与える《絶望セシ預言者》、物理・魔法被ダメージ割合軽減&END大幅上昇《狂喜スル守護聖人》、HP自動回復&病毒・呪怨系状態異常耐性上昇の《狂イ果テル司祭》、AGI大幅上昇&制限系状態異常耐性上昇の《狂走スル巡礼者》と言ったスキルを使う事で得た超級職に迫るステータスで剣を振るい木々を片端から斬り裂いていた。

更にそれらのデメリットである【狂乱】【絶望】【被虐】【狂気】【惑乱】などを【シャカ】のスキル無効にしつつ、敵のみを対象とする様に設定した《伝播スル狂信》によってそれらの状態異常を【バイオハーデス】に与えてもいたのだが…。

「そうですね、時折木々の何本かの動きがおかしくなっていますが、どう

も「バイオハーデス」全体には効果が届いていない様です……おつとアリマちゃん危ない《スライスハンド》《正拳突き》《アッパー》《コークスクリュー》！」

「ありがとう、ミュウちゃん《サンダースラッシュ》！」

……その隣で拳に聖属性と炎を纏わせてアリマでは対処しきれない不意打ちなどを的確に見切つて殴り飛ばしているミュウの言う通り、相手が自身を認識している事が条件である《伝播スル狂信》では「バイオハーデス」全体に効果が届いてはいなかったのだ。

『うむむ……「バイオハーデス」はステータスが部位毎に異なるから《模倣》がやり難い、部位別に対象にも出来るけどそもそもステータスが低いし。……《纏装》の方も弱い攻撃を連射するタイプだから余り意味がないか……ごめん、相性が悪くてイマイチ僕のスキルが刺さらないや』

「仕方ありませんよミメ。MPは《聖拳》と《フレイム・フィスト》に回しましょう。相手のステータスなら貧弱な素の私でもなんとかするでしょうし、アリマちゃんの妨害もこの戦場に限れば結構効いてますから」

「……」

どうにも相性が噛み合わない事は凹むミメーシスを励ましつつ、ミュウは呪弾や枝矢を躲しながら精神汚染を受けた妙な動きをしている部位とそうで無い部位を即座に見切り、正常な部位だけを聖炎を纏った拳で撃ち砕いてその場の戦況を優位にしていくな。

『Fear・Scream』

「お、精神系は効かないので。ただやっぱり幾ら戦つても奥から奥から追加が来るから結局はジリ貧だね……こうしてミュウちゃんとゲームをするのは楽しいけど詰み確定じゃ……」

「《精神統一》《心頭滅却》……それは私も同じですよ。折角の仲直りしてから始めての共同戦線なので、出来れば勝ちたいのですが……」

そんな見てる方がほっこりする様な会話をしながら、彼女達は倒した奥から新しく追加で生えてきた「バイオハーデス」が聞いた相手に「恐怖」の状態異常を与える叫びを使って来たのに対して各々で精神

防御で防ぎながら、お返しに凶悪な多重精神汚染と聖炎の拳を叩き込んだのだった。



【とりあえず東側にはいふえくんどを向かわせたわ。三人がかりなら暫くは抑えられるでしょう】

【了解、他にヤバくなった所があったら俺の方からヴォルトかクルエランを回す……と言っても、その前に壊滅かもしれんが】

【しかし《魂の森》の四方を壁で囲み、その間に戦力を配置して敵を削る防衛戦というアイデアは上手いろう。お陰でかなり長く戦い続けられておる】

そんな念話をしているのは南側で自身のティムモンスター達と共に戦っているレントと西側で戦っているひめひめ、そして《魂の森》の中央でその維持と全体支援ついでに《テレパシー》スキルで二人を繋いでいるネリルの三人だった……指揮官ポジの二人からの指示や、二人への会話をネリルが念話で繋げる事で人員を分けた状態でもスムーズな連携が出来る様になっているのだ。

ちなみに現在の彼等は《魂の森》の北東・北西・南東・南西の境界付近四ヶ所にいふえくんどの「プラスアテナ」による城壁を築いて、その間の東西南北から戦力を出して「バイオハーデス」を攻撃、危なくなったら《魂の森》内部に戻って防戦するという、所謂『籠城戦』を行う事で古代伝説級^{ユニーク・ボス・モンスター}へU B M相手^{ユニーク・ボス・モンスター}に長時間戦う事が出来ていたのだ。

【……まあ、援軍のアテも敵を倒す術もない籠城戦は敗北までの延命策でしかないがの】

【そんな事は分かっている……が、ウチのミカが勝算があるっぽい事を言ってたしな】

【ミカちゃんが言うならまだ何とかなるかもしれないけど……その辺り詳しく分からないの？ ミカちゃん】

【うえ!?? いきなり念話は……わつとと!??】

いきなり念話を繋がれたミカはそれに一瞬気を取られた所為で危うく【バイオハーデス】の触手に捕まりそうになったが、その寸前でひめひめの《光炎之矢》による精密狙撃が触手を砕いたので難を逃れた。

……ちなみにレント・ひめひめ・ネリルの3名は念話で現状を打破する術を話し合いつつ他のメンバーに指示を出しながら、更に自分達の役目である戦闘も完璧にこなしてたりするが。

【ちよつと!?? っつち結構ギリギリの戦いなんだからいきなりはやめてよね! 私はお兄ちゃん達みたいに念話と並行して戦闘とか器用な事は出来ないんだから!】

【このぐらいいなら並行思考と高速思考に慣れればいけるだろう……む、ヴォルトちよつと下がれ。《セイクリッド・バースト》】

【ごめんねー、とりあえず暫くは私が受け持つから……とりあえず《炎勢之矢》と《スプレッドアロー》で焼き払いつつ話を聞くわ】

【このリアルハイスペックチート共め、こちとら“直感”以外は凡人なんだよ……後、正直この戦いの先はよく分からないんだよ。“今は無いがこのままなら勝算はある”気がするけど、何かこう曖昧なんだよね】

ミカ曰く自身の“直感”は色々と不安定だから明確に『ビジョン』が観える時であれば曖昧な感覚だけの時もあり、今回は後者との事……これ以上は分からなさそうなので、三人は念話を切って話し合いを続けた。

【でどうする? このまま戦い続けるだけなら『ペルシナさん達の準備が整うまでの時間稼ぎ』とかを言い訳にすればいけるけど? 元々みんなそれ覚悟で来てるしね】

【それは構わないが……問題はそのまま戦い続けられるかだな。あの【バイオハーデス】はこれまで“下級職レベルのスキル”しか使つて来てない】

【超級職素体の《U.B.M.》を取り込んだにも関わらずのう】

そう、スキルを多数同時発動していたから分かりにくいかったかもしれないが、これまで【バイオハーデス】が使つて来たスキルは最初

にひめひめの必殺スキルの効果を軽減した広域防御結界以外は《カー
スバレット》《カースバインド》《ファイアー・スクリーム》など呪術師・
死霊術師系統の下級状態異常スキルか、《ブランチアロー》《ヴァイン
ウィップ》などの森司祭系統の地属性樹木操作下級魔法スキルだけで
あり、三人はこれ以上のスキルを持っているのではないかと警戒して
いたのだ。

【私の必殺スキルの時には対応して防御して来たし、大元の「ハデスブ
ランチ」を取り込んだ大木を私が消滅させたから下級スキルしか使え
なくなっただんじや】

【それなら良いんだがな……問題は使えないのか使われないのかが分か
らん事だ。後者なら警戒しない訳にもいかんし……ネリル、例の『融
合スキル』の準備は？】

【既に発動待機状態にあるから互いに触れればいつでも使えるぞい
……じやが、ミュウとミメのそれと違ってMPを継続消費するから長
期戦には向かんど】

【それでも最大MPはある程度上がるならお前には十分だろう。もし
向こうが本気を出して来たら使う】

【了解じや】



■【冥樹屍界 バイオハーデス】について

さて、そんな用心深い三人の警戒は概ね正しい……元【冥^{キング・オウ・タルタロス}王】
である【冥樹死王 ハデスブランチ】と【ハイ・アンデッド・ジャイ
アントウッド】の融合体が大元である【バイオハーデス】は当然上級
以上のスキル、死霊術や植物操作に関しては超級クラスのスキルも使
用可能だ。

……それでも【バイオハーデス】が下級スキルの大量使用しか行わ
ないのは、【バイオハーデス】というモンスターの存在意義が『全ての
生物を自分と一体化させて同じ永遠を生きる』という^{怨念}考えに基づいて
動いているからだ。

そして「バイオハーデス」が生物と遭遇した時の行動パターンは「ハデスブランチ」から受け継いだ知識を元にした機械的なものであり、まず『その生物を《冥樹侵食・屍界拡大》^{ハデス・ハザード}によって取り込む」事が最優先。それで抵抗する様なら『状態異常スキルや弱めの攻撃スキルで可能な限り肉体を保ったまままで制圧する』次善策を実行する様になっている。

……これは《冥樹侵食・屍界拡大》で取り込む際に肉体が綺麗な方が得られるHPなどが多いという理由の以外にも、「バイオハーデス」が多生物を『共に生きる為に取り込むべきモノ』としか思っていない……つまり基本的に敵として見ていないからでもあった。

加えて「共に生きる」……自身という存在を保存する事が優先的な行動パターンに設定されているので、自分自身を大きく自傷する様な大規模攻撃に関してはブレーキが掛かる仕様になっている事も下級スキルの大量使用を優先する理由になっている。

……もし「ハデスブランチ」を取り込んだ大元の巨木が残っていれば、ひめひめの必殺スキルへ事前に結界を展開して対応した様にある程度行動パターンに融通を効かせる事も出来たのだが、大元の巨木が破壊されてそれ以外の部位だけでは判断力も大きく落ちる事からそう言った事も出来なかったのだ。

しかし、判断力が落ちて融通が効かなくなっているとは言え「バイオハーデス」自体の行動パターンは変わらない……つまり『自身を攻撃している生物の脅威度』が『自身の肉体を増やして共に生きる優先度』を上回る事があるならば、「共に生きる対象」ではなく自身を脅かす「敵」として侵食や自傷によるダメージを脇に置いた「対処」に移るだろう。

……例えば自分の肉体の範囲中に強力な浄化の力を持つ結界を展開し、その上で自身と十分以上戦ってその肉体をそれなりに削っている相手が居た時ならば。



「??????」
「??????」
「?????!!」

《遠視》と《透視》で見たけど少し離れた所にそれっぽい黒い魔力の塊が見えたわね。加えて未だに木々はこつちへの攻撃を行なっているから発射阻止は無理そう……ネリルちゃん、念話を全体に」

「もうやったぞい」

「ありがとう……相手が全方位から超威力の闇属性魔法を撃とうとしているわ！ 全員《魂の森》の中央に急いで退避！ 守りを固めるわよ!!!」

全方位を囲まれて逃げ場もなく、包囲を突破しての発射阻止も出来ない今の彼等には全力で防御するぐらいしか対処の方法は無かったのだが。

……幸いと言うか、もとより彼等はデスペナ覚悟で戦っていたのでその指示に対する混乱も無く、全員が直ぐにネリルがいる《魂の森》の中央に集まる事が出来た。

「よし！ 全員集まったわね！ でいふえくんど、まずは壁を「うむ、中央に面子を集めたのは良い判断じゃ。……さて主人殿、早速融合じゃ」

「分かった。……お前達は戻っている《送還》^{リ・ユール}ヴォルト、クルエラン」「うむ、準備は良いようじゃな。では行くぞ……《フュージョニック・ユニオン・エレメンタル》！」

ひめひめの言葉に被せる形で真っ先に動いたのはネリルだった……彼女がタイムモンスターをしまったレントの手を取って融合スキルを発動させると二人を光が包み込み、次の瞬間そこには髪が銀色に染まり両目の色が赤と青になったレントの姿があった。

……それを見て驚く他のメンバーを後目にネリルと融合したレントが地面に手を突いた瞬間、展開されていた《魂の森》の範囲が半径10メートルぐらいにまで圧縮されたのだ。

「結果が狭く……!? これは……?」

《魂の森》の範囲を圧縮して効果を高めただけじゃよ。主人殿と融合して肉体強度と最大MPを増やせばこのくらいはな。気休めかも知れんがついでに結界も追加しておこう《ハイエンド・セイクリッド・

バリア』

「おい、ぼーっとしている暇はないぞ。向こうの攻撃までもう時間が無い……《詠唱》終了。《ホーリーゾーン》！」

驚くメンバーに融合したネリルが《テレパシー》で簡潔に説明した後に既にある城壁の外側に更なる聖属性の結界を展開し、それと同時に他のメンバーに注意したレントも呪怨系状態異常を軽減するフィールドを形成した。

「おっとそうだったわね。でいふえ〜んど！」

「了解！ 《フリーダム・ランパード》最大展開！ 更に《奇跡の城壁》！」

「私も行くわ！ HP八万消費！ 《我が命を捧げ聖なる守りを》!!!」

それを聞いて即座に気を取直した他のメンバーも直ぐに各々の防御スキルを使用して行く……まずでいふえ〜んどが既に展開していた城壁と圧縮された《魂の森》の間のスペースに可能な限りの【パラステナ】を全方位に追加展開し、それに加えて【城塞衛兵】キャッスル・ガードの城塞への魔法ダメージ軽減スキルを行使して防御を固める。

また、クラリスがそれらの城壁と自分達の間消費したHPの十倍の耐久値を持つ聖属性の結界を作り出す固有スキルを使用して自分達を囲った。

「《足引きの呪縛域》！ 《ドーンウォール》！」

「クラリスさんHP！ 《サードヒール》！」

「私は全体防御とか出来ないのよね……《堅樹光球》！」

『それは私も同じなだけ……《ヘビーディフェンダー》！』

「まさかこのスキルを使う事になろうとは……《結跏趺坐結界》！」

更にクロードは飛び道具の減速狙いで固有スキルを使いつつ閻魔性の防御魔法を使い、アリマはサブジョブである【司祭】の回復魔法でHPを減らしたいクラリスを回復させ、ひめひめは特典武具のスキルで自身に光の障壁を張り、ミカは余り効果はないかなと思いつつ【重戦士】ヘビーファイターの装備強度上昇スキルを【ドラグテイル】ドラグテイルに使い、ミュウは魔法ダメージ半減と状態異常耐性を三倍にする【僧兵】モンクのスキルを使う為に胡座をかいて座り込んだ。

掘んだ可能性

□〈ヘサウダーテ霊林〉深部

本気で「敵」を排除する気になった【冥樹屍界 バイオハーデス】が使用した最終奥義《ファイナルブローウ》が使用した最終奥義《テッドリー・ワールドエンド》×8による全方位からの砲撃はレントやひめひめ達が展開した防御の悉くを粉碎、その後にお互いの砲撃同士がぶつかり合い闇属性と呪いの大爆発を起こして辺り一帯を吹き飛ばした。

「……ぐぐ、少し【気絶】してましたか……アリマちゃん！ 大丈夫で
すか？」

「おお、まだちよつと頭がフラフラするけど何とか……
《狂喜スル守護聖人》掛けといて良かった……」

「はい、みんな無事？ 死んだ人は返事して〜」

「……死んだら返事出来ないだろ……」

『【死兵】とか取ってれば出来るかもドラ……』

……しかし、そんな大爆破の真っ只中に居た筈の〈マスター〉達はズタボロになりながらも辛うじて生存していたのだ。

「スキルのコストでHP減ってた私は死ぬかと思っただけ……付
けてて良かった【救命のブローチ】」

「うう、でも呪怨系状態異常が……アンデッドの〈UBM〉と戦う予定
だったから【高位聖水】は準備してあるけど……」

『《ファイフスヒール》《デイスペル・カース》……とりあえず自分は動け
る程度には治したが、他は……』

「私は特典武器のバリアのお陰でダメージは一番少ないから他優先で
……後、助かったわよレント。貴方達が穴を掘ってくれたお陰で死な
ずに済んだわ」

『《ピットフォール》を使ったのはワシじゃがのう。どうにか直撃だけ
は回避出来たらしい』

そう、彼等が助かった最大のは《テッドリー・ワールドエンド》が
防御を抜いて自分達に当たる寸前、レントとネリルが「落とし穴を
掘って敵を落とす」土属性魔法《ピットフォール》を真下の地面に使

い、その場に居たメンバー全てを深さ30メートルぐらいの穴の中に落とす事でギリギリ直撃だけは回避したのだ。

それに加えて全員が総掛かりで展開した各種防御によって《ワールドエンド》の威力が少しは下がっていた事と、ネリルが追加で穴の上に聖属性障壁を展開した事でその後起こった大爆発の威力が穴の中に届き難くなったお陰でギリギリ彼等は生存出来たのである。

『こんな事もあるうかと買っておいた【高位聖水】だ！』

「状態異常耐性高くて助かったのです」

『《デイスperl・カース》《デイスperl・カース》《デイスperl・カース》と』

「……ただ、HPは何とか回復出来ても全員MPとSPは枯渇寸前なのよね」

「流石に古代伝説級へU ユニーク・ボス・モンスター B M 相手に十五分以上も戦闘すればな」
「ダンジョン攻略にもそれなりに消耗してたしね……」

だが、事前に準備していた回復アイテムなどでHPや呪怨系状態異常を回復させたとしても、これまでの戦闘により既に彼等の残りMP・SPは殆ど残っておらずこれ以上の戦闘を行うのは厳しいと言わざるを得ない状況であった。

……彼等は全員腕の立つへマスターなので現状を正確に把握しており、故にその場には『やはりダメだったか』と言った諦念と落胆の雰囲気立ち込めていた。

『さて、今は先程の闇と呪怨属性の爆発の余波で誤魔化せておるが、時期我らが生きておる事はアンデッドの《生命感知》で知られるじやろう。ちなみに今の攻撃で《魂 ソウル・フオレスト の森》もほぼ吹き飛んだぞ』

「へUBMの規格外さは【ドラグリーフ】で知ってたつもりだったが、まさか古代伝説級だとかここまでのバケモノになるとは……」

「元からデスペナ覚悟で来たつもりだけど殆ど嫌がらせしか出来てないわね……もう少し削れると思ってたんだけど」

「せめて時間は稼げたと思いたいけど……」

「後はデスペナになってリアル側で詳しい情報を伝えるしかないかしらね」

防衛戦の切り札であった《魂の森》も《テッドリー・ワールドエンド》の彼等へマスターへのダメージと呪怨系状態異常の効果を大幅に下げると言う最後の役割を果たした後、効果範囲のフィールドが破壊し尽くすされた事で消失しており……端的に言えば『もう打つ手がバンザイ特効ぐらいしか思いつかない』と言うのが、その場にいるメンバーのほぼ共通した考えだった。

「……姉様、何か手は無いんですか？」

『……………』

そして、ようやく友人と仲直りした直後の共同クエストが失敗に終わるのは嫌だと思っていたミュウは、こんな時には何時も事件を解決出来る道筋を指し示してくれる姉のミカに最後の希望を込めて問い掛けたが、彼女は着ぐるみの中で黙して何も語らなかった……否、語れなかった。

『ゴメンねミュウ、偉そうな事を言った割に今回は役に立たなくて……』

「せっかくのミュウちゃんとの初クエストがこんな結果だったのは残念だけど……」

「……………うぐぐ……ええいっ！ 二人ともそんな空気でするのですか！ 確かにアリマちゃんとの初クエストがクソ難度なのは思うところありますが、だからこそ最後まで全力で後悔ない様に挑むべきなのです！ せめて一矢ぐらいは報いましょう!!!」

暗い雰囲気になっている相棒と親友を見たミュウはどうとう我慢の限界になった様に勢い立ち上がりながら、周りのメンバーから注目されるのも気にせずやけっぱちになったかの様にそう叫んだ……尚、これまでの彼女の性格とは明らかに違う行動だと思いかもしれないが、むしろメンタル面では基本的に普通の小学生である加藤祐美かとう ゆみという人間にとってはこちらの方がデフォルトの性格なのだ。

単に今まではかつての『事件』のトラウマから周りに合わせた『良い子』の様に振舞っていただけであり、そんなある種の『枷』が親友との仲直りで緩んで本来の子供っぽい性格が戻ってきた感じと言った所だ。

……そして現実では一人の小学生でしかない彼女の変化は、この
〈Infinite Dendrogram〉のプレイヤーの一人であ
るミュウ・ウイステリア——TYPEメイデンの〈マスター〉にとって
は大きな意味を持つていたのだった。

『……えつとミュウ、演説中に悪いけどコレを見てくれる?』

「別に演説はしてないんですが……何です?」

……そんなミュウのやけっぱち宣言の直後、彼女はミメが展開した
ウィンドウの中に見知らぬ赤いウィンドウがある事に気が付いた。

【同調者生命危機感知】

【同調者生存意思感知】

【ヘエンブリオ】TYPE：メイデン【模倣天女 ミメーシス】の蓄積
経験値——グリーン】

【■■■実行可能】

【■■■起動準備中】

【停止する場合はあと20秒以内に停止操作を行ってください】

【停止しますか? Y/N】

「……え? 何ですかコレ『来たアアアアア!! やつとこの状況で
勝利出来る可能性が掴めたよおう!!』ひゃあ!?」

ミュウがその表示をもつと詳しく見ようとした矢先、いきなりミカ
が飛び上がりながらそんな事を叫んだので思わず驚いてしまい、その
姉の奇行に注意を向けてしまったが故に彼女はそのままウィンドウ
を放置してしまった。

【カウント終了】

【■■■による緊急進化プロセス実行の意思を認めます】

【現状蓄積経験より採りうる一五八パターンより現状最適解を算出】

【対象ヘエンブリオ】：模倣天女 ミメーシス】に対して■■■による
緊急進化を実行します】

【負荷軽減のため次回進化までの蓄積期間を延長します】

『コレは……! まさか進化!?? でもコレなら……!』

「ちよつと待ってください! なんかいきなり何かが始まったんです
が姉様!?」

『うんうんナイスだよミメちゃん、ミュウちゃん！ これであの【パイオハーデス】に勝てる目が出て来たから！』

自分と融合している【ミメーシス】が何か変化しようとしており、それによって名状しがたい感覚を味わっているミュウは何か知ってそうなミカを問いたのだが、彼女はまるで『攻略に必要な低乱数のイベントが発生する様に乱数調整して、それがようやく発生してくれたのでハイテンションになったRTA走者』の如き有様だったので見事にスルーされた。

……尚、穴の中でそんな彼女達を見ている他のメンバーは、事情をある程度察しているレントとひめひめ以外一様に困惑した表情になっていたが。

【■■■■——完了しました】

【Form V】[The Identify You And Me]

「……終わつたみたいですね。大丈夫ですかミメ。……後姉様は事情説明」

『私も何が起こってるのかは分からないよ？ ミユウちゃんとミメちゃんに起きた現象がこの状況を打開するのに必要なのは分かるけど……詳しくはミメちゃんの方が良く知ってると思うよ』

虫食いの表示があるウィンドウが「何か」を終えた事を示し、更に融合している【ミメーシス】の変化が終わった事を感じ取った事でミュウは「何か」が終わった事を察してミメの安否を確認した。

……後、姉にジト目を向けながら説明要求したが『詳しくは知らん』と返されたので、溜息を吐きながらも【ミメーシス】からの話を聞く事にした。

『うん大丈夫だよミュウ。……それでだけど、どうも僕は『第五形態』に進化したみたい』

「まあ『緊急進化プロセス』云々と表示されてましたものね。……それで姉様の喜びようがアレな事になる感じな凄いスキルでも覚ええましたか？」

『うん、進化によって既存のスキルはだいぶ使いやすく調整されたし、

僕自身のステータスもかなり上がったけど……まあ、それらはオマケみたいなものだね。多分ミカが期待してるのは新しく覚えた必殺スキルの事だろうけど……』

ミュウは姉のハイテンションを見た所為で一周回って冷静になりながら、相棒である「ミメーシス」が進化した事と新たに覚えた「必殺スキル」の詳細を聞き……確かにこのスキルであれば「バイオハーデス」に勝てる可能性があるかと判断した。

『二つ目の発動条件である“対象との最低五分以上の戦闘”——古代伝説級である「バイオハーデス」相手だと十五分は戦う必要があったみたいだけど、これまでの戦いでその条件は満たしてる』

「後は二つ目の条件である“対象との接触状態”を達成すれば必殺スキルは使用出来ますね。その後に対応のデメリットも課せられますが。……そういう訳で皆様、あの「バイオハーデス」を倒す目処が立ったので、私がアイツに接触してスキルを使用出来る様に援護をお願いします」

「「え、マジで?」」

かなりの絶望的な状況に対していきなり齎された福音に、状況が理解出来ず成り行きを見守っていた他のメンバーは思わず聞き返していた……だが、ミュウから彼女達の必殺スキルの詳細を聞いていく内に『確かにそれならワンチャンあるかも』と考え、どのみちこのままではデスペナ確定だった事もあって彼等はそれに残った余力の全てを賭けた乾坤一擲の反撃を行う事に決めたのだった。

「ネリル、今の「バイオハーデス」の様子は?」

『ふむん……どうやらワシらが生きておる事を知ったみたいじゃな。地中から根を伸ばしてこちらに向かわせつつ、吹き飛ばされた地上に再びアンデッド樹木を生やしてこちらを包囲するつもりのような』

「成る程、向こうからこっちに近づいて来るなら高都合だ。……あの「バイオハーデス」にどれでも良いから触れられれば良いんだな?」

「はい、ミメ曰く『アレらは全部繋がってるから一つの個体扱いで行けると思う』そうです」

「それじゃあ最後の攻撃に移ろうか！ 作戦はシンプルに地上に上がったらミュウちゃんが【バイオハーデス】に触れてスキルを発動させるのを全力で援護で!!!」

……そうしてひめひめの号令の下で彼等へマスター達と古代伝説級へUBMへ【冥樹屍界 バイオハーデス】の最後の攻防が幕を上げたのだった。



□【模倣天女 ミメーシス】について

ミュウ・ウイステリアのへエンブリオへ TYPE:メイデンwitt hアドバンス・ガーディアン（進化により上位カテゴリ化）【模倣天女 ミメーシス】だが、そのモチーフである“ミメーシス”とは模倣・再現を意味する単語であり、西洋哲学においては『人・物の言葉・動作・形態の特徴を模倣することによってその対象を如実に表現しようとする行為』という意味でも使われている。

……まあ、哲学に纏わる言葉なのでそれ以上詳しい意味を理解するのは難しく、ミュウ自身も以前ネットで自分のへエンブリオへのモチーフを調べようとした時は『……つまり何かを真似する意味の単語なのです！』と思考放棄して詳しく調べなかつたぐらいなので意味はそこまで重要では無いが、それ故に【ミメーシス】の能力特性は他者のステータス・状態異常・攻撃などをコピーして自身に運用する『模倣』……. だけではない。

そもそも【ミメーシス】の『他者の性質のコピー』という特性は、^{祐美}ミュウがかつて巻き込まれた事件で自分の才能——異常性を見られた所為で友人と^{真里亞}疎遠になってしまった（少なくとも彼女自身はそう思った）トラウマに端を発している。

……その際に抱いた『何故自分は他の子と同じではないのか』という憤り、それが転じて『自分が他人と同じ“普通”なら誰かと共にいられるのでは』という願望が根幹となり『他者の性質を自身に貼り付ける』という模倣からの同一化を能力特性として生まれたのが【ミ

メーシス」なのだ。

また「ミメーシス」が意思を持ったメイデンであるのも孵化時の感情以外にも『異常な私と共にある誰かが欲しい』という思いも原因になっており、更にTYPEが能力的により適したテリトリー（実態が無い）でも（異常な自分と一つになる）フュージョンガーディアンでも無くアドバンス・ガーディアン（常に側に寄り添ってくれる者）なのもそのパーソナルが由来である。

……故に「ミメーシス」は常にミュウの側に侍り、時には彼女の思い通り成したい事に向けて背を押ししたり、或いは異常な戦闘能力を忌避しながらも兄妹について行く力は欲しいという願いに応えて発揮出来る戦闘能力を最低限に抑える様にスキル効果を調整する事もしていた。

例えば《憑依融合》で「ステータス補正ゼロ」と「両手装備不可」のデメリットがある割にステータスの上昇値を低くして直接戦闘能力に関わりづらい耐性などを引き上げていたり、各スキルの使用条件が微妙に厳しかったり、第四形態進化時にスキルが追加されなかった割には余り強化されなかったりと……『ハマスター』の戦闘センスを活かす』という名目で彼女が自分のパーソナルを受け入れられるまで「エンブリオ」の能力を少しだけ使い難く調整していたのだ。

だが、今回のアリマとの和解によってミュウが自分のパーソナルに向き合うきっかけが出来た事、そして■■■■による状況を打開する為の強制進化なので余らせていたリソースも全て使わざるを得なくなった事により「ミメーシス」はその本質である『自他を同じにする同一化』の特性を最大限に適用した、メイデンとしての強者打破（ジャイアントキリング）の力を宿す「必殺スキル」を発現させたのである。

……友人との復縁を果たし頼りになる兄妹がいる今の「ハマスター」ならば、己の本質の暗い部分——『何故誰も私と同じになつてくれないのか』という負の感情の一端を具現化した必殺スキルと向き合っても大丈夫だと考えて「ミメーシス」はその進化を許容したのだ。



「?????」
「?????」
「?????」
「?????」

先程の最終奥義ですら排除対象が消えていない事を知った【バイオハーデス】だったが、それでも特に動揺する事無く——そもそも動揺する様な精神では無い事もあって引き続き対象を排除する為、根や枝を操作してその周辺に再び自身でもある木々を生やし対象を包囲しようとしていた。

……それは損耗した排除対象を包囲して倒せばそれでよし、それが無理なら足止めしつつ再びの【デッドリー・ワールドエンド】か別の上級魔法を叩き込めば良いという考えであり……。

「《フリーダム・ランパード》！」

「全員やる事は分かっているわね！ 一瞬で良いから【バイオハーデス】を引きつけるわよ！ 《光炎の矢》！」

「《足引きの呪縛域》デイスレイション・ゾーン 最大展開！」

「《悟りし者の御業》ソウル・コントローラー 効果時間圧縮強化！ 《催眠暗示：混乱》！」

「■■■■《Branch Needle》《Vine Whip》《C
urse Bullet》《Curse Bind》《Branch
Needle》《Vine Whip》《Curse Bulle
t》《Curse Bind》」

故にエレベーターの様に地下からせり上がらせた【プラスアテナ】に乗ったへマスター達が自身に攻撃を仕掛けてきた時も、ただ機械的に彼等を対象に全方位からの下級スキルによる一斉攻撃による足止めからの上級魔法の使用準備に取り掛かったのだ。

「ミュウちゃんを対象に《ダメージコンバート》！ これでダメージは私が引き受けるわよ！」

「《ハイ・キネティック・レジスト》……残りMPから効果時間は短い
が物理耐性はこれでよしじゃ」

「《ホーリー・ブレッシング》……呪怨系もこれでよし」

「ありがとうございます……姉様、ステータスをお借りします」

「《天威模倣》アビリティ・ミラージュ！ STRとAGIを同一化！」

「オツケー、道中は壁になるよ！」

だが、この時【バイオハーデス】は真つ先に出て来て自身へと戦闘

行為を行ったメンバーへの攻撃を優先してしまっただが故に、その少し後ろで反撃の要であるミュウに可能な限りのバフを掛けていたメンバーへの対応が遅れてしまったのだ。

……そうして残されたりソースで可能な限りのバフを掛けられたミュウは、進化により敵味方問わずに対象と出来るようになった固有スキルで物理ステータス特化であるミカの4000に迫るAGIと一万を優に超えるSTRを自身に写し取った後、彼女と共に全速力で「バイオハーデス」に向けて突撃した。

『■■■■』《Branch Needle》《Vine Whip》《Curse Bullet》《Curse Bind》』

「遅い上に数が少ないですね、これなら突破は容易です」

『私も居るしね！ 普段はやらないけど今回はタンク役！』

当然「バイオハーデス」は向かって来たミュウとミカにも攻撃を仕掛けていくが、それらの遠距離攻撃はクロードのスキルによって大きく減速している上、先のひめひめの狙撃やアリマの精神汚染などによって攻撃を行う木々が減っていたのでこの時だけは彼女達の進行を阻害出来るだけの物量を出せない。

加えてそれらの攻撃も前に出たミカが「ドラグテイル」の強度と「クインバース」の状態異常置換を頼りに壁となった事で後ろのミュウには届かなかった。

『■■■■』

「遅い！……触れましたよミメ!!!」

『ああやろう!!!』

そうして皆の働きによって出来た一瞬の隙を突き、彼女は強化されたSTRによる踏み込みとAGIによる機動を組み合わせた移動術で一気に「バイオハーデス」である一本の木々へと接近してそれに触れ……相手が何かをするよりも早く必殺スキルを発動させた。

『《汝は正しく我を模倣せよ!!!》』

そうして彼女達のその宣言の直後、ミメとの融合によって桃色に染まっていたいたミュウの髪と目の色が元の茶髪と黒目に戻り……それと同時に「サウダーテ霊林」を侵食していた「バイオハーデス」が

使用していた全てのスキル効果が停止してその動きを止めたのだ。

「成る程、自分の身体を動かすのも植物操作のスキルによるものでしたかね？ ……だとすればどれだけ喚こうがもう貴方は何も出来ませんよ。何せ私はそんなスキルを有していませんから」

自身が持つていた筈の《冥樹侵食・屍界拡大》や《魔力集束賦活》などの数多のスキルが全て使用出来なくなり、更にはそれぞれ一千万を超えていた筈のHP・MP・SPが各数千から二万弱にまで下がっている事に気が付いた「バイオハーデス」は何がどうなっているのか分からず混乱しながら喚くが、それを見ている「ミメーシスとの融合が解除された」ミュウは悠然とそう言い放った。

そう、これこそ彼女達の必殺スキル《汝は正しく我を模倣せよ》の効果——『ミメーシス』を条件を満たした対象一体に強制憑依させ、ミュウの元々のステータス・スキル・耐性をその対象に上書きして同

「下のものにする」効果なのだ。
『■■■■！』
『■■■■！』

「ふむ、初めての必殺スキルで効果の程は不安でしたが、少なくとも古代伝説級《UBM》であれ解除不可能な様ですね。 ……まあ、今のスキルとステータスが今の私と同じになっただけですから然もありませんが」

これが《汝は正しく我を模倣せよ》の最も恐ろしい部分……ミュウと同じステータスとスキルに上書きされるが故に、元々持っていた《マスター》や《UBM》を強者足らしめる各々の固有スキルが完全に使えなくなってしまう所なのだ。

……必殺スキルとはその《エンブリオ》の集大成。だからこそ「相手を自分と同じ領域に引きずり降ろす」このスキルは「模倣と同一化」を能力特性とし「相手と同じ能力であればマスターの技量があれば勝てる」という意味での強者打破の性質を有する【ミメーシス】の「必殺」に相応しい強力なスキルだと言えるだろう。

「まあ、今現在だと効果時間は十分程なので、余り悠長にはしていませんが……」

現象である。

……それを見たレントは予想通りだと頷き、同じくそれを見た他のメンバーもこぞって「バイオハーデス」への固定ダメージ攻撃を仕掛けた。

『成る程！　ここは折角買った【高濃度除草剤】の出番だね。喰らえー！』

「確か【吸命】の状態異常にする【吸命牙の矢】を買ってあったかしら」
「階層性にも固定ダメージ魔法があつたな……だがもうMPが……」

『お、HPを回復して……？　……そういえば私【僧兵】の自己回復スキル持っていました」

「でも低級の回復魔法じゃ木をいきなり生やすって訳にもいかないみたいよ。HPだけが減つたのと傷痕系状態異常を治すなら後者の方が手間取るし」

だが、薬品や矢による【枯死】【吸命】の状態異常はこれまた大質量によつて効きが悪く、固定ダメージ魔法が使えるクロードもMPが足りず、更には自身の使えるスキルを把握した「バイオハーデス」がミウも覚えている自己回復魔法まで使い始めた事でダメージを稼ぎ難くなっていた。

「どうしましょう兄様！　このままだと時間切れですが！」

「……安心しろ問題ない、準備は整つたしな。ネリル」

『うむ、対アンデッド用聖属性固定ダメージ魔法《パニッシュメント光の裁き》、準備完了じゃ』

折角の必殺スキルなのにこのままでは無意味に効果時間を終了すると思つて焦り始めたミウに対して、レントは落ち着く様に声を掛けながら掌の上に光輝く小さな十字架——ネリルがたつた今開発した対アンデッド用固定ダメージ魔法を浮かべながら手近な「バイオハーデス」へと近づいて行く。

『ひかじ、今のワシの残り魔力ではHPを完全に削るには少し足りんかの……』
『……と言うわけで主人殿、スキルとしては登録したでな』

「ああ……《イミテーション・プリンユーナク仮想奥義・神技昇華》【ダークナイト暗黒騎士】のレベルを40消費してコイツへ」

その十字架を見た「バイオハーデス」は『それが自分を滅ぼすものである』と判断してどうにか抵抗しようと叫び声を上げるが、体系系のスキルが殆どなミュウの能力を上書きされているせいで文字通り「手も足も出ず」、レベルを捧げた事で更なる輝きを放ち始めた十字架を持つたレントが向かってくる事に対して何も出来ず……。

「じゃあさようなら……《パニッシュメント光の裁き》」

『……!!!』

その光輝く十字架が木の幹に押し付けられると同時に発生した二十万以上の固定ダメージが「バイオハーデス」の現在のHPを跡形もなく消し飛ばし、それによって「サウダーテ霊林」を半径数キロにまで侵食していた全ての「バイオハーデス」の身体も跡形もなく消滅して光の塵となったのだ。

〔UBM〕【冥樹屍界 バイオハーデス】が討伐されました】

【MVPを選出します】

【「ミュウ・ウイステリア」がMVPに選出されました】

【「ミュウ・ウイステリア」にMVP特典【霊樹冥冠 バイオハーデス】を贈与します】

「……おや、トドメを刺した兄様では無く私がMVPですか。……まあ今はとにかくお疲れ様でした、ミメ」

そんなアナウンスの内容に少し驚いたミュウだったが連戦の疲れもあってスルーしつつ、必殺スキルの代価として『24時間の休眠状態』となった【ミメーシス】を労わるように自身の「手を取り合う二人の少女」の紋章を優しい表情で撫でたのだった。

彼女達のリザルト

□自然都市ニツサ・冒険者ギルド マジック・リスト【魔導拳】ミュウ・ウイステリア

「……はい、そういう訳でどうか【バイオハーデス】は倒して来たのでクエスト達成です。お疲れ様でした」

「いやいやちよつと待って下さい！ 本当に倒したんですか!?!?」

「本当ですよ。ほらこのサークレットが特典武器です」

事実を告げたらめつちや動揺し出したペルシナさんに対して、私は獲得して頭に付けていた木製のサークレット——【靈樹冥冠 バイオハーデス】を見せて私達の報告が真実だと証明しました……私達が【冥樹屍界 バイオハーデス】を倒した後、その肉体になっていた森が纏めて跡形も無く消えた所為で〈サウダーテ靈林〉の一部が荒野となったりしましたが、流石にそれは私達ではどうにかなる問題では無いのと、先に【バイオハーデス】の討伐報告をすべきという意見が出たので私達はニツサ辺境伯領にまで戻ったのです。

……それで今は冒険者ギルドで何やら慌ただしく作業をしていたペルシナさんとその隣で浮かぶズカさんを見つけて、こうして【バイオハーデス】撃破の報告をしていたのですが……。

「まあ、ちよつと報告が遅かったわねー。私達全速力でここまで戻って来てから、直ぐに冒険者ギルドなどを介して古代伝説級ユニーク・ボス・モンスター〈U B M〉の発生を領主を始めとするニツサ全体に伝えた直後だったから」

「……あー……」

成る程、道理で冒険者ギルドに様々な人が居て慌ただしくしている訳ですね……実際、〈サウダーテ靈林〉全てを侵食しかけていた【バイオハーデス】はあそこで倒せなければ更に酷い事になっていたでしょうし、その脅威をいち早く伝えるのは当然必要でしょうから。

……そうして事情を聞いたニツサ側は党首の娘さんが卒倒しながらも領内の騎士団や様々なギルド、更に王都にまで使いを出して自分達の窮状を知らせながら、領内の〈マスター〉にまで声を掛けて大規

模な「バイオハーデス」討伐隊を結成しようとして動いていた……所で私達が『「バイオハーデス」討伐しちやいました！ テヘペロ！』とか言っちゃった訳ですか。これは気まずい（苦笑）

「……それで本当に倒したんですよね？ いや、皆さんの発言に対して《真偽判定》が反応しないのは分かっていますし、犠牲なく〈UBM〉が討伐されたならそれに越した事は無いんですが……」

「本当ですよ。なんなら特典武器の詳細でも見せましょうか？」

多分、事態の急展開の連続でまだちよつぱり混乱してる感じのペルシナさんを落ち着かせる意味もあって、私は獲得した特典武器の方の「バイオハーデス」のステータスを見せる事にしました。

……ちなみに急いで戻って来たので特典武器の詳しい能力とかは説明してなかったからか、姉様を始めとする他のメンバーも覗き込んで来ましたけどまあ良いでしょう。それではお待ちかねのスペック表はこちらなのです。

【霊樹冥冠 バイオハーデス】

エンシェントレジンダリーアームズ
〈古代伝説級武器〉

凡ゆる生物を自らに同化させる冥樹の概念を具現化した至宝。

自身と周囲の魔力を純粋な力に変換すると共に、装着者の致死の負傷を肩代わりする。

※譲渡売却不可アイテム

※装備レベル制限なし

・装備補正

なし

・装備スキル

《霊樹の万器》

《冥冠の加護》

《アッドリー・ワールドエンド》

ご覧の通り装備補正こそ有りませんが、その分だけ保有する三つのスキルはどれもが非常に強力なのです。

まず第1スキル《霊樹の万器》は周辺の自然魔力を自動収集、或いは任意で装備者のMPを込める事で魔力を蓄積し、装備者のHP・M

P・SPを使うスキルの使用時に蓄積した魔力を代わりに消費して使う事が出来るというものでした……『蓄積するのが魔力^MなのにHP・SPの代替も出来るのか強すぎる』『この手の蓄積系は魔法使い垂線のアイテムじゃしろう』とは兄様とネリルの言葉でした。

そして第2スキル《冥冠の加護》は装備者が致死のダメージを受けた時、代わりにその分だけ蓄積した魔力を消費する事でダメージを無効化するという「救命のブローチ」とほぼ同等の身代わり系スキルでした……最もあちらと同じで一度使えば24時間のクールタイムが課せられますが。

最後の第3スキル《テッドリー・ワールドエンド》は多分あの時に「バイオハーデス」が使って来た砲撃がベースっぽいスキルで、蓄積した魔力と装備者のHP・MP・SPの最大値を任意で消費して闇属性・呪怨系複合の魔法砲撃を撃つスキルみたいです……まだ使っていないので詳細は分かりませんが、消費したHP・MP・SPの最大値は24時間で回復する代わりにその間は「バイオハーデス」の機能そのものが停止するデメリットがあるみたいです。

(改めて見ると《霊樹の万器》は《模倣》系のコスト確保の為、《冥冠の加護》は《纏装》で攻撃を受ける時があるから、《テッドリー・ワールドエンド》は多分必殺スキルとの併用が前提でのアジヤストですかね。本当にそうなるかは分かりませんが自分の最大HPを下げると共に相手のHPも下げて、そこに大出力の対生物特化闇属性攻撃を撃ち込むハメ技が出来るかもです)

「確かに古代伝説級の特典武器ですね、間違いなく。……手間を掛けさせてすみません。ではこれから領主や各ギルドの面々や集まった《マスター》含む人々に事情を説明して来ますので、本当に申し訳ありませんが皆さんも事情を説明して頂けると……」

「まあそこはしようがないわね……疲れてるだろうけど、もうちよつと頑張りましょ」

そうして私達はペルシナさんと一緒に「バイオハーデス」の討伐完了を色々な人に説明する事となったのでした……まあ、正直言って私達では討伐出来るとは「姉様以外」思っていなかったでしょうから、

色々ごたつくのは仕方ないですけどね。



「……あー、やっと一息つけるよー……」

「思ったよりも説明に戸惑ったな」

「お疲れ様でした、皆さん」

そういう訳で諸々事情を領主さんとか各ギルドマスターに説明したり【バイオハーデス】討伐時の様子や〈サウダーテ霊林〉の現状を説明したりする事大体二時間ぐらい、外も暗くなり始めた辺りで私達はようやく説明を終えて解放されたのでした。

……まあ、特典武器と《真偽判定》のお陰で【バイオハーデス】の存在とそれを討伐した事自体は信じて貰えましたし、領主さんや各ギルドマスターなどのティアン勢からは感謝されましたけど、集まった〈マスター〉達は『デンドロ初ノレイドイベントだと思ってたら既に終わっていた件』『特典武器羨まC！』『超スピードとかそんなちやちなもんじゃ無い、もっと恐ろしい物の片鱗を味わったぜ』『只のフカシじゃね？』などと少しだけ騒ぎになったりしましたが、別に何か損害を被った人は居なかったので『なんだ、誤報か』という感じでそのまま解散しました。

「しかし、古代伝説級の〈UBM〉を倒したのに懸賞金とか貰えないのか。【ドラグリーフ】の時は結構貰えたのに」

「そもそも『UBM〉への懸賞金』自体が〈UBM〉による人的被害が出た場合、早急に討伐する為にギルドや国や領主や被害者が積み立てる感じで出来てるからな」

「つまり被害を出してなかったり、人里離れた場所で突発的に現れた〈UBM〉を倒しても懸賞金はそもそも掛からないという事よ。【ドラグリーフ】の時も【プラントドラゴン】の大量発生があつて懸賞金が掛かってたからだし」

「ええと、一応【ハデスブランチ】の方には懸賞金が掛かっていました
が……」

「討伐したのは【バイオオハーデス】なんですが大丈夫なのですか？」

実の所【バイオオハーデス】が【ハデスランチ】を取り込んだというのは状況から考察された推測でしか無いのではとも思いましたが、私達が【バイオオハーデス】を討伐したのとほぼ同時期にペルシナさんが持っていた【比翼の羅針盤】——今までずっとハイデス氏だった【ハデスランチ】指し示していたその反応が途絶えたので十分な証拠になるだろうとの事。

……問題は懸賞金を掛けていたのはレジエンダリアの死霊術師ギルドが中心となった各ギルドや議会なので、受け取りたければレジエンダリアまで行く必要があるという事です。特に特典武器持つてる私は。

「すみません、流石にギルドでの積立金までは持つてくる事は出来なかったので、お手数をお掛けしますが」

「私は別にレジエンダリアに行くのも構いませんよ。アリマちゃんと一緒に居られるのは嬉しいですし。……兄様達は？」

「俺も特に問題無いが……ミカはどうする？ 例超級職の件とかもあるだろう」

「そっちは多分大丈夫な気がするし、最悪お兄ちゃんに頼るから。私もレジエンダリアに行くよ」

「よし決まりね！ せっかくだから私達が案内するわよ！」

そんな訳で私達は急遽予定を変更して報酬を受け取る為にレジエンダリアまで行く事になったのでした……最もペルシナさんはニッサ側の領主などにまだ幾らかの説明や事後処理の手続き諸々が残っているのです、レジエンダリアへの出発はもう少し後の事になるでしょうが。

私的には他国に行くのは初めてなので少し楽しみですし、アリマちゃんも『ミユウちゃんともっと一緒に居られる』と嬉しそうにしていたので私も嬉しくなりましたが、ふと見るとペルシナさんが物憂げな雰囲気で溜息を吐いていました。

「あー……ごめんねー、ペルシナちゃん。『今度は師匠を止めるのに間に合わせてみせる』って言ったのに【バイオオハーデス】……【ハデ

スブランチ」との決着に連れて行けなくて」

「……………いえ、皆さんの話を聞く限り私がその場に居た所で足手まといにしかならなかつたでしょうから。……………それに、もう師匠が残したモノが災いを呼ばなくなつたのならそれで十分です」

シズカさんの慰め言葉に対し、ペルシナさんはそう言つて笑みを浮かべてはくれましたが……………ああ、姉様がちよつと気まずそうに視線を逸らしていますね。

でも実際【死霊術師】ネクロマンサーの彼女がいても展開された聖属性特化《魂の森》でほぼ役に立たなかつたでしょうし、姉様が無理に遠ざけたのなら多分高確率で死んでいたって事なのでしょうから仕方ない事だと思ひますが。

「まあ、人間生きていれば後悔を背負つたままだろうと“先”はあるものよ。私は幽霊だけど（笑）」

「……………そうですね。……………改めて皆さん、今回は師匠が生み出してしまったへUBMを大した犠牲もなく討伐して頂いて本当にありがとうございます。うございました。お陰でこれ以上【冥王】ハイデスの名前が穢されずに済みました」

……………まあ、こうして誰も死なず大した犠牲や被害も出ずに【バイオハーデス】との戦いを乗り越えられたのならそれで十分なのでしょうと、目の前で例を言うペルシナさんを見て私はそう思ひました。願わくば【冥王】ハイデス氏の魂に安らかな眠りがあらん事を……………。



【鉄工刃鬼 ジンオーガ】

最終到達レベル：61

討伐MVP：【雷 忍】サンダー・ニンジャ 退魔・忍 Lv100（合計レベル：50）

0)

へエンブリオ：【迅雷薄衣 ヤクサイカツチ】

MVP特典：伝説級【鍊鉄双刃 ジンオーガ】

【漂白病粘 ルーゴサイト】

最終到達レベル：53

討伐MVP：【竜騎兵】ドラグナー メアリ・ボニー Lv68 (合計レベル：418)

〈エンブリオ〉：【純水飲竜 アポピス】

MVP特典：伝説級【白病水砲 ルーゴサイト】

【殲葬鉄竜 メタルドライガー】

最終到達レベル：75

討伐MVP：【戦車操縦士】タンク・ドライバー ジョージ・グレン Lv95 (合計レベル：495)

〈エンブリオ〉：【憑器巫女 ツクモガミ】

MVP特典：古代伝説級【換装機竜 メタルドライガー】

【兜防愚 ビートレス】

最終到達レベル：32

討伐MVP：【呪槍士】カリスト・ランサー シュバルツ・ブラック Lv86 (合計レベル：436)

〈エンブリオ〉：【滅神呪槍 ミステイルティン】

MVP特典：逸話級【愚防手甲 ビートレス】

【冥樹屍界 バイオハーデス】

最終到達レベル：82

討伐MVP：【魔導拳】マジック・フィスト ミユウ・ウイステリア Lv100 (合計レベル：500)

〈エンブリオ〉：【模倣天女 ミメーシス】

MVP特典：古代伝説級【霊樹冥冠 バイオハーデス】

「……ふむ、予想よりも早く〈マスター〉のみの手で古代伝説級〈UBM〉を討伐する事例がはじめているか。地球の〈マスター〉の成長は予想以上だな、喜ばしい誤算だ」

「いやいや、この時期に出るには割とやばい〈UBM〉だったからねー。煌玉竜の模造品が暴走した【メタルドライガー】とか、伝説級〈UBM〉を取り込んで成長速度が異常な【バイオハーデス】とか」

管理AI達が住まうとある場所で〈UBM〉の討伐記録を見て笑み

を浮かべるジャバウオックに対して、自分が活動している王国でヤバめの〈UBM〉が出たと聞いて確認しに来たチエシヤがツツコミを入れた。

「だが、結果的に被害は最小限で討伐されているのだし問題は無からう。加えてこの二つの古代伝説級との戦いの中でそれぞれのMVPはメイデンの緊急進化を発動させて勝っているのだから、〈超級〉を揃えると言う我々の目的にも十分意味のある結果だった。……それに戦いの顛末も十分に英雄的ヒロイックな物だったしな。〈UBM〉製作者冥利に尽きると言うものだ」

「……まーそうなんだけどねー」

実際、この二体の古代伝説級はデータを見る限りだと偶々居合わせた〈マスター〉達によって最小限の被害で討伐されているので、チエシヤもそれ以上は何も言わなかった。

「しかし、既に古代伝説級すら討伐出来る〈マスター〉が出始めているとなると、次のハロウィンイベントで隠しボス扱いとして投下予定の〈UBM〉ももう少し強化しておいた方が良いか？　せつかくのイベントボスがあつさり討伐されても拍子抜けだろうし、期間限定モンスターを配置する初のイベントだからもう少し煮詰めておくか」

「いや、ハロウィンイベントは僕達がポップさせたモンスターを倒して期間限定アイテムを手に入れるのがメインのイベントだからねー。それにこっちでもイベントまで後一カ月ちよつとしか無いんだからさー」

それでも内心『ジャバウオックが煮詰めると変なヤツが出来上がる時がままあるんだよなあ』と思っているチエシヤは（多分無駄だろうと考えつつも）次のイベントでやり過ぎない様に釘を刺しておくのだった。

間章 様々な掲示板／色々な短編
ダンジョンスレ／超級職の試練

□??地球 とある掲示板

◇◇◇

【自然ダンジョン】へInfinite Dendrogram◇ダン
ジョン情報スレ43【変化が激しい】

1：名無しの大探索者「sage」：2043／10／19（月）

このスレはへInfinite Dendrogram◇のダン
ジョンに関する情報を書き込むスレです

ダンジョン内でのモンスターの目撃情報・獲得アイテム・ダンジョ
ンの内部構造・質問などご自由に

荒らしはスルー推奨

・

・

・

350：名無しの紅蓮術師「sage」：2043／10／19（月）

近場の自然ダンジョンにへUBM◇が現れたと聞いて街が戦力を募
集してたから参加したが

準備を終えた時に「へUBM◇は既に別のへマスター◇によって倒さ
れました」と言われた件

351：名無しの高位召喚術師「sage」：2043／10／19
（月）

「まあタイミングを逃すのは良くある事かな？」

352：名無しの高位書士「sage」：2043／10／19（月）
350

だが、〈UBM〉の討伐街が戦力を募集する程と言う事は相当に危険度が高い相手なのだろうか？

〈UBM〉相手だと下手に手を出すと危険だから普通は懸賞金を掛けるぐらいなんだが

353：名無しの水忍「sage」：2043／10／19（月）

〈UBM〉相手に討伐隊が編成されるのは放置するデメリットが戦いを挑むデメリットを遥かに上回る場合だけだしな

ちよつと前の「ゴブゾード」戦みたいになゴブリンの国を作って街に侵攻して来たりとか

354：名無しの大探索者「sage」：2043／10／19（月）
そもそも自然ダンジョンに発生した〈UBM〉は大体そこに住み着いて出てこないから

基本的に街とかへの危険度は低い筈なのだが……追加情報早よ

355：名無しの高位祓魔師「sage」：2043／10／19（月）
350のパーティーメンバーだけどその〈UBM〉が現れたのはアルター南の「サウダーテ霊林」ってところ

お隣のレジエンダリアみたいに自然魔力が濃くて独自の生態系を構築してたから自然ダンジョン認定された場所

356：名無しの装甲操縦士「sage」：2043／10／19（月）
隣の国の環境が限定的に再現されてる自然ダンジョンだな
国境付近の地域には稀に良くあるやつだ

357：名無しの霊道師「sage」：2043／10／19（月）

稀に良くあるとは一体？

まあ黄河の東の果てには天地系ジョブに付けるクリスタルがあるって話は聞いたが

358：名無しの紅蓮術師「sage」：2043／10／19（月）

アルター南のニツサでもレジエンダリア要素がある【竜騎士】とか【精霊術師】に就けるけど

より専門的な上級職とかのご当地系ジョブは無理って感じだったな

それより話の続きだが現れた（UBM）は古代伝説級【冥樹屍界バイオハーデス】ってヤツだったらしい

359：名無しの大戦士「sage」：2043／10／19（月）

古代伝説級はマジでヤバイ

俺も【ドラグエツジ】って言う古代伝説級竜王に瞬殺されたことあるし

360：名無しの高位祓魔師「sage」：2043／10／19（月）

実際討伐したパーティーの人達に話を聞いた限りでもかなりヤバそうだったし

具体的には発生から数十分で自然ダンジョン深部の森を数キロに渡って侵食して自分の身体にしたとか

361：名無しの紅蓮術師「sage」：2043／10／19（月）

何でも周囲の自然魔力を吸収して近くの生物を植物系アンデッドに変更して融合吸収増殖してたらしい

加えてスライムとかと同じコアの無いタイプで変質した森を全部倒さないと仕留められないとか

質量が増える度にHPMPSPが増大してそれを使って超級職奥義レベルの魔法を使ってくるとか

362：名無しの高位召喚術師「sage」：2043/10/19
(月)

ホント強い事しか書かれて無いわね、バランス調整ミスった禁止カード(超魔導竜騎士)かしら

自然魔力たっぷりな森林なレジエンダリアに現れてたら更に酷い事になってたわ

363：名無しの水忍「sage」：2043/10/19 (月)

むしろ良くそんなの倒せたな

そのへマスターパーティーって何者なんだ？

364：名無しの高位祓魔師「sage」：2043/10/19 (月)

倒したのはアルターだと複数(UBM)討伐で有名な「怪異殺し」の三兄妹パーティーだな

後レジエンダリア出身のへマスターパーティー……と何故か幽霊がいた

365：名無しの大探索者「sage」：2043/10/19 (月)

アルターの「怪異殺し」……：有名なスレでは(UBM)討伐や特殊な事件を解決している三人とあったが

しかし幽霊？ 死霊術師でもいたのか？

366：名無しの高位召喚術師「sage」：2043/10/19
(月)

ああ、幽霊って事は伝説級竜王を討伐したあのパーティーね
確かこの前アルターに行くとか言ってたかしら

367：名無しの高位書士「sage」：2043/10/19 (月)

レジエンダリアの中でも変態では無いのに実力の高いパーティーだとそこそこの有名な彼女達か

ただリーダーはクラン一位のオーナーと仲がいいと聞くが

368・名無しの高位呪術師「sage」:2043/10/19(月)

>>>367

彼女とは志を同じくする同士ですからな

そして2人のロリの心を曇らせていたモヤが晴れたようで実に喜ばしいですぞ

369・名無しの大戦士「sage」:2043/10/19(月)

つまりへマスターのの中でもやべー上澄み勢のパーティーだった訳だ

それなら古代伝説級も討伐出来るか

370・名無しの霊道士「sage」:2043/10/19(月)

>>>368

え? 一体誰……?!

371・名無しの高位書士「sage」:2043/10/19(月)

バカ触れるな! お前もロリシヨタになるぞ!!!

372・名無しの紅蓮術師「sage」:2043/10/19(月)

>>>369

まあそのパーティーも初めから「バイオハーデス」を倒す気は無かったって言ってたけど

たまたまクエストを受けてダンジョンに潜ってた時にそのへUBM発生に立ち会って

ヤバすぎる相手だったから同行していたティアンに街への連絡を頼みつつデスペナ覚悟で特効したらしい

373・名無しの高位祓魔師「sage」:2043/10/19(月)

それでそのティアンの人から事情を聞いた領主や各ギルドマスターは急いで討伐・調査隊を募集したんだけど

その後、街に戻ってきたパーティーが「なんか倒せちゃいました」ってなった感じ

374：名無しの装甲操縦士「sage」：2043／10／19（月）
はーん、なるほどね

375：名無しの大盗賊「sage」：2043／10／19（月）
しかしスペック草見るにその〈UBM〉1パーティー程度で倒せる相手じゃないと思うんだけど
一体どうやって倒したんだ？

376：名無しの水忍「sage」：2043／10／19（月）
せっかくのレイドボスで集まったのに挑む前に倒されてて草

377：名無しの紅蓮術師「sage」：2043／10／19（月）
〈〉375

偶々必殺スキルの一つが上手く弱点をつけて何とか倒せたとか
言ってた、詳細は教えてくれなかったけど

後でダンジョンを調査したら深部の数キロが草木一本無い荒野になつてたらしいから激戦だった様だし

378：名無しの高位召喚術師「sage」：2043／10／19（月）
メタが上手くハマれば倒せる事もあるわよね

後、荒野化は森を自身の肉体にした〈UBM〉が倒されたからかしら？

379：名無しの大盗賊「sage」：2043／10／19（月）
てか方法は秘密かよ

380：名無しの高位書士「sage」：2043／10／19（月）

まあ手の内を隠すのは当然だし討伐の証明も特典武器と《真偽判定》があるからな

討伐証明にわざわざ基本詳細を話す必要はないのだ

381：名無しの機甲戦士「sage」：2043／10／19（月）
でも、せつかくの〈UBM〉だったのに先に倒されて文句を言うやつはいなかったのか？

382：名無しの船長「sage」：2043／10／19（月）
いや、〈UBM〉なんて早い者勝ちだし文句言ってもしょうがないでしょ

そもそも被害拡大の前に討伐が基本でしょうに

383：名無しの大盗賊「sage」：2043／10／19（月）
特典武器は盗めないしドロップもしないから倒した後に襲っても意味ないしな

……〈UBM〉との戦闘中に諸共攻撃してMVP狙いとかはあるけど

384：名無しの大戦士「sage」：2043／10／19（月）
まあユニーク要素満々〈UBM〉相手だとそう言うドロドロとしたのもまあ……あるかな

385：名無しの高位書士「sage」：2043／10／19（月）
やっぱユニーク狙いの〈マスター〉は怖いな、とつまりしとこ

386：名無しの霊道士「sage」：2043／10／19（月）
つまり信頼出来る仲間（キョンシー）と共にダンジョンアタックが一番と言う事だな！

387：名無しの高位召喚術師「sage」：2043／10／19

(月)

そうね、信頼出来る仲間(召喚モンスター)と共に行く冒険はいいわね

388：名無しの司令官「sage」：2043/10/19(月)

えーっと、人間範疇生物は……？

389：名無しの水忍「sage」：2043/10/19(月)

知ってるか？ ダンジョンから出た所でお宝狙いで襲い掛かってくるPKとかもいるんだぞ

……アイテムやMPSPが切れた所で襲いかかってくるのはやめろお!!？

390：名無しの高位祓魔師「sage」：2043/10/19(月)

>>381

……実はその後討伐パーティーを狙った襲撃事件もあったんですけどね

どうもPKが不満を持っていたフリーの〈マスター〉を焚きつけたみたいで

391：名無しの紅蓮術師「sage」：2043/10/19(月)

まあ普通に全員返り討ちにされたみたいだけど

俺たちが見た時には1人残った全身鎧のヤツをドラゴンの着ぐるみが一方向的に殴り続けていたな

しかも他のメンバーは遠巻きに見てるから実質嬲り殺し

392：名無しの機甲戦士「sage」：2043/10/19(月)

討伐パーティーがやべーヤツらだった件

393：名無しの船長「sage」：2043/10/19(月)

〈マスター〉の中でも上澄み勢は能力か人格か格好かどれかがヤバイ

ですからねえ

グランバロアでも海を爆発させたり液体黄金召喚とかあるし

394：名無しの重装戦士「sage」：2043／10／19（月）

そのボコボコに殴られ続けた俺が通りますよつと

いやーへUBMの討伐パーティーに恥じない実力者達だったな！

395：名無しの大盗賊「sage」：2043／10／19（月）

うわあ！　なんか出た！

まさかご本人様登場!?!?

396：名無しの高位召喚術師「sage」：2043／10／19
（月）

掲示板でこういう展開は珍しいわね

それに鬺り殺しにされた割には元気そうだけど

397：名無しの重装戦士「sage」：2043／10／19（月）

>>>396

まあ先にこっちから仕掛けたんだし鬺り殺しされてもしょうがないかなって

せっかく強敵であるへUBMと戦えると思ったのにお預けされたから

代わりとしてPKの口車に乗ってみたけど見事に返り討ちだったよ！

398：名無しの水忍「sage」：2043／10／19（月）

あー、これウチ（天地）でよく見るバトルジャンキーなタイプのヤツだわ

とりあえず強敵と戦えれば良いってヤツ

399：名無しの重装戦士「sage」：2043／10／19（月）

機会があれば彼女にはリベンジしたいけどね！

……まあ、俺の鎧を殴り続けていたのには何か理由がありそうだったけど

最後に『これで多少は進んだかな。ご協力ありがとうね』とか言っていたし



□〈霊都アムニール〉・棍棒士ギルド

【装備状態の装備品への与ダメージが五千万を突破しました】

【条件解放により、【戦棍姫^{メイス・プリンセス}】への転職クエストが解放されました】

【詳細は戦棍士系統への転職可能なクリスタルでご確認ください】

【転職の試練に挑みますか？】

【試練の番人を打倒せよ】

【成功すれば、次代の【戦棍姫】の座を与える】

【失敗すれば、次に試練を受けられるのは一か月後である】

『……ふふふふ、フハハハハははははあゲホッ！　ゴホッ！！　……苦節デンドロ内時間で四カ月ぐらい、〈墓標迷宮〉でゴブリンを叩き潰したりPKをちようど良いサンドバッグにしたり、お兄ちゃんの作ったゴーレムにネリルちゃんを作った耐久値特化の最低限装備と認識される金属鎧を着せて殴りつづけたり！　それでようやく【戦棍王】……じゃなくて【戦棍姫】の就職条件を満たしてやりましたよコラア！！』

そこはまるで円形の闘技場の様にも見える舞台が設置されている奇妙な空間であり、その一角にある【戦棍姫】の転職試練の内容が書かれた石版の前でドラゴンの着ぐるみを着た少女が異様なハイテンションで叫んでいるので更に奇妙さが増していた。

……まあ、上のアナウンスを見れば分かる通りここは【戦棍姫】への転職試練の為の特殊空間で、着ぐるみの少女とはその転職条件達成の為に繰り返しした正直あんまり好きではない単純作業をようやく漸

く終えてはしやいでいるミカ・ウイステリアその人であった。

『……おっと、いつまでもこうしている訳にはいかないよね。流石にもう一カ月待つか嫌だし、その間に誰かに超級職取られたらデンド口引退案件だから気を引き締めないと』

改めて気合いを入れたミカが両手に【ギガース】と【破碎戦棍・四式】を持ったフル装備状態で闘技場へと上がっていくと、その舞台には銀色の光沢を持つ金属で出来た大盾とメイスを両手に持ち同じ色合いの全身鎧を着た戦士が立っていた。

『さて、あれが石版に書かれていた試練の番人みたいだね。よく見たら頭上の名前も【メイスキング・トライアルズ】^{戦棍王の試練}ってあるし……来るか』

『……』
そうして舞台上上がったミカに対して、それを試練の開始と判断した【メイスキング・トライアルズ】は無言のまま即座に左手の盾を前方に構えながらの突撃を敢行する。

大型の盾で身を隠しながらAGIに換算して3000程度の速度で突っ込んで来るメイスキングに対し、ミカは一先ずその場で迎え撃とうと両手のメイスを構えた。

『《シールドチャージ》』

『……んこっ！ 《盾割》《連棍撃》！』

そのまま大盾による体当たりを見舞って来たメイスキングだったが、その攻撃を見切った大盾に向けてミカが【ギガース】でカウンター^{スマッシュ}気味に【碎屋】の盾破壊打撃を叩き込み、間髪入れずに【双棍土】^{デュアル・ストライカー}のスキルでもう片手の武器でも同じアクティブスキルを大盾に当てて弾き飛ばす。

……だが、メイスキングは弾かれた勢いのまま身体を反転させつつ、右手のメイスに雷を迷わせながら更なるカウンターを見舞って来た。

『《サンダー・インパクト》』

『それも視えてる！ 《竜尾剣》！』

それは大盾を目隠しにして放たれた技だったが、類稀な“直感”を

持つミカはメイスを【どらぐている】から伸ばした剣尾で受け止める事で防ぎつつ、感電による【麻痺】に対しては【クインバース】の《インスタント・エンパイア》で防ぐ。

『《アームズブレイク》《シールドバッシュ》《インパクト・ストライク》《テンペスト・ストライク》』

『ちいっ！ 《ウエポン・ブレイカー》！ 《グランド・インパクト》！』

だが、その攻撃を防がれた後もメイスキングは高い技術センススキルでもって様々なメイス系と盾系のアクティブスキルを組み合わせる事で、ミカに対して怒涛の連撃を繰り出して行く。

それに対してミカは咄嗟に武器破壊を試みるが銀色の金属——高品質伝説級金属なオリハルコンで出来た武器はSTR一万を超える彼女と言えど易々とは砕けず、止む無く地面を衝撃波で揺らして足止めしつつ一旦距離を取った。

（やっぱり見覚えのあるあの金属はオリハルコンか。私がクエスト報酬でネリルちゃんにお菓子と一緒に貰いで、条件達成の為に今まで散々砕いてきたミスリルより高品質・高強度の。ステータスはSTR 8000・AGI 5000ぐらいだけどメイス系のスキルレベルと装備品の性能が高い感じ。鎧の性能を合わせると防御力は一万を優に超えてるかな……つまり戦棍士系統超級職の試練に相応しい相手って事？）

ミカの推測通り、この「メイスキング・トリアルズ」の伝説級金属装備は「それを如何に破壊・突破するか」を試すものであり、有している高レベルのメイス系・防具系アクティブスキルは「自身を上回るメイスの戦技を持っているか」を判定する為——つまりは挑戦者の『武器破壊と衝撃による対人戦に長けたメイスという武器種』の扱いを判定する為の試練として設定されているのである。

（さて、ネリルちゃんとかの話の話を聞くに超級職の試練はティアンが受ける事を前提としてるから、ステ補正がある私なら殴り続けるだけでも多分ギリギリ突破出来る……というか、私はそれしか出来ないんだけど。新しく覚えた必殺スキルは大火力が出せるタイプでもないし）

『——《インフェルノ・ブレイク》』

『おおっと』

そんな事を考えながらも、ミカは「直感」と高いステータスを駆使してメイスキングの攻撃を凌ぎ続けていく……が、流石に兄や下の妹程の戦闘技巧が無い彼女では回避に集中しながら反撃を見舞うのは難しく、徐々に防戦一方となっていた。

『パラライズ・インパクト』《スタンストライク》《インパクト》』

『うぐぐ、遠慮なく撃ちおつて……でも分かってきたかな。コイツはアクティブスキル主体の戦術がメインの行動パターンみたいだね』

ミカの考え通りメイスキングは前述の理由からメイス系アクティブスキルを積極的に使つて挑戦者を攻撃する様にプログラムされている……が、それは挑戦者がメイス系スキルを連撃を掻い潜つてダメージを与えられるかを判定する為であり、途中でSPが切れにくい様に高レベルの《SP自動回復》も有しているので持久戦にも対応している。

……最も彼女にとって重要なのは「相手がスキルによる攻撃を主体とする」という点だけだったのだが。

『それに私だと回避しながらだともな攻撃を当てられないから……しようがないし必殺スキルを使つて全力で攻撃に集中しようか。ターゲツト脅威対象「メイスキング・トリアルズ」……設定完了

《我は禍ギツ神を砕ガく巨人なり》』

……そしてミカは膠着した戦況を動かす為に自身の「ヘンブリオ」
【激炎棍 ギガース】の必殺スキルを使い……。



『……………』

『…………ふう、やっと倒せたよ。SPもすつからかんだし結構ギリギリだったか』

……約10分後、舞台の上にはSPをほぼ空にして僅かにHPを減らしただけのミカと、装備していた伝説級武器防具を一通り砕かれて

全身を徹底的に殴られた様なダメージを受けて光の塵となって行く
【メイスキング・トライアルズ】の姿があった。

『……色々大変だったけど、やっと【戦棍姫】ゲットだぜ。……何とか
ギリギリ今度のハロウィンイベントには間に合ったかな。それに今
後訪れる“脅威”相手にも』

そうして試練を達成したミカは自身のステータス欄を見てメイン
ジョブが【戦棍姫】になっている事を確認し、ホツとした様子で一息
吐いた……彼女の“直感”が示す所では『今後のデンドロ世界で起こ
る事件に対しては超級職への就職が必須』となっていたので、一先ず
条件を達成出来て安堵しているのだ。

『まあ流石に就いただけじゃ何もスキルは覚えてないけど……しばらく
くお兄ちゃんを頼ってレベル上げかな！ 後は掲示板のジョブスレ
に書き込んで阿鼻叫喚の渦を巻き起こすとか！』

……まあ、それはそれとしてミカとしても1人のゲーマーとしてユ
ニーク要素をゲット出来た事への喜びもあるので、割とテンション高
めになりながら彼女は試練の空間を後にしたのだった。

生産スレ／デンドロの生産クラン達

□??地球 とある掲示板



〔生産クラン〕へInfinite Dendrogramへ生産スレ
73 【続々誕生！】

1：名無しの刀匠「sage」：2043/10/21（水）

このスレはVRMMOへInfinite Dendrogram
へにおける生産関連の情報を書き込むスレです

クラン宣伝などの書き込みは自由ですが情報漏洩は自己責任で
荒らしはスルー推奨

・
・
・

56：名無しの高位錬金術士「sage」：2043/10/21（水）

へプロデュース・ビルドへの運営はまあ順調かな

へエンブリオへ製希少素材の取り引きやオーダーメイド装備の発注で
結構有名になってる

57：名無しの紡績職人「sage」：2043/10/21（水）

新しいメンバーも加入したしね！

58：名無しの宝石職人「sage」：2043/10/21（水）

へプロデュース・ビルドへ新メンバーその1です

その分色々な生産活動が細々とやられてる感じ

66：名無しの高位匠職人「sage」：2043／10／21（水）

各国で色々と特色があるんだなあ

後はグランバロアとドライブかな

67：名無しの船匠「sage」：2043／10／21（水）

>>62>>63>>64>>65

お前らは順調そうでいいよなあ……

俺らへグランバロア架空戦記協会へは現実の兵器の再現に悪戦苦闘してると言うのに

68：名無しの建築家「sage」：2043／10／21（水）

資金と資材と資料と人材と技術と……何もかもが足りん！

大和を再現出来るのはいつの日になるのか……

69：名無しの教授「sage」：2043／10／21（水）

〈叡智の三角〉でも人型ロボット開発はかなり厳しいねえ

……
上述の理由に加えて成果が無いからクラン内の空気がちよつと

70：名無しの高位操縦士「sage」：2043／10／21（水）

金を稼ぐテストパイロット組と実際に開発する生産組の軋轢がねー

生産は上手くないかないと稼いだ金が泡となって消えるから穀潰しとかって意見も

71：名無しの高位錬金術士「sage」：2043／10／21（水）

ああ、最終目標が高い組の面々か

〈マスター〉の万能の適正と〈エンブリオ〉があればそこそこの生産は普通に来るけど

彼らのようにデンドロ内に無い新しい概念を作ろうとしてればそりやあ大変だよな

72：名無しの刀匠「sage」：2043／10／21（水）

まあ、そのロマンは理解出来る（現実出来るかはさておき）

73：名無しの紡績職人「sage」：2043／10／21（水）

やっぱりドライブやグランバロアみたいな技術レベルが特殊な国の生産は大変なのかな？

74：名無しの大農家「sage」：2043／10／21（水）

>>>73

私もドライブの生産職だけど上の二つは目的が高いのが問題だと思うよ

最近食料生産量が落ちて来るとかだから私は食料生産特化へエンブリオでも大儲けしてるし

75：名無しの銃匠「sage」：2043／10／21（水）

同じくドライブ生産者だけど銃器などの既存の生産は普通に盛ん機械鎧作って『私がアイアンマンだ』とかやってるヤツもいた

76：名無しの船棟梁「sage」：2043／10／21（水）

グランバロアでも既存の船舶の改良強化とかは結構やってるよ
へエンブリオに期待したティアンからの依頼だから料金はあっち持ちだし

77：名無しの木工職人「sage」：2043／10／21（水）

へエンブリオの力目当てのティアンは結構いるしね

78：名無しの高位技師「sage」：2043／10／21（水）

>>>74

ぐざぎざ……妬ましい……!

こつちはボロ小屋でチマチマ生産するしか出来ないのに……!?!?

79：名無し建築家「sage」：2043／10／21（水）

>>76

ぐぬぬ……現実の艦艇とかデンドロには影も形もないからティアンからの理解が中々得られんのだ!

だから何とか自前でやらねばならないと言うに……!

80：名無しの教授「sage」：2043／10／21（水）

ウチなんて現実ですら存在しないからねえ

ファンタジーなデンドロなら技術的にはいけると思うんだけどティアンの理解を得られるかと言うと……

81：名無しの銃匠「sage」：2043／10／21（水）

全く新しい技術と言うのは現実でも敬遠されるもの

既存の応用とかなら受け入れられやすいんだけど

82：名無しの宝石職人「sage」：2043／10／21（水）

そもそもデンドロの生産や商売はその地に根付くティアンの方が色々と有利だからね

ウチのクランも希少素材とかを対価に彼等と『仲良く』しているし

83：名無しの高位操縦士「sage」：2043／10／21（水）

仲良く（賄賂をやってスポンサーに）しているですね分かります

84：名無しの高位錬金術士「sage」：2043／10／21（水）

>>83

賄賂とかイメージダウン的な事を言わないでください

普通に希少素材とかを取引してこちらの有用性を証明した上でス

ポンサー的な事をやって貰ってるだけだ

85：名無しの大農家「sage」：2043／10／21（水）

まあ私もバルバロス伯爵領で第三皇子様や農家ギルドからの支援を受けてるしね

不作で食えなくなったティアンの農家の人を派遣してもらったり

86：名無しの刀匠「sage」：2043／10／21（水）

天地の場合はティアンの鍛冶師に弟子入りとかあるな

……めつつつつちや厳しいけど!!!

87：名無しの猛毒術師「sage」：2043／10／21（水）

カルディナだとティアンのスポンサーとか信用出来るか怪しいんだよなあ

88：名無しの高位整備士「sage」：2043／10／21（水）

人型ロボットに投資してくれる酔狂なティアン貴族とかいないのか

なろうとかではお約束じゃん

89：名無しの教授「sage」：2043／10／21（水）

その辺りはウチのサブオーナーが金策がてら動いて貰ってるけど芳しくないねえ

まず人型ロボットの有用性を証明出来ないとスポンサーにはなれないって言われたとか

90：名無しの高位技師「sage」：2043／10／21（水）

その人型ロボットを作るためにお金がいるんですよおく!!!

91：名無しの船匠「sage」：2043／10／21（水）

誰だってそう思う、俺だってそう思う

92：名無しの高位符札職人「sage」：2043/10/21（水）
みんな大変だなあ（符の生産だからコスト低め）

93：名無しの魔道具職人「sage」：2043/10/21（水）
レジェンダリアは変態達が独自ルートを突っ走ってる感じだから
こういう意見を見てるとちよつと楽しい

94：名無しの裝飾職人「sage」：2043/10/21（水）
と言うか人型ロボットとか現実の艦艇とかじゃなくてさ
もつと簡単に作れる物で技術力をアピールするべきでわ？

95：名無しの教授「sage」：2043/10/21（水）
ふむ詳しく

96：名無しの建築家「sage」：2043/10/21（水）
話を聞こうじゃないか

97：名無しの銃匠「sage」：2043/10/21（水）
>>>95>>>96
判断が早い

98：名無しの船棟梁「sage」：2043/10/21（水）
必死だなあ

99：名無しの裝飾職人「sage」：2043/10/21（水）
要するに既存のアイテムを改良して高性能に作って
「ハマスター」ならこれこれこう言う事が出来ますよ」って技術力
をアピールしてスポンサーを募る感じ？

100：名無しの紡績職人「sage」：2043/10/21（水）

まあ私達へプロデュース・ビルドも最初は作ったアイテムじゃない
くて

〈エンブリオ〉製希少素材の方を取引に出して自分達の宣伝を行った
し

101：名無しの高位錬金術士「sage」：2043／10／21
(水)

人型ロボットや現実の艦艇の研究で得た技術を使って既存のガイ
ストや船舶を強化して売り込むとか

この〈エンブリオ〉と〈マスター〉の技術力なら更にいいものを作
れるんじゃないかとアピールする感じ

102：名無しの宝石職人「sage」：2043／10／21 (水)

その手の試作品を作ればモチベーションの維持やノウハウの積
み重ねも出来るしね

103：名無しの木工職人「sage」：2043／10／21 (水)

そもそもデンドロで大規模な生産がしたければティアンの助成は
必要だよ

生産資材の大部分は生産ギルドや大商人達が握ってるから

104：名無しの教授「sage」：2043／10／21 (水)

成る程ねえ……確かに〃自分達で人型ロボットを作る〃って事に
ちよつとこだわり過ぎてたか

とりあえずガイストを一部だけ人型にして技術力のアピールとノ
ウハウの蓄積を……

105：名無しの建築家「sage」：2043／10／21 (水)

まあ、最終的に現実とは違うデンドロの海で戦うつもりなのだし

こちら側の船舶ノウハウも必要か……とりあえず貿易船団に声を
掛けてみるか

106・名無しの高位整備士「sage」：2043／10／21（水）
つまり……どう言う事だつてばよ？

107・名無しの高位操縦士「sage」：2043／10／21（水）
要するにガンダムを作る前にガンタンクを作つて技術レベルを上げつつ

それをプレゼンしてスポンサーからお金をせびろうつて訳だね！

108・名無しの高位整備士「sage」：2043／10／21（水）
成る程、完璧に理解した

つまりRX計画とV作戦をやればいいんだな

109・名無しの高位技師「sage」：2043／10／21（水）
ガチタン……いいよね

110・名無しの船匠「sage」：2043／10／21（水）
オタク特有の超速理解www
まあ俺らも似たようなもんだが

111・名無しの教授「sage」：2043／10／21（水）
理解してくれるならそれでもいいんだけどねえ

まあスポンサーが見つかるかは分からないけどこのままじゃ煮詰まりそうだし

サブオーナーとも相談して色々やってみようかねえ

112・名無しの猛毒術師「sage」：2043／10／21（水）
いいなー、みんなでワイワイ楽しそうで

まあティアン商人の権益とか諸々は凄い面倒くさいけど頑張れ

113・名無しの魔道具職人「sage」：2043／10／21（水）

ティアンの政治とか商売って凄くドロドロしてる所もあるからなあ

刺客雇って闇討ちとかも……

114・名無しの高位匠職人「sage」：2043／10／21（水）

そういった設定までちゃんと作り込んでるデンドロ

でもそんな商売の負の面とか要らないんだよなあ

115・名無しの戦車操縦士「sage」：2043／10／21（水）

でもガンタンのようなガイストはどっかで作られてるって聞いたけど

後、〈叡智の三角〉がいる掲示板ってここかな？

116・名無しの高位操縦士「sage」：2043／10／21（水）

おっと新入りさんいらっしやい！　ところで何の用かな？

クラン入り希望ならテストパイロットとかも絶賛募集中だよ！

117・名無しの高位整備士「sage」：2043／10／21（水）

現在〈叡智の三角〉は一人でも多くのやる気ある人材を募集中さ！

118・名無しの高位技師「sage」：2043／10／21（水）

何せ人材は何人いても足りない状況だからな！

みんなで作ろう人型ロボット！

119・名無しの建築家「sage」：2043／10／21（水）

必死だな、気持ちは凄い分かるが

120・名無しの戦車操縦士「sage」：2043／10／21（水）

いや、先日手に入れた特典武器が二足歩行の機械系特殊装備品でな

それに追加パーツを付けたりして強化出来る装備スキルがあるんだが

サブで生産職取ってるだけの俺だと上手く使えなくて専門家に相談しようかと

1 2 1 : 名無しの高位整備士「sage」: 2 0 4 3 / 1 0 / 2 1 (水)
ガタツ!

1 2 2 : 名無しの高位技師「sage」: 2 0 4 3 / 1 0 / 2 1 (水)
ガタタタツ!!!

1 2 3 : 名無しの高位操縦士「sage」: 2 0 4 3 / 1 0 / 2 1 (水)
ドンガラガツシヤアアアンツ!!!

1 2 4 : 名無しの教授「sage」: 2 0 4 3 / 1 0 / 2 1 (水)
>>> 1 2 1 >>> 1 2 2 >>> 1 2 3

とりあえず落ち着きなさい君達

……それで、幾ら支払えばウチに来てくれるのかねえ?

1 2 5 : 名無しの宝石職人「sage」: 2 0 4 3 / 1 0 / 2 1 (水)
うわあ、すごいさわぎ

1 2 6 : 名無しの高位錬金術士「sage」: 2 0 4 3 / 1 0 / 2 1 (水)
(水)

特典武器素材は使用出来るのは所有者だけだが他者でも加工は出来ると聞いたが

1 2 7 : 名無しの高位整備士「sage」: 2 0 4 3 / 1 0 / 2 1 (水)
それでスペックは!?? 外見は!??

1 2 8 : 名無しの高位技師「sage」: 2 0 4 3 / 1 0 / 2 1 (水)
人型ロボット特典武器来たーーーーー!!! 詳細キボンヌ!!!

129・名無しの高位操縦士「sage」：2043／10／21（水）
教えてくれたらお姉さんがイイコト♡してあげるぜ！

130・名無しの戦車操縦士「sage」：2043／10／21（水）
あ、そういうのは間に合ってるんでいいです
失礼しました他を当たります

131・名無しの装飾職人「sage」：2043／10／21（水）
あ、帰っちゃった

132・名無しの高位整備士「sage」：2043／10／21（水）
MATE?!? >>129のアホな寝言は無視していいから?!
? お問い合わせ！

133・名無しの高位技師「sage」：2043／10／21（水）
>>129お前ホント何やってるんだよこの色情狂！

134・名無しの教授「sage」：2043／10／21（水）
はいはい>>129は黙ってようねえ、今は真面目な話をしている
んだよ

確か先日皇国の東側の遺跡でロボットドラゴン型の〈UBM〉が出
て
それが〈マスター〉によつて討伐されたって話を聞いたから本当く
さいしねえ！

135・名無しの木工職人「sage」：2043／10／21（水）
逃した魚は大きかったとき

136・名無しの高位操縦士「sage」：2043／10／21（水）
そんなく（；； 凸、）

137・名無しの戦車操縦士「sage」:2043/10/21(水)
まあいるんですけどね

ちなみに人型じゃなくて二足歩行のドラゴンロボな特典武器でした

後口から荷電粒子砲を発射可能

138・名無しの高位整備士「sage」:2043/10/21(水)
逃してなかった!

しかしガンダムじゃなくてゾイドだったか

139・名無しの高位技師「sage」:2043/10/21(水)
口から荷電粒子砲……ジエノザウラーかな?

140・名無しの教授「sage」:2043/10/21(水)
ガンダムでもゾイドでも何でもいいけど二足歩行の参考資料はマジで欲しい

出来れば皇都の郊外にある〈叡智の三角〉本拠地に来て欲しいんだけど

今なら人材はタダで供給するよ

141・名無しの高位操縦士「sage」:2043/10/21(水)
>>140

どうせ何も言わなくても新鮮な動くロボットドラゴンとか持つてくれば

現在ロボ成分不足で飢えてるロボマニア達が群がるだろうからね!

142・名無しの戦車操縦士「sage」:2043/10/21(水)
うーん、今の「メタルドライガー」はウチの相棒の新しい身体になってるからなあ

あんまりしつこいと相棒の方から文句が出るかも

143：名無しの教授「sage」：2043/10/21（水）

MATEE！ その辺りは丁寧に扱わせる様に念を入れておくからねえ！

後聞いたへUBMの名前と一致したからやっぱりあの事件のMV Pか！

144：名無しの船棟梁「sage」：2043/10/21（水）

特典武器が肉体って事はTYPEアドバンスのへエンブリオかな？

145：名無しの高位整備士「sage」：2043/10/21（水）
預かったロボに関しては元より高性能にした上でピカピカに磨き上げて返すと約束するから!?!?

146：名無しの高位技師「sage」：2043/10/21（水）
だからどうかウチに来て下さいお願いします!!!

147：名無しの戦車操縦士「sage」：2043/10/21（水）
それじゃあ今度お邪魔させてもらおうかな
ウチの相棒も『性能は凄いですすがちよつと見窄らしいですわ』って言ってるし

整備は問題ないんだけどパーツのカスタムとかは専門家の伝手が欲しいし

148：名無しの高位操縦士「sage」：2043/10/21（水）
フイイーツツシュ!!!

149：名無しの教授「sage」：2043/10/21（水）
>>>147

上の発言はスルーしてくれていいからねえ

それと歓迎するよお、ようこそ〈叡智の三角〉へ

150：名無しの紡績職人「sage」：2043／10／21（水）

特典武器素材とかいいなあ

ウチも扱ってみたい

151：名無しの高位錬金術士「sage」：2043／10／21

（水）

常連客の何人かに〈UBM〉を倒せそうな者もいるからそつちに期待だな

職業スレ／レントとひめひめ

□??地球 とある掲示板



【最強の】へInfinite Dendrogram∨職業スレ66
【ジョブビルド】

1：名無しの獣戦鬼「sage」：2043／10／29（木）

このスレはへInfinite Dendrogram∨のジョブ
に関する情報を書き込むスレです

ジョブについて・ジョブスキル・ジョブビルド・就職条件の質問な
どご自由に

荒らしはスルー推奨

・

・

・

616：名無しの獣戦鬼「sage」：2043／10／29（木）

やはりガードナー獣戦士理論が最強なのは確定的に明らかだろう

上級ガードナーのステータス加算とサブに入れられる豊富な物理
スキルで実質純竜級二体だし

617：名無しの剛剣武者「sage」：2043／10／29（木）

まあ、掲示板を見ても各国の決闘で獣戦士系統が結果を残してるか
らなあ

……天地では超級職ティアンやそいつらに対抗できる一部の上澄

みを突破出来ない程度ですが！

618：名無しの船長「sage」：2043/10/29（木）

後グランバロアの決闘だと船の性能の方が重要だし

船型チャリオッツと船員系ジョブのコンボが流行り

619：名無しの獣戦鬼「sage」：2043/10/29（木）

>>617>>618

そう言った特殊例を挙げられても……

それにガードナー獣戦士理論はへエンブリオがガードナーなら誰でも直ぐに出来るお手軽さがあるし

620：名無しの黒騎士「sage」：2043/10/29（木）

つまりはガードナーじゃ無いと出来ないって事ですよね？

正直言つて千差万別のへエンブリオがある以上はそれに合わせたジョブにするのが一番なのは

へマスターの中でも上澄み勢はそれとリアルスキルと特典武具とを兼ね備えた連中だし

621：名無しの高位精霊術師「sage」：2043/10/29

（木）

>>620

それを言っちゃうと汎用ジョブビルド考察の意味が無くなっちゃうんですが……

622：名無しの金雷術師「sage」：2043/10/29（木）

こっちはゲームのシステムのジョブビルドの考察がしたいのであって

そこにユニーク要素とリアルスキルを入れて貰っても困る

まあへマスターへ全てがユニーク要素の塊であるへエンブリオを持つてる時点でアレなんだけど

623：名無しの硬拳士「sage」：2043/10/29（木）

デンドロで汎用ジョブビルド論が余り盛り上がらない理由↓ユニーク満載へエンブリオ

624：名無しの疾風操縦士「sage」：2043/10/29（木）

ガードナー獣戦士理論も『ガードナーは従属キャパゼロ』って言う共通項と

《獣心憑依》との相性に気がついたから盛り上がったんだしな

625：名無しの隻剣聖「sage」：2043/10/29（木）

奇しくも>>619の言う通り多くのガードナー使いで採用出来たから話題になったので

その人だけのエンブリオとジョブのシナジーだと自己完結するだけだから

626：名無しの戦棍鬼「sage」：2043/10/29（木）

他に汎用性のあるシナジーだとアームズを対応する武器強化スキルで強化するとか？

専門の上級職になれば装備スキルも強化出来るからエンブリオのスキル強化にも使える

627：名無しの船長「sage」：2043/10/29（木）

それチャリオッツでも同じ事出来ますよね

上級職の《船舶強化》や《操縦》とかならかなり強化されます

628：名無しの高位精霊術師「sage」：2043/10/29

（木）

後はMP消費系エンブリオと【生贄】を組み合わせた“生贄MP特化理論”かな

ジョブスキルの数が減ると言うデメリットをエンブリオのスキル

で補う感じで

629：名無しの剛剣武者「sage」：2043/10/29（木）

天地だと野伏初撃必殺理論とかも流行ってる

武士系ジョブなら【野伏】をサブに入れておけばいいし

630：名無しの硬拳士「sage」：2043/10/29（木）

エンブリオの効果で高いステータスに出来る貴方には素手ビルド

素手でしか使えないしジョブのステも低い分強力な素手スキルを
重ねがけして超強化だ！

631：名無しの金雷術師「sage」：2043/10/29（木）

誰でも使えると言うなら【ジエム】貯蔵連打理論も忘れちゃいけない

やり方は簡単、ただ【ジエム】を沢山作るか買うかして投げるだけ
！

……尚、その際の値段は考えないものとする

632：名無しの黒騎士「sage」：2043/10/29（木）

えーっと何の話をしてたんだっか、汎用ジョブ理論の売り込みだっ
け？

633：名無しの獣戦鬼「sage」：2043/10/29（木）

こうして様々な汎用ビルドが生まれてはデンドロの圧倒的なユ
ニークパワーに飲まれて消えていくのさ

ガードナー獣戦士理論だって何処まで続くか、先着一名の獣戦士系
統超級職を探し始めてるし

634：名無しの戦棍姫「sage」：2043/10/29（木）

先着一名の超級職を取られたらその人がガードナー獣戦士理論最
強って事になっちゃうもんね

635：名無しの崇神「sage」：2043/10/29（木）

超級職は早い者勝ちだから

636：名無しの戦棍鬼「sage」：2043/10/29（木）

んん？ 名前表記が誤字じゃないか？ “鬼”が“姫”になるけど

637：名無しの疾風操縦士「sage」：2043/10/29（木）

>>636……あつ（察し）

638：名無しの船長「sage」：2043/10/29（木）

え、マジですか？

ひよつとしてこの掲示板では初の報告ですか？ しかも二人!?!?

639：名無しの高位精霊術師「sage」：2043/10/29

（木）

どうやらとうとう“その時”が来てしまったようだな

640：名無しの剛剣武者「sage」：2043/10/29（木）

えーつと、何となく察したがとりあえず戦棍鬼ニキはドンマイ（笑）

641：名無しの獣戦鬼「sage」：2043/10/29（木）

とりあえずお二人は詳しい報告をプリーズ、転職条件とか

642：名無しの戦棍鬼「sage」：2043/10/29（木）

いや……まだ、まだ焦るような時間じゃない……！

643：名無しの戦棍姫「sage」：2043/10/29（木）

>>641

まあ別にいいよ、どうせ不死身のマスターである私が就いた時点で

おお、爆弾情報が次々と……

650：名無しの船長「sage」：2043／10／29（木）

>>648

え？ 怨念操作特化超級職って掲示板越しの怨念まで操れるの？

651：名無しの崇神「sage」：2043／10／29（木）

流石に「崇神」のジョブスキルでは掲示板越しの怨念までは無理ね

）

ちなみに転職の試練は怨念に溢れた場所にある転職のクリスタルに触れるだけの簡単な物だったわよ

652：名無しの獣戦鬼「sage」：2043／10／29（木）

しかし、とうとう「マスター」の中でも超級職を取る者が現れたか……ていうか早くね？ まだデンドロのサービスが始まって三カ

月、中でも一年経ってないんだけど

653：名無しの戦棍姫「sage」：2043／10／29（木）

私は偶々条件を知れたしジョブと強敵撃破は実力があれば難しくないから

正直累積ダメージが一番面倒くさかったけど知人に頼んで破壊される用の防具を作って貰った

654：名無しの崇神「sage」：2043／10／29（木）

聞いた話だけど「神」系のジョブはその分野で相応しい技術と成果を出せば達成出来るらしいわね

私もちよつと多くの怨念を使ったら条件を達成出来たし案外簡単かもね

655：名無しの高位精霊術師「sage」：2043／10／29

（木）

多分一般へマスター〜にとっては絶対簡単じゃないやつダゾ
掲示板でよく言われる極一部の上澄み勢しか達成出来ないやつだ

656：名無しの戦棍鬼「sage」：2043／10／29（木）
ええい、先に取りられてしまったモノはしょうがない

メイス系統か打撃武器系の超級職ってなにかあったか……？

657：名無しの疾風操縦士「sage」：2043／10／29（木）
おお、戦棍鬼ニキ復活した

658：名無しの戦棍姫「sage」：2043／10／29（木）
メイスという武器種自体が打撃系武器派生の一種だからね

私が知ってる限りだと騎士系統派生メイス運用特化の【戦棍騎士】
ぐらいかな

勿論アルター王国でしか就けません

659：名無しの剛剣武者「sage」：2043／10／29（木）
確か打撃武器系のジョブは天地にもあったかな
いや、あれは棒術系やトンファー系だったか

660：名無しの戦棍鬼「sage」：2043／10／29（木）
そうかアルターに行けばいいんだな!!？
レジェンダリア所属だからお隣だしいける！

661：名無しの黒騎士「sage」：2043／10／29（木）
必死だねえ、でも騎士系統の上級職は転職に騎士団関係者からの推
挙が必要だったりするから

騎士団の信頼関係を得てないと厳しいけど

662：名無しの戦棍鬼「sage」：2043／10／29（木）
じゃあどうしろと言うんだ!!？

663：名無しの黒騎士「sage」：2043/10/29（木）

そんなあなたにご紹介するのが克蘭〈アルター王国自由騎士団〉

!!!

主に騎士ロールプレイを行う克蘭なので騎士団の手伝いをよくやってるから信頼関係もあるから

加入後の行動次第では早期に上級職の推薦を貰うことも！

664：名無しの金雷術師「sage」：2043/10/29（木）

よく出来た宣伝かな？ まあジョブ達成条件の話だからスレチとも言えんが

665：名無しの崇神「sage」：2043/10/29（木）

掲示板も意外と面白いわね



□〈霊都アムニール〉とある宿屋【古株】ベテランレント・ウイステリア

「ねーレントー、今度のハロウィンイベントは二人で一緒にデートしない？」

「別に構わないが……こつちだとネリルを始めとするタイムモンスター達もいるが？」

「別にそこまで拘らないわよ。そもそも現実あっちじゃおいそれとデートなんて出来ない代わりだし、その内容がイベントモンスター狩りだからロマンチックな雰囲気にはならない事は分かってるわよ」

「それもそうか」

俺が宿の一室でジョブクエストを兼ねた【ジエム】作りをしていると、偶々一緒にいたひめひめが後ろから抱き着きながらデートの誘いをして来たので承諾した。まあ、俺達は今更デート程度で恥ずかしくない様な仲でも無いのでさっくりオーケーを出したけど。

……そんな俺達の会話を聞いていた、備え付けのベッドに座りながらミカから貢がれたレジエンダリア産高級お菓子「レインボー・シュークリーム」を頬張っているネリルが唐突に口を開いた。

「……お主ら夫婦か？ 他の者がいる所では大分態度が違うが」

「別に付き合ってるとか彼氏彼女な関係じゃないぞ。お互いに好き合っつてはいるが」

「リアルだと色々としがらみがあるから、今は付き合ったりとかは出来ないんだけどデンドロでは違うからねー。表立たせない為に他の人には隠す必要があるから普段は隠してるけど」

まあ実はそう言う事だったので……以前何処かの誰かに『俺に彼女がいた事が無い』と言ったかもしれないが、ひめひめ姫とは告白したり互いの想いを確認しあったりしたが付き合っつてはいないので嘘ではない（強弁）

「ほう、ならワシはデートの時は空気を読んで引っ込んでようかの」
「そんなに気を使わなくて良いわよ？ 私は好きな男の側に別の女が居るからって嫉妬に狂うタイプじゃないし。……そもそも、貴女は今レントの事をそんな目で見てないじゃない。楽しい事を見出す長命種特有の面白そうなモノを見る目だし」
「……ほう、よく見ておるな」

茶化す様な口調でそう言ったネリルだったが、ひめひめから返された言葉を聞いて『面白そうなモノを見つけた』とでも言うような笑みを浮かべた……まあ頼にレインボーなクリームが付いてるから迫力はないが。

「貴女は自分の楽しみの為に自分のルールだけには従うけど、逆に言えば自分のルールは曲げないタイプでしょ。結構義理堅いタイプみたいだし。……シズカさんと同じタイプの長命種だから、私にとっつては自分の命と利権に拘るタイプの連中と比べれば付き合いやすいわよ」

「まあ、長命種は世界を娯楽として楽しむか自分の命を死守するか、そうでなくば只生きるだけかじゃからの。……主人殿には生活の場を確保して貰った恩もあるし、妹御の『直感』を合わせればこの世界に

於いてへマスター」によって起こされるであろう動乱を目の当たりに出来るだろうからな。従魔としてはちゃんとするわい」

……うん、仲が良さそうで何よりダナー(棒)……まあ、女の戦いつて言うよりはお互いに相手の「線引きやルール」を探って落とし所を見つけようとしているだけだろうが。

……しかし間に挟まれてる俺がちよつと気ままずくなって来たんだが……。

「そう言えばシズカさんも^{スベリオルジョウ}超級職に転職したんだよな。確か^{ザ・ウエンジエンス}「崇神」だったか」

「露骨に話題を変えて来たわね。……まあ良いわ。聞いた話だと怨念操作スキル特化超級職、名前も含めてシズカさんのイメージにぴったりのジョブね。この前の「バイオハーデス」戦であのバジリスクを作った時に条件を満たしたから転職しといたって後から言われたわ」「あの時の怨念操作技巧なら「神」に選ばれてもおかしくは無いの」

確か「神」系統の超級職はその分野で相応しい成果を出せば条件を達成出来るらしいからな。ミカも^{メイス・プリンセス}「戦棍姫」に就いたし、ミユウちゃんも古代伝説級特典武器を手に入れた上に今は^{キング・オブ・グランプリング}「格闘王」の座を虎視眈々と狙ってるし……。

「……とは言え【崇神】は就いたティアンのほぼ全てが怨念に取り込まれて派手に自滅する末路を迎えておる曰く付きの超級職じゃが……」「その辺りはシズカさんなら問題無いでしょ。現実の彼女はこちらで言うなら古代伝説級ぐらいだし……むしろ超級職を得てはしやぎ過ぎないかが心配ね。こっちはあくまで「遊戯」として振る舞う様に約束してるけど、抑止力として私も超級職に就きたい所ねー」

「そこまで警戒する事は……あるかもしれんが。彼女の好み(オモチャ的な意味で)な「死に囚われた人」とかを見かけたらやらかす可能性もある」

ちなみに魔弓士系統超級職は魔弓という武器種がかなり希少な事もあって絶賛ロスト中だそうで、ネリルも^{キング・オブ・イリーガルボウ}「魔王」は三強時代にレジェンダリアに居たと聞くが直接面識は無いの。そもそもこの辺りの地下は「アムニール」の縄張りじゃから余り近寄らんかった

し』との事で条件までは知らないそうだな。

「サブジョブの【高位幻術師】ハイ・イリュージョニスト側も見つかからないし、取れそうな弓系の「神」も既に在位者がいるしね。……何処かに手頃な超級職でも落ちてないかしら」

「そんな超級職があったら俺が拾う(断言)……こっちは超級職への転職制限が課せられてる中で、少しでも強力なジョブビルドを探して日々創意工夫してると言うに」

「そう言えば貴方見慣れないジョブに就いてるわね。【古株】ってどんなジョブ？」

【古株】は【見習】アプレンティスの上級職だな」

まず、見習系統下級職【見習】はステータスがほぼ伸びない代わりに獲得経験値を上昇させる《職業訓練》とスキルレベルが上昇しやすくなる《技能練習》と言うパッシブのジョブスキルを覚えるジョブだ(ちなみにこの二つにはジョブクエスト受託時や他者から指導されている時には効果が増す副次効果もある)

……これだけではレベルが上がりやすく他にジョブスキルを覚えられないのにスキルレベルが上がるだけのジョブなのだが、三つ目のスキル《職能連結》ジョブリンクによって『メインジョブのレベル以下のサブジョブ一つを選択してそのジョブスキルを使用可能とし、更に獲得経験値を選択したジョブと分割する』事によって、対象のジョブレベルとスキルレベルを効率よく上げる事が出来る様になる仕様になっている。

「まあ、わざわざステータスが伸びず使えるスキルも覚ええない【見習】に貴重なジョブの枠を使うぐらいなら、普通に下級職のレベル上げをした方が良いつて理由で余り人気の無いジョブなんだが、俺にとつてはレベルとスキルレベルが上がりやすくなるだけで十分有用なジョブだな。……【ルー】が第五形態に進化して《我は万の職能レルに通ず》も強化されてジョブ枠が更に増えたからな。最終的な戦闘力よりもレベル上げの速度を優先する事にしたんで取った」

「成る程……で、上級職の【古株】の方は？」

「基本は【見習】と同じでステータスはほぼ伸びず《職業訓練》と《技能練習》の最大レベルが上昇してよりレベルが上がりやすくなり、《職

能連結》も最大三つまでのサブジョブを選ぶ事が出来る様になる。
……まあ上級職なのにレベル上げしか出来ず、就職条件が【見習】の
カンストに加えて『ジョブレベルの合計上昇数400以上』と『スキ
ルレベルの合計上昇数200以上』と結構厳しいから実質ロストして
たぐらいに人気が無いけど」

一応、他人への指導時に《職業訓練》と《技能練習》の効果を引き
上げて、その効果を指導対象にも及ぼせる《職能指導》とかも覚える
けど……それを目当てにするぐらいなら、より指導面で効果の高いス
キルを覚えて就職条件も楽な【教師】ティーチャーや【教官】コーチ系統の上級職を取る
よねって話なので不人気ジョブである事に変わりはない。

最も多くのジョブ枠を持つ俺にとっては就職条件はどれも容易く
満たせる物でしか無く、見習系統ジョブスキルのレベルはジョブレベ
ルに連動して上がる仕様だから楽にスキルレベルが上がるのも良い
し、何より【古株】の奥義が俺と相性が非常に良い。

「奥義？」

「【古株】をカンストさせる事で覚えるスキルで《百専練磨》オールド・ハンドってスキ
ルなんだけど。これが効果」

《百専練磨》：パッシブスキル

自身の合計レベルの五倍の数値だけHP・MP・SPを上昇させ、自
身の合計レベルの数値だけSTR・END・AGI・DEX・LUC・
従属キャパシティを上昇させる。

また、自身のジョブスキルのレベルの合計数『200』につき『1』
%自身のアクティブジョブスキル効果を上昇させる（スキルレベルの
存在しないスキルはスキルレベル『1』として扱う）

……見て分かる通り俺の常備アイテムである【ヴァルシオン】の《強
装才刃》と同じ『ジョブレベルを基準にした自己強化パッシブスキル』
である。言うまでもなく膨大なジョブレベルを持つ俺とレベル基準
強化スキルや補正の相性は最上だし、数多のスキルを持つ俺ならジョ
ブスキル上昇効果率もかなり高い。

「まあ貴方にとっては相性が良過ぎるスキルね。むしろなんで今まで
就かなかったのか」

「これまではパーティーバランス的に魔法スキル習得を優先してたしな。後はほぼロストしてたからか気付くのが遅れたんだよ。【見習】カンストして上級職になってから気付いた」

「ティアンにとつては難易度の割に効果が微妙なジョブだからワシも知らなかった。別にワシはジョブの専門家ではないしの」

尚、現在は【古株】をカンストさせた上で《職能連結》を使って経験値稼ぎ用としてサブに入れた【狩人】ハンター【傭兵】マーセナリー【餓鬼】イーターに経験値を落としてる。経験値稼ぎにジョブ変える必要がないから超便利。

「まあ、妹さんに置いて行かれない様に自己強化が順調なら良いわ。デンドロでまた才能コンプレックスを拗らせても困るし」

「うるさいわ。……確かにそういうコンプレックスが無ければ【ルー】はこんな『才能と技能の追加』に特化したへエンブリオにはならんだろうが」

「はいはい、ちよつと言い過ぎたわよ。……これで許してちょうだいな」

「む」

そう謝りながらひめひめは俺に軽くキスをすると『じゃ、ハロウインデート楽しみにしてるわね』と言いながら部屋から出て行った……リアルでは隠す必要がある反動かね。こつちでは妙に大胆になつてる。

「おーおー、お熱いのー。……ちなみに今の光景を妹御達やあのへY L N T 倶楽部〉に見られたら面白い事になるじやろうか」

「妹連中なら問題ないがロリシヨタ共はちよつと……ただでさえ妹二人（リアルロリ）とネリル（見た目はロリ）とひめひめ（アバターはロリ）を連れてる所為で、あそこのオーナー以外のメンバーからは同類ロリコンを見る様な目で見られるんだから」

ちなみに何故かこつちの事情を全部察してるオーナーからは『いいお兄さんですな』とか親しげに話しかけられるんだがな。あからさま過ぎる H E N T A I なのにロリシヨタへの危険や悪意が一切無いからミカやミュウちゃんは特に警戒なく接してるし。

……ひめひめ曰く『多分、そう言うのに気が付いてしまうからこそ

“無垢なもの”に惹かれてるタイプなんでしょうね。持ってしまったもので嫌な思いをしてみると言う点なら妹さん達と同じかも……H
ENTAIなのは事実だけど』って事だが、“お前も同じなのは？”
“とは言わないでおこう。撃たれたくないし。”

ハロウィンスレ／少女達の戦い

□??地球 とある掲示板



【トリックオア】へInfinite Dendrogramへハロウィンイベントスレ【トリート!!!】

1：名無しの白氷術師「sage」：2043/10/31（土）

このスレはへInfinite Dendrogramへハロウィンイベントに関する情報を書き込むスレです

イベント内容・イベントモンスター・イベント交換アイテムの質問などご自由に

荒らしはスルー推奨

・

・

・

759：名無しの鎧巨人「sage」：2043/10/31（土）

アバー!?!? 雑魚イベントモンスターの攻撃防いだら状態異常食らってタコ殴りにされて死んだ!

なんだこのクソイベントオ!!!

760：名無しの炎忍「sage」：2043/10/31（土）

ご愁傷様www

しかし俺はそんな事無かったけど状態異常食らったって報告は結構聞くな

761：名無しの剛剣士「sage」：2043/10/31（土）
まあ、ハロウィンイベントのモンスターらしくアンデッド系統が多いからな

他にはご当地ジョブのスキルを使ってそれっぽい格好してる「仮装」系とかいるし

762：名無しの大海賊「sage」：2043/10/31（土）

総称すると昼は仮装パーティー、夜はアンデッド祭りなイベントだね

【海賊】や【船大工】の仮装をした魚人が何処で作ったのか船に乗って襲撃してきたのは驚いたけど

763：名無しの白氷術師「sage」：2043/10/31（土）

アルターの編集部のメンバーによる解析でイベントモンスターは共通スキルを持っていると判明

《トリック・オア・トリート》：パッシブスキル

与えたダメージの10%分だけHP・MP・SP回復する

与えたダメージが『1』以下の時は代わりに数十種類の中からランダムで一つの状態異常を掛ける

764：名無しの鎧巨人「sage」：2043/10/31（土）

これの所為か!?!? なんだこの耐久型殺し!!!

765：名無しの高位書士「sage」：2043/10/31（土）

レジェンダリア編集部でも同スキルを確認

どうもスキルが微妙な上に隠蔽が掛かってたから発見が遅れたらしい

766：名無しの疾風槍士「sage」：2043/10/31（土）

ドレイン割合も少ないしダメージ1以下なんて逆に滅多にないか

ら大したスキルじゃないんじゃ？

767：名無しの大気功士「sage」：2043／10／31（土）

>>766

ダメージ軽減スキルがあつて相手の実力が低ければダメージ0とかあるからな

ノーダメージ雑魚狩りポイント取得に対する罨スキルかね？

768：名無しの大銃士「sage」：2043／10／31（土）

つまりトリック（ドレイン）かトリート（状態異常）のどっちか選べって事か

実にハロウィンらしいスキルだな！（尚被害）

769：名無しの白氷術師「sage」：2043／10／31（土）

後、この状態異常交換は発動条件が厳しい＋ランダムだからかかなりレジストし難い様だ

どうも状態異常の強度自体はそこまで強くない様だが要検証だな

770：名無しの高位書士「sage」：2043／10／31（土）

壁役のメンバーに弱めイベントモンスターの攻撃を受けさせ続けて状態異常の種類を調べるか

イベント日数も限りがあるし他の支部と協力した方が良いな

771：名無しの鎧巨人「sage」：2043／10／31（土）

>>769

【麻痺】と【猛毒】と【吸命】と【呪縛】と【拘束】と【混乱】その他諸々を食らつたんですが

アイツら動けなくなった所を集中攻撃しやがって……！

772：名無しの炎忍「sage」：2043／10／31（土）

運が悪かつたのでは？

773：名無しの大海賊「sage」：2043/10/31（土）
アンデッド系は普通の状態異常スキルも使ってくるからねー

774：名無しの剛剣士「sage」：2043/10/31（土）
状態異常系の敵がいるのにソロ狩りするからだろ

775：名無しの疾風槍士「sage」：2043/10/31（土）
ハロウインはパーティープレイ推奨イベント

776：名無しの鎧巨人「sage」：2043/10/31（土）
>>774>>775
うるせえ!!! パーティー組んでくれるヤツなんていないんだよ!
コミュ障舐めんな!!!

777：名無しの竜騎兵「sage」：2043/10/31（土）
レジェンダリアで空飛んどつたら「ハイ・パンプキン・ドラゴン」っ
ちゆう上位純竜レベルのイベモン見つけたで

なんか青い炎を吐いてきてステータスも高かったから逃げたけど
アレはソロじゃ無理やな

778：名無しの大銃士「sage」：2043/10/31（土）
似たような「パンプキン・ワイバーン」とかはドライブでも見かけ
た

でも単に体色がオレンジと頭部がカボチャ型だけのドラゴンモ
ンスターだったからこれじゃない感

779：名無しの青龍道士「sage」：2043/10/31（土）
「ジャック・オー・ランタン」とか「ウィル・オ・ウィスプ」とかはハ
ロウインらしいよ

……中華感満載な黄河に出ると違和感があるけど

780：名無しの炎忍「sage」：2043/10/31（土）

天地ではキュウリとナスに足が生えた植物系イベントモンスターを見かけたぞ

……ドロップは美味しかったけど、それはお盆じゃね？

781：名無しの高位書士「sage」：2043/10/31（土）

まあ運営もハロウィン系モンスターを考えるのが色々大変なんだろう……多分

782：名無しの白氷術師「sage」：2043/10/31（土）

一応仮装系モンスターはご当地っぽい感じだったが

アルター・ドライブ・レジエンダリアの西方三国はゴブリンだったけど

783：名無しの大弓狩人「sage」：2043/10/31（土）

カルディナと黄河は「デイスガイズ・〇〇・アントマン」っていう魔蟲

見た目は二足歩行のアリだな

784：名無しの大海賊「sage」：2043/10/31（土）

さつきも言ったけどグランバロア……というか海には「マーマン」っていう魚人

夜は船幽霊とか幽霊船とかも出たよ

785：名無しの炎忍「sage」：2043/10/31（土）

天地は仮装鬼系……西方三国の名前変えただけな気もする

786：名無しの装甲操縦士「sage」：2043/10/31（土）

操縦士のジョブをあてがわれたのに乗る機体が普通の馬なんてゴブリンもいたけど

787：名無しの大銃士「sage」：2043/10/31（土）

逆に複数名で戦車を操縦するイベントボスのヤツ等もいたが

788：名無しの大気功士「sage」：2043/10/31（土）

中位ぐらいの狩場だと仮装系複数名でジョブのシナジーが噛み合った連携をしてくる時があるからな

そこに他のイベントモンスターが加わったら侮れない

789：名無しの剛剣士「sage」：2043/10/31（土）

逆に初心者狩場付近の初級モンスターは連携してこないから歯応えのある丁度いい難易度なのかな

前述した通りに事故や罠とかもあるがそれは普通の狩りでも同じだし

790：名無しの長槍騎士「sage」：2043/10/31（土）

イベントボスを付与術師とかが強化して襲い掛かせて来たから全滅したんだけど

791：名無しの賢者「sage」：2043/10/31（土）

こっちは従魔師系統が野良モンスターをタイムから強化して来たのに遭遇したが

792：名無しの炎忍「sage」：2043/10/31（土）

俺も指揮官っぽい鬼が複数の小鬼と連携組んで戦ってるのは見た

793：名無しの白氷術師「sage」：2043/10/31（土）

仮装系は大多数が下級職をあてがわれた下級モンスターだが

数は少ないが上級職をあてがわれた上級ボスモンスターも確認されているな

794：名無しの高位霊術師「sage」：2043/10/31（土）
多分怨霊術師っぽい上位ゴブリンが辺りに沢山いた「ウイル・オ・
ウィスプ」をコストにして

強力な呪術をばら撒いて狩場が阿鼻叫喚の地獄絵図になってるん
ですが

795：名無しの高位書士「sage」：2043/10/31（土）
こうして報告を聞いているだけでも面白いなwww

796：名無しの刀匠「sage」：2043/10/31（土）
しかし狩り系のイベントだから生産職的には暇なイベントだな

797：名無しの紡績職人「sage」：2043/10/31（土）
素材系イベントアイテムの持ち込みに期待かなー

798：名無しの高位技師「sage」：2043/10/31（土）
生産職が蚊帳の外気味なイベントな気もするが……初の大規模イ
ベントならこんなものか
それよりこっちはロボット開発で忙しいし

799：名無しの白氷術師「sage」：2043/10/31（土）
情報だと装備品よりも素材アイテムの方が質が高くなっているか
ら
生産職にもある程度考慮されている様だかな

800：名無しの鎧巨人「sage」：2043/10/31（土）

まあ結局デスペナになった俺にはもう関わりのない事ですけどね
orz



□〈魔霧の森〉【魔導拳^{マジック・リスト}】ミュウ・ウイステリア

遂に始まったハロウインイベント、私はアリマちゃんとその恩人達だと言う人達とパーティーを組んで霊都から少し離れた所にある、自然魔力の関係で常に濃霧が立ち込めると言う場所——〈魔霧の森〉でイベントモンスター狩りを行っていました。

『GYIAAAA!』

「おっと、中々鋭い拳ですね」

そして今私はイベント上級モンスターの一体である格闘家の様な仮装をした筋骨隆々のゴ布林——「デイスガイズ・ハードパンチャー・ゴ布林」と一対一で戦っていました。掲示板などではハロウインらしく「仮装系」などと呼ばれる彼等ですが、実際には与えられた職業のジョブスキルを身に付けているので、その実力は決して^{見掛け倒し}仮装では無いのです。

その証拠に完全に相手が見えているこちらと違って、魔力の籠った濃霧の所為で単純な視覚だけで無く探知系スキルも制限されるこの〈魔霧の森〉の中であっても「ハードパンチャー」の拳は正確に私を狙ってきていますし。

『GII! GAA!』

「ほう、ステータスは『バフ込み』で上位純竜級。加えて高い『拳術』のセンススキルと……確か【硬拳士^{ハードパンチャー}】には攻撃力を上げるスキルがありましたね」

『《我が拳、巖の如く》だよミュウ。ENDの三倍分だけ拳の攻撃力と防御力を上げるスキル。《天威模倣^{アビリティ・ミラーリング}》に干渉しない攻撃力と防御力を上げるスキルだから就く上級職候補にも上がったでしょ』

最も流石に視界のハンデは大きいからか拳撃には余りキレが無く、ステータスも《天威模倣》のお陰でSTR・END・AGIが同じになっっているの避けるには苦労しませんが。

「さて、そろそろ片付けましょうか」

『そうだね……【バイオハーデス】よりMPを10万ほど消費して《エンハンスリスト》起動』

『G I A ! ? ? 』

直後、ミメが発動させたMPを消費して拳の攻撃力と防御力を強化する魔拳士系統の基本スキルに【霊樹冥冠 バイオハーデス】から汲み出されたカンスト魔法職へマスターの最大MPに匹敵する魔力が注ぎ込まれ、相手の【硬拳士】の奥義に迫るレベルの強化を私の拳に齎しました。

……先も言った通り《天威模倣》はステータスだけに関わるスキルなので、この様に攻撃力や防御力を上昇させるスキルと併用が可能です。加えて自然魔力が豊富なレジエンダリアに居るお陰で【バイオハーデス】の蓄積も十分なので、この程度の消費なら特に問題は無いですしね。

『ついでに一万ぐらい使って《ダークネス・フイスト》も追加だ』

「では行きましょう……まずは片腕」

『G I I A A A ! ? ? 』

更に追加で閻属性のオーラを纏わせた《スライスハンド》で私はすれ違いざまにハードパンチャーの片腕を切断しました……ちなみにネリルちゃんとの訓練の成果か、或いは第五形態に進化したお陰か融合しているミメは私の各種スキルを使う事が出来る様になってました。

「閻属性の拳はENDでの防御がし難くなりますので……これで終わりです」

『G A A A A A …… ! ? ? 』

そして私は片腕を失ってバランスを崩したハードパンチャーに対して強化された拳と《正拳突き》《リバーブロー》《掌底打ち》の連携で打ち据えた後、頭部を《ジェットアッパー》で吹き飛ばして蹴りを付けました……格闘スキルの無詠唱発動も中々様になって来ましたし、これなら十分に実践でも使えるでしょう。

……さて、今の【デイスガイズ・ハードパンチャー・ゴブリン】を強化していたモンスターを倒しに行った他のパーティーメンバーへ連絡しておきましょう。

『……は、はい、こちらミマモリです……どうしたのミュウちゃん、ま

さかやられ……!」

「いえ、こちらはもうハードパンチャーを倒しました。そちらはどうですか?」

『え、上位純竜レベルまで強化された相手をあつさり? ……やだ濡れ……こっちはバフを掛けていた【デイスガイズ・エンチャント】と【デイスガイズ・ドルイド】と【デイスガイズ・コマンダー】を見つけたよ。向こうも最大戦力がやられて動揺しているみたいだし今から叩くよ』

「分かりました、私もそちらに向かいますね」

……まあ、支援特化の相手なら私が来る前に終わるでしょうが。何せ向こうには新しい『特典武器』を手に入れておそらく私以上の実力になったアリマちゃん、このレジェンダリアに於けるトップレベルのクランのメンバー達が居ますからね。



「……やっぱり終わってましたね。予想通りです」

「あ、ミュウちゃん。あの強化された純竜級をあつさり倒すなんて流石だね! 出来ればもう少し早く支援役を見つけて倒したかったんだけど、連中の中にイリユージョニストも居たみたいで」

「そんなに気にしなくて良いですよ、普通に倒せましたし」

そんなアリマちゃんでしたが戦闘を終えたばかりなのか手に持つ刀身が二股に分かれた剣——伝説級特典武器【音叉角剣 ヴァニフォーク】が細かく振動しながら甲高い音を発していました。

「その使い心地はどうですか? まだ鳴ってますけど」

「あ、もうスキルはオフにしてるんだけど暫くは震え続けるみたい……ミュウちゃんを始めとするパーティーメンバーへ【強制睡眠】の対象から外してあるから大丈夫だけど」

元となった【音響角鹿 ヴァニフォーク】は私達がアルターからレジェンダリアに向かう際に偶々遭遇した鹿型のへU ユニーク・ボス・モンスター B Mで、音叉の様なツノを振動させる事で発生させた音に触れた者に強力な【強

【制睡眠】の精神干渉を発生させたり、神話級金属に匹敵する強度の角による超振動打撃や音速の音響衝撃波によって戦う強敵でした。

……まあ精神干渉が効かない上、カリキュレーターである【シヤカ】の特性から自分が受けている精神干渉の種類を看破出来るアリマちゃん居たので早々に手の内を明らかにされて、スキル特化型だったから物理的な戦闘能力は純竜級レベルだった事もあり《転位》で状態異常が効かない私と彼女のタッグと他メンバーからの遠距離支援によって撃破されましたが。

「使い心地に関しては武器としても高性能だし、装備スキルも剣から出た音に触れた相手全てを【強制睡眠】にする《スリーピング・ソプラノ》はかなり強いよ。……その分、敵味方の区別は付かないからパーティー戦では【シヤカ】の補助が必須だけど」

「そこは精神汚染が効かないアリマちゃんにアジャストされたからこそですね。デンドロのスキルはセーフティを取っ払って無制御にした方が高出力化するみたいですし」

剣から出た音全てと言うのは、当然ながら【ヴァニフオーク】を手につつアリマちゃん自身にも効果があるという事ですが、精神系状態異常を受けても一切問題なく行動出来る彼女にとってはデメリットになつてませんものね。

これと【ヴァニフオーク】のもう一つの装備スキルを組み合わせた今のアリマちゃんの戦闘能力は、推定ですが【バイオハーデス】を使う私をも上回るでしょう……とところで。

「……何故皆さんは私達から遠くへと離れているんですか？」

『ふふふ……それは再び友人に戻れた二人の尊い会話を邪魔しない為ですぞ。俺は空気の読める男ですのぞな』

「ああ、少女達の無垢な絡みは最高なんじや。尊死ぬ〜」

「そんな尊みに溢れる空間に我々の様な不純物が踏み入って良い筈がない（断言）」

「見てるだけで現実の汚濁に包まれた我が魂が浄化される……」

そんな事を言いながら私達から30メートルぐらい離れた所に居るのはアリマちゃんのフレンドだと言うレジエンダリアの上位クラ

ンへY L N T倶楽部〉のオーナーの【高位呪術師】LS・エルゴ・ス
ムさんと、その克蘭メンバーであるゴツイバイザーを付けた女性の
【邪眼術師】イヴィルマンサーミマモリさん、顔の下半分を覆うマスクを付けて手には翡
翠色の杖を持った男性の【翠風術師】エアロマンサーKNKAさん、背後に大きな蟹
型のガードナーを従えた男性の【獣戦鬼】ビーストオーガ剛雅さんの四人でした。
……少々個性的なメンバーですが、視界が封じられスキルによる探
査が阻害される上に環境に適応した強力なモンスターが跋扈する〈魔
霧の森〉で安定した狩りが出来る凄腕の〈マスター〉達なのです。
「……しかし、ミマモリさんの【ヴィルーパークシャ】は凄いですね。
この数メートル先も見えない筈の濃霧の中でも普段と変わりなくも
のが見えるんですから」

「あつ……幼女に褒められた……ふへへへ……！」

『おっと、少々ロリシヨタの尊み成分を摂取し過ぎてトリップしてお
る様ですな。ほれ斜め45度チョップ！』

……そんな手刀を食らって再起動しているミマモリさんの【監視感
撮 ヴィルーパークシャ】は強力な《透視》《遠視》《心眼》の効果を
持つ強力かつ正確な視覚系固有スキル有するバイザー型の〈エンブリ
オ〉だそうです。

更にその内の一つだけを自身のパーティーメンバーにも付与出来
るスキルもあるという優れ物であり、彼女のお陰で濃霧が立ち込める
ので狩りにはとても向かない〈魔霧の森〉でも私達は問題なく行動が
出来ると言うわけなのです。

「LSさん達仲良いんですね、やっぱり上位克蘭だとメンバー同士
の絆とかもすっかりとしてる感じ何ですか？」

『我々は同じ“志”の元集った同士達ですからな。仲は基本的
に悪くないですよ』

「……まあ偶に些細な意見の不一致で喧嘩になる事はあるが、それで
も目的の為になら皆で協力して行動するだろう」

「それに考えが違っていても〈魔法少女連盟〉みたいに仲良く協力出来
る所もある……どうしても合わない奴等も居るが」

……ちなみに彼等の様子を見てそんな質問が出て来るアリマチャ

んは意外と呑気と言うかおおらかな性格してます。そんな些細な事を気にしない性格だから割と面倒臭い私と友達になつてくれたとも言えるんですが……む。

「……何かいますね《人間探知》……十時の方向、高レベルの人間が五人ほどこいます」

『何ですと？ ……ミマモリ、KNKA、剛雅』

「了解《四天の読心眼》《四天の透視眼》並列起動。出力調整・隠蔽看破特化」

「《エア・エクスプロージョン》……確かに居るな。起きろ【アイテール】」

「【カルキノス】前に出る、彼女達を庇え」

『K I S S Y A S S Y A !』

その時、私はこちらを見る誰かの視線を感じ取ったので、直ぐに【ブラックオーツ】のスキルを使って霧に隠れながらこちらを伺っていた五人の人間を見つけ出しました。人間範疇生物の位置と大雑把に強さしか分からない《人間探知》ですが、効果が限定的なある分だけ殆どの隠蔽を看破可能な探知能力を有するのです。

そして私の言葉を聞いた《Y L N T 倶楽部》のメンバーは先程までの緩んだ雰囲気から一変して、即座に探知スキルによる対象の補足と戦闘準備を整えました。そんな私達の様子を見て隠れていても無駄だと思ったのか、潜んでいた者達は《光学迷彩》を解いて姿を現します。

「……ふふふ……中々勘のいいお嬢さんだ」

『お前は……ペロセウス！ まさか今回の一件を嗅ぎつけたと言うのか！』

「えーっと、お知り合いですか？」

「……彼奴等は《L P T 小隊》。我らと同じ業を背負いながらも決定的な部分で道を違えた宿敵よ」

そして《Y L N T 倶楽部》の四人と、ペロセウスと言うらしい盾を持った《マスター》を先頭とした《L P T 小隊》と言うクランの五人は、困惑する私とアリマちゃんを他所にお互いに戦闘態勢に入りつつ

剣呑な雰囲気を放ちながら睨み合います。

……その光景を見てどうやら克蘭同士の抗争に巻き込まれた様だと判断した私とアリマちゃんは、それぞれいつでも戦闘に入れる準備を整えながら彼等の様子を見守る事にしたのでした。

レジェンダリアのHENTAI達

□〈魔霧の森〉

マジック・フィスト【魔導拳】

ミュウ・ウイステリア

『……それでペロセウス、態々こんな辺鄙な場所まで一体何の様ですか？ 折角のハロウィンイベントなのだから、何処か適当な所で狩りでもして来たらどうですか？』

「ふん、そんな『辺鄙な場所』に少女達を連れ込む貴様らに言われたくないな。いやはやまったく、こんな所でナニをしようとしていたのやら」

「私の〈エンブリオ〉のお陰でこの森でも行動に支障が無いから狩りに来ただけよ。……まったくこれだから童貞は。思考が全部下半身に直結しているわね」

「何をしようと聞いただけでそんな返答を返す方がアレなんじゃ無いかあ？ この喪女熟女が」

……さて、ハロウィンイベントをしに来た私達でしたが、何故か目の前で〈Y L N T 倶楽部〉のメンバー四人と、その敵対クランらしい〈L P T 小隊〉のメンバー五人が凄腕な剣呑な雰囲気ですばしているのです。

「……ええと、これは私達いつたいどうすれば良いのかなミュウちゃん。LSさん達も見事無いぐらいおっかない雰囲気になってるし」
「襲い掛かって来たPK〈マスター〉相手なら有無を言わさせず皆殺しで問題ないのですが、今回はどうもクラン同士の争いが関わっている様ですし……」

アリマちゃんがこっそり近づいて来て耳打ちして来たので、私も同じく小さな声で喋りましたが……おや、何か向こうの言い争いが止まっていますね。そしてみんな私達の方を見えます。

「……少女同士が顔を寄せて……はっ！ キスシーン！」
「幼女同士の百合描写尊い」「ハアハア……ウツ！」「チツ、これだから解釈違い共は……尊いロリ同士の友情描写の方が良いに決まってるでしょー！」「ああああく浄化されるく」「汚物共と会話して汚れた魂が浄化されていく……」
『やはりロリシヨタの友情はいつ見ても尊いものですね』

「……うーん、イベントの時間も限られてるし、とりあえず向こうの人達を殲滅すれば良いのかな？」

「……ええとアリマちゃん、まずは二つのクランの事情を聞いてみましょう」

……彼等を見てこのままだと話が進まない様な気がしたので、とりあえず「ヴァニフオーク」から先程よりも低い音を鳴らし始めたアリマちゃんを制止しつつ、私は二つのクランが何故敵対しているのかを聞く事にしました。

『ふむ、巻き込んでしまった二人には事情を説明する必要があるでしょうな。……まあ簡単に言えば彼等は元々〈Y L N T 倶楽部〉に所属していたか、我らと同じ考え^{ロリシヨタ}を持つていた者達なのですが、我々にとって「最大の禁忌」を犯したが故に追放・敵対する事となり、そういった者達が集まって出来たクランが〈L P T 小隊〉なのですぞ』

「我らはこの自由なる世界で己が望みを叶える為に来たと言うのに、その〈Y L N T 倶楽部〉の連中は狭量な考えから我らを否定して追いやったのだ！」

……そのL Sさんと彼方の盾を持った男性『ペロセウス』氏の証言によると、要するに〈Y L N T 倶楽部〉の主義主張とは相反する考えを持つ者達で構成されたのが〈L P T 小隊〉であり、それ故に敵対する事になったと言う訳ですか。

「じゃあ、結局〈L P T 小隊〉は私達に何の様？ 敵対P Kのつもりなら相手になるけど」

「おっと、早合点はよしてくれ「少女^{ロリ}狂女」。こちらとしても君達の様な可憐な少女^{ロリ}達に手を出すつもりは無い……そちらから仕掛けて来るなら防戦ぐらいはするが」

そう言いながらペロセウス氏は手に持った『蛇の頭髪を持った女性が描かれた盾』をこちらに向けて牽制して来ました……ちなみに「少女狂女」とはアリマちゃんの通り名らしく、以前《伝播スル狂信》の設定をミスって辺りのモンスターや《マスター》を纏めて狂乱状態に叩き込んで地獄絵図に変えた所から付けられてしまったのだとか。

まあ、本人は『やらかした事的にしようがないけど、もうちよつと

可愛い通り名なら良かった』とも言ってましたが、通り名というのは他人が付けるモノですからね。

『気を付けて下され二人とも。ペロセウスが持っている盾は彼奴の〈エンブリオ〉【反視逆盾 アイギス】。盾で攻撃を受けた相手に対して【石化】や【精神休眠】の状態異常を掛けてくるカウンター型ですぞ』

「ちなみに盾で防げない、特にそちらの『少狂嬢』が得意とする精神系状態異常は別の〈エンブリオ〉で対策されている。だからそんな音を出しても無駄だよ」

まあ、先程の戦闘で潜伏していた彼らにも無差別型であるアリマちゃんの精神干渉が届いている筈なのに、ああやって無事って事は対策はされているって事ですよね……最もそれには余り意味は無いのですが、とにかく今は肝心の『彼らの目的』を聞きましようか。

「それで、結局貴方達は何をしに来たんですか？」

「ふふふ、決まっているだろう？ 我々を理不尽に放逐しながら、ぬけぬけと可憐な少女達ロリと共にイベントを楽しんでいる〈Y L N T 倶楽部〉の連中を粛正して……その後はどうか俺達と一緒にハロウィンイベントを回して下さい！ 出来ればお手手繋いで！ お願いします
!!!」

「二「お願いしまあす!!!」」

そう言いながら彼等へL P T 小隊のメンバーは私とアリマちゃんに向けて腰を90度に曲げながら懇願して来たのです……それを見て困惑する私達でしたが、何かを返答しようと思うよりも早く〈Y L N T 倶楽部〉の皆さんが彼等へと怒鳴り始めます。

『ハアアアアアアアッ!?? ロリシヨタ達をパーティーに誘うならまだしも〴〵お手手繋いで〴〵とか緊急時以外はあり得ませんぞ!!!』
Yイエス

ロリシヨタノータッチ

L N Tこそ我がクラン名にも掲げる紳士淑女の掟ですぞ!!!』

「うるせえんだよ!!! 俺達はリアルだとセクハラとか言われて出来ないロリシヨタ達との触れ合いが目的でデンドロをやっているのに、そんな下らない掟で俺達の自由を縛りやがってえ!!! だからこそ俺達のクラン名はL P T 小隊! 虐げられた者達の誓いの名前なん

だ!!!」

「ハア？ 貴様ら直結厨の性犯罪者達の汚物のごとき舌がロリシヨタ達に触れるなど考えるだけで悍ましいんだが!?？ 我々紳士淑女に許されるのはロリシヨタの残り香をクンカクンカする所までに決まってるんだろお!!!」

「別に俺達は無許可でペロペロとかしねーし！ むしろペロリストなのはオーナーだけで、俺らはちよつとだけロリシヨタ達と手を繋げれば良いぐらいのロリシヨタコンだし！ それも拒否されたら素直に引き下がるから、ロリシヨタの衣服から残り香を全力吸引してるお前らよりもマシだから!!!」

「うっせえバーカ！ 孤児院の洗濯を手伝ってる時にたまたまロリシヨタの香り成分が鼻孔に入るだけですう〜！ お前らと違って不可抗力ですう〜!!!」

「うっせえバーカバーカ！ 俺らだって孤児院の子供達の面倒を見る時に必要だから触れてるだけですう〜！ お眠のロリシヨタ達をベッドに運ぶ時とかさあ！ それをいちいち咎めやがって!!!」

「うっせえバーカバーカバーカ!!!」
「何だこのバーカバーカ!!!」

……途中から語彙力が酷いことになってますが二つのクランの言い争いは続きました。姉様なら『盛大にブーメラン投げ合ってるねー』とか言いそうですし、現在兄様とデート中なひめひめさんなら『え？ あそこにいるHENTAI共は全員ぶつ殺したわ。ぶつ殺すなんて下品な言葉は使わないわよ』と既に全員の頭を撃ち抜いた後になりそうですが……さてどうしましょうか。

「……えーっと、へLPT小隊の皆さんでしたっけ？ 申し訳ないですけど今回のハロウィンイベントは私がLSさん達と誘ったので、言い出した以上は最後まで付き合おうと思ってますから貴方達の誘いは受けられません。ごめんなさい」

『ナニイ？?』

「……おおう、流石はアリマちゃん。こんな状況でも躊躇なく行きますね」

正直言つてあの言い争いに介入するのは私でも二の足を踏むんですが、そこに痺れる懂れます……そして、そのアリマちゃんの御断りの言葉を聞いたへLPT小隊のメンバーは絶望の表情を浮かべ、逆にへY L N T倶楽部のメンバーは(マスクを付けてるLSさん以外)鬼の首でも取つたかの様な笑みを浮かべました。

「フハハハア!!! ほらロリシヨタに断られたんだから素直に帰りな! それともその程度のマナーすら守れない程に落ちぶれたか!」

「ぐぬぬぬぬ……貴様らの様なH E N T A Iをパーティーに誘つてくれるロリへマスターなんて言う都市伝説が本当に実在したとは!」
「ハロウインイベント中に『せっかくロリに誘われたのにクジが外れた!』と騒いでるへY L N T倶楽部のバカ共を見て来てみたが、正直また連中の妄想で本当は金でも積んだんだと思つてたのに……」

「……あの阿呆共……後でめる」

『……ペロセウス、お前達の言いたい事に関しては後で彼女達がいない所にてじっくりと聞きますので、ここは一旦引いては貰えないですか?』

そんな何やらヒートアップしそうな雰囲気の中、一步前に出たLSさんが他のメンバーを制止しながらへLPT小隊へそう言った……どうも彼は穩便に話をつけようとしている様なのですが……。

「ええいつ! ……ここまで来て引き下がれるか! ロリへマスター達とイベントを回るの諦めるが貴様らはデスペナにして、ロリシヨタと一緒に居られないリアルで悶々としたハロウインを送らせてやる!!!」
『……ペロセウス、お前達をそこまで追い込んだ事には俺達の無理解や至らなさも原因であつた事は認めよう。……だが、イベントを楽しんでいる彼女達の邪魔をする言うのなら、へY L N T倶楽部のオーナーとしてお前達を打ち倒す』

半ばヤケになつたかの様に己のへエンブリオである【アイギス】とミスリル製つばい片手剣を構えるペロセウス氏と、彼に呼応する様に各々の武器やへエンブリオを構えたへLPT小隊。それに対してLSさんはこれまでに無い真剣な声を上げながら足元に魔方阵を展開し、同じく他のへY L N T倶楽部のメンバーも目の前の敵を打ち倒

さんと戦闘態勢に入りました……まあ、このクラン同士の抗争の原因は『ロリシヨタに関する性癖の不一致』なんですけどね。

それに向こうが戦闘態勢に入った所為で完全に迎え撃つ気となったアリマちゃんが前に出てしまいましたし、彼女の攻撃が既に終わっている以上、彼等〈LPT小隊〉はもう詰んでるんですけど。

「……うん、引く気が無いならしょうがないか。私もミュウちゃんとのハロウィンイベントをこれ以上邪魔させたく無いし、貴方達を排除するよ。……最後に行っておくけど、このまま何もせずに帰るなら見逃してあげるよ」

「君達と戦う気は無いんだがな。……それに幾らかつて事件の報復として自分をPKしに来た〈マスター〉十数人を逆に精神汚染で返り討ちにした君とは言え、精神耐性能力持ちの〈エンブリオ〉相手では……その情報は古いよ? ……今の私に“耐性”は意味がないから『スリーピング・ソプラノ』……ぐがーzzz」

余裕を崩さないペロセウス氏でしたが、アリマちゃんが「ヴァニフォーク」から発生させた催眠音波を聞いた瞬間、まるで付加されていた筈の精神耐性が無くなったかの様に他のクランメンバー諸共あっさりと【強制睡眠】に落ちてしまいました。

『「……え?」』

「うん、あくまでも精神耐性を上げるスキルで音波や精神干渉そのものを無効化している訳じゃ無かったみたいだね。限界まで耐性を“引き下げれば”一瞬で状態異常に落とせるのが分かったのも収穫かな?」

「……まあ、彼等は騒いでいる間にずっと聞かされてましたものねえ。第二スキル」

いきなり相手が眠りこけた事に啞然とする〈YLN T倶楽部〉の面々でしたが、これこそが先程から【音叉角剣 ヴァニフォーク】が発生させていた少し低い音の正体——触れた者の精神系状態異常耐性を引き下げる音波を発生させる第二スキル『ウィークネス・テノール』なのです。

……今回は音波を長時間聞かせ続けて十分に耐性を減らしてから

の【強制睡眠】と言う地味な使い方でしたが、アリマちゃんが本気ならこれと《伝播スル狂信》を組み合わせて超強化されたステータスによる直接戦闘＋耐性減弱精神汚染による広域制圧・殲滅すら可能な超凶悪スキルです。自分ごと巻き込む特性的に《転位》も無意味なのでまともに戦えば私でも勝てないですね。

「さてと、なるべく穏便に片付けたつもりだけど彼等はどのような。LSさんはどうします？」

『……そうですね。折角のお二人とのハロウィンイベントにわざわざPKをしたくは無いですし、このまま放置して我々は別の場所でイベントの続きとしたいですな。……このイベントが終わり次第、彼等とはかつて同じ志同じ志を持った者同士シヨとして俺がしっかりと話し合っておきますので』

「分かりました、私もそれで良いですよ」

そういう訳で私達は【強制睡眠】にされた彼等を放置して、また別の狩場へと移動してハロウィンイベントに戻る事となりました……。まあ、精神減弱は放置しておけば時間経過で元に戻るらしいですし、【強制睡眠】も軽く掛けただけだから直に起きるでしょとはアリマちゃんの弁です。それまでにモンスターとかに襲われるかも知れませんが、先にちよつかいをかけて来たのは向こうなので自業自得という事で。

……そして狩場を変える為に移動する途中、私達はへY L N T 倶楽部へのオーナーとしてのLSさんから『巻き込んでしまった以上はある程度の事情を話しておかねば不義理に当たりますな』と彼等へLP T 小隊への因縁について少し聞きました。

『……元々は彼等も子供達ロリシヨタの為に慈善事業を積極的に行う善良なへマスターへであったのですが、無垢なる少年少女達とのささやかな触れ合いを求めた彼等に対して、我々がその名の通り“ノー”を突き付けてしまったが故にあそこまで拗れてしまったのです』

「……まあ、私達が言える事でも無いけどこのレジエンダリアには変態が多いからねえ。その中には私達と違って善良では無い、直接的な害を成そうとするタチの悪い連中もいるから、そんなヤツらから

子供達ロリシヨタを守る為には徹底的な線引きが必要だったのよ」

「当時はクランを立ち上げたばかりで色々ゴタついてたから、少し過剰すぎる排斥になってるのに気がつくのが遅れた」

「それにティアンの子供達ロリシヨタを狙う『魂喰らい』の〈U B M〉の情報や、今は活動を縮小しているが幼女ロリ〈マスター〉専門のPKクラン〈メスガキわからせ隊〉とかの活動で俺達もピリピリしてたから」

「あ、そう言えば私とひめひめさんとサリーちゃんを襲って来たので返り討ちにした〈マスター〉達がそんなクラン名を名乗ってましたっけ」

そんな彼等の話を聞いてクランの経営も色々大変なのだと思います。多数の〈マスター〉が混在する上位のクラン故に人間関係も複雑な様で……。

『まあ、幾ら思い詰めたとは言えど子供達ロリシヨタをオモチャとお菓子で釣つて、その代わりにペロペロさせるようにしたのは完全にアウトですが』

「連中が子供達ロリシヨタをベッドに運んでる間に、その無垢なる肢体をさり気なく撫で回してたから内臓を溶かしたのはやむ終えない」

「手の甲ならセクハラじゃ無いとかそういう問題じゃ無い」

「やはりイエスロリシヨタノータッチは徹底すべきだな」

「あはは……」

……でもこんな感じのショーもないオチが付くのがレジエンダリアクオリティ(苦笑)……まあ、彼等は基本的に良い人たちなので付き合っていて不快な気分にはなりません。



そんな訳で私達は次の狩場へと向かう為に一旦〈アムニール〉にまで戻っていたのですが、そこで着ぐるみ装備の戦闘態勢な姉様と遭遇したのです。

『ちように良かったミュウちゃん達。一緒にこれからレイドボスを倒しに行かない?』

「え？ ……私は構いませんが、他の人達はどうです？」

「私もいいよー。レイドボス戦とか楽しみだし」

『少女達の頼みを断るといふ選択肢は我ら〈Y L N T 倶楽部〉には存在
しませんぞ』

「「うんうん」」

……とまあそんな訳で、私達は姉様の誘いでハロウィンイベントに於ける『レイドボス』と言える相手と戦う事になったのでした。どうやら私達のハロウィンはまだまだ続く様です。

ハロウィンスレ2／ボスモンスター攻略に向けて

□??地球 とある掲示板



「レッツー」へInfinite Dendrogramへハロウィン
イベントスレ2「ハロウィン！」

1：名無しの高位書士「sage」：2043／10／31（土）

このスレはへInfinite Dendrogramへハロウ
インイベントに関する情報を書き込むスレです

イベント内容・イベントモンスター・イベント交換アイテムの質問
などご自由に

荒らしはスルー推奨

8：名無しの白氷術師「sage」：2043／10／31（土）

イベント中・後半になったら

「デイスガイズ・ウエアウルフ・ゴブリン」や「デイスガイズ・バンシー・
ゴブリン」と言った

新規にポップされたと思しきモンスターも確認されたぞ

9：名無しの鷹匠「sage」：2043／10／31（土）

そんな新規モンスターなど詳しいステータスとかはwikiを見
よう！

10：名無しの大斧士「sage」：2043／10／31（土）
ここぞとばかりに宣伝する編纂部の鏡

11：名無しの高位精霊術師「sage」：2043／10／31（土）
ギャー!? イベントボスモンスターにやられた！
何あの「ハイ・パンプキン・ドラゴン」ってヤツ！
カボチャ頭のオレンジドラゴンとかいうクソデザインなのに強すぎない!!!

12：名無しの影「sage」：2043／10／31（土）
デザインはアレでも上位純竜級でござるからなあ
天地に出てきた「デッドリー・キューカンバー・ペイルホース」なども

広域に「死呪宣告」「脱力」「飢餓」と言った凶悪な状態異常をばら撒いておりましたし

13：名無しの聖騎士「sage」：2043／10／31（土）
アルター東部に現れた「ファーマーキング・パンプキンゴーレム」とか

「プランテイング・パンプキンゴーレム」を育てて大軍勢を作ってたんだけど

〈アルター王国自由騎士団〉は只今討伐メンバー募集中

14：名無しの戦車操縦士「sage」：2043／10／31（土）
イベントモンスターだからかティアンには手を出さないのは色んな意味で幸いだったが

ドライブでは「ジャイアント・イグニス・ファトス」って巨大な火の玉モンスターがいた

物理や熱系攻撃に強いみたいで相性悪いんだよなあ

15：名無しの高位書士「sage」：2043／10／31（土）

各国の情報を総合するとイベントモンスターの中でも上位純竜級の特に高い能力を持つ

……所謂『レイドボス』レベルのモンスターが存在しているようだな

16：名無しの白氷術師「sage」：2043／10／31（土）

それらのレイドボスモンスターは基本的に一箇所の決められた範囲内に留まっており

近くに「マスタ―」が現れた場合には攻撃を仕掛ける……要は固定ボスと言った所か

17：名無しの黄龍道士「sage」：2043／10／31（土）

後はティアンが範囲内に入っても襲わない様だぞ
流星に攻撃されれば別の様だが

18：名無しの海賊剣豪「sage」：2043／10／31（土）

「ハイ・パンプキン・シーサーペント」討伐成功！
闇属性物体透過ブレス呪い付きは厄介だったけど

一定範囲内にしか動かないから知人が爆破して弱った所を一斉攻撃

19：名無しの蒼海術師「sage」：2043／10／31（土）

やっぱりレイドボス想定だったからかドロップアイテムは凄い大量に出たぞ

普通の上位純竜倒した時よりも多かったな

20：名無しの提督「sage」：2043／10／31（土）

まあそれなりの大人数で挑んだから一人一人に当たった量はそんなでもないが

21：名無しの大斧士「sage」：2043／10／31（土）

じゃあ少人数のパーティーでレイドボスを倒せばアイテムがガツポガツポか！

22：名無しの高位精霊術師「sage」：2043／10／31（土）

>>>21

そう皮算用して散って言ったへマスター達がいっぱい居るんですよ、俺とか

23：名無しの鷹匠「sage」：2043／10／31（土）

イベントのレイドボスなのだから大人数で挑むのが普通なんだろうが

……一部少人数で撃破する様な連中もいそうではあるが

24：名無しの影「sage」：2043／10／31（土）

種類にもよるがレイドボスは物理ステだけでも一万越えがザラでござるからなあ

HP・MPとかも高くて二十万超えてる上に強いスキルをきっちり揃えてるでござる

25：名無しの戦棍姫「sage」：2043／10／31（土）

まあ、上位純竜級モンスターはへUBMみたいな特異なスキルはないけど

その分ジョブスキルにもなってる汎用性の高い普通に強いスキルを揃えてるからね

正直言つて種が分かれば攻略可能なへUBMより手強いのはそこそこ多いよ

26：名無しの白氷術師「sage」：2043／10／31（土）

特異（ユニーク）でないのが弱いとは限らないという訳だ

まあイベントモンスターは普通でないスキルを使って来たりするが

27：名無しの崇神「sage」：2043/10/31（土）

そう言えば倒された「ランタン」や「ウィスプ」は偶に他のイベントモンスターを強化してるみたいよ

ボスモンスターとかは強化される前にさつきと倒した方がいいんじゃないかしら

28：名無しの黄龍道士「sage」：2043/10/31（土）

え？ それどこ情報？

29：名無しの海賊剣豪「sage」：2043/10/31（土）

そう言えば「シーサーペント」もステータスが二割ぐらい強化されてた様な

イベントボス補正だと思ってたけど

30：名無しの戦車操縦士「sage」：2043/10/31（土）

編集部ー！

31：名無しの戦棍姫「sage」：2043/10/31（土）

崇神さん、出来ればもうちよつと詳しく

32：名無しの崇神「sage」：2043/10/31（土）

そうねー、イベントのモンスターを倒した時に末期の怨念が別の所に流れてたのよ

それを辿ってみると他のモンスターに怨念が付加されて強化されてたのよね

怨念操作特化の超級職のお陰か怨念への感知能力も上がってるのよね

33：名無しの提督「sage」：2043/10/31（土）

実に早いレスをありがとう……検証はーん！

34：名無しの扇動者「sage」：2043／10／31（土）

おやあ？ これは丁度タイムリーでしたねえ、ドライブ支部から新鮮な新情報ですよ

《未練の灯火》：アクティブスキル

自身が死亡した時に効果範囲内にいる最も合計ステータスの高いモンスター一体に全ステータス＋1%のバフを掛ける

持続時間は72時間

このスキルによるバフの最大値は＋300%まで

35：名無しの白氷術師「sage」：2043／10／31（土）

くっ、先を越されたか：しかし「ウイスプ」も「ランタン」もちやんと調べた筈なんだが

36：名無しの高位書士「sage」：2043／10／31（土）

俺のへエンブリオで調べた「ウイスプ」はこんなスキルを持っていなかった筈なんだが

37：名無しの扇動者「sage」：2043／10／31（土）

>>>35>>36

それは貴方達の調べ方が足りなかっただけではあ？……と言いたい所ですが

どうもこのスキルはイベント中盤辺りから新たにポップした個体の半分しか持ってない様で

序盤に「ウイスプ」などを調べて終わりでは気付かない仕様でしたよお

38：名無しの蒼海術師「sage」：2043／10／31（土）

「ウイスプ」と「ランタン」は全国展開されてる雑魚敵だからなあ

運が悪いと後半は超強化されたボスモンスターになるかもな

39：名無しの戦棍姫「sage」：2043／10／31（土）
ふむ、じゃあボスモンスターへのリベンジは早めがいいか

40：名無しの高位精霊術師「sage」：2043／10／31（土）
え？ 超級職取ってんに負けたの？ 宝の持ち腐れでは？

41：名無しの戦棍姫「sage」：2043／10／31（土）
＞＞40

良い度胸だ、丁度今はレジエンダリアにいるし後でキルしてあげよう

幾ら超級職でも飛べないんじゃないよ空からブレス撃ち下ろしてくるやつにはどうしようもないんだよ

42：名無しの高位書士「sage」：2043／10／31（土）

何にせよ、イベントが終わるまでに全てのボスモンスターを討伐出来るかどうかだな



□〈霊都アムニール〉【戦棍姫】メイス・ブリンセスミカ・ウイステリア

「……そんな訳で掲示板で煽られたのがムカつくので、戦力を揃えてあの憎たらしい「ハイ・パンプキン・ドラゴン」にリベンジする為にミュウちゃん達に声を掛けたんだよ。臨時のパーティーメンバーだけだと戦力が足りなくてね」

「事情は大体分かりましたが姉様、とりあえず掲示板での煽り程度でPKは辞めて下さいね」

ははは、流石にちよつと掲示板で煽られたぐらいでそんな事はしないよ。あのコメントも売り言葉に買い言葉ってだけで別に本気じゃないしね……半分くらいは。

「まあそれはともかくとして、予定が入ったお兄ちゃんやミュウちゃ

んの代わりに臨時パーティーを組んだ人達とセーブポイントで待ちあわせだから行こうか。他の人達も出来るだけ戦力を集まめるって言うってたし、これで再戦の準備が整う筈！」

「分かりました……そう言えば姉様、そのパーティーを組んだへマスター」ってどんな人達なんです？」

「ああ、冒険者ギルドで募集して集まった人達で、普通の男性へマスター」その1のブラッド・Oさん、普通の男性へマスター」その2のGandorLさん。それと魔法少女へマスター」その1サリー・クリイミーちゃんと、魔法少女へマスター」その2のバーニング・ハートさん。後は魔法少女マスコットへマスター」のモツプルさんが一匹「マスコット……？」

臨時で集まったにしては皆んな普通に良いへマスター」達で、各々の実力も高かったからイベントモンスター狩りも問題なく順調に進んでただけだね。

それで『折角だしこのままボス戦に行くか！』みたいなテンションで向かったんだけど……まず向こうは空を飛んでるから地上近接戦型な私とOさんがほぼ戦力外に、モツプルさんの支援を受けた魔法少女二人の魔法攻撃も亜音速を超える速度で飛んでるから中々当たらない上に展開されたオーラ型防御魔法に阻まれて致命傷にならず、へエンブリオ」がドラゴン型戦闘機故に唯一の飛行戦力だったガンドールさんも単純なスペック差で歯が立たずに撤退って感じ。

『モツプル氏はへ魔法少女連盟」の克蘭オーナーですな。『魔法少女のマスコットになりたい』という願いのみで小型アニメ妖精系人外型というまともに行動する事すら難しいアバターを作り、それによって何度も踏みつけられモンスターと間違われ十何度ものデスペナの味わつてもなお諦めず、最終的には『始まりの魔法少女』サリー・クリイミー氏と出会ってそのマスコットになったシンデレラストーリーの持ち主ですな。その逸話から満場一致で克蘭オーナーに推薦されたとか』

「ちなみにサリーちゃんはへ魔法少女連盟」に所属している魔法少女で、日頃から様々なクエストを受けて人助けに勤しんでいる魔法少女

的ロリっ子だ」

「『爆炎の魔法少女』バーニング・ハートさんも同じクランに所属している魔法少女で、サリーちゃんの友達だから良く一緒に行動してるわね。……ちなみに二つ名に関しては『魔法少女連盟』のサポートメンバーが総力を挙げて考えて広めてるのよね」

「後の男二人は知りませんし興味ないです」

「あ、はい、分かりました」

ちなみにOさんとガンドールさんはごく普通の性格の『マスター』で、それぞれ『エンブリオ』とジョブの組み合わせもしっかりと考えられている普通に強い『マスター』だよ……レジェンダリアで普通では無い『HENTAI』って事だから、普通ってのは一般的には褒め言葉です。

◇

「えーつと、まあ援軍の当てが潰れて誰も連れてこれんかったワイら言うのもアレなんやけど……もつとマシな連中は連れてこれんかったんか？ ミカちゃん」

「そちらのミュウとアリマは問題ないどころか、後者はレジェンダリアでも最強格の『マスター』と有名だから良いんだが……他のメンバーはレジェンダリアでもトップクラスのHENTAI達だろう」

「でも実力は本物だよ。……それにミュウちゃんアリマちゃんがこっち側なら絶対に背後から撃つとかも無いし、後々の報酬で揉める事も無いよ」

「むしろ我々がロリシヨタの盾になる所存ですが？」

「イベントアイテムなんて全部ロリシヨタに貢ぐつもりでしたが？」

「あ、はい」

そんな感じで私が連れて来た援軍達に（当然ながら）二人は難色を示したが、その後の説得によって問題なく受け入れられた（強弁）の後には『魔法少女連盟』組の到着を待つだけとなった。

「あ、ミカちゃん待ったー？ ……ごめんねー、手が空いていた戦闘系

のメンバーが二人しか居なくて……って!?？　なんでアンタが居るのよLS！」

『お久しぶりですなバーニング殿。それは勿論ミカ殿にイベントボスの攻略に誘われたからですぞ』

「ええ……もつとまともな援軍は居なかったの？　ミュウとアリマそつちの二人以外は全員HENTAIじゃない」

そうして暫く待っていると〈魔法少女連盟〉組のメンバーである炎っぽい意匠があしらわれた『これぞ魔法少女』っていうデザインのカジュアルな衣装を着た赤髪の少女——バーニング・ハートさんがやって来て、予想通りLSさん達がいる事にツツコミを入れた

その後ろにはハートの意匠があしらわれた魔法少女服を着て肩に妖精っぽい少女——サリー・クリイミーちゃんとその肩に乗っているモップルさん、そして初見であるそれぞれ違うデザインの魔法少女服を着た二人の魔法少女の姿があるし、見ての通り彼女達が援軍みたいだね。

……とりあえずバーニングさんにはさつきと同じ様に事情を説明しておこう。

「いやまあ、それはそうかも知れないけど……コイツら明らかな危険人物よ？」

「え？　別に彼等からは一切の“危険”は感じないけど」

「こちらを害する気が一切無いのは見れば分かります」

「私達に悪意とか抱いて無いしね」

「……この子達の危機管理意識ってどっかズレてるわね。……LS含むHENTAI共！　言っておくけどこの子達やウチのメンバーに変な事をするんじゃないわよー」

そんな感じでやや呆れながらも納得してくれたバーニングさんは、鋭い目をしながらLSさん達を指差して注意をするが……。

『H A H A H A、その辺りはご心配なく。俺も同志達も我らの掟『イエスロリシヨタノータッチ』を破る事はありませんぞ。そもそもサリー殿はともかくそちらの二人は中身15歳ぐらいの女子中学生だから守備範囲外ですし、中身アラサーのバーニング殿に関しては言わずも

「がなですぞ」

「え、なんで分かるの？ 怖……」

「実物は伝聞と想像以上にキモい」

「だからデンドロでアバターの中身のある事ない事ぶっちゃけるのは辞めろって言うてるでしょ！ そんなだから毎回ひめひめさんにボコられてるのよ！」

……とりあえずキレそうなバーニングさんを宥めつつ、LSさんには中身についての言及を避けるように言っておいて、更に距離を取ろうとする新規魔法少女組を逃がさない様に……ほら、その『自分達』は関係ありませんよ』的な表情で距離を取ってる男二人も手伝って。『ええ……』とか言わない。

「安心せよ、爆炎の魔法少女」バーニング・ハート。そして「飛翼の魔法少女」イーグレットと「氷晶の魔法少女」スノー・ホワイトよ。魔法少女にとって重要なのは中身の年齢などという下らんモノではなくその在り方だ。我が女神は当然だとしても、例えばアラサーだろうがJSだろうがJCだろうが魔法少女足らんとするその心があるのなら、このモツプルは「魔法少女のマスコット」として全力で君達を手助けしよう。……例えばアラサーであろうとなー！」

「だからアラサーアラサー連呼するなって言ってるでしょうがこのクソ淫獣！」

「お、落ち着いてバーニングちゃん。モツプルも悪気はないんだよ」

……尚、この後はミュウちゃん達と協力してバーニングさんを宥めたり、やつぱり立ち去ろうとする二人の魔法少女を割と協力的だったサリーちゃんに手伝って貰ったりと手を尽くして、どうにかこのメンバーでのボスモンスターの攻略を納得させたのだった。

……うむ、まさかLSさん達を誘ったのがここまで影響を及ぼすとは、この私の目を持ってしても見抜けなかった（節穴）……だって「危険」は一切感じないし、人の悪意に敏感なミュウちゃんとアリマちゃんも普通に気を許してるし……。

「……ハア、まあ良いわよ。私もあのドラゴンにはリベンジしたかったしね。……それで、作戦はどうするの？」

「うーん、一度戦った感想だと先ずは地上に叩き落とさないと勝負にならないかな。……これでも超級職だし、手の届く範囲に来てくれれば殴り勝つ自信はあるよ。ミュウちゃんもいるし」

『それでは地上に叩き落とすのと動きを止めるのは我らへYLN T倶楽部』にお任せを。我らが参加する事を不安視している方も居るようですので、まずは働きを持ってそれを払拭してみせますぞ』

「……成る程な。やけどその為にはあの「ハイ・パンプキン・ドラゴン」をおびき出す必要があるし、そこはワイ等がやらなあかな。空戦で負けたままつちゅうのは悔しいし」

「それには私も同行するよ。これでも空を飛ぶ事に特化した『飛翼の魔法少女』なんて呼ばれてるのは伊達じゃない」

「ちなみに私は魔法少女のマスコットだから魔法少女達への支援しか出来ない！」

「ええと、じゃあ火力は十分に足りてるみたいなので、私は他の皆さんへの回復をやりますね。《魔法転身》マジカルトランス【司教】レシヨブ」

「ああ成る程、サリーちゃんは兄様のに近いタイプのへエンブリオなのですか。……しかし、魔法少女の皆さんは通り名が可愛くて良い感じですね」

「ありがとう……通り名を考えて広めてるのはウチのサポートメンバーだけだね。《魔法少女連盟》に魔法少女として所属すると、まずコードネーム的な二つ名が決められるんだよ」

「それはちよつと惹かれるものがあるね。……私の通り名は『小狂女』とか『狂乱舞踏』とかアレなのばかりだし。まあ戦闘スタイルが精神汚染前提だからしょうがないけどさ……」

「通り名など他人が勝手に言うものなのだから気にしても仕方ないだろう。それにこのHENTAI共のアレ過ぎる通り名と比べれば大分マシだと思うぞ。少なくともゲーム内の有名プレイヤーの通り名としてはな」

……最後のブラッド・Oさんの発言が遠い未来でフラグになる気が少ししたけど、それは気にしてもしょうがないのでスルーしつつ作戦の概要を決めた私達はイベントボスモンスター「ハイ・パンプキン・

ドラゴン」の討伐に再挑戦する事となったのでした。

ハロウィンボスのカボチャ竜（前編）

□ 〈樹霊の森〉 上空

レジェンダリアの首都からやや離れた所にある植物系モンスターが多く生息する〈樹霊の森〉、その上空でカボチャ頭のオレンジ色ドラゴンというコミカルなデザインをした「ハイ・パンプキン・ドラゴン」が、ドラゴンの意匠がある戦闘機「竜紋機 ワイバーン」に騎乗したGandorlと、羽飾りが付いた金色のブーツ——TYPE：エルダーアームズ【白翼天靴 タラリア】から白い翼を展開した「飛翼の魔法少女」イーグレットを追いかけ回していた。

『GOAAAAAAAAA!!!』

『だああああ!?!? 《翼の紋章》使つとつてもAGIで差がないから振り切れへん!』

「くっ!・これは《ヒート・ジャベリン》!?!? 魔法まで使つて来るの!?!?」

……それだけ聞くと何かファンシーな字面に見えるが、実際には『カボチャ頭から呪いの炎を吹きあがらせながら雄叫びを上げて亜音速を超える速度で迫り来る全長30メートル強のドラゴン（遠距離攻撃魔法付き）から逃げ回る』と言う、レジェンダリアへマスターの中でも一二を争う空戦技術を持つ二人をして正直生きた心地がしないレベルの死地だったのだが。

今もドラゴンは複数の炎の槍を放つて二人を牽制しつつ、そのままAGIで劣っているガンドールに狙いを定めて追い詰めて食い千切ろうとし……。

『こなクソオ!!!』

「だったら一旦吹き飛ばします! 《エメラルド・バースト》!」

『AAAAAAAAA!?!?』

そうして危うく追い付かれそうになったガンドールが咄嗟に機体をロールさせてドラゴンの牙を躲し、代わりに音速の三倍の速度で攻撃を回避しながら接近したイーグレットがそこに割り込んで、すれ違いざま即座に発動させた【エアロマンサー翠風術師】の奥義による暴風を顔面に叩き

つけて吹き飛ばし難を逃れた所だ。

……尚、飛行速度は「【生贄】MP特化理論」とMPのステ補正によって十五万近い最大MPを持つイーグレットと、そのへエンブリオ「タラリア」のMPを消費して自身のAGIと同じ速度で飛行する「飛行」アビエーション、飛行時に元々の最大MPの二割をAGIに加算する「飛翔」ソアリングと言う二つのスキルの組み合わせ。

そして奥義クラスの魔法を即時発動出来たのは飛行速度が一万を超える毎に累積する形で自身が使用するアクティブスキルの発動までの時間・消費MP・クールタイムを二分の一にする常時発動型必殺スキル《飛翼》タラリアによって、音速の三倍で飛行していた彼女のスキル発動までの時間が八分の一になっていたからである。

「済まん！ 助かったわ！ ……こつちも攻撃したいけど迂闊に飛行形態以外にしたら即落とされそうやからな」

「まあ仕方ないよ。こつちの魔法も向こうの防御魔法とENDに阻まれてあんまり効いてないし、当初の予定通り交互にアレのヘイトを取りながら目的地点に誘い込もう……来るよー！」

『G A A A A A A A A A O O O O O O!!』

……しかし、そんな超超音速で飛行しながら魔法を連射すると言う非常に強い戦術を駆使するイーグレットと言えど、ENDが一万五千を超えている上に物理・魔法ダメージを軽減する防御魔法まで使ってくる「ハイ・パンプキン・ドラゴン」相手では致命傷を与えるのは難しく、故に二人は協力して「作戦」の地点まで相手を誘導すべく再び危険過ぎる「鬼ごっこ」を続けるのだった。



「……《四天の千里眼》《四天の透視眼》……目標である「ハイ・パンプキン・ドラゴン」はガンドルとイーグレットの後を追って目標地点に接近中。後1分ほどで到着するかと。JC魔法少女とタンデム飛行とか羨ましいです」

「それは俺も同意見だが、今はロリシヨタ達に良いところを見せる為

にも作戦に集中だ」

「はいはい分かっているわよ……《広目の天眼》パーティーメンバーに視界補正を」

そんな二人が必死になって誘導しようとしている場所は《樹霊の森》の中でも木々が少なく開けた地点であり、そこには「ヴィルーパークシヤ」を使ってドラゴンと二人の様子を観測しているミマモリや、今回の作戦の要だとミカロリに言われていつになく真剣な表情で自身の《エンブリオ》である杖を構えるKNKAを始めとして他のパーティーメンバーが揃っていた。

……さて、そんなヤル気満々のKNKAの《エンブリオ》はTYP E:アームズ「空輝清杖 アイテール」という長杖であり、澄み渡った輝く大気を神格化したギリシヤ神話の神であり天体を構成する第五元素であるエーテルの由来となった「アイテール」がモチーフ故にか、そのスキルは空気中の不純物を吸収してMPに変換して蓄積・運用する《輝く空を我が手に》のみである。

だが、その特性上酸素や窒素は吸収出来ず、基本的に空気中に微量しか存在しない不純物のみしかMPに変換出来ない事から、大量にMPを蓄積するには余程大気が汚染された場所にでも行かなければならないと少し使い辛いスキルではある。

『ふむ、大気中の自然魔力が少し濃くなって来ましたな。……《アクシデントサークル》が発生しても困りますし、KNKA頼みますぞ』

「了解。「アイテール」周囲にある大気中の可視化した自然魔力を対象に《輝く空を我が手に》を起動」

……最も、それはここが可視化不純物と扱われるする程に自然魔力の濃いレジエンダリアでなければの話だが。

加えて自然魔力なのでMPへの変換効率は当然100%であり、更にこれまでも今と同じ様に《アクシデントサークル》対策として何度も自然魔力を吸収し、膨大な量のMP蓄積しているが故に、彼は《Y LNT倶楽部》の中でも屈指の実力を持つ魔法使いとして知られているのだ。

「……はい、吸収完了。これではばらくは《アクシデントサークル》は

発生せんよ。MPの蓄積も十分だから作戦はいつでも始められる……が、流石に亜音速を超える速度で飛ばれると避けられる可能性が高いから足止めが欲しいが」

「……ホントこいつらって変態の癖に能力だけは優秀なのよね……まあ今は良いわ。モツプル、こっちにもバフを寄越して」

「うむ良かろう、魔法少女バーニング・ハートよ。《魔法少女達の宴》」

そんな彼等を見て微妙な気持ちになった「爆炎の魔法少女」バーニング・ハートだったが、それでも今は戦いに集中するべきとモツプルからの『パーティーメンバーの魔法職限定バフ』を受け取って赤色のオーラを纏いながら、自身の《エンブリオ》である炎を象った意匠の杖を構えた……最も、それは武器では無く。

「《ブレイズ・バースト》《ヒート・ジャベリン》《クリムゾン・スフィア》《オプティカル・カモフラージュ》セット《多重同時召喚》
《火鳥召喚》」

『『『KITTIITI!』』』』

自身の炎熱系魔法をエレメンタルとして変性・召喚する為の『召喚触媒』であり、その名も【奇炎伴杖 イグニス・ファトウス】と言うTYPE:レギオンの《エンブリオ》である。そして今回使った《火鳥召喚》は高速飛行しながら突撃する火の鳥型エレメンタルを召喚するスキルである。更に変性出来る魔法は最大4つまでで、魔法を追加すればその特性を付加しステータスも上昇する。

……そんな事をしている間、遂にガンドールとイーグレットを追って「ハイ・パンプキン・ドラゴン」が彼等の待機する地点にまでやって来た。

『連れて来たで!』

『……GAAAAAooooo!!!』

「良い? あの「ハイ・パンプキン・ドラゴン」に姿を消しながら体当たりしなさい……行け!」

『『『KIKE——!!!』』』』

また、魔法を付加したモンスターが存在している間は自身がその魔法を使用する事が出来ないデメリットがあるとはが、例えば

イリュージョニスト

【幻術師】の光学迷彩を付与すれば今の様に召喚モンスター^{イリュージョニスト}の姿を一時的に見え難くするなどの応用も効くのだ。

……さて、先程バーニングが付加したそれ以外の3つの魔法は【紅蓮術師】^{パイロマンサー}の奥義を含む上級魔法であり、召喚された【イグニス・バード】はAGI特化で高速飛行しながら突撃して自爆するモンスターなのであり……。

『『『K I K E——!!!』』』』

『!?? G G A A A A A A A A A A A A A A A A!?!?』

その結果は鬼ごっこに集中していたドラゴンは姿を隠した火の鳥達に気付く事が出来ず、彼等はガラ空きの胴体部に次々とぶつかって灼熱を纏った大爆発を引き起こすと言う光景となつて目の前に現れたのだ。

……だが、ガンドールとイーグレット相手の空中戦から防御魔法を継続していたドラゴンはダメージこそ受けたものの未だに健在で……それでもその動きは一時的に止まった。

「よし！ サリー今こそ君の出番だ！ ここに居るK N K A君に君の魔法少女パワーを込めた声援を送るんだ!!!」

「え!?!? えーつと……頑張つて下さいK N K Aさん!」

「フオオオオオオオオオオ！ 漲つてキタアアアア！ ロリの声援が身体に染み渡るウウウウ……全てのロリシヨタにいい所を見せる為！

【アイテール】全魔力解放オオ！ 《ダウンバーストオオオオ!!!》

『G A、G A A A A O O O O!!!』

そこに割とアレな感じの《詠唱》を言ったK N K Aが【アイテール】内の膨大な蓄積魔力を解放し、それを使って「ハイ・パンプキン・ドラゴン」を対象に超大出力の下降気流を魔法で発生させたのだ。

……直前の寸劇の所為で周りからの視線は冷めたものになっているが、それでも数十万以上のMPを持って発生させられた下降気流の勢いは凄まじく、上位純竜であるドラゴンですら飛行は困難にさせて無理矢理地面へと叩き付けようとしていた。

『G A A A……G A A A A A A A O O O O O——!!!』

だが、それでも【ハイ・パンプキン・ドラゴン】は万能ダメージ軽

減スキル《ハイ・マルチアタック・レジスト》の出力を上げて風属性魔法の効果を軽減すると同時に、強化されたSTRによってどうにか飛行を維持しながら効果範囲外に出ようと風の勢いを利用して斜め下に向けて移動しようとして……。

「範囲外に出るのはダメですよ……落ちなさい《アイスマイク氷晶創造》ジャベリンアイスマーブ氷晶操作》」

『GOO A A A A!?!』

その直後、ドラゴン目掛けて上から無数の巨大な鋭い氷柱が風に乗って降り注いで次々とぶち当たり飛行体勢を大きく崩したのだ……これは「クリア・クリスタル氷晶の魔法少女」ことスノー・ホワイトの『製氷』に特化したTYPE：フオートレスの《エンブリオ》「氷室晶界 ニブルヘイム」によるものである。

この「ニブルヘイム」は周囲の空間そのものを工房に、大気中の微量な水分を起点となる素材として自身のMPを消費する事で氷を作り出すと言う珍しい非実体型のフオートレスであり、今はモツプルからのバフ効果もあつて《ダウンバースト》の更に上で多数の巨大な氷柱を作り出してから風に乗せて落としたのだ。

『GUGUGU……GUUAAA!!』

『諦めが悪いで……良い加減に落ちい！ 《弓の紋章》《ドラゴン・ファイア竜騎砲哮》!!!』

「さっきまでのお返し！ 《魔法多重発動》《グリント・パイル》!!!」
だが、それでも強化されたENDで耐えながら脱出しようとしていた「ハイ・パンプキン・ドラゴン」に対して、これまで散々追いかけて回されたお返しと言わんばかりに翼が生えた銃へと「ワイバーン」を変形させたガンドールのジョブスキルを乗せた砲撃と、イーグレットが放った「フラッシュエモンサー閃光術師」の奥義である三発の光の槍が突き刺さった。

……流石の上位純竜でもこれだけの攻撃を受けながら飛行を維持する事は出来ず、とうとう下降気流に押されて地面へと墜落して行ったのだった。



『……よし、撃墜班は上手くやってくれたみたいだね。ここからは私達地上班の出番、アイツが再び空に戻る前に倒す！』

「最低での翼を奪う必要があるでしょうね。2度も同じ手は使えないでしょうし、再び空に戻られたらアウトです」

「それは分かっているが……お前が先に突っ込んで囷くわとなると言う作戦で本当にいいのか？」

そして「ハイ・パンプキン・ドラゴン」が墜落した場所には既に残りである地上戦担当のパーティメンバーが急行していた……そんな中でブラッド・Oがミカに向けて彼女自身から今回の作戦の確認を行なっていた。

『うん、例えば地上に落ちても相手が強敵なことに変わりないし、多分初手で魔法かブレスを使ってくるだろうから誰かが囷くわになる必要があると思うから』

「それなら俺と壁型ガードナーである「カルキノス」が囷くわになった方が良いと思うが。むしろ幼女を庇うのが俺の仕事なんだが！」

『気持ちは有り難いけど、剛雅さん達にはドラゴンの再飛行の阻止をやって貰いたいしね。……それに私ならアイツの魔法やブレス受けられる手段手段を持つてるから、超スベリ級職は伊達じゃ無いって所を見せてあげるよ』

熱弁するロリシヨタコンに対して別の役目を頼みつつ、墜落した「パンプキン・ドラゴン」がその衝撃から立ち直って再び空へと舞い上がろうとしている場面を見たミカは即座に一万五千越えのSTRと亜音速を超えるAGIを駆使して正面から突っ込んで行った。

『GUUUU……』

『それじゃあ行くよ！ 他のみんなは側面から翼狙いで攻撃をお願い！』

「おいっ！ ……仕方ない、後衛のメンバーが追い付くまで飛ばされない様に足止め！ 出来れば翼を破壊して機動力を奪うぞ。《疾蒼シツソウ》！」

「まあ姉様なら大丈夫でしょう。《天威模倣アヒリテイ・ミラーリング》！」

「《狂走スル巡礼者》《ソウル・コントローラー悟りし者の御業》精神干渉対象を「ハイ・パンプキン・ドラゴン」のみに固定！ 《ウィークネス・テノール》！」

「むう、ロリ幼女の頼みなら断れんが……【カルキノス】はいつでもサポート出来る様にしておけ《ウインドダッシュ》！」

『K I S Y A S Y A !』

それを見た他のメンバーはそれぞれのAGI強化系スキルを使いながら、ミカを避けて大きく回り込む形で「パンプキン・ドラゴン」へと迫って行く……が、当然それを見逃すドラゴンではなく、即座に飛行準備を取り止めて迎撃の体勢を取り、複数の羽の生えた黒い弾丸を複数彼等に向けて撃ち放って来た。

『GRUUU……GRUAAAAA!!』

「む、アレは何かの闇属性魔法ですか？」

「ダークマンサー【暗闇術師】の奥義《グルーム・ストーカー》だ！ 追尾性があるから気を付けろ！」

加えてそれらの闇の弾丸にはドラゴンが《エンチャント・カース》によって当たった者に【呪縛】の追加効果を生じさせる効果が仕込まれており、それを察した彼等は誘導判決を見切ってどうにか追い縋って来る誘導弾をどうにか回避して行ったが、それに手間取った所為で接近をドラゴンに近づく事が妨害されていた。

『でも、正面から来る私を狙わないのはどうかな！』

ただ一人、持ち前の「直感」によって『闇の弾丸は包囲を崩す為の牽制で自分は狙われてない』と見破り、そのまま一切速度を落とさずに正面突破を続けていたミカを除いてはだが。

……最も、イベントボスモンスターとして相応の知性を与えられている【ハイ・パンプキン・ドラゴン】がそれに気づいていない訳が無く、単に包囲しようとしている者には誘導弾で牽制し、正面から来る愚か者には並行して準備していた《カースド・ブレイズ》による広範囲攻撃で焼き尽くす戦術だったただけなのだが。

『UUUUUU……GUUUUUUUUU!!』

「ブレス!? マズいぞあの距離では避けきれん！」

「しまった!? ロリをカツコよく庇うタイミングを逃したあ!!」

そうして他のメンバーが誘導弾を躲す中で、ドラゴンのカボチャ頭から放たれた呪炎のブレスは無謀にも正面から突っ込んできたドラゴンの着ぐるみを飲み込んで……。

『それは私が既に視た未来だよ…… 《我は禍ツ神を砕く巨人なり》』

その直前、予想した通りの展開故に一切の動揺もないミカは自身の〈エンブリオ〉である「激災棍 ギガース」の必殺スキルを行使した。

ハロウィンボスのカボチャ竜（後編）

□ 「激災棍 ギガース」について

ミカ・ウイステリアの〈ヘエンブリオ〉TYPE：エルダーアームズ（第五形態への進化で上位カテゴリ化）【激災棍 ギガース】は物理的なステータス補正と装備としての性能、そして凡ゆる防御スキル効果を減少させる《バーリア・ブレイカー》のみをスキルとして有する、言つてはアレだが割とよくあるタイプの単機能特化型アームズ系へエンブリオである……最も、能力がシンプルだからと言つて、それを発現させたミカ加藤美希のパーソナルが単純と言う訳では無いが。

……加藤美希と言う少女が自らの『危険を察知する直感』と言う異質な才能を自覚したのは今から約六年程前、海外旅行に行く為に両親と兄が乗った飛行機が墜落して、両親が死に兄が命に関わる重症を負つた……その時に自分一人だけ『直感』によつて危険を感じた飛行機に乗るのを避けて叔父夫婦（祐美の両親）の家で留守番をしていたからである。

勿論、彼女は自分だけ助かろうとした訳ではなく未だに小学生にも上がつていなかった故に『直感』が告げている『危険』が何か分からず、ただ『旅行には行きたくない』と駄々をこねるしか出来なかつただけなのだ。両親と兄も単に初めての海外旅行を嫌がつているだけだと思つて彼女を親戚に預けたので、『直感』と言う異才を持つている事には気が付かなかつたのだからやむ終えない事だったのでろう。

最も『阻止出来たにも関わらず危険を回避させる事もせず、その結果として両親を失つた』と言う事実以後で気が付いてしまった彼女の心に残されたトラウマは並大抵のモノでは無かつたのだが。

実際、事故後の彼女は『あの時ちゃんと止められていれば』『なんでそうしなかつたのか』『どうして私にはこんな力が』と思ひ悩んで塞ぎ込んでしまつていたが、その後は奇跡的に一カ月くらいで回復した兄や叔父夫婦の励ましで日常生活を送れるぐらゐに回復した……のだが、今度は事故をきっかけに完全に目覚めた『直感』が未来で自分が不快に思う事を知らせて来る事が悩みとなつた。

まだ小学生である彼女にとって『下の妹がナニカに襲われる』や『同級生が自殺する』などの情報を告げられても精神的な負担になるだけそれでも彼女はもう事故の時の様にはならない様に同時に告げられる解決法を頼りに行動して行くが、所詮は小学生でしかない以上は手に負えずにどうにも出来ない事も多々あった。

故に、今はある程度割り切れる様になったとは言え、こんな経験をしてしまった彼女の内心には『危険をどうにか出来ない自分への無力感』と『直感』などと言う形で理不尽を一方的に告げて来るナニカ——この世界にあるかもしれない『神』の様な存在への憤り』が生まれたのだ。

そして、そのパーソナルと『直感』によってへ Infinite Dendrogram 世界において『神』や『危険』に関わりの深い概念——【神】系統のジョブが司るモノでへ U B M やへエンブリオを象徴するモノでもある『スキル』の存在を無意識のうちに把握した事で『高いステータスによるスキル効果の無効化』を能力特性とする【ギガース】が生まれたのである。

まあ、流石にへエンブリオのリソース的な問題で高ステータスとスキル無効の併用は不可能だったので、高めの物理ステータス補正と物理攻撃力を基準とした防御系スキル効果の減少と言う形で発現し、更にパッシブスキルである『バリアブレイカー』をこの世界の脅威に対抗する為に単純な防御スキルだけでなく攻撃を遮断する『法則』などにまで効果を発揮する様にしたので単機能特化型としては出力が大分低くなったりもしたが。

……それでもへマスターの願いを叶えるのがへエンブリオであり、【ギガース】も常に主人の真の望みを叶える為に戦闘経験の分析と思考を続け……その結果として条件を付ける事でスキル無効の力を引き上げる形で発現したので必殺スキル『我は禍ツ神を砕く巨人なり』である。

この必殺スキルはマスターが認識している敵対対象一体を選択する事で発動する事が出来て、その際に『二つの効果』を新たに得る……まず一つ目は『バリアブレイカー』の効果が選択した対象にし

『まずは一撃目！ 《ノックバック・インパクト》!!!』

『GAOツ!?』

そのままミカは《カード・ブレイズ》を突っ切ってドラゴンの顔の前まで迫り、相手が自身の炎でも燃えず呪いすら掛からない相手に動揺して一瞬動きを止めた隙を突いて、新たに覚えた【戦棍姫^{メイヌ・プリンセス}】のスキルを使いながらその顎を【ギガス】で大きくカチ上げた。

そして《ノックバック・インパクト》は与えるダメージがゼロになる代わりに相手を大きく弾き飛ばし、更に【硬直】と【部分麻痺】の状態異常を与えるスキル。加えてドラゴンが有する防御魔法と耐性スキルは強化された《バリアブレイカー》で無意味なものになった以上、その効果をドラゴンはモロに受ける事になり……。

『GA……AA……』

『よし！ 頭部に【部分麻痺】が入れば脳震盪みたいな状態になるみたいだね。今が総攻撃のチャンスだよ！ 《インパクト・ストライク》！』

『DEHAA!』

その結果、ドラゴンはまるで目眩でも起こしたかのように振らつきながら地面へと倒れ込んでしまった……これは攻撃を当てた部位の動きを大きく鈍らせる【部分麻痺】を頭部に受けた結果、三半規管の働きが鈍った影響で所謂『立ち眩み』を起こしたからである。

……当然、中途なく内部破壊系の打撃を胴体に叩き込んで追撃しているミカに言われなくとも、他の《マスター》達はその隙を見逃す事無くそれぞれ《グルーム・ストーカー》に対処しながら一気に接近してそれぞれの全力攻撃を叩き込んで行く。

『地上に落とさずええれば負けないと言っていたのは本当だったか

……《暴^{ボウリョク}緑》《ブラッディ・インパクト》！』

『流石は超級職のスキル、上位純竜をタコ殴りに出来るとは……ミメ、MPを回さない、翼を狙います 《真撃》《正拳突き》！』

『了解、MP十万使って《エンハンスフィスト》《ライトニング・フィスト》』

『私も行きます。各種狂化自己バフ並行起動！ 《レーザーブレード》

！」

「カルキノス」はヤツの足に組み付け！ 《ストーム・ステインガー》
！」

『KYASSYSSYA!』

緑色の血液置換へエンブリオを身体に纏ったブラッド・Oの拳が
「ハイ・パンプキン・ドラゴン」の顔に突き刺さり、ドラゴンの一万越えのSTR・END及び五千超えのAGIをコピーしたミュウが拳に雷を纏わせながらその背に登って翼の付け根部分に拳を打ち込む。

更に自身のへエンブリオの力で必要な強化スキルを瞬時に並列使用したアリマが光熱を発する「ヴァニフォーク」でドラゴンの足を斬り裂き、もう片方の足には剛雅が「疾風槍士」の奥義により超音速の突きを放ちながら、自身のへエンブリオである「守護星蟹 カルキノス」の鋏で挟んだ相手を離されにくくしつつそのAGIを下げる
《邪魔大鋏》で組みつかせる。

……が、それでも一万五千に達するENDを持ちHPもバフ込みで五十万を優に超えるドラゴンは総攻撃を耐えながら脳震盪から回復。即座に《ヒートボディ》で身体に高熱を纏わせつつ直接攻撃をして来た相手に「呪詛」を掛ける《リヴェンジ・カース》を使った上で出鱈目に暴れ回り纏わりつく人間を退けようとした。

『GAAAAAAAAAAAA!!!』

「チツ《装紅》！ 流石に上位純竜だけあって簡単には倒れてくれないか！」

「ですが翼の片方はへし折りましたし飛行は難しいかと！ 姉様は今だに攻撃を続けてますし！」

「後、俺の「カルキノス」も食らいつついるが！」

『どりゃあ！ 熱も呪いも今の私には効かないよ！ 《サンダー・インパクト》！」

高熱と呪いと巨体から繰り出される近接系アクティブスキルに押されて接近していたへマスター達は一旦下がるが、そんな中でもミカ（と足を挟んだまま攻撃を受け続けている「カルキノス」）は今だにドラゴンとの近接戦を続けていた。

今も高熱と呪いを継続中の必殺スキルで無効化し、ドラゴンの放った《ブレイククロー》すらも威力を減衰させながら反撃に雷を纏った【ギガース】で弾き返すが……。

『GEEEA A A A A A!!』

『! おっと、それは勘弁!』

そこでドラゴンが苦し紛れに振るった尻尾を見たミカは慌てて飛びすさりながら回避した……これは《我は禍ツ神を砕く巨人なり》ではアクティブスキルを使わない只の通常攻撃には効果を発揮しないからである。これが武技系のアクティブスキルなら攻撃力や運動エネルギーを含めて減衰させるのだが、通常攻撃だとSTR強化などの掛かっているパッシブスキルの効果だけは減衰できるが単純な腕力^{STR}から発生する攻撃力には干渉しないのだ。

また、兄との必殺スキルの試験運用では装備している装備品の装備スキルの効果は対象でも、【ジエム】などの消費アイテムの効果は対象外である事が分かっており、これについて兄は『元ネタのギリシヤ神話の巨人は神には殺されなくても、人間であるヘラクレスの怪力と^{通常攻撃}消費アイテム^{ヒュドラの毒矢}で倒されてるから原作再現かな』とコメントしている。

『……さて、残りのSPは半分ぐらい。事前に飲んでおいた【SP持続回復ポーション】の効果含めても維持できるのは十分ぐらいか』

「流石にボスだけあって精神耐性も高いわね……とところでさっきからドラゴンに組みついてる蟹が凄く殴られてるんだけど大丈夫なの?」

「ああ、俺の【カルキノス】はロリシヨタを庇って攻撃されるのが仕事だしな。直接攻撃を受けると相手のSTRを下げたり、HP自動回復や魔法と状態異常の効果を軽減するスキルも持ってるから」

「お陰でこちらが攻撃する際も出来てますしね! 《ソニックブロー》!」

「一応妨害もしておくか 《ブラッディ・チェーン》!」

『GIIIIIA A A A A A O O O O O O O O O O O!!』

その後も翼へのダメージと組み付いた【カルキノス】のお陰(時折

アリマが回復魔法を飛ばしてる)で「ハイ・パンプキン・ドラゴン」が再び飛び上がる事も無かったが、それでも上位純竜のステータスによる豊富な近接用アクティブスキルと魔法を駆使して暴れ回る相手に「マスタ―」達は一進一退の攻防を繰り返していった。

……そんな戦況が動いたのは上空からの砲撃がドラゴンに向けて撃ち放たれた時からだった。

『済まん遅れた！ 加勢するで！ 《弓の紋章》……ファイア!!!』

『《魔法多重発動》《エアハンマー》！』

『G A H A A ? ? ?』

空から援軍に来たガンドルとイーグレットの銃撃と魔法が、何度目かの攻防で地上部隊を振り払って体勢整えようとしていたドラゴンに突き刺さってダメージを与えた。その攻撃で与えたダメージ自体は少なかったが、ドラゴンを怯ませて前衛組が攻撃に移る隙を作るには十分な効果を発揮していた。

『G U U A A A A A A A A !!!』

『よし、メンバーが増えたお陰でD P S (秒間火力)も増えたしこのままなら行けるかな……《ギガント・ストライク》！』

「多分ヤツはHPの自動回復も持つてるだろうから。反撃の魔法も痛いし、なるべく彼方に攻撃の隙を与えない様に攻め続けたい所だが……《ブラッディ・インパクト》！」

『向こうが飛べへんならこっちは一方的に空から攻撃出来るし……おっと!?? 魔法がこっちを追いかけて来るな!』

「誘導弾による対空攻撃までやって来るのね……ん? 通信……光を? 《ライト》！」

それでも尚、狂ったかの様に暴れ続けるドラゴンに対して歴戦の「マスタ―」である彼等は多少もたつきながらもお互いの隙をフォローする様に代わる代わるに連携攻撃を仕掛けていったが、そんな中で突然イーグレットが攻撃力の無い光源を作り出す魔法を使用した。

発生した光源はただその場の者達を強めに照らすだけで攻撃力などは一切無く、一瞬僅かに警戒したドラゴンも直ぐに目眩しだと思いき直ぐに戦闘を続行しようとし……その直後、光源によって伸びきった

ドラゴンの影を何者かが踏んだ。

『《シャドウ・スタンプ》ですぞ』

『G I I I ? ? G A A A A ! ! !』

その足の正体はガスマスクに全身タイツの変質者……もといへY L N T 倶楽部〓オーナーL S ・エルゴ・スムであり、彼のメインジョブハイ・ソールサラー【高位呪術師】の相手の影を踏む事で【呪縛】【恐怖】【吸魔】の三重状態異常を与える呪術によりドラゴンの動きが止まった。

そしてA G I 差とM P などの回復で遅れていたサリー・クリイミーやバーニング・ハートと言った魔法少女組や、ミマモリ・K N K A と言ったへY L N T 倶楽部〓後衛組が戦場に現れて前衛組の援護へと回り始める。

「とりあえず壁を出しましょうか……アイスメイク《氷晶創造》アイスカット《氷晶成型》《クリエイト・フロストゴーレム》」

「なら私はアタッカーを出すわね……《ヒート・ジャベリン》《フレアボム》《ヒートボディ》《カラーチェンジ》セット《焰騎士召喚》。とにかく突っ込んでドラゴンに近接攻撃をしない」

「私は回復を！ 《魔法射程延長》《魔法多重発動》《ファイブヒール》！」

「フハハハハ！ 魔法少女達の支援を有り難く受け取れい！」

まず彼女達は自分達を守る為にスノー・ホワイトが氷で出来たゴーレムを複数召喚し、更にバーニングがアタッカー役も兼ねている槍を持ってカラフルな色合いをした近接攻撃用騎士型の炎エレメンタルを召喚、更にサリーが減った前衛組のH P を回復させながらその肩に乗ったモップルが意味もなくドヤる（一応【司令官】コマンダーのパッシブスキルなどで支援はしている）

「うむむ、【アイテール】の蓄積M P はさつきノリで殆ど使い切ったしな。普通に支援しか出来ん」

「まずはD P S を更に増やしましょう……《四天の透視眼》ターゲットの内臓に照準。《ヴェノムアイ》」

『守りを固めるなら急いだ方が良いですな。向こうは呪術も使える上位純竜である以上、俺程度の呪術ではそう長くは……おや？』

『G I …… G I G I ……』

おそらく自分の呪術はそろそろレジストされるだろうと考えたLSだったが、視線の先にいるドラゴンを見るとまるで何かに恐怖しているかの様に身体を震わせて動きを止めていた。

それを見たLSは直ぐに《シヤドウ・スタンプ》の内【恐怖】の状態異常だけがレジストされなかったのだらうと当たりを付けたが、一体何故一番レジストされやすい精神系状態異常だけが残ったのかを考えて、先程〃とある幼女〃がやってみせた芸当を思い出した。

「……やつと《ウィークネス・テノール》が効いてきたみたい。やつぱり上位の純竜となると精神耐性も高いのか、或いはスキル自体の効きが悪いのか……多分両方かな」

その幼女……アリマは手に持った二又の剣【音叉角剣 ヴァニフォーク】から精神耐性を減弱させる音波をドラゴンに向けて放ち続けながらそう言った。ドラゴンは戦闘開始からずっと精神減弱スキルを浴びせられていたが故、精神系状態異常である【恐怖】をモロに食らったと言うわけである。

『G U G U G U …… G I G Y A A A A A A !!』

「うん《伝播スル狂信》による狂化系デバフも入り始めたか、ちよつと遅かったね。……でもあの巨体とステータスで暴れ狂われても困るし眠らせようか……効果範囲圧縮《スリーピング・ソプラノ》！」

そして何かに恐怖しながらも狂った様に暴れ始めたドラゴンに対して、アリマは本来無差別に放射されるだけの【ヴァニフォーク】の音波を《悟りし者の御業》で無理矢理に圧縮した音波斬撃をその頭部に叩き込みそれによる圧縮状態異常の【強制睡眠】に落とし込んだ。「んぐんぐ……よし、これで後は全員で総攻撃して倒すだけだよ！状態異常が解けそうならもう一回撃ち込むし！」

「流石はアリマちゃんですね！ 早速殴りましょう！」
『……お、おう……』

幾らか減ったMPとSPを回復させる為にポーションを飲みながら『一仕事終えた』みたいないい笑顔でそんな事を言うアリマに対し、基本彼女の事は全肯定ヨイシヨなミュウ以外の面々は『え？ 増援も

到着してこれから激戦が始まる雰囲気だったのにもう終わり?』みたいな事を内心思いつつも、このチャンスに逃すわけにも行かないと気を取り直して眠りこけた「ハイ・パンプキン・ドラゴン」へと一斉攻撃を行うのだった。

……その結果はと言うと、まあ当然ながら幾ら上位の純竜とはいえ完全に状態異常へ嵌ってしまった状況でこれだけのへマスター達の一斉攻撃をどうにか出来る筈もなく、汎用スキルしか持たない普通のボスモンスターだったのでそのまま特に何かドンデン返しも起きずにサククリ討伐されたのであった。

◇◇◇

『……はい乙ー。これでイベントボスモンスター「ハイ・パンプキン・ドラゴン」の討伐は終了ですねお疲れ様でしたー』

「いやあ、流石はイベントボスだけあって「ハイ・パンプキン・ドラゴン」は強敵でしたね!」

「そうですねアリマちゃん。ですがパーティーの連携もあって無事倒せましたし、ドロップアイテムもがっほりです」

「……最後は眠っているドラゴンをタコ殴りにするだけの作業だったけどな」

『やはりデンドロに於いて状態異常は重いですな。うわようじよつよいですぞ』

眠っている所への総攻撃の末に「ハイ・パンプキン・ドラゴン」が光の塵となった事をしっかりと確認して勝鬨(おぎなり)を挙げたミカが切っ掛けで、他のメンバーも漸く緊張を解いてドロップアイテムの分配など戦後の処理へと移っていった。

『あ、我らへのドロップアイテムは彼女達ロリンヨタ勢に渡しても良いですぞ』
「後出来ればフレンド登録もお願いしたい」

「どさくさに紛れて何やろうとしてるのよアンタら。……ドロップアイテムは全員で山分けで良いわね? コイツらを只働きさせるのは逆に怖いわ」

「LSさん達も活躍してたしドロップアイテムは受け取っておくべきだと思えます！」

その際の報酬の分配で〈Y L N T 倶楽部〉のメンバーが『自分達の方をロリシヨタへ貢ぐ』と言い出したのを、バーニング（H R N T A I 達への警戒から）とアリマ達少女組（こっちは普通に善意）が止めてとりあえず全員で山分けにしたりなんて事もあったが、基本ロリシヨタが言う事には素直に従うH E N T A I 達含めてがめついタイプはいなかったので報酬について特に揉める事は無かった。

「あ、そうだ！ ミユウちゃんとミカちゃんにお願いがあるんだけど、私とフレンド登録してくれないかな？」

「ん？ サリーちゃんと？ 別に良いけど」

「私も構いませんよ」

「ありがとうございます！ 今度機会があったら私達へ魔法少女連盟に遊びに来てよ」

「君達にも中々の『魔法少女』の資質がありそうだからな。私達が作って廃棄したアイテムも存分に使いこなしているようだし、制作アイテムの販売などもやっているから気軽に来ると良い」

また、ミカとミユウが〈魔法少女連盟〉組とフレンド登録したりなどでもあって、互いに（一部H E N T A I と常識人勢除く）友誼を結ぶなどして和やかな雰囲気で行った今回のイベントボス攻略臨時パーティーは解散したのだった。

ハロウィンスレ3／裏側の事情

□??地球 とある掲示板

◇◇◇

「レッツ！」へInfinite Dendrogramへハロウィン
イベントスレ2「ハロウィン！」

1：名無しの高位書士「sage」：2043／10／31（土）

このスレはへInfinite Dendrogramへハロウィン
イベントに関する情報を書き込むスレです

イベント内容・イベントモンスター・イベント交換アイテムの質問
などご自由に

荒らしはスルー推奨

365：名無しの剣聖「sage」：2043/10/31（土）

配下の「プランティング・パンプキンゴーレム」が百体以上いたからな

クラン一っだけではどうしようもなかったからフリーの者達も合わせた大規模討伐作業になった

366：名無しの司教「sage」：2043/10/31（土）

ほんま大変やったわー

倒しても倒してもボスが更に追加を作り出すんやからー

367：名無しの黒騎士「sage」：2043/10/31（土）

最終的には配下を足止めしつつ精鋭部隊をボスに突っ込ませてどうにかって感じ

幸いというか生産能力特化で本体の戦闘能力はそこまででも無かったから

368：名無しの黄龍道士「sage」：2043/10/31（土）

しかし次々とボスモンスター討伐の報告が上がってくるな

100スレぐらい上では敗北報告ばかりだったのに

369：名無しの大海賊「sage」：2043/10/31（土）

まあ、ちゃんと情報集めて対策取って人数揃えて連携すれば

個々のマスターの実力が相応なら倒せるぐらいの難易度みたいだしね

370：名無しの戦車操縦士「sage」：2043/10/31（土）

うぐぐ、あの「ジャイアント・イグニス・ファトウス」は俺だけじゃ倒せんな

多分《物理無効》と《炎熱吸収》を持ってるっぽいし

ドライブのバルバロス領北側なので討伐パーティー募集

371：名無しの雷忍「sage」：2043/10/31（土）
【アツドリー・キューカンバー・ペイルホース】討伐パーティー現在募集中よ

西白塔領東側にいるやつで状態異常耐性に長けた人とかは歓迎

372：名無しの高位精霊術師「sage」：2043/10/31（土）

みんないいなー、デスペナした俺らは掲示板見てるだけー

373：名無しの高位木工職人「sage」：2043/10/31（土）

イベントモンスターが落とす植物素材の【ハロウィン・パンプキン】各種高価買取中

byアルター王国生産クランへプロデュース・ビルド

374：名無しの大農家「sage」：2043/10/31（土）

イベントモンスターが落とす食物素材の【ハロウィン・パンプキン】各種高価買取中

byドライブ王国農業クランへドライブ農業復興委員会

375：名無しの猛毒術師「sage」：2043/10/31（土）

>>>373>>374
被ってるwww

まあ【ハロウィン・パンプキン】シリーズって食べても素材にしても優秀だからね

376：名無しの高位薬師「sage」：2043/10/31（土）

種によって特性は違うけど薬にも出来そう

イベント終わったら栽培出来ないかな

377：名無しの魔女「sage」：2043/10/31（土）

金属素材だと「ホロウメタル」って言うのを確認

どうも霊体系アンデッド的要素のある金属っぽいね

378：名無しの大戦士「sage」：2043/10/31（土）

武器アイテムだと「イグニス・ブレード」みたいな呪い系や

逆に「鎮魂の盾」とかの浄化系が落ちるみたいだな

379：名無しの弓聖「sage」：2043/10/31（土）

でも性能面だとレベル50〜150帯ぐらいのヤツばかりだけ
ど

正直微妙

380：名無しの蒼海術師「sage」：2043/10/31（土）

イベントに余り参加出来ない生産職に配慮して素材の方が高品質
になっている

……のではないかとパーティーメンバーが言ってた

381：名無しの高位書士「sage」：2043/10/31（土）

まあ、ごく稀に高性能な装備が落ちない事もないようだがな
生産素材の方がだいぶ出やすいだけで

382：名無しの白氷術師「sage」：2043/10/31（土）

まあ、腕のいい生産職に素材を持ち込んだ方が
ドロップよりも良い物が作られるのは普通だし仕方がない

383：名無しの大気功士「sage」：2043/10/31（土）

Q、生産職にツテがない場合はどうすればいいですか？

384：名無しの高位木工職人「sage」：2043/10/31
（土）

>>>383

A、初見さんでも大丈夫で素材持ち込みOKなお店を探しましょう
冒険者ギルドや対応する装備の生産系ギルドの人に質問するのも
良いでしょう

私達アルター在住へプロデュース・ビルドも初見・素材持ち込み
OKです

385：名無しの剛剣武者「sage」：2043/10/31（土）

天地だと初見さんお断りの店が多いからなあ

この大量の素材を持っていける店を探さないと

386：名無しの高位薬師「sage」：2043/10/31（土）

その辺りの詳しい話は生産系スレに詳しいからそっちでね

387：名無しの高位操縦士「sage」：2043/10/31（土）

イベントしてたらなんかヤベーへUBMに襲われてデスペナした
人だけど

名前は「予次源匠 ケイオスキューブ」っていうなんか色々なパー
ツで構成されたゴーレム

これもハロウィンイベントのモンスターなのか？

388：名無しの司教「sage」：2043/10/31（土）

只の野良へUBMやないの？

道を歩い取ったらへUBMにぶつかるのもままあるしな

389：名無しの高位書士「sage」：2043/10/31（土）

実はイベント用に配置した隠しボス説も考えられるが情報が足り
ないな

390：名無しの白氷術師「sage」：2043/10/31（土）

へUBMはなあ……特典狙いであまり情報が広まらんから

デスペナしてもリベンジの為に情報を秘匿する人が多いし

391：名無しの戦棍姫「sage」：2043/10/31（土）
野良かイベントかの区別が付かないんじゃない？

特定の地点で動かないとかボスと同じ特徴があれば分かりやすいけど

392：名無しの高位操縦士「sage」：2043/10/31（土）
「ケイオスキューブ」は皇都の東から皇都付近まで追って来たぞ
後はカボチャとか仮装っぽいデザインの「ケイオスゴーレム」を引き連れてた

後は本体のパーツにもハロウイン的な意匠があったような

393：名無しの魔女「sage」：2043/10/31（土）
そこまで来るとイベントボス臭いねえ

隠しボスとか？

394：名無し扇動者「sage」：2043/10/31（土）
情報が足りませんねえ、場所は皇都の東ですか
ドライブの編集部でちよつと調べて来ますよ

395：名無しの船長「sage」：2043/10/31（土）
イベントしてたら「万搦千手 ワイルドハンド」って言う幽霊船に襲われた

なんか念動力みたいなので海上に現れた嵐と大渦の中に引きずり込まれそうになったぞ

396：名無しの大海賊「sage」：2043/10/31（土）
あら、グランバロアからも目撃情報が出てきたわね

397：名無しの高位書士「sage」：2043/10/31（土）

ふむ、イベントへUBMの有無は少し調べてみるべきかな

・
・
・

472：名無しの高位陰陽師「sage」：2043／10／31（土）

各国の編集部と協力した結果それらしいへUBMは何体か発見出来たみたいだな

天地では大量の霊体系アンデッドを引き連れた「霊縛将帥　ダイテ
ンオウ」がいたぞ

473：名無しの高位鑑定士「sage」：2043／10／31（土）

カルディナでは「発火葬霊　イグニツション」という火の玉のへUBMを確認

一定距離に近づくとなんの予兆も無く肉体が燃え出す能力があるっぽい

474：名無しの青龍道士「sage」：2043／10／31（土）

黄河では敵に「カボチャ化」の特殊状態異常を与える

見た目もカボチャな「禍墓致也　パンプジン」つてのを発見
正直言つてまんま過ぎて吹いた

475：名無しの扇動者「sage」：2043／10／31（土）

＞＞474

これはイベントへUBMで確定ですかね

「ケイオスキューブ」含めてマスターを見かけたら襲いかかってくる性質があるみたいです

ティアンは見かけても追ってこなかった上に街に近付いても入る様子はありませんでした

476：名無しの翠風術師「sage」：2043／10／31（土）
グランバロアの「ワイルドハンド」もティアン船よりマスター船優先だったかな

477：名無しの白氷術師「sage」：2043／10／31（土）
アルターでは見つからなかったが……もう討伐されたか
或いはそもそも配置されていないか

478：名無しの高位書士「sage」：2043／10／31（土）
レジェンダリアではイベント狩りをしていたらいつの間にか首を落とされた報告があり

現在追跡調査中

479：名無しの扇動者「sage」：2043／10／31（土）
>>477

この感じだと多分アルターにも配置されてると思いますよおもつと頑張つて探して下さい

まあ既に討伐されて情報秘匿と言うのもあり得ますけど

480：名無しの高位精霊術師「sage」：2043／10／31（土）

今までのスレから総合するとこれらの「UBM」はボスみたいな固定配置ではなく

基本的の自由に動き回りながらイベント中の「マスター」を発見次第攻撃する性質があると

481：名無しの高位操縦士「sage」：2043／10／31（土）
徘徊系の隠しボスかな？

482：名無しの高位木工職人「sage」：2043／10／31
(土)

しかしこんな短時間で徘徊〈UBM〉を見つけ出すとか編集部
の探査力ヤバイね

483：名無しの高位陰陽師「sage」：2043／10／31(土)
まあ向こうがマスターを見かけたら積極的に襲いかかってくる
から見つけやすかったしな

484：名無しの高位鑑定士「sage」：2043／10／31(土)
知恵のあるモンスター程そういった下手な行動を取らないから
分りやすかったとも言える

485：名無しの扇動者「sage」：2043／10／31(土)
ちなみに現在掲示板〈UBM〉情報が拡散したお陰でマスターが
ワラワラと集まってますねえ

そしてお約束の同士討ちが始まっています

486：名無しの翠風術師「sage」：2043／10／31(土)
え？ 〈UBM〉の前なのにアイツ等何やってるの？ バカなの死
ぬの？ byティアン

487：名無しの魔女「sage」：2043／10／31(土)
〈マスター〉の業は深い

488：名無しの船長「sage」：2043／10／31(土)
こんな所にいられるか！ 俺は普通のハロウィンイベントに戻ら
せてもらう！

489：名無しの青龍道士「sage」：2043／10／31(土)

その後<>488の姿を見た者はいなかった……

490・名無しの高位陰陽師「sage」:2043/10/31(土)
珍しく掲示板芸がうまく繋がったな(笑)

後イベントへUBM<の討伐にマスター達の意識が向いてイベントボスの討伐に影響が出そう

491・名無しの高位鑑定士「sage」:2043/10/31(土)
というかへUBM<にも例の《未練の灯火》のバフが乗ってるっぽいんですが

492・名無しの白氷術師「sage」:2043/10/31(土)
さて、アルターではへUBM<は見つからないし普通にイベントを攻略するか

まあ他の皆さんは同士討ちの方が怖いへUBM<討伐を頑張ってるな(笑)

493・名無しの高位精霊術師「sage」:2043/10/31(土)
<>492

洒落になってないんだよなあ

UBMごとマスターを攻撃すればMVPと邪魔者の排除がまとめて出来るぜ!

みたいな事を考える連中はよくいるし

494・名無しの高位操縦士「sage」:2043/10/31(土)
この掲示板も俺みたいなデスペナ組と生産職と編集部しか書き込みが無くなったしな

やはりイベントUBMの方に行ってしまったか

495・名無しの高位書士「sage」:2043/10/31(土)

まあ、掲示板に書き込みばつかするよりもイベントに参加する方が普通ではあるよね

496：名無しの高位薬師「sage」：2043／10／31（土）
UBM相手だとデスペナのリスクも高いしな

497：名無しの扇動者「sage」：2043／10／31（土）
こちらの「ケイオスキューブ」戦はお互いの同士討ちに加えてドロップしたアイテムとかを回収してますかね
それらを撃ち返して来たり素材にして新しいゴーレムを作ってる感じですか

とりあえず動画も撮ってますし相手の質量と他のマスターが減った辺りで一斉攻撃を掛けましょうか

498：名無しの高位陰陽師「sage」：2043／10／31（土）
UBMの前で同士討ちなんてしてたら残念でも無く当然なんだよなあ

499：名無しの白氷術師「sage」：2043／10／31（土）
横入りはマナー違反なんだがマスター同士なら罪にもならんしな

500：名無しの翠風術師「sage」：2043／10／31（土）
ティアンも討伐に関わってるならその限りでは無いんだけどねー
そもそも同士討ちするなら討伐なんて出来ないだろうにみんな馬鹿なのかな？

501：名無しの高位書士「sage」：2043／10／31（土）
今日もユニークという魔力がマスター達を狂わせるのであったと
さ



「……ふむ、途中でテコ入れをしたがイベントボスマンスタ―はヘマスタ―達によつて討伐されているし、もう後半だがイベント隠しボス扱いである。〈U B M〉もほぼ発見されているか。通常のマンスタ―の討伐状況も含めて初の大規模イベントにしては順調だな」

「そうだねー、いつもみたいにもう少し何かトラブルでも起きるかと思つたけど順調だねー、珍しく。掲示板とかを見るにマッドハツターの『生産素材のランク引き上げ』もイベントに直接参加出来ない生産職のヘマスタ―には好評だしね。マッドハツターにしては良い提案だったよ」

「ジャバウォックに『ボスマンスタ―対象のバフスキルを新たに追加する』と聞いた時は大丈夫かと思つたが、蓋を開けてみれば現状の上位ヘマスタ―達ならバフの掛かったボスマンスタ―も討伐しているしな。カンフル剤としてはこの方が良かったかもしれんな」

「ヘマスタ―達の反応も上々みたいね。初心者には下級マンスタ―を狩りつつ割と高性能なアイテムをゲット、上級者はレイドボス挑戦や高品質な素材アイテムを馴染みの生産職に持つていくって感じで」

管理A I達が座すとある場所、その一室ではジャバウォック・チェシャ・クイーン・アリスの四名がモニターを介して現在進行中の『ハロウィンイベント』の推移を見守っていた。

……ちなみに他の管理A I達はマンスタ―の配置やアイテム管理でイベントで絶賛仕事中心だったり、そもそも興味が無かったり、普段と変わらず仕事量が多かったり、別の用事があったりで不参加である。最もこの四名もイベントの監視と同時に不測の事態の把握と対処の担当でもあるので仕事をしていない訳では無いが。

「それにしても、この『ケイオスキューブ』ってアイテムボックスが〈U B M〉化したマンスタ―よね。中身をハロウィンっぽいアイテムにしてそれっぽさを出してるけど、戦闘で消費と回収を繰り返す毎にどんどんハロウィンらしさが無くなってるわね」

「まあハロウィン系のモンスターと見せかけて本質は別の所と言う狙いもあるが……そもそも通常のボスモンスターと違って〈UBM〉を用意するのは簡単では無いから、流石に7大国全てのハロウィン要素を持たせたものを配置するのは難しい。全てカボチャとゴーストにする訳にもいかんしな」

「モンスターを用意するのも結構大変なんだがな。地球の資料からハロウィンの情報を集めてそれらしいモンスターを作ったりとか。……通常のモンスターを用意するのもそこまで手間が掛かるのに〈UBM〉までハロウィン仕様など何体も出来るか」

「そこはしようがないよねー。地球のMMOのハロウィンイベントの資料とか取り寄せたけど、〈Infinite Dendrogram〉じゃダメつてのも多いしー。イベントの進行方法とかは凄く参考にはなっただけどー」

そんな風に初の大規模イベントで特に大きなトラブルも無く順調に進行しているからか管理AI達もどこか余裕を持って過ごしていた……流石に細かいミスなどはあつたが、それも次回のイベント時に参考にしようと考えられる程度のものであつた。

「そう言えばー、掲示板ではまだアルターとレジエンダリアに投下した〈UBM〉が見つかってないみたいだけどー？」

「その二つは隠密性能が高いタイプだからな、存在は確認出来るが見つけるのは難しい故に隠しボスとして配置した。……まあ、クイーンが作ってアルターに投下した【鏡影像 シャドウミラー】はイベント開始すぐに討伐されたが」

「うう……昼間は姿を消しつつ光エネルギーをチャージし、夜限定で敵の見た目・ステータス・スキル・装備品をコピーした上で敵の数に応じたバフが掛かってチャージしたエネルギー分コストが必要なスキルも使えるハロウィンの仮装と掛けた感じにして開発に一カ月掛かった力作だったんだが……“ハンプティのお気に入り”と早期に遭遇して普通に倒された……」

「あらあら」

ちなみにその時の某着ぐるみは『どっかの悪いスライムの所為で同

キャラ対戦には慣れてるワン!』とのコメントを残している……それはともかくとして、折角のイベント用〈UBM〉がイマイチ活躍出来なくて落ち込んでる同僚クイーンの気をそらすべく、チェシヤは未だに発見されていけないもう一体の〈UBM〉について聞いてみた。

「それじゃあもう一体のレジエンダリアの方はどんな感じなの?」

「そちらは『夜行殺断 グリムリープ』という、ハロウィンは死者が現世に現れる日からそれを狩る死神のイメージで抜擢した〈UBM〉だな。能力は幻術とクリティカルと……ふむ、どうやら丁度現在交戦中の様だな」

「む、どうやら交戦中なのはティアンのパーティーの様だが」

「あら? 確かイベントモンスターにはティアンには攻撃しない縛りを入れていた筈じゃなかったかしら?」

趣にジャバウオックが映し出したモニターにはレジエンダリアの森の中で、大鎌を持った死神「グリムリープ」と褐色の肌を保つ女戦士の一団が戦闘を行ってる光景が映し出されていた。

「確かに〈UBM〉を含むイベントモンスター達には『開催期間中は〈マスター〉を積極的に襲え』『ティアンにはこちらから攻撃するな』『街には入るな』といった縛りを設けているが、〈マスター〉と行動を共にしているティアンやそもそもティアンから攻撃を受けた際には普通に戦闘を行うぞ。そうしなければ〈マスター〉のイベントでティアンがモンスターに一方的に攻撃して行くだけになる可能性もあったからな」

「まあそこはしょうがないねー。一応その情報は各国に流布しておいたけど〈UBM〉まで対象とまでは教えてないし、そもそもティアンにはイベントモンスターとそうでない物の見分けはつき難いしねー。戦ってるのはレジエンダリア随一の武闘派民族である『アマゾネス』の人達みたいだしー」

「超級職も居ないし普通に全滅かしらね。〈マスター〉にぶつけるのが目的の〈UBM〉なのだからそちらの方が良いんだけど」

「いや、ティアンの中に古代伝説級特典武器の持ち主がいるようだな。ドライブの神話級武器保持者と同じくMVPとしてはややイレギュ

ラーな形ではあるが……」

そんな事を話す管理A I達の前には『竜の装飾を持つ大剣』を振るうポニーテールの少女を中心としたアマゾネス達が、幻術と大鎌を駆使用する「グリムリープ」とどうにかやりあっている光景があつた……が、その戦いが五分を過ぎた所でアマゾネスの内の一の人の首が、突如として背後に現れた「グリムリープ」の大鎌によって刈り取られたのだ。

「うわー、あれって空間転移？ 分身の幻術と組み合わせるとかエグいねー」

「まあ色々制限や条件は付いているがな。「グリムリープ」は投下した〈UBM〉の中でも初見での殺傷能力に長けている」

「アマゾネス達のメインジョブである【女戦士】^{アマゾネス}は女性によるパーティーでの集団戦闘に特化したジョブ。パーティーを纏める指揮役がやられた様だし、これで終わりか」

画面の中では指揮官をやられて動揺するアマゾネス達に対し、分身と光学迷彩による幻惑の中に空間転移を混ぜるといふ手法で彼女達に何をしているのかを悟らせずにその首を狩る【グリムリープ】によって次々とアマゾネス達の数が減り、とうとう大剣を持った特典武器持ちの少女一人だけとなつてしまつていた。

……そんな中でアバター^{タタ}管理^{至上主義}担当で画面を興味無さそうに無表情で見ていたアリスが唐突に笑みを浮かべた直後、少女の背後に転移した【グリムリープ】に「複数の光の矢」が突き刺さつた。

『え？』

『幻術……じゃなくて転移かしらね。この二つの複合とか嫌な相手か
思い出すわ』

『ああ、昔二人であつちで戦つた「魔幻の狩人」か。幻術を見せ札にして切り札の転移で仕留めるヤツ』

「……ふふふ、どうやら面白い事になつて来たわね」

「その様な。窮地に陥つたティアンを救うと言うのもまた英雄的な展開か。……見せてもらおうか、地球^{あち}での「異端者」達の力という物を」

「……この二人はホントにもー……」

……相変わらずな同僚二人を見て溜息を吐きつつ、チエシヤは画面の中に現れてアマゾネスの少女を助け出した雷を纏う三本角の馬にまたがるレントとひめひめの行動を見守るのだった。

アマゾネス達の戦い

□〈夜灯の森〉

「……ハア……ハア……ハア……」

そこは夜になると可視化した自然魔力が淡く光る事から〈夜灯の森〉と呼ばれる場所、それ故に深夜でもほの明るいそこで褐色の肌を赤いコートで身を包み、金色の髪を「竜の装飾があらわれた髪飾り」でポニーテールに結わえた150センチ小柄な少女が息を切らせながら身の丈程のある竜の装飾を付けた大剣を正眼に構えていた。

よく見るとその少女の頭部のこめかみ辺りからはツノが生えており、腰部からはコートのスリットから出る形でまるで蜥蜴のような尻尾が生えていると言うレジェンダリアでもそこそこ珍しい亜人的な特徴が目立つ外見をしていた。

彼女はレジェンダリアに於ける部族の一つであり、高い戦闘能力とその全てが女性と言う特徴のある種族『アマゾネス』である^{ドラゴン・ファイター}【竜戦士】ティアモ・ウル・ヒュポレと言い、定期的な部族パーティーでのレベリングと修練により遠征を行っていた三パーティー18人程いた内の一人で……その最後の一人であった。

『』『』『K I H I H I H I H I……』『』『』『』

「くっ……私以外は全員やられた……」

そしてティアモの眼前には全身に黒いボロ切れの様なローブを纏い顔には髑髏の面を付けて手には大鎌を持った、まるで〈マスター〉達がイメージする「死神」の様な存在——伝説級^{ユニーク・ボス・モンスター}〈U B M〉【夜行殺断 グリムリープ】が七体も宙に浮きながら彼女の周りを取り囲んでいた。

……そして辺りには彼女の仲間であり今回パーティーを組んでいた合計レベルは最低でも100強、中には自分以上よりも上の^{カンズト}500レベルに達する強者もいたアマゾネスの戦士達が全員首を落とされて絶命し地面に倒れ伏していた。

『』『』『K I H I H I H I H I H I……』『』『』『』

（こつちを嘲笑ってる……訳じや無い。単に残った私を最大限に警戒

しているから確実に始末しようとタイミングを計ってるだけか。嘲笑いでもしてくれれば逃げる隙も出来たかもしれないのに……これが伝説級〈UBM〉……！)

……何故ティアンとしては卓越した戦闘能力を持つアマゾネス達がこんな事になっているのかと言うと、話は少し過去に遡る……。

◇

まず『アマゾネス』は女しか存在しない種族であり、主に近接戦闘系のジョブに高い適正を持つレジエンダリアの諸種族の中でも武力に長けた種族でもある。更に種族単位での平均合計レベルも300近く、それ故に強者を尊ぶ気風があるので定期的に新人のレベルリングや戦闘経験を積む為のパーティー単位での遠征によるフィールド巡りや自然ダンジョン踏破などを行なって日々鍛錬を行なって自らを磨いているのだ。

……実の所は他にも色々とアマゾネス特有の“理由”などはあるのだが、まあとにかくティアモ含めたアマゾネス達は新人アマゾネス(それでもレベルは100近い)の育成も兼ねての遠征に赴いており……そこでハロウインイベントに参加していたヘマスター達の首を刎ねて始末する『グリムリープ』と偶々遭遇してしまったのだ。

『〈UBM〉……！ 全員戦闘準備！ 遠距離攻撃班攻撃開始！ 奥義

【ジエム】 投擲！』

『分かった！ 〈アローレイン〉！』

『了解！ 【ジエム】〈クリムゾン・スファイア〉 投擲します！』

『お前達！ 全体バフを順次発動していけ！ 〈アマゾネス・ウォークライ〉！』

『〈アマゾネス・ウォーシャウト〉！』

『〈アマゾネス・ウォーハウル〉！』

そして超音速機動でその場にいる全てのヘマスターの首を落とすとして光の塵へと変えた『グリムリープ』を見た彼女達の行動は、可能な限りの遠距離攻撃による先制と【女戦士^{アマゾネス}】のジョブスキルで自分達に

バフを掛ける戦闘準備だった。

尚、ジョブとしての【女戦士】は『パーティー内の女性の数』を基準とした自己強化のパッシブスキルと、パーティー内の女性を対象としたアクティブバフスキルを使う特殊条件パーティー内の女性対象下での自己・他者の物理ステータス強化に特化した前衛系ジョブである。更に上級職の【女戦士長】アマゾンネス・リーダーならば女性限定時でパーティー枠を拡張したり、奥義である《アマゾンネス・トライブ》によって他の【女戦士長】が率いているパーティーも女戦士系スキルの対象に出来たりする

そしてアマゾンネスは全員がこのジョブへの適性を持っており、戦闘ではパーティー内の全員が女性であるが故に最大効率で運用出来る【女戦士】の全体アクティブバフと単体パッシブバフを行使して、物理ステータスを大きく引き上げての集団戦法によって亜竜級どころか純竜級モンスターさえも討伐してのける事から彼女達はレジエンダリアでもトップクラスの武勇を持つと言われているのだ。

『K I H I H I ……』

『【ジェム】も遠距離攻撃も超音速機動で回避されたか……まずはへUBM』の能力を見極めるぞ。最悪殿を置いて撤退する』

『全員死力を尽くせ！ 最低でもこのへUBM』の情報を持ち帰る！

我らアマゾンネスはレジエンダリアの守護者！ この国を脅かす者と戦うのが我らの役目だ！』

『相手は急所攻撃に長けた大鎌を使う！ 【救命のブローチ】を装備していたへマスター』をそのまま殺している以上は防御スキルは無意味な可能性が高い！ 注意せよ』

『『はい！』』

……最もアマゾンネス達はこれまでも他の国からは魔境と呼ばれるレジエンダリアで戦い続けてきた武力も知力も優れた精鋭であり、それ故にたかがアマゾンネス二十人強程度で倒せるほど伝説級へUBM』は甘い相手では無いとよく知っていた。初手で攻撃を仕掛けたのはアクティブバフを準備する時間を稼ぐ為と、能力の分からないへUBM』相手に全員で背を向けて撤退する方が全滅の可能性が高いと判断したからである。

……まあ、この【グリムリープ】には『イベント中にこちらからティアンを攻撃しない』という縛りがあったので背を向けて全力で逃げれば追って来なかったのだが、そんな「ゲーム的な理由」をティアンである彼女達に見抜けと言うのは酷だろう。

『K I H I H I H I H I ……』 《フアントム・エイリアス》

『『『『K I H I H I H I H I ……』』』』

『七体が増えた!?』?』

『いや、あのスキルは【高位幻術師】ハイ・イリユージョニストも使う高位の幻術だな。その内六体は幻影だ』

『確か姿だけでなく音や熱源、気配なども本体と同じ幻影を作り出す魔法だった筈。並みの術者では一体か二体程度作るのが限界の筈だが、そこはへUBM』か』

『幻影で攪乱して急所を狙う気か?』

そして己を攻撃してきたアマゾネスを認識した【グリムリープ】の縛りは解け、即座に得意の幻術によって六体の幻影を展開して眼前の敵を須らく始末せんと戦闘態勢へと入り……六体の幻影を含め七体の【グリムリープ】全員が亜音速を超える速度でアマゾネス達へと襲い掛かった。

『『『『『K I H I H I H I H I ……』』』』』

『早い! 幻影も亜音速以上!?』?』

『でも、そんなあからさまに幻術を使うなら本体はどれだかすぐに分か……』

『さて! まずは遠隔攻撃で幻影を攻撃! 前衛はティアモに任せろ!』

『ティアモ、済まんがヤツの手札を見極めてくれ』

『……了解。』 《竜闘気》ドラゴンファイト

それに対してバフ効果で超音速機動も目で追えているアマゾネスの若手が前に出ようとしたが、それを【女戦士長】であるベテランが止めて遠距離攻撃を指示、それと共に自分達の中で最も高い実力を持つティアモに【グリムリープ】の相手を任せた。

それに応えたティアモも【竜戦士】の奥義である身体能力・攻撃力・

防御力・魔法耐性・状態異常耐性を全上昇させるオーラをその身に纏い、亜音速を超える速度による踏み込みで遠距離攻撃を掻い潜って積極して来た「グリムリープ」の幻影の一体に突っ込んで両手に持った大剣——父親の形見でもある【剛竜剣】によって斬り払い霧散させた。

『K I H I ……』

『ん……《破魔竜剣》^{ハマンツルギ}は有効』

これがティアモが頭に付けている竜の髪飾り——特殊な事情によつて、手に入れてしまった。古代伝説級特典武器【竜剣飾 ドラグソード】の『装備している剣の攻撃力以下のMPで使用されたスキルを斬り裂く事で無効化する』パッシブスキル《破魔竜剣》の力である。しかし、あくまで斬り裂いた物のみを無効化するので残りの幻影は健在であり、その中の幻影だと分かっている一体がティアモに向けて大鎌を見舞つて来たので……彼女は即座に150センチ以上がある【剛竜剣】を鮮やかに降るつて斬り返し、その大鎌を受け止めた。

『K I H I ! ? ? 』

『流星にへU B M 』が只の幻影を嚇けると思う程にバカじゃない……この幻影は実体化出来るみたいだから気を付けて！』

『やはりそういうスキルも持っていたか！ 全員幻影一体に付き複数名で当たれ！』

『へU B M 』が汎用の幻術系スキルを只使う訳が無いからな！』

『『『『K I H I H I H I ……』』』』

彼女達の言う通り、これは夜の間だけ幻影の鎌による攻撃を本体と同じ性能で実体化させる《幻夜の^{フアントム・サイズ}大鎌》という【グリムリープ】の固有スキルによる物である。更にそこには夜間限定で大鎌の攻撃が急に所^{ナイト・デスサイズ}に当たった際に相手の防御力・【ブローチ】などの防御スキル・《ラスト・コマンド》《ラスト・スタンド》などの食い縛り系スキルを無効化する《^{ナイト・デスサイズ}夜天の死鎌》の効果も乗っているので、単純に即死攻撃の手数を大幅に増やす役割も担っている。

『チツ、当然そのぐらいはやって来るか。急所だけは絶対に外しな！』
『鎌は防げるけど本体は幻影のまま……釜の攻撃だけ実体化させるスキルか。向こう攻撃は防ぐか躲して、本体へは幻影を破れる光か炎系

の攻撃を使い！ 《レーザーブレード》！』

『ヤツの動きに対応出来ない者は【ジエム】を使い！ 対応出来る者達は協力して攻撃を捌くんだ！』

『本体は……こつちに来た！』

『《ファントム・エイリアス》……H I H I！』

そして【グリムリープ】はティアモに消された幻影を再展開して六体に戻すと、それらをアマゾネス達に向かわせつつ自分自身は幻影を消滅させるティアモを相手取るために斬りかかって行った。

だが、アマゾネス達も歴戦の【女戦士長】を中心としてティアモの言葉から【グリムリープ】の手の内を大凡読み切り、迫り来る六体の幻影の攻撃を熟練の戦士達が中心となって防ぎ、そこにやや若手の戦士が火属性・光属性の【ジエム】や属性を武器に纏わせる装備を使って幻影を破壊して行く。

『『『『H I H I H I H I！』』』』』

『ふん、どうやら幻影の方は流石に本体程に強くは無いみたいだね。打ち合った感触だとA G Iに関しては七割程、普通の攻撃力の方も似たようなもんか』

『とは言え、武器が大鎌である以上は急所に攻撃を受ければ私達では普通に死ぬから油断するなよ！ あの伝説のへマスター達でも一撃でやられたんだからね！』

『ティアモ！ 本体はそつちに任せるよ！ 幻影だけなら私達でも対処出来る！』

『委細了解……《ヘビースラッシュ》！』

『H I H I！ 《ファントム・エイリアス》』

それでも【グリムリープ】は幻影が破壊される度に再度幻術を使って補充して行くが、幻影の戦闘能力は本体程では無い事も手伝ってアマゾネス達は【女戦士長】達を中心に連携しつつ互角の戦いを演じていた。

そして本体の方は超音速機動からのクリティカルでティアモを始末しようとするが、各種バフに加えて“元々のステータス”が高い彼女はその動きを見切る事が出来ており、かなりの技量で振るわれる大

鎌もアマゾネスとして幼い頃から鍛錬を積んで、更にサブの上級職である【ソート・ジャイアント剣 巨人】の大剣重量軽減・慣性制御・空気抵抗軽減などのスキルを組み合わせた彼女の大剣捌きを上回る程では無かったので互角の打ち合いとなっていた。

『思ったよりもへUBM』と互角に打ち合えているね……カチュア、シャニー、エスカ、あんた達三人はここから離脱して【グリムリープ】の情報を街まで持って行きな』

『ええ!?? でも有利に戦えている状況で戦力を減らすのは……』

『馬鹿が……今は有利に戦えているからこそへUBM』の情報を持ち帰れる最大のチャンスなんだよ』

『それにレベルと技術がまだ低いあんた達は幻影にまともな対処が出来ていない。抜けても戦力減少は最低限で済むから情報を伝えるのはあんた達が最適なんだよ。……分かったら行きな!』

『『は、はい!!』』

その途中で【女戦士長】達はパーティー内で一番戦闘能力の低いアマゾネス三人を戦闘から離脱させるという一手を打っていた……彼女達は相手の動きの違和感や、彼我の戦力差から本来なら誰か一人でも致命傷を負う筈の戦いなのに未だ『互角の戦い』にしかなくなっていな
い事から、今の【グリムリープ】は意図的に時間を稼ぐ為に引き気味の姿勢で戦っていると見抜いていたのだ。

故に相手はまだ切り札とも言える強力な固有スキルを隠し持っていて、それを使われたら自分達が全滅する事もあり得るとまで読んでおり、今の内に抜けても問題ないメンバーを離脱させて全滅だけは回避させようとしたのだ。

……そして幸いな事に【グリムリープ】は他の強力なアマゾネスたちの方を危険視していて優先的に狙っている事もあり、三人の逃亡は特に妨害される事も無く成功して……これから始まる蹂躞劇での全滅だけは避けられた。

『K I H I H I H I H I ~!』

『む、ちよこまかと動いていたのに遠ざかって……《タイタン・ブレイク》!』

超音速機動と亜音速未満の機動による緩急をつけた移動を駆使してこちらの隙を伺っていた「グリムリープ」がいきなり距離を取ったのを見て、ティアモは相手の行動が時間稼ぎから別の物に変わったと判断し咄嗟に踏み込んで「剣巨人」の攻撃力倍加・大剣重量に応じた防御力減少を伴う斬撃を見舞う奥義を叩き込んだ。

……彼女も「グリムリープ」はまだ手の内を隠していると考えており、自分の最大の一撃を叩き込めばそれに対する相手の対処によって少なくとも手札の一つは把握出来ると言う思惑の下での攻撃であり……そうして大上段から振るわれた斬撃は幻影となっていた「グリムリープ」を捉えて《破魔竜剣》の効果で跡形も無く霧散させた。

『なっ!?? 幻影……本体が消えた! 全員注意を……!』

『K I H I H I……』

『ガツ……!??』

直ぐに本体と幻影がいつの間にか入れ替わっていると気付いたティアモは仲間に注意を促したが、その的には既に一人の「女戦士長」の背後に転移していた「グリムリープ」が大鎌によってその首を刎ねた後であった……これが「グリムリープ」の切り札とも言える固有スキル《暗夜行渡》——夜間限定で自身と五分以上戦闘を行った相手の背後に転移して、更にはその際には転移後の攻撃終了まで強力な気配隠蔽効果を発揮するスキルである、

それに加えて「グリムリープ」が展開出来る《ファントム・エイリアス》の総数は実は七体であり、転移と同時に自分がいた位置に幻影分身を配置して転移自体気付かれないうようにする事で熟練のアマゾネス達相手に完璧な奇襲を決める事が出来たのだ。

『このリーダーをよくもお! ……消えた!??』

『K I H I H I……』

『……え?』

『アリサー! コイツまさか転移を……!??』

……そして《暗夜行渡》の最も厄介な所はデメリットが前述の状況及び事前準備と一度転移した相手の背後には十分間は再転移出来ない事ぐらいで、スキルの発動自体はかなりのローコストかつ連続で行

ムリープ」を打ち据えながら離れ、そこに彼女を避ける軌道を描いた魔法の矢が次々と「グリムリープ」やその周囲に突き刺さっては爆発して距離を無理矢理離させる。

更に追撃を掛けようとしていた幻影はその間に展開された炎の壁に阻まれ、その間に声が聞こえて来た方向に転がり込んだ彼女はレジエンダリアでも珍しい純竜クラスの馬形モンスターである「ライトニング・トライコーン」に乗った男女二名の「マスタ―」の姿を目撃した。

「途中で出会ったアマゾネス三人に助けを請われて来たんだけど……ちよつと遅かったかしらね」

「少なくとも一人は助けられたと考えよう……その君、今は下がって怪我を治しておけ《喚起》^{コール}ネリル、クルエラン」

「……ん、分かった」

……そして「ライトニング・トライコーン」——純竜級に進化したヴォルトから飛び降りたひめひめは首が無く横たわるアマゾネス達を見て顔を顰めながらも弓を構え、同じく目を細めて真剣な表情をした騎乗したままのレントは疲労からか少し顔の赤いティアモを下がらせつつネリルを後方に、クルエランを前方に呼び出して「グリムリープ」と相對するのだった。

夜に踊る死神

□ 〈夜光の森〉

「さて、治療しながらで構わないんだが、あの〈UBM〉の能力や特徴を簡単に説明してくれないか？」

「う、うん……アイツは幻術による七体の分身と大鎌による【ブローチ】も無効にするクリティカル攻撃を使ってくる。それと分身の大鎌でも相手を攻撃出来るし透明化の幻術もある。そして相手に背後に転移する能力も持っていて隠密発動出来るのかタイミングがよく分からない。戦闘直後には転移を使ってこなかったから何か条件があるのかも……」

質問されたティアモは傷を直すためにポーションを背中に振りかけながらも、レント達に知る限りの「夜行殺断 グリムリップ」に関する情報を早口で話していった。この辺りの切り替えの早さは流石は戦闘民族であるアマゾネスらしいと言えるだろう。

……だが、それを見た「グリムリップ」はいきなり現れた「不確定要素」にこれ以上準備されるのは危険と判断して、目くらましに展開されていた炎の壁を斬り裂きながら七体の分身を攪乱させる様に散らしつつレント達へと斬りかかっていく。

「『『『『K I H I H I H I 』!!』』』」

「!??!? 来た!」

「あの程度の壁では足止めにならないか……《ブースト・エンデュランス》。クルエランは前に出る、幻影は任せる。俺達は手始めに本体を狙う」

『GO』

向かって来た「グリムリップ」達に対してレントはクルエランにバフを掛けて壁役にしつつ、自身はアイテムボックスから魔法銃「シルヴァ・ブライト」を取り出して、最初から今までずっと補足し続けていた本体へと向けた。

……これまで余り出番が無かった「シルヴァ・ブライト」だが、そもそもレントが普段の戦闘においてコレを使わないのは雑に使うだ

ブースター』《ブーステッド・グループ・アジリティイ》」

……のだが、そもそも幻術対策の為に【イリユージョニスト幻術師】系統を取つていたひめひめと、上級職以下の魔法など全て使えて当然なネリルは問題なく使用可能であった。加えてネリルの方はついでに「グリムリール」に相対しているクルエランに物理ステータス上昇バフを、その場にいる味方全てにAGI上昇バフを掛ける事すらしていた。

『《ワン・アンド・オール・エンチャント》ぐらいなら素で出来るのじやよ』

「助かった二人共！　クルエラン、ヴォルト、俺たちは本体だけを狙うぞー！」

『承知！　《ライトニング・ジャベリン》！』

『K I I H I I E ！』

そうして残された【グリムリール】本体に対してレントは先程よりも威力を落とした状態で【シルヴァ・ブライト】を練習し、彼を乗せたヴォルトも頭部の三つの角から雷電を迸らせ槍状に変形させて射出した。

……尚【ライトニング・トライコーン】へと進化したヴォルトに新たに追加されたツノは決して飾りでは無く、この三本の角を中心とする事で雷属性スキルの高精度運用を可能とする《征雷の角》というパッシブスキルを有しているのだ。これとこれまでの騎乗戦闘しながらの雷電制御訓練が身を結んだ結果として進化時に発現した《防雷の鞍》と言う騎乗者を雷属性から保護するスキルを合わせて、ようやくヴォルトはレントとの騎乗戦闘が可能になったのである。

『K I I H I I E ！』

「……とは言え、回避に徹せられると早々当たらんか……だが追い込んだ、やれクルエラン」

『G O O O ！！』

だが、それでもレント達の遠隔攻撃を超音速機動躲した【グリムリール】だったが、そうして回避される方向すらも計算に入れて射撃していたレントの策によって前に出ていたクルエランの近くにまで移動させられていたのだ。

ならばと「グリムリープ」は自身よりも巨体なクルエランを壁にして彼等の遠隔攻撃を封じようと懐に潜り込んでの接近戦を挑むが、E N Dにバフを重ねられたクルエランには自慢の大鎌でも切り傷を付けるだけしか出来ず、急所を狙おうにもゴーレム故に装甲に覆われた胸部内のコア以外に弱点が無いクルエラン相手ではクリティカルヒットを発生させる事も出来ないので仕留め切れなかった。

『GOOOOO!!!』

『KIIIIII!!!』

「まあ流石にAGI差で攻撃は当てられんか……《ゴーレム・リペア》」
それでも「グリムリープ」はAGIの差を活かしてクルエランの拳を躲しながらその身体を斬り裂いて行くが、ゴーレムであるが故にレントの使う「戦像職人」のスキルであっさり修復されたのを見て、これではキリがないと一旦距離を取った……が、そこに『このタイミングで距離を取るだろう』と先読みしていたレントに指示によって、全身から電撃を走らせたヴォルトが突撃を敢行したのだ。

「突っ込めヴォルト、遠距離では拉致があかないから近接戦だ。急所攻撃には気を付けろよ! 《瞬間装備》《ルミナス・コーン》!」

「相手に態勢を整えられる方が危険な気がしますしね……《エレクトリカル・エンハンス》! 《サンダー・トライデント》!」

制御系スキルの恩恵によってようやく騎乗中の発動が可能になった『電気を纏う事での身体強化』と、進化して新たに覚えた『角に近接用の雷の刃を展開するスキル』を使ったヴォルトは一気に「グリムリープ」を突き刺さんと突撃した。

更に騎乗しているレントも武器を「パラディンソード」に切り替えつつ、刀身に聖属性の馬上槍の様なエネルギーを纏わせて刺突とリーチに特化させる「聖騎士」の馬上戦闘用スキルを使って近接戦を挑む構えをとる。

『!?!? KEHYAAAA!!!』

『狙いはこちらか! だが進化して手に入れたこの角は伊達では……!』

だが、それでも一万越えのAGIを持つ「グリムリープ」は即座に

反応して『そちらから来るならむしろ好都合』と薙ぎ払う様にヴォルトの首を狙って大鎌を振るい、それに対してヴォルトも雷刃を纏わせ、三本角で迎撃しようと頭部を振るって……。

「……違う、本命は上だ」

『K I H I E ! ? ？』

直後、突然レントが何も無い自身の上に剣を振るったと思ったら薙ぎ払いの構えを取っていた筈の「グリムリープ」の姿が歪み、代わりに上段から大鎌を振り下ろそうとしてレントの剣に展開された《ルミナス・コーン》に払い飛ばされた「グリムリープ」の姿があつたのだ……実は直前に「グリムリープ」は自分の身体に被せる形で自身の幻影を作り出して、本当の自分とは別の攻撃をさせる事での不意打ちを狙っていたのだ。

……本体と同じ座標にある幻影故に気配やヴォルトの電磁波による探知といった探知系スキルなどで見破る事も難しい高度な幻術技巧だったのだが……。

「済まんがソレは以前リアルでに見た事があつてな……突つ込めヴォルト！」

『了解！ 《サンダー・トライデント》 最大出力!!』

『K I K A K A K A K A K A K A K A K A K A ! ? ？』

それはリアルでの経験則と《イリユージョン・ジャミング》によって僅かに乱れていた幻影を見逃さない観察眼を持つレントに見破られ、その結果として攻撃を捌かれて大きく隙を晒した「グリムリープ」にヴォルトの雷の三本角が突き刺さってその身体に大電流を叩き込まれた。

そうして放たれた大電流によって「グリムリープ」が身に付けていた仮面やローブが破壊されて行き、その内にあつたまるで夜の様に暗い色合いをしたエレメンタルの肉体が見えたのだ。

「む……成る程【ナイト夜のエレメンタル】の亜種じゃったか。夜という空間や概念に纏わる能力を持つ希少種じゃな」

「……凄い、これが《マスター》の力……あの《UBM》をこんなあつさり……」

「んー、如何かしらね。アマゾネスの精鋭を倒した割にあつさり過ぎ

るし、まだ何か隠している気がするんだけど……まだ夜だし必殺スキルは使えないけど準備はしておこうかしら」

一方的に電流を叩き込まれている「グリムリープ」を見て傷の治療を終えたティアモは驚いていたが、それに対してひめひめはどうにも「嫌な感じ」がする事から油断なく「アマテラス」を構えてその様子を見守り……その直後、まだレント達が戦いを始めてから3分程度しか経っていないにも関わらず、《サンダー・トライデント》に貫かれて電流を流され続けられていた筈の「グリムリープ」の身体が跡形もなく消滅したのだ。

それによっていきなり手答えが消えた事でヴォルトは一旦《サンダー・トライデント》を解除して辺りを探り、相手の転移に何度も煮え湯を飲まされてきたティアモは今度こそ捉えようと背後を中心に警戒した。

『消えた!?? どこに……!』

「また転移!?? 今度は誰の背後に……!」

「む? いやあれは……」

「……違う! 転移じゃなくてまだ居る!」

だが転移程度なら感知出来るネリルと異能・戦術問わずに対幻惑に非常に長けたリアルスキルを持つひめひめ、側から見ている内その二人は「グリムリープ」が転移したのでは無くその身体だけが消え去って残った大鎌は光学迷彩で姿を消しているだけという事に気が付いていた。

……そして、姿を消している大鎌は今まで閉じていた先端部分にあつた眼を開き、月の様な淡い黄色の単眼を覗かせながら独りで宇宙を舞いレントの首を刈ろうとして……。

「《黒晶刃》……お前も武器が本体のタイプだったか。そういうへUMB」が流行ってるのか?」

『KIITII!』

以前に似たような相手と戦った事がある故に大鎌がまだ残っている事に気が付いていたレントが、咄嗟に首と刃の間に割り込ませた剣と首を起点に二股に別れた形に生やされた黒い刃に阻まれた。

……そして物体は透過する筈の《黒晶刃》で受け止められた事からレントは『大鎌の方が本体である』疑惑を確信に変えつつ、手綱から手を離して「グリムリープ」の持ち手を掴んで無理矢理引き剥がし5000近いSTRを使って投げ飛ばした。

「あの大鎌が本体だ！ 《リバース・クルセイド》！」

『承知！ 《サンダー・スマッシュャー》！』

「成る程ね！ 《ハウンドアロー》《光炎之矢》！」

「ふむ…… 《グルーム・ストーカー》」

そうして投げ飛ばされた「グリムリープ」に対して地面から吹き上がる闇のエネルギー、指向性を持たされた雷撃、視線による追尾機能付きの光炎の矢、生物のみに当たる追尾式の闇の魔弾が次々と突き刺さっていく……が、夜間限定だが神話級金属並みの防御力とへUBMとして相応に高いHPを持つ本体を倒すには威力が足りなかった。

『K I K I T I I！ 《闇夜の死神》』

そして攻撃の衝撃を利用して距離を取った「グリムリープ」がスキルを行使した途端、先程と同じ夜色のエレメンタルの肉体が構築されて本体である大鎌を手を取った……これが「グリムリープ」に取って本当の意味での切り札と言える《闇夜の死神》——夜間限定で本体のENDを中心としたステータス上昇と、伝説級相当のスペックのあるエレメンタルの肉体を作成してそちらを本体だと偽装するスキルである。

このスキルのお陰でMPが残っている限りはエレメンタルの肉体が幾ら破壊されても問題なく、そもそも神話級金属並みの強度となった本体を傷付けるのも至難の技となるといって、夜間限定とは言え「グリムリープ」は異常な生存性能を有するへUBMとなっているのだ。当然、戦闘時間を稼ぐ必要がある《暗夜行渡》との相性も最高である。「ふむふむ、どうも【ナイト・エレメンタル】と器物系のエレメンタルのハイブリッドだったようじゃな。加えてアレだけのスキルを使ってもMPが二割も削れておらん。おそらく夜間限定でのMP消費削減と自動回復じゃな」

「加えて本体がクソ硬い。多分殆どのスキルに『夜間限定』のデメリッ

トを付けている分だけスキルの性能やステータスが高くなってるんだろうが……」

「夜が明けるまでは後5時間ぐらいはあるから時間切れを狙うのは現実的じゃないね。夜間だと私の必殺スキルも使えないし」

「……私だと神話級金属レベルでは傷を付けるぐらいしか出来ないし……特典武器の第二スキルなら可能性はあるけど今は使えない」

「……とりあえず詳しく」

それに対してレント達は一旦集まって現在分かった情報を整理していたが、そこでティアモが特典武器「ドラグブレード」のスキルに付いて「グリムリープ」に聞かれない様に小声で話した。

「……成る程、確かにそれなり条件は厳しいが……俺ではまともにダメージを与える手段だと《神技昇華》でワンチャンあるかと言った所だしな」

「単純にENDの影響を受けにくい闇属性か雷属性を使う手もあるが……それでは先にこっちがやられるのう」

「とりあえずティアモさんだったかしら、第二スキルに方はまだ少し待って頂戴。MPの総量と私の勘だけどアツチにもう切り札が無いとは限らないから、まずはこっちの攻撃手段を試すわ」

「分かった」

それだけ手早く話し終えた彼等は戦闘態勢を整えて再び「グリムリープ」に向き合ったが、それに対して「グリムリープ」は再び《ファントム・エイリアス》を行使して二体だけ分身を作り出してみせた。

『『K I H I H I H I ……』』』

「数を絞ってその分だけ制御力を上げた《イリユージョン・ジャミン》《グ》二つ分の妨害を突破したようじゃな。それでもやや精度は落ちておるが」

「とにかく敵が三体に増えようがやる事は変わらないわ。あの本体である大鎌を何とかしてぶっ壊すのよ」

……そうしてお互いに準備が整った所で分身と共に超音速で斬りかかって来た「グリムリープ」にレント達が対応する形で第二ラウンドが始まったのだった。

夜を払う竜の剣

□〈夜光の森〉

『『K I H I H I H I ！！！』』』

何処から声が出ているのか分からない様な不気味な笑い声は発しながら、三体の「グリムリープ」は大鎌を構えながら亜音速を超える速度で緩急を付けたフェイントを織り交ぜつつレント達との距離を詰めていく。

……それに対してレントは徐に即時放出機能付きのアイテムボックスから三つの「ジエム」を取り出し、三体の「グリムリープ」の進行方向上に投げ放った。

「ネリル、壁」

「『ハイ・アイス・レジスト・ウォール』……人使いが荒いのう」

『『K I H I H I E ！？？』』』

その直後、まるで示し合わせたかの様にネリルが対氷属性の障壁を前方に展開した……その瞬間に投げ放たれた「ジエム」『ホワイト・フィールド』(自作)が起動して、超音速移動が出来る「グリムリープ」でも回避できないタイミングと範囲に上級職の奥義に相応しい極低温の冷気を発生させて前方を白く覆い尽くした。

「ちよ！？？ この近距離で上級奥義魔法を……！？？」

「大丈夫よティアモさん、直前にネリルちゃんが障壁を展開してたから」

「しかし主人殿、いきなり自分達を巻き込む規模の「ジエム」を投げるとはな。ワシの障壁が間に合わなければどうするつもりだったんじゃないや？」

「お前が「ジエム」の運用に対応出来ない筈がないだろう？ ……さて、本体にダメージを与えるのは難しそうだから「凍結」を狙ってみたが……クルエラン、前に出ろ」

『GO!!!』

そうレントが指示を出し、ゴーレムらしく基本的に主人には忠実なクルエランが白煙に包まれたままの前方に躊躇なく足を踏み入れて

……白煙を突き破って現れた「グリムリープ」の斬撃を受け止めた。
……不意打ちで極低温の冷気を受けて幻影は構成に使われていた熱エネルギーを奪われて消滅、身体の方も「凍結」された「グリムリープ」だったが、先程と同じ様に身体を消滅させて「凍結」されていらない新たなエレメンタルの身体を再構成して凍ったままの大鎌^{本体}を使って攻撃したのだ。

『GOOO!!』

『K I H I H I …… 《フアントム・エイリアス》』

「そのまま本体を抑えろ！ ……チツ、やはり「凍結」程度では止まらないか！」

大鎌に斬り裂かれてもそれを意に介さず「グリムリープ」に向けて拳を繰り出すクルエランだったが、相手は超音速機動で躲しながら再度幻影を二体召喚して後ろにいるレント達に喉しかけた。

だが、クルエランの方も『急所がない自分にとってあの大鎌は防御力と自己再生でどうにでもなる攻撃』だと割り切って、本体を抑えろと言う主人の命令を成すために相手の攻撃を無視して拳を振るい続ける。流石にその攻撃を無視する訳にも行かず、結果的に「グリムリープ」はクルエランによって足止めされる事になった。

『K I H I H I ……!』

「行くぞヴォルト、クリティカルだけには注意しろ《アイス・ブリザード》！」

『了解！ 《ライトニング・ジャベリン》！』

「ティアモさん、前衛を任せて良いかしら？ 《ヴァイパー・アロー》
《光炎之矢》」

「分かった！ イヤアアアッ!!!」

突破して来た二体の幻影も、一体はレントが広範囲に放った冷気の奔流によって熱エネルギーを奪われて構成が揺らいだ所にヴォルトの雷の槍を叩き込まれて霧散、もう一体もひめひめの矢を回避しようとして発射前に回避方向へと曲がる様に設定してあった矢に穿たれて動きが止まった所へティアモの《破魔竜剣》^{ハマノツルギ}によって断ち切られて消滅した。

展開中の《イリユージュオン・ジャミング》によって脆くなっている事もあってあっさりと消滅する幻影だったが、それも織り込み済みだったのか「グリムリープ」はクルエランの攻撃を回避しながらも新たに二体の幻影を展開してレント達に嫉しかけた。

『K I H I H I H I ！』

「不味い……あいつ明らかに時間を稼いでる。仲間達を転移で皆殺しにした時と同じ展開。あの時は5分ぐらい戦ったら転移を使い始めたけど……」

「ふむ、とすると背後転移の条件は戦闘継続時間と言った所か？ 連続行使したって話だしクールタイムの線は薄いか。ネリル、クルエランに対氷バフ。彼女に使ってこない所を見ると同一対象には連続使用出来ない様だが…… 《詠唱》終了《ホワイト・フィールド》」

「ほいほい…… 《ハイ・アイス・レジスト》」

自分の考えを《詠唱》として口に出しながら纏めたレントは、ネリルに指示を出してから「グリムリープ」の本体と幻影をクルエラン毎巻き込むレベルの前方広範囲に【白氷術師】^{ヘイルマンサー}の奥義である極低温の冷気を発生させて纏めて凍結させた。金属製ゴーレムであるクルエランであればダメージは最小限で住むだろうと考えて巻き添え攻撃である。

『……GO……』

「うん、いきなりクルエランを巻き込んだのは正直悪かったと思うてる。《ゴーレム・リペア》」

「氷も溶かしておくぞ 《ヒートボディ》」

……まあ、奇襲の為とは言えいきなり主人から攻撃されたのは不満だったのかクルエランは文句を言いたそうな雰囲気しながら下がって来たので、レントとネリルは謝りつつ回復と高熱付与による体表の氷の除去を粛々と行うのだった。ちなみに前衛のクルエランの耐久性なら問題ないレベルの広範囲魔法による巻き添え戦術はもう何度もやっているのです、クルエランの方も慣れてはいる。

「でも、さっきと同じ【凍結】狙いじゃ時間稼ぎにしかないし、向こうに時間を稼がせるのは危ないんじゃない？」

「あの肉体の再構築にはそれなりの魔力を使うみたいだしMP切れ狙いだよ。……それにもう戦闘開始から五分は過ぎてるからいつ転移を使って来てもおかしくは無い。だから広範囲攻撃で……『K I H I H I！』」

そうレントが説明していた直後、冷気によって出来た白煙が目眩しになっていと思った「グリムリープ」は先程と同じ様に【凍結】した肉体を再構築した上で彼の背後に転移してその首目掛けて大鎌を振るい……その刃は直前に彼が後ろも見ずに首を守る様に掲げた右腕を貫いた所為で急所である首からは逸れてしまった。

『K I H I A ! ? ? 』

「……その際に乗じて一番脅威度へイトを稼いでいた俺の背後に転移する様に誘導したんだが、上手くいった様だ」

そう、五分が過ぎた時点でレントは「グリムリープ」が自分の背後に転移してくるだろうと予測し、いつ転移して来ても問題ない様に警戒していたのだ。ちなみに『自分の背後に来るだろう』との予測は自身とヴォルトが一番ダメージを与えてる以外にも、これまでの戦闘でティアモに転移攻撃を使わなかった以上は同一人物への転移には制約があると考えた他、攻撃が効かないクルエランに使う事はまず無くひめひめとネリルなら背後に転移されても自分で対応できると考えての判断である。

そしてレントはそのままもう片方の手も使って大鎌を抑え込み、それに「グリムリープ」は抗おうとするもSTRに於いては大した差がなく、急所に当たらなければ攻撃力は低い事もあって本体を彼から一息に離させる事は出来なかった。

「それにティマーである俺を倒せばタイムモンスター全員消えるし、こいつは頭良いみたいだからそう来ると思ってた……《詠唱》終了《アヴェンジブースト》。ヴォルト、やれ！」

『《迅雷の蹄》！』

『K I H I E ! ? ? 』

レントが使ったのは【呪術師ソーサラー】のスキルである自身にダメージを与えた相手に対する呪術を強化する《アヴェンジブースト》であり、そ

れによって本体に滴る血——【暗黒騎士^{ダークナイト}】のスキル《ブラッド・カー
ス》の効果が増幅されて【グリムリープ】に【呪縛】の状態異常を掛
けた。

直後、レントの指示に従ってヴォルトが雷を纏った後ろ脚で勢いよ
く【グリムリープ】を蹴り付けようとして……その直前に腕に突き刺
さっていた大鎌も含めて跡形も無く【グリムリープ】は掻き消えた。
『消えた!??』

「転移だ！ 次はどこに……ネリルの後ろ！」

『K I H I I I!』

そうして転移した【グリムリープ】が現れたのはネリルの背後で
あった……《ブラッド・カーズ》による呪縛も動かしているエレメン
タル側に血が付着しなかった事が原因で余り効果を及ばなかったの
だ。加えて《闇夜の死神》で作られたエレメンタルも【グリムリープ】
の肉体の一部と言う判定なので、大鎌だけを状態異常に掛けてもエレ
メンタル側からスキルを行使するなど可能な事も原因にある。

ただ、それでも動きはやや鈍っていたのでレントが転移先を特定す
るぐらいいは出来たが、声を掛けた時には既に大鎌がネリルの無防備な
首筋に振り下ろされた後であり……その刃は首筋の寸前で、見えな
い何か[〃]に阻まれたかの様に停止した。

『K I H I I I!??』

「……まあ、背後から首を狙うと分かっていたし対策は取ってあるん
じやがな。《グラランド・ホルダー》」

「《クイックファイア》！」

「《ヴァイパー・アロー》《光炎之矢》！」

そのカラクリは単純、事前に自分の急所の周りだけ《ハイ・マテリ
アル・レジスト・ウォール》を展開していただけである。【グリムリー
プ】の攻撃力は急所に当たらない限りは亜竜級上位程度のクルエラン
の防御を突破出来ないレベルだと判断しての防御術である。

……そして攻撃を止められて動きが一瞬止まった【グリムリープ】
に対して、まずネリルが地面を操作して作り上げた三本の腕によって
拘束し、そこにレントがスキルによって瞬時にアイテムボックスから

出した【シルヴァ・ブライト】による射撃とひめひめの【アマテラス】による射撃が放たれ……それらが当たる寸前、またしても【グリムリープ】は今度はひめひめの背後に転移してその首に大鎌を振り下ろした。

「《堅樹光球》……ワンパターン過ぎるわよ。予想通りね」

『KI……KIKIA!?!?』

……が、その大鎌はひめひめの周りに展開された光の障壁に阻まれて、更に先程放たれた《光炎之矢》が軌道を180度変えて彼女の元に戻りその背後に居る【グリムリープ】を撃ち抜いた。

この《アローエフェクト・フリードロウ》は魔法矢を発射する前にその軌道を自由に設定出来るスキルであり、レント・ネリルと続けて奇襲に失敗した以上は残った自分の背後に転移してくれだろうと予測したひめひめが、これを使って外れた後に自分の背後を撃ち抜く様に設定しておいたのである。

そしてひめひめは【グリムリープ】が攻撃を受けて怯んだ隙に《堅樹光球》を解除、そのまま背後を振り向きつつ本体である大鎌に狙いを定めて【アマテラス】を引き絞る。

「《光剛勢》《サクリファイス・ボウ》《光炎之矢》!!!」

『GIAAAA!?!?』

そうして放たれた【ドラグリーフ】に蓄積された光エネルギーとグレイト・マギアーチャー【大魔弓手】の奥義である魔法弓の耐久値を犠牲に攻撃力を大きく引き上げる《サクリファイス・ボウ》の効果が上乘せされた、必殺スキル以外なら彼女の最大火力である光熱の矢が狙い能わず大鎌の単眼部分に突き刺さり……その眼球部分を僅かに溶かす程度に終わった。

「だあー！ これでもダメなの!?!?」

「ふむ、ならば防御を無視する闇属性はどうじゃ 《グルーム・ストーカー》ー！」

『防御が効きにくいなら雷属性も付けましょう《サンダー・ボルト》ー!』

「《仮想奥義・神技昇華》レベル50消費《リバース・クルセイド》!!!」

奥義の反動で破損して【アマテラス】を紋章にしまいつつ下がった

ひめひめに変わり、ネリルの闇属性追尾弾とヴォルトが放った落雷が「グリムリープ」の本体に突き刺さり、そこに己のレベルを捧げて攻撃力を大幅に引き上げた闇の奔流がエレメンタルの肉体ごと大鎌を呑み込んだ。

……それぞれ必殺の意思を込めて放ったスキルであり、特にレントの攻撃は純竜級モンスターでさえ葬り去れる威力があったのだが……それでも倒せたのはエレメンタルの肉体側だけであり、本体である大鎌はダメージを受けながらもまだ無事であった。

『ギギツ……GIGI……』

「HPは削れてるけどこれでも駄目か。こいつENDだけじゃなくて魔法耐性も高いみたいだ」

「強度や耐久値、魔法耐性など武器としての性能も神話級金属レベルと言った所かの」

彼等の予想通り《闇夜の死神》による本体の武器としての強度強化は単純なENDの強化だけでなく、魔法耐性や耐久性^HなどもEND程では無いが引き上げているのだ。それに元となった大鎌の武器性能が高い事もあって超級職の奥義レベルの魔法攻撃でも1発2発程度では倒せなくなっているのである。

……しかし、それでも「グリムリープ」にとって本体のHPをここまで削られた事は初めてであり、更に幻術や転移やクリティカルなどの自身のスキルにも悉く対処して来る目の前の人間はこれまで敵対して来た中でも最大の「脅威対象」だと認識したが故に、自身が持つ『切り札』を持って確実に仕留めるべきだと判断したのだ。

『ギギ……ギギギ……殺ス。《殺断死鎌》^{アブソリュート・スレイ}』

そうして再びエレメンタルの身体を再構築した「グリムリープ」は、これまでの取ってつけた様な笑い声とは違う本気の殺意を彼等に向けて二十万と言う残されたMPの大半を消費して切り札であるスキルを行使すると、本体である大鎌の周りの風景が歪に捻じ曲がり始めたのだ。

「アレはまた幻術……って訳じゃ無さそうね」

「うむ、どうやら空間干渉系スキル……しかも転移などでは無く、直接

空間に作用する攻撃系スキルの様じゃな」

そう、「グリムリープ」の切り札である《殺断死鎌》は《夜天の死鎌》ナイトデスサイズの防御無視効果を《暗夜行渡》ナイトリープの空間操作能力を応用させて空間そのものの守りを無効化する様に変更し、そのまま範囲内の敵対対象を空間諸共切断すると言う荒技である。

ただ、当然の如く夜間にしか使えない上、使用には夜間限定の消費MP軽減や自動回復スキルを考へても膨大となるMPが必要な事と、発動中に《夜天の死鎌》《暗夜行渡》は使用出来ず「グリムリープ」自身もスキルの制御に集中する為幻術などは使えなくなるリスクもある。なのでこれまでは使つて来なかつたが、目の前の敵はなんとしてでも排除するべきだと判断したが故に使用へと踏み切つたのだ。

「!?? 来るぞ!!!」

『キイイイイイイエエエエエエ!!!』

そして「グリムリープ」は奇声を上げながら空間の歪みを伴つた大鎌をレント達に向かつて超音速で振り抜き、その周辺にある空間諸共ズタズタに引き裂く空間歪曲を発生させたのだ。

相手が逃げられない様に消費するMPを増やしてでも効果範囲を広げて、このタイミングならば範囲外への移動は絶対に不可能だと確信して放たれた空間歪曲の斬撃波はレント達を呑み込む……直前に前方に躍り出て来たこれまでティアモの【剛竜剣】に受け止められた。

……これまで大して活躍していなかったが故に半ば意識の外にあった彼女の行動に多少驚く「グリムリープ」だったが、幻影をかき消した剣であつてもこれだけのMPを込めた空間断裂なら問題なく諸共屠れると確信し……。

「コンー・《破魔竜大剣》!!!」

『ナアニイ!??』

それ故に彼女の【剛竜剣】によつて《殺断死鎌》によつて発生させた空間歪曲が切断されて霧散した光景を見た「グリムリープ」は思わず驚愕の声を上げてしまった……これがティアモが有する【竜剣師ドラグソード】の第二スキル、使用後に24時間のクールタイムがある代わりにドラゴン系素材製の刀剣で斬りつけた凡ゆるMP消費の

スキルを完全に無効化する《破魔竜大剣》のスキルである。

更にこのスキルには続きがあり、その刀剣の装備攻撃力をその後の三分間だけ無効にしたスキルに使われていたMP数値分だが上昇させる効果があるのだ。

「凄い魔力、これなら！ 《アマゾネス・ウォーシャウト》！」

「うむ、思った以上に良い展開となったの……《ハイ・フィジカル・ブースター》」

『グッ！』

なので《殺断死鎌》を無効にした【剛竜剣】の攻撃力は二十万近く上昇しており、それによって濃密な燐光を放ち始めた大剣を持ったティアモはここが勝機と【女戦士^{アマゾネス}】のAGI上昇バフを自身に掛けて【グリムリープ】へと突っ込んで行き、更にネリルの物理ステータスバフを受けて加速した。

……それを見た【グリムリープ】は『あの太剣は自身を殺しうる』と瞬時に判断したが、スキルの反動によって《暗夜行渡》も使えずMPも殆ど残っていないだったので、やむ終えずAGIによる超音速機動と残ったMPによる光学迷彩で逃亡を図ろうとした。

「逃す訳ないでしょう、《ヴァイパーアロー》《アクセルアロー》《ブリザードアロー》」

「まあシンプルに逃げ道を封じるか……《魔法射程延長》《魔法威力強化》《ロックウオール》」

『ナツ!??』

……が、その後方の逃走経路にはティアモが魔法を無効化すると知って準備していたレントが展開した岩の壁によって塞がれており、それを突破しようと一瞬足が止まった所でサブの魔法弓に持ち替えたいひめひめからの射撃がエレメンタルの肉体へと当たって【凍結】させた。

そして本体が【凍結】した事によって動きが止まってしまった【グリムリープ】の元へ、後の『物理最強』の通常攻撃にすら迫る攻撃力を得たティアモが迫り来る。

「皆の仇……《タイタン・ブレイク》!!!」

『ガ……ガアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!?』

そうして追い付いたティアマが攻撃力を倍にする奥義も併用して大上段から振り下ろした【剛竜剣】の一閃は【グリムリープ】の本体である大鎌を保持していたエレメンタルの肉体諸共まるで紙切れの様に斬り飛ばし、その圧倒的な攻撃力によって前方の地形諸共【グリムリープ】を跡形も無く消しとばしたのだった。

◇

〔UBM〕【夜行殺断 グリムリープ】が討伐されました〕

〔MVPを選出します〕

〔ティアモ・ウル・ヒュポレ〕がMVPに選出されました〕

〔ティアモ・ウル・ヒュポレ〕にMVP特典【夜天手甲 グリムリープ】を贈与します〕

「このアナウンスは……皆、仇は取れたよ。せめて安らかに……」

《ファイフス・ヒール》……よし、ちゃんとアナウンスは鳴ったし復活とかもしないみたいだな」

「流石にそれは警戒し過ぎじゃない？ ……とにかく、まずはアマゾネス達の遺体を【棺桶】に入れて吊いましょう」

彼等は討伐報告のアナウンスとティアモの手元に現れた特典武器を見てようやく【グリムリープ】討伐を確信して一息吐き、まずは首を狩られて息絶えたアマゾネス達の遺体を吊う事となった。

「……あー、相手が相手だったから躊躇なく広範囲攻撃をぶつ放したから結構遺体が損壊してるな」

「そこは気にしなくていい。彼女達もアマゾネスの戦士である以上は遺体がまともに残らないぐらいは覚悟の上。むしろ仇を取ってもらった事に感謝する筈。……それよりもUBMのMVPを私が取る事になったけど……」

「戦闘時間とラストアタック的に当然の結果じゃないかしら？ 私達は途中参加だった訳だし。……ああ、私もレントも他のへマスターと違って特典武器にがついたりはしないから」

そんな話をしつつアマゾネス達の弔いを終えたレントとひめひめはイベントを楽しむ空気じゃ無くなつた事と、ティアモが逃げた三人のアマゾネスと合流する為に緊急時の合流地点に定めていた霊都へ向かうと言つた事で彼女に付いて街へと戻る事になった。

「今回は色々とありがとう。偶々出会つたばかりなのにへU B Mの討伐の手助けをしてくれて……このお礼はアマゾネスの名にかけて必ずする。……えーつと……」

「ああ、そういえば慌ただしくて自己紹介もしてなかったな。俺はレント・ウイステリア、レジエンダリアには旅行に来た感じのしがないへマスターだよ」

「私はひめひめ、レジエンダリアの「まともな！」「へマスター」でレントの友人よ」

「私はティアモ・ウル・ヒュポレ、アマゾネスの戦士をやつてる。……改めてよろしく」

……そうして戦いの後の自己紹介を終えた彼等は疲れた身体を休める為にも霊都へとゆつくり歩いて行つてのだった。

ハロウインリザルト

□〈霊都アムニール〉【戦棍姫】メイス・ブリンセス ミカ・ウイステリア

「ふむん、流石はボスモンスターのドロップアイテム、結構いい値段で売れたね」

「サリーちゃんに〈魔法少女連盟〉の生産担当の人達を紹介して貰いましたからね。お友達価格でかなり色を付けて貰いましたし、ついになんか良い装備も買う事が出来て満足です」

「あそこで売ってるのは殆ど女性専用の装備群だったけど、私達なら問題なかったしね」

「まあ『お前も魔法少女にならないか?』『魔法少女はいいぞお』って勧誘がしつこい所以外は良いクランだったね」

ハロウインイベントが終わってから何日か経った後、私とミュウちゃんとミメちゃんとアリマちゃんはハロウインイベントで手に入れたアイテムを売り終わって霊都の市街地を歩いています。

今回のイベントではボスモンスターを倒した事もあってドロップしたアイテムは中々の物だったんだけど、装備品に関しては今の普段使いの装備から変える程の性能の物は無かったので、とりあえず特典耐性特化のアクセサリをいくつか残して売り、それ以外の素材系に關してもお兄ちゃんが欲しいって言ってたヤツ以外は売ってお金にした感じである。

「魔法少女と言っても私は完全な物理戦闘職なんだけどねー。これで魔法少女とか言うのは無理では? 着ぐるみでメイス振り回す魔法少女とか、関節技主体の魔法少女レベルのイロモノじゃん」

「うーん、一応魔法剣士とか魔法拳士的な魔法少女も〈連盟〉には所属しているらしいよ? こうプリキュア的な感じで」

「姉様はともかく魔法戦士系ジョブである【魔導拳】マジック・フィストの私や【狂信者】ファンティックのアリマちゃんなら大丈夫! ……とか言われましたね」

「精神汚染系魔法少女とかどう見ても悪役じゃん?」

「呪術系魔法少女も所属してるからセーフ! とも言ってたけど」

魔法少女とは貴女がそう思うモノが魔法少女なのです! ……と

かサブオーナーのサリーちゃんが言ってたので、その辺りへ魔法少女連盟は割と自由なクランみたいなんだよね。

まあ、アリマちゃんは今の固定パーティーの居心地が良いので一人でも何処かのクランに所属する気は無いらしく、私とミュウちゃんはそもそもレジェンダリアには一時的に所属しているだけだからね。

「それで次はどうしようかな？ イベントも終わったし」

「そうだねー、何時ものメンバーとレントさんを誘って霊都以外の都市に行ってみるのはどうかな？ ミユウちゃん達は霊都しか見てないから他の都市にも行ってみない？」

「それは面白そうですね。この霊都も神秘的で見ていて飽きない所ですが、どうせレジェンダリアに来たのなら別の所にも行ってみたいのです」

まあ、レジェンダリアに来てからは私の超級職就職の為のゴーレム装備千本ノックやら、ミュウちゃんとアリマちゃんのイチヤイチャ（笑）やらで霊都周辺での行動ばかりだったからね。確かクロードさんクラリスさんでいふえくんどさんは三人でパーティー組んで、シズカさんは新しく就いた「崇ザ・ヴェンジェンス神」の試運転って事で独自行動してるんだっただけ。

……このレジェンダリアはへアクシデントサークルを始めとする特有の自然現象があるぐらい自然環境が厳しく、更に様々な部族が集まって作られた連合国家である関係上その個々の部族が定めたルールで禁足地とかがある所為で『うっかり立ち入って指名手配』とかが割とあるの、慣れていないと国内旅行とかはし難いのもあるしね。

今は〈Wiki編集部・レジェンダリア支部〉が各部族毎のタブーや禁足地の情報をWikiホームページや掲示板に挙げていたり、デンドロ内でも冒険者ギルドと協力してそれらの情報を纏めたガイドブックを格安で販売してるから大分マシにはなっただけだし、サービス開始直後は情報不足による指名手配犯がかなり出たとか。

「まあ、特定の部族が住まう『村落』とか『秘境』には伝手が無いと難しいけど、この霊都みたいに多種族が入り混じって利用する『都市』ならそう言った禁則事項とかも無くて普通に行けるから大丈夫だよ。

道中も私達なら問題ないし、へアクシデントサークルもミュウちゃんが居れば大丈夫だし」

「バイオハーデス」が自動で自然魔力を吸ってくれますからね。私の周りでは自然魔力が一定以上になる事は無いみたいです」

「お陰で蓄積魔力もギユンギユン溜まるよ」

「せっかく買った魔力霧散系アイテムが割と無駄になったけどねー」

そんな風私達はのんびり駄弁りながら霊都を歩いていたのだが、ふと前を見るとお兄ちゃんとひめひめさんの姿があった……よく見ると、他に褐色肌の女性が四人ぐらいいるね。紋章はないからティアンみたいだし、一人は角とか尻尾とか生えてるけど亜人が多いレジエンドリアではよくある光景だからおかしくは無いか。

「……今日……助かつ……お礼……」

「『今回………くれ……助け………た！』」

「どう………して……人間………で」

「別に………いいの………わ」

……ふむ、話してる雰囲気的に何かトラブルという訳では無さそうかな。どうも僅かに聞こえる声から女性四人がお兄ちゃん達にお礼を言っているみたいだね。

とりあえず無視するのもアレなので声だけは掛けておこうと私達は近付いて行って……。

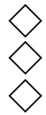
「………そういう訳でレント、どうか私を貴方の妾にして欲しいのだけど」

「いやちよつと待て、一体どういう訳だ（よ）？」

「『………なん………だと………？』」

何故か角と尻尾の生えた褐色金髪美少女がお兄ちゃんの妾になるうとしていた……何を言っているのか分からないかもしれないが、告白とか婚約とかそんなちやちなモノじゃない。もつと恐ろしいモノの片鱗を感じ取ったよ……。

………ていうか一体どういう事なんだってばよ!?? とにかくお兄ちゃんは詳しい事情を話すべき………と思った私達は彼等の下に詰め寄るのでしたとき。



□〈霊都アムニール〉【ダークナイト暗黒騎士】レント・ウイステリア

「……レント、ひめひめ、二人とも今回は本当にありがとう。お陰で助かったよ。……ほら、貴女達もお礼を言って」

「『今回は私達の頼みを聞いてくれて、その上で〈U B M〉ユニーク・ボス・モンスターからティアモさんを助けて頂いてありがとうございました！』」

「どういたしまして。まあ人間に敵対的な〈UBM〉を見かけたらとりあえず倒しておく方針なので」

「別にそこまで畏まらなくていいのに。大した事はしてないわ」

例の「グリムリープ」と戦ってハロウインイベントを終えてから暫くした後、霊都で要らないイベントアイテムの換金などを終えた俺とひめひめはだったのだが、そこに先日の戦いで共に戦ったティアモとその時に俺達へと助けを求めた三人のアマゾネス——カチュア、シャニー、エスカという少女三人と遭遇してこうしてお礼を言われている。

「……あの後はティアモが『別れた三人を探しに行く、後でお礼はする』と言って解散だったからな。どうやら無事に合流は出来たらしい。」

「じゃあ前に言った通りまずは救援に対する礼を渡しておく。……とりあえず戦死したアマゾネスのアイテムから適当なのを見繕って……」

「いやいや、流石にそれは不謹慎では？ ご家族の元への遺品とかあるし」

「ん？ いや別にそこは気にしなくていい。彼女達も自分達の仇を討ってくれた人達の報酬に所持品が使われるなら文句は言わないと思う」

何でも彼女達曰く、戦いの中の生きるアマゾネス的には戦いの場で助けて貰った或いは仇を取って貰ったなら、その相手には最大限の礼を尽くすべきというのが基本らしい。

それと死者に関してはお出来れば死体の弔いぐらいはするが、戦場では死体が残らない事も多いので基本的に『死ぬまでの生き様を生者が覚えておく』ものであり、死んでからの葬儀とかは殆ど行われなかつたとしてもあつさり済ませるのが普通だとか。

……彼女達のそんな説明を聞くに、この辺りは現実と違つて一般的にモンスターが跋扈するデンドロダとまあある死生観だけど、戦いを好んで戦士としての誇りを高いアマゾネス達はそれが更に強い感じみたいだな。

「まあこゝは素直に受け取つておきましょう。……レジエンダリアではその部族特有のマイルールを持つてゐる事が多いから、下手に断ると面倒な事になるわよ」

「二応、私達アマゾネスは種族特性的に他種族から媚を迎える事が多い事もあつて、そう言つた独自の面倒極まりないルールとかは余り無いけど。さつき言つた『アマゾネスの戦士としての在り方』も、この世界の戦士の多くが持っているものをはつきりと明文化しただけだし」

「それに愛用の装備とかは家族へ渡す用として残しますよ」

「……まあ、なら良いか。郷に入つては郷に従えとも言ふし」

そう言う訳で俺たちは報酬として「グリムリープ」との戦いで死んだアマゾネス達が保有していたアイテムを貰う事になつた……まあ、装備品の予備とかは殆ど女性前衛戦士系専門とかだったので、あの戦いで消費したアイテムを補填出来るだけの「ジエム」やらポーシヨンやらを貰うぐらいで済ませたが。

「うむむ……消費アイテムしか報酬に支払える物が無いとは。装備品はアマゾネス製だとどれも尖り過ぎてゐるのが問題か」

「いや、消費した消耗品を補填してくれただけでも有難いから気にしなくてもいいんだが」

「それでもへ＼UBMの討伐の報酬にはまるで足りないし、あの戦いでレントが使つた「ジエム」《ホワイト・フィールド》三つとかはレジエンダリアでも軽く百万リル以上するし」

「アレは全部自作だから……」

俺は上級職複数取れるから【高位魔石職人】と各種魔法系上級職を

ハイ・ジエムマイスター

揃えて上級魔法【ジエム】を色々作れるからな。レア魔法の【ジエム】は高く売れるから《長き腕》の効果でドロップアイテムが手に入らない事なんて関係無いぐらいには稼げるし。

「でもへU B M 討伐の報酬としては少ないし……そうだ、丁度いいからアレにしよう……そういう訳でレント、どうか私を貴方の妾にして欲しいのだけど」

「いやちよつと待て、一体どういう訳だ（よ）!? ? ！」

「!? ? ……なん……だと……? ! ? ！」

それでも何か納得が行かなそうにしていたティアモだったのだが、少し考え込んだ後にそんなめっちゃ訳の分からない提案をして来たのだが……と言うか何だ『妾』って!? ? こつちのアマゾネスも向こうの南米にいた連中と同じ様に男に飢えてるのか!? ?

……と、俺とひめひめが彼女の意味不明な提案に混乱していたら、いつの間に居たのかミカとミュウちゃんとアリマちゃんが慌てた様子でこつちに駆けてきた。

「どどどど言う事お兄ちゃん!? ? 何でいきなり妾を迎えてるの!? ? ！」

「いや別に迎えて無いんだが……」

「そうですよ!? ? ひめひめさんという者がありませんがー!」

「そこは大丈夫。私達アマゾネスは一夫多妻製だから正妻はひめひめさんで私は愛人的な感じで良いから」

「いや貴女もちよつと待ちなさい」

「これが大人の恋愛……!? ? ！」

……あーもうめちやくちやだよ。妹達も珍しく動揺しているみたいだし、これはどう收拾を付けるべきか。



「……さて、それでどうしてレントの妾になろうと思ったのかしら？

詳しく説明して頂戴」

「命を助けて貰った時にピンと来たし、実力に関しては言うまでもなくその後の対応から人格面でも問題無さそうだったから『旦那様にするにはこの人がいいな』って思ったから告白した。妾なのはひめひめさんが既に居たから」

「ええーつと！ 一応アマゾネスは恋愛に関しては積極的なので、気に入った男がいたらとりあえず想いを伝えるのは良くある事です！」
「愛なら付き合ってからでも深められるみたいな考えですね。アマゾネス内では割とよくある考え方です」

「後、ティアモは割と口下手な上に天然気味なので結構変な発言もあるんです！ だからそんなに怒らないで下さい正室さん！」

あれから騒ぎ立てる妹達をバフ込みSTR五千くらいチョップで（物理的に）黙らせて、少し目立った所為で他の人に迷惑を掛けそう（後なんか変態も寄って来そう）だったので、その場の者達を連れて事前に取りつてあつた宿屋に駆け込んで詳しい事情を聞いたらこんな感じだった。

……まあそれに別にひめひめはこの程度で怒ったりはしないし、顔が強張ってるのは単に状況が面倒になってるから頭を痛くしてるだけだから。

「……やっぱり文化の違いかねえ」

「いや、なんか余裕そうだけどこの状況をどうするのお兄ちゃん？」

「それよりもひめひめさんは正室なのですか兄様？」

「もっかいチョップ食らわすぞ」

後、ウチの妹二人が何故か意外と食い付いているんだよな。まあメタル面では基本女子小学生だから色恋沙汰に興味深々でもおかしくはないんだが……しかし、どうするかな。

俺にはひめひめ姫乃がいるから『彼女にして欲しい』なら断って終わりなんだが、今回は『ひめひめは尊重するから妾にして欲しい』だからな。それにアマゾネスだから以前の南米の時みたいに断ってもアップローチ○を掛けてくるかも。

「……ふむ、どうやらいきなりの告白で動揺させてしまったみたい？ お婆様からも『アマゾネスの恋愛感は性急な所もあるから、相手に

引かれたら一旦時間を置きつつ地道に好感度を稼いだ方が良い』って
言ってたし……うん、今は別に返事をしなくて良いよ。時間を置いて
ゆっくり考えてくれれば良いし」

「あ、はい」

「とりあえずそういう事を目の前で言うのは度胸があると言うべきか
しらね？」

「ティアモは天然なだけです！　ちよつと天然なだけなんですう
？」

……とか思っていたら、ティアモがあつさりとなんな事を言っ
たので何かを言う機会を逃してしまった。アマゾネスって色々割
切りが早すぎないかと思っただが、後ろでオロオロしている三人娘を
見る限りティアモが特にそう^天な性格^然みたいだけだ。

「そういう訳で次の話に行こうか」

「この空気では？」

「？……今回『グリムリープ』の所為で遠征隊が私達以外が全滅した
から、この霊都からアマゾネスの本拠地であるへ麗都アンティアネラ
まで戻るのが不安なので護衛を頼みたい。後二人には出来れば麗都
で戦闘時の報告も頼みたい。勿論報酬は追加で出すし、麗都につけば
族長あたりからかなりの報酬を貰えると思う」

なんか本当にティアモの切り替えが早すぎて俺もひめひめも状況
に対応出来ないんだけど……今までシズカさんを代表例としてそれ
なりに『アレな性格の女性』とは会ってきたが、彼女は今まで居なかつ
たタイプだなあ。

「……実は都市に付いた瞬間に大量の男日照りのアマゾネス達が襲
いかかって来るとかは無いわよね？」

「ええ……流石にそんな事はしない。邪妖精とかじゃあるまいし。
……まあ、良い男を見かけたら声を掛けるアマゾネスは居ないことも
無いけど、アマゾネス全体のイメージにも関わるからそういう無理矢
理な迫り方はしないよ」

「へアンティアネラへはアマゾネスだけではない様々な種族が仲良く暮
らす平和な都市ですよ！　【女帝】を筆頭としたアマゾネス精鋭戦士

達が守りに付いているので、レジエンダリアでも屈指の治安を誇りますしー！」

「そもそもアマゾネス達の恋愛アプローチはあくまで個人です。種族を上げてとかはしないです。恋愛・結婚・妊娠・出産の各種サポートは充実している街ではありませんが」

「少なくとも禁足地とか言って問答無用で攻撃を叩き込んで指名手配する事もある所と比べれば、〈マスター〉にとっても遥かに過ごしやすい都市だと評判」

「……少なくとも《真偽判定》に反応は無いから嘘では無いだろうし、そもそも〈麗都アンティアネラ〉の情報はガイドブックにも普通に載ってたしな。」

「……成る程、^{デンドロ}こつちのアマゾネスは^{地球}アツチの連中よりも遥かに理性的らしい」

「二人は何か昔アマゾネスから被害を受けた事でもあるの？ もしそうなら同族として謝るけど……」

「ああ気にしなくて大丈夫よ。アマゾネスはアマゾネスでも私達が元いた世界に生息していた連中の事だから。……昔南米でちよつとね」

「アレは……嫌な事件だったな……」

「ひめひめさんとお兄ちゃんが凄い遠い目をしてる……二人の過去に一体何が？」

正直言ってスーパー超人アマゾネス軍団に追いかけて回されるのもう勘弁願いたいかなって……まあ、デンドロのアマゾネスは大丈夫そうだし、妾云々はさておき彼女達の依頼を受けるぐらいはしても良
いかな。

第6章 麗しの都

【女帝】との邂逅

□〈麗都アンティアネラ〉 【高位従魔師^{ハイ・テイマー}】レント・ウイステリア
「……そう言うわけで此処が〈麗都アンティアネラ〉。このレジエンダリアでもかなり発展してる都市になると思う」

「まあ確かに〈アムニール〉と比べても遜色無いわね。外からは頑強な城壁に覆われてたから分らなかったけど、中は結構豪華だし」

「あちらと比べるとやや硬い感じはするが。アルターの要塞系都市に雰囲気に近いと言うか」

結局ティアモからの依頼を受けた俺たちは『お兄ちゃん（兄様）の恋愛模様を見届けないと！』とかヤケにはしゃぐ妹達と、話を聞きつけて面白そうだと合流したシズカさん達ひめひめパーティーメンバーと共にレジエンダリアの北東側に存在する〈麗都アンティアネラ〉へとやって来ていた。

……その過程でティアモが俺と『正妻の覚えを良くする為』とか言ってひめひめに積極的に話しかけて来たり、その結果として俺とひめひめが付き合ってる事が妹達にバレたり——実のところ隠す理由もそんなに無いので、今は事情があつてリアルでは付き合えない」とだけ言つて終わりだが——したが、問題なく無事に着いた（強弁）
「まあアマゾネスにとって強さ＝美しさ、みたいなところがありますし。後はアルターとカルデイナの国境が近い事や、周りに強力なモンスター^{モンスター}の縄張りがいくつもあるから防衛力は高くないと」

「此処はレジエンダリアの自然魔力の要なので都市を置かない訳にもいかず、でも周りに強力なモンスターが多いから戦闘に長けたアマゾネスに任せられたんです」

「面倒な所を押し付けられたとも言える。アマゾネスは議会での発言力が微妙つて婆様も愚痴つてたし」

「ティアモ、裏話を言うのはやめとこう？」

まあアマゾネス娘達の話はともかく、街の中は活気に溢れていてア

マゾネス以外にも様々な種族が入り乱れて生活している様だった。どうも見た限り武器屋が多いから、戦いに長けたアマゾネスの街らしく強力な武器の生産が盛んな要塞都市としての面もある感じかな。

……うん、どうやら『実は南米の奥深くに住むガチ蛮族で男を見ると飢えた獣の様な目を向けてくる』とかそんな訳では無い様だな。アマゾネスと異種族男性（マスター）なども含む）の普通に仲睦まじいカップルはよく見かけるから、その辺りはキチンとしているみたいだし。

「じゃあ私達は報告の為に族長の所に行くけど」

「分かったわ」

「それじゃあ私達は適当に街を回ってみるよ」

「新しい街に着いたらとりあえず観光だよねー」

そういう訳で俺とひめひめは街の観光に繰り出す他のメンバーと別れ、ティアモ並びにアマゾネス三人娘と一緒にこの（アンティアネラ）の長……アマゾネス達の長であるという族長に会いに行く事になったのだった。



「……着いた。事前に連絡した時には此処に族長は居ると言っていた筈」

「大きな屋敷ねー。何かこう独特のエキゾチックな雰囲気がある外観かしら」

「アルターの領主の住まいとかよりも小さいが」

「それは族長が『無駄に広い所に住んでも落ち着かん』とか言ってる。普段は此処に住んでるから。流石に小さ過ぎると見栄えの問題があるからそこそこ大きいけど」

「政治やその他業務時には別の大型施設を使ったりもしますよ」

そうして街中を歩く事暫く、ティアモの案内で俺達は街の中心部にある大きな屋敷の前までやって来ていた……そして自分達のトップに会うと緊張しているアマゾネス三人娘をスルーしたティアモが、ま

るで勝手知ったる場所の様に堂々と扉の前にいる門番らしきアマゾネスに話し掛けた。

「来た、入れて」

「おや、お帰りお嬢。……事情は聞いているからさっさと入りな。後ろの人達もね」

そんなティアモも簡潔に過ぎる言葉に対しても、門番は嫌な顔一つせず俺達を屋敷の中に案内してくれた……そして通されたのは大広間であり、そこには一目でどれも高い実力を持つと分かる数名のアマゾネス達がいた。

……そして、その中心に座る外見はティアモ同年代ぐらい見えるアマゾネスの少女——最も、纏う雰囲気は周りの戦士達と比べても尚別格の存在だと一目で分かる人物が座っていた。

「お帰りティアモ。それとそつちの〈マスター〉二人は初めましてだね。……私がアマゾネスの族長である女戦士系統超級職スベリオルジョブ【女帝】レイソア・デル・ヒュポレだ。今回は孫が世話になったみたいだね」

「私の祖母。後見た目が若過ぎるのはハイエルフとアマゾネスのハーフだから寿命が長いのだ」

「……成る程、俺はレント・ウイステリア。〈マスター〉だ」
「同じくひめひめよ」

どうやらティアモは族長の孫だったらしい、俺もひめひめも初耳である……まあ、この屋敷に来た時点で全く緊張していなかったから察せられたが。本人の性格（天然）によるものなのかは判別し難かったが。

後、俺もひめひめも多少はお偉いさんの相手は慣れているので大して動揺せずに挨拶を済ます事が出来……そんな俺達の反応を見たレイソア氏は『面白いものを見た』と言った雰囲気エンブレスで笑みを浮かべた。「ふむ、どうやら二人ともかなりの「やり手」みたいだねえ。……まあそこは後回しにするとして、ティアモは遠征先で何があったのかを話しな。先に通信である程度は聞いているが直接詳しく聞きたいからね。説明を頼むよ」

「ん、分かった。……私達は遠征の途中で夜でも明るくて狩りがしや

すいへ夜光の森へ行ったんだけど、そこで伝説級ユニーク・ボス・モンスターへU B M「夜行殺断 グリムリープ」に遭遇して……」

そうしてティアモはアマゾネス達による遠征部隊と「グリムリープ」の戦いの一部始終を語り、更に妙に力がこもった口調で途中で俺とひめひめが助けてくれた事を念入りに語り出した。

……今までから口数が少ない割に突拍子の無い発言をする印象だったティアモなので少し不安だったが、そこは戦闘に関しては真面目なアマゾネスだからなのか状況説明は普通にしっかり分かりやすく伝えていた。そして時折俺やひめひめ、更にはアマゾネス三人娘の口添えなどを絡めてティアモは「グリムリープ」遭遇に関する話を終えたのだった。

「……それで遠征隊は私と後ろの三人を残して全滅したけど、レントとひめひめ達の協力で「グリムリープ」は倒す事が出来た。MVPは私が取って、これが特典武具の「夜天手甲 グリムリープ」になる」「族長、確かにあの手甲は伝説級特典武具の様です」

「うむ、遠征部隊の壊滅は不運なことだったが、それでも御主等だけでも生きて帰って来て特典武具まで手に入れたのは目出度い事だね。遺族への説明や遺品に関してはこちらでやっておこう」

ティアモの両手に装備された「手の甲部分に黄色の目の様な紋様をあしらった黒い手甲」——【夜天手甲 グリムリープ】を見ながら頷いたレイソア氏は、側に居るアマゾネス達に指示を出してこの一件の後処理を行っていた。

「……うむ、このぐらいでいいだろうね。後は任せるよ。……さて、ウチの孫を助けてくれた上、へUBMの討伐まで手伝ってくれた以上はあんた達にも何か礼をしないとねえ」

「後は依頼を受けて私と後ろ三人をここまで護衛してくれた事もあるから報酬は奮発して。……今ちよつと妾になれる様にアプローチ中だから、二人の好感度が上がるように一番良いのを頼む」

「いや、そこで族長にタカるの?」

……まさか妾云々の話を持つてくるとはな。なんか族長の娘だしどう対応するのが正解なのか……くっ！ 南米で見た『アマゾネス

女王』と名乗るクリーチャーの姿がフラッシュバックして思考がイマイチ纏まらん！

「カネとコネは使ってこそ意味がある。それに欲しい男がいたらゲスな手段以外の可能な限りの手段を使って落とすべきだと婆様から教わったし」

「カカカ！ 確かに昔そんな事言ったかね。……しかし、ティアモもようやく色を知る歳か。その祝いに夫候補と正妻候補殿に渡す報酬にはちよいと色を付けておくか。二人とも凄腕の戦士みたいだし宝物庫にある武器とかで良いかい？」

「ええと、別に構いませんが……」

「いや、別に妾に迎える訳では……」

昔のトラウマによりアマゾネス・リアリティ・ショックの所為でイマイチ対応が鈍い俺とひめひめを見たレイソア氏は、意味深な笑みを浮かべつつ部下らしきアマゾネスの一人に頼んで宝物庫にある武器のリストを用意させていた。

……なんか順調に外堀を埋められている様な気もしたが、どうすべきかを考えてる間に部下の人が宝物庫のリストを作って持ってきってしまった。仕事が早い。

「ほれ、これが宝物庫の中身の中で渡しても良い物のリストだよ。この中から一つ選んで持って行くと良い」

「功績を成したアマゾネスやこちら側に引き込んで起きたい者に婆様が宝物を渡すのは良くある事だから遠慮無く貰って。性能に関しては超級職の所持品だから申し分無いと思う」

「……まあ確かに、リストを見る限りだとかかなりの高性能な物ばかりだが……」

うむむ、いかな。どうやら完全に向こう側のペースだ……とりあえずひめひめとアイコンタクトで『リストを見るフリをしながらちよつと落ち着こう』という方針を共有しつつ報酬の装備を選んで行く。

……思ったより『岩盤を素手で砕きながら追ってくる女王』の事はトラウマになっていたみたいだな。あの頃の俺が空を飛べなければ

確実に捕まって酷いことになってただろうし。

「……それじゃあ私はこの【幻影樹のティアラ】で良いかしら。MP＋20%と《幻術適正》《幻術運用効率化》《MP自動回復》の装備スキルがあるから丁度いいわね。頭部装備は良い物が無くて間に合わせの装備を付けてるだけだから。……魔弓でもあれば予備に貰っても良かったけど無いみたいだし」

「ああ幻術使いがウチにいないから死蔵されてたヤツだね。持っていきな。……後魔弓はな。レジェンダリアでもエルフの一部でしか使つてないマイナーで扱い難い武器だからねえ」

狙いを定めて引き金を引くだけで使える魔力式銃器や拠点に備え付けで使う事が殆どの魔力式大砲と違い、魔弓は弓を引いて射る技術とある程度のSTRとDEXが必要だからな。魔法職のサブウェポンとしては使いにくいらしい。

他にも機械技術とのハイブリッドである前者二つと比べると純粋に魔法技術のみで作られている故にMP効率が悪く、魔力式銃器よりマシンとは言え生産難度も技術面・コスト面共に高いので、生産技術があるレジェンダリアでもかなり希少な武器なのとか。

……同じMPを使う弓なら魔法矢を放つよりも、普通の矢を射る行為を強化する類の装備スキル持ちの方が強いらしいな。サイズと発射機構的な問題で同じ消耗品でも矢には銃弾と比べてかなり強力な特殊効果を付与出来るからだとか。

「俺は【戦舞の衣（上）】にするか。HPとSPに合計レベル×5の装備補正に、いくつかの《病毒耐性》の装備スキルがあるから丁度良い。下の方は【クルエラン・コア】があるから要らんし」

「合計レベル参照の装備補正は値段に比しての効果が低いからあまり人気が無いが……【勇者】の同類であるアンタならそっちの方が良いか。……後、何に萎縮してるのかは分からないがこの報酬はあくまで〈UBM〉の討伐を手伝った事に対する物だからね。アンタらとティアモの色恋問題には関係無いから、アタシらアマゾネスはその辺りあくまで自己責任だしねえ」

そうして俺達が報酬を選び終わるとレイソア氏は部下のアマゾネ

スを宝物庫に向かわせた後、何かを見透かしたかのように言った……うん、だいぶアマゾネス・リアリティ・ショックも落ち着いたしな。

……うん、デンドロのアマゾネスと現実のアマゾネスは別物別物。何故なら普通に会話とコミュニケーションが成立するから。

「まあアンタ達二人が夫婦なのは見れば分かるし、ティアモを妾に迎えるかはそっちで決めてくれ。別にフった所でアマゾネスとしてとやかく言う事は無いからね。……まあ、種だけ貰って現地妻扱いとかでもお互いが納得するなら構わないよ（笑）」

「ムムム……出来ればちゃんど認められて側室になりたいけど……」

「いや流石にそれはちよつと……そもそもへマスターとの子供とか難しいでしょう。システムの」

「まあログアウトがあるからこつちで子供を産むのは難しいでしょうね」

ログアウトやデスペナルティになった時点で『へマスター』の身体から離れた体液』の類いも消滅するからな。今まで相手してきたPKを返り討ちにした時も飛び散った血や内臓も消えてたし。

「ああ、その問題ならこつちでも確認してるよ。既にへマスターと、深い仲”になったアマゾネスも居るからね。今もこつちの専門家に何組かの有志の協力、そこで妊娠や出産に纏わるへエンブリオ持ちへマスターの協力で、現在はへマスターとティアンの妊娠を可能とする技術を研究中だ。……とりあえず着床から妊娠までの時間を早めるか、体外に出た体液を保存する手段が出来ればいけると思うんだけどね」

「いやそこまでののか？」

「戦闘・恋愛・妊娠・出産に於いて私達アマゾネスは常に全力。それらに対する各種福祉支援などでもこのレジエンダリアで最も力を入れている」

「……妊娠出産に纏わるへエンブリオって……まあ居るか、レジエンダリアだし」

この辺りは基本女性しか居ないアマゾネス特有の傾向みたいかね

……まあそんな感じでレイソア氏やティアモと雑談をしている内に報酬を取りに行ったアマゾネスの人が戻って来たので、それぞれの報酬を受け取った俺達は屋敷を後にする事となった。

「よし、報酬も貰ったし婆様との顔合わせも終わったから次はどうする？ この麗都のオススデートスポットでも回る？」

「やれやれ、はしゃいじゃってまあ……悪いけどこの子の事を宜しく頼むよ。妾にするでも現地妻にするでもふるにするでもそっちで決めてくれれば良いし、私はそれについて何か言う事は無いけど、こんなでも孫だし色々面倒な事情を抱えてるからねえ。関係をどうするにしても出来れば仲良くしてやってくれ」

「まあそのぐらいなら……」

「……これって外堀を埋められてるだけじゃないの？」

……それを言うなひめひめよ。正直言つてティアモは今までにな
いタイプだから、前述の アマゾンネス・リアリティ・シヨック A R S とかもあって微妙に距離感を測りかねているんだよな。

まあとりあえずお互いに話し合つて良い感じに軟着陸させるから……アンタの性格だとそれでなあなあになつて面倒を見る事になりそう？ まさかそんな……。

ティアモの過去／竜の血統

□〈群獣の森〉【高位徒魔師^{ハイ・テイマー}】レント・ウイステリア

ここは〈麗都アンティアネラ〉北部にある獣系モンスターが群れをなして生息している〈群獣の森〉、ここでは木々の間を飛び回りながら連携して襲い掛かって来た「フォレスト・ウルフ」の群れを三人のアマゾネス達が迎え撃っていた。

『『GURURUUUAAA!!!』』

「シャニー！ そつち行つたよ！」

「オツケー、カチュア。エスカ、カバー宜しく。《ピンポイントアロー》！」

「分かつた！ 《シールドバッシュ》！」

両手に持った双剣で「フォレスト・ウルフ」を斬り払ったデュアル・ソードマン【双剣士】のカチュアが別のウルフ二匹が木々を足場に後方へと向かって飛んだのを見て注意を出し、それを聞いた【弓狩人^{ボウハンター}】のシャニーが飛び上がって動けない一瞬を狙い済ました急所狙いの一矢によつて一匹の頭部を撃ち抜き、突撃して来たもう一匹は【盾士^{シールドター}】のエスカが盾で弾きとばしながらカウンター気味に片手剣で斬りつけた。

……彼女達三人はそれぞれ下級職四職目の合計レベル150強ぐらいだが、幼い頃からアマゾネスとして訓練を積んでいるだけあつて下級モンスターとは言え優れた連携を見せる「フォレスト・ウルフ」達と互角に戦えている。

「……うん、レントのバフ混みとは言え森の中ではそれなりに厄介な「フォレスト・ウルフ」の群れに対応出来るとは、あの三人も大分強くなった。これもレントの経験値増加バフと各種援護のお陰だね」

「まあ散々レベリングしたからステータスは上がるし、技量は三人とも元々十分なものがあつたからな。援護に関しても以前騎士団で受けたクエストでその辺りのコツは掴んでる。ヤバそうなモンスターを先に始末するから」

「レントの【ルー】はパーティーメンバーにも効果を発揮するのは強いわよねえ。私はカンストしてるから恩恵を受けられないけど」

そんな彼女達の戦いを俺とひめひめとティアモはそう評価しつつ後ろから眺めていた……今回俺とひめひめが彼女達と一緒に狩りを行なっているのは、以前の「グリムリープ」騒動のせいで本来の目的であるレベリングが出来なくなっていたカチユア・シャニー・エスカ三人の修行に付き合ってくれと依頼されたからだ。

尚、この〈獣群の森〉は都市周辺の狩場の中で一番モンスターの平均レベルが低いので、俺の《長き腕》込みでなら彼女達のレベリングには丁度いいと選ばれたのだが、レジエンダリアの特殊環境で生きているだけあって此処で群れを構成する獣型モンスターは高い連携精度と地形を利用する知恵を持っている事が多く……。

『GURURURU……』

デミドラグ・フォレストウルフ

「おっと群のボスだね。【デミドラグ・フォレストウルフ亜竜森狼】が三体と配下の【フォレスト・ウルフ】が沢山。やつぱりあの連中は偵察だったかな」

「成る程な……《喚起^{コール}》ヴォルト、ネリル、クルエラン」

この様に亜竜級クラスが群れを作って行動する事も無くは無いだ……アンティアネラ周辺にある他の狩場と比べると平均レベルは低いな分、群れによる連携とか協力を行うモンスターが多いのが此処の特徴なのである。

まあ、麗都周辺の狩場の中では特殊な自然環境も少なくモンスターの最大レベルも亜竜級なので、合計レベル100以上の者にレベリングと戦闘経験の獲得をさせるには丁度いい場所なのだとか。勿論事故防止に護衛を付けて。

「あの連中は私とレントで対応する。丁度【ドラゴン・ファイター竜戦士】のレベルも上げたかったし。ひめひめにはあの三人の援護をお願いしたい」

「はいはい、私はもうカンストしてるし経験値泥棒にならない範囲で援護するわよ」

「経験値はいくらあっても足りん。特に俺は」

『GUUUUAAAAAAAAA!!』

そうして俺達はアマゾネス三人娘をサポートしつつ、襲いかかって来た【フォレスト・ウルフ】の群れを迎え撃つ事になったのだった。



「……あー！ 終わったー！」

「はいはいお疲れ様。ほい《ファイブスヒール》」

「ありがとうございます、レントさん」

「やっぱり回復魔法が使えるメンバーがいるといいね。アマゾネスって殆どが物理的なジョブにしか適正が無いから魔法職貴重だし」

そういう訳で亜竜級含む「フォレスト・ウルフ」の群れを倒した俺達は、負傷した三人娘を治療しつつモンスターの気配がしない場所で一休みしていた。まあ今更亜竜級三体ぐらいなら敵では無いしね。

だいたい「亜竜森狼」の一体はティアモが正面から挑んで斬り伏せ、もう一体はクルエランが押さえ込んだ所をヴォルトに踏み潰され、最後の一体は俺が普通に倒したって感じだった。三人娘の方もひめひめの援護によつて多数の「フォレスト・ウルフ」を倒して大分レベルが上がってるから、レベリングとしては一先ず成功と言つていいかな。

「しかしレントの《エンブリオ》、亜竜級を倒しただけでレベルが上がるのは凄いな。お陰で「竜戦士」のレベルも上がつてもう一度500レベルになれそう」

「亜竜級以上は【宝櫃】のリソースがまるごと経験値になるからな。ドロップするであろうアイテムの質で変化するが、平均して獲得経験値は二十倍から三十倍以上になるみたいだから」

「ふえー、凄い」

「これが《マスター》……」

「ひめひめさんの弓の腕も凄かったし……」

「それは自前の技術よ」

なので《長き腕》を使っている状態なら雑魚の殲滅よりも亜竜級モンスターを何体か倒す方が獲得経験値の効率は良かったりする。亜竜級を安定して倒せる実力がある事が前提だし、純竜級までになると倒すのに手間取るから時間当たりの効率が悪くなるけど。純竜以上ならドロップアイテムの方が欲しいのもあるから。

「そういえばティアモ、【竜戦士】ってどういうジョブなんだ？ 余り聞いたことの無いジョブだから気になったんだが」

「ん……この【竜戦士】ってジョブは種族を人間からドラゴンに変える種族変更系上級職の一つ」

「じゃあ、ティアモの角や尻尾もドラゴンの物なんだ？」

「それはそうだけど、この角と尻尾は『生まれつき』」

……ふむ、確か【大死霊】や【鬼武者】など種族が変わるジョブは幾らか存在するし、【竜戦士】もその類ならアマゾネスに竜の角と尻尾が生えてもおかしくは無いと思ったが……生まれつきという事は、成る程。

「つまりティアモはドラゴンの血を引いているという事か？」

「うん、そう。……私は古代伝説級^{ユニーク・ボス・モンスター}へU B M^{ソード・プリンセス}」【剣竜王 ドラグ

ソード」と、人間である母【剣 姫】アミティア・ウル・ヒュポレの間に生まれた竜^{ハーフドラゴン}人。だから種族がドラゴンなのは生まれつき」

「ふむ、どうりてドラゴンとしての血が濃いと思ったら……ちなみにドラゴンは殆どの他種族と交配出来るから人間とのハーフもおる。またその場合の人間範疇生物とモンスターのどちらかで生まれるかは基本的に母体の種別と同じになる傾向があるのじゃ」

俺や妹達が色々と質問するせいですっかり解説役が板について来たネリルの言によるなら、ドラゴンの^へU B M^と人間の母親との間に生まれた者は種族：ドラゴンの人間範疇生物になるって事か……しかし【ドラグソード】とはティアモが持っていた特典武器の名前では……？

「……うん、この【竜剣飾 ドラグソード】と【剛竜剣】は父さんが残してくれた形見みたいな物。……かつてレジエンダリアを襲った神話級^へU B M^{滅光核魔 ガンマレイザー}」と両親が戦った時に父さんが私を庇ってね。そいつ自体は援軍に来た祖母達アマゾネス達が倒したけど両親を始めとする多くの戦士が犠牲になって、どうもその時に私を庇った傷が致命傷になって父さんが死んだからMVPに選ばれちゃったみたい」

「……つらい話なら話さなくても良いが。別に少しジョブについて気

になっただけだし」

「別にもう割り切ってるし。後は良いタイミングで過去話をすればレントの同情を引けるかもって祖母が言ってた」

頭に付けた髪飾りを撫でながら神妙な表情で辛い過去を語るテイアモに俺は少し申し訳ない気持ちになった……俺はただ珍しいジヨブについて聞きたかったただだったんだが。

それと後半の発言に《真偽判定》は反応せず、ひめひめは『アレはしおらしくしてるだけの演技ね。目の奥では獲物を捕らえようとしている雌の人が宿ってるわ』とか言ってるけど。男の俺には分からない世界だなあ（白目）

「私としても好きになっただ人に自分の事とか知ってほしいし……まあそれより【竜戦士】の事だけど、このジヨブはアマゾネスの里にあった先々期文明の資料に情報が載っていたジヨブ。確か当時のアマゾネスと交流があった竜人種族ドラゴニユートって言う部族が就いてたとか」

「ふむ、黄河の王族が古龍の血を引いていると聞いた事があるが似たような種族なのか」

これはリアルで見たデンドロWiki・黄河支部サイトからの情報だが。ネリルも先々期文明時に居た古龍が戯れに人間と子を成したと母親から聞いたと言っていたし。

「おそらくはね。文献にも『高位の竜の血を引く部族』とか書かれてた。それ以上は断片的に情報しか残ってなかったし、今のレジエンダリアにそんな種族は居ない以上はもう絶滅したらしいから詳しくは分からないけど。……それで肝心の【竜戦士】なんだけど、運良くその文献に一部の就職条件が載ってたから色々試行錯誤して転職出来たの。具体的な条件は『合計レベル400以上』『亜竜級以上のドラゴンのHPを50%以上削って討伐』『人間と従属関係に無い種族がドラゴンのモンスターから【竜戦士】への推挙を受ける』ってものだったけど」

「それは上級職としてはかなり厳しい条件だな、特に三番目」

所謂『レア上級職』ってヤツか。一番目と二番目ならへマスター〜など実力のある人間なら条件を達成するのは可能だろうけど、三番目に

関しては知恵を持った人間に友好的なドラゴン系モンスターへの伝手が必要だから、〈マスター〉の間でも知られていないのは当然か。「まあ『竜を打ち倒して竜に認められた者がつく事が出来る』とか文献には書かれてたし。ちなみに私の推挙は文献を見た父さんが残しておいてくれた『私を【竜戦士】に推挙する』書状で満たせた。後、父さんが生きてる時に従兄弟の何人かを推挙したけど就職は出来なかったから、多分ティアンで適切のあるのは私みたいなドラゴンの血を引く者だけとかだと思う」

「万能の適正を持つ〈マスター〉なら就けるだろうが、ドラゴンの推挙なんて貰えるヤツはほぼ居ないだろうからな。従属してないのが条件ならタイムモンスターやガードナーでも無理だから〈マスター〉が就くのも難しいだろう」

「そんなレアな上級職なら強いのかしら？　ここまで聞くとどんな能力があるのかちよつと気になるわね」

まあ確かにレア上級職の情報には気になるな。最初は軽く聞くんもりだったのに話が妙に重くなつたけど、ここまで聞いたなら情報を得ておかないとそんな気がする……なんて思いつつティアモの方を見ると、彼女はひめひめの疑問に対して何故か少し困った様な表情をしていた。

「うーん、上級職としては【竜戦士】も別に弱いジョブじゃないんだけど……初めから使える固有スキルは種族をドラゴンに変えて生命力や身体能力を向上させるパッシブ《ドラゴン・ブラッド竜血炉心》と、奥義であるMPを消費して自身に攻撃力・防御力・身体強化・魔法耐性などの複合buffを与えるオーラを纏うアクティブ《ドラゴニック・オーラ竜闘気》の二つ」

「最初から奥義が使えるのね。しかしそれだけの効果がある複合buffって上級職にしては強すぎない？」

「おそらく上級職のスキルの範囲内になる何らかのデメリットがあるんだろう。消費コストか個々の効果の強度辺りで」

まあ、上級職スキルのリソース範囲内でそんな効果を盛り合わせにすれば、効果の何処かを削るかコストを法外にするかしかないからな……その俺の予想を裏付ける様にティアモは軽く溜息を吐きながら

首をすくめつつ話を続けた。

「うん当たり。《竜鬪気》の個々の能力の強化度合いは上級職の奥義としてはかなり低い、特定ステータスを強化する事に特化した下級職のスキルぐらいなレベル。……まあ、他のスキルが《竜鬪気》との併用前提でSPを消費して強化する効果範囲を偏らせるヤツばかりだから、単体運用は想定していないみたいだけど。STR強化特化の《ドラゴンアーム》とか物理防御強化特化の《ドラゴンスケイル》とか」「聞く限りは色々な状況に対応出来る強そうな上級職に思えるが」

「最も《竜鬪気》は使っている間に少なくないMPを消費するから生まれつきステータスの高い私でも長時間の維持が出来ないし、派生スキルも燃費が良いとは言えない上に似たような特化型上級職のスキルと比べると効果が低いし。加えて【竜戦士】自体のステータスもDEXとLUC以外がバランスよく伸びる所為で個々の数値は上級職にしては低めだから、バランス良いんだけど個々の分野に於いては他の特化型上級職の方が強いんだよね」

「まあ、バランス型ジョブの悲哀ってヤツね。対応力が高いのは良いけど、いざと言う時には特化型の方が使いやすいって感じ」

成る程、確かに【竜戦士】は弱くは無いジョブではあるだろうが、ジョブ枠が少ない上級職ともなれば『切り札』になり得る奥義とかがある方が優先されるか。弱くは無いが就職条件の厳しさに釣り合った性能かどうかと言われると微妙って感じに思える。

「父さんが残した推薦状で転職出来た形見みたいなジョブで、転職条件も異様に厳しいから正直もつと強いと思ってたんだよね。……いや、弱くはないのは分かってるし、ドラゴンである私には何となくだけどスキルが使いやすいやすぐ感じるから相性は悪くないとも思うんだけど……私は父さんや母さんみたいに強くなりたいから、ジョブの構成にもちよつと悩んでる」

「まあ、苦勞して取った装備やジョブが思ったより強くないとかは（ゲームでは）よくある事だし余り気にしなくても良いんじゃない？

決して弱くはないんだから」

「それに希少なジョブなら超級職は空いてるだろうし取得を目指せば

良いだろう。多分へマスターへ含めてもライバルは少ないと思うぞ」
「やっぱり強くなるにはそれが一番かな」

まあ、レベル上限が無い超級職は取ってレベルを上げてしまえば、どんなジョブで誰が使おうが上級職以下とは隔絶した強さを手に入られるからな。上級職以下のジョブ構成で悩むぐらいならさっさと超級職を取れ……とか言う身もふたもない意見を言っても問題ないレベル。

……何処をどう考えてもレベル制限があるゲームのシステムで『レベルの上限が無い』と言うのはブツ壊れなんだよなあ。それが先着一名様限定とか普通のゲームなら暴動間違いなし。

「よし、過去話や雑談で好感度を稼いだ事だしそろそろレベリングの続きをしようか。空気を読んで黙ってくれてたそっちの三人娘もそろそろ行くよ」

「「はーい」」

……なんか俺もひめひめも順調に絆されてると言うか攻略されている気もするが。まあ彼女達は友人として付き合う分なら悪い相手でもないし別に良いかな……そんな事を考えつつ、俺は引き続きレベリングの為のモンスター狩り를 続けて行くのだった。

少女達の討伐クエスト

□〈へ巨妖樹の森〉^{マジック・フィスト}【魔導拳】ミユウ・ウイステリア

ここはへ麗都アンティアネラへ南西部に位置するへ巨妖樹の森へ、何でもかつては巨人族の住処である肥沃でレジエンダリアでも珍しく安定した土地だったのだが、彼等と妖精族との資源と住処を巡る争いがあった際に何らかの禁術系の魔法具が使われた事によって汚染され生態系が変動、今は亜竜級から純竜級の凶暴なモンスターが住み付き危険度の高い自然現象もよく起きる危険な場所になってしまったそうです。

しかし、最近この森に【アフォレスト・マギロード・ゴーレム】と言う自然魔力を吸収して自身の配下であるゴーレムを生産、更に周囲の魔力・自然環境を自分に優位なものに変えるモンスターが目撃されたのです。コイツは放っておくと生態系を大きく乱すため特級の危険生物に指定されていて、今回も麗都にいたへマスターへティアン問わずに討伐クエストが発令されたので私達も参加する事にしたというのが現状ですね。

「《フレイルム・フィスト》《正拳突き》！」

『G I G G I ……《Fire Register》《Kinetic Register》』

そして今現在私は全長5メートル程の黒い樹木で出来たゴーレム型モンスターである【プランテイング・ブラックゴーレム】に炎を纏った拳を叩き込む戦闘中です。コイツは【アフォレスト】が作り出して分体ゴーレムの一体で、既に似たようなゴーレムがこの森に多数目撃されているとの事。

しかしながら、ゴーレムの使った炎熱防御と物理防御の魔法で威力を減衰させられたので、相手がHP・END型である事もあってさしたるダメージを与える事は出来ませんでした。

『K I K I K I ……《Plant Repair》』

『G U U U ! 《Wood Strike》!』

「チツ、回復されましたか」

そのダメージも後方にいた【プランティング・ホワイトゴーレム】の回復魔法で治されてしまい、それで万全の状態となった【ブラックゴーレム】の太い木の幹の様な拳が唸りを上げてこちらに迫り来ました。

……まあ。AGIは低いし単に腕を振り回しているだけなので、紙一重で回避しながら腕に触れて《回し受け》を使いその運動ベクトルを捻じ曲げて転ばせてやりましたが。

「……姉様、ステータスを借ります。ミメ」

『オツケー《天威模倣》《フリーズ・フィスト》！』

『分かったよ！ そつちも頑張つて……ねっ！』

とは言え、今の私のステータスでは倒しきれないので向こうで別の【ブラックゴーレム】と戦つてる姉様のステータスをコピーしつつ、奥義《双魔拳》により《フレイム・フィスト》の炎熱を左手に移動させ、右手には【バイオハーデス】から引き出した魔力を使って極寒の冷気を纏わせます。

「敵が防御するなら、それ以上にパワーを上げて物理で殴ればいいのです。《瓦割り》」

『GUUU!?!?』

そのまま私は超級職になった事で二万以上となった姉様のSTRと木石を砕く事に特化した格闘スキルの合わせ技で倒れたゴーレムの胸部に一閃、その硬質な樹木で出来た表皮を粉々に砕いた後に纏わせていた冷気によって凍結させて再生を阻害します。

……おっと、凍らせた奥にゴーレムのコアが見えましたね。追加で左手の炎熱拳を凍結した部分に叩き込んで一気に砕いてしましましょう。

『GUUU……』

「よし、私は後ろの回復役を潰しに行きますので他の足止めは任せました！」

『了解！ ……はい防御とか無駄ア！ 《インフェルノ・ブレイク》！』
「分かったわ。向こうの魔法役はこつちで抑えるから……《ヴァイパー・アロー》《光炎之矢》！」

「頑張つてねミュウちゃん！ 《デイバイド・ブレード》！」

コアを破壊して【プランティング・ブラックゴーレム】を倒した私はパーティーを組んでいた他のみんな——防御魔法がかかった【ブラックゴーレム】を圧倒的なステータスと防御無効の固有スキルによつて殴り倒している姉様、ゴーレム軍団のリーダー格である【プランティング・ワイズマンゴーレム】の使う攻撃魔法を躲しながら反撃に光熱の魔法矢を放つひめひめさん、自己強化を掛けながら【ブラックゴーレム】の一体と斬り捨てているアリマちゃんの三人に声を掛けておきます。

あの三人なら他のゴーレム達相手に遅れをとる事は無いでしょうからね。私は早急に回復・支援役である【ホワイトゴーレム】を潰すべきでしょう。

『K I K I …… 《Earth Wall》！』

「む、足止めの為の壁ですか」

ですが【ホワイトゴーレム】も自身が狙われていると判断したのか、私との間に地面を隆起させた壁を作り出して足止めを凶ろうとしました……砕くのは可能でしょうが隙が出来ますので飛び越えましょう。先日《魔法少女連盟》さんから丁度いい装備を買いましたし。

「起動せよ【エアロ・タラリア】《エアロジェット》」

そう言った直後、私は足に履いた銀色の羽飾りが付いた脚甲の足裏からジェット噴射の様な暴風を発生させて反動で上へと飛び、目の前の土の壁を飛び越えた所で身体を反転させつつ《エアロジャンプ》の装備スキルで空を蹴り【ホワイトゴーレム】へと突っ込みました。

この【エアロ・タラリア】は《魔法少女連盟》の生産班の人達が『魔法少女なら空を飛ぶべきだろ、常識的に考えて』という目的の下で、所属している魔法少女の一人“飛翼の魔法少女”イーグレットさんの《エンブリオ》【タラリア】を参考に作られた“魔法少女を飛ばせる為”の装備の一つだそうです。

……まあ、生産技術や運用に際してのコストの関係で飛行能力の装備スキルを再現出来ず、代わりにジェット噴射による加速と空中跳躍のスキルを入れたが『これ飛行じゃ無くて跳躍じゃない？』『魔法少

女って物理ステータス低めなのが多いから跳躍だと』『ジェット噴射であらぬ方向へと飛んで壁や地面のシミになった件』という理由で余り普及はしなかったモデルらしいです。

『KIIII!?!?』

「遅い 《フィストバースト》」

慌てて「ホワイトゴレム」は逃げ出そうとしますが姉様のステータスを得ている私にとっては遅過ぎる動きだったので、そのまま左拳を頭部に叩き込みながら纏っていた炎に追加のMPを注ぎ込んで炸裂させて上半身を吹き飛ばして撃破しました。

……最も前衛型の私にとっては空中跳躍が出来る装備は有り難いですし、コストとして要求されるMPも「バイオハーデス」があれば考慮する必要がなくなります。それに『狭い場所では使わないでね』と言われたジェット噴射機構も、少し練習すればレジエンダリアの木々の間を飛び回れる程度には扱える性能はあったので私的には大満足です。頑丈なので蹴りに使っても平気ですし。

「……さて、こっちは倒しましたが……」

『いい加減にシツコイ！ これで五体目だよ！ 《インパクト・エクスプロード》！』

別の方向では姉様が「ブラックゴレム」の胸部を殴り付けた途端、まるで体内で爆発が起こったかの様にその樹体が吹き飛んで内にあったコアを粉碎してしまいました……姉様曰く、アレは最近メイス・プリンセス【戦棍姫】のレベルを上げたら覚えた《インパクト・エクスプロード》と言う、殴った相手の体内へと衝撃を通して炸裂させるアクティブスキルだそうです。

超級職になってレベルもある程度までは上がった姉様の實力はこのパーティの中でも頭一つ抜けており、直へエンブリオの補正も合わせての高い物理ステータスと本人のリアルスキル感によって純竜級すらも容易く倒せる領域にまで至っています。

『ひめひめさん！ 加勢するよー！』

「助かるわミカちゃん。あの「ワイズマン」自分も純竜級な上、防御魔法や地属性・風属性の攻撃魔法を使って来るからかなり強いよね。

《ピアースアロー》《閃光之矢》！」

『GUGIGI……《Shine Regist Wall》《Aero Javelin》！』

ひめひめさんが貫通力を強化した光の矢を「ワイズマン」に向けて放ちますが、相手は光属性防御の障壁を展開してダメージを減らしつつ反撃に風の槍を複数放ちました……広範囲を攻撃する亜音速の槍を避けきれないと判断したひめひめさんは迷わず特典武器による光の壁を展開して凌ぎ、姉様は直感と亜音速超えのAGIによつて回避しました。

……まあ、今まで純竜級の「ワイズマン」相手に一対一で私達に攻撃が行かないように誘導しながら足止めしていたひめひめさんですからね。姉様が援軍に入った以上はそう遠からずケリが付くでしょう。

「そう言うわけで私はアリマちゃんの援護に行きますか。なあに、今の姉様のステータスがあればそこらの敵など問題にはなりません」
『他人の禪で相撲を取るつてヤツかな。僕の能力はそう言うことに特化してるんだけど』

「それより出来れば援護急いでほしいよ！ コイツら物理耐性があるのか剣が効きにくくて！」

おっと、今はアリマちゃんの援護に急がねば……今回はちよつと長期的なクエストであり複数のパーティーが参加していて乱戦の可能性もあるので、彼女の広域精神汚染は封印して狂化スキルと剣技だけで戦つて貰つてますからね。どうも少し相性が悪かったようです。

◇

「よし！ やつと片付いたよ〜」

「お疲れ様ですアリマちゃん。……どうやら姉様達も終わったみたいですね」

それからアリマちゃんが戦っていた「ブラックゴーレム」を私が残っていた《フリーズ・フィスト》に《フィストバースト》を上乗せ

した上で凍らせて砕いた後、姉様達の方もリーダー格の「ワイズマン」を倒し終えた事で一先ず戦闘は終了となりました。

『とりあえずこれでこちらのゴーレムは全滅だね。こっちのドロップは【賢樹霊の宝櫃】か、中身は期待出来るかな?』

「実力的には純竜レベルはあったからね。他もそれなりに強くて連携も取れてたし、超級職のミカちゃんとそのステータスをコピー出来るミュウちゃんがいなければもつと苦戦してたかしら」

そのまま私達は慣れた様子でテキパキとドロップアイテムを回収してアイテムボックスへと回収していきます。まだこちら辺は不意打ちや奇襲の可能性もある危険地帯ですし、アイテムの分配に関しては街に戻って落ち着いてからって事になってます。

……今回は信頼出来る身内だけのパーティーなので問題無いですが、これが野良パーティーだと偶に持ち逃げとかも有るんですよって思いつつ回復用のポーションを煽る私でした。

「しかし情報によると【アフォレスト・マジロード・ゴーレム】は純竜級でも高位のモンスターではありますが、それでも生産出来るゴーレムは亜竜級が最大だと聞きました。ですがあの【ワイズマン】の実力は純竜に届いて他のゴーレムに指示を出せるレベルでしたね」

『ふむ、偶に良くある何時ものイレギュラーかな? そこまで 危険な感じはしないけど』

「それは下調べ不足ね。ティアモに聞いた話だと【マジロード】は周囲の自然魔力を使って魔法行使や眷属生成を行うけど、稀に多量の自然魔力を使って眷属を強化するスキルを持っている個体もいるらしいわよ」

「成る程」

同じ種族のモンスターでも取得しているスキルが違うのは普通にある事ですからね。そもそもモンスターのスキルはその個体が積んできた経験と生まれ持った資質でどんなものを覚えるのか決まるそうです。

……しかしティアモさんですか。兄様の妾になりたいとか言うとしても宣言をぶつ放したアマゾネスの女性……今回も『レベリングク

エストの続き』と言う理由で他のアマゾネスのテイアンと一緒に兄様とパーティーを組んで、私達とは別行動でクエストに挑んでいるんですが。

『と言うか、ひめひめさんはお兄ちゃんとティアモと一緒にパーティー組んで平気なの？ 私達はい最近まで知らなかったけど、長く付き合ってる恋人同士なんですよ？』

「カンストしてる私が組んでもレベリングの邪魔だし、向こうには何故か面白がつて付いてきた【女帝】レイソア氏もいるから戦力的には妥当な振り分けでしょう？ 私の見立てだと【マギロード】ぐらいならレイソア氏一人で始末出来るわよ」

「いえそう言う事ではなく……」

「ああ、妾云々に関しては貴女達が気にする事ではないわよ。……その程度で私とレントの関係がどうこうなる事は無いし、ティアモの方もリアルでレントに粉かけて来た“連中”よりはマシだからね。そもそも私は妾の一人や二人では文句は言わないわよ、私が正妻なら」

「……ふええ……これがオトナの恋愛……」

……おおう……ここまではつきりと宣言されると私も姉様も何も言えませんね。ごまかしや虚勢では無い事が一目で分かるぐらいに堂々としていますし……無駄に気を回そうとした私や姉様の余計なお世話でしたか？

「まあ、貴女達が気を回す必要は無いわよ。少なくともこの程度の事なら私もレントもリアル側の人間関係とかには影響出ないし……全員、戦闘体勢、敵よ。それもモンスターじゃない」

『おつとそうみたいだね。ちよつと危険を感じる』

「ですね、さつきからこっちに視線が来てます……《人間探知》」

「……あ、はい！」

……と、そうして駄弁っていたら唐突に何者かがこちらに悪意を向けた嫌な気配を察知したので、私は戦闘体勢に入ると共に【ブラックオーツ】の索敵スキルを使います……ふむ、ひめひめさんの言う通り十二名二パーティー分の人間の反応がありますね。

「……10時から3時の方向に計12人の人間を確認。こちらを包囲

する動きですね」

「それで姿が見えず音も聞こえないとなると……【高位幻術師】の光学迷彩と音波遮断、そのパーティー付与かへエンブリオね。とりあえずアリマはいつも通り戦闘準備をして……まずは邪魔な幻術を剥がすわ《イリユージョン・ジャミング》」

小声で指示を兼ねた《詠唱》を終えたひめひめさんは私が言った方向に向けて威力強化と指向性を持たせた幻術を阻害する魔法を放った……すると、私達から三十メートル近く離れた地点でこちらを包囲しようとしている者達——左手に紋章があるのでへマスター——の一団が姿を現しました。

「なっ!? 幻術が!」

「落ち着け! 既に包囲は完了している!」

「そうだ! 今こそ我らへメスガキわからせ隊による復讐の「死ね《光剛成》《アクセルアロー》《ヴァイパーアロー》《爆裂之矢》」

それに動揺した彼等が何かしようとした瞬間、まるでゴミを見るかのような目になったひめひめさんが瞬時に「アマテラス」で強化された五本の矢を放ちました……それらの矢は五方向に分かれて複雑な軌道を描き木々の間をすり抜けながら彼等の内の5名へ見事に命中、その周りにいた連中を巻き込みながら大爆発を起こして彼等に大打撃を与えました。

……しかしへメスガキわからせ隊」と言う単語はどこかで聞き覚えが……ああ、確かLSさんが言っていたひめひめさんとアリマちゃんを狙ったPKクランの名前でしたね。

「つまり倒しても問題ない相手と言う訳ですね《心頭滅却》《賦活の息吹》《エンハンスフィスト》」

『了解《天威模倣》。対象はミカで』

「しかしPKって姿を消しての奇襲が多いよね。流行ってるのかな?」

まあ、この世界の戦闘——特に千差万別のへエンブリオを持つへマスター相手の戦闘では相手に何もさせずに倒す『先手必殺』が基本ですからね。姿を消しての不意打ちはそう言った意味でも有効な戦

術ですからみんなやってるんでしよう。

……故に、これから私と姉様が行うのもひめひめさんの先手で浮き足立ったヘメスガキわからせ隊の連中の数を可能な限り減らす事なんですけどね。誰がどんなへエンブリオ^切を^札持つているかは分かりませんから、精神耐性と病毒耐性を上げつつ今の内に敵を可能な限り倒して不確定要素を潰しておかなければ。

PK達をわからせろ！

□〈巨妖樹の森〉

「クソツ、いきなり先制攻撃とは……被害は!?？」

「爆発矢に当たった後衛魔法職は「ブローチ」付けてたヤツら以外は粉々です！ 周りにいた連中も爆発のダメージが！」

「変態軌道で脆い後衛の相手だけをピンポイントで狙って来やがって！」

襲撃者がHENTAIだと分かって一切の容赦を捨てたひめひめの先制狙撃は、そのターゲットである彼女達を包囲しようとしていた〈メスガキわからせ隊〉に多大な打撃を与えていた。

……具体的に言うとな彼女は矢の軌道を後衛に居る魔法職らしい装備をした者に向かう様設定して見事に直撃させたので、防御力に劣る後衛達は広範囲に及ぶ爆発により「ブローチ」を付けていなかった3人はデスペナ、他のメンバーも爆発によって死にこそしなかったがダメージを貰うなど大打撃を負っていたのだ。

「無事な者は態勢を立て直して攻撃準備だ！ これで終わらないなら追撃が来るぞ！ 《万軍の王》！」

「よくもやりやがったな！ メスガキ共め、わからせてやる！」

「行くぞ【オンギョウキ】！」

だが、その中でも克蘭オーナーである【司令官】コマンダーの男は爆発矢が直撃したものの【救命のブローチ】のお陰で無事であり、すぐに指示を出しつつ自身の〈ヘエンブリオ〉の必殺スキルによって克蘭メンバーのステータスと状態異常耐性を引き上げた。それに答える様に無事だった前衛もそれぞれの武器を取ったり、ガードナーの〈ヘエンブリオ〉に指示を出したりと戦闘準備を整えていった。

『……まあ準備が終わるまで待つ必要は無いよね。《ハードストライク》！』

「なっ速げハアツ!?？」

……が、そうして準備を整え終わる前に超音速機動で接近した着ぐるみ——【戦棍姫】メイ・プリンセスミカ・ウイステリアが大型メイス【ギガース】を

勢いよく振り下ろしてメンバーの一人を一瞬でミンチに変えた。

更に体勢を立て直すついでに彼女は【どらぐている】に付いた『装備者のSTRと同じパワーを持ち、AGIと同じ速さで伸縮・稼働させられる』ブレード付きの尻尾——《竜尾剣》を伸長させて爆発のダメージによってふらついていたメンバーの一人を容赦なく串刺しにした。

「このメスガキめ！ 《バスターアックス》！」

『ふむ……《ウエポン・デモリッシャー》！』

そこにステータス補正特化の《エンブリオ》持ちでミカの動きを把握出来たメンバーが、バフ込みで超音速に迫る速度で接近して両手持ちの大斧を大上段から振り下ろした……が、その攻撃も《直感》による危険予知で見切っていた彼女は、迎え撃つ機動で【ギガース】を振り上げて大斧を跡形もなく粉碎した。

尚、装備が粉碎されたのはは【戦棍姫】の《対装備》に特化したアクトイブスキルであり、装備への攻撃時にその強度を自身のSTR分下げる（ゼロ以下にはならない）効果である《ウエポン・デモリッシャー》の力が大きいが。

「なあっ!?? 俺の斧が高かったのにビイツ!??」

『《瞬間装備》《インパクト・ストライク》……ステータス自慢みたいだけど、私に勝ちたければSTRが後一万ぐらい足りないんじゃない?』

相手が武器の破壊により動揺した隙を突いてアイテムボックスから呼び出した【破碎戦棍・四式】を片手で振り上げてその顎を打ち砕き、付随して発生した衝撃波によって頭部を内側から爆ぜ飛ばしたミカはそんな事を呟いた。

……現在の彼女のステータスは超級職を取ってから地道に、時に兄に手伝って貰ってレベリングをしていた事もあり、《エンブリオ》のステータス補正と【どらぐている】の装備補正を合わせればSTRは二万・AGIも超音速に迫り、物理ステータスの中では一番低いENDでも5000近いというカンスト《マスター》程度では太刀打ち出来ないスペックになっているのだ。

『さてと、とりあえず超^{スベリ}級職と言うものの理不尽さをたつぷり味わって貰おうか。ユニーク要素でマウント取るとか一回やつてみたかったんだよね』

「生意気なメスガキめ！ これは全力でわからせなければなるまい！ ……お前たち、やれい!!!」

「「うおおおおお!!!」」

ミカは片手で「ギガス」を突き付けながら敵のリーダーに向けてそう宣言し、それを見た彼等へメスガキわからせ隊は『生意気なメスガキを絶対にわからせる』と言うクラン全員が共有している信念に火を付けられたのか雄叫びを上げて彼女に一斉攻撃を仕掛けてきた。

「まずは状態異常に掛けてやれ！」

「オレの魅力でわからせてやる！ メール・テンプレテーション《雄性の誘惑》！」

「【猛毒】と【酩酊】と【衰弱】の毒を混ぜて喰らえ！ 《疫病の風》！」
「アバダケダブラなんまいだぶなんまいだぶ……《テッドマンズ・バインド》！」

まずリーダーの指示の下、生き残っていた状態異常スキルが使えるメンバーがミカに向けて一斉に女性への「魅了」の波動、複数の毒を混ぜた風を浴びせるへエンブリオの固有スキル、へエンブリオと《詠唱》の効果で強化・即時発動された複合呪詛が放たれた。

彼等はメスガキを分からせる事が目的でPKをしているので自分達へのバフと、敵への複数の状態異常を駆使して徹底的に有利な状況を作り出す事に特化した連携を好んでおり、この複数種の状態異常による一斉投射もどれかが敵の耐性を突破すれば良いと言う狙いで行われた彼等の常套手段だったのだが……。

『《インスタント・エンパイア》……悪いね、そのタイプの状態異常は効かないんだ』

「「なニイツ?？」」

それらの状態異常はミカが装備していた特典武具「鬼身腰帯 クインバース」のスキルにより、それに事前に作ってぶら下げていた「鬼の頭キーホルダー」へと移し替えられて彼女自身には一切の効果を

発揮しなかった。ちなみにキーホルダーは定期的により多くのSPを込めた物に作り直しているので複数の状態異常を食らっても十分に余裕がある。

そのまま彼女は状態異常の雨を突っ切りながら超音速で接近し、まず病毒から近接戦に切り替えようとした【毒手拳】ボイسن・フィストを撲殺。ついでとばかりに近くにいた【大死霊】リッチも新たに取り出した【ラブリー（略）】で滅殺。最後の【女術】ピンブは自分のへエンブリオである《液状生命体》持ち液体エレメンタルを壁にして凌ごうとしたが、そんなの知らんと言わんばかりに防御スキルを無効にする【ギガース】によってまとめ殴り潰された。

「俺の【ウンディーネ】は水の精霊なのにヒデブツ!?？」

『《ストライク》つと。そういうスキルも私にはあんまり効かない……おつと後ろか。《重意圏》《竜尾剣》』

『GIE!?』

「なっ!?? 俺の【オンギョウキ】に気付いただと!?？」

その隙を突いて姿と音を消して背後から奇襲しようとして来た鬼型ガードナーの攻撃も「直感」で看破して躲し、すぐに【どらぐてい】の周囲にある物体の位置を把握するスキルによって割り出した位置にテイルブレードを放って串刺しにする。

それに対してマスターの【獣戦鬼】ビースト・オーガはミカを攻撃してガードナーが離脱する隙を作ろうと強化されたステータスで駆けるが、それよりも早く彼女は《重破断》グラビトロン・デバイダを使いながらブレードを動かしてガードナーを両断して始末し、それによって《獣心憑依》が切れたマスターを返す刀で叩き潰した。

「そんな……2パーティー12人がもう3人に……」

「くそっ！ 超級職だからってここまでデタラメなのか!?？」

「落ち着け！ まだ勝機はある！ ……喰らえ《アクセルスロー》！」「おつと【ジエム】か。……下がらないと不味そうだね！」

超級職・上級へエンブリオ・二つの特典武器によって圧倒的な戦力を得ているミカの戦い振りに怖気付き始めたへメスガキわからせ隊だったけど、それでもまだ戦意を失っていないリーダーは虎の子であった

た【ジエム】《ホワイト・フィールド》を投擲した。

彼がサブジョブに入れてあった【投手】ピッチャーのスキルによってかなりの速度で飛来した【ジエム】は彼女の手前にあった木に突き刺さって周囲一帯を極低温の冷氣によって包み込んだ。

『……ふう、ギリギリ離脱出来たか。やっぱりAGIは正義だね』

しかし、その【ジエム】の危険性と効果範囲を“直感”していたミカは全速力で後退する事で凍結範囲内にいる時間を短くしており、身に付けている【どらぐてい】の寒冷体制もあってダメージは最小限に収まっていた。

「まだだ！ 《突撃司令》《攻撃司令》《強襲司令》《行軍司令》!!!」

「うおおおおおおお！ わからせエエエエエ！ 《神力の戦帯》!!!」

「《我が望みを叶えよ魔剣》……物理ステータス強化！ 攻撃力強化！ 走行強化！」

『おっと、仕掛けて来たか』

だが、その間にリーダーは【司令官】のアクティブスキルを使って残りのメンバーを可能な限り強化し、その二人の内【硬拳士】ハードパンチャーの方はSTRを中心とした自己ステータス強化の必殺スキルを、【剣聖】ソードマスターの方は三つまで効果を指定して発動出来る魔剣型アームズの必殺スキルを全て自己強化に回す事で、現在のミカに匹敵するか一部は上回りがねない物理ステータスを得て攻撃を仕掛けたのだ。

「超級職でイキつてるとかムカつく！ 絶対にわからせる！ 《我が拳、巖となりて》！ 《ストーム・ストレート》!!!」

「最早わからせの為に時間をかける余裕は無い！ せめて苦しませずに斬り捨ててやろう！ 《レーザーブレード》!!!」

『余り強い言葉を使うなよ……弱く見えるよ？』

片方が【硬拳士】の奥義で拳の攻撃力を増した上でスキルにより加速込みで超音速での正拳突きを放ち、もう片方も光熱を纏わせた魔剣を超音速で振るってミカを攻撃する……が、それらの攻撃の軌道を彼女は全て“直感”によって先読みする事で回避していく。

「何故だ！ 何故攻撃が当たらない!?？」

『高いステータスによるごり押しだけじゃね。お兄ちゃんやミユウ

ちやんと比べれば技量が足りないから、私程度に動きを先読みされるだけで回避されるんだよ』

「何を!?？」

実際の所、彼等のへメスガキわからせ隊の戦術は状態異常を始めとする敵へのデバフと自分達へのバフを併用する事で徹底的に有利な状況を作り出した後、その優位でマウントを取りながらじっくりと時間を掛けて相手をわからせると言うものであり、故に同格の相手と戦う技量は決して高くは無いのだ。

……最もここまで攻撃を回避出来るのは「直感」によつて完全に攻撃を先読み出来る事と、ミカ自身の技量が兄や妹と比べると劣るとは言えデンドロでへU B Mを始めとする強敵と戦つて来たお陰で相応に高かつたからなのであるが。

「だが、そちらも防御と回避で精一杯の様だな！」

「このまま攻め続ければわからせられる!!」

『……まあ、やっぱり攻撃を先読み出来るだけじゃ、回避はともかく反撃は本人の技量と戦術眼次第になるんだよね。……お兄ちゃん達ならどうとでもなるんだろうけど、私程度じゃこの状況だと防戦一方かな』

とは言え、流石に自身と互角のステータスを持つ相手に二体一では「直感」による先読みがあつても反撃に移る隙を見出せずに防戦一方になってしまつていたが。防御に使っている「ギガス」も《戦棍強化》レベルEXで強度を倍加させているとは言え、相手の攻撃力が高過ぎて傷が付き始めているのでこのままでは彼女に不利な状況になるだけだろう。

『……まあ、それは私が一人で戦っているならだけどね』

「……《ヴァイパー・アロー》《ピアースアロー》《光炎之矢》」

「なびやつ……」

「何イ!?？」

ミカがそう言った直後、五本の光の矢が複雑な軌道を描いて指揮を執っていたリーダーの頭部や胴体部の急所へと次々と突き刺さり、付加されていた『貫通力強化』の効果もあつて頭部や心臓などの主要臓

器を撃ち抜いて絶命させたのだ。

……言うまでもなく、それを行なったのは先制攻撃をした後は後方で“作業”を行なっていたひめひめである。

「とりあえず指揮官であるバフの大元を先に潰すのはお約束でしょう。……それと向こうに居たそのHENTAI共の別働隊はミュウちゃんとアリマが潰したそうよ」

「なっ!?? 気づいていたのか!??」

『まあね。派手に暴れて注意を引きつけた甲斐があつたつて訳よ』

実は今回へメスガキわからせ隊には姿を消して接近していた部隊の他、有利な状況で調子に乗ったメスガキを戦況を逆転させてわからせる為の援軍役として後方に別働隊を配置していたのだが、探知範囲が非常に広いミュウの《人間探知》によってこちらを伺っている者達が居ると看破され、ミカが暴れている隙にこつそりと向かったミュウとアリマの二名に討伐されていたのだ。

ちなみに二人が他のへメスガキわからせ隊の目を掻い潜った方法はアリマの場合はひめひめに光学迷彩を掛けて貰っただけだが、ミュウの場合はミカに注意が行っている間に自前の気配遮断（技術）で敵の死角に潜り込んで誰にも気付かれずに後方の部隊へ奇襲を掛けるというものだったりする。

……コピースキルにより物理戦闘型超級職のステータスを得ているミュウと全力の狂化スキルによって自己強化されているアリマの二人に奇襲されれば、サポートメインで本隊程の戦闘能力が無い別働隊ではどうしようもなく潰されたという訳である。

「さて、こつちもそろそろ終わらせるわ……《イリユージョン・アバター》」

「なっ!?? 分身しただと!??」

「落ち着け！ 只の幻術だ！」

実に面倒そうな雰囲気のみめひめが行使したのは他者の実体の無い分身を作り出す幻術であり、それによってミカが一見五人に増えた様に見えて彼等は一瞬戸惑ってしまった……所詮は外見だけが同じなだけの幻術なので冷静に時間を掛ければ見破る事が出来るのだが、

リーダーがやられた事でバフが切れてステータスが落ちていた彼等にとつてその一瞬の戸惑いは致命的だった。

『はい隙あり《インパクト・エクスプローダー》!』

「オゴバアツ!?？」

まず、ミカが幻影の拳を振り上げて空振りした【硬拳土】の横腹に【ギガス】を叩き込み、打撃によるダメージに付随して発生した衝撃波の炸裂によつて内臓を破壊して致命傷を与えた。

ちなみに彼は【救命のブローチ】を付けていたが《バリアブレイカー》によつて効果が弱められていた事と、そもそも強化されたステータスによつてギリギリ死んでいなかったので発動せず放置しておくだけで死亡する状態になっていた。

「まあ、ダメージで動けない所をキチンと複数回殴つて始末しておくけど」

「ぶびっ! ぶべらっ!?？」

「くそうっ! こうなつたらお前だけでも!!!」

「あら、私が狙い? ……舐められたものね《ハウンドアロー》《爆裂之矢》!」

しかし、もう一人の【剣聖】はミカが念入りにトドメを刺している隙に、後方で援護していたひめひめに狙いを変えて全速力で突っ込んで行つた。それに対してひめひめも視線誘導の効果を付与した爆発矢を相手や地面に向けて放ち、爆風によりノックバックを狙いながら牽制する。

……だが、覚悟を決めたのか【剣聖】は強化された物理ステータス任せに爆風に耐えながら彼女に向けて突っ切つて来たのだ。

「うおおおおお! わからせえええ!!! 《ストーム・ストラッシュ》!!!」

「……この国つてどの変態も根性だけは立派よねえ……」

更に【剣聖】はスキルによる加速も合わせて遂に超音速を超える速度となり、放たれる無数の矢を掻い潜つてとうとうひめひめに必殺の斬撃を放つてみせた。

「……仕方ないから【ブローチ】はくれてあげる。《フラッシュ》」

「がつ！ 目が……」

だが、ひめひめは呆れた様子ながらもその斬撃を敢えて致命傷になる部分で受ける事で「救命のブローチ」を発動される事で凌ぎ、更にゼロ距離から相手の顔に向けて魔法による強烈な光を浴びせて怯ませつつ「盲目」の状態異常にしながら距離を取った。

それでも諦めずにメスガキの気配を感知して剣を振るう「剣聖」だったが闇雲に振るわれる剣を回避するぐらい歴戦のひめひめにとっては訳無く、反撃として貫通力を強化した《閃光之矢》で手足や目を撃ち抜いて戦闘能力を確実に削いで行く。

「ブローチ」を発動させない様に撃つのも面倒ね」

「声が……そっちなか！」

「残念外れ……《シャツフル・ミラージュ》で声と気配の発生点を誤魔化したりもしてるのよね。……もう終わりだけど」

『……やつと追いついたよ《インパクト・スマツシャー》!!!』

「がひゅっ!?？」

そんな風に「剣聖」がひめひめに翻弄されている間に「硬拳士」を始末し終えたミカが追いついてしまい、最後には背後から振り下ろされた身代わりスキルすら減弱させる「ギガース」により「ブローチ」が発動する事すら無くミンチにされたのだった。

『ゴメンねひめひめさん、まさかそっちに行くとは。仲間を助けるか散々挑発した私を狙うかでこっちに來ると思ったんだけど』

「レジエンダリアの変態の根性は色々は無駄にアレだからね、気にしなくていいわよ。直ぐに仕留められなかった私にも非があるし、「ブローチ」はまた手に入れればいいわ。……疲れたでしょうけど、とりあえずアリマ達を迎えに行きましょう」

そうして突発的に始まった戦闘を終わらせた彼女達は疲れた様な雰囲気漂わせながらも、別働隊を血祭りに上げていたミュウとアリマを迎えに森の中を歩いて行ったのだった。

討伐クエストside兄

□〈へ巨妖樹の森〉【高位従魔師^{ハイ・テイマー}】レント・ウイステリア

麗都南西部に位置する〈へ巨妖樹の森〉に現れたと言う【アフオレスト・マギロード・ゴーレム】及びそれが生み出したゴーレムの討伐依頼を受けた俺は、経験値稼ぎのクエストの続きも兼ねてティアモと三人娘……それで何故かついて来たアマゾネス族長にして^{スベリオルジョ}超級職^{エンブレス}【女帝】レイソア氏とパーティーを組んでいた。

……いや何で？　って俺も思うんだが『一応アマゾネスの危機だから私が自ら出陣するのは自然だろう？　それに孫の成長ぶりも見たいし』と言って押し切られてしまった。

『『『Poison Body』GOAAAAA!!』』』

【プランティング・ポイズンゴーレム】……あからさま毒持ちだし接触は危険か。クルエラン、やれ」

『GOO!』

まあ、今は戦闘中なので余計な考え事は後にするが……とりあえず近付いて来たあからさまに毒々しい色合いの液体を体から滲み出してるゴーレム三体には、金属故に腐食系以外の病毒が効かないクルエランを当てる。敵は三体だが【巨像職人^{ゴロッサス・マイスター}】の《戦像強化》と【高位従魔師】の《魔物強化》でステータスが倍近くなってるし大丈夫だろう。

「ネリルは俺と一緒にクルエランを援護、ヴォルトはあちちで群れる【プランティング・ウッドゴーレム】を一掃してくれ。《フリーズ・ジャベリン》」

「ふむ、了解したぞい《ロック・グレイヴ》」

『承知、雑魚の掃討ですね《サンダー・スマッシュャー》!』

『『『GOGAAAAA!?!?』』』』

幸い相手は腐食系の攻撃は使ってこなかった様で大したダメージを受けていないクルエランを援護する為に俺が冷気の槍を【ポイズンゴーレム】の一体に打ち込んで凍結させ、残り二体にネリルが地面を操作して作り出した複数の石の杭が突き刺さる。

更に別方向から来た多数の下級ゴーレムは攻撃範囲に優れたヴォルトの雷撃で消しとばされた。バフが乗った純竜級であるヴォルトの前では下級モンスターが幾ら集まっても大した敵じゃないし、得意とする雷属性魔法は制御が難しくフレンドリーファイアが多いから前衛の支援には向かんしな。

「ほーら、バフを私自ら掛けてやったんだから頑張れよー」

「3人とも上級職に就けたんだし亜竜級のゴーレムぐらいは倒さない」と

「いやまだ就いたばかりでレベル低いんですけど!」

「攻撃が重い! しかも硬いし!」

「ゴイツ亜竜級の中でも強い方じゃない? ……純竜級に近い気がする」

『G A A A A A A A A A! 『Wood Strike』!!』

そして別の場所では亜竜級の「プランティング・ブラックゴーレム」とアマゾネス三人娘が、後ろでバフを掛けてるレイソア氏と偶に邪魔してくる下級ゴーレムを雑に斬り裂いて排除しているティアモの二人に見守られながら割と必死な様子で戦っていた。

……確かカチュアがストロング・ソードマン【剛 剣 士】、エスカがガーディアン【守護者】、シャニーがグレイト・ボウハンター【大弓 狩 人】に就けたと言っていたな。

『Kinetic Regist! GOA!』

「物理防御魔法!?? こっち物理攻撃しか出来るヤツが居ないんだけど!」

「矢が通らない……」

「ど、どうすれば……!??」

『《アマゾネス・ウォーマーチ》《アマゾネス・ウォーディフェンス》……ほれ、バフは掛けてやったから何とかなるだろ」

「アマゾネスは物理型が殆どだから物理耐性持ちに弱い……故にそう言った相手と相対した時の戦い方も学んでおく必要がある」

「「ひくん!??」」

……まあ、後ろの二人が見守っている間は三人娘も大丈夫だろう。上級職に就きたてで亜竜級上位レベルのモンスターと戦わせるのは

かなりのスパルタだと思うが、以前の「グリムリープ」の一件で麗都の主力戦力が減ってしまっているから次代の戦力を出来るだけ早く育てたいと言っていたし。

とりあえず彼女達が戦っている間に近づいて来る敵ゴーレム達をどうにかするか……って、ネリルから教わった探知技術と《レイライン・サーチ》の組み合わせを使ってみたら思ったよりもこっちに來てるゴーレムの数が多いな。

「下級モンスターレベルのゴーレム27、亜竜級レベルのゴーレム6……数が少し多いな。……済まんがそちの指導はもう終わらせてほしい。『本命』が近いのかどうも敵の数が多い」

「ほう、成る程……やはり優秀だね。出来ればウチに欲しいもんだが。

《瞬間装備》」

そう言いながら恐らくは【ヒビイロカネ】製であろう大型の斧ハルバード槍を取り出したレイソア氏は、そのまま大体俺よりも遥かに早い——音速の五倍程の速度で「ブラックゴーレム」に接近して一瞬にして胸部のコア毎ゴーレムを両断してみせたのだった。

……分かつてはいたがやっぱり超強いなあの人。俺でも辛うじて目で追えるぐらいの速度だったし、斬撃の鋭さから技量の凄まじさも伺える。『私が戦ったら一瞬で決着が付いてしまうし雑魚相手では出る気は無いよ』って最初に言っただのは伊達じゃないな。

「ほら、ボサツとしてるんじゃないよ、どうやら大軍さんのお出ましまいたいだからね。数は私が適度に減らしてやるから頑張りな」

「いや、私達さっきの戦闘でダメージが……」

「《魔法多重発動》《ファイブスヒール》……とりあえずHPはこれで良いか」

「MP・SPは各々ポーションを使って。……数が多いから私も戦うし頑張つて」

「……はい……」

そうしてお疲れ気味の三人娘を回復させた所で、俺達はぞろぞろとやって来たゴーレムを迎え撃つ事になったのだった……まあ、レイソア氏が半分近くを即座に殲滅してくれたお陰で楽に片付いたけどね

!

◇

「……やっと終わった……」

「あばー……」

「疲れた……」

「ふむ、ここまでゴーレムが多いと『本命』が近い感じかねえ」

「とすると少し消耗し過ぎたかな。今の内に回復しておきたいけど……レント、周りに敵は？」

「探知した範囲にモンスター及び人間の反応は無いな。……ヴォルトやネリルの探知でも危険は無さそうだし、しばらく休むぐらいは何とかなるだろう」

戦いが終わった後に一通り周辺を探知した俺がそう言うと、ティアモと三人娘は身体を休ませつつ減ったHPなどを回復させる為にポーションを煽った。ちなみにレイソア氏はアクティブスキルを一切使わず被弾もしなかったので回復は不要な様だ。

……とりあえずクルエランは結構ダメージを受けてるから《ゴーレム・リペア》で回復させて、ヴォルトにも【MP回復ポーション】与えておくか。ネリルはダメージ受けてない上にレジエンダリアなら《自然魔力吸収》のパッシブスキルで回復出来るだろうから問題ないな。

「しかし、レントは戦闘も魔法も回復もモンスター使役も出来るとは優秀だね。おそらく《エンブリオ》の効果で多数のジョブに就いているんだろうが、それらのスキルを十全に使っているのは本人の才覚故か。ティムモンスター達も粒ぞろいだしね」

「ありがとうございます。ヴォルト達に関しては巡り合わせが良かったので」

ヴォルト達を回復させた後、ポーションと特典武器であるズボン【創像地衣 クルエラン・コア】の《レイライン・アブソープ》でMPを回復させていたら唐突にレイソア氏に話し掛けられたので無難な

回答をしておいた。

……もうアマゾネス恐怖症は治ってるけど、これまでも主にティアモとの関係について根掘り葉掘り聞かれたので少し彼女には苦手意識があるんだよなあ。後、これまでデンドロで出会ったティアンの中ではリヒトさんと並んで強者オーラが凄いし。

「むむ、ちよつとしつこく聞き過ぎたか……それでティアモ、妾になるアプローチは上手く言っているのかい？　こうして狩りに誘えるんだから悪い様にはなっていないみたいだが……本命にはなれそうかね」「とりあえず気軽に話せる友人ぐらいには仲良くなつた。……後。正妻枠に入るのはひめひめさんの正妻力が高過ぎて絶対無理。今回のパーティーでも『その程度で私とレントの関係がどうこうなる事は無いから気にする事は無いわよ』と特に気負つた様子も無く言われたし」

「幼い見かけによらず威風堂々とした正妻の貫禄があつた」

「何があつても自分と彼の関係は変わらないと確信してる圧倒的な女の強さがあつたよ！」

「実はレントさんが少女趣味なだけとか……」

「待て、俺は別にロリコンでは無いぞ。そもそもひめひめがロリなのはこの世界でだけだ」

流星にレジエンダリアによく居るHENTAIロリショタと同列扱いは不本意なので、デンドロに於ける〈マスター〉のアバターの話を含めて詳しく事情を説明する羽目になった。クツソ精神的に疲れた。

……後、それを見てネリルがニヤニヤしてるのもちよつとイラツと来た。お前どんどん俗っぽくなってるよな……と、思っていたらネリルが唐突に何かに気が付いた様に顔を上げた。

「ふむ？　……マスター、どうやら本命が来た様じゃぞ？」

「何？　《レイライン・サーチ》……特に反応は無いが、何か偽装か隠蔽を行なっているのか？」

「うむ正解じゃな。相手は地面と森そのものに偽装している上、自然魔力の操作で地脈の流れまで正確に擬態しているから《レイライン・サーチ》起点の探知では相性が悪いじやろう。よく見れば通常の地脈

「あのぐらいなら可愛いものだろう？」

まあ、動揺する三人娘の気持ちも分からんでもないが。【アフォレスト】の見た目は様々な木々が生い茂った大地が数十メートルの人型となっていると言うサイズ差的にもインパクトの強い外見だし。ステータスはHP・MPが三十万越えと非常に高く、STRとENDも一万近いと高い上にバフまで掛かっていると相当なものだし。

今まで戦って来た^{ユニーク・ボス・モンスター}へU B M達よりも単純なステータスや戦闘能力では上回りそうだな。サイズ差に関しては昔『友人』と似たような大きさの「怪獣」と戦った事があるから気にならないが。

「あの時と違って「変身」も「巨大化」も出来んが……まあ、^{デンドロ}今現在の俺なら戦えない事は無いだろう」

「向こうもやる気満々みたい。こつちを見てる」

『GOOOOAAA!!!』

「自分が制御を握ってる筈の地脈越しの攻撃にプライドを傷つけられたか？ ……ハッ、貴様の技量が未熟なのが悪い」

立ち上がったからこちら——ネリルの方を睨みつけていた【アフォレスト】だったが、そんな彼女の挑発に怒ったのか周辺の自然魔力を急速に吸収しながら頭部に周囲の光を集め始めた。

『GOOOO……』

「アレは^{フラッシュユマンサー}【閃光術師】の奥義《グリント・パイル》。しかも自然魔力の上乗せで威力を大幅に引き上げてるか」

「ちよ!?? 早く逃げないと……!」

「いやアレは光魔法を発動寸前の状態で待機させて、発射時にだけ射角を調節するタイプになっておるな。下手に動くと移動先を光速で撃ち抜かれるぞ」

確かにネリルの言う通り【アフォレスト】は光球を作り出してこつちを睨みつけている。発動に時間がかかり発射タイミングや方向も読まれやすい光属性魔法を運用する技術の一つと以前ネリル自身が言っていたな。かなり高度な技術らしいがそんな事が出来るレベルの技量は持っていると言う事か。

「それじゃあ避けられないの!??」

「いや、向こうのAGIを上回っていれば避けられん事は無いだろうが……ネリル、今回挑発したのはお前なんだしお前が防げ」

「まあ良いじゃろう」

このままバラバラに動き回ればAGI的に俺とティアモとレイソア氏は避けられるだろうが三人娘が怪しいしな。ここは責任を持ってネリルに任せるか。

「どうせネリルが防ぐからそこまで焦らなくていいぞ。危なそうならクルエランの後ろにでも隠れてればいいから」

「は、はい！」

「随分信頼してるんだね。……一応、発射するタイミングを見極めて動けば避けられるかな」

「いや、光球を明滅させてタイミングを凶られにくくもしているな……まあ撃たれても私なら問題は無いが、ここはお手並み拝見と行くかね」

『GUUUU……《Glint Pile》!!!』

念の為に防御体勢を取らせたクルエランの後ろに三人娘を待機させた直後、不敵な笑みを浮かべて前に出たネリルに向かって「アフオレスト」が極太の輝く杭を光速で打ち出し……。

「《シャイン・リフレクション》……発射タイミングが丸わかりじゃ」
『GUUUUUUUUU?』

その直前にネリルによって展開された光属性反射魔法障壁で光の杭はそっくりそのまま跳ね返され「アフオレスト」の頭部を撃ち貫いた……おそらく向こうが《グリント・パイル》を使って来ると分かった時点で、こちらも反射魔法を発動寸前の状態で待機させておいたんだらう。

「自分を狙わせれば反射角の調節も簡単だろうしな。……さて、顔面を撃ち抜いても生きてる……と言うか再生までしてるが、やっぱゴレムだしコアを破壊しないとダメか」

「でも流石にあれだけのダメージを与えたのならしばらくは動けないだろうし今の内に『Purge Magi Trent』!…….』…….』
「思ったけどそうでも無いみたい」

ダメージを受けて動きが止まった「アフォレスト」だったが、その身体に生えた木々を切り離して木製ゴーレムへと作り変えて自身の守りに付けたのだ。回復までの時間を稼ぐ気か。

「配下を増やして守りを固めて来たか。今の内に接近してコアを砕こうと思っただけど……」

「まあパージ系スキルは基本奥の手じゃからアレも相当に追い詰められているだろうよ。ダメージでしばらく動けないのは事実じゃろうし」

「とは言え、回復されれば面倒な事になるだろうから早めに倒さねば」「ま、今回は私も戦うからそこまで焦る事はないさ。……どうもアレはゴーレム系モンスターにしてはかなり知恵と技量に長けてるみたいだし、このまま放置しておいたら麗都に被害が出るかもしれないねえ。アマゾネスの長としての仕事をさせて貰おうか」

そうして先程までの観戦気分と違い完全に自分達への脅威となる対象を打ち倒すと決めて臨戦体勢になったレイソア氏を筆頭として、俺たちはこのクエストのボスモンスターである「アフォレスト・マジロード・ゴーレム」へと戦いを挑む事になったのだった。

【女帝】の力

□〈巨妖樹の森〉

『G O O G O O ……』《B o o s t e d T r e n t o S t r e n g
t h》《B o o s t e d T r e n t o E n d u r a n c e》《B o
o s t e d T r e n t o A g i l i t y》『!!!』
『!!!G O O O O O O O!!!』

自身の攻撃を反射されて暫く動きが鈍る程のダメージを受けた【ア
フォレスト・マジロード・ゴーレム】だったが、即座に《甲殻剥離^パ・
魔樹霊^{マギトレント}》によつて配下である3メートル程の【プランティング・マジゴー
レム】を数十体生成。更にソレ等にバフを掛けて亜竜級上位レベルま
で物理ステータスを引き上げて、自身を脅かす敵を排除する為に進撃
させた。

また、周囲の自然魔力を吸収する《マジ・アブソープ》で消費した
MPを、周囲の木々から生命力を吸収する《ジオ・ドレイン》で減少
したHPを回復させるなど、いきなりの大ダメージに対しても間違い
なくその状況に於いて「最善の行動」を取つて敵を迎え撃とうとし
ていた。

「流石に完全回復されると少し面倒な事になるねえ。……仕方ない、
ボスの【アフォレスト】は私が倒すから、それまで配下のゴーレムの
足止めを頼むよ」

「ん、了解」

「分かりました」

……ただしそれは、このレジエンダリアに置いて最強の個人戦闘型
である【女帝^{エンプレス}】レイソア・ウル・ヒュポレを敵にしてはいなければ
話であつたが。

彼女はティアモとレント（後三人娘）に【プランティング・マジゴー
レム】の足止めを頼んだ後、瞬時にゴーレムの群れの眼前に音速の五
倍以上の速度で移動して手に持った【エンプレス・ハルバード】を振
りかぶつた。

「とりあえず道を開けて貰おうかね……《ブラスト・アックス》!!!」

『GOAAA!?』

そのまま五万を超えるSTRを基準として衝撃波を巻き起こすア
クティブスキルで10体程のゴーレムを薙ぎ払いながら粉々にし、そ
の直後に瞬時に跳躍しつつブーツ型の伝説級特典武器「硬空翔靴 マ
テリアル・ハイ」のスキルによって空中に大気を固体化した足場を作
り上げ、それを使って空を駆ける事で一気に「アフォレスト」へと接
近していった。

……STR・AGIと共に五万以上と言う^{スベリオルジョブ}超級職としても絶大な
ステータスを発揮しているレイソアであるが、そのメインジョブであ
る【女帝】のステータス自体は同じ前衛系超級職と比べても非常に低
く、長年【女帝】としてアマゾネスの長を務めて合計レベル1000
を優に超える彼女でもHP十万、SP五万、STR・END・AGI・
DEXが五千弱と言った所である。

『GO!?』 《High Kinetic Regist》!!!

「物理防御魔法か……だが緩い。《ピアース・スピアー》！」
……にも関わらず、彼女がハルバードによる突撃でENDが一万を
優に超え、更に防御魔法まで使っている【アフォレスト】を容易く穿つ
て風穴を開けているのは、【女帝】が有する『自身の女戦士系統のスキ
ル効果を配下の女戦士系統のジョブに就いている女性全てに適応さ
せる』パッシブスキル 《女帝の威光》^{エンプレス・マジエステイ}の効果によるものだ。

その効果を具体的に言うとな戦士系統のパーティー対象の全体バ
フを配下の女性全てに掛かり、パーティー内の女性の数に応じた自己
強化のパッシブスキルを配下の女性全ての数に応じて反映させると
いったもので、彼女の圧倒的なステータスも【女戦士】^{アマゾネス}のパーティー
内の女性人数に応じた自己強化スキル《アマゾネスの闘気》の効果を
これにより大きく引き上げる事によって成り立っている。

『GOAAA!』 《Stone Bullet》!!!

「おっと、自分の肉体の一部を飛ばして来たか。……何が仕込まれて
いるか分からんから普通に弾くし避けるが」

現在レイソアの配下であるアマゾネスの数は万を優に超えており、
元の【女帝】のステータスが低かろうがスキルレベル×対象人数%だ

け物理ステータスを強化するパッシブスキル《アマゾネスの闘気》の強化倍率が跳ね上がっている為にボスモンスター^のの圧倒すら可能なのだ。

ただし《女帝の威光》の効果範囲は配下が増えれば増える程に無尽蔵で拡大していく訳では無くスキルレベルに応じての限界があり、アクティブスキルの効果範囲はスキルレベル×500メートル内にいる配下のみ、パッシブスキルの対象人数も最大スキルレベル×10名までとなっている。

「そら、吹き飛ば《アックス・ウェイブ》！」

『G A A A A A A A A A !!?』

最も長年【女帝】を務めて来た彼女のスキルレベルは当然最大値の10であり、故にアクティブスキルの有効射程は5キロ。パッシブスキルの最大強化値はそれぞれのスキルレベルが超級職となった事により10となっているので10×100で+1000%。

……つまり現在の彼女のステータスはHP100万、SP 50万、STR・END・AGI・DEXがそれぞれ5万という規格外な値となっており、その一撃は数十メートルあるゴーレムを単なる衝撃波を発生させるスキルで容易く吹き飛ばす程になっているので充分過ぎるのだが。

『G I G I G I G I ! ! ! : : : : < L i g h t R a y > !!』

「チッ、光属性魔法による弾幕か。一発一発は下位魔法の様だから威力は大した事は無いが……」

その圧倒的なステータスにより後の個人戦闘型^{スベリオル}〈超級〉にも迫る戦闘能力を持つレイソアであるが、膨大な質量と防御魔法と自動回復、更に空を駆ける彼女に対して弾幕の如く大量の石弾やレーザーを撃ち込んでくる【アフオレスト】相手にはやや手間取っていた。

……勿論、このまま戦い続ければ普通に撃破は出来るだろうし、例えば彼女が切り札として有する神話級特典武具【殲滅光斧 ガンマレイザー】を使えば一瞬で【アフオレスト】を消滅させる事が出来るだろうが……。

【ガンマレイザー】は周辺環境への被害がデカすぎるから使えないの

よね。この〈巨妖樹の森〉は特殊な素材が群生してる麗都の産業に重要な場所だから「今後十年草木一本生えない荒地」にする訳にも行かないし……ま、配下ゴーレムとの戦いは下のティアモ達の実戦経験には丁度いいだろうし、他の攻撃用特典武器も使わず適当な時間を掛けて倒しましょうか」

そんな風にレイソアは地上で戦うティアモやレント達の様子を見て今後の行動を決めた後「アフォレスト」の攻撃を下に行かせない様に気を付けつつ、相手が放つ弾幕を「マテリアル・ハイ」のよる空中機動で回避しながら再びハルバードを構えて突っ込んで行ったのだった。



『『GOGOGO、GOGOGO……』』

「なんかめっちゃ来てますけど!?？」

「とりあえず先制攻撃で数を減らすか……《魔法射程延長》《魔法範囲拡大》《ホワイト・フィールド》！」

「了解了解……《アースイーター》」

『承知しました……《サンダー・スマッシュ》！』

地上では進軍してくる30体強の「プランティング・マジゴーレム」の軍勢に対して、レントが射程距離と効果範囲を増幅させた極低温の冷氣で、ネリルが地面に出来た亀裂にゴーレムを放り込んでから土砂で砕く事で、ヴォルトが角から放たれる雷の砲撃による先制攻撃をお見舞いしていた。

……だが、ゴーレムは全て「アフォレスト」からのバフを受けている上、甲殻剥離系スキルによって作られた謂わば「アフォレスト」の分体であるが故に劣化版とは言え本体のスキルも運用可能であり、攻撃に対する防御魔法などを行使して被害を抑えていた。

「全然矢が効いている気配が無いんだけど……」

「ふむ防御魔法が使えるなら纏めて薙ぎ払うのは難しいか……ネリル、防御」

「《ハイ・シャイン・レジスト・ウォール》つと」

『『『Light Ray』』』』

そして当然本体の使う攻撃魔法も分体は使用可能であり、反撃として何体かのゴーレムが光属性魔法によるレーザーを撃ち込む事すらして来た……最も発生までに時間のかかる光属性魔法だったので、発射される前にネリルが対光属性用の防御障壁を展開した事で全て防がれたが。

とは言え、上級職の奥義レベルの攻撃にも耐えられる上に魔法による遠距離攻撃も可能なゴーレム軍団が迫り来る光景はかなりの威圧感を持っており、それを見たアマゾネス三人娘は少し涙目になっていたぐらいだが。

「それでどうするのレント。向こうの婆様の戦いはまだ掛かりそうだし、流石に数十体のバフ付き亜竜級ゴーレムを纏めて相手取るのはキツイけど」

「別に正面から挑む必要も無いだろう、こつちの目的は足止めだし連中はバフ込みでもAGIはそこまで高く無いからな。引き気味に戦えば向こうの決着が付くまで持ち堪えるぐらいは出来るだろうさ。……それに危なくなればレイソア氏は瞬時に勝負を決めるだろうし」「流石はレント、気付いてたか。……ウチの婆様があの程度のモンスターに苦戦するとかあり得ないから。どうせ『数で負けている状況での足止めの経験が積めるだろう』とか思ってるに違いない」

「『ええ……』」

まあ、経験から来る観察眼に長けているレントと身内故に大体の思考を読めるティアモはレイソアの目的を大凡把握していたので、さして慌てる事なく遅滞戦術からの敵戦力の減少に舵を切った。

基本的には逃げ回りつつゴーレムからの遠距離魔法攻撃をネリルが防ぎつつレントとヴォルトが遠距離攻撃、近づかれたらクルエランとティアモが主軸になって一体つつ倒しながら切り抜けて再び離脱。アマゾネス三人娘はその隙を埋めるフォロー要員といった所である。

『『『Light Ray』』』』

『『『Earth Hand』』』』

「ウォールは継続しつつ、地属性魔法は《アース・コントロール》で干渉して相殺……しかし随分と機械的な駆動じゃな。おそらくページで作ったゴーレムは「アフォレスト」がセミオートで動かす使用なのじゃろうが」

「消し飛べ《クリムゾン・スファイア》……これまでの自立起動型のゴーレムと比べると行動パターンが単純に過ぎるな。おそらく本体がリアルタイムで指示する事が前提なんだろうが……そんな余裕は無いらしい」

そう言ったレントが見た先には空中を超高速で移動しながら「アフォレスト」をめった斬りにしているレイソアの姿があった。「アフォレスト」の方も防御魔法やレーザーで抵抗しているが、反撃は全て見切られた上で圧倒的なAGI差により回避され、防御魔法も防御スキル減衰の効果もある武器と高いSTRの前では焼け石に水の様だった。

それはともかく、お陰で敵や状況に応じて「アフォレスト」の指示で戦闘パターンを変えて連携する事が前提のゴーレム達は『敵を追い詰めて攻撃する』という戦闘パターンのまま切り替える事が出来ず、それ故にパターンを読んで遅滞戦闘に徹している彼等を倒しきる事は出来なかった。

『『G I G I G I G I G I ……《Physical Boost》！』』

「《タイタン・ブレイク》！ ……一体一体はそこまで強くないんだけど、囲まれると厄介かな」

『GOOOO!!』

「あ、ありがとうございます、クルエランさん！」

自己強化魔法を使った上で近付いて接近戦を挑んで来るゴーレムも何体かいたが、同じくネリルが片手間で施した強化魔法を受けたクルエランが壁となって足止めしつつ、ティアモが【剛竜剣】を振るって両断していく。

また、アマゾネス三人娘も【女帝】やネリルからのバフで強化された上で3人がかりで一体のゴーレムを攻撃する形で戦果を挙げてい

るが、やはりステータスと技術がまだ追い付いていない所為か壁役のエスカがゴーレムの打撃を受け切れずに転倒してしまい窮地に陥ってしまった。

「キャッ!?? 不味っ!??」

「エスカッ!??」

『GOOOO《Wood Stri サクリフェイス・バスタージャベリン《我が命を捧げ破壊の一投を》!!!
GOGAAAAA!??」』

だが、ゴーレムの拳が彼女に振り下ろされる直前、横合いから超音速で飛来した一本の白い槍がゴーレムのコアを貫いて粉々に粉碎した……その白い槍——アームズ系へエンブリオ〈「ロンギヌス」は直ぐに持ち主の手元に戻って行き、当然その先にはひめひめのパーティーメンバーであるクラリスと、彼女と今回のクエストを一緒に受けていたクロード・でいふえくん・シズカの姿があった。

彼等もこの森でのゴーレム討伐クエストに参加しており、偶々近くに居た所で巨大な「アフォレスト」を見てここまでやって来たのだ。

「おーい、レントくん！ 大丈夫ー！」

「明らかにボスモンだと分かるデカイヤツがいたから来てみたら知り合いが戦ってた……一応、聞いておくが援軍はいるか？ 横入りにはならないよな？」

「いや、正直言つて数が多くて面倒だったから援軍は大歓迎だぞ」

「じゃあとりあえず向かってくるゴーレムに壁を作って分断するか……《フリーダム・ランパード》！」

そうでいふえくんが手を翳した瞬間、ゴーレムの軍勢を大体半分ぐらいに分断する様に城壁型へエンブリオ〈「パラスアテナ」が展開される。そうして後ろのゴーレムを足止めしている隙に彼等は前方に居たゴーレムへと集中攻撃を仕掛けて行く。

「とりあえず動きは封じるぞ……《足引きの呪縛域》デイスレイション・ソーン《フリーズ・ジャベリン》！」

「よっしゃ今の内に攻撃……したいけど今日の「ロンギヌス」のスキルは全部使い切っちゃったんだよね。なので凍った相手に通常攻撃します《スラスト》！」

「《フリーダム・ランパード》……《フリーダム・ランパード》……《フリーダム・ランパード》……これでは出でてこれないな。《サジタリアス・アーク》！」

「それじゃあ壁の中にアンデッドを入れましょうね。《御霊顕現・亡霊召喚》【ギロチンスタッグ・スペクター】《ポルターガイスト》《怨念憎与》」

クロードがAGIデバフと凍結で動きを止めたゴーレムに対してクラリスが槍を突き込んで砕き、壁の向こうにいるゴーレムに対してはでいふえくんどが更なる追加の城壁を展開して取り囲み、更に空いている上から【インダイレクト・アーチャー曲射弓手】の奥義による弧を描いて放たれる弓矢の一撃が襲い掛かる。

加えてシズカが召喚した物体の切断に特化した亜竜級モンスター【ギロチン・スタッグビートル】の霊体アンデッド仕様を召喚し、更に物理干渉と【ザ・ヴェンジェンス崇神】のスキルでの怨念付与による強化を付与して壁の中にいるゴーレムへの攻撃を命じた。

「ふむふむ、物質破壊に長けた【ギロチンスタッグ】ならゴーレム相手にもいい感じに戦え……って、光属性魔法まで使うのね。流石に少し不利だし自爆させましょうか。《テッドリー・エクスプロジブ》」

「シズカさん、前衛ゴーレムがレーザーでそっちを狙ってますので下がってください。《グランドクロス》！」

「あらありがと。コイツら作られたばかりで『業』を溜め込んでないから【崇神】の力はイマイチ使い難いから、今までと同じで溜め込んだ怨念を使うしかないわ。《御霊顕現・亡霊召喚》【ブラッディベア・スペクター】《怨念憎与》」

「それでも十分に強いじゃないですか。後ネリルはシズカさんの防衛も頼む。《セイクリッド・スラッシュ》！」

「ホントに精霊使いが荒いのう……《ハイ・シャイン・レジスト・ウォール》」

その後もシズカは次々と霊体系アンデッドを壁の中へと送り込み、倒されそうになったら怨念を物理的破壊力に変換させて自爆させるを繰り返してドンドンゴーレムの数を減らして行く。彼女は怨念操

作に長けた【崇神】に就いた事で《斯の身は怨嗟の受け皿也や》に怨念を蓄積しやすくなったので、その使用にも大分遠慮が無くなっている。

まあ、本体が脆い事は一切変わっていないが、そこはレントが近づくゴーレムを排除したりネリルが追加で彼女の周りに防御障壁を展開する事でカバーしていた。

『GOA A A A!!』

「《ドラゴン・クロウ》！ ……カチュアは足の関節を狙って！ シャニーは胸のコアを！ エスカはフォロー！」

「了解！ 《ティバイド・ブレード》！」

「《カバームーブ》！ 《シールドパライ》！」

「コアは…そこっ！ 《ピンポイント・アロー》！」

援軍が来た事によって一人で複数のゴーレムを相手取る必要がなくなり余裕が出来たティアモは三人娘と合流、四人がかりで一体のゴーレムを集中攻撃して敵の数を減らす戦い方にシフトしていた。今もティアモが胸部を斬り裂いてコアを露出させ、カチュアとエスカが体勢を崩し、そこにシャニーが急所に当たった時に威力を大幅に上昇させる一射でコアを撃ち抜いて撃破していた。

…そうした彼等の奮闘もあり30体以上居たはずのゴーレムは次々と打ち倒されていき、やがて最後の一体をレントが《クリムゾン・スフィア》で焼き払った事で地上の戦闘は終了したのだった。

「よし、これでゴーレムは全部倒せたよな。次はようやくボスゴーレムの相手だ…誰か戦ってるみたいだけどまずは横入りにならない様に…」

「…ああ、悪いがクロード。多分俺達が出るまでもなく終わるぞ」

「こっちが片付いた以上は婆様を加減をする必要も無くなるし」

「…なんだもう片付いたのかい。じゃあコツチも終わらせるか《瞬間装備》」

そんな地上の様子を見たレイソアは武器を「エンプレス・ハルバード」から一本の黒い槍——古代伝説級特典武器【剋死无槍 デモンズトレード】へと切り替えた。

更に、次の一撃のみダメージを消費したHP分の固定ダメージに変更する。《相剋槍碎^{デモンストレード}》の装備スキルに五十万のHPを注ぎ込み、既に全身がボロボロになってまともに動けない「アフォレスト」のコアがある胸部に向けて突っ込んだ。

「じゃあな、ウチの子達の実戦経験には丁度いい相手だったよ」

『GU、G A a A A a A a A A A A A!!』

そうして彼女が「アフォレスト」の胸部に槍を突き刺した瞬間、それに込められたHPが五十万の固定ダメージへと変化して数十メートルの巨体を誇るゴーレムの肉体の数割を消し飛ばし、その範囲内にあったコアも消滅した事で「アフォレスト」は撃破された。

「……ええ……数十メートルのゴーレムを一人で倒すとかどんだけ……」

「アマゾネスの族長である超級職の人だってよ。……やはり超級職は色々と規格外だな」

「ティアンのヤバい組はホントヤバいわー（小並感）」

……そんなへマスター達の驚嘆と呆れの声を最後にへ巨妖樹の森で起こったゴーレム騒動と、それらの討伐クエストは終わりを告げたのであった。

掲示板回：限定イベントと……

□??地球 とある掲示板

◇◇◇

【招待状?】へInfinite Dendrogramのイベント情報
report7【限定イベント?】

1：名無しの空振術師「sage」：2043/11/11（水）

このスレはへInfinite Dendrogramのイベントに関する情報を書き込むスレです

イベント内容・イベントモンスター・イベント交換アイテムの質問
などご自由に

荒らしはスルー推奨

2：名無しの破砕者「sage」：2043/11/11（水）

建て乙

3：名無しの抜刀剣士「sage」：2043/11/11（水）

おつかれです

4：名無しの猛毒狩人「sage」：2043/11/11（水）

それでハロウィン終わった後に新イベの情報が入ったとか聞いた
けど

5：名無しの呪槍士「sage」：2043/11/11（水）

意見メールに対して全て『仕様です』としか言わない運営にしては
イベントのサイクルが早いな

6：名無しの剛弓士「sage」：2043/11/11（水）

それより情報はよ

7：名無しの白氷術師「sage」：2043/11/11（水）

>>6 うむ、先日パーティーでボスモンスターを倒したらこんなアイテムが手に入ったんだ

〔バトルロイヤル〕参加券〕

運営主催の特別イベント、〔バトルロイヤル〕への参加券。

この参加券を所有している者がログインしていた場合、十一月15日の〇〇時（プレイヤー出身地“時間”に専用のイベントエリアに転送される）。

この参加券は『獲得プレイヤー名』のみ使用可能。

8：名無しの空振術師「sage」：2043/11/11（水）

ふーん、アイテムゲットした人限定のイベントって感じかな

9：名無しの剣聖「sage」：2043/11/11（水）

うらやまC！

10：名無しの破砕者「sage」：2043/11/11（水）

YO☆KO☆SE!!!

11：名無しの赤龍道士「sage」：2043/11/11（水）

ちゃんと個人情報伏せてんのな

12：名無しの白氷術師「sage」：2043/11/11（水）

>>10 獲得した者しか使えず譲渡も出来ない仕様だったから無理

盗難系スキルでも奪取不可能な事は確認している

>>11 流石に掲示板に個人情報載せるのはNGなのでアイテム表示は一部変更してる

13：名無しの抜刀術士「sage」：2043/11/11（水）

イベント名がバトルロイヤルという事は呼び出されたへマスターへ
同士で戦う感じでしょうか

僕も手に入れたのですがそれなら面白そうです

14：名無しの高位操縦士「sage」：2043／11／11（水）
これから皆さんには殺し合いをしてもらいます

15：名無しの猛毒狩人「sage」：2043／11／11（水）
この形式だと他にも参加券ゲットしたヤツはいそうだけど持つて
る人挙手ー

16：名無しの雷忍「sage」：2043／11／11（水）
ノ

17：名無しの大魔王士「sage」：2043／11／11（水）
ノ

18：名無しの戦車操縦士「sage」：2043／11／11（水）
ノ

19：名無しの白氷術師「sage」：2043／11／11（水）
結構いるな

それとジョブを見るにおそらく全てのへマスターへからランダムで
当たってる感じか

20：名無しの抜刀術士「sage」：2043／11／11（水）
世界中からへマスターへが集まって戦い合うイベントですか
実に面白そうですねこの参加券

21：名無しの剛槍武者「sage」：2043／11／11（水）
成る程、つまりは他の国の強者と戦える訳だな！ 実に楽しみだ！

22：名無しの雷忍「sage」：2043／11／11（水）
腕がなるわね！

23：名無しの空振術師「sage」：2043／11／11（水）
うーんこのまるで水を得た魚のような頭天地

24：名無しの戦車操縦士「sage」：2043／11／11（水）
しかし思ったんだがこのチケット戦闘出来ない（マスター）に当たったらどうするんだろうな

25：名無しの呪槍士「sage」：2043／11／11（水）
>>24 ボスモンスター倒したマスターに当たるといいから
自動的に参加者はそれなりの実力者になるんじゃないか

26：名無しの赤龍道士「sage」：2043／11／11（水）
ボスモンスター倒したメンバーに生産職がいるケースもゼロじゃないだろうが

参加券のドロップ率的には考慮しなくてもいい確率じゃねえ？

27：名無しの戦車操縦士「sage」：2043／11／11（水）
>>25 いや、俺の参加券は十万里ルでガチャ回したら出てきた
んだけど

28：名無しの高位操縦士「sage」：2043／11／11（水）
なんだと!?!? これはやはりガチャを回さねば！

29：名無しの白氷術師「sage」：2043／11／11（水）
>>28 やめておけ、その先は地獄だぞ

30：名無しの剣聖「sage」：2043／11／11（水）

じゃあやっぱり参加者の戦闘能力にはバラツキがありそうなのかな？

31：名無しの大魔弓士「sage」：2043／11／11（水）
多分参加者はある程度運営が調整してるとは思うんだけどねー

32：名無しの破砕者「sage」：2043／11／11（水）
まあ弱い者がリンチに合うイベントとかつまらんだろうからな

33：名無しの剛弓士「sage」：2043／11／11（水）
参加者の戦闘能力に差は無いとは言わないけど

34：名無しの空振術師「sage」：2043／11／11（水）
デンドロが始まってもう四カ月、内部時間だと一年ぐらいだから結構差は出来てそう

35：名無しの高位陰陽師「sage」：2043／11／11（水）
やっぱり初期組が有利なのか

36：名無しの雷忍「sage」：2043／11／11（水）
ヤバイヤツは始めたばかりでもヤバイですわよ、リアルスキルとか

37：名無しの白氷術師「sage」：2043／11／11（水）
>>31 もしそうなら世界各地の有名マスターが集まって戦い合うイベントになるのか
気を引き締めて行かなければ

38：名無しの大魔弓士「sage」：2043／11／11（水）
まあへマスターだけのイベントなら気楽に行けるでしょ
……いつものティアンを巻き込む突発イベントより

39：名無しの戦車操縦士「sage」：2043／11／11（水）
周りが全員ぶっ〇しても問題ないマスターだしな

40：名無しの呪槍士「sage」：2043／11／11（水）
ううむ、今からボスモンスター狩りをすれば参加券が手に入るだろうか

41：名無しの高位操縦士「sage」：2043／11／11（水）
これから十万里ル十連ガチャやつてくる

42：名無しの猛毒狩人「sage」：2043／11／11（水）
オイオイ、死んだわアイツ

43：名無しの赤龍道士「sage」：2043／11／11（水）
まあ手に入ったら運が良かったぐらいに思っておけばいいだろうな

44：名無しの抜刀術士「sage」：2043／11／11（水）
では今から他の参加者の首を落とす準備をしておきましょう

45：名無しの大魔弓士「sage」：2043／11／11（水）
>>44 やだこの子怖い

46：名無しの剛槍武者「sage」：2043／11／11（水）
天地では挨拶の様なものだからな

47：名無しの空振術師「sage」：2043／11／11（水）
天地民がイキイキし過ぎてるな

48：名無しの剣聖「sage」：2043／11／11（水）
やっぱり修羅の国じゃん

49：名無しの白氷術師「sage」：2043／11／11（水）
運良く限定イベントのチケットを手に入れられたのだし色々と情
報を仕入れねば

50：名無しの雷忍「sage」：2043／11／11（水）
私をマンゾクさせてくれる強者は居るかしらね

51：名無しの大魔弓士「sage」：2043／11／11（水）
>>34 今思ったけどこれってデンドロ始まってから内部で一
周年記念っぽいわね



【鍵付き】 レジエンダリア紳士・淑女専用スレ part78 【鍵付き】
1：名無しの邪眼術師「sage」：2043／11／13（金）
このスレはレジエンダリア所属の「紳士・淑女」の為の掲示板で
す。

普段は自重している熱いパトス溢れる書き込みをしても構いませ
んが他者への批判や煽りはやめましょう。

あくまでスレ内ではっちゃけるのでありデンドロや現実ではきち
んと良識と常識に沿って行動しましょう。

364：名無しの追跡者「sage」：2043／11／13（金）

やはり《透視》《聞き耳》《隠密》は必須スキル

365：名無しの翠風術師「sage」：2043／11／13（金）

本日も孤児院でのボランティア活動を行って来たぞ

やはりロリシヨタの空気は汚れた俺を浄化してくれる

366：名無しの邪眼術師「sage」：2043／11／13（金）

>>364 影から推しを見守る為には当然スキルレベルもカンストさせるべき

367：名無しの高位精霊術師「sage」：2043／11／13

（金）

ふう、今日も【妖精女王】様は麗しかった……ライブ最高

368：名無しの司令官「sage」：2043／11／13（金）

うむ、やはり魔法少女の活躍を宣伝する為にはライブステージなどがあっても良いか？

いやあまりにそちらに偏りすぎると魔法少女の本分を忘れてしま
う事になりかねん

369：名無しの蛮戦鬼「sage」：2043／11／13（金）

今日は《迷いの森》を全裸疾走してきた

370：名無しの守護者「sage」：2043／11／13（金）

>>369 通報しますた

371：名無しの高位魔道具職人「sage」：2043／11／13

（金）

>>369 通報しました

372：名無しの高位呪術師「sage」：2043／11／13（金）

>>369 まあ人気のない場所でやってるなら好きにすれば良いとも思いますが

流石に人がいる場所ならパンツぐらいは履いた方が良いでしょう

373：名無しの畜戦鬼「sage」：2043／11／13（金）

>>372 流石に街中では上半身半裸で済ませてるぞ

いやあ装備さえしつかりとしてれば上半身裸で街を歩いてても文句言われない辺りデンドロは素晴らしいな！

374：名無しの大狩人「sage」：2043／11／13（金）

やだこのスレ変態しかない？

375：名無しの邪眼術師「sage」：2043／11／13（金）

>>374 つ鏡

376：名無しの大盗賊「sage」：2043／11／13（金）

今日のコップの縁は実にクリーミーな味だったまる

377：名無しの追跡者「sage」：2043／11／13（金）

ここに居るヤツ全員変態定期

378：名無しの怪盗「sage」：2043／11／13（金）

今日のロリの寝顔も美しかった

やはりロリシヨタの眠りを邪魔せず視か……もとい見守るには【怪盗】のジョブが最適だな

379：名無しの翠風術師「sage」：2043／11／13（金）

真面目に怪盗やってるヤツに謝れ

380：名無しの助産師長「sage」：2043／11／13（金）

うむむ、やはりへマスターとティアンの子供を作るのには色々

クリアせねばならん要素多いな

381：名無しの守護者「sage」：2043／11／13（金）
え？ マスターとティアンで子供って作れんの？

382：名無しの高位粘体師「sage」：2043／11／13（金）
そこんところ詳しく！
そんな方法があれば私もスライムちゃんの子供が!!!

383：名無しの邪眼術師「sage」：2043／11／13（金）
いやティアンじゃなくてモンスターじゃん

384：名無しの高位呪術師「sage」：2043／11／13（金）
ああ、確かアマゾネス部族の一部で研究されているのでしたな

385：名無しの助産師長「sage」：2043／11／13（金）
>>381 理論上は可能だが現実的には非常に難しい
>>384 うん、アマゾネスとマスターの恋仲が増えたから依頼を受けたの

386：名無しの高位精霊術師「sage」：2043／11／13
（金）
つまりドユコト？

387：名無しの助産師長「sage」：2043／11／13（金）
まずマスターとティアンで子供を作る事は“生物学的”には可能
だ

検査の結果マスターの精子でティアンの卵子を妊娠させる事が出
来る様だしな

少なくともこれまでの調査結果ではマスターとティアンに生物学
的な違いは無いと結論されてる

388：名無しの助産師長「sage」：2043／11／13（金）
ただ問題はマスターがログアウトした時点で体液（精液）も消えるんだよな

ログアウト時の処理としてマスターの切り離された肉体とかも消滅する仕様だから

389：名無しの大狩人「sage」：2043／11／13（金）
つまり中〇しした精液がログアウトで消えるから子供が作れないと

390：名無しの守護者「sage」：2043／11／13（金）
つまり俺がロリシヨタと遊んだ後『ちよつとトイレ』した時にログアウトすれば証拠は消える……？

391：名無しの高位精粘体師「sage」：2043／11／13
（金）
→クツソキモい

392：名無しの邪眼術師「sage」：2043／11／13（金）
→スライム姦志望が何か言ったら

393：名無しの高位呪術師「sage」：2043／11／13（金）
つまりマスターとティアンの間で子供を作るにはマスターが子供が出来るまでログアウトしなければ良いと

……普通のマスターには難しいですな

394：名無しの助産師長「sage」：2043／11／13（金）
一応マスターの一部が食われた後にログアウトした場合にも食った物が相手の体内から消えるけど

消化されて相手の肉体の一部になった場合は栄養やらがログアウト

トして消える事は無かった

395：名無しの助産師長「sage」：2043／11／13（金）
だからマスターの精子が受精した卵子は『一つの命』となるまでロ
グインし続ければ妊娠は可能だと仮説が立てられた

どの段階で『命』と判定されるかは現状調査中ではあるが少なくとも
もそれなりに時間は掛かる様だ

396：名無しの翠風術師「sage」：2043／11／13（金）
まあ普通のマスターでも丸一日ログインし続ける事も難しいだろ
うからな

397：名無しの追跡者「sage」：2043／11／13（金）
デンドロが三倍時間でも丸一日ログインすれば現実では8時間経
過だもんなあ

398：名無しの高位粘体師「sage」：2043／11／13（金）
もし一週間以上はログインし続けなければならぬとかなら普通
は無理よね

399：名無しの大狩人「sage」：2043／11／13（金）
卵子が『命』として確立される時間を短くするとか出来んのか？
成長促進系スキルとか結構あつた筈だけど

400：名無しの助産師長「sage」：2043／11／13（金）
>>399 理論上出来なくは無いが一番デリケートな時期の母
子に使うのはリスクがある

試算では生物として頑丈なモンスターならともかく人間だと障害
や流産とかの可能性が高そうだ

401：名無しの助産師長「sage」：2043／11／13（金）

そもそもいくつかの生物の成長促進系ジョブスキルも効果がそこまで劇的では無いし

エンブリオのスキルで強化すると前述のリスクが高まる恐れがある

402：名無しの高位精霊術師「sage」：2043／11／13
(金)

じゃあマスターがログアウトしても精子をそのままに出来る手法とか

403：名無しの助産師長「sage」：2043／11／13 (金)
>>402 そちらの線でも研究中だが未だに方法は見つからない

何しろデンドロのシステム面での話だからな

404：名無しの守護者「sage」：2043／11／13 (金)
まあ難しいか

405：名無しの助産師長「sage」：2043／11／13 (金)
勿論千差万別のエンブリオなら出来るヤツもあるかもしれんが
我ら研究チームは妊娠出産生命活動に関わるエンブリオ持ちはいつでも歓迎だぞ

このレジェンダリアならそんなエンブリオを持つてるヤツも一定数いるだろうからな

406：名無しの高位呪術師「sage」：2043／11／13 (金)
まあエンブリオはマスターのパーソナルから生まれますからな

407：名無しの追跡者「sage」：2043／11／13 (金)
まあ居るよねww

408：名無しの邪眼術師「sage」：2043／11／13（金）
他国マスターからは『変態の国』とか呼ばれてるし（事実）

409：名無しの翠風術師「sage」：2043／11／13（金）
ちゃんとまともなマスターもいるよ
このスレにはいないけど（笑）

410：名無しの高位粘体師「sage」：2043／11／13（金）
私が見た限り性癖がアレなのは全体の半分ぐらいかなー
んでオープンにしてるのが全体の1割ぐらい

411：名無しの追跡者「sage」：2043／11／13（金）
つまり四割はムツツリwww

412：名無しの助産師長「sage」：2043／11／13（金）
俺は真面目に生命の神秘を研究してるだけなんだがな
保健体育の教科書の文面に興奮するぐらいだ

413：名無しの大狩人「sage」：2043／11／13（金）
もうちよつと隠せ

竜の少女の歩む道

□〈麗都アンティアネラ〉ドラゴン・ファイター【竜 戦 士】ティアモ・ウル・ヒュポレ
……自分で言うのもアレだが、私——ティアモ・ウル・ヒュポレと
言うアマゾネスは割と恵まれていた方だと思う。

『さて！ それじゃあ今日も剣の訓練をしましょうか！』

『そうだな、この世界で生きていくのに力はいくらあっても足りん。
剣竜的には最低限一人で自立出来る程度の腕を得るまでは鍛えるつ
もりだ』

『分かった』

快活で明るくアマゾネスでも最高の剣の使い手である【剣 姫】ア
ミティア・ウル・ヒュポレ、寡黙だが私を気遣ってくれた優しさを持
つ古代伝説級^{ユニーク・ボス・モンスター}へU B M〈【剣竜王 ドラグソード】ヴィルティウ
ス。

この二人を両親に持つ私は生まれながらにして他のティアンと比
べても高いステータスと竜の尾と角を持ち、その力を使いこなす為
に幼い頃から神域の剣技を持つ二人からの剣技の指導を受けるとい
う、この世界のティアンとしては非常に恵まれた生まれであると言
えよう。

『その年から剣の修行とはの。まあ別に構わんのだが花嫁修行もして
おきな、お前みたいに家事全滅とかだと嫁の貰い手がいなくなつたり
するだろう？』

『げっ、ババア……け、剣の腕があればステキな旦那さんぐらい手に入
れられるし（震え声）』

『まあアミティアの剣の腕に惚れた俺みたいな男もいるしな。……そ
れはそれとして食い物は美味しい方がいいが』

『父さんの料理は美味しいよ。……母さん？ 不味い』

『Σ（。D。 ー ー）』

曾祖母も竜王とのハーフである私と普通に接してくれたし、他の親
戚や友人ともまあ普通に遊んだりしていたと思う。そもそもこのレ
ジエンダリアでは尻尾と角ぐらいは珍しいものでは無いし、それこそ

非人型範疇生物とのハーフだって少しはいるからね。

……そんな風に幼い頃の私はこんな少し変わった、でも普通で楽しい日々が続いていくんだと思っていただけ……。

『……と、父さん……私を庇って……』

『子供が独り立ちする前は命を賭けて守るのが剣竜の掟だ。……しかし、俺が纏っていた対魔法耐性特化の《竜王気》すらも抜いて来るとはな。あの光線による波状攻撃を全て剣で斬り裂くしか無い訳か。……アミティア、そちらは？』

『私達家族とティアモのお付きで近くにいたから貴方がついでに庇えたマリエ以外は全滅ね』

『申し訳ありません……それよりアミティア様、ヴィルティウス様、早く治療を……』

『無駄よ……あの光線、単なる光属性攻撃じゃないみたい。掠っただけの私でも徐々にHPが削られているし、ステータス見たら【被曝】って状態異常が出てるわ。【快癒万能薬】も【高位霊水】も効かないし、むしろ回復魔法の【ジエム】を使ったら逆にHPが減った……回復阻害付きの特殊状態異常かそれに近いモノね』

そんな日々が終わったのはアマゾネス達が定期的に行なっている経験値稼ぎの為の遠征、今回は麗都からの距離も近いという事なので実践の空気を体感させる為にと両親が私も連れてきた時の事。

超級職と古代伝説級〈UBM〉がバックに居るので割と余裕を持って亜竜級モンスターを狩っていたアマゾネス達の前に突如現れたのは美しくも禍々しい光によって構成された人型のエレメンタル——神話級〈UBM〉【滅光核魔 ガンマレイザー】だったのだ。

『それにしても三十人以上いたアマゾネス達が一瞬で……』

『あの全身から放つ光線は一発一発の威力が超級魔法奥義にすら匹敵する上に連射までしてくる。速度も光属性故の光速で全身から放つから技の起こりも捉えにくい……俺でも防御と斬り払いに集中せねば直ぐにやられる』

『代わりに私が貴方の《破魔竜剣》を纏わせた一点集中型《ソード・アヴァランチ》で一度は細切れにしたのに、すぐさま本体っぽい光の塊

が虫の息だったアマゾネスに乗り移って再起動したわね。……その後、後に細切れにされた人間らしき残骸が落ちてたけど……』

『憑依型のエレメンタル……その手の相手も問答無用で斬り裂けるのが俺の《竜王気》の筈なんだが。おそらく相手は神話級、まだなにか固有スキルがあるんだろう。……攻撃自体は通ったのか今は大人しいが……』

いきなり現れた「ガンマレイザー」は全身から放つ光線によって自力で回避した母さんと、光線を斬り払った父さんに庇われた私達を除くその場にいたアマゾネス達を瞬時に絶命させたのだ。

加えて攻撃を掻い潜って接近した母さんの奥義でも倒す事が出来なず、その際の攻防で父さんは私を庇って腹に風穴を開ける大ダメージを受けてしまったという絶望的な状況だった。

『……とにかく、マリエはティアモを連れて麗都の方へと逃げて頂戴。既にババアには連絡したし、上手くいけばこっちに向かってきてると合流出来る筈よ』

『分かりました。……それでお二人は……』

『あの「ガンマレイザー」に死力を尽くして戦いを挑むわ。貴女達が逃げる為にも麗都に近づかせない為にもアレの足止めも必要だろうし、多分この状態異常だとどの道長くは動けない感じだしね……いけるわよね』

『愚問、やられたのなら相手を殺すまで斬り刻むのが俺の【剣竜王】としての流儀だ。……それに俺の負傷であればもう長くはないだろうしな。幸い肉体の動作に今すぐ支障があるタイプの状態異常では無さそうだから、最後に一花咲かせるぐらいは出来るだろう。お前と一緒ならな』

『……ッー』

……そんな絶望的な状況でもヤケにならず凄絶に笑ってみせる両親を見て、私は思わず胸に浮かんだ疑問を叫んでしまっていた。

『どうして……どうして父さん達はこんな状況なのにお互い楽しそうなの？』

『んーそう見える？ ……だとしたらとなりは旦那がいるからかしら

ね。アマゾネス的に生死を賭けた戦いで愛する者と一緒とかむしろ興奮するし』

『己が認めた番と死力を尽くした戦いをするのは悪くないものだ。俺の生まれ故郷である天地の武芸者夫婦は大体そんな感じだったからな』

『ま、好きな男と一緒に居られるなら戦場だろうが日常だろうが楽しく感じるもんだよ。ティアモにもいつか分かる時が来るさ。……だから今は生き延びなさい』

そう言いながら私の頭を撫でてくれた母さんは楽しそうな雰囲気を変えないままに父さんと絶望的な戦いへと赴き、その後ろ姿を私はマリエさんに抱えられて麗都に逃がされながら見ている事しか出来なかった。

……その後は連絡を聞いて急遽討伐隊を編成した【女帝】^{エンプレス}レイソアお婆ちゃんに私は保護されて麗都に避難し、それからしばらくした後何故か父さんの特典武具が私の元に来ると共に【ガンマレイザー】が討伐された報告を聞いたのだった。

『……ふむ、まさかティアモがMVPに選ばれるとはね。直接彼を殺した【ガンマレイザー】は先に死んで、この【剛竜剣】を貴女に残す為に残された自分の命を全部使った結果か。或いはここまで見越してたか』

『後は私を庇って大ダメージを受けてた。……どうして』

『気にするな……って言ってもこういうのには意味ないからねえ。まあ自分が納得行くまで考えて、精一杯生きていきなつてぐらいか、私が言えるのは』

『……父さんと母さんぐらい強くなれば、あの時二人が笑っていた理由も分かるのかな』

『そこでそういう考えになる所がああ二人の子供って感じもするね。……まあ特典武具とそれに匹敵する剣を得たアンタを放置しておく選択肢はないから、私が面倒を見ながらしっかり鍛えてやるよ。……生きていけばいつかは自分が納得出来る答えは見つかるかもしれないからね』

『……途中で出会ったアマゾネス三人に助けを請われて来たんだけど……ちよつと遅かったかしらね』

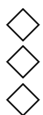
『少なくとも一人は助けられたと考えよう……その君、今は下がって怪我を治しておけ』

その死神の鎌を打ち払ったのは、かつて私が最後に見た両親を思い出させる関係性であると一目で分かる程の絆で結ばれた二人のヘマスターだ。……少し恥ずかしい話ではあるが、あの時の私はそういった“二人”に一目惚れしてしまったのだろう。

勿論、その後の完璧な連携で〈UBM〉を倒した所とか、その後『妾にしてくれ』というアレな要求の後にも嫌な顔せずに行動を共にしてくれる優しい所とかにも惹かれたが。

『……彼らと一緒に居れば、私は答えを見つけられるのかな……』

……そして、或いは彼らと一緒にいれば両親の最後の笑顔の答えが見つかるかもしれないとも思っ、私は今日もちよつと鬱陶しく思われたとしても彼らの元へと向かうのだった。



□ 〈麗都アンティアネラ〉喫茶店 【高位従魔師】レント・ウイステリア

「……とまあ、そんな理由で私は二人の繋がりのエモさに惚れたのです」

「うん、まあ事情はなんとなく分かった。しかし“エモさ”って……」
「なんかこの国の〈ヘマスター〉がよく言ってるのでティアンにも浸透した言葉の一つですね」

……俺が食事してる喫茶店にいきなりやって来て、そんな回想&自分語りをし終えたティアモは何時もの真顔で引き続きエモさについて語りながらデザートを食べていた。わりかしハードな過去語りではあったのだが相変わらず真顔で喋り続けるので反応に困る。

「……まあ『自分でも分からない“答え”を見つけない』というのであれば無碍にも出来んか」

「おお割と好感触？ マリエさんに言われた『男には殊勝な感じの過去語りが効く』ってのは本当だったのか」

「だからそういう事言われると反応に困るんだが」

……俺自身かつては『答え』を求めて色々と迷った身であるし、今も自分なりの『答え』を求めてこの世界を歩いている妹達を見ているとな。

「だが、俺達兄妹はそろそろアルターの方に戻ろうと思っっているんだが。ひめひめとも別れて行動する事になりそうだし」

「……え？ あんなに仲睦まじい感じなのに？ ひめひめさんの方は付いていくと思ってた」

「あいつもレジェンダリアに愛着が湧いてるからまだ居るつもりみないだし、俺達もアルターの方でやりたい事とかもあるしな。……今回は少し長い旅行だったがそろそろ終わりって事だ」

元々レジェンダリアにはちよつと寄っていただけぐらいの気持ちだったしな。ハロウィンイベントとかアマゾネス関係で色々あったから長引いてしまったが。

「……ひめひめさんと別れても大丈夫なの？」

「別にこちらで別れたぐらいで変わる様な関係性では無いしな。それに個人個人で楽しむ時間も必要だろうし……そもそも俺達は『マスター』だから『彼方側』では普通に毎日会ってるからな」

「ああ、『マスター』は別の世界から来てるんだよね。そっちで会ってるなら此方でも一緒にいなくても問題ないのか……ふむ」

そう言ったティアモはデザートを食べ終えると共に何やら考え込んでしまった……まあ、俺と姫乃の関係性に惚れたらしい彼女だから色々と思う所があるんだろう。

……まあ正直これで諦めるならそれまで「分かった、私も貴方に着いてアルター行く」へ？

「確かに二人の関係性に惹かれたのは事実だけど、それはそれとしてレントの事を好きになったのは嘘じゃないし。それに『答え』を見つめる為にも旅に出て自分を鍛えなおすとかはやってみたいと思っていた」

「この麗都やレジェンダリアを離れる事になるが……」

「惚れた男に着いて行つて国から出るアマゾネスは沢山いるから問題なし。……後、例え一緒に行事を貴方が許さなくても追いかけるから」

そんな事を《真偽判定》を使わずとも本気だと分かるガンギまつた表情で言つたティアモを見て、俺は彼女の事を正直どうしようかと頭を抱える事となつた。

……好き嫌いはともかく彼女に情が湧いているのも事実だし、勝手に着いて来るつて言うならいつそのこと一緒に旅をした方が良い気もする。この世界はカンストティアン一人で旅出来る程に緩くはないし、それで彼女が死んだら流石に寝覚めも悪い。ミカの《直感》問題もあるし。

「……分かつた、君が俺達のパーティーに加わつても良いよ。まあどんな感じになるかは後々妹達と相談する事になるけど」

「よっしゃ、とりあえず一緒にいれる免罪符ゲット。後はなし崩しに既成事実を作つて妾に……」

「悪いがパーティー入りは認めてもそういう事は別の話だからな」
「拒絶されてない以上は充分チャンスがあるから今はそれで問題なし」

ブレないなあ。やつぱりどの世界でも男が掛かつたアマゾネスはヤバいわ……さて、ひめひめに関しては『こういう展開』になる事は予測出来るから好きにすればつて言つてたし問題ないんだが、価値観が普通に女子小学生の妹達への説明が面倒な事になりそうだな。

「そう言えばひめひめさんと妹さん達は？ 一緒にやないの？」

「アイツらはアリマちゃんと一緒に『バトルロイヤル』つてへマスタール専用の催し物に参加してるから不在だな。なんでも以前のクエストでボスマンスター倒した時に参加券を手に入れたとか」

「へー、ウチで偶にやる闘技大会みたいなモノかな？ 不死身のへマスタールなら殺し合いでもルールを決めれば催し物になるのか」

「まあそんな感じだ」

こちらの時間でデンドロ一周年記念だし、多分そのイベントだろう

から気楽に楽しめそうなんでちよつと行つてくるぜ！ ……つて感じであの四人は何処かに転移していったからな。

あの四人なら全国の「マスター」が集まるバトルロイヤルでもいいセン行くだろうし、ティアンが関わらない以上は事件とかになり様もないからまあ気楽に楽しめばいいんじゃないって感じである。

「レントは参加しなかったの？」

「参加券が当たらなかつた。 ……まあ俺はドロップアイテムを大体経験値に変換してるからな」

「ああ成る程」

まさかドロップアイテム廃止にこんな落とし穴があるとは。まあ俺がイベントに「選ばれる」かどうかは別としてもなんか損した気分になるな。

「じゃあレントは今日どうするの？」

「まあ適当にクエストでも受けるかね。何か良いジョブクエストでもあれば良いんだが」

「勿論私も着いて行くよ」

「…まあ好きにすれば良いさ（拒否しても着いてきそうな凄みを感じるし）」

そういう訳で俺は『よつしや二人きりでデートだ』とガッツポしてティアモを連れて喫茶店を出たのだった……美少女を連れてれば悪目立ちするとか思ったが、この町ではカップルが珍しくないの大して気にもされないのが良い所だな。

崇リノ神

□〈異樹の荒地〉

そこは〈麗都アンティアネラ〉の北西部に位置する森が多いレジエ
ンダリアでも珍しい、疎らに僅かな草が生えるだけの荒野で構成され
たエリア〈異樹の荒地〉。

……最も、ここは昔は単なる森であり環境もレジエンダリアとして
は安定していて、生息しているモンスターも低レベルなので更に北西
にある小国家群やアルター王国・カルディナなどへの通商路として使
われていた。

「……と言ってもそれは10年前、あの神話級^{ユニーク・ボス・モンスター}へU B M〈滅光核
魔 ガンマレイザー〉とアマゾネス達との戦いが起こるまでの話だけ
れども。あの戦いの余波で森と生物は消し飛んで、更には放射能汚染
と呼ばれる現象で草木一つ生えない場所になったからね」

「でも、今俺たちはそんな汚染された場所を歩いている訳だが大丈夫
なのか？ まあ俺は最悪デスペナすれば良いんだが」

「少なくとも既に放射能汚染は除染済みだから大丈夫。その事件の後
にこの近くで発見された核やら放射能について研究していた先々期
文明の遺跡から資料が出て来て、そこから得られた知識やアイテムで
何とか【被曝】や放射能汚染をどうにかする方法が分かったのが幸い
だったね。……まあ件の【ガンマレイザー】はそこで研究されていた
エレメンタルだったらしいけど」

「それはまたなんとまあ」

そんな場所に【ライトニング・トライコーン】のヴォルトに馬車を
引かせている移動している【高位従魔師^{ハイ・テイマー}】のレント、及び馬車に乗っ
ている【竜戦士^{ドラゴン・ファイター}】ティアモと【崇神^{サ・ウエンジエンス}】シズカが居た。

……あの後、適当に冒険者ギルドでクエストを見繕っていた二人
だったが、そこでひめひめとアリマがイベントに行き他のメンバーも
予定が合わずに暇を持って余していたシズカがやって来て『ひま〜ひま
〜、なんか面白い事ない〜』とか言ったので、とりあえず彼女が好き
そうなクエストをレントが選んで受けたという次第だったりする。

「ともかく遺跡の技術で時間をかければ【被曝】や放射能汚染を治す事が出来る様にはなったんだけど、戦場になった此処はまともな生物が住めない環境になっていた上に放射能で変異した植物が特異なモンスター、果ては〈UBM〉にまで変異して住み着くという悲惨な状況だったみたい」

「放射能変異植物モンスターとかバイオ○ンテかな？」

「日本人には馴染み深い概念よね、放射能で変異する怪獣って」

そんな風に半分くらい冗談で某怪獣王閣下が出る映画シリーズを思い浮かべている二人であったが、実際【ガンマレイザー】が倒された直後の当時には生き残った生物の極一部が高濃度の放射線に適応出来る様に変異した自然魔力の影響で異常な進化を遂げる様な現象が起きていたので笑い事では済まなかつたという状況だった。

故に特殊環境であるレジエンダリアにおける貴重な通商路の確保、及びに変異したモンスターによるこれ以上の勢力拡大を阻止する為に【妖精女王】を中心とする妖精郷の総力でもって汚染された一帯の生物全てを殲滅した結果が現在の〈異樹の荒地〉となっているのだ。「でも今は汚染もモンスターも完全に除去出来たから問題は起こってないよ。むしろ環境が変わり過ぎてモンスターがあまり近寄らなくなったから、輸送の為の通商路としては大分使いやすくなったぐらい」

「それはなんとというか遅しいな」

「まあね、ちよつと生態系が変わるぐらいどうか出来なきやレジエンダリアではやってられないよ。……最もまた変異モンスターが現れる可能性や新しいモンスターが他所から住み着く事も十分にあるから、今回みたいな生態系調査のクエストが定期的にあるんだけど」

今回彼らが冒険者ギルドから受けたクエストは〈異樹の荒野〉での生態系調査」と言い、その名の通り生態系が大きく変異してしまった〈異樹の荒野〉の様子を調査、及び出現したモンスターの掃討による通商路の安全確保を行なってギルドに報告するというものだ。

まあ、殆ど何もない荒れ果てた場所を調査する事が稀に遭遇するモンスターとの戦闘する程度なのでつまらない事。後はそこまで良く

もない報酬からはつきり言つて不人気の塩漬けクエストであり、麗都でも基本的に時期が来たらアマゾネス達が物資の輸送ついでに調査するか稀にデータ目当てで〈Wiki編纂部・レジエンダリア支部〉の〈マスター〉が受ける事がある程度のクエストなのだが。

「……さてシズカさん、貴女が好みそうな怨念が集まりそうな場所受けられるクエストだが暇つぶしにはなつたか」

「そうねえ、確かに無念の内に死んだアマゾネスやモンスターを私の《観怨眼》で読み取れるんだけどねー。……そもそも麗都自体がアマニールとかと比べれば怨念が薄いよね。アマゾネス達って死んだ時あんまり怨念残さないみたいなのよ」

「まあ私達アマゾネスは基本的に『全力で戦つて死ぬなら本望』って思考だから」

「だから麗都自体が私の好みから外れるのよね、良い街ではあるんだけど。……アマニールみたいに『様々な種族の陰謀や欲望や無念が絡み合った怨念』とかは味わえないから少し退屈なのよねえ」

そう言つたシズカは口が弧を描く様な恐ろしい笑みを浮かべており、それを初めて見たティアモは思わず身体を固めて警戒態勢へと入ってしまった。

……彼等がこのクエストを受けたのは最近シズカが趣味の『怨念観察』がイマイチ出来ずにストレス溜まると文句を言つたので、レントが『下手に鬱憤を溜められても困るといふか面倒な事になりかねない』と判断して彼女が好みそうなものを見繕つたからなのだ。

「……彼女、最初に会つた時と雰囲気全然違ふんだけど。もつともな人だと思つてた」

「シズカさんはこっちの方が素だ。最初の方は単なるロール^猫プレイ^被」

そもそも、まともな性格の人が『他人の怨念を取り込む^{TYPE:ボディ}自分の身体^{ひめひめ}のへエンブリオ』なんて発現しないだろう……とレントは考えつつ、やっぱりこの人は色々と放置出来んから見張り^{ひめひめ}は必要だしミカとの相性も良くないからデンドロ口内では別行動で正解だななどと改めて思い直していた。

「そんな不安そうな『怨念』を出さなくても、この世界でひめひめと

の『契約』もあるから自ら怨念を生む様な大事件は起こさないつもりよ。……そもそも私は自分で事件を起こすよりも他人が起こした事に横からちよっかい掛ける方が好きだし、このレジエンダリアへマスターの現状とか上の方の腹黒さとかを考えればそう遠からず災い起きるでしょうから自分で何かをする必要は無いし」

「まあレジエンダリアの上の方は婆様が『アイツら陰険腹黒過ぎてめんどくせえ……』ってしよっちゅう愚痴るレベルだけど」

「やっぱ貴女はウチの妹とは相性悪いな、起きうる事件を引つ掻き回すタイプは」

そう遠くない未来にレジエンダリア、或いはへInfinite Dendrogram全体で起こるであろう『災厄』を己の経験則から予測し、それに想いを馳せながら邪悪な笑みを浮かべるシズカに対し、比較的良識のある二人はやや呆れながらもため息を吐いていた。

「そこまで心配しなくても良いわよ。少なくともこの遊戯で私は善玉寄りのロールプレイで遊ぶつもりだから、むしろ起きうる悲劇を少しでも減らす様に動くつもり。……私の勘だけど今後この世界で起きうる災厄はかなり酷いものになるだろうし、この【崇神】のジョブを考えるとその災厄を存分に味わうには善側の立ち位置の方が私好きな気がするのよね」

「……そういう方向性で『遊ぶ』なら別に良いさ。むしろ貴女の場合は『遊ばなくなった』時の方が怖そうだしな」

実に『愉しそうな』笑顔でそんな事を語るシズカを見て内心頭を抱えるレントであったが、問題を起こさないと云っている以上は自分に何か出来る事は無いだろうと一先ずこの問題を置いておいてクエストに集中する事にした。

「まあ良い、今はとにかく受けたクエストをこなそう。……と言つても今の所モンスターの一部も見当たらないんだが。索敵系スキルを幾らか使っても反応は無いし、このまま適当に見て回って『異常なし』と報告すれば良いのか？」

「それでも最低限の報酬は貰えるとは思うけど、とりあえず前回の調

査資料と比べて環境が復旧しているかどうかぐらいは調べべき。
……後、最近ここを通った行商隊が壊滅したって話も聞いたからそこも気をつける感じで」

そう言いつつレントは辺りを見渡しながら《魔物索敵》《レイライ
ン・サーチ》などを使って周辺を調べ、ティアモも辺りを警戒しつつ
アイテムボックスから取り出した資料と実際の荒野の様子を見比べ
ていく。

「シズカさんの方では何か分からないのか？　ここらの怨念から情報
を読み取るとか」

「《観怨眼》ならそういう事も出来なくは無いかけれど、そもそも怨念自
体が生前の無念とかを喚き散らしているのが殆どだから望む情報を得
るのは難しいのよね。この辺り人の魂を観て死者と対話出来るらし
い」キング・オブ・タルタロス「冥　王」の《観魂眼》とかには劣るわ。怨念はこつちと対話
とかしてくれないし……まあやっては見るけどね。ティアモちゃん、
襲われた人達の詳しい情報はある？」

「この資料に書いてある」

ティアモから手渡された資料をシズカは《ポルターガイスト》を使
いながら摘んで読んでいった……その資料には行商隊が霊都アム
ニールから小国家群へとマジックアイテムを運んでいた事、レジエン
ダリアでも腕利きのティアン冒険者を護衛にしていた事、そんな彼等
の写真などがそれなりに詳しく載っていた。

資料によると彼等はアムニールからアンティアネラを経由して小
国家群へと向かった途中で連絡を絶った様で、後日アマゾネス達の調
査隊が訪れた時に彼等の遺体と馬車の「残骸」が発見されたらしい。
「まあ外に出たパーティーが消息を断つのは良くある事だけど、この
護衛に付いていた冒険者達はレジエンダリアでも有数の腕利きだっ
たみたいだし、発見された遺体及び馬車の残骸の状況も少しおかし
かったみたい」

「『その遺体は食い残しの破片しか残っておらず、頑丈な高級馬車が残
骸になるまで砕けていた』ねえ。彼等が食われた事と輸送中のアイテ
ムボックスは残っていた事からモンスター、手練れを倒して馬車を砕

いた事から純竜級以上の相手だと推測されるが、後の調査隊が調べても付近にそれらしいモンスターは発見出来なかったと」

「ふーん、成る程ねえ。まあ写真があれば少しは見つけやすいか………さて」

二人の話を聞きながら資料に載っていた冒険者の写真を一瞥したシズカは虚空……【崇神】たる彼女にしか見えない、辺りに揺蕩う数多の悪意・悲嘆・憎悪・忿怒・絶望と言った多種多様な怨念を《観怨眼》にて見据えた。

そして彼女は自身のへエンブリオ〔不有幽霊 ゴースト〕のスキル《斯の身は怨嗟の受け皿也や》によって周辺の怨念を自身の身体の中に取り込み、それらが奏でる負の感情溢れる叫びを涼しい顔のままに一つ残らず余さず聞き取りながら有している情報を読み取っていく。「……ハラヘッタ……痛い……苦しい……無念だ……カユウマ……一体何処から……これね、手練れのティアンの怨念は分かりやすくて良い。《怨霊保持》《観怨眼・禍魂視》……馬車がいきなり吹き飛び……啄まれ……風……上から……。どうも上空からいきなり現れた。何か”にやられたみたいね”

「成る程、相手は飛行型のモンスターだった訳か。確かにレジエンダリアで良くある森林地帯と違って、この荒野であれば上空から攻撃する事も出来るか」

「後の調査隊が何も発見出来なかったのは、単に相手の行動範囲が広すぎて既にその場にはいなかったから。……でも、こんな見晴らしのいい場所で、空からとはいえ手練れのティアン相手に奇襲を行えるとなると相当な隠密能力を……」

シズカがジョブとへエンブリオのスキルを駆使して護衛が残した怨念から読み取った情報を元として、レントとティアモは行商隊を襲った相手の大凡の特性を推測しながら日が落ちかけている空を見上げて……そのやや離れた地点に“何か”の影が見えている事に気が付いた。

「ッ！ 敵襲！ 散開!!!」

「切り離す！ ヴォルト走れ！」

『了解！』

「あらあら……」

それなりに近い距離にも関わらず自分達が使っていた探知系スキルに引つかかっている。何かを瞬時に敵と判断した彼等は、各々馬車を置き去りにしてその場から急いで離脱し……。

『……KITTE！』

直後、上空から音も無く接近して来た影——怪鳥種「上位純竜級」
モンスター「ハイ・ダークゲイル・ステルスガルーダ」が放った風属性上級職奥義魔法《エメラルド・バースト》による破壊的な暴風が地面へと撃ち放たれて彼等が乗っていた馬車を粉々に粉碎した。



□ ■ 〈異樹の荒野〉 上空

『KUE！ KIEEEE……！』

その「ハイ・ダークゲイル・ステルスガルーダ」はその名の通り視覚で捉えにくくなる《視覚迷彩》、飛行時の音を消す《無音飛行》、《殺気感知》をすり抜ける《殺気隠蔽》、《危険察知》を無効化する《潜伏奇襲》などの隠密系スキルからの風・闇属性魔法による奇襲を得意とするモンスターである。

最近ではこの荒野を縄張りの中の狩場の一つとして、経験値的に実入りの良いティアンの集団などを狙って奇襲攻撃による狩りを何度か成功させて気分が良かったのだが……それ故に今回奇襲が失敗に終わった事には苛立ちを隠せず、それを成した眼下の獲物を睨みつけていた。

「庇ってくれてありがとうねティアモちゃん」

「霊体なら風属性は余り効かないでしょうに」

「覚えてて良かった【聖騎士】^{パラディン}の盾スキル……《喚起》^{コール}ネリル」

『電磁障壁の練習をしておいて正解でした』

あの時、まずティアモが《竜闘気》^{ドラゴニックオーラ}を使って風を防御しながら《エメラルド・バースト》の直撃点から離脱しつつ、同時に《破魔竜剣》^{ハーマンツルギ}で

風を切る事で込められた魔力を減じる事で威力を落とす。

そしてレントも同じく即座にヴォルトを馬車から切り離しつつ騎乗、更に《瞬間装備》した盾から聖属性防御障壁スキル《ホーリークロス・シールド》を展開して、同時に張られた《エレクトロ・シャッター》と合わせて暴風を凌ぎきったのだ。

……後、シズカがいくつかの物理現象を透過する霊体であり、その中には風属性も含まれていてダメージを受けていないので当然無事である。

「ほう、上位の怪鳥か。対空攻撃手段が無ければ下手な〈UBM〉よりも厄介じゃぞ？」

「分かっている……《詠唱》終了。《ヒート・ジャベリン》」

『《サンダー・スマッシュ》!!!』

そしてレントは騎乗しながら呼び出して後ろに乗せたネリルの言葉に返しつつ、上空にいる「ステルスガルーダ」に向けて射程と弾速を強化した《ヒート・ジャベリン》を十発以上放ち、同時に放たれたヴォルトの広範囲電撃による対空攻撃を仕掛けた。

『K E E E !』

「速い……超音速機動か、距離を取られた」

だが、それらの魔法は直ぐに超音速で上空へと飛翔した「ステルスガルーダ」には一発も当たらず、加えて相手が高空へと移動した事でレントとティアモ達には有効な攻撃を撃てる手段が無くなってしまった。

これが「ステルスガルーダ」の対地上戦力用の戦術……奇襲が失敗した場合には上空に登って距離を取りつつ、超音速で飛翔しながら地上へ遠距離攻撃を一方的に行うという単純だが攻撃を当てる手段に限られる地上の相手にとっては厄介な戦術である。

「距離が遠い上にあの速度では攻撃を当てる事は至難だな。どうするか」

「私みたいな前衛型は出来る事が無くなるんだけど。……やっぱり高位の飛行型は厄介」

『K Y U E E E E E ……』

実際レント達は高空を飛翔する「ステルスガルーダ」に対して迂闊に手を打てなくなっており、それを見たガルーダはこの戦術がハマる相手だと判断して閨属性追尾攻撃魔法「グルーム・ストーカー」による追撃を仕掛けようと準備した……直後、その身を崇りが襲った。

「さて、アレが貴方達を殺した相手よ。怨みを晴らす機会を与えてあげ……《怨結び》からの《怨御籤・大凶》」

『KIIII!!? GIEEAAA!!』

シズカがそう呟くと同時に高空を超音速で飛んでいた「ステルスガルーダ」へ【呪縛】【吸魔】【呪詛】の三重呪怨系状態異常、及びLUCに對する一万近いデバフが掛かりその動きを封じ込めたのだ。

……本来なら相手に掛ける場合なんらかのアクションか事前準備が必要な呪怨系状態が即座に、かつ超音速で移動する相手に掛けられた訳は【崇神】の有する『怨念が負の感情を向ける相手へと使った怨念運用スキルが距離などを無視して必中する』アクティブスキル《怨結び》によるものである。

『GIIII!! GUAAAAA!!』

「ああ、蓄積した怨念を追加してスキル出力を上げてるから、例えば上位純竜であってもそう簡単にはレジスト出来ないわよ。防御スキルも《怨返し》で無視出来るしねえ」

自らを襲った“崇り”をどうにかレジストしようとする「ステルスガルーダ」だったが多量の怨念を追加されている上、『怨念が負の感情を向ける相手へと使った怨念運用スキルが防御系スキルを無視する』パッシブスキル《怨返し》の効果もあってただもがくだけに終わっていた。

これこそが【崇神】というジョブの本質——他のジョブの様に怨念をエネルギーとするのでは無く、怨念が持つ『何かへの怨み』をただ無為に消えゆくモノではなく明確な『崇り』として運用する文字通り“崇りの神”の力なのだ。

……そして“崇り”はまだ終わっていない。この魔境とも言われるレジエンダリアに於いてLUCがマイナスになるとどうなるのか、それは「ステルスガルーダ」へと急速に集まりつつある膨大な自然魔

力が示しているだろう。

「あ、へアクシデントサークル……アレはやばそうだね」

「まあこのレジエンダリアでLUCがマイナス一万を越えればねえ」

「のんびりとしている場合じゃないぞ。この距離じゃ巻き込まれかねないからさっさと離脱だ」

『……AAAAAAAAAAAAAAAA……!!!』

状況を見た彼等が全力でその場から離脱した直後、集まっていた自然魔力が風属性へと変じながら風属性魔法超級職「嵐キング・オブ・テンペスト王」の奥義《大嵐テンペスト》に匹敵する破壊の颯風と化して不運たる「ステルスガルーダ」を包み込んだ。

……崇りによって生み出された大竜巻は風属性に高い耐性がある筈のガルーダを容赦なく斬り刻んで行き、その余波が地上にいるレント達にまで襲い来るレベルだったのでネリルが《ハイエンド・ウインド・レジスト・ウォール》を展開して守る必要があった程だ。

『GEEEEUUUUUUAAAAAAAAAAAAAAAA!!!』

「……おお、まだ耐えておるな」

「怪鳥種は風属性に耐性があるヤツが殆どだから」

だが、それでも上位純竜級怪鳥としての意地か「ステルスガルーダ」は自身の耐性と風属性の防御魔法を駆使して必死に大竜巻に耐えていた。あくまで嵐はガルーダの不幸の結果起こったへアクシデントサークルによるものなので、防御無視などの「崇神」のスキル効果の対象にはならないのだ。

……まあ、マイナス一万越えの不幸が耐性のある属性の攻撃で終わる筈もなく、それを証明するかの様に荒れ狂う竜巻の全体が徐々に帯電し始めた。

「ふむ、アレが本命か。魔力を回せ主人殿……《ハイエンド・サンダー・レジスト・ウォール》」

「全員、閃光防御」

そうしてネリルがレントから回された魔力を使って対雷属性の障壁を重ねて展開した直後、竜巻の帯電が瞬く間に勢いを増して中心にいる「ステルスガルーダ」へ向けた超級職奥義クラスの雷撃となつて

スパークした。

『AAAAAAAAAAAAAAAAaaaaaaaa……………!!!』

その雷はまさしく「天罰」と言える程の威力となって「ステルスガルーダ」を焼き尽くし、魔法型故に上位純竜級モンスタ―としては余り高くないHPを一気に削り飛ばす。

そして少しの後に雷と竜巻が消滅した所には黒焦げの炭へと変わった魔鳥のみが残されており、それもそう時間も経たないうちに光の塵へと変わったのだった。

「…………いやあ、思ったよりも凄い事になったわね。正直状態異常とデバフで向こうの動きを制限出来れば良いぐらいだったんだけど」

「しかし、上位純竜クラスを一方的に倒すとか「崇神」やばいな」

「流石にここまで事になったのはアイツの運が悪かっただけよ。なのでこの荒野が更に酷い事になってても私は悪くない」

「まあ上位純竜を倒せてこの程度の被害で済んだのはむしろ幸運だと思おう」

そうして彼等は大嵐と雷の余波で幾らか挟れて焼け焦げた荒野を見つつ、とりあえずクエストとして一旦この事を報告すべきだと思い麗都へと戻る事にしたのだった。

…………まあ、馬車が壊れたのでヴォルトにレントとティアモが二人乗りになり、そこにシズカが《ポルターガイスト》でしがみ付きながら憑いて行く（誤字にあらず）という少し間拔けな光景になってしまったが。

妖精境でのやり残り

□〈麗都アンティアネラ〉・教会

「……………」
妖精境レジエンダリアにあるアマゾネス達が治める都市へアンティアネラ、麗都とも呼ばれる煌びやかなその街の教会内部の礼拝堂で一人の〈マスタ〉……【抵抗術師^{レジストマンサー}】レント・ウイステリアが跪きながら一心不乱に祈りを捧げていた。

この世界の教会は地球の様に宗教施設というよりは司祭系ジョブへのサポート施設という面が強く、主に司祭系ジョブ用のクリスタルがある場所に建てられるので彼のような外部の人間が転職やジョブクエストの為に使用する事も多いのだ。

「……………」
しかしレントが祈りを捧げているのは別に何かのクエストを受けた訳ではなく、また彼自身が何かの神を崇めているとか宗教にハマったとかいう事でもない。

「……………」
では何故こんな事をしているのかと言うと司祭系ジョブで習得出来るアクティブスキル《礼拝》の効果条件を満たす為である。このスキルは1日に1度宗教系の施設で一定時間祈りを捧げる事によって、24時間の間スキルレベルとその施設の規模に応じてLUCにバフがかかるという物だ。

ただし、バフ系のジョブスキルとしては長時間祈りを捧げる必要があるので戦闘中は当然使えず、更に丸一日と長時間効果が持続する反面バフの強度はスキルレベル最大の【司教^{ビショップ}】が大陸最大規模の教会であるアルター王国王都アルテアの大聖堂で使ったとしても200前後LUCが上がるだけの微妙な効果なのだが。

(スキルガチャ^{刃技採集}でSSRスキルガチャでSSRスキルガチャでSSRスキルガチャでSSRスキルガチャでSSRスキルガチャでSSRスキルガチャでSSRスキルガチャでSSRスキルガチャでSSRスキルガチャでSSRスキルガチャでSSRスキルガチャでSSRスキルガチャでSSRスキルガチャでSSRスキルガチャでSSRスキルガチャでSSR)

……)

……まあ色々ガバガバなデンドロのスキルなので捧げてる祈りがこんなんでも普通に効果が発揮されるし、司祭関連のジョブには《礼拝》使用時にLUC以外にもバフが掛かったり特殊効果が付与されたりする派生スキルがあつたりするので1日の始めにちよつと祈っておくかという者は一定数いるが。

そうして《礼拝》の効果が発揮された事を確認したレントは施設を利用させてくれたアマゾネスの司祭に礼を言った後、面で待っていたティアモと合流した。

「終わった？ 結構掛かったね。《礼拝》スキル使う人なんてアマゾネスではあんまりいないからというか、そもそも司祭系ジョブに就く人がウチでは少ないから。後は長い時間祈るといふ行為に向いていないのも多いし」

「これでも一度使えば丸一日効果が続くから始めに使っておくだけの価値はあると思うがな。俺は《礼拝》関連派生スキルもいくつか持っているから色々バフが付く。……流石にこの規模の施設だと効果は薄いが」

そういう性質なので《礼拝》に長い時間を取られる事もあって「マスター」で使っている人は少ないが、世界最大の教会を有している【^{パラディン}聖騎士】のジョブの都合から司祭派生ジョブを取る事が多いアルター王国の騎士団のティアンなどでは些細なバフでも有難いので毎日使ってる人も多い模様。

……さて、そんなレントだが今日はアルター王国に戻る前にレジエンドリアでやり残した事を済ませる為にログインしていた、尚妹二人は予定が合わなかったのでログインしておらず、ひめひめ達には既にレジエンドリアを出る事を伝えていてホームである「アムニール」へと戻っていたので現在はソロで行動している。

「そういえば俺のログアウト中はどうかだったんだ？ ティムモンスターはともかく奴隷を取るのは初めてでな、システムの的にはモンスターと同じ様に時間停止機能つきのジュエル内に格納される筈だが」
「特に問題はないし大丈夫。私の主観的にはレントがログアウトして

からすぐに貴方がログインしてきたみたいになってるし。……それにしてもやっぱり「貴方の雌奴隷」というフレーズはいいね」

「変な言い方をするな、「雌」はいらん「雌」は。あくまでへマスタ―とティアンが一緒に行動するにあたってログアウトやログインの問題を解決出来る『奴隷』という形式が一番効率が良かったのであつてな……」

そう、実はレントはティアモと契約して自分の奴隷にしていたのだ……勿論(妹達にはツツコまれたが)そこに疚しい感情とかは無く、自分と同行する以上はログアウト時にティアモだけがこちらの世界に取り残されるのに対処する為のものなのだが。

実際この世界での奴隷契約は一種の雇用形態であるのが大半なのでそこまで問題になる事は無く、自分達と同行する以上はユニーク・ボス・モンスターへU B Mレベルの相手と戦う機会がある事も考えればティアモの生存率を上げる為に必要な措置でもあると妹二人は説得したが。

「まあひめひめ正妻さんは『生存率上昇なら必要な措置よね。あの兄妹に付き合う以上は大変だろうけど私の代わりに力になってあげてね』で華麗にスルーして首都に戻っていったけど。……やっぱり正妻力が高過ぎる……」

「……お前がどう思うかについてはもう何も言わん。俺はジョブにピンチ【女術】とドラゴン・テイマー【従竜師】を追加したから、新しく仲間になったお前を十全に活かす事にするだけだ」

「パッシブスキルで《女奴隷強化》と《従竜強化》が掛かるのは有難いね。私も言われた通りジョブをアマゾネス【女戦士】からリア・ソルジャー【殿兵】に切り替えて、いざとなったら【ジュエル】の自動回収機能と合わせて生還出来る様にしたし。使う機会がないのが一番の保険だけど」

ちなみにアマゾネスの象徴とも言える【女戦士】をリセットする事について何か言われるかもと思っていたレントだったが、ティアモは『このジョブアマゾネスの集団で戦うなら役に立つけどそれ以外だとスキルが使い物にならないしステータスも低くて要らないよ。それにウチから出て他の街に嫁いだ人とかもさっさと別ジョブに変える事が多いから問題ない』と言つてあつさりと言われたとの事。

自らが奴隷になる事をあつさりと承諾した事と言い、この辺りは実戦・実力主義であるアマゾネスらしい思考とも言えるだろう（ティアモに邪な狙いが無かったとは言わない）

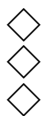
「それで今日は何をやるの？ 確かスキルを習得出来る珍しい力を持つてる特典武器を使うと聞いたけど」

「それに加えて『クルエラン』の強化だな。せつかく自然魔力の濃いレジェンダリアに来たんだからゴーレムの改造を行わない手は無い。ネリルと相談して必要な素材も集め終わったし、この麗都の周囲にある作成に最適な自然魔力がある場所にも当たりは付けた」

「でもわざわざ生産活動を屋外でやるのは危険が多過ぎると思うけど。……勿論貴方が望むならどこへでも付いて行くけど」

「そこは主に生産を行うネリルの都合だな。曰く工房よりも自然の中の方がやりやすいんだと……一応モンスター対策は考えてるし大丈夫だろう」

こうしてあつさりと危険に飛び込むあたりはへマスター特有かなとティアモは思いつつも、そういつた事に自分を連れて行くつもりで色々と手を回してくれた事を内心嬉しく思いつつ、彼女はレントについていって街の外へと向かっていったのだった。



□麗都南東部・ヘギガイアス鉱山跡地◇ 【抵抗術師】 レント・ウイス
テリア

「……よし着いた、ここだな」

「うーん早い。まさかレジェンダリアの森をこの速度で移動可能とか。それにここって自然ダンジョンのヘギガイアス鉱山跡地？ 確か昔に希少鉱石を掘り尽くして、今は鉱石ミネラル蚯蚓種のモンスターが住み着いている場所よね」

「ああ、ワーム種は生息している場所の地質や鉱物資源を回復させる性質があるから、今は再び資源が回復するまでほぼ放置されている鉱山だな。一応モンスターも住み着いているが、主に生息しているミネ

ラルワーム種は基本臆病でこちらから攻撃するか鉱石を過剰に掘らなければこちらを襲ってくる事は殆ど無いから生産場所にするには丁度いい。ネリルからのお墨付きだ」

そんな訳で俺はティアモを伴って麗都の南東にある自然ダンジョンへギガイアス鉱山跡地へとやって来ていた。ちなみに移動方法はヴォルトにティアモとネリルを乗せて疾走、道中のモンスターとの戦闘を最小限にしつつレジエンダリア特有の自然現象による障害をネリルの自然魔力操作技術で無効化するというレジエンダリア在住のティアモも驚く力技である。

「うむ、ワーム種は鉱石などの再生の他にも地脈の自然魔力を調整・賦活する能力を持っているからの。金属ベースのゴーレムを作る際に練り込む自然魔力として、この地にある地属性かつ金属属性よりの魔力が最も適しておる」

「……話には聞いてたけど本当にとんでもないエレメンタルだね彼女は。麗都周辺にはそこまで特異な環境が無いとはいえレジエンダリア特有の自然現象をあつさりは無効化するなんて……あの様々な逸話が残る神話級へUBMへ「アニミズワーム」の生まれ変わりというのも本当なのか」

ちなみにティアモには仲間になった時点で隠しておくのも無理だしネリルの正体とかミカの「直感」についての事情をおおよそ話している。多少は驚かれたが色々な不可思議が常識として存在しているデンドロ世界のベテランティアンだからか、或いは本人の性格なのかあつさりと信じてはくれて良かったが。

「しかしネリルの前世は結構有名なんだな。本人は以前に『ずっと地下に籠ってたからそんな目立ってない』と言っていたが」

「長く活動しているへUBMならそれなりに話題になるし、私達アマゾネスみたいな戦闘重視の勢力ならいざ遭遇した時の備えとして近隣のへUBMの情報は可能な限り集めるから。まあ情報にないへUBMがいきなり現れたり、情報持ってもやられる事も珍しくは無いけどね」

やはりこの世界で長く過ごしているベテランのティアンの方がこ

う言った情報は多く持つてるものなんだな。ネリルも色々知ってるがモンスターだから情報はどうしてもそっち寄りになるし。

「【アニミズウォーム】で有名な逸話には希少鉱石が眠る鉱山で発見され、そこを一瞬にして縄張りである自然ダンジョンに変えたとかがある。或いはお隣さんアルター王国における【聖剣王】の伝説で神話級金属を求めていた聖剣王パーティーが出会って、彼等に神話級金属の鉱脈への道筋を示したとか」

「鉱山を自然ダンジョンに変えたのはお気に入り

「ネリルが話す時には割と良くあるぞ。偶に聞いちゃいけない様な情報も混じるが」

「……今の『【邪神】の『フィルター』』云々とか。まあネリル意外と情報管理がガバいからなあ、本人基準では話す情報を厳選してるらしいがその基準点が彼女の価値観によって成り立ってるから……」

ちなみに【聖剣王】達へ与えた神話級金属は生産系超級職ティアンの手で各種最高級装備品や「ベルクロス」というらしい伝説級レベルの超高性能ゴーレムに加工されたらしい。実はその際の生産工程をちよつと見学させて貰っていて、ネリルが「クルエラン」を作成するにはその技術や発想の一部を反映させてみたとかいう事実もあった模様。生産技術はともかく発想とかはモンスターである自分よりもティアンの方が上回る事は多いのだとか。

「まあ無駄話はここまでにしてそろそろここに来た目的を果たすとするか。……まずはスキルガチャの時間だ。無駄に目立つから街中でやりたくないんだよな」

「ふむ、今のところ周囲にモンスターはおらんぞ」

『同じく私の探知範囲内にはいませんね』

「警戒はしておく」

そうしてティアモ達が周囲を警戒している間に俺は首元から下げられた小剣型のペンダント【才集刃飾 ヴアルシオン】を手に取り、そのスキル《刃技才集》を起動してその中から溢れ出した虹色の光が自分の中に浸透していくのに身を任せる。

……ちなみにこのエフェクトは習得するスキルの強度には関係ない模様。〈UBM〉由来らしき《黒晶刃》《レイライン・サーチ》そして【バイオハーデス】倒した後に引いた対アンドレッドデバフスキル《冥王の威圧》と、それ以外っぽい《ファイアブレス》《ポイズンステインガー》《職能補助・火石作成》を引いた時でも全部同じエフェクトだったしな。

「……………よし終わったな」

「思ってたより派手で時間もかかったね。これなら街中でやりたくないのも分かるかな……………正直野外じゃなくて部屋の中とかでいいと思うけど」

「初めて〈UBM〉由来らしきスキルを引いた時は野外だったからこの方がいいスキルが引ける気がするんだ（思い込み）……………それよりも今回のスキルは……………《闇夜の衣》？ やっぱり【グリムリープ】由来のスキルを引いたか」

さて、見た所パッシブスキルみたいだな。それと効果は……………『自己よりレベルが1000以上低い相手（モンスター）からの場合は相手のレベルを10倍として計算）からの鑑定系スキルを無効にする。夜間の場合は自分への感知系スキルも無効に出来る。レベル差が大きい程に効果が上昇』とステータス欄には書かれてるな。

確か【グリムリープ】は自分を武器に偽装するスキルがあった筈だしそこからか？ 後レベル差が1000以上とかやっぱり《刃技才集》で得られるスキルは現在の俺にアジャストした形になるみたいだな。《冥王の威圧》もアンドレッドに対して彼我のレベル差分だけ全ステータスをマイナスするデバフ効果だったし。

「……………とまあそんな感じのスキルだったな。パッシブスキルだから

持つてるだけ損は無いし十分に当たりの部類だろう」

「ふーん、じゃあ《看破》……確かにステータスが隠蔽されてるね。条件厳しい気もするけど貴方ならこの世界のほぼ全ての相手に問題なく効果を適応出来るでしょうしね」

「教会で祈った甲斐があつたようじゃのー。関係あるかは知らんが」

とにかく強いスキルが出たのだからよしっ！ これからも《礼拝》と野外ガチャは欠かさない様にしよう！ 多分システム的には無関係な気がするけどもうジnkスになってるからね！

「さて、それじゃあ本題のゴーレム作りに入るぞ。確か自然ダンジョンの内部でやった方が良いんだよね？」

「ああ、この辺りの地脈の中心点はこの洞窟の内部にあるじやろ。ミネラルワーム達はこっちから仕掛けなければ攻撃してくる事は無いし、他にはエレメンタル系列のゴーレムが出る事もあるみたいじゃがそれならどうとでもなる」

「……自然ダンジョン内部で生産活動とか普通じゃないんだけど……元神話級へUBMだからなのかな」

「ネリルは意外と凝り性だから生産活動に関しては信頼できる。それと自然干渉及び魔法の実力もな」

そんな会話をしつつも俺達は自然ダンジョンへギガイアス鉱山跡地へと足を踏み入れたのだった。さて「クルエラン」の強化がどうなるかな。

クルエラン、新たなる姿！

□〈ヘギガイアス鉱山跡地〉【抵抗術師^{レジスタマンサー}】レント・ウイステリア

あれから俺達は侵入口である洞窟からヘギガイアス鉱山跡地へ入り、自然ダンジョンを歩むとは思えないぐらいその中のかつて鉱夫達が使っていたらしい通路を順調に進んでいた。

この鉱山は遙か昔に今はレジエンダリアから消えた『巨人族』が使っていた事もあるらしく、その名残なのか通路はかなり広くに作られていたので人間サイズの俺達には歩きやすかったりするのだが、モンスター蔓延る自然ダンジョン内部を順調過ぎるぐらいに進める理由は他にあり……。

『UGGOGO……』「はいはい大人しくしておれ。《エレメンツ・カームネス》《エレメンタル・チャーム》……ワシらには関わるな。向こうへ行っておれ」……KYUUUU……』

今も通路の横から現れた純竜級エレメンタル「グレーター・ミスリルゴレム」がこちらに戦意を向けて来たが、相手が何か行動を起こすよりも早くネリルが手を掲げると借りて来た猫の様に大人しくなってスゴスゴと引き下がってしまった。

この様に先程からダンジョン内で遭遇するエレメンタルモンスターをネリルが精霊とエレメンタルを鎮静化させる《エレメンツ・カームネス》と、同じく精霊とエレメンタルを「魅了」する《エレメンタル・チャーム》によって片っ端から戦闘不能にして退けているのだ。

「相変わらず凄いね。精霊の鎮静化や魅了は【エレメンタラー】にとつては基本的なスキルだけど、それを通常の精霊よりも効きにくいエレメンタルモンスター、しかも純竜級にすらあつさりやつてみせるなんてこのレジエンダリアでも出来る人はあんまり居ないんだけど」

「精霊を構成する自然魔力の流れを理解してスキルの波長を調整するだけだからそこまで珍しい技術では無いぞ。それにこの精霊やエレメンタルは此処を住処とする精霊達の影響で『自身と鉱石を守る・鉱石を発掘しに来た者を攻撃する』のが基本パターンになつとる

様じゃから、そこを踏まねば敵意を抑制して退けるだけなら容易い」「つまりエレメンタルモンスターに攻撃せず鉱石を取らなければ進むのは簡単だと」

最もこの自然ダンジョンの目玉は採掘される希少鉱石、及び先程出てきた【ミスリルゴーレム】の様な鉱物系モンスターからのドロップだからな。

自然と此処に来るのはそういったレアアイテム採取を目的とした者達のみとなり、そういった連中に対しては積極的に襲い来るエレメンタルモンスターと防衛本能を刺激された精霊達による魔法攻撃、そして地中から【ミネラルワーム】達の奇襲なども受けるという結構な難易度のダンジョンへと早変わりする訳だ。

「俺達の目的は此処の自然魔力を少し使わせてもらうだけだから問題ない……んだよな？ 自然魔力取られても怒るとかは？」

「その辺りは問題ない、さっき此処に入ってきた時点で精霊とは話を付けた。そもそも自然魔力豊富なレジエンダリアの魔力溜まりの一つがこの鉱山じゃからな。枯渇させるぐらい使うなら襲って来るじやろうが、ゴーレム一体に注ぎ込む程度ならそんな事にはならん」「成る程、杞憂だったか」

そんな感じで俺達は時折出て来るゴーレムをあしらいつつ、ネリルの案内の元でこの鉱山内において最も自然魔力が濃く作業がしやすい地点まで向かっていくのだった。ホントにネリルが便利過ぎるんだよなあ。



「……うむ、まあ此処でいいじやろう。あんまり奥に行き過ぎると精霊やこのダンジョンのヌシレベルのモンスターとかを刺激するし、ゴーレム作るなら此処ぐらいの自然魔力で十分」

「入り口も一箇所だから見張りもしやすい」

「ていうか『ヌシ』とかいるのか」

そうして俺達は鉱山にある通路の一つの行き止まりでスペースが

広く取られている所までやって来て、あまり俺がログイン出来る時間は残っていない事もあって此処で「クルエラン」の再作成及び改造強化作業を行う事にした。

とりあえずティアモとヴォルトに入り口の見張りを任せつつ、俺はアイテムボックスから「クルエラン」の躯体と「クルエラン・コア」の一件で回収した古代伝説級金属合金含む幾つかの素材アイテムを取り出し、更にジュエルからあらかじめ分離しておいた『クルエランの本体であるコア』も呼び出した。

「そう言えばその【クルエラン】ってゴーレムってアイテム系なの？それともモンスター？」

「躯体の方はアイテム扱いだがコアの方はエレメンタル系統に近いモンスターって設定になってる。その所為か躯体だけならアイテムボックスにしまえるが、コアを入れて融合させると完全なモンスターになるから【ジュエル】にしか入れられなくなるんだよな」

基本的に職人に作られたゴーレムはアイテムでありモンスターでもあるって設定が多いんだが、この【クルエラン】はエレメンタルモンスターのコアにゴーレムの躯体を纏わせて融合させてるからそんな複雑な仕様になってるみたいだ。

まあ、入れる先がジュエルかアイテムボックスかで変わるぐらいなので運用には特に支障はないので構わないのだが……とそんな事を考えている間にどうやらネリルがこの部屋に自然魔力を集まりやすくする術式を敷き終わった様だな。

「ふむ、とりあえずこれで下準備の為の陣は敷き終わったな。……さて主人殿、これから【クルエラン】の改修を行う訳じゃが手順は頭に入っておるよな」

「無論だ。……今回はスキルの共有によって作業効率を上げる為に《フュージョニック・ユニオン・エレメンタル》を使った融合状態で製作作業を行う。その際には此処に敷いた陣とネリル自身の自然魔力吸収能力、そして俺の【クルエラン・コア】の《レイライン・アブソープ》による地脈からの魔力吸収の合わせ技でMPを高速回復させて融合コストと生産スキルのコストを賄う。それに加えてゴーレムへの

自然魔力付与も陣によって効率化されてるんだったな」

「うむ、融合スキルも前回の仕様からいくらか燃費を改善させておるし、万が一に備えてMP譲渡の魔法を込めた【ジエム】も多数用意してあるから作業には十分足りるじゃろう。製作予定としては古代伝説級金属を使った躯体強度・ステータスの大幅強化。更に《クリエーション・ゴーレムアーミーズ》を使って主人殿が新たに覚えた【格闘家】^{グラブブラー}系統から格闘系パッシブスキルの付与、及び融合状態のワシの魔法スキルから使えそうなものの付与と言った所かの」

うん了解、生産作業前の確認行為は重要だからな。特に今回は融合状態の作業という事で複雑な作業が必要になるし慎重にいかなければならぬのだ。

まあ圧倒的な技量差もあつて今回のメイン作業はネリルで俺は補助、融合スキルに関してメインはネリルの魔法スキルを付与するのが目的だしな。スキル運用特化の人形と違ってステータス特化のゴーレムだと格闘系アクティブスキル入れても余り活用出来んし、それならコアがエレメンタルである事によって適正があり、今までは無駄に余っていた高いMPを活用できる魔法スキルを習得させた方がいいって感じた。

「それじゃ早速作業を始めるかの……《フュージョニック・ユニオン・エレメンタル》」

「……オツケー、融合完了だ。さてとまずは《メイクゴーレム》のスキルで躯体に干渉しつつ《インクルード・ネイチャーマナ》で自然魔力を込めて……」

『それと並行して《メタル・デIFOオメーション》^{金 属 変 形}でこつちのアダマンタイト合金も加工しつつ、《アROI・メイキング》^{合 金 製 作}で組み合わせ……』

そうして作業内容の確認を終えた俺とネリルは融合スキルを行使して合体、まずは手始めにコアを取り除いた【クルエラン】の躯体に俺がゴーレム創造と自然魔力付与のスキルで干渉と下準備。それと並行してネリルがアダマンタイト合金及び素材を魔法で加工しつつ、ゴーレムと最も相性の良い組成になる様に合金を再構成しながら形

状を変形させていく。

……とりあえず俺はこれまでの訓練と融合によるスキル共有で出来るようになった自然魔力操作に集中して躯体への付与と自分のMP回復に集中しつつ、その間にネリルがクルエランの新躯体を加工するって感じた。

『ふむ、躯体の方は「クルエラン」がこれまで獲得した経験値リソースが残っておるから、それを使って剛性を強化しつつ素材アイテムの内で物理防御力の高いやつを混ぜ込みながら関節単位で作り直して内部フレームとする。そこでコアを胸部に埋め込んで此処には魔法スキルを付与、フレームの方には格闘系パッシブスキルを付与しよう。最終的に統合されるがそれが一番効率が良いさそうじゃ』

「了解。《クリエイション・ゴーレムアーミーズ》《格闘技》《拳闘》《足技》付与」

『魔法に関しては事前に付与用スキルとして「覚えておいた」ものを付与すればいいな。ホイホイホイツと』

そしてネリルの錬金術系スキルによって「クルエラン」の躯体だった物がアダマントタイトを始めとする物理強度が高い金属と混ぜ合わされ高強度の合金と化し、それが金属加工の魔法スキルによって形を整えられて以前のクルエランよりふた回りは大きい全長を持つ金属の人型骨格となった。

更に「自分が習得しているスキルを付与出来る」《クリエイション・ゴーレムアーミーズ》で融合して俺のスキルとして扱われているネリルのスキルがクルエランのコアへと付与されていく。

『前は融合スキル未完成じゃったからワシの魔法スキルは付与させられなかったからな。それにクルエランのコアはワシの「魔神石」ベースで作ったから全ての属性の魔法に適正があるし、どうやら付与出来る魔法の数も多い様じゃからゴーレムとは思えない数のスキルを与えられるな。……とりあえずゴーレムの躯体強化・金属の各種耐性を引き上げる地属性・海属性魔法、攻撃用に火・雷・光・氷属性の攻撃魔法、後は自然魔力吸収による再生とMP回復のパッシブスキルと魔法補助のパッシブスキルも入るか？』

「相変わらずこういう作業になると凝り性になるな」

まあ本来は俺専用の特典武具である「クルエラン・コア」のスキルを俺よりも遥かに上手く使いこなしている辺り、やはりネリルはスキル運用技術に関して俺では及びもつかないレベルだと再認識したが。

俺もデンドロにログインしている間に暇さえあれば魔法スキルを中心に色々を使いながら練習してスキル運用の技術を磨き、ネリルの指導もあつて最近では魔法スキルをマニュアルで調整や改造とかも出来る様になったが……この世界のスキルを把握すればする程にネリルの技量が異常なレベルである事が理解出来てしまうのだ。

『まあワシレベルの技術の持ち主は、稀によく居る』ぐらいじゃし、なんなら前世のワシよりも遥かにヤバいのが複数いるのがこの世界なんじゃがな』

「そんな連中とは出来れば関わりたくないんだが……そういう連中が起こす問題の規模はデンドロ世界全体に及ぶだろうしそうもいかないか」

『そんな時の為にも戦力になる「クルエラン」は良い仕上がりでせんとな。……次は外装じゃな。残りのアダマントタイト合金を変形させつつ、元々の積層装甲を活かす形でフレームに肉付けする形で行くかの。とりあえず外装は対魔法・対エネルギー耐性重視でダメージは受ける前提で再生能力を強化して……』

確か融合しているから考えている事の表層部分はネリルに読み取られるんだったな……そんな事を思っている間にもアダマントタイト合金が次々と分離・変形を繰り返してフレームへと纏わされて癒着・融合されていく。

ネリルは凄くあっさり変形させている様に見えるけど、多分一般へマスター・ティアンの上級職レベルの人間が数十人がかりで何日も掛けてやる作業を単独かつ超高速でやってるんだろうなあ。

『再生機能に関してはコアさえ無事なら外装は幾らでも再生出来る様に自動修復機能も……そうじゃ、先々期文明技術の《相互交換修復機能》をパクって外装がある程度無事ならコアが損傷しても再生する様にしとくかの。流星にあそこまで完璧な再生にはならん超劣化品

じやが、これで生存能力も少しは上がるじやろう」

「まあ外装と違ってモンスター扱いのコアがロストするのは避けたい
良いんじゃないか。これなら早々はやられないだろ」

『最も本物の《相互互換修復機能》と違って設定した遠隔地の対象を再生させるなんて事は出来ず、あくまでも自己修復の延長線上にある機構じやからな。例えば火属性魔法奥義を連射されれば再生する前にコアと外装を跡形もなく蒸発させられるじやろうから過信は禁物じやよ』

逆に言えばそのレベルでも無ければ対魔法装甲及びスキルとして発言させた熱変動耐性と魔法耐性のパッシブスキル、更には耐性強化のアクティブスキルを併用すれば防げるらしい。まあ壁役として運用する予定だから頑丈なのは良い事だけだよ。

そうこうしている内にフレーム全身に外装部分が装着されて以前よりのふた回り程デカくなった金属のゴーレムが目の前に鎮座していたのだった。

『後は関節部の稼働が問題なく可能なように細部を調整して……外装へのスキル付与は耐性系パッシブを置くとして、デザインももう少し弄れるがどうする？』

「そうだな、余りゴテゴテさせる気はしないし細部を弄るぐらいでいいか。実用性重視で機能美溢れるデザインにしよう」

あんまり地球式のスーローロボット風味にするのもアレだしリロロボット風味の外見でダサくはならない感じのシンプルなデザインで行くか。アダマントタイト合金とか硬くて外見を細かく弄るのも面倒だしな。

……そんな感じで稼働の邪魔にならない範囲で外装のデザインを整えていき、出来上がったのは鈍色の装甲と太い手足を持って頭部には赤いモノアイが光るロボットっぽいデザインのゴーレムであった。『ふむ、とりあえずこれで完成かの。ENDとHP以外のステータスは前と余り変わっておらず作り直した影響で種族レベルは下がっておるが、習得スキルの数と質は比べ物にならない。それに何よりアダマントタイト合金を始めとする高級素材を使い切って自然魔力もふんだ

んに付与したからレベル上限も大幅に上がっておる故、今後のレベルアップで更に強くなれるぞ』

「これ以上の改造だと神話級金属^{ヒビイロカネ}レベルの素材を大量にぶち込むぐらいしかないし、当然ながらそんな金もないからモンスターとして成長させる方向の方がいいか。……それでクルエラン、新しい身体の調子はどうだ？ 動作確認をやってみてくれ」

『UGGOGGO………GGOO!』

ひとまず作業が終わったので眠らせていた「クルエラン」を起こして動作確認をさせ、その命令を聞いたクルエランは手足や腰を動かしたり軽く歩いてみたり頭部のモノアイを光らせてみたりして、その結果特に問題は無い事を伝えて来た。

流石に戦闘機動やスキルの使用はこのスペースだと難しいか。下手に暴れてこのダンジョンのエレメンタルを刺激する訳にもいかんし……とりあえずそろそろMPが切れそうだから一旦融合を解くか。「よつと……ふむふむ、ワシが見た限り不具合とかはなさそうじゃな。敢えてコアとフレームと外装の複数種のパーツに分けて、最後にそれを融合させて一つのゴーレムにするという特殊な複合型の製法じゃから通常のゴーレムよりも難易度が高い生産作業じゃったが流石はワシ」

「まあ今の俺では到底出来ないレベルの技術で作られてたからな。……ティアモ、ヴォルト、こっちの作業は終わったぞ」

「もう終わったの？ 思ったよりも早かったね……って、また凄いのを作った」

『ステータスは現時点でも純竜級上位でしょうか。特にENDとHPがすごい事に』

『GOO!』

完成したクルエランの出来をみて二人も驚いているみたいだな。実際ステータスもスキルも凄い事になってるし……さて、後残ってるのは……。

「それじゃ最後にクルエランのゴーレムとしての名前を決めるか。……そうだな【カスタムゴーレム・クルエラン二型】でいいか。どう

せ通称の「クルエラン」でしか呼ばないし」

「シンプルだね。まあ下手に捻るよりもいいんじゃない?」

『GO、GO』

「クルエラン自身も「クルエラン」の名前が付いていれば文句はないみたいじゃない」

はい決定。変に捻るとロクな事にならないし、俺自身ネーミングセンスがそんなにある方じゃないからな（妹達よりはマシだが）

「じゃあ作業は終わったし帰るか。あんまり自然ダンジョンに長居するのも危険だから」

「うむ了解。ああ主人殿、ここの半径100メートル圏内に敵性存在は居ないし、他者のスキル効果範囲内という事は無いぞ」

「そうか。じゃあ全員【ジュエル】に戻ってくれ、ログアウトから次口グインの転移で麗都のセーブポイントに戻るから」

「『『はい（GOO）』』」

そうして作業を終えた俺は皆を【ジュエル】にしまってからログアウト処理を実行、特にイレギュラーな妨害が入る事もなく無事にログアウトしてダンジョンから脱出する事が出来たのだった。

ちなみにティアモを奴隷扱いはしたのはいったいどうしたログインログアウト、それとデスペナルティなどの『ヘマスター』にしか無い恩恵』を受けさせる為でもある。ティムモンスターや奴隷のシステムは色々と悪用もとい有効活用出来そうだからな。

特別章 争乱の孤島 バトルロイヤルイベント

□〈麗都アンティアネラ〉【戦棍姫】メイス・プリンセス ミカ・ウイステリア
「……うーん、じゃあコレとコレとコレかな。はい料金」

「身内に【ジエム】職人がいるとアイテム確保が楽でいいわね」

「このジエムは少々お高めでしたからね。魔法系ジョブに就いている人がレジエンダリアとしては少なめだかららしいですが」

「色々と用意して貰ってありがとうございます！」

「……まあ、料金と素材は貰ってるから良いんだがな。ネリルも手伝ってくれたし」

とある日のデンドロ内にて、私はミュウちゃん・ひめひめさん・アリマちゃんと一緒にお兄ちゃんから事前に頼んでおいたいくつかの高位魔法入り【ジエム】を受け取り、その代金として相当なリルを手渡していた。

……流石はお兄ちゃんとネリルちゃん、当たり前前の様に上級奥義魔法【ジエム】を用意出来るとはね。お兄ちゃんネリル先生からの魔法指導を得て最近『コツを掴んだ』らしく、ある程度マニュアルで魔法スキルを効率的に運用出来る様になったらしいし。

「さて、各種ポーション類も可能な限り買い込んだし、コレで『バトルロイヤルイベント』の準備は出来たかな」

「掲示板で調べてみても初めての限定イベントっぽいし、何かあるか分からないからね」

「出来る限りの準備はしておくべきでしょう」

「まあ、お前らなら心配ないだろうけど頑張れよ。じゃあなー」

そう、今回私達は色々準備をしているのは以前の討伐クエストの時、何か湧いて来たPKを倒した後に偶然純竜級ボスモンスターと遭遇して撃破した際に「バトルロイヤル参加券」という運営主催の特別イベントに参加できる権利を手に入れたので行ってみようって感じになったからだ。

決闘と違ってアイテム制限とかは余り無さそうだからね、それなら消費アイテムの準備をしておくのは戦術としてはありだろう……まあ具体的な内容までは分からないから出たところ勝負だけだ。

「お兄ちゃんも行っちゃったし、参加券に記された時間もそろそろだね。どういう方針で行く?」

「バトルロイヤルと言ってもどういうルールで来るかは分からないし、とりあえず出来るだけこの四人で協力して勝ち残ろうってぐらいかしら? 幾ら何でも一人で参加者全員全滅させるなんて無理というか、よっぽどの脳筋以外は考えないだろうから他も協力する連中は出るだろうし」

「バトルロイヤルのお約束として途中まで協力して勝ち残ると言うのはよく聞きますね」

ミュウちゃんの言う通り、バトルロイヤルに於いては一度死んだらお終いなので生存率を上げる為に途中まで他の参加者と協力しながら勝ち残るのは有用な戦術だろう。

まあ漫画やラノベで良くある展開だね、その後に裏切りやら騙し討ちが横行したり、最後に勝ち残った仲間同士で雌雄を決したりとかもあつたり。

「でも『最後の一人になるまで戦え』とかだったらどうするの?」

「掲示板で見た限りの参加者数だと流石に複数名残らせるとは思うけど……まあ、もしそうだったら途中まで協力して最後に残ったら戦う感じで良いでしょう。どうせへマスターへしか参加しないイベントなんだし気楽にいけば良いわ」

そんな少し不安そうなアリマちゃんの疑問に対して、ひめひめさんがあつげらかんとした口調で『普通に最後の一人になるまで戦えば良い』と答えてくれた。

「まあ気楽にいこう。ひめひめさんの言う通りどうせへマスターへ同士のイベントなんだから最後まで楽しめば良いと思うよ」

「そうですよ。勝ち負け含めて楽しむイベントでしょうから、もしこのメンバーで戦うとなっても全力でやってやれば良いんです」

「ミュウちゃん……うん、そうだよね。このメンバー相手に勝てる

気はあんまりしないけど、もしそうなっても全力で頑張るよ！」

「……アリマちゃんなら十分に勝算あると思うけどね」

主にミュウちゃんの説得でやる気を出してくれたアリマちゃんだったが、ひめひめさんがボヤいた通りバトルロイヤルというルールなら無差別精神汚染を得意戦術にする彼女の勝算はかなり高いと思う。

実際超級職取ってる私でもアリマちゃん相手では「クインバース」の状態異常置換に頼って近接戦するしか無いし、ミュウちゃん相手ではステータスが高いとか意味なくなるからクツソ不利……ひめひめさん？ 何とかして近づかないと死ぬ（断言）

「……ん？ そろそろ参加券に書かれた時間になるわね」

「よし、それじゃあ頑張ろうか！」

……そうして全ての準備を終えた私達はイベントの開始時間になると同時に何処かへと転送されていったのだった。



転送の直後、私の視界には麗都の広場の光景では無く、どちらかと言えばチュートリアル時に管理AIと出会った空間に似た雰囲気を持った白くて広大な空間を映していた。

その側にはちゃんとミュウちゃん達三人が居て、更に周囲には私達と同じ参加者らしい「マスター」達が次々に転送されて来ている。

「……ふうん？ やっぱり各国から腕利きの「マスター」を集めてるみたいね。まあ私達が参加券を入手出来た時点でそうじゃないかとは思ってたけど」

「そもそも参加券自体が純竜級モンスターを倒したりする事で入手出来るみたいだし、必然的に参加券を手に入れた「マスター」はそれが出来る腕前を持ってって事ですからね」

「強そうな人がいっぱい……」

「そうだねー」

まあ、ひめひめさんは運営が狙って腕の立つ「マスター」に参加券

をそれとなく配布したんじゃないかって考えてるみたいだけどね。実際どうかは分かんないけど、とにかく戦闘能力が高いへマスターが集められてるのは間違いなさそう。

転送されて来ている参加者の服装を見ると見慣れない和風や中華風の服を着ている人が多く感じるね。多分黄河や天地出身のへマスターだろうけど。

『はい、只今をもって、ログイン中の参加者の転送が完了しましたー。これにてイベントの参加を締め切らせていただきますー』

そんな事を考えていると突然どこか間延びした聞き覚えのある声が聞こえてきて、その直後に白い空間の明かりが落ちて真っ黒になった。

……そして少しの間を置いて空中の一点にスポットライトが当てられると、そこには私のチュートリアルを担当した管理AI『チェシャ』が何か見えない足場の様な物に立っていたのだ。

『皆様ようこそいらっしゃいましたー。本日はイベント、へバトルロイヤルへにご参加いただきありがとうございますとうございませー』

「ふおおおおお！ チェシャちゃん!!」

何やら何処からか奇声と共にパシャパシャパシャとカメラのシャッター音が聞こえてきた……チェシャさんのファンなへマスターへでも居たかな？

『これからルール説明をさせていただきますのでー、お静かにお願いしまーす』

「分かったわチェシャちゃん！」

チェシャさんがそう言ったらピツタリ黙るのには草なんだよ……それはともかくとして、直後空中にホログラムの大スクリーンが浮かび上がり、海に囲まれた大きな島の写真を写し出した。

ぱつと見だと森があり山があり川があり湖がありと自然あふれる結構大きめの島に見えるけど、文明が栄えてる様子はないからまあ所謂無人島ってヤツかな？

『こちらが今回のイベントエリアです。正確には島の陸地、島の上空500メートル、島から20メートルの海まで。島を覆う結界に触れた

ら失格になるので気を付けてねー』

スクリーンにチエシヤさんが今言った範囲を示す図が表示される。まあ私は空も飛べないし水中戦が得意な訳でもないから普通に陸上で行動すれば良いかな。

『それで今回のイベントのルールだけどー、バトルロイヤル』の名前通りこれから皆さんには殺し合いをしてもらいまーす。正確には開始と共にここにいる参加者達がこの島のランダムな地点に転送されて、それから島にいるへマスターの数で三人になるまで戦いあって貰う感じー。勝ち残った人には豪華報酬があるからがんばってねー』

「……あちゃー、三人までなのか」

うーむ、四人組の私達が勝ち抜くと一人は必ず脱落する事になるのか。バトルロイヤルである以上は予想してたけど思ったよりもクリア人数は少なかった様だ。

「……ど、どうしましょう?」

「さっき言った通り可能な限りこのメンバーで協力して勝ち進むって所は変わらないけど、その最大人数が三人になるだけよ。残った一人は可哀想だけどこれもルールだから。……まあ集まったへマスター達は精鋭ばかりだし、この四人が揃ってクリア出来るなんて確率はかなり低いだろうから余り気にしないで良いと思うわよ」

アリマちゃんとおひめひめさんが小声で話し合っていたので私とミュウちゃんもその方針で問題ないと答えておく。思ったよりも勝ち残り人数が少なかったけどまあしようがない、どうやら運営達はちゃんとしたバトルロイヤルが望みらしいしね。

『さて、今回のイベントには普段とは違う要素がいくつかあるんだー。……まず、今回のイベントでプレイヤーが死亡した際には、特別にデスペナルティ無しで自分のセーブポイントに転送されるよー。ついでにアイテムのランダムドロップも無しになってるー』

「マジで?」

「至れり尽くせりだな」

「じゃあ普段からそうしてくれよ……」

ふーん、私はこれまでデスペナになった事は無いけど、それならリスクも少ないし気軽に参加出来るかな。バトルロイヤルを積極的にやって欲しい運営からの心遣いって事かな。

『ああでも、死亡した従魔や奴隷の蘇生は出来ないし、壊れた装備も修復機能がある奴以外は直らないからそこは気を付けてねー。他にはさつきも言ったけどイベントエリアのスタート位置は個々人でランダム、かつ他の参加者とは一定以上離れて配置されるからねー。それとイベントエリアには無関係の野生モンスターは入れない様になってるよー。後は【救命のブローチ】の使用は今回禁止ー。でもそれ以外のアイテム……例えば身代わり効果持ち特典武器なんかは大丈夫だからねー。アイテムの禁止に関してはこれだけー』

まあ【ブローチ】の禁止は決闘とかでもそうだから参加者の動揺は少ないみたいだね。むしろ他のアイテムは好きに使って良いらしいから、お兄ちゃんをこき使った甲斐はあったみたいだな。

『最後にイベント内容についての詳細ねー。さつきも言った通りイベント自体はプレイヤー同士によるバトルロイヤルなんだけど、島内にはイベント用の特殊モンスターも配置されてるんだー。そして特殊モンスターを倒すとそのモンスターの強さに応じてHP・MP・SPが一定割合回復する上、各種消費アイテムをドロップする様になるよー。上手く使つてねー』

特殊モンスター上手く使えばバトルロイヤルで消耗したHPとかを回復出来る……とはならない気がするなあ。モンスターを倒すのにも手間が掛かるし、戦闘中を狙われる可能性もあるからその辺りも警戒しないと。

『更に島の各地にはレアアイテムが入った宝箱がいくつも配置されているからねー。どれも希少なアイテムだから欲しい人は探してみるのも良いんじゃないかなー。……それと今言つた事以外にも『隠しギミック』がこのイベントにはあったりするからお楽しみにー』

何か『バトルロイヤル』って要素から離れたギミックばかりな気がするね。単なるサービスなのかそれとも罠なのか、或いはギミックを増やす事で状況を混沌とさせてそこから各へマスターへ達がどうする

のかを見定める気なのか。

……そんな風に思わず深読みしてしまう説明だったね。他のヘマスタ―達も半分ぐらいは何か考え込んでいるし。

『説明はこれで終わりねー。……それでは一斉転送を始めるよー。みんな頑張つてねー』

……そんなチェシャさんの声と共に、私達は一斉にイベントエリヤへと転送されたのだった。さてどうなる事やら。

◇◇◇

□■ イベント用管理AI作業領域

「各ヘマスタ―達をエリア内への空間転移は完了した。イベントエリヤとなっている島に敷いた隔離・強制転送の結界にも今のところ異常は無い」

「……イベントエリアに張った……偽装結界も問題ない……わ」

「こちらでも確認した。少なくとも現在島に気付いたモンスターは周囲にはいない。島内に配置したイベントモンスターも問題無く稼働中だ」

「死亡したヘマスタ―のアバターの即時復活準備も出来てるわよ」

「配置したアイテムも問題ありませんねい」

「島内の自然環境にも今のところ問題は見られない」

「ご苦労さまー……初めての限定隔離イベントは今のところ順調だねー」

そこは今回のイベント用に用意された管理AI達の作業領域。今回の『バトルロイヤルイベント』は〈Infinite Dendrogram〉に於ける初めての限定隔離イベントであるので、今後の同型イベント運用のための各種機能確認や不具合の調整の為にこの様な場所で管理AI達は各種データの解析を行っているのだ。

「少なくともシステム面に於いての不具合は見つからないね。データは集まったし次からは忙しいダッチェス達とかには楽しませてあげられるかも〜?」

「問題は参加したへマスター」達の動向だな。データ収集の為に敢えてへマスター」同士の戦い以外の要素も加えてみたが……」

「隔離イベントの目的はへエンブリオ」を進化させるカンフル剤の一つだもの。普段とは違う環境でのへマスター」達の行動がどう影響するのかを見るんだからそれでいいじゃない?」

「今回のイベントでは第六形態に至ったへマスター」は参加していないが、特典武器持ちや超級職持ちもいるからな。進化の為のカンフル剤としては悪くないだろう。……私も「隠しギミック」を用意したしな。時間が来れば投下しよう」

そうして彼等はデータを集めつつも島内のへマスター」達の様子を覗き見ていた……ちなみに何名かの管理AIは個人的に目を掛けているへマスター」に参加券が渡る様に仕向けたりしたりする。

「しかし、今後のデータ収集の為とはいえ今回はややイベントとしては混沌とし過ぎているな」

「まあ、ジャバウオックの用意した「隠しギミック」と言い、純粋な『バトルロイヤル』とはいかない感じになってるかな」

「今回は実験みたいなものだし、今後はちゃんと特典分野に特化したイベントをやっていけばいいんじゃない?」

「そうね。……とにかく今はどのへマスター」がこのバトルロイヤルを勝ち残るかを見守る事にしましょう」

こうして裏方で頑張る管理AI達を他所に、イベントエリアでは世界中から集まったへマスター」達による熾烈な『バトルロイヤル』が始まっていったのだった。

まあ【シャウト・ハンター】はボーナスキャラと言うよりは要するに見つけた参加者に片っ端から襲い掛かりながら、大声で自分の他の参加者に位置情報を知らせる事で参加者同士が戦い合うバトルロイヤルを促進するのが役割のモンスターなのだ。

「……しゃーなし切り替えよう。要はこっちに向かって来るヤツを全員返り討ちにすれば良いんだ。元より俺は光と音を出しまくるから隠密には向いてないし」

とは言えそこは天地の修羅勢へマスター、元々色々な強者と戦える事に期待してイベントに参加したので、他の参加者の方から向かって来るなら好都合とポジティブに考えつつ油断なく辺りを探り……その直後の背後で《殺気感知》に反応があった。

「ッ!? 《轟雷一閃》!!」

「どわあッ!?」

アンブツシユは『野武士一撃必殺理論』が流行っている天地では良くあるので即座に反応した彼は、その場から飛びすさりつつ【ヴァジユラ】を背後に向けてその矛先から電撃を放射して背後に迫っていた男に叩き込んだ。

……だが、直接流し込んだ訳ではないので威力は落ちているが、それでも上級職が使う中位電撃魔法程度の出力はある雷撃を食らったにも関わらず、その男の「マスター」は来ていたフード付きローブに僅かに焦げ目を付けた程度で無事だった。

「イテテ……奇襲はダメだったか、やるねえお前さん」

「威力落ちてるとは言え電撃食らって余裕そうだな……成る程【身代わり竜鱗】か。確かそっちは禁止されてなかったな」

その男の懐から零れ落ちた竜の鱗の残骸を見て彼は自分の攻撃で相手が無事だった理由を察し、即座に『あの高いアイテムを何個も持つてはいないだろう』と判断して今度は直接電撃を流し込んで仕留めようと駆け出した。

「うおっと、いきなりかー!」

「投げナイフ……!」

だが、彼が駆け出すと同時に男は後ろに下がりながら複数のナイフ

を投擲、それに毒の様な物が塗られていると見た彼はへエンブリオのスキルを警戒して念の為にナイフを回避して……それによって出来た一瞬がこの戦いの勝敗を分ける事となった。

「やっぱ欲張るもんじゃねえなあ。《財宝は誰の物でも無く》」

「必殺スキ……なにいり!?? これは……!!?」

そうして男が自らのへエンブリオの名を宣言し、それを攻撃系の必殺スキルを警戒した彼の考えに反していきなり持っていたアイテムボックスの中身が全て周囲にばら撒かれたのだ。

……これが男のへエンブリオの【財櫃開閉 アリババ】の『対象一人の亜空間収納の中身を全て外に出して、その所有権を消去する』必殺スキル 《財宝は誰の物でも無く》である。

「くっ、俺のアイテムをばら撒いたのか!??」

アイテムボックスの中身を出すだけのスキルが必殺スキルなのかと疑問に思うかもしれないが、この世界のアイテムボックスは安物でも数百キロを優に超える物品を収納可能であり、ベテラン勢であれば複数のアイテムボックスにトン単位での物品を入れている事もあるのでそんな中身がいきなり周囲に放り出されたら少なくとも動きは止まってしまう。

現に彼のアイテムボックスにはイベントに備えて準備していた予備武器や多量の消費アイテム、狩ったモンスターの素材などが一斉に辺りにばら撒かれた事で即興の障害物となって足を鈍らせる……が、そこは天地の修羅勢というか『これ以上何かされる前に殺す』と即座に【ヴァジュラ】を投擲体勢で構えて必殺スキルを発動しようとした。「一手遅いなあ! 《ガベージ・スイーパー》!」

「なっ……!?? 俺のアイテムがっ!!」

だがそれよりも事前に流れを決めていた男が動く方が早く、発動された掃除屋系統上級職【大掃除屋《グレイト・クリーナー》】の《ガベージ・スイーパー》——一定範囲内のゴミを自分のアイテムボックス内に回収するスキルによって散らばったアイテムは全て男のアイテムボックスの中に入ってしまった。

本来掃除屋系統は他人が持っているアイテムや落としたアイテム

など所有権が設定されている物は「掃除すべきゴミ」と判定されない
のでスキルが対応する事ないのだが、男の『所有権の消去』の効果
がある必殺スキルと組み合わせる事で最悪クラスの盗難スキルと化
してしまったのだ。

「ヒヤハハハハハハアッ!!!」これでお前のアイテムは全部頂いた
「とりあえず死ねえ!」《極・轟雷一閃》《クリティカル・ジャベリン》
!!!」アババババババア!!!」

……まあ直後、攻撃体勢に入っていた彼が超音速で投げ放った
【ヴァジュラ】が男の直撃して、そこから超級職の奥義レベルの轟雷が
流し込まれた事によって男は黒い炭の塊となって絶命したのだが。

最も男は奪った物を保管する為のアイテムボックスに関しては物
凄く頑丈なモデルを選んだので必殺スキルを受けても無事であり、最
初からデスペナになってもアイテムを落とさないイベントで上位ヘマ
スターのアイテムを奪うだけ奪って死ぬつもりだったので実質勝ち
逃げだったが。

「……くっそ、倒したけど奪われたアイテムは返ってこないよなあ。
しかも不意打ちを食らうとは最悪……だ……」

そうして「背後から頭部・頸動脈・心臓・両足の関節部を撃ち抜か
れていた」彼は、散々な目にあつたと落ち込みながらそのまま地面に
倒れ伏してしまった。

「……まあバトルロイヤルに横入りは基本だからね。少し気の毒だと
は思うけど……」

それを成したのは当然彼らから100メートル以上離れた森の中
から光学迷彩など各種幻術を駆使して隠れながら監視していたひめ
ひめであり、彼女は彼が槍を投擲した直後の《殺気感知》を使っても
回避出来ないタイミングで光速・貫通性特化の《閃光之矢》を使って
狙撃したのだ。

光属性故に生成時間が長くコストも嵩む《閃光之矢》だが光速で放
たれるという最大のメリットから「アマテラス」の中でも狙撃に一番
向いたスキルであり、今回は《ピアース・アロー》による貫通力の上
乗せと《ヴァイパー・アロー》による軌道変更を合わせて木々の間を

すり抜けて彼の急所を射抜いたという訳である。

「……くそう、今回のイベントは踏んだり蹴ったりだあ……とりあえずあの男の顔は覚えたから次あったら絶対にぶっ殺してやるう……」
「……よし死んだね。喉狙った矢が外れて発生妨害の為の気管支じゃなくて頸動脈掠らせるだけだったけど、他が当たったしまあ良し」

そんな嘆きの声を上げながら彼は急所を撃ち抜かれた事でHPが尽きて光の塵となり、それを遠くから見て確認したひめひめは幻術を最低限の消音以外は解除しつつ【MP回復ポーション】を飲みながら油断なく周囲を警戒した。

（さて、あんなモンスターがいると分かった以上は下手に隠れるよりも合流優先の方が生存率は上がるかな。消耗したMPは【ドラグリーフ】の自動回復があるからまだ大丈夫だけど、やっぱり単騎での連戦は避けたいしね）

……そう考えた彼女は周囲への警戒と索敵を続けながらも可能な限り気配を消して森の中を歩いていくのだった。



□イベントエリア西部 メイス、プリンセス【戦棍姫】ミカ・ウイステリア

『当たれえー！』

『おっと、当たらないよー！』

『よく動く、ニュータイプとでもいうの!?!?』

目の前にいる脚部キャタピラのロボットが手に持ったマシンガンを撃ち込んでくるが、私はそれを“直感”で先読みして回避しつつ反撃に【どらぐている】の《竜尾剣》を伸ばしてロボットを刺し貫こうとする。

……転送されてから勘のままに適当に歩いていたら紅白のロボアニメで出て来そうなパイロットスーツを着た女性へマスターと遭遇、とりあえず殴り倒そうと迫ったらアイテムボックスから廃材や爆弾や煙幕を出されて牽制された間にロボットに乗られたのでこうやって戦ってるんだ。

『なんとお！ 伝説級合金シールドだ！』

『む、これも防がれたか……アレはこっちの攻撃を先読みしてるね』

控えめに言っただけのロボットと戦闘系超級職である私とのステータス差は圧倒的の筈なのにさっきから攻め込めない。相手の操縦技量もあるんだろうけど、初手から不意打ちにいちいち的確な対処をしている所を見るに、多分私と同じで危険を事前に察知出来るんだろう。

たったこれだけの戦闘で深読みし過ぎと思われるかもしれないが、相手の動きがいつもの私とよく似てるから多分そうだと思う。それが技術か「エンブリオ」かまでは分からないけれど……なので対策も直ぐに思いつく。

『不意打ち奇襲には頼らず、シンプルに圧倒的な性能差ステータスを持って、先読みが介在しない正面戦闘で叩き潰すのが一番かな』

『ゲエツ!?? ええいつ連邦のモビルスーツ……もとい超級職スベリオルジヨブは化け物か!!!』

私は超級職のSTRとAGIを全力で使って相手に向かって走り出しつつ、更に《竜尾剣》を地面に叩きつけて追加の加速を行い突撃した。

あちらも危険を察知したのか近付かせまいと手持ちの銃を連写しながら下がろうとするが、脚部がキャタピラなので機敏な動きは出来ず銃撃も当たりそうなヤツを「ギガス」で弾くか【どらぐている】の防御力とEND頼りで凌いで一気に呐喊する。

『機体が私の反応に付いて来れない!?? ……てゆーか、テイルブレードに大型メイスってどこのバルバ○スルプス○クスよ！ ガンタ○クで戦える相手じゃないでしょ!??』

『鉄○は私も好きだよっ！』

そのまま接近した私は相手が分かっているにも対応出来ない速度で《竜尾剣》を銃を持っている腕に突き刺して動きを止め、それと同時に引き戻す勢いを利用して跳躍してキャタピラの上に飛び乗って「ギガス」を振りかぶる。

『……フーちゃん、やっぱり二足歩行機能は必要……』

『それじゃあね。《インパクト・スマッシュ》!!!』

莫大なSTRによつて振り下ろされた「ギガス」は容易くロボットの装甲を粉々に砕き、スキル効果によつて発生した衝撃波は内部に乗っていた物理ステータスの低いパイロットをすり潰してそのHPをゼロとしたのだった。

『……よし、何とか倒せたね。あの機体の性能がもつと高かったら危なかったかも』

さて、次はどうするかと考えたが何と無く東側と南側側から嫌な感じがするので、とりあえず嫌な感じがしない北側に向かう事にする。

まあ見ず知らずの《マスター》だけのイベントだから私の「直感」は直近のものしか明確には感じられないんだけど、このまま留まっても話が進まないので動きながら他のメンバーと合流を願いつつ参加者を倒す方針で行こう。

『隠れながら進むのが最善なんだろうけどこの格好(着ぐるみ)は目立つし隠密系スキル持ってないし……まあ不意打ちには強いから即殺される事は無いでしょう』

それに今回は事件やら悲劇のないイベントだから、適当に頭空っぽにして楽しむのも良いでしょう。勿論生き残り豪華報酬は狙うけどね。

集められた強者達

□■イベントエリア南西部

「……旦那様、開始からずっと隠れたままですけど私は使わないんですの？」

イベントエリアの森にある茂みの中に身を潜めながら黒髪黒目で和装の小柄な少女——TYPE:メイデンwithアドバンス【憑器巫女 ツクモガミ】は少し不満そうな声音で肩を寄せ合っているパイロットスーツを着た青年に問いかけていた。

「いや、ツクモガミが今の戦闘形態になるとすっごく目立つ。今回はバトルロイヤルだから一人目立つヤツがいたら集中攻撃されるだろ。だから序盤は隠れながら敵の数が減るのを待つ作戦だ」

彼女の問いに対して青年——〈叡智の三角〉特別戦闘員【戦車操縦士】ジョージ・グレンはバトルロイヤルを勝ち抜く為に必要な戦術だと答えて、自分の活躍の機会がない事で機嫌を悪くしている相方を宥めていた。

……ちなみにツクモガミの方は外見が小学生ぐらいなので、茂みの中で男と一緒にいる光景は側から見ての犯罪臭が凄かったりする。

「……なんかどこかで凄く失礼な事を言われた気がするが……まあとにかく俺達の戦闘は目立つからな。戦力温存の為に今は待ちだ」

「そう上手くいきますの？ 私達どちらも操縦特化で隠密とか苦手ですし、旦那様も私に乗っていないければ雑魚じゃ無いですか」

「それはそうなんだが……流石に他の参加者に遭遇したら隠れるのは諦めるさ。どうせ一度戦闘に入ったら俺達は嫌でも目立つし、そこからは群がる敵を殲滅する方向にシフトするさ」

そんな主人の提案に渋々ではあるが同意したツクモガミはメイデンとしての部分変化を応用する事で自身の機能の一つである【対生物索敵レーダー】を腕に展開、それを見ながら辺りを警戒しつつ身を隠した。

それから遠方で【シャウト・ハンター】の叫び声や何かの戦闘音が聞こえてくる事もあったが、彼らは息を潜めながら茂みの中に隠れ続

けていたのだが……。

「……旦那様、どうやら見つかってしまった様ですの」

「……まあ、こんな雑過ぎるかくれんぼが上手くいくはずもないよな。

……ツクモ、戦闘準備だ」

ツクモガミがリーダーにこちらへ真つ直ぐ向かってくる生体反応を感知した事で、ショージ曰く『雑過ぎるかくれんぼ』は終わりを迎えたと判断した彼らは茂みから出て敵手の迎撃に移っていった。

『GUUAAAAAAAAUUU!!』

「ヒャッハー！ 見つけたぜエ！ もう俺様の【ガルム】の鼻からは逃れられねえぞ!!」

そんな彼らの前に現れたのは一匹の黒い大きな犬型のガードナーを連れたモヒカンの大男で、彼らは二人を見つけると犬の方は牙と爪で相手を引き裂こうとし、男の方は《獣心憑依》で強化されたステータスを活かして接近戦に持ち込もうと剣を構えて突っ込んで行った。

最も考えなしに突撃している様に見えて実は男は必要なら撤退する事も視野に入れており、更にこのへエンブリオ〈追撃猟犬 ガルム〉は匂いを記憶した相手の位置を把握するスキルを持っているので、仮に戦闘を仕切り直しても再び追跡して奇襲する事も考えているなど確かに彼はこのイベントに招かれるだけの実力を有していた。

「じゃあとりあえず【スモークデイスチャージャー】をポイつと」

「む、煙幕か。……だが無駄だア！ 俺の【ガルム】の鼻の前ではその程度の目くらましは無意味！ 行け!!!」

『GAAAAAAAAUU!!』

それ故に彼はショージが煙幕を焚いた事でその場から逃走する気だと判断して、視覚に頼らずとも敵を見つけ出して攻撃出来る【ガルム】に敵を噛み砕けて指示を出した。

上級のガードナーである【ガルム】なら乗機に乗っていない操縦士など容易く倒せるとの判断であり、その狙い通りに【ガルム】はショージに飛び掛かって……ツクモが巨大な機械の腕部に変形させて右腕に防がれて弾き飛ばされた。

『GAA!?!』

「なに!?? ……アレはまさかメイデン、へエンブリオ」が乗機のパートナーだったか!」

だがそれでもへマスター」が搭乗していない今なら倒せると男は考えたが、直後そこに見覚えのある僅かな揺らぎ——《瞬間装備》系統スキルの前兆が発生すると同時に腕部のハードポイントに大型の大砲が接続されてその砲口を彼らへと向けた。

「《四次元展開》【試作マルチプルカノン】セット散弾^{ショットガン}、ラピッドフア
イアですの」

「うおおおおお! 回避イ!!」

その砲口から連写された散弾が彼らを襲うが、鳴り響いた《殺気感知》に従って咄嗟に全力で回避に専念した事で散弾の一部に被弾する程度の軽傷で済ませる事が出来た。

……だが、その間にツクモガミの肉体変容は一気に進んでいった……両手に花鋭い伝説級金属^{オリハルコン}で出来た爪を、足は十メートル程の長さの鋼鉄の脚部に、背部からは複数の金属関節で構成された尾が生えて、頭部は竜を模した鋭い牙を持つ機械竜のそれとなり、胴体は人間が騎乗できるコックピットブロックを備えたものに変異してそこにジョージが乗り込む事で完成した。

『メタルドライガー・スウィッチングカスタム』アクティブ。各種機能正常駆動、いつでもいけますの』

『了解だ。……では戦争の時間と行こうか』

「……なっ、巨大な機械の竜だとお!??」

そこに現れたのは身長15メートル、頭部が尻尾までの全長が30メートルに届き、全身にミスリル合金製の装甲と複数の銃火器を取り付けられた大型ドラゴン型の機械であった。

これはかつてジョージが倒した古代伝説級^{ユニーク・ボス・モンスター}へU B M」【殲葬鉄

竜 メタルドライガー」の特典武器【換装機竜 メタルドライガー」へ、へ叡智の三角」のメンバーが中々完成しない人型ロボットへの鬱憤を晴らすかの如く現在出来る限りの強化改造が施された機体【メタルドライガー・スウィッチングカスタム】である。

「くっ、こっちは一旦引くぞ! 《チェイサー・ファンク》を……!」

『逃す気は無い』

『《四次元展開》対人射撃装備セットですの』

この「メタルドライガー」は「ツクモガミ」の『装備品に憑依してそれを自身のへエンブリオ』として扱う』スキル《神の宿る器》によってTYPE：アームズやチャリオツツのへエンブリオの如く自由自在に運用出来るので、男が逃げ出そうとするのを見て対応しようとする主人の意思を即座に、かつ正確に組みとって己の機能を行使するのだ。

そうしてツクモガミは瞬時に右手のハードポイントにガトリングガン、腹部に対人用のマシンガン、背部と脚部にはミサイルランチャーを装備して、既に左手に装備していたカノン砲と合わせて逃げようとする男に照準を向けてジョージにコントロールを移した。

『《一斉掃射》』

「グ、ぐわアアアアアッ!!!」

『AAAAOOOON!!!』

それらの砲口はジョージの【戦車操縦士】が有する特殊装備品の砲撃威力強化スキルを受けて一斉に火を吹き、回避行動に移っていた男達にマシンガンとガトリングガンの掃射によって動きを止め、そこにミサイルランチャーから放たれた焼夷弾が降り注いで焼き尽くし、トドメに弾種を徹甲弾に切り替えたカノン砲の直撃してそのHPをゼロにしたのだった。

……この「メタルドライガー・スイッチングカスタム」はそれだけでも純竜級に匹敵する性能を持つ古代伝説級特典武器に、《叡智の三角》謹製の装備品による改造とジョージのジョブスキル、そして憑依した装備を使い込む程に強化する「ツクモガミ」のパッシブバフスキル《神へと至りうる器》によって上位純竜級に匹敵する総合戦闘能力を有するのだ。

『目標の撃破を確認しましたの。次はどうしますの?』

「このまま森を抜けるぞ。騒ぎを起こした以上は他の参加者も寄ってくるだろうし、流石に障害物が多い場所は戦い難い」

『了解ですのー。《四次元格納》』

ツクモガミは主人の指示に従い一旦装備品をコックピット内部に備え付けられたアイテムボックス型逸話級特典武器【四次元箱 ケイオスキューブ】にしまい込むと、周りの木々をなぎ倒しながら南側にあった平原部へと向かっていった。

尚、この特典武器はハロウインの時に現れた【予次元箱 ケイオスキューブ】をへ叡智の三角メンバーと共に倒した際に獲得した特典武器であり、機能としては大容量の物体の収納やダメージ置換による不壊、中身を特典武器の一部とする事による盗難防止と自在かつ瞬時に物品の展開・収納を行うという普通のアイテムボックスの延長線上にある地味なものである。

『とりあえず頭部装備を【有線偵察用ドローン】に、脚部・腕部装備に【シールド型伝説級金属追加装甲】に変えておきますの』

「いくらコイツでも複数のへマスターから必殺スキルを受ければ流石に倒されるしな。索敵と防御重視でいこう」

だが、その【ケイオスキューブ】を【メタルドライガー】の《換装機構》を活かして【ツクモガミ】の一部として組み込み、自在に運用出来るへエンブリオとした上でスキル《四次元展開》と《四次元格納》及び《換装機構》を連動させる事で内部に収納した数々の装備を自由に付け替える事が出来る様になったのだ。

故にその名は【スウィッチングカスタム^{装備変更特化型改修機}】であり、へ叡智の三角の技術者達が（趣味とロマンと実用性とロボット開発が進まない鬱憤を込めて）開発した様々な装備を使い分ける事で高い汎用性を発揮出来る様になっているのだ。

『ドローンに反応あり、他の参加者ですわ。登録してあるへ叡智の三角メンバーでは無いですの』

「背部装備を長距離攻撃用の大口徑キャノンに変更、遠距離攻撃で先制する。……どのみちこの姿を晒した以上は向かってくる他の参加者を殲滅するしか無いからな。AR・I・CAとかの他に参加したクランメンバーと合流出来ればいいんだが」

そうして最初に隠れていた森から見て南側にあった平地に出た彼らは、騒ぎを聞きつけて寄ってきた参加者達に対してロボットマニア

達が作り上げた数多の武装による圧倒的な攻撃力による洗礼を与えていったのであった。



□■ イベントエリア中央部

「この痴女！ しつこい！ 召喚サモン「グレーター・ウッドゴーレム」「ロックゴーレム・トルーパーズ！」

「違います、これは日本のクノイチの正式な衣装です。《裂雷神剣》」

イベントエリア中央部の山岳地帯、ここではゴシック調のローブを纏い手に持った本から複数のゴーレムを召喚している少女と、全身を身体のラインがモロに出ているぴっちりスーツを纏い手足に僅かな装甲を付けて両手には小刀を持っているぶつちやけ痴女にしか見えない女性が激しい戦いを繰り広げていた。

……少女の方はレジェンダリア克蘭〈魔法少女連盟〉の一員である【高位契約者】ハイ・コントラクター「契約の魔法少女」ティア・ラメント、女性の方は天地からの参加者【雷サンダー 忍ニンジャ】退魔・忍である。

「あの痴女の足を止めなさい！ 《多重同時召喚》「ライトニング・ストライクバード」「ブレイズ・ワイバーン！」

迫る忍に対してティアは純竜級に迫るステータスのゴーレムを前に出して壁にすると共に、手に持った本から更に亜竜級クラスの雷を纏った怪鳥と炎の力を持つ翼竜を召喚して上空から敵に攻撃の指示を出した。

これだけ強力なモンスターを多数召喚出来るのは彼女が持っている本——召喚触媒の〈エンブリオ〉【契約法典 ゲーティア】によるものだ。この【ゲーティア】は最大72体の召喚モンスターと契約出来る召喚触媒であると共に、ここから召喚したモンスターにステータス上昇と召喚時MP軽減のパッシブ効果を与える事が出来る召喚師垂涎の〈エンブリオ〉。

そしてティアはそれと召喚師系統のジョブスキルを組み合わせる事で、複数人亜竜から純竜クラスのモンスターを自在に使役しながら

戦う事が出来る強力な「マスター」である。

「成る程、強力な召喚モンスターの物量で戦うスタイルと……ならば全て正面から押しつぶせばいいわね。《デュアル・スラッシュ》！」

『K I S Y A A A A ！？』

「なっ！？ 純竜級の「ウッドゴーレム」を一撃で！？」

「まだまだ行くぞ…… 《雷遁・雷撃波》！」

……だが、そんな強力な召喚モンスターの軍勢であるにも関わらず忍の雷を纏った双剣による斬撃で「グレーター・ウッドゴーレム」はあっさりと斬り裂かれ、群れを成して迫っていた「ロックゴーレム・トルーパーズ」も彼女が超音速で武器をしまおうと共に印を結んで放たれた大威力の雷によって粉碎された。

その理由は彼女が纏っているぴっちりスーツの「エンブリオ」【迅雷薄衣 ヤクサイカツチ】の《火雷神熱》——『戦闘時間5秒毎にSTR・END・AGI・DEXが1%ずつ上昇する』継続バフスキルの効果によるもの。そしてこの戦いに至るまで彼女は「シャウト・ハンター」を利用するなどして十分以上は戦闘時間を稼ぐ事で、自身のステータスを前衛系超級職クラスにまで引き上げていたという訳である。

「次は飛ぶ鳥を落とす！ 《鳴雷神撃》!!!」

『K I E E E E E E ！？』

「くっ！？ ワイバーンは撃って！」

「悪いが防がせて貰う！ 《黒雷神壁》！」

更に彼女は雷属性に耐性のある【ライトニング・ストライクバード】に対しては蹴りと共に放たれた衝撃波によって粉碎し、ティアの指示によって放たれた火球に対しても帯電する黒雲を自分の前に展開する事で全て防いでしまった。

これらは【ヤクサイカツチ】のスキルであり、それぞれ強力な効果を持つているが発動条件として『《火雷神熱》の使用時間が1分毎にスキルが順番に一つづつ使用可能になる』という条件が付けられている。

それ故に【ヤクサイカツチ】は本来なら戦闘開始から数分経たなけ

れば全力で戦えないデメリットを負ったへエンブリオなのだが、今回の様なバトルロイヤルでの連戦であれば事前に準備さえ整えれば初手から全力で戦う事も出来るのだ。

「なら追加召喚」させん。モードチェンジ【テンペストシユーター】「あぐつ!!?」

次々と配下の召喚モンスターが倒されていったティアだが尚も諦めずにアーチャー達を盾にしつつ新たな召喚モンスターを呼び出そうとするが、それよりもAGIで圧倒的に上回る忍が再び手に持った双剣——伝説級特典武器【錬鉄双刃 ジンオーガ】の片方が銃へと変形し、そこから放たれた雷を纏う風の弾丸に肩部撃ち抜かれた事によって召喚は中断されてしまう。

……特典武器【ジンオーガ】は装備スキル《武装合成》によって手持ち武器を最大4つまで自身に融合させる事が出来て、更に形状と能力を融合させた武器へと自由に変形・変更させる事も出来る。今回は融合させた風属性の魔弾を放つ魔力式銃器【テンペストシユーター】へと片方の剣を変形させて武器に雷を纏わせる《裂雷神劍》の効果と合わせて銃撃したのだ。

「これでトドメよ、モードチェンジ【十文字手裏劍】《迅雷飛刃》！」
そうして忍はもう片方の【ジンオーガ】を大型の十字手裏劍へと変化させて投擲、雷を纏いながら飛翔した手裏劍はワイバーンを斬り裂きながらティアの胴体を真っ二つにしてそのHPをゼロにしたのだった。

戻ってきた手裏劍をキャッチした彼女は両手の武器を再び双刃へと戻しながら、直ぐに次の敵を探す為に周囲を索敵し始めた。《火雷神熱》の効果は戦闘終了から300秒程で効果が解除されて再び一からやり直しになってしまう為である。

「さて、バフが切れない内に次の参加者を探さないかね……《土雷神波》」

そう言った忍から電磁波が全方位に放たれる……この《土雷神波》は一種のレーダーであり電磁波の反射によって物体の位置を探る他、電磁波が当たった対象に距離を無視して《看破》などの解析系スキル

を使う事も出来る強力な索敵スキルである。

そうして周辺を索敵して敵か「シャウト・ハンター」のどちらかを見つけ出して戦闘すれば……と考えていた忍だったが、その電磁波が「何者か」の反応を察知するとほぼ同時にそいつから慎重する鎖が自身に向けて超音速で放たれた事を感知してそれを慌てて斬り払った。

「重っ!?? しかもこの強度は……!」

咄嗟の斬撃とは言え今の強化された自分の攻撃……しかも「ジンオーガ」の『戦闘時間に比例して自身の性能を上昇させる』もう一つのスキル《戦刀錬刃》による強化、及び《武装合成》の『元の双刃形態では合成した武器の装備攻撃力・防御力の合計の半分が加算される』効果を合わせて各形態の中でも最大の攻撃力となっている筈の剣でも完全には斬り裂けなかった鎖を見て彼女は警戒心を強めていく。「……へえ、この強化された「紅蓮鎖獄の看守」を斬るのか……やっぱり世界中からへマスター」が集まるイベントだけあって強い人が多いね」

「お前は……何者だ?」

そして鎖が引っ込むと同時に恐らくは特典武具らしき青いロングコートを羽織り、一目でかなりの業物だと分かる軽鎧や小手などを身に付けた実に楽しそうな雰囲気青年が超音速機動で忍の前に現れた。

……その全体的なコーディネートはチグハグだったが、彼女はそれが天地でもよく見る『特典武具を中心にとにかく性能の高い装備を付けまくっている』タイプだと看破し、何より男の雰囲気から自分を始めとする多くの天地へマスター達と同じバトルマニアであると思われる戦闘態勢を取った。

「僕はファイガロ、アルター王国所属のへマスター」だよ。……さあ、やろうか」

「天地所属へマスター」退魔・忍……参る!」

……そうして、このバトルロイヤルというルールの中でへエンブリオのスキルによる最高に近い戦闘能力を有する事の出来る二名の戦

いが始まったのだった。

合流する者／潜伏する者

□イベントエリア東部

イベントエリア東部、この地区は荒れ果てた荒野が広がるエリアであり森林地帯や山岳地帯と違って身を隠せる障害物が無いので、この付近に飛ばされた「マスタ―」達はお互いの姿や戦闘中の他の参加者達をすぐに見つけてしまっていた。

故に一度戦闘が始まるとその事は付近の参加者にも直ぐに知られてしまい、更に隠れて不意打ちも難しい拓けた場所なので必然的に正面戦闘が多くなり、それが複数の参加者同士で連鎖した結果今回のイベントで最も多くの「マスタ―」達が入り乱れる大乱闘が起きていたのだった。

「ギャア!?? か、身体が勝手に……!」

「これは【魅了】か!?? マズイ避けてく……!??」

「くっ!?? ならば《心頭滅却》で精神状態異常耐性を……なんで俺に

【惑乱】の状態異常が!??」

「《不動心》とかも持つてるのに……ぐわあっ!??」

「おいこつちに来るんじゃない!??」

「クソツッ! 魅了攻撃を撒き散らしてるのはあの二人だ! 先にアイ

ツらを……な、待てガハツ!!」

……最もそれは少し前の話であり、今のイベントエリア東部の現状は【魅了】を始めとする複数の精神系状態異常に掛かった参加者達がお互いに殺しあうある種の地獄絵図と化していたのだが。

「アリマちゃん、とりあえず最優先で範囲攻撃を持ってそうな「マスタ―」を潰しますよ。その次ぐらいに精神異常に掛かっていない相手を狙います。《スライスハンド》」

「分かったよミュウちゃん。《精神分析》……《レーザーブレード》!」

「「ギャアアアアアツ!??」」

そんな光景を生み出した張本人達こそが混乱している参加者に紛れて危険な相手の首を後ろから手刀で斬り落としている【マジック・フィスト魔導拳】ミュウ・ウイステリアと、精神汚染を受けずに正気を保っている相手

を発光する剣によって斬り捨てている【狂信者】アリマ・スカーレットの二人である。

尚、正確にはアリマの両手に持っている異様な形状の剣——右手に持った伝説級特典武具の二又の剣【音叉角剣 ヴァニフォーク】から発せられる精神耐性を減弱させる音色《ウィークネス・テノール》と、左手に持つまるで「魔法少女モノ」に出てくるアイテムの様にハートなどをあしらった剣【ラブリーチャーミングハートソード】から発せられる万民を【魅了】する波動《チャーミングウェーブ》の組み合わせによるものだが。

「だったら纏めて吹き飛ばせ！ 《ラピッドファイア》《アグネヤストラ》ア！！」

「わつとと!?？」

「おつと、やっぱり範囲攻撃持ちは乱戦を一掃されるからダメですね」
それでも未だに精神汚染を受けていない一人の参加者が手に持ったアサルトライフル型の《エンブリオ》から多数の炎弾を発射する事で、元凶二人ごと周りの参加者を撃破しようと試みたが、既に複数の狂化系スキルによって前衛系超級職に迫るステータスを得ているアリマとそのステータスをコピーしたミュウはその攻撃を超音速機動で回避してしまった。

「……ちよつと掠りましたし、そっくりお返ししますね」

『《攻撃纏装》解放 《アグネヤストラ》』

「ギャアアア!?？」

「なつ!?？ これは俺の……!」

それに加えてミュウが滅多に使わない【ミメーシス】のスキル《攻撃纏装》の食らった攻撃のコストをそのまま支払う事で、自分がその攻撃を使用できる効果によってカウンター^①の炎弾を放つ事でアサルトライフルを持った男を含む何人かの参加者を蹴散らしてしまう。

だが、それでもこのイベントに出られるだけの強者達だけあってまだ動ける者の中には後の副作用と引き換えに精神系状態異常を回復させ、更に一定時間精神状態異常を無効にする【高濃度覚醒剤】を服用して対抗する者も居た。

「後の副作用なんて考えてられるか！ 《雲耀・疾風》《抜刀・千鳥》！
チエストオオオ!!」

「む、速い……ですが太刀筋が単純です」

『《エンチャント・フィスト》《アンチウエポン・カースナツクル》』

その内の一人の男がAGI強化のジョブスキルと斬れ味を強化する刀型へエンブリオのコンボを使いながら、近くにいたミュウに向かって大上段から斬りかかる……が、その必殺の意思を入れた斬撃はあっさりで見切られて、素手による武器防御のスキル《ウエポン・パリング》と拳の強化魔法を込めた裏拳で刀身の横部分を殴られて捌かれた。

更に彼女が装備している手甲「アンチウエポン・デモンズガントレット」のスキル、手首から上に触れた装備を呪怨系状態異常【呪物】とする効果で一時的に刀が使用不可能となり、それによって出来た隙を突かれて《攻撃纏装》でコピーした刀の斬れ味を上乘せした《貫手》によって心臓を貫かれて男は息絶えた。

「……1分経過。《伝播スル狂信》の判定時間です。ついでにクールタイムの終わった《チャーミングウエーブ》も」

「なっ、足が!?？」

「【高濃度覚醒剤】を飲んでるのになんで!?？」

「まさか精神耐性そのものに……!?？」

そうした混乱によって時間が経つにつれてアリマの常時発動型パッシブスキル《伝播スル狂信》によって、彼女に掛かった狂化スキルの副産物である精神系状態異常、及び精神状態異常のデメリットがある装備による精神汚染を伝播されて同じ精神状態異常されるへマスタ―が次々と増えていく。

更に《ウィークネス・テノール》を長時間掛け続けられていた事によつて、此処にいる参加者達はジョブスキルや【高濃度覚醒剤】ですら効果が無い程にまで精神耐性が下がってしまっていた。

「身体が動かなくなつて……!」

「スキルが発動しない!?？ これはなんの効果だ!」

「戦闘開始からもう3分経過、これでこの場の参加者の全てが私の術

中に落ちたよ」

「明確な状態異常対策持ちが居なかったのが幸いでしたね。では迅速に気を付けつつ全員倒しましょうか」

そうしてその場の参加者の全てが精神汚染によってまともに動けなくなった事を見た二人は、万が一〈エンブリオ〉などによる不意打ちや分からん殺しなどを受けられない様に気を付けつつも一人ずつ参加者を始末していった。

側から見ていると外見少女の二人が動けない〈マスター〉を淡々と始末しているという中々ホラーな光景であり、此処で倒された〈マスター〉達の話から彼女達へ「処刑少女」や「認識災害」などの二つ名が付いたりするのはまた別の話だ。

「よし、蘇生したり自爆したりする様な能力持ちは無し。全員光の塵になる所も確認したしこれで大丈夫でしょう。念の為に《人間探知》も使って……姿を消している人とかは居ませんね」

「とりあえずバフを解除して……やっぱり狂化スキルをフルに使うとMPSPがキツイね。まあいきなり荒野に飛ばされて大乱闘だったから使わないとやられてただろうけど」

尚、彼女達はイベントが始まった後に比較的すぐに合流出来たのだが、遮蔽物が無い荒野故その直後に大乱闘に巻き込まれてしまい、そこでアリマが広域魅了スキルを不意打ちで食らわせて主導権を握ってどうにか対抗出来たと言った所だ。

実際こうしてぶじなのは精神系状態異常対策持ちが少なかったなご運に助けられた所も多い事は自覚しているので、彼女達はこれ以上拓けたこの場所に留まる事をよしとせず直ぐに西にある森林・山岳地帯へと進んでいった。

「仕方ありません、私達で範囲攻撃が出来るのはアリマちゃんのみで精神攻撃だけですからね。私はこういう乱戦には余り強くないですから負担を掛けてしまいますが……」

「いや普通に乱戦に紛れて首刈りしてたじゃん。しかも私を狙いそうなヤツから優先して。……それに新装備の【邪妖精】シリーズのお陰でMPSPにもまだ余裕があるし」

そんな事を言ったアリマは回復ポーションを飲みながら首に着けられた黒字に白のハートがあしらわれた金属製の首輪——MPの割合上昇と自動回復の引き換えに精神状態異常耐性減弱と【服従】の精神状態異常を装備者に齎す新装備【邪妖精の首輪】に触れた。

ちなみにこのアイテムは「ラブリーチャーミングハートソード」と同じく〈魔法少女連盟〉が作成に関わった一品であり、使用者含めて【魅了】してしまうあちらと合わせて彼女を能動的に精神状態異常にする事で《伝播スル狂信》の効果を高めながらデメリットを相殺している。

「しかし「エアロ・タラリア」といい〈魔法少女連盟〉が作る装備は本当に性能が高いですね」

「あれでも「マスタール」による魔法系アイテム生産クランとしてはレジェンダリア魔法大国でもトップクラスだから。女性専用アイテムしか作らないけど」

「レジェンダリアのアイテムって性能は高いけどキワモノが多いイメージがあるよ。……さて、とりあえずこのまま西に向かって森がある場所に入るよ。流石に遮蔽物がない場所で遠隔武器無しは辛いし」
「うん分かった。私もまだ連戦はキツイし精神攻撃の射程距離の外から攻められるのには弱いしね。《伝播スル狂信》は私を認識してればかなり離れてても大丈夫だけど準備期間がいるし」

そうして彼女達は周囲を警戒しつつも急いで西にある山岳地帯の森林部へと向かっていったのだった……荒野の外側にはバトルロイヤルを勝ち抜く為に早く離脱した参加者や、未だに戦い続けている強者がいると覚悟しながら。



□イベントエリア北西部

「……だったらこっちよ！ 《ハウンドアロー》《ブリザードアロー》！」

「氷の矢？ でもそれじゃあ通らない。《熱体圏》」

イベントエリア北西にある森林部、そこでは予備武装の「凍竜の魔弓」を手に宙を自在に飛翔する氷の矢を放つレジェンダリアのヘマスターグレイト・マギアーチャー【大魔弓士】ひめひめと、迫り来る氷の矢を特典武器のスキルで超高温のフィールドを自分の身体の周囲に展開して溶かし防いだアルター王国へ月世の会所属ヘマスターゲイル・ボクサー【疾風拳士】日向葵の姿があつた。

……ひめひめはこっそり隠れながら漁夫の利を得る形で戦っている参加者を弾道を操って自分の位置がバレない様に狙撃し続けたのだが、少しやり過ぎたせいで葵に見つかって【アマテラス】による光熱矢の攻撃を【カルナ】の光熱吸収で無効化されてしまいこまで追い詰められているのだった。

「予備武器も駄目か……って!?」 《堅樹光球》！
「遠距離攻撃ならこちらにもある。《ヒートブラスト・コンバージョン》」

相性の悪さに歯噛みするひめひめだったが咄嗟に嫌な気配を感じた為、光の防壁を張りつつ地面へと転がった……その直後、葵は【カルナ】内に蓄積された膨大な熱エネルギーをMPに変換して頭部に付けられたサークレット型逸話級特典武器【熱竜冠 ヒートライザ】から超高温の熱光線を発射した。

放たれた熱光線は周囲の森を焼き払い炭化させながら突き進み、更に葵はそのまま首を振る事でひめひめが居た位置を薙ぎ払う様に熱線を移動させて前方一帯を纏めて焼き払ったのだった。まあそこは百戦錬磨のひめひめであるので光の障壁で防ぎつつ、射線を見切つて薙ぎ払われた反対側に避ける事で長時間照射される事を防いで凌いだのだが。

（あつぶな、バリア使つてなかったら即死だったわね。しかし今ので蓄積した光もこっそり持っていかれたし。……さっきの動きからしてステータスとジョブビルドはおそらく前衛系なのにこの火力、コストのMPはどこから……さっき私の光熱矢が当たった瞬間に消滅した事から【ドラグリーフ】と同じ光熱の吸収蓄積かしらね。そこに熱攻撃のスキル持ちを組み合わせてこの惨状と。どっちがどっちかは

わからないけどへエンブリオ」と特典武具のコンボ。それなら……）
「……仕方ない、本当はもう少し練習したかったんだけど……【アマテラス】第2形態」

——Form II 【Twin Bowgun】

それでもひめひめはその戦闘経験と明晰な頭脳からここまでの短い戦闘で相手の能力を大凡看破してみせ、その上で『このまま撃ち続けられれば負ける』と判断してこちらからも反撃を行うべく【凍竜の魔弓】をしまいながら左手の紋章より二丁の片手持ちボウガンを呼び出した。

このボウガンは【アマテラス】が第五形態へと進化した際に追加されていた新形態であり、通常の和弓モードよりも魔法矢の威力と射程距離が減る代わりに二丁持ちによる手数倍加と魔法矢の連射性・速射性が向上する事による近接戦に特化した姿である。

「さて、光や熱エネルギーは吸収するみたいだけど爆発で発生する衝撃波とかはどうかな？ 《ヴァイパーアロー》《爆裂之矢》！」

「チツ、《クロスガード》！」

そして瞬時にひめひめは両手のボウガンに爆発属性の魔法矢を5本づつセットしながら弾道を設定して発射、敵の360度全方位から時間差付きで襲い掛からせて葵を爆撃していった。

咄嗟に腕を交差させて防御力を上げるアクティブスキルで防御した葵だったが、爆発によって発生した熱エネルギーは【カルナ】で吸収出来ても純粋な物理エネルギーである衝撃波は吸収出来ず、また《熱体圏》もあくまで熱エネルギーを纏わせるだけなので物理攻撃に対する防御には効果が薄くそのまま衝撃波によって吹き飛ばされてしまう。

「ふむ、やっぱり吸収可能なのは光と熱エネルギーだけか。このまま撃ち続けて押さえ込む」

「むむ、こつちが射撃しようとしたら潰される……見かけによらず戦闘技術オバケ枠？」

そのままひめひめはボウガン形態の速射性を活かした絶え間ない連射によって爆撃を行いつつ、それによる衝撃波で葵の耐性を適時崩

す事で遠距離攻撃手段である《ヒートブラスト・コンバージェンス》を撃たせない様に立ち回っていた。

葵も反撃しようとするが全方位から襲い来る爆撃の回避と防御に手間取って、更に熱戦を撃とうとするタイミングでピンポイントに体勢を崩されて頭部の前方にしか撃てない特性からまともに相手の方向に撃つこともままならなくなっていた。

「でも威力はそんなでもない……突っ込んで接近戦に持ち込めば。《ストーム・ステップ》」

「チツ、やつぱりこつちじや威力が低いから仕留めきれないか。ストッピングパワーが足りない」

しかし、それならばと葵は高速移動系のスキルを使いながら弾幕を避けつつ、避けきれない物には防御を固めて無理矢理に突破する事でひめひめに対して近接戦闘に持ち込む事で仕留める方に作戦を変更した。

当然近づかせない様に応射するひめひめだったがボウガン形態の「アマテラス」では威力が低くなり過ぎ、加えて《爆裂之矢》は爆発の衝撃と熱エネルギーによる広範囲攻撃なので単純な威力は低く、その上で熱エネルギーは吸収されているので相手を倒すだけの火力を出す事が出来ずに接近を許してしまった。

「……止めきれないわね」

「捉えた。《インフェルノ・バーンナックル》《ストーム・ラッシュ》！」
そして葵は両腕に装備した「インフェルノ・デモンズガントレット」のスキルによって両拳に豪炎を纏わせながら、「疾風拳士」の奥義によって目にも留まらぬ速さのパンチのラッシュをひめひめへと打ち込……もうとしたが最初の一発が入った瞬間、ひめひめの身体はまるで霞の様に消えてしまった。

「えっ!? まさか転移!? ……いや幻術だったの? いったいいつの間に……」

その光景に流石の葵も今までの冷静な表情を崩しながら慌てた様子で周囲を見渡すが、辺りは彼女達の戦闘の余波によって焼き払われた森が広がるばかりで誰かがいる気配は無かったのだった。



「……ふう、流石に相性が悪過ぎるわね。だからこそバトルロイヤルなら「逃げる」一択よ」

先程の戦闘地点から更に西へと進んだ場所にある森林部、そこまで全速力で走って逃げて来たひめひめは光学迷彩を解いて漸く一息吐いたのだった。

……実は彼女が【アマテラス】第2形態を出した時点で《イリユージョン・エイリアス》による幻影も一緒に展開しており、更に自分は光学迷彩で姿を消しつつ魔法矢の軌道进行操作して一見幻影の自分が矢を放っている様に見せかけながら爆炎に紛れて戦闘地帯から離脱していたのだ。

(しかしMPを消費し過ぎた、ポーションだけでも完全には回復出来ないか。仕方ないから他のメンバーとの合流は後回しにしてしばらくは潜伏優先ね)

そう考えたひめひめは【ドラグリーフ】のフードを被ると共に光学迷彩と比べて消費MPが少ない体色変化の幻術で森林柄の迷彩を自分に描いて森の中に溶け込み、更に周囲を警戒しながら木々の間を音をなるべく立てない様に移動するというゲリラみたいな動きを始めた。

彼女は追い込まれた事によってこれまで少しあった油断を消して今までの参加者を積極的に減らす方針から、可能な限り戦闘を避けながら潜伏して生き残る事を優先する方針へとシフトしたのであった。

潰し合う参加者達

□ イベントエリア南側

『《四次元展開》【大型滑腔砲】を二挺前腕肩部ハードポイントへ、【対人榴弾】セット。背部ミサイルランチャーには【対人誘導炸裂弾頭】を追加装填ですの』

『全く、俺はレイドボスじゃないんだぞ。《ハウザーインパクト》！』
「二ウワアアアアアアアアアアッ!!!」

イベントエリア最南端にある海岸に面した草原地帯、そこでは地面で両手両足掴んで四足歩行状態になった機械の竜【メタルドライバー・スウィッチングカスタム】がパイロットであるジョージ・グレンの操縦の下、機体各部に装着した重火器を自身を取り囲む他の参加者達へと一斉に発射していた。

そして放たれた砲弾とミサイルは【戦車操縦士^{タンク・ドライバー}】のアクティブスキル効果も加わって大爆発を起こして周囲の「マスタ」を飲み込んでいく……が、地球の歩兵相手であれば有効であった榴弾も、人間が戦車以上の防御力を持つことも珍しくないこの^{Infinite Dendrogram}の 世界においては必殺の兵器とは言えなかった。

「無駄無駄ア！ 《絶対具足》《アストロガード》！」

「直撃を避ければ！ 《硬気功》！」

「他を囮にして全力で避ければいいな。《アクセラレイション》！」

「全て斬り払う…… 《玉弾き》！」

ある者は「エンブリオ」とジョブスキルを組み合わせて自身の防御力を大幅に上昇させてミサイルの直撃を無傷で防ぎ、またある者は地面から土の壁を展開して砲撃を防ぎつつ爆発を自身の防御力を上昇させる事で凌ぎ、更に別の者はミサイルを誘導を上手く他人に押し付けて回避し、果ては向かってくる砲弾を全て刀で斬り払っている者ま

でいる始末。
『全然数が減らないですのー、取り敢えず砲弾を【HEAT弾】に変えますの』

『やっぱり目立ちすぎたせいで袋叩きにされてるなあ。《貫徹甲弾》

！』

「ゴフツ!?? 俺の鎧が……!」

それでもジョージは愚痴りつつも搭載されたセンサーによって爆風の中の敵の位置を割り出し、装填された対物貫通力に特化した弾頭を対物攻撃に特化した砲撃スキルで撃つ事で全身鎧を纏った「マスタール」を始末していた。

……「ツクモガミ」を戦闘形態にして戦い始めたグレンであったが、やはりその巨体は目立ちすぎた上にその高い戦闘能力を見た他の参加者が『まずはヤツから狙え』と言わんばかりに即席の同盟を組んで攻撃を仕掛けて来たので今の様な多勢に無勢を強いられてしまっているのだ。

「ヤツは砲撃特化だ！ 接近戦を狙え！ 《ストーム・ステインガー》」

「斬る……! 《斬鉄》!」

「チツ、だが接近戦が出来ない訳じゃないんだがなっ!」

『普通の戦車だった頃とは違いますの!』

そして爆撃を高いAGIで掻い潜った禍々しい槍を持った「マスタール」と日本刀を持った「マスタール」が左右から「メタルドライガー」へと接近戦を仕掛けるが、ジョージは瞬時に機体を操作して肩の大砲を犠牲に槍を受け止めつつその場から跳びのきながら相手を振り払い、更に機体を一回転させる事で長い尾を鞭の様に奮って刀の男を殴り飛ばした。

元より地竜を模して作られた「メタルドライガー」は自由に三次元機動が出来るレベルの運動性を持っており、その上で「ツクモガミ」と融合して「エンブリオ」化する事でジョージの意思通り自在に動き回る事が出来るのだ。

「ヒヤッハー! 隙を見て漁夫の利だぜえ!!! 《ミサイルパレード》!!!」

「うおっ!?? テメエ!!!」

『背部ユニットを迎撃用ガトリングガンに』

ジョージ達にとって幸いだと言えるのはこれがバトルロイヤルであり彼等があくまで即興で連携を取っているだけなので付け入る隙

があり、更に今の様に他の参加者が割り込んでくる事もあるので状況が混戦じみて一人だけが狙われる事がまだ少ない事か。

だが、それでもこの戦場で一番目立つのはサイズがデカくて強い自分達であると彼等は考え、今もモヒカンの「マスター」が手に持ったミサイルランチャーから発射されたミサイルの三割程が自分に向かってきた辺り、此処にいる参加者は常に自分達から意識を逸らしていない以上は逃げるのは最早無理だろうと判断した。

『まあ逃走の選択肢が無い事は最初から分かりきっていた事だがな……ツクモ、近接戦特化形態に移行！』

『了解ですの。射撃武装収納、直立モードに変形。腕部【ヒートブレードシールド】【対人ガトリングガン】展開、背部には【ミサイルランチャー付きランドセル】、腰部には【対人機関砲】を装備』

故にジョージは逃走ではなく闘争の選択肢を選び、それに答えたツクモは「メタルドライガー」のフレームを稼働させてあたかも古き良き特撮番組に出て来る二足歩行の怪獣の様な姿へと変形させた上で全身に近接戦闘用の装備を装着した。

元々「メタルドライガー」にはへU ユニーク・ボス・モンスター B M だった時代から四足歩行形態、前傾姿勢の二足歩行形態、直立姿勢の二足歩行形態に可変する機構が組み込まれていた。そして特典武具になった現在でもフレームにはその機構は健在だったので、変形機構というロマンが大好きな「叡智の三角」メンバーは当然改造時に装甲を変形機構に干渉しない様に取り付けて、更にはそれぞれの形態での運用に特化した専用装備も作ってしまったのだった。

『これまでは引き気味に戦っていたが、ここからは消耗度外視でいかせてもらおう！ 《モーターラッシュ》！』

『背部ミサイル一斉発射ですの！』

「なっ速……ガハアッ!?」

まずジョージは近接戦に持ち込もうと近付いてきた「マスター」へ逆に接近しながら右腕に付けられた先端がブレードになったシールドを掬い上げる様に奮って両断し、それと並行してツクモが背部ユニットから左右及び上方向に多数のミサイルを発射して敵陣へと襲

い掛からせる。

それによって混乱した敵群に対して更に左腕に固定されたガトリングガンと腰部の機関砲から無数の弾丸をばら撒き、加えてその巨体からは想像出来ない程の運動性とAGIで動き回りながら敵を踏み潰したり尻尾で薙ぎ払ったりとこれまでとは打って変わっての大暴れを披露してみせたのだ。

「ゴイツいきなり動きが……うわあっ!?？」

「仕方ない……《彼方リユウセイよりの閃イトウき》《紫電一閃》！」

「こつちも出し惜しみはしてられないか……《龍脈コウの主はリユウここに》！」
「ヒヤッハー！　まとめて粉碎だぜえ!!! 《三千世界灰燼と化せ》！」

しかし、それでもこの場にいるのはそれぞれこのバトルロイヤルの参加証を手に入れた者——純竜級以上のモンスターをも倒せる凄腕の「マスター」達故、その中でも上澄みの者達は巨体を誇る「メタルドライガー」の圧倒的な暴力を掻い潜ってそれぞれの「必殺スキル」を用いて反撃に移る。

侍風の格好をした「マスター」は刀型「エンブリオ」の『斬撃のみを転移させて対象に当てる』必殺スキルと上級職奥義の剣技スキルを合わせて相手の尾を半分近く斬り裂き、チャイナドレスを着た中華風「マスター」は地面の下に隠していた龍型の上級ガーディアンと融合しながら周囲の大地と一体となって相手を地面に沈めて動きを封じ、モヒカンの「マスター」は手に持ったミサイルランチャーを単発式のミサイルランチャーへと変形させて胴体部を狙って撃ち込み咄嗟に掲げたシールド毎相手の右腕を吹き飛ばす大爆発を起こした。

『ええいつ腕が……やはり多勢に無勢か！　必殺スキルを一齐に喰らえば流石の「メタルドライガー」でも……!』

『こつちは必殺スキルが実質使えないのが辛いのです……でもまだまだ身体は動きますし、この近辺にリーダーには残った他の「マスター」は後四人ですので頑張るですの!』

それでもジョージとツクモは諦める事なくダメージを受けた「メタルドライガー」を無理矢理動かして反撃に移る。手始めに残ったミサイルを一齐に発射して侍風「マスター」を牽制しつつ、腰部と脚部に

グレネードランチャーを装備して下方に発射して地面ごと敵を吹き飛ばしながらその場を脱した。

そのまま四足歩行形態に移行しつつ「メタルドライガー」の切り札である《口部荷電粒子砲》に動力炉、及び追加装備した予備バッテリーのMPの大半を注ぎ込んで更には「戦車操縦士」の奥義まで使って残った敵をまとめて屠ろうとした。

『荷電粒子砲用追加バッテリー』展開及びMP急速充填！』

『破城砲撃』……いけるか？』

「まだ動くのかよお〜！」

「斬り捨てるのみ……！」

「マズイ！ ヤツを止めろ」《ヤドリギの枝よ、天へ伸びよ》「何？」

……その直前に先程の攻撃に参加しなかった槍使いの「マスタール」がどこからか“木製の槍”を取り出し、瞬時に何か異様な雰囲気を漂わせる球状のフィールドを展開してその場にいる参加者全員を飲み込んだ。

今までは声を上げるだけで余り目立たなかったその男の行動に他の参加者は警戒するが、既にその男——アルター王国所属の「マスタール」【呪槍士】カースト・ランサー シュバルツ・ブラックの攻撃準備は終了していたのだ。

『輝ける命脈よ、尽き果てろ』《輝ける才覚よ、消え失せよ》

直後、彼の「エンブリオ」【滅神呪槍 ミスティルティン】のスキルによって他の参加者の内前衛型の者の数万を超えているHPは1000以下まで下がり、続け様に使われたスキルによって合計レベル×50——カンストしている彼らにとっては25000に及ぶ威力の固定ダメージを叩き込まれてシュバルツ以外の参加者は一瞬で消し飛んだのであった。



「……よしよし上手くいったな、丁度いい相手がいたから他の参加者を扇動して争わせる作戦。正直危なかった気もするが最終的に俺の

一人勝ちだからまあよし。……やっぱりPK以外は上手くいくんだよなあ」

そうしてシュバルツは「メタルドライガー」など他の参加者の痕跡が跡形もなく消えた事を確認した後、素早くその場から離れて近場の茂みに隠れながらポーションを取り出して戦闘での消耗を回復させる為に飲んでいた。

彼の《輝ける命脈よ、尽き果てろ》は進化の結果条件を満たした相手にHP・MP・SPの内最も高い数値を最も低い数値とする効果になつており、それと《輝ける才覚よ、消え失せよ》を組み合わせる事によって例えば前衛型でもHPを強制的に下げた上で回避不可で格殺級の固定ダメージを叩き込む必殺のコンボ攻撃となつていたので。

最も彼の「ミステイルティン」はスキルの対象とする条件が『ミステイルティン自体に接触するか《ヤドリギの枝よ、天へ伸びよ》効果範囲に入る事』であり、更にスキルを使用するには必ず《エンブリオ》を保持して自分自身にもスキル効果が及ぶ状態で無ければならないデメリットがあつたので本来なら自爆気味の手段にしかない筈が何故か今の彼には一切のダメージがなかった。

〔救命のブローチ〕が無い今回のイベントではこのコンボは有効だな。〔ビートルス〕のお陰で俺には一切の悪影響は及ばない……消耗は激しいが〕

その理由は彼が手に入れた籠手型の逸話級特典武器「愚防手甲ビートルス」のパッシブスキル《坊愚忘業^{ボクゲガド}》の効果——装備者はこの特典武器を装備した腕で持っている手持ち武器からの悪影響を受けない——によって「ミステイルティン」による自分へのデバフやダメージを無効化しているからである。

ただし《輝ける才覚よ、消え失せよ》は固定ダメージを与える特性上無差別かつ条件付きのスキルにしては非常に燃費が悪く、対象者の数とレベルによって変動はするが先程の様にカンスト四人に使うだけでMPを最大値の半分近く持っていかれる。なので今回の様に連戦が予想される状況では使うタイミングは限られているし、今回もわざわざ敵の数が減った後に使う事で使用後にも最低限の継戦能力を

だが、ミカは得意の「直感」に寄ってレーザーが発射される直前に僅かに首を横に傾げる事で回避しながら直ぐに後ろを向くが、そこには森が広がるだけでおそらくは光属性魔法であろう攻撃を発射した術者の姿はどこにもなかった。

直後、左右から見えない攻撃点より時間差で計4条のレーザーが襲い来るが、彼女は最低限の動きでレーザーを回避して回避先を読んで放たれた少し出力の高いレーザーも【ギガース】を盾代わりにしてあっさり防いで見せた……実は少し前に彼女がこの地点に入ってから今の様な攻撃が立て続けに繰り出されていたのだ。

（ビームって事は光属性の攻撃だろうし姿が見えないのは光学迷彩によるものか。虚空からいきなり放たれた様にも見えええし多分それ。……でも全方位から放たれるし魔法の発射点自体を別に置く能力つてのも考えられるか。或いはロボアニメでよく見るビツトみたいなのを隠してるとかかな？）

今の森の中は全方位からの発射点が見えない光速レーザー弾幕が降るといふ普通の者にとってはキリングゾーンにしかならない場所と化していたが、直感だけで発射タイミングと攻撃の軌道が読めるミカにとっては攻撃範囲が狭く真つ直ぐにしか飛ばないレーザーはむしろ回避しやすい部類のものでしかなくこうして考え事をする余裕すらあった。

……とはいえ、この攻撃を行なっている「何者か」の位置は分かっておらず、ならばと「発射点」を潰そうにも下手に攻撃体制に入ればその隙を突かれて回避しきれない量の攻撃が飛んでくる可能性が彼女は高いと考えていたので今は回避に徹するしか無い状況であり……実際それをかなり離れた森の中から見ていた「何者か」もそれを狙っていた。

（ほう？ 死角から時間差でのレーザーも全て回避か防御ですか。……天秤座ライブラで見た彼女のジョブは「戦棍姫」、〈マスター〉で超級職を取った人と戦うのは初めてなので良い「取材」になると思いましたが、この回避能力は武器運用特化のジョブの力ではなさそうですね。あのメイスの〈エンブリオ〉の力ででしょうか？）

そいつは黒髪の男性であり片目を瞑りながら、その目の裏に全方位からのレーザーを余裕を持って回避するミカの姿を映して僅かに笑みすら浮かべていた。

そうして彼は光属性魔法のレーザーを放ち更には自分の目の代わりにもなっている空中浮遊する黒い玉——【光輝展星 ゾディアック】という名の「エンブリオ」を引き続き操りながら「取材」を続けていった。

（偶々手に入ったバトルロイヤルの参加券、初のイベントであればこれまで体験した事のない経験出来るだろうと参加しましたが良かったですね。「マスター」では未だ数少ない超級職に加えて私の攻撃を全て回避する異様な立ち回り、こんな経験はこの世界に来てから始めてですからとても良い「作品の為の材料」になりそうです）

そうしてその男——【閃光術師】フラッシュマンサーエフはとても嬉しそうな笑みを浮かべながらも、どうすればミカの力の底を測り体験出来るかを考えつつ【ゾディアック】を更に高速かつ精緻に動かして彼女への攻勢を強めながら「取材」を続けていったのだった。

星の光を超えて

□イベントエリア北西部

イベントエリア北西にある森林の一角、そこでは参加したヘマスタ―の中でも選りすぐりの強者である【戦棍姫】メイス・プリンセスミカ・ウイステリアと【閃光術師】フラッシュユマンサーエフの激しい戦いが繰り広げられていた。『うわつとおー・ドンドンビーム攻撃が激しくなるね！』

とは言っても実際の光景はエフが操る光学迷彩によって姿を消して、宙を自在に飛翔する球体型の彼の〈エンブリオ〉【光輝展星 ゾディアック】から放たれるレーザーをミカが必死に回避しているというかなり一方的なものだったが。

加えてミカを「非常に興味深い取材対象」と判断したエフは攻撃を行う【ゾディアック】の数を更に増やし、それと並行して使用される光属性魔法をより強力なものへと切り替えて、それに対して彼女がどこまでやれるのかを見極める為に更なる苛烈な攻撃を行い始めたのだ。

（おっと、更に攻撃の密度と出力が上がったね。回避も防御も出来ないレベルの密度の攻撃でこつちを仕留めに来る算段かな。……さてと正直状況はかなり悪いね。近接戦しか出来ない私じゃ、見えない相手の射程外からの遠距離攻撃を撃たれ続けたら何も出来ないし）

それらの攻撃に対してミカは己の「直感」に従って高いAGIによる回避と【撃炎棍 ギガース】を盾代わりにした防御で凌いで行くが、彼女は超級職とはいえ近接戦に特化した自分では反撃出来ない遠距離からの攻撃を撃たれ続ければ、いずれはジリ貧になってレーザーに蜂の巣にされるだろうとも考えていた。

実際彼女の「直感」でも回避や防御を仕切れずに【どらぐている】の強度任せでレーザーを喰らわざるを得ない状況も何度かあり、またレーザーの発射点にメイスから衝撃波を放って攻撃しても、エフが撃った後すぐに【ゾディアック】を移動させる事を徹底していたので破壊する事は叶わなかった。

（うむむ、これだけ撃ち続けられるって相手のMPはどうなっている

のか。なんか蓄積とか回復とかで補ってるんだらうけどさ。……それとさつきからそれなりに動き回ってるのに操ってるへマスターが見当たらない。光学迷彩で姿を消してるか或いは更に遠距離からビットを操ってるか、後者ならこつちを状況を把握する手段が必要だけど、ビットにカメラでもついているの？)

それでもミカは全方位から襲い来るレーザーを“直感”に身を任せながら動く事で直撃だけは避けて凌ぎつつ、敵手の能力特性を暴くべく頭を働かせていた。

……内心では光学迷彩した端末ぐらいなら空気の振動とかで位置情報を正確に把握出来るミユウ妹や、優れた頭脳で敵の〈エンブリオ〉の能力を明らかに出来るレント兄ならこの状況も楽に突破出来るだろうとかも考えていたが、現状では意味ない思考だったので頭の隅に置いておいて自分出来る事で現状を打破しようと動き出した。

(仕方ないいつも通り“直感”を活かして突破口を割り出そう。……超音速機動で無理矢理突破して離脱……ダメだね移動先を置き撃ちされて危険な気がする。このまま回避行動を継続してエネルギー切れ狙い……論外こつちが先に死ぬ。後は……)

そうしてミカはいくつかの手を頭に思い浮かべて、その選択肢の先にある危険を“直感”で読み取っていく……彼女の“直感”は自身に訪れる危険を察知するものであり、更に危険を乗り越える為に必要な行動を事前に示唆する事もあるのだが、その性質を応用する事でこの様に自分が取り得る行動が危険かどうかを判断して、逆説的にそれらの選択肢の中で最も“安全”——成功率の高い答えを選ぶ事も出来るのだ。

(……よし、この状況になった以上はこれが一番安全な手法みたいだし行くか)

『まずは《重位圏》！』

打つ手を決めたミカはまず【どらぐている】の装備スキルである《重位圏》を発動——このスキルは重力属性の応用で物質の質量を感知する事によって周辺の物体位置を知覚するものであり、その特性上例えば光学迷彩で姿を消していても質量さえあればその物体の位置を把握

出来る。

……ただしガチャで当てた特典武具である為か、この《重位圏》による感知は元の持ち主の魔力や“特殊な気”の運用・感知技術を前提にしたもので質量の位置をかなり大雑把な感覚的に装備者へと伝える仕様になっており、今の彼女では森の様な障害物の多い場所で小型の物体位置を把握するのは困難なので使用しなかったスキルなのが……。

『うぐ……やっぱりこの辺りの物体の位置が分かる感覚は慣れないね。特に障害物が多いと……でも見つけた。流石に木々のない上空に何かあるのは分かりやすい！ 《竜尾剣》！』

それでも何もない上空に浮いている一つの球体——エフ自身と視覚を共有する事でミカの戦闘を観察していた【ゾディアック】の一機を見つけだす事は可能であり、彼女は即座にテイルブレードを伸ばしてその球体を切断して破壊した。

それにより一時的にだがエフは戦場を見る“目”を失う事となりレーザーの発射も一時的に止まってしまう。当然彼は“取材”を続行する為即座に別の端末で視覚を確保しようとするが、それに先んじてミカは《ブラスト・スウィング》による衝撃波や《テンペスト・ストライク》による旋風をレーザーの発射点に向けて放つて【ゾディアック】を辺りの木々と破壊し始めた。

『障害物がなくなれば少しは見やすくなるでしょ！ そういう訳で危険そうな方向に《ブラスト・スウィング》！』

これらのスキルは上級職のスキルではあるが衝撃波や旋風の威力は使用者の攻撃力に比例する仕様なので、超級職としての圧倒的なステータスと装備攻撃力を持つミカが振るえば周囲の森を薙ぎ払って簡単な平地を作るぐらいは容易い。

加えてエフが彼女の実力の底を見ようと追加で【ゾディアック】を近付けていた事もあってその多くが攻撃に巻き込まれて損傷してしまい、加えて視点を別の端末に切り替えようとすると“直感”がそれを危険とみなして彼女がそちらに衝撃波を放つので状況の把握がし難くなる有り様だった。

『とりあえず危険っぽい方向に衝撃波を撃ったら攻撃の頻度が低くなったね。辺りもさっぱりしたしこれなら……』『G U A O O O O O!!!』

『むっ!』

そうして有利な状況を作って辺りを見回したミカだったが、突如としてまだ無事だった森の中からリアルな像程の巨躯と屈強な四肢を持つ獅子が飛び出し、更には前脚の爪を光らせながら襲い掛かってきたのだ。

咄嗟に彼女はその光刃レーザー爪を【ギガス】で受け止めて防いだが、その五本の爪の一本一本が【剣ソード聖マスター】の奥義《レーザーブレード》に匹敵する熱量を放っていたので思わず顔を顰めた。

『G A A A A A!!!』

『うおっと。イベント用のモンスターには見えないしタイムモンスターか召喚辺りかな?』

屈強な獅子の正体はエフが《天ソディアックに描く物語》——星に蓄積された光エネルギーを消費して黄道十二星座をモチーフとした多様な召喚獣を呼び出す必殺スキル——の一つ《獅子レオ》によって呼び出した純粹性能型の召喚モンスターである。

そのステータスは物理前衛型の上位純竜級モンスターに匹敵するレベルであり、主人であるエフの命令に従ってそのステータスからレーザークローを繰り出す近接戦をミカに仕掛けていった……のだが、その光刃は強度と耐久性も強化されている上級アームズの【ギガス】を壊せるレベルではなく、STRなどにステータスにおいても物理補正特化かつ前衛型超級職である彼女の方が上回っていたので逆に振るわれた【ギガス】によって弾き返される羽目になっていた。

『G Y A O O O O O!?!?』

『うん、まあ強いけど倒せないって程じゃない……んだけどねっ!』

圧倒的なSTR差によってあっさりと弾き飛ばされる獅子だったが、ミカはそれに追撃を掛けようとはせずに慌ててバックステップした……その直後、彼女がいた場所を見慣れたレーザーが貫いたのだ。

視線を向けた先にはエフがこれだけ避けられるならもう意味はな

いと光学迷彩を解除した黒い球体——【ゾディアック】がかなり離れた所に浮かんでおり、更に彼女と獅子を囲む様にして破壊を免れたのと新たに追加した物を合わせて十数個の球体が距離を取って浮かんでいたのだ。

『……ふうん？ 微妙に遠い位置にあるし……次はコンビネーションかな』

『GAOOO!!』

ミカがそう呟いて直後に包囲していた【ゾディアック】から高出力のレーザーが放たれ、彼女がそれを最小限の動きで回避した所に体勢を立て直した獅子が再び光刃爪を振りかざして躍り掛かって来たので今度は止まった所をレーザーで撃たれるのを嫌がって受けずに下がり回避した。

厄介な事に【ゾディアック】は彼女の衝撃波やテールブレードで破壊するには微妙に面倒な距離を保ったまま攻撃をしていた。これは今までの戦闘からエフが相手の射程距離を見切って対処し難い距離に配置したからであり、言うまでもなく光速のレーザーは多少距離が開こうが問題にはならないので獅子を全方位のレーザーが援護し、レーザーをどうにかしようにも獅子が邪魔をするという状況になっていた。

『ううむ、流石にレーザーを避けながらライオンの相手をするのはキツいかな。……まずは片方を急いで潰そう。《ノックバック・インパクト》！』

『GYAA!?!?』

そこまでの状況に追い込んで尚ミカは“直感”と超音速機動を駆使して獅子とレーザーによる波状攻撃を躲し続け、遂に持ち前の勘の良さで獅子が攻撃する一瞬の隙を見つけ出し、振り下ろされた右の爪に合わせる様に【ギガース】をアップパー気味に振るって相手の腕を勢いよく弾き飛ばした。

それでもダメージはないと判断した獅子は直ぐに体勢を立て直すうとするが、ダメージの代わりに当てた部分を【硬直】【部分麻痺】させるスキルで右前脚が動かなかった所為でその場に倒れ伏し、当然そ

の際に彼女はトドメを刺す為に超音速機動でレーザーを振り切りながら接近する。

「……《グリント・パイル》」
『むっ』

……だが、そのタイミングで戦場に接近していたエフ本人が光学迷彩を解除、それと同時にチャージしていた上級職の奥義である光属性魔法を解放して機動が一直線になっていたミカへと光に槍を放ったのだ。

複数の端末を、しかも遠距離からの関節視点で自在に操りながらレーザーで敵を攻撃出来る彼の空間認識力と射撃の腕は非常に高く、光属性故の光速の攻撃である事もあってその光の槍は超音速で動くミカを正確に捉えており真っ直ぐ彼女へと向かいその身体を貫く……。

『……それは解ってた。』
《重破断》
グラビトロン・デイバイダー

……筈だったが、その奇襲すらも“直感”で読み切っていたミカは《グリント・パイル》が発動する直前その射線に《竜尾剣》を置き、更にその刀身を光すら通さない様な漆黒に染めながら光の槍を受け止めたのだ。

この《重破断》は光すら捻じ曲げる超重力波を刀身に展開するスキル、それ故に漆黒の刀身に当たった光の槍はそのまま真っ二つに裂けて彼女の両側へと通り過ぎてしまう。そして彼女がわざわざ敵の本体を見過ぐす筈もなく、そのままテイルブレードを超音速で伸長させてエフの心臓を正確に貫いた。

『これで……嫌違う『G A A A A A！』チィ！ まだ動くか！』

しかし、確実に仕留めたと思ったそのタイミングでミカは自身の“直感”が警報を鳴らした事に気付いて辺りを警戒するが、そこに最後まで主人の命令を守ろうとする忠実な獅子がまだ動く手脚を持って彼女へと突撃を仕掛けたのだ。

その突撃自体はSTR差によってあっさり受け止められてしまうのだが、彼女の脳裏には獅子が突撃を仕掛ける事が出来た事——「へマスター」が死ねば従魔や召喚獣も送還される筈であるにも関わらず獅

子が未だに存在している事への疑問がよぎっていた。

『……まさか、さつきのは偽「《天に描く物語——アクエリアス溢瓶》」後ろ!?』

その疑問の答えにミカが辿り着くと同時にその背後から男の声がしたが、現在絶賛獅子を受け止めている彼女には後ろを振り返る余裕はなく体格差もあって弾き飛ばすにも僅かに時間がかかってしまう状況だった。

そして現れた「本物の」エフはその僅かな時間の中で既に「ゾディアック」の必殺スキルで水瓶座を描き終えており、その星座からは膨大な光エネルギーが蓄積された一つの『瓶』が召喚されていたのだ。

『回避は……間に合わないか』

「発射」

直後、その瓶が倒れると共に内蔵されていた膨大な光エネルギーが解放、無数の広域拡散レーザーと化して獅子諸共押さえつけられていたミカを光の奔流にて呑み込んだのであった。



「……ふむ、このタイミングで拡散レーザーを放てば回避しきれないみたいですね」

高域拡散レーザーによって残っていた木々をも焼き払われるか消し飛んでいて、その余波で煙と砂埃が立ち込める更地となった眼前を見たエフをそう一人心地た。

彼はミカの戦闘を見て『相手は何らかの方法でレーザーが来る方向とタイミングを完全に読みきっている』と考え、それなら発射された時には既に回避する場所がない広範囲攻撃ならば有効かもしれないと仮説を立てて、自身の必殺スキルの中で最大の攻撃範囲を持つ水瓶座を当てる為の戦術を組み立てたのだ。

それを実行する為に獅子を囿にしつつ自身に光学迷彩を使って接近、更に何かの防御手段を持っているかを見ると油断を誘う為に必殺スキルで作った自身そっくりの分身《ジエミニ双星》を囿として使って拡散レーザーを当てる隙を作ったのだ。

(さて、こちらの手札の中でも最大級に火力がある《溢瓶》が当たりましたし、着ぐるみの特典武具の強度を考えても十分貫通可能なので自身は致命傷の筈ですが。無数のレーザーが当たる使用上《身代わり竜鱗》の様な使い捨て防御アイテムも連続攻撃の判定で突破できますし。……ただあの回避能力のカラクリはまだ分かってないですし、超級職相手だからと必殺スキルを奮発して四つも使ってリソースが心許ないんですね)

それでもエフは未だに相手の先読みと回避のカラクリが完全に分かっていないので思考は続けていた。《エンブリオ》や特典武具のスキルで説明出来なくもないのだが、これまで様々な対象を“取材”してきた彼自身の観察眼がその安易な答えに疑問を表していたからだ。

或いは以前に似たような着ぐるみを着た《マスター》を取材した際に純粋な技術でレーザーに対処された経験があつたからこそ違和感を感じたのかもしれないが、彼にはその思考に長く浸る事は許されなかつた……何故なら拡散レーザーが直撃した筈のミカが土煙を突つ切つて超音速で自身の元に突撃してきたからだ！

『やつと見つけた本体イ！』

「ツ!?? 《グリント・パイル》！」

だが、ミカの今まで好きにやられてきた怒りとストレスを込めた突撃に対しても万が一を備えていたエフは即座に対応しており、あらかじめ自分の周囲に待機させておいた「ゾディアック」と共に既にチャージ済みの《グリント・パイル》を向かつて来る彼女に向けて放ち迎撃する。

当たればそれでよし、躲かれてもその間に再度必殺スキルを使つて盾役か逃走用の召喚獣を呼び出す狙いの攻撃だったが……その考えは放たれた光の槍が彼女の着ぐるみに当たった瞬間に霧散した事によつて打ち碎かれた。

「防御スキ 《インパクト・スマッシュ》!!!」ゴフアツ!??

それを見てエフは直ぐに相手は何らかの強力な防御スキルを発動していると判断したが、そこから何か行動するよりも速く光の槍を無視しながら超音速で接近したミカがその懐に潜り込みアクティブス

キルに乗せた「ギガス」をフルスイングする。

ジョブ構成が魔法系と非戦闘型の書士系統のみの彼の貧弱な物理ステータスで前衛型超級職の一撃に耐えられる筈もなく、着けていた防御装備も《防御スキル効果減少バリアブレイカー》によって突破された結果、衝撃波を伴い打撃と内部破壊を合わせた一撃を撃ち込まれた彼の肉体は一瞬でミンチより酷い感じになった後すぐさま光の塵となって消えていった。

『……よし、今度は本物だね。必殺スキルも対象者死亡で解除されるし』

ミカがあれだけの高威力レーザーを受けても無事だった理由は拡散レーザーが当たる直前にエフを対象として《ギガス我は禍ツ神を砕く巨人なり》を使っていたからである。その効果対象にした相手が自身に向けるスキル効果の大幅減少の力によって光属性魔法スキルの威力を減らし、更にこっそり着けていた光熱ダメージ軽減のアクセサリーと特典武器着ぐるみの強度によって耐えたのだ。

尚、必殺スキルは使おうと思えば最初から使えたが、ただ使うだけでは遠距離から撃たれ続けてSP切れで敗北していたのは明白なので、それを考えて敵の本体の位置が分かるまで我慢強く温存した彼女の戦術勝ちである。

『誰だか知らないけど超強い相手だったね。温存予定の必殺スキルも切っちゃったし……むむ！』

そうして念の為に当たりを警戒しながら戦闘跡地から離れる様に移動していたミカだったが、彼女にとっては慣れ親しんだ「危険」を知らせる感覚を覚えて眉を顰めながら足を止めた。

『うーむ、危険は迫って来る気はするんだけど「今はいない」？ 参加者ならそんな事には……とりあえず安全そうな方向に進もうか』

その感覚はやや妙なものであったがレーザーが当たって損傷した着ぐるみや疲弊した自分自身など消耗している現状ではまず安全を確保して休む時間が欲しいと思ったので、ひとまず彼女は警戒しながら危険が少ない方向に移動しつつ今後何が起こるかについて考えを

巡らせる事にしたのだった。

小康状態／次なる戦いは……

□ イベントエリア北側

『……ポーションで僅かに損耗したHPも回復したし、SPも【クインバース】の自動回復で回復済み。MPは最大値低いから使い切っちゃったしもう少し掛かるかな』

イベントエリア北側森林部、ここではドラゴンっぽい着ぐるみを着た【戦棍姫】メイスト・プリンセスミカ・ウイステリアが人気のない森の中を歩いていた。彼女は“直感”を駆使して可能な限り危険を避けながら進む事で厄介な参加者と戦う事無くここまで辿り着けたのだ。まあ途中で遭遇した【シャウト・ハンター】を瞬殺して回復薬代わりにしたり、大して危険ではない（超級職基準）参加者へマスターを即殺したりする程度の戦闘はあったが概ね損耗無しな状況である。

『しかし回復薬も見なくなつたね。全員倒しちゃったかな？ まあ五月蠅いのが居なくなつて有り難いけど』

ちなみに彼女の考え通りイベントエリア内に配置された【シャウト・ハンター】は大体倒されている。まあ対人間に特化した探知スキルと大声を上げるスキルがメインでステータスは亜竜レベルだし戦闘スキルも最低限、更に参加者を見つけたら大声上げて突っ込む思考回路だから悉く回復薬扱いされるのも当然だが。

尚、モンスター投下を行ったジャバウォックとしては“バトルロイヤル”を“かくれんぼ”にしない為に潜伏引きこもり参加者を炙り出すカンフル剤扱いで配置した【シャウト・ハンター】だったが、戦闘力が低過ぎる事や投下数が少なかった事でイマイチ思った程の効果は無かったという所感の様だ（データは取れたので次回に生かす予定だけ）

『……さてと、私の“直感”だとこの辺りが一番安全の筈だけど、まあ命が掛かってないイベントだから少し先を読む方の精度は低いかな……そのところどう思う？ ひめひめさん』

「……“それ”に関してはミカちゃんの特有の感覚だから私に言える事はないわね。知り合いの“占い師”ならもう少しまともなアドバ

イスが出来るかもしれないけど、私は「未来を視る」事は出来ないし」

そうしてミカが独り言を口な出しながら後ろを振り向くと、木々の間からまるで滲み出すかの様に緑色のフードローブを被ったグレイト・マギアーチャー「大魔弓士」ひめひめが姿を現したのだ。

……まあ、かなりワケありというか狙い通りみたいだなシチュエーションに見えるかもしれないが、単にひめひめはあれから幻術と下級職狩人スキルと本人の技術を駆使して頑張って潜伏しながら逃げ隠れて偶々ミカと合流出来ただけなのだが。

「ま、それはともかくとして合流出来て助かったわ。私単独だとこのバトルロイヤルイベントで勝ち進むのは厳しいし。……ミカちゃんの「直感」に期待してなかったといえは嘘になるけど」

『バトルロイヤルだけあって強い人が多いもんねー。危険を避けるなら味方がいる場所を示してくれるかもしれないとは考えてたし。……私もガンタンクに乗ったニュータイプとか、全方位からビーム撃つてくるファンネル使用とかと戦って大変だったから』

「ガ○ダム好きの参加者でもいたのかしら？ ……まあこっちも光と熱全吸収する相手には逃げるしか無かったし」

とりあえず二人は今考えてもしようがない事は頭の隅に追いやりつつ、まずはバトルロイヤルイベントをクリアする事に集中しようと考えて合流するまでにお互いにあった出来事や現状を掻い摘んで説明していった。

『……うーむ、炎攻撃全吸収は多分葵ちゃんかなあ？ アルターいた時の知り合いで「月世の会」のメンバーだった子。特典武器の性質からして間違いなさそう』

「アルターの「ヘマスター」だったのね。もしもう一度戦う事になったら私は戦力外だから貴女に任せるわ」

『うん、厳しい相手だけど力技で殴り倒せないって事はないだろうし。……ただ、多分これから参加者より厄介な「何か」が来そうな気がするんだよねー』

「なに？ いきなりイベントエリアにイレギュラーなユニーク・ボス・モンスターへU B M

でも襲撃を掛けてくるの?」

『多分違うよー、イベントにおけるイレギュラーではなさそう。でもそれに近い事は起きるかも。……やっぱり安全なイベントだからか』
『遠い勘』はイマイチ精度が荒いね。それは逆にいえばイベント自体は安全なんだって事だと思う』

「てことは最初にチエシヤが言っていた『隠しギミック』とかが怪しいわね。……何となく予想は出来る気もするけど」

そうして話し合いの結果『おそらくこのバトルロイヤルイベントには後もう一波乱あるだろう』と予想した二人は、今後起こりうる『何か』に備える為に可能な限り万全の態勢を整えるべく牙を研ぐのだった。



□ イベントエリア中央東側

「……むむ、《人間探知》に反応あり。ここから北西方向300メートルぐらい先ですね」

「それじゃあ迂回する?」

「あっちの方が森が濃いので身を隠しつつ進みましょう」

イベントエリア中央にある山岳地帯の森林部、そこには他の参加者との交戦を避ける為に移動して来た【魔導拳】マジック・フイストミュウ・ウイステリアと【狂信者】ファンナティックアリマ・スカーレットのコンビが周囲を警戒しつつ移動していた。

また、この際ミュウの特典武具【黒晶首巻 ブラックオーツ】の《人間探知》が大活躍している。人間しか探知出来ない欠点も参加者が《マスター》のみであれば問題にはならず、自分との大雑把な距離と角度程度しか分からない分だけ消費MPも少ないので【バイオハーデス】の蓄積MPがあれば常時使用も可能なので戦闘回避や先制攻撃など非常に役に立っていた。

「……む、向こうもこっちから離れていきますね。気づかれましたか?」

「さつきからこんなのはつかりだね。さつきまでと違って遭遇する参加者も少ないし、近くに行っても戦闘を避けて逃げていく参加者が殆ど」

「バトルロイヤルで生き残るにはそれが一番効率的ですからね。序盤からイケイケドンドンで戦ってる参加者は途中で息切れするか、或いはどこかで倒される人が多いのでは？ それで今生き残ってるのは逃げるか隠れるかを戦術にした人が多いのかと」

実際おおよそは彼女の言う通りであり序盤から積極的に戦って来た参加者は初見殺しが当たり前なへマスターが跋扈するバトルロイヤルという場もあつて多くが倒されており、勝ち残った者もその殆どが相応に損耗して別の参加者に倒されるか逃げ隠れして生き残る方に舵を切っている。

最初から完全に戦闘を捨てて隠蔽特化のへエンブリオの力で隠れ潜む者などを含めると現実のイベントは『かくれんぼ』の様相を呈して来ていると言えるかもしれない……最もそんな状況でも戦い続けて敵を片端から撃破する事が出来る “ごく一部の例外” な参加者もいるにはいるが。

「ふうむ、追撃するのもそれはそれでリスクがあるしスルーで良いですかね。どうせ別の誰かが倒すでしょう」

「……みんなそう思ってたらいベント終わらないんじゃないかな？」
「流石にそこまではいらない……と思いますが。いずれ誰かが痺れを切らすか、或いはまだ残ってる『うるせえぶっ飛ばす!!!』思考の人が動くでしょう。多分」

そんな彼女達が選んだ戦術も可能な限り戦闘を避ける生き残り重視というバトルロイヤルでは鉄板だがゲームだと特に面白味のない戦術なのだ。

まあミュウの方は使える手札が微妙に使いにくかったりクールタイムが長過ぎて連続戦闘に向いてなかったり、アリマの方は安定して強くはあるが精神汚染に掛けるのにどうしても長期戦にならざるを得ず消耗が激しいという理由で必要以上の戦闘を避けたいという判断だった。

「……あ、あそこに何かありますね。罨でしようか？」

「いや……アレって『宝箱』じゃない？」

「ああそう言えば最初にチェシヤが言っていましたね。すっかり忘れてました」

……と、そんな方針で人目につかない山岳地帯の森の中を前衛系ステータス任せに進んでいた彼女達だったが、偶然山肌の一部にある窪みに木と金属で出来たファンタジーモノでよく見るデザインの宝箱を見つけてしまったのだ。

とりあえず興味本位で近付いてみた二人だったが、宝箱を間近にした時点で何かに気が付いた様に足を止めた。

「……これ罨とかじゃないですよね？」

「どうだろう？」

まあ要するに宝箱自体が罨じゃないかの疑念を持ったのだ。まあこれまで殺伐としたバトルロイヤルイベントで戦い続けたし、何よりチェシヤが『隠しギミック』があるとか言っていたのが大きい。

「とりあえず周囲に人間はいませんね。これがモンスターという可能性もありますが」

『僕の間でもこの宝箱にステータスがある様には感じないけど……』

「それじゃあ範囲圧縮《スリーピング・ソプラノ》……反応はないね。やっぱり考え過ぎかな？」

「じゃあ開けますか。……もしミミックでも殴り飛ばせばいいんですし」

なので彼女達は念入りに周囲を警戒したり実はモンスターじゃないかを探って見たり、果ては催眠音波をぶつけてみても宝箱はうんともすんとも言わなかったので覚悟を決めて宝箱を開けると……そこには一つの透明な球状のアイテムが鎮座していた。

「ふむ、これは……【リソース・チャージャー】？ 使えば経験値が手に入る消費系アイテムみたいですね。……私もうカンストしてるんですが」

「私もー。なんかガツカリ感がスゴイ」

まあこのアイテムもイベント用に管理AIが用意した物なので一つ使えば下級職一個カンスト出来るぐらいのリソースが込められた一品ではあるのだが、散々警戒と覚悟を経て開いた宝箱の中身が今の自分達では使えない物だったので彼女達のテンションは低めである。その後の話し合いの結果、とりあえずレベル上げの頻度が非常に多い兄^{レント}へのお土産にでもすればいいかと自分を納得させた彼女達は再び殺伐としたバトルロイヤルへと戻っていったのであったとき。

◇

「……では気を取り直してバトルロイヤルを最後まで生き残りましょう！ せっかく参加したイベントだし楽しまねば！」

「そうだね！」

そんなイベントアイテムが微妙だった事は脇に置きつつ二人は再び周囲を警戒しながらの移動を再開するが、今度はもし戦いになった時に自分達が戦いやすい場所を見繕いながら移動する事にした。

いくら他の参加者から逃げたとしても足場が悪い場所に行ってしまったら動きが封じられて不利になるからという考えだが、宝箱を見つけた時に『今回はあくまでゲームだったね』と思い至って流石に逃げ回ってるだけではないつまでもイベントが終わらないと気付いたのもある。

「まあ結局は戦わないといけない気もしますし、せっかくのバトルロイヤルイベントで隠れんぼはつまらないでしょう」

「そうだねミュウちゃん」

「……後は『バトルロイヤルイベント』と銘打ってある以上はあの『シャウト・ハンター』以外にも運営が戦いを促進する“何か”を仕掛けてくる気もしますしね」

この手の“直感”はミカの専売特許ではあるが、特に“戦闘に関する勘の良さ”であればミュウもその才覚からかなりのものを持っていたりする。

……そのお陰かは知らないが、彼女達が移動してからしばらくした

後にミュウが前方からこちらに向かってくる複数の人間の反応を察知したのだ。

「……前方から何人か人が来てます。かなりの速度でこっちに向かって来てますね。どうします?」

「さつき戦うって決めたんだし迎え撃とうよ」

「まあそうですね。とりあえず剣が振りやすい様なある程度拓けた場所に移動しましょう。そういう場所ならアリマちゃん精神干渉もハメやすいですしね」

そう素早く話を纏めた彼女達は森の中で少し拓けた場所に陣取りつつ、各種自己バフや攻撃準備を整えていった……のだが、敵を探知していたミュウが人間の反応がいきなり一人減った事に気が付いたのだ。

「む、反応が一人減った? まさか戦闘中……いや」

「どうしたの?」

「……こっちに向かって来る人間の反応が一人づつ、しかも早いペースで消えています。消えた後に別の人間の反応があるのでおそらく戦闘中……というか何者かが参加者を次々と撃破しているみたいです。というかこれってこっちに向かってるんじゃないかと、襲撃者から逃げてる?」

彼女がそう言うっている間にも五人は反応があつた筈の《人間探知》内の反応が次々と消えて行き、あつという間に反応は襲撃者だと思われる一つのみとなってしまった。

……そしてその反応はゆっくりとした速度で彼女達の元へと近づいていき、やがて目視で見られる範囲内へと入ると共に反応と同じ位置の藪の中からリアルな彼女達と同じぐらいの年齢の『身体に付けた鎖に刀を帯びている和装の少年』が現れたのだ。

「おや、次の『仕合』の相手は貴女達ですか。……成る程、これは手強そうです」

「そちらも僅か1分足らずで四人の《マスター》を斬り捨てるとはなかなかのお点前で。……ああ、ドーモコンニチワ、ミュウ・ウイステリアと申します」

「これはごく丁寧に、カシミヤと言います。天地でへマスターをします」

「……あ！ えつとアリマ・スカーレットです？」

尚、〃カシミヤ〃と名乗る少年とミュウの会話は一見すると和やかな挨拶に聞こえるかもしれないが、それを少し離れた後方から見ていたアリマには二人の間の空気が徐々に研ぎ澄まされていく様な気がして思わず冷や汗を流す程であった。

しかし、そうして少年の名前を聞いたミュウが——研ぎ澄まされている気配はそのままに——相手を観察しながら何か合点の入った様な表情を浮かべた。

「ああ、やっぱり『榎宮くん』でしたか。よく見るとアバターもリアルとそう変わってないですね」

「ふむ、成る程『加藤さん』ですね？ このゲームをやっていると聞きましたがまさかこんな所で出会うとは」

「え、えーっと、知り合いなの？」

「同じ学校のクラスメイトで隣の席の子ですね。数少ないデンドロやってるクラスメイトなのでよく話をする友人ですよ」

「その様な感じですか。そっちのアリマさんもウチの学校の人ですかね？ 加藤……じゃなくてミュウさんと一緒にいた気がしますね」

尚、これもクラスメイト同士がゲームで顔合わせしたので友好的に話をしてる様に見えるが、やっぱり二人の間の空気は張り詰めたままで後ろで見ているアリマは温度は更に下がった様な気すらしていた。

「……え、えつと、友達同士なら協力してバトルロイヤルを勝ち抜くつていうのは……？」

「申し訳ありません、僕は今回のイベントで自分の腕試しの為に一人で戦い抜くと決めているので。……それにミュウさんとは一度戦つてみたいと思っていましたし」

「まあでしょうね。……リアルならともかくゲーム内のイベントでなら一戦ぐらいは構いませんよ。後アリマちゃんは後ろに下がって精神攻撃と防御に集中して下さい。貴女が接近戦を挑もうとしたらカウンターで首が落ちます」

「ア、ハイ」

どうか勇氣を出して協力の提案を試してみたアリマであったが出会った瞬間から『戦いになるのは確定ですね』と確信して意見を一致させていた二人にあっさり断られたので、とにかく氣を取り直して後方に下がりがながら《スリーピング・ソプラノ》による精神干渉によるミュウへの援護に徹する構えを取った。

それに対してカシミヤは自身の精神耐性パッシブスキルが反応している事を見て瞬時に東方武士系の精神耐性アクティブスキルの起動、及び精神耐性アクセサリーの《瞬間装着》を行いつつ刀の唾に手を掛け戦闘態勢へと移る。

「精神系状態異常ですか」

「卑怯とは言いませんよね？」（ミメ、ステータスコピーと拳への強化を）

『アビリティ・ミラーリング天 威 模 倣』《エンハンスファイト》《メタル・ファイト》《硬気功》
「いえ、これは決闘ではなくバトルロイヤルですから。二体一だろうが対応出来ない方が悪い」

それに対してミュウの方も即座に戦闘態勢を取り、更に瞬時に彼女の考えに応えたミメーシスが自身のAGIをカシミヤのそれと同期させつつ両拳に強化と硬度上昇のバフを掛ける。

「……《雲耀・瞬光》」

「《ウエポン・パリング》」

そして二人の間の空気が最大まで研ぎ澄まされながら張り詰めた瞬間、カシミヤが足元に魔法陣の様な紋章を展開しつつ超超音速で接近しながらの抜刀術を放ち、ミュウは武器防御のスキルを使いながらそんな彼と全く同じ速度で拳を振るって自身に迫る刃の閃きを迎撃戦とする。

……こうして二人の“武の天災児”同士の戦いが幕を上げたのだった。

刃と拳

□■回想・櫛宮刃

……僕と彼女——「加藤祐美さん」が出会ったのは実は小学生で同じクラスになる前、父さんが古い知り合いが開いている『水面流古武術』と呼ばれている武術の道場へと行った時に偶然出会ったのです。

同じ地方にあるマイナー武術の道場主通しだったからなのか父さんとあちらの師範代はそこそこ親しい関係だったらしいので仲良く談笑しており、その間僕は暇だったのと少しの好奇心からあちらの道場内を見学する許可を得て散策をしていました。

「……ん？」

「……フ……ハ……」

すると庭の方で僅かに声がするので気になってそちらに行ってみると、そこには非常にゆっくりとした動作で尚且つ一目で分かるぐらゐに流麗な動きで古武術の型を繰り返している彼女の姿があったのです。

……それで終わってれば良かったんですが、この時の僕はまだ若かった（小学一年生時、ちなみに今は小学二年生）ので思わず見たままの感想を言ってしまったのです。

「……どうして自分の才能に枷を嵌めて動きにくい様になっているんですか？」

「……私は「コレ」がキライなんです」

あの時の彼女は一目見て分かるぐらゐの規格外な「武の才」を全力で封じ込めようとしていたので思わずそんな言葉が口に出てしまいました。それに対して彼女がとても困った様な、或いは悲しそうな顔をして返答されてしまったのでその後言葉は続きませんでした。

……それからは気まぎれなくなったので父さんが帰るのに付いてそのまま帰宅したのですが、後日さわりだけです。彼女の「事情」を聞いて非常に申し訳なく思い、二年生に上がった時のクラス変えで偶然同

じクラスになったので謝りにいたりしましたが」

「……あの時はそちらの事情も知らずに無神経な事を言っ
て申し訳ありませんでした」

「……別に構いませんよ。特に気にしてはいないので」

まあその時は微妙に気まずい空気になったりしましたが、夏休みが
終わった辺りでお互いに〈Infinite Dendrogram〉をやっている事を知って共通の話題が出来たのでそれなりに話す
友人ぐらゐの関係に落ち着きました(他のクラスメイトプレイヤーは
デンドロガリアル過ぎるという理由で辞めてて、未だにデンドロやつ
てると言ったらやや引かれました)

その後も何度か彼女と話す機会がありました、ある時を境にして
彼女が自分の才能に掛けた「枷」が少し緩んでいるのに気がつきま
した。詳しく聞いてみると友人と仲直りしたそうで、確かに同世代の
少女と共に登下校する姿を見る機会が何度かありました。

「今はレジエンダリアでデンドロやってますね。自然環境や住んでる
人達が中々独特で面白い所ですよ」

「そうなんですか。僕は相変わらず天地で楽しく遊んで戦っていますよ」

それからは彼女とも前よりいくらか蟠りが解けた様に多少話す頻
度が増えましたが、それでも心の何処かで「痼り」の様なモノがある
気がしていました……なので今回のイベントはいい機会かもしれな
い、一度しつかり彼女と剣を交えれば自分の心にある程度の区切りを
つけられるかもしれない……と少し考えてしまったのです。

……それに、やはり武芸者としては自身よりも遥かに高い才覚を持
つ相手との戦いは楽しみですね。自分で思ってたかなり不器用な
気もしますが、何だかんだで僕にとってはコレが一番手っ取り早いん
です(天地脳)



□ イベントエリア中央東側

そして、そんな二人は今イベントエリア中央に聳え立つ山の東側の

麓の森、その一角にある空き地にて【アシンス・ブレイダー抜刀術士】カシミヤと【マジック・フィスト魔導拳】ミュウ・ウイステリアとして、武に特化した“天災児”同士としての戦いを演じる事となっていた。

「《雲耀・瞬光》」

まずは初手としてカシミヤが抜刀時限定でAGIを十倍にする《雲耀・瞬光》を使い、それと併用して自身の刀を保持している鎖型補助腕の《エンブリオ》【自在抜刀 イナバ】のAGIと同じ速度で自分を自由に動かす魔方陣を足元に展開する固有スキル《コルトムーブ鮫兔無歩》を使いながら接近しながらの抜刀をミュウの首筋へと見舞う。

……カシミヤの現在のAGIは約4000であり、つまりその十倍である約四万という戦闘系超級職すら優に上回る速度による移動と抜刀速度、更に抜刀術に関して天部の才と血の滲むような修練を積んだ彼の技術を合わせた一閃はこれだけでも数多の《マスター》達の首を落として天地の修羅達にも恐れられる一撃である。

「《ウエポン・パリング》」

「む、速い……？」

……のだが、その一閃に対してミュウは対象一体のステータスを自身にコピーする《アベリテイ・ミラーリング天威模倣》によって自身のAGIをカシミヤのAGIと同じにし、更に拳の強化と素手での武器防御スキルを組み合わせて音速の四倍で振るわれる刀を“ブン殴る”事により必殺に一閃を防いで見せたのだ。

まあ正確に言えば抜刀の起動を先読みして刀の側面を弾く事によって受け流したというのが正しいのだが、例えば同じ速度であろうとも卓越した技術から放たれるカシミヤの一閃に対処できるあたりミュウの格闘の才もまた規格外と言えるだろう。

「《閃》」

「《裏拳》」

最もカシミヤは『彼女なら自分の抜刀を捌くぐらい出来るでしょう』と思っていたので特に動揺などはせず、そのまま流れる様な動作で逆の手による抜刀術に移行。更に今度は抜刀威力を引き上げるジョブスキルも併用して斬り込むが、それに対してミュウも同じく

ジヨブスキルを追加した裏拳によって先程と同じ様に刀の側面を叩いて払う。

ちなみに《剣速徹し》は防御されていない状態でのみ発動するので素手で武器を受け止めた時に「防御判定」となる《ウェポン・パリング》で防がれており、超超音速で拳と刀を打ち合わせている事もお互いに剣戟時の反動軽減やEND上昇のスキルで反動を消しているのでダメージを受けるなどは無い。

だが、それでも両腕による抜刀を繰り出し終えたカシミヤには隙が出来ており、逆に防御に徹していて素手故に小回りが利くミュウはそこをについて刀の間合いの内側に接近して勝負を決めようとし……その思惑は刀を振り切った体勢のまま180度後方へとスライド移動したカシミヤによって阻まれた。

「チツ（あの魔方阵、おそらくAGIと同じ速度で自分を自由に動かせるみたいな能力ですか、厄介な。こちらは移動に「踏み込む」必要がある分どうしても一手遅れますね）」

「《納刀術》（《雲耀・瞬光》の効果が切れた時には彼女の速度は落ちていた……いえ、こちらと同じになってましたね。加速時もそうでしたしおそらくAGIを同期させるタイプのスキル。速度による優位性はありませんか）」

刀を高速で鞘に収めるジヨブスキルと「イナバ」の操作を併用して瞬時に再びの抜刀体勢に移ったカシミヤに対し、相手が後ろに移動した時点で「接近すればカウンターを貰う」と判断していたミュウは逆に一旦距離を取って体勢を整えた。

……彼と戦った天地の「マスター」の多くにも「抜刀時の動けないデメリットを無くす為のスキル」と思われている《鮫兎無歩》だが、その真価は「どんな状況でも慣性や空気抵抗を無視して自身を自由に移動させられる」事であり、カシミヤ自身の立ち回りのセンスと合わせれば「踏み込みでは不可能な軌道で接近する」や「隙が出来てしまった緊急時に自分を移動して回避する」などの応用も出来るのだ。

「さて問題は彼女がどれだけ「手札」を隠しているか……」《火走り》

「(やはり踏み込み必要が無い分立て直しも早い!) 《風拍掌》」

そして再攻撃の準備を終えたカシミヤは即座に抜刀と共に接近、今度はフェイントをかけつつ側面から回り込む様に迫りつつスキルによって炎を纏わせた一閃を放ち、それに対してミュウの方もフェイントを看破しながら旋風と共に放たれる掌底によって炎の威力を弱めながら刀の側面を弾いて受け流す。

そこでミュウは先程の様にもう片方の刀による再度の抜刀に備えて迎撃の体勢を取り、そこにカシミヤは流れる様な連続抜刀を……行わずに納刀状態のまま一呼吸おいた。

「(ツ!?!? “変速”ですか!) 《受け流し》!」

「《雷閃》」

一拍置いた事によりカシミヤの抜刀時加速効果が切れてAGIが通常のものに戻り、当然それによりAGIを同期させていたミュウの速度も一気に落ちてしまっただが対応が遅れてしまう。AGIを自分の意思で変えられるカシミヤに対し、それに合わせて変化するAGIに対応した動きをせざるを得ないが故に対応が半歩遅れてしまうミュウとミメーシスに欠点を突いたフェイント技である。

それでも彼女は自身の首を狙う刀を辛うじて腕部の「デモンズガンレット」で受けつつ、それを斜めに構える事で受け流して防いでみせる……が、彼の使ったジョブスキルは「抜刀後に同じ速度で刀を斬り返す二連撃」であり、その効果によって今度は無防備な逆側から再び刀が向かってくる。

『【エアロタラリア】にMP充填。《エアロジェット》《エアロジャンプ》起動』

「せいっー!」

「わっ! 壁ですか!」

だが、最初の一閃を受け流した時点で「僅かに攻め気が薄いからコレが本命ではない」と読んでいたミュウは即座に対応、それにノータイムで融合しているミメーシスが答えて足に装備した「エアロタラリア」へと「バイオハーデス」に蓄積した膨大なMPを注ぎ込む。

そして間髪入れずに足裏からジェット噴射を“真横に”放って自

分の身体をバック宙に要領で真横に倒して刀をギリギリの所で回避。更に相手の方向へと向いた足裏から大気の踏み台を発生……本来なら空中跳躍の足場に使う為に一瞬だけ展開される小規模な踏み台だが、多量のMPが注がれていた事で擬似的に『巨大な大気の壁』と化して勢いよく噴出されたのでカシミヤを押し出したのだ。

（危なかったですね。やはり読み合いや技術勝負だと全霊を掛けて武術に打ち込んでいる彼と武術自体そんなに好きではない私なら不利ですね。どうしても才能任せのメツキが剥がれます）

（あんな対処をするとは。やはり戦闘センスにおいては僕よりも彼女の方が数段上ですか。今は経験でカバーしてますが打ち崩すのには時間が掛かりそうであり……そうなった場合、後方にいるあちらの彼女アリマの力で僕は確実に敗北しますね）

大気の壁に押し出されるも《鮫兎無歩》で体勢を崩さず距離を取ったカシミヤは、同じく超人的なバランス感覚でジェットバック宙を決めて着地したミュウを警戒しつつ、その30メートル程後方に下がって《スリーピング・ソプラノ》を奏で続けているアリマに目をやった。

彼女は戦闘が始まってからずっと自身の《エンブリオ》のスキルと特典武具を駆使してカシミヤに精神干渉をし続けており、今は耐性スキルでレジスト出来ているがコレが長引けば耐性を抜かれて精神系状態異常に掛けられるのは明らかだった。

（ミュウさんを無視して彼女を狙う……のは不可能ですね。少し距離がある事もあって下手に背を向けたらそれこそ一瞬で倒されますし、何よりアリマさんの方もこちらの攻防を目で追えてるのでこちらから仕掛けて一撃で仕留められるかどうかは怪しい。……選ぶべき選択はミュウさんを一気に倒し、その後精神汚染になる前にもう一人を仕留めるのが最適解なのは分かりきってますが……問題は向こうもそれを誘っているという所です）

（読み合いを続けるとどうしても不利になるので短期決戦、しかも一度の交差で決着がつく様な戦いの方が読み合いの選択肢を減らして一本道に出来るから勝算が高いんですね。だからこそアリマちゃんを後方にやって長期戦という選択を潰しましたし。……それにこ

ちらには彼の一闪を凌ぐ防御手段が「二つ」あります」

ミュウの狙いは自身が保有する二つの特典武器——【黒晶首巻 ブ
ラックオーツ】のほぼあらゆる武器を透過させる《暗黒転身》ダークネス・シフトと【冥
樹霊冠 バイオハーデス】の【ブローチ】が使えないイベントにおけ
る数少ない即死回避スキル《冥冠の加護》でカシミヤの一闪を防ぎな
がらカウンターを叩き込む事による勝利であった。

その為にミュウはわざわざアリマが精神干渉を行う事を知らせる
事で長期戦の選択肢を潰し、更に彼女に注意を向けさせる事でカシミ
ヤの注意を分散させるなどの布石を打っていたのだ。ちなみに今ま
での攻防で防御スキルを使わなかったのは相手の攻め気が薄いと見
て、ここで使えばカウンターを入れられず無駄打ちになると判断した
からである。

（まあ彼相手にタイムマンだと勝率3割あればいい方なぐらい実力に差
があるので、ここは可能な限り布石を撃ちますが……ですのでミメ）
『……ん、了解。ちよつと不安だけど頑張るよ』

（おそらく狙いはこちらの必殺の一闪を凌いでのカウンター、加えて
長期戦になれば彼女ほどの戦闘センスであれば僕の剣術の「理」ま
で掌握されかねませんし……いえ、少し複雑に考え過ぎましたね。ど
のみち他に道がないのなら……）

そうして実時間では数秒も経っていない読み合いの後にカシミヤ
から放たれる気配が一気に鋭いモノへと変動し、それを見たミュウの
方も「ついに来るか」と同じく辺りの空気が張り詰める程に集中し
ていく。

「元より抜刀術の基本は「一斬必殺」。それしか道がないのなら須ら
く斬って捨てるまで」

「来ますか」

色々と相手の手を読むなど考えた末『元より長期戦では確実に敗北
する以上、例えそこが虎口であろうとも踏み込んで手持ちの「全て」
を使って相手の手札を全て斬り破るしか道は無し。つまり全力かつ
最速でミュウさんを打ち倒し、そこから自分が精神汚染を受ける前
にアリマさんを倒せばいい』と思いついたカシミヤは己の全霊でもつ

て眼前の大敵を斬り捨てる覚悟を固めた。

そしてミュウもそんな彼の考えを察して自分出来る“全て”でもって決戦に赴く覚悟を決めて……その一瞬後、カシミヤが超超音速で接近し、ミュウがそれを迎え撃つ形で二人の“天災児”の最期の激突が始まったのだった。

決着、そして終盤戦へ……

□イベントエリア中央東側

カシミヤとミュウ、二人の“天災児”は孤島の一角にて雌雄を決するべく互いに『この激突で決着をつける』という意志の元に最後の決戦を繰り広げ様としていた。

「……それしか道がないのなら須らく斬って捨てるまで」

「来ますか」

そして二人の間の空気が最大限にまで張り詰めて研ぎ澄まされた時、遂にカシミヤが動き出した……最も彼がやる事はこれまで現実、そして《Infinite Dendrogram》で行ってきた『己の抜刀術に全てを賭ける』もの、故に抜刀の体勢をとったまま《鮫兎無歩》^{ゴートムーブ}によって超音速でミュウを斬り捨てるべく接近する。

それに対してミュウはその場で迎撃の構えを取るだけで動かず待ちの構え……元より彼女は最初から相手の必殺を誘って特典武器の防御スキルを利用してのカウンター狙い、故に下手に動いて隙を見せるより動かずに迎え撃つ事を選んだのだ。

「やはり刃を通せる隙など見せませんか……ではこじ開けるまで」
《紫電一閃》

「《寸勁》（電撃ですか……!）」

カシミヤの初手は電撃を伴う斬撃を放つジョブスキルと抜刀術を組み合わせた一閃。雷光を纏うその斬撃は狙い違わずミュウの首を指して振り抜かれるが、それに対して彼女は最小の動きのみで大威力の打撃を与えるスキルの応用で直前に迫った刀の側面を打ち抜き軌道を逸らす。

しかし、それがカシミヤの狙いでありそうして接触した事によって刀に纏わせていた電撃が通電する。彼女は《憑依融合》^{フュージョン・アツプ}によってエレメンタルとなり各種属性耐性も上がってはいるが、それでも悪影響をゼロには出来ずほんの刹那の間だけ僅かに動きを鈍らせてしまい……その刹那の間をカシミヤは見逃さなかった。

「(ここですね)《居合い》」

そうして僅かな隙をこじ開けた彼が次にもう片方の手で発動したスキルは《居合い》——抜刀術の基本スキルであり抜刀時に自身のAGIを現在値の倍とするジョブスキルであり、それにより彼のAGIは八万近くまで上昇する。

もちろん《アビリティ・ミラーリング天威模倣》によってAGIを同値にしているミュウのAGIも引き上がるが、やはり自分の意思によらず引き上がってしまう事によって上昇したAGIに対する行動はカシミヤよりも半歩遅れてしまう……先程と同じ変速のフェイント、ただし今度は急加速によってタイミングをずらした一閃は無防備な彼女の首へと吸い込まれていき……。

「(……ええ、こんな隙を見せたなら貴方は必ず私の防御を抜いてきますよね。それは分かっています) 《ダークネス・シフト暗黒転身》」

「ツ!?」

その一閃はミュウが先の一閃を防いだ直後に発動させていた《暗黒転身》の“生物と閥属性以外を擦り抜ける”効果によって首に当たりながらも一切のダメージを与える事なくそのまま通り抜けて空を切ったのだ。

彼女は初太刀を防いだ時点で『彼なら次の斬撃を確実に自分に当ててくる』と判断して即座に防御スキルを発動しており、そして両手装備不可のデメリットと引き換えに防御スキルとしては珍しく自身の移動には制限がない特性を生かして狙い通り両手を振り抜き終わったカシミヤを仕留めるべく一気に接近して刀の触れない懐へと潜り込もう……とした所で融合しているミメの意思が“まだAGIの加速が終了していない”と認識した事を知覚した。

「(……やはり防御スキルがありましたか。二太刀目で使ってくれて助かりました。《瞬間装備》)」

「(三本目!) ツ!?」

そこでミュウはカシミヤが最初に居合いを放った手に再び“鞘に収まった刀”が握られて、それが補助腕である「イナバ」によって保持される事によって一般的な抜刀術の体勢とは異なれど確かに3回目^の抜刀術へと入っている事に気が付いた。

これは装備をアイテムボックス内部の物と入れ替える《瞬間装備》を応用し、抜刀が終わった後の手に納刀状態の刀を補助腕である「イナバ」も駆使して保持させる事で途切れない連続の抜刀術を放つカシミヤの秘技であり、未だに習熟不足とスキルのクールタイムの関係で3度目までが限界であったがこれまでの攻防によって、抜刀術は両手で交互の二連続まで”と思わされていたミュウを驚かせた。

「ですが《暗黒転身》の効果時間は十秒。仮に闇属性攻撃などでも《霊冠の加護》で……いや、あれはまさか特典武器!??」

「僕のとっておきです、この【ダントウジン】は」

防御スキルとしては珍しく自身の移動には制限がない《暗黒転身》の特性、更にもう一つの一度だけダメージを蓄積MPで肩代わりできる【バイオハーデス】があれば例え3度目の攻撃であろうが対応出来ると攻撃を続行しようとした所でミュウは3本目の太刀が異質な雰囲気をもつ——自分も持っている特典武器の一種であると気が付いた。

その刀の正体は逸話級特典武器【命斬刀 ダントウジン】という代物であり、抜刀した直後の一閃にのみ限定してあらゆる防御スキルを発動させず、及びその一閃で殺傷した相手の《ラスト・コマンド》を始めとする食い縛り系スキルによる延命をも無効化する《^{ダントウジン}斬絶殺》の装備スキルを有する格殺の魔刃である。

「回避不可ならこのまま突っ込む！ この間合いでAGIが同じなら先にこちらの攻撃が当たる！」

「同期しているのはAGIのみであれば、AGIはそのままに斬撃のみを加速させる”スキルなら！」《鞘走り》！

更にカシミヤ抜刀時に刀身のみを加速させる《鞘走り》——AGIには影響を与えずに斬撃のみを加速させる”スキルを使用して、同期しているAGIにSTRを加えた踏み込みによる加速で先制を狙っていたミュウの思惑に先んじる速度で抜刀術を放った。

その一閃は不安定な抜刀体勢、刀身の無理矢理な加速から放たれたとは思えない精度の斬撃として接近の為に前傾姿勢となっていた彼女の首に吸い込まれていき、【ダントウジン】の力によって彼女の特典

武具の防御を発動させずにその首を斬り飛ばしたのだった。

「ミュウちゃん!? だったら私が!」

「そう来ますか……」

宙を舞うミュウの首を目にしたアリマは決意を秘めた顔つきで今度は自らが前衛となるべく強化されたステータスで前へと進もうとし、それを見たカシミヤは素早く再度の抜刀体勢に入って彼女の方も斬り捨てようとした……が、その直前に腕を何者かに掴まれた事によつて物理的に、また有り得ない事象を前にした精神的動揺もあつて動きを止めてしまった。

「なっ!?!?」

『……捕まえた。《攻撃纏装》《スライス・ハンド》!!!』

彼の腕を掴んだ者の正体は首を斬り飛ばされて首無しになつている筈のミュウ……の身体に憑依してそれを動かしている「ミメーシス」であり、彼女はそのままカシミヤの防御無視斬撃の効果を上乘せした手刀を一閃させて掴んでいる「ダントウジン」を持っているほうの腕ごと彼の胴体部を袈裟懸けに斬り裂いたのだ。

……ミメーシスと融合しているミュウは『種族：エレメンタル』となつている事から分かる通り生態的な構造も人間のものではなく、憑依しているミメーシスが無事であれば【頸部切断】の状態異常であつても「生物としての特性」によつて即死はしない（スキルによる食い縛りではないので【ダントウジン】の効果範囲外）

そしてミュウは事前に『カシミヤ相手なら防御スキルで相打ち狙いでも先にこちらの首が落ちる可能性も十分ある』と予想しており、事前にミメーシスに対して『もし自分の首が落ちた時にはそちらで身体を操つて攻撃して』と頼んでいたのだ。流石に首が飛ばされて脳と肉体の神経が切断された状態だとミュウ自身で首から下を動かす事は不可能なので。

『少し浅いか! やっぱ僕だとミュウみたいには……《回し蹴り》!!!』
「くっ! ですがこれなら!」

しかし、肉体を動かした経験が薄いミメーシスであるのでどうしてもスキルアシスト頼りの攻撃に成らざるを得ず、不意打ちで打ち込ん

だ先程の攻撃もギリギリ致命傷にならない程度だったのでカシミヤは片腕が斬り落とされ胸部から腹部に裂傷を負わされてはいるがまだ動けた。

それを見たミメーシスは追撃の回し蹴りを放つものの、カシミヤは重症だろうが問題なく動ける《鮫兎無歩》を使って型通りの動きでしかないそれを回避しつつ残った片腕と「イナバ」を動かして抜刀体勢へと移行する。

「ミュウちゃんはやらせないですよ！」

「チツ！」

どれだけの重症を負おうがまだ動ける以上勝負を捨てる道理はないと天地のへマスターへらしく考えて「勝つ為」に動き続けるカシミヤだったが、そこに超音速で移動して来たアリマが彼とミュウ（首無し）の間へと割り込んで来た。

そのまま彼女は両手に持った「ヴァニフォーク」と「ラブリーチャールディングハートソード」の二刀流で斬りかかっていくが、その太刀筋はミュウや天地の武芸者と比べればセンススキル頼りの拙いものであったので、彼はその斬撃を見切って回避しつつ《雲耀・瞬光》の効果で加速した抜刀術を残った片腕のみで放って彼女の首へと放ち……。

「《如来転心唯我独尊》!!!」

「なっ!??!」

その《剣速徹し》の効果でENDの大幅減少を伴う一刀は、しかしアリマの首に当たりながらも薄皮一枚裂くことなく停止していたのだ……それを見たカシミヤは一瞬のみ驚くものの、直前に相手を使用したのが「必殺スキル」である事から何らかの防御効果で防がれたと判断した。

だが、防御スキルを突破出来る「ダントウジン」は片手ごと持つていかれており、それだけでなく一度使用すれば十分程のクールタイムを課せられる装備なので使えない。それでも彼は諦める事なく後方に下がりながら効果時間切れを狙い、カウンターで振るわれた相手の横薙ぎの斬撃を回避する……。

「《伝心》並びに《レーザーブレード》!!!」

「でもまだ避けられ……なっ!?!?」

その光熱を纏った一刀の範囲から完全に逃れた筈のカシミヤだったが、しかしその腹部がまるで焼き切られたかの様な裂傷を生じさせた上で肉体を上下真つ二つに切断されて地面に倒れ伏したのだった。

……この奇妙な現象はアリマの〈エンブリオ〉TYPE：ルール・カリキュレーター【正心偽脳 シャカ】の必殺スキル《如来転心唯我独尊》の効果——自身を一時的に精神生命体へと置換し、その際に自身が関わる物理現象と精神的現象の境界を曖昧とする力によるものである。

「……悪いけど今の私の攻撃は必中だし、殆どの物理攻撃も効かないよ。……それよりミュウちゃん大丈夫!?!?」

『まだ死亡はしないけど……つて融合してると僕の声は外部に聞こえないんだよね。とりあえずミュウの首を持ってこよう』

それだけだと分かりにくいかもしれないが要するに、自分が関わる物理現象を精神的現象としても扱い、逆に精神的現象を物理現象としても扱える。効果であると考えれば良い。

これによつて敵からの物理攻撃を精神的悪影響と同じ様に扱って《悟りの境地》で防いだり、他者に思念を送るスキル《伝心》と剣技ジヨブスキルを《悟りし者の御業》で複合させて『斬撃のみを遠距離の対象に届けて斬り裂く』などと言った芸当も可能になるのだ。

……そしてアリマは必殺スキルを維持したまま倒れ伏したカシミヤを尚も警戒しつつデュラハン状態のミュウを庇うが、その身体を動かしているミメーシスは斬り飛ばされた首を取つてくると徐に身体にくっつけながらイベント用にレントから貰っていた高位回復魔法の【ジエム】を使用した。

『……よしくつついたね。ミュウ大丈夫?』

「……ええどうにか。流石に首を斬り落とされるのは初めてでしたが兄様の【ジエム】で治せて良かったです」

「うわ本当にくつついた。……大丈夫なんだよね?」

「大丈夫ですよアリマちゃん……ですがまだ戦いは終わってません。

あの状態でも移動スキルと残った片腕で抜刀術を放つて来るかも……」

「いや流石にこの負傷では後十秒ぐらいで死にますし、スキル起動条件である抜刀体勢を取るのも無理なんですが……それにもし抜刀術を打つても貴女はもう接近戦をする気すらないでしょう?」

「そんな事は当然です。何故好き好んでカシミヤ君に近接戦を挑まねばならないのですか。遠距離戦で封殺出来るならそうします」

「そこ言葉通りにミュウはカシミヤがまだ戦うつもりなら必殺スキル起動状態のアリマを盾にしつつ、拳士系の遠距離攻撃系スキルや範囲攻撃の「ジエム」を使って彼が傷痕系継続ダメージで死ぬまで近づけずらせない気まんまんであったが(これまで使わなかったのは万全の彼相手では全部避けられて無駄だからである)」

「ふう、首を落とした後の残心を怠るとは僕もまだまだ修行が足りません」

「というか今回の勝因はアリマちゃんが居たからですけどね。私ばかり見て彼女に注意を割けなかったのが主な敗因でしょう……この世界での彼女は私よりも強いですよ。最後はしっかりと決めてくれましたし」

「いや私は殆ど見てただけだし、最後まで今度は後ろで見てるだけじゃなくて前に出ようとして思っただけで……」

「……成る程、これは僕の負けですね。……ですが次はリベンジさせて貰いますよ」

そうして二人の会話を聞いてどこかスッキリとした笑みを浮かべたカシミヤは継続ダメージによってHPがゼロになり光の塵となったイベントから脱落したのであった。

「……まあ、こちらの世界でもし機会があれば請け負いますよ」

「……こうして天災児達の戦いは彼女達“二人”の勝利に終わったのだった。」



「うーん、やっぱり結構消耗しちゃったね。私の必殺スキルは効果が微妙な割に消耗が激しいよ」

「いやあらゆる攻撃を無効にして自分からの攻撃は必中とか十分過ぎるぐらい強いと思いますが。発動条件が厳し過ぎて中々使えない私のそれと比べれば」

『発動出来ればどんな相手でも詰ませられるから。メイデンはジャイアントキリングが真骨頂だし！』

そうしてカシミヤとの死闘を制したミュウとアリマはポーションを煽りながら損耗を回復させつつ、先程までと同じ様に周囲を警戒しながら森の中を歩いていった。

……強敵を一人倒そうともこの島にいる参加者が三人になるまでバトルロイヤルは終わる事は無く、彼女達もそれは分かっているので即応体勢を維持したまま動いていた。

「……む、また《人間探知》に反応があります。今度は一人ですね」
「他の参加者かな。どうする？ とりあえず戦闘準備を……」

そこでミュウがまたしても他の参加者らしき反応を感じたので彼女達は戦闘準備を整えようとし……その直後に探知範囲内ギリギリに居たはずの「それ」が先程の加速したカシミヤ以上の速度でこちらに接近して来たのを感じ取ったミュウは慌てて声を上げた。

「不味いもう来ます！ 準備を……きやあつ!!？」

「ミュウちゃん!!！」

警告の声を上げつつ前に出たミュウだったが言い終える前に前方から超超音速で飛来した「鎖」に弾き飛ばされた……幸いまだ使われてなかった《霊冠の加護》によって致命傷は肩代わりされたが、ただの鎖の一撃が致命傷になるレベルの異常な攻撃力を持つ事。そして何よりその鎖に見覚えがあった彼女はよりにもよって「最悪な相手」と遭遇したらしいと内心歯噛みした。

『エフェクト・ミラーリング《転位模倣》！ 《ライトニング・フィスト》！ 《エンハンスフィスト》！』

「チエアアアッ!!！」

吹き飛ばされた彼女に追撃の鎖が二本迫るもののミュウの考えに

答えたミメーシスが「鎖の持ち主」を対象にバフ効果を写し取るスキルを使用、それによって相手の「絶大なステータスバフ」をコピーした彼女は瞬時に体勢と立て直し雷を纏う両腕で鎖を弾き飛ばした。

……しかし最初の攻撃で使われた物を含む合計3本の鎖は異常な硬度と攻撃力を誇っており破壊は出来ず、その間に自己バフをノータイムで実行して敵に対する精神汚染を行おうとしていたアリマに超音速で接近する一人の男がいた。

「ミュウちゃん!?? 《スリーピング……》」

「……疾イ!!!」

その男は手に持った伝説級特典武器【竜鳴槍 ドラグソング】が発する超振動波でアリマの【ヴァニフォーク】から鳴り響く強化された催眠音波を力技でかき消して無効化、そのまま彼女の反撃を許さぬ速度と精度で槍を胸部に突き刺して強化された攻撃力と振動波によって上半身を消し飛ばしてあっさりとりタイアさせたのだった。

「アリマちゃん!?? ……まさか貴方がいるとは思いませんでしたよ
ファイガロさん!!!」

「君は……ミュウちゃんだったね、ギデオンの決闘以来だね久しぶり。……やっぱりのイベントは強者と沢山戦えて良いね」

そうして仲間を失ったミュウはイベント開始から戦い続けて中央部の他の参加者を壊滅させていた長時間戦闘済状態のアルター王国決闘ランカー【剛闘士】ファイガロと対峙してしまったのであった。



□■ イベント用管理AI作業領域

「……ふむ、これでバトルロイヤルの残り人数は38人。かなり早い段階で大分減ったな」

「大規模戦闘がいくつかあったからな。尚今のところ空間操作に異常は無し」

「各システム面でも特に異常は起きてないねー。まあ空間に強力に作

用する〈エンブリオ〉持ちはいなかったけど」

「しかあし、配置した宝箱はあまり拾われてませんねえ。取られにくい場所には相応のレア度のアイテムを配置したのでえすが」

「あくまで主目的はバトルロイヤルだからな、そんな中で宝箱を探す余裕などないだろう。それより「シャウト・ハンター」はギミックとしては微妙だったな」

「試験の為に色々要素を追加したのだから仕方がないけど、やっぱりイベントの目的は一つに絞るべきね。そこは次回に活かしましょう」

バトルロイヤルが佳境を迎える中、それを観戦しながら隔離スペースにおける各種システム動作を確認していた管理AI達は各々の感想を言い合う程度には余裕はあった。

まあ、総評としては『システム面では問題なし』『イベントとしては余計な要素を多くし過ぎて全体的に薄味になった?』と言った所であり、次回以降はもう少し趣向を凝らすべきかと思っていたが。

「……さて、ではイベント最終盤の隠しギミック……参加者達を刈り取る四体の〈U B M〉ユニーク・ボス・モンスターを投下するとするか」

「改めて聞くと〈UBM〉のイベントエリアでの行動時におけるデータ取りの為とはいえ多いな」

「でも未だに隠れてバトルロイヤルをクリアしようとしてる人もいるし、このままだとグダグダ時間だけが過ぎる可能性もあるわね」

「まあバトルロイヤルなら生き残り優先なのは間違いじゃないし」「生き残り特化のチェシヤが言うと言説力があるね」

「……そうしたどこか呑気にも聞こえる会話が行われた後、イベントエリアの孤島に参加者達を刈り取る最悪の狩人達が放たれたのだった。」